仰之

西涯

内務大臣法學博士男爵平田東助閣下題辭

文學博士 井上頼圀
熱田宮々司 角田忠行 監修

平田盛胤
三木五百枝 校訂

平田篤胤全集

東京 一致堂書店

平田篤胤翁自畫自賛ト肖像

一古道乃大意

一佛道の大意

一俗神道の大意

一儒道乃大意

一歌道乃大意

一醫道乃大意

一 神代の有さま又御国を神国なる事萬物萬事は万国にすぐれたる事を辨じて又御國乃有さまの人のえらき所以を演説す

一 天竺の国風釈迦一代のありさま佛法唐土に傳はりそれより御国へ渡りて十宗と分れたる宗旨はさらなり佛者の心得大むねを説く

一 世にいはゆる両部神道唯一神道といふ類外国の道に意をとりまじへ説くるものにて真の神道とは異なる謂れを悉く演説す

一 唐土乃開闢より歴代のあらまし漢籍によりて辨じ又俗の腐儒者どもの非説をも辨じ總じて漢土の學問のあらましを演説す

一 歌のおこりより及び哥を詠むにたがへやすく万葉家近躰家といふ所以また哥書物語の書を讀む心得總じて此道にわたれる事を説く

一 医乃道の始まり漢土阿蘭陀等は醫學諸流の甚しく病家の心得人躰のつけ眼になるべき事に声をきゝなどの所以養生せしむる事を説く

平田篤胤翁筆蹟

目次

以上

古道大意はしがき

これの古道大意と云ふ書はも。我が神ならふ學びのおや。伊吹の屋の平大人の。其御許に侍らふ人々に。古道の趣を。講き聞せ給ふを。承賜はれる敎子たちの。打聽を筆記したるものなるを。後に師の見まして。此は能くこそ書取たれと。褒め給へる物なり。抑この講釋本よ。常言にしも宣へれば。此を拔き見むには。御口づから宣給ふを。まのあたり直に。受賜はれる如思はれて。いと懇にいと親く。眞の道の趣の。明かに悟り得らるゝ。最も〳〵有がたく。尊き御本になむ有ける。拙くをぢなき俊秀らが。稱へ申さむは。中々になめし畏し。然れば其講說を。聞こと得ざる。遠き境に住居る人々は。こゝよかしこと寫し傳へて。拜み讀むも多かれど。今しかく。この御道したふ忠誠人たちの。年々にふえ行て。寫し傳ふる暇なく。はた寫し誤りも出來めれば。こたび鐵胤君に議り申して。遠近人の勞きいらずて。容易く拜み讀べく。千萬のすり本をも成してむと。堅木の板に彫なして。伊吹の屋の文庫に納めまゐらせつ。かゝれば此の御書の。千世に八千世に朽ること無く。失る事なく。繼々に弘まりて。この正道の。いやます〳〵に榮え行らむ事を。あな樂しきかも。あな歡ばしきかも。かく言すは。

秋田人　小澤三折俊秀

古道大意の由緣

人としては。人の道を知らずは有るべからず。人の道を知るには。まづ其の父母先祖を知り。國體を辨へずは有るべからず。其の國體をしるには。其の太元開闢の由緣をしらずは有べからず。君臣の等。彝倫の敍。すべて天下を經綸するの道。こと〴〵く此に起原せり。其の太元開闢の由緣を知るには。我が神典を拜讀せずは有べからず。神典とは。日本紀古事記をはじめ。其ほか皇國の古書を云ふ。此の古書を讀て道を辨ふるを。古道學と云ふ。謂ゆる古への道を執て。今の有を御すとは是なり。斯て今世に行はるゝ。道と云ふ道の中に殊に弘まれるは。儒道佛道なり。この二つの道。ともに其のもと外國より渡れるが。先漢土には。陶唐。虞舜など云ひし國主の時に。授禪といふことを爲て。父子の親愛廢り。簒奪の所爲これより始まれり。殷湯。周武などいふ首長が世に出ては。放伐を專にして。君臣の義理絕ぬ。この親愛義理廢絕の上は。大道立ず。經世の綱紀。則とる所なし。偶に取べき物あるは小事なり。是かの國代々。長久せざる所以なり。また佛道の趣意は。上下尊卑の分無く。衣食住に離れ。子孫斷滅を好む道なれば。人たるもの曾て歸依すべき事に非ず。此餘の道々も。この二つに準へて。各々一區の小徑たる事を辨ふべし。抑わが國の道に於ては。開闢以來。帝位一とたび立て。君臣の等。萬世動く事なく。彝倫の敍。はた自然に具れり。これ但し。神これを其の性に賦して。生しめ給へるなり。是を以て治國平天下の道。事實の上に昭々たり。此我が神國の玄妙にして。彼戎夷の少徑と。豈同年の談ならむや。然れば我が御道は。宇宙第一の正道。萬國の君師たれば。六合の内に含養せらるゝもの。誰かはこれに寄らざるべき。此を知らざるは不明なり。知りて傳へざるは不實也。學者これを思はざる可けむや。是古道の講說なくは有るべからざる所以なり。謹て記す。

文政七年甲申正月　　平田鐵胤

古道大意上卷

平田篤胤先生講談　門人等筆記

今こゝに演說いたします所は。古道の大意で。先その說く所は。此方の學風を古學と申すゆゑん。また其古學の源。及びそれを開き初め。人にをしへ。世に弘められたる人々の傳の大略。また其のより本づく所。また神代のあらまし。神の御德の有がたき所以。また御國の神國なる謂。また賤の男我々に至るまでも。神の御末に相違なきゆゑん。又天地の初發。いはゆる開闢より致して恐れながら。御皇統の聯綿と。御榮え遊ばされて。萬國に竝ぶ國なく。物も事も萬國に優れてをる事。又御國の人は。その神國なるを以ての故に。自然にして。正しき眞の心を具へて居る。其を古へより大和心とも。大和魂とも申してある。是らの事をもあらまし申し。また神代の神の御傳說。その御所業どもは。今の凡人の心を以て是を思へば。甚靈く。信じ難く思はれる。其非事を論し。右の事どもを申す中に。眞の道の趣も。おのづからに籠てある。但し神代のあらまし。及び神のありがたき所以などは。實に廿日や卅日。息もつかずに申したればとて。中々以て其の御德の。廣く尊く妙なる謂の。そりや萬分一も。演說いたし盡さるゝやうな事では無いでござる。其を此わづか。二日か三日ほどの間に。申さうと致す事故に。熟々思ふ所が。斯やうにかい摘んで申しては。却て淺々と聞受らるゝ方も有らうかと。思はれるなれども。此の後追々演說いたす中に。かばかり粗々も。神代の事を申て置ねば。分りかねることが多いでござる。其ゆゑに止むことを得ず。搔いつまんで。神の御代の沿革りを言はゞ。かけて通るやうに申すのでござる。其故にかの世に誰もいふ。石戸隱のことも申さねば。大蛇退治などの事も申さぬ。猶總ての精細なる事どもは。古傳說の純粹なる處を撰置て。別段に委く演說いたす。其時に申すことで。しかしなぜ又其委き譯をも此處で說ぬことじやと。思はれる人も有うかなれども。是には譯がある。其わけと云は。一體此方の說く古道の趣は。謂ゆる天下の大道で。則人の道である故に。實には此の大御國の人たる者は學ばずとも。其の大意ぐらゐは。心得居べきはずのことで

ござる。然れば其演説をいたすに。誰しの人も。耳に入がたきはずはなき事なれども。今の世の中一般に。儒道佛道を始め。其外も種々の道が弘がつて。各々其下の心に。或は佛道に依るとか。儒道によるとか。扨は俗に謂ゆる神道。または道學とか。又或は心學などゝ云ふことで。居りを付おいたり。又さやうに居りを付をる。と云ふ程のことで無くても。何となく右やうの説どもを。見馴きゝなれ言馴て。何ぞかぞ下心のないと云は無く。又必かぶれて居ぬ人と云ふは有ません。其故に始めより突かけに。此方の專とする古の道を。委く演説いたす時は。とかく彼元より世の人の。見なれ聞馴いひなれて居る。種々の事どもが障りと成て。とツくりと合點のゆく程。眞の意味合を悟り得ず。聞とりかねる故に。心得違ひが出來て。太じき事の紛れと成る。惟まぎれと成ばかりでなく。其元より心に蓄へたる事と。此方の説く趣が。違つてをるに依て。是を信せず。信せぬに依て聞ほしもせず。其少かばかり聞はつツたる事共を。固より信せぬまゝに聞違へ。其聞違へたら〴〵なとを。其れながらに尾鰭を添て。外へ行て。彼此と誹りなんどもするもので。世間を見るに。さやうの人がよく有るものでござる。勿論是は元より大意の事ゆゑ。よく聞れた處が。實には古道學の萬分一でもない。其の萬分一の片はしを。一席二席きいたぐらゐでは。何とも言へることでは無い。譬へば爰に。大きなる牛が一疋ある。然るに盲たる人は見る事能はず。只其尻尾ばかりを捫て見て。その全體をなでも致さず牛は小き獸じやと思つて卑めるやうなものでござる。但し其れしきの誹りは。物の數とも致さぬことなれば。此方はそれにいたしても。此我說く道は。おしつけ申すと分りますが。畏くも此世の始めより。今の現の神の御事實で。殊には古の天皇命の。廣く厚き思召で。嚴重におもんじて。御傳へあそばしたることゞもを申すこと故。さやうに粗忽で有ては。其天津神國津神。及び古への天皇命の。後の世を思召す。厚き御心に對し奉りて。此方何とも恐多きことじやに依て。先其舊來の。聞なれ見馴て居ることの。正實の有るかたち。又其ひがごとをあらあら論辨いたして。人々の心に。扨は佛道にも有れ。儒道にもあれ。心法悟道。又は俗の神道にもあれ。

先づかやうな物と云ことを心にとめ。居りを付置て。扨其魂の居つた處で。古道の奥意を。古傳説に依て。とッくりと演説致せば。其時こそ此方のとく處に。疑ひは無いことでござる。扨こそ爰では彼。なま〳〵聞て心得違ひ。又は聞はつりを人に語つて。誘るやうなことはあるまいと思つてのことでござる。又さうない處が。とかく何の道何の學び事でも。始めのうちは倦のくるが。世の常の人情じやに依て。長いことの内に退屈が有ては。説まする此方もむだ骨をり。又聞く人々も詮ないことで。其ゆゑ次々に言ふ事を替て。倦のこぬやうに。其事をしたしく。初學の人々の耳に入れ置て。言はゞ面白みを付け。下拵へをして。猶とッくりと眞の道の精密と。委く細やかなる處までを。申したい聞せたいと云ふ本意をもこめて。思ひ付たる。此の古道大意の演説でござる。とは申すものゝ。此席に説く處とても。さら〳〵猥がはしく。穿鑿もしつめぬ事を申すのではないで。誰しの人も。先早く心得べき肝要なることゞもを。取集め綴り合せて申すのであるから。是は長げなく。下いことを言ふと思はず。とッくと勘辨を加へて。

聞るゝやうに致したいことでござる。扨又別段に申すことが有る。それは世間に學問と云へば。一と通りのやうにきこえるなれども。甚品々が有て。先此方のおもと致す。御國の學問にも。細かに分ると。七つ八つにも分るでござる。まづ神の道を第一とする一派があり。また歌學と云て。歌の道をむねとするが有り。また律令の學と云ふが有り。又伊勢物語や。源氏物語をおもと學ぶ者があり。又歴史の學と云て。御代々の事をせんさくするが有り。また古實諸禮の學問が一つあり。其中にも俗に云ふ。神道と云に又諸流があり。歌學と云にも二三流あり。ざッと御國の事を學ぶばかりも。此通りに派が分るでござる。又儒者の學ぶ漢學と云にも。同く御國の學問ぐらゐに派が分る。又佛學。是は諸宗が有て。各その立かたが違ふ故に。學び方もちがふは本よりの事。又佛法から流れ出たる心學などゝ云。ちョこざいな學びを爲て。人に勸める者もあり。是らの譯は別段に。佛道の大意をとく砌に申すつもりでござる。又天文地理の學び。又蘭學と云て。阿蘭陀の學び。また醫者の學問にも。古方後世蘭療など種々差別が

あり。なんと此通り。學問は色々ある。その中に何の學問がいッち大きいぞと云に。ちと自分勝手のやうなれども。御國すなはち我國の學問ほど。大きい物はないでござる。なぜと云に。先近く儒學と佛學との上で申さば。儒者は先四書五經とか。十三經とかいふ類の書物をよむことを覺え。また左國史漢と云て。左傳と云もの。國語と云ふもの。史記と云もの。漢書といふ物などを粗々讀で。さて漢文を綴くる方をおぼえ。其ふだんの言ぐさに。詩を作ることでも覺えると。もう儒者と云て通られるで。是しきの書物をよんで。是式のことを覺るに。さしも難いことはありや致さんでござる。大方世間の儒者が。皆この位なものでござる。さて其儒者に比べては。出家の方がよッほど廣い。なぜと云に己が是非よまねばならぬと極めたる。俗にいふ經文が五千餘卷。馬に付たならば七八駄あらう。其を皆は讀まず。十分一をよんだ所が。ざッと儒者がおもとよまねばならぬ書物の。一陪も有るでござる。其れのみならず儒者は。佛書をよまんでも。事が缺けぬに依てとんと讀ず。たまさか佛書をよむ儒者もあれど。そりや百人に一人もない。僧徒は其れと事かはり。儒者のおもと見る書物をば。子供の時から。文字を知る爲によんでおく。又詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。爰で僧徒の學問は儒者よりは博いでござる。又御國の學問がいッちひろいと云故は。右申す通り。儒學佛學を始め種々さまざまの學問が有て。其道々のこころと事とが。悉く御國の學び事に混雜して。譬へば彼の八紘九野之水。天漢の流。注がずと云ことなしと云ふ如く。有ゆる學事混雜して。大海へ諸の川々より。落て來る水の交つてゐるやうなものでござる。其通り入交つてある故に。人の心も多く其れに移り。孰れを是とも。いづれを非とも別ちかねて。言はゞまごついて居ることが多く有る。夫故に。その混雜を具に分ねば。眞の道の有がたき所も顯れはせず。其こんざつをより分て。眞の道の害となる事をいひ顯さうとするに付ては。よく先の事を知らねば言へず。彼の唐人蘇子由と云者の申したる如く。善與レ人言者。因二其人之言一。而爲二之言一。則天下之辯者服矣。云々と申たる如く。此方の事ばかり言つてはいかず。たとへば僧徒を諭すには。佛書で言ふとき

ウの音も出ず。儒者をさすには儒書で論ずれば。猫に逐れた鼠のやうに畏まる。然れば御國の純粹と正しき道を得やうとするには。此に心得なくては叶はぬ事でござる。殊にもろ〳〵の學問の道。たとひ外國の事にしろ。御國人が學ぶからは。其よき事を撰んで。御國の用にせんとのまでござる。さすれば實は漢土は勿論。天竺。阿蘭陀の學問をも。凡て御國學びと云ても違はぬ程のこと。則これが御國人にして。外國の事を學ぶ者の心得でござる。扨我が先師たち以來。此方も及ばずながら。此通り氣を付て人にも演說いたすからは。何事も此學問の本意に背かぬやう。背かぬやうにと。吟味に吟味を重ね。古人先達の公論明說に原づき。其說を集めつゞつて。演說は致すもの〻。廣きことの中には。考へ落し言たがひもあらうと存ずる。なせなれば。篤胤素より不敏の性質にて。中々以て世に多かる事の。萬分一も知り得らるることではない故。考へ脱しの有ることであらうぞ。其れは常に心づかひに思ひ居る事でござる。仍て今聞る〻方々の中。門人に限らず。いや其はさうでは有るまい。と思はれる衆があるならば。

其趣を言て給はるがよい。其の意見が實に理に當らば。速に改めやうでござる。又不審なことも。問れるやうに致したいものでござる。又神の御上などを申すに至つては。とんと世間普通の學者等の申すとは。違つてをるに依て。さて此は。今まで思ふたとは相違な事じや。鬼神は二氣の良能。鬼神は造化の跡とこそ聞をるに。平田の讒口にては。信じ難いことじやと。思ふやうな事も有うかでござる。これは此方も本おぼえの有たことで。其も更々無理とは存ぜぬから。さやうな事も有りの儘に。御不審を承りたいでござる。唐人も疑はしきは。問んことをおもふとぞ。又之を如何これをいかんと言ざる者は。之を如何ともすること無しと云ひ。又かの鼓や鐘なども。打かつかねば。鳴もいたさぬやうなものじやと。古人も言て。問答の譬に致したが。是は實にさうでござる。何とぞ今日を始めとして。往々も捨おかず。神の有難い處。道の精密なる處まで。學び付よりつき。聞ほさうと。志を振起されますやうに。致したい物でござる。但し是は今日始めて。此席へ出られたる方々にばかり申すことでござる。

扨まづ第一に申て置ねばならぬ事は。此方の學風を古學と云ひ。學ぶ道を古道と申す故は。古へ儒佛の道。いまだ御國へ渡り來らざる以前の。純粹なる古への意。古への言を以て。天地の初めよりの事實を。すなほに說考へ。その事實の上に。眞の道の具つてある事を。明らむる學問である故に。古道學と申すでござる。抑この學風の由て來る其始めは。東照大神君その糸口を開かせられ。公子尾張の源敬公。その御遺意を紹せられ。さて水戸中納言光圀卿。大きに興起あらせられたことでござる。此君の世に殊れて御坐ることは。世の人の能く存じ居ることで。則世に水戸の黃門樣と申すは。此御方のことでござる。此君が世の中に。唯々唐の學問ばかり行はれて。御國の古き御代の事などは。心とする者のなきことを御歎きなされ。第一には。禁裡を殊の外御尊敬あらせられ。數の學者を御抱へあそばし。先世に有りとある古書を御集なされ。又諸國の神社佛閣。及び在々に至るまで。あまたの人を分遣はされて。いさゝか一枚二ひらに足らぬ物も。古き書物をば。悉く御集めなされ。夫を明細に御吟味有て。神武天皇の御代より。後小松天皇の御代まで。御代は百代。年數二千年あまりの間の事を。具に御撰びなさせられ。大日本史と云歷史を御作なされ。又神道集成と云をも御撰びなされ。又古書はもとより。堂上方の世々の御記錄を始め。數百部の書物の中より。朝廷の御禮儀に關ることどもを。御類聚なされて。五百卷餘の書となされたでござる。此御大業の御入用として。御高三十五萬石の內。十萬石を分けおかれまして。誠に數十年の御辛勞で。終に御成就なされ。扨朝廷に奉られたる處が。朝廷にも御感斜ならず思召し。右五百卷の御書物をば。禮儀類典と云題號を。御つけ下されたでござる。又其ころ難波に契冲といふ人が有て。是は故有て眞言の僧とは成たなれども。厚く御國の古へを信じ學んで。中頃より亂れ來りし假名遣ひを。古書の古言を證據として是を正し。和字正濫抄と云書を著し。其外いろ〳〵發明の書物を作て。其名高く。光圀卿の御耳に入り。殊の外感じ思し召し。度々御使者を遣され。御逢なされたき由を。仰せ入られたなれども。契冲は固く御辭退申て罷出なんだでござる。所が光圀卿には。甚御慕ひな

されて。安藤爲章といふ。御國學に志の厚き御家臣を。契冲の門人に遣はされ。且萬葉集は。殊の外古き歌集で。歌のみならず。博く古へを考へるの助となるべき。結構なる書物なれども。其頃まで世にある所の注解。何れも宜くないに依て。よく古へに叶べき注を仕るべき由。御頼みなされたでござる。契冲畏まつて。是に於て。萬葉集の代匠記と云ふを撰んで差上ました。此方の萬葉學は。是より始まつたことでござる。光圀卿それを御覽なされたる所が。今までの有ゆる注釋とは事かはり。悉く古言古意を尋ねて是を記し。甚すぐれたる物ゆゑに。大きに御悅びなされて。白金千兩。絹三千匹を下されたでござる。契冲その賜物を更に蓄へず。悉く貧窮の者に與へられたと云ことで。又右の代匠記を作るとて。夥しく古書を集め考たる時。その餘力を以て。古今集へも注を下して。是をば餘材抄と名を付たでござる。是以て其時分まで有たる所の注解とは。雲泥の違ひにて。誠に結構なものでござる。扨契冲は。元祿十四年正月廿五日に。年は六十三歲で身まかられたでござる。其著したる書物凡て廿五部。卷數百廿卷餘もあるでござる。此契冲に追すがつて。荷田宿禰東麻呂翁。俗名を羽倉齋宮と云人が出られて。大きに御國の學問を勵み弘められて。四方に其名高く。旣に御國學の學校を。京都へ建うとて。公の御免を受られ。其地をば東山にしつらへやうと爲られたる所が。其事果さず。病に依て身まかられたでござる。此翁著述の書數十部。卷數百卷餘り有たる由なれども。思ふ旨あるとて。末期に多く焚捨られたるに依て。今纔に遺りたるもの五六部。數卷ならでは有ることなく。然れども我古道學の道紀を立られたるは。此人でござる。此次が賀茂の縣主眞淵の翁。通名を岡部衞士と云ふ人が出られて。家の號を縣居と付られたるに依て。縣居の大人。また縣居の翁などゝも申すでござる。扨この翁。荷田の大人の門人となり。其の本志を紹で勤學いたされたでござる。その遠つ祖は。神皇産靈神の御孫。鴨建角見命と申して。八咫烏と化て。神武天皇を導き奉られたる神で。縣居の翁は此神の子孫でござる。代々遠江國濱松の莊。岡部の鄕に在る。賀茂の新宮を齋かれたる。正しき家柄でござる。眞淵の翁より五世の祖たる。政定と申

す人は。引馬原の御軍に大功が有て。東照宮より。來國行が打たる刀と。丸龍の具足とを賜はつた程のことでござる。扨この眞淵の翁は。其師東麻呂翁の上を。今一段上つて。なほ深く考へ。始めて古への道を明かに得んとするには。漢意佛意を清く捨はてねば。眞の處は得がたく。歌を詠むも。古の言を解くも。皆神代の道を知べき便なる由を。懇にとき誨され。扨遂に田安の殿に召出され。御國學の御師範を申上られたでござる。其門人にも勝れたる人が多く。藤原宇萬伎。楫取魚彥。また近頃までも世に居たりし加藤千蔭。村田春海なども。皆此翁の弟子でござる。扨この翁は。明和六年十月晦日に。行年七十三にて身まかられたでござる。其著されたる書物が四十九部。卷數が百卷ちかく有るでござる。此次は即拙者どもが師と仰ぐ。本居先生平阿曾美宣長の翁で。始めは醫を業とせられたるに依て。本居舜庵と稱れましたが。後に紀伊國中納言殿に召出されまして。中衛と改められたでござる。其先祖は。桓武天皇の御裔。池大納言賴盛卿六代の後胤。本居縣の判官平の建郷と申した人の末にて。伊勢の國松阪の人で。家の號を。鈴の屋と付られたるに依て。世に鈴の屋の大人とも。鈴の屋の翁とも申すでござる。扨この翁の學問の太じきことは。世に類なく。それは其著されたる書どもを讀明らむれば。能く知れることで。申までは無れども。其始めは。漢の學問を深く學ばれて。夫より御國の學びに移り。縣居の大人に從て。其大志を受繼れ。學問の道に於ては。古へより類ひなき大功を立られたでござる。其御心緒の事を。かい摘んで申さば。先其著されたる。うひ山蹈と云ふ書に言れたる趣は。人として人の眞の道は。どうした物ぞと云ふことを。知らずに居るべきことではない。學問の志なき者は。そりやどうも爲方は無けれども。かりそめにも其の志があるならば。同じくは眞の道の爲に。力を用ふべきことじや。然るに道の事をば。なほざりに差おいて。唯末の事にばかり拘づらッて居ると云ふは。そりや學問する者の本意ではない。と言はれ。又學問は。始めより其志を高く大きに立て。其奥の所まで。極め盡さずは止まいと。堅く思ひこむがよい。此志が弱くては。おのづから倦怠ることが出るものじや。とも言れま

じたでござる。此通り人にも教へらるゝ程のこと故に。自分では實に此とほりいたされたでござる。是も亦其著されたる書どもを讀めば。能分りますでござる。又その心の公にして。私なきことは。弟子中へ誡められたる詞に。我に隨つて物學ぶ輩は。我が後に又よき考への出來たらんには。必々わが說に泥まぬがよい。我がいひ置たることにも。違ひたることの有るをば。其違つてをる故を言ひて。よき考へを弘めよ。一體我が人を教ふるは。道を明かにせんとての事なれば。とにもかくにも。道を明かにするのが。我を用ふるのじや。其わけを思はずして。いたづらに我を尊むは。そりや我が心ではないぞと。玉勝間と云書に。かいて置れたでござる。また村田の橋彥と云ふ人が。同國白子の人で。翁の御門人に成たいと云て。文通したる其返事に。おくられたる翁の手紙を。所持いたして居るが。それに言はれましたには。皇朝の學問に於ては。秘事口傳など申すことは。露ほどもこれ無く候。さやうの義を申立候は。皆邪道にて候。多く道を說聞せ候が本意に候へば。門弟ならずとて。野生に於ては。秘し申候義さら〳〵ござなく候。さりながら皇朝の古道御執心の段。御殊勝の御義。何よりも悅ばしく存じ候。と云ひおくられたことも有ますでござる。世間の歌學者。神道者など名のる輩が譬へば歌學者なれば。三木三鳥の傳じやの。てにをはの傳じやの。古今集と云ふの傳受じやのと云ひ。又神道者流のいふ。天の浮橋の傳じやの。土金の傳じやのと云ことを言てさわぐけれども。こりや皆その下心に。汚い物の有てすることで。眞の公なる學問をする者が。そんなをかしな事はせぬがよいでござる。其は鈴の屋の本居先生は。右に段々申す通り。同門佗門の差別なく。知られたる程は惜まずに傳へて。淸く明らかに。學問のすぢを立て。教へられたる事故に。始めの內は。かの秘事口傳を專とする輩に。甚以てにくまれましたなれども。終に其心の如く世に弘まり。其門人帳を見まするに。六十六箇國の內に。唯二箇國ならではない程のことで。殊に享和元年の春上京致されて。四條に舍て居られたる砌などは。公家の御歷々がた。學問を公に心がけらるゝ御方は翁の舍りへ御尋有て。御入門なされ。世にも人の知

て居る。中山大納言殿を始め參らせ。富の小路新三位殿。芝山中納言殿など。其外夥しく有ましたでござる。既に其ころ御歌の宗匠と有らせらるゝ日野一位資枝卿ですら。御感心の餘りに。其御孫。日野中宮權大進殿と申すを遣され。翁を師と御賴みなされて。其始めて入せられたる時の御歌が。「和歌の浦に行へをたどる海士小船。今より君を梶とたのまん。と仰せられたでござる。此意を約めて申さば。和歌の浦と云ふ浦に。行方を跛て居るあまの小船に。御自分を御准なされて。大和歌の道にたどつて居る某じや程に。今より君を師匠と御賴み申すと仰せられたのでござる。此外にも御尋なされたる御かた〴〵が。各この意ばへの御歌を御讀なされ。何れも翁をさして。本居先生。鈴の屋の翁。又は鈴の屋の大人と御尊み遊ばし。御賴みなされて。翁の講釋を御聽聞なされ。閑院の宮樣。妙法院の宮樣までも。翁を召されて御慕ひあそばし。實に千古の昔より。かやうの事はありや致さんでござる。扨爰に一つの話がある。夫は今の世に。戲作者と云ふが有て。彼や此やの書物を見かぢり。あそこを取てこゝへ紹ぎ。無いことも有るやうに。面白くをかしく書取て。其を渡世と爲て居る者じやが。とかく小利口に立回つて。面白さうなことは。猿のやうに人眞似をする。既に本居先生の。古へに。高皇產靈神と申すが。天上にまし坐て。世の中の萬の物人種をも。御造り出しなされたと云ふことを。其著されたる書どもに。くれぐれ言て置れ。また大禍津日神と申すがおはし坐て。世の中のあしき事をつかさどり。大直毘神と申すが御坐て。其惡きことを。善きに復さう〳〵となされること。是も古書に據て。いひ置れたるを見ると直さま。善玉惡玉と云ふ戲作本を作つて。天道樣が。竹の管を以て。子供がシャボンとやらを吹く體に。圖などを書いて世に弘め。また今はやる五冊ものとか云て。敵討や。因果咄しを書綴りたるを見るに。近頃に出來るものほど。古い詞を交てかき。又一人にてつぶ〳〵と。小言など言ふ事を。古い詞では。ヒトリゴチテと云ふ。其戲作本に。こんな詞もある。又俗にそれはこれはなどゝ言を。そはこはと云ふ。かやうの詞も戲作者がまねて書く。こりやどうして。彼等が知てかくと云に。皆我か翁の著されたる書物

が。古へ言で書て有る故に。其を見やう見眞似に。やッて見るのでござる。爰に又をかしい事のあるは我が同門の者の處へ。俳諧をする者が來て。それが庭とやらへ。龜の子が來たとて。きつく悦び。其事を文らしき物に書て。持てきて直してくれろと云故に。其を書き直し。龜の子が不意に來たと書て有た處を。ゆくりなくと直して遣たれば。其人が云には外はよけれども。此ゆくりなくと云詞が有ては。今流行る五冊物のやうで惡いから。昔のよい詞に直してもらひたいと云たで。是には同門の者もあきれたこの話でござる。なんと戲作者どもが態にしろ。其眞の言が。けッく俗の詞じやと思ふ程に。翁の德はゆき渡つて。世に有難き翁なれども。世の人は知らず。唐人も申た通り。耳が聾て。謂ゆるつんぼうなる者は。雷が鳴てもとんと聞えず。盲人は何なる面白き物も見えぬやうなもので。世に道を學ぶの。學問をするのと云人々も。知らず〳〵其德を蒙つて居れども。此翁の。さばかり有難き先生におはせることをば知らぬでござる。さて翁の著されたる書物が五十五部。卷數百八十餘卷有て。何れも〳〵學問する者は。常に傍を放されぬ物で。一部一冊として。扨この先生は。享和元年九月廿九日に。御年七十二にて身まかられたでござる。抑中古に。儒佛の道が渡てより以來。世人の心其の風に推移つて。古道の趣は粗略に成行きまして。次第に猥りがはしく。世を經るに從て。古への道は絕たるがごとく。足利將軍の。天下の政事を執中されましたる頃は。誠に亂世の至極でありました處が。織田信長公。豐臣秀吉公。次々出させられて。大きに惡弊をきため直されまして。天下の人略その威勢には服しましたなれども。猶人心は穩かになりませぬ處に。畏くも東照大神君。御武德を以て天下を治めさせられ。其御仁澤至らぬ隈なく。人々忠孝の道を心得。尊內卑外の旨をも辨へて。次々古へに復り行べき中にも。世を治めさせらるゝには。古道を學べきこと專一なる儀を思召され。天下に命せて。古書を御求め遊ばされ。緊要の書等をば。悉く書寫を命ぜられ。京都にも江戸にも。駿府にも差置せられたでござる。是らの御事は。當時の御記錄どもを拜見いたせば。明かなることで。扨

其の多く集めさせられたる古書どもをば。尾張の源敬公に御附屬なされ。敬公是に依て。神祇寶典。類聚日本紀など申す書を撰ませられ。又水戸の源義公。其御志を繼せられ。有用の御書ども御撰ありたる御事は。既に上に申すが如く。是より世に弘まり。この學問に仕へ奉る人々。追々出ましたる中に。身は下ながら。荷田宿禰羽倉東滿翁。賀茂縣主岡部眞淵翁。平阿曾美本居宣長翁。この三人の大人等。次々に勵み學ばれ。その門流も多く。今かやうに眞盛と相成り。我輩に至るまで。太平の御德化を蒙つて。心寛に。古へ學び仕へ奉ることゝ成たるは。專東照大神君の御恩頼によることゝ。有難しとも尊しとも。稱へ申べき詞もないでござる。猶是等のことは別に委しく記したる物が有ます。今は彼かけて通るこ申す程のこと故に。大略の中の。又大略を申すのでござる。

さて此方のごとく道の趣は。何に據て申すぞと云に。古への事實を御記し傳へ遊ばされたる。朝廷の正しき御書物を本として申すので。一體眞の道と云ものは。事實の上に具つて有るものでござる。然るをとかく世の學者などは。盡く教訓と云ふ事を。記したる書物でなくては。道は得られぬ如く思て居るが多いで。こりや甚の心得ちがひなことで。教へと申すものは。事實よりは甚下い物でござる。其故は。實事が有れば教へはいらず。道の實事がなき故にをしへと云ことがおこる。唐の老子と云書にも。大道すたれて仁義ありと申したは。こゝを見ぬいた語でござる。殊に教と云ものは。人の心に親くはしみぬもので。其は譬へば。武士の心を勵ますに。軍に出ては先驅せよ。人に後れるなと書いたる。教への書物を見せるよりは。古への勇士等の。人に先だち。勇猛さかんに戰ひ。高名など致したる事實の軍書を見たる方が。深く心にしみこんで。我れも事有らば。昔の誰々が如く。適やッて見せやうと云ふ。猛き心がふり起る。かの先がけせよ後れるなと云ふ教では。さまで心の振起らぬものでござる。又近くは。君の仇は討べきものぞと云をしへをきゝたるよりは。大石内藏之助はじめ。四十七人の義士が。千辛萬苦の難義をして。主君淺野内匠頭殿の仇。吉良上野介殿をうちたる實のはなしが。身にしみ／＼と髮も逆だ

ち。涙もこぼれるほど。心に深く染るものでござる。是は誰しの人も。心には覺えの有さうなもので。殊に敎へといふ物は。其心ざま其人となりの宜からぬ者が。言置たる敎訓でも。書に記て遺つて有ると。何さま尤らしく見える物で。唐の敎への書物と云ものには。是がけしからず多い。或は君を弑して。國を奪たる者などの云た敎言にさへ。誠に金科玉條と云て。玉とも金ともいひさうに。尤らしく書てある。しかれども其行ひの實を見れば。主殺し國賊じやに依て。其尤らしく言てある事どもは。皆空言と云てそらごとじや。實が無くて。其書列ねたる處ばかりが立派では。そりや山賣の能書を見たやうな物でござる。此等の訣をば夢にも知らず。敎への書物で無ければ。道は得られぬ。敎導にはならぬなど丶思つて。世の常の學者や。道學者なんど云ふ輩が。夫ばかりを唱へて居ると云は、片腹痛いことでござる。唐でも此等の訣をよく心得たるは。まづ孔子一人のやうでござる。汲こそ其申した語に。我欲レ載ニ之空言一。不レ如レ見ニ之行事之深切著明ニ也とあるでござる。此意は。孔子の思ふには。人を敎ふるに。

夫はさうする物ではない。是はかうするものじやと云やうに。尤らしき敎へ言を記して。人を誨さうと思ふけれども。夫では人の心に入りかねるから。夫よりは是を。人の行ひの事實に書著して見せるほど。深く切に。著るく明かに。人の心にしみることは無いと云の意でござる。此意ゆゑに。孔子は敎の書とては。一部一冊も作らずにたゞ春秋と云記錄をしらべ正して。何の某は。かゝる惡き行ひが有つた。誰々はかやうの善事が有つたと云ことを。ありの儘に記して。その記錄を讀めば。自から其中に。ちやんと惡をこらし。善を勸むことを。人の氣の付くやうに書取たもので。實に孔子生涯の骨折と云は。此春秋でござる。夫ゆゑに。わが志春秋に在りとも。又我を知る者は。それ惟春秋か。我を罪する者は。其たゞ春秋乎。とも申したでござる。此意は。我存分に志をこめて。記したる物は春秋じや。此春秋が世に傳はり。後の人が是を見て。いかにも孔子は。道を辨へたる人と知れるものは春秋じや。又國々の君にしろ。主弑しは主ころし。親ころしは親弑しと。有りのまゝに記したる故に。是は孔子の憚りなきの

じやと。後の世に我を罪に言ひ貶すものも。此春秋じやと云の意でござる。是程に心をこめて書きたる春秋ゆゑ、いッち實の有るもので。孔子の心のよく見えるは。此書に越たる物はない。然るに大かた世間の儒者などが。儒書の上でも斯の如く。慥なる訣のあるを知らず。只々ひねくッた理屈の。教訓を書いてゐるは。己が本尊とする。孔子の本意を會得せず。春秋を熟く讀ぬからの誤りでござる。なんと是で眞の道と云ふものは。教訓の書では其うまみが知れず。事實の書物でなくては。眞意は得られぬ訣じやと云ふことも。合點のゆきさうな物でござる。只今申す通り。眞の道と云ものは。教訓では其旨味が知れぬ。仍て其古への眞の道を知るべき。事實を記してある。其書物は何じやと云ふに。古事記が第一でござる。其ふることぶみと云は。世間の人が。古事記とおぼえてゐる書物が。此ふることぶみのことで。扨この書物が。どうして出來たる物じやと云に。掛まくも畏き神武天皇より。第三十九代に御當りあそばす。天武天皇の。有難くも厚く思召立せられたる御事で。一體その以前。古くより朝廷にも諸家にも。記し傳へたる所の。天地初發よりの。古き傳説の御書物が有て。其が神代の古言の儘に書て有たでござる。處が其に各々誤りも有り。又紛らはしきこともあッたと云ふことで。そこで天武天皇の御心づき遊ばして。かやうに紛らはしき説が有ては。今此時に。よく其正實なる所を撰び定めずは。後の世に至りて。孰れを是とも孰れを非とも。分らぬやうに成らうと仰せられて。其朝廷の御記錄はもとより。諸家の記錄どもを集めて。精密に御吟味あそばされ。其少かも紛らはしき事なく。正しき所をしらげて。御撰成されたる書物でござる。尤も神代の古言の儘に。言の清濁をさへ嚴重に御しらべ遊ばし。違ぬやう誤らぬやうにと。先御自らの御口に。御誦うかべ遊ばし。其時稗田阿禮と云ふ嫗が有て。年は廿八歳。殊の外に利發聰明なる人で。口に誦み耳に觸たることは。心に記して。いッかな忘れると云ことのない人で有たでござる。そこで其の阿禮を召せられて。彼しらげに精げ遊ばされたる所の。天地の初發より。御父帝。舒明天皇までの御事を。天武天皇が。御口づからに御教へあそばされて其をとッく

りと。稗田の阿禮に唱へさせ。口なれさせ遊ばされたでござる。是は御國は固より。言靈の幸ふ國と。古語にも申して。言語の道を守幸ふ神のおはしまして。其の言語の上に。盡く精密なる。眞の道の趣のこもッて有ることゆゑ。其を違へぬやう失ぬやうにと。重んじ思召て。扨かやうに致しつゝ讀うかべて。言の清濁。上下りまでを熟したる上にて。御書取せ遊ばさうとの。厚き御心でおはし坐たが。其うちに御代が替て。此御次が持統天皇と申上る。其御次が文武天皇と申奉るでござる。所が此二御代の間に。何なる故にか。唯かの阿禮が口に誦うかべて有るばかりで。御書取せ遊ばさなんだでござる。其次を元明天皇と申上る。此時阿禮は。もはや五十有餘で。有たでござる。所で此御代の。和銅四年九月十八日と云日に。太朝臣安萬侶と云人に仰付られて。夫を御書取せなされ。翌年正月廿八日と云に。記し終て献せられたでござる。是すなはち安萬侶主の。表序に書れたる趣で。此書が即古事記でござる。此和銅五年が。今此文化十年よりは。千百二年になるでござる。されば此古事記は。畏くも天武天皇の。厚く

思召付せられて。御自ら古傳說の正實なる所を。御撰定遊して。御誦うかべなされたる古語で有ますから。世に類ひもなく。甚も尊き御典でござる。もし元明天皇の御代に。其御志を御繼あそばして。御書取せなされずんば。かほどにも尊く有がたき古語も。阿禮の媼が命と共に。失果るで有ましたらうを。有難くも和銅の御代に。御記し遊されて。今の世までに傳り來て。斯の如く拜見奉ると云は。有がたしとも有難いことで。かりそめにも道に志有ん者は。頂に捧持て。天武天皇又元明天皇。二御代の有難き思召し。また稗田阿禮。太朝臣安萬侶の恩德を。忘るべきことではないでござる。扨この御記に。天地を御始め遊はしたる神々の御事實を始め。其餘の事實に。盡く萬の始め。道の趣は具つて有るでござる。されば本居翁の歌に。「上つ代のかたちよく見よいその上。古ことぶみはまそみの鏡。と詠れたでござる。上つ代のかたちよく見よとは。上代の有樣をよく見たがよい。其の上代の有樣を能知うと思ふには。古事記を讀さへすれば。眞澄の鏡の曇なきが如く明かに。上代の眞の道に知れると云の意でござ

る。扨拙者の演説いたす所は。此通り明かに知れる。其古事記の事實を本と致して。古への道。神の御上を申すなれば。天武天皇。元明天皇。この二御代の厚き御心も。思召もこもッて有ること。かた〴〵以て勿體なく。恐多きことゆゑ。何れも其御心得で御聞あるが宜い。此方の身分こそ賤き者なれども。其の申す所は。神の御眞實。畏くも古への天皇命の。深く厚き思召で。殊には御口づから御誦うかべ御傳へ遊ばしたること故に實以てなほざりならぬ御事でござる。

扨世間に。神の道を學ぶと云人が幾らか有て。夫らはもとより。大凡の世の人も。日本書紀のみ尊び。その第一第二の卷を。神代の卷と云て。此二卷を別に板に致し。俗の神道者なんど。うるさく言痛きまでに。注釋をいたして。世の始めまた神の御事實をしるに。此を除いて。外に書物の無いやうに。思てゐるけれども。其は心得違ひで。其委き訣は。師の古事記傳の始めに。具に記し置れましたが。其大略を申さば。先一體かの日本書紀と申す書は。和銅五年正月に。古事記を御書取せ遊ばして。から八年後に。四十四代。元正天皇の養老四年五月。尤もこれも勅命に依て。一品舍人親王の御記しなされて。奏上られたもので。其以前に御撰び遊ばされたる。古事記の有るが上に。重ねて是を御撰びなされたるはどうじやと申すに。古事記は右に申す通り。上代の趣をすなほに。有のまゝに傳へやうと。天武天皇の厚く思召たること。安萬侶主も。其大御心を心として。記されたる物故に。只ありの儘で。漢の國史と云もの丶體には似もつかず。當時は公にも。漢學問を盛んに。御好み遊したるをりから故に。古事記の餘りに。只有りのまゝに飾なく。見立なくて。淺々と聞ゆるを。歎ず思し召て。更に廣くことどもを考へ。年紀をも立。また漢めかしき語どもを。飾りそへなんどもして。漢の文章を作し。諸越の國史に似たる國史と立ん爲に。御記なされたものでござる。一體が此やうの御趣意で。御記しなされたる事ゆゑに。とんと漢風で。甚だ古への實を失つたることが多いでござる。抑意と事と言とは。皆相稱つて居るべきもので。夫ゆゑに上代は。意も事も言も上代のさまが有り。後の世は。意も事も言も。後の世の樣

が有り。又漢國は意も事も言も。漢國の樣の有るものでござる。所をかの日本紀は。後世の意を以て。上代の事を記し。漢國の言語を以て。皇國の意を記されたる故に。相稱はず。こゝで古への實を。取失つたることゞもが多いでござる。又古事記は。少かも狡意を加へず。古へより言傳たるまゝに。記されたるに依て。其意も事も言も相稱つて。皆上代の實で。是は專古への語言を主と。記されたるが故でござる。凡て意も事も。言を以て傳へる物じやに依て。書物は其記したる言辭が。主とある大切のものでござる。仍て爰に日本紀のかざりの漢文ゆゑに。古への實を失ひ。かつ後世の惑ひを生じたることを。一つ二つ言はゞ。先その神代の卷の始に。古天地未レ剖。陰陽不レ分。渾沌如二雞子一と云より。然後。神聖生二其中一焉。と有までは。漢籍淮南子と云ふもの。また三五暦記など云もの。其外の書の文をも。彼此とり合せて。かざりに加られたる撰者の意で。此方の古への傳說では無いでござる。此續きの文に。故曰。開闢初。洲壤浮漂。譬猶三游魚之浮二水上一也。云々とあるは。是が實に此方上代の傳說

で。故曰とあるを以て。夫より上は。新に撰者の加へられたる文なることが知れまする。若さう無くては。この故曰と書れたることは。何の意とも知れぬでござる。初めの文は凡てさかしく。皆漢國風に書れたる故に。御國の古傳說とは。趣きが違てきこえる。然ればこゝは。古言の訓を附てよむまでもなく。唯序文として差置がよいでござる。既く古人も。釋日本紀に。日本紀卅卷無レ序。但師說。初ノ文。然後神聖生二其中一焉。已上者序文也。と云てあるでござる。そも〱天地の初發の有さまは。實に我が御國の。古への傳說の如で有ませうものを。何なれば煩くこちたき。異國の傳說をかり用ひて。初めに重ね擧られたることか。今この二つを比べ見るに。漢風の方は。理ふかく聞えて。信にさうで有つたらうと思はれ。古傳の方は。物げなく淺々と聞える故に。誰も〱。かの漢籍の說にのみ心ひかれて。日本紀の御撰者。舍人親王を始め。世々の識者。今にいたるまで。皆惑つたものでござる。夫故に此の漢文の處を。道の眞意と心得て。煩くうッとしいほど。注釋を書散し。祕授の口傳のと言ひ騷で居たが。扨

汲淺ましく拙いことでござる。又乾道獨化所以成此純男といひ。又乾坤之道相參而化。所以成此男女とある。是らの類の文も。撰者の心を以て。易の十翼などの文を採りて。新たに加へられたるさかしら文でござる。また伊邪那岐神を陽神と書き。伊邪那美命をば陰神と書かれたるなんども宜くない。これは其の頭上も下も。ひたすら漢めいたる事を。悦び思はれる世て有たる故に。此やうには書れたることなれども。甚以て後の惑ひぐさと成たでござる。其故は後の世の生漢意の學者ども丶。同く是を悦んで。その生さかしき心に。伊邪那岐命。伊邪那美命と申すは。唯かりに名を設けたるもので。御神體ある物ではなく。實は陰陽造化を指て云たものぞと心得て。或は周易の理を以て說き。陰陽五行を以て說くこと丶成たる故に。神代のことは皆假の作りごとのやうになり。古への傳說は。悉く漢意に奪はれ果て。眞旨の見えぬやうに成たものでござる。抑撰者はさやうのことまでには。御心も付せられず。唯文の漢めくを好きこと丶して。飾のみに泥まれたらうなれども。此文どもは後の世に至て。さまぐ\の邪說を招く媒となり。眞の道の顯れ難き根本とは成たでござる。猶此外に。煩くこちたき潤飾の文を加へられて。事實の紛と成たること少なからず。或は神の御名なんどをも。唐の異形の物の名に書替たり。中にも甚しきは。神武天皇の御卷に。弟猾大設牛酒以勞饗皇師焉とかき。崇神天皇の御卷に。盡命神龜以極致災之所由也。と書れたる撰者の御心は。只漢文の潤飾ばかりでは有なれども。後の人は是を實と思ひ。牛酒とある故牛肉を食ひ。神龜と有れば。卜法に龜を用ひたること丶思ふに依て。學問の害となることで。牛を食ひ。卜に龜を用るなどは唐でいたすことでござる。また景行天皇の御紀。倭建命の。東國を言向に御出立遊はす所へ。天皇持斧鉞以授日本武尊曰。云々と書れましたが。凡て古へかやうの時には。矛か劍などをこそ賜つたることなれ。斧鉞を賜はつたることはさんとない。夫故に是も古事記には。給比々羅木八尋矛と有る。是が實のことでござる。其を強て漢めかさうとて。斧鉞とは書れたもので。語を飾られたるは。まだ容る丶方も有れど。かやうに物をさへ

に督てかゝれたは餘りのことで。猶この類が夥しく
有るでござる。然れども又こゝに。日本紀の勝れた
ることを言はゞ。先神代の傳說を。精粗異同に拘は
らず。一書に曰くとて悉く古傳の儘に並べ擧られ。又
神武天皇より以後は。猶更御代々の御事を。委く詳
に載れたるに依て。めでたき御事實多く傳はり。彼
の漢風なる飾の文面を除ては。世に有りとある御典
の中に。此御典程。尊く大切なるはないでござる。
されば師の翁の歌に。「まつぶさに何で知らまし古へ
を。やまと御紀の世になかりせば。」と詠れたは是故
でござる。此等を以て。古事記と日本紀と。互に得
失差別あることを知るが宜いでござる。所が昔より。
世間の人おしなべて。唯この日本紀をのみ尊び用ひ
て。世々の學者も。是にはいたく心を碎いて。神代
の巻には。煩いほど注釋なども多く有るに。古事記
をば。唯等閑に思ひ過して。心を用ふべきものとも
思はずに差置たは。どうしたことじやといふに。世
の人たゝ。漢籍意にのみ泥んで。大御國の古意を忘
れ果たる故で。其甚しきに至ては。古事記を日本紀
の。下書のやうに心得て居る人さへ有るが。是らは
一向に。事の趣を知らぬ未しきことで。云にも足ら
ぬ非ごとでござる。爰に我が鈴の屋の翁は。其漢籍
意の好らぬことを悟り。上代の正實なる旨を。ます
みの鏡の曇りなく孰見あきらめ。古の眞面目を見る
べきは。古事記なることを世に誨し。古事記の傳と
云ふ。類ひなくめでたき書。四十四巻をかき著し。
古事記の尊き由を知るには。先日本紀の潤飾多きこ
とを知らざれば。漢籍意に迷ひをる癖疾さりがたく。
此病が去んでは。古事記の宜きことが顯はれず。古
事記の宜きことを知んでは。古へ學の正しき道は。
知られぬと云ことを發明いたされ。古事記を以て。
有るが中の上たる史典と定めて。日本紀をば。是が
次へ立られたもので。假令にも。皇大御國の學問に。
志の有らん輩は。努々此意を。思ひあやまらぬやう
に仕たがよいと。懇に言ひ置れたでござる。
扨この日本紀の題名は。日本書紀と書いてあるけれ
ども。やはり俗の言習はしの通り。日本紀と稱して。
書の字の無いのが本稱でござる。然れども。其の日
本紀と云ふ題號も。心得がたいことで。其はまづ漢
の國史の。漢書唐書など云ふ名に傚つて。御國の號

を標られたものなれども。漢國は代々に國の號の替る故に。其代の號を以て名を付ねば。分り難いからのこと。皇國の御皇統は。天地と共に遠く長く。御續遊して。替らせ給ふ事がないに依て。國號を標て。それと分けいふべき謂はないでござる。斯やうのことに國號を標るは。並ぶ處ある時の爲方でござる。然るに是は何に對したることかと云ふに。たゞ漢國に對せられたることゝ見える。然れば彼を內とし。我を外としたる題號で正しからず。此後次々に。御記しなされたる御國史どもゝ。又是に傚つて名つけられ。文德三代の實錄にさへ。此の國號を御冠なされたは。愈こゝろ得ぬことでござる。夫を後の代の人が。却て是を高き名と思ふは。何なる心で有りませう。此事は師の翁も。くれ〳〵言置れましたが。實に心得ぬことでござる。

扨世間の人が。誰も〳〵此國をさして。神國〳〵と云ひ。また我々は。神の御末じやなどゝ言ひますが。實に是は世間の人の申す通りに。違ひも無いことで。我御國は。天神の殊なる御意に依て。神の御生なされて。萬の外國等とは。天地懸隔な違ひで。引比べにはならぬ。結構なあり難い國で。尤神國に相違なく。又我々賤の男賤の女に至る迄も。神の御末にちがひ無いでござる。では有れども惜いことには。其神國。また神の御末なる所以の本を。知んで居る人が多いでござる。夫では一向むちやくちやで。折角神國に生れて。神の御末じやと云ふせんもないと申すものでござる。夫も更に神國とも。神の御末とも知らず。そんな志も無く。謂ゆる空々寂々とやらで居る人は。そりや爲方がなけれども。かりそめにも。神の有難い謂を聞かうとて。此やうに御入來あること云ふは。既に志の有ると云ふ物でござる。苟くも人と生れて。眞の道を知りたいと云ふ志が有るならば。此をば一つ誠の處をしらべて置たいもので。既に唐國の人すら禮記に。君子論二撰其先祖之美一而明著二之後世一也云々。其先祖有レ善。而弗レ知不明也。知而弗レ傳不仁也。此君子之所レ恥也。と申してある。此意は。眞の道を行く人と云ものは。其の先祖の美を撰び論め。其事を明かにして。後の世に著れるやうに爲ものじや。然るに其先祖に。善事の有るを。知らずに居ると云は。不明と申して。道

理に昧いと云ものじや。又其先祖に。善事の有るを知て居ながら。其をよく明らめ。世にも傳へやうと思はぬと云は。そりや不仁と云て。言はゞ。先祖に不實不孝と云ふものじや。是が誠の道をも辿らうと思ふ人の。恥べき事じやと云ことでござる。なんと唐人すらかやうで。夫に此の有難い神國に生れて。神の御末とある此方が。其本の所以を知らずに居ては。なんと口惜いことではないかな。實に御國の人に限りて。唐土。天竺。オロシヤ。オランダ。シヤムロ。カボチヤ等の國に至るまで。凡て此の天地に有とあらゆる萬國の人とは。とんと訣が違ひ。尊く勝れてゐることは。先この御國を。神國といひ初たは。もと此國の人の。我ぼめに申たことではない。先其の濫觴を申さば。萬國を御開闢なされたるも。皆神世の尊き神々にて。其神たち。悉く此の御國に御出來なされたることなれば。則御國は。神の御本國なること故に。神國と稱すは。實に宇宙界ての公論なること。更に論なきことなれども。其古傳をば。傳へ知らざる國々までも。自然と御威光の輝いて。神國なる事を知たることは。もと今の朝鮮が三韓と云て。新羅。高麗。百濟と申た時分に。御國の世に妙なる。ふしぎな有がたい國なることを。彼の國で聞傳へて。御國は。かの朝鮮からは。東に當る故に。其國の人が。東の方に。日本と云ふ神國が有ると云て。きつく恐れ敬つたもので。其の詞のつひ〳〵世に弘まつて。今では世間一般に。知るも知らぬも。神國々々と云やうに成たもので。是は漢人ながらも。能く言當たることで。其の神國に違ないと云訣は。神代の事を學ぶと能知れる。夫はまづ此の世界は。大造廣く大きいことで。國も勿論たんと有る。其中で我國ばかりを。神國じやと云ては。どうかうゐばれとか云すぢに聞えるけれども。上に云ふ如く萬國の公論で。夫に違ひのないと云ふ證據を。今具に申さうならば。先以て世の初め。神々からの言傳へに。此天地の無きことは。本より申すに及ばず。日月も何もなく。只虚空と云て大空ばかりで有たが。其大虚空と云ものは。更に〳〵極しなく大きいことで。實は口にては。何ともかとも言やうなく。限ないことで。其の限りの無い大虚空の中に。天御中主神と申す神おはし坐し。次に高皇產靈神。また神皇產靈

神と申上る二柱の。いとも〳〵奇く尊く妙なる神樣が在らせられたでござる。扨この二柱の皇産靈神の。其くすしく妙なる御徳に因て。其極しもなく限りも無い大虚空の中へ。其狀いふに言れぬ一つの物が先生て。其一つの物が。何もなき虚空の中に漂てゐる體が。たとへば雲の一村。係がる所なく。浮てゐるやうで有たと云ことでござる。所が其一つの物から。丁ど葦牙の如く。ぴら〳〵と角ぐみ騰た物がある。其あしかびと云は。葦の芽と云ふことで。則その立騰たる形が。葦の芽のふくやうで有た故に。斯やうに申傳へたものでござる。扨その上つた物の體は。如何なる物じやと申すに。是はいかなる物と云ふこと。傳へがないに依て。申されぬことながら。試に申さば。清くすみ明らかな物でござる。なぜさう申すぞなれば。是が則日と成たるもので。後に天照大御神の知し看てより。その御體の御光の照徹り坐て。まのあたり。天つ日と拜奉るを以て知るでござる。扨此物が萠上り騰るほどに。上へ騰つてしたゝか廣く大きくなる。譬へば山から。雲のもえ出る時は細くて。言はゞ葦の芽のふくとも云べき樣に見ゆれども。上へ升て限りも無く廣くなるやうな物で。御國のいにしへ。則神代に天國とも。高天原とも申し。また唯に天とばかりも申したことでござる。此等の訣は。此次の處で申すと能く訣るから。夫まで待れるが宜いでござる。扨始め葦の芽の如くもえ上りたる時に。夫に依て御生なされたる神樣が在る。其御名を。宇麻志阿斯訶備比古遲神。と申上るでござる。又其もえ上つてあめと成たる。其づッと上の處へ。御出來なされたる神の御名を。天之常立神と申上る。扨かの元の處。則葦芽の如く萠上つて。天と成たる物の。根と爲つてゐる處より。下へ垂下りたる物あり。是に依て御成なされた神の御名を。國之常立神と申し。夫に追すがッて。御出來あそばしたる神の御名を。豐雲野神と申す。此垂下りたる物が。後に斷絶て月と成でござる。扨又上にも非ず下にもあらず。其元の處へ。始めて御生なされたるが。宇比地邇神と申す男神と。須比智邇神と申す女神とが御出來なされ。其次を角杙神。活杙神と申し。其次を大斗能地神。大斗乃辨神と申し。其次を淤母陀琉神。訶志古泥神と申し。此次が人のよく知て居る。伊邪

那岐神と。伊邪那美神と御成なされたでござる。さ
てはじめに申したる。天之御中主神より以下。此の
伊邪那岐。伊邪那美神まで。十七神の御名に。悉く
深い訣がある。此をよく心得ると。別して其神々の
妙なる道理も。能分ることでござる。なれども先日
相斷りまする通り。只その道をかけて通ること故に。
是は別に委く申すつもりでござる。但し是うち皇產
靈神の御名の義をば。今が今きッと。心得ねばなら
ぬ訣が有るに依て。是をば一と通り申しませうでご
ざる。其は先かくの如く虚空の中へ。一つの物の出
來たるを始め。其中より葦芽の如く萠上て。天つ口
と成たるも。神々の御出來なされたも。此後伊邪那
岐。伊邪那美神の。御國を御生み固めなされて。月
日の神を始め奉り。もろ〳〵の神々を御生なされた
るも。又此後も追々諸の神々が。御出來なされて。
各々それ〳〵に主宰て。在らせられるけれども。其
元は皆この。皇產靈神の御德に依てなる事でござる。
そりやどうして知れると云に。其訣が御名の上に具
て有る。其はまづ高と云も神といふも。尊んで申た
る詞。又皇と申すは。則御の字の意で。高と云ひ神

といひ。御と云て。此神の御德を大きにほめ稱たも
のでござる。又產と申すは。產すると云字。また生
ずると云字の義で。物をむし生じ出來すことでござ
る。古歌に。我君は千世に八千世にさゞれ石の。巖
となりて苔のむすまで。と云は。苔の生るまでと云
ふことで。則それと同じ詞でござる。又今の世にも。
むすこ。むすめなど云も。すなはち我むし生じたる
子と申すことで。神代の古言の遺つてをるのでござ
る。又むすびのびは。奇々妙々にして。言にいはれ
ず測り知られぬ。尊きことを云ふ古言で。まのあた
り此世を御照しなされる日輪を。日と云ふのも。熟
熟見れば見るまに〳〵。はなはだ靈く尊く。奇々妙
妙なる物ゆゑに。日とは云ふでござる。皇產靈神は。
天地をさへに。御作り遊ばす程の。奇々妙々なる御
神德を具へて。入せらるゝ神様じやに依て。ひとま
をす詞をそへて。申上たものでござる。御名の義を
つゞめて申さば。天と申す高き處におはし坐て。世
にありと有る事物を。生じ御出かし遊ばす奇々妙々
に尊き神と申すことでござる。又御名の上で知れる
ばかりで無く。其は追々に分りますが。伊邪那岐。

伊邪那美二柱の神へ。天の沼矛と申す。御矛を下されて。此漂へる國を。造り固めよと仰せ付られて。御下しなされたを始めとして。世の中の諸事を主宰て在せられる訣が。神代の事實の上で。明かに見えてある。又事實に見えて有るばかりで無く。神武天皇より二十四代に御當あそばす。顯宗天皇の御代の。三年と云春二月のことじやが。日の神。また月の神様が。人に御託なされて。阿閉臣事代と云人へ。御誨あそばすには。我御祖高皇産靈神は。天地をさへ造りました御功あり。仍て神領の民地をさし上られよ。若其の通り差上られたならば。我幸へ守らうと御誨しなされたでござる。是に因て神領の民地をさし上られ。それ〳〵仰付られて。御祭あそばし。又こゝかしこへ。其御社を御建遊ばしたなどの。慥なる事もあるでござる。扨此の時の。日の神月の神の御誨言に。高皇産靈の御神を。わが御祖と仰せられましたが。此御祖と申すは。近〳〵申さば。御先祖と申す程のことでござる。一體日の神月の神は。伊邪那岐神の御子におはし座ながら。高皇産靈神を。我が祖と仰せらるゝは。どうした訣じやと申すに。諸の神々の御出來なされたるも。言もて行けば。皆この高皇産靈。神皇産靈神の。産靈の御靈に依らぬといふことはない。其故に日の神月の神様でさへ。皇産靈神様をば。我祖と仰せられたものでござる。既に神代の卷には。産靈の神様に。御子が千五百座まし〳〵たと云ことが有る。ちいほと申すは。千五百と書てあるけれども。千五百に限たことでは無い。此れは只數の限りなく多いことを。古言には千五百とか。八百萬とか云ふ例で。有ゆる神等を。皆この御神の御子じやと申ても。實は宜いやうなものでござる。其故は。神も人も。皆この御神の産し御生じなさるゝ。奇々妙々なる御神德に因て。出來るからのことでござる。拾遺集と申すは。三代集の一つで。朝廷の御撰集じやが。其中に。「君見ればむすぶの神ぞうらめしき。つれなき人を何つくりけん。」と申す歌がある。此歌の意は。扨々君は情ない方じやさう情なくさッしやる君を見る度ごとに。産靈の神様が。御恨めしう存じまする。其訣は。なぜ此やうにつれない人を。御造り出しなされたことじやと。染染思ひまする。と云ふ意で。是はもと戀の歌では有

るけれども。此の時分までは。此神様の御德を。世間の人もよく覺て居たる故に。斯やうの歌も詠だものでござる。なんと皇產靈の神と申す御名の訣と云ひ。神代の古事を。御記しなされたる事實の上に。何事も其本は。皆この二柱の。產靈の妙なる御靈に因る所以が。明かに見えたること。月の神日の神の御さとし言に。我祖高皇產靈神は。天地を預め造らしし御功ありと。慥に御さとしあそばしたることなどで。此神の御德の有難いことも。實に天にまし坐て。世の中を主宰して在せらるゝ訣も。よく分ることでござる。さ。是程によく道理の見えてあることでも。唐や天竺の學問を。わるく仕損つてゐる學者や。又は學問がなくても。生さかしらに生れ付た輩などは。其己が生れて出たるも。直ちに此御神の產靈の御靈に依て。出來たる物なることを辨へず。猶しつこく疑はしく思つてそりや此國ぎりの昔ばなしで。實にさうだか。信じられぬなど思ふものでござる。さやうの族には。まだ〳〵申し聞す事がある。なんと御國ばかりで無く。諸の外國に。人だねの生たるのも。又惡いながらも國らしくなり。夫々に物の出來たるも。皆此神の御靈に因ることで。其證據には。其國國に。各々その傳へが有る。夫は先唐の古傳說に。此神の御事を。上帝とも天帝とも。或は皇天とも名づけ奉つて。其神が。天上に坐まして。世を主宰して。人も其御靈に依て生じ。又人の性に。仁義禮智と云やうな。誠の心を具へて居るのも。皆この上帝のなされることじやと云ふ傳が。形の如く傳つてある。是はからの書物でも。ぐッと古く。詩經。書經。論語など云ものを見ても。眼を活して見るとよッく知れる。但し漢土は。生さかしらな國俗ゆゑ。夫ををかしく寓言のやうに。とき枉た說どもが有るなれども。其事は。先年鬼神新論と云ふ書を著して。具に辨じて置いたでござる。又天竺の古傳說に。產靈神御ことを。大梵自在天王と稱し。また梵天王とも申し傳へて。是もやッぱり其神が。忉利天と申す。至て高い天上に御坐て。世の中を主宰して。尤天地も人間萬物も。皆此神の造たもので。此神ほど尊い神はないと。上古から言傳へたものでござる。所がはるか後の世に釋迦と云人が出て。佛道と云ことを。己が心を以て作り始め。神道と云て。實は幻術じや

が。其の幻術を以て人を惑はし。其の梵天王。帝釋天のやうなことでは無く。其を供にもつれる程の。けしからず尊い。佛と云があると云て。大それたる妄說を弘めたものでござる。所を昔から博識な僧徒も。いくらか出たなれども。釋迦が妄說に目がくらんで。此の訣を云た者は一人も無いでござる。是らの委い訣は。佛道の演說に申すつもりでござる。又天竺よりも遙西の方にも幾らともなく國が有て其國國にも。夫々に天つ神の。天地を始め。人また萬の物をも。御造なされたと云ふ傳へが各々有る。是も蘭書と云て。阿蘭陀の書物を見るとよく知れるでござる。さア。なんと國通り。萬國いひ合せたやうに。天津神の天に御座まして。萬を產なし給ふと云ふ傳へが。訛りながらもあるを考へ合せて。皇國の古傳說の。小緣ならぬ訣がしれるでござる。然れば世に神々は。甚〱多く御し座せども。此御神は。其大本にまし〱て。殊更に尊くおはしまし。其產靈の御德。中でも更なる御事じやに依て。有るが中にも仰ぎ奉るべく。崇め奉るべきは此神樣でござる。夫ゆゑに。神武天皇の御代に。天皇命御自ら。鳥見の山中に。祭時を御立あそばして。御祭なされ。又八柱の神々を。朝廷の御守神と御祭りなされたるが。其の第一に。此の御產靈神二柱を御祭りなされ。次に玉積產日神。つぎに生產日神。つぎに足產日神。此外は。大宮乃賣神。御食津神。事代主神。以上八柱なり。則神祇官の八神と申し奉るは是でござる。此中にも。玉積產日。生產日。足產日の三柱は。伊邪那岐大神の司命の御靈の神におはしますこと。別に委く考へ置たでござる。扨かほどまでにも。產靈の御神を。重く御祭りなされ。又右に申す通り。唐南蠻。クロンボウの國々でさへ。此神の御德をば。第一と崇め奉る事の中に。其の神國に生れて。神の御末とある。此御國の人のよく辨へて。齋き奉らぬと申すは。あまりと云へば不糺なことで。勿體なしとも勿體なく。畏きことの限りでござる。とは申すものゝ。世間の人が押竝て。古への學問をするものでも無いから。是はどうかと云へば。世間の人の不糺しではなく。今までの世々の學者が。由なき漢さへづり。佛意の生さかしらにのみ惑ひはてゝ。此神の御德に氣がつかず。不辨へで。此神の御德を。

世の人に説き聞せなんだ故でござる。但し其生狡意な學者どもは。夫にして置ても。近くはよッく世の中の人の言ふことに。是は御天道様のなされる事じやの。或は御天道様が。此方をかやうに。御生付なされたのと言ひますが。其の天道さまと云は。何のことゝも知らず。申さばむチやで申て居るが。是は古へに。此神の御徳を。世の人が能辨へて。かの拾遺集の歌に。「君見れば産靈神ぞ恨めしき。つれなき人を何造りけむ」。と云た心ばへに申したる。詞と意の存つてゐるのでござる。何はとも有れ。此神の尊ぶべく齋奉るべき謂を知らず聞ぬ内は。そりやしかたがないが。もうかやうに聞て。なる程と思つたならば。速に其の神號を覺え奉つて。齋奉るが宜いでござる。なぜと申すに。こりや響いやうなれども。天地をさへに御造り遊ばし。叉萬の事を掌られる。諸の神等も。此御徳に依て。御出來あそばしたる程の事で。天地の有らん限りごころではなく。未天地も無かりし以前より。おはし坐たるを以て見れば。譬ひ天地は何になるとも。世に無窮に大坐々て。幸へ惠み給ひ。既に此方おたがひ。釋迦も孔子も。猶

も杓子も。皆此神の産靈の妙なる御靈に因て。生れ出たる物じやに依て。其本を忘奉らぬと云ふ。道の誠をたどるのでござる。漢國の如く。古傳説の慥ならぬ國人ですら。孔子などは。罪を天に獲れば。祈る所なしと申したが。此の意は。天帝すなはち天つ神の御咎めを獲ては。外に祈る所がない。なぜなれば。天津神は。諸の神の君の如くに坐ます故に。ごうもならぬと云の意でござる。猶孔子の此語の意は。鬼神新論と云ふ書を著して。具に論じおいたでござる。穴かしこ〳〵返す返すも。此御神の御德は。朝夕に忘れ奉らぬやうに是はきッと心得られるが宜いでござる。扨叉先年。伊勢平藏平貞丈先生と云ふ人あり。此人は天明の末あたりまで。世に居られたる人で。有職古實の學問。叉は武士道の學びに秀でられたる先生で。世に此家の學風を伊勢流と云ふ。なせなれば。足利の盛なる時分。殿中内外の古實を主られたる。伊勢伊勢守より以來連綿として。今も御旗本衆で。其古實と云を傳來してゐらるゝゆゑに。伊勢流と申すでござる。扨この貞丈先生の申されたる言に。書物を見るには。古への眼。今の眼と

いふことを心得て。讀ねばならぬことじや。其の古への眼と申すは。古の書物を常に多く見なれて。古代の風儀をよく見知たる眼を云ふ。又今の眼と申すは。今の世當時の風儀ばかりを見馴て。古代の風儀をば。一向に見知らぬ眼を云ふ。扨古への眼を以て。今の世の趣きを見れば。今の風儀が明かに知れる。今の眼を以て。古代の事を見る時は。古代の事をも。今の風儀の如くに見なす故に明かならず。疑はしきことばかり有て分らぬものじや。譬へば古き書物に。金百兩とあるは。煉金と云物を。秤目で百兩のことなるを。今の眼を以て見れば。金子の小判百兩の如く見える。又古き書に八丈絹とあるは。尾張の國より出たる物で。長八丈の絹なるを。今の眼を以て見る時は。八丈島より出る絹と同じ樣に思ふ。こんな類が殊に數へ盡されぬほど多いことじや。と云ひ置れたでござる。是は學問の上ばかりで無く。今日の家業づくにも。本を知つたと知らぬとでは。きつく慮の違ふことが有るものでござる。殊に學問と申すものは。何の上にも及ぼして。用にたて。働きをつくる爲の物ゆゑ別してのこと。先古き世の事をよく溫ね明らめ。高い處に上つてゐて。夫から下を見下す時は。今の世の低く新らしい事は。さしも骨を折らずに分るものでござる。是じやに依て。唐の人も。故を溫ねて新きを知らば。以て師たるべしとも申たでござる。今の世おのが身の上にも。靈き事は幾らも有れども。常に馴れてゐるから。其身をもあやしとも思はず。たまさか神異なることでも有ると。大きに惑ひを生ずる事が多いでござる。所を古への學を爲る者は。古へと云へば。此上もなき天地の始めから。奇しく靈しく。妙なる事といへば。此上も無き天地をさへに始められたる神々の御事實をよく明らめること故に此上の高い事はないから。神代の神の御上を。今の眼を以て。今の凡人へ引べつして疑ふやうな。固陋なる心は起らず。此を及ぼす時は。何の上にも流通ることで。とかく何の學び何の業でも。ぐッと高い處を爲ておくが宜でござる。譬ば本歌と云て。眞の歌を詠むものは。連歌はなんの苦もなくでき。連歌をよくする人は。發句が何の苦も無く出來るを見ても。とかく人は。高いことを覺えるがよいでござる。又貞丈先生の言れましたに

は。書物を讀で。其文の義をとくに。唯一方にばかり偏て。外に通じ渉らぬは。偏見と申て。片寄つた書物の見やうと云ものじや。また文の義を解くに。轉用旁通と云て。此事にも當り。彼の事にも當つて滯りのないが活見と申て。眼を活して書物を見ると申すものでござる。又偏見と片寄つた見やうの人は。憤悱と云て。事を開き。發明するやうなことは無い。活見と云て。眼を活して書物を見る者は。事を開き。發明する。憤悱の勢ひがある。と申されたるが。是以て學問の上ばかりではない諸事に行渡ることで。今の世に漢學する人々。又漢意の狹き惡癖の付たる人などは。多く今の眼を以て古へを思つたり。又かれを考へるに是を以てすると云やうな。活見の人も少ないでござる。どうぞさう無いやうに致したい物でござる。

扨御國の言に。凡て加美と申すは。古への意を尋ぬれば古への御典に見えたる。天地の諸の神等を始め參らせ。其を祀り奉る社にまし座す御靈をも申し。又人は更にも云はず。鳥獸草木の類。海山なんど。其外何にもあれ。尋常ならず殊れたる德が有て。畏み恐るべき物を。加美と申すが古へのさまで。其のすぐれたると云は。尊きこと善いこと。いさをしき事などの。殊たるばかりを云では無く。惡しきもの奇き物なども。世に殊れて畏きをば神と申すでござる。扨人の中の神は。先掛まくも畏き天皇御代々。みな神に座ますことは申すも更なること。其は萬葉を初めとして。古くより歌にも。遠つ神とも稱して。凡人とは遙に遠く。尊く畏くおはし座が故でござる。斯くて次々にも神なる人。古へも今も有ることで。又天の下に廣く流通したることでは無くとも。一國一郡一村一家の內に付て。其程々に神なる人は有ることでござる。扨神代の神たちも。多くは其代の人で。其代の人は皆神々しく有たる故に。神代とは申すでござる。又人ならぬ物では。雷は常にも鳴神と申せば。本より神なること論なく。又龍天狗狐なごの類も。すぐれて奇異く畏き物ゆゑ。是も神でござる。又虎をも狼をも神と申したること。日本紀。萬葉集などに見え。また伊邪那岐大神は。桃子に。大加牟豆美命と申す名を賜はり。また御頸の玉を。御倉板擧之神と申たる類ひも有る。又神代紀や。俗に

中臣祓と覺えて居る。大祓詞にもある通り。磐根木株艸葉などが。神代に物言たることがある。是も神でござる。扨また海山などを神と云たることも多い。夫は其御靈の神を云では無い。直ちに其の海をも山をも指して神と申たもので。是らも山は高く聳え。海は深く。渡るにも越すにも。甚かしこき物なるが故に。神と申すでござる。そも〳〵神と申す古への意を尋ぬるに。斯くの如く種々さま〴〵で。貴きもあり賤きもあり。强きも有り弱きもあり善きも有り惡しきも有て。心も行も。其のさま〴〵に隨つて。とり〴〵なることで。その貴き賤きにも段々が有て。最も卑き神の中には德が少なくて。凡人にも負けるさへ有り。其れは彼狐なんどは。其異き事を爲すことは。いかに賢く巧みなる人といへども。掛ても及ぶべきことではなく。實に神でござる。然れども又常に狗などにさへ。制せられるやうな。微き賤でござる。さやうの類の。一向いやしき神の上をのみ思比べて。何なる神といへども。理を以て向ふには。恐るべきことは無いと思ふ人も。世には多く有れども。是らは尊いと卑いと。其威力の。大きに

相違あることを辨へぬ非事でござる。扨かくの如くの訣じやに依て。神と申すものは。さんと一樣に定めては申しがたい物でござる。然るを世の人が。神をば凡て外國に謂ゆる。佛菩薩。聖人などゝ。同類の物の如く心得て。當然の理を以て。神の上を推さうとするは。甚しきひが事で。惡しく邪なる神は。何事も理に違つた所爲のみ多く。又善き神じやと申ても。其ほど〳〵に從つて。正しき理の儘ではなく。事にふれて。怒り給ふ時などは。御荒びなさるゝ事も有り。夫は崇神天皇の御代に。三輪の大物主神の。疫病を御はやらしなされたるなどを思ふが宜いでござる。惡しき神とても悅んで。御心の御なごみ遊ばしたる時は。幸ひ惠み給はることの。絕えて無いと申すでも有るまいでござる。又人の上にとりては。其しわざの。差當ては惡しく思はれることも。誠には善く。善いと思はれる事も。實には惡き理の有るなども有らうでござる。すべて人の智は限りが有て。眞の理は。得知れぬ物じやに依て。とにかくに神の御上は。猥りに測り云ふべき物ではないで。況て善いも惡いも。いと尊く殊れたる神等の御上に至ては。

最も〳〵靈く。奇々妙々に座ますに依て。更に人の小さき智慧を以て。其理などは。千重の一重も。測り知るべきことではない。唯その尊きを尊び。かしこきを畏み。恐るべきを恐れて有べきものでござる。抑その御國の古へ。加美と申すは。有の趣で有る所を。遙に後の御代に。唐の文字が渡り來て。其の加美と云ふ言へ。唐の神の字を充たゝので。是は能當てをると申すうちに。七八分は當つて。二三分はあたらぬ訣がある。其れはまづ。御國で加美と申すは。きツと其の實物をさしてのみ申して。紛はしい事はない。然るを唐で神の字の用ひ様は。實物の加美を指して申すはかりでなく。唯其の物を稱て。靈異と云ふやうな心ばへにも用て。譬へば神靈と云時は。あやしき劒と云ふこと。神龜といへば。あやしい龜といふことになる。御國で神と申す時は。必實物を指して申す故に。是らの違ひが有る。但し又一つ。御國語に。神何と。神の字を上に付て言ふことがある。其れは。神事。神はかり。神伊邪那岐命などの類。何れも美て申す。謂ゆる尊稱でござる。扨是は。カミとは言はず。カムと唱へることでござる。一體

御國は言語の國で。元は神字の假字のみ有て。漢字の如き義理ある字は無く。詞をのみむねと傳へたる處へ。漢字が渡て。その漢字を。御國の言語へ當てたる故に。義理の分り易いこともできたなれども。又かれこれ打合はぬ字も多くあるでござる。其れは段々開かれるうちに。追々合點のゆくこと。然るを世の常の學者等が。斯やうの訣を辨へず。漢字の義理にばかりすがり泥んで。此方の御事實を說くに依て。誤りたることも。又夥しいでござる。

古道大意下卷

平田篤胤先生講談　門人等筆記

扨先日の演説に申したる通り。世の始め。かの大虚空の中に漂つたる一つの物より。葦芽の如く萠上つて天と成り。其の天の根と爲てゐる。一つの物の底にも。又一つの物が垂下り成り。それに國之常立神と。豐斟野神とがおできなされたでござる。其の垂下つたる物を。根國とも。根堅洲國とも申したるが。是れが後に斷離れて。今までのあたり見奉る月と成つたでござる。扨その天は。其のもえ上つたる始めより。すみ明かな物で有つたる所を。今また天照大御神の所知食ことゝ成て。其の御光が照徹りて。ますます明らかなのでござる。さて此の天照大御神の。高天原を所知したと申す御傳を。世の神道學者などが。天と云は都のことで。則天照大御神を。天子の御位につけ奉つた事を。天へ送上たと云つたものぢやのなんのと。生狡意を申すけれども。皆心にまかせたる漫言で。天つ神の御傳へ。古への天皇命の厚き思召で。正實を御傳へ遊ばしたる。神の御事實をとき紛らかしたる奸曲。その罪輕からぬことでござる。扨また月讀命をば。夜の食國をしろしめせと仰られて。月を知しめす神と成され。是に於て伊邪那岐命は。初め高皇産靈神より。詔命を御受なされたる。御功績が立たる故に。すなはち更天に御上りなされて。其事を御祖神へ。復命おふせ上げられて。此の後永く天上にある所の。日少宮と申すに留まつて入せらるゝことで。扨この伊邪那岐神の御目より。月日の神の御生れなされたると云に。能似たる説が。漢土の古き傳説にもある。夫は天地の始めの時に。盤古氏と云が出て。其盤古氏の左の目が日となり。右の眼が月と成たなどゝ云ふ説のあるのは。こりや御國の古傳説の訛りながらも。彼の國へも傳へ遺つたものと見えるでござる。但し爰に一人。此の方を難ずる者が有て申すには。先刻から承はる所が。神代の事を講釋せらるゝに付て。大分外國の似よりな傳説を引言にいはれますが。先その如く。外の國々にも。我古傳説と同じやうな説が有ては。我か神代の傳説が正しいとも申されませぬ。なぜと云に。若その外國の人々が。一所に寄集つて。各々其

の國の古傳說を語出したる時に。何れも何れも。我國の傳へが正しい。我國は本ぢや。わが國は日神の御本國ぢやなど〻云ひ爭つたならば。誰が夫を裁斷して。是を果したもので有らう。なんと天地初めの時より。生て居る人はありやすまいし。夫に外國の說は誤で。我神代の說ばかりが。正しい〳〵と云は。どうか我家の本尊が尊いと云たやうで。贔負のさたが過るやうだが。どうでござる。又さやうに紛はしき說が。此にもかしこにも有ては。何れが是とも非とも。定め難いことぢやに依て。神代の事おツくるめて。先は信ぜぬ方がましであらうと難じたでござる。なんとかやうに難じられては。傍より見ては。ちと困るで有うと思はれませうが。一向こまる訣ではない。こゝが却つて學問の德の見える處で。則これに對て曰ふには。先右の如く紛はしき處をも。學問の眼を以ては。其の眞僞忽に見分ることぢや。今これを近く譬へていへば。定家卿の小倉山の山莊にて書れたるのは。本より一首が一枚づゝならでは無きはずのもので。所を菅家の歌にもせよ。蟬丸の歌にもせよ。其の一枚づゝ有べき物を。十人が持つて居て。各々是が眞ぢや〳〵といひ爭ふ。こゝでは甚紛らはしいやうなれども。古筆見とか云やうに。よく目の利た人は。夫を悉く見分て。十枚の內から。一枚眞の色紙を見出す。ちヤうどこんな物で。夫を見分ることができず。押並て僞物であらうと捨るのは。そりや利發のやうには聞ゆれども。見分る眼の具らぬので。未巧者の至らぬと云ものでござる。然れば神代の傳へを。外國に似よりの說が有ては。紛はしいとて信せぬのも。是と同じことぢや。其撰び分け見分ることを。今一つ近きことの上でたとへば。米の商賣をする者などが。米を見分るのに。五箇國十箇國の米をまぜ合せたるを。一握り見せると。是は美濃の上米。これは仙臺。是は九州米と云ふやうに。一粒々々より分るでござる。しろうとが見ては。どうか虛言らしく思ふやうな物ぢやが。其撰分たる處で見ると。なるほど米粒の形が各々違て。見紛ふべきやうは無く。爰で素人ども。とんと閉口することで。學問も其の如く。よく公に學んだる其の精密なる　かの古へと今に通るべき眼をぐツと見開き。事實と古へに徵して考へる時は。此位な事は何の苦

もなく分ることで。中々以て我神代の古傳說は。たとひ外國の似よりの說がいくら有つたればとて。自からの實事にためし見るに。動かぬ事でござる。然らばなぜ又其誤がちなる。外國の說を引くと云に。是が彼足代でござる。足代のことを云、生さかしき人の古傳說を疑ふ者を諭すには。誤りにもせよ。外國にも似寄た事のあるを引て聞かすれば。考へ合せて。さては諸の國々が云ひ合せたやうに。かやうの傳へが有ては。何れ此の事は。有たることには相違ないと云ふ心が先出來る。其心の出來たる上では。彼と此と考へ合せて。諸の國にいひ傳へたる說の中に。殊れて御國の古傳說が眞實ぢや。大槪ならぬことぢやと。疑ひの速かに晴る人も。まゝあるものでござる。外國の似よりな說を引のは。其悟を得させんが爲で。さやうに悟つた上では。もはや外國の引言は。無用と成ていらぬ物でござる。是は佛書の譬なれど。月の在所を敎へんとするに。指をさし上て。あれ〳〵あそこよと云て敎へはいたすなれども。其の人が月を見つける時は。其のさしをしへたる指が。もういらぬ故に引てしまう。ちやうどそんな物で。外國の似よりな說を引て申すのは。御國の古傳說を見つけさせんと。指敎へたる指ぢやと思はるゝが宜いでござる。

扨伊邪那岐伊邪那美二柱の神樣が。始め天つ神の詔命を御受なされて。おのころ島へ御下りなされて。大八島國を次々御生遊ばしたる事を。かやうにかい撮んで百が一を申ては。實は事も分らず。僅ばかりの年數のやうにも聞こゆるなれども。神の御壽命は。いとも〳〵久遠と云つて長いことで。實は計り知れぬことでござる。夫ほど年數の積つたことでは有るけれども。猶此時までも。未だちやんと御國もでき終たと云ではないで。然れども種々の神々を。御生置なされたる事ゆゑ。追々其の御末が。ふえて。中にも須佐之男命の御末が。さつく御勢が有て。大穴牟遲神と申す。甚の勝れたる神樣で。御兄弟が八十柱おはしまし。始めは此の御兄弟の神々の爲に。かれこれと御難儀をなされたなれども。夜見の國に坐ます。須佐之男命の御計らひに依て。遂に其多くの御兄弟の神々を御從へなされて。則この御國を所知めし。又の御名を大國主神と申し上るも。此の御國を

知し食たる故でござる。御子たちも多くおはし座て。其の中にも第一が事代主神と申上て。神祇官の八神の其の御一と方でござる。又味耜高彦根神。これは高加茂の神様でござる。また建御名方命と申すは。是は信濃國諏訪におはします神様で。何れも〳〵御威勢が強くおはし坐たでござる。扨此の此大國主神は。御名をかず多く御持なされて。居させらるゝに依て。大名持神とは申すで。大名持と云が轉じて。大汝と云やうに成たもので。扨大名牟遲神は。かの八尋矛と申す。嚴しき矛を御杖あそばして。少毘古那神と申す神様と。御力を御合せなされて。此の御國を御經營なされ。伊邪那岐。伊邪那美神の。なされ殘しておかれたる事共は。大きに片付たでござる。猶又醫藥方術の道をも。此二柱の神の御始めなされた事で。是は醫道の講談の砌に申すつもりでござる。さて爰に天照大御神は。伊邪那岐神の御命のまにまに。天の君とまし坐て。高皇産靈神。神皇産靈神もろ共に。天の事は申すに及ばず。天の下の事をも至らぬ隈なく。御めぐみ遊ばして入らせられ。扨御せらるゝには。葦原の中國は。我が御子の所知食べ

き國ぞやと仰せられて。其の御子神。正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命へ。詔が有て。この御國をしろしめせと仰られたでござる。此天忍穗耳命と申上るは。以前。須佐之男命と。天照大御神と。玉と劒とを以て御誓なされて。世の神道者流などが。劒玉の誓とか云て。例の秘事口傳を云てさわぐは此のことで。其の誓の上に御出來なされたる神様で。則高皇産靈神の御女。萬幡豐秋津師姫命の御子。玉依比賣命と御配偶と爲されて。其御生あそばしたる御子の御名を。天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命と申上るでござる。かやうの譯ゆゑに。此の邇々藝命は。天照大御神には。御正統の御孫。また高皇産靈神には。御曾孫に當らせらるゝ。それ故に。この邇邇藝命の御事を。皇孫命と申上る。又天孫と書たるも同じことでござる。扨右申すとほり。此御國は。かの御威勢の強い大穴牟遲神の。知看て入せらるゝ處へ。上もなき天照大御神。高皇産靈神の御意とは申しながらも。別段に君を御天降し遊ばさるゝに付ては。一と通りの事ではまゐらぬ譯ゆゑに。天に於て。かの大祓詞。すなはち俗に謂ゆる中臣祓に

もある通り。八百萬の神等を。神集へに御つどへ遊ばし。色々と御評議が有たでござる。ところが興臺産靈神と云神の御子に。思兼神と申す神がおはし坐て。是はきつく思慮の深き神で。近く申さば。御智慧の卓れたること故に。此神へ御尋ね有て。すなはち天穗日命と申すを。御下なされたでござる。この穗日命も。實は天照大御神の御子で。云はゞ堪忍ずよく。御辛抱なされて。事をなし整へる。御性質の神様で有たる故に。かの御勢の强き。大穴牟遲神に。御心の和むやうに。御承知の有るやうに。かれこれ御執拵へなさるゝ處が。三年許がほども經たと申ことでござる。是に於て。又々御評議が有て。天稚日子と申すを御下しなされて。武威を以て。大穴牟遲神の御承知なさるゝやうにと有たる處が。天稚彦は却つて。大穴牟遲神の御女。下照姬と申すを娶て。自分に此の國を得んと搆へ。是も八年がほど。御返事を申されなんだでござる。夫のみならず。天津神より。御催促の御使に遣はされたる。雉名鳴女と申すを。射殺しなんどさへ致したでござる。是に於て。又かの名たゝる武甕槌男神。經津主神と申す。武勇絶倫と類なく。勇しき神二柱を。御天降なされて。彼の穗日命の。大穴牟遲神を御和なさるのと。武甕槌神。經津主神の武勇とにて。とう〳〵大穴牟遲神は御承知なされて。遂に此の國を皇御孫命へ。御禪りなさるゝことに成て。扨仰せらるゝは。出雲國へ。天皇の大宮と同じ樣に宮を造つて。我を御祭り下さるならば。其處に鎭居て。幽事と申て。世に有りとある事の。隱れて。現在の目に見えぬことどもを主宰りませう。又皇御孫命は。長く此の御國を御治なされて。天の下の顯事と申て。世の中の目に見ゆることどもを。御治め遊ばせと仰せられたでござる。彼天下を御經營なさるゝ時に。御杖あそばしたる八尋矛を。御ゆづりなされて。此の矛は我が。天の下を治めたる功のある矛ゆゑに。皇孫命是を以て。國を御治め遊ばしたならば。必ず安らかに治ませうと仰せられたでござる。そこで高皇産靈神。天照大御神にも。御尤に思召て。其仰せのとほりに。出雲國の多藝志の小濱と申す處へ。嚴く大きく宮を御造せなされて。夫へ大國主神は。長く御鎭座あらせられたでござる。此の御宮を杵築宮と申して。則

今の出雲の大社のことでござる。又かの天穗日命は。大國主命を御和なされて。云はゞ御氣に入なれば。其の御使神と成れたでござる。すなはち今の國造と申すは。實には國のみやつこと申べきことで。此の天穗日命の御末の。連綿と相續いたさるゝの下。中々以て一と通りの家柄ではない。右の訣ゆゑ。今の現も。世の中の幽事と申て。彼の隱れて目に見えず行はるゝことは。悉く出雲の大社の御計らひなること。論なきものでござる。玉鉾百首に。「あらはにの事は大君かみ事は。大國主の神の御こゝろ」。と詠れたはこの意で。俗の諺に。十月は神々が。出雲の大社へ御寄なさるの。或は緣むすびを爲るゝと云ひますが。是はけしからず古くから。世間に申したことで。其れを古い學者たちが。彼此と理屈を申て。なき事にしたがるけれども。篤胤が竊に思ふには。かの天もの言はず。人をして言はしむるとかいふ類ひに。神の御心として。世にかく言觸したることで。誠に此のとほりに違ひの無いことかと思ひ合さるゝことが。今の世にも大分あるでござる。何はともあれ此の神は。世の人の殊更に能齋き奉らねばならぬ神樣で。猶この神の御德を。人たる者は。粗略に思ひ奉るまじきことなる由は。古史傳また。玉襷と申すものに。委しく申し置いたでござる。

さて先この通りに。大穴牟遲神は御鎭り遊ばして。そこで天照大御神。高皇産靈神の御心として。いよいよ皇孫瓊々藝命を。此の國へ御下しなさるゝ段に成て。天照大御神。御手に謂ゆる三種の神器 すなはち草薙の御劔。八尺瓊のまが玉。それに伊勢の五十鈴の宮に。天照大御神の御靈代と齋き奉る所の。御鏡を御捧げあそばして。瓊々藝命へ仰せらるゝには。豐葦原の水穗の國は。吾子孫のつぎ〳〵所知食べき地なり。汝皇孫命行て知しめせ。又この御鏡は。我御子孫の繼々。もはら我が御靈として。我を視るが如く齋ひ祭りて。御同殿におはしませ。寶祚の隆坐んこと。天壤と無窮なるべしと。御祝言を仰せられて。又御添なされたる神々は。中臣藤原の御先祖の神。すなはち河内國枚岡に鎭り坐ます處の。天兒屋命。忌部家の御先祖。天太玉命を始めとして五柱。また別に皇孫命の御守護の神と遊ばさんが爲に。其御靈をも御添なされたる神々は。天手力雄神。是は信

州戸隠。また豊宇氣毘賣神。是は上天子樣より下々までの。朝夕の食物を。飽まで安らかに給られるやうに。御守なさるゝ神樣で。すなはち伊勢の外宮に鎭りまし坐が此の神樣でござる。又諸の禍事の。四方四隅と申て。よもよすみより入來るを。入れじと御守りなさるゝ御門の神。すなはち門を御守りなさるゝ天石戸別神。また何によらず思慮を深くして。考へ悟ることの妙なる。天思兼神の御靈などでござる。扨此やうに何れも〳〵。卓越たる神々を御供にさし添られ。天の浮橋に乘りて。かの大祓詞。すなはち俗に中臣祓と云文にも。天の八重雲を。いづの道別に道別とある通り。八重九重に。たな引きかさなる天雲を。かきわけ〳〵。天忍日命と申す神が。天の石靫と云を御背負なされて。太刀を佩き。又天の梔弓といふ弓を御持なされ。天の眞鹿兒矢と云御矢をたばさみ。皇孫命の御前に御立なされて。御天降なされたでござる。扨その御天降なされたる處が。日向國高千穗峯で。此時第一に御出迎なされたる此國の神が。猨田彦大神でござる。此御下なされたる時に。空が暗くて。物の色目も分らなんだと申すことで。そこで稻穗を籾となして。四方へ御投散なされたる所が。空も晴たと云ことで。此山のこと。今は霧山とも霧島山とも云て。西の峯は。大隅國贈唹郡。東の峯は。日向國諸縣郡で。此山の不思議なる事ども多く。其の中に。今も神代の由緣に因て。自然生の稻のはえると申し。又時として。霧の深く立つことが有ると云でござる。所を神代の古實と申て。謂ゆる先達の者が人に敎へて。手毎に稻穗を持せ行て。若この霧が起る時は。其を以て拂ながら行けば。暫が間に天晴て。事故なく登られると申すことでござる。

扨この御天降りの時に。御乘なされたと有る。天の浮橋といふは。天と地との間を往來する物で。空にうかぶ物ゆゑに浮橋と云ふ。此世なる物では。船と同樣の物。それ故に。天の磐船とも申すでござる。始め伊邪那岐伊邪那美神の。天の浮橋に御立なされ。沼矛を以て。國を御探なされたとあるも同物でござる。扨此のうきはしに乘には。高き處よりのることと見えて。今國々に在る梯立と云は。其料に神の御造なされたる物の遺跡と思はれる。其れは先播磨國

の風土記に。賀古郡益氣の里と云處に。此の梯立のとあり。又丹後國の風土記にも。與謝郡速石の里といふ處の海に。橋立と云ものあり。是はけしからず大きいことで。長が貳千貳百貳拾九丈。廣さが九丈拾丈。もツと廣い處は。貳拾丈ぐらゐの處もあると記てあるで。是は今の世の人もよく知て。見に行ものも大ぶある。篤胤が知た人にも。見て來た者も數人有て。何れも恐入て。とかく强言をしたがる者も。我折て居でござる。抑此浮橋の往來は。伊邪那岐伊邪那美二柱神の。大そらを乘るために。御造りなされたるが始めにて。此後は。ほかの神々の御往來も必有たるべく尤其中に。天照大御神を天へ御送上なさるゝ時は。天之御柱を以て。御上なされたと有れば。此れは別物なる上に。この頃までは。天地相去未レ遠こも有て。近く容易く聞ゆるなれども。今皇孫邇々藝命の。浮橋に乘て御天降なさるゝ趣は。八重棚雲を。稜威のちわきにちわきなど有て。其さま以前よりは。殊の外遠きやうに聞ゆるでござる。扨この御降なされて後。ますゝゝ天日は上へ相遠ざかるに依て。此の浮橋の往來も止み。其梯どもゝ。

終には地に仆伏たるが。即今。播磨や丹後國にあるのじやと云ことでござる。斯くて天日は上へ上つて。大虚空の眞中に。しやんと位を定めて。外へは動くことなく。一處に在て。右旋りに。くるゝゝと旋て有る。これ天つ日の有狀也。扨又大地は。其の天日を中として。其より遙に遠き大空を。右めぐりに漂ひ行て。大周り一周する。これ一年なり但し此大周の間に。自己の旋轉ありて。天日に向ふ時は晝をなし。背向るをりは夜となる。此一旋轉を一日と云ふ。かくの如くに旋轉ること。三百六十餘轉する間に。大空を行き。天日を大周して。又本の處にかへる。是を一年と云ふ。扨また夜見の國も。此みぎりに斷離れて月と見え。大地の外を周行して。盈虛を爲し。二十九日半餘にして。本の處に復る。是を一月と云ふ。これすなはち。天日。大地。月夜見の。今の如く成整ひたるとの大略でござる。此事を近く譬へて申さば。服部中庸が申たるとほり。兒の臍帶と胞衣と續きたるが如く。又木草の果が熟すれば。蔕おちのするやうなもので。是只に其狀の似たるばかりで無く。其の道理迄が全く同じことで。なぜと

申すに。皇孫命の。天より御降なされたるは。兒の生出たるやうな物で。又伊邪那岐伊邪那美二柱の大神の。御生なされて。日の神の御生れなされたる。此の御國の君の御定り遊ばして。御天降なされて。御治めあそばすは。天地國土の事の。全く成就したる所で。是草木の果の生て熟したると。全く同じ道理でござる。又其の始め一の物より。天と萠上りたる砌は。正しく天と上下相對する處が御國なる故に。即御國の在處は。此の大地の頂上なることが知れるでざる。又諸の外國の初は。古傳說に。處々の小島は。皆是潮沫凝成者矣。とあるに依て考ふるに。伊邪那岐伊邪那美二柱の神。大八島國を御生なされて。國土と海水と。漸々に分れるに隨て。こゝかしこと。潮の沫の自らに凝固まりて。泥土のより聚て大きくも小くも國と成たるので。御國に比べては。遙に後れて成たることをも知が宜いでござる。是も皆皇產靈神の。むすびの御德に依て出來ることは。異り無れども。外國どもは。二柱の神の御產なされたるに非ず。又日の神の御本國でないに依て。御國とは初より。尊卑美惡の差別も。爰でよく分るでござる。是を思ふにも。皇國はこれ天地の根蔕で。諸の事物。悉く萬國に優れてをる所以も。又諸の外國どもの。何もかも皇國に劣るべきことをも。考へ知るが宜いでござる。又此の訣ゆゑに。諸の外國どもに。偶のこれる古傳說も。御國の如く。詳には傳らぬはずのことで。是は譬へば。京に有たる事を。國々の鄙に語りつたへたやうなもので。本の京ほどに慥ならぬも。尤なことでござる。又御國の古傳說の片はしを。訛りながらに云ひ傳へて。其の國の如く申て居るのは。是も都にて有たる事を。遠き鄙に聞傳へて。年久しくなる儘に。本をば失ひ。其處にて有たることの如くに。語傳へたるやうなもので。とッくりと此等の訣を考へて。御國の天子様は。實に四海萬國を知し食べき。眞の天子と御座ますこと著明く。尊しなんど申し奉るも。中々よの常のことでは無いでござる。然るを世の學者等が。ひたすら外國の說にのみ惑ひ溺れて。御國のかばかり尊き御事を知りませず。偶に此やうの眞說を聞いても。信ずること能はず。却ていひ破らうとさへ致すは。返すゞゝ心得違ひなることでござる。又世間の。外國びいき

の學者どもの能くいふことには。我國は小國で。又國の開けも遲かッたなど丶よく申すが。先御國を。小國々々と云て。貶さうとするけれども。國ばかりでもなく。凡て物の尊いと卑いと。美と惡いとは。形の大小によるものではない。數丈の大石も方寸の玉に如ず。又牛馬象など云類の獸は。大きいけれども人にしかず。何ほど廣大なる國じやと申ても。下國は下國。狹く小くても上國は上國で。近く萬國の圖と云ものを見るに。オロシヤ。アメリカなど云。殊の外大きなる國が數々有て。中には草木も生ぜず。人物もない處があるが。それでも是を上國と云うか。夫迄もなく。近く御國の內でさへ。上中下と分て有るけれども。それは國の大小を以て。御定めなされたことでは无く。國の產物一體の風土を以て。上國下國の差別は立たものでござる。又御國の開けの遲いと云は。智慧づきの晩かッたと云て誹るので。實は思慮の至らぬのでござる。其の故は。御國は萬國の祖國本國じやに依て。自ら地氣厚く。申さば大智大器量の人の。智慧の開けの晩いやうなもので。是は譬ば。摠見院の右大臣織田信長公などは。二十歲を越されるまでは。一向おだしく揣くて。人はみな馬鹿殿と申たと云こと。又大石內藏助良雄なども。天地と共に美名を傳ふる程の人なれども。是以て二十歲ばかりまでも。人は馬鹿だと申たとのこと。かやうの類が。昔の器量人にはしたゝか有る。又鳥獸などは。生れて直に。米や虫を啄て食つたり。又生れてやう〱。二月三月も立やいな。雌雄交合を爲たり何かするも。皆賤き物なるが故で。其から見れば。人はけしからず。何もかも埒のあかぬものでござる。是が直に人の鳥獸よりは尊い所で。外國の早くわる賢く成たるも。御國の久しく神代の有樣で。わるがしこく無かつたのも。是に準へて考へるが宜いでござる。唐國の老子と云書にも。大器は晩成と云てある。此意は。右申たる大量大智の人や。又は鳥獸に比べては。智慧づきの遲いやうなことを申たもので。是は唐人ながら能云あてたことでござる。是は思ひ付たから申すが。御國は右に段々申す通り。天地の根蔕で。近く草木の果で。譬ば蔕の處じやに依て。ちやうど彼瓜や桃の果などの。其のやうやくに大く成のは。蔕の處より頭の方へ育つなれども。

其そだち上つた上で熟するには。成收つたる末の方たら熟して來て。蔕の所はいツち後に熟するもので。こりや蔕の處は。成初むる本の處じやに仍て。氣が厚い故で。さんと木草の果の生て熟するも。人が生れる訣なども同じことで。天地の出來初めの狀と。更に異りは無いでござる。但し此やうに委く申ても。領解の行かぬ人は。やはり領解ゆかず。ぼかんとして居るものじやが。段々演說を遂てきかれた上で。彼此を思ひ合せ。發明することが出來て。其時は。篤胤がぐど〳〵言ぐらゐのことでは无く。筆で書うとするに。彼唐人も申したる。書は言を盡さずとか云やうに。書取られず。然らば口に言んとするに。彼の言は意を盡さずとか云やうに。口に餘つていひ解れず。其ではかの。手の舞ひ足の踏ことを知らずとか云やうに。小踊りする程。心ちよきことの有るもので。篤胤が演說ぐらゐは。坐睡ながらにも云はれることでござる。但し何によらず。外國で仕出したる事物が。御國へ渡つてくると其れをさらと見て。其の上を遙に卓絕て。其事の出來ることも。又御國人の勝れたる所で。それは此の篤胤が致ても。彼よりは乾とよく出來る。是が御國の風土の自然で。自然と申すは。神の御國なる故でござる。是らのことに付ても。細やかに考へたことも有りますが。夫は醫道の演說のついでに申すつもりでござる。

扨皇孫邇々藝命は。まづ筑紫の日向之高千穗の峯に。御天降遊ばして。大宮所と成べき處を御尋ねなされ。吾田の笠狹の御碕なる。長屋之竹島と申す處を都となされて。天の下を所知食たでござる。是に於て國津神たち。何れも。何れも。皇孫命を。天つ神の御子と申て。畏み仕へ奉られ。是より致て世々の天皇を。天津神の御子と申す事に成たでござる。右の訣故に。天子と唱へ申すは字音にて。元より漢語なれども。此の天つ神の御子と申上る御稱に。よく叶つてゐる言で。實に天子と稱すべきは。我天皇に限ることで。夫に付て諸越の王を。天子と云ふことの當らぬわけは。漢學の大意に論辨いたすつもりでござる。扨邇々藝命は。笠狹の御碕なる竹島に御座なされて。天の下を知しめし。大山津見神の御女。木花開耶姫命と申す神を御迎なされて。御生せ遊ばしたるが。天津日高日子穗々手見命と申上る。此日子穗々手見

命がわけあつて海つみの宮と申て。則海宮へ御出なされて。其の綿津見神の御女。豊玉姫命と申す神を御娶遊ばし。御生せなされたるが。日子波限建鵜草葺不合命と申上る。扨其葺不合命も。同わたつみの神の弟女。玉依姫命と申す神を。御娶遊ばして。御生せなされたるが。神倭伊波禮毘古命と申上るで。此御方の御代に。日向國笠狹の御碕より。大和國へ都を御遷しなされて。かの長髄彦など云を御誅罰あそばし。是が俗にも能知てをる。神武天皇樣でござる。但し神武天皇と申上るは。實の御名ではない。實の御名は。右に申たる。神倭伊波禮毘古命で。夫へはるか千年許も後の世に。漢風の御諡號を奉て。神武天皇と申上たものでござる。扨こゝで申さねばならぬ事がある。其れは俗の學者の說。及び世の常の人も洽く申すことに。天神七代。地神五代。人王何十代などゝ云ことを申すが。是は其初。何なるをこの者の言出たることか。甚の誤りで。曾て當らぬことでござる。夫はまづ古事記にも日本紀にも。國之常立神以下。伊邪那岐伊邪那美神までを。是を神世七代と申す由は見えたれども。此れを天神と申すことは見えませぬ。是はさう有べきことは。國之常立神以下。伊邪那岐伊邪那美神まで。七代の神等は。皆此の國土に付て御生あそばしたること故に。天つ神と申すべき謂はないでござる。天地最初に。早くより天に御座なされたる。天之御中主神。次に高皇產靈神。神皇產靈神。次に宇摩志阿斯訶備比古遲神。天之常立神。この五柱の神々を。古事記に別て。天つ神と記されたるによつて。夫れより以下。國之常立神よりこなた。伊邪那岐伊邪那美神までは。天神と申さぬことは明かで。然れども又正しく是を。國つ神と稱したことも物に見えず。一體國津神と申すは。邇邇藝命より後の御代に至て。此の國なる神を。天つ神に對する時に申す稱でござる。又天照大御神より。葺不合命までを。地神五代と申も。太じき非說で。其故は天照大御神は。此の國土には御生れあそばしたなれども。御父神。伊邪那岐大神の御心として。天を所知食さしめ。今もまのあたり拜奉る。其天日を知しめす神におはし坐せば。天つ神なること論はなく。其の御子忍穗耳の命も。其御孫邇々藝命も。天に御生れあそばしたることゆゑに。是は本より天

つ神でござる。じやに仍て邇々藝命が。此の御國へ御天降り遊ばして御代しろしめし。其の御子穗々手見命より。御子孫の次々を。天つ神の御子と申すでござる。但し穗々手見命。鵜草葺不合命は。此國に御生れなされた故に。天つ神とは申さず。然れども又是を。地つ神と申たことも。更に物に見えず。其はなぜなれば。此の國土には御生れ遊ばしたなれども。天つ神の御正統に坐ますが故に。皇孫命とも。又漢文にかく時は。天孫とも申すでござる。此訣じやものを。どう致して天照大御神や。忍穗耳命。また邇々藝命を。地神と申べき由縁が有りませうぞ。凡て天神七代。地神五代と申す事は。古書に曾て見えず。忌部正通の。神代卷口訣と申す物に。始めて見えたなれども。是は事の意をも。古へをも考へず。強て天と地とに當やうとて。漫りに言出したる。後の世の俗說でござる。然るを世の學者ども。さやうの辨も無く。賢げに天七地五など云ひ。又は神武天皇以下を。人王とか申て。則天地人の三元に象るなんど云ひ。又天を所知食を。天神と申すなど云ひ。或は此の七代五代を。天の七星。地の五行に象ると云ひ。又は易の八卦に配當して說なんどゝ爲なれども。凡て近き世の漢意の輩の私說で。皆取られぬことゞもでござる。又佛說ずきなる者は。此の七代を過去の七佛に形どるのなんのと申すが。かやうの類は。耳に觸きくも汚はしく。片腹いたく。實には甚恐多き御事でござる。さてまた神代と申すことは。人の代と別て申す稱で。夫はいと上つ代の人は。凡て皆神で有たる故に。其代をさして。神代と云た物で。扨いつ頃までの人は神で。何頃からこなたの人は。神でないと云ふ。際やかなる差別はないに仍て。萬葉の歌どもなどにも。唯古へを廣く神代と申たもので。其は萬葉集の六の卷に。「大和の國は皇祖の。神の御代より敷坐る。國にし有れば。と詠だのは。神武天皇の御代を申し。又十八の卷に。「すめろぎの神の大御代と詠だのは。垂仁天皇の御代を申し。又一の卷には。其御代をも稱奉りて。神の御代と詠である。猶此外にも。廣く古へを神代と申たる例は種々有る。然れ共事を分て云時は。鵜草葺不合の命迄を神代といたし。神武天皇より以下を。人代と致すことで。日本紀にも此意を以て。葺不合命まで二卷

を。神代上下と標されたもので。何さまにも。神倭伊波禮彥命。すなはち神武天皇の御代に。始めて日向國笠狹の御碕より。大和國へ都を御移しあそばし。世の中の有狀も。とんと新に成たる故に。是より後を。人の代とも云べきもので御坐る。然れども今を以て是を思へば。神武天皇の大御代より。其後もなほ暫の御代々々。まだ〳〵其世の人は。神なる事どもが有て。やッぱり神代と云べき有樣で。夫から段段年立ち。御代の替るに隨て。今の姿に成たことで御座る。扨かやうに凡人と成果たる。今の心を以て思へば。いかう神世の人の。神なる所業があやしく。疑はしく思はれるなれ共。更に疑べきことでは无い。其を世の學者どもが。今の凡人の心を以て古へを考へ。かれこれ異國の說を取合せて。古への神の。奇奇妙々と。くすしく妙なりし事實を說まげ。それを强て。奇くも無さまに。狂說どもを吐散し。說ちらして書に記し。世に弘めたることゆゑ。世の人もそれを見たり聞たりして。心にしみ込み。神代のことは。皆寓言と申して。作り事じやと思ふやうに成てしまッたで御座る。彼の神道者流。又は世の常の學者等の云ふとほりのことでは。神代の神々は。やはり今の凡人と同じことで。其奇しく異しく。神なる事の有たと云を。皆寓言の作りことゝして見る時は。今の人間に異りも無れば。さして神と云べき物でも无く。又有がたいこともないと申すものでござる。さすれば其代を指て。神代と云べき謂もなく。又御國を殊更に。神國と云べき筋も无く。また御國の人に限て。神の御末じやと。我だけく云がものでも无でござる。凡て世間の生狡意な輩は。とかく神代の神々の。奇靈なる御所業を信せず。漢風の小智を振て。かしこげに彼此と申けれども。こりや夏虫の見と申て。夏に成て生じたる虫が。氷を疑ふやうなもので。扨々身の程を知らぬ愚なことで。今それらを諭がてら。天地を御始めなされたる。靈妙と云て。靈く妙なりし神々の御末が。世を經年を重ぬる儘に段々と。かの靈妙なることの遠ざかりて。斯の如く靈いことも何も无き。今の凡人と成て。數十代を累ねたる所を。至て近きことを譬として。申さうならば。先その家を興し始めたる先祖が。ちやうどかの。釋迦が嶽とか。谷風とか云た相撲取のやうに。大男で。

の御國で。其天つ日を所知食て。天地の有ん限りに。世を御めぐみ遊ばす日の神。天照大御神の御生國で。高皇産靈神の御曾孫。天照大御神の御孫にまし〱。て。殊更に此二柱の神の。御愛み御惠みあそばさる。邇々藝命へ天に坐せる神々の。殊に卓絶たるばかりを。右二柱の大御神の。御目鑒を以て御撰びなされ。御附屬あそばし。又天照大御神の。殊に大切と御齋遊ばさるゝ。三種の神器を。天子の御璽として御授あそばし。又御日づから。豐葦原の水穗の國は。我が御子孫の次々に知し召て。天地と共に無窮なるべき國ぞと。御祝言を仰せられたる。其神勅空しからず。皇孫邇々藝命より。當今様まで。唯一日の如く。御代を知し食て。其御附屬なされたる神々の御子孫とても。今以て其如く。連綿と御續きなされて。其末々が世にひろがり。又世々の天子様の御末の御子だちへ。平氏や源氏などを下されて。臣下の列にもなされたるが。其末の末がふえ弘がつて。つひ〱御互の上と成たる物で。なんと此の趣じやものを。御國は誠の神國であるまいか。なんとおたがひは。誠に神の御末では有るまいか。今はかやうに零落て。

其先祖の神も慥ならぬやうなれども。御國の人には各々氏姓と云が有て。其は元來天子様より賜たる物で。近くは源平藤橘などゝ云て。源とか平とか橘とか。藤原とか云ものが是でござる。其を以て古へを穿鑿すると。大きに知れる。又其姓をも覺えぬと云人は。今名のつてゐる。平田とか何とか云ふ類ひの。名字と云ふものでも。大元の先祖をば。くり出されるもので。是を系圖の學問と申して。又一派立てゐるでござる。其人は知らずに居るのも。名字を聞けば。こりや何と申す神。何と申し上たる天子様から。出たる人じやといふことは。此方には自分の事で無くても。あら〱は晴にも知れるでござる。扨〱かくの通り。古傳説の事實に依て能明らめ。又世の營みの忙しくて。己が手に明らめることのならぬ方方は。導く人の話でも聞覺えられて。扨其上でおし張て我が國は神國じやとも。我らは神の御末じやとも。爰では氣強く云へるでござる。さう無くては。若人になぜ其許は。御國に限つて神國じやの。又神の御末じやのと。大きなことを云ふぞと咎められたならば。ぎツくりするで有うと。篤胤は按じられるで。

又さう咎められた所で。此くらゐに粗々も心得て居たことを以て。咎を付たならば。彼のおたがひに賤める唐人すら。是は先會の日に申たることながら。其先祖の美を論撰めて。明かに後の世に著すものじや。其の先祖が善有ても知らぬと云は。不明と云て。道理に昧いと云ものじや。知て傳へざるは不仁と云て。先祖へ不實不孝と云ものじやと云たにも。恥かしく無いと云ふものでござる。

扨此のとほり神の御末。神の御本國じやに依て。この御國は。萬の外國どもとは天地懸隔で。何もかも不足なことはなく。滿足で美しく。第一に命をつなぐ米穀が。萬國隨一に結構で。此の結構なる風土水土の國に生れて。結構なる五穀を。豐受姫命。すなはち伊勢の外宮の神様の。厚き御德に仍て。飽までに食てをる故に。御國に生れる人は。本の種と云ひ。とんと外國の人とは。同じ年にもいはれぬ程。武づよく聰明に。殊れて居るでござる。但しかやうに。古傳說の事實を以て考へ正し。誠のことを申ても。外國の學びに惑つてゐる人や。又生さかしらな人は。何もかもよく。御國がよい〳〵と平田は云ふが。ありやけツく。贔負の引仆ではないか。などゝ云も有うかで。さやうの人には。此國の本說で申て聞かせても。猶かれこれと云ものだから。其らには。天文地理及び外國の說を以て。御國の萬國に優れてをると云は。此天地の間の公論なることを。示さうと存ずるでござる。是は此次の會のとにいたしませう。

我が鈴の屋の翁が詠れたる歌に。「あやしきはこれの天地うべな〳〵。神代は殊にあやしく有けん。と詠れましたが。これのと云は。このと云と同じこと。又うべな〳〵と云ふは。言篇に若と云字を書いた。諾の字の義の詞で。俗に申さば。なるほどゝか。げに〳〵とか云詞の意で。一首の意は。世に靈き物と云は此天地じや。然れば其あやしき天地の。今初まると云神代のことなれば。又殊に奇々妙々なることが。多く有たであらう。げに理りじやと云ふの意でござる。あやしく有けんは。俗に云はゞ。靈かつたで有うと云の意で。扨かやうに詠れたるは。世の人の。神代の種々のあやしき事どもを。有るまじきことゝ。異み思つて疑ふ故。さやうに疑ふは。却て愚なることじやと云意を。諭し詠れたもので。扨此あやしさ

も靈しく。奇々妙々なる天地の始りの有狀。又天地と分れたる大抵の趣は。先の二會に。神代の古傳說に原いて。粗々演說いたしたる通のこと。一體この大地は。先會に申すとほり。其初め浮雲の如くで。其狀いひ難く。大虛空の中に漂つて。係る所はなくて。譬へば。一つの球をつき上たるやうにて。何ともあやしく。奇々妙々なることで。是に準へて思ふにも。彼の天の浮橋を。天地の間に浮めて自由をなしたるなどは。更に〱疑しきことでは无く。思合せて悟られることでござる。抑々天は動かず。地の動き旋るといふことは。外國の說を借るに及ばず。本より御國の古傳にて明かなることなれども。天文地理のことに付ては。西洋人の考へたる說が。第一に委く。誰が聞ても分り易きことゆゑに。今は其の說に因て云ことじや。扨其の大地の形はまん丸な物で。近くは古者などの持て居るものに。鞠の如く丸く拵へて。夫へ國々をもり付て。其外へは。種々の輪を回したる物がある。あれは渾天儀と云物で。彼まん丸くして。圓をもり付たが。此大地の有狀で。丸き物ゆゑに。地球とも名けたもので。則地球の球の字はまりと申す字でござる。扨その大地球のぐるりが。海と國とで。近く申せば。其くぼい處へは水が溜つて。則海と川とに成り。また高い處は國で。中にもひよツくりと。もぬけて高い處が山と覺えさへすれは。違ひないことで。諺に六海三山一平地と申て。此の大地のぐるりが。六分程は海。三つは山。一つは平地じやと申すことでござる。又或は海と陸と。相半してゐると云說も有るで。扨其の大地球に有る國を。五つに分て。第一をアジヤと云ひ。第二をエウロツパと云。第三をアメリカといひ。第四を南アメリカと云ひ。第五を北アメリカと云ふ。凡て是を五つの大國といひ。又是を以て五大洲とも申すでござる。御國。もろこし。韃靼。天竺などは。此第一のあじやと號けたる大國の內で。さすれば。御國から韃靼天竺などを合せたる程の國が。まだ四つ有うと申すものでござる。其五つの大洲を合せたるよりも。まだ〱海と成てゐる處は多いから。なんとめツぽうかいに大きな物では無かな。夫程に大きな物が。此大空の中に浮漂てゐて。落もせず。上りもせずに居ることを。どうして考へ知たものじやと

申すに。右に申したるヱウロッパ。則第二に當る國國の人々は。自由自在に。此の大地球のぐるりを船で乗回し。國と云ふ國の限り行ぬ處なく。其ヱウロッパの中にも。小國なれども。阿蘭陀と云ふ國は。其萬國を。自由自在に乗渡らうとするに付ては。天文地理に委しく無てはならぬ事ゆゑに。是を第一の學びとしたものでござる。其上けしからず。氣を長く物を考へる國風で。底の底まで物を考へる。其考への爲とて。種々測量の道具を拵へ。譬へば日月星の有形などを見んとては。望遠鏡。遮日鏡を拵へ。又其の大きさ遠さ近さを知んとては。量地などの道具を考へ。夫をするにも。五年十年。乃至一生もかかり。一代に考へ課せぬことは。自分の考へたる處までを書遺て。其後を。又子孫や弟子の者が。幾代も〳〵係て考へつけ。扨その器を以て是非に考へ付やうとするでござる。然れども殊勝な國で。唐などのやうに。推量の上すべりなことは云はぬ。それ故に。どうして考へても知れぬ事は。こりや人間の上では知れぬ事じや。造物主と云て。天つ神の御所業で無ては。測れぬと云て。とんとおし推量なことは

云はぬでござる。其通にして。千年二千年の間。數百人の人々が。考に考へて。煎じ詰たる說どもが。書物にして。此御國へも貢ぎ奉て有る故に。其を見て今かやうに申のでござる。扨此大地が丸い物で。中に浮てゐるに相違なき證據には。船で東へ東へと乗て行くと西へ出る。是に於て。圓體と云說が動かぬでござる。然れば其通り丸い物なれば。いづこを上とも下とも。言難きやうなれども。此丸く見える大虛空に。北極南極と申て。とんと動かぬ處が有る。是は譬へば。車に樞軸のある如く。又磨に臍の有るやうなもので。此外は星も何も周旋れども。是はめぐらず。夫故に極と名けたもので。極はきはまると云ふ字で。此の北極南極と云を。中眞に取て上下を定め。三百六十に割をする。但し少餘りが出る。さて其の三百六十餘を。又この大地へも割付て。其一つを一度と云ふ。一度の廣さが。御國の里數で。大低三十里ほどに當る。天地の度數と云は此の事でござる。此度數の當りやうで。寒國と熱國とが分り。夫に依て國の善惡も定る。御國は此の天地の度數にあて丶云へば。ちやうど三十度から。四十度までの

間に當る。是は三百六十度の內では。一ばんに好き風土で。御國の四時の氣候が中正で。結構なは此故でござる。扨一度を三十里として積れば。此の大地の周圍が一萬八百里あり。又めぐりが一萬八百里有れば。其差わたしが大凡其の三分一ほど有るもの故に。是は三千四百四十里ばかりも有らうと云ものでござる。扨この天文說の。御國へ傳はつて。是を初めて世に弘めたるが。長崎の西川求林齋と云人で。是は元祿前後の人で。此の以前は。天文地理萬國の事なども一向不分で。しどけなかつた所を。かの誰も知てをる。天經或問と云書を板に開し。また華夷通商考と云ふ。萬國の風俗などを擧たる書を作て。是らも世に弘め。此外にも色々著述がある。是からして世の人も。萬國の事を。あら〳〵も知るやうに成たでござる。此人しほらしくも。御國魂の有た人で。其西洋の天文地理の說。及び唐の說に因て。日本水土考と云ふ書物。一卷を著したでござる。それに云ふことには。

渾地則地球萬國圖者。異邦之所著。而地理之學。不可不悉之以察其水土也。蓋萬國各無不以自國爲上國。而用自國之說。斷自國之美者。未脫私稱之偏。故今從異邦之所圖。以察此國之美。則非私稱之儀。而實知此國爲上國之理矣。於玆書日本水土考。以示同學。苟雖以此儀談於異邦人。豈得拒之哉。

是は序の趣でござる。扨本文の趣を。かい摘んで申さば。

我國之形勢。東西長。南北狹。少反曲而有淤龍遶首之貌也。國有萬國之東頭。而朝陽始照之地。陽氣發生之最初也。號日本者其義最相當也。此國爲神國之義。水土自然之理乎。史記云東北神明之舍。日本者淸陽中正之水土也。故神明會于此。最不可疑焉。

此國四時中正之國也。雖萬國廣大。四時中正。如我國者不多焉。總在南北四十七度之間者。皆偏熱國也。或去中帶。凡六十度以上之地者。皆偏寒國也。唯去中帶。自二十七八度至四十二三度之間。爲之四時正氣國也。日本中央之京畿。去中帶三十度。其東邊三十八九度。其西邊三十一二度。是四時正和之水土也。

日本比之天竺辰旦則雖謂小。然國者不可以廣大爲貴以四時之正偏。人物之美惡而可定其貴賤是故國土極大者。其人情風俗多岐而難一統。故辰旦之王統。變亂而難久日本之限度。不廣亦非狹其人事風俗民情。相齊混一而易治。是故日本皇統。自開闢至當今而無變者。萬國中惟日本而已。是亦非水土之神妙耶。

日本國要害勝於萬國者也。蓋小國干大國者。必有爲大國被屈。或終爲大國所併焉。日本之地雖近於大國。隔灘海而如相遠故無被屈於大國之患。況其所併乎。辰旦之大國被苦北狄之强大者。其地相連故也。況小國耶。然則日本風水要害之好。萬國最上也。住乎浦安之大城。備乎干矛之武德而永與天地無窮矣。此民者神明之孫裔而此道者神明之遺訓也。愛清淨潔白。樂質素朴實者。則仁勇之道而智自足也。是此國自然神德也。豈不貴哉。

さて先刻申すとほり。五大州の內。第二に當る。エウロツパの諸國の人々は。此の大地のぐるりを。自在に乘回して。萬國の事體を。よツく見たり聞いたり尋ねたりして。其國々の風俗産物人氣。また土地がらの事までを。とツくりと考へて。かの蕨の芽だちや。蚯蚓を見たやうな阿蘭陀文字で。委しく記したる書物がいろ〳〵有て。其を御國の詞に翻譯して。萬國の有樣を。一目に見えるやうにしたるものが。山村才助昌永の。增譯采覽異言と申して十二卷。尤國々の圖も附てゐる是は一體新井筑後守白石先生の采覽異言と云書を。增補いたしたるもの。實は公儀の御息の挂つて出來たる物で。萬國の事を知るには實に此位の物はありや致さんでござる。但し是には御國のことが洩てゐる。其の故は我國の事で。誰も知たることと故に外國人の評議を聞までではない。と云の心と見えるでござる。是は實に尤なことで。さう有べきはず。又我國の事じやに依て誰も知て居さうな物じやがやツぱり知らぬ人が多い。是は常の人ばかりでなく學者と呼れる人が。大抵はかやうなもので。却て御國の結構なるを卑め貶し外國をよいと心得て居ると云ふは。あまりなとで。譬ば常に米の飯を飽までに食て居る人は。其に狎て何とも思はず。

嘗に麥飯や。稗の飯ばかりを食てゐる人々を。羨しがるやうなもので扨其の遥西の國より。渡したる書物の内に。ベンケルイヒンギハンヤツパン。と云書が有る。是を此方の言に直して見ると。日本志と云ふことになる。是はエンゲルベルベルトケンフル。と云者の記したる書物で。此の人は萬國の事を委く知らうが爲に。どこの國と云ことなく渡つてあるき。御國の事をも吟味しやうが爲に阿蘭陀船のカヒタンと云役人と成て正德時分に御國へも參り。京も江戸も見て。かの萬國の風土記を作て。萬國に名を知られ。後世へ夫で名を揚げやうと思ふ心から爲たることゝ故に。それは〳〵精密なることで。是は外國と云ふ中にも。けしからず遠き國で何も御國に贔負いたさうはずも無し。何のこともなく。萬國をあるいて見た所が。天地の間に。御國ほど結構なる國は無いから。其の事を。有の儘に記したと見えるでござる。我が翁の歌に。「天地のそきへのきはみまぎぬとも御國にましてよき國あらめや」。と詠れたが。實以てそれに違のないことは。其の書物で能わかる。其書の趣をかいつまんで申さば。まづ御國を難ずる人の有る儘に筆を起て云には。日本人がちやんと。錠でもおろしたやうに。諸の外國と商ひを通せず。其國の人をば外國へ出さず。又外國から。どうぞ交はりたい。交易がしたいと云て願ても。取上ぬは。どうしたことじやと云に。一體この大地に住つてゐるほどの人は。皆心安く交りを爲べきことじや。これは造物主とて。天地を始め。人間及び萬物を造らッしやる。天津神の御心じや。夫に日本人が。萬國の人と交らぬと云は。ありや我儘なことで。天つ神の思召に違ふと云ふものだ。鴈や燕ですら。外國へ往たり來たりするではないか。夫に人として。鴈やつばめにも劣てゐる所爲じやが。どうだと。一つ難問を出して。扨是を言開た物でござる。是を自問自答の文法と申て。先自分で態と難問の語をおこして。又自分で其譏を答へるのでござる。扨其いひ開き方は。なるほど夫は一と通り。尤のやうな云かたじやが。さうで無い。日本が外國と交はらぬ譏を今具にいひ開く程に。とッくりと聞ッしやれ。先日本國の歎ばしく美ましいことは。異國の人と交易せんでもとんと困ることがない。そりやどうじやと云ふに。

まづ地勢が有福で。外國の產物を。取寄ずとも宜いからのことじや。又我ヱウロッパ諸國の者どもの。外國あるきをして。交易を專とすることは一體物が足らぬからの事じや。譬へばこゝに。一つの國が有て。かの天地を造らしッた天津神樣が。世に殊なる御惠をかけられて。命を保つべき一切の物。滿足らうやうになされて。國もけしからず強く又其國人も。勇氣がすさまじくッて。外國から攻て來たる時などに。よく防ぐ手段が有て。外國の物を受けずとも。事の缺けぬほど有たならば。外國と交易をせぬ方が。國の風俗も亂れんで。却て國の大なる益じや。ココチ委ク云フ　そんな國は此大地の內を尋ねて。どこに有うと思ふぞ。其は世界萬國に知れたる日本ぢや。いで〳〵其の訣を猶具に云うならば。日本は。此方及び諸國の頭にある國で。天神が是を殊の外に御惠みなされて。けしからず烈く嶮岨なる海を。取りまいて置れたる故に。外國から船を寄るに。日本かいわいの海は。浪あらく逆風が吹て。其海中はと云へば。淺瀨が有つたり。巖石が多くて。中々寄ても付れぬ荒海で。大船を入る處がない。其うち只一箇處。長崎の湊と云が有て。是は少しは大きい船も入るによけれども。其入口が窄まり樣々に曲つてよく鍛煉したる船主でも。わるくすると乘そこなふ處じや　然れども是より外には。どんとよき湊がない。又海が其通りじやに依て。外國から攻ても。勝れぬやうに。是も天つ神がして置れたのじや。又其國に人の多いことは。言語も及びがたいことで。海邊を見れば。人民夥しく。大小諸の舟の繋多なること。是は國中の人が盡く。海邊に住居して陸地の方は。更に人はなく。空虛だらうと思ふやうだが。なんとさしも大きくはない國で。斯の如く莫太に人の有ると云ふは。こりやどんと理外と云ふものだ。又城郭家居が建續て。どんと一連のやうに成てゐる。尤何村々々と云ふやうに。其處に名は有るけれども。是は古へ別々で有た故のことでござる。今は一と連に成て居て。只其古き名を失はぬばかりのこと。實は家居が一續きじやと云てある。是は實にさうで。外國へ渡つた人の話や。外國の書物を見るのに。只めッたに廣いばかりで。空地が多く。夫ゆえに不辨理なことばかり。又外國は大きいに合せては。漢を初め。人がい

かう少いでござる。扨云には日本人は。大膽と云てよからうか。英雄と云て宜らうか。めッぽう强い氣象がある。そりやなんじやと云に。敵の爲に打負るか。若くは敵を覘ふことが有て。其を報ゆるとがならぬと。爰で少しも辟易かず。云はゞ平氣で。自身に腹を掻切て死ぬ。事に臨で命を惜まぬこと此通りじや。又日本人はめッぽうに。豪傑だといふ證據になるべき事は。彼の七人の若士が臺灣の國で。とんだ豪傑なる振舞をして此方の國々を膽を潰させたことがあると云てかの濱田彌兵衛らが働のことを書てあるでござる。是は寛永年中のことで。其頃は御國からも。勝手次第に。外國へ船を出したる時分で。長崎の代官。末次平藏と云人が。天竺の方へ。交易の船を出したでござる。所を其彌臺灣は。阿蘭陀で持て居た時でかの末次氏の船を。其の國の者どもが出て嘲弄し。剰へ積物を。皆取うとさへ致したでござる。乃て此方の船の者も。甚憤つたなれども。向は大船で。しかも武器鐵炮などを以て。ぶす〳〵やつてゐる。此方は只の交易船のこと故に。はか〴〵しき兵器もないから。無念を堪へて。さま〴〵に上

手を云ひ。品々の物を與などもして。辛くして長崎へ逃歸たが。此事無念で堪られぬ故に。その事を有の儘に。末次氏へ申した所が。平藏甚の大和心の人で有たる故に。勃然として大に怒り。にッくき夷どもが行狀かな。我計ふべき旨有り。みよ〳〵此の後わが國の船に。彼國の者どもが。指もさゝぬやう。目に物見せてくれんずと申て。則支配内の町人に。右申したる濱田彌兵衛。同く弟新藏と云ふ剛强の者を呼で。此事を具に語り。かの夷どもの。我船に不屆をいたしたること。我が意趣に似て私事にあらず。其故は。先第一に。萬國に英雄豪傑の國と稱譽を取たる。此の御國の恥となることじや。此後又いかなる不屆を爲んも計り難く。扨は往々他國へ船を出す妨となることじやに依て。其の分には捨置れず。彼等が目に物見するやう。何分よろしく賴むと申た所が。此兩人は元より。かの大和心の大丈夫で。かやうの事に當ては。中々五分でも引氣のなき者ども故に。夫はいと易きことなり。斯やう〳〵の手段を致して。彼等が膽玉を拔て參らん。御心安かれと申して。心安く請合ひ。彌兵衛が子の彌左衛門。外に

四人を談らひ。都合七人の豪傑者が。商人の體に出立て。しな物を積入れ。かねて渡海はいたし。海路にはよく熟してゐることゆゑ。大船に眞梶しゞぬき烈風に帆を上て。日ならず臺灣の國へ著船いたし。交易のことを云入たで御座る。所が彼國の者も。始めは心を許さなんだと申すことで御座る。然れども能したゝめたること故に。異き體にも見えぬから。そこで國王へ其事を言上たで御座る。其時分の國王は。尤阿蘭陀より附置て先刻申たる代官で。名は「ヒイトルモイツ」と云者で有ましたが。何の心もなく對面致して。其交易の物を吟味して。直段づけなどをいたして居る所を。彌兵衛はよき圖を見すまして。電の如く飛懸て。其國王ヒイトルモイツを。取て押へて捻ぎつけ。懐に匿し持たる脇指を。拔より速く。ヒイトルモイツが胸先へ指付まするを。かの弟新藏。また悴の彌左衛門の兩人が。同く拔つれて立上たで御座る。是を見ると。側まはりの夷どもが。逃出もあり。いや是は大變。ピイ〳〵。パア〳〵。ナチウル〳〵と云て閧き。椽の下へ駈こむもあり。泣も有り。其内に。かの外に居たる四人の者も拔つれてかけ入る。城中の騷動云ばかりなく。實に潮の涌が如くで有たと云ますが。さうで有りましたらう。然れども彼七人の豪傑者が。刀を拔持て。其勢の猛なるに恐れ。且少しにても敵對いたしたならば。ヒイトルモイツが。直に刺殺されさうだから。寄付れもせず。國王を助けやうも無い故に。只パア〳〵と云て。肩で息をついで居る。所で彌兵衛は。其國の語にも達して居たること故に。大地もひゞくばかりの大音を發して。先靜まり居れ。と叱りつけて。扨しとやかに。彼不屆の始末を咎めたる所が。國王が誠に戰ひ恐れて侘言をいたし。其者共は只今は佗國へ行てをるに依て。歸り次第重き刑に行て。罪を謝しませうが。夫までの人質に。我が一子を上て置ませうから。どうぞ我命は免して下されと云て。十二歳になる男子を差出し。今ゟ以後貴國の船へ。指ざしも致させまいと。海山かけて誓を立る故に。彌兵衛は。其國王をば許して。人質の男子を引立て。我船へ乘せ。長崎へ歸たことがある。此事がきつく萬國の評判に成て居るで御座る。扨又いふには。日本の地が自然に堅固で。かつて外國の寇を恐るべき

ことがない。希にも彼蒙古の世祖などのやうに。日本を攻た者も有るけれども。とんと勝ことができぬ。世祖が萬將軍と云者に。大小の船の數三千五百艘に。軍士二十四萬を授て。日本を攻にやッた所が。其浦へ著くと。暴風烈く吹て。夫ほど強大無敵なる軍船。及び船中の軍兵。盡く打碎かれたことも書てある。これも相違のないことで。北條時宗の政事を執たる時分。弘安四年のことで。此世祖と云は。蒙古と云ふから出て。から中を攻取り。其勢に乘て。御國をも下に屬やうとて。度々降參のことを云てよこしたなれども。御取上なかつた所が。猶しつこく云てよこしたる故に。其使に來たる者共のうち。宗と有る者どもを。皆鎌倉の由比が濱へ引出し。首を打切て。獄門に懸られたで御座る。所が。殘りの者どもが歸て。其事を申たる所が。彼ほこりに誇て。勢ひの強い蒙古のことゆえ。大きに腹を立て。此通り攻て來たで御座る。其とき伊勢の大御神を始め。諸社へ勅使を立られ。御祈も有たる所が。伊勢の風の宮のあらたなる御告が有て。大に神風を吹起し。彼船どもを。一夜の内に吹覆してしまッたで御座る。

其時ふしぎなることは。白衣を著たる神人の船が。彼の大風の中に見えて。けしからず働いたと云ふことで。是はどこから出たとも知れず。定て神々のなされた事で有らうで。此時攻來つたる軍勢の內。生殘て歸た者が。只三人有たと申すことで。是はあの方の書物に書てある。是も不思議なことで。其神風の恐しき事を。彼王に云聞せん爲に。やッぱり神の御計らひかと思はれるで御座る。さうなくては。廿四萬の軍兵。三千五百艘の船が一艘も殘らず。ひゝくりかへる程の事だに。三人ばかり生て居やうはずが無でござる。是に於て。さしもの世祖もこりこりして。再び手の出ぬやうに成たで。是が又外國へ廣く知れて。どこの國でも。舌を振つてゐるで。夫ゆえ西洋の書物にも。此通り恐てある。扨又曰ふには。日本人が戰場に出ては。勇敢謀略のこる所なく。軍法正しく。よく大將の命を聞て。進み戰ふことを悅んで。其圖を外さず。是らは此方が云までもなく。後の世に成たならば。自然と萬國に明かになること故に。日本人をば恐れ敬ふべきことじや。又世の習ひとして。とかく太平が久しく續く時は。人が柔弱に

なるものだが。日本に於ては。さう柔弱には決してならぬ訣がある。夫は國人が常に古人の武勇を慕て。夫を不斷の心得とし。又子を育てるにも。其泣とき。又は常にも昔の勇士の物語をして聞かせ。とかく武勇をおもに教訓として。幼い時から。心に染ついて忘させぬやうにすると申たでござる。是らは實以て外國の人ながらも。能氣の付たことで。此御國人は。けッく氣が付んで居ることで。いかにも此人の云に違ひなく。よく氣が付たと云ふ訣は。今の世もさやうだが。昔から子等だましの一つ咄しに。金太郎といふは。山姥の子で。熊や猿を引擘たの。或は源の頼光は。大江山と云へ行て。四天王の人々と共に。酒呑童子と云鬼を退治したの。俵藤太秀郷が。蜈蚣の王を射殺したの。また桃太郎が。日本一の黍團子と云を食て。力がついて。是も鬼が島を平げたのと。とかく子どもの内から。武勇になる爲だと見えて。勇ましい事ばかり言て聞せ。また近頃の草冊子には。色々としャらくさいことも有るけれども。三四十年も以前までは。目玉が大きくて。腕や脛にふしこぶ立たる。武者繪の冊子が多かッた物で。是は古人の深く考へて。したることでも有るまいかなれども。御國の人は。自然と武強く。勇しいことを好む故で。何にも是らは結構なこと。行々萬々歳も。此やうに有たいものでござる。扨又曰ふには。大人同士が集れば。先古人の武功のことを。談じ合ことを第一とし。夫を委く評論して。きつく感心して。事有れば。夫をまねやうと心がけ。又兵器と云て。戰の道具にも乏くない。遠くに居て戰ふには。弓有り鐵炮あり。又手と手とを交へて戰ふには。鎗と刀とを用ふる。別して其刀の鋭く切れること。ひと刀にして。人體兩斷とする程のことじや。ときつく魂消て有るけれども。まだ／＼こんな事ではない。二ッ胴ぎり三ッ胴截りなどゝ云て。土段をかけて切拂ふなど云やうなことがある。扨是はよき序じやに依て申ますが。御國の刀が萬國最上で。夫ゆゑ外國人の欲がるは云までも無ことで。なんと同じ鐵でする物だが。どうして御國の刀に限て。さやうに良からうか鍛やうと云ても。外國の人は。別して工夫を凝すことなれば。劣さうも無ことなれども。爰が風土のせいで。別して刀は。萬國に勝れねばならぬ訣が有て。

此の事は先年委く考へて。別に書て置たけれども。今其大略を申さば。先御國は。段々申すとほり。萬國の元首則かしらで。人體で譬やうならば額の處。また刀で云へば。其切先のやうな物で。殊に天地初めの時に。天津神高皇産靈神様が。天の沼矛を伊邪那岐伊邪那美二柱の神へ下されて。國を造れと仰せ付られ。又二柱の神は。其矛を指下して。御掻なしなされて。其矛の滴り凝て島と成て。夫がだいと爲て出來たる此御國でござる。皇産靈神の御授け遊はすに。御品こそ有ませうに。矛を下されたには。深き御計の無らう筈がない。こりや凡人と成たる今の心では。何にとも計られぬことながら。御國の自然と堅固で。人の武強く勝れて居のも。先あらかじめ爰に芽が見えるでござる。又此後大國主神も。八千矛と云を御杖なされて。御國を御經營あそばし。扨御國を皇孫命へ御讓りあそばさるゝ時に。其御矛をも進せられ。此矛を以て御治めなさらふならば。天の下は安らかに。治まるべき由を仰せられて。差上られたでござる。かやう仰せられたには。是また必ふかく妙なる由縁の有さうなことゝ。又朝廷の御守り。天津日嗣の御璽たる所の。三種の神寶の一つが。天の叢雲の御劔と申て。靈驗申すも更なる御事で。是も甚深きゆゑ有ることでござる。我翁の歌に。「世の中の有る趣きは何事も、神代のあとを尋ねて知らゆ。と詠れたが。實以てさやうで。是らの事も。とッくりと考へると。言外にいひ出難き旨味ある事なれども。彼生漢意の人などは。何と聞受られませうかでござる。又町人百姓に至るまで一腰づゝ挟んでゐるこりや外國には餘りないことで。自然と云が則神の御心で。押並て武強いので。古くは町人も。皆刀をさへ佩てあるいたと云ことで。既に享保年中。すなはち有徳院殿の御代に。町人の輩が脇指をさして居のは。何頃よりのことじや。控でも有るかと御尋が有たる所が。とんと知れず何時からと云ことなく。久しく佩來る。剰へに。以前は刀をも佩たる由を。町奉行まで申上て。其後いよ／＼御構ひなく。今に佩をることでござる。扨又云には。此通り國強く人強く。物が足うぞならば。外國と交るはだめなことじや。夫故ちゃんと國へ鎖をして。交易をせまいと云のじや。自然と此理を日本人が覺えたものじや。

其の自然と云が。實は天つ神の敎じや。いでやまた。日本の福有なることを具に云はゞ。まづ第一に。地方が殊れて中正で。夫ゆゑ南なる國々のやうに。暑くてどうもならぬと云ふやうなことは無く。又北國極寒の。どうもならぬと云やうな寒さもない。さつ又是は云ふに及ばぬ事じやが。諸の國々の肥澤て歡ぶべく樂むべきは。天の度數に取ては。北緯三十度と。四十度との間にあるに及はない。日本はちやうど。夫に當てゐる。又或人が難じて。日本國は嶮岨で石の多い國で。また尖なる高山の多い國じやに依て。其國人が拔群の苦勞をせずは。物は出來まいと云だらうが。夫もまた天津神の御心で。此國を殊更に悳んで。さうして置れたものじや。其故は。さやうに嶮岨で。民の耕作に骨の折るのは。則結構なことで。一體人と云ものは。勞せず働かずに居ては。體が倦で。病が發る訣の物じやと云て。其訣が委く書てあるで。扨其訣じやに仍て。此通り天津神が。此國の人を。身體すこやかに骨を折して。頭腦は人間の。神魂の居る處じやに仍て。其頭腦を穎敏と云て。さとくすこやかにして。其の神氣を發明させようと云の御心じや。中々以て。かの天竺の國などのやうな。熱國くろんぼのやからが。自然生と云て。ひとりでに生てゐる草木を賴みにして。其命をつなぎ。殆鳥獸に等しき者どもと。一つにはせぬと云。天つ神の御心じや。又或人難じて。日本の土地は。かしこやこゝでちぎれてゐて。言はゞ諸の島を。寄合せたやうな國じやが。こりやなんと。惡い國ではないか。と云者も有うが。是も又天津神の御心で。殊更に日本を御惠なされる證據しや。其故は。日本の國國の離れてゐるのは。譬へば此大地球の國々が。遠く放れて有るやうなもので。さう放れてゐると。其國國に依て。產物が各々ちがつて。色々有用の物が出來る。夫で日本一國とんと。外國の物を望まずとも濟やうに。神の爲れたものじやと云て。御國の國々の產物。美濃尾張の米が好いの。佐渡から金が出ると云ことを委く云て。又諸の細工の。萬國に勝れて居ることや。何か此外にも。夥しく贅て有るでござる。なんと遙に西とも西のはてなる外國人の。かほど迄にも。御國の實以て神國で。萬國に殊れて。結構な國と云ふことを覺えてゐることじやに。其國に

生れて。其國の事を知らずにゐると云は。口惜いことでござる。夫のみならず。是ほど結搆な國に生れながら。外國どもを賛て。よい國じや。強い國じやなど思て。其の外國の奴原などが。御國近くのはなれ島へでも、生ごしやくな事でも爲ると驚いて。眉を釁めなんどする者が有る。こりや一向はかない愚かな事でござる。然れども是は御國人の。底心からさうではない。皆外國の學問を。わるくしたる輩の。習弊を弘めるからのことで。其は先佛者は。天竺ばかりを賛て。彼の國は佛の本國で。尊い國じや。我國は東方粟散國と云て。東方の海へ。粟粒一つを流したやうな國じや。などゝ云て騒ぐ。また儒者は。漢土を稱て。彼國は聖人の國じや。中華じや我國は小國で。且夷狄と云て。ゑびす國じや。などゝ云て。御國を賤める。又近頃はやり初たる阿蘭陀の學問をする輩は。よく外國の樣子も知て居ながら。其中には心得違ひをして。又やみくもに。西の極なる國々を贔負して、譬へばオロシヤは大國じや。夫に人が利發で。其上火術と云て。鐵炮や大石火矢を妙に用つて。夫で百里も先の城郭などを、一打に潰してしまふ。日本ぐらゐの小國は。こなみぢんにもする程のことだから。けうとい物じやなどゝ云て。其圖や。或は萬國の繪圖などを出して。此の通り日本は小國じや。などゝ云て驚かす。既に先年蝦夷の放れ島へ。海賊が來て。盜みをして行たと云ふ。噂の有た時などがさうでござる。こりや皆神國の神國たる故を知らず。御國の國體に昧いからのことで。まだしも其己己は。人の國の世話ばかりをして。國體に昧いことは。不便ながらも爲方が無れども。其おのれが。おぞけ魂を世に廣めて。普く人にまで。さう思はせるが憎いでござる。然れども御國の人は。彼ケンプルも申したとほり。自然に雄々しく。武強いことゆゑ其の外國を強いかのやうに思ふのも。實は外國びいきの人に言立られて。ちよいとかぶれるばかりのことで。其底の心には。此國は神國ぢや。我等も神孫じや。何ぞ毛唐人めが。戎狄どもめが。阿程のことを仕出すものか。驅散らしてやるがよいなどゝ云ふ。いやけしからぬ強い者が底に有て。こりや篤胤が申すまでもなくさうでござる。中々以て。唐の國の人の樣に。ゑびすじやの。夷狄じやのと云て。禽獸の樣に卑

めたる。其の夷狄に。國を盡く奪取られ。あれ程の大國の國人が首を低て。其いやしめられたる北狄を君王と敬ひ。今は國中殘ず。けし坊主にされてしまッたが。さ。こんな腰ぬけは。御國に限つて一人も有るまいでござる。世にはいくらも。道をとくの。敎へるのとて。弘める人がある。夫を聞くと。大抵は儒者で。わる賢く狹いことを說ちらす。又道學者などゝ。事々しく名のる輩は。心法や悟道とか云ふやうに。佛臭く地獄くさい事を弘めて。人に不人情を示して。やくたいなしの腰ぬけ根性にせうと爲る。その言ふ所をちよいと聞くと。尤らしく聞えるやうなれども。能く考へて見ると。大抵は。誠の道に乖けてゐる事ばかり。云て居るでござる。そんならは。其の眞の道と云ものは。いかう六づかしいことかと云ふに。一向むざうさな物で。彼の心法や悟道や。聖賢のまねなどのやうに。出來にくいものでは無く。大道を何の障りもなく。大手を振つて步行れるやうに。誰しの人にも心安く出來ることで。みんなが知らず〳〵。其道を步でゐる。そりやどうじやと云に。誰も〳〵生れながらにして。神と君と親は尊く。妻

子のかはいゝと云ことは。人の敎を借んでも。みごとに知てゐる。人の道に關ることを。言もて行けば。多端のやうなれども。實は是から割出したやうなもので。先日も申す通り。其元は。皇產靈神の御靈に因て。出來る人じやに依て。其眞の情も。直ちに產靈神の御賦なされた物で。夫故に是を性と云でござる。此事は唐の古き人も。よく眞の道に眼の付た人は。一速く云ておいたことで。中庸に。天の命これを性と謂ひ。性に率ふ之を道といひ。道を修むるを敎と謂ふとある。此意は。人間に生れると。生れながらにして。仁義禮智と云やうな。眞の情が。自ら具つて居る。是は天つ神の御賦下された物で。則是を人の性と云ふ。此の性の字は。うまれつきと訓む字で。さて夫ほどに結構なる情を。天津神の御靈によつて。生れ得てゐるに依て。夫なりに僞らず枉らず行くを。人間の眞との道と云ふ。又其生れ得たる道を邪心の出ぬやうに修し齊へて。近くたとへやうならば。御國人は自からに。武く正しく直に生れつく是を大和心とも。御國魂とも云でござる。然るを佗の國々の小ざかしき敎說や。或は御國を忘れて。外

國を慕ふやうな。生れもつかぬ情が添ふと。其を說さとし。いやさうではない。かうではないと。元の性に思ひ返し。思ひ直させるのを。敎といふでござる。先かやうの趣で。なんと眞の道と云ものは。此やうに安らかなもので返す〴〵も生さかしらな眞似や。心法じやの。悟道じやのと云やうな。佛くさくしやら臭いことは。さらりとやめて。どうぞ此の大和心。御國魂をば。枉ず忘れず修し齊へて。直ぐ正しく。淸く善はしい大和心に。磨ぎ上げたいものでござる。古人の歌に「武士の取佩く太刀のつかの間も。忘れじと思ふ大和魂」と云がある。此の歌の心は。武士たる者の。常に腰を放たんでゐる太刀の如く。身に引そへて。又束の間もと云は。直に太刀の柄にいひ掛て。少しの間もと云ことで。少しの間も大和心をば忘れまいと思ふてゐる。と云の意でござる我鈴の屋の翁が。自らの畫像の上に書れた歌に。「師木島の大和心を人とはゞ。朝日にゝほふ山櫻花」と詠れたでござる。まづ師木島と云ふは。直に御國の事では有るけれども。古へから。大和と云ふ時の枕詞においたもので。こゝも其の通でござる。一首の意は。もし人が此方に。君の心はどうでござるぞ。又大和心と云は。どうした趣でござると問ふたならば。答へて。大和心と云ものは。春山の櫻の花の。たんと美しく咲いてある所へ。朝日のさし登るまゝに。其花へきらきらと映りて。照相ふやうな物じや。又わしが心も。その通りでござる。と答へると言はれたので。なんと美しく潔よく。匂ひやかなる物も多き中に。是程うるはしい事は有まいでござる。諄いやうなれども。素より御國人は。皆々下の心に。此美しく潔き心を持て居るけれども。大かたは外國どもの心に移り。其の本意が曇つてゐる。是をどうぞ磨き出して。元の美麗しい心に成たいものでござる。この大和心。御國だましひの磨きが足らんで。辛抱がぐらつくと。諸事の心得違ひがこゝから出來る。本立て道生と。唐人の申たも。此らに叶てゐるやうでござる。扨その大和心のみがき方はと云へば。我が翁の著されたる書物をよむに及は無いでござる。然れども日々に。爲す業の忙がしい人々や。いかう年でも寄た人などは。夫も出來まいから。其よく大和心を。辨へたる人に便つて聞くが宜いでござ

る。こりやどちらにしても。至る所は同じことで。「家のなり勿怠りそねみやびをの。歌はよむとも書は讀むとも。と鈴の屋の翁は詠れたでござる。また翁の書れたる物に。心さとく心直き人は。善きこと聞けば速けく悟り。こゝろ遅く。心なほからぬ人は。悟れども人に負んことを忌てえうつらず得おもむかずて。生のかぎり。枯野の草の。去年のふるから舊きになづみて。淺みどり春の若葉の。うら細しきをば。摘こと知らずて朽はつめり。と言はれましたが。是は實に此とほりの事で。世間に學問すると云ふ人は。夥しく有ることなれども。とかくわるい癖が有てどうもならん。其くせと云ふは。大かたの學者にはあるでござる。彼のよく世にも申すことだが。目を卑めて耳を尊ぶ。とか云ふ類ひの人が多く有て。外國の人の云たことや。又古へ人の言たる事にばかり拘らひ泥で。我御國人。また近き世の人の言たことをば。善説もよしとは云はず思はず。又是はよいと思ふことでも。やッぱり先入を改めず。負じ魂にかの毛を吹て疵を求め。言ひ破らう〳〵と致して。其心がやがて。學びの道に乖けてゐる事にも。氣が付んで居らるゝ人もまゝ有でござる。此ことは。唐の人なども。惡いことじやと申て。論語には三四箇條も誡めて有る。されぱとて。其よき事も知らぬ内は。そりや爲方が無れども。苟くも學問に志の有る人は。此心ばへを常に忘れず。人に氣を付られたならば。改むるに憚ることなく。速かに先入の惡弊を淸く捨て。かの翁の言はれたる。去年の古からをば手折らずに。どうぞ春の若葉のうら細しきを摘で。おたがひに。眞の道をたどるやうに致したいものでござる。又自分ばかりでも無く。人にも語り聞すのが。是も人間の眞の道でござる。既に唐人すら朝に道を聞て。夕に死すとも可なりと申て。眞の道をきかうぞならば。朝聞て。夕かたに死んでもよいと思ふほど。嬉いと云ふことで。唐人すら此通りじやもの。なんと此道。この御國の有がたきを覺えては。人には語り聞せずばなるまい。これ及ばずながら。篤胤が人にも勸める所以でござる。是が即ち天津神國津神への神忠。これがすなはち恐れながら。天皇また大將軍家の御厚恩を。粗略に思ひ奉らざる一端是がすなはち兩親に生出されて。育てゝもらひまし

たる恩返しで。直に人間の道で有らうと存ずるでござる。何れも其の御心得で。どうぞ〳〵。往々も捨おかず。道の學びに。怠りの無きやうに。勵み勤められるが。第一の事でござる。

今度かく。古道の大意を講說するに付ては。又諸道の旨をも。大略講せずは有べからず。仍て是より次々。歌道の大意。醫道の大意。さては俗に謂ゆる神道の大意。また外國より渡り來たる。儒道佛道などの大意をも。次々講せんとす。扨また右諸道の趣を。取りすべて論辨いたし。其より神々の御功德神拜の古法式。先祖の祭りかた。總て世に在る人の今日の心得を述て。玉襷と名けたる講本十卷あり。右等を見聞して。いよゝ倍々我が古道の眞實にして。人たる者は必學はずは有るまじき所以を知辨ふべし。

俗神道大意序

かけまくもかしこき我すめら御國の道はしも神なからことあげせぬみちにしあれはたゞほこのみちといふ名によそへたるその名さへあらざりけらしさるをやう〳〵とつくにのみち〳〵わたりまうてきにしよりこなたこゝの大みくにぶりを神道となつけそめてかのみち〳〵にならへいふらむこそいともけからはしくかしこきわさにはありけれそれたにあなるをほうしかともおよつれト部のいへのあとなしごとさへ今はあめの下にまくすはらはひゝろこりておさろのみちふみわけかたくなりにたるをはやくひら田の翁うれたみなげきて直學譚獘といふふみ作らんのこころをおこしてまつそのしけかりしねなしくさともかりそけられたる是の說とよかのかくろひしおほみ國ふりあきらめなむにはこれにまさるしるへもあらすなんされはわか伯とのゝみかとたちならす神つかさはさらなりくに〳〵ところ〳〵より此ふみもとめまほしくすめるをおのかうつしもたるを聞しりてこへる人はたすくなからぬにそれこと〳〵にうつしあたへむはわつらはしくたはやすからぬわさなればおもひわひてかくすり巻とはなしつるなりけり萬延のはしめのとし文月のこゝぬかのひ神祇伯資訓王の

阪東執事古川躬行しるす。

俗神道大意一之卷

平田先生講說　門人等筆記

凡て世の中の事にも物にも。名が違て同じ物が有り。また名は同くて。事の違て居るがあり。其れを能くしらべ辨へぬと。大きに心得違ひが出來たり。また牽强附會と申て。彼と此とは其筋の違て居ることを强に牽よせて。同じ物ぢやと附會さんとするやうな。誣說も出來る事ぢや。然れば物學ぶ人は。この訣をよく心得て居らぬと。折角學んだることどもが。諺にも勞して功なしと申す如く。むだ骨折と成てしまふことが多く有る。熟々世間の學者を見るに。夫がけしからず多く。傍より見るに見かねるほど。扨々氣の毒なものぢや。夫はまづ物が同じくて。名の違てをるは。誰も能く言ふ。難波の葦は伊勢の濱荻。京の太夫は江戶のおいらん。俗家の妾は法師の大黑。これらはみな物が同くて。名の違て居るのぢや。又名は同くて。實事の違て居ることは。神道などがそれぢや。と申す故は。神道々々と一と口にいへば云ものゝ。巨細に此を分て云へば。十二三にも分らうが。其內大きなる相違の所を別ても。ざッと五つの差別が有る。此は眞の學びに志す人々は。能く心得て居るべきことで。其はまづ眞の神道と申すは。古道の大意に申たる如く。この天地を御造り遊したる。天つ神高皇產靈。神皇產靈神の始めまして。伊邪那岐伊邪那美神の。御受繼あそばして。世に有りと有事物の本を御始めなされ。又その事物を。悉に持分けしろしめす神々を御生なされて。其功德は。天照大御神に御傳へあそばし。さて皇御孫邇々杵命御天降り遊ばさるゝ時。天つ御祖產靈の御神。天照大御神より。皇御孫命の御代々々。天の下を知し召す。御政のやうを御傳へあそばし。扨御代御代の天皇。その御依しのまに〳〵。己命の御さかしらを御加へあそばさず。天地と共に御世しろしめすことぢやが。此の道をさして神道と申したることでその慥なる證文は。日本書紀の孝德天皇の三年四月に。臣連及び天の下の御民の素姓を御正しなさるる時の詔に。惟神我子應治故寄。是以與天地之初君臨之國也と宣へる。この惟神とある詔命の分註に。惟神者謂隨神道亦自有神道也とある。此

は天皇の御自ら御下し遊ばされたる御法か。又は撰者舎人親王のなされたる御法か。天皇のあそばしたる御言なれば。いよ以て有難く。舎人親王の成されたるにもあれ。實によく吾が古道の意を明したる語で。右申たる旨によう叶て。これが吾が徒のいはゆる神の道と云の出所。よりごころぢや。神道といへばとて。外に何も人に異つたる行ひの有ではない。即ちこの御文面に。隨神道とも。自有神道ともある如く。天皇の御祖神の御依しの通りに。御おきて遊ばす御法令を畏まり奉り。扨吾々も神の産靈の御靈に依て。生れ出たる物故に。各々業々におのづから神の道が有て。それは神と君と親を敬ひ。妻子を惠むなどを始め。儒者のいはゆる五倫五常の道は。生れながらに具つてある故。それなりに曲ずゆがめず隨ひ行くを。神の道に隨ふとは云ことぢや。さて天皇は。此の道に御隨ひ遊して。天の下を御治あそばし。下々は其御心を心として。この道に隨ひ行くべき當前の事故。ありと有る人の限り。儒者も坊主も。この神道に洩ると云はならぬことぢや。もし此道をかれこれ云はうとならば。此國には居らぬがよろしい。眞の神道と云はこの事で。まづ是が一つ。

また同じ書紀の中でも。用明天皇の御卷の始めに。天皇信佛法尊神道と見えたる神道は。右申たる神道とは訣が違て。神を祭り神を禱り。また祓などの類。すべて神に仕へ奉るのわざを。宏く申たもので。謂ゆる神事のことぢや。尤もその神事とも云ひもて行けば神道のわざながら。事と道とは。身木と枝葉の如くで。右申たる惟神なる道とは。大きに本末の差別あることで。佛法と相對て神道と有ればとて。後世神道者などの云如く。教の道と心得るは非ぢや。唯こゝにいはゆる神道をば。用明天皇は。佛法を御信じあそばしたなれども。神事のことをも。粗略には遊ばさなんだといふ意に。輕く見るが宜しい。但し今の世に神道者など云ふ輩は。眞の神道と云ものは。何樣なる物ぢやといふ訣を知らず。唯に祓祈禱などのわざを神道と覺えて居るから。爰にいはゆる神道の字は。かれらがより所にすればなりはするぢや。先この神道で二つと。また三つには。漢籍周易の十翼に。觀天之神道而四時不忒。聖人以神道設教。而天下服矣とある。この易の文に。天之神道と

云たは。四時不レ忒とある如く。春夏秋冬の季候を忒へず。風吹き雨降り。萬物の生出る所を以て。天然の神道と云のこゝろに云ひ。同じ易の文に。陰陽不レ測これを神と云とある。神の字の義ぢや。御國の謂ゆる神の如く。しやんと實物の神をさして。其神のなさるゝ道と云の義ではない。それ故天の字と神道との間へ。これと訓む之の字を置て。天之神道とかき。天然の神道と云ふ意に申たものぢや。扨すべて文の意は。つら〳〵天然自然に神く行はるゝ。道の有さまを觀れば。四時の季候が違はず。春は暖で草木の芽がはり。夏は暑くて草木が成長いたし。秋は涼くて草木が實のり修り。冬は寒く草木が彫んで根に藏まつて。いつも忒ふことがないから。古への聖人といはるゝかしこき徒が。こゝらのあやしく行はるゝ道を觀じ。それより思ひおこして。世人に耕作の道を敎へたで。世の人がその智に服したと云の義でござる。序ぢやに依て申すが。この文に設レ敎とあるのは。人たるの道を敎へたと云ことではない。たゞ耕作の仕やうを敎へたと云ことぢや。それは上なる四時不レ忒と云ふ文を受て。かく云たるを以

て解るがよい。世々の儒者どもの解しやうが皆わるい。此わけ故に。ともに神道と云へばとて。右に申たる二つの神道とは。とんと趣意が違ふことで。一體もろこしの文字が渡つてこのかた。御國の古言へそれを當たるのに。全くよく叶てをるのと。合はぬとがある。これも亦よく心得ておかねばならぬことぢや。その一つ二つを云はゞ。御國言にかぜと云に。彼の國の風の字をあて。みづと云に水の字をあて。きと云に木の字をあてたるなどは。よく合てをるけれども。鳥獸草木などには。一向に塡そこなつたなども大ぶあるぢや。かやうの事は本草學を致して見るとよくわかる。扨御國のカミと云物に。もろこしの神の字を塡たるなどは。五分合て五分は合はぬ。其故いかにと云ふに。御國でカミと云は。これまで段々申す通り。しつかりと實物をさして申すことぢや。然るにもろこしの神の字は。右申す如く。大概は實物を指て云ではなく。かの易の文に。陰陽不レ測これを神と云。とある義に云て。天然のあやしき道と云の意で。天之神道などゝ云へる類ひが多い。尤も右の餘に山川の神だの。また何の神くれの神と。

實物をさし云て。御國のカミとさらに違はぬこともあれど。大かたは謂ゆる虚字で。用の言に多く云て。今御國の如く。實物の體言に云ことは。少いぢや。今は何事も字にあづけ。其字の義に依て。古へをも見んとする世の中ながら。それは非心得ぢや。こゝらの訣をよく辨へ居らぬと。學問するにしたゝか損がある。これまでの學者どもが心得違をいたし。混雜なる說ばかり云たものぢや。既に太宰彌右衛門が辨道書にも。今の人神道を我國の道と思ひ。儒佛とならべて。是を一つの道と心得候こと。大なる謬にて候。神道はもと聖人の道の中にこれあり候。周易に。觀天之神道四時不忒聖人以神道設教而天下服矣。とこれあり。神道と云こと。始めて此文に見え候。と記して有るが。凡ていはゆる儒者と云ものは。はなはだ拙き者で。その中にも。この太宰と云男は。心狹くねぢけたる奴で。とにかくに御國を謗らんとする心に。右の如く判然と致したる別のあるにも心つかず。一つに混じ。神道と書る字になづんで。かゝる憶說をいつたものぢや。これだに依て古學をする人は。能くその差別を辨ふべきことぢや。この國に神道と云道はないと。太宰が云たは。定めて今の諸社の禰宜神主。または土御門の流を汲で。陰陽家の神道者といふもの。鈴を振て門々に立ち。三種祓とか云をよみたて。高天が原を云てあるき。荒神祭などして。世を渡る輩を。神道と心得ての評と見えるが。彼らがことは。末に取あつめて論辨いたさうが。實はとるに足らぬもので。鉢坊主も同じことぢや。さて四つにはいはゆる兩部神道。五つには謂ゆる唯一神道だが。但し世人の心得て居る所は。天の下の神社の中に。神主祝部社家など云類ひばかり仕へてをる社を唯一と心得。それに法師の交つて仕へをる社を兩部と云ふが　兩部と云名目は。元來さうした訣ではない。かの空海法師が弘めたる眞言の宗旨に。金剛界胎藏界といふ二つの訣が有て。これを金胎の兩部と云ぢや。かの謂ゆる兩部神道と云は。この金胎兩部の旨を。神道の事實に習合して造り立て。神は佛の垂跡。佛は神の本地ぢやと云て。世を欺き人を誑かしたものぢや。さて其書は。まづ古くは天地麗氣記と云もの十八卷四本これは始めに空海撰と有るが。天野信景が說に。これは麗氣灌頂の書な

ごを本として。後人の空海に託して。僞り作つた物であらうと云たが。實にさうと見えて。末の處へ行ては。空海の言くなどヽ云こともあるから。空海ではあるまいなれども。何れ空海が説を受ついで。兩部神道を弘めんとする奴の。作つたものとは見える。また兩部神道二圖と云物も有る。これも空海が作といひ傳へ。この餘にも種々かやうの書どもが有て。さて其書どもに云へるさまは。聖德太子。舍人親王もみな兩部神道なり。空海諸道に通達して。神道の奥義をきはめ。この兩部神道を中興せり。嵯峨天皇これを叡感あつて。兩部神道と云號を下し賜はつたなどヽある。是はみな空言なること論はなく。さて其説ざまは。神儒教の三教の勝を取て劣を捨るなど云て有れども。これは故翁の玉がつまに。まづ三教の勝を取るとはいへども。其説ることどもを見るに。たゞ儒と佛とをのみ取て。神の道の意を取れることは更になし。凡て佛の道を專として儒をまじへ。かくて神の道は。たゞ書紀の神代卷の。天地の初發の所の潤色の漢文と。國常立など神の御名を。とりとり出せるばかりにこそあれ。其道の意としては露ばかりも見えず、爭でかこれを神道と名づくることを得む。殊にこの兩部神道と云者は。たゞ己が心を主人とし。神と聖人とを奴僕として。心に任せて驅使ひたる物にして。神の御典をも。佛の説をも。儒の言をも。己が心の如くに。説きなし難き所をば。みな方便ぞ假説ぞ表示ぞなど云ひなして。一向に思ふまゝに説たるは。佛の道にも非ず。儒の道にもあらず。況て神の道に非ざることは更にも云はず。たゞ己が私の新ばり道なるを。神道としも名づけたるは。何なる故ぞと云に。儒の道佛の道はあだし國より渡りまうで來つる道にして。神の道ぞ皇國の本よりの道なれば。後の世といへども。世の人なほ他國の道に依らんよりは。おなじくは吾國の道をこそは尊むべけれと。思ふ心もさすがに多く有ものなれば。さる世の人を面向けんために。我が國の道と云名を借たるものにして。此の輩の祖とする。昔の法師なども然にぞ有ける。當時なほ國々の民どもは。もはら神を尊み仰げる故に。まづ其神を引こめて。己が道の中の物になして。畏くも佛の奴のごと説なして。人の心を移させたる物ぞかし。世の兩部神道の神道

と云名も。此心ばへを以てなり。又儒の道には。よろづを陰陽の理をもて說き。其上にまた大極無極と云物をさけり。然れごもその大極無極は。何なることわりいかなる故にて。大極無極なるぞと云はむに。答ふべき由なきが故に。かの兩部神道には。佛の道の密教の義に依りて。今一きは上へを說て。これを阿字眞如海。變動自在の所作などと言て。諸の道に勝れたる如く誇れごも。其阿字眞如は。又何なる理いかなる因緣にて。變動自在なるぞと云はむには。いかゝ答へむとする。凡て物の理は。次々にその本を推極めもて行く時は。何なる故ともいかなる理りとも知るべきに非ず。遂には皆あやしきに落るなり。然れば陰陽も大極無極も阿字眞如も。皆假の嘴りぐさにして。實には其理あることなく。えうなき徒ごとなりかし。又眞如の無明を生ずると云もいと〳〵心得ず。眞如ならむには無明は生ずまじきことなるに。何にして生ずるにか。其理こそ聞まほしけれ。不覺によるが故に。忽然と無明を生ずと云なれご。然らばその不覺はまた何の因緣。いかなる理にて不覺なるぞと云はゞ何に。又不覺ならんからに。生ずべき因緣ことわり無くては。無明の生ずべき由なし。其の因緣ことわりは何に〳〵と云ひおかれましたが。是で謂ゆる兩部神道者ごもの。咽くびは締めつけてしまはれたことぢや。但しこの兩部神道と云ことの起つたは。右の麗氣記。また兩部神道二圖などにも記し。また世にも云ひ傳ふる如く。空海法師がはじめたるに違ひなく。彼奴惡智惠の限りをふるひ深く巧んで根をかたく造りおいたる說に。後々の佛者ごもが。次々に潤色增補して固めたること故。容易には論辨いたし回いことながら。篤胤が考への及んだる限りを以て辨論いたさば。元來は聖武天皇の御代に。南都の東大寺を御建立遊ばしたる時に。かの菅原寺の行基と云法師が。朝廷を欺きたてまつり。神佛一體の旨に申掠め奉り。かの奈良の大佛を。畏くも天照大御神の。本地と云に致して。造つたるより以來の事と思はれる。いで其のいはれは。この行基法師と云は。聖武天皇の御代に當て。朝廷には甚だ御用ひあそばし。この法師が始めて大僧正といふ號僧位を賜はり。又この法師に。始めて菩薩といふ號を。御ゆるしなされた程のことで。かの東大寺を御

造營あそばさるゝ砌。この僧を伊勢の大御神の宮へ遣はされ。御伺ひなされたと申す事で。此事續紀には洩れてをれども。前後の事實とくらべ考ふるに。これは實にありたることと見えて。これかれの古き書に記しある中に。元亨釋書に。殊に委く記してある。此元亨釋書と云は。後醍醐天皇の元亨二年に。師錬と云僧が　御國へ佛法わたッて以來。其道に與かれる事實。及び諸法師どもの傳などを書き集めて奏ッたる書で。三十卷あるが。それに記したる趣は。聖武天皇の十三年に。天皇東大寺を御建立あそばさん事を思召たなれども。御國の世々に神を御いつき祭りあそばされたる所を。さやうに大きうなる佛寺を御造らせ遊ばしたならば。神の御心のいかゞ御座らんと思しめして。行基法師に。佛の舍利一粒を御授け遊ばして。伊勢の神宮へ御遣はしなされて。大御神へ御獻じあそばされ。此事を伺はれたる所が。行基は內宮の南門にある大杉の下に庵を構へて。天皇の思し召を申上て。念じ居たる事七日が間。時に第七日にあたる夜に至つて。神殿がおのづから開けて。大御神の。內より大音に御唱へあそばすには。

實相眞如之日輪。照二却生死之長夜一。本有常住之月輪。爍二破煩惱之迷雲一。我今逢二難レ遭大願一。如二渡得一レ船。又受二難レ得寶珠一。如二暗得一レ炬。師其持二舍利一。藏二埋飯高郷一と。神勅が有たる故に。行基は其の舍利を神の宣へる通りに。かの飯高の郷にをさめて。さて都に歸り。此よしを天皇へ申上げたる所が。天皇にも殊の外およろこび遊ばして。又おぼしめすには。行基を以て伊勢の神宮へ遣はしたること。群臣の議する所もいかゞあらんと思召て。重ねて橘諸兄公を勅使に遣はされたる所が。諸兄公には神勅もなかつたが。其歸られて右の由を申上られたる夜に。天皇の御夢に。大御神の御告げあそばすには。日輪是毘盧遮那なり。帝この意を以て佛寺の御いとなみ然るべきの趣きに神勅あッて。日輪の相を現じ。光かゞやいて御見せなされたる故。天皇御夢さめて。御感激遊ばし。そこで東大寺の大佛を十六丈に御建立あそばした。と申てあるぢや。是は一わたりに考へては。元亨釋書の作者師錬が。僞てかやうの妄說を作つたのぢやと申たいやうなれども。熟々おもへば妄說は妄說ぢやが。師錬が妄說ではなく。行基がかの神勅を僞り

作て。天皇へ申上げ云ひふらし。世を欺いたには違ひない。其の故は。この諸兄公を。伊勢へ勅使に立られたること。元亨釋書には十三年の事とありて國史に有る所とは年こそちがへども。右大臣橘諸兄公と。神祇伯中臣名代卿などを勅使として。伊勢の大御神へ神寶を献ぜられたことが。十年五月の所に有て。何の故に遣されたると云こともないから。察する所が此事の御伺ひなどで有も致したらうさ。然ればさばかり重んじ御愛みあそばしたる行基がことゆゑ。天皇の御心で遣はされたるか。或は行基が自の心より申乞ひなどもして。大御神へ伺はんなどゝ云て。大宮の邊りまで參りも致したらうじや。但し右の實相眞如之日輪者云々と。大御神の仰せられたさ云ことは穴かしこ。いかで〳〵大御神の。かゝる穢らはしき物を御愛しあそばさんや。かゝるけがらはしき御言を宣給はんや。行基法師が。畏くも憚なくも。大御神に申かけを致して。かゝる神勅が有たと己れ僞り言して。天皇へ申上たに相違ない。夫ゆゑ天皇にも。大御心を定めあそばして。東大寺を御たて遊ばしたことゝ見える。正史に此事見えねども。

此時かゝる事のなくて。東大寺の大佛を。大御神の本地ぢやと申し傳へやうはずもない。林道春の神社考に。舊記曰。南京東大寺。中央臺遮那大佛者。表天照大神之本地。左面觀音者。天兒屋根命。右脇虚空藏者。太玉命。鎭守權現者。八幡大菩薩也。と記し有るが。其の舊記と云は。何なる書をさしていはれたる事か。未その本書を見ぬが。定めて據ある舊記であらう。何れにもこの時。行基法師が妄說を御信じあそばして。本地垂跡を御始めなされたには違ひないと見ゆるぢや。また天皇の御夢に。大御神の御形を現はして御諭しなされたると云事。是は甚あやしきことで。これこそは元亨釋書の作者師錬が。妄說に相違あるまいと思はれるなれども。もし實に有たることならば。それは彼の幻術ぢや。漢の明帝や。唐の玄宗などが見たる夢と同じく。此例は韓より。菩提佛哲など云妖僧ども來居つて。行基とは殊更に中よかつたること故。是奴ら申合せて。いたしたることに違ひない。夫は天平八年に。菩提佛哲二人の僧が渡り來れるとき。行基が出迎つて菩提が手を取て。舊きより識た者の如くで有たと云ことで。夫よ

り菩提を。行基が立たる菅原寺へ伴つてかへり。物など食て後。二人が箸を執て板をたゝき舞をまひたるに。其の碩まで。菅原寺の側に居たる。三年おきず物いはんで。たゞ時々頭を上て。東方を見て居たりし異人が有た所が。俄に起て寺に入てともに舞ひ。此奴歌て云には。時哉々々。縁熟哉と云て。三人相共に故舊の如く親しかつたと云ことなど。何とやらんいやな奴らが所爲ぢや。かの異人が時々かしらを上て東を見たるは。東大寺の出來ることを待ち。また啞の如くに成て居たるは。この歌をうたはんとてのことだと。釋書にはあるぢや。一體この東大寺の御建立は。行基がそゝのがし申せるより。思召したゝれたることらしく。夫れ故に何もかも。彼奴が計らひらしいことぢや。また天皇へ夢を見せ奉つたるも。直ちに彼奴がわざかもしれぬ。夫は思ひ合さるゝことがある。行基と同じ時の僧に智光法師と云が有て。行基と中がわるかッた所が。あるとき夢に地獄へ行て。閻魔王に。行基をそしることを叱られ。夢さめて後。行基が許へ。わびに行たる所が。行基はとく其事を知て居て。智光が來るを見て。咲を含んで居たと云ことが。釋書にも。往生傳と云物にも記して有るが。是らは正しく行基法師が幻術で見せたる夢と見ゆれば。天皇の御夢も。彼奴が見せ奉つた事と見ゆる。又思ひ合はさるゝは。續紀にもこの僧の傳に。有靈異とある。これらも思ひ合すべきことで。三寶に大御神御神託あらば。諸兄公に有るべきはずの所が。この公には何も仰せられず。行基へ仰せられたと云ては。こゝが詮議の糸口ぢや。

さて是は序だに依て申すが。此間も申す通り。日蓮宗と云宗の者どもの書た物には。殊に僞りも多く。また神の道の妨となることも多く有るが中に。かの宗では智識と呼れたる。日遠と云僧のあらはしたる。神佛冥應論と云がある。此れは古くよりある所の兩部神道に效つて。日蓮宗の旨と。神の道の趣きとを兩部習合して。妄說たらたらなることを書たるもので。其中にをかしいことがあるは。中國の相國の園太暦第九曰。文永元年十一月廿一日。雪降。頃日日蓮上人詣伊勢内宮神拜之時。從神殿而有異聲。忽現神容有託宣。其神詠曰。契會與。御法乃華乃春登秋。同心得山遠護利氏。上人法流有成就之瑞歸社

之由。今日自渡會延兼許注進。云々。又十一日。建治元年十月十二日。暴風入夜晴。去九日自荒木田信濃守注進而曰。勢陽尾陽之間疫大起。民戶內死者十而八九也。頃日有神託曰。有名日蓮僧來于此國可招之。乃請之令誦法花經疫疾忽消滅。故歸法者數百家。などゝ記して。他宗では。この方の宗旨をそしるけれども。斯の如くやんごとなき和國家の記錄に。しかも兩宮より注進の由を御記しなされ。內外宮の大神宮ともに。吾が祖師をば止んごとなきものに思召す由をいひ立たが。此れはかの行基が僞りの託宣をまねて。かの趣向を盗んだものぢや。いかにも園太曆と云は。中園の太政大臣公賢公の記錄で。すなはち中園の園と云字と。太政大臣の太の字とを取て。園太曆と名づけられたるもので。世の人が名のみ聞てゐる堂上の記錄ゆゑ。人の知らぬを幸ひに。僞つてかやうのことがあると。此の文を自分が作つて記したものぢや。今はこの書も世に傳はり。間々人も見るものではあるけれども。文永元年より五十年餘り後。應長より。北朝の應安年中までを。ぬき〱に記したる物で。かやうの事共は決してなく。此れらは何に法花宗でも。餘りなる僞りぢや。殊にこの文の內にをかしいことは。內宮の禰宜衆は荒木田氏外宮の禰宜衆は度會氏ぢやものを。取ちがへて書たも。かやうな巧みをするにしては文盲なことぢや。とかく日蓮が生涯の事實に名の高きことどもは辰の口の難などを。始めとして。大かたは古いことをぬすんで造り替たもので。諸宗の中でも。第一文盲な癖に。氣ばかり强く。神をば三十番神などと云て日每に法花經の番をするなどゝ。畏き妄說を云ひふらして佛の下司の如く。日蓮にさへはるか劣れるさまに。書には記して。見るに覺えず汗をながし。胸の痛むやうなことをするのは。此宗旨ぢや。扨この本地垂跡の妄說は。一と通りに考へたる所では行基をはじめ。御國の法師どもの。世人を其道に引入れんが爲に。思ひ付て新たに始めたることの如く思はるゝなれども。これも其の根ざしはけしからず古いことで。元來は釋迦の申出したることぢや。夫はこのまゝ佛道の大意のみぎりにも申す通り。元來佛法は釋迦のはじめて考へ作りたる事なれば。一と通りの事では其の國人も承知いたさぬ故。まづ過

去の七佛と云を立て。又己からして久遠劫と申て。兜率天と云天かぎりもなく遠きまへから成佛して。衆生濟度の爲に居たる。善賢菩薩と云た佛なるが。この世に出たるに今の身すなはち釋迦と垂跡して。其道を弘めたる所が。其後の僧ども由をいつはつて。其を受て。ます〳〵本地垂跡の妄説が委しく相成り。夫より佛法漢土へ渡つたる所が。からには元來儒者がさなへて。世々の王ども〻。それを用ふる顔にもてなしをる。彼の聖人の道。即儒道が一ぱいに國の云ひぐさと成てをる。また道士と云もの。此はこの間も申す通り。彼國の古へより。神仙の道を書き傳へたりと云ふ。老子などの書を元として。道を立る者がある。これを道家の學と申すぢや。かくの如く漢土には。元より儒者と道士とが有て。とかく佛法を拒みいやしめる故。佛者どもが思ひつきて。儒者の本尊とする孔子。また孔子第一の弟子と後世にも尊ぶ所の顔回。また道士の本尊とする老子を。その本地は天竺の菩薩で。則釋迦の弟子なるが。かららへ生れて。その地相應の道を説たるものぢやと云て。其事が天竺より渡つたる佛經に 釋迦が既に云

ひおいたる。淸淨法行經。また冢薫因緣經。などいふ梵經を翻譯するとき。其いひぐさと爲べき語を書加へて世にひろめ。大きに儒者と道士の鼻を挫いだものぢや。此れにたまげて。儒者も道士も佛法に歸依した者少からず。また其以下の者は。なほこれには驚いて。佛信心に成たと申すことで。其文は。先年かき披をしておいたが。閻浮提中有ニ振旦國一我遣ニ三聖在レ中化ニ導人民一儒童菩薩彼稱ニ老子一伽葉菩薩彼稱ニ孔子一月光菩薩彼稱ニ顔回一とあるだか。これ唐でも本地垂跡の說を以て。其世の僧どもが。儒者と道士とを押付んが爲に。致したる奸曲で。年代をおして其實の所を糺し見れば。老子は釋迦よりも大きに先の人。孔子は釋迦と同じ時代の人で。たゞ釋迦よりは七年後に死たるばかりの違ひぢや。後にはこの僞りを。あちらの儒者の。劉學士と云者に引むくられて。僧も大きに恥をかき。其後はかの經を僞經の部に收めてはあるけれども。また何ぞと云と。漢土大和の僧どもが。引言に云ひたがることぢや。さればこの本地垂跡のことは。御國の古き僧どもの始めて。致したことでもなく。元來は釋迦が始めて。か

らの僧が夫をまね。又それを御國の僧がまねたものぢや。この間も申す通り。かの司馬達等がはじめて渡り來て。佛道を行つたる時分に。御國人たれ一人信ずる者なく。異域の神を祭るとて。皆あざめいやしめ。其の後朝廷へ貢ぎ奉つたるをりなども。帝にも御定めかねあそばし。守屋の大連。勝海の連などは。これを拒みたるなどを思ふに。下々では殊更に。外國の神を祭るなどをば。心ならぬことに思ひ。我國の神をこそと思ふ者の。さすがに多かッたと見える。なほ思ひ合さるゝことのあるは。書紀の孝徳天皇元年七月の所に。大臣阿部倉梯麻呂、蘇我石川麻呂の二人に詔が有て。大夫等また八十伴の歴々等に。民を悦ばしむるの路はいかにと御問ませ遊ばしたる所が。二人の大臣かしこまつて。歷く其事を。百八十の造等に問ひ合されたる所が。皆が申すには。先以。祭ニ鎮神祇一然後應レ議ニ政事一と申す故。その由を天皇へ申上られたる所が。その日直に倭漢直比羅夫を尾張の國に遣はされ。又忌部の首子麻呂を美濃の國に遣はされて。神の幣を御供へなされたとある。此事をよく思ふが宜い。是は佛法渡つて以來。九十五六年後の事だが。聖德太子や馬子などが。あのやうに騷ぎ立て。佛法を弘めたなれども。世に普く信ずることはさておき。朝廷に仕へ奉る人々ですら。信ずる人が少かッたる故。この時かく御問ひなされたるに。大夫たち八十伴の造等が口を揃へて。天の下の御民を悦ばさんとするには。先第一に天つ神國つ神を御祭りなされ。御政事を御議り遊ばす時は。天の下の大御民が悦びますると申上られた事ぢや。聖德太子の御憲法に。篤敬ニ三寶一三寶者。四生之終歸。萬國之極宗也。など御記しなされ。嚴くきめつけて。天下の人に。普く佛法を信じさせんとなされたなれども。さうはいかなんだことゝ見える。是は。さすがに神國の人とて。有がたく。涙さへにこぼれる程のことぢや。川柳點に。「その當座奈良の佛も御氣苦勞。」また「神國のひさしを借りて大伽藍。」とも云た通り。餘り世に信じてもない所へ。その庇をかりて立られたこと故。もしひよッと。こわされもしやうか。燒れもしやうかとさぞ氣苦勞で有りましたらう。去ながらとう〳〵庇を借りて。おも屋を取らんとするほどの勢ひまでに。成をッたぢやに依て。

辨じねばならぬこと。これに付ても。守屋の佛法を拒まれたること。何に尤なることではないかな。凡て古書を讀むには。かやうのことをば。目をむき出してよく讀み。前後を考ふべきことぢや。扨この孝德天皇の元年から。聖武天皇の十三年。東大寺の大佛を御建立なされたる年までは。是また九十六七年になること故。またよほど弘まりは致したらうなれども。猶いまだ信ずる者の少かつたる故。さばかり佛法に御惑ひあそばされたる聖武天皇でも。わが神の御國へ佛法を弘むることは。神の御心のいかに有らんと御心安からず思し召て。大御神へ勅使が御立あそばしなども成されたることゝ見える。されば下下は況て信ずる者が少かつたで有らうさ。そこで行基法師が思ひつき。とても佛法ばかりを。其儘に弘めんとしては。普くは人が信せぬに依て。諸越にある本地垂跡のためしを。こゝに手本として。神を引込み朝廷を欺き。畏くも大御神の御詔ありしと僞つて。けがらはしきことを巧み出したと見ゆる。諸越の書にも。僞をうらんとする者は。必その眞をかりると云たは。かやうのことであらう。さて此とき御造らせなされたる佛は。續日本紀に盧舍那と有て。此は翻譯名義集の通別三身といふ篇に見えて。盧舍那此云光明徧照とも。また翻爲淨滿とも見え。また毘盧舍那は同篇に。此云徧一切處と有て。この二つ共に。なべての佛のうへに云ことぢや。それ故に名義集に。通貫諸佛とある。されば行基法師が。僞て奏上たる意も。たゞ佛と神と一體にして隔なく。佛は神の本地ぢやと云心に申上たことゝ見える。また幻術を以て見せ奉つたる御夢のさとし言に。日輪是毘盧舍那也と云たのは。この聖武天皇の御世あたりは。まだ／＼世が古かッたる故に。世の人が正直に。神代の事實を信じて。今日のあたり拜み奉る日輪は。すなはち伊勢の大御神ぢやと心得てをるに依て。日輪是毘盧舍那也と云て。大御神も本地は佛だと云の心ぢや。さて名義集に依て。盧舍那又毘盧舍那と云わけを。考へ見たる所が。右のごとくで。これが則ち正說ぢや。然るにこゝに心得ぬことは。師の翁も疑ておかれたる如く。御國で古へ盧舍那と云たは。この名義集に記したる義とは異にして。ただ。大きなる佛像を。盧舍那佛とも。また毘盧舍那

佛とも云たもので。此の外にも大佛を盧舍那佛と云たる例はあるが。これは心得ぬことながら。よく思へば。この時分は佛學などのことは。いまだ初々しかつたる故に。こゝろえ過たもので有らう。扨この佛は。天平十七年乙酉の八月より。天平勝寶四年壬辰の年まで。中七年に悉く成就して。かの天竺より渡り來たる菩提。世に謂ゆる婆羅門僧正といふ法師が。釋迦の舍利三十一粒を持來たるを。大佛の白毫に藏めて造つたと云ことぢや。この大佛の緣起に。この事が委しく記して有るが。其あらましを云はゞ。堂の高さ二十間。東西二十八間七尺。南北二十五間四尺。瓦數十三萬三千六百六十四枚とまづ記して。さて始にこの佛を。この御代に御建立あそばしたる訣を委く記して。またこの大佛を鑄るに。赤銅七十三萬九千五百六十斤。白錫一萬二千六百八十斤。水銀五萬八千六百五十石。ねりきがね一萬四百四十六匁。このかねを以て。伊勢太神宮の御告にまかせて鑄たると記して。其長は五丈三尺五寸。御面相一丈六尺。御目のながさ三尺九寸。玉眼一尺六寸。御鼻は二尺五寸。御口は三尺九寸。御耳は三尺五寸。御肩のわたり二丈八尺七寸。御かひなより御うで二丈九尺。御足のうら。一丈三尺。蓮花座の高さ一丈。さしわたし六丈八尺。誠に三國無雙の靈佛也など。例の如く烟のたつほど尊げに書きちらして有るが。こゝに人の氣のつかぬことだが。川柳點と云ものは。とかくよく穴をさがして云もので。其句に「大佛のへのこの寸はかきのこし。と云ひましたが。此はよく氣の付たものぢや。この寸尺を記したならば。さぞ大さうな物で有ませう。扨この時に御造りなされた大佛は。安德天皇の治承四年に。高倉宮の御事あつたる後に。平淸盛公四男。三位重衡卿こゝに攻來て。この院内寺中にこもり居たる軍兵を。退散せしめん爲に。火を放て。この大伽藍を烟となしたぢや。此事も緣起に記して。悲いかな金銅の盧舍那佛の。御ぐしは落て大地にあり。御身はわきて湯の如くになつたと書てある。なんぼ婆羅門が開眼でも。三國無雙の靈像でも。釋迦法師が舍利を入れても。火の神の御荒びには。この通り何のこともなく。びしやびしやと燒て。灰に成てしまふ。こゝらを以ても。神の御權威の畏きことを知るが宜しい。扨この[illegible]

和元年に。俊乘坊重源と云法師が。後白川法皇の勅を受て勧進をいたし。元久二年己卯三月に本の如くこしらへたてたぢや。橘成季の著聞集に。この坊主が兩宮へ參つて。この事を申し通夜いたしたれば。兩宮ともに靈夢の御さとしが有て。白珠を賜はつたと有るが。この白き珠と云は。かの舍利のことを云だが。これも又かの行基法師が。初めの例に效つて。かゝる僞り言を云ふらした物ぢや。さて右に段々申す通りの訣ぢやに依て。この時行基法師がいへる妄言が。則御國に於て。本地垂跡といふことを始めて。神の道をかき暗まし。世人を惑はしたるの始まりぢや。これに付て恐れながら。つらつら思ひまするに。この聖武天皇の。法師どもの爲に御欺かれあそばして。佛法を御信じなされたること。實にこの御世の御事どもを見る毎に。思ひ出るごとに。心を痛むることばかり多き中に。まづ本地垂跡と云ことをも御始めなされて。わが神祇の道を御弱ましなされ。それに乘てかだましき僧ども。この御代には殊に多く。其が中に行基法師。また元昉法師など云をも御寵愛なされ。此奴その御寵愛に誇つて。我儘横行いたすをも御捨おきあそばさるゝのみならず。その御きさき光明皇后の。かれと密通なされて。彼が子をさへに御生みなされたるをも。其儘さし置れ。それのみならずこの法師が惡行を憎んで。御黜けあそばせがしと申上たる藤原廣繼をば。却て罪におとして筑紫へ遣はされた所が。廣繼こゝに於て其いきどほりに堪がたく。兵を聚めて。實はこの元昉を殺さんが爲に。朝廷に射向ひ奉つたぢや。そこで官軍をさし向られて廣繼をば御誅しなされたなれども。この廣繼が謀叛は。中々以て朝廷を傾け奉らんとて致したる事ではない。たゞ惡僧どもを退治せんとの事ぢや。扨此後には。ますます元昉はゞかりなく惡行を爲たる故。天皇にも。よくよくに思召したると見えて。筑紫の觀音寺の別當と云に。左遷仰せ付られたぢや。こゝに氣味よきことは。元昉その寺に入らんとする時。忽然に大雷なり出して。この法師が首を抜て門前にすて置たが。これは廣繼の靈魂のいたしたる事で。天平十八年六月のことぢや。この後もしばしば廣繼の靈魂が祟りをなしたる故。これは神に御祭りなされて。すなはち京の御靈の社の中に一神となさ

れた。また筑紫肥前國松浦郡の板櫃社と云も。この廣繼の社ぢや。さて光明皇后の御生みなされたる元昉が子は。日本後紀に僧正善珠は光明子之孽子也とある。孽子と云は。上たる人の。下なる者と。かやうのいたづらをして拵へた子のことぢや。

また天平勝寶元年には。東大寺へ行幸あそばし。かの盧舍那佛の像前へ勿體なくも。北面臣下の御座をあそばし。そのさゝげられたる詔の御文に。三寶乃奴止仕奉流天皇我命。盧舍那像能大前仁奏賜布止奏。などやうに御したゝめあそばしたるなど。いかに禍神に御まじこりなされたることかと。いともいとも畏いことぢや。鈴の屋の翁の歴朝詔詞解に。この三寶乃奴止仕奉流。とある御文へ爾をいれられて。そも〳〵此の天皇の。殊に佛法を深く信じ尊み給ひし御事は。申すも更なる中に。是らの御言は。天津神の御子の命の。挂ても詔り給ふべき御言とはおほえず。餘りに淺ましく悲しくて。いとゆゝしく畏ければ今は訓を缺きぬ。心あらん人は。このはじめの八字をば。目をふたぎて過すべくなむ。と云おかれたは。實に尤なることぢや。また甲賀寺の盧舍那佛御建立のみぎりは。大御手づから其繩を御引あそばし。孝謙天皇へ御位を御讓り遊ばして後。勝蔓といふ法師名なんどを御つけあそばし。御位に在らせられたる間の御行狀。すべての御わざも大かたは佛わざのやうであり。また此御代に始めて疱瘡の病が御國へ傳はり。又御代々々に。未だきゝも及ばぬ程の疫病などはやつて。更に佛法を御信じあそばしたる驗はなく。惡きことのみ多かつたぢや。扨この御心御わざが。次の御代迄に及んで。孝謙天皇の御行狀の。恐れながら亂りがはしきこと。申上奉るも胸いたむ程のことで。中にも弓削道鏡の髮長奴が。畏くもにくゝも朝廷に跋扈いたし。剩へに天日嗣の大御位をさへに。伺ひ奉たる程のことに至つたるも。恐れながら聖武天皇の御遺風より起つたることで。其元はといへば。みな佛の道をいたく御信じあそばしたる御心得違ひより來れることで。これは事實をよく考へ見るときは。明らかに知られることぢや。仍て今日序だによつて。孝謙天皇の御代のあらまし。その御不行跡のことまで。道鏡法師が惡事の始末。ならびに清麻呂の大忠節のことを。あら〳〵申さう

から。さツくりと開れて。佛の道のいま〳〵しきもので。國の害となるものなることを心得らるゝがよろしい。それはまづ聖武天皇は。天平勝寶元年と云に。御位を孝謙天皇に御譲りなされて。入道あそばされ。勝寶と申上る。さて孝謙天皇と申すは。聖武天皇の御姫御子に坐て。三十二に御なりあそばさるる時。御位に御即あそばし。例の佛道に御惑ひなされたることは申すまでもなく。惠美押勝と云者を御寵愛あそばして。御婬犯の御行ひまし〳〵。これにも種々申すべきことはあれどそれはさしおき。十一年目に御位をば。日本紀を御撰びなされたる舍人親王の御子。大炊の王と申すに御譲りなされて。御飾を御おろし遊ばしたが。この大炊天皇の御代。天平寶字五年よりして。かの道鏡を御寵愛なされ始めたぢや。抑この道鏡と云は。俗姓は弓削連で。河内の國の人で。佛經も少かおぼえたと云くらゐの事で有たが。坐禪のことを得たる由の聞えが有たる故。召れて内道場と云にさし置せられて。禪師と云になされたぢや。所が孝謙天皇。いさゝか御惱にあらせられて。道鏡法師はその御看病に侍たるときに。始めて寵幸を被つたぢや。時に大炊天皇は。その御不行跡を御歎きあそばして。じば〳〵御諫めなさるゝ所が御きゝ入れなく。是より御中睦しからず。天平神護元年と云に。大炊天皇の御位をおろして。淡路の國に御流しなされ。重ねて御位に御即き遊ばした。此再び御位に御つきあそばして以來の。唐様の御名をば。稱德天皇と申上る。また世に淡路廢帝と申すは。この御流され遊ばしたる大炊天皇の御事ぢや。こゝらにも種々わけがあれどもそれはさしおき。是よります〳〵道鏡を御寵愛さかんに成て。太政大臣禪師と云になされ。この者坊主で居て太政大臣ぢや。又しばらくして法王と云になされて。此時には。諸の臣等伴造だちにも。みな拜を御させなされて。天皇と同じことに敬はしめられ。尤もこの者の兄弟一門をも。盡く高き位を賜つたぢや。さて目のよる所へ玉がよるとか云が如く。同じ不屆なものもあるもので。山階寺の基眞と云妖僧が有て。これはかの幻術をよく致して。佛法にことよせくさ〴〵怪しきわざを致し。道鏡はこれを朝廷に近づけて。共に逆威をふるひ。その横行いはん方なく。御國史に。基

眞が怒を作す者は。卿大夫といへども。したゝかなる目にあへるよし見え。道路畏之避ること如逃虎とあるから。まして道鏡がいきほひ思ひやらるゝぢや。御國史に。天皇尤崇佛法云々。道鏡擅權輕輿力役務繕伽藍公私彫喪國用不足。政刑日峻。殺戮妄加と見え。又た天皇不悆時。道鏡因播籍恩私勢振内外自廢帝黜宗室有重望者多羅非辜日嗣之位遂且絶矣。道鏡自以寵愛隆渥日夜僥倖非望とあるなどを考ふべきことぢや。こゝに筑紫太宰主神習宜阿曾麻呂といふ者。道鏡に媚事へて。宇佐宮の神託と矯て言上るやうは。道鏡をして皇位に即かしめ給はゞ。天下太平ならんと申上たぢや。道鏡がこれを聞て大きに喜んで。實は行基法師めが。神託と僞てあてたに依て。己もそれにならひ。時至れりと頼しく思つて居る。このとき天皇は。和氣清麻呂を御床近く御召なされて勅あるには。昨夜夢に人が來て。八幡神の使と稱して云へるは奏すべきことの有に依て。そちが姉法均を遣はすやうにとのことなるが。法均は女の身の。遠路に堪がたからうに依て。そちが代りに行て。神の

敎を承はツて參れと仰せられたぢや。この和氣の淸麻呂と申すは。その性質はなはだ直なる人で。又その姉法均と云は。もとの名を廣虫と云て。若き時より孝謙天皇の御側に召仕はれ。天皇の御飾を御おろしなされたる時に。尼と成て天皇の御弟子と成た人で。尼ながら淸麻呂の姉とて。至つてよき人で。大きに善行のある人ぢや。さて淸麻告は。右の御言を畏て。すぐに筑紫へ立んとする時に。道鏡が云には。大神の使を請ひ給ふ故は。わが即位の事を告んとてなり。汝その心して返り言を申せ。そのかへり言に依ては。我即位の上は汝を大臣の位にせんと云ひふくめたぢや。此時より先に。路眞人豊永と云人が有て。これは元來道鏡が爲には師で有たが。道鏡が威勢さかんにして。皇位を伺ふ狀をさとりて。或時淸麻呂にさゝやいで云には。道鏡もし天位に登らば。吾何の面目あつて彼が如き者に臣となり仕ふべきぞ。その時は吾れ同志の人々と共に。諸越の伯夷と云ものゝ。武王が惡をいやしみて。餓死したる如くならんと云たれば。淸麻呂は深く其の言を。尤もなることに思つて。常に命を致しても志を立んと心がけて

居たと云ことぢや。されば此の道鏡がいひ付たる時は。何とも云はず。うけた顔で居られたらうけれども。心の中には。川柳點に。「へのこめが冊位どこかとのごこやと」。と云へる如く。かたはら痛く思はれたことであらう。さて清麻呂は。八幡の神宮に詣でたる所が。八幡の大御神の御さとし言に。我國家開闢以來。君臣定矣。以臣爲君未之有也。天之日嗣必立皇緒。無道之人宜早掃除。ときびしく御さとしあそばしたぢや。此時清麻呂また謹で祈て申上らるゝには。今大御神の教へ給ふ所は。實に國家の大事にて候へば。一と通りの御さとしにては。畏き御事ながら。信用もいたし難きやうに候へば。願はくは神異を示し給はれかしと申したる時に。大御神は忽然として。その御形を御現じあそばしたるを見奉れば。その御丈は三丈ばかり。大御光り滿月の如くで有たと申すことぢや。其の時清麻呂はその尊容を拜し奉て。魂を消し度を失つて。仰ぎ見奉ること能はなんだと有るが。それはさうであつたらう。爰に大神かさねての御託宣に。我國家君臣分定。而道鏡悖逆無道。輙望神器。是以神靈震怒不聽其祈。汝歸如吾言奏之。天之日嗣必續皇緒。汝勿懼道鏡之怨。吾必相濟。と御さとしなされたぢや。抑この御さとし言は。このときの大事を御定めなされたるばかりでなく。萬世にわたッて。朝廷を覬覦やうなたぶれ奴を取挫ぐべき。甚も〳〵有難き御言ぢやに依て。各々つゝしんで心得らるゝが宜しい。こゝに於て清麻呂はその御託宣を畏み承つて。京に歸り神勅のまに〳〵奏上たる所が。天皇には。定めて道鏡を位に即けよと御諭しがあらうと。思召したるに變つて。かくの如き御さとし故。これは清麻呂が。御託宣を僞て申上ると思召したなれども。まさか誅するにも忍びずおはしましたるに。道鏡は目をむき出し大きに怒て。清麻呂の官位をはいで庶人となし。足の筋を切て立れぬやうにいたし。大隅の國へ流して。名をも穢麻呂とつけ。また姉法均をも還俗せしめて。是も名を別部の狹虫とつけて。備後の國に流し。猶清麻呂をば途中へ人を廻して殺さんとしたる時に。雷雨晦暝とあるから。雷なり大降りてまッくらと云やうにあれたと見える。其時に假にして勅使が來て。その途中に於て殺すことを

ば。辛うじて免されたぢや。これが則ち八幡の大御神の御助けぢや。又これは大隅の國へ行かるゝ途中にてのことなるに。既に危く今や殺されんとする時に。勅使の參たる所を見れば。これは朝廷にも。くさ〴〵大御神の神威を御現じなされたる故。それに驚いて。早馬の勅使を遣はされて。殺す事をば御免しなされたには相違ない事ぢや。是につけて日蓮法師が傳に。かの俗にいふ辰の口の難とやらの時。日蓮は縛られて。鎌倉の八幡の前を通りながら。大きなる聲をして云には。八幡大神よく聞べし。むかし釋迦牟尼佛の法華經を說き給へる時。三千大千世界の鬼神の寄て。幾萬歲も法華經を守らうと約したとあるが。八幡の神もその佛勅を聞いたであらうが。いかに此の日蓮は。第一の法花の行者なるに。今かゝる縲目に逢て。刑せられんとするを見つゝ居る事。佛勅に背くの罪。いかにして遁れんと云て。扨辰の口で。すでに首を斬られんとする時。いみじき雷なり。風雨のあれで。一丈ばかりの滿月の如き光物が飛わたり。振上たる太刀も折れなんどしたるに。また鎌倉の殿中に於ても。右の如くで有たに依て。今や斬られんとする所へ。早馬の使が來て。日蓮をゆるしたることゝ。全く八幡の神の。日蓮にきめられて。其理に伏し。佛勅とやらを恐れて守護したのぢやとあるが。例の太刀のをれたと云は。この間いふ通り。主馬の判官盛久が古事をぬすみ。八幡の大神の御救ひなされたと云ことは。全くこゝの淸麻呂の古事を盜んだものぢや。また古き一說に。大神の淸麻呂に。御形を現はして御さとしなされたる時の御詔に。道鏡天位を貪らんとして。多くの邪神に幣を捧げて祈る故に。善惡の二神に合戰が出來て。その邪神の軍がつよく。正き神の軍が弱くて。我れ已に困羸て當りがたく。仰で佛力を憑で。皇運を扶け護ることぢやに依て。汝還て此由を奏して。佛像を造り伽藍を立て佛經を誦せよ。しかしたならば邪神を退治して國家安らかならんと御誨し有たなどゝ有て。これは道春の神社考などにも擧ておかれましたが。例の坊主どもの云ひそへたる妄說ぢや。かやうの妄說を道春の神社考に擧らるゝと云は心得違ひな事ぢや。いかで八幡の神のかゝる事の御さとし有ませうぞ。この道鏡がかゝる逆心を企てたも。元をいへば。佛

道を御信じなされたるから起つたることを。大御神には。とく知し看し坐ますことで。それ故清麻呂に有がたき御詔もあり。清麻呂の命をも御救ひなされたものぢや。

扨清麻呂は。大隅の國へ流されて居られたる時に。參議右大辨藤原百川と云人。その忠節を感んで。自らの封戸の内二十戸を分て。清麻呂の配所へ贈られたと云ことぢや。扨これより三年のち。寶龜元年八月に。稱德天皇は御隱れあそばして。次に御立あそばしたるが。光仁天皇と申上る。かくて稱德天皇を葬奉て。道鏡法師を其陵の下にいほりして仕へ奉らしめ給ひ。扨彼の法王の位も何も御取上なされて。仰せ出さるゝには。道鏡法師久しく逆心をいだいて居たる故。重き刑にも處せらるべきなれども。先帝の厚く御惠みなされたる者ぢやに依て。その事なく。下野の國藥師寺を造る。別當になさるゝとの事で。其日すぐに追立て。かの國へ遣はされ。また道鏡が弟また甥などの緣上つて居たるをも。土佐の國に御流しなされたぢや。鈴の屋の翁こゝらの事共を記して。凡て此の天皇の御世のほどは。禍津日神の御心の。いかに荒びにあらび坐けん。類ひなき禍事ども多く。殊に道鏡が事は。神代より類ひなく。云ん方もなき大禍事にぞ有ける。かゝる太じき亂れは。誠に三寶の驗。四大天王の不可思議威神の力の守護にこそは有りけめと。甚も甚もゆゝしく淺ましくなむ。とも。又この道鏡は。古へ今に類もなきおふけなき惡き穢き奴にしあれば。極刑に行ひて。その屍を寸々に屠ちらしても。なほ飽足るまじきに。高野の天皇世に坐しゝほどは。少かも下より議らふ事なく。天皇の御心に從ひ奉りて。崩坐て後に至りてすら。宥てかくいと輕く行ひ給へるは。偏へに。先きの天皇を重みし奉り給ひて。深く顧みおぼしめしたる大御心にて。かにもかくにも天皇の御しわざを。傍よりはかり奉る事なく。畏み從ひ奉り。崩り坐ての後迄も。猶かく有けるは。古への正しき道の。さすがに遺れる御しわざにて。最も〳〵有がたき御事也かし。と云おかれましたが。一々的當の論ぢや。實にかやうの禍事どもは。みな聖武天皇の。深く法師原が説に御惑ひあそばし。佛を御信じなされたるより。起つたることゝもで。阿曾麻呂が。八幡の神の神託

と僞つたも。道鏡と示し合せて。彼行基法師が伊勢の大御神の神託と。僞りを申せるを。御信じ遊ばしたるに根ざしを起し。其手をやらんとの巧みぢや。さて道鏡法師は。これより三年目に死んだが。其死だる時以二庶人一葬レ之と有て。たゞ人のなみに埋めたことぢや。

扨また大隅の國へ流されたる清麻呂をば。光仁天皇御位に御即あそばすと。やがて召返されて。先もとの姓名に復せられ。又その姉法均をも召歸されて。二人とも次々に高き位を賜はッて。御用ひなされ殊に。此の兄弟はなはだ中よく。當時の稱ごとで有たと云ことぢや。然るに清麻呂卿は。道鏡が爲に足の筋を切られたることゆゑ。脚痿て立ことができぬ所を。八幡の神を拜せんとて。輿に乘て出立れたるが。豐前の國宇佐郡楉田村といふ迄行かるゝと。ふしぎなる哉。野猪が三百ばかりも出て來て。路の左右に列て徐に歩み。前駈すること十里ばかりにして。山中に走り入つたぢや。此を見る人。みな大きに異んだといふことぢや。さて御社を拜するの日に至て。にはかに起て歩かるゝことを得たとあるが。さてさて神の御恩賴は有がたきものぢや。始めに汝歸て吾が言ふが如くこれを奏せ。道鏡が怒をおそるゝことなかれ。吾れ必す相濟はんと御さとしあそばしたるに違はぬことぢや。此時また大神の御さとし有て。神封の綿。八萬餘屯を賜はられたが。清麻呂卿は。すなはち其賜ものを。大宮司より以下。國中の百姓に頒ち與へて。はじめ參詣の時は。輿に駕て往れたなれども。歸らるゝをりは。馬を馳せて還られたるを見て。路々の人もこれを見て歎じ異み。神の御惠みの厚き事を。恐れ入つたと云ことぢや。この後桓武天皇の延曆十八年二月に薨せられたが此人のことにつけては。申すべきことしたゝかあれども。右申すことゞもは。たゞ聖武天皇の佛法を御信じなされて。兩部神道のもとゐを御始めなされたる。その弊を申さんとて。因に申すこと故。外のことゞもは云まいぢや。さて〳〵此清麻呂卿と申す方は。道鏡がさばかりの威權に媚び諂ふことなく。その怒りをおそれず。身を捨て神の敎へのまゝに。かへりごと奏されたる功の世に優れて。後の御世々々になりても。即位のはじめ宇佐の御使には。必すこの和氣氏の人

を遣す例とさへ成た事ぢや。かやうの太じき功の尊さに。講説は横へ入るやうなれども。かく具さに申すぢや。實に此時清麻呂卿の。大倭心のなかつたならば。何やうの枉事が起らうも知れなんだ所を。この卿の大倭魂と。有がたくも尊くも。八幡の神の神勅に。我國は。天地の始めよりこのかた。君と臣と定まれり。臣を以て君とすることと之なしと詔へるとに其事止んで。道鏡が巧みも水の泡と成たるは。しかすがに神の御國の有難くも。直日神の坐すが故でござる。

さて光仁天皇の御次が。桓武天皇と申上る。この御代の延暦三甲子の年十月に。大和の奈良より。今の京に都を御遷しあそばして。同く七年に日枝の山に延暦寺を御建立あそばしたが。時の年號に依て延暦寺と號られたるものぢや。抑此日吉山と申すは。古事記に初めて其名が見えて。かしこに坐す神は。速須佐之男神の御孫の。大山咋神ぢや。それは速須佐之男神が。大山津見神の御女に坐す。神大市比賣神と申すに御娶あそばして。御生みなされたる神に。大年神と申すがおはし坐す。これは稻穀の事に大きに御功の有たる神ゆゑ。かやうに名を御負ひあそばしたので。諸國に大歳神社とあるが。多くはこの神に坐し。朝廷に於ても。年々重く御祭あそばさるゝことで。俗にも年神樣と申すは。この御神のことぢや。但し暦の首めに記しある。八將神とか申す中にある。大歳とは違ふに依て。思ひまがへぬが宜い。扨此大年の神が。天知迦流美豆比賣神と申すに御合あそばして。御生みなされたるが。奥津比古神。奥津比賣神と申て。すなはち本文に。此者諸人以拜竈神也と有て。この二柱の神は。諸民にかまどを立て。爨炊く事を御敎へあそばしたる神に坐す故。神代よりいたして。家毎に祭り奉つたることぢや。それ故本文に。かやう御記しなされたもので。尤も朝廷に於ても大炊寮と申て。天皇の御膳を御爨きなさるゝ所に。重く御祭りあそばさるゝことぢや。扨この天皇の宮に御祭りなさるゝ所は。延喜式に竈神四座と有て。これに火產靈神と。庭火神とを加へて。御祭りなされたもので。此は火神の御靈を賜はつて物は成ること故。いかにもかやう有るべきことぢや。さて此火產靈神は。御母伊邪那美神の惡子と仰せられたる

如く。御心あらくおはす神におはし坐す故。古くも荒神と申たと見える。紀伊の國の玉置山と云所に。荒神祭神社と云が有て。是は火の神を祭つたると。信景が鹽尻の記にあるが。これらも證とすべき事ぢや。

さて俗にかまどの神を荒神と云て。あたまの三つあるをかしな物を祭る事は。火の神を荒神と申すにつけて。兩部習合はじまつてこのかた。天竺の障礙神と云物の。一名を荒神と云て。これは一切の障礙を爲す物ぢやと云事で。もろ／＼修法の時に。まづ此神を祈りなごめるが。密家の秘法で。是を祭る法を。荒神供と云ふ。それを字の同じきまゝに。竈神に附會したものぢや。この天竺の障礙神と云ものは。いはゆる大聖歡喜天（天竺にては毘那夜伽と云ふ。）の本身ぢやと云ことで。一向に竈のことには與からぬもので。このことは信景が粗考へたる說に。篤胤が辨を加へて申すのぢや。さればわが古の道を信ずる人は。あのやうなをかしな物をば早く拂ひ捨て。古へざまの正き神に祭り替るが宜しい。この間も申す通り。天竺の神ぢやの菩薩ぢやのと云たぐひは。大かたは無き物なるを。後世の坊主どもが。杜撰にこしらへた物ぢや。然るにそれを祭りなんどもして取はやすと。そこへかの妖々しきこつぱ神どもが。よいかと思ひ寄そつて。くさ／″＼祟りがましきことなどをして。位そばへるものぢやぞ。

扨この奧津比古奧津比賣の神の次に。御生れなされたるが。大山咋神と申てまたの御名を。山末之大主神とも申すぢや。すなはち本文に。此神者坐二淡海國之日枝山一と有て。神代より彼の山に坐し。神名式に。近江の國滋賀の郡日吉神社。名神大と有て。やんごとなき大社の神樣で。尤もとはこの神一座まし／＼た事ぢや。それへこの桓武天皇の御代に。すなはち此國より出たる法師最澄が申上て。延曆寺を御建立なされたぢや。さて後世には比叡山と云へば。延曆寺のことゝのみ心得。又日吉をひよしと唱へて。さんと別のやうに成たが。古へは日吉と書ても。唱へはやはりひえで。ひよしと云たることは更にない。それは住吉も古へはすみのえと云て。すみよしと云はなかつたと同じことぢや。又最澄法師が。此の山に佛寺を建て。此神をば。その寺の守り神の如くいひなし。山王と云名をさへに負せ奉つたるに依て今

の世に至ては。其ひよしと云名さへ。人は知らぬやうになり。たゞ山王とのみ申すぢや。かくて最澄法師が。この御山に寺を建て。大山咋神を山王と申し奉つたる。その妄説はどうぢやと申すに。最澄ある時小比叡の峯に上つたる時に。日輪の如き三つの光が見えるからよく見れば。其中に釋迦と藥師と彌陀の像が。ありありと現はれたる故。其名を問たれば。答へて云には。竪の三點に横の一點を加へ。横の三點に竪の一點を添ふると。言ひ畢つて。その光りが空に昇つて去たる故。その言を文字の上に考へて見ると。竪の三點に横の一點を加ふれば。山の字となり。横の三點に。竪の一點を添ふれば王の字となる。こゝに於てつらつら思へば。高大にして動かざるは山也。また天地人の三才を經緯する者は王ぢやに依て。この山を山王と號けたと云ことで。まづこの神に。釋迦。彌陀。藥師といふ本地をこしらへたぢや。但この妄説には異説もあれど。最澄が妄説は。これが本當の説と見える。さんとこの竪の三點横の三點などいふ偽り言は。謂ゆるなぞなぞで。彼のあさつてあたごまゐりと云なぞを。たまごと解き。タイコイヌイテバナカニオクと云なぞを。たばこと解くなど云類ひと同じことで。若輩な説ぢや。また釋迦や阿彌陀が。天竺から來て。漢字の謎をかけて行くこともない。なんとか言ひやうも有さうなものだが。これで最澄が學問のほども知らるゝことぢや。扨これより後は。妄説のしやうが巧者になつて。こゝに佛寺を建べき本の由よしをも造て申したには。昔人壽二萬歳の時。釋迦が都率天に住して。大海を見たる所が。波浪に梵音が聞えるから。それを求て御國へ來た所が。其梵音は。一本の蘆が海上に浮んで。それに止つたと云ふ事ぢや。時に其蘆が化して。一つの島と成て。それが即ち比叡山の。大宮權現垂跡の地ぢや。其後人壽百歳の時に。釋迦がまた天竺より御國に來たる所が。これが鵜草葺不合命の御時で。近江の國志賀の浦に。魚を釣る翁が居たるから。釋迦は其翁に。吾此所に佛法を弘めんと思ふと云たれば。その翁が云には我は。人壽六千歳の時よりこの所の地主で。こゝの湖水の七度變枯して。桑田となるを見たるほどの者ぢやもし。此所が佛法世界と成たならば。吾が釣をする處がなくなる故。弘めさすこと

はならぬと云から。釋迦は空しく歸らんとする所へ。東方より大宮權現飛來て。吾は人壽二萬歳の時より。この所へ地主で居るに。かの翁はいまだ吾あることを知らぬ故に。そのやうに云なれども。吾何ぞ此地を惜まん。今釋尊に獻るほどに。宜しく佛法流布の山とせられよと相約して。西と東とに別れて去たが。この翁は白鬚神で有つたと。此謂れに依て。延暦寺を日吉の山に建てたるので。佛と佛と。かねて約しある事ぢやと云て。かの山に藥師を本尊とするも。こゝから來たことで。みな跡形もなき妄説ぢや。扨この御神は。延喜の臨時祭式に。日吉神社一座。と有て。一柱に坐すを。また外に六社を並べ立て。日吉七社となした。それは謂ゆる。大宮。二宮。聖眞子。八王子。客人宮。十禪師。三宮。これを日吉七社といふ。實はこの坊主が致したることで。古へにはなき物ぢや。それ故延喜式は。この後に御撰みなされたる御書ながら。この七社の事は御取りなさらず。右申す如く古へのまゝに。日吉神社一座と御記しなされたものぢや。扨斯の如く。七社を並べ立て混雜したる故。今はどれがどうで。大山咋神は何れの御社か。さッぱり分らぬやうに成り。また後に中七社。下七社と云をも立て。これを合せて二十一社と云。是より倍々わからなく致してしまつたぢや。師の翁が是を歎かれて。抑二十一社皆佛ざまのみにて。宗と有べき古への神社は。其中に何れにかと。たどらるゝばかり埋れ賜ひぬるは。最も淺ましきわざなりけり。凡て此の神社の事は。後の書どもに。くさ〲云へることゞも多けれども。みな延暦寺に因て。佛めきたることのみなれば。取るに足らずと云ひおかれましたが。實にさることで。いま〲しきことの限りぢやはい。

さて最澄は。桓武天皇の延暦二十一年に。諸越へ渡つて。天臺の宗旨を受て。同く二十四年にかへり來て後に。ます〲神佛一致に混雜して。其弟子慈覺など。それを次々に演弘めて。凡ての神に本地を立て。本地が佛で。權に神と垂跡して現はれたると云の義を以て。權現と云號を始め。日吉の神をも山王權現にしてしまッたぢや。また天照大御神。八幡神。加茂神。松尾神。などを始め。名たゝる神々を撰び出して。これに一々の本地をつけ。月の三十日を。

まはり持に交代して。法花經を守護し番をするなどと云て。これを三十番神と云ぢや。これは或人の云へる如く。御國の神々。寄合辻番の日雇を見たやうに。今日は某が當番。明日は誰が非番と定め。非番の日は何事が出來てもかまはぬと云やうな。鄙劣なる番わりをなされたと云ことは。とんとない。今の世の人は。この三十番神と云を。日蓮がしたる事と思つて居るが。實は天臺宗でいたしたのを。日蓮がその趣向を盗んだもので。こゝが謂ゆる日蓮宗は。天臺宗のあぶら虫なる所ぢや。

また八幡の大神を菩薩と申すやうに成たのも。この最澄が致したることで。則かれらが記したる書に。かの七社の中なる聖眞子と云を阿彌陀として。八幡大菩薩之身分也とあり。又この延暦二年五月に。八幡大神の託宣なされて。我は無量劫よりこのかた。善巧方便を修して。諸の衆生を濟度す。我が名をば。大自在王菩薩と云と。御さとしなされたと云ことが見え。又弘仁五年の春。最澄が宇佐八幡神宮に詣でて。法花經を講じたる時に。八幡の神の宣ふには。法の味を嘗め。久しく年を歴たるに。今その妙なる言を聞て。悦ばしく思ふが。その德に報いんとするに。何もとらする物がないから。我に法衣があるに依て。之を以て其志を表はさんと御さとし有て。神殿を啓き。紫の衣二領を推出して賜はつたるがそれが。今に延暦寺に在るなどゝ。あつかましく記しあるを見れば。この法師がさる妄說を云て。其衣をとり出し。人を欺いたと見ゆる。さて此神を。本地は阿彌陀ぢやの。實は菩薩ぢやのと云につけて。八幡の放生會と云ことを始めて。これも神の御さとしといひ立たものぢや。此事中むかしよりして。朝廷の重き神わざに成てをるから。何とも申にくきことながら。これは元來最勝王經と云佛經に。池の魚を放て。大きに功德になると云ことのあるより根ざしたことで。八月十五日に。石淸水八幡宮に於て有ることぢや。まづ八月一日から十五日まで。人を諸方に遣はされて。數萬の魚を御買集めなされて。これを山下の小河に放ち。十五日の早朝に。其供養として神輿を山下に降し奉る。これは八幡の神の放たる魚どもを。御供養なさるゝと云趣意ぢや。祠官の人々禮服をうるはしく裝ひ。伶人は舞樂を奏し。甚だ嚴

なることで。さて法師どもは經をよみ。その法會を以て。神輿は山に御還りなさる。その時は祠官たちは禮服を脱ぎ。淨衣と云て白き服に著かへ。法師ども共に白き杖をつき。草鞋をはくだが。これは。葬儀に準へたものだと云ことぢや。一條兼良公の世諺問答と云ものに。放生のいみじきことは。最勝王經長者子流水品の。池魚のことよりおこるにや。誠に生るを放つ御誓ひ。有がたかりし事どもなり。早旦に井のはなを神輿くだらせ給ふ時は。行幸の儀式にて。音樂の聲雲をうごかし。衣冠のよそほひ日にかゞやけり。其に引かへ還幸の有さまは。神人法師ばらに至るまで白き杖をつきて。かへらぬ道に送り奉る儀式なり。これやこの朝に紅顏ありて世路に誇れども。夕へに白骨となりて郊原に朽ぬること。世の有さまをしめし給ふ。神慮の程はかり難く有がたきことゞもなり。是にて神佛の隔なきを思ふべし。と記しおかれましたが。この兼良公と申すは。今の一條家の御先代で。百三代後花園天皇の御時に。關白職におはして。頗る博識なる御方で。くさ〴〵御著述も有り。また御氣性もいかう高く。すでに或人の方へ行れて。古書を讀とかれたる時に。其床に菅家の像を挂置れたるを見て云れますには。彼れはもと儒家より經上つたるもので。生涯の官も右大臣ぎり。また學べる所も。和漢の學ともに。延喜までの事ならでは知らず。吾は世々攝家で。職は關白となり。また學べる所も。延喜以前は云も更なり。その以下今の世までのことを學んでをる。さすれば彼が像は。吾が上に置べきことでない。と云はれたと云程の御人ながら。その御見識は。生涯やはり兩部で。それ故に著はし置れたる書どもが。盡くこのやうなさまに佛臭く。抹香くさくてたまらぬことゞもぢや。後に入道いたされて。世に一條禪閤と申すは。この御人のことぢや。朝廷よりなさるゝこと故。申すも畏きことながら。實の所は放生會と云ことは。やくたいもないことで。かの川柳點に。「はなすゆゑとりてがあると龜が云ひ。といへる如く。放生と云ことがあるに依て。放しうなぎや。はなし龜を。わざとこらへて賣る者が出來る。則ち石淸水の放生會も。今は前かたに魚を取貯へて。それを御買上になされて放つから。何にもならぬことで。魚や龜の子の爲には。

却つて放生會が恨めしいはずぢや。そこを川柳が云たので。これらは大きにおもしろく。また橋の上や堀のはたで。念佛を云ひながら。放しうなぎをして居る。べらぼうどものさとし草になることぢや。かかる淺ましき事を。八幡の神の御託宣あらうはずがない。殊に還幸の砌は。葬式のかたちにして。歸らぬ道に從り奉る儀式ぢやなどゝ云ことは。耳にふれきくも畏く勿體なく。神を汚し奉るのかぎりぢや。かやうのことゞもを公然と行はるゝやうにいたしたのは。みな法師の輩が上をそゝのかし參らせ。上にも其妄說を御信じあそばしたるからのことで。其はじめをひらいたは。聖武天皇の御代に行基法師と云髮長めがわざで。實に憎く忌々しきことゞもでござる。

俗神道大意二之卷

平篤胤講述　門人等筆記

林道春先生の神社考に。夫本朝者神國也。神武帝已來。相續相承皇緒不絕。是我天神之所授道也。中世佛氏移彼西天之法。變吾俗神道漸廢。而其異端以離我而難立故設左道之說曰。伊弉諾伊弉冉者梵語也。日神者大日也。大日本國故名曰日本國。或其本地佛而垂跡神也。大權同塵。故名曰權現。結緣利物。故曰菩薩。時之王公大人信伏不悟。遂至令神社佛寺混雜而不疑。巫祝沙門同住而共居。嗚呼神在而如亡。神如為神其奈何哉。雖然猶幸有日本書紀。延喜式等之諸書而可以辨疑是亦讀書知理之人。可少覺也。非為庸人而言之。云云。庶幾世人之崇我神而排彼佛也。然則國家復上古之淳直民俗致內外之清淨不亦可乎。これは序に記されたる趣きぢや。また本文の中に。傳敎。弘法。慈覺。智證。見我國之神國而人多歸敬而遂揚言。伊勢者大日。日吉者釋迦。我遣神明化彼日本時王公大人信伏不悟。夫佛者一黠胡而夷狄

之法也。變神國爲黠胡之國。譬如下喬木而入幽谷。君子之所不取也。我見兩部習合者。彼潛竊我古記之言。飾佛剃神。世人不之察也。遂至令神書殆乎絕。我見吉田家說。亦剽掠彼兩部習合者。以爲己說。盜竊主人之財。主人之子孫不知爲我財。而就其盜乞其憐。是譬也。と記し置れたが。凡て尤なる說共ぢやっそも〳〵佛法世に弘まつて以來。道春の時代まで。年數千有餘年。貴賤上下あまねく人の心に染つきて。學文のなき人は更にも云はず。學文に長たる人々も。其書遺されたる書等を見るに。一人として佛を尊ばぬ人なく。何れも此を兼學して。其道をいひ破つたる人なごは。絕てなきことぢや。夫は謂ゆる武人とてもその如く。近く天正慶長元和あたりの武士たちは。實に千引の石をも打碎くばかりの勢で。戰ふ每に必勝日々に人の首を六つ七つ。十をばかりづゝも取英豪傑等なれどもうらには皆佛を信じ。勿ぢや。それは學者といへば右知らず。世に諭さぬから。父などの事は。さらに伺ひしらぬこと故。勢ひ猛に悍りつゝも。さすが人情のさり難き所で。後の世を怕がらしたる。佛法のおごしには惑ひさうな物ぢや。それ故古への武士等の行狀を見わたすに。佛に對して。これは愉快なる所業よと思ふことがないが其中に。中村彌右衛門元親と云は。赤松家の庶流で。享祿五年二月十一日。織田備後の守信秀の。今川家を攻めて城を奪ひたる時に。元親は力戰して討死したるが。此人に一人の男子が有て。身を隱し尾州廣井村の東光寺と云寺の僧となり。忠禪と云て居たが。壯年に及び。奮然として志を發し。墨染の衣を脫で髮をはやしたりしかば。人みな甚だこれを異んだる時に。我は男兒たり。先祖よりの業を繼で大海にもまたがり。大山をもわき挾まんと思ふに。世人愚にして。浮屠を恐るゝ故に。わが還俗を訝れども。大丈夫たる者。いかんぞ黠胡の法に縛られんや。と云さま。持たる所の弓おし張て。本尊の藥師佛を射て。大聲に打笑ひ。袂を拂て寺の門を出て。直に東國に下り。英雄の譽れを取りたる。中村對馬の守元勝と云はこれぢや。武士ではこの人などだと存ずる。是より外には。武士とある人々に。

是はこゝちよいと。思ふやうなことを致した人はとんとない。さて文人も。右申す如く。既に道春の師たる惺窩先生なども。佛くさいぢや。所を道春先生は。始めて佛法の。わが古代の事實をかき暗まし。又法師どもの。奸曲いたしたることどもを。かつぐ〲は開かれたる人では有れども。猶いまだ。眞の古意を得られなんだ故に。熟く彼らが奸を。看破せられたりと見ゆること少く。また儒者だに依て。其論が漢くさく。佛意は破りつゝも。漢意に說落したる事ども〻多く有るから。其說等は。十の中。二つ三つならでは取れぬぢや。夫はそれと致して。佛法を破り初たるは。まづ此人を以て。嚆矢と云つべきもので。この人さやうに。始めを開かれてから。世の儒者などの。佛道を破することは始つたことぢや。扨この先生の言に。傳敎弘法らが。佛法を弘めんとするに。御國の神國にして。人多く神の道を尊信するを見て。吾が道のひとり立ち。獨行はれがたきことを知り。こゝに於て潛に。御國の古き書の言を竊んで。神を剃ぎ佛を飾り。本地垂跡。兩部習合の左道を始めた。と云はれましたが。實によう見拔れたることで。その傳敎までの奸曲は。先日の會にあらあら申たる通りのわけ。さて今日はまづ始めに。その弘法が奸曲を。具に論辨いたすのぢや。但しこの弘法が傳のあらましは。佛道の大意に申たる通りでこやつ法師の多かる中にも。その奸曲わるだくみの。底ひなく根ぶかくて。底深きことは麴町の井戸の如く。ほり難きことは。掘兼の井の如くだに依て。それを掘つけ汲出さんと致すには。中々以てこつぱ儒者らが。とぼけた眼で。容易に見分らるゝことではない。わが精密なる古へ學の大活眼を。大久米命の目の如く。猶ぐッと見ひらき。いで物見せんと。大倭心をふり起して取きめねば。辨へがたきことぢや。其はまづ空海が諸越へ渡て。慧果阿闍梨と云に逢て。傳へ受て來たると云ふ。眞言祕密陀羅尼の宗旨の。出所傳來を云說に。彼のいはゆる三部の密經たる。大日經。金剛頂經。蘇悉地經の三部は。毘盧舍那佛といふ佛の說たる經で。それを金剛手菩薩がうけて。南天竺の鐵塔の中に祕し置たるを。數百年の後に。かの龍樹と云が。栗粒を打つけて。其鐵塔をひらき。金剛手より受けたるを。龍樹それを龍智

といふに傳へたるが。龍智より不空三藏と云に傳へたる時に。不空がそれを受て。諸越唐の玄宗が開元年中に。彼の國に渡り來て。慧果阿闍梨と云に傳へたるをりしも。空海が法を求めて彼の國に渡り。その慧果阿闍梨に逢て。傳へ受て來たのだと云けれども。此は空海が大なる僞でこの妄説の根ざしをとくと考へたる所が甚だ深き惡巧のあることぢや。いで其由を具に辨へん。其はまづ龍樹菩薩が南天竺の鐵塔から。彼經どもを取出したると云が。實で有うならば。彼れが著はしたる大論と云ものは。諸の經々のうはさ。佛法の由來沿革まで。洩さず穿鑿して。記したる物なるに。どうして左程の大切なる密經どもの噂。およびそれを鐵塔の中から得たる事などを。少かもいひ置ぬことか。己その祕密の經の趣きを骨として。人選びをして。龍智といふ者に傳へるほどならば。餘の經どもの穿鑿は捨置ても。此の密經どもの傳來釋義をば。きつと大論に記し置べきことぢや。これ一つの不審。また龍樹より龍智に傳へ。龍智より不空に傳へたと。云ことでこの不空と云が。唐の玄宗が時に諸越へ渡り來て。慧果と云に傳へたと云が。これは仲基も疑ておいたる通り。年數が打合ぬ。なぜと云に。龍樹は釋迦より。七百年ばかり後の人だに依て。玄宗が開元年中から。千年ほども先の人だが。なんと。千年程の間を。龍樹。龍智。不空と。たゞ三人で傳へ來つたと云は。信ぜられぬ事ぢや。これ二つの不審。また是らの不審は。三つ子でも。氣の付て咎めさうなことゆゑ。其しりを結んで云には。玄宗より五代前の太宗が時に。かの玄弉法師が。天竺に渡りたる時。龍智が七百餘歳で。南天竺の磔迦國といふに居て。それに玄弉法師が逢て來たほどのことで。空海が諸越へ渡つたる時も。龍智はやはり。天竺に長らへて居た。などゝ云けれども。此も天游が疑ひたる如く僞りぢや。なぜと云に。玄弉法師が天竺に渡りたる時に。さやうな珍しき人に逢て。さやうな尊き經の。鐵塔から出たるといふ咄を聞たならば。其事は。必かの西域記に記し置べきこと。又その鐵塔の有たる古蹟のことも。かならず記し有べきことなるに。少かもさやうの噂のないは。どうしたことか。佛法に關かる古蹟をば。さしもなきことまで洩さず委く記し付たるに。かや

うの大切なることを。記し洩すべきはずがない。又この玄奘法師が氣性では。實に龍智に逢たからには。その祕密ごともをも。傳へうけて來ぬと云は。ないはずのことぢや。さすれば。夫を傳へて來ぬからは。龍樹が鐵塔から經を取出したと云說は。もと天竺にはなき說ぢや。これ三つの不審。また玄宗が世に天竺の不空三藏が。からへ渡りて慧果に傳へたる所は。服部天游が云たる如く。壇場の飾り。また儀軌と云て。その修法の式。および其祈るべき佛神の名どもを。記したる物などを。傳へたるのみのことぢや。然るに彼の三部の密經などいふ類の。經論の有るがあやしい。尤もこの內。金剛頂經のことばかりは。不空三藏が義訣と云ものに。此をかの鐵塔の中から龍樹が取り出したる由に記しあれども。此義訣といふ書を。不空三藏が書と云こと。甚だ覺束なく。よし是がすべては。實に不空が書にいたしても。鐵塔から經を出したると云說が。右に辨ずる如く。もと無きこと故。これは後に惡巧みをせんとする奴が。その張本にせん爲に書加へたる文なる事疑ひなし。さすれば三部の密經。五部の祕經など。眞言家に謂ゆる經々は。もと天竺より渡りたる物でなき事。推て知るべし。これ四つの不審。また佛道の演說に申す如く。阿含經。般若經。法花經。華嚴經。大集經。楞伽經と。順はかやうに。後の法師どもが。次々その上手に加上して。經々を作つたなれども。何れとても。その說く所を。釋迦に託けぬと云はないが。かの祕密の經說ばかりは。釋迦といはず。毘盧舍那が說だと云が。この毘盧舍那と云は。富永の仲基が。毘盧舍那之號出二于華嚴一。本讀レ佛之言。合以二大日一者新意也。といへるは。甚だ尤もなることで。此の間も申す如く。これは諸越の宋と云たる世に。法雲といふ僧が著したる。翻譯名義集の。通別三身と云篇に依て考ふるに。毘盧舍那。此云二徧一切處一と有て。佛德の一切の處に。徧く行わたると云意に。讃稱ていふ天竺語で。それは凡ての佛に云ことだに依て。名義集に。通別三身の篇にこの言を出し。又その篇の下に。通貫二諸佛一。とあるを以て。是故を知るが宜い。この毘盧舍那といふ天竺言が。いよ〳〵以て大日と云言になつて。夫が一佛の名であらうならば。其佛の正身の有無は暫くおいても。名義集の。

諸佛別名と云篇にも出して。毘盧舍那此云大日佛。となければならぬことぢや。既に阿彌陀なども。實には無きものなれども。天竺より渡つたる經には。正しく一佛として有るに依て。此篇にその名を出して。阿彌陀翻無量壽佛。と記してある。これに依てこれを考ふれば。毘盧舍那を大日と譯して。別に一佛の名とすべき由は。天竺より渡りたる經論どもにはたえて無き事なる故。名義集に記さゞること。明かに知らるゝことで。其はかの不空と云天竺僧が。諸越へ來て。密教を傳へたるは。唐の玄宗が開元年中のこと。又この名義集を記したるが。宋の紹興十三年と云年のことだに依て。不空が傳へに。毘盧舍那と云は一佛の名で。大日佛と云ことになるといふ說が有たならば。それよりはるか後の世に記し集めたる名義集だに依て。右いふ如く。毘盧舍那此云大日佛。となければならぬことだがさうは無い。これ五つの不審。尤も金剛手菩薩が。陀羅尼を受持つたと云ふことは。即ちかの宗旨に用ふる。六度經と云經に。釋迦の言とて。我か滅度の後には。阿難に吾が說く所の修多羅藏を受持しめ。鄔波離には。吾が說る毘那耶藏を受持しめ。迦多衍那には。吾がとく所の阿毘曇藏を受持しめ。また文殊菩薩には。吾が說る大乘般若を受持しめ。金剛手菩薩には。吾が說る甚深微妙の。總持門を受持しむ。と云たといふことがある故。まづ是を本の根ざしとして。金剛手菩薩が。甚深微妙の陀羅尼を傳へた。と云ことはいひ出したるなれども。此の六度經の趣きは。大日佛より。それを傳へたと云ではない。釋迦が傳へたと云ことで。此の經にある趣きが。かの不空三藏が。この宗を諸越に弘めたる時。傳へたる趣きと見えることぢや。然ればいよ〳〵以て。大日と云佛名は。からは本より天竺にも。決してこれなき名目なることは論はない。何とかくの如く。六つの不審が有て。云ひ拔んとするにも。とても拔られぬことだが。その大日佛といふ佛は。天竺でも知らぬ物なれば。かの大日經のたぐひ密經どもゝ。天竺より傳はらぬこと。これ又論なく。然らば其無き佛の名を設け。無き經々を僞り作れるは何奴で何の爲に造れるぞ。かやうのことを致すには。何ぞ下に巧むことのある。奸賊心の有る奴でなければ。かやうの巧みは致さぬ

はずだが。其盜人は誰であらうと考ふる。こゝがそも〳〵詮議の糸口で。わが古學の眼は謂ゆる毘盧舍那。譯すれば徧一切所なる。有がたき所ぢや。この糸口からさがし入り。其の大ぬす人の。住所へ尋ね蹈ねぢくつて。高手小手にくゝし上やうと云所だが。其ごろぼうめは。どこにどう隱れて居ると思へば。やはり此の御國のうち。木の國の高野山と云山に。かれこれ千年ばかりも以前に隱れ住だか。老くたばッても。其の惡念の凝かたまり。今も猶その惡靈をこの世に留め。四國のほとりや中國すぢを。或はすた〳〵坊主と形をやつし。又は挽臼の目きりなんどと形をかへ。愚人を惑はし誑らかす。空海法師が世にをる時の所爲で有た。此のもの林道春の云はれたる如く。御國の神國にして。天の下の諸人。みな神祇を崇め。佛を信ずる心の薄きを見て。さては吾が道の。久しく行はれがたき事を悟り神佛習合して。神と佛とを混同して人を惑はし。己れがよる佛道を。普く人に信じさせんとの心で。深く巧んだることぢや。それは先かの行基法師が。奈良の大佛を。伊勢の大御神の本地佛と。立たる所より思ひ起して。その本因を天竺の事に取り成し。大御神の石屋戸に。御さし隱りあそばしたる。古傳説を。天竺の古事と似かよふ樣に。おぼ〳〵しく交へ混らして。人の心を惑はさんが爲に。龍樹が鐵塔より。大日の祕密を取出したると云ことは。空海が造つたものぢや。尤もその種としたることは。西域記に。婆毘吠伽論師と云が。南天竺の磔迦國といふ國に至て。芥子を呪て岩壁を擊開き。彌勒の阿素洛宮に入たとかいふ。幻術ばなしを龍樹に附會し。その岩壁を鐵塔に換て。それを大御神の御籠りあそばしたる岩屋戸に擬し。釋迦が金剛手菩薩に。陀羅尼を傳へたといふ。六度經の說を取て。その釋迦を毘盧舍那にかへて。さて行基か。奈良の毘盧舍那大佛を。大御神の本地と立たるを幸として。その毘盧舍那に。大日佛といふ新儀の飜譯して。その大日がやがて大御神で。大御神はやがて毘盧舍那大日佛ぞと。人の思ひ取るべきさまに云ひ混らし。また龍樹が鐵塔を開いたと云ことも。天之手力男神の。岩屋戸をひらいて。大御神を出し奉つたる事に通はせ。手力といひ龍と云ひ。その強げなる所より。ほのかに人の思ひ惑ふべき樣に

引よせて。世の人に。天照大御神の。岩屋戸に御さし籠りなされたと云。神代の故事は。實は天竺にて。大日佛の鐵塔にこもれる事を。御國のことにして云た物だと。思はせんとしたる物にて。大切なる神代の故事を。此國に居ながら盜んで。天竺の物にせんとするにて。是が盜人坊主でなくて何で有らう。かかる類ひの者をば佛法にても獅子身中の虫とは云ことじや。富永も。服部も。龍樹が鐵塔より密經を得たりと云をば大論に此事見えぬを以て。疑ひを遺し。不空三藏らが。附會にや有らんとまで云はれたれど。空海にかゝる巧みの有て。彼の作れる妄說ぞとは思ひも付かず。此二人が如く大活眼の人々ですら。この奸術をば考へ出ぬほどのこと故。ましてよのつねの儒者神道者などの。其臭をもかぎ出し得ることではないから千年餘りも此法師の惡巧は。現はれなんだものと見える。篤胤今を去る事十五年以前に。篠崎金吾と云儒者の著はしたる。和學辨といふ書を見たる時に。その中に。大日靈尊の。大日如來に似たる。天磐戸の堅固にきこゆるが。鐵塔の堅固に似たる。手力雄の龍樹に似たる。千歲いまだ其の喧嘩なりと。記しある。是は儒者と云中にも。いやみの有るをのこで。御國の古へを學ぶげにて。却て底意地わるく。遠廻しに。云ひくたさんと爲たる儒者ゆゑ。此ことも。やはり底には。神代の岩屋戸の古事は。天竺の鐵塔の古事を。造り直したる物ぞ。と云ことを含んで。言には出さず。匂はしたものぢや。篤胤この書を見たる時分は。未しきほどのことにて。其のよく似たるに。是は故ありげなる事とは思ひながら。明らめる力もなく。徒に疑ひを存して。常に心にたえず。思ひくらしたること。今年まで。十五年の間で有た。然るに今年今月。表會の演說本を。增補いたすに付て。なほ深く考へ。右の如くには。考へ付けたことぢや。扨々憎き。空海法師が邪事。こやつ實に。臼の目をきる靈があるならば。この篤胤が。天つ神國つ神の御靈たまはり。古學の精密なる眼を見ひらき。すが〳〵しき大倭心を以て。この如く辨し。賊法師とさへ言ひ罵るを。口惜くも思ひませうが。此の申しひらきを致して見るが宜しい。かやうの妖僧を。弘法樣よ。大師樣よとて。厄よけ給へなんど媚諂ひ。かれが前に額づき拜むなんどは。

何に物を知らぬ世の人だと云ても。あまりなることぢや。扨この法師が。右の說どもをば。察する所。もろこしに於て。趣向をば己が立て。かの國の人を怙み。其書どもを造りもらつて。かの慧果と云法師に受たり。と云て持歸り。世を欺いた物で。それは思ひ合さるゝことの有るは。諸越より傳へ受て來れるに。其の本とある。諸越に。この密敎の趣きが。はやく絕たりと云も。可笑なことぢや。それは實に絕たのではない。空海が。彼の國に。三年の逗留の間に。かの國人をも雇つて。密かに作て來れるから。彼の國には本より無いのぢや。扨御國へ歸り來て後にも。猶此にても。其根を固めんとして作たる妄說に。昔この國のいまだ成らざる時。天照大御神天上に坐まし。大海の底を見給ふ時に。大日如來の印文があるから。怪み思し召て。鉾を指下して。その印文を御搜りなされたれば。その御鉾の滴りが露の如くで有たを。それを第六天の魔王がはるかに見て云には。この滴りの露が地と成たならば。來世に必ず佛法を興すであらうから。吾これを壞らんと云て。すなはち其の六天より降來たる時に。大御神の魔王に宣ふには。吾れ三寶を近づけまいし。又其の名をも稱へまいに依て慮る事勿れと。御約しなされたれば。魔王が即還つたと。云ひ出したが。是はかの傳敎が。日吉山に寺を建て。その因緣を僞り作り。むかし人壽二萬歲の時に。釋迦が都率天に住して。大海を見たるに。波浪に法音が聞えるから。それを求めて御國へ來たる所が。其梵音は。一本の蘆が海上に浮んでそれに止り其の蘆化して一つの島となり。それが比叡山だなどゝ僞つたる例に傚ひ。こやつも又かゝる妄說を造り出したもので。皆少かづゝ神代の故事を取交へて。世人の心を惑はし。吾が道に歸依さすべき張本と爲たものぢや。その大御神の鉾を以て大海を御探りなされたと云事は。伊邪那岐。伊邪那美命の御古事をかき亂して。大御神の古事に取成し。かの大日佛が印文のしるしに依て。この御國は出來たる物となし。また魔王が此國に佛法の起らんことを怒て。それを妨げたりと云は。かの釋迦が成道したる時。魔王が世に佛道の弘まらんことを怒て妨げたりと云。佛書の古事をかりて造言したものぢや。尤これには深き意味もあることで。神宮に佛

法を忌るゝこその口惜さまゝに實には大御神の佛法を御忌なさるゝにはあらねども。天地の初に。魔王とかくの如く御約束が有たる故。表にのみ佛法を御忌みなさるゝと云說をいはんとする。其張本にも致さんとての造言だが。なほ其心は只今に。外宮の寶基本紀を申す時に。能くその底意の分ることぢや。さて空海は右の如くまづ惡巧みの根をかため例の金剛界胎藏界の兩部を習合して神の道をみだし。嵯峨天皇の弘仁七年に高野山に伽藍を建んことを申し乞ひ。かの山に古へより鎮座す丹生神社を。わが宗の守護神と爲たることさ。傳教が日吉神社を。彼宗旨の守神と立たると同じことぢや。

扨この者。いかに謀を回したるにか。外宮豊受大神の宮司等をそゝのかし。惡智慧をつけ。且多く僞書を作らせたとと見ゆる。それは外宮に古より五部書と稱する書が有て。それは謂ゆる寶基本記。御鎮座傳記。御鎮座次第記。御鎮座本記。倭姬命世記。この五の書を外宮の五部書と云ふ。そも〳〵此五部の書共を僞作したるゆゑんは。外宮の禰宜等が內宮の上もなく尊く坐て。世の人の信じ奉る所も。朝廷の御扱も。外宮より重んじ遊ばさるゝ事を嫉み。元來外宮は豊受姬命と申し上て。靈の眞柱に記したる通り。飲食作處衣服の御神に坐ますを。國之常立神だと云て。これは日本紀の趣にては。第一に御出來なされたる樣に見えて。天照大御神の御先祖とも云ふべき趣きに見えもいたすから。右の如く云ひなし。外宮こそ。內宮天照大御神よりは尊み奉るべきことなれと。世の人を誣欺き。おのが私の爲にせんことを巧み。古事記をはじめ。古書の文面に乘き。且それを云ひ紛らし。その證據にせんが爲に。この五部の書どもを次々に作て。神庫に傳はる所の古書だと云たものぢや。但し是は次々に。外宮の禰宜等の。邪心の募たるいはれであるが。其わる根性の種を蒔たるは。空海がわざと見ゆることぢや。それはいかにと申すに。尾張の國の東照宮の神主。吉見左京大夫幸和と云人の。寛保年中に著はしたる。五部書說辨と云書が十二卷ある。それはそれは委く辨じられたもので。丁どかの仲基が諸佛經を。阿含の次に般若が出來。般若の次に法華經が出來たりと云ふ事まで。慥に見わけ安く書れたやうなもので。其說に。

寳基本記が。いッち始めに作つたる僞書と見ゆると云て。其考が有るが。よく見拔れた事で。實にさうぢや。扨その寳基本記の作者を。かの行基法師だと。古くより云ひ傳へてをるが。篤胤がつらつら考へたる所が。これは空海が外宮に立入り。禰宜等の中に。内宮の御榮を羨みをる人々をそゝのかし。まづ内宮を押付る張本と爲べき。寳基本記を作て其機に應じ。それに己れが道の弘まるべきやうに習合してこれを記し。其始を行基法師に託したものぢや。それは先その寳基本記と云ものは。内宮外宮御鎭座の事を主と記して。それに種々の事どもを。交へ記したる物で。中には空海後の人の加筆したりと見ゆるも大分あるが。其の内こゝが空海が。わる巧みの骨とあることゝ思ふ所々を。かい抓んで申さば。まづ始に垂仁天皇の御代二十六年。すなはち内宮御鎭座ましましたる年の十一月の。新嘗會と申て。大御神に新穀を奉つて。御祭りの有たるその夜に。齋宮姫御子大倭姫命が。神主がた物忌たち。八十氏の人々に。詔へる御言とて。記しあるやうは。吾今夜大御神之命を承て。託宣する所だに依て。神主部。物忌等。懈ることなく。正明にこれを聞け。とまづ仰せられて。扨その御託宣とて。仰られたりと云言に。

人乃天下之神物奈利須レ掌ニ靜メ謐志

と云は。彼輩の說に。人は天の御靈をわけて生るるもの故に。かく宣給へるものだと申すけれども。それでは。天之神物也と云はんでは聞えず。下の字が有るだけが餘計だから。よく思へば。これは俗にも云ふ。人は萬物の靈といふ趣きの言と見ゆる。さう見ねば解せぬことぢや。また須レ掌ニ靜メ謐ニと云は。漢籍禮記に。人生而靜天之性也。とあるなどより。書出したることだが。それにしても須レ掌がをかしい。かやうの語格は。からにも大倭にも無いことで拙いことぢや。此は作者の意を推はかるに。心をば靜謐にすることを。主とせよと云の意であらう。扨この言が即密家の謂ゆる阿字本不生と云のこゝろでござる。

心乃神明之主他利。莫レ傷ニ心神一禮

と云は。即金剛頂經の文に。一切衆生。本有ニ薩埵一。爲ニ貪瞋癡煩惱一之所レ縛故。輪ニ廻六趣一。とある文の意で。心と云ものは佛と成るべき主なるに。やゝ

ともすれば煩惱の爲に。心を傷るもの故傷らぬやうにせよと云の義で。それをたゞ佛語を改めたのみのことぢや。俗に持扱ふ六根清淨の祓と申す物に。天照大神乃宣久。人波乃天下乃神物奈利。心波乃神明乃本主多利。莫レ傷二心神一是故目仁諸々乃不淨乎見弖。心仁諸乃不淨乎不レ見。など丶云へるのも。この寶基本記の僞作後に。これに依て作つた物と見ゆる。○これは序だに依て申すが。俗の神道者どもの說に。この六根淸淨祓の文は。欽明天皇の御代に常磐大連と云人が。天皇へ佛法を御止めあそばせといふ御諫言の爲に。大御神の神勅を以て。これを記し奉つたものだと申すが。これは時代をも考へぬ。文盲者流の申したることぢや。なぜと云に。是は書紀に。欽明天皇の御代に佛經の渡來つたる時に。中臣の連鎌子の諫められたことがある。それを心得違へて云たものぢや。この鎌子と申す人は。彼らがいはゆる常磐の大連の。祖父とある人だに依て。六根淸淨の祓の文と云から致して佛語で。六根といふは眼、耳、鼻、舌、心、意の六ツで。佛經にいくらもあることぢや。一體この淸淨の文は。大日經禮懺の文と云ものを元として。涅槃無名論といふ物に。天地與レ我同根。萬物與レ我一般など丶云語を。取合せて作つた物ゆゑ。兩部習合家の作つてそれを畏くも。天照大御神の神勅と僞り。作者を古代の人に云ひ紛らしたに相違ないことだが。かやうの心法くさきことゞもは。からや天竺で云ことでこそあれ。神の道には絕えて無きことぢや。

神垂以二祈禱一爲レ先。

吉見の云はれたる通り。神垂といふ熟字はいまだ聞ざることだが。これは下の句の。冥加と云に對せんが爲におきたることゝ見ゆるが。言こゝろは神の惠みを垂るゝと云義と見ゆる。扨其神垂とやらは。祈禱を以て先となすとは。此れは神宮にては。天皇の寶祚。又天の下の御民も。安くまさきく。五穀の豊饒などを祈る職分ゆゑ。己が子などへの敎訓には。かくも云ひ敎ふべきなれども。大御神の神託としては。をかしな物ぢや。なぜと云に。大御神の。吾に向て祈禱を先とせよ。然らば惠を垂るべしと仰せられたとしては。佛どもそれ〳〵に。

吾が名號を稱へたならば。救ひとるべしと誓願あると云に似て。いやな氣味ぢや。

冥加以二正直一爲レ本。

この冥加と云言は。常にも能くいふ言だが。元來は佛書から出たる言で。すなはち華嚴經の疏と云ものに。一顯加。二冥加。冥加者。隱密難レ見。故曰二冥加一。と有て。これで冥加と云言がよくわかる。顯加と對したる所は。丁どあらはごとゝ。かみごとゝ。對して居るやうなものぢや。

任二其誓一皆令レ得二大道一者。天下和順。日月精明。風雨以レ時。國豐民安。

其誓と云は。上なる神垂以二祈禱一爲レ先。冥加以二正直一爲レ本。といふ言を受て。神の惠を垂るゝには祈禱を以て先きとするに依て。そこを能く心得て。正直を以て吾をたのむならば。吾はさやうの者には。冥加あらんとの誓願だに依て。其の誓ひの如く大道を得させてやらうとのことぢや。大道と云言は。老子に。大道廢有二仁義一と初めて見えたる詞で。その言は取ながら。心は菩提を得せしめんと云の義で。佛の誓と云と同じことぢや。されば天下和順と云より以下十六字。たゞちに無量壽經の全文を取て。記したるもので。此を大御神の神託と云は。餘なることぢや。

故神人守二混沌之始一。

と云は。神の宮人等に。天地の始めのいはれを守れと云ことで。これはこの僞りの神託の中にも。奸曲の張本たる言で。かく記したるに。大きに故あることぢや。其はまづ空海おのれ多くの經論を僞作して。右申す如く。大日と云佛を新作し。その故事由來をも。天照大御神の御故事に。似かよふ樣に造言して云ひ紛らし。猶その根を固めんが爲に。いひ出したる妄說にて。それは先にも申たる如く。世の初めに天照大御神。天上に坐て大海の底を御覽なされたる所が。大日如來の印文が有て。それを御かきなしなされたれば。此の御國が成固まツて。それを第六天の魔王が見て。行々佛法の弘まらん事を怒り。それを壞らんとて來れる時に。大御神は。三寶を近づけまいと。魔王に御誓ひなされたと云說を作て。それと說を合せ。天地初發の時より。魔王とかゝる約束が有に依て。吾神

宮に仕へる神人ども〻。能くこの始めのいはれを守て。表には。佛法を信じ顔を出すな。と云のこころでござる。

屏二佛法之息一置二高臺之上一。崇二祭神祇一云々。

と云は。右いふ如きの謂れがあるに依て。佛法を信ずる所を表にあらはしては。魔王がおこり出すに依て。佛法の息を内に屏藏て。高臺の上におき。表には神祇を崇むる貌をなし。内心には能く佛法を信じて居ろと云ことで。やがて東大寺の毘盧舍那佛を。神社考に引たる舊記に。中央臺遮那大佛とある如く。敬ふ心を含ましたものぢや。是を俗の神道學者どもが。屏二佛法之息一と訓て。大御神の御言に。佛法をしりぞけろと。仰せられたのだ。と申すは。字義をよく心得ぬよみ方ぢや。この訓のことは。神道闢疑編と云書に。よく辨じて。屏息訓點。宜レ訓レ藏レ息。不レ可レ訓レ斥レ息。所レ謂屏レ息者肅敬之至也。論語註云。屏藏也と申してある。實にこの説の如く。屏息の二字は。息を藏めて敬ひ肅むのこ〻ろで。元亨釋書に。師錬が。伊勢の大宮に參詣したる時の事を記して。行人屏レ息肅如也とあるも。こ〻の熟字を用ひて。同じ意ぢや。これらのことを考へて。屏をこ〻ではしりぞけと訓むまじきことを知るが宜しい。扨かくの如く御託宣有しと先いひおいて。其の下心は。裡に本地佛を立て。表には。垂跡の神號を以て崇めよ。と云ふ張本にした物ぢや。

神代ニ人心聖而常也。直而正也。地神之末。天下人其心神黒而云々。

こ〻に神代とさしたは。天照大御神の御時代をさして云たもの。又地神の末とは。葺不合命の御時代を指て云たものぢや。凡て天神七代。地神五代。人皇幾代など〻云詞は。俗なることで。上古には無き言なることと。古道の大意に委く申たる通りの訣ぢや。但しこ〻に地神之末といへるに依れば。餘程ふるきことで。此頃よりそろ〳〵云ひ始めたと〻見える。扨こ〻にその地神葺不合命の御代あたり。天下の人の心神が黒う成つたと云たるは。釋迦が世に在りし時代は。普通の説では。もろこし周穆王が時に當ると云に依て。それでは丁ど御國では。葺不合尊の御世にあたるに依て。先つこ

こにかく云て。下文に。奉レ代二皇天一。西天眞人以二苦心一誨諭云々と云語とかけ合せたものぢや。
不レ信二神明之禁令一。故沉二生死長夜闇一。云々
これは。かの行基が僞つて。大御神の御託宣だと云たる語にも。照二却生死之長夜一。と元亨釋書にある。それと同じ趣きの文言ぢや。
因レ茲奉レ代二皇天一。西天眞人。以二苦心一誨喩。令レ修レ善。隨レ器授レ法以來。大神歸二本居一止二託宣一倍。
皇天と云こと。古書にある趣きは。皇天二祖と申して。天照大御神と。高皇產靈神二柱をさして申すことで。夫れは書紀の神武天皇の御卷にあれど。こゝは其と替り。內宮外宮の神をさして申たものぢや。即さきの文を受て。地神の末。萓不合命の御代あたりには。既に世が澆季に及んで。人の心直からず。神明の禁令をも信せぬに依て。內外兩宮の皇天神に代て。西天の眞人釋迦牟尼佛が。苦なる心を以て。衆生を敎化し。善道を修せしめ。夫々の器量にしたがつて。佛法を授くる故。もはや皇天の大神。すなはち兩宮の神樣が。釋迦の敎ふる趣きに御ゆづり遊ばして。本居に歸り天上ましくて。託宣を御止めなされたに依て。世の人。その時世相應なる。釋迦の敎へに從へと仰せられた。と云心を。ふくましたもので。是れみな世の人を佛法に引入れて。神を信ずる心を移させんとの巧みぢや。なほ思ひ合さるゝことのあるは。悲華經と云佛經をも僞作して。その文中に。尤釋迦の云へる語として。我滅度後。於二惡世中一。現二大明神一。廣度二衆生一。など〻記して。即吾が御國の神々は。盡く釋迦の垂跡だと云はんとする張本にしたものぢや。此文を。日蓮法師が宗旨の書どもに引て。御國の神々は。凡て佛の垂跡だと云の證としたるには。文を作りかへて。於二東方一現二大明神一とあるが。これは東方としたるだけなほ憎きしわざぢや。又序だに依て申すが。そも〳〵御國に於て。もと大明神と云ことは無いことで。何れの古書にも。正しき物には曾て見えぬことで。全く僧どもの云出したる名ぢや。其は何なることより。根ざし初たる妄說かと考ふるに。まづ般若心經に。大明神と云ことは有れども。それは咒文を稱たることで。神にいふ詞ではないが。先づそれより思

ひつき。又延喜式の神名帳に。やんごとなき御由緣の坐す神社々々の下に。名神大と云ことを御記しなされたるが多くある。此は名たゝる神で。朝廷の御扱ひは大社におはし坐すとの事と見ゆる。然るに。名神大とある。大の字を上へまはし。名と云字をば。明の字に書きかへ。尤もこの明の字にかき替へたのも。宣命の御文などに。現御神とかくべきを。明神とも。御書きなさるゝから。此の明神の熟字などをも思ひよせて。此號は作つたるものと見ゆる。世の學者たち。大かたは權現と云號をば。兩部習合家の作つたる號と云ことは。心づいて居れども。大明神と云號をば。誰もさうは思はぬことぢや。何れにも此號は古書に曾てなく。神名式にもみな某の神社とのみ有を以て。法師どもの始めたことを知るが宜しい。さてこの西天の眞人云々と云言は。列子といふ漢文の寓言に。孔子の語とて。西方に有二聖人一不レ治而不レ亂。不レ言而自信。不レ化而自行。蕩々乎人無二能名一焉。とある文をふまへて書たものぢや。此の列子なる聖人と云を。諸越の佛者らが。釋迦のことだと云

ひさわぐことだが。さうではない。是は別に考へ記した物が有る。

若應レ節自在二告示一則。開二大明戸一。無形顯レ音。或小童女。須レ在二驗言一矣。猥莫レ信二狂言類一

これも前文を受て。先つかやうの訣で。西天の眞人に。教諭は讓置なれども。もし時に依て。御自身に御告さとしなさるゝことの有るをりは。大明戸を開て。形をば現さず。音のみを發して諭すか。また或は小童女となりて。驗のある言をいひ諭すべき間。みだりに外の神託々々と云をば。信ずることと勿れと云の意ぢや。なぜかやうの言をしるしたと云に。此の神託は。一體。垂仁天皇の二十六年十一月。新嘗祭の夜に。御さとしなされたる御託宣と僞はり。さて佛法にひき入れて。行々は。御國を殘らず。佛法世界になさんとの巧み故。西天の眞人。すなはち釋迦牟尼佛に。世の人を敎導のことをゆづり其後は。御託宣あるまじき由に。云ひはしたなれども。彼の行基法師が。神宮に詣たる時。神殿おのづから開けて。大聲に御唱へなされたりと云ふ。彼の僞の託宣と。また聖武天皇の御

夢に。大御神の。玉女と成て。御託しなされたりと云ことなば。眞のことに推立んとして。垂仁天皇の御代に。倭姫命へ御告の有たる時。すでにかくの如しと。人の思ひ合せて信ずるやうに作つたものぢや、また須在驗言矣。猥莫信狂言。とことわりたるは。行基への御託宣。また聖武天皇への夢にしらせなどは。儼驗いちじるく。格別なることぞと。ますく信じ思はせて。行基が神託に事を寄せ。種々己が欲を肆にしたることを羨み。其の跡をしたひ。猥に託宣と稱して。欺くもの多からんことを察して。狂言の類を信ずること勿れと云て、己が造れる神託をのみ實と思はしめん爲の張本にせうとて。まづ前ごとわりをしたもので。此書の末にも。また太神宮國至內。禁誅斷巫覡。誑是庶民愚仰信妖言姧厭兒而隱正理也。と記して。行基が如きは。信實の正僧にして。巫覡贋僧ではない。と云意を含めたなれども。行基は僞託宣の開祖で。後の法師どもは。傳教弘法を始め。みな行基がしかたを眞似たものぢや。

從天地實陰陽掌神木宜存自正。是長生術不老藥也。

これは佛者どもの常に云て。人をおもむける。長生不老の虚說で。取るに足らざることぢや。それは此間も申す如く。其の開祖たる釋迦すらも。長生不老になりたいと云て。かけまはツたなれども。年もより皺くたに成て。毒にさへあたり。のたれ死をいたした程の事だから。何もならぬこと。扨

神主部物忌等。所託宣懇致其誠終無疑貳心齋仕敬祭天神地神矣

これまでが神託の語だ。と云のこゝろぢや。

これは倭姫命の御詞として。始めに神主部物忌等。無懈正明闇焉。と云へるを。結んだものぢや。扨こそ寶基本記の文を。よく考へ見れば右の如く。すべて眞言秘密の教の趣きに歸して。云ひ通るべき方もなく。空海がわざと見ゆるが。此れを今かさねて論じやうならば。まづ空海。かの密教の本因をば。天竺の古事に造りなし。種々そのむきの僞書を作り。さて彌その思ひ付たる。左道を弘めんと致すにつけては。彼の行基が僞りの託宣をば。實にせんが爲に。外宮の祠宮の中に。吾が仕へ奉る神の。內宮

より劣り給ふことを。飽かず思ひ居るを幸として。外宮に立入り。器量有る祠官たちに。惡意をすゝめ起さしめ。豊受神を。内宮より上に立つべき。爭論の張本と爲べき書を。古書に擬して作り與へ。それに託して。己が惡計の手段と爲るべき說等を。多く造り入れて。書き取たものぢや。これらのこと。正しく其傳へは無けれども。空海が前後の事實を。今說きたる寶基本記の文と引合せて。とくと考ふるに。ひしひしと符合して混れはないから。こゝで悟られることぢや。さう無ければ。いかに外宮の輩。内宮の御榮を羨しく思へばとて。連綿たる神官としてかゝる邪事を。各々我が手に作られやうはずが無い。なほ思ひ合さるゝことの有るは。先日申たる。天地麗氣記といふ兩部習合の書を。古くより空海が作と云ひ傳へて居るが中に空海以後の者が。增補したりと見ゆることもあれど。外宮鎭座のことが中にも委く。それは凡て五部書の中。倭姫命世記の意を以て。記しある。此れ等も證となすべきことぢや。されば篤胤が說は。しひ言とは云はれまい。猶この寶基本記に記したる一體の趣き。また右よみときたる僞託宣のおもむきは。まづ倭姬命と申すは。齋の姬命の在が中にも古く御名が高くて。世の人の信じ思ひ奉る御方故に。其の御名をかたり。此の姬御子に兩宮の神樣が御託宣あッたと云へば。此上もなきことゝ故。人の信ずることを考へて致したることぢや。さて右の如く外宮を抱きいれ。僞書を作つて。まづ神宮には。古くより佛法を御忌なさるゝを以て。佛法を立須久彌といひ。佛經を染紙といひ。僧を髮長と云ひ。堂を古里多幾と云などの口惜さに。其說を造て。大御神。內には佛法を守り給へども。世のはじめ魔王に。三寶は近づけまいと。御約しなされたに依て。外には御忌なさるゝことぞ。その證には。垂仁天皇の御代に倭姬命に御さしなされたる御言に。神人守二混沌之始一。屛二佛法之息一置二高臺之上一と御託宣有しと匂はせ。其高臺の上におけと宣へるは。やがて奈良の大佛のことで。それが則ち八葉中臺圓字大日如來ぢや。これは聖武天皇の御代に。御諭しなされたる御言に。日輪は毘盧舍那なりと仰せられたるから。大御神はやがてこれ大日如來。さて大日の本國なるが故に。

大日本國と云。また天岩戸と云も。高天原と云も。都率天のことで。是を法界宮密嚴國の內證といふ。その內證の都を出て。跡を日本に垂れたに依て。內宮は胎藏界の。大日四重の曼荼羅を表して。玉垣瑞籬荒垣など。重々にして有り。又鰹木の九つあるは。胎藏の九尊を表し。また千木は。智義と云ことで。一切智を表し。扨その風窽は。至德一大道の穴なり。また鳥居は。東西南北四方の中に。西方を以て智門となす故に。西方を以て鳥居と號す。大智淸淨心の緣なり。さて外宮は。金剛界の大日佛を象どり。然して金剛界の五智を表す。故に金剛夜叉神と云。また大悲の本誓に任せて。萬品を利すること。水德の如く。續命の術を致たる故に。御氣津神といひ。又水變じて天地となり。天地起て。人民化生したるに依て。天之御中主神と云。さて胎金兩部は陰陽を象る。陰女陽男にして。八人乙女は。胎藏界の八葉をかたどり。五人の神樂人は。金剛界の五智を象どる。又死ることを忌詞に奈保留と云は。死は生より出で。生は死の初めなり。故に生死ともに忌むなせなれば。不生不滅の毘盧舍那法身だに依て。生死流轉を嫌ひ。

一切の衆生をして。生死を離れしめんとするのだと云ひ。凡て空海が說を記したる。麗氣記の類の兩部の書。また外宮の書ども。寶基本記などを始め。大抵かくの如きもので。かやうの說どもは。今逐一に辨ずるまでもなく。能く古へ學をさへすれば分ることぢや。其中に序だに依て。千木。堅魚木。鳥居のこと。これは兩部唯一ともに深祕として。やかましく云こと故。あら〳〵辨じませうが。其はまづ神宮の棟に上る千木のことを。諸越にいはゆる仁義禮智の智義に附會したること。附會の中の附會にして。笑ふべきの甚しきものぢや。そも〳〵此の千木と云ものは。古事記には氷椽と有て。名のこゝろは。千木と云も氷椽と云も。共に肱木と云ことで。其ひぢぎのぢを省いてひぎと云ひ。またひをはぶいてはちぎ共云ふ。凡て物の形の ∀ かくの如くなるを比知といふ。手の肱も此意。また肱金など云も同じこころぢや。扨この千木と云ひ氷木と云ものは。貞和餝記と云て。兩宮の御宮造の事を記したる物の中に。組目上謂二千木一。組目下謂二搏風一と有る如く。搏風の先のことで。上代の家造りに。屋の左右の端に前後

の軒より上して。棟に行合ふ所を組違へ。其末を長く上へ出したる物で。その棟より上へ。高く出たる所を氷木とは云。尤後世には。千木を別に作る社もあれども。伊勢には今に搏風の末を切らず。直に千木に用ふることぢや。さて甚重き故に。風穴をあけると。或人の説だが。是は實にさることぢや。然るに寶基本記に。この穴を。至德一大道之竅也と云は。いかう狂氣な説ぢや。又この千木の端を揆ことも。伊勢内宮外宮にて。内をそぐと。外をそぐとの差あるに就て。寶基本記には。水火之起。天地之象也。向レ上天神開レ口也。向レ下地神合レ口也。など云ひなせるは。眞言の阿吽の二つより附會したるもの。又後世の神道學者などは。陰陽の理など。ことごとしく云ひなすは。例の漢意の附會で取るに足らず。此は尾張の吉見氏が云る如く。内宮と外宮と。狀を換たるのみにて。何の意もないことぢや。○又堅魚木のことは固木と云ことで。萱屋の棟を固むる木で。今の世にも萱葺の屋根には。鳥をどりと云て。同じ萱を一束にして。棟の上より兩方へ垂て。押へたる物がある。あれが即堅魚木ぢや。神殿の棟は。古風の形を存して。木を丸く削て。棟に横に並べたる物で。此外に何も深き理屈のないことぢや。然るに此を秘授口傳として云ひさわぐは。みな本義を知らぬからのことでござる。○さて鳥居のことも。この寶基本記に。四方中以二西方一爲レ知二門一也。故以二西方一號二鳥居一など云へるを始め。後の神道學者など。色色に附會して云ひ騒げども。凡て取るに足らず。此は尾張人吉見氏が。殊によく辨じて置れましたが。其の説に依て申さば。儀式帳に。於葺御門。不葺御門と二つのわけが有て。俗に云ふ鳥居は。この不葺御門のことぢや。延喜式大神宮式に。高欄鴨居丸桁。高欄土居桁と有て。その鴨居の丸桁と云は。高欄の上の桁の事で。此を鴨居と云は。上に居ると云の義で。尤この大神宮式に。鴨居と書てあれども。同く内匠式には。御輿鳥居の高欄ともあり。また類聚雜要抄に。裝束をかくる衣架の圖ありて。其の笠木を鳥居木とあれば。凡て鳥居と云は。上にある横木を云と見える。又下にある横木を。古くは土居と云ふ。今は敷居と云ふ。和名抄に。門鷄鳥居也。以二其形似一レ塒有二此名一と云て。よく聞える。かくの如く。凡

て上にある笠木を。鳥居と云より事起て。不葺御門を。鳥居とも云とこは成たものだ。と云はれたが。此が正義ぢや。また天野氏の說にも。神社の鳥居。昔は門と云て。鳥居とは云ず。伊勢の宮の一二等の鳥居も。古書に。第一の門。第二の門とあり。但し寶龜二年の太政官符に。內外の鳥居など有れば。門とのみも云はざりしと見ゆ。酉陽雜俎に。東門雞棲木と云こともあり。これ鳥居の意に等しきにや。とも云てある。外に或は異國の華表を以てこれにあて。又は白張を著たる下部は。主人の供を勤て。漸く門外に侍ふ故に。其白張を鳥に比し。白張著たる者の居る所故。門を鳥居と云などいひ。又寶基本記の。以西方為知門故以西方號鳥居など云へる類ひは。凡て論ずるに足らぬ說どもなるに。況て秘事口傳を云などは。たはけの限りで有ますする。

○さて空海が伊勢兩宮の御事實に。己が道を習合致したることのあらまし百分一。大筋ばかりは辨じたが。その外宮者流の為に。擾亂したる說は。豐宇氣神を。國常立尊とし。天之御中主神の御別名としたるが骨ぢや。さて又例の如く大御神の御託宣を僞り作て。我祭奉仕之時。先可奉祭止由氣大神宮也。然後我宮祭事可勤仕と云御神託を造り記したるが。外宮を內宮の上に立んとする。張本に造つたる言で。外宮の禰宜たちに授けたる。惡巧みの主意專要と見えるぢや。かくて始めはまづ。一人二人の祠官をそゝのがして。右の如く。はからひも致したらうが。計の如くゆけば。大きに外宮者流の為には宜しきこと故。惡きことには人の與する習ひだに依て。漸々にさる橫さま心の人々もふえて。後には空海が手を放れても。次々に五部の書を增補して造つたものと見える。扨外宮の人々のこらず。さる曲心にかぶれては。佛の習合を何とも思はれなんだらうなれども。實には凡て神宮に於ては。一字の上にも忌言が有て。塔を阿良々岐と云ひ。佛經を染紙。佛を中子といひ。僧を髮長といひ。尼を女髮長と云ふ類ひ。また朝廷及びもろ〳〵の神事に。禁門に入ることを許さず。大宮には僧尼の拜所と云て別に有り。また禁秘御抄にも。僧尼より奉つたる物は奉らずと。御記しあそばしたるなどは。みな人の知たる通りのことぢや。然るを外宮の禰宜たちが。初は空海が惡巧

みに。かぶれたといへども。次々に兩部習合本地垂跡を。わざと委くものすると云は。苦々しいことぢや。是に付て。伊勢の大御神の。實以て佛はきつく御忌あそばさるゝ。屹といたしたる事實を一つ二つ申さば。まづ古くは稱德天皇の御紀。天平神護二年七月丙子の所に。遣使造丈六佛像於伊勢太神宮寺と云ことありて。彼の聖武天皇の。東大寺の大佛を御作りなされたるよりは。二十年ばかり後なれど。伊勢の大宮近くに。佛像を作り置せられたるは。此時が始めぢや。然るに此のち。光仁天皇の寶龜三年八月の處に。徙度會神宮寺於飯高郡度瀨山房と有り。こゝには何の故と云ことは見えねど。同十一年二月の條に。神祇官言。伊勢大神宮寺。先爲有祟。遷建他所。而今近神郡。其祟未止。除飯野郡之外。移造便所者許之とある。此文に先爲有祟遷建所とあれば。寶龜三年に。度瀨山房に御徙させなされたるは。御祟りの有たる故なること論なし。是古く大御神の佛を嫌ひ給ふ事の。明かなる證文ぢや。また類聚國史に。弘仁七年六月丙辰。伊勢大神宮司。從七位下。大中臣朝臣清持。有犯穢並行佛事。

神祇官卜之有祟。科大祓解見任と見え。また宇治左大臣賴長公の台記に。近衛天皇の天養二年三月七日。左馬權頭顯定來云。左大將雅定。伊勢勅使。精進之間。雖渡他所。衣裳雜具等。猶在中院第。仍佛經等。不置家中。而中院寢殿有煙。件煙見屋上。隣里驚存放火由。驚放天井見之。有繪像佛五體。色旗等。出件物於門外之後煙散盡。と見え。また三條內大臣實房公。高倉天皇の治承元年に。公卿勅使を勤められしときの自記に。十五日の下に。去夜夢僧侶於佛經籍者先日併取去了。然而驚夢告。令搜求之處。出居廊長押上見出楊柳觀音一體。則以取退了。信心彌疑。謹愼殊重可恐々々。又行國同有夢想事。又障子色紙形畫圖。有僧法師等。或人云。是繪像佛同事也。雖強事取退了。敬神之至。以重爲先之故也。と見え又その翌る十六日の下に。去夜夢想。又見僧侶眼前謁談之由也。佛像併取去了。爲之如何備思之。裡錦之護等。不可憚之由。先日兼康所聽也。仍手朝夕所懸之護。奉神事之後。不懸之。只置寢所枕上也。若是等佛像所見歟。爲相試今夜之告併渡他所了。兼光并小女之護。同以渡了。

と記して。又其あくる十七日の下に。去夜無謂僧徒之夢。知去夜夢想彼護等所見歟。毎度嚴重。彌成信者也とある。此れらの類ひを讀で。よく心得べきことぢや。扨右らに依て思ふに。聖武天皇の御世に。盧舍那の大佛御建立のことを。大御神の御望みなされたる由に。御神託の有たと云は。行基僧が奸術の僞なること。彌以て明かぢや。夫はいかにと云に。先日申したる如く。行基が佛の舍利一粒を持て。神宮へ參りたる所が。我今逢難遭大願如渡得船。又受難得寶珠如暗得炬。師其持舍利藏埋飯高郷と大御神の仰せらるゝ程に。佛事を深く御懇望のことならば。寺院の大宮近くあるを。きつく御嫌ひなさるべき謂れは有るまじきことぢや。抑いかなるゆゑに依て。佛を御嫌ひなさるゝと云ふことは。神の御心なれば。測り奉り難きことなれど。强て按ずるに。元來僧の行狀と云物は。君親妻子を棄て。人の人たる道を失ひ。また其食は。朝夕人の門に立て食を乞ひ食ふこれを正命の食と云故に法界のけがれ大に混じ。また僧の法は。人の棄てたる衣服を着て。此を正法の衣と云。かゝる不潔の物を服する者。今の世には無れども。其の法はかくの如くなれば不淨なる故に。御忌みなさるゝことゝ思はるゝ。まして親しく死穢にふれたり。葬送を業と致しもするから。祝儀よろこび神祭には憚るべきこと。こゝで神の御嫌ひなさるゝで有ませう。かやうの訣故に。伊勢の大御神にさゝぐる宣命などには。決して佛臭きことや。抹香くさきことは御忌みなさるゝ。朝廷の御定めぢや。其れは月輪攝政兼實公の著はされたる玉葉と申すは。古實を知るに結搆なる書物で有るが。それに記されたることに。大きに心得ておくべきことがある。夫は建久四年正月四日。十二社奉幣。大内記宗業。内覽宣命草。其狀曰。祈神道佛界之由載之。余難云。於伊勢者。不載三寶字。依他事自然有件字。猶先例削除之。何況正稱佛界哉。若有先例歟。如何陳曰。他社宣命無憚。於伊勢者素可改之由所存也。重仰曰。此申狀太無謂。我朝之習以伊勢事爲本。爭以所載他社之狀草奏哉。太以不當。雖須召過狀。年始最初之御祈也。有人愁不可宥。仍宥之仰子細。敢無披陳之方歟。とあるが。かやうのことは。よ

く辨へておくが宜しい。然るを外宮の禰宜等が。いづれも〳〵やんごとなき神の子孫として。甚も〳〵止んごとなき神に仕へ奉る身の上に在りながら。中子が教をいひ弘むる。穢らはしき妖僧が。悪巧に一致して。おのれが悪慾の爲に。神を佛の垂跡ぢやなどゝ云ことを始めらるゝと云は。思へばよく神罰もあたらぬことぢや。と思はれる。朝廷の律令の御定めに依て。これを定むる時は。まづ僧尼令に。凡僧尼假說災祥語及國家妖惑百姓依法律付官司科罪。と有て。其法律は。賊盜律に。凡造妖書及妖言遠流。傳用以惑衆者亦如之。言理無害者杖六十。私有妖書雖不行用杖八十。言理無害者笞四十とある。これらの御文面に依て考へ見れば。なんと外宮の人々。および行基をはじめ。傳教空海が輩の罪はどうであらう。又なんと五部書の類ひは。妖書ではあるまいか。實相眞如之日輪などゝ云ふ類の。いつはり神託は。妖言ではあるまいか本地垂跡兩部を始めたる僧ども。外宮の禰宜たち。どうかいふ。時のいはゆる廻り合せがよくて。島流しか。たゞきの罪を遁れたのぢや。既に先年常憲院殿の御代に。

上州館林の廣濟寺と云禪寺の住職に潮音といふ者その御智識のきこえ有たる者で。これが。志摩の國伊雜宮の神主が家に。古き僞書の少しばかり有りたるを元として。加筆忘作増補いたし。七十二卷に書きひろめ。此を聖德太子の眞本だと申して。印板にして世に行つた。舊事大成經と云はこのことぢや。是は伊雜の宮の神主と。潮音と相謀て。伊雜の宮は。天照大御神の御本宮だと云ひかすめて。伊勢の神宮を壓んと巧み。其證據に引うとて。僞作した物ぢや。所が天和元年に。その僞作のことが顯はれて。伊雜の宮の神主永野采女も。かの潮音も。流罪に仰せ付られ。大成經の刻版。並に所々へ賣り遣はしたる版本を。取集て。御燒捨になり。夫れを開板したる書林。豊島屋豊八と云者も。追放せられた所が。この潮音は。將軍家の御母君。一位樣の。御歸依遊ばしたる僧で有たる故。其御願に依て。流刑をは御宥恕あッて。上野の國黑瀧山へ轉住仰せ付られたことがある。空海が外宮の禰宜たちをそゝのかし。本地垂跡を云ひ廣め。寶基本記などの書を作つて。内宮を壓うと致したるわる巧みと。よう似たことぢや。さ

かく坊主と云者は。名僧智識の聞えが有ても。ゆだんのならぬものなることは。行基。傳敎。弘法。また潮音らがことを思ひ合せても知るが宜しい。

○さて空海傳敎らが巧める如く。とう〲神社々々を。大かたは兩部習合にして。宮造りの狀より。神前のかざり祭り方なども。佛ざまを混ずるやうに相なり。神前におく獅子と云物は。元來天竺では。人の死からだを埋めた所に。その死骸を。獸の爲に食れん事を恐れて。獅子は猛き物で。諸獸の恐るゝものの故におく事なるを。神社にする。また二王など云ふ。をかしな物を立せおき。また人には。彼の謂ゆる一代の守り本尊。など云ものを造て信じさせ。この餘かぞへも盡されぬほど。穢きことゞもは多くあるが。この守本尊の事に付て。中村平吾三近子と云者の著はしたる。兒戲笑談といふ滑稽ぶみに。をかしな事を云てある。夫は人間に推なくて。一代の守本尊と云が有て。其身を守護し給ふ由なり。是ほど結構なる守護は有べからず。殊に大日。不動。觀音。普賢など云ふ勝れたる。一枚看板の佛菩薩たちが。乘うつりて付添給ふに。何なれば惡逆不道をなし。家を燒き人を殺し。盜賊密夫などいふ。大それたる事を仕出し。多病早死。貧苦横難の不幸ひの限りなくある。此等を守本尊として。見給ひながら。きよろりとして居給ひ。今はかうよと見えし場も救はず。空しく見遁しに爲給ふことぞ。何を守り給ふことぞ不審ばれ叵し。人間にても。或は喧嘩口論の場に行かゝりては。雙方無難に取しづめ。武士たる者は。時宜により。助太刀をなす。まして守本尊は然あるべし。男女の色に迫りて心中とて。二ッともなき命を。互ひに突きつらぬかれて。死するほどの場所に。守本尊は。何をして居給ふことぞ。大經師。おさん茂兵衞が密夫の時分も。おさんは勢至菩薩。茂兵衞は普賢菩薩が。守本尊のよし。一代の附添なれば。たまたま本尊衆が留守なることもある內に。間男せまじきものにもあらねど。其後ながき牢舍のうち。さて御仕置の時分。何なりとも。守本尊かけつけて。ここは助け給ふべき筈なるに。やはり其通りに見捨給ふは。守本尊の役義が立ぬことぞ。かく云へばとて。惡口にてもなく。理屈ばかりで詰ると云にても無けれど。學問の道は究理といひて。疑はしきことは。

いつくまでも繹究むる道なり。僧に問へば。悪人貪著には。守本尊も退給ふと云へり。それは近頃水くさき心かな。それでは佛も。襟につき給ふ道理也。善人はさして悪きこともせぬ故。守護に及ばず。悪人にこそ守りに油斷なく。不道をさせぬやうに世話やきたまふこそ。本意なるべし。かしくと云へる辻放下が。人間一代の守本尊は。佛菩薩より飯と汁との二つなり。貴賤共に此二つの守本尊に見限らるゝと。この世の暇乞ぞといひしは名言也。と申したが。大きにおもしろき説ぢや。鈴の屋の翁の歌に。「あだ言もよめば讀かひ有るものを。いづれの書かよまで捨べき。」と詠れましたが。何にもさること故。かやうの書も暇あらば。隨分よみ見るべきことゝ思はれる。

○扨これは。みな心得ても居られようが。序だに依てまをすが。外宮の神様は。先に申す如く。衣食住の御神。豐受姫神と申上て。五穀及び上天皇より下萬氏までの。日毎にたうべる食物を。御主宰あそばして居させらるゝ神様で。これは人ばかりでなく。天照大御神を始め參らせ。神々のめし上り物までを。御司どりあそばされて。天に於ては。天照大御神すら。御みづから御祭りあそばさるゝ程の。世にやんごとなき神様ぢや。夫ゆゑ皇孫命の。近き御守り神と御定めあそばして。御天降りの砌。その御靈を御付なされて御下しなされ。雄略天皇の御代五年までは。丹波の國に御社の有たる所を。天照大御神が。雄略天皇の御夢に御誨しあそばすには。吾。高天原坐氏。見志眞岐賜志處爾。志都眞利坐奴。然。吾一所耳。坐波甚苦。加以大御饌毛安不聞食坐故爾。丹波國比沼乃眞奈井爾坐。我御饌都神。等由氣大神乎。我許欲。と御覺し遊ばされたる故。天皇にも驚き思し召て。今の處へ御移しあそばし。それより致して。今以て內宮の朝夕の御饌をば。日毎に外宮より調じて。差上らるゝことぢや。ところを外宮の人々。先に申す通りのわる巧みを致して。國の常立の神ぢやなどゝ申して。此の事昔より幾度となく。內宮の人人と爭論が有ていつでも負る。夫でも今以てとかく。國常立の神を云ひたがり。又御祓などを配るにも。田舍の人々などの知らぬこと故。やはり天照大御神のかほに紛らしてくばる。始めは皇太神宮。と記し

なども致したる所を。近ごろは。內宮の方からきめられて。それも止めになッて。たゞ太神宮とばかり記してある。こゝらの訣を能く心得て。たゞ太神宮とばかりある御祓のみを。入れ置るゝ方々は。內宮の御祓をも受け。また內宮ばかりの御祓を入れおかるゝ人々は。外宮の御祓をも。共にうけ奉るべきことぢや。天照大御神の御誨し言に。豊受の神が。側に坐まさねば。大御饌も心安くきこし食さぬと仰せられたを思へば。朝夕に献る御酒なども。御心よく聞しめさぬ事であらうに依て。何れにも此の二柱ともに。受奉つて。齋き奉るべきことぢや。さて鈴の屋の翁の集に。さき竹の辨のしりへに添むとて。詠ける歌。と有て。「外つ宮を國の常立とこだちと。よそりなきこと云ふは誰が言。「外つ宮の神は天照日神の。いつき奉らす御食の大神。と記しおかれて有まする。

伊勢の宮へ凡人の參詣致し。物など奉る事の古き御定は。延暦の儀式帳に。王臣家。幷諸民之不レ令レ進ニ幣帛ニ。重禁斷。若以ニ斯事ニ幣帛進人遠波。準ニ流罪ニと見ゆ。また延喜式には。凡王臣以下不レ得ニ輙供ニ太神幣帛ニ。其三后皇太子。若有ニ應レ供者ニ。臨時奏聞とあり。また長寛勘文といふものには。伊勢神宮者。禁ニ斷私幣ニ。忌ニ憚佛事ニなどゝ相見えて。かやうに古へは嚴重に御定めの有たることで。こりやみな伊勢の大御神を。殊更に御崇敬あそばしてのことぢや。然るを今は。諸民の賤き輩までも。物など捧げをろがみ奉り。剰へに賤しきしづの男。この方らが家々までも。大麻をその御像代として。齋き祝ひ奉るやうにさへ成たるは。いつの頃よりのことかと申すに。まづ古へには僧家より。其祈禱の卷數を。その檀那に贈つたもので。其卷數とは。大般若經一部。仁王經百卷。心經千卷などやうに。讀誦したる卷の數を。目錄に記したるもので。是より移つて。諸社の神主もまた卷數を大家に奉つたと見えて。續千載集に。住吉の神主國平。大宮院に御卷數奉るとて。松が枝に付たるを見て。女房に代りて。「ちとせとも祈るしるしの言のはを。結びやつくる住よしの松。」と詠る歌があるから。神社も習合の忘說におち入て。卷數を用ひたるは古きことゝ見ゆる。古書に大麻を奉るとあるは各別のことで。千度萬度の祓したる麻を奉たこと

ではない。其は古へには神八郡。或は三郡などゝ申て。朝廷より諸國へ詔が有て。御厨神戸等。その貢物も夥しく有たる故。大宮に仕へ奉る人々。家々。ことごとく豐饒にくらしの成たもの故のことぢや。所をかの保元平治の亂れ。源平の軍ありし時分からいたして。段々世の中亂りがはしく。足利の時分には諸國より朝廷への御調さへ。運送たえた程のことゆゑ。大御神への貢物なども。諸國より送ることとんと絶たる事も暫く有た程のことぢやと申すが其砌佛者どもは。かねて兩宮を。佛ざまにせんと心がけ居ること故。神宮のおとろへ。兩宮の禰宜神主たちの。難義の所へ付入て。そゝのがし申し進めて。內外宮ともに。佛法の法樂と云わざより起して。太神宮の法樂といふことを始め。兩宮の法樂舍と申す坊舍を。山田に三坊。宇治に七坊こしらへて。祈禱の爲め。大神宮へ法樂として。仁王經。般若心經。或は金光明最勝王經などをよみ上げて。其卷數を記したる札。また大麻を。其頃は代僧を以て。亂の中ながら緣を求めて。諸國の家々へ。初穗を取て配り賣たと云ことぢや。但しかやうの爲方も。外宮山田の方で。中つ世より專ら致したる事。さやうに年々いたすこと故。いはゆる得意のやうに成て。僧家の師檀の如くになり。すなはち檀家とも檀那ともいへば。檀家の方からも。其配りあるく僧どもを。佛ことばで師と呼び。また御師なども申たものぢや。さてかやうに致したに依て。遠國の人もよく是を知て。參宮したる時は。先立にその御師を賴みなんどせし程に。いつとなく山田は所も賑やかに。家も立つゞき。廣くなり榮えたるが。宇治は右の如く。卷數大麻などを賣あるかなんだ故。その所も淋しく狹かッたことぢや。その上に豐臣秀吉公の。神地の封戸を掠めてこのかた。祠官たちが恒の產なく。是より山田のするに習ひ漸に麻箱土產を送り始めて。今は遠國迄も。持行くやうに成たれども。檀家は山田の十が二もなく故に宇治は所も今以て狹く。不繁昌で有まする。

○其後は段々かの僧どもゝ。ことも多く奢りも付て。又その手に代る者を拵へ。これは俗人で。何太夫などゝ云名をつけ。かの僧どもの代官として諸國へ廻り。例の佛經の卷數を配りあるきたる所が。かの檀家でも。先には僧を御師と云たる癖がやまんで。是

をも俗人ながら御師と申したと云ことで。之が今のいはゆる御師のはじめで。實は法師をさして申したことで。即佛語ぢや。夫故外宮の神主出口延佳など。それを否がツて。詔刀師などゝ云號を付たなれ共。たゞ名ばかりが詔刀師で。參宮の人へ詔刀を教授すると云こともなく。やツぱり法師の師の字は遁れぬぢや。また近頃天野信景が。鹽尻を見れば。神宮の祠官などを。御師と自稱ふること東鑑なんどに云へるは。御祈師の略なりと云ふ。さも有べし。但し源氏物語玉かつらの巻に。初瀬の僧を御師といへることあり。是も祈の師を云めり。されば神人佛者おしなべて。祈りする者を崇めて。御師と云にやあらん。僧家の名目を取りて。檀那とさへいへば。御師の名も。本は佛者よりいひ初めたる事なるべし。御師と云ふこと。他よりいはゞ可なり。自稱するはかたはら痛し。と云置ましたが。尤なことぢや。又右の巻數箱も一變して。御祓箱と稱し。ぬさの木を入れて配るやうに成たれども。其以前は。兩宮ともに浮屠師の輩が交り居たるゆゑ。中頃までの御祓箱の銘には。伊勢兩宮二天八王子諸神諸佛と書たるも有り。

また渡海祈禱の祓箱には。兩太神宮八大龍王守と書き。或は春日大明神。八幡大菩薩伍大力菩薩などゝも書き添て配つたと申すことが。寛文年中の。御祓の銘諍論記。と申すに委しく記してある。右の如く麻箱をくばることは。もと佛家より移り來たることゆゑ。千度の祓。萬度の祓などゝ記したる狀が。巻數に似てゐる。また札守りと云ものも。本は故由あることなれども。今神職たちのする處は。大てい佛家から來たことぢや。さて右に申したる。七坊三坊の寺も。今に宇治と山田に殘つて有るさうぢや。但し三坊と云名は。元の儘ながら。わけは古來と違つて居る。其訣は。慶長五年。關ヶ原御陣の後。諸國の神社の社家等が。悉く罷出で。御勝利の御賀を申上たる砌。山田にある。三坊の師職ども相談して。東照宮の御在京なされたる砌。まかり出て申上る。これは山田の内。岩淵。中の郷。二タ俣。三郷の者ども。都合二十三人。尤この節勝手もよろしく。氣性も强き者等ばかりが出た事で。誰にても。此時に出れば。三方の内に入る所で有たなれども。漸々三坊三組の内から。たゞ二十三人出たる故。この者へ。

神君より御朱印を下され。山田三郷の仕置は。有來りの通り。この三郷で。二十三人の者どもより合ひ。仕置致すべきよしを。御免なし下され。今に於て。山田では三方會合と申すさうぢや。また內宮がた。宇治の七坊も。山田と同じく。御師職の者ども相談して。外宮方よりは。一兩年も過ぎて。御悦を申上げ。此はやゝ治世に成て罷出たること故。山田よりも却て人數多く。都合五十三人出たる所が。是にも御朱印を下されて。年寄會合と。今に唱へるのが。この子孫と申すとぢや。さて宇治の七坊は。今は坊と申す名目をば止めて申さぬが。山田は今以て三ばうと申す。然れども坊の字を。方の字に書かへて。三方と申すが。この事は御師の方では。きつく忌隱して。決して申さぬことぢやと聞て居る。但し坊といふ名目の。今はさッぱり無くなつたと申すでもないことは。今も太々神樂を執行の時など。講中の者などが。御師の宅へ到著致したるを。坊入りと申すぢや。また伊勢講と云ふことのあるに付て。これも信景が說に。昔佛家に觀音講あり。近世伊勢講と稱し。結衆して錢を集め。貸して其息を殖し。參宮の費に供ふ。これ市井の人。路費の備へなき者の爲にして。近年の俗かと思へば。永祿中已にこの事あり。室町日記に。大家坊と云僧。伊勢講中の置錢を方々より借用し。何れも返辨せざりしかば。撿斷所へ訴へ出たる故。それを濟すべきよし申付たることありと云へり。實にこの頃より有たることゝ見ゆる。

扨この御祓と申て配るわけは。伊勢で八座置の神事と申て。甚だ深祕と致すことがある。夫れはかの一切成就の祓といふを。數とりを以て執行いたし。千度を千度祓といひ。一萬たびを一萬度の祓と申て。其數取の麻を箱へ入れて。それを御祓と稱へ。ふたがひに神の御形代として。をがみ奉るのが是ぢや。また當時諸國および江戸表へ。御祓くばりに參る者は。かの御師職の手代どもで。是を代官と申すが。御師どもが自身に出ると云ことはない。夫故身上のよろしい御師は。右の代官どもを。己れが家來から差出す。また輕き御師は。家來がないに依て。手代どもを。五人三人申合せて受持にさせることぢや。

また御師より。諸國へくばる御祓箱に添て。土產と

して。のしあはびなど、新暦を配ることも。戰國のみぎりは。遠國などでは京都へ遠いに依て。暦を求めたること。容易には出來ぬ。そこで右の代官どもへ。外の品を土産に持參致すよりは。何卒京都より暦を求めくれよと。所々から頼まれる。そこで求めて。送り〳〵致したる所が。いつとなく伊勢から。暦を配ることに成たものと申すことぢや。

〇扨また往古より致して。伊豆の國には。暦の博士が居つて。三島明神の下社家。川合龍節と申す暦師が配り。公儀へも暦を献上いたし來れること故。伊豆一个國は。伊勢暦を停止被仰付たと申すことぢや。但し右伊勢暦の出處は。毎年祭主藤浪家より。朝廷へ御奏達あッて。土御門家の暦を寫本で申うけ。夫を伊勢で板行に致すことで。右暦師は宇治に居て。佐藤伊織と申すが。實は町人で。紙屋茂兵衛と申して。これは藤浪家の御家來分で。御由緒もある家柄だと申すことで。外宮には暦屋五軒もある。尤も古來の暦は。口の所へ繪の圖などをかき。頭書に傳暦抄などゝ書たるも有て。實は埒もないもので有たことぢや。

さて神社々々は畏くも年をふるまに〳〵。傳教弘法らが惡巧みのごとく。漸々に御衰へあそばし。とう今眼前に見るが如く成ましたが。扨々いきどほろしきことで。是につけて先師の玉勝間に。此ことを歎きおかれたる條を。二三條よみませう。それはまづ藤波の卷にいはれたるには。「和泉志と云ふ書に。彼國の大鳥神社の御事をしるせるを見るに。慶長中罹兵火。元祿中僧快圓。興建神鳳寺於域内。寺隅僅存小祠。としるせるを見て。涙もこぼるゝばかり悲しくぞおぼゆる。此の神社は。神名帳に。大鳥の郡大鳥神社。名神大。月次。新嘗と見ゆ。高き御位をも授奉り給へる。御社に坐ますものを。其域をしも佛どころにしなしたる。禍津日のしわざは爲方もなき物なりけり。さて御社は。その片隅に僅に殘りて坐ますらんほどよ。詣ては見奉らねど。思ひやり奉るだに悲しきを。悲しと見奉る人のなきは何にぞや。大かた國々に。かゝる類ひ多かるべきを。今はたま〳〵之をかの書に見當りたる儘に。あまりの歎かはしさに得たへで。かくは驚かしおくなり。あはれかゝることに心ざし有らん人もがな。と申され。

又よの人の。神社は物さびたるを尊しとすることゝ云ふ條に。「今の世の人。神の御社はさびしく物淋たるを。たふとしと思ふは。いにしへ神社の盛なりし。世の樣をば知らずして。たゞ今の世に。大かた古く尊き神社どもは。太じく衰へて荒たるを見なれて。ふるく尊き神社は。固よりかくある物と心得たるからの非事なり。云々。」又いはれしは。「よろづよりも世の中に願はしきは。いかで諸々の神の社の衰へをもて直し。もろ／＼の神わざを興さまほしくこそ。今の世の神社神事のさまは。大抵中ごろの亂世に。甚くおとろへ廢れたる儘なる。今の世の人は。たゞ今のさまをのみ見て。古へよりかゝる物ぞと思ひたんめる。まれ／＼書をよむ人なども。たゞ漢籍をのみむねとは讀て。其心もて萬づをさだして。皇國の古き書どもをば。をさ／＼よむ人も無ければ。古への御世には。神の社神事を。むねと重くし給ひしことをばしらず。又まれには知れる人も有れども。なほ今の世のならひに紛れては。古へを思ひ比べて。之を深く歎く人のなきこそ。いと悲しけれ。」と云ひおかれ。また同じふみ。花の雪と云卷に。神をなほざりに思ひ奉る世の習ひを悲しむことゝ云一條を記して。其いはれますには。「世の人の神を等閑に思奉るは。返す／＼心うきわざなり。さるは程々に尊とみ奉らぬにしも非ざんめれど。唯世の習ひの。人なみ／＼のかいなでの尊みのみこそあれ。實に心にしめて尊み奉るべきことを思ひ辨へず。たゞ粗略にぞ思ひためる。目にこそ見えね。この天地萬物の出來始めしも。又むかし今の世の中の。大き小き諸の事も。人の身の上。くひ物著物居どころ。何くれもろ／＼のことも。悉く神の御惠みに係らざること無きを。さる故由をは忘れはてゝ。なべての人。たゞ禍津日の枉事にのみまじこり。心を傾けて。萬にさかしだつ人。はた漢籍意を心とはして。希々に神代の御事どもを聞ても。たゞ遙けき世界の昔語をきくがごと。よそげにのみ思ひ過して。そは皆今の世の中。おのが身々の上に係れる本なることを思ひたどらず。よろづよりも悲きは。神の社神事の衰なるを。かばかりめでたき御代にしも。諸ゝ古き神の御社どもの。太じく衰ませるを。直し立て奉らんの。心ざしある人の。世に出來ぬこそ。甚も／＼くち惜け

れ。そも／＼宣長。かゝるすぢの事を。返す返すいひ出るを。人はうるさしとも思ふらめど。此事の慨さの。朝暮心に忘るゝ間もなくおぼゆるから。筆だにされば。書いでまほしくてなん。「治まれる御代の印を千木高く。神の社に見る由もがな。」と記し置れましたが。凡て／＼尤なることで有まする。之につけて篤胤。この大人の教へに從ひ初てより。いかでいかで此の御心を紹で。古道を說弘め。世に普くしらさんと。負氣なくも思ひ起して。世の古學者と名稱る人々は。歌物語ぶみをのみ讀耽りて。道のことをば等閑に捨おき。かばかり大人の筆とる毎に。驚かしおかれたる御心を。紹てんとする人も。之なきことを口惜く。大人の教子の中にては。末とも末なる。其末の席より。かき分けさし出て。古道の心を說き明し。世に有らゆる邪道を。辨へ正し言ひ破るを。生狡意の學者などは。世の有狀の移り行く。眞の道を知らで居るから。さこそ密には。大海を手して塞がんとする癡心よと。いひも思ひもいたさうが。さる人は何にもいへ。この己が學び得たる正道の意を世に普ねくしき及ぼし。むしろ死すとも其靈を世に遺し。かの楠正成ぬしの云はれし如く。最期の一念に依て生をひき。その靈を後の世の心ある者の心に移し。かく爲つゝとしを經るうちには。世にある横さの道々を。盡くに失ひはてんと云靈の眞柱つき立て。かく諸道を辨へ糺し云ひ破る篤胤が魂で。中生ごゝろの輩などの。燕雀なんぞ鴻鵠の志を知らん。その小鳥どもの心に。量り知らるゝ。小きたましひではないぢや。其れはまづ佛道の世に弘まれる沿革を。熱々考ふるに。かの繼體天皇の御代に。渡り來れる初めには。誰も信ずる者なく。欽明天皇の御代に。表立て渡り來ても。やう／＼馬子がたぐひ。一人二人ならでは信ずる者なく。それは上には。聖德太子の權威を以て推掠め。篤く敬二三寶一。三寶者四生之終歸。萬國之極宗也。などゝ嚴しく信じさせんとせられ。或は片岡の飢人の類の。廻し者をなされなどもして。色々に民を御導きなされたなれ共。其後九十五六年あッて。孝德天皇の御代に。百八十の臣等に。いかにしてば民を悦ばする御政ならんと。御問ひあそばしたる時。みな申すには先以祭二鎭神祇一。然後應レ議二政事一と申たる程のこと。扨この後ま

た九十五六年後。聖武天皇の御代に。奈良の大佛を御建立あそばさうとする時に。神も人も受まじきことを思し召て。大御神に伺ひ坐まし。また行基らも。佛のみにては。人の信ずまじきことを計つて。かの奸計を巧み。さて後に。傳敎弘法らの妖法師どもゝ。己が道のみ獨は立がたきことを考へて。行基が奸計に習ひ。世々の法師どもが。千慮萬謀。悪智慧の限りを振つて。終々今の如くにはなッたものぢや。但し今の世は。佛法さかんのやうなれども。中つ世の盛なるに比べては甚く衰へ。これは先師もいひおかれたる通り。佛經の亡びくちはやゝ立てをる。此はけだし直日神の御靈のはや驗ある所ぢや。但しこれもから人孔子が十世知ぬべしと申たる如く。ごう云所の綻びより。終に亡ぶると云ことまで。古學の眼を以ては。よく見え分るすぢぢや。かゝる世に生れ合せたるこそ。幸ひとも幸のこと故。古學を委しくして。其正實の動くまじき説を以て。横さの道々を。辨へ糺しい破らんに。終にはなどか此正道の弘まらんであらうぞ。それは外國より渡り來し。佛法のをそ說。よこさまごとですら。年を經る間には。かくはえつきの正道をさへに押隱して弘まるやうに成たるを。況て正道のひろまるは。元に歸るのぢやに依て。之はなほ速かなるべきこと。云ふまでも無く。あら〳〵快きかな時すでに至つたに依て。篤胤が導きに隨はるゝ人々は。晝夜を捨てず勵み勉めて。まづ本を堅めらるゝやうに致されて。この機會を失はず。末の世に至ても文化の頃の何の何某と。普くの世の人に知らるゝばかり。功を立るなどは姑らくおいても。鈴の屋の翁が。「佛らは玉のうてなに齋かえて。神は雨もる小屋のしき屋に。又「法師らは雲に飛ぶ世をふせ菴に。屈みてふるが神の宮人。と詠れたる如く。いかに口をしく憤ろしきことではないかな。

○又こゝにいさゝか考へたることの有るは。古へは右申したる儀式帳。また延喜式などに見えたる通り。庶人などは中々以て。伊勢の大御神へ物奉ることはさておき。拜み奉ることさへ。容易には出來なんだ所を。毎度も申す通り。佛道が根ざしと成て世も亂れ。夫にのッて佛わざ佛の道も世に弘がり。遂には伊勢の兩宮までも右の通りに佛法に御かぶれ遊

ばし。夫より此御祓を配ることにも相成り。今では法花宗。一向宗と云ねぢけ心の宗旨を除くの外は。誰が家にもかの御祓を受奉つて。拜み奉るやうに相成り。佛のみは信せぬやうになつて居るのも。中昔などの思ひをすれば。世の中みな佛法にのみ成はてるかと。按じられるを。其の佛わざの弘まる因みに。古へには容易くまうで奉ることさへ叶はざりし大御神の宮へ。恐れながら物さへ奉るやうにも相成り。家毎にその神の宮をしつらひて。祭りもし奉ると申すは。之も偏へに神の御心で。かやうになり來つたること申すまではなく。中には佛のいやしく。神の有がたき故由などを辨へられて。宗と神を尊まるゝやからも。月々日々に多く相成り。諸國の神社の社家等にも。大きにこゝらを。心づかるゝ人々が出らるゝ樣子で。今はなるたけ佛わざの交りあるを取のけんと致すやうにも成ゆく所を。熟々思ひ廻らすに。そろ〳〵古へに復るべききざしが見えて。大ぶおもしろく成て來たことで。師の翁が歌に。「吉きことに凶事いつぎまがことに。よきこといつぐ世の中の道。」と詠れたはこゝらのことぢや。之を思ふに鈴の屋の翁の道を説かれたる時分は。かの歌によまれたる通り。「まがつひい世人の耳か塞ぐらん。まこと談ればきく人のなきと詠おかれたる。其禍神の御手を。世の人の耳よりはなし給ふことかと思へば。嬉しく有難くて。涙さへこぼれる程のことで。篤胤は内外のわざに胸ぐるしきこと。力車に七車。しよツても立れぬほど有るなれども。其れは心と致さず。唯々人の聞とりよいやうにと。演説の草稿を認めるにも。夜とてもたんとは臥せらず。居る程のことなれども。身も心もすが〳〵しく。之も偏へに神の御靈と。有がたいことでござる。

○豐彭曰く。この最澄空海兩僧が。神祇の本傳を剽掠して。生涯奸惡を爲せる事どもの大略は。此書に見えたれども。其等の業報に因て。妖魔と成り。今に其山々に在住して。世々に其異驗を現せることの考證は。古今妖魔考に記され。佛法を弘めたることの趣きは。印度藏志に。委しく論辨せられたるを見て知るべし。

俗神道大意三之巻

平篤胤講說　門人等聞書

さて今日より論辨いたす所は。俗に謂ゆる唯一神道の論辨ぢやが。夫に付て。上古の事はまづ暫く措て。今の世にいはゆる。神祇の四姓と云ことをば。早く心得居べきことぢや。さて其の四姓と云は。王氏。中臣氏。齋部氏。卜部氏。この四姓の方々が。神祇祭祀の事に預らるゝに依て。これを神祇の四姓とは申すのぢや。此の中に。まづ第一に王氏と申は。白川家のことぢやが。抑この御家は。六十五代花山天皇の皇子に。清仁親王と申すがおはし坐て。其の御子に。延信王と申すが有て。これは六十九代。後朱雀天皇の寬德年中に。勅定有て。神祇の伯に補任せられてより以來。當職資延王殿まで。代數三十餘代。年數八百年にちかく。連綿として。伯職を相續いたされ。尤も源姓は賜つてあるなれども。代ごとに伯職拜任の日に。勅定有て。王氏に復せられ。此の御家ばかりは。代々王孫として。臣列に御下しなさらぬが定例で。外には例なく。尊き御家柄ぢや。右の譯ゆゑ。延信王。資延王など。實名の下に。王の字を加へて申すことで。尤も此れは。白川家一家に限ることぢや。扨この御家に。代々任せらるゝ。神祇伯と申す職掌の事は。まづ古く。令の御文面に。神祇。祭祀。祝部。神戸。名籍。大嘗。鎭魂。御巫。卜兆。官事を摠判することを掌る。と有て。すべて朝廷の御神事の典を掌られ。さて諸國の神社の神主祝を。こと〳〵く支配なされ。また御巫と申て。神神に御禱をいたす。某々の勤むきを視正され。また重き御神事には。卜部どもに仰せ付られて。龜卜と申て。龜甲を燒て卜せらるゝことがある。其事どもを令せらるゝことをも知り。惣じて神祇に預ること其を。判斷せらるゝが。神祇伯の職掌ぢや。さてその神祇伯の伯と云ことは。惣つかさと云ことで。すなはち令の集解に。伯は長也と有て。神祇道の長官統領と云は。この伯職のことぢやが。そも〳〵この伯職の根源は御國は神の御國なるが故に。神を大切に御齋きあそばすが。天皇の天の下を御治め遊ばす。御政事の本ぢやに依て。上古には。天皇御自ら。右申たる伯職の掌らるゝことを。御勤めあそばしたる

ことで。それはよく。古事記。書紀。古語拾遺などを讀て。知るがよろしいぢや。扨かくの如く。御神事が。御政事の本で。御神事やがて御政事ぢやに依て。政事の政の字を。まつりごとゝ訓むも。此のいはれぢや。かくて後の世となつて。神事と政事とを別に分ちて。それ〳〵に官を御立なされ。御神事に預る官を。神祇官と申し。天皇の御手代りとして。その神事の本を掌る官人を。御任じなされて。それを神祇伯と稱し。また御政事に預る官を。太政官と申して。二つにわかッたなれども。神を重んじなさるゝが。道の本である故に。職員令に。神祇官を太政官の上に立られ。それは後世に出來たる職原抄などでも。その御定めで。今もその如くぢや。さて伯職はかく重き職ぢやに依て。中頃までは。諸國の神主祝をはじめ。禰宜社人などの刑罪仕置までを。判斷せられたものぢやが。それより武家にて。天下の仕置致さるゝやうになッてこのかた。今では寺社奉行の懸りとなつたぢや。然れども伯職で。甚だ重く。天皇の御代々。神拜の式等御師範申上られて。天皇の日々の御神拜に。もし御障りあらせられて。御闕拜のときは。伯殿御代拜いたされ。其時は女房奉書と申て。勾當の內侍の御許より。「あすよりの御拜。御代官つとめられ候やうに。申入られ候かしく。伯二位どのへ」。と申す綸旨を賜はる。そこで日々の御代拜をいたさるゝことぢや。もし伯殿にも御さはり有て。御代拜つとめられがたき時は。關白殿下へ。御代拜を仰せ付らるゝ。こゝを以て。神祇伯職の重きことを知るが宜しい。則內侍所の御守護。八神殿の預り。宮中御定例の御神事は申すに及ばず。盡く伯家の職掌で。五攝家に於ても。攝政關白に任せらるゝときは。必ず伯家の神式。御相傳を受させられ。それまでは。四垂の忌繩を用ひられたる家も。伯家の式の如く。八垂に改めらるゝが古實ぢや。これがまづ神祇の長官。伯家のあらましを申すのぢや。○第二に中臣氏と申すは。其の遠祖は。天兒屋根命と申して。これは皇御孫邇々藝命。御天降のとき。皇産靈御神。天照大御神の御依しあそばして。皇御孫命の供奉の臣列。第一の神におはし坐て。皇御孫命に補佐なされ。またかの天照大御神の。岩屋戸に御さし隱りあそばしたる時。その岩戸の前に於て。廣

く厚き稱辭を申されて。大御神を出し奉られたる謂れに依て。その御孫天種子命と申すが神武天皇の御代に。天神壽詞と申て。天神より。天皇を御位に即け奉る。御依しの祝詞を。奏されたるが例となり。夫より以來。その其子孫たる。中臣氏の家に於て。世々此事を掌どり來り。兒屋根命より十二世の孫。可多能古と申すに。御食子と申すと。國子と申すと。二人の男子が有て。これより系が二ッに別つたぢやが。それは長男御食子の子が。大織冠鎌足公で。これより中臣姓を改めて。藤原姓を賜はり。すなはち今の五攝家はこの裔ぢや。また次男國子の子を國足といひ。國足の子を意美麿と云ひ。意美麿の子を清麿と云ふ。この代に中臣姓に。大の字を加へて。大中臣と云姓になされ。其の子今麿と云人。伊勢神宮の祭主に補せられ。それよりいたして今に至り。連綿と相續いたされ。すなはち藤波家と申すはこれぢや。神代以來。連綿たる中臣姓だに依て。その御家の古きことは。伯家などの及ぶ所ではないぢや。○第三に。齋部氏と申すは。その遠祖は。高皇産靈神の御子。天太玉命と申して。天兒屋根命と共に。皇御孫命の補佐をなされ。かつこの神は。大御神の。岩屋戸に御さし隱あそばしたる時。くさ〴〵の捧物を取持して。この事に功のおはし坐たる謂れに依て。その御孫天富命と申すが。神武天皇の御代に。神璽乃鏡劍と申て。天照大御神より。天皇の御位をしろしめす。御璽に賜はッたる。八咫の御鏡と。叢雲の御劍とを傳へられたるより以來。其子孫たる齋部氏の家に於て。世々この事を掌り來れる所を。不幸にして。その家が。漸々に衰へて。上古には。中臣家と。この齋部の家とは。車の兩輪相ならぶが如くで在りましたが。その家が公卿には絕て。今はその形のみが存り。齋部代と申て。土御門家に於て。この代を勤めらるゝことゝ成ました。これは何とぞ此家をば。厚く御取立有レ之たく存じ奉ることぢや。○第四に。卜部氏と云は。古へには四國の卜部と申て。壹岐國。對馬國。伊豆國。常陸國と。合せて四國。また都よりも。龜甲を燒て。卜をいたすことを得たる者を。凡て二十人。神祇官に差置れて。神事のときの龜卜を御させなされたものぢや。それが漸に止んで。今は吉田家の職掌と爲つてをるだが。そも〳〵

この吉田家の先祖は。朝廷の御正史。三代實錄に依てこれを考へるに。平麿と申て。もと伊豆國より出たる卜者のうちで。その父祖は詳ならぬ人なれども。龜卜の事をば。うまく熟したる人で在たる故に。五十四代仁明天皇の御代に。もろこしに御使を御遣しなさるゝとき。使部と申て無位無官の小使と云やうな。賤き役にさゝれて。御使の供をいたして。唐國へ行き。御使の還りたる後に。神祇官の大史と云て。位は正八位上でつとむる職に立身いたし。其後も漸々に。位階も進んだなれども昇りつめたる官位は。從五位下丹波の介。と云になッたがとゞで。五十七代。陽成天皇の元慶五年。といふに卒去いたした。その子を豊宗と云ひ。それより好眞三兼延四兼忠五兼親六兼政七兼俊八兼康九兼貞十兼茂十一兼直十二兼藤十三兼益十四兼夏十五兼豐十六兼熈十七兼敦十八兼富十九兼名二十兼倶二十一兼致二十二兼滿二十三兼右二十四兼見二十五兼治二十六兼英二十七兼超と云まで。二十八代が間。地下の官人で。その先祖平麿は。龜卜に妙を得たる人で在つたる故に。卜部二十人の支配を仰せ付られて。龜卜の長上と云になつて居たる所が。兼超が子を兼連と云ふ。二十九代目なり。この兼連と云は。百十三代靈元天皇の御代。天和貞享あたりの人で。將軍家は。五代目綱吉公の時分に。始めて昇殿を許されて。堂上の列に成ました。然れども其の職掌は。今以て龜卜の長上で。その事を掌る家なることはかはることなく。また神祇權大副と申て。權に神祇伯の副官を勤めらるゝことぢや。さて右の如く。もとは卑き家なれども。どうして堂上の列になッたと申す。其わけはおしつけ辨じませうが。まづこれで。神祇の四姓の家がらのわけはすみました。かくて白川家に於ては。右申す如く。代々神祇の伯職統領なるが故に。右の中臣氏齋部氏。また吉田卜部の人々を帥て。神事に仕へ奉らるゝことだが。夫は先その御神事のあるとき。まづ白川家へ。御綸旨を以て仰せ出さるゝと。白川家より奉書を以て。その向々へ沙汰いたさるゝことで。その例を一つ申さば。大嘗會の時に。白川家へなし下さるゝ御綸旨の趣きは。

來月何日。可レ有二大嘗會國郡卜定一。神祇官人參勤之事。可下令二下知一給上。仍執達如レ件。

何月何日　　右中辨何某

謹上　伯二位殿
追啓刻限可ㇾ爲ニ辰ノ一點一也。
と仰せつけらるゝ時に。白川家の御請文に。
來月何日。可ㇾ有ニ大嘗會國郡卜定一。神祇官人參勤之事。可ㇾ令ニ下知一旨。謹受所如ㇾ件。
何月何日　白川家　御實名
と云ふの御請書で。さて伯家より。吉田家へ下知せらるゝと。吉田家より請書のおもむきは。
來月何日。可ㇾ有ニ大嘗會國郡卜定一。可ㇾ令ㇾ參勤一旨。被ニ仰下一謹奉候也。恐々謹言。
何月何日　吉田家　實名
追而刻限可ㇾ爲ニ辰ノ一點一。宮主卜部等參勤之事。可ㇾ下ニ知一旨奉候也。
と云ふ御請で。別紙を以て。その當日參勤の宮主卜部等の姓名を記して。進ずることぢや。○また伊勢の大御神へ。奉幣使を御立なさるゝとき。白川家へなし下さるゝ。御綸旨の御文言に。

來ル何日。可ㇾ被ㇾ發ニ遣セ　伊勢一社奉幣使一使之事任ㇾ例。可下令ニ下知一給上者。依ニ　天氣一執達如ㇾ件。
何月何日　右中辨何某
謹上　伯二位殿
と云ふ御文言で。そこでこの御請をいたされて。これは伊勢の祭主藤波家の掌らるゝこと故。この通りを下知いたさるゝと。藤波家よりの御請に。
來ル何日。可ㇾ被ㇾ發ニ遣セ　伊勢一社奉幣使一。可ㇾ令ニ參向一之旨被ニ　仰下一。謹奉候也恐々謹言。
何月何日　藤波家　實名
と云ふの御請の文言ぢや凡ての御神事に。諸向へ下知せらるゝさまは。是らを以て准へしるが宜しい。かくの如く。白川家は。神祇伯といふ職名と云ひ。事實の上に於ても。その職掌の明かに知らるゝことなるに。俗には甚だ心得違をいたして。吉田家を神祇道の統領長官。とこゝろ得て居ると云ふは。さてさて聞いことだとは云ものゝ。俗人に。さやう思ひ通すやうにいたしたるは。吉田殿の先祖より代々。奸曲なる巧を致して。さう〳〵世の人にさう思はし

たもので。こゝらの細なる事どもは。尾張の東照宮の神主。吉見佐京大夫源の幸和といふ人が。具に辨じて。元文四年に。増益辨卜抄と云ふ書四卷を著はしたが。その自序の趣を見れば。正親町從一位公通卿と申すが。その頃神學有職の事に。御名高かッたる故。吉見氏がこの正親町殿を師として。學問したるが。その初めて。この卿に相見のとき。仰せらるるには。神道は天下の大道にして。萬國の道々の及ぶ所ではなく。その著なる所を知らんとならば。律令格式。國史官牒を熟覽して。其僞妄を去るを以て急務とせよ。それは吉田卜部の人。己が系譜の賤きを隱し。天兒屋命の末裔なりと稱し。神道管領職を賜はるなどゝ僞て。天皇を蔑如にし。衆を欺くこと。擧て數ふべからず。田舍の輩は。堂上のことに闇きが故に。僞りと知らず。吉田卜部は。實に神道の家なりと思ひ。彼れが爲に欺かるゝは。これ古書に闇き故であるが。吉田の僞り。一つ二つにあらざれば。一朝一夕に語り盡しがたけれども。古記實錄を以て糺すときは。正僞おのづから分明なることぢやと御諭なされたとある。吉見氏がその仰せを承て。度會

神主延經が著はしたる。辨卜抄と云を本として。作つたるといふ趣きで。それはそれは物の見ごとに。よう辨じ明したることぢや。その概略をつまみ。なほ其いひ洩したることは。篤胤が說をも加へて申さば。まづ第一に。吉田家の先祖平麻呂と申すは。右申たる如く。伊豆國より出たる卜部の一人で。その出所詳ならぬ人で有つたなれども。龜卜の事をよくするに依て立身いたし。從五位下丹波の介までには經上つたものぢや。然るに吉田家の系圖と云ものを見るに。藤原家の系圖をぬすみ。天兒屋命より系を引て。大織冠鎌足公より五代目の。智治麿と云人の子なる由を記し。齊衡三年。龜卜の兆に達するに依て。大中臣を改め。卜部姓を賜ひ。神祇伯の職に成たるなど記しありますが。大なる僞ぢや。それはまづ中臣本系帳とて。中臣家に傳はる。正しき系圖に依てこれを見るに。智治麿に子が五人あれども。平麿といふ名はなく。又平麿に。卜部の姓を賜はッたとあるも。眞赤な僞りで。卜部姓は賜はるまでもなく。伊豆國の卜部のその一人だから。もちまへの卜部ぢや。また神祇伯に補せられたと云が。中にも大

きなる僞りの。神祇を欺き。上を誣ひたる妄説ぢや。それはこの僞りの張本にせんとして。畏くも朝廷の御正史たる。三代實錄に。貞觀二年十一月十六日壬辰。正四位下行神祇伯橘朝臣永名。とあるを。卜部宿禰平麻呂と。わが先祖の名に書かへ。なほ外にも平麿と云名を。他人にかき替。他人の名を平麿と書替などして。板に彫しめたなれども。猶いまだ。世に古寫本もあるから。校合して見ると。直にその化の皮がはげ。まだも可笑きことは。餘は右の如く書替もいたしたなれども。陽成天皇の御卷。元慶五年十二月五日。平麿が卒したる所に。その傳の檃括が記してあるが。そこの文を書かへ。入筆することをからりと忘れて。古本のまゝに。從五位下丹波介。卜部宿禰平麻呂卒。平麻呂伊豆國人也。云々と其儘あるから。こゝで百日の說法屁一つ。とその化があらはれて見える。これ全く神の御惜しみでかな有ませう。すべて國史の例は。その父祖の名を記すが法なるに。たゞ平麿は伊豆國の人也。さばかり記して。其父祖の名を記さぬ所を以て。その出所の詳ならず。いやしき人なることを知るが宜い。なほ吉田系圖の中に。神祇伯に任じたると記せるは。平麿ばかりでなく。五代目兼忠。六代目兼親。七代目兼政などをも。神祇伯に任じたると記しあれども。みな僞りなること。これに准へて知べく。また六代目兼親。七代目兼政。八代目兼俊。十代目兼貞。十一代目兼茂。十二代目兼直。この六人が下に。侍從と記したるも。すべて僞ぢや。十七代兼熙より始て。侍從に任ずることは。古記に見えたれども。その先代は。みな龜卜の長上にて。侍從拜任のことは。古書に曾てなきことで。右の外吉田系圖の下に記せることゞも。みな正史實錄に乖けてゐる。其辨は。吉見氏が委くわきまへてあるから。辨卜抄を見るが宜しい。次に吉田家に於て。神祇管領長上だの。或は神祇統領だの。或は勾當だのと稱すること。甚だ以て相すまぬことで。夫は右に申す如く。吉田家は龜卜の長上なる所を。神祇の長上と稱して。長官の如く申しかすめ。世間を欺くのだが。世人官職の事を不案内だに依て。其僞を辨ふること能はざるから。彼が爲に欺かれて。實に神道の惣司の如く心得て。尊信する故。それに乘じて。僞りの綸旨を多く造り。また武將の命令と

稱し。諸國の神官を欺き。己が配下に屬(つけ)んとする奸術ぢや殊に彼は利欲の爲にするのだから。僧どもの所爲と同じことで。まづは云に足らぬことゆゑ。道に志す人は。彼に欺かれぬやうに。其辨(わきま)へをばつけて置べきことぢや。それは彼の家の。龜卜長上なることの證據は。朝野群載に。まづ寛治二年七月三日。卜部(うらべの)吉田家七代目。兼政が款狀に。正六位上龜長。卜部宿禰兼政とあり。また八代目兼俊と云が。長治二年四月六日に。神祇少副と云官を申し乞へるときの狀が載せて。それに。龜卜得業生正六位上。卜部宿禰兼俊とある。龜卜得業生と云は。龜卜長上と云に同じことぢや。また康和五年に。同家の兼繼と云が。〔父祖の業を繼て。龜卜長上職になりたいと。願ひ申したる時の狀もある。此らはみな。吉田卜部の先祖だが。かくの如く。龜卜長上を願ふの狀はあれども。神祇長官を願ふなどは思ひもよらぬことぢや。この外にも。永昌記。中右記。長秋記などにも。幾所(いくところ)と云こともなく。吉田家の先祖を。龜卜長上何某。と記してある。扨その龜卜の長上と云は。職員令に依て考るに。卜部二十人。長上約在(ハメリ)其中(ニ)と見え。また

義解の文に。寶龜六年五月二十九日格(ノニ)曰。卜部等中(ノ)。簡(ニ)定(メ)卜尤長(ナルモノ)二人(ヲ)以任(ス)長上(ニ)とあり。この外延喜式。西宮記なども。皆これと符合いたして。更に紛なきことで。右卜部二十人の中の上首を。龜卜長上とも。卜部長上とも。また略しては。龜長とも云て。神祇長官とは。はなはだ隔別なことで。古記に。神祇長官と云へるは。みな伯職をさして云ことぢや。然るに吉田家に於て。神祇長上など稱し。古書を板にするにも。その奥書に。我家を神道長上など記してあるは。龜卜長上と云を謟(いつはり)て。世人を欺くのぢや。神祇伯の外に。神祇管領長上など云職あることは。歷代の國史官牒。律令格式の書にも。かつて見えぬことで。殊に吉田家は。元來吉田社の預(あづか)りで。それ故代々。吉田村に住して。かの社の社務職なるが上に。古く建久九年に。十一代目の先祖兼茂と云が。白川業資王の家司(けいし)に補(ふ)せられてこのかた。白川家の家頼で居て。神祇權大副を務めたもので。その子兼直と云もその通りぢや。このこと業資王記。また資宗王記などに。慥なる證據がある。尤も後にはこれをいやに思つて。遠ざかるやうにしたることゝ見えて。

神祇官年中行事。貞應二年十月二十八日の下に。今日行二初任吉書一。兼日仰二本官一云々。任二安元之佳例一。補二家司二人一云々。權大副兼直宿禰。雖レ爲二副官一家人也。兄弟兼繼兩人之間。可レ著二座一之由。內々以二茂平書札一相催之處。稱二遠忌之由一不二參著一。奇怪事。又權少副兼賴。同相催之處。老母所勞獲麟云々。近代卜部官人。雖レ知二交祀相傳家人之由一。如レ斯不レ足レ言事。とあるを見れば。此頃は。伯家の家人なる事をいやがり。其著座すべき時なども。忌があるの。母が病氣のと云て。斷つたことゝ見える。○扨かの家に傳はると云。綸旨と云ふ物を見るに。甚だの僞りもので。この事明白に。吉見氏が辨じて有ますから。辨卜抄を必ず見るべきことぢや。其うち第一にふるしとするは。後堀河天皇の御綸旨と申てある。其文に。

神祇之管領長上。幷南座勾當事。寶龜五年以來。爲二御一流之重職一。不レ被レ交二他人一之條。天兒屋根尊大業。唯受一人之明德乎。神祇伯者。近代雖レ及二人臣流通之拜任一。專於二御當流一十七代。至二庶子中臣流一。四代經二歷之一。尤叶二神祇道之本理一者哉。就レ中去永延度。以二十八社ノ社務職一。爲二御家業之賞一。被レ補二朝恩一之時。件等社神主祠官以下事。爲二進止一之上者。以二一門輩一。可レ被二巡次補任一之條。及二勅定一畢。彌々可下令レ存二知此旨一給上者。依二　天氣一執達如レ件。

嘉祿三年十一月廿一日　左衞門佐信成

謹上　冷泉侍從殿 于時兼直

と云があり。また後圓融天皇の御綸旨とて。

神祇道管領勾當。並天下諸神社執　奏事。任二延長五年聖斷之旨一。彌可レ被レ報二務者。依二　天氣一執啓如レ件。

永和元年六月十六日　左中辨宣方

謹上　神道長上殿 于時兼敦朝臣

と云があり。また高倉天皇御綸旨なりとて。

當家事。受二祖神之妙業一。累代相二傳之一矣。神國之根源。

朝家之樞要。尤無二比類一神道之棟梁。本官之管領。唯在二一流一。爲二南座勾當一之上者。宮中參　列之時。不レ守二位次一。而可レ被レ著二一座一者。依二　院宣一執達如レ件。

安元元年六月十日　　　　　　權右中辨經房奉

謹上　冷泉權大副殿

と云もある。吉見氏これらを辨じて云るゝやうは。此文中に。寶龜五年以來とあるが。これは四十九代光仁天皇の年號なるに。その御代の國史にも。公卿補任にも所見なく。又この僞文に。官中參列のとき。位次を守らずして。一の座に著せらるべしとの院宣の由なれば。甚だ重き職號を。國史官牒にも。記し洩すべき謂なければ。これ僞にして後に作れることゆゑ。古書に記さゞること分明なり。また寶龜五年は。吉田の先祖平麿が時よりは。五六十年前のことなれば。その父祖たる。伊豆國の土民に。管領長上の號を賜へると云にや。平麿は。伊豆國の。先祖詳かならざる人なれば。寶龜五年の勅は。誰に賜へりしことか。返々跡形もなき僞なり。かくの如く。時代おしに吟味するか。系圖を押て。實錄に引合せて僉議すれば。その僞り忽に顯然たり。世の人唯々に。彼の家を尊敬して。僞をも疑はず。實に天兒屋命の神孫そと思ひ。その造言を戴きて。欺かるゝこそうたてけれ。と云ひましたが。一々尤なることぢや。

なほ此外にも。後奈良天皇の御綸旨。また御醍醐天皇の御綸旨と云もの。また萬松院殿足利義晴御敎書など云も數通ありて。仰山なることゞもが書たてゝあれども。みな僞りなること。これらに准へて知るべき事ぢや。〇吉田家は代々。奸曲なるわる巧をすると云ものゝ。その惡巧は。實には二十一代目の。兼倶と云がその張本で。僞書造言謀計は。みなこの人の手に成つたものぢや。それは先この兼倶と云は。後土御門天皇の延德時分の人で。其惡巧の多き中に。十八代の祖。兼延と云が作に託して。名法要集と云書を造たが。其の趣意は。我家系の賤きを隱して。上に次々申たる如く。系圖を僞り作り。さて畏くも。大織冠鎌足公の御書。と云物がある。此は己が先祖の系圖を。藤原系圖より盜んで造れる故。やがて鎌足公を己が祖となし。天兒屋命より次々。鎌足公まで傳へ來れる神道を。意美麿と云に附屬せられ。其より我家に傳へた。と云證據にせんとて。作つたる物だが。その文に。

太祖尊神者。掌其解除之太諄辭而宜。俾以太

占卜事而奉仕主神事之宗源也。神籬者。亦名天津磐境吾國之神寶。祖神之眞體者也。以傳神鉄。附屬祭官意美麻呂。者謹勿怠失矣。

大化六年六月一日　　中臣朝臣鎌子

と有るが。これが例の眞赤な僞りで。兼倶が僞作して。鎌足公に託したる物なること。明かに見える。其信じがたき證據多くあるが中に。まづ第一太祖尊神とは。天兒屋命をさすと見えたが。此はいかにも。鎌足公と。意美麿の爲には祖神なれども。吉田卜部の爲には。祖神とは云はれまい。それを己が家へ引付んとする巧に。僞り申たる事ぢや。但し此の卜部の先祖のことに付ては。篤胤ふかく考ふる處有て。別に吉家系譜傳と云物を著はさうと。其稿は爲たるが。其家の人々は。大きに眉目を起すことなれども。つゆ程も知ぬことなれば。却て紛らはしき故に。こゝでは云はぬ。扨また掌其解除之太諄辭而宣とは。すなはち神代卷に。天兒屋命。掌其解除太諄辭宣之。と云を取り。大祓詞にも。宣天津祝詞太祝詞などもあるに付て。別に祕する咒文が有て。それを天兒屋命より。唯受一人傳來して。吉田家に相承すといはん爲の造言ぢや。それはもろ〳〵祝詞の文中に。太諄詞と云詞のあるは訣あることで。大かたは。直にその祝詞をさして云が中にも。大祓詞などは。別にその祝詞を傳へたること。篤胤委く考へ著したる物有て。まぎれなきことなれども。別に秘して。吉田家に傳る神代よりの咒文と云は。何もないことぢや。然るに空海がはじめたる。兩部の旨を習合して。天津祝詞聞文傳と云を作て。その文に。諸法如影像清淨無假穢。衆説不可得。皆從因業生。などゝ。大日經禮儀の文と。おなじ旨の僞文を作て。これを天津祝詞太諄辭ぞと稱し。天兒屋命の。岩戸の前にて宣申されたるは。即この文で。吉田家代々。この太諄辭を掌り。宣り來ると云はあまりなることで。今辨を加ふるまでもなく。その僞明白なることぢや。どうして〳〵。大織冠鎌足公が。かやうの物を傳へられませうぞ。○また一には俾以太占卜事而奉仕。主神事之宗源也。と云は。神代卷にあることで。それを取て。己が家の卜部に引つけたるなれども。神代の太占と云は。鹿の肩骨を灼て。卜ふしかたで。吉田家に掌る。龜甲をやく卜とは。大き

に相違なことで。その吉田家の主る龜卜は。はるか後世に。もろこしより渡つたることで。殊には卜部と云二十人の下官が。神祇官の庭上に蹲踞て致す。いやしき仕事と思はれる。〇また三つには。神籬璽亦名天津磐境者。吾國之神寶。祖神之眞體者也。といへるは。殊に虚誕妄說。笑ふにも堪たることぢや。それはまづ。この神籬磐境のことは。神代の卷に。皇御孫命の。御天降あそばさるゝとき。高皇產靈神の。天兒屋命太玉命に勅して。吾れは天津神籬。及び天津磐境を起し立て。當に吾が御孫の爲に。齋ひ奉らん。汝天兒屋命。太玉命。この天津神籬を持て。葦原中國に降り。吾か孫の爲に齋ひ奉れ。と仰せられたるもので。これは神祇官に御祭りあそばす。八神殿の本たる故よしの御物だが。このことは一朝一夕に申し盡しがたき。尊く妙なる謂れのある事で。篤胤が精密なる考がありますが。一と口にいへば。產靈神の御靈代を齋ひ奉つたる御屋代やうの物ぢや。尤も神籬と磐境とは別物で。それゆゑに。天津神籬及び天津磐境と云て。この二つの間に。及の字を置たのぢや。然るをこの兼俱が僞文に。神籬璽。亦の名は天津磐境と云て。一つ物ぞと心得たるは。捧腹にたへたることで。鎌足公が。どうしてかやうの文盲なることを仰せ置れませう。また神籬璽と云て。これを後世出來たる印の事だと心得て。そのむきに僞つたが殊にをかしい。扨それを。吾か國の神寶。祖神の眞體なるもの也と云て。これを持傳へるからは。吾か家は。神祇道の本家だといふ張本に。神籬の御正印とか云て。その印をも造て人を欺き。この印の出處は。天照大御神と。第六天の魔王と。合戰をなされたりしとき。魔王が戰ひまけて。向後背くまじき爲に璽をいたして誓を立たる。其の印だに依て。これを以て邪神の祟をなすとき。それを封じこめ。其祠を破却し。また諸々の神社を。心の儘に取扱ふも。此印を傳來するが故のことで。この謂に依て。吉田家の神つかひとは云などゝ俗に申すことも。實は吉田家よりいひ出したことぢや。これらみな。己が家を深く尊信させやうとて。兼俱が造り出したる妄說だが。をかしいかな。氣味よいかな。この兼俱に子が二人有て。その嫡子は兼致と云て。吉田の神職をつぎ。次男は平野社の神職となッたが。其の

後中あしく成て。兄弟の家でありながら。爭論に及んだる時に。吉田家より訴へるやうは。天兒屋命より。大織冠に傳はり。夫より意美麿に授られし。神籬御正印と云ものを。吾家に所持する。これは深祕のものなれば。曾て人に見せず。吾が家諸神をあがめ。または諸社を破却せんも。心まゝなるは。この御正印あるが故なるに。平野妄に掠申すこと。大きなる僻言也といひ上たれば。平野の答に。天津神籬と云ことは。神代の卷にあれども。何樣の物と云ことは。今は計り知られぬ物であるを。吾が祖兼倶。試に其形を作り見んとて。二條通りの。何某といふ鑄物師に談らひ。銅を以て。かりに造れる物なり。昔の神籬と云ものは。かやうの物なるかおぼ束なし。然るに神代より。今に相傳して所持すると云は。甚だ僞なり。これを新に造れることを知らずに。吉田が訴へ申すなるべし。もし此ことを知りつゝも。隱してかく申すならば。却て彼の家の恥辱を顯はすことなりと。立派に云てのけたことがある。この事は林道春先生の神道祕傳抄。また折中俗解。また梅村載筆など云書に記しあることじや。あゝあゝ吉田兼倶。かゝる造言を巧み。器物までを新に作りて。神代の古物ぞと欺き。上を誣奉ると云は。神に仕ふる身の。何といふ不屆で有ませう。思へばよく神罰もあたらぬ物ぢや。然れどもその惡巧が。直に血で血を洗ふとか云やうに。己が子孫の兄弟喧嘩から顯れて。天下に恥辱を得たるは。心地よきことではないか。此の文中に。傳神錄と云書をも。大織冠より傳へたとあるが。これも兼倶が僞作なること論はなく。その書に記せることゞも。思ひやられることぢや。

○四つには。大化六年六月一日。中臣朝臣鎌子。とあるが。この奧書一つを以ても。時代相違がしれ。また兼倶が文盲なることを知るが宜しい。それはまづ。大化と云年號は。三十七代孝德天皇の年號で。五年かぎりにして。六年六月と云はなく。六年と云べき春二月九日に。長門國から。白き雉を獻じたるを祥瑞として。白雉と改元あそばしたに依て。よし六年が有ても。二月九日までぢや。殊に鎌足公は。三十九代。天智天皇の八年に薨せられて。其の子不比等の時。四十代天武天皇の御代に。それまでは。連の戸で有たる所を。改て朝臣の戸を賜はッたから。

大化六年の頃は。中臣連鎌子とあるべきはずだが。この文に中臣朝臣とあるは。三十五年後のことを。先に知て居て書れたことか。後人の僞りごとには。かくの如く時代不都合なることがあるから。其尻のわれることで。こゝが僞りする神鬮で有ませう。○また彼家の記に。一條天皇の永延二年に。大織冠鎌足の。鎌の字の片字を以て。實名の頭(かしら)におくべきよし。宸筆を御染あそばし。賜はッてより以來。當家に於て。代々兼と云字を用ふると申すも。赤うそぢや。それは此の永延と云年號は。實に一條天皇の年號なれども。この二年のころは。一條天皇樣は。やうやく九歳に御わたり遊ばす時だに依て。御自身にかやうのことを。御解(げ)しあそばして。鎌足の鎌の字の金篇(かねへん)を除(のぞ)き。そのつくりの兼の字を取て。名乘(なのり)の頭字にしろと勅定あるのみか。宸筆までを御染あそばして。賜はッたると云こと。實(まこと)しからぬこと。よしさることの有にもいたせ。例の時代不都合が有て。忽(たちまち)にその僞りの顯はるゝは。をかしきことぢや。それは江家次第の。六月晦御贖物(あがもの)の處に。天祿元年六月三十日。行事藏人遠度五位召。仰二諸司一。召二闈宮主兼延一と云ことがある。この天祿元年は。六十四代圓融天皇の年號で。其次花山天皇を隔(へだ)て。六十六代。一條天皇の永延二年まで。其間十八年ある。さすれば十八年以前に。兼延と名乘たること明かぢや。然れば永延二年に。兼の字を。宸筆にて賜はッたると云こと。僞りに相違ないことで。畏くもかやうのことまでを。勅定と僞り。宸筆を似せて。家の寶にそなへ。己を飾らんとする心根のきたなきことを知がよい。これに付て畏けれど。當今の大御名を。兼仁と申上るに依て。吉田家の流れをくむ。神道者流の俗說に。恐多くも。當今の大御名の兼の字は。吉田家へ御懇望あそばし。仰せ遣されて。御つけ遊ばしたる故。吉田家にて。當時は。兼の字を名乘らぬなどゝ云て。これを吉田家の規摸なることに云ひさわぐが。扨々文盲なることぢや。天皇の御名乘りあそばすに。何れの字を御つけ有らうとも。誰に御憚りあそばさるゝことが有ませうぞ。吉田家に於て。當時兼の字を名乘らぬのは。天皇の大御名の字故。止めよと仰せ付られたに依てのことで。將軍家の御子たちなどの御名に。さしあふ字をさへに。御觸(ふれ)が有

て。御止めなさるゝことを以ても。知がよろしい。
さて吉田家二十一代目の祖。卜部兼倶は。右申す如く。悪巧をいたして。畏くも綸旨院宣をさへに偽作いたし。神祇管領長上と稱し。十七代神祇伯に任じたるなど。跡形もなき偽ごとを云ひ。また七朝の侍讀として。中納言の贈官を賜はり。また十八社の社務職に任じ。天下の諸社の執奏すべきよし。延長五年の勅定と偽り。さても猶あかず。そのかみ何の岡とか云に有たる。観音の八角堂を。吾が社地に引て。それを神武天皇以来の齋場所で。やがて八神殿ぞと誣偽り。剰に。後土御門天皇の。延徳元年三月と。また十月のことだが。伊勢兩宮の大御神の御神體。その外あまたの神寶。光を放て。吉田山へ飛移らせ給へると云て。畏くも。その御神體の御形代を偽り作り。今神明と云祠を。新に建立して。その由を。堂上の内縁ある人にたのみて。密奏いたし。抑その云へることに。大御神の御さとし言に。吾今吉田山に移れることを。世人あやしみ思ふべけれど。實にこゝに移れる證には。賀茂川の水。鹽はゆくなりぬべし。と御託しありと云て。夜ひそかに。鹽數百俵を。賀茂川の水上に沈めおき。かれこれと。奸佞わる巧みの限をふるッて奏上たる故。朝廷にも實にさることに思召て。すでに新神明と云號を賜はり。止んごとなき御社に。あそばさんとせられたる程に。伊勢兩宮の禰宜等より。數通の訴狀を捧げて。このことを申わきまへ。決して彼の山へは。御飛移りあそばさず。全く兼倶が奸計の由を申ひらき。終にこの悪巧み相あらはれて。かの祠を破却せられ。兩宮よりの訴に依て。夫より後は。神用といへども。卜部氏を兩宮へ遣はされず。まして私に參ることをば。かたく御指留になッたぢや。其後かの家の別家なる。平野の神主より。本家のかはりに。伊勢の奉幣使の時の。神役を勤めたき由を申出たなれども。それさへ御さし許なく。今以て吉田家一統。及びその配下の輩までも。大御神の宮へ參ることはさておき。かの家の流れと見ては。宮川より内へ一人も入れぬと云ふ定めと成てしまつたことぢや。このことは。兩宮の禰宜たちのかきたる。神敵兼倶謀計記と云もの。また文明闘山記。などいふ物に。委く記してある。抑かくの如き悪巧をいたしたなれども。重き罪に所

せられなんだのは。此家にて預る。吉田社と申すは。大和の春日と。御同體の神で。それは藤原家の。氏神の社と云ものゆゑ。其社人を。太じき罪に所せられては。藤原一統の面目にかゝること故。御宥めなされた物ぢや。何にしてもよき後だてを持て居て。光も如在なく取拵へたからのことぢや。かくて後世に。昇殿をゆるされて。堂上の列に加はッたのも。ひきがよいからのことと。なんと吉田家は。卜部のいやしき家がらにもいたせ。吉田神社の神主をもつとめて。卑ながらにも。神祇の職にて有ながら。かゝる悪巧をいたして。天下第一たる。大御神の大宮へ。參ることさへかなはず。神敵の家と世々にいはれて。萬世に恥辱をのこしたが。さて〳〵よい氣味ぢや。然るにかくても猶恥を知らず。これより次々の代々にも。ます〳〵悪巧をして。己が家をかざり。尤も朝廷に於ては。さしも御用はなけれども。將軍家御創業以來。奸計を以てとり入り。その家を。實に神祇長官と思はせ參らせ。その威光をかり。彼の僞りの論旨どもを。諸國の神人に示して。おどし掠めて配下につけ。今は大半。かの家の配下の如くに致したが。扨々にくきことのかぎりぢや。然れども右申す如く。かの家は。元來が。吉田の神職からなり上つたるゆゑに。諸國の大社の神職たちは。今以て吉田家の執奏に依て。官位を賜はることを恥辱として。出雲大社。常陸鹿島。下總香取。信州諏訪。尾張熱田。紀州日前。同熊野。肥後國阿蘇宮。豊前國宇佐宮などをはじめ。謂ゆる二十一社の神主がたなども。吉田家をば。いかう卑めることで。なぜなれば。近頃まで地下の神職で有たからのこと。其手を經て。執奏にあづかるは。仕へ奉る神社の爲に。恥辱とするも尤なることぢや。然るに兼連以來。昇殿をゆりて。堂上一列なれば。何れの家にたのむも。同じことなる故。吉田より執奏ありても。恥にあらずと云人もあれど。それは近頃不案内なることで。いまだ吉田びいきの詞だに依て。そんな言は聞ぬがよい。勿論。堂上方とても。家々の尊卑おなじからず。攝家。清花。大臣家。羽林家。名家などいふ差別が有て。家々の吟味がある。これらのことも。よく有職の道を學んで。おぼえ居るべきことぢや。さて右申たる大社の執奏は。吉田の手にのらぬは本より。其

の外も。他家において。執奏せらるゝ社が多かることを羨み。それをも凡て。吉田の執奏にせんとかまへて。近く寛文六年。かの始めて昇殿をゆるされたる兼連が時だが。まづ内々其時の傳奏。飛鳥井家をこしらへて。例の似せ綸旨の寫しどもを持出し。それを證にして。諸國の神社を。のこらず從へんと致したることがある。その時攝政殿下鷹司殿へ。さし出したる覺書に。

口上之覺

二十二社。幷出雲大社。常州鹿島。下總香取。信州諏訪。尾州熱田。紀州日前宮。同熊野。肥後國阿曾宮。豊前宇佐宮。此等之社大宮司神主等。位階申上候事。向後も吉田執奏及不ㇾ申。其外天下之諸社家。官位申ㇾ之輩者。先年被ニ仰出一候通り。吉田執奏仕候樣に。御奉書頂載仕度存候條。宜御沙汰賴入存候以上。

十月八日

と記したが。この願書に。さすがに二十二社。及び出雲の大社。鹿島香取などの大社をば。向後も吉田執奏に及不ㇾ申と云て。執奏せうといはなんだが。是はとても。其の社々の神人等が。吉田よりは。みな家がらで。とても吉田の手にはのるまいと思つてのことぢや。また其外。天下之諸社家。官位申ㇾ之輩者。先年被ニ仰出一候通り。といつたは。甚だの山ごとで。これは後にあらはれることぢや。また例の似せ綸旨どもに添たる覺書に。

口上覺

後圓融院永和元年之　綸旨。右者本書回祿。兼連四代之先祖寫置候。其後　後奈良院天文二年之綸旨。幷萬松院義晴之御教書。右者本書有ㇾ之。此外者不ㇾ致ニ現在一候也。

三月三日　　　兼連

靑木志摩守殿鷹司家ノ諸大夫也

と認めて差出したが。是みな似せもの故。おしつけ化の皮がはげる。又兼倶が書のこしたる書面也とて。さし出したる一通に。

神祇伯職之事

一兼倶先祖十七代。被ㇾ補ニ伯職一候事。二字私補見ニ嘉祿三年ノ　勅裁一事。

一當伯耆花山源氏。彼先祖。依テニ神祇官造進之忠節一。

備令伯職經歷之事。

一天下六十餘州諸神社事。悉以爲二當流申沙汰一也。不レ可二直 奏一之由。代々 言旨等有レ之。中古以來。八幡日吉等。强訴申沙汰雜儀之間辭申畢。伊勢 加茂 春日此三社。被レ置二傳 奏一事者。應永以來之儀也。

さまづ記して。扨この已前。寛文五年七月十一日に。將軍家より仰出されたる。五箇條の御書付をも寫し出したが。其の全文には。さしも用なけれど。中の二箇條に。「一。社家位階。從二前々一以二傳 奏一昇進之輩者。彌可レ爲二其通一事。」いま一條に。「一。無位之社人。可レ著二白張一。其外之裝束者。以二吉田之許狀一可レ著レ之事」。といふ二箇條があるから。是でもの云つもりで。書き出したものぢや。なほ此上にも。右五箇條の御書付を。吉田家の被官等に。江戸の御城に於て。御渡しなされたる時に。台命ありしと。畏くも申かけ。家來ども三人。鈴鹿將監。大角主水。鈴鹿釆女と云が。僞つてさし添たる。その文面に。

一去年七月十一日。被二仰出一候。御條目御朱印之事。

同十二月十二日。於二御城一吉田致二頂戴一候。其砌。吉田御訴訟申上候者。御條目之表。從二前々一以二傳 奏一遂二昇進一輩者。彌可レ爲二其通一。（中略）傳 奏無レ之社々者祠官等官位。申上候者。吉田執 奏仕候樣。被二仰付一可レ被レ下由。申上候處。則其通被二仰付一。神文之前書等迄。吉良若狹守殿を以。被レ下候事。

一御條目御文言。云々略レ之。

一二十二社之外。幷傳 奏無レ之祠官等位階。吉田執 奏仕候儀。寺社奉行。口上に被二申渡一候云々。

神文之寫者。則今日備二攝政樣御覽一。飛鳥井殿。正親町殿へは。昨日始備二御披見一候以上。

右三箇條。全相違無二御座一候。三人之者。前方御斷不二申上一候段。無調法之至。迷惑仕候。乍レ然欽恐餘有之過。御免被レ成。向後二十二社之外。祠官等。位階申時分。吉田へ參候樣。被二仰付一可レ被レ下候。仍言上如レ件。

寛文六年午十二月十五日　鈴鹿將監

大角主水

鈴鹿釆女

青木　志摩守殿

廣庭中務少輔殿

と認めた。この青木志摩守。實庭中務少輔と云は。鷹司殿下の諸大夫だが。かやうのことは。まづ傳奏に内意をして。聞すみのよい所で。願書をさし出し。其の翌日同じ書付を。時の攝政殿下へ。さし出すが定りで。夫れ故この文言にも。かく認めたこと。扨この寛文六年より。三四年御捨おきなされたる所が。吉田家より。しきりと御催促申上る。これに依て。鷹司殿下より。寛文九年三月三日に。傳奏の御方。飛鳥井前大納言殿。正親町前大納言殿へ。ひたりと御さし止め。遣はされたる御書の趣きが。かくの如くで。まづ其始めに。「吉田望申事」。とあそばして。

一二十二社。並書付之大社之外。諸社家官位申時。吉田可有執奏哉之事。先規社家官位執奏仕候證文有之哉與。吉田へ相尋候處。天文年中。唯一神道長上職之證文。所持之事に而。諸社官位執奏之儀者不相見候。且又先年關東より。被仰出候條目之趣も。前々より。以傳奏官位申社家者。彌可爲其通事。與之趣而。吉田執奏之儀無之候。無傳奏社家者。以舊例。自古來職事相付。披露之事也。然者天下之社家。吉田執奏之儀。新規之望。莫太之事に候。其上白川二位元祖。清仁親王息延信王。萬壽年中。被補神祇伯。從是。白川家累代。當年迄。至六百四十餘年。被補神祇伯有之事に候得者。神慮難計候事。

寛文九年酉三月朔日　　房輔

飛鳥井前大納言殿

正親町前大納言殿

と。仰せ遣はされたる時に。傳奏飛鳥井殿の。述られたる所存の趣きが。

一吉田預置候。神祇官。神祇道管領勾當。并天下諸社執奏之事。被仰出候宣旨。御教書等有之上者。諸社執奏之儀。勿論之様に被存候事。

と書付を以て。殿下へ申上られたる時に。鷹司殿下の思召を。御記しなされ。扨かやうに。傳奏の申張るやうに成ては。重きこと故。もはや攝政殿下と申せども。御一存ではならぬわけ故。まづ思召をば。御記しなされつゝも。五攝家のこらずのおぼし召を。御聞なさるゝことで。この時は。一條殿ばかりは。御若年にあらせられたる故に。御かき記しこれなく。九條殿。二條殿。近衞殿。何れも其おぼしめしを。

御記しなされたが。まづ鷹司殿下の御文に。
一吉田。預二置神祇官一之由雖レ被レ申。神祇官屋鋪者。大宮猪熊通二條御城近邊に候得共。只今致二退轉一候。　後柏原院御代之頃迄。八神殿有レ之。當白川二位民部卿忠富王迄。代々預レ之。被レ致二支配一候。吉田預置と申事。不二分明一若齋場所之事に候哉。是者。後光明院御宇。正保三年。　伊勢例幣御再興之時。神祇官斷絶に付。吉田齋場所を。神祇官に被二借用一候に而。神祇官とは不レ稱候事。
一永和元年之　綸旨者。本紙無レ之。吉田兼見寫之由也。其上諸社家。官位執　奏之儀無レ之故。最前不レ入二披見一候得共。爲レ念此度遣レ之候事。
一天文三年。武家御教書本紙有レ之。寫一紙。是者天文二年綸旨之通故。最前不レ入二披見一候得共。是も此度遣候事。
右之證文之外。不レ致二現在一之旨。吉田口上書一通
以上。
五月十九日　　房輔
と遊ばして。かの似せ綸旨どもを。こんな取るに足らざる物だが。見よ。と宣はぬばかりに。仰せ遣されたもので。扨九條殿の御口上書の趣は。
一吉田家。諸社家官位申時。執　奏可レ有レ之哉之事。
舊例雖レ考レ之無二所見一候。
また。二條殿御口上書の趣は。
一從二吉田家一諸社家官位申時執　奏可レ有レ之哉之事
先例雖レ考レ之無二所見一候。如又新儀於レ被二　仰出一者。神祇伯可レ應二其職一歟。
また。近衞殿の。御口上書の趣きは。
一吉田家。諸社家官位申時。執　奏可レ有レ之哉之事。
後奈良院勅書。披見有度思召候。
と。是はとても。その綸旨々々と云が。僞なることをしろしめす故。その後奈良院の勅書の眞物を。御覽なされ度と。御詰りなされた物で。尤もこのとき吉田家より。關東をも取繕ひ。關東よりも。此事を御執持なされて。此時の御老中。板倉内膳正殿より。攝政殿下へ仰せ遣はされたる故に。又々鷹司殿下より。其御答へが有つた。尤もかの嘉祿三年の綸旨と云の寫し。又かの兼倶が。書のこしたりと云て差出したる。先祖十七代。神祇伯に補せられたりなど云ふ。三箇條の寫をも遣はされて。其の御文面に。

一嘉祿三年　綸旨之趣。神祇長上之事。次に者神祇伯職之事。次に十八社社務職之事に候。從二吉田一。諸社家官位執　奏之儀。曾以無レ之。其上相續而綸旨等無レ之候。天文二年　後奈良院勅書に。嘉祿之度之　綸旨は。さりとては。文字あやまりたる物にて候由。被レ染二宸翰一候。依レ之同天文二年。綸旨之趣も。神祇道之諸事。可レ進二退一候由。被二仰出一。非二官位執　奏之事一候。然者。飛鳥井所存雖レ被レ申。官位執　奏之儀不二分明一候。

一　兼倶三箇條之事

一神祇伯職之事。舊者吉田家。被レ補二伯職一之由申候得共。所見無レ之。七字今補　中古以來。花山源氏白川家。至二當伯二位一。數代經歷也。根本神職之官位者。神祇官に付て。伯職之人。致二沙汰一候事也。然者非二伯職一。吉田官位執　奏之儀。難二信用一候。

一天下六十餘州諸社之事。悉以爲二當流申沙汰一也。不レ可二直　奏一之由。代々　宣旨等有レ之由に候得共。是者非二　綸旨一。兼倶書付に候。尤官位執　奏之儀。代々之　宣旨有レ之由に候得共。一代も不二相見一。又　伊勢之儀。應永以來傳　奏有レ之旨。其以前者。從二吉田家一汰沙申候樣に書候得共。神宮者重き事故。久我雅實公上卿。其後九條殿祖。兼實公等。五百年以前より。上卿有レ之事に而。吉田非二沙汰一候。其時代之上卿は。傳　奏同前之事に候。

一賀茂者。應安年中より。傳　奏有レ之也。是以應永以前之事に候得者。兼倶申分重々相違に候。

一春日者。不レ限二官位一。諸事以二南曹辨一。關白へ申上。關白支配之事。古來連綿。攝關之職掌也。然者兼倶。僻事多書述候故。三个條之證文。猶以難二信用一候。

吉田。今迄執　奏無レ之而も。相調候得者。新規と云。不レ遲事に候。且又　後奈良院　勅書　綸旨等。難二相破一儀に候へば　主上愈御年齡相加。御定之時節。先例被二廣考一。委御吟味之上。被二　仰出一可レ然候歟。

五月十九日　　　房　輔

板倉内膳正殿

と仰せ進せられたる時に。關東よりも。重ねては何とも仰せ遣はされず。然るところ。飛鳥井殿が。又

又しつこく吉田家の腰をおして。とにかくに。此事を執り持れて。鷹司殿下房輔公の御諚を。難じ申されたる故に。殿下より。又々さくさ舊例を御糺しなされ。御口上の覺書を以て。御さとしなされたる趣きは。

一吉田之儀。相濟間敷候旨。去年五月以二御書付一被二仰入一候處。飛鳥井殿所存之通。重而被レ記レ之。殿下御書付之趣を。一々被レ難レ之候。皆以支流之論辨にて候。抑此儀は。最前被二仰入一候通。攝家中へ被二仰入一被レ成二御尋一候得共。至レ今吉田家。舊例不レ被レ得二所見一候。然上者。此事新規之儀。(中略)決定候間。相濟間敷候條。彌左樣に御心得可レ被レ成候。

一殿下攝關之儀。才德雖レ不レ當二其器一。踐二烈祖之跡一。當職之上者。棟二梁于諸官一者也。然者官位政事一身之裁判。辭讓無レ之所に候。雖レ然正理無レ紛儀。或爲二忠義一之儀者。不レ限二兩傳奏一。誰人之所存に而も。可レ被二相立一事勿論に候。吉田之儀は。新規と云ひ。道理不分明之處。飛鳥井殿限二此儀一。無二遠慮一被二荷擔一。對二殿下一過言不二似合一儀に候。其上此事至二後來一而者。相濟間敷與有レ之候者。殘念之旨。強而存分被二相述一候儀も可レ有レ之哉。殿下之御所意者。先唯今正理不レ見候間。被二相延一候樣にとの事は。朝廷之儀。輕々敷御沙汰。難レ被レ成被二思召一故に候處。飛鳥井殿理不盡に。相濟候樣にとの儀。依怙之至に候。尤飛鳥井殿書付に。事之筋相違之儀有レ之候間。一々可レ被レ及二御再答一候得共。事長く。且者世俗濫之。論訴ケ間敷成行候義。無道候故。萬端被レ閣レ之事候以上。

月日　　　　房輔

と。かやうに仰せ遣されたで。飛鳥井殿の。吉田家に荷擔ひいき致されたる心も。水の泡と成てしまつたさ。又その三四年以前より。諸社の社家たちの。官位の願を申時に。吉田家にて執奏いたす故。その子細を御尋なされたる所が。江戸表に於て。寺社奉行。並に高家吉良若狹守。口上を以て仰せ渡されたるに依て。執奏いたす由を。吉田家の雜掌どもが申す故。其のよしを關東へ。御問合せなされたる處が。寺社奉行。ならびに高家吉良若狹守など。左樣の儀を申渡したることなき由を。答へられたるに依て。

此事をも御口上書を以て。きびしく申渡され。その御文言に。上裁をも申し掠むるの段。曲事之至也。とさへあるほどのことで有たぢや。○又かの吉田家より。差出したる書付に。去年江戸の御城に於て。諸の社家を執奏致すべき由を。申渡されたると云て。その賜はッだる證文の寫とて。指出したる故。その證文の本書を。指出すべき由を。仰せ出されたる處が。吉田家より申さるゝには。江戸にて。家來鈴鹿石見守へ。別段に仰せ出され。歸京の後とり紛れ。延引に及びさし出さず。鈴鹿石見守宅に預り置候處。類燒いたしたる由を。御返答申し上た。されば是も。僞りで有つたと見える。この時攝政殿下の仰せに。石見守不調法之段。申訣相立難きにつき。百日逼塞いたすべき旨を仰せ付られ。さて御書付を以て。吉田家へ仰せ渡されたる御文言は。

社家位階之事。從ニ先規ニ傳　奏有レ之者勿論。無ニ傳　奏ニ之社家も。吉田不レ可レ及ニ執　奏ニ。雖レ然遠國より。吉田へ賴來候社人位階之事者。吉田方より。職事迄申入。相調可レ然候。無位無官之社人裝束者。吉田より可レ有ニ差圖ニ者也。

八月十七日

と仰せ渡されて。これで諸事落著いたし。吉田家の邪なる望も。しやんと錠がおりてしまッた。この御文言のうち。遠國より。吉田家へたのみ來たる社人の位階とても。吉田家で直に執奏することは相ならず。其時の職事方まで申入れて。職事がたより執奏いたして。その願ひを調へよとの事。また無位無官の社人どもの裝束は。吉田家で差圖いたすべく。と仰せ出されたるは。去年寛文五年七月十一日に。將軍家より仰出されたる五箇條の御條目に。「無位之社人可レ著ニ白張ニ其外之裝束者。以ニ吉田之許狀ニ可レ著レ之事。とあるを御立なされての仰出されぢや。さすれば吉田家に於て。諸社の宮人を。盡く支配すべき謂は。曾てなきこと。然るを世の不學なる輩が。なほいまだ。吉田家の支配を受べきことに。思つてをるも多く。吉田官とか云て。俗の神職者などの。何の守などゝ名乘てをるは。氣の毒なことぢや。依てこの吉田官のわけも。あら〳〵申置ませう。それはまづ吉田家の裁許狀は。寛文五年七月の御條目の如く。無位の社人に。相應の裝束を裁許せらるべきことな

ゑに。分に過たる狩衣を許し。官名までを授け。また黒袍などをも許さるゝこと。言語道斷非禮の限りなることゞ。と申す故は。その裁許狀とて渡さるゝ文言に。

何國何郡何村。何社之祠官。何々守何某。恒例之神事祭禮參勤之時。可レ著ニ風折烏帽子狩衣一者也。神道裁許狀如レ件。

何々年何月何日　　吉田家　實　名

神道管領長上卜部朝臣何某

と記してある。俗の神職者流が。吉田官と稱して。大和守の。和泉守のと名乘り。吉田家の裁許狀を申請たと云は。右の文言ぢや。此文言を見るに。裝束裁許までのことで。官位の義ではない。これは寛文五年。關東より仰せ出されたる御條目に。無位之社人者可レ著ニ白張一其外之裝束は。以ニ吉田之許狀一可レ著レ之事。とある故のことゝ見える。さて吉見氏のいはれたる如く。白張とのみ云ときは。小者中間の著する裝束を。白張といひ。社家の著する淨衣をも。上下とも白きもの故。不案内の輩は。白張と云なれども。小者中間の著する白張の地は。布でいたした物。また淨衣と云ものは。斷地を白粉張にして。裁縫もとんと異なる物ぢや。扨この淨衣は。尊卑を分たず著用する服だに依て。上は天子様より。下は六位の侍。または無位無官の者まで著する物で。寛文五年の御條目に。白張と有るは。この淨衣のことぢや。然るに不學なる神職たちは。小者中間らが著る白張と。紛れて見ゆることをいやがり。また布衣素襖も。無位の人も著して。苦からぬなれども。夫よりは見分の宜き物を。著せんと希ふに依て。吉田家より。紋紗の狩衣を免さるゝことゝ見ゆる。然れども狩衣は。大中納言も著せらるゝ物で。品輕からず。殊にこれは尋常の略服で。實は狩の時に著する物ゆゑに。神拜にはいかゞしき物ぢや。然るを吉田家の說に。淨衣と云時は。何れの裝束にても。清淨なれば。狩衣でも素襖でも。淨衣と云て。通用の名目じや。などゝ申さるゝが。淨衣といふ名目が。一つの裝束に立てをるからは。混じて云べきすぢはない。然れば狩衣を。妄に許さるゝは。甚不正なることで。まして社人神職より。金銀を出して願ふ時は。黒袍を免し。また笑ふべく。卑むべきことは。笏を持に

も。冠をかぶるにも。沓をはくにも。一つ〱禮謝を貪り取て。授けらるゝが。それを受る人は。愚にして。是非なきヿなれども。授くる人は。法を犯し。下を欺くと云物で。相すまぬヿでは有まいか。それは服色の御令は。たとへば五位にては。緋袍を著するが當前なる所を。四位の著する黒袍を著する如きは。位袍を借亂するとて。堅く御禁制のヿなるに。無位の輕き社人に。黒袍を許して著せると云は。非禮僭上の甚しきヿで。一向論ずるに。詞もない程のことぢや。また吉田官と稱して。吉田より官名を許さると云は。右の裁許狀に。大和守とか。和泉守とか。記し與へる故に。實に任官したりと思つてをるが。總じて社家に限らず。位階のみを下されて。官のないはあれども。官有て位のないと云ことは。とんと聞たことがない。然るに吉田の裁許狀に。官名ばかり有て。四位とか五位とか云位階は。ないがをかしい。これを受て。實に任官したりと思ひ。疑ふ心のないは。不學故のこと。また吉田へ。この事を難ずれば。其者自ら。大和守と申來し故。かく認めたるので。更に此方で任じたのではないと云ふ。是みな

例の遁辭ぢや。官位のことは。天皇より御授けあそばすことなるに。臣として私に官を授けると云は。その罪輕からぬことで。吉田より授る官名は。かくの如くまやかしたるもの故に。實に立ず。公儀の御扱ひも。和泉守の。大和守のと名乘たればとて。守の御取扱はなさらず。たゞ大和とか。和泉とか呼捨になさるゝことぢや。實に禁廷へ奏聞を經て。位記口宣を頂戴いたしたる官名なれば。さうはなさらぬ。又この許狀の末に。神道裁許狀如レ件。と書るゝも聞えぬことで。裝束裁許狀如レ件。とあればよく聞ゆるが。こゝに神道の字は。義に於て通せず。只何事も。神道といへば。能きことゝ存せらるゝと見ゆる。また末に神道長上とあるも。通せぬことで。神祇道長官と云べきを。略して書たるつもりか。然れども。吉田卜部は。神祇伯でなきこと。上に辨ずるが如く。彼の家は。龜卜の長上だに依て。其通りかけば尤なれども。猶あつかましく。神祇長官と。世間に思はせんとする。我慢僞計の心ざしが止ざる故。かやうのまやかしばかり書れると見える。扨任官を望む神職たちが上京して。直に吉田の家老かと思はるゝ。

鈴鹿石見守。同周防守。同壹岐守など云輩に頼んで申入るれば。兎や角と難澁をいひ。月を經て永々逗留するうち。賂を貪り。さて右の狩衣著用の許狀を申うけ。其文言に。何の守とかある故。愚昧の神職ごもが欺かれて。勅許の如く思ひ。官金を出し。吉田殿に對面の事すんで。歸るばかりのことぢや。又其家老かと見ゆる三人は。周防守。石見守など〻。受領を稱する故に。攝家。清花。大臣家などの如く。諸大夫を召使はる〻かと思ひ。尊敬すれども。右いふ如く。兼連まで地下の社家で。二十二社の内で有た所を。近き世に昇殿を聽され。公家衆並に成たる故に。平の公家衆より劣て。大納言はさておき。參議中將辨藏人などに。拜任する事もならぬ程の。卑き家柄だに依て。大臣家などの足元へも寄られず。どうして諸大夫を召使ふことなどがなりませうぞ。只彼の家は。吉田社の預りで。社務職だに依て。彼の社に屬する下社家どもに。輕き官位をかけて。石見守。壹岐守など〻稱して。社人ながら。彼家の家老らしく。見せかけた物だから。必しも欺かれぬがよい。又吉田を頼んで。實の官位を願ふ者もあれども。寺院などで本寺を頼むと同じ事であるから。大社の輩は。吉田の下に立ことを恥辱とするは是故ぢや。凡て實の官位を頂戴するとき賜はる。口宣位記等の御文面を見る時は。吉田官など云は。辨を待ずして。まや物と云ことは知れる。此に付て。白川家にて。無位無官の者へ賜はる許狀などは。少かもまやかしたる事なく。立派な物で有ますが。其文言の趣は。

應下以二姓名一某國某郡其社補中神主職上事

右以二件某一令レ補二神主職一訖著二風折烏帽子淨衣一可レ令レ欽二仕恒例神事一者本官裁許之狀如レ件

年號某年某月日　神祇伯家令官位姓名押署　奉

此の如くで。少かも潛上不法の詞は見えず。誠に相當の文と思はれる。さて吉田家の奸曲邪佞をはたらきて。家をおこし。又今以て其餘風やむことなく。奸佞を致さる〻ことゞも。中々以て。一朝一夕に語り盡し難きことで有りますが。それは吉見氏の辨卜抄を讀る〻時は。細やかに辨じてあるから。今は少か申すのぢや。さて彼家にて。神道々々と云ひ。又その神事とて致さる〻ことどもを見るに。凡て眞言宗

の佛道行事と同じ事だに依て。篤胤若年の時より其の唯一神道と名のるには似つかぬことゝ。怪く思つて居たが。林道春先生の神社考に。われ吉田家の說を見るに。彼兩部習合の說を剽み掠めて以て。己が說となしたる物ぞ。といひ置れたるに心づき。其のち天野信景が。しほじりと云書を見れば。卜部家にて修する所の神道護摩供は。吉田兼俱が子の九江僧吉田山の下に一寺を建て。神龍院と號けしが。この法師が始めて行ひ初し法なり。然れば僧こそ修すべきに。今の祠官たち。傳受して修するは。實に似げなき妄事なりとあるから。さすれば吉田家の謂ゆる神道。また神事などは。兼俱が時より始めたことに相違なく。扨こそ此人の先祖。兼延と云が作だと云て。妄作いたしたる。名法要集と云書が。甚く眞言宗の旨だに仍て。其內むねとある事どもを辨じやうならば。まづ彼家の神道なら。唯一と稱することは。法花經に。唯有一乘法とある文に取り。さて後一條院宸筆にて。唯一の二字を記して賜はッたると。名法要集にあるから。先以て佛語を取たのぢや。又其宸筆を御染あそばしたると云は。例の信じ難きこと云までもなく。此方であらうならば。同じ唯一といひ出すにも。其據にとる物が大きに違ふ。それは日本紀の。孝德天皇の御卷の。御詔の御文に。帝道唯一と云ことがある。兼俱はこれを見付ぬから。佛書に依たもので。己が家は。天兒屋命の嫡々相承たる。神道の家ぞと云て。日本紀をば。我が家の書の如く云ひなしながら。是を知らぬと云は。訝しきことぢや。さて吉田家の神道行事は。もと眞言をまなんで始めたることゆゑ。其壇も四角なるべきに。八角に作て祕事といたし。神道は八の數を用ふるなどいひ。神道護摩。宗源行事。十八神道。この三つを三科と立て。此を兼學んだるを。三壇行事とも云ふ。此外神道灌頂。神道加持。火燒行事などいひ。猶くさ〳〵有て祕事とし。此を切紙傳受と云ひて。ひそかに傳へる。此三壇行事のうち。護摩灌頂は。もとより眞言の行法。また宗源行事と云ことは。密家の兩界の本次第。と云行事を盜だるもの。又十八神道と云も。眞言の十八道といふ行事をぬすみ。鳥居を白布でまとひ。樒を榊に取かへて。神道の行事と名づけ。其唱ふる文をきけば。一切衆生。六根の色體に迷ひ。

三心の元々を忘るゝ故に。罰多く賞少きなり。正しく其本は。色體も神明の分身。心は一神の同根なりなどゝ。眞言の心を取て。妄說をなし。これを神祕神傳と號し。十八神道を傳ふるには。錢何十貫の謝禮。火燒行事にては。金何程と價を極め。愚昧の神職等を欺き。禮謝を貪る(むさぼ)ことぢや。

○吉田家より分つたる家に。萩原家と申すがある。それは豐臣太閤秀吉公。慶長三年に薨せられて後。相談有て。御遺骸をば。阿彌陀が峯に葬り。その神靈を。豐國大明神と號し。社を立て。其の神主に。吉田の庶流を御取立有て。二萬石を下さるべしと。吉田家へ御沙汰があッた。これは今の御世の。かく學問の道の開けてすら。彼家をば。神道の家のやうに思つてをる人も。多くあることなれば。況(まし)てその時分は。さやう故に。かゝる御沙汰も有たもので有ませう。此時吉田家は。兼賴と云たが。總領ながら。家を弟にゆづり。家號を萩原と改め。豐國大明神の神主となり。彼吉田家に傳はる。神道傳受のことをば。殘らず持て立のいたが。この後當將軍家になつて。豐國大明神の社を。破却なさるゝとき。兼賴をば。豐後國へ配流仰付られたなれども。後水尾天皇樣の御詔にて。其まゝ都に置候へ。との御事で有たる故に。千石賜はッて。吉田村に蟄居して居られた。と云ことぢや。(これは、新靈面命によりて云、)この砌。江戸日本橋一町目魚店の商人に。尼ケ崎屋五郎右衞門と云もの有て。或大名に。魚の直(あたひ)がしたゝか有たなれども。償(つぐの)はれざる故に。問屋に家を取られて。僅なる人の軒をかりて居たが。(これは鹽尻に依て云ふ、○面命に、堺の町人にて、江戸に藥店を出したり云々、)其後鎌倉に隱遁して。此者生得歌を詠むことを好み。歌よみは。とかく神道を知らでは。叶はぬことゝ思付て。京都に登り。人に添狀をもらひ。萩原兼賴のもとへ行て。御目に挂(かゝ)りたしと云たる所が。何くれと六かしく申されて。對面なき故に。一首の歌を詠んでかき記し。これをさし上て賜はれと。云て立歸つた。其歌に。「神の道とはむと思ひくれはどり。あやしと人のなど咎(とが)むらむ」。兼賴この歌を見て。人を走(はし)らせて呼かへし。對面せられ。これより一年ばかり。京都に逗留して。翁の傳とか云までを傳へうけて。鎌倉へ歸たが。吉川惟足と云はこれぢや。鹽尻に云。京都に登り。萩原家の下部となり。と

かくして吉田家に仕へ。兼賴末期に。彼家の書を盜取り。暇を得て。自家の物にして。神道々々と。こと〴〵しく鳴しゆゑ。吉田の人々。其傳なくして。私に口說をなす事を咎めしかば。京を去り東に歸り。彌々神道を說く。久しく京に在りしゆゑ。歌のことなんど聞覺えて。利口人の耳を驚かす。然るに。舊事大成經の僞書。造爲のことに緣りて。鎌倉へ下さる。かゝれども溯信軒泰翁。稻葉正則少將正俊。堀田筑前守始めより彼說を信じ。面白きことにして。再び東都に返して。自說を爲せしと見ゆるが。本文に云とは異なり。

爰にかの萩原兼賴。わづらはれて。末期に及んだる時に。辱なくも。後水尾天皇樣より。代々の傳來は如何。と御尋あそばしたる時に。兼賴の御答に。行事の儀は。家來將監に。七枚起請を書せ候て。傳へ置候。道の事は。其器なく。旣に亡び申候。と申上られたとある。

この言に依て考れば。臨尻に。惟足が。兼賴の末期に。彼家の書を盜で。立退たとあるは。實說で有ませう。盜まれて亡なりたる故。かく答へ申されたで有う。と思はれる。

かくて惟足は。兼賴の死たる後。吾は萩原家の神道を。のこらず傳受たりと云て。ますく神道を說く故。それは萩原臨終の詞に。道の事は。其の傳ふべき人なくて。旣に亡び申候。と申たるに違ふ事だに依て。僞であらうと。京都の御疑が挂つて。座鋪牢に入れて置れたる時に。惟足が申には。神道を存候か。不存か。其道を知たる人に。御問試みさせ下さるやうに。と云に依て。兩三輩の堂上に仰せ付られて。吉田流の神道の。大切なる所を擇んで。三四箇條問はれたる所が。よく答へたる故。その段を奏上たれば。然らば不審ながら。其分よさて。御免が有て。其後江戶へ來て。芝の牛町に。かすかなる體にて居たる砌。會津の。肥後守殿へ召れて。御意に入り。是れより肥後守殿と。其時の御老中。稻葉美濃守殿と。御兩家より仰立られて。大樹公の御目見を仰付られ。この後吉田萩原の兩家より。かの傳受の書共を。返すべき由を。彼此と云はれたなれども。とう〳〵返さず。我家に持傳へて。これが今の吉川源十郎の先祖でありますす。新嘗面命によりて云ふ。

しば尻に。近世神道者と云もの。習合家の説を以て。吾國の道に混じ。神明をあやまり。或は文字を取らずして。別に神代の傳の秘説ありなんど。妄説を爲て。愚俗を惑はし。和訓をさへに造り出して。一家の秘とし。剩へ。造言の罪を犯し。僞書を造れること。國家を憚らざる大罪人なり。習合一變して。此風とはなれり。其の實は。卜部家のおもてを替たる物にて。吉川惟足より起る。と云ましたが。然る事ぢや。また惟足流の神道の秘書に。伯父とは。父についでおちる。と云和語なりとあるが。然らば伯母はいかにぞや。一笑すべし。或人惟足門人長岡爲麿に。有氣の賀のとき。祭る神あるかと問へば。うけの御靈の神なり。と答へしとかや。然らば無氣の年は。むけの御靈と云神ありや。笑ふべしと云ふことも有が。なるほどをかしいことぢや。又この爲麿と云もの。其弟子となる者には。必神系圖を與ふ。兒屋命より次次。惟足爲麿とつらねたり。これ佛家の。師弟血脈の相傳に習へり。と有ますが。是は世の神道者ども。今もする事ときこえる。

此の惟足の世にある時分。山崎嘉右衞門と云が有て。これはもと。土佐國の。山崎何某と云針醫の子で。幼き時より。京都妙心寺の禪僧。舜藏司となッて居たが。或とき僧大勢。本尊の前で。經を誦して居たる砌。にはかにぐつ／＼と吹き出したから。和尚が驚いて。汝は何を笑ふのだと云たれば。釋迦廣大なる妄説どもを云おいたがをかしさに。覺えず笑ひ出したりと云ふ。此後漸々に。佛法をいやに成たる時に。土佐の國守。山内家の家老に。野中主計と云が有て。これは頗る儒者で。そこはさばかりの器量を持て居ながら。僧と成て朽果べきことではない。と云ひ進めて。還俗させた。此より舜藏司は。髮をはやして。山崎嘉右衞門と稱し。實名を敬義と名のり。號を闇齋と付け。二程子朱子の學を學び明らめ。大きに其世に鳴り。則其學を以て。會津左中將正之朝臣に仕へたる所が。彼惟足が。吉田流の神道を。さかりに唱ふる時分だに依て。その弟子。服部春安と云者。山崎が唱ふる。朱子學に立る所の大極の説をいひ破り。とかく。國常立尊でなくては。すわらぬと云て。山崎と大いさかひをした處が。さう／＼山

崎は云ひ伏せられて。惟足が弟子と成り。また外宮の延佳が門人ともなり。此の後に。また吉田家へ入門して。其流義を委くまなび。自分の靈祠を。京都上御靈の內に建て。垂加靈社といふ額をかけ。是よりして神道の方の通名を。垂加翁と名のッたことで。此人の。朱子學の弟子が多く有たる中に。佐藤直方。淺見安正など云人を始め。山崎が神道に入て以來は。其神道の說の。牽强附會多きことを非として。破門を受た者も多かッたと云ことぢや。實にこれは尤なることぢや。吉田家の神道と云趣の。段々申す如く。けしからぬことなるに。況て垂加が。此に朱子學の旨。性理。大極。陰陽。五行の說をまじへて。垂加流と云一流をひらき。其牽强附會なること。何とも歎とも云べきやうも無きむづかしきことと成たが。此は鈴の屋の翁か。人の問に答て。垂加流の神道と云は。佛をば嫌ひて。習合せぬさまに致したなれ共。其替りには。皆儒意を習合して。造立たる故に。實は此も兩部にて。譬へば兩部神道は。陽症の傷寒の如く。熱に惱まさるゝこと。あらはに見ゆるを。垂加流の如き。唯一と稱する流は。陰症の傷寒の如く。

表は唯一にて。熱氣の見えざる故に。人みな其病を知らず。實に唯一と思へども。裏は悉く。儒意漢意の大熱に犯されて。難治の病なり。其外垂加流の外にも。此かれ少々づゝ。かはり有る流々あれど。皆陰症の同病を免れず。と云れましたが。實に陰症の病で。かの顯に。佛意をまじへたるよりは。餘程辨へがたく。この輩。佛意を混ふることをば謗りつゝも。其本といたす朱子學が。元來佛意を以て建立したる學風なるに。其を習合したる物ゆゑに。實にはこの垂加に至つて。彌々增々。漢意の雲霧。ふかく立みちて。闇の夜の如く。古の道は見えがたく成た。とは云ものゝ。陽證ならば陽證で。葛根湯か。麻黃湯で。さらりとやッて直すが。俗に謂ゆる陰症といふは。實には陽明症のことだが。それなら其のやうに。此方には。其陰證を見立る目的があるから。白虎湯で熱をさますか。さては大承氣湯といふ攻擊の。大黃芒硝劑を與へて。熱の爲に燒ついてをる。燥屎と云て。ためぐその漢意を。べり〳〵と逐下してやる。又實の陰症虛寒の病と見れば。附子劑で。體をしびらせ煖めて。本復させる。どの道にも。其

漢意を直さにやおかぬ。これが此方の流義でござる。

これも序だに依て申すが。垂加と云名も。けがらはしいことで。其故は。一體垂加と付たのは。彼の五部書に。神垂以二祈禱一爲レ先。冥加以二正直一爲レ本。とある文を。神の垂は祈禱を以て先となし。冥加は正直を以て本と爲す。とよんで。其の神垂の垂字と。冥加の加字を取て。垂加と付たることのよし。其門人。八重垣翁とか云者のかいた。神道口傳と云物にあるが。さすればやツぱり。垂加と云名も。佛語を一字づゝ。取合せて付た名ぢや。彼流では。佛法をば口のかたきに罵るが。自分の名さへ。佛語で付るとは。こりやどうした事だ。此意で。名を付たに相違ないことは。則垂加の文集に。神垂。祈禱。冥加。正直。我願守レ之。終身勿レ忘と。此寶基本紀の文を。其まゝとツて。身を終るまで。これを守ると云てある書これを。佛語としらずに付たならば文盲いはん方なく。知てすれば。歴としたる兩部だが。扨々きたない心ではないかな。

さて吉田家に謂ゆる。唯一と云ことは。其前に。兩部神道と云ことの有るに對して。其の兩部をまじへず。と云こゝろに。彼の法花經の。唯有一乘法。無二亦無三。といふ語から思ひ付て。唯一と云ことは。いひ始めたものだが。此の唯一といふ熟語は。法花經に有ばかりでなく。外の佛書にもいくらか有て。三界唯一心。また唯一心。彌陀名號。即身成佛とも。それを略しては。唯心の彌陀とも。一心彌陀佛ともいふ。此等の唯一といふ熟字を取り。尤も神の道の。唯一なるべきは。さやう有べきことなれども。元來は。兩部有てこのかた。其と異にせんとて。云出したるのみのことで。其説をきけば。吉田家の唯一も。基づく所は。やはり兩部は遁れぬことぢや。又垂加流などで。唯一と云ふ説は。佛書の唯一を取たと云は。いやな事に思ふと見えて。その唯一の説が。これと異にして。此方の立たる神道を。唯一と云ことは。兩部に相對したることではない。人は則天が下の神物で。天と人と毛頭へだてなき故に。天人唯一の理を以て。唯一と云ふなどゝ云ことだが。是は此の間も申たる。外宮の僞書。寶基本紀の文に。人乃天下神物也。と云所から思ひついて。宋儒の理學を

持こんで。立たる說ではあるけれども。其の一と云ふ語の本の出所は。佛語をぬすんで云ひ出したることで。それを垂加が。また盜みをして。かやうの理屈をこじ付たること故に。いはゞ彼臭い物に。追々に蓋をしたる如く。直ちにそれとは見えずとも。其臭氣の泄れぬことはない。然れば此流義も。云ひもて行けば。やはり佛意に歸することぢや。こゝが謂ゆる陰症の傷寒で。一寸知れぬ熱ながら。さやうの訣をば辨へも無く。此流を汲む輩が。めッた無性に佛法を罵るが。是は俗の諺に。盜人たけだけしい。と云はこの事ぢや。

門人森義春云く。吉田殿の奸曲僞妄を働かるゝことは。上に辨卜抄を擧て。師の委く辨論せられたるが如し。然はあれど。今しかく學問の道開け。善惡邪正明かに辨へ知らるゝ世と成れるが上に。去々年の秋。師の上京せられたる砌。彼家より。厚く招待せられたるなどを思へば。先非を改めて。次々古に復さるゝこともかと。少は懷しくも思ひ居たる時しも。彼家より中臣祓本義ちふ書を。普く門下の人々に授けらるゝ由聞て。さこそ有めと其書を借見たるに。甲斐國三木廣隆と云人の著せる物なるが。拙しなど云はむも愚にて。いともいとも牽強附會。云べきやうもなき。大妄說にぞ有ける。然のみならず。例の管領長上など云ふ稱ある上に。事々しき賞詞の。公文所と云序をさへ添て。板本と爲し。無智文盲の神職らに。權威を以て推授け。強て過分の金幣を貪り取らるゝ由なるは。彼の文明の頃より四百年。今も替らず。奸曲僭上はなはだしく。吉田殿は更にも云はず。其の被官等迄。一人もそれと悟れる者なきは。何なる神の御罰にて。再びなほる時も無く。妖魅世界に墮果られたることゝ見ゆるは。憐むべきことにこそ。然れば一々辨を費やすに及ばず。かく一と言云ひ放ち置くになむ。時は文政八年九月なかば。

俗神道大意四

平田先生講說　門人等聞書

世の中の事物。おほかたは。佛意佛行の相混つて。これまで段々申す通り。其仍て來ること。甚久しく。實に一朝一夕のことではこれなく。既に伊勢の大御神の宮事さへに。夫に御かぶれ遊ばしたる程のこと。眞に此れは。歎きても歎かはしく。悲いことぢや。去ながら。さやうの非事も。今は世の神職等。及びよの常の人も。目なれ耳なれ口馴れ。また致し馴て。世間一般に相成り。既に朝廷の御神事にさへ。佛道くさきことが。相混つてをる程のことゆゑ。之を業として居る人たち。かの過て改むるに憚ること勿れ。とか云やうに。速に今までの非を改むることの。致し難きことも有らうなれど。其を見す〳〵非事と知つゝ。申さずにも居られず。また眞の所を明らめずにも置れまい。なぜと云ふに。他門より。若もかれこれ非難を受まい物でもない。其の砌など。知て居て夫に答へること。更に辨へも致さずに。人の非難を承はるとでは。いかうこちらの强みが違ふことぢや。夫故。是はとツくりと精げ明らめて置ねばならぬ。夫に付て心得がある。鈴の屋の翁の云れたるには。「道に叶はずとて。世に久しくあり習ひつる業。にはかに止むとするは惡し。只その害ひの筋を省き去て。ある物は有るにてさし置て。眞の道を尋ぬべき也。萬の事を。强て道の任に。直し行はむとするは。中々に眞の道の意に叶はざるとあり。萬のこと。興るも亡ぶるも。盛なるも衰ふるも。みな神の御心にし有れば。更に人の力もて。え動かすべきわざには非ず。眞の道の意を悟り得たらむ人は。おのづから此理は。よく明らめ知べきなり。と云ひおかれ。又大祓詞俗に中臣祓といふの後釋に云れますには。「凡て近き世に。神道者と云ふ者の所行を見るに。法師の佛をいつくわざを。羨み效ひて。行ふ事のみ多し。其中に。この大祓の詞をよむことも。かの佛の。經だらになど云物をよむに習ひて。或は神の御前に向ひて誦み。或は數百遍もよみ。或は五千度。一萬度の祓など云こと有て。此をよむを祓修行といひ。又此詞を。當に中臣祓と云ひ習へるから。祓と云物を。即この詞のこと丶心得。又それに習ひて。外にも某の祓某の祓

とて。よむ文の世にこれかれ有るは。みな祓と云ことの樣をも辨へざる。後の世人の造れる物にて。只例の漢めきたる事をのみ云ひて。古への意詞にあらず。祓には殊に由なきことのみ也。扨又右に云へる如く。直に此詞を祓と心得。これをよむを祓ひ修行とするは。太じき非事なり。此詞は祓の業を行ひて。其由を神に申す詞なるに。其祓の事をばせずして。此詞をのみ讀むは。祓をせずして爲よしを申すにて。神を欺き奉るに似たれば。此詞いかにめでたくとも。只讀たらむばかりにては。罪穢の淸まらむこと覺束なし。此詞は祓には非ず。祓の祝詞なり。又此をよむも。祓には非ず。祓は祓のわざをして。其時に此詞はよむ物也と心得べし。然はあれども上の件の如く。心得誤り來れるも。久しきことにて。世に普くよむ習ひとなれることなれば。今これをよむを。あしとは咎むべきに非ず。祓と祓詞とのけぢめを。心得辨へ居て。讀ことは。世の習ひに從ひたらむも善かりぬべくこそ。といひ置れたが。誠にこゝらが。鈴の屋の翁の學問の。透徹の所に至られて。有難い所ぢや。能々こゝらを心得て。必ず今迄の仕來りを。淸く止めはてよう。改めようなどゝは。思はれぬが宜く。只々改め止ても。差支へにならぬ事共をば。追々に改め正さるゝやうに致したい物ぢや。一體今度。世間の有ゆる神道を。論辨いたすことは。こゝに心得違ひ。さし支へも出來やうかと存じて。此は云ふまい。などゝも存じたなれども。夫では眞の道を說むと致す篤胤が。眞情の儘でもないと。彼これ心配をいたしたなれども。翁の右の敎もあることゆゑ。思ひを放つて申しまする。返す〲。强たることのないやうに。神に仕へ奉る。謂ゆる御神事なども仕來りは暫くまづ。其儘におかれるが宜いぢや。其中に。神代の事實を說まげ云枉ること。及び眞の道に背けをる古人の說をば。根から葉からとり捨ることは。こりや今の間にも。かの過ちて改むるに憚ることなく。胆を放つていたしたい物ぢや。然れば古人の神學者が。致し置たることの。古の眞に違ひ。今の俗の神事にも。間違つてをることゞもを。取集めて次々申さう。但し數多きことなるを。一々次第を立て云には非ず。思ひ出るまに〱云ふなれば。聞とり惡きことも有らう。其心にて御聞が宜いこと

ぢや。
○扨まづ垂加流にとく趣きを申さば。吉田家の謂ゆる神道は。唯一といひはすれども。顯に兩部習合の趣きの見えるを以て。其佛意の混じたるが惡きことを心づき。その佛意をば。皆をツて此を撰び其事には。少か功も有なれども。かの用明天皇の御紀なる神道の二字。佛法と相對したるなどを非心得いたして。神の敎の道と云ことにとり成したなれども。其の敎の書とては。御國にはとんとない。夫はきつい物ぢや。誠にない。爰で彼垂加などが思ひ付て。日本紀の神代の卷を。敎訓の書に取成て。說枉げ云枉げ。牽强附會。耳とつて鼻かむやうな說を立て。しやらくさく。ちよこざいなる。私の新治道を建立いたし。神代の奇しく怪き事どもを。甚く理說にときなした物ぢや。但し神代のあやしく靈異なることを。後の世人の生さかしらなる心を以て。怪しからぬ趣にいひなすことは。元來は小ざかしき漢國風が移りきて。夫をまねた物ぢやが。夫はいかにと云に。から國も世の始めに出たる人々は。謂ゆる神異なることが有て。其狀なども後の世から思へば。化物の如く。片羽物のやうにも見えることぢや。所をかの國人が。後の世心を以て。其怪きことをば都ては取らず。偶にとツて。史記など云類の書に記しあるをば。後世それに注をする輩。その己が身の。いはゞまづ平々たる所より及ぼして。古への怪きを信せず小智を振つて此を出とき。譬へば天皇氏と云は。頭が十二有たといふ傳へを。これは兄弟が十二人有て。各々十二州に主と成たることを。かやうに云た物ぢやの。など云ふたぐひに說て。とかく傳へもなく據もなきことを。己が心を以ていひ枉る。此が唐人流の惡弊ぢや。夫を御國の人もまねび取て。始めて其源を開かれたるは。日本紀の御撰者。舍人親王が御魁ぢや。此事は鈴の屋の翁が具に論じおかれてある。夫より段々押移て。卜部家の釋日本紀、齋部正道の神代卷口訣。一條禪閤兼良公の日本紀纂疏を始め。其外末書ども。ちら〳〵其心ばへに說來て。垂加らが其を委くして。終に今の俗の神學者流などが云やうに。大成いたした物ぢや。

○扨この大成したる。俗の神道と云によりて諸流が有て。彼の兩部神道と云を除くの外はみな唯一神道と名の

ることなれども。此も猶いまだ。佛意の兩部めきたる說や所業も。先入師となる譬の如くで。遁れ果ねば。古の道の眞をば更にしらず。只々漢意を附會することの。功者に成たぶんのことぢや。其諸流の神道が。各々其の立方に。少かづゝの違ひは有れど。今の俗に。多く人の信じ用ふる所は。吉田家で立たる趣〻又外宮の神主。出口延佳が流と。山崎垂加の作りたる神道がはやる事ぢや。其內吉田家の神道は。天兒屋命より。嫡々相承したる。神道の本源ぢや。など云るゝけれども。佛意が多く交てをるに依て。其誠ならぬことが直にしれる。又出口延佳が作たる神道は。周易を附會して。何もかも神代の事は。みな易の道理で說た物ぢや。又山崎垂加の流は。右の說どもをも用ふるが上に。宋儒の理學を附會した物で。何れも陰陽五行を本として說く中にも。垂加の流は殊に甚しいぢや。此等を今論じようとするに。どの流はかうで。何流はどうで。と云やうに辨じては。大ぶ事が入組んで。說くに六かしく。又聞取りにもわるいから。皆押くるめて。神道者流の說と申て。其非言を辨じまする。其つもりできかるゝが宜しい。

○扨まづ垂加流の說に。我國の神道は。天照大御神の御建なされて。人を教へ天下國家を治め給ふの道で。猿田彥の神の導き給へる道ぢやと申すが。此はけしからぬ牽强附會なことぢや。なぜと申すに。猿田彥の神は。皇美麻命の御天降の時に。御出迎なされて。御啓行をこそなされたなれども。世の人の行ふべき道を。御敎へなされたと申すことは。古書にかつて跡形もなき妄說ぢや。こりや何のこともなく。神代紀に。發訓の書に說成さうとする心から思ひ付て。皇美麻命の御導きをなされたと云所へ搆つて。こじつけた物ぢや。扨又猿田彥の神は。正くはさだひこと申す御名なるを。俗にはさるだひこと云。この猿と云ふ處から思付き。其前より有たる兩部神道の。かの胎藏界の佛理を取合せて。見ざる聞かざる言ざるとかいふ圖などを書き。混沌傳とかいふ傳授ごとなどを拵へ。又それを廣めて。其の見ず。きかず。いはぬ所が。即ちつゝしみぢやと云て。漢國の宋の代の朱熹と云ふ儒者が云ひ張たる。敬と云ことを取合せ。土金の傳。また僞愼の傳など云。をかしなこと

を拵へなんどもして。いつわりは。五つにわれると云ことで金ぢやの。又つゝしみは。土金で。土卜(つちしま)ると云ことぢやなど云ぢや。但しかやうの牽强附會をいたして。神の道神の敎と僞つたのも。實は不便なわけもある。夫は元來かの輩も御國を厚く思ふ心がさすがに有て。世の儒者などの。御國をあしく云ひなし。敎の道が無つたなどゝ。とかく卑める故に。夫をくやしく思ふ心からして。天竺には佛の敎あり。漢には儒者の謂ゆる。聖人の敎が有て。唯わが國ばかりが。敎への道のないと云ことを恥かしく思ひ。そこでかやうの牽强附會をして。敎への道を云ひ出した物で。これが抑々萬つの心得違ひ。牽强附會の仍て來るの本ぢやが。元來敎と云ものは。惡事をする者があるに依て立た物で。實は敎の有のは國の恥で。御國の古へは自ら君おやに忠孝(まめ)やかに有て。敎へだてをせずともすんだ物ぢや。彼の古人の神學者たちが。こゝの處に心付んで。そうでもないことを夫に取なし云たのはこりや誤りで。猶このことは儒道の演説をいたす砌に。具に申すつもりぢや。若しひて神學者流の云如く。天照大御神こと更に。敎の道を御立あそばしたとのことならば。是は輕(かる)からぬ大切のことゆゑ。古書古傳說に。必ず明かに。其事を載置れねばならぬことぢやが。曾て以て敎の道を御作りなされたと申すことは相見えぬ。後世妄作の神道が出來て後の。雜書家傳の類などに。道々しきことの記しあるは。一向とるに足らぬことゞもぢや。

○神學者流の持扱ふものに。神令となづけて。神道のおきて。神の敎と云て。記した物が一卷ある。夫を見れば。漢籍のこましやくれな理屈を取合せて。祝詞。祓の詞を似せてかいた物で。更に信用するにたらぬ物ぢや。又かの妄作の道を。理學神道とも云と申すけれども。理學と云は。漢土の宋と云た代に。程明道。程伊川といふ兄弟。及び朱熹と云者の。唱へ始めたる學風で。實は禪學の趣意を盜んで。立たる學風なることは。古人のよく辨じ置たることぢや。扨その朱熹が時代は。我が御國は。保元平治の頃に當つて居るゆゑ。猿田彦の神の時分などには。聞きも及ばぬ漢土の學問。まして遙(はるか)後なる宋の代の朱熹が始めた理學を。どうして御存じ有らうぞ。夫を猿

田彦命の傳へさしつた敎ぢやと云ふで。僞作なることもしれ。時代も知らぬ文盲をさへに欺すことぢや。

○神學者流の說に。日本紀の神代の卷は。神道の本書なるに依て。祕傳口訣はなはだ多く。講釋も大切のことで。容易くは通達ならぬと云けれども此も取るに足らぬいひ方ぢや。なぜと云に。かやうの說を云出したる本の起りは。儒道には六經十三經など丶云本書あり。又佛書には。一切經と云ふ本書ある所へ。彼らが妄作したる神道にばかり。本書が無くては。恥なことぢやと心得。其敎への本書をば。作り出す力もないかして。神代の卷を强て本書に取なし。これを講釋して。かの妄作神道をとく器とした物ぢや。事實を御記しなされた書物を。神の敎と云はうとすることゆゑ。牽强附會。もツても立れぬ說どもが多い。此事を。伊勢貞丈先生の云はれたには。神代の卷の文を以て。神の敎の道に解なさうとて。其本文をば曲言也と云て。陰陽の消長。五行の相生相尅の理說を以てし。儒佛の兩道性理の學を混雜し。牽强附會して。謎語をとくが如く。佛經の譬喩を解くが如くして。强て敎の道になるやうに解なすは。正解にあらず。日本紀は國史なり。上古の事跡を載たる書なり。敎への道を載せたる書には非ず。凡て史は直言を以て書く物なり。何ぞ曲言を用ひんや。曲言ならば。正史とすべからず。直言を直にとかずして。曲てとき。本文の文意の外の義を生ずるは。曲解なり。道を載せざる書を。强て道を載たる書に紛らさうとて。まげて解き。奇怪に非ざるやうに云はむとて。曲て解くに依て。其曲げやうに祕傳口訣さま〴〵むづかしきことが出來たることぢや。と云れたが。是はよう云れた。實に此通りぢや。猶委く申さうならば。一體は生から心の小智がある故。敎の道といひなさうとする奸曲ばかりでもなく。實は神代の古傳說をあやしみ疑つて。信じ得ぬ故ときまげたる趣意もあることぢや。

○俗の神道者流。しひて神代の卷を敎訓の書也として。先神代の故事をいひ枉べき基を立おきて。其古へを云まげたる中に。相すまぬことはまづ。天照大御神を。たゞ古への神人也といひなし。其しろしめしたる高天原といひ。天つ國と云へるは。則大倭の國の事なるを天子の御座なされたる處ぢやに依て。

天に准へたる物なり。後にかの國に。高市と云所あり。香山と云山ありなど〻。猶附會の説をいひますが。これは師の翁の。天祖都城辨々と云書を著はして。委く辨せられ。又記傳にも辨じおかれたが。其大略を摘んで申さば。先大和國に。天の香山。高市などいふ地名有ればとて。大御神の都で有たると云證にはならぬことぢや。なぜと云に。若さやうの地名あるを以て。こゝぞ大御神のまし〳〵たる都ぞと云ならば。播磨國揖保郡にも香山あり。常陸國久慈郡にも高市あり。又都といふ地名もあり。備後國神名郡。伊豫國越智郡などにも高市あり。又神代紀に天安河ありて。近江國にも安川あり。必しも神代の都の趾ならねども。天上なると同じ地名あること斯の如くぢや。抑々天照大御神の都は。高天原に在て。その高天原と云るは天上なることと。古典の趣きいと明かなることと故。大和ぢやの何のと。凡て此國土に在し如く云る説は。みな古典に乖ける私事ぢや。然るを生さかしき後の世人の漢意に。此大御神は天皇の御大祖に坐て。神代紀に。さま〴〵故事もおはしますは。天つ日の神には坐まさず。此國土にまし

坐たる神人なるべし。高天原といへるも。其都のことにて必この國土の内に有べき理也と推はかッて思ふより。種々の邪説は出來た物ぢや。然れどもさやうに見ては。古典の趣とは甚く相違して。一つも符がたきを。強てかにかくに云くろめたものぢや。但しさう云くろめる人も。こゝかしこと打合ず。自らも心には快からず思ふであらうが。生さかしき漢意の放れがたき。後の世の習ひとは云ひながら。最も心うきことぢや。抑々神の御上のことは。測りがたく妙なる理の有て。凡人心のとかく計り知べきことに非ざるを。諸越人は此理を得曉らず。今の現に見聞く所の。尋常の理に泥み。古今天地の間の事。此理の外はなしと片おちに思てをるのは。都ていと愚なることであるを。皇國人も悉く。其漢籍に溺れ惑つて。其漢意を一向に賢き事に思ひ。彼の妙なる理を思はず。萬のことに。惟己が狡意をのみ先に立てゝ。古傳をば信せず。神代の奇異きことゞもを。皆世の常の理に合ふさまに説まげて。高天原と云へるは。帝都の事ぞ。天照大御神は。此の國に坐ましたる神聖ぞなどやうに。己が心の好む方に任せて云

成たるもので。古典には。さる趣とては。曾てなきことぢや。凡てかゝる類の古傳說。古書に記し傳へられたることを。其事に拘はらず。己が心に任せて說うならば。水と記したらんを。實は水には非ず火なるを。水とは記したる也。とも云はゞ云れもしようぢや。又高天原は。天上なることを疑ひて。此の國土の內也と云はん人の爲に。猶いはゞ。神代紀に。伊邪那岐命の詔に。天照大神者。可三以治二高天原一。素盞嗚尊者。可三以治二天下一とある。是にて高天原とは。此國土のうちならぬことを知るが宜い。高天原が。もし實に此國土の內で。帝都のことならば。天下をば。須佐之男命の治しめして。大御神は唯。其內の帝都ばかりを治しめせとの詔と云んか。扨その帝都。もし大和國ならば。須佐之男命の治しめす域內に於て。天照大御神は。只大和國の國守などの如くにて。おはしませとのことか。凡て心得ぬことぢや。又この大御神。もし神代に。大和國に坐ましたらんには。後には何れの國に移り坐て。大和にはまし坐ざるにか。然るを此輩。天照大御神の崩御坐ることは。國史に敢て言ざるは。深く以あるべし

など云て。崩御坐しといふ趣に說なすは。穴かしこ。これらは枉說の中にも。太じき狂言で。畏きことの限りぢや。抔卷も忌々しく畏けれど。もし崩ましたとならば。此天地は。永く常闇となるべきことぢや。夫はいかにと云に。彼石屋戶に御差籠りなされたる。暫の程でさへ。天地は常闇と成たるを。崩坐たならば。長く日の光は有るまじき事ぢや。然るに此れにも又說を作つて。天照大御神は日の所化に依て。御生れあそばしたる神故に。石屋戶に御さし籠りの時は。天つ日も光を失つたのぢや。などゝ云けれども。此も理は同く。しばし御差こもりなされたるにさへ然ることならば崩坐ては。常闇と成果べき理なるに。然らぬはいかに。又崩坐しなば。必ず御陵あるべきに。無きはいかに。神代といへども。邇々藝命より御三代は。日向國に御陵あることさだかなるは。此國土に御天降なされて。崩坐るが故ぢや。此御陵どもは後々までも御祭有らせらるゝよし。諸陵式に見えてある。然るに天照大御神。天忍穗耳命の御陵のなきは。永く天上に神留坐すが故で。若しはたして此國土にて崩坐たならば。必ず其陵も定か

に有て。後まで祭らせ給ふべきことぢや。後御三代の御陵をすら御祭りあそばすに。況て御大祖と坐す大御神の御陵を。御祭りなきことはないわけぢや。又たとひ朝廷より祭らせ給ふことはなくとも。夫と貞かに申傳へぬと云はないことぢや。垂加以來生さかしき徒が。大和國の天香山を。此大御神の御陵ぞなど云ひもすれど。甚もゆヽしく畏く。心に任せたる狂言で。若さも有らむには。古へより必すさやうの傳あるべき事ぢや。抑天照大御神は。靈能眞柱に委く申たる如く。則今日のあたり拜み奉る。天日を知しめす神に坐せば。此世のあらん限り。崩りますことは坐まさぬ故に。どうして其御陵は有うぞ。凡て大御神の御陵を。そこぞかしこぞなど申すは。返すヾヽいとも畏く。忌々しき枉說で。氣違ひのさたぢや。又此大御神。もし大和國に坐ましたらんには。其の大和なる都を御捨なされ。皇美麻命を日向國に御降し遊ばして。西の邊の國を知しめさせ給へるは何の謂であらう。此徒これらのことは。いかに說くるめようとするぞ。日本紀。古事記古語拾遺の傳とも。又萬葉集の歌など。其外の書どもにも。大和國は神武天皇より始めて。大宮しき坐るよしは見えたれども天照大御神の宮處で有たと云趣は。何れの書にも凡て見えたることなき妄說ぢや。

○神學者流の。神代の事實をとくに。陰陽を附會することの當らぬ訣を。いッち近いことで云はうならば。神代卷に。日神天照大御神と。月神月讀神の。御生れあそばしたることを。垂加などが說に。天照大御神をば。天日に感じて御生みなされ。月讀神をば。天月に感じて御生みなされたることを曲言して。日神月神を御生なされたると云つた物ぢや。と云てあるが。暫く此說を助けて論じやうならば。日は大陽とも云程のことで有ながら。夫に感じて御生れなされたる天照大御神の。女神なはどうしたことぢや。また月は大陰とも云ふほどのこと故。それに御感じなされたならば。女神で有さうな物ぢやが。月讀の神は男神ぢやが。こりや又どうしたことか。先ざッと此位なものぢや。所を此れにも又。例の道理を附會して。日神にして女神に坐すことも。陰陽の理に合つて居ると云た者もある。さすれば彌々妄說なることがいちじるしい。なぜと云にもし日神にして男

神ならば。彼の徒いよ〳〵したり貌に。陰陽の理に合つてゐると云であらう。さすれば女神では決してかなはぬ道理ぢや。所を女神でも其理に合ふと云ときは。これ男でも女でも違はぬなれば。果して陰と陽との差別はどこに有る。なんと此樣なたわいもないことを。いゝ氣に成て云て居ると云は。扨々不便なる輩ぢやはい。

○序にこの陰陽のことで。今一つ云はねばならぬことがある。夫は井澤長秀。號を蟠龍子と云た人は。肥後の隈本の人で。これもやッぱり。垂加や。延佳などの流れを汲だる神學者で。其著した物も大ぶ有て。其内よく人の見る物ぢやが。廣益俗說辨と云ふがある。中には尤もなことも有れど。先つは初學の爲には。惑ひぐさに成て。宜くない物ぢや。その中に笑ふべきことは。或人問て云く。諸越の劍は。日本に及ばざるか。答て曰。何れの國と云へども。日本に及ぶ物なし。又問ふ。いかなる故に及ばざるか。答て曰く。吾子しらずや。日本は。天瓊矛の滴り凝れる所の國なり。利劍その風土によれり。文永弘安に。蒙古襲ひ來りしかども。天地徧滿の瓊矛にあたりて碎けさりぬ。と云てあるが。天沼矛のしたゞりが凝て出來たるは。おのごろ島ぢやものを。長秀が御國の統てへかけて云たのは。其頃の神學者どもおし並て。さう心得て居たに依て。此れは咎むるまでのこともなし。利劍その風土に因れりと云たのは。實に相違なきことなれども。此に付てをかしいことは。一體この天の沼矛で。國を御探りなされたと云古事は。天地初めの時に。天つ神がいざなぎいざなみ二柱の神へ。天の沼矛を下されて。此漂てをる國を。繕へと仰せられたる故に。二柱の神は。天浮橋に御立なされて。其矛を指おろして御搔なしなされ。御引上げなされたる時に。矛先のしたゝりが積て。おのごろ島と成たるとある。こりや何のこともなく。文面の通りぢや。所が此古事を。普通の神學者どもの說く趣は。これは人の上をかりて。天を云た物で。則ち天人唯一の道理を明かにするのぢやと云て。先つ天つ神の御命じなされたと云は。道の大原天に出ると云の意を。曲言して云たものぢやと云ひ又。いざなぎいざなみの神のごとく。天に坐ての古事と。國に坐しての古事とあるをば國に坐てのこと

をば。已に生れたるを云の義を以て已生と說き。天に生ての古事をば。未た生れぬ先と云の義を以て未生と云ひて。此未生と云は。實には御形のあると云ではなく。只人の上を以て。天の陰陽の理を云つた物で。二柱の神の天浮橋に立とは。陰陽和合して。動き初むるを云たもので。沼矛を指下すとは。其陰陽の動て。國土までにみち及ぶことで。陰の潤ひを瓊にたとへ。陽のきざしを矛に譬へて。天の瓊矛といふ。其瓊矛の露したゞり凝て島となるとは。彼の陰の潤ひ陽のきざしの。海水に感合して。自から國土と成たることを曲言して。瓊矛の滴こッて島となる。と云た物ぢやと。此やうにとく。長秀などが神道を說く趣きが。專この通りぢや。若し實にこの說の如くで有らうならば。其謂ゆる陰陽と云もの丶和合し動いて。國土と成ことは。御國に限ることではあるまい。萬國ともにさうで有らう所を右の古事を曲言と見れば。此理に依て。御國の劔のみが。自然に利かるべき謂れはないぢや。若御國の劔の萬國に勝れてをることを。右の古事に引かけて云はうとならば。陰陽の理を云た物ぢやとの說は當らぬことぢや。もし强て瓊矛の古事は。陰陽の理をいへる寓言ぢやと云ならば。皇國の劔は夫故に。萬國にすぐれると云は當らぬことぢや。其故は陰陽の理ならば。萬國同じことで有さうな物ぢや。但し漢土を始め。萬の國々には。其謂ゆる陰陽と云物の。感合はないことか。なんと尻口あはぬをかしい說ではないかな。凡て此義は。御國の物も事も。萬國に勝れをることを。神代の古事に挂て云はよけれども。神代の。實に奇靈く有たることを。あやしくはないと。寓言に說うといたす故に。こ丶とかしこと喰違つて。彼のかしら隱して尻かくさずとか云やうに。此の如く拙き强說を申すことぢや。又この長秀が語の中に。文永弘安に。蒙古襲來りしかども。天地徧滿の瓊矛にあたりて。碎けさりぬと申たも。どうかおく歯に物の挾まッた。とか云やうで。どちつかずに綾なしたる言狀ぢや。夫はかの二柱の神の瓊矛の古事をば。漢流の挾き心に云まげながらも。彼の蒙古が賊船のおそひ來れる時。神風の此を吹き破れること。又御國の劔の萬國に勝れてをる事の跡などを思ひ回らせば。只寓言と片付て仕まふも惜い物ゆゑ。まづ寓言

に說て世に諂ひ。また事實へも引かけて。事を兩端にあやなした物で。世の神學者流。延佳。垂加などが說ざま。凡てかやうぢや。此はもと佛經の意で。かの空にして空に非ず。不色有色。虛實の相に著滯することなく。夫を離れるといふ。大般若經などの旨を宋儒が盜み。それを以て說を立て。謂ゆる經書といふ儒書を說たる。其說の移つた物ぢや。夫は譬へば。漢國に於ても。天つ神の御事をば。古へより天帝とも。皇天とも云て。尤も天上に坐まし。世の中を主宰して。萬つの事物の生成することを云傳へて。かの國の古書に。其趣きが明かに見ゆるぢや。所を後世の凡人心に。怪く思ひ。夫を上古の寓言ぢやと云うとすれば。跡もあり。また孔子の語を始め。天帝のことを云へる古書の趣きが。正しく寓言とも見えぬ故に定めかね。こゝで彼のごろぼう根性が出て。佛經の意をぬすみ。虛實有無の間を云て。おぼおぼしく文なし說き人を欺く物ぢや。夫は朱子が鬼神の有無をときたる語に。鬼神之理云々。謂二眞有二一物一。固不可。謂レ非二眞有二一物一亦不可。など丶云て。有無の間を云たるは。則ち般若經のたぐひ。佛經の旨に相違ないぢや。此惡ぐせを受繼で。垂加以下長秀ぐらゐの神道者が。右やうに姦しく。物を兩端に云て居るぢや。然れども彼等は。宋儒の說を此上なしと尊信して。既に理學神道などゝ。名のりをる程のことゆゑ。其罪も云はゞ淺いが。古學者と名のッて。宋儒の說を云ひ破つたる。物部の徂徠。伊藤東涯などが。やッぱり此の有無の間をゆく說を。おそッて居たが相すまぬ。夫はまづ徂徠が鬼神を論じたる書中に。謂二之有一者。權在レ彼者也。謂二之無一者。權在レ我者也といひ。また東涯の鬼神を論じたる語に。不レ窮二鬼神於有無一。此善窮二鬼神一者也。など云たが。こりやどうだ。朱子の意と何も異つたことはなく。其說に從て居るのぢや。朱子の說に從へば。とりも直さず佛經の意ぢや。迷へば法花に轉ぜられ。悟れば法花を轉ずると云の意なり。なんとかやうに。人の佛經から物したものを。又ものして我が物貌に古學と稱し。中にも物部徂徠などは。大きな聲をはり上て。世の人をおどし。朱子をば。佛意ぢやの禪學風の學問ぢやのと。口を極めて云て置たが。これも又かの。盜人たけ〴〵しいと云ものぢや。幸ひに

彼等はよい時分に生れ出て。此位な事でも。人は通しておいた故に。今以て虚名が高いが。今時分まで居もしたならば。いや目にもの見せてやらうずものを。

○俗の神學者の書に。人は天が下の神物にして。其身に固有の一神おはし坐す。則國常立尊の分神なり。是れ高天原に神留坐の心體なり。愛を以て神人唯一の理を辨へ。黒心なく赤心を以て。大虚元理の聖神を勸請する時は。自己固有の神明を感得するなり。是鏡に向ふに。物として影を映さずと云ことなきに等く。祈るに從て感應あるの心用なり。國常立尊を放れて。諸神あるにあらず。理を以ていへば。有形と云べからず。物を以て云へば。無形と云べからず。其身則ち神明と同一體なれば。正直の教を守り。明德を明かにする時は。心裡の神舍忽ちひらけて。神明を拜し奉るなり。此固有の神明を知らずして一生を終るを。根國底國にさまよふと云也。と云て有るが。此れも彼の朱子が。佛意を盜んで。經書を說たる趣に因て申たもので。其身に固有の一神おはします。則ち國常立命の分身也。と云たは。

佛者の說に。佛は固より我か體に有て。あみだ佛の分身ぢや。と云から思ひ付たること。また高天原に神留坐の。心の體なりと云つたのは。彼の已心の淨土から思ひついたること。是を以て神心惟一の理を辨へ。大虚元理の聖神を勸請する時は。自己固有の神明を感得すると云たのは。唯心の彌陀から思ひ付たること。是れ鏡に向ふに。物として影を映さずと云ことなきに等く。祈るに從て感應あるの心用也と云たのは。朱子が佛意を竊んで。大學の明德の注解に云たる旨を取たるもの。國常立命を放れて。諸神あるに非ずと云たのは。諸佛みな釋迦なりとも。あみだを放れて。諸佛なしとも云ふの意。國常立命を。理を以ていへば。有形と云べからず。物を以ていへば。無形と云へからずと云たのは。右申す通り。空非空虚實の相を放るゝと云ふ佛經の旨。其身則神明と同一體なればと云へるは。即心是佛。佛則是心。この身をはなれて佛なし。と云のこゝろ。明德を明にする時は。心の裡の神舍忽開けて。神明を拜し奉ると云たのは。見性すれば心胸が開けて。則ち固有の佛を拜すると云ふ。禪家の悟りの丸ぬすみ。

此の固有の神明を知らずして。一生を終るを。根の國底の國に徬徨ふと云たのは。佛者の說に。唯心のみだ。已心の淨土なる旨を知らず。夫を見付ずに居るのは。則ち凡夫で。地獄に墮ると云は此事ぢや。と云の說を丸で盜んで附會した物で。只あみだと云號を。國常立命と改め。淨土と云ふ號を。高天原と更め。大虛。元理。明德などゝいふ儒者詞を替たぶんのことで。やッはり兩部ぢや。其上に宋儒の理談がまじッて居るから。云はゞ三部神道とも云ふべきものぢや。

○俗の神學者の說に。とかく陰陽五行を附會して。神代の事實を云ひますが。陰陽は右に段々申す通りのこと。又五行と云つて。木火土金水の五つを。何のことにも附會致して。垂加延佳などが神道もみな夫ぢやが。中々以て彼の徒らの申すやうに。何もかも此道理を推て。知れると云物ではない。其訣を申すも。實はめんどうながら。聊か申さば。漢土では此五行を始め。何も歟も五つに定め。五味。五臟。五色。五常などゝ。凡て五つの數といたし。萬の物に配當して。牽强したるも。大造ふるくから申たことではあるなれども。實はたわいのないことで當らぬ訣は。まづ五行を五色へ配合して。火の色を赤といひ。木の色を青と云も。先は宜けれども。土の色を黄と定めたのは當らぬことぢや。なぜと云に土には青きも有れば赤きも有り。白きもあれば黑きもあり。其外なほ種々の色が有て。黃色も土の一つの色ぢや。又金の色をも白と定めたけれども。これにも。赤きもあれば黃なるも有り。然るを金は白く。土は黃なるが。其正色ぢやと云事をどうして知て居るか。又水の色を黑色と定めたることも甚だ强說ぢや。どう見ても此方の目には。水は黑く見えぬが。漢土の人や。俗の神學者流などの目には。黑く見ゆることか。合點のゆかぬことぢや。若是は水は大そうに深い淵んなどを覗て見ると。藍の色の如くに見えて。先は黑きやうに見なされる物ぢやが。そんな所から云出した事ではないか知らぬ。若そんな訣でも有ならば。赤色また青色の類も。至てこく塊りなんど致したるは。黑きやうに見ゆる物ぢやが。此らも黑いと云てよからうか。一體五行の騷ぎの大造に成たのは。漢の代あたりからのことで。其前にも云たこと

なども。有れど餘りさわがしくはないことで。禮記の學記に。水は五色に當ることなしと有るのが。本當のことぢや。只々水は水色として置くとも。一向差支へにはならぬことで此は水ばかりでなし。外にも色は種々有て。五つには限らぬぢや。亦五味と云けれども。味ひも五つに限らず。人の腸も。五藏と限るなれども。此も漢の代あたりからのこと。其古へ周の代の古書などには。九藏とも云てあり。又腑分をして見ても。五つよりはたんとある。色も五色には成て居ぬ。また仁義禮智信と五つに云ことも當らぬことで。孟子などが始めて云出したることぢやと云ことは。近頃の儒者も辨じてあるぢや。何はともあれ。五つに數を限りて其理を云は。皆とるに足らず。其内水を黑色と云などは。殊に煩きしひ言で。俗に無理を云者のたとへに。鷺を烏と云ことがある。夫によく似たことぢや。夫も諸越人はきつく好んで。此樣なあはうを云ならば。そりやどうでもぢやが。何も御國の人は。其の眞似をせずともよいことぢやに。何に依らず。毛唐人の云たことをば信ずると云は。むごい物ぢや。かやうの人に若いたづらな唐人が有て。屎を味噌ぢやと云つたならば。俗の神學者。儒者などは。おいそれと食ふかも知れぬ。と思はれるやうぢや。

○俗の神道者の說に。神の御上を。彼の五行の理屈を配當して。何某の神は火德。どの神は土德。この神は金德などゝ云ことをいふが。此も唐人の眞似をして云ことは元よりなれども。其の唐人の火德と云こと。史記などに。神農氏といふ人は。火德を以て王となれる故に炎帝と云ひ。有熊氏と云者は。土德を以て其國王と成たに依て。黃帝と云たなどゝ云こと。其代々の始めに記てあるに依て。篤胤が幼年の時に。此は何ぞ故あることであらうと思た所が。これ以て何のたわいもないことぢや。夫は王子年が拾遺記と云書に。軒轅は以二戊巳之日一生。故以二土德一稱レ王也とある。さすれば此は。何のことも無く。其生れたる日の干支を以て。土德や火德と云た物で。一枚摺の年代記や。俗間の大雜書と云物などに記してある。彼の木性などゝ云と一つことぢや。軒轅と云ふは。黃帝の號でござる。

○世間に三社の託宣といふ物がある。夫を見るに。

まん中に天照大神宮としるし。左右に春日大明神。八幡大菩薩と記して。まづ天照大神宮の御託宣ぢやと云の文に。正直雖レ非二一旦之依怙一。終蒙二日月憐一。謀計雖レ為二眼前之利潤一。必蒙二神明之罰一とあるが。此語は。大神宮の御言ではない。夫は梶原景時が孫。無住法師が作つたる。沙石集と云物の。正直之人得レ實と云の章に。聖德太子の御詞には。謀計雖レ為二眼前之利潤一。終當二佛神之罰一。正直雖レ非二一旦之依怙一。必蒙二日月之哀一。まことなるかな心あらむ人。深く此心を存すべき也。と見えてある。此語實に聖德太子の語か。又は無住法師が。太子に託けて申たるかは知らねども。是が出所で。正直云々の句を先とし。謀計云々の句を後にし。佛神と云へるを。神明と改め。佛神の罰に當るとある。當の字を。蒙と云ふ字に改め。哀の字を憐の字に改めて。大神宮の託宣を僞つた物ぢや。先これが三社の託宣僞作の根本で。其外も推てしれるぢや。八幡春日の託宣に於ては。更に一己の自作と見える。又この三社の託と云物は。無住法師が。在世。鎌倉將軍の時代までは。なかツた物なることも知れるぢや。又春日の御託宣といふ物に。雖レ曳二千日注連一。不レ到二邪見之家一。雖レ為二重服深厚一。可レ趣二慈悲之室一。とあるが。千日の注連といふ名目。古書に曾てなきこと。又邪見慈悲などいふ語は。佛書の名目ぢや。實に神の御諭しならば。佛語はないはずのこと。兩部習合の神社の緣起や。諸の俗書にのせたる神託に。佛語あるは。皆佛ずきの輩の造言ぢや。また雖レ為二重服深厚一云々の語も。眞の神祇道。朝廷の御格めに背けてをる。神事に死穢を忌むことは。祭祀の御大法で。朝廷に於て御神事の時に。群臣の中に。慈悲心ある者は。重服たりとも穢をいまず。神事に與れと云ことは。神祇式。神祇令にもないことぢや。また八幡の神託ぢやと云には。雖レ食二鐵丸一。不レ受二心汚人之物一。雖レ坐二銅焰一。不レ到二心穢人之處一。とあるが。食鐵丸坐銅焰の語は。どうか佛家で。地獄の苦患をとく語に似てゐる。尤も佛者の口氣がある。不レ受二人之物一と云の語。甚卑しく聞えて。神の御語とは思はれず。此託宣は。地獄をとく時の語と。僧の乞食をする心を以て。神の上を云た物ぢや。此託宣かれらが云如く。尊く實に有たることならば。神託は貴く重きことゆゑ。何天皇の御代。何

年月何日。何國何郡何鄕で。何の何某に神がゝり遊ばして。何の何某へ對して。此託宣があッたと云ことを。其國の國司何某が。解狀と云を以て太政官へ注進したるを。何月何日何某の卿が。奏聞したると云こと。體になければならぬ事ぢや。類聚三代格に記されたる。弘仁三年九月廿六日。官符と云て。朝廷より仰出されたる御文面に。諸國信民狂申上寔繁。或言及國家。或妄陳禍福云々。自今以後若有百姓輙稱託宣者。不論男女。隨事科决。但有神宣灼然其驗尤著者。國司檢察定實言上。とあるぢや。此格の御文を讀で。上古の御格をしるが宜い。また此神託の文。大神宮を中に立て。八幡春日の二柱を左右に置て。三社と稱するは。佛家の阿彌陀を中尊とし。觀音勢至を脇に置て。三尊と稱するから。思ひ付て作たことぢや。若此託宣が實ならば。三神云ひ合せて。同日同所で。一度に託宣あッたでは有まい。年月日時も國郡も違ひ。託宣の語も長きも短きも有て。不同で。其詞ものりと。祓の詞などのやうに。古雅で有さうな物ぢやが。左はなくてみな一樣に對句を設けたもをかしい。伊勢貞丈先生は。吉田家の先祖兼倶の作であらうと云はれましたが。さうらしいことぢや。然るにまた近ごろ。新蘆面命と云物に。垂加の說とて。三社託宣は。託宣ではなくて賛なり。中は嵯峨天皇の御賛。八幡は弘法の賛。春日は吉田兼延の賛ぢや。と云てあるが。此は垂加の據あッて云つたことか。何さまにも。賛といふ妄のものでござる。

○神道者の持扱ふ。六根淸淨の祓と云物は。佛意を取繕て作つた物で。尤も後世の人の僞作なることは。こりや辨ずるまでも無けれども。まだ〳〵信じて居る者も多いに依て。申さねばならぬ。則六根と申すは。六賊とも申て。眼耳鼻舌身意を申すだが。扨この六根よりいたして。色聲香味など種々のことが身の中に入るに依て。其入る物を六入と名けてある。其六入が六根を汚すの塵埃ぢやと云の意を以て六塵とも申す。此六塵が六根より入り來つて。心を煩はし惱まさんとするを。心に夫を受ぬやうにするを。佛法の修行とする故に。此意を取て。目に諸々の穢を留ず。などゝ云ふ詞を作つた物ぢや。抑々佛法は。父母妻子の恩愛を捨て家を出去り。世人の交

りを絶ち。獨身と成て。樹下や石の上を居所として。唯少しも心を動かすことなく。死人のやう。木石のやうになるを。よきことにするなれども。夫は釋迦が物好で。爲初めたる乞食の所業ぢや。世にある人は上天子より。下萬民に至るまで。各々勤め行ふべき事業が有て。六根六塵などの說を用ひては。世の事業をさッぱりとやめねばならず。甚た以て人間の道に害となることぢや。彼天竺の乞食の食物も。世に在る人が有ればこそ。喰ひ餘りを與へる人も有けれども。天下の人上下貴賤みな出家して乞食に成たならば。喰ひ餘りをくれる人もなくなるで有うし。よごれ物やぼろッきれを。拾て著たくも捨ておく者もあるまい。されば佛意佛語を神祭りに忌憚ること。神事に仕へ奉る禮法の第一ぢや。然るに佛意佛語佛法を以て作つたる。六根清淨の祓詞を唱へると云は。清淨にはならんで。却て汚穢くすると云物ぢや。此外にもなほ種々樣々の祓詞があるけれども。神祇式の祝詞の部へ御記しなされぬのは。凡て取らぬが宜い。既にも申す通り。祓を致して祓の詞をよむのは。罪を淸むる爲の物である所を。神前へ向て唱るは。まづ失禮ぢや。なぜと云に。神樣には罪穢は有りは致すまい。伊勢貞丈先生の云れるには。世の神道者流が神へ向て。六根清淨祓や。三種祓などをよむことは。更に當らぬことぢやに依て。神はさこそをかしく思召す事であらう。畢竟神ぢやに依て。ふき出しもし給はねども。人ならんには。堪へかねて吹出し。神主が顏は唾まみれになるであらうと云れたが。そんな物ぢや。又一つ。三種の祓と申て。俗の神道者などの。唱へる物が有るが。其詞は。とほかみゑみため。坎艮震巽離坤兌乾。はらひたまへ。淸めて給ふ。と云ふ文ぢや。この坎艮震巽離坤兌乾を。御國の訓にして。ね。うしとら。う。たつみ。うま。ひつじさる。とり。いぬゐ。と十二支の名を申す者も有る。此を祓詞といたすと云はけしからぬことぢや。一體とほかみゑみため。と申すことは。卜部家。則ち今の吉田家で。主らるゝ。龜卜と申して。龜の甲を灼て。占をいたすことが有る其龜甲に。と。ほ。かみ。ゑみ。ため。と申して。五ヶ所の名所をつけて。其灼所に依て。吉凶を占ふことで。又龜甲をやく時に。とほかみゑみためと口に唱へながら此をや

くぢや。是は龜卜の祝詞にして。祓詞ではない。又この龜卜をいたす時は。かんごんしんそんりこんだけんの八卦の名をば唱へる物ではない。八卦は易の上にあることで。龜卜と易とは各別ちがッて居ることで。混雜いたすべきものではない。所を龜卜の詞へ。八卦の名を取交て。拂ひ給へ淸めて給ふと申すは。何のことかねからつまらず。一向に其義理も分らぬことぢや。是はもと吉田家で作られたることで。元來龜卜の家ぢやに依て。やがて龜卜の詞を取交へて。彼の家で此を作り。此も古へから有來つたる物ぢやと云るゝけれども。夫は妄說ぢや。一旦古へからの有來りぢやと云出したること故に。他流でこれを覺えよむ者が。いくらか有るけれども。彼家から咎めもならず。外のことであらうならば。彼家風では何ほどか喧ましく云るゝ事で有う物を。さうも云れず。扨又此のをかしな物を。朝廷の御神事を御掌り遊ばさるゝ。甚も〳〵止んごとなき御家などでも。御用ひなさるゝと云やうにも。承知いたして居るが夫が誠ならば。扨々歎かはしいことぢや。又此詞や。六根淸淨の祓にも。驗があるに依て。捨られぬなどと云つて。眞の祝詞と同じやうに云るゝ人も有るが。夫は神の道をも學ぶ人の所爲とも覺えぬことぢや。どうしてかやうのつまらぬ物に。眞のしるしが有ませうぞ。此等に驗があるならば。そりや佛經にも驗があり。又ちゝんぷい〳〵。はらひ給へ淸めて給ふと云てもしるしがある。譬へば爰に病人が有て。其症相應の藥をのまして。其病のなほるのは。こりや當りまへ。夫は癒るべきはずでなほるので。眞の祝詞でしるしの有のは。これと同じ道理ぢや。久しい以前に見た。金桂談と云ふ俗書の中に。或所で急に腹を痛める人が有て。早速藥はなく。困つた所が。傍にきてんのきいた者が有て。衿首の垢を丸めて。此はえんりんのあんかん丹と云ふ。尊い藥ぢやに依て。戴いて呑むがよいなどゝ云て。尊げにもてなし與へたる所が。其腹痛みが即時になほッた。と云ことが有ましたが。三種の祓や。六根淸淨でしるしの有のは。此あんかん丹の驗が有たと同じ事ぢや。なんとかやうの物を。眞の祝詞と同じやうに。假令しるしが有たればとて。持扱ふと云は。こりや拙い心と云物ぢや。さやうの人は煩つても。眞の藥とあんかん

丹と。同様に呑れるかもしれぬと思はれる。古文辭に何の足らぬことが有て。かやうの物を用ふるか。合點のゆかぬことぢや。一體神様へ對して。祝詞をよむの心得は。先ふだん朝暮の神拜には。只々何のこともなく。某々の神の大御前を。畏みながら拜み奉る由を申し。又殊更に。何ぞ願ひ奉るか。或は申上奉るべきことの有をりは。別段に古文辭をつゞり合せて。古への祝詞の體につくり。夫を讀上るのが。本當の事ぢや。此は委くこゝらの訣を。ぞんじられぬ方々の爲に。鈴屋の翁が新に作られました。祝詞をよんで聞せ申さう。拜二藥神一詞とありて。大穴牟遲命少名毘古那命。二柱大神の大前に。姓名恐々みも白く。遠津神代に。二柱相並ばして。御心を合せ給ひ。御力を合せ給ひて。諸共に。大八洲國修理堅め給ひて。國作坐大神と。稱辭竟奉る大神等。諸の病を治むる藥の方をも。始め給ひ定め給ひて。天下に所有る顯見青人草の。苦瀨に落て。阿都迦比惱むを。助け給ひ救給へば。此某等が醫藥の業も。大神等の米具美給ひ。知波比將賜御靈に依てし。過つこと無く。驗は將有と。廣き厚き恩賴を。恐み恐みも獻奉り。宇禮志み奉ると。姓名恐み恐みも白す。とある是は文集に出たる詞どもの中の一つぢや。扨また延喜式八の巻に。御記しなされたる祝詞をも。一つ讀ませう。祈年祭。高天原に神留坐。皇睦神漏伎命。神漏彌命以。天社國社と稱辭竟奉。皇神等の前に白く。今年二月に。御年初將賜と爲而。皇御孫命の宇豆の幣帛を。朝日の豐逆登に。稱辭竟奉くと宣。○御年皇神等の前に白く。皇神等の依さし奉む奥津御年を。手肱に水沫畫垂。向股に泥畫寄て。取作む奥津御年を。八束穗の伊加志穗に。皇神等の依さし奉者。初穗をば。千穎八百穎に奉置て。瓺閉高知。瓺腹滿雙て汁にも穎にも稱辭竟奉む。大野原に生物者。甘菜辛菜。青海原住物者。鰭の廣物鰭の狹物。奥津藻菜。邊津藻菜に至るまでに。御服者。明妙照妙和妙荒妙に稱辭竟奉らむ。御年皇神の前に。白馬白猪白鷄。種々色物を備奉て。皇御孫命の宇豆の幣帛を。稱辭竟奉らくと宣。まづかやうの物で。其神々により。願事に依て。申す詞の替る事。此は必さうなくてはならぬことぢや。所を何れの神々へ。何事を申すにも。祈り奉るにも。大祓の詞にいたせ。

何の祝詞にいたせ。夫ばかりをよむと云は。近く譬へば權兵衛が所へ。緣談のことで遣した手紙を。八兵衛や。三太郎が所へ。金談もあれば書物の掛合も有て。各々其用事の違つて居るのに。其緣談の手紙の。しかも宛名々々其ちがッて居るのに。夫を遣はしても宜からうか。用事が便じやうか。能く事の狀を考へるが宜しいぢや。今迄の過りは。こりや云ても返らぬこと。神職の衆などは。こゝを能く心得られて。どうぞ祝詞をばかき習はるゝやうに。是は是非いたしたいものでござる。

○俗の神學者流が。中臣の祓詞を。中臣祓とのみ云て。詞の字を略するは。こりや宜くない事ぢや。彼の詞をなぜ中臣の祓の詞と申すぞなれば。中臣氏の御先祖天兒屋命は。天照大御神の。天の岩屋戸へ御こもり遊ばされたる砌り。稱辭と申て。うるはしく祝詞を申上られたる所が。大御神は其祝詞の善美きに御めであそばして。磐戸を細めに明けて。御らんなさる所を。天手力男神が。大御神の御手を賜はッて。出し奉つたる例に依て。神へよみ上る祝詞は。いつも中臣氏。則ち天兒屋命の御子孫がよむべきこと。と此は神代よりの御定めで有た物で。今の世とてもさやうぢや。中にも彼の大祓詞のは古き物で。中臣家の受持て。讀るゝ物と定つて居たる故に。中臣祓詞と申すぢや。然れども正くは。大祓詞と申すべき物で。其大祓と申すは。遙の古へよりなされたる。止んごとなき御神事で。朝廷に仕へ奉る。百官男女の爲に。六月と十二月の晦日に。祓の御神事をなされて下さる。其時中臣氏の人が。例の如く彼祓詞を唱へるぢや。元來此は延喜式の初め十卷。神祇式の祝詞の部に。御記しおかれたる詞で。其祓をすることは。過犯せる罪は。身の穢なる故。夫を祓ひ清むるが爲にすることで。甚も〳〵妙なる謂れのあることで。夫は鈴の屋の翁が。具に記しおかれてござる。

○一萬度の祓。五千度の祓と書て。伊勢大神宮を始め。其外の社々に於ても。右の如くいたして。御祓箱を配ることぢやが。是は上に申す如く。もと一切成就の祓と云詞を。數取を以て執行いたし。其遍數に應じて。書付る由なれども。其本は佛家の千部萬部の讀經。百萬遍の念佛。千卷陀羅尼などより思ひ付て。其まねを致したることにて。穢らはしく。又

其一切成就と云文も。面白からぬことなれば。これは早く止たき物ぢや。但し祝詞は。幾度も。くり返し〳〵申上たることゝ思ふ由あり。其はたとへば。他人に物を頼むにも。唯一たび申して。聞ぬからとて。止てしまふは。頼む心の薄いので。幾度もいくたびも物など贈りて。深切にたのみ入れば。聞受がたきことにても。否み難くて。承引いたすことあるは。人情の常であるから。神といへども。其如く。必ず懇切にくり返し〳〵。幾度となく願ひ申す時には。御聞受下さる道理にて。已に其驗有たることなどをも思ひ合せ。年ごろ考へて。其證據を得たることぢやが。此事は。別に委く記したる物ある故。ここには云まい。然れば。千度萬度など。度數を記すは。理ないでは無れども。其本は。佛法に效ひたるゆゑ。片腹痛く。けがらはしい。是は何とぞ。古の道に依て。清く正く書改めたいことぢや。然れば天津祝詞を宣り申せば。罪も穢も。悉く祓ひ清まること論なく。又祓の詞をよむは。右の祝詞に依て。罪穢の拂ひ清まる由を。神等に申上げ。人にも申聞せる事ぢやに依て。これが誠の祓除執行の本義と云ものぢや然るを祓の詞を。幾遍も繰返し〳〵唱へて。祈禱になると心得たのは。祝詞と。祓の詞との差別を知らず。本の主意を失つたことぢや。又後代の妄作神道の輩が。右の訣を知らず。祓の詞を。唯に天津祝詞と心得。ことに其祝詞あることを思はず。且この祓詞を注解するに。天照大御神の教の道と云の證に立んとして。彼の祓詞に記しある罪の條目を。御禁止なされたる意に取繕ひ。佛説理學等を以て。其說を作り文り。教訓に說きなしたなれども。中臣祓詞は。すなはち祓ひ除の詞で。教誡の書ではない。夫を強て。教訓の書にとかうとする故。正解ではなく。又例の曲解ぢや。延喜式の本文に。高天原爾神留坐と云讀出しの前に。天皇の宣制の御詞が有て。其の詞に。官々爾仕奉留人等乃。過犯家牟雜々罪乎。今年六月晦之大祓爾。祓給比淸給事乎。諸聞食止宣と有る。この過ち犯しと云は。心に思ひ謀らず。臨時にふとして犯したる罪を。過ちと申すぢや。字書に無心之失謂二之過一。有心之過謂二之惡一とある通りの事で。一體過と云ものは。かねて教誡を以て禁止することは。致し難い物ぢや。夫を豫め教誡の道を作

つて。人をおきてるのが。漢國の風ぢや。其事をば辨へもいたさず。何でも歟でもとかく敎へに云たがるは。神學者流の過りぢや。川柳が句に。「通りぬけ無用で通りぬけが知れ」。と云くらゐのことで。敎誡の書といふ物は。大きに此心ばへのある物で。質直な子に。わる智慧を付るやうなことがある物ぢや。但しかやうのことは。中でも。から心十分にはびこッて。漢ずき聖賢びいきの人などは。聞ても直には。合點のゆきかねることでも有う。但し是は少し横道には入たが。千度萬度の序に云ふのぢや。

〇俗の神道者の說に。神道にて手を拍つをかしはでと云は。其うつ形が。柏の葉に似てゐるに依て云た物で。猶本說は深祕也などゝ申すぢや。又天皇の御膳のことを。かしはでと申すに附會して。其かしはでを食るゝ時に。大御手を御拍ちあそばすに依て。手を拍ことをかしはでと云などゝ申す說もあるが。皆とるに足らぬ妄說で。元來は拍手といふ名目。古書にいまだ見當らず。慥ならぬ名目で。一體手を拍つことは。上古には神のみならず。凡て人に向て敬するの禮で。一體は先を深く珍重する心の。自然に顯るゝ形容ぢや。抑禮と云物は。みな自然とあらはれる心の形で。こりや萬國おなじことゝ申すうち。御國の古禮などは。別してさうで。其容もくさぐさ有が中に。手をうつと拜むとが。よう先を愛敬ふ心の。懇に見ゆる形ぢや。此の手を拍つ禮の。依て來る本意を申しあらはさば。今の俗にも。日頃懷しく慕はしく思ひめづる人に。途中などで不意に行合ふか。又は己が許へたまさかに。尋ね來られなどしたるをり。貌見合せて。覺えず。いやこれはと手を拍ことがある物ぢやが。此は其手を拍たる時は。謂ゆる無心で。何の心もなく。只めで思ふ心の花が。容に顯れるので。則手をうつの禮はこれが本ぢや。夫故に。世の初めから致して有たる禮で。尤神に限つてしたる禮ではない。拍レ手と云ことの。始めて見えたるは。古事記に。事代主神の。此御國を御去りあそばす時に。天の逆手を御うちなされたとあるを始め。雄略天皇樣の進せられたる禮代の物を。一言主神の手を拍て御受なされたることも有り。其外繼體天皇樣。持統天皇樣などの。御位に御つき遊ばしたる砌などに。公卿百寮。羅列匝拜而拍レ手と云こと

も有り。又から書周禮の春官に。振動と云ふ禮がある。其注に兩手を以て擊也とあり。然ればからの古へも。手を拍たることが有た。此等を考へ通して。神に向つて拍つに限らぬことを知るが宜い。此後段段漢風を御學び遊ばすやうに成てより。此古禮を御止なされて。只々神事にばかり致すことのやうに成た物ぢや。扨神樣へ向て手を拍ことを。八開手と申すが。本當の神語で。夫は延喜の神祇式。大嘗會の章に。五位以上共起就二中庭版位一。跪拍レ手四度度別二八遍一。と有て。其御注に。神語所レ謂八開手是也とある。此心は。云々。ゝゝゝさ打て見せると云のこゝろぢや。此外に神拜の古禮は種々ある。其中に兩段再拜と云ことも有て。早く心得て置ずはなるまいが。夫は序に致さうが。先拜むと云事をば能く心得て居るが宜しい。元來をがむと云語はをろがむと云ことの約まり。をろがむは。をれかゞむと云ことの約つたので。其をれかゞむと云は。體ををりかゞめて。かやうにかたちをして見せる致すことぢや。諸の祝詞に。しゝじもの膝折伏せ。鵜自物うなねつきぬきと申すは此ことで。天竺の。かゝとをなめるの禮などは。こりや蠻夷の者の致すことゆゑ。論に及ばず。正しく先を敬ふの禮では。此拜みを致す禮ほど。其敬ふ心の顯るゝことはあるまい。扨俗にかしはでと云ことを。古書に考へても。未た見あたらぬが。此は何のこともなく。日本紀。延喜式を始め。古書に拍レ手とあるを。文字しらぬ人が。つひ柏字と見て。かしはでとよみ違へて。夫を云ひ廣め。かしは手といふ名義がしれぬに依て。例の妄説を作り出して。祕事口傳などゝ云ことをいひ出した物と見える。うつと云字は。手へんにしろいと云ふ白の字をかき。かしはと云字は。木へんに白字をかくで。ふと見違へた物ぢや。日本紀の訓に。拍手をてをうつと讀である。何れにもかしは手と云ふは。後代に云ひ出したことには相違なく。且は慥ならぬことだに依て。古學に志す人などの。云べきことではないことぢや。

○俗の神道者流が。祈禱の時の發言に。無上靈寶神道加持と云事がある。神事の詞は。延喜式にも神語とある如く。凡て古意古言を用ひて。無上靈寶神道加持など云やうな。字音の詞はありや致さぬ。又加持と云ことは。眞言宗から出たる佛家の詞に相違な

い。所を鹿島加持取とて。武甕槌命から始つたことぢやなど〻。香取の社から思ひ付て。實は跡かたもなきことを附會して。佛家の眞似ではないやうに云ひとり。云ひ紛らさむと致すけれども。紛れなき佛語。また佛わざぢや。御國の神語ならば。まじなひと云べきことぢや。

○俗の神道者流の。神拜又は祈禱などを致すに。印相を結ぶことがある。此も吉田の家で始めたることで。三光の印と申て。日月星の三印があり。又おのごろ島の印。八尋殿の印などゝ云ことも有るが。古事記。書紀。古語拾遺その外正史實錄に。諸神たちが。印相を御結びなされたと云ことは曾てない。是も例の。眞言僧の行法を取たること論なし。凡て此等の行狀。一と目見ても。忽に分ることぢや。

○吉田家の名法要集と云書に。木綿襷を挂ずして。神祇に向ひ奉るべからずと記して。又例の僞の神託をのせて。木綿襷をかけざる者は。天に日月なきが如く。地に萬物を載せざるが如し。と宣へる由を記し。又云には。唯一の神道。一と事受る者は一筋を用ひ。二た事受るものは。四筋を用ふ。三事受る者は。八組を用ふ。此緒を挂ざる者は。かつて神に向ひ奉ること勿れ。とあるが。とても名法要集などの如く。始めから仕まひまで。妄說ばかりな物を。論辨いたす隙はなけれど。世の神職等が。此に欺かれて。挂て居る人も大ぶあるから。此は心得の爲に。申さずはなるまい。然れども。多年いたし馴て居る事ゆゑ。俄に止られもすまいが。其の古への正しきに從ふと從はぬとは。こりや其人に任すことで。仍て今は只。古への眞を有の儘に申すのぢや。夫は先ゆふ襷を挂ざる者は。天に日月なきが如く。地に萬物を載ざるが如しとは。何等の書物にあることか。正史實錄に於て。曾て見たことのない神託で。若これが實に神託ならば。其神は。御國の事を不案內な神故。いづれにも此國の神ではない。天竺の佛が化て出て。かの糞掃衣たる。けさのまねをさせ。此國の神職をば冠裝束をした。出家にせうとの結構と見ゆる。とかく吉田家では。綸旨ぢやの。神託ぢやのと云を造て。愚人をおどしたがる代々の家風で。そりや皆その下た心に。一つきたない物が有て。致さるることで。一々は甚申しにくいことばかりぢや。既

に此神宣と云に怖れて。木綿襷を願ふ者はこれを許し。禮謝を取られる。此は今では。吉田殿の知て致さるゝことでも有まいかなれども。其雜掌執役の輩が致すことでも。吉田家の瑕となることぢや。まづ唯一神道一事受る者は。一と筋を用ひ。二事受る者は。四組を用ひ。三事受る者は。八組を用ふると云こと。何れの御代に。仰せ出されたる御令なるか。正史實錄。律令格式の本文。その外正き書に於て。見當らぬことで。これ全く吉田家の造言に相違なく。彼の品級を分つて。一事二事三事と。三段にして。一筋四組八組と。襷の品を別たのも。吉見幸和が申たる通り。度々に謝禮を多く貪らむとするの。下心と察せられるやうぢや。彼の朝廷の御さだめ。律の御文面にも。詐僞律に。詐二爲官私文書一增減以求二財賞一者。准レ盗論。とあるをも知んで、右やうの造言を云出し。まだ神託を僞られたること。扨々いぶかしいことぢや。又或は木綿襷を挂ずに神前へ向ふは。赤裸で神へ向ふも同樣の無禮で。殊にこれは不淨を除る爲の物ぢやなどゝ申すなれども。皆妄說で取に足らず。扨其挂させるゆふだすきと云物を見れば。草綿。則もめんの糸を組で致た物ぢやが。あれでは古實にも相ひ叶はず。そんならば古へにゆふと申て。襷に作つた物は何ぢやと申に。今の世にこうづの木と云て。紙を漉く物が夫で。和名抄に。穀加知木也と見えたるもので。其木の皮を取て織たる布を。由布と申すぢや。和名抄に木棉和名由布とある物が此事で。古へのゆふぢや。今のもめんは桓武天皇の御代に。崑崙と云ふ國から初めて渡り。中頃たえて又渡り來て。近く永祿天正の比から。尋と世に弘つた物で。古へはなかつた物で。同じ木綿とかくを以て。同物と思ふは誤りぢや。扨右の加知の木の皮を以て。織たる由布を以て致したる襷を。ゆふたすきと申た物ぢや。凡て神事にゆふだすきを挂る事は祭禮を司どる官人たちが。或は神饌を捧げ持ち。或は幣帛をとり。或は祭の器物を取扱ふ時。衣袍の袖幅廣くて。手をつかふ妨になる故に。襷を挂て結びあげるが本で。何も深い由緣のなきこと。今の俗にも何ぞ動きをする者は。せひ襷をかける。則これぢや。抑々襷かくることの。始て物に見えたるは。神代紀に。天照大御神の天の岩屋へ御差籠り遊ば

したる砌に。八百萬の神等相謀て。これを出し奉らんとして。天鈿女命が俳優をなされたる。其裝ひのことを記して。以レ蘿爲二手襷一とある。但しこゝに蘿とあるは誤りで。實は以二眞析一爲二手繦一と有たのを取違へた物で。此ことは別に委く記しおいたことだが。何れにも。手襷には相違ない。扨此は鈿女命は。手に茅纏の矟を持ち。たくみに俳優すとある如く。八百萬の神を笑はしめ。其の面白き音に蕩給はずして。天照大御神の御出なさるゝやうにとのことで。さま〴〵に俳優のわざをせらるゝこと故。手繦をかけられた物ぢや。又同じ神代紀に。大物主神を御祭りなされる所に。使下太玉命以二弱肩一。被二太手繦一而。代二御手一以祭中此神上。とあるこれも太玉命は。この前よりいたして。神の捧物などを。御取持なさるゝこと故。手次を挂られた物ぢや。又延喜式の祝詞に忌部弱肩爾。太襷取挂氏持由庭波利。仕奉禮留幣帛乎。神主祝部等受賜氏。事不レ過捧持奉登宣。などゝあるを思ひわたすが宜しい。かやうの訣をも忘却して。今の神學者流。さしも手を使ふこともないに。せひ神前へは襷をかけねばならぬ。と心得られたるは。全く名法要集に。たばかられたものぢや。まづ第一に神へ對して無禮に當る。下女はした女のやうな者すら人前へ襷を挂て出ることは。無禮なことに心得て居るはさ。彼義太夫ぶしの唄ひ物に。たすきはづしてとんで出るとある。下女のりんにも恥るがよいぢや。何の事もなく。坊主の輪袈裟から思ひ付て。其眞似をしたことに相違ない。夫故に。一向に襷の趣意もなく。狩衣の袖も結び擧ず。只々肩へ引挂るまでのことぢや。

○俗神道者流の説に。神前に於て鈴をふることは。天照大御神天岩戸に。御籠り遊ばしたる時に。天鈿女命。俳優をなされて。著鐸矛を御持なされたることが。古語拾遺にある其のさなきの矛とあるは。鈴を付たる矛ぢや。又天照大神伊勢國に。宮所を御定めなさらうとて。其の御告の爲に。天より天の逆太刀。天の逆鉾鈴を御なげ下しなされたる事。倭姫命世記にある。此れ等の緣に依て。鈴をふるなどゝ申すけれども。此は殊に附會の說ぢや。なぜと申すに。彼古語拾遺なるさなぎの矛は。矛が主で。鐸は飾りに付た物で。玉を飾りに付たる矛を。沼矛と云と同じ意

ぢや。何ぞ。主とする所の矛をば用ひずに。飾にした る鈴のみを取て用ひようぞ。又倭姫命世記は。是まで 申す通り。古傳說もあらはすれども。先は僞書ぢやに 仍て。たとひ神々がみな。鈴を御振りなされたと書 て有ても。信ずるに足らず又種々の物を。御投下し なされたと云こと。古書に嘗て見えず。且天の逆太 刀と云名は妄作で。佗書に見も及ばぬこと。一つと して信ずべきことはない。殊に尻口あはぬをかしい ことは。俗の神學者の說では。天照大御神は。大和 國に坐ましたる。上古の天皇で。只の御人體なるこ とに申ながら。天より鈴や何かを。御投下しなされ たとは何を申すか。その時ばかり。虛空に飛上つて なされたとの事か。とんと生酔の物言のやうぢや。 延喜式の神祇式に。諸々の神祭の料具。種々の器物 雜物の名。員數等を盡く委細に御記しなされたなれ 共。鈴は見えず。又正月元旦の四方拜。十一月の新 嘗會。また御即位の後の大嘗會などにも。天皇の。 鈴を御ふり遊ばすと云こともなく。又神祇伯家のこと は。天皇より。神祇の伯職を御命じなさるゝからは。 眞に神祇の長官で。天神地祇の伯職をなされ。天皇 の御神事の。御代官をなさるゝなれども。朝廷の御 神事に。鈴を振らるゝと云こともない。こりやさう 有さうなことは。古事記。日本紀。古語拾遺等の正 しき御書に。諸神の中に。鈴を御振りなされた方は 嘗てない。何のことも無く。俗の神道で鈴を振るの は佛家の眞言修法の時に金剛鈴と云て鈴をふり鳴す ことがある。一體俗の唯一神道は。段々申す通り。 兩部神道から出た物で。其兩部神道は。眞言僧のし わざを取て。行法を作た物ゆゑ。其金剛鈴をふる。 其眞似をした物に相違のないことぢや。但し此れも 今は常のやうに成てをるに依て。俄に止ては。差支 にもなることで有うから。餘り急にも止られまいが。 志ある人はこゝを心得て居らぬと。人にきめられた 時に。當惑いたすこと故。まづ申ておくのぢや。此 に付て憫れほしたことが有るは。篤胤が同門に。堤 の朝風と申す人がある。是が傳へ持て居たる。垂加 の門人。八重垣翁とか云者の。鈴の傳に。これは祕 中の祕なる由を記て。神前に於て鈴をふることは。 神は古への神人の御靈を祭つて。則ち陰氣の物故。 これを感得せむとするには。陽氣でなければならぬ 事。夫故に鈴をふる。一體鈴の起りは。男子の陽物。

則陰頭の形を表して作つたる物で。夫を振鳴して。神の陰氣なる所を呼出し。感得さする所業じや。と尤らしく。八重垣翁秘々中の祕傳などゝ。朱印をさへに押て記し有たが。扨々いかに陰陽家の説なればとて。此れ等は餘りの事に惘れ果て。論辨いたすにも舌が縮んで。一向も出ぬ程のこと。祕々中の祕と申すも。又尤な事ぢや。其節篤胤が申たには。人の作たかねの鈴は。から〳〵鳴て喧がしく。さ程にも陰氣な神が。其音を聞かしッたならば。折角出掛つて。引こみもなさらうかと案じられる程に。いつそ鈴の本體なる陽物を。正の物正で出して。振まはしたならば。神の御感得も猶速かで有さうな物ぢやが。垂加流の神道者だち。鈴ふッたばかりで。御感得のない時は。大きに苛つて。正の物を出して振らるゝかも知れぬと申して。兩人はらを抱へて。笑つたことがある。餘り慕何々々しい祕傳ごとぢや。（俗の神道者流が。幣束を執つて。神拜する人に。戴かすることだが。此も古へには無いことぢや。一體幣束の幣の字は。唐で人に贈る禮物を幣と申す。夫に絹帛と申て。絹の類を贈るを幣帛と云ぢや。又我が古へに。ぬさと云物は。神に手向る物をも云ひ。又祓に出す物をも申し。又みてぐらとも申す。但し少しく差別のあることは。みてぐらと云時は。玉や。鏡。劔。またにぎてをも總ていひ。ぬさと云へば。木綿又は麻のにぎてに限ることで。其中おもに。麻を用ひたる物故に。麻と云字をやがて。ぬさとも讀ことゝ成た物ぢや。今の世も。祝ひことの贈ものなどに。麻を第一と致すことも。少か古風の存して居るのぢや。扨右の如く。御國のぬさ。みてぐらを神に手向け。又人にも贈る訣が。漢土の幣物の意に。能く合つて居る故に。其幣の字を。御國のぬさ。またみてぐらと云ふ語へ當た物ぢや。後代は右の。ゆふあさのにぎてに替るに。紙でするやうになり。又幣束と云をば。四垂。八垂など申すことも。古實には覺束ないことぢや。扨中昔。延喜式などの御定めでは。此ぬさを。朝廷より諸社へ頒ち捧げられ。常人も諸社へ。此の方より幣を持參して。神へ奉つた物で。此はかうなければならぬことぢや。なぜと申すに。幣は神へ願事の印の禮代として。奉るが主意の物だに依てのことである所を。田舍人などは幣を

ば。此方より持參はいたさんで。けッく社人が幣を持出して。人に戴かすと云は。様々物も移ればかやうにも。ありやこりやに移る物か。夫のみならず。幣束を切て。神體と致すことも。皆右の所より。おつに移り來た物で。此等も今は仕來りと成たること故。俄に改めることにもなるまいかなれども。本をば心得て居るが宜い。

○神學者流の說に。鏡を以て諸社の神體とすることは鏡は一圓相にして。稜なく闕けたる所なし。此は天の形を象り。面の方に平かなるは。地の形に象どれり。光明清淨にして。一點の障りなく。普く萬民を照し守り給ふ所の表相ぢやに依て。神拜する人。其神鏡に向へば。其人の形すなほに明に映る。これ則ち正直の道を示して。神は即汝が身なり。汝が身より外には神なし。神に祈らむよりは。汝が身を敬して。正直の道を守れよとの。教の道を示さんが爲に。鏡を以て神體と致したる物ぢや。などゝ申すが。此說は。佛法から出たる說で。普く萬民を照し給ふと云は。佛經に謂ゆる。光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。といふと同く。又神は即汝が身也と云より以下は。かの唯心の彌陀。已心の淨土と云の心ぢや。よしや此意にもせよ。鏡を立おいたばかりで。拜禮する人。もし右の理說を考へ當ぬ時は。唯に鏡と見たばかりで。教にも誡めにもなりや致すまい。其事をあらはに云はず。人に深く考へ當させ。自ら悟らせるやうな。六かしいことは。我國上古の風にはないことぢや。佛法は像教とて。佛像を始め。金剛界。胎藏界の圖。九品淨土のまんだら。地獄の圖などの類。其像を造て。教る事はあれども。御國の上古に。右やうのことは曾てないことぢや。鏡を以て神體とすることゝ。此は八咫鏡を以て。伊勢の大御神の御神體とするを學んだ物ぢや。然れども八咫の御鏡は。天照大御神の。高天原に於て。御容貌を御寫しあそばしたる御鏡ぢやに依て。夫へわけ御靈を御附なされて。此鏡を見ること。我を見るが如くにせよと仰せられて。皇御孫命へ御授けあそばし。皇御孫命。御天降り遊ばして後。傳へ〳〵て。垂仁天皇樣の御代に。伊勢の國へ宮所を御立なされて。其神鏡を。大御神の御神體として。御崇めあそばしたると云。きッと謂れのあることで。其外も。古き神

社の御靈代は種々有て。鏡には限らぬことである所を。何れの社にも鏡を立るは。實はいはれもないことながら。伊勢の神宮を學んで。鏡を神體とすると申すことならば。安らかに聞ゆるなれども。佛法を以て道理を說き。右の通りに申すことなれば。聞捨にも致しがたい。又かみとはかゞみの中略で。くもりのない所を表したる物故。かゞみを立るなど丶申すなれども。かみが有てかゞみは出來たる物で。かゞみが有てから。かみは出來たと思ふは。けしからぬ心得違ひなことぢや。

○俗の神學者流の說に。二所の宗廟と云は。伊勢加茂の兩宮を申し。其外は社稷と云など丶申すけれども。此も心得違ひなことぢや。一體宗廟社稷と申すことは。漢土にあることで。御國には古へより此稱はありや致さぬ。とかく世間の學者は。何によらず漢土のことを以て。御國のことに合さうと致すけれども。合ぬことが多い。夫を强て合さうといたして。牽强附會するは。益もないことぢや。日本紀などに。なり〳〵宗廟社稷など丶云字は有れども。只例の潤飾の漢文に記れたぶんのことで。元より神社を申たのでは無ぢや。夫故にくにいへなど丶は訓んである。くにいへと云ふは。漢文に國家と申すの訓を移した物ぢや。日本紀の全篇に此類が甚だ多い。其義に心づかんで。唯文字に拘はッて。漢のことを强て引合さんと致す故に。喧しく牽强附會の說が出來るぢや。一體宗廟社稷と申すは。漢國の王どもの。死靈を祭り置た所で。謂ゆる靈屋を申す號ぢや。夫を大御神の宮などに申すと云は。甚も畏く穢らはしく。牽强附會も事に依ることで。但し筑前國の。香椎廟のみ。古書どもに取分て廟と申て有るけれども。是は延喜式の神名帳にさへ。御記なさらぬ程のことで別に由緣のあることで。此等に依て。妄りに他の神社を。宗廟など丶は。申すまじきことをも知るが宜しい。

○垂加流の神道者のすることに。安座巡行と云ことがある。これも佛家の眞似ぢや。一體禪家の方で。結跏趺坐。不動にして心を靜め。觀念するを坐禪と申す。儒家でも。朱子の學風を傳ふる者は。致敬靜座と申て。此座禪のまねをいたすが。此は禪家の眞似ぢや。孔子はそんなことはせぬと云て。詰り問へば。孝經にある。仲尼閒居の文などを引て陳ずるけ

れども。孝經は後世の僞書で。其上閑居と云ことは。只ひまで居たと云ことを申た物で。坐禪のことではない。夫故に曾子を呼かけて。咄しをした物ぢや。朱子學者の云やうに。誠の坐禪ならば。咄しはせぬ筈のことぢや。夫はそれにしても。垂加流の安座は。朱子の靜坐から思ひ付た物で。則ち禪家の坐禪のまねに相違なく。只座禪を朱子は靜座と名をかへ。垂加は靜坐を。安座と名を替たぶんのことで。先に申すごとく。心をしづめ神道の安心を練るの修行ぢや。上古の諸神たち。安坐など云ふことをなされたる趣きは。古書に曾て見も聞も及ばぬことぢや。心は活物で。人間息の有らん限りは。動くが當りまへで。夫が動かねば。今日人事を行ふことも出來は致さぬ。但し心がもし。邪さまの惡きことに。動きに移りも致すならば。夫は其時に臨んで。鎮めさへいたせば宜いことぢや。又巡行と云ことを致すのは。右の安座を久しく行ふ時は。却て心を苦しむる故に。時々立て左巡に回て。また安座を致すぢや。此は土計と申て。板に小き穴をあけて。其上に砂をもり。其下に鉢を置て。漏落る砂をうけ。その砂の。板の上より漏れ盡るを度と致して。其砂の多少はわが好き次第に致すことで。此は佛家の行道と云わざをまねて。我が神道に。いざなぎいざなみ二柱神の。天の御柱を御回りなされたることなどを。加味した物ぢや。江戸淺草に住で居た神道者。橘三喜と云者は。明和安永の頃まで居た男で。よく此安座の修行が出來て。鼻先に紙を糊づけにして息をつめ氣をねり。後には其紙が少しも動かぬやうに成たと申すことぢや。又觀神悟道と云ことも。垂加流の神道にあるが。此も佛家の。觀法悟道と云のまね。此ほか諸流の神道に。その行事器物。神前のかざり等大かた古へにかなはず。見て眉を顰め。聞て耳を塞ぐやうなことばかり多く有て。十日や二十日に。申し盡されぬこと故に。まづこれ限りに致そう。○伊勢貞丈先生は。甚だかやうのことを憤り歎かれて。今の世の俗に。唯一などゝ名のりをる。垂加流および。諸流の神學者流を。神はらひに拂ひ。神殴きにたゝき殺してしまはずば。誠の神道は。明になるまいと云て。「ちはやふる神たかすむる雲霧を。しなどの風に吹き拂はなむ」。とよみ置れましたが。これは尤なことぢや。また鈴の屋

翁の歌に。「しるべすと醜のもの知り中々に。よこさの道に人まどはすも」と詠まれたはこゝの事ぢや。

俗神道は今日ぎりにして。此次よりは。歌道の習弊を論辨いたしませう。

歌道大意講本序

うたは古今集序に天地の開け始りける時より出來にけりとありて皇神の授け賜へる誠ひとつを種として萬の言の葉にうたひ出て鬼神を感かし義人を泣かしむべく物するそ眞の歌の旨には在ける然あるを藤原の御世の頃より言葉の花を專とすること始りて遂には世と共に降ちゆきて互に噓言の云ひ競べしつゝそのをそ言の巧なるを佳調と持はやして果は淫亂の媒する具とさへなれるが多かるは皇神等のいかに見そなはすらむいと淺ましきことならずや爰にわが故氣吹舍大人の若さかりにおはしゝ頃古道の大意を講說し給ふ序に彼のをそ歌作り等が非ことしつゝ世を惑はし五月蠅なすこゝにかしこに喧げるをあなうるさあなかましとて家の名におふ氣吹擯はし天地の始の時より出來にし誠の歌の大旨を敎へ給ひし言の葉を同じ學びの兄人等が匣の底の底寶とかきつめ置るを切に請得て正目に御說を受賜はらぬ人々の爲にとてかく淸書しつるは角田忠行なり

歌道大意

平田先生講說　門人等筆記

玄道云此のふみを四方の敎子等の八百重しく波しく〳〵しひてこひ白せるより稻舟のいなびもあへずて今の氣吹舍主の云おこせらるゝやうわが翁のことぐさに先人考翁の記し給へるふみは千まき五百卷と山とはゆりのいとさはなるは云も更にて月に日にけに漸々に御考の淺ち原つばら〳〵にみちたらひ成もゆきますにつけつゝ今思へば肝わかゝりし時の考へはかたはなる事の有りけるよこそにふれてはの給ひいでしを此の書もそが一にてあはれ古の歌も遠つ神祖の大御代のみてぶりは藤原のみかどまたならのみかどの頃よりやう〳〵にうつりそめていやはてにはやさ人のをそごとのいひくらべのごとく成り來しはいとかなしくはた歌聖と呼るゝ人々のあとにも心ゆかぬ事などの論も玉たすきの說なむ後の定說にはあなるされば此を櫻木ににほはさむをりはその由をことわりてよといはれしかばいで一言をといひおこせらるゝにげに

も世のなま〲しき徒はいづれをはかとまどひな
むがうしろめたくて上の件を一わたりかくなむ
さて今日と此の次の會日と二日に演說いたす處は兼
て申たる歌道の粗ましで人たるものは誰とても歌は
詠むべきものでまた道の眞もこれに依て辨へらるゝ
ゆゑん又その歌詠む心ばへまた萬葉家といふ訣また
近世家の歌よみの非ことまた歌をよまんと爲る心得
などのことを鈴屋翁が說を本と致してかたはら先達
の說また篤胤が思ひ得たることどもなどを採交へて
演說いたすことでござる夫につけて心得べきことが
ある夫は朝廷の御撰集の內。新千載集に藤原信良と
いふ人の歌に（水ぐきの岡べのさゝの一とふしをこ
の世にのこす言の葉もかな）此歌の意は水ぐきの岡
邊の篠のと云までは一とふしと云ふの枕詞死ぬまで
に何の仕出したることも無く一生を送るは誠につま
らぬことだ後の世になりて某と云た人はいつの頃に
云々のことを爲しおいたが感心なことだと稱られる
やうに歌なり文章也書記して遺しおきたいものだと
云の意でござるまた續拾遺集に丹波經長朝臣の歌に
（仕へ來し身は下ながら我道の名をや雲居の代々に
止めん）此意はかやうに御奉公をして居る我身の官
位は卑いことなれども何とぞ世に勝れたる秀歌を詠
んで撰集にも入り後々までも雲上堂上方の御稱に預
るやうに致したく思ふといふの意でござるこの二首
の歌などがよく心得居つて志を振起すべき思ひぐさ
に致すがよいでござる。この人々斯やうの深き志だ
に依て果してその歌どもが御撰集へ御收めに成て斯
やうに久しく世に傳はり猶この行末天地と共に傳は
ることでござる卑き賤の男しづの女といへども其名
を高く雲の上に聞へ上げ畏くも天皇にまで其の名を
知られ奉るは歌の有難い處ですでに御代々の御撰集
古今集を始め實に卑きうかれ女遊女のたぐひまでも
能き歌よみたるをば御選み入れ遊ばして其の名を天
地と共に無窮に致すことでござる道に志の無いもの
は論の限りではないが少かも道に志ある者は珍たき
書物を著はすかまた夫までもなくは眞の歌なりと詠
んで後世に其名の傳はるやうにありたいものでござ
る赤縣州の人さへこの事は返す〲云つてある。鳥
や獸を見たやうにさんと後世に知られぬのも口惜い
事ではないか。と云へばいや夫は昔の人こそ書をも

作り能き歌をも詠んで名も殘つたらうなれどもどうして今の人が成ることではないなど丶自分からさみして居るのが世の人の常ではあれども夫は自暴自棄と申て赤縣人などもきつく惡いことだと申てあるまた古の名高き人の名をさして舜何人ぞや我何人ぞやなど云つて夫に劣らじと勵み學んだがあり。また天地の間なる萬のものみな古への儘と見ゆるものを人ばかりが古への人に劣るはずはないなど丶申て學んだ者もある但しさやうの志も無く眞の道を探ねも致さず道を學ぶなどをば用なき事のやうに覺えたる輩などは適も眞の志ある人を見ては嘲め笑ひ誹りなど致す者が多いものでござる是は千匹の鼻かけ猿が鼻のまんぞくな猿を見て笑ふやうなものだによッて是も心とすべきことでは無くこれは續古今集に載られたる紫式部の歌に（わりなしや人こそ人と云はずとも自から身をや思ひすつべき）と詠まれた通りよしや人はいかに云ふとも我れとわが身を見限つて捨べきことではない右の歌に人こそ人と云はずともと云つたは如何にも猛く雄々しい心でござるそれ故にこそ源氏物語といふ名高き書を數十卷著はして世に貽し天地と共にその美名を殘さる丶でござる篤胤が弘く外國の書をも攷へて見る處がこの大地球に有りとある國に紫式部ほどの書物を著した女は決して有りや致さぬ尤も赤縣にも曹太家など云ふ聞えたる才女が有て漢書を書纂だなど丶云ふことも有るけれども決して紫式部の足下へも寄つくべき物ではない實に女の才では天地の始めよりこの行末も有るまいと思ふほどでござるなんと女でさへ此の歌の如くに高く志を立たればこそかやうに美名を世に傳へる然るに男子たるもの丶かやうに珍たく靜かに治まれる御代に生れて生のかぎりかの毛唐人すら卑めたる飯袋となッて朽はてんは如何にも口惜いことじやに依つて何ぞ後世に名の傳はるやうな書物を著るかせめて歌でも詠んで貽したいものでござる

○さて此方の歌學びの風を世には萬葉家と申すでござるなぜなれば何事も近き世の過り來れる說を採り用ひず盡く古の正しかッたるその源に溯つて古意古言を探ね明らめ少かも臆說を加へず古の有の儘に朴に物を考へ古へ風に正しき歌を詠まんと致すことでその據として全ら讀解くものは萬葉集だに依て世間

より萬葉家と申すでござるさてこの萬葉集と申すものは歌集のあるが中にもいッち古く正しきもので道を學び古へを知るに結構なるもの故に鈴屋翁の教へにはまづ第一に古事記を讀んで神代の實を知り其本をかたくして夫より日本紀に及び古事記に漏れたる事を讀み辨へ次に萬葉集と立て是は歌集ながら朝廷のやんごとなき正史たる古事記書紀の次へ立られたることは實は縣居翁が深く攷へて教へられたる筋でござるこの事を鈴屋翁が宇比山踏といふ書に記し置れまするは萬葉集は歌の集なるに二典の次に擧て道を知るに甚益ありと云ふ故は心得ぬ事に人思ふらめども我師の大人古へ學の教へもッはら此にあり其說に古の道を知らんとならばまづ古の歌を學びて古風の歌を詠み次に古の文を學びて古へぶりの文を作りて古言を熟く知りて古事記日本紀をよく讀むべし古言を知らでは古意は知られず古意を知らでは古の道は知り難かるべしと云ふ意ばへを常に言ひて教へられたり此教へは迂遠きやうなれども然らずその故はまづ大かた人は言と事と心とそのさま大抵相應ひて似たる物にて譬へば心の賢き人はいふ言のさまもなす事のさまもそれに應じて賢く心の拙き人はいふ言のさまもなす事のさまも夫に應じて拙きものなりまた男は思ふ心もいふ言もなすわざも男のさまあり女は思ふ心もいふ言もなすわざも女のさまありされば時代々々の差別もまた是らの如くにて心も言も事も上代の人は上代のさま中古の人は中古のさま後世の人は後世のさま有て各々そのいへる言となせる事と思へる心と相符ひて似たる物なるを今の世に在てその上代の人の言をも事をも心をも考へ知らんとするに其云りし言は歌に傳はり爲せりし事は史に傳はれるをその史も言を以て記したれば言の外ならず心の樣も又歌にて知るべし言と事と心とは其樣相かなへるものなれば後世にして古の人の思へる心なせる事を知りて其世の有さまを正しく知るべき事は古言古歌にあるなりさて古の道は二典の神代上代の事跡の上に備はりたれば古言古歌をよく得て是を見るときは其道の意自づから明らかなり古事記は古傳說の儘に記されては有れども正しく古言を知るべきことは萬葉に及ばず書紀は殊に漢文のかざり多ければ更なりさて二典に載れる歌どもは上古のなれば殊に古

言古意を知るべき第一の至寶なり然れども其數多からざれば弘く考るに足ざるを萬葉は歌數いと多ければ古言はをさ〳〵漏れたることなく傳はりたる故に是を第一に學べとは師も敎へられたるなり總て神の道は儒佛などの道の善惡是非を言痛く議せるやうなる理屈は露ばかりもなくたゞ寬に大らかに雅たる物にて歌のおもむきぞ能くこれにかなへりけるさて自らも古風の歌を學びて詠むべし都て萬のこと他の上にて思ふと自からの事にて思ふとは淺深の異なるものにて他の上の事にてはいか程深く思ふやうにても自からの事ほど深くは染まぬ物なり歌も然やうにて古歌をばいかほど深く考へても他のうへのことなればなほ深く至らぬ所あるを自から詠むになりては我事なる故に心を用ふること格別にて深き意味を知ることなりされぱこそ師も自から古風の歌を詠み古ぶりの文を作れと敎へられたるなれさて後世になりて萬葉ぶりの歌をたてゝ詠める人はただ鎌倉右大臣殿(實朝公)のみにして外には聞えざりしを吾が師の大人の詠み始め給ひしより其敎へによりて世に詠む人多く出來たるを其の人其の心ざす處必しも古の道を明らめん爲に詠むには非ずおほくはたゞ歌を好み槪ぶのみにして其心ざしは近世風の歌よみの輩と同じことなり」云々と云はれたるは尤なることで今世の歌作者は古學とは云ひつゝも眞の古へ學びの意では無いでござる其譯は次々に申さう

○さて縣居翁は鈴屋翁が屢いはれまする通り萬葉を解をしへ古へ風の歌文を作り習ふべきことを諭されましたのは實は是よりして神代の道へ導き諭さんとの意で致されたに違ひなく書とかき著はされたる書どもに其意ばへを返す〳〵言ひおかれ今これに掛置まする掛物は縣居翁の眞跡ですなはち祝詞考の序でござるが其趣を具に記して置れました處を江戸にもこの翁の御門人で近頃までも世に居り萬葉家と名のり居たる輩が吾が鈴屋翁が縣居翁の歌を詠み古へを學ぶのは神の道を知るべき爲だと敎へられたる趣に隨つて其筋を人に示さるゝことを妬み憎んで之を誚り己れをば更に道など云ふをば如何なることゝも思ひ辨まへず汚き心を以て縣居翁の本意をば失ひながらそれでも生涯萬葉家と名のり縣居の名ばかりを衒つて世を果した者が多いでござる近頃或人の咄しに

聆ましたがこれは老人でその若い時には縣居翁の許へ親しく參つたる者で夫が居合せたる處へある人が來て咄しの序に翁へ申すには先生は常に人に敎へらるゝ處を承はるに歌を詠み文を作ることを學ぶのは古の道にわけ入るべき山口にせんとてのことだと言れますが其のむねと有る門人たち中にも江戸の人々は只歌のみを戀として古の道を學ばんなどは心がけも致さぬは入門の砌り翁へ捧げ進らする誓詞にも違つて篤實ならぬ事なれば先生はさこそいふ詮なく憤ろしく思し召すことで有ませうと申したれば縣居翁が言はれますには然ればのことぢや予らが深く考へて敎ふることをよく心得て道までに及ぶ者は江戸などにはとんと無くみな歌ばかりを詠んで居るが今さら破門もならずと諦めて居ることで是は譬へば娘を數多持て親の心には各々智慧も身がらも相應の夫をもたせんなど深く思ひ慮つて書讀み物かく方やら外も女のなすべき事を敎へ置たるが其女ども親のさる思ひはかりをば夫れども思はず身がら不相應なる賤き鳶の者しごとしなんど云ふ類ひの者に添はんとして親の心を背くやうなもので憎くはあれどこりやどうも勘當もならず憎いながらに不便にもあるさ。云つて笑つては居られたれども深く歎息せられた樣子であッたとの咄しでござるさてこそ縣居の翁門人たちが去年今年までも江戸では名高く萬葉家の歌詠みと名のりなど致したけれどもむげに拙い輩ばかりでござるさて萬葉集をよみ釋くことは古道の大意を演說の砌に申たる通り夫は水戸中納言光圀卿の思召しつきで其仰を承賜はつて難波の契冲阿闍梨が解き初め萬葉の代匠記と云ふもの五十卷を書て奉り其第一卷目雄略天皇樣の御歌に籠毛與美籠持。布久思毛與美夫君志持云々とある御歌の籠毛與といふを古來その讀を知らんで籠毛與と誤り讀來つたる處を契冲は神代紀の無間堅間と云ふを證としてかたまもよと訓んだるを始め其の外夥しく卓見がある故に光圀卿にも殊の外に御悦び遊ばし白金千兩絹三十匹を下されたのでござる此事及び萬葉集のわけがなほ委く光圀卿の御內なる安藤爲章號を年山と申たる人の千年山集と申すに書てあるからよく心得ておくが宜いでござるまた光圀卿の御撰なされたる釋萬葉集と申すも五十卷あると申すことでござる

○さて歌と云ふは如何なる物を云ふぞと申すに三十一字の歌を始と致して神樂歌。催馬樂。連歌。今樣。風俗。平家物語。猿樂の唄ひもの。また今の世の狂歌俳諧小歌淨瑠理また童の唄つてあるくはやり歌。臼舂歌。木挽歌の類ひまで。都て詞の程よく調つて節をあやなし唄はるゝ物を都て歌とは云でござるこの中に古のと今のとまた雅と俗との差別はあるけれとも盡くみな歌でござるだによつて今の世に卑き賤の男賤の女が口號みに唄ふ物をも歌と云ふかの三十一字の歌は昔の人の歌で小歌はやり歌の潮來ぶしやしんぐい〳〵は今の人の歌ではあるなれとも古へのとは遙に違つてをるのは古と今とのわけで違ふのでござる昔の歌は意も詞も美しく雅びやかで今の小歌はやり歌は意も詞も穢く卑いのは雅と俗との違ひめで其のうたひ上げ詠上げたる處では古のと今のと雅なると俗なるとの差別はいかふ違つてとんと同じものとは云へぬやうなれとも同く歌には相違ないでござる夫故にかの賤の男賤の女童の口ずさびに唄ふのをも即ち歌と云ふ是は神代から致して今の世までに相傳はッて其名義を失はぬのでござる

○さて平家物語または猿樂の謠ひ淨瑠理の類ひは歌でないかのやうに思はるゝなれとも元來是らは物語の類ひながら節をつけて唄ふ處が則ち歌でござる物語の類ひは元來は唄ふべき物ではなけれとも平家物語に節をつけて唄ふことが始つてから猿樂の謠ひものや夫から移つて淨瑠理の類ひが出來たものでござる是は諸越の國なども詩と文のわかちが有て詩は謠へども文は謠ふことないものなる處を近き世と成つて文の體なる物にも節をつけて謠ふことが始まッたと申すことでござる御國でも物語のたぐひは文じやに依て唄ふべきものではなく歌とは其詞も異なるとが多い夫を程よく謠はるゝやうに作て唄ふ處は即ち歌でござる其内平家をば謠ふと云はんで語ると云ふ是はもとふ唄べき物でなく物語の類ひだに依て其意ばへを失なはず今もやつぱりカタルと云ふまた淨瑠理も實は物語で元來は平家物語を語る處から移つて出來たる者だに依つて是も同く語ると云ふでござる然れども名ばかりは語るといへども實は謠ふに依つて是らをもまづ歌の類ひに相違ないとは云でござる

○さてウタと云詞のわけは元來心に思ふことを言に

あやをなし長めて云ひ出るをウタフと云其のウタフといふ言ばを直に體言にウタと云つて名にしたものでウタと云ふ詞が下に思ふ心を洩し出ることで俗にウッタ〜といふ言も正しくはウタへと云ふべきことでもと同じ事でござる夫故今の俗にも言に顯はして云ひ惡く下には斯やうにも爲ま欲く願ふ意などを風めかして云ふをまづしかじ〳〵とうたひかけ置てなどいふこのウタヒも訴へる意で古言の殘つてをるのでござるさて歌を唄ひますることは人ばかりでもなく禽獸に至るまで有情といッて情あるものはみな其聲に歌があるでござる夫は古今集の序に花に鳴く鶯水に栖む蛙の聲を聞けば活としいけるもの何れか歌を詠まざりけるとあるは凡そ活物と云はるゝ程の者に歌を詠まぬ物はないと云ふのでござるこれをよく思ふが宜い鳥や蟲なんどもその鳴聲がほど〳〵に整のッて自つからあや有るのはみな其ものゝ歌でござる但し世に鶯や蛙の歌だと申て三十一字の歌をいひ傳へて居るのは古今集の序の詞から思ひついて如何なるをこの者か僞り作つたもので是は云ふにも足らぬこと鶯はうぐひす蛙はかはづ己がじゝその鳴聲のあやあるを其が歌と貫之主の云はれたぶんのことで鶯も蛙も三十一字の歌をば詠むと云はれたのではないのでござる是につけて近所に道學とか何とかいッて人に物を敎ふると云ふ人があるから何やうの事を云ふかと先だッて鶯胤がその者の所へ行て聞た處がこの古今集の序を引出して鶯や蛙がはやッはり人間と同じやうに三十一字の歌を詠む事に解て夫につけて世の歌を敎へる人はてにをはを整へるに或は假名づかひなどゝ云ふことを申すけれとも既に貫之も蛙や鶯さへに歌を詠むと書て置れたがこの鶯や蛙が誰にもてにをはだの假名づかひだのと云ふことを習つた噺しも聞かぬ夫に人として假名づかひやてにをはのことを覺えやうの習はうのと云ふは鳥や蟲にも劣つて居ると云ふものだなどゝ申したがかの道學者ぐらゐの者は大かたかやうの白癡を申てやッはり蛙や鶯が人間と同じやうな調を詠む事と貫之の云れたことだと思つて居るでござるなほ此腐れ道學者の非ことは夥しく有て鶯胤が親くする人々も彼に迷つて居た者も大分あッたる故其の人々の爲に尻口物語といふを作つてその非事を辨じおきましたから望の衆へ

は見せるつもりでござる
○偖この謌と云ふものは何時の比より始まつたものだと申すに古今集の序に此歌天地の開け始まりける時より出來にけりと紀貫之主の書れたる通り世の始め神々が在せられると直に歌の有るは知れたことでござる何故と申すにかの生とし生るもの孰れか謌を詠まざりけると有る通りの訣ゆえ神々の御心に嬉しい樂しいと思召す其時々はア、ハレといふ御言のあッたることはこりや申すまでもないことでござる夫故に貫之主は天地の開け始まりける時より出來にけりと云はれたものでござる偖その歌の始と云ふべきは伊邪那岐伊邪那美二柱神樣が自凝島に御天降遊ばして天御柱を御巡り遊ばし互に御唱へ遊ばしたる御言がある夫は古事記に伊邪那岐命先言ニ阿那邇夜志愛袁登賣袁ニ後妹伊邪那美命言ニ阿那邇夜志愛袁登古袁ニと有る御言でござる是はかの御柱を右と左とに別つて御巡り遊ばし御行逢ひ成され。はたと御顏と御顏を御見合せ遊ばして其御心にあな美はしき少女よあな美愛き少男よと互に思召す御情の實が御聲に發し御言に顯はれてかやうに仰られた者で夫故後世に之を歌の始とも申すでござる然れども古事記日本紀ともにこの御言を歌と云はぬのは慥に歌と云ふべき程のことではないに依つてのことなれども五言二句に調つてその御語のさまも唯の詞では無いに依て日本紀にも唱和とは書れたものでござる斯やうのわけ故この御詞を以つて歌の始と致すことなれども何事でも始は後々のやうに諦ではないもので此の前にも神々の斯やうの類ひの御言があッたらうかなれども夫は物に見えぬに依つてまづ是を始めとは申すことでござる
○さて是は歌と慥に御記しなされ。かつ其詞も三十一字に調つてをるのは須佐乃雄命の八俣の大蛇を御退治遊ばしかの奇稻田姬命を御娶りなされ夫と御住ひ遊ばす御屋を出雲國へ御造りなされて是を須賀の宮と云ふ其時に其處から雲が夥しく立騰つたるに依つて須佐乃雄命は夫を御覽遊ばして御歌ひなさるゝには夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻碁微爾夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐袁と遊ばしたが是が實に歌と云ふものゝ始めでござるこの御歌の意はまづ夜久毛多都と申すは彌雲立と云ふの意でその彌と云ふは今の

世にも物の多く重つたることをいやが上に重なるなど丶申す其いやと同じことでいやと云ふべきが自づから約つてやさばかり云ふが古言の常でその唯にやと云ふにつけて假に八の字をも書でござる八百萬神と書たる八の字なども八百萬神と云ふことではなく數の夥しく多いことを申たものでござる此外にやといふことを付て申すことが甚だ多いが皆この意でとんと八の字に意は無いでござる斯やうの訣を知らんで俗の神道者流が神道では八の數をたツとぶなど丶申て周易の八卦の說なごを取合せて申すがみな文盲故のことでござる近く今の世に草木の花の重なツて咲たるを八重櫻八重菊など丶云ふを以て考へるが宜しいこりや木草に何にも八の數を尊ぶ謂もないことでござる○伊豆毛と云ふは出る雲と云ふ義でくものくの字を略していづもと云つたもので即ち出雲と云ふ國の名は根元この御歌の古事に依つて申したことでござる○夜幣賀岐と云ふ夜幣これ則ちやへ櫻やへ菊などのやへでやの字の意は右申したる通りのこと則ち幾重か重ねたる垣と云ふことでかの立騰つたる雲をいまゝ御造り遊ばす御屋の垣と御見立なされて斯樣仰せられたものでござる○都麻碁微爾と云ふは都麻とは則ち奇名田姫の御事を仰せられたるもので奇名田姫を籠置く料に雲が彌重垣を造ると御見立なされたもので一首の意は今我れ須賀の宮を造る時しも彌重雲が起よ。この立出る雲が彌重垣を成すは吾が夫婦籠り居らんこの宮の料に雲も彌重垣を作ることよと御詠みなされたのでござる○この御歌に彌重垣作る其彌重垣をと重ねて仰せられたのは上代の歌に幾らも有ることで都て謠ひ上るものは今の世の童部の口吟びまでも同じく上の詞を返して再び云ふことが多い夫は一寸云はゞかの薩摩の國ぶしなど丶云にも(島の權左衞門どのあよかよめとりやる島でいちばんよかよめだの〳〵)と繰返して謠ふ皆かやうの訣でござる偖この須佐乃雄命の御謌は則ち是を歌の始めと致すことでござるまた俗の神道者流俗の歌學者流の輩がこの御歌に種々の言痛き妄說を作つて例の秘事口傳を申すが皆いふにも足らぬ說どもでござるまた稻田姬の御答の御歌だと申して有るもみな後世の妄說だによッて引くるめて火にさッくべるが宜しいでござる

○さて謌といふものを詠み出すその本の起りはどういふ處いかなることに依つて出來る物だと申すに物の感を知る處から出來るものでござるその物のあはれを知ると云ふは如何なることぞと申すに古今集の序に倭歌はひとつ心をたねとしてよろづのとの葉とぞなれりけるとあるこの心と云ふが則ち物のあはれを知る心をさして云つたものでござるこの續きの文に世の中にある人ことわざ繁きものなれば心に思ふことを見る物きく物につけて言出せる也とあるこの心に思ふことゝ云ふもまた則ち物の感を知る心のことでござる物の感を知ると云ふ謂は都て世の中に生とし生て居るものはみな情があるに依つて物にふれて必ず思ふことがあるだに依つて生とし生て居るものはみな歌がなけりやならぬ其中にも人は殊に萬物より勝れて心も明らかなる物だによッて思ふことも繁く深く殊には禽獸よりも成す事なす業の繁きもの故事に觸ることも多いから彌々思ふことが多いこゝで歌がなけりやならぬ訣でござる偖その思ふことの繁く深いは何故だと云へば物の感じと云ふことを知て居るからのことでござる物のあはれを知つて事業繁きもの故其事に觸る毎に情が動いて靜かならぬでござる情が動くと云ふは或時は喜しく或時は悲しく又腹立しく亦は悦ばしく或は樂しく面白く或は恐ろしく憂はしく或は愛しく或は憎ましく或は戀しく或は厭しくなど樣々に思ふ事の有るは則ちみな物のあはれを知つて居るに依つて斯やうに情が動くでござるあはれを知つて居るに依て情が動くと云ふは譬へば嬉しき事に逢て嬉しく思ふのはその嬉しかるべき事の意を辨へ知つて居るに依つて嬉しく思ふでござるまた悲しき事に當つて悲しく思ふのはその悲しかるべき事の意を辨へて居るに依て悲しく思ふのでござる然れば事に觸れてその嬉しく悲しき事の意を辨へ知るを物のあはれを知ると云ふでござるその事の意を知らんでは嬉しい事も悲しい事もないに依つて思ふことが無い思ふことがなければ謌は出來ぬ訣でござる生とし生る物はみな分々につけて事の意を辨へ知つて居る故に悲しき事も嬉しき事もある悲しきことも嬉しきことも有るに依つて歌があるでござる其中にも事の意を辨へ知るに淺いと深いが有つて禽獸は其心淺くて人に比べては物の辨へがないやうな

物でござる人は物に勝れて事の意を能く辨へ物のあはれを知つて居る其人の中にもまた淺いと深いがあッて深く物の感を知る人に比べてはむげに物のあはれを知らぬやうに思はるゝ人も有て知つたと知らぬとでいかう間のあることだに依て常には物のあはれを知らぬ人と云ふも多くある是は眞に知らぬではなく深いと淺いとの違ひでござる譬へば珍たき花を見潔かなる月に向つてあはれと情の感くは則ち此れ物のあはれを知るので是その月花のあはれなる趣を心に辨へて居る故に感ずるけれども其趣を辨へ知らぬ人は如何程めでたき花や月にも心の感ずることがない是すなはち物のあはれを知らぬと云ふもので是は月花ばかりでなく外のいはゆる七情と云ふ情の動かぬが物のあはれを知らぬのでござる然れば物のあはれを知る人を心ある人と云ひ物のあはれを知らぬを心なき人と云ふ物のあはれを知る知らぬと云ふことは大略かやうの譯でなほ委しく云はゞ物に感ずるが即ち物のあはれを知るのでござる俗には感ずると云ふことを能きことに許り云ふけれども元來は然で無く旣に感の字は字書にも動也と注の有る字で總て何事に依らず嬉しとも悲しとも事に觸れて深く情の動くことで夫が則ち物のあはれを知る處でござる偖あはれと云ふ辭も後世には只悲しき事に許り云て哀の字を書くけれども一體は深く心に感ずる事の有る時あゝはれと歎息する辭で阿那と云ひ阿夜と云ひまた後世あらなど云ふと同じ類ひでござるなほ委しくは古史傳の演說の時に申すつもりでござる

○さて歌を詠み出す事はこの物のあはれを知る處の深き中から出來るもので其の感に堪へぬ時のわざでござる感に堪へぬと云ふは事に觸れてもあはれを知らぬ人はあはれと思はずあはれと思はねば歌も出來ず譬へば大造に神鳴りはたゝきがら〳〵づどんぴッしやりと恐ろしき音がしても聾な人は聞えぬ故神の鳴とも思はぬに依つて恐ろしいとも思はぬやうなものでござる然るを物のあはれを知る人は其事にふれてあはれと思ふまいと爲れどもあはれと思はれて止みがたくちやうど耳の能く聞える人が鳴神を聞くまいと思へども聞えて恐ろしく思ふやうなものでござる譬へばお互のやうに眞の道を好む者は心そこ道を有難く思ふ是が物のあはれを知つたる處で夫故あゝ

眞の道は有難いあゝ神様の御徳と云ふものは云はふやうも無く奇しく異しく尊い物だといふ言も口に出る此が歌でござる夫に引かへて誠の道の有難いことも神の尊いとも知らぬ人は何とも思はずしやあ〳〵として居る夫が物のあはれを知らぬので其心が無ければ神は尊い道は有難いと云ふ歌も出ぬやうなものでござるさて然やうに深くあはれを感ずる時は心に籠て忍び難くそこで自づから其のあはれに思ひ餘ることを言の葉に云ひ出るものでござる譬へば悲しい事に値つてあら悲しやと歎き云ひ面白いことの堪がたきはあなおもしろと喚き悦ぶ此が則ち歌の根元で嬉しいにつけ悲しいにつけ其時々に嬉しい悲しいと動く心が自づから言に出るのでその言にあやの有るのが則ち歌でござる夫はまづ近きことの上で云はふならば斯やうのことは能く有るものじやが夜に入つていざもう寢ようとか云つて表の戸ざしを爲て序に寢がけの小用でもいたしてなどゝ思つてまづ潜り戸をヅッと明て何の氣もなくぬつと外へ顏を出す處が秋の最中などで月の光りが冷え渡つて皛だこゝではどんな者でも小用には出たものゝとやッて前を搦ることよりもまづ月夜見の照渡らす方へ目が附いて其方へ仰向て眺めるその眺める下の心は偖々皛かに美はしい月だと心に感じ愛てるからのことでござるそこで其の愛る心が言に顯れてあッあ美い月だと云ひ出す此が則ち歌の起る源のどうも云へぬ處でござるそのあゝ宜い月だと云つたるあッあが則ち懇に思ひ詰た誠の情の聲に顯はるゝので古くはあなと云ひまたあらと云ふも同じ語で古語拾遺に古語事之甚切皆稱阿那と有は則ち此の事でござる此は古語ばかりでなく今の世とてもあらともあゝともあなとも云てあら悲しやあゝ切ないあな事々しいのと云ふ皆一つ言で情の切に思ふ處から云ひ出す言でござる偖そのあゝ宜い月だと云つたのが即て歌の場では有るけれども唯斯やうに申した許りでは歌には成らずこの言にあやを成して云ひ取つた處が則ち歌でござる夫は譬へば其月に見蕩てかの戸ざしを爲ることをさへに打忘れて眺め居る程に秋の夜の露さへ袖に降りて着たる物も濕々となるこゝらでかの言に文を成して(眞木の戸をさしも敢なで秋の夜の飽ぬ眺めに袖の露けさ)など云ふやうに云ひとるそこで軈成に歌ら

しく詞がなるでござるまた途中などで美しい女でも行逢ふと誰しの人も若き程は夫を能く見ま欲しく面向しく名をさへ聞ま欲しく思ふものでござる然れとも然見らるゝものでもなく名を聞れるものでもないが此らも歌の出る情のある處でござる是を今一寸萬葉風で歌らしく云はふならば（途に逢ひて人目面なみ言とはで別れし妹よあやにゆかしも）とか何とか云ふ是らが眞心の儘なる雅情みやびの實は面白い處でござるまた悲しいことで云はふならば篤胤が如く財乏しくはかなくて五年三年あゝ讀みたいやれ欲しやと戀にこがれて辛きくめんを爲て漸々寫させるか買ひ取たる書物などまた外にやんごとなきことなどの有て夫を代なして左爲ばや右せばやと夫を手放す時なんどの胸苦しき事云はん方なく此らも歌の出來る處でござる既に古人も伊勢の家集に則ち百人一首にも出て居る伊勢の事だが家を人のになしてと云ふ詞書が有るからは自分の今まで住まッたる家を賣らるゝ時の事と見えるが（飛鳥川淵にもあらぬ我宿もせにかはり行く物にぞ有ける）と詠れましたが此歌の意はかの誰も知つての通りあすか川と云ふ川は昨日は瀬かと思へば今日は淵と變るその飛鳥川の淵にあらぬ我が家が錢にかはり行くよさて／＼と歎息を籠めて云つた歌でござる此歌のせにかはり行くと詠んだるせにをたゞ川の瀬と云ふことに見るは歌の見やうの委くないのでござるせにと云ふは今云ふ錢のことでござるさて是らを見るにつけおもふに附けても偖々昔も今も人情の同じく此の方は毎度これを致して居るに依つて染々と胸に徹へて伊勢が心を思ひやらるゝでござるこゝらが鈴屋大人の自分が歌を詠めば人の歌をも感ずると言れた處でござる

○偖その歌は世間の歌作と云ふ輩は大方三十一字の歌をのみ詠み世の人も歌と云へば夫に限るやうに思つて居るも有けれとも種々の體が有つて夫は追て申さうがまづ此の方の詠むべきは三十一字の歌は素より其上にいふべき意の多くて三十一字に云ひ取り難き事は長歌と云つてしたゝか長く連けて詠むでござる其趣は（高光る日の御子やすみしゝわが大君萬代にいや常しくに奥山の葉ひろくま樫。しが葉のひろりいまんしが枝の榮えいませと拜みてあやに畏み言ほぎまつる）と斯やうでござる是が鈴屋翁が大御世

壽ひの歌とて詠まれたる長歌で斯程にも長く詠む然れども語の連けざまには何んにも替つた事はなくやつぱり語をば五言七言五言七言と連けて古の言に熟しさへすれば何んのこともなく詠まれるものでござる「尤もその云ひ出る言に依つては五言七言ならで四言或は六言八言なるも有れども五七の格には外れぬ」その五言七言と云ふは一字を一言として譬へば在原業平朝臣の歌に（ちはやふる神代もきかず立田川からくれないに水くゝるとは）これを一句づゝ計へて見ると（指を折て）斯やうに五言七言五言七言となッて居る長歌とてもその通り則ちこの鈴屋翁の長歌を讀んで見ても知れる（また計へる）とんと是も五言七言の調べに替ることはないでござる然れば歌と云ふものは何の事もなくお互の樣に古の學びをして古の道を心得その學び得たる眞の情を古の言葉で五言七言と能く本末のかけ合て聞えるやうに美はしく云ひとるのが歌でござるさこの通り無造作なもので何にも傳授だの口訣だのと人撰びをして傳へるやうな小むづかしいことはありや致さんでござるその傳授口訣と云ふことは文盲の癖に物を欲がる輩の致すことで都て取に足らぬことでござる其の訣は次の會席に演說致しませう

○さて是は業平朝臣の歌を申し出した序に俗に覺えてをる處とよく學問致した上で得たる處とは百人一首の訓方にさへきつく違ひのあることを一寸云ひませうこの業平朝臣の歌を俗では（千早振神代もきかず龍田川からくれないに水くゝるとは）と詠れで世の常の歌學者等の解く趣はちはやふると云ふは神と云ふの枕言だと固く心得て神と云ふには是非ちはやふると云はねばならぬ事に心得て何故ちはやふる神代と云ふぞなれば神代にはちはやと云ふ物を着てその袖を振つたに依つてちはやふる神代と云ふ偖その神代にも聞いたことはない龍田川にもみぢ葉の散り布いて其下を水の流るゝはちやうどからくれないの下を水が潜つて行くやうだと詠まれたことゝ斯やうに釋いて業平朝臣の立田川の川端に立て居らるゝ圖などをかいてあるが古への學びをする此の方で釋く趣きはとんと違ふ一體この歌は古今集に出てをるが本で夫を定家卿が拔出して小倉山の山莊なる百人一首に加へられたものでござるだに依つてまづ古今集

から吟味して見ると古今集の秋の部の下に二條后の東宮の御息所と申ける時に御屏風に立田川にもみぢ流れたるかたをかけるを題にてと云ふ詞書俗にいふ前書が有て在原業平朝臣すなはち此歌があるでござるされば此歌は業平朝臣が立田川へ行て詠れた歌ではない御屏風の繪を見て詠れた歌だに依て龍田川の川端に立て居らるゝ所などを繪に書くはまず以て當らぬことでござるまた俗の百人一首には千早振ると書て有るけれどもあれは假字と申して字にさつぱり心はなく本當はちはやぶると濁つて云ふべきことでござる其ちはやぶると云ふ詞の意は神代の卷に殘賊強暴横惡之神と有るをイチハヤブルカミと訓んである其イチハヤと云ふは俗にすばやいと云ふやうな心の辭でまたブルと云ふは俗に賢人ぶるの親方ぶるのまだ知つたりぶりなど云ふ類ひのフリブルと同じことでいちはやぶると云は元來惡き神に云ふことでござる夫ゆえ日本紀に殘賊強暴横惡之神とあるをいちはやぶるかみと訓んだものでござるそのいちはやぶるのいの字を略してちはやぶると云ふでござるちはやぶると云ふにつけて千早振と字をとり合せ借りて書くばかりとんと千早振と書た字に意はなく既に千劍破とも書てあるみな借字でござるだに依つてちはやふると淸で云つてはとんと義の解せぬことで是非にぶると濁つて云はねばならぬことでござるこの千劍破とも書て有るにつけてまた附會の說をいッてあるがあまり煩いから夫はまづおきませうさて右申す通りちはやぶると云ふ語はぐッと古るくは惡き神の上にばかり云ふことで善き神に云ふ枕詞は靈幸ふと云つたものでござる靈幸ふと云は神の御靈のふさはッて幸を賜はることを云ふでござる右のわけなる處を段々古に暗くなつて來て此業平朝臣の頃などはとかく善き惡きを云はず都て神と云ふことの枕言と爲るやうになッたものでござる況や業平後の人および普通の歌よみ歌學者の類ひはみな心得違ひを云て居たことでかやうの珍たき說どもは漸々契沖阿闍梨が穿鑿仕出し縣居翁鈴屋翁で大成するやうに成つたことでござるさて水くゝるとはと淸んで申す故はそのかみ絞纈とも括り染とも申す物が有て夫は今有る絞り染のことでござる川にもみぢ葉の流るゝ有さまをその絞染に見立て詠れたる歌で一首の意を約めて申

さば遠き神代の昔しには色々と奇しく異しき神の御所爲どもが有つたと聞傳へて居るがその神代の傳言にさへ龍田川の川水をからくれなゐの括り染にしたと云ふことは聞たことがないさて〳〵奇妙なことだふしぎなことだと云ひ成されたる歌の意でござるとんと期やうに俗の思ふとは違つて居る是は序だに依つて申すが此のやうに諸事普通の說は違つてをるに依て古學はせねばならぬわけでござる

○さて眞の歌も時行り小唄も同じく歌ひ上るものだによってうたと云ひその歌と云ふには替りなけれども眞の歌は五言七言と入りかへに句を成しはやり小歌の類ひはこの定りに外れて居るやうに思ふけれどもその唄ふ處に文が有つて詞の數ほど能く整ひ揃つて亂れず面白く聞ゆることはどうだと申すに其謠ふ時に字の足らぬは足らぬやうに節を延し文字の餘るをば節を約めて短く謠ひみな五言七言の調に應へて三言四言六言八言も謠ふ處はみな五言と七言の調に謠ひ上けたものでござる夫は越後の新潟ぶしまた潮來ぶしまた道中ぶしなど云ふ類ひは七言の句を三句云て五言で止める故程能く調つて譬へば（雨の降る日と日の暮がたはいとゞ思ひが益はいな（咲た櫻になぜこまつなぐ駒がいさめば花もちる（思ひ染川わたらぬさきはかほど深いとしらなみた」なんどやうに大かた七言三句五言一句二十六字に調べをなしたものでござるその內に此調を外して今の俗に字あまりいたこなど云ふ類ひ其外も幾らかこんな類ひが有てまた字の不足なるも大分ある是らも多いのはつゞめてせはしく字の少いのは延して調の合ふやうに謠つてどんと五七の調に成る處を見れば五七の調にゆくが人の謠ふほどらひの自然の定りと見えるでござる

さて眞の道の心ばへを探ぬる人は素より都て人は風雅の情が無けりやならぬものでござる夫はなぜと云に風雅の情に通じてかの物のあはれを知るが眞の歌の出る處で是でなけりや歌の道は知れぬ夫故鈴屋翁も言れますには人は雅の趣を知らでは有べからず是を知らざるは物のあはれを知らず心なき人也かくて其みやびの趣を知ることは歌を詠み物語書などを能く見るにあり然して古へ人の雅たる情を知り都て古の雅たる世の有さまを能く知るはこれ古の道を知る

べき階梯也然るに世間の學問する人々の樣を見わたすに主と道を學ぶ輩は多くはたゞ漢流の議論理屈にのみかゝづらひて歌など詠むをばたゞあだ事のやうに思ひすてゝ歌集などは開きて見ん物ともせず古人の雅情を夢にも知ざるが故に其主とする處の古の道をも知ること能はず斯くの如くにては名のみ神道にてたゞ外國の意のみなれば實には道を學ぶと云ふものにはあらず偖また歌を詠み文を作りて古をしたひ好む輩はたゞ風流のすぢにのみまつはれて道のことをばうちすてゝ更に心にかくることなければ萬づに古へをしたひてふるき衣服調度などをよろこび古き書を好み讀む類ひなどもみな風流のための玩物にするのみ也抑々人としてはいかなる者も人の道を知らでは有べからず殊に何のすぢにもせよ學問をもして書をも讀むほどの者の道に心をよすることなく神のめぐみのたふときわけなどをも知らずなほざりに思ひて過すべき事にはあらず古をしたひたふとむとならばかならずまづその本たる道をこそ第一に深く心がけを明らめ知るべきわざなるにこれをさし置て末にのみかゝづらふは實に古を好むと云ものにはあらずさては歌を詠むもまことにぞ有けるのり長がおしへにしたがひてものまなびせん輩はこれらのこゝろをよく思ひわきまへてあなかしこ道をなほざりに思ひ過すことなかれ」と云ひおかれましたが是はくりかへしよんで能く味ひておくが宜いでござる偖その古の雅びまた物のあはれを知るには物語ぶみを讀めと翁がいはれました其の物語は種々ありますが中にも伊勢物語源氏物語などが第一のものでござる其の心得の爲めに源氏物語は長くて句ぎりがむづかしいから伊勢物語を一くさり申しませう（昔東五條におほきさいの宮のおはしましける西の對にすむ人ありけりそれをゆきとふらふ人こゝろざし深かゝりけるをほいにはあらで。む月の十日あまりほかに隱れにけり在ところはきけど人のいき依べき處にも非ざりければ猶うしと思ひつゝなん有ける又の年の正月に梅花さかりなるにこぞを思ひて彼のにしのたゐに行て見れどこぞにゝるべうも非ずあばらなる板敷に月の傾くまでふせりてこぞを戀て詠る（月やあらぬ春や昔のはるならぬ我身ひとつはもとの身にして）とよみてほの〴〵明るになく〳〵歸りにけり」この歌

の意は今夜こゝへ來て見れば月の色も春のけしきも違たらふと思ふにやッぱり去年のとほりだ然るにただおれが身一つばかりは去年の身で有ながら去年逢た人にあはれはせんで其時とは大きに違つたことだ偖も〳〵去年の春が戀しいと云ふの意でござる心あまりありてことば足らずと貫之主の評をつけられたのは此でござる誹ったのではないさて是につけてかの俗にもてはやす淨瑠理ぶしの文句などにも作者がいかう骨を折て作るもの故至極感心して物のあはれを知るの場が幾らかある夫も雅の趣き物のあはれと云ことの心を辨へんで聞くとまた聊かも物のあはれてふことを知て聞くとでは面白みがいかう違ふでござる是は猿と云ふ獸のこはい物だと云ふことは誰も知て居るけれどももと咀つかれたことの有る者のこはがりやうは格別に身にしみ〳〵と恐れをなす。風雅の情を辨へたものと辨へぬとでは此のくらゐに違ふものでござる夫は夕霧と云ふ傾城と伊左衞門と云者の事を作つたる廓文章と云ふ淨瑠理ぶしに伊左衞門は傾城ぐるひに財を費やして親の勘當を請たる故本の全盛に引かへてしり切れ草履に紙子など着て其の文句にも引けば破るゝ摑めば跡へしはす浪人昔はやりが迎ひに出る今はやう〳〵長刀の草履を縫ひとか何とか有て久しぶりとてかの夕霧が居る吉田屋喜左衞門と云ふが處へ來たる處が夕霧は阿波大盡とか云ふに揚られて居て奥の間にその相手をして三線を彈て賑やかに騷いで居るそこで伊左衞門は待て居ながら夫を聞て偖はこの方を落ぶれたりと見かぎッて他へ心がはりがしたることゝ氣を揉みながら立つ居つの獨言にあッあ彈くは〳〵去年の月見は奥座敷そこは隈なき夜と共に飮あかしたる大騷ぎ太夫とおれがつれ彈でひいた時の面白さ彈く其主は替らねどかはつたはおれが身の上あいつが心底あのやうにあらふとは」思はぬ人にせき止められてと唄に移る處だがとんと是は伊勢物語のこゝの業平朝臣の月やあらぬと云ふ歌の趣向を取て作つたもので大ぶ面白いでござる斯やうの類ひが幾らか有ますどうぞ眞の道をたどらんとする人は捻くッた唐人理屈をば大概にしてどうぞ物のあはれを知ると云ことを覺えるやうに致したいものでござる眞の歌はこゝらでなければ得られませぬ堂上がたの地下を賤しめて其歌なんどを

も取上げぬやうに云はるゝ事も甚だ古に背いてをることで既に定家卿の語にも和歌に師匠なしと云はれまた其孫爲世卿の勅命を蒙られて續千載集を撰まれたるときに。さして歌よみでない人の來るにもこの度勅撰こそ候へ御歌や候出させ給へと云はしッたと云ふことでござる夫に御門人衆が各々勅撰は道の重きことなれば透逸をこそ撰ばるべきことなれ然るを歌も詠まぬ者に歌を乞はるゝこと人の難も有べき事也然る可からずとつぶやき云はるゝを爲世卿の聞かれて其人に申さるゝには歌はこの國の風俗だに依つて國に生るゝもの誰か歌を詠まぬと云はない稽古して世に知られた歌よみもありまた獨で詠んで心をやッて居る者もあるまた能き歌の出來ることは歌よみならぬ者も詠出して古き集にも入て後撰集の八ッ子が類もある勅撰を承て弘く能き歌を求むる時名譽なき人もいかなる透逸を詠で持て居るかも知れぬをなごか相ふれずして有べきぞと云はれたことを則ち藤貞宗入道頓阿の井蛙抄と云ふ物に記されて誠に有難き撰者の心だと云つて置れましたが實に公なる爲世卿のお心でござる斯くの如く其道の達人は賤き者の歌とても捨はならぬ夫は歌ばかりでもなく其外諸の技藝といへども世に勝れたる人の有るをば天皇にもきつく御悅び遊ばさるゝことでござる是は新蘆面命といふ書に有ますが靈元天皇樣は元祿十七年の頃仙洞樣に坐しまして其御製の御歌に（名あるものと雲の上まで聞えあげよ聞て我身の樂みにせむ）と御詠み遊ばしたが是らは誠に涙もこぼれる程有難き思召でござる御代々の天皇にもかく地下の凡夫にも勝れたる者の有る事を御悅び遊ばすことで近くは江戸の狂歌師四方の眞顏が詠んだる歌を御取傳あそばす堂上のあッて畏くも當今の御聞に入りて甚た御感遊ばし云々のことが有つたでござる何とこの眞顏と云は孰も知ての通り數寄屋町のいはゆる大屋で眞に凡夫下賤の者だが雅の道をば粗得たる人故にかゝる大御惠の幸を蒙つたことで有がたいなど云も更なることでござる其の時眞顏が歡びの歌に（武藏野の小ぐきか雉子をどり立かたじけなさにほろ〳〵なかゆ）と詠んだでござるこの歌の意はこの人本より江戸者ゆゑに武藏野のをぐきと云ひ我が身を雉子にたとへて其身の賤き處をも含みたるなり此たびの大御惠を蒙

りたる憙しさに思はずも踊り上り有がた泪のほろほろこぼれて憙しなきに泣くと云ふことでこの詠口が謂ゆる俳偕でおもしろい處でござる是は序だに依て云ますがいま江戸に狂歌師と云がしたゝか有て何れも穢げなる狂名をつけてきたなげなる言ばかりを云ひ散すがこの眞顏は篤胤もしたしく交はりますがそんな輩の群をば拔出た處が有て尤も世の初學の人を導くとては其の並に穢氣なる歌をも詠めど夫は謂ゆる方便にすることで實の處は萬葉集や古今集にある俳諧體と云ふに心を入れて狂歌も古風に返さんと云ふ心で其立たる筋は甚だ尤なる說でござる其は委しく彼が著したる書に論じてある然るを俗の狂歌師共が謂ゆる忌敵とやらで何くれと毛を吹て疵を求め訕り散すけれども實は眞顏が足元へも寄附くことではない殊にあつく本居先生の說を信じて古道にも大きに身を入れて居る故その歌學も古學で能く辨へて居る其の一つを云ひませうが夫は今も二條家冷泉家を御代々歌道の宗家と云ふこの兩家の御先祖は定家卿でその定家卿の御子に爲世卿と云と爲兼卿と云がましまして御兄弟わけ有て不和となり兩家にわかり

則ち二條家は爲世卿の御血脈冷泉家は爲兼卿の御血脈でござるこの爲兼卿の御子に爲守と云が在て後に剃髮せられて曉月坊と申されたでござるこの方の終られたる處は素より其墓所さへ諦に知れずに居つたる處が眞顏が彼此の古書を弘く考へて二條家冷泉家の御家の知れ兼て居つたる事どもを熟く考へ置て先年上京して冷泉殿へ御目見へ申上て其考へたること共を申あげ曉月坊の成り行き其墓所も今現に鎌倉の□と云所に存在することまで御敎へ申上て甚だ御稱美に預つたでござる其時冷泉殿のお前で詠だ歌に（曉の月の行方を雲の上に敎へ申さば指やまがらん）と詠んだでござる其時冷泉殿の御返しに（歌闕）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝと詠まれたでござるなんと凡下の身の上ながら學問の德と云ふものは有り難いものでござるとかく世の大屋じやの庄屋じやのと云ふ者は身の程をば知らんで人が相應にあしらッて置けば高い氣になッて惡く高ぶり屎たれな理屈を云て實は可笑なもので芝居でするにも高が築地の善好ぐらゐが役で蝙蝠羽折で慕何を云ふが中には眞顏がやうな者も出來る是も產靈大神の御德の妙なる處でござ

る是に附けても人は學問すべきことでござる是も序じやに依つて云ひますが青木昆陽先生と云ふは元來學問が宜かッた故に公儀の御召出しにあづかッて當時其子孫は御旗本で百石賜はッて居らるゝが其著した書には昆陽漫錄また經濟纂要などゝ云ふ物が有て學問の心得には大ぶなるものでござる夫は青木昆陽の魚屋に生れてもと同じ樣に生立て友達で有た輩は生涯天秤棒を肩に挂けかの卷き舌でなまッさ大さばあまじほのさんまと呼であるいた者が多かッたらうがこゝらも能く考へるが宜しいでござる夫は强に學問を深くせんでも譬へ文字は知らんでも古道の大意にも演說いたす通り道に志して達人の云ふ事を能く聞おぼえて其至る處に至れば夫だけの名を人にも知らるゝやうに成るでござる古人の語にも虎は死して皮を殘し人は死して名を殘すと云ひまた人は一代名は末代と云ふことも有るからどうぞ歌なりとも詠み覺えるが宜い夫も本歌は六かしく思ふならば狂歌でもよい狂歌を詠まうと思ふならば眞顏に從て詠むが宜いなぜなれば眞顏は眞の道にも志して居るに依つてその詠歌が狂歌でも實情で先に云つたる二首の歌の如くで實が有るからのことでござる今は江戸の狂歌師共が眞顏に化せられて偶々古風の狂歌をも詠むとはすれども其本が道を知らんで薄情だから實がなく止ごとなき事をも嘲哢するやうなことを云でござる夫は相應に學びの力らも有ると云ふ狂歌師の秀逸じやと云ふ狂歌に（歌詠みも下手こそよけれ天地も動き出してはたまるものかは）是は古今集の序に貫之主のちからをもいれずして天地を動かし云々と記れたを嘲哢したる趣で甚だ歌道を輕んじたる云かたでござるまた（三年までとかでむすびし下ひものくさゝをこよひ君にかゝせん）是は萬葉集に（ふたりして結びし紐をひとりして。吾は解見じたゞに相までは）と云ふ歌が有て古の女は夫の他國へでも行た時は其かへるまで下帶の紐を解んで操を立て待て居たるもの故にそれを諧に詠だことでござるこれは實は飯盛が歌だが右の古事を詠だものながら臭さを今宵君にかゝせんなど云やうなことはとんとお座へ出して吟じもならぬやうにむさく穢い事で如何に狂歌でも餘りなことでござる是はみな實情がなく道に厚くないからのことでござる大かた世の狂謌師と云ふ

者力があると云た處がこのくらゐな薄情な者でござる毎にも云ふ通り先入師となると古人の云つた通りとかく始に悪い道へ踏入ると夫がついて廻つて竟に道の眞を知らんでしまふものでござるじやに依てとても狂詞をするならば道の眞を敎へる眞顔に從て學ぶが宜いと云のでござる

さて二條家冷泉家の系圖をあら〳〵申さば法性寺攝政道長公の第六男に長家卿と云が有てこの長家卿の四世の孫が彼の俊成卿でござる五條に居られたに依て五條三位とは申すでござる俊成卿の御子が定家卿でござる俊成卿は勅命に依て千載和歌集を撰まれまた古來風體抄など云著述もあり其家集を長秋詠草と云ふ定家卿は(京極中納言と云ふ)勅命に依て新古今和歌集を撰まれまた新勅撰和歌集をも著されたりまた明月記詠歌大概など其外著述數部あり其家集を拾遺愚草と云ふ御父子相繼て歌を善く詠れて是は犬打つ童も知て居ることで今さら云まではないでござる定家卿の御子が民部卿爲家卿これも歌の名人で勅命に依て續後撰集續古今集をも撰ばれたでござるさて爲家卿に御子が三人あッて長子を爲氏卿と云ふ次を爲相卿と云ひ其次を爲守と云ふ此人が後に僧になッて曉月坊と云つたでござるさて長子爲氏卿は宇都宮彌三郎頼綱の女の腹に生れ爲相卿と曉月坊とは平時忠卿の女の腹に生れた御子たちでござるさて二條家と云は爲氏卿の御裔で則その御子に爲世卿と云が有て是も名高き歌詠みで著述も有たでござるこの爲世卿の御子たちが數多おはしたる中に爲通朝臣爲藤卿爲冬朝臣三人の裔が三流になッて有て共に二條家と申したがみな裔絶て二條家は亡なッて仕まッたでござる然るに歌の道になほ今の世までも二條家と云はこの御家の歌の掟を受傳へられたる家々を云でござるその子孫と云ではないまた冷泉家と云は右申す通り定家卿の男爲家卿の次男すなはち爲相卿より連綿と相續せられて八代目の爲純卿その長子爲勝主は儒道の大意に惺窩先生の事を申したるとき演説いたしたる通り戰死を遂られて惺窩先生の子爲景と云ふ人後光明天皇の正保年中勅命に依て冷泉の家を再興せられてより以來今の冷泉殿まで代々歌の御家と成て居らるゝでござる右のわけ故二條家冷泉家はもと兄弟の御家でござる一體この二條家冷泉家のことは甚

以てこみ入たる訣が有て中々一寸に心得らるゝ事ではなくまた歌道の大意にさしも入用もなきこと故まづ心得ねばならぬ事のみをかい撮んであら〳〵申すのでござる

○さて大かたの人の心に歌と云ものは公家衆の翫ぶべきもので地下のものゝ詠むべき物ではなく假令や詠んだりとも訣して公家衆には及ぶべき事ではないやうに思つて偶々風雅の道に志しでも有る人は俳諧發句ぐらゐをやッて爲たり顔にもてなして居るがさて〳〵心得違ひの埒もないことでござる今の世にこそは公家の方々ばかりがおもと歌を詠るゝやうに成て居るけれども先日の會にも申たる通り是は決して然やうの訣でなく誰とても歌は詠むべきもので實は人間の眞の情より出る物なれば貴賤と人に隔の有る可きいはれはなく既に貫之主も古今集の序に生とし生るもの孰か歌を詠まざりけると云れたはこの故でござる但し斯やうに思つて居る事はよの常の人ばかりでもなく儒者なんど世に物知り容して人もかれをば物知のやうに通して置くものながら名高き儒者にも斯やうの心得違ひを云て置たもある是らはとかく世の人が尤の事のやうに存じ居るに依て辨じませうが夫は太宰春臺が獨語と云書に申て置きまするは我が父母共に和歌を好みし故に八九歳の比より三十一字を連ぬる方を知り十歳ばかりより十二三までにこしをれ詞およそ三四百首も詠みけり師もなく友も無ければ詞よみたればとて人に見することもなく書つけて藏め置たるのみ也其時の心には歌はよみ得べき物とのみ思へり十四五歳の時始て詩と云物を學びてやう〳〵七言絶句などを綴る方を知れり其時愚心ひそかに思惟せしは和歌を學んで譬へ上手になりたりとも公家の人々を越ることはなるまじければいつも公家の下に屈みなんこと口をし詩は公家の制をうくまじければ上手にさへなりなば公家をも弟子にすべし此の道に於ては天下に恐るゝことはあるまじいざ歌よむことをやめて詩作る事を習はゞやと思ひ定めて書付置たる和歌の反古を盡く焚すてゝ一首ものこし留めず夫より詩を好んでひたすら學び習ふこと二十年をへてやう〳〵詩の道を明たり」と書てある世に物しりと云はるゝ者ともすら斯やうに心得てをるから況やよのつねの人は皆かやうの非心得して居るこ

とでござる都て儒者と申す者は大かた心狹く俗氣なるものでその本の起りまた歌と云ふもの丶趣意を心得ぬに依つて今の堂上がたなどが歌詠むことは其家藝のやうに秘しつ丶み猥に夫を高く云なして地下の者の詠だ歌なんどは地下の風だのなんのと貶し賤しめらる丶故夫を實と思つて畏たものでござるたとへ地下なればとて歌なんどは公家衆のさしづなどを受けべき謂れなくこりや力次第學問次第のものでござる既に鈴屋翁は堂上の方々に歌一首直してもらはれたることもなく一己の力で歌の達人となられ夫のみならずくさ〳〵堂上方の歌をはじめ世の歌よみの非事を正して玉霰と云ものまた詞の玉緒などゝ云ふ珍たしともめでたく目ざましく歌詠み文かく人の規則となる可き結搆なる書等を著はして堂上方もみな其の御蔭を蒙られかつ發會の日に申たる通り京へ上られ四條に宿つて居られた時分などは堂上方の內學問を公に致さる丶御方々は皆翁の門に入られすでに朝廷の御歌所の宗匠とあらせらる丶日野一位資枝卿も翁のことを誰かは浪の下草と見んなど御歌をなされその御孫中宮權大進資愛朝臣をば翁の舍へ遣はされて御門人となされその始て御出の時に權大進殿の御歌に「和歌の浦に行方をたどる海士をぶね今より君をかぢと賴まん」と仰せられた程のことでござるこゝらをよく思ふが宜いでござる太宰はもと歌を詠んで夫から詩を作り習ひ歌をば火にくべて仕まツたと申すが篤胤は是に引かへて元來は赤縣學問をすきで致したる故詩を作り實は子供の時からのを計へて見たらば三四百首も有たらうが鈴屋の敎へられたる御國の學問に入り初てから夫までは詩を作つて居つたることの非事を覺え書記して置たる詩の百首近くも有たのを殘らず火に投て歌を詠まんと一としきりは力めて見たことも有るでござる夫でも元來は生れつきに歌を詠む才がない故に至極の下手では有けれども詩と歌のけぢめまた歌よむ心ばへなどのことはあはれ人に劣らふとも思はぬやうに鈴屋翁が敎へに依てまづはなツたでござる

○さて世の人もかの太宰が云た通り歌は公家の人々に及び難いと思つて居るにつけてその心て勵し申さんがためまた心得にもなる事故荷田在滿が記し置たる國歌八論と云ふ物に論じたる心ち能き事を申しま

せうこの在滿といふは縣居翁の師と頼まれたる荷田東麿翁の養子ですこむる學才もあッて鈴屋翁には少し先輩の人でござるこの國歌八論に官家の論と云ふ一條が有て夫に今の公家の人々猥りに地下の者の歌をば悪く云はるゝ所を却て堂上の衆々の歌に非事も悪しき歌も多き事を云てその官家の人々其よめる處を見るに風情淡薄にして力なくかゝる歌を詠て何の樂しき處ぞ余固陋なりと云へどもしか如きの歌をば執筆の下に詠出して則數百首に充しむべし然るにたまゝ力ある歌を見ては則いはく地下風也歌にあらずと其これをきく人も我が歌の却て彼より長せるをば知らで只おもへらく歌のことにわたりては堂上の人に企及ぶべからずとさらにこれを疑論することなし歌とのみ見ゆる物を歌にあらずといはむならば何ぞその歌にあらざると云ふ當然の理をもッて是を責ざる論辨には及ばんで妄に堂上と云ふ目をもッて地下にほこることと大旨今の官家の人の風なりと云つたでござるなんと是は太宰が心とは何れが弘くどちらが尤であらふ我が古學をする人の心はざッと此くらゐに世間なみよりは高いでござるこの論は鈴屋翁も殊の外に美めおかれたことでござる

○俗の歌學者の人撰びをして傳へるものに古今集の三鳥の傳と云ふがある夫は。よぶ子鳥。いなおほせどり。百千鳥。これを三鳥の傳と云ふでござる先呼子鳥と云を詠んだる歌は則古今集春の部の上によみ人しらず「をちこちのたつきも知らぬ山中におぼつかなくもよぶ子鳥哉」またいなおほせ鳥の歌は同く秋の上に是も詠人しらず「我かどにいなおほせ鳥のなくなへにけさふく風にかりは來にけり」また百千鳥の歌は同く春の上に是もよみ人しらず「もゝ千鳥さえづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく」これらの歌に云る三鳥を古今三鳥の傳と申していみじきことに致すことながらさしも秘事と致す程のこともなく随分知れて居ることでござるまた一流にも百千鳥の歌はなくて拾遺集の神樂歌「しなが鳥いなのふし原とびわたる鴫が羽音はおもしろきかなと云ふ歌のしなが鳥を入れて同く古今三鳥の傳と致したるもあるまた三木の傳と申も有るがこれも取に足らぬことで一體歌の道などに傳授と云ふは上古より致して決してなく夫は古今集の序に有る通りひとつ心

を種として人々思ふことを見る物聞ものに付て云ひ出したるものなれば秘事口傳のあらふ筈は無いが是は遙か後代室町家の頃に東下野守常縁と云ふ武士の歌人が有て是は頼朝公時分の千葉介常胤の六男東六郎太夫胤頼と申て下總國東莊三十三郷を領して代々歌人で大内の御會にも伺候いたし子孫が京に居つてその後孫右申したる東下野守常縁と申すが室町將軍家の近臣で弓馬の道又歌道の事にも通じてこれが始て古今傳授と云ことを作り宗祇法師に傳へ夫より公家の方々までに及んで今は大極秘事大切のことに爲られて恐くも天皇へさへに古今集の御傳授などゝ申すやうになツたと申すことで此事つぶさに伊勢貞丈先生の書れたるものに武家閑談等の書を引て記し置れたでござるさてこの三木三鳥のことを正しく夫は何々だと云ふこともあら〳〵知れてをることながら今は堂上方のきつく秘して置るゝことだと云に依て夫を今あからさまに申てはどうか腹あしき所爲のやうにもありますからまづ此席では申すまいが實はその傳授の書等に書て有やうなことではなくさらりと埒の明たことゞもでござる

さて是より致して近世家世俗の歌よみの風のあしきことゞもをあら〳〵申さばまづ道統と云ふことを立てその傳來の事をいみじきわざとして尊信いたし歌も教もたゞ傳來正しき人のをのみひたすらに能きことゝ固く心得傳來なき人のは歌も教も用ひがたき物と致しまた古の人の歌及び其家の宗匠の歌などをば善き惡きを考へ見るまでもなくたゞ及ばぬ事としてひたぶるに仰ぎ尊み他門の人の歌と云へば假令いか程よくても是をとらず心を止めて見んともせず都て己が學ぶ家の法度掟をかのいはゆるさりきらひ制の言葉など云ふことをひたすらに神の掟の如く思つて動くことなく是を固く守ることをのみ專一と致すに依てその教へ法度に括られて甚た泥んでをる故に詠出す歌がすべて詞のつゞけざまも一首の姿も近世風と云ふ歌はみな一やうに定まツて居る如く一際珍らしき風などは曾てなく惡い癖ばかりが多く（玉葉見るべし）其體が卑しく究屈で譬へば手も足も縛り付られた者の動くこと叶はぬが如くいと苦しくわびしげに見えて少かも寛に延らかなる處はなくて夫をみづから顧も致さずたゞ各々能きことゝかたく覺えて居ると云ふ

は甚しき固陋と云ふもので怯く愚なることと云ん方もないことでござるかやうのことでは歌と云ものゝ本意にたがッて更に雅の趣ではないでござる抑々道統傳來の筋を重くいみじきことに致すは元來佛家の習ひかの御血脈とか云ふことから移つて宋儒が夫を眞似道統をはしめたものでござる佛家には諸宗各々わが宗の祖師と云ものゝ說をば善き惡きを擇ぶこともなく其あしきことをも強てよいと申して尊信いたし夫に違つてをる他の說をば能くても用ひぬと云ふが儒者どもの習ひでござる近世風の歌人また神學者と名のる輩などが全く是を眞似たものでござる夫は神學者流歌人ばかりでもなく中昔より以來もろ／＼の藝道などもみないとも／＼愚かなる風俗でござる如何ほど傳來がよくてもその敎へ宜しからず其わざが怯くては用ひ難く其中に諸藝などは其わざに依ては傳來を重んずると云ふこともあれども學問や歌などは更に夫によるべきことではない是は古への集どもを見ても知るが宜いでござるその作者の家筋傳來などには一向に拘はることなく誰にても弘くよい歌を拾ひ撰られたものでござる然ればこそ定家卿の敎へにも和歌に師匠なしと云はれたでござる

○偖また世々の先達の立おかれたる種々の法度掟の中には必ず守るべきこともあれどもまた一向に怯くて必ず拘はるまじきことも多いでござる處をひたすらに固く夫れを守るに依て却て歌のさまが惡くなつたることも近世は多いでござる都て歌道の掟は善きと惡きとを擇み守るべきことで是も玉霰に委く見える決してひたすら其掟をよしと泥むべきことではないまた古人の歌はみな勝れたる物のやうに心得にただ及ばぬことのみ思つてその善惡を考へ見んとも致さぬは是また愚かなることでござる古の歌だと申て惡きことも多く歌仙といへども歌每に勝れたる物でもないに依て假令人麿貫之の歌なりとも實に善か惡いかを考へ見て及ばぬまでもいろ／＼と評論をつけて見るべきことでござる總て歌の善惡を見分る稽古これに越したことはなく甚だ學問の益になることであるを近世の歌人のごとく及ばぬことのみ心得居ては總て歌の善惡を見分べき眼の明かになるやうもなくまた自分の歌もよいかわるいかを辨へることも出來ず然やうではいつまでも只々宗匠の人にばかりゆ

たねもたれて居るは云ふ詮なきことゞもでござる都て近世風の歌人の如く何事も悉に描き學びかたでは生涯よき歌は出來るものではないと鈴屋翁は云はれたでござる

○偖また世には歌を詠むばかりでなく古き歌集共を始め歌書に見えたる萬のことをとき明らむる學びがある是を世には歌學者と云ふ歌學と云へば歌よむことを學ぶことではあれどもまづ暫く其學びするを分て歌學と云ったもので古へでは顯昭法橋などがこの歌學を專と致された人でござるその著し貽された書どもその說はゆき足はぬことが多けれども時代が古いに依つて用ふべきことも少からぬが近世三四百年以來の人々の說はかの近世風の愚かなる癖が多くある上に都て幼く描きことのみで實は云ふにも足らぬとゞもでござる然る處この間も申す通り契沖法師が出られてからこの學びが大きに開けそめて歌書のとり捌きは宜しくなッたでござるさて歌を詠むとをのみ專と致すとこの歌學の方を專とするとで二たやうなる中にかの顯昭を始めとして今の世に至つても歌學のかた宜しき人は大抵いづれも歌詠むかたは拙くて歌は歌學のない人に上手が多いでござる此はどうしたことじやと申すに專一に致すと專一に致さぬとに依てかやうの道理があると見えるされバさて歌學の能い人の詠だる歌が皆かならず惡きものと定めて心得るは非事でござるこの二た筋の心ばへを能く心得辨へたならば歌學びがどうして歌をよむ妨とはならうぞ若また歌の學びが妨となッて能き歌を得詠ぬならばそれは辨への宜くないからでござる然れども歌學の方は大概にしておいても歌をばよく出來るやうに致したいものでござる歌學の方に餘り深くかゝづらッては佛書赤縣書などにも弘く渉らんでは事足らぬわざじやに依て其の中に無益の書に手間を費すも多く有から此らの辨へもなければならぬと鈴屋翁が言れました

○さて歌と申すものは心の眞を云ひ出す物なることは右に段々申す通り戀の情ほど人の眞心を顯はすものはないに依て老たる若き男をんな俗と僧との差別なく都て戀の歌には人もあはれと心に徹へる歌とも が多くこの情は老て腰かゞみ明日に知らぬと云ほどに年がよつても止まぬものはこの眞心ぢやと昔から

物のあはれを知つたる人々の云ひおかれた事で其一つをいはゞ六百番の歌合に老の戀と云ふ題にて藤原隆信朝臣の詠まれた歌に「色に染む心は同じ昔にて人のつらさに老を知る哉」この歌を俊成卿の判の詞にげにさる事ときこゆ可レジ爲レル勝と云れましたが是は詠れた隆信朝臣もよく老の戀の意を詠み取られ其れを判せられたる俊成卿は素より物のあはれを知り盡された事故其戀情を察して然ることに思はれたる故かやうの判詞を致されたものでござる是は鈴屋翁の隨筆玉勝間と云ふものに翁か採出して其内の一條に記し置れましたが是また老の心の止事なく尤なることに思はれたる故のことでござる

○さて歌を詠むに古への人は其時の詞が直に雅やかでやッぱり歌に詠むやうな詞で有たる故よむにもさして骨もをれなんだけれども今は言もよこなまり惡くなッてをるから今がいま古の歌詞のやうに早速はゆかぬことで是は餘儀もないことだが段々かやうに聞なれ見なれるとつひ〳〵眞の古の歌も詠めるやうに何時となく出來ることでござる夫まではまづごうなりと今の言でその眞心を詠で見るが宜いでござる

夫を知つた人に直してもらふと歌になるとかく俗にも云ふ通り沙彌から長老にはなれぬことでござる夫につけてむかし藤原保昌があの通りの勇士だに依て始は歌なんども詠まれなんだと見えて或日朝早く起て庭前を見られたる處が梅の花が落てをる處がこの保昌の奥方はかの百人一首にも出て居る和泉式部で名に負ふ歌よみ故保昌も日ごろそれを羨しく思つて居たる處が今申す通り梅花が散て居るに依て此こそと思つてその詠まれたる歌が妙でござる「早朝におきてぞ見つる梅の花を夜陰大風不審々々」と詠まれたでござる夫を和泉式部が見てこれは歌詞にはかやうにこそ詠むものなれと申て夫を詠直し「朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」

玄道云此事は妄誕なる證をあげて梅園筆記に論るが如し

とやはらげたと申すことだがまづ初學の人の歌よむ心ばへはこんなものでござるどうでも歌をよむ氣さへ有れば竟には出來るわけでござる是につけてまたをかしいことがある是は篤胤がまだ幼く出羽の秋田

に居つたる時分半六と申ていまさか餅と云ふ餅を賣に來る男がありましたが夫が或時參て篤胤が父に物がたり致しますには咋日矢ばせへ參りました所が行がけには咲なんでをッた櫻花が返りにけしからず能くさきましたから是は只に通り過るでもないと存じて一首やりましたと申すとそこで父が夫はおもしろいどうやッたと申したれば「いきがけにさかにし花はもどりがけにさてもよくさいたをけとぢかばの木の花」と詠んだと云ふこの心はさかにし花と云ふは咲かずに有た花と云ふの方言でござるをけとぢかばの木はかの木具曲物などとぢぬふ皮はこの櫻より取るが故に申たのでござるそれをきいて父が腹を抱へて笑たことが有て篤胤も兒耳に今に覺えて居るでござる大かた初心の歌と云ものはまづこんな物でござる此心ばへを何のこともなく雅びな詞で詠さへすれば歌になるたゞ言の俗と雅とのちがひ計り誰とても物にめでる心は同じことだに依て昔人のやうに歌は詠めさうなものでござるこの雅俗のことは本歌ばかりでもなく世俗のはやり歌でさへ少かづゝ雅俗がある譬へば今やうの潮來ぶしの文句に「逢て話は山々有れどまさか顏見りや口へ出ぬ」又は臼挽き歌の文句に「あはで曇りし心のかゞみ逢てはらさん疑ひを」「よるべなき身は夢こそ賴めうつなつま戸を夜のあめ」是らは同じ俗の歌でも詞がやさしくて面白いけれども彼のけん女ぶしなどの文句はいやしくて聞に耳へさはッておもしろみが薄いでござる夫は譬へば「けん女見る目は糸より細いおいら見る目は猿眼」または「ゆんべ來たのを猫ぢやとおシやるねこが下駄はいて來るものか」是らは俗の中にもまた俗な文句でござる然れども意はどちらもよう聞えて戀の心の眞は能く見える詞の雅俗はこれらで辨へるが宜い

○さて世の歌學者のもてあつかふ物に和歌三神の像と申すが有る夫は住吉。玉津島。人麿この三社を申すでござるこの事はいつの比より始まッたと申すことは詳ならぬことでたゞ假よりなことは藤原基俊卿の悅目抄と申する書の末に藤原爲氏のおく書があッて次に起證文が記してある其文に元者秘書非二賢子一者不レ可レ承云々もし其外の人に傳レ之者住吉玉津島人丸赤人殊に下照姫素盞烏尊の惡みを蒙りて今生には長く求むる處の六義にまどひ後生は必いとふ處に

三途におち候はん依レ之起證文之狀如レ件とあります
がこの文には三神にかぎらず赤人も下照姬も素盞烏
尊も有て六神あるが後に是を約めて三神と致したも
のと見えるでござるさてこれはかの南部神道の演說
に申したる通り佛家で阿彌陀觀音勢至を合せて三尊
と云ふその三尊の彌陀から思ひついて三社の託宣と
云ものを造て天照大御神春日大神八幡大神を本尊と
たて夫からの思ひつきで歌學者流の方でも夫を眞似
てこの和歌三神と云ことを始めたものと見えるでご
ざるさて右の悅目抄のおく書を記れたる藤原爲氏と
申すは定家の中納言の御孫爲家卿の御子で弘安八年
八月に出家致されて法名を覺阿と云はれた人でござ
るこの弘安と云は當文化八年からは五百三十年たら
ずになることだがさすればこの比から住吉玉津島の
神をも歌の道にかけて申したことゝ見ゆるでござる
然れどもこれは甚承け引きがたいことでなぜと申すに
まづ住吉神社は攝津國住吉郡に在てその祭る神は底
筒男命中筒男命表筒男命と申して元來海を知看す神
で御本體は海宮に坐ます神でござるさてこの三柱は
伊邪那岐命の阿波岐原で御身滌あそばされたる禊り
御出來遊ばしたる神等でこの三柱へ息長足姬命後の
御諡神功皇后を合せ祭つて住吉四所明神と申すでご
ざるこの神功皇后を合せ祭り奉る故はこの姬命の三
韓を御征ち遊ばさるゝ時にかの三柱の神の御力を御
そへあそばして神功皇后の御艦を御守護あそばし風
波のわざはひなく安らかにかの新羅國の中央まで波
の打あがる程に御艦の勢ひつよくかの國王どもが畏
む惑つて其後長く御國へ使を奉つたることの謂に依
てのことでござる依てこの住吉神社は外國をしづめ
給ふことまた外國へ舟出などのことを專と御守りな
さるゝ神で歌の神に祭り奉るは當らぬことでござる
夫よりは此神は軍法の本を知看す神と思はれる樣な
る證據があれどもこゝでは紛らはしき故に云はずこ
れは武道の講說の時に委しく申ませう夫をどういふ
緣から歌の神と祭るやうに成たことだと考へた所が
どうも知れませぬが是は伊勢物語にむかしみかどす
みよしに行幸し玉ひけり「われ見ても久しくなりぬ
住吉の岸の姬松いく代へぬらん」おほんがみげぎや
うし給ひて「むつましと君はしら浪瑞垣の久しき代
よりいはひそめてき」とあるがこの事より思ひつい

て住吉の神を歌の神としたものであらふかでござる然れども伊勢物語も實に古き物ながら虚實混雑なる物で夫にむかし帝とはあるけれども何れの天皇の御事か詳ならず殊に帝の御歌にやとあるわれ見ても久しくなりぬと云ふ歌は古今集にも出てあるが雜の部にをさめ置れてよみ人知らずとあれば慥かならぬことでござるまたすみよしの神の御形ち現はされてむつましと君はしら浪瑞垣の云々と云ふ歌を御よみなされたと云ふこともたとへ實に住吉の神の御歌にも致せ右の帝の御歌と云からしてかやふの相違があるに依てめつたには信じられず殊に住吉四所の内いづれの神が現はれさしッたことか是もおぼつかないこと今の二條家冷泉家の新流では伊勢物語をば全篇盡く實錄として信じらるゝことながらかの書は中にはわざとつくりこしらへたる箇條どもが有て文と趣向は物のあはれを知るべき愛たきものながら事實のことに於ては甚だ深き所以の有ることで大きに取捨のいる書類でござるそこらの勘辨もなくこゝから思ひついたことかと思はるゝでござる○偖これに付て世人のよく知てをる古事に唐の白樂天が御國の人の智恵を計らんとて渡つて來たと云ことがある其時に住吉大明神が老翁と現じ釣をたれておはしたる處が樂天は船をよせて「青苔似レ衣懸二巖肩一白雲似レ帶廻二山腰一」と詩を吟ひかけたる處がかの老翁が歌を以て和へて申すには「こけ衣着たるいははさもなくてきぬ着ぬ山の帶をする哉」と仰せられたと云ことがある處で白樂天が大に胆をつぶして賤き漁をする翁でさへかやうのことだに依て中々日本の者には及ぶことではないぞやとあきらめて其所から直に漕歸つたと云ことをよくいひますがこれ以て妄作の説で白氏文集と云は樂天が詩文を集めたるものなれどもこの詩はないまた御國へ來たと云ふことも決してなくまた御國の正史實錄にもないことで是は大江匡房卿の説を錄したる江談抄と申すがある夫に「白雲似レ帶圍二山腰一青苔如レ衣負二巖背一」「こけ衣着たるいはほは眞廣けんきぬ着ぬ山の帶するはなぞ」と有て都在中が作と記してあるこの詩歌を所々あらためて住吉の神と樂天の贈答に云ひ傳へたものでござる○また古今著聞集に後徳大寺左大臣○○公の住吉社にての歌合に社頭月と云ふ題にて「ふりにける松ものい

はゞ聞てましむかしもかくや住吉の月」と詠れたる歌にこの神の御めで遊ばして左大臣殿の筑紫の領所より年貢を送れる舟の津國の海で惡風に遇ひ既に入海せんとしたる時に住吉の神御形を現じて御救ひなされたと云ことが有るが是もたゞ歌に御めで遊ばしたと云ふ分のことで歌の神と云ふ證にはならぬ是を歌の神と申上るならば神は素より人も物のあはれを知たるをばみな歌の神とするやうになッて甚以ていかゞのことでござる

○さて是は序だに依て申ますが俗にはすみよしと申すが正しくはすみのえと云ふべきことでござる古くはすみのえと申たもので吉の字はえの假名にかりたものでござる是はこの住吉ばかりでなくいま吉野と云ふ處をも古くはえしぬと云ひまた近江の比叡山をも古くは古事記を始めひえの山と云を今書く處の叡の字はえの假名に遣つた字でござる處を段々横訛つてひえい山と云ひまたすみのえと云ふえに吉の字を書と同じく日吉とも書て有つたる處を住吉を住吉と云と同じことで日吉と云て今は比叡山とやうに漢風の名にきこえまた日吉三王などゝ云て根から本をば失つてしまッたでござる斯やうの訣をも能く心得ておくが宜いでござる

○さて玉津島この神社は紀伊國海部郡若の浦に在て祭る神は袋草紙などに見えたる古き俗說に衣通の姬御子と云ひ始く此俗說を佐けていはゞこの姬御子は允恭天皇の皇后忍坂大中津姬の御妹御子でその御貌が殊の外麗はしくその御美しさが御衣の表へ徹て有たる故に時の人是を衣通姬御子と申上たと申すことが日本紀にある是を俗にそとほり姬と云は宜くないそとほしの姬御子と申すべきことでござるこの祭神のことを本居先生の玉がつまには國人岩橋秀榮と云ふ人が神功皇后ならむと云りとてその說を擧られましたが如何であるかなほよく考て定めやうでござるさてこの玉津島の神を歌の神と致すことはどう云處から思ひついて始めたことだと思ふに是は何のこともなく若の浦と云處から思ひ付て和歌の神ときめたことゝ見えるでござる然れども歌を和歌と云ふは一向のちのことで若の浦のわかは若いと云ふ字の意だに依て是はよしもなき牽強附會でござる倚その御歌と云ふは「立かへり又も此世に跡たれん名もおもし

ろき和歌の浦浪」とあるが是は日本紀に見えず殊に衣通の御子の御歌の調ではなく甚だ後世の風體で尤も後世のいかなるをこの者が作つたる僞作の歌に相違ないことでござる夫はこの歌の上の句は盡く佛家の説を以て作つたもので立かへりと云はかの謂ゆる輪廻再生でこの世は今の世と云ふこと跡垂れんと云はかの垂跡のことで是はみな佛家の詞でござる衣通の姫御子は允恭天皇樣の御代に坐ましたること故佛法の渡らぬ百二三十年程先の御方ゆゑ佛語で歌を御詠なさらうはずもなしかやうのことも知らんで後の世人が猥りに僞作致したる歌を何の辨へもなく尊信して玉津島の神の御歌だとおもひまたこの神を歌の神だと思ふは文盲なことでござる實はこの歌本末かけ合はず云はゞかッぱの屁を見たやうなつまらぬ歌でござる

○さて人麿社。是は石見國の海邊松林の中に在て延喜式神名帳にこの社はなくいはゆる式外の神だが是はもと石見を治られたる國司などの私に鎭座いたしたものと見えるでござる然れども近く享保八年二月正一位を御授け遊ばして正しく公の神社となッたでござるさて人麿は古今集の序にも歌のひじり也とある通り實に歌の名人で有たに依て歌の神と祭ることは聞えぬ事ながら「ほの〲と明石の浦の朝ぎりに島がくれ行く舟をしぞ思ふ」と云ふ歌を書て是を人麿の歌だと申すが是は誤りでござるかつ俗説にこの歌の詞が過去現在未來三世佛法の妙理をのべて是に深秘口傳あり凡人の及ぶべき歌でなくこの歌をよまれたるに依て歌の神となられたのだと申すが人麿の歌は盡く萬葉集に載せられて其外に人麿集だの何のと云にあるはみな後人の致したことで萬葉集になき歌のあるはみな取に足らぬでござる尤もこの歌は古今集の羇旅の部に隱岐國に流されける時に舟にのりて出たつとて京なる人の許に遣はしける小野篁朝臣「わだの原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつり舟」と云歌が有てその次に題しらずよみ人しらず「みやこ出てけふみかの原いづみ川川風さむし衣かせ山」と云歌が有てそれに並べて「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」この歌は或人云く柿本人麿がなり。とあるが是は貫之主の心にも誰が歌と云ふこと諸に知らざりし故に

この或人の説をもまづ捨ずに記しおかれた分のことで小野篁の歌の次に記されたるも心有てのことでござる夫はこの歌小野篁のわたの原八十島かけてと云ふ歌とおなじく篁のよまれたると云ふこともありて夫を心に思ひて其ほどいまだ諦(さだか)には知れなんだ故に何となく篁のわたの原の歌の次へ記された事と見えるでござる實に是は篁の歌に相違なく則ち今昔物語の第二十四卷目世俗の部に「今はむかし小野篁と云ふ人ありけり事ありて隱岐國へ流されける時船にのりて出立とて京に知りたる人のもとにかくよみてつかはしける「わだの原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよ海士のつり舟」明石と云所に行て其夜やどりて九月ばかりの事也ければ明ぼのに寐られずしてながめ居たるに舟の行が島がくれするを見てあはれと思ひてかくなんよみける「ほのぐ〵と明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」と云てぞ泣ける是は、[illegible]歸りてかたるを聞つたへたる也」と見えてあるされはこれは篁朝臣の歌に相違ない處を貫之主の古今集を撰集仰せ付られて記さるゝ時分は詳(さだか)に知なんだ故よみ人知らずと題し或は篁とも或は人麿とも云に依て篁の歌の次へ出し左の注には或人のいはく人麿がの也と云ふことをも記して置れたものでござる夫を後世の人が強て人麿におしつけ羇旅の歌を佛說に取なし牽強附會かッぱの屁を見たやうな僻說を造て作者の本意を失つたものでござる殊に古人の歌と云ものは時代のふりや其人のしらべかたも各々違つて是は決して人麿の口調でなく一體のしらべも人麿の時代よりは後のさまだと縣居翁鈴屋翁も共にたしかなる考へが有るでござるさやうのことをば露しらず文盲千萬なることを云つて人を惑はすが俗の歌學者流の癖でござるされば人麿はこの歌を詠んだに依て歌の神とするなど云は大なる誤りでござるもし人麿は歌をよく詠れたに依て歌の神とすると云ふならば夫は隨分聞えてをるでござる都て都の神によらず何の神くれの神と云ふは上古に其事を始られたる神を始めの祖として何の神と申すことでござるされば歌の神は須佐乃男命を祭り奉るべきことでござる夫をさし置て俗說に惑ひ住吉玉津島を歌の神と申すことは當らぬひがごとで其內人麿は歌を始たる人ではなけれども歌をよく〳〵詠れて貫之も人丸は歌の聖だ

と云れた程の人故歌の神といはんも筋のないではなけれども須佐乃男命は伊邪那岐大神の御子天照大御神の御弟に坐ますと云ひ殊に人麿よりは何萬年か先の神様だに依て實に歌の神は須佐乃男命で事足りそうなものでござる人麿をもし祭らば須佐乃男命の末社などには祭りもすべきことでござる

○さて漢學者の作る詩と云ものは則ち赤縣の歌で夫故これをからうたと云ふ然れども御國の歌とはそのかみ出る心ばへに違ひがあるこの差別はとくと心得てをらねばならぬ筋で鈴屋翁も論じられまた尾張の横井千秋と云ふ人もこのわかちを論じたる物がある夫を取合て申さば一體歌は先日も申す通り人の心に思ひあまることを詞に述謠つて欝を散じいぶせさを忘るゝ爲のもので詩も赤縣州の歌だに依て其趣がもッぱら同じことで無けりやならぬ道理でござる處を今これを比べて考へたる處が其趣の大きに異なることが多い夫はいかなる故だと申すに國の風俗また人の心の同じからぬが故でござるまづ人の心と云ものは大かたは何所も〳〵同じ筋のものなれども時世に隨ひ國々に依て異なることが多い中にも御國はいつも申す通り天地の限りあまねく御照しあそばす日の大御神の御本國でその御末の天都日嗣が天地と共にとこしなへに御傳へなさるゝ御國だに依て國風正しく人の心も直きことは萬の外國にすぐれて居る處を中ごろより諸越の國の書をあまねく習つて其國風を直似ぶことになッたる故世のならはし人の心もかの赤縣州の風に移つて正しからず直からぬことも大分まじッて來たでござる此わけ故古の歌は心の直かッた儘に思ふ筋を隱すことなく詠だもので夫が即ち眞の歌でござる處を後の世になッては自から一つの藝のやうになッて多くは題と云ものを設けて詠む故にただ古人の歌詞にばかりならッて己が今の心には更に思はぬことまた身の上にあづからぬことをも作りかまへて詠むことになッたる故に眞の歌は少く作り物が多く成たものでござるさて諸越の詩も古へと後の世と代々に移りかはり來たることは歌と專ら同じことなるうちに歌と詩との違ひのあることはかの諸越は上古より致して國の風俗もみだりがはしく人の心のさかし立て僞の多い國だに依て詩も後の世のは更にも云ず質朴であッた上代のといへどもなほ思ふ心

の眞をば掩ひかくして表方を偽りかざることが多いでござる皇國の歌も中比より後のは古へを學んで意をも多くに作つた物ではあるけれども我が上代の人の心の眞の儘で有たる歌の意を次々に習ひ傳へて詠ゆゑに作り事作ゝ實を學んだ作り事で作り言がやがて人の眞の趣でござる處を赤縣の詩はかの偽を習ひ傳へて作る程にいよゝ益々偽の上の偽に違ひないでござる然るを世の人此理りをも辨へず詩はその趣の尤々しく賢げなるを見ては戎國をば國のならはし人の心も勝つて居る樣に思ひ歌はたゞ物はかなく雌々しきやうに思ひ詩には劣つてはかなきあだごとの如く思ふと云ふは戎國の詩の表の偽に惑つてのことでござるすべて人はいか程賢くても目に見えぬ心のうちはみな雌々しくはかなきことの多いもので諸越の詩の如く雄々しく賢い物ではなくて賢氣に聞ゆるは作り飾つたる表べの偽事でござるいでや其眞偽の證を云はゞ歌は神代の昔から致して男女の間の情を主と詠で戀の歌が殊に多い此が眞の儘なる一つの證據でござる後の世と云へどもなほ戀の歌の多いのは是また古の眞をまなぶ證據でござる然るに詩は上代の戀の詩もかの古く詩經など云ものに記してある中には隨分あるけれども中比からは閨怨などゝ云はあるけれども夫はたゞ婦人の情を設けて云つたばかりのことで男の戀の詩とてははか〴〵しい書には絕て見えぬがそも〳〵赤縣國は殊に婬犯のことの甚しい國なるが其詩を見れば婦人のみ戀はして男は戀情のないとかと見えるは甚しき偽ではないか是が偽でなくて何だらう抑々戀は愚なるも賢きも遁れ難き自からの人の情だに依て其歌の多いのが實のことで歌は則ち人の情の眞のさまを云ひ出るものなる證據でござるこの一つの差別を以て萬のこと皇國と諸越との眞なると偽なるとをわかち知るが宜いでござる戎國の道は言にこそ誠々と云ひたつるけれども夫は口で云ふ計り實の處は聖人賢人と云はれたる者共のしわざと云どもたゞ表方を作れることのみが多くて其偽を以て人をも教へたてんと致すが故に自づから世の人の爲業が彌々偽のみが多くなツて中々に身も家も國も治まり難く亂るゝことのみ多いでござる然るを皇國の道は上も下も直き誠の心を以て和ぎ合ふ故に言痛く教ふることは無れども自づから感たく治つた

ものでござる抑々古へ人の直く眞で有たる證は内大臣鎌足公の歌に「我はもややすみ子得たりみな人の得がてにすとふやすみ子得たり」と詠れたことが有る是はこのやすみ兒と云ふ顔よき女はみな人のけさうしけれどもとかく從はずして居つたる處を鎌足公が夫を得られて限りなく喜び思はれて詠れたる歌でござるまた舍人親王の御歌に「ますら男やかたこひせむとなげゝどもしこのますらを猶戀にけり」と詠れましたがこの御歌の意は我はますら男なるにかく雌々しく片戀をばすべきことではないと我ながら嘆けどもなほ戀しくて堪がたいと云はさて〳〵我はしこのますら男にて有けるよと云ふの意でござるこの御方々は申す迄もなく長々しく甚だ貴き御方で坐ましたけれどもなほ實の心はかくの如くにてその情を覆ひかくすことなく僞りかざらんで有の儘によみ出られたものでござる是は萬葉集に出たる歌で二首とも決して後世の題を以てよんだ歌とは違ひ實に其事有て詠れた歌でござるなんと諸越の人はかやうの實を顯はしたる詩は作らうかそりやないことでござる然るに其實事を記たる書類を見ればいやはや大違ひなことで強きことは鬼神を欺きさかしきことは聖賢と稱した人々にも戀情の深く甚しいことはいくらもある中にも彼の項羽などはその力山を拔くとも云て強きこと比びなく色氣もない男のやうに思はれるともその妾虞氏に別れる時のことなどを思へば言ふに言れぬ樣子なるが實にこれが眞の人情でござるこの項羽と云人はつまらぬことで死たなれども隨分器量もありて惜からぬ人でござるまた後のことながら俊成卿の歌に「戀せずは人は情のなからまし物のあはれもこれよりぞ知る」と詠れたる如くものゝ哀を知ることは戀に及はなく夫ゆゑ歌の眞を云ひ出すは戀の歌に如はないでござるかやうに云はゞ人に戀せよと勸る如く思ふ人も有うかなれどもさやうの訣ではない昔も今もこの戀のまどひに依て身をはふらかし家を亂し國を亡すものの數知らず多いことは誰も〳〵能く知て居ることで夫は今更に云ふ迄もないこと然れども諸越などの教の如く是をかたはらより強て誡め止めんとするは譬へば溢るゝ水の源を捨おいて流れの末を堰とめんとするが如くにて中々なるいたづらことでござる然るに物の哀を知ると云ふはその源よ

うよく導びく故に末は是こいやねども溢るゝ事のないやうな物でござるそも〳〵國の侯たる人などの戀にまごッて政を怠り下のいみじき嘆きとならんに夫を御止めなされと側からいかに諫めたりとも敎へたりとも更に止まる物ではない處を物のあはれを知て居らるゝ侯はいましめずとも敎へずとも人の爲國の爲に惡いとはするに忍びぬ心のあるは自づから然やうのあしきふるまひは爲ぬものでござる然るに諸越などの世々の王は物のあはれを知るがための諫き故か敎へはきびしき國なれども中々に戀にまごッて横さまのふるまひを致し國を失つた者がかの唐の玄宗をはじめ其外數しらず多いけれども御國の古へ人は戀の歌は詠んだけれども戀にまごッて惡きふるまひをした人は諸越のやうに多くはないでござるこゝらを自分の國の風と比べて考へたればこそ魏志と云ふ赤縣の歴史にも御國のことを記して其風俗不㆑淫とさへ云つたでござるまた今の世とても諸越の敎へを學び詩をも作る人は戀はせぬと云でもなく歌よむ人は歌よまぬ人より戀に溺るゝことの深きものでもない是は物のあはれを知ると云ふ益のある故でござる物のあはれを知ると云ふことは先日も申す通り萬の事の心を辨へ知て世の人の思ふ情のさまを悟り知て夫を我が身になしてあはれと思ふことを申すでござるされば是がすなはち諸越書にいはゆる仁と云ふものだ然るにかの國人は仁と云は强て世の人を懐け名を求めて己が大きなる利を得んためにするが多くて心から出たる實の仁は甚だ少いでござるかの孟軻と云たる者の國々の侯に王道仁義とて勤めたることなどもその說である云ふことどもを考へ見ればみな利の爲の王道仁義で實ではない大かた是らを以てかの國人の云ふ說共は萬に僞の多き程をもおし度り知が宜いでござる夫は僞りせよとは敎へぬけれ共僞を以て敎ふる故に其を學ぶ者も自づから僞りを致すは實は然るべき理りで都て赤縣州の敎へは表べの僞りを以て治めんと致す故に中々に國は治りがたいが歌もて物のあはれを知と云ふは利を得ん爲にも非ず名を求むる爲にもあらず心の底からしみ〴〵と眞にあはれと思ふすぢを知るに依てうはべこそは果なきたはれ事の如くなれども自づから人に眞を敎へて上も下も和ぎ合ふ道だに依て云ひもてゆけば身を治め家

を治め國を治むる道の本とも云ふべきものでござる

○さて僧法師の戀することは堅くあるまじきことで有ながら歌の道では是を嫌はず御代々の御撰集にも僧の戀歌は多く見え今も憚らず詠むことはいかにと申すに鈴屋翁の言れますには婬慾は佛のいみじき戒だに依て法師の殊に深く愼むべきことゝは誰も／＼存じたることで今もなほこの筋に迷ふをば世にあさましきことに致すことでは有るなれども然やうに善き惡きことの定めはその道々にてこそともかくも云ひあつかふべきことなれども歌は筋の違ふことで必ず儒佛の教へに背かずとするわざでもないからその爲ざまの善き惡きなどはとかく云ふべきことではないたゞ物のあはれを專として心に思ひあまる事はいかにも／＼詠出るが道でござる法師は世を遁れて佛道に入たる上はその教を重く守つて假そめにも亂れたふるまひはあるまじきことではあるなれども夫はなほ顯て忍び愼む表方の身の行ひがさうだので其をこらへ難て內々は彼處へ灸などすゑるも有さうでござる法師だと云て俄に俗と人情のかはる可きものではなく心の底まで潔く戀の思ひのなくなり果ることこは有まじくさすれば色を思ふ心もなけりゃならぬ是は素より人とある者の性でござ[illegible]り有べき筈のことだに依てさしも悲べきことでもなくまた罰むべきことでもなくまたとりはづしては有まじきことでも無いよしやこの過ちを爲出ることが有たればとて生て居る涯りは有りさうなことでこりやさしも憎むべき程のことでもないでござる釋迦の是をきつく戒めたのも人はどうせ免れ難く惑ひ安き故で禮記に飲食男女は人の大慾存すと云てあるもみな斯やうの訣でござる然るを僧とだに云へば心の底までみな木偶土泥人の如くなる可きものだと人も思ひ自もそんなかほつきは致して居るけれども夫は中々に罪の重かるべきことでござる今その心ばへを設けて云はゞ世に貴き聖とも云べき名僧も有らう時に夫がいみじく美はしく盛なる花や紅葉の本にしばし立寄てあなめでたの花やもみぢよと見もし思ひもする所を先達ても申す通り道の邊りなどで面むかしく美はしき女に行き逢ては目も見やらずに過行くが此二つを思ふに紅葉も花も同じ此世の色香だに依て僧の輩は少かも心とむべき事ではなけれども殊に執念の止まる程の事もある

まいに依て法師もすこしは夫に感じたりともさのみ科あるまじく女の色は殊に人の心を迷はして必ず後の世の障りとなりぬべきもので世棄人は更に目にも觸まじきこと故にこの花もみぢをばあはれと見て女をば見向きもやらぬ法師かのひじりのふるまひはいと貴いことでござるされど心の底から實にさうで女には目も心も止らぬと申すならば夫はいみじき僞でござるなぞと申すに花もみぢの色香は愛たいの美はしいのと云た所がなほ限り有て人の心に染こと淺く人の色は底もなくかぎりもないもので心にそむこと甚だ深い昔から男女の色に命を亡なッたるものは幾らも有て計へ盡されぬことながら花やもみぢの色香に命を亡なッたと云は聞も及ばぬことでござる斯程に訣のわかッたることでその限りある色香の淺き花もみぢをさへ感る心に限りなく深く心に染む女の色をばどうして愛たいと思はぬことが有ませうぞ是は譬へば十兩の金は得ま欲しく千兩の金は欲くないと云やうな訣でさやうの道理は絶てないことでござる美き女を見ても少も心を動かさぬならばそりや眞の佛かさうなくは鳥蟲にも劣つてむげに情なき石木のたぐひと云べきものでござる人とある中にも殊に法師は妻を持たずこの慾を常に愼むものだに依て彌々心には思ひの鬱ふるべきことで俗よりもまさッて戀の歌は多く哀に出來べきことでござる近い處が常に呑つけたるたばこを絶ものとか云て止めて居るとやるせなく呑たく戀しくなる此らを考へ合すが宜いでござるかの志賀寺の上人が京極の御息所を戀奉りその御手を取て萬葉集に大伴家持卿の詠おかれたる「初春のはつねのけふの玉はゞき手に取るからにゆらぐ玉の緒」と云ふ歌を云ひ出したと申する古事なごが法師の心ばへに叶つて哀れなるしわざでござる然やうに心の中に深く積つたる妄念をも歌に詠出て少も思ひを晴したらば夫こそかの發露懺悔の心にもかなひよし叶はぬ處が歌は歌で右申す通り儒佛の道とはとんと訣が違てをること故にその定めを以て彼れ此れ云ふべきことではないでござる

校者云以下稿を闕たゞ惜むべきなり

志都の岩屋講釋本奥かき

石見のや静の岩屋てふ御書はもまなばしら吾が學びの祖と坐す玉しき平大人の著はし給へる御書にて其著はし給へる書の千巻餘り有が中の一つには有れど靈幸ふ神の御靈の殊更にそはりたりけむ千尋の海の底寶みたからぬしと愛尊ぶべき御書になむ有けるさるは此御ふみよ奇魂のくすしの道はも皇産靈の大神より出て大穴牟遲少彦名二柱大神の請繼して即其静の岩屋におはしつゝ治め給ひ弘め玉へる道にして御國のは更なり諸越の謂ゆる神仙の道に傳ふる醫藥方術も又此二柱大神の傳へ給へるなる事をさへに詳に考へ明し給へれば此道學ぶ輩には此の御書にしく物なき故なればぞかし然はあれど此御書よしたゝかなる御書にて其草稿もいまだ全くは調はざる事なれば弟子たりといへども弘く拜み讀む事の叶はざるをいかにせむ然るを爰に去し文化の頃ほひに此道の大意とて師の講聞せ玉へるを其儘に寫取たる御書二巻有上の件の大き石屋に比ぶればいと小けくはみゆる物から尤もくしびなる御書にて近くは人の體内をも見明し遠くは天つみかげ押伏とも見の及ばざる萬國の事等をし書著はし給へれば目にこそはさゝけく見ゆれ實はいと大きなる搆へにてはたいと便よき作りなりけり然れば此石屋をし櫻木に彫なして千世に朽せぬ御寶と爲さましかば神等の眞靈の幸蒙れる百千が一つも報い奉る理ならめとわが學の友なる早田弘道に語らふに本より心利きますら男にし有ければ我もしか思へる事なりとて一速く諸なひて頓て氣吹舍に願申て静の石屋の岩戸をし斯しも開き初たるは弘道が手力もたる功にぞ有けるかゝれば今より後は此道慕ふ人々の常夜行惑ひもなくあな面白あなさやけとめで悦ぶ有狀を己も共にみちのくのいはではいかでと有のまに〳〵かく打出るものは弘道と同じ伊達郡にて藥の道にゆかり有紫匂ふ藤田里人奥山正胤

志都の石屋講本はしかき

現身の世にある。吉き事凶きこと。嬉しきこと悲き事の多かるは。言も更なる事なれど。其が中に病ばかり。悲しきものは有る事なし。然るにその病の状。許多ありて。自づからに癒べきも有り。癒べからざるも有り。又その療する方の當否によりて。生死の定まる事有るは。又言も更なり。其を爲す者は誰ぞ。世に在る醫師たちにあり。然れば醫術は。尤もやごとなき事にて。嚴重に爲ずは有るべからず。扨常人は悉に。醫を爲には及ばざれども。事ある時に。醫を選まむ道を知らずは有るべからざる事。是はた言も更なり。爰に我道の學びの親。氣吹舎の平の大人はも。いと若くおはしゝ時より。由有て醫の道を學び。壯の年頃には。むねと醫業を立られしを。其後は。古の道の學の急がしさに。其業をば止られつれど。其盛に勤られたる時にしも。世の中の俗醫輩の。其風儀の宜しからざるを。慨み憤りて。いかで此を揉直さむの心にて。しづの石屋ちふ書をば著されたり。抑醫道の本はしも。久堅の天津御祖の大神の始め給ひて。大名持少彦名二柱の大神に傳へ給ひ。それより弘く。天の下萬の國々迄も。教へ及ぼし給へる事なる由は。師の委く皇典を始め。諸越の書どもをも考へて。懇に説示されたるがごとし。然はあれど。此石屋はしも。いとも太じき書にして。己がごと力なき者の。容易くゆるがし出べき物にも非ざるに。況て其草稿も。全くは成をへざる事なれば。同門の者といへども。弘くは見せ給はざるを。いかに爲ましと。歎きてのみも過つるを。其講説の本はしも。はやく文化の中頃に。師の眞盛りに。この道講聞せ給へるを。御許に侍ふ弟子たちの。聞書したるを。後に師の見ましして。加筆などし給へる也けり。されば此書は。いと簡易にして。其旨よく通え。はた俗語にさへ書たれば。誰しの人も。辨へ難き處なく。一度も讀見む人は。忽ちにこの道の本をもこゝろえ。巧拙き醫師の撰みも出來ぬべし。はた世の俗醫輩の。良からぬ習弊も。自づからに改まりなむ。あな尊き書なるかも。いとも奇しき道なるかも。かく思續くる時しも。我學びの友。奥山正胤が。同じ心に思ひおこして。いかで〳〵と誘もふに。魂相つゝ。やが

て此よし氣吹屋に乞申して。刊本となし。世に示さんとするものは。道の奥伊達郡半田の里人。早田弘道

志都能石屋講本 一名醫道大意 上之卷

大壑 平田先生講說 門人等筆記

さて今日より申す事は。醫道の大意でありますが。其れに付て。篤胤が常申す五箇の大言が有る。それは。一つには。儒者儒道を知らず。二つには。佛者佛道を知らず。三つには。神道者神道をしらず。四つには。歌學者歌道をしらず。五つには醫者醫道を知らず。是でござる。又篤胤が口からは。申にくい事ながら。吾が黨の古學者流に。古學の本意をしらぬ者も多いが。是はさたの限りなることでござる。と申すと。甚の大言で。痛く人の耳に立つことながら。古き諺に。目くら千人。目明き千人と申すことが有れども。伊勢貞丈先生は。そんなことぢやない。目くら千人。目くら千人ぢやと云れましたが。此れはいかふ劇言のやうだが。隨分さることで。世に眞の道の行はれ難き處を。慨み思ふ心からは。かやうの憤り小言も打出らるゝ物でござる。其は諸越の孔子なども。幾らかいきどほッて。大言自負を云ひ出したることが有る。これは彼平賀源内が申したる如く。

これも世に。人のしりての無きことを憤つて云たる言に。今時世上に目が無ければ。能ある鷹も。おさなしう爪を秘せば。鳶かと思つて。たはけどもが。茶にしたり馬鹿にする故。謙退辭讓は間に合はず。と云たる通りの訣で。少かは大言も言ねば。人を感發させることは成らぬ物でござる。彼の孔子も。憤せざれば啓せず云々と云たは此のことでござる。但し其れもそれだけのことを。自分に修し得た上で云たきもの。又かの童謠にも。とても爲るなら大きなこと爲やれ。奈良の大佛のけつ爲やれと云たやうに。ぐッと大きなことを致したい物でござる。さて醫道は。俗にも技藝小道の如く申す者も多いが。實には甚だむづかしい事の。明らめ難いものでござる。夫はなぜと申すに。此には醫のことを心得て居られる衆も有ませうが。御案内の通り醫業と申すものは。甚だのむづかしいもので。實には大造いやな物でござる。なぜなれば。人の生死にあづかる事ぢやに依てのことでござる。此れは申さずともなことながら。生とし生る物。何れか命を惜まざりける。とこれは貫之ではない。篤胤が申すのじやがさ。斯様のわけ故。醫を業と爲る程の人は。誰もこゝを心掛て。心の及ぶ限は。せんさくしつめて置るゝは知れたこと。さすれば此れは篤胤がちョこざいに。御醫者方へ對して。醫療の心掛などは申すべき筋でないから。此れはとんと申ませぬが。但し醫師の業の因て起つた源などのことは。こりや古への學びを委く致したる上でなくては。容易くたどり知られぬことで。此れらは甚だ心得に相成ることゆゑ申まする。さりながら是とても。世間の人情として。當時のことにのみ目が付て。其の源の因て起る所以などを申すをば。迂遠と云てまはり遠いことのやうに思はれ。聞れる內に。欠まじくらなことも有ませうが。左にも右にも今日の處は。こりやたゞ。御醫者方へ御聞せ申さうとての演説ではない。と思はれるが宜いでござる。但し世には眞の醫者は甚だ少く。盜人醫者が多く有るに依て。其のぬす人醫者の訣をば。篤胤が心付たるあら〳〵を申ませうから。願はくは用心して。彼等がむれに入らぬやうに。是は致したい物でござる。扨これは。古道の大意を演説の砌から。毎度々々申す通り。世の中のこと。何事に依らず盡く幽事で。

夫は四季。また晝夜のゆき替り。世の中の亂れ治まり。また雨ふり風吹きばかりでなく。人の現に致すこと〻ても。約まる處は。皆神の御心。御所爲に漏る〻ことなく。此れは鈴の屋翁が。人はたとへば人形の如くで。神は人形を遣ふ人間の如くの訣じや。と云はれたる通り。夫に相違もなきことながら。至て意味ふかく。唐の後の世ざまなる。狡意說にかぶれて居る人は。今聞て今が今に。實に尤もとは思ひ取りの出來ぬことながら。古道の大意から。缺かさず聞かれた衆は。粗々も此らは承知して居られませうが。中途から聞れた衆などは。どう有りませうか。夫は夫として。右申す通り。何もかも世の中の諸事。神の御心と申すうち。醫の道などが。別して神の道に關る第一の訣が有ますから。其醫を業と致す者は。第一に神のわけ道を知らねば成らぬことでござる。と云へば。彼の末にのみ目が付て。源を思はぬ人は。いや扨こそ平田が。迂遠なことを云ひ出したりと思はれませうが。決してさうでない。此れは既に諸越の人も。唐の孫思邈などは。凡欲レ爲ニ大醫一。須三妙解ニ陰陽周易一。乃得レ爲ニ大醫一。若不レ爾者。如ニ無レ目夜遊一。動致ニ顛殞一。と云ましたが。此れは周易と云へばとて。何もかの占を爲る方を。知らねばならぬと云の訣ではない。しかし其易の出來たる所以は。未だ考究めざれども。元來聖人の作で。天地鬼神の道理を盡したる物なる上に。文王周公孔子らも。追々に增補訂正したることじやに依て。茲に因れば。事物の變化も。知らるることのやうに。云ひもし思ひもして居るに依て。醫を業とする者は。天地鬼神の道理を知らねば。目がなくて夜ぶら〱あるくやうに。どこぞでは跌きが出來る。危いことじやと云の意で。孫眞人はかやうに申た物でござる。此れは甚だ尤もなことで。實に明言でござる。去ながら。其易に書て有る理屈の說にすがッて。天地鬼神の道をも知らうと致すは。そりや諸越の如く。神代の古傳說を失たる國々の人こそ。事かけ代にさうも爲ずば。歟也にも幽事の訣をしることは出來まいなれども。御國は何時も申すとほり。神の本つ御國で。世の始め神の古傳說は。まつぶさに。殘る處なく傳はッて居るに依て。易に申たる處の陰陽の變化。鬼神の道理の。其の本はこれと。貞かに夫を學らる〻實物の神を。

しゃんと押へて。其の陰陽五行などゝ名を付たる物が。やがて神の御所爲じやと申すことを知て。事を致すに依て。其の實物を捕へたとどらへぬとでは。死物と活物との違ひが有て。いかう見込の違ふことでござる。其差別を少か申さば。まづ大抵の事しり人。及び漢風の理屈ばかりを云人は。たとへば雷は。陰と陽との相碾りて激するの聲じやと云ひ。風は陰陽の動くのじやなどゝ云て。唯陰陽と云をのみ。事事しく申すけれども。其の陰陽と云物を。死物とするか活物とするか。死物ならば。激して雷となる事もなく。動いて風となることも無いはずのことでござる。處を。或は激し。或は動くことも有るは。決めて活て居る物なると論はないでござる。旣に活物なる上は。其靈あること。是また論はないでござる。これ實物の神でなくて。何で有らう。若また陰陽は死物なれども。或は激し或は動くは。自然じやと云か。然らば其死物なる陰陽を。自然に動かし激さする。其物は何物じや。其死物ぢやと云ふ陰陽を激して。雷に鳴したり。動かして風と爲したりするからは。こりや決して活物の神が在て。然するには疑ないでござる。かやうの訣じやに依て。陰陽で。何もかもすむと思ふは非ことで。其の陰陽を陰陽たらしむる。實物の神ある事を知らねば。どッこいと踐まへた處の思ひ込みが。いかう喰違つて。扨こそ漢人の說。また夫れを信じて居る人の。言たり書いたりした物は。其のおんづまりへ行くと。云はゞ帯ひろ前の。無褌になッて居るやうな。取締らぬ說ともが多いでござる。其內にも諸越人は。眞の古傳說を知らぬが上に。生さかしらで。實物の神を得捕へず。其作つた書を見ると。臍の下から。ぐつ〳〵と吹出すやうな。笑しいことを云て。其極意には。陰陽とか大極とか云ことで。居りを付ておく。然れども其の陰陽の理屈を云たる周易にでも。すがらにやならぬ故に。そこで孫眞人もそれに依て。凡そ大醫たらんと欲せば。妙に陰陽周易を解すべし。爾らざれば。目なくして夜遊ぶが如く。動もすれば顚殞をいたす。とは云た物でござる。かやうに志した處は。實に醫を爲る者の本意とすべく。動かぬ處で。尤なることでござる。但し尤もでは有るけれども。陰陽周易と云たのは。返す〳〵も漢國に。神の眞の事實を知べき傳

なき故に。事かけ代に。其に依た物じやと云ことをよく辨へて。唯その心のみを取て。其の陰陽を陰陽たらしむる神の事實を。古學をして知るが宜いでござる。とかく諸越人の說く處は。實物の神有て。世の中の諸の事物を造化すことを知らぬゆゑ。其の神のなさるゝ事實の跡を。みな陰陽とのみ申すけれども。夫は非ことで。その陰陽をなす。實物の神あることを知た人は。或の儒者では。孔子ばかりのやうでござる。此訣は。先年著したる鬼神新論と申す物に。委く論じ置ましたに依て。其を見らるゝと。さらりと埒のあくことでござる。何にしろ神の實物なる事に。合點のゆかぬ人は。此方の說に。こゝかしこ疑はしく思はるゝことが有らうでござる。醫の業のことを申すなどが。別してさうでござる。

扨まづ神の實物なることを知たる上で。醫道の起る源をも知べきことじやに依て其訣をだん〳〵申さうが。先この人間の。各かやうに活動く處が。第一に靈いことでござる。但し是も。彼の陰陽の理に依れば。知れぬことは無いと云へども。其陰陽の奧に。其陰陽を陰陽たらしむる。甚も〳〵。奇靈に妙なる神が有るに依て。陰陽の理屈を付るのは末のことで。本を云へば。神の御所業でござる。夫れ故に鈴の屋の翁は。人は譬へば人形の如くで。神は人形をつかふ人間のやうな物じや。と云れたでござる。又その活動らく體に。病と云ことが有て。夫に藥を與へて癒るも。是は常と成てをるに依て。何となく思つて居るけれども。實は奇靈に怪しきこと。又かやうに水々と若やいで居る人間が。段々年を重ねる儘に。容貌も變り皺もよれば。腰も屈んで死ぬるのも。實は何んとも思はねば思はぬやうな物の。やッぱり怪いことで。こりや云ひもて行けば。こと〴〵く神の御所業なることは。論は無れども。人の死ぬるに。委く云へば。年寄て死ぬと。病んで死ぬとの訣が有て。夫は先世の中の事と云ものは。彼玉鉾百首に。「善事に禍事いつぎ禍ことに。よきこといつぐ世の中の道。と詠れたる通り。善事から惡事を生じ。惡事から善事を生ずべき妙なる道理が有て。これは天地の初めよりさうでござる。此事の本の故由は。具さに師の古事記傳に。說おかれましたに依て。夫れは內會の砌りに委く演說いたしませうが。夫はまづ。

近く人の上で云はうならば。其の生れて出ることは。彼皇産靈大神の。甚も妙なる產靈の御靈に依て。形ちを爲し。父母の生なし。其漸に成長して。萬のことの出來るやうになるのも。共に善事では有るけれども。其成長しつゝ行く程に。いつとなく老衰へて死ぬる事は。これ成長すると云ふ善事が。やがて死ぬると云惡事の本となるのでござる。又人の壯に成長する事は。豊受の大神の御靈賜はり。食物を快く給て。養ひ居る故じやに依て。其食物をやめぬ限りは。衰へさうもないこと。尤も死にもしさうもない物じやが。其齡の長けゆくに從て。己が心とは爲ぬけれども。食物なども段々減つて。さうない處が。自然に老おとろへて。八十九十ぐらゐを限りとして死ぬることは。是また神の御心なることは。云も更なれども。此は皇美麻邇々藝命の。御天降りあそばしたる砌。故有て石長比賣をめさず。木花之佐久夜毘賣を婚たる御由縁に因てのことで。其以前は。殊の外に命長く。こゝらには妙なる訣のあることで。神代の古傳說に慥に見えて。此れは別に委く考へ記したる物が有ゆゑ。其は內會の時に申ませう。但し

これは。外の神々の御心にも。御任せなさらぬことと見え。老て死ぬることは。こりや藥でも直らぬことでござる。病はこれと事替つて。此の病があれば。此藥が有て。夫を直すことは。彼の邪なる神の人を病しむれば。善神の。夫をなほす藥を御定めなされたに依て。其病ひが直るでござる。此れはかの伊邪那岐神樣が。禍津日神を御吹生しなされて。此神は。穢きこと。汚れたること有ては。それを怒て御荒びなされ。世に禍事が起るに依て。その禍ことを直さうとして。大直日神を御出來しなされたると。また伊邪那美の神樣は。火神迦具土神を御生みなされて。其火の神の荒び給はんをりの鎭めにと思召て。水の神。土の神。瓠。川菜を御生みあそばし。其荒びを鎭め給はんやうを。御敎へなされたると同く。草根木皮に。それ〴〵の功の有るのは。盡く神の御定め置れた物でござる。其傳への。かつ〴〵存つて居るを申さば。伊邪那岐命の。豫母都國へ御出なされたる時に。豫母都志許賣と云物等に。追はれあそばしたる時に。待受けて。桃子を採て。其志許賣に御打付けなされたる處が。志許賣どもこれに恐れて。逃

返つたでござる。そこで伊邪那岐神様が。桃子に。汝吾を助けたるが如く。有ゆる宇都しき靑人草の。苦瀨に落ちてくるしまん時に。助けてよと仰せられたる。其の御言の儘に。かの桃の木が。今も疫癘鬼を避るの功があるに依て。此れは漢籍本草を始め。其の外も種々の書に。疫鬼をさくるとて。或は仙家の物じやとも申て。したゝか褒めてあることでござる。また大穴牟遲神の。八十柱まし〳〵たる御兄弟の神に。たばかられて。やけどをなされたる時に。神産巣日御祖命の。蚶貝比賣と。蛤貝比賣とに命せつけられて。御癒しなされたと有る。其蛤貝と云ふは。今のはまぐりの類で。これ以て傷火に今も効をなす物でござる。なほ此事は。追付け委く申まする。凡ての藥の。某々の病を治す功の有ることは。本は皆かやうの訣に。神の御定めなされたなれども。物毎に其傳がないから。夫と知らずに居るのでござる。右の桃子と。蛤貝との訣を考へ弘めて。外をも准へ知るが宜い。拙師の翁の歌に。「傳へなきことは知べき由もなし。知らえぬことはしらずてを有らむ。と詠まれたのは。戎人の如く。神の御傳もなきことを。猥りに推量り言をするは宜くない。古傳が無くて知れぬことは。知れぬにして置くべきことじや。と云の意でござる。去ながら。又かやうにも詠置かれたでござる。其は右の歌の次に。「傳へはし無くとも似たる類ひ有らば。外になぞへて知ることも有らむ。と詠れましたが。是れすなはち右の蛤貝と桃子との古傳に依て。外の物にも某々の能あることは。是もみな神の御定めなされたるとを。准へ知るやうのことを申された物でござる。此等をよく思ふが宜しいでござる。

さて某の草根木皮が。某の病にきくと云ふことを。人の智慧を以て考へ付け。また方を製つて。夫で病を癒すことは。是また神の御靈を賜つて覺るので。中にも大穴牟遲少彥名二柱神の御恩賴に依ることで。夫れは神代御紀に。大己貴命。與少彥名命。戮力一心。經營天下。復爲顯見蒼生及畜產。則定其療病之方。又爲攘鳥獸昆虫之災異。則定其禁厭之法。是以百姓至今咸蒙恩賴。と有て。この二柱の神は。醫藥の事を掌つて居させらるゝことでござる。此うち大穴牟遲

神の御傳は。古道の大意を演說の砌に。あら〳〵申たること。且今日申す處のついで〳〵に出まするから。夫で大旨わかること故。まづ置いて。こゝで少彥名命の御傳を申ませう。

さて少彥名神は。古事記に。大國主神。坐二出雲之御大之御前一時。自二波穗一乘二天之羅摩船一而。內二剝鵝皮一剝爲二衣服一有二歸來神一爾雖レ問二其名一不レ答。且雖レ問二所從之諸神一皆白レ不レ知。爾多爾且久白言。此者久延毘古必知之。即召二久延毘古一問時。答二白此者神產巢日神之御子。少毘古那神一。故爾白二上於二神產巢日御祖命一者。答下告此者實我子也。於二子之中一自二我手俣一久岐斯子也。故與二汝葦原色許男命一爲二兄弟一而。作二堅其國上。故自レ爾大穴牟遲與二少名毘古那二一柱神相並。作二堅此國一然後者。其少名毘古那神者。度二于常世國一也。とあり。○大國主神と申すは。即ち大穴牟遲神の御一名でござる。○坐二出雲之御大之御前一時と申すは。即ち出雲の御大の御前と申す處に。御出なされた時にと申す事。この大の字は。ほのかなに用つた物ごでござる。御前と申すは。御紀に　島曲俗云二美佐祁一とある通りのことで。即ち島の出崎のことで。漢字では。山へんに甲の字を書た字が。よく當つて居る。夫れゆゑ順の和名抄に。其の字をみさきと訓であるでござる。○波の穗と申すは。波の白く高く立つさまを申す古言で。凡て穗と云ことは。いちじるしく著はれ見ゆることを申て。其立ちさかる波のまに〳〵。御寄りなされたことでござる。○天之羅摩船。天之と申すは。天之蘿じやの。天之眞拆じやのと申す例に。添へて申たまでのこと。かゞみと云は。野山にいくらも生て有物で。俗にはがゞらひとも。がゞ芋とも云ひ。秋田などでは。ごがちよとも云ふ。即ちぱんやと云綿の出來る蔓草で。其實を二つに破ると。さんと船のやうな物でござる。ぱんやわたは。其實の中に在る。これは藥に用つて。よく乳を出す物でござる。○鵝皮この鵝の字は。師の翁の說に。蟲へんに我と云字の誤りでござる。蛾ひむしと云は飛んで燈火の中へ入て。身を亡なす蟲で。歌にも。夏蟲の蛾の衣。なども詠である物じやと。委くは記傳に記しおかれたでござる。篤胤按ふに。此說もさることなれども。此は神代御紀に。以二鷦鷯羽一爲レ

衣と有る方宜しからうでござる。何れにも鶉の字は。誤りと思はれまする。
○內剝と云は。丸ながらに皮を剝いだことで。其を衣服に著て。寄てござッた神が有る。○爾雖問其名不答。且雖問所從之諸神皆白不知とは。大穴牟遲神樣が。其のよッてござッた小さい神樣に。その御名を御問なされた處が。とんと答へさッしゃらぬ。そこで大穴牟遲神に隨從して居らるゝ諸の神へ。この今寄つて來たるちひさい神は。何と云神か。知てをるかと御問なされたけれども。皆知らぬと申さるゝ。○爾多爾且久白言。且は具の字の誤りで。たにぐゝと申すは。歌にも祝詞にも。いくらか申てある物で。即ちひきがへるのことでござる。具久と云は。これが鳴聲に依て付けた名で。谷と云は。此の物は。谷間じやの。或は物のはざまなどに居る物ゆゑ。谷蟆と申すでござる。この蟆と申す物は。甚だ奇靈なる態あるもので。其れは漢籍にも見え。世の人も能知て居るとほりのこと。いか樣こゝも由有げなることでござる。扨その蟆が申すには。○此者久延毘古必知之これはくえびこが。必ず存じて居りませう。と申すことでござる。○即召久延毘古問時。答白此者神產巢日神之御子。少名毘古那神。これも右の通り。谷ぐゝが申すゆゑ。然らばと思召て。久延毘古に御問なされたる處が。久延毘古が申上るには。此れは神產巢日神樣の御子で。其の御名は。少名毘古那神と申上る神樣でござりまする。と申す。この久延毘古と云は。山田之曾富騰と申す者のことで。甚以て奇妙不測なる由ある物なれども。其の委き訣は。こゝで申ては横へはひるに依て。それは內會の時にいたしませう。○故爾白上神產巢日御祖命者。と申すは。大穴牟遲神樣が。久延毘古の申上ることを。御聞あそばして。扨はさうか。然らば神產巢日御祖命へ。此神のこれへ來られたることを申上やうと。天上へ御使を以て仰せ上られたことでござる。こゝに限て。神產巢日神樣を。御祖命とありますは。元來神產巢日神樣は女神に御坐が上に。大穴牟遲神樣の御爲にも。御先祖にましますが故でござる。○さて產巢日神樣が。大穴牟遲神の。御使の神へ仰せられますには。此者實我子也。此者と云は。これはと云こと但し此者と仰られたから

は。此時の御使の神と御一處に。少名毘古那神樣を。天へ御上せなされたこと丶見えるでござる。さうなくては。これはと仰せられやうはずはないで。ござる。

○於二子之中一自二我手俣一久岐斯子也。御子の中にと申すは。我御子は多き中に。と申すことでござる。我か手俣よりくきし御子なり。手俣と云ふは。則字の如く。手のまたと云ことで。此指の俣のことでござる。久岐斯御子也と申すは。すなはち産巣日神樣の御手の俣から。漏れて墮ちさせられた子じや。と仰せらる丶ことでござる。今の俗にも。くゞりぬけるなんど申す言は。此の久岐と云語の移つたのでござる。○こ丶の處を。御紀では。御使を天へ遣はされて。天つ神へ申上られたる處が。天つ神すなはち。高皇産靈神樣の仰せられますには。吾所レ産兒凡有二一千五百座一其中一兒最惡不レ順二教養一自二指間一漏墮者必彼矣。とありますが。此の御紀の趣きでは。この時少毘古那神を。天へ御上せなされたこととは見えませぬが。此れは彼これ少か傳への異なる處でござる。また高皇産靈神樣と。神皇産靈神樣とも。男女の違おはし坐せども。此れは孰れにても宜しからうでござる。○故與二汝葦原色許男命一爲二兄弟一而。作二堅其國一。こ丶に汝と御さしなされたは。則ち大穴牟遲神をさして仰せられた御言で。いましと云は。則なんぢと云と同じ意の言でござる。また葦原色許男命と申すは。大穴牟遲神の。御武勇に坐ます處より稱へ申たるので。則ち御別名でござる。爲二兄弟一而と云は。すなはち謂ゆる兄弟の義を結んでと。皇産靈神樣が。御さしづを遊ばしたのでござる。此れは今の世にも。義兄弟と申て。いくらも有ることじやが。誠に是が始りで。既に皇産靈神樣の御許しあそばされたることで。其は頼もしく宜いこと丶見えるでござる。○作二堅其國一と申すは。古道の大意に申たる通り。天地初發の時に。かの伊邪那岐伊邪那美神へ。天つ神樣が。是漂へる國を。作り固め成せと仰せられて。天の沼矛を賜はり。さて二柱神は。御國を次々御生みなされ。其を未だ御作り終給はざる中に。女神伊邪那美命は。御餘儀なき訣有て。豫美の國へ御立退あそばされたでござる。其の時男神伊邪那岐命は。御跡を追つて其へ入らせられ。吾與レ

汝所作之國。未作竟。と仰せられたることがある。その未だ二柱神の。作り終ずさし置れたるところを作固めて。彼の伊邪那岐伊邪那美二柱の神の。御功績を御繼ぎなさるゝやうにと。皇產靈神樣の。御んさしづなし遣はされたことでござる。尤も此れは大穴牟遲神より。御上せなされたる御使の神へ。仰せ含められたる。謂ゆる御口上でござる。さて其國と仰せられたは。天より此の御國を指て仰せられたる御言ゆゑでござる。次の文には。此國と有る。こゝらの差別をよく思ふが宜いでござる。○故自爾大穴牟遲。與少名毘古那二柱神相並。此は聞えたる通り。右の皇產靈神樣の御さしづの如く。二柱神が御一所にと申すことでござる。○作堅此國と申すは。即ちこの御國を。御作りかため遊ばしたと云ことでござる。扨この御國を御作りなされたることは。まづ神代御紀に。大己貴命。與少彥名命戮力一心經營天下といひ。出雲風土記に。飯石郡多禰鄉。所造天下大神。大穴持命。與須久奈比古命。巡行天下時。稻種墮此所。故云種と云ひ。また續後紀十九の歌に。日本乃野馬臺能國遠賀美侶伎能。宿那毘古那加葦菅遠。殖生志津々、國固米。造介牟與理。また萬葉七に。大穴道少御神作。妹勢能山見吉。また六に。大汝少彥名能神社者。名著始鷄目名耳乎。名兒山跡負而云々と云ひ。又十八に。於保奈牟知須久奈比古奈野神代欲里。伊比都藝家良之云々と。みなかやうの趣に。この二柱の御事を申つたへたのは。すなはち天の下を御作りなされたる御功があるに依てのことでござる。扨その常に入らせられたる處が。石見國の志都乃石室でござる。此に御座なされて。さて國々を御作巡りなされたことでござる。

扨少彥名神は酒をも御作り始めなされたでござる。其は弘仁私記に。少彥名命。是造酒神也と見え。又酒の古名を。久斯とも。伎とも云。それ故に。此神を久志能加美と申す。即ち酒之神と云ことでござる。抑酒のことの早く見えましたは。速須佐之男大神の。八俣大蛇を殺し給ふ處に。八鹽折酒に。お醉せなされたることが見え。また是より前に。酒とは無けれとも。天照大御神の御語に。屎なすは醉て吐散す。と仰せられた事も有るでござる。但しこれらは。少

彥名神の。海より御依來なされざる前の事じやに依て。此神の御造りなされたでは有るまいか。とも云れませうが。此神は。皇產靈大神の御子と有れば。其の御出來なされたは。ぐッと早いことで。夫より後に。外國へは御出なされたる事と思はれるゆゑ。これはうたがひ有るまいでござる。扨久斯神と申すことは。神功皇后の御歌に。此御酒は。吾が御酒ならず久志能加美。常世に坐す石立す。少御神の釀し御酒。云々と有る。久志能加美。すなはち酒之神でござる。さて伎と云ふは。久斯の約まりで。共に酒のこと。かの白伎黑伎など云伎。すなはち夫でござる。さてまた大穴牟遲神も。御造りなされた事と見えて。崇神天皇御紀八年の處に。高橋連活日と云人の歌に此御酒は吾が御酒ならず。和なす大物主の釀し御酒。いくひさ〳〵。と歌つた事が有。但しこれも此活日と云人は。大三輪社の掌酒と爲て居て詠んだる歌なれば。殊更に其神に係て詠だのでも有うかでござる。其はともあれ。久斯は久須利と同言で。久斯神すなはち藥之神でござる。扨その醫藥のとは。大穴牟遲。少彥名二柱の神の御掌りなさるゝ訣は。

既にも申し。又下にも段々申すから。酒も二柱神の御掌りなされる事を考へ合せて知が宜いでござる。さて是より。又その本文に移ります。〇然後者。これはどうかこゝでは。二柱神が。既に國を作り固め竟て後。と云たやうに聞えますが。此次の文に。大國主神愁而告。吾獨何能得二作此國一。と仰せられたを見れば。御作り竟なされたる後では無く。猶作つて入らせらるゝ時分のことで。此れは其始めつかたは。相並んで作らせられたなれ共。其後つかたになりては。と云の意でござる。〇其少名毘古那神者。度二于常世國一也。この常世國のことは次に云。〇扨この少名彥那命の。常世の國へ御渡りなされたところを。神代御紀では。其後少彥名命。行二至熊野之御碕一。遂適二於常世鄕一矣と見え。又同じ一書の說。また伯耆國風土記に。相見郡郡家西北。有二餘戸里一。有二粟島一。少日子命。蒔レ粟秀實離々。即載レ粟。彈二渡常世國一。故云二粟島一也。とある。さすれば此神は。いとも〳〵小なる神樣で。又常世國へ御渡なさらうとて。粟の莖へ御上りなされ。其れを撓めしなはせて。ぴんと起返るはづみに。彈かれ飛んで。御渡りなさ

れたる事と見えるでござる。扨この粟島の祭神は。即ち小彦名命でござる。然るを俗には。粟島の神を女神なりと申て。其の説に。粟島大明神は。住吉大明神の妃で有た處が。帶下の病に依て。男神これを疎じて。粟島に御流しなされた故に。婦人の病を祈るに。かならず感應が有て。別して腰より下の病を愈し給はんとの御誓願じや。などゝ申すけれども。其の女神にまし坐さぬことは。右に申たる御紀。古事記の文面に依て明かなこと。こりや思ふに。大穴牟遲神と伴なッて。國々を御經營なされたと云ことを。片はし聞て。女神とこゝろえ。どうか云事で。大穴牟遲の神を。住吉大明神と過り心得。また病を治むるの方を御定めなされたと云ことを。唯婦人の病のみを愈し給ふ事に心得。國々の御經營も。未だ御果しなさらぬ内に。大穴牟遲神に御離れなされて。常世の國へ御渡りなされたることを。男神に疎まれて。お流されなされたなどゝ。誤りにあやまりを云ひ傳へたものでござる。〇扨こゝに常世の國と有る處。これまでさんと分らず。發明の説がないに依て。まづ鈴屋翁の説を擧て。委く辨じませう。さて翁の説に。常世の國と云は。何所にもあれ。とほく海を渡つて往く國を申すなれば。御國の外は。萬國みな常世の國と云が。古への云ひざまでござる。かくて此の少名毘古那命は。神産巣日御祖命の御手俣より。漏を去りなされた神で。此段の文に依れば。くきおさりなされてから。其御行方も御知られなさらぬ趣でござる。そりヤなぜなれば。此の御國へは御下りなさらんで。外國へ放れ往せられた故でござる。扨此段に。海から御依なされたのは。外國より渡つて入せられたので。度二于常世國一也とあるは。又ぞろ外國へ御返りなされた物でござる。右に引て申たる。神功皇后の御歌に常世にいますと遊ばしたのは。後まで外國に鎮つて入らせらるゝ故でござる。然れば此の御神は。初め高天原に於て。神産巣日神の御手の俣より。くき放れ御天降りなされてから。永く外國に入らせらるゝ神樣で。其間に。しばらく皇國へ御渡りなされて。大穴牟遲神と御一所に。御國を御作りなされた物でござる。この趣に依て。とッくりと考へた處が。諸の外國三韓。また諸越。其外も四方に有りと有る萬國は本みなこの神の。御經

營かためなされたものと見えるでござる。尤も諸々の外國の初めは。なみ神代紀に潮沫の凝つて成たる物と有る。其内であらうでござる。さやう有て後に。此の少名毘古那神の御下りなされて何れの國をもみな御經營なされて。其おそき速き。又優劣などの異こそ有らうなれ共。悉く此神の御作り固めなされたに。泄れたるは有るまいでござる。其れは今の人の代の。命の長さを以て計る時は。萬の國々を。此神の御作りなされたと致しては。時代の合はぬとに思ふ人も有ませうが。さうでない。神代の壽命年數は。殊の外に長く久しいことで。此神の外國へ放れ下らせられたなどは。漢國に謂ゆる伏羲。また天竺に謂ゆる刹帝利などよりは。遙に前代のことじやに依て。萬國みな此に準へて。疑ふべきことではないでござる。さて諸の外國には。神代の正き傳說がないに依て。此の神の天より御下りなされて。其國を御作りなされたる事を。風聞にも知んで居る國々も有らうし。又その國々の語のまゝに異なる御名を負せ奉つて。ほのぐ\訛りながらに。傳へたる國も有ませう。又その御靈を。後の世まで齋き祀る御社のある國々も有るだらうけれども。其れも異なる御名であらうに依て。左に右に。何れの國々でも。正しき傳說は知らんで居ることでござる。抑かやうに申すことを聞かれる世間の人が。何と思ひませうか。千年にも餘つて。普く外國の說ばかりを聞きなれて。心の底にしみ著いたる世の人なれば。推なべては今が今になアる程と諾ふ人は。そりや少からうが。さやうの輩は何にも有れ。御國の學問をする人などは。此等の訣を。能く心得居るべきことでござる。と鈴屋翁の云ひおかれましたが。いまこの說をくり返し讀味ひまするに。先始めに。常世國のことを說かれたるは。篤胤が思ふ處とは異つて。諾ひ難く思はれまするが。其れより後に。諸の外國どもは皆。少彥名神の。御作立なされたで有らうと云よりして。此神の御傳の。外國にのこり有べきはずなる由を諭されたるなどは。信に目覺しく。古往今來此の大人を置いては。外に誰も思ひ依るまじき事で。實に有がたき御諭し言でござる。篤胤此說に依て。とツくと考へたる處が。此少彥名神のみならず。大穴牟遲神も。外國どもを御作りなさらう爲に。御渡りなされたと見えまする。

其の由は。下に引く如く。齊衡三年に。常陸國へ御歸の時。二柱神御一所なる上に。其時の御託宣に依て。相分りますることでござる。然れば此神の御事實も。必外國どもに遺り有べきこと。申すまでもないことでござる。なほ此外にも。古き神々の御渡りなされたるも。必す有うとは思はれまするが。未だ其證據を得ぬから。夫れは猶よく考へ定めたる上で申さうでござる。

扨その常世國は。底依の國であらうとの考へは。一と通り聞えたるが如くなれども。篤胤が思ふ處とは。大きに異つて居る。夫はまづ此海よりして。御立去りなされたる故に。遠近こそ有れ。西洋の謂ゆる五大洲の內。何處にかおはし坐であらう。其處は。大凡皇國の下の方に當れば。即ち底依の國で。そことところ音通ひ。よりのりを省いて。底依國すなはち常世國としても。此處は歟なりに押付くやうなれども。常世と云詞を。なほ廣く考へ通して見ては。差支が有うでござる。仍ては此處もさうでは有るまいと思はれまする。然らば其は何處じやと云に。これは決めて諸越のからを始め。現界の國處ではなくて。幽界のことゝ思はれるでござる。然れば其幽界と云は。また何處じやと云に。此れは何處にも。海にも山にも有るには相違なけれども。其と指しては云ひ難い。其れは何故なれば。凡俗の目に見えぬ隱れ國ゆゑのことでござる。此事の證據は。垂仁天皇御紀。九十九年天皇崩御の處に。田道間守がことを記して。是常世國則神仙祕區。俗非ㇾ所ㇾ臻とある。此祕區すなはち幽界のことで。今も神祇仙靈の幽界をば。かくれ國。かくれ鄕など云でござる。然らば又外國を御經營なされたと申すも。その祕區のことかと云に。此れは又さうでない。一とまづ皇國を去て。幽界に御隱れなされ。夫れから後に。彼國々の現界へ。御顯出なされたることでござる。彼の大穴牟遲神の。八十坰手に御隱れなされたる。事代主神の。八重青柴垣に御隱れなされたるなども。みな幽冥に御入りなされたることを申すので。此後大穴牟遲神も。彼處へ御出現なされたること。上に申たる通りでござる。さて常世と云ふ名義は。いかにと云に文字の如く。常とはに變らぬ世界。謂ゆる不老不死の國と云の意でござる。かの浦嶼子が行きたるも。

其中の一个所で。漢土にて仙境と云も。皆同じ事で。彼の旧道間守が取來ましたるは。即ち其の仙境の物と見えるでござる。さて常世の國と云は。右の如くでござる處を。翁の說の如く。底依國と云ふことに致しては。顯幽の違ひのみならず。その趣き大きに異なるでござる。能く考へて辨へるが宜しい。此の事は神の道の學びに取て。第一のことなれども。中中此に申し盡し難いに依て。別に委く書記して見せませうが。今は大略を申すのでござる。

扨また此少彥名神の御事を。皇產靈神の御詔に。最惡而不レ順ニ教養一。云々と申すこと。神代御紀に在りますが。此のこと何とも心得がたいに依て。其の御事跡をつら〱考へたる處が。最惡と仰せられる程のことは一つも見えず。唯その御功德の大きなることは。前後考へ合せて。自からに知られまするが。是に依て思ひまするに。此の神は元來。御形體は小さけれども。其御器量は拔群の大英傑に御坐すこと故に。若くはかの。大行は細瑾を顧みずとも申す如く。御內むきの小さき事などは。御神命の御教養に　御順ひなされざることなども有たに依て。右の御詞も有たであらうでござる。但し最惡とは有れども。さしも御憎みなされたとは聞えず。末に宜ニ愛而養一之とあるを思へば。却て御慈愛の御心。深く有らせられたることを能く思ひ奉るが宜い。もとがたいしたることで无い故に。古事記の傳へには。无いのでも有らうでござる。猶此の事は熟く考へて。古史傳に委く記しませう。

さて後世に至て。諸の外國より。種々の事も物もだん〱に渡り來て。御國の用を爲す事は。專らこの二柱の神の。御掌りなされる事。と思れるでござる。其はまづ崇神天皇の御代に。大物主神の御諭有て。意富加羅國の人。初めて來朝したるをもつて知られまする。此大物主神と申すは。即ち大穴牟遲の神の和御魂神におはし坐すでござる。猶此上を申さば。神代に須佐之男大神の。天壁立極廻坐したとあるは。宇宙の國々悉くを。御巡見あそばされたので。其の中に。韓鄉之島は金銀がある。吾見所御之國に。浮寶有らずは佳からじと仰せられて。其の船に造るべき木を御植生なされて。外國の往來を御始めさせ遊ばされ。此の後御紀に見えたるは。上に申す如く。

意富加羅國の人の來朝じやが。即ち其の船に乘りてのこと。又同し御世に。此方にも。諸國に船を多く御造らせなされたでござる。扨また天照大御神の御前に白す祝詞に。皇大御神能見霽志坐四方國者。天能壁立極。國能退立限。青雲能靄極。白雲能墜坐向伏限。靑海原者棹柁不干。舟艫能至留極。大海爾舟滿都々氣氐。自陸往道者。荷緒結堅氐。躡根木根履佐久彌氐。馬爪能至留限。長道無間久立都々氣氐。狹國者廣久。峻國者平久。遠國者八十綱打掛氐引寄如事。皇大御神能寄奉波。荷前者。皇大御神能大前爾。如横山打積置氐。云々とあるを以て。大穴牟遲。少彥名神も知し看せども。その大本は。天照大御神の所知看す御事にて。其萬國の有らんかぎり。悉く皇國に寄て仕へ奉らしめ給ふ御由縁を。よく知り辨ふべきことでござる。此祝詞の意は云々。是等を以て。我國は萬國の祖國。我大君は。即ち萬國の大君に大坐ますことを辨へ。また萬國よりは。皇國を慕ひ奉る由縁をも知べきことでござる。扨この御由縁を知たる上は。萬國より參來物ども。悉く御國の用と爲るべき訣も知れるでござる。是らのことはなほ次々に委く申すことでは有れども。まづ第一に此大義を知んでは。諸事萬端さし支へが有て。物の條理がさんと分らぬこと故に。斯は辨ずるのでござるから。是を知て而して後に。我が古學の廣大にして。儒學佛學蘭學を初め。外蕃の學事は。都てみな陋く少さきことを。とッくと辨へ知べきことでござる。さて右の如く。大御神の。萬づの大本を知看すに付ては。皇國に用ある物を。外國より持來るはさることなれども。又其中に。善からぬ事物の來るは。如何なる理で有うと云に。是はもと。外國どもの始めは。御國の如く。伊邪那岐伊邪那美二柱大神の。御生成なされたるに非ず。潮沫の凝固まッて成たる國々なる故に。人氣も宜からず。其れ故に產出る物も。したがッて宜しからぬ訣でござる。然れば萬國より渡り來る物には。自然と佳らぬ物の交り來るべき理を辨へ知るが宜いでござる。但しかやうに申せば。掛卷も畏き大御神を初め奉り。速須佐之男大神。また大穴牟遲少彥名神の知し看からは。其惡き物は撰み給て。渡り來らざるやうに成し下さるべきことゝ思はれる。此理は如何と云に。此は大御神

こは申せども。實は其荒御魂。大禍津日神の。專ら所知看すことにて。さしも細かしきこと迄には至らせられず。唯その御神德の廣大无邊なる處より。善も惡きも悉に。御國に御寄せなさるゝこと故に。儒佛の道は云までも无く。動ともすれば甚異かる邪法迄も。交り來る事を思ふべき物でござる。しかし是も決して惡き心では无い。譬へば諸國の浦々にて。佳魚を採らうとして地引と云大網を引く處が。鯛ひらめなど。其のほか用ある魚のみは採れずして。中には甚怪き海獸の類ひなども寄來て。却て煩はしく妨げに爲ることさへ有るは。元來大仕掛で有るゆゑに。彼邪道の交つて入り來るを。撰み分けることの成がたいと同じ理でござる。此れをもよく思ふべき物でござる。

さて又右の如く萬の戎國々は。悉く我が大神等の知看すことゝしては。其國々の人々。とッくに其訣を心得て。悉く藩臣と稱して服來るべき道理じやに。さやうのことは无くて。尤も近き國には來たのも有れど。其は稀まれにて。遠き國々は服從ふ者なく。彼文永弘安の頃の戎國を初め。却て皇國を伺ひ奉らうと爲るは。又何なる理りであらうと云に。是は萬づの國々に。古への傳說明かならず。況て我が神の御國の古傳などは。夢にも知らざる故に。其國々の卑しき所以を辨へず。唯不毛ながらも。廣大なる土地を領すれば。自ら尊大に思ひ誇つて。却つて我大皇國を侮り奉る樣なるは。憎むべき事には有れども。實は眞の古傳を知らず。且瓦石は大きなれども卑しく金玉は小さくとも。貴き事を辨へぬ故のことで。謂ゆる蠢爾たる戎狄にしては。さも有べく憐むべきとでござる。然るに近頃。世の中次第に開けゆくに隨て。此れも彼須佐之男大神の御心かも。船の製造巧者になり航海の術自在成故に。各國の善惡も互に知られ。彼金玉瓦石も。面あたりに見える樣に成ては。大皇國の萬國に勝れて。穀物は申す迄も無く。萬づ產出る物。悉く結構なるを羨み奉りて。其れを得まほしく思ふに付ては。四方の夷狄ども。技巧の限りを盡し齎來て。御機嫌を取申し。或は我が漂民を送るに言託て。通商を請ひなど。漸々に親ひ奉り。又中には負氣なき狂業を企てるも有るやうに聞えるでござる。然るに此れらのこと。速かに御咎めも無きは。例

の大らかに差置れるのでござる。然れどもそれは小事のこと。終には皇國の損害とも相成べき大事に至ては。少かも宥め給ふことなく。御稜威を震つて打亡ぼし給はんことは。弘安の度は云に及ばず。其外をりをり御驗の有たるを以て知べきものでござる。但し是は。人をして御討せなさるゝも。神の御威稜に依て亡ぶるも。實は同じ理でござる。扨さやう有りつゝも。皇國を覗ふ心なほ止まず。年を重ね世を經るまゝに。彼に懲り此に怖るゝ其中に。四方の戎狄ども。興廢沿革さま〴〵有て長久せず。本より彼に主從の定まりなく。萬事猥りがはしきに付ても。我大君の大御代は。幾千世歷ても替らせ給ふことなく。征夷大將軍の御威光も。彌增々に四海に輝き。彼戎狄ら。終には尊卑善惡强弱をも。心のそこひ思ひ辨へ。い這ひ拜み服從奉り。かの通商交易など云とはいつしか絕えて。我大君は。四海萬國の大君上におはし坐し。彼等は一向に臣下と稱して。國產ども澤山に貢ぎ献り。參來るべきことと。鏡に挂て見るが如く。阿那尊きかも。阿那愉快きかも。但し此は要なき言擧の如くに思ふ人も有ませうが。決して篤胤が强說では無い。遠つ神代に。大神等の成掟て給ふ趣を伺ひ奉り。其後御世々々見えたる御事實を思ひ合せて。かくは推量り奉らるゝことでござる。既に其驗の。今ほの〴〵見え初たる上は。右申す如く成整はんことも。然しも久しいことでは有るまいと思はれまする。

さて醫藥の道は。神皇產靈大神より初まり大穴牟遲少彥名神の御受繼なされ。なほ廣く御撰み有て。此御世より。萬國へまでも御傳へ遊はされたること見えまする。抑皇國の古へ。神代は申すに及ばず。其後も人の心大らかで。物思ひも无く。惡き病などは无き故に。醫藥方術も事少なくて。足はぬことも无かッたる處が。仁德天皇の大御代頃より初めて。次々に漢人ども多く參來り。書籍ども貢奉り。又此方よりも。彼の國の物學びに。大御使を遣はされなど有て。種々のこと。醫藥方術。及び其書ともゝ傳はり來て。人々其を珍らしく思ふに付ては。いつとなく皇國の方は粗略になり。本より神字もて書きたるも有れど。漢字もて記せるが多く。彼此と和漢紛らはしく。人人次第に漢意に移り行て。終には皇國の醫藥方術を

ば。重んぜざることゝ成たるは。甚以て慨く憤ろしきことでござる。然るに近頃。わが古學の興りたるより。此道をも開け初て。漢方に依らず醫療を爲す者も。かつ〴〵出來たるは。然すがに神の御國の印にて。いとも愛たきことでござる。

さて外國より渡來たる物の中に。醫藥の道などは。本より我大神等の。彼處に敎く。御傳へ置なされたるも有ると見えて。殊に用を爲す故に。又いつとなく御國の物と成て。普く用ふる上は。本より外國の方じやとても。强て嫌ふべきことではない。其れと云も漢國は。國がら惡き故に。病症もむづかしく。尤も藥品も風土に依て。ひねこびたる物多く。療方も其れに應ずること故に。自然と委くも成り來たる物でござる。然るに御國も。中古より以來は。儒佛の道も弘まり。彼れこれと。物ごと煩はしく。人心わるく賢しく。物思ふことの多くなるに付ては。古へに無き難病どもゝ出來たに依て。そこでかの漢方が丁どよく相應するやうに成て。行はれた物でござる。譬へば盜人多き國々にては。險しき法度を立ると同じ理で。むづかしき病が出ると。又隨つて此道に賢き人が出來る。醫者多き地には。難病も多い物で。如レ此く段々に委くも成來たものでござる。

さて又近ごろ。西の極なる阿蘭陀と云國よりして。一種の學風おこりて。今世に蘭學と稱する者。即ちそれでござる。元來その國柄と見えて。物の理を考へ究むることは甚だ賢く。仍ては發明の說も少なからず。天文地理の學は云に及ばず。器械の巧なること。人の目を驚かし。醫藥製煉の道ことに委く。其書どもゝ次々に渡り來て。世に弘まり初めたるは。即ち神の御心であらうでござる。然るに其の渡り來る藥品どもの中には。効能の勝れたるも有り。又は製煉を盡して至て猛烈なる類も有て。良醫これを用ひて病症に應ずれば。灼然き効驗を奏すも有れど。本その藥性を知らず。又は其藥性は知ても。庸醫らは其用ふべき處を知らず。若その病症に應ぜざれば。大害を生じて。忽ち人命を失ふに至る。此は譬へば猿に利刀を持たせ。馬鹿に鐵砲を放た令るやうな物で。信に危いことの甚しいでござる。抑その究理の委きは。惡きことには非ざれども。彼紅夷ら。世に

は眞の神あることを知らず。人の智は限り有るを。限无きの萬物の理りを考へ究めんと欲るに付ては。強たる說多く。元より狡意なる國風なる故に。現在の小理に拘泥て。却つて幽神の大義を悟らず。其れ故に。その說至て究屈にして。我が古道の妨げとなる事も多いでござる。去りながら。世間の有樣を考ふるに。今は物ごと新奇を好む風俗なれば。此の學風も。儒佛の道の榮えたる如く。段々と弘まり行くことで有らうと思はれる。然らんには。世の爲人の爲と成べきことも多からうなれども。又害となることも少なかるまいと思はれるでござる。是こそは。彼吉事に此凶事のいつぐべき世の中の道なるを以て。然やうには推量知られることでござる。抑かく外國々より。萬の事物の。我が大御國に參來ることは。上に申す皇神等の大御心にて。其の御神德の廣大なる故に。善き惡きの撰无く。森羅萬象こと〲く皇國に御引寄せ遊ばさるゝ趣きを。能く考へ辨へて。外國より來る事物は。よく撰採りて用ふべきことで。申すは畏きことなれども。是すなはち大神等の御心掟と思ひ奉られるでござる。然らば其の惡きことは何と爲ると云に。彼の良工は材を棄てず。良將は士を棄てずと云たる如く。それ〲の遣ひ道が有らうでござる。其由を一ッ二ッ申さば。蛇呉公蜂などの類は。无くて然るべき物と思ふに。大穴牟遲神の。根の國へ入らせられたる時に。須佐之男大神。右の物共を用ひて。其御器量を御試なされてより。大きなる御功德を立て。大國主大神と御成りなされたることは。申すまでも无く。是より後に。人の上にてかやうなる類のことは。今數ふるに遑あらずでござる。また例に申すは畏きことながら。糞汁は穢きものゝ限りなれども。田畑の作物に用ふれば。至極の用を爲すなど。皆惡しき物を使て。善きことを成させられ。また今の世に暴逆無賴の罪人を召捕り。呵責するなどは。誰も惡ふべきこと故に。良民ならぬ閙引の徒。または非人などに取扱はせる物でござる。此は譬へば。兵は凶器なれども。亂を治むるには。其の凶器を用ひずんば有べからず。醫藥の道またこれに同く。藥種は常には毒なるが多かれども。其病に當つては功を爲すこと。亂世には凶器を用ひざれは治らざると。丁ど同じ理なることを悟るが宜

いでござる。然れば渡來の物共は。必ず善きを撰んで用ふることは申すまでも无く。悪きをも猥りに捨ることも无く。其の相應な處へ遣ふやうにすれば。世に有りと有る程の物。一つとして不用と云は有るまいでござる。世に禍神の多いのを。正しき神等の有して差置せらるゝも。必ず御用ひなさるゝ處ある故で有ませう。是を以て皇神たちの御心の。廣大無邊なることを思ひ奉るべきことでござる。然れば儒佛の道の弘まッたは。禍神日神の枉業で。大御神も暫らくは其れに御堪へなされず。彼須佐之男大神の大荒びに仍て。天の石窟へ御引込なされたるごとくに。御手を束ねて御座なされたのじやと申す說は。憚りなことなれども。御結構と申さうか。ちと御ふがひ無いやうで。篤胤はさうでは有るまいと思ひまするでござる。扨此事は。心得違へたる人が多いに仍つて。講釋はちと廻道の樣なれども。大略を申たのでござる。さて是れより立返つて。酒のことを申さう。抑酒は百藥の長とも申て。甚愛たき物で。人の睦びの仲立を爲し。或は心地あしく。胸の痞つたる時なども。一杯の酒にも。其の心がすが〳〵しく成て諸の憂き悲しさをも忘れ。又平生は。いと女々しく弱き男も。酒を呑んでは。鼻息が手負猪の如く。猛く雄々しく成り。古くは應神天皇樣。すなはち八幡の御神が。須々許理と云人の獻つたる御酒に。御醉遊して。「すゝこりがかみし御酒に。我醉にけりことなぐし（事和酒）。ゑぐし（咲酒）に。われ醉ひにけり。と御歌ひ遊ばしつゝ。そゞろに御出かけなされて。御衝あそばしたる御杖を以て。大坂に在つたる大石を。御打ちなされたる處が。其大きなる石が。走つて避けたと申す事で。其の御代の諺に。堅石避醉人也。と云たと申す程のこと。是は挂卷も畏き。廣幡の八幡大御神の。現人神にましましたる時の御所業じやに仍て。よしや酒に御醉あそばさずとも。かやうな事も有さうな物でござる。是は序でじやに依て申ますが。淸輔朝臣の袋冊子に。夜行の途中。誦文の歌と云がある。其歌は。この八幡の御神の故事から出たることゝ見えて。かたしはや。つかせゝくりにくめる酒。手ゑひ足ゑひ我醉にけり。と有る。是を翁の考へに。これを夜行の誦文としたる意は。堅石すら走り避たることの如く。何なる恐ろしき物も。我を怖れて逃去り。近付くまいとの

意で有らう。と云れましたが。實にさうと見えるでござる。鶺鴒はきつく是を信じて。甚だ驗を見たることが度々あるでござる。初酒はかやうに愛たき物ゆゑ。上つ御代よりいたして。神も人も貴きも賤きも。吉きに付け凶きに付て。漢も夷も。やんごとなき物にもてはやすことでござる。但しかやうにばかり申ては。酒を好るゝ方々は。鼻を高くし。ここにこ物で居らるゝはず。既に古人も。大伴の旅人卿などは。「云はんすべ爲ん方知らに極まりて。尊き物は酒にし有るらし。また「阿那見にく。さかしらをすと酒飲まぬ。人をよく見れば猿にかも似る。と詠れましたが。此れ等は大きに。上戸の人〻の。得意に思ふ歌で。酒は實に甚めでたき物故。古へより。神へ献る物の第一として是を供へ。諸の神へ讀上る祝詞に。甕邊高知。甕腹滿雙などゝ有るは。御酒をたんと捧げて。神の御心を取奉る趣きでござる。然れども又害となることも甚だ多い。いたく醉狂れては。太き枉事を引出し。又計らずも。溝や川などに落ちなどして。百年の命を亡ふたぐひが。昔も今も少なからず。其の酒故に。初めて身を亡つたるが。まづ八俣のをろちでござる。此れは須佐之男神も。汝は畏き神なりと。仰られたほどのことで。眞に畏き神では有るけれども。かの須佐之男命の御計らひで。設け置れたる八醞の旨き酒に。現をぬかして醉臥れて。彼の尻尾へ貯へ持ちたるところの。天之叢雲の劒を。須佐之男命に取られ奉るのみならず。剰へに。其の身もずた〱に斬屠られたでござる。かやうの曲事も有るに依て。何處も昔の賢き人は。此れを戒め。佛法の方でも。釋迦はきつくいましめて。五戒の一つといたしたほどのこと。但し釋迦も。本は酒を飲んだに違ひ无い。其れは佛道の大意を演說の砌申たる通り。其の父淨飯王が。釋迦に出家をさせまいとて。妓樂を爲して慰め紛らした處が。釋迦も夫れに心うかれて。欲心内に發し。羅睺羅胎に處し。耶輸その夜に孕んだと云ことが有るから。さすれば是時。釋迦は酒も飲み。酒に依て淫欲の情が起り。耶輸を孕ましたことゝ見えるでござる。自分もかやうのことが有て。酒はいたく心をも行をも取亂す物ゆゑ。五戒の一つとさへ立て。嚴く後の僧どもを戒めた物でござる。また孔子も。酒を飲んだに違ひ无い。論語に。

唯酒無レ量不レ及レ亂と見え。たゞし沽酒市脯不レ食といふことが有るから。孔子は。沽た酒をば飲まなんで。手作りをして飲んだやうに見えるでござる。漢土で酒を造り初たは。狄儀と云女で。其の造つたる酒を。夏の禹王へ捧げ飲ました處が。禹王が大きに醉ひて。此れは後の世に人の行ひを亂す物じや。わるい物を初めたと云て。夫れより狄儀を踈み憎んだと申す事でござる。但し此頃はじめて酒を造つたと云はいかゞ。是より以前に必ず有らうと思はれるでござる。しかし其れはとも有れ。酒はかやうに。善きこと惡きこと。互に有る物にはあれども。其惡きは酒の咎に非ず。程よくする時は。無比の良藥なること。酒を用ふる程の人は。誰も思ひ辨ふべきこと。其外いかなる良藥も。過れば身の害となることは云までも无いでござる。其れは譬へば。穀物は。人の命を繼ぐ物にて。食はざれば忽ち死することなれども。暴食のみ爲れば。身を傷ふもの也。又色情も无くては叶はざることなれども。度を過れば命を亡ふと同じ理りなり。身を傷ひ命を亡ふを以て。此の二つを惡物とは云べからず。漢人も。飲食男女は人之大慾存す。と云ひたる如く。本より无くて叶はざること故に。皇産靈神の御心と。人々に其性を賦して。御生れさせなさるゝことでござる。然ればこそ此二つの道は。御教を待たずして。誰も自からに知りたるは。甚も奇に妙なる物ではござらぬか。

さて大穴牟遲少彦名神は。今の凡人の心を以ておもへば。假令くすしく靈しき御業がおはしまし。又御長命に坐したるにも致せ。疾くに神去り坐々て。今は世に御座すまいと思ふやうじやが。尤も神代の御典に御見えなさるゝ國津神々の中には。御隱れ遊ばしたるも多く有れども。天に坐します神々は申すに及ばず。國津神でも。大穴牟遲少彦那命樣などは。今の現に。人の目に見えこそ爲給はねども。今の世までも坐しますには違ひないと。篤胤は思ふ子細が有る。今日の演說は。みな大義に關る道の肝要なることばかりながら。其中にも此等のことは。とッくりと承知いたさるゝやうに致したい物でござる。いでや其の今の世とても。彼の二柱の神の。存在して坐ますに違ひ无いと申す故は。此の少彦名命の。常世の國へ御渡なされたと申することが。幾千歳の神代の昔

より云ひ傳へきて。其を古事記に御記しなされたる年が。元明天皇の和銅五年正月廿八日のことで。夫より百四十五年後。文德天皇の御代。齊衡三年十二月五日に。また〱此神が御國へ入らせられたることがある。それは即ち文德天皇樣の御實錄に。齊衡三年十二月庚午朔戊戌。常陸國上言。鹿島郡大洗磯前。有神新降。初郡民有煮海爲鹽者。夜半望海光耀屬天。明日有兩怪石。見在水次。高各尺許。體神造非人間石。鹽翁私異之去。後一日亦有廿餘小石。在向石左右。似若侍座。彩色非常。或形沙門唯無耳目。時神憑人云。我是大奈母知少比古奈命也。昔造此國訖去往東海。今爲濟民更亦來歸。と仰せられて。其の翌年天安元年八月に。その神社を朝廷の御社になされ。即ち今の大洗磯前と。酒列磯前の兩社がこれで。延喜式の神名帳に。名神大と有て。朝廷の大社の列に御加へなされた程のことでござる。但しこの內あかぬ事は。同く天安元年十月。この兩神を。號藥師菩薩明神と云ふことの有るは。此ころ專ら。佛法の世に弘く用ひられたる時分ゆゑ。僧どもの。上へ申勸め奉つたることゝ見えるでござる。即ち延喜式にも。其の如く御記しなされてある。さて〱是は歎かはしいことでござる。神の御自ら。我は是れ大奈母知少比古奈命也。と御名告あそばされたる物を。其眞の御名をば差おいて。藥師菩薩と御祭りなされたは。恐れながら當らぬことでござる。但しこれは。若くは後の世の佛ずきな輩などが。己が身方にせんと搆へて。國史へも延喜式へも。竊に書き入れたのではないかと思はれることが有る。其れはもツと委しく古寫本を考へて。究めやうでござる。既にさやうの例は。吉田殿の先祖平麻呂と云ふ人は。伊豆の國から出て。龜卜を得手たる者で。尤も其上りつめたる位階も。從五位下ぐらゐで。先祖も詳かならぬ程の人なる事を恥て。朝廷の御國史たる三代實錄を。板本にする時。貞觀二年の處に。神祇伯橘の朝臣永名とある文を。畏くも。神祇伯卜部平麻呂と書替へ。吉田家の先祖の名にして板におこし。世に弘たる等のことも有る。これは先師も辨じおかれたる如く。けしからぬことでござるが。右の藥師菩薩明神も。そんな好曲で爲たとかも知れぬでござる。何はとも有れ。なんとこの齊衡三年

に。昔この國を造り訖つて東海に往き。今民を濟はんが爲に。更にまた來り歸り。と仰せられて御座なされたは。こりやどうでござる。各方は何と思はれますかと。此事を考へわたしても。我が神代の古傳說のおぼろけならぬこと。推及ぼして。信ずるにも餘りあること。思へば思ふまに〳〵。言へば言ふまに〳〵。口にほゝ張つて篤胤などは。實はぞッとするやうで。別して大穴牟遲少彥名命の貴く妙なることが知れ。又今の世とても。存在ましますに相違ないことが悟られるでござる。神世に。常世の國へ御入りあそばしてから幾千歲の後。齊衡三年に。ゆくりなくかやうのことじやに依て。其の齊衡三年から。此の文化八年までは。纔に九百五十六年ばかりにしかならぬこと故。こりや人間にこそ。したゝかの年數のやうに思ふけれども。神等の御上では。少かの間で有らうから。實は天地と共に。無窮に御座なさるゝことゝ思ひ奉るでござる。凡俗の目には見えぬけれども。決して粗略に思ひ奉らず。常に己がつむりの上に御坐ことと心得て。醫をわざとする人などは。別して齋奉るべき事でござる。さて神代に。常世の國へ御渡りなされたは。少彥名命御一と方じやが。此の時の御託言に。大奈母知少比古奈命と仰せられ。且御靈代の神石も。二た柱にまし坐す處を見れば。其傳は无けれども。その後いつの程にか。大穴牟遲神も。同く常世の國へ御出なされて有たが。此時少彥名命と御同伴なされて。御歸りあそばされた物でござる。又その御靈代を。石に御遺しなされたること。是れはふかき謂れの有ることゝ見えて。神功皇后の御歌にも石たゝす少御神と見え。また延喜式の神名帳にも。能登國能登郡に。宿那彥神像石神社と申すも有る。凡て此らのことゞもは。猶委く細やかに考へたこともあれども。餘り長くなるに依て。まづあらあら申すのでござる。

さて古傳說に。大穴牟遲少彥名神樣が。禁厭の法をも御定めなされたと有に付て思ふに。今の世の醫師などの。絶えていたさぬことなれども。御國の古へは本より。諸越なども。病には多く禁厭を用ひたもので。殊に漢土の醫は。もと巫祝と云て。まじなひ等を爲者の致し始めたも有るでござる。其れはまづ彼

國の世本。また呂氏春秋。說文など云書どもに。巫彭作醫と云ことが見え。此餘にも。巫抵。巫陽。巫履。巫凡。巫相など云ふ者が有て。盡く彼の巫祝の徒で。是らは山海經に見えて。郭璞が注に。皆神醫也とある。此は元來禁厭はらひ。謂ゆる加持やうのことを致す者ながら。其まじなひ祓ひの術を以て病を癒すゆゑ。其のなほす處を指して。醫と云た物でござる。其れはまづ內經の賊風篇と云に。先巫知百病之勝。先知其病所從生者。可祝而已也とあるはこゝでござる。是に依て考へる時は。漢土の古。まじなひで病をなほすのも。其病の發る源の。因る處を尋ねて。そこへ付入り。氣を轉ずる仕方と見えるでござる。されば陰陽應象大論に。治病必求於本ともありまする。さて又其呪術をして。病を癒したる狀は。どうじやと申すに。漢の代の劉向と云人の。說苑と云書に。上古之爲醫者曰苗父。苗父之爲醫也。以菅爲席。以芻爲狗。北面而發十言耳。諸扶而來。輿而來者。皆平復如故とある。これで大抵の狀がおし量らるゝでござる。扨これを致す者を巫醫と云でござる。なぜされば。巫祝で居りつゝ。醫を致すに依てのことでござる。論語に。人而無恆。不可以作巫醫とあるは。是を云た物でござる。醫賸と云書に。巫醫唯是醫已。周禮有巫馬。卽馬醫。汲冢周書。鄕立巫醫。具百藥以備疾災。畜五味以備百草。呂覽云。巫醫毒藥逐除治之。故古之人賤之。爲其末也。後漢許楊。及王莽篡位。變姓名爲巫醫。逃匿它界。皆非巫與醫之謂。素問有移精變氣論。上古之醫必爲祝由。則所以有巫醫之稱也。ともあるでござる。○さて是より。巫祝の業をば次にいたして。藥を食すことを専らとして。其れに片付て居る者もだん〳〵出來て。周の代になりては。巫祝は巫祝。また醫を爲る者は醫と。別に立て。周禮の天官などを見れば。醫師と云ものが有て。是は掌醫之政令。聚毒藥以共醫事と云ひ。又疾醫と云が有て。これは掌養萬民之疾病と記し有るとほり。かやうに分だッて來たに依て。以前の如く。巫彭巫咸などやうに。頭に巫の字を附て云ことを止めて。かの近くは春秋の左傳などには。醫を業といたしたる者をば。皆頭へ醫字をそへて。醫緩醫和などやうに云ことゝ成た物でござ

る。其のち隋の代と成て。古へは醫も巫祝も。一つ物で有たることの。古實に依た物と見えて。尙藥局と申て。醫のつめ居る。云はゞ役所へ。咒禁博士と云ものと。咒禁生と云者とを置き。尤もこれは醫の充へ立て。其咒禁博士といふが。咒禁生と云に。咒禁祓除などのことを敎へて。病人ある時は。醫と共共に取掛つた物でござる。これは唐の六典と申す書に。具さに見えます。御國とても右の通り。二柱神が。醫藥と禁厭とを御始めあそばしたる。正しき古傳說もある程のことゆゑ。別してのこと。其上御國の令の御制は。多く唐の代の制を御用ひなされたる物ゆゑ。此訣が符合と云ひ。かた〲以て直に典藥寮と申て。醫者方の詰居らるゝ御役所へ。諸越と同じやうに。咒禁博士。咒禁生と云を御立てあそばし。これは醫疾令の御文面。またその義解の言に依れば。何のことも无く咒文をよみ。又は加持やうの事をして病邪を去り。また右の神代御紀に。鳥獸昆虫の災を禳はんが爲に。其の禁厭之法を。大名持少彦命の。御始めなされたることある通り。其をまじなふ業を致した物でござる。但し是は。漢も大倭も上の御定で。

その民間の醫はどうじやと申すに。まづ漢土の醫書では。先刻申たる孫思邈の千金方また張子和と云人の儒門事親など云物は。名たゝる名醫の著したる醫家日用の書じやがかやうの輩も。醫藥と咒禁とを兼て致したもので其れは各々その書どもに其咒禁の法をも具さに記して有る是ら甚だ古への道に符つて居ることでござる。世の生猾意なる人別して醫者などはきつくかやうのことを否がられるけれ共。そりや古を學ばぬ故のことでござる。凡て病は邪なる神の所業じやに依て。藥にもしろ咒禁にもしろ。其病を療さうとて致すことは。正直き神の御靈に依ることで。病に苦めらるゝ人の。信じて是を受くる時は其信ずる處がすなはち直き神の御靈の相應たるのじやに依て。病の癒るも尤もなことでござる。藥にまじなひの意あり。厭禁に藥の意もこもツて居るでござる。是は此間もまをす通り。或人。人の腹痛みに。襟の垢を丸めて。是は。えんりんのあんかん丹と云藥じやと。尊きよしに欺き與へたる處が。其人大きに信じて是を呑んだれば。其痛が即座に癒たと申すことも。思ひ合すが宜しいでござる。一體は藥を用ふる

事は。呪術から深入して始まッたこと故に。何ぞと云とまじなひぎみな事が有る。譬へば東の方へさしたる桃の木の根を。手一束に切つて煎じて呑むとか。また瘧のきり藥は。一と夜露に晒して用ふとか。水腫の藥を煎じる水は。流れ川の水を。流れなりに汲むとか。かやうのことゞもが計へも盡されぬ程有て。皆此の通りにして。きつと驗の有る物でござる。藥方書の元祖たる傷寒論にすら。苓桂甘棗湯を煎じる水は。甘爛水と申て。幾たびも杓を以て汲上げ。泡立たして。それで煎じるの。又は傷寒などの類。凡て大病を煩つて。未だはきと爲ぬ内に。男女交合をして煩つたる者には。燒褌散と申て。男ならば女。女ならば。其交つたる男の褌の。しかも陰所に近く。汚れたる處を。黒燒にして用ふると。發汗して直に快くなる。此れは篤胤は。一度も用ひて見たことは无けれども。歴々の醫者に。試見た人がいくらか有て。何れも大效を得たる由を書遺してある。此れらは傷寒論に有るにもせよ。禁厭に違ひ无い。かやうのことをば。醫者方は。何と心得て居らるゝか。猶この類のことが。終日云ても盡し難い程あることでござる。然らば病には。信じて呪禁だに爲れば。藥は入らぬ物かと云にさうで无い。藥と呪禁と。其驗が。互に似通ふ處が有ると云ふばかりで。其異なることは。譬へば敵を平治するに。言を以て服さするど。兵を以て服さするとの違ひが有るやうな物でござる。夫は藥には其の氣味に。寒と温との性が。自づからに具はッて。彼の內經の藏氣法時論にも。辛酸甘苦鹹各有レ所レ利。或散或收。或緩或急。或堅或耎とある如く。其能が違ふ故。其いき處も違つて。直にそれ〲の病の在る處へ射向て攻破り。或は人々。其身に固より有る處の神氣を佐けて。其邪氣を追散すなどが。兵を以て敵を挫ぐに能く似て居る。また攻撃の藥。大黄とか。巴豆とか云類の藥を與へ呑ましめ。あとで和かなる藥を呑せ。また粥などを與へて補ひなどするも。兵を擧て敵を服さ令たる後は。また仁慈を施して。撫安んずるなどゝも。能く似て居るでござる。〇さて古へは。呪禁でも病は癒たなれども。後の世となるに從つて。人心さかしく成て。呪禁を信せず。信せねば其驗も无かッたるゆゑ。漸々に其法も廢れて。さて今の世の如く。病には藥を以て癒

すこと丶のみ成て。かの五藏別論に。拘ニ鬼神ー者。不ㇾ可ニ與言ニ至德ー。と云やうにも成たでござる。然れば今の世に。醫師を業といたす人は。世の並に咒禁などの法には。心を殘さずして。藥の利みちをのみ能く學ぶが宜いでござる。但し俗には。加持咒禁法を甚だ信じて。醫者に藥を貰ひ。また修驗者など云に。祈禱まじなひをさするも多く有る。其を彼此やかましく云醫者も有れど。心狹く拒むべきことで无い。其れが實は古への道の趣でござる。然るを倭漢の籍に。巫覡の類を信ずる者には。藥を與へぬが宜い。などゝ申ても有るけれども。こりや古への道を知らぬからの事でござる。其上彼等を拒むは。何とやらん香功を。いのり咒禁する輩に。奪はるゝことを思つてのやうで。心も狹く卑しくも聞えることでござる。史記扁鵲傳に。信ㇾ巫不ㇾ信ㇾ醫不ㇾ治也とあれば。病家も此れを辨へて。兩方ともに。能く／＼信用すべきものでござる。扨忘れたり。天野信景か説に。天台止觀七云。知ニ野巫ー唯解ニ一術方ー救ニ一人ー獲ニ一喃料ー。何須ㇾ學ニ神農本艸ーと見ゆ。和俗無學の醫を。やぶくすしと云は。もと台家の諺かと申たが。然もあらうでござる。

さて此方のことを。醫師また醫者など云は漢語で。それを御國の言で正しく云へば。くすしと云べきこと。其のくすしと云は。くすりしと云詞の。りの字を略して。くすしと云た物でござる。さてくすりしとなぜ云なれば。醫藥の業を爲る者ゆゑ。くすりしと云ふ。丁ど弓を爲る者を弓師。矢をする者を矢師と云と一つことでござる。扨又くすりと云言は。此れは少かたりとも古への學びを爲て。少しくも古言のとでも聞覺えたる人は。醫のする術。また藥の病にきくとは。くすしく靈しき物じやに依て。くすり。亦くすしなどゝ云で有らうと。誰も直に思ひ付くことじやが。此方の業と爲ること故に。篤胤が數年來考へた處が。くすりと云詞は。一體貼ることの古言と見えるでござる。又くすしと云物は。貼傳るが本で有たるゆゑに。くすりと云名を令負た物でござる。扨それを。古へはくすり。亦くすねとも通はして云ひ。凡て物のひッたりと。俗に云ぶ。くッつくと云やうなことを云た詞と見えるでござる。今の世にくすねすと云て。ひッたりと附く物が有るは。過々古

言の存つて居るの。又くすぐると云語も。體に指を摩付る狀なんどが。何とやらん由ありげに聞えるでござる。本艸和名と申する書は。延喜の帝御時分に。典藥寮の大醫博士たる處の。深江輔仁と申す人の。すなはち勅命を蒙つて撰まれた物で。甚だ正しい物だ時に。其書に。漢名を石蘚と云物のことを。和名すくなひこのくすね。一名いはくすりと見え。和名抄にも此の通り有ますが。是れくすねとゑ。くすりとも通はし云たる證據で。そのすくなびこのくすねと云は。即少彥命の藥と云ことで。諸の藥が。この神に故由の无いと云は有るまいけれども。其の中に別して此の石蘚をば。彼の神樣が。御用ひなされたる物故に。神の御代より致して。かやうに名を付けた物と見える。又岩くすりと云名は。此の物は彼の垣衣と云物の類で。岩にひッ付き生ずる物故。右申す通り。くするど云は。つくることじやに依て。岩くすりと云た物で有らうでござる。何れにもくすりとくすねと。本同じ言とは見えるでござる。又藥はつけるが本で有たと申す故は。是れも同書に。芍藥。和名えびすぐすり。一名ぬみぐすりと有る。是に依て

考へたる處が。先づぬみぐすりとは。呑む藥と云ことでござる。是即藥は貼るが本で有たる故に。その呑んで病を療す藥をば。殊更にぬみぐすりと云た物でござる。處を後には。此方がだん／＼委く成て。藥は大抵呑むことゝ成たる故に。又こと更に貼藥と云言も出來た物でござる。萬づの事。かやうに移つて行くが常に幾らも有ることでござる。藥はつけるが本で有たる故に。古き書にも。藥はつけたる事實のみが多く有て。呑んだことはさんと見えぬ。其れは古事記に。大穴牟遲神樣が。稻羽之素兎が。鰐の爲に身の皮を引むくられて。泣いて居たるを。不便に思召て。蒲黃を取て貼よと仰られたることが有る。是がまづ藥を貼ることの。物に見えたる始で。その後大穴牟遲神樣は。八十柱まし／＼たる。御兄弟のわるだくみに依て。猪に似たる燒石に。傷火をなされたる時。神皇産靈神樣が。蚶貝姫と。蛤貝姫と云に仰付られて。きさげを焦して。母の乳汁として。御塗らせなされたることが有るなどをおもふが宜いでござる。實に人情の上で考へても。貼るが本なる訣は。今一寸額などを物に打つけると。あゝ痛やと云

さま。何の心も无く自然の靈智で。とやツて唾を付る。此こらが抑くするの本で。是れから弘めて。餘の物ともつける事が出來た物でござる。えも知れぬ物を。口に入れて呑みこむ事は先づは氣味わるくつ後に始まりさうな物なる事を。人情事實の上に考へて見るが宜いでござる。扨又同く芍藥の和名を。えびすぐすりと云故は。まづ凡てえびすと云語は。常とは違つて異なる物。また常に有る事と違つて居ることを。古言にえびすと云たもの。則ち外國を指してえびすと云のも。御國の人とは違つて居るに依て。えびすと云。これは今の世にも。其の心ばへの古言が殘つて。膳などをありやこりやに。人の前へすゑると。えびす膳と云ひ。又紙は裁合せたる物故に。四角なるべき處を。角に裁殘つて。出張た處でも有ると。是をえびす紙と云。これも紙は四角なるが常なる處を。それと違つて居るに依つて。えびす紙とは云でござる。芍藥をえびすぐすりと云も。くすりと云物。元來は賄る物なる處を。一名ゑみぐすりとも有て。是を呑んで病を癒す處が。本の意とは違つて居るに依て。えびすぐすりと云た物でござる。◯

さて御國でくすりと云語のわけ。其本の起原は。これで粗々すみましたが。其の御國で藥を呑たる始めはと云へば。其呑む事は諸越から傳つたることと見える。其れは古事記に。神武天皇樣より第二十代。男淺津間若子宿禰命。即ち後の世に。允恭天皇樣と諡號を奉たる天皇の御代に。新羅の國より。金波鎭。漢紀武と云者が參つて。允恭天皇樣の。久しき御病を癒し奉たる事がある。尤もそこの文には。慥に召上つたとは无けれども。事のさまを考へ見た處が。是の時めし上つたやうに見えますから。先是らを始めと致すべきかでござる。なぜ又御國の古へ人は。藥を呑む事を氣が付かなんだ事じや。と不審が有りませうが。實は是れも御國の尊い處で。上古にはさしも事々しき病が无かツた故でござる。老子に。國家昏亂して忠臣あり。と申た通り。外國は國がら惡しく。早くから事々しき病も多かツた故に。少彥命樣も。殊に御心を入れられ。其御靈に依て。彼の國々の人は。種々くすりのことを考へ作り。其術も早く委く成た物でござる。こゝが神の妙なる處でござる。夫故外國から渡りたる醫書の中には。御國ではさん

と見も聞きも知らぬ病の療じかたが。幾らとも无く記して有る。是れをもよく思ふが宜しいでござる。○扨又唐で薬の始まりは。すなはち酒でござる。是を呑まして。上古は人の病を直し。夫から弘めて。草根木皮。または虫とり獣。何によらず。薬に用ふことを仕出した物でござる。夫れはまづ醫者の醫の字が。やがて酒醴の類でござる。周禮の天官酒正職に。辨四飲之物。○一曰清。二に曰醫と有て。賈公彦が疏に。清醴清也。醫者謂釀粥爲醴と見え。又集韵と云字書に。醫濁漿也ともある。是は上古の世には。今つかふやうな薬は无く。専ら酒醴を用ひて。病を療治したる物ゆゑに。その後色々の薬が出來て。夫れを以て病を療す人をさして。醫と云こゝに成たものでござる。夫ゆゑ醫の字は。上をば匚をして。矢の字と殳を書き。下へ謂ゆるひよみの酉を書くでござる。說文に。醫治病工也。从医从酉。醫病聲。酒所以治病也。周禮有醫酒。○古巫彭初作醫と見え。また禮記に。酒者所以養老也。所以養病也と云ひ。素問の湯液醪醴論に。岐伯曰。自古聖人之作湯液醪醴者。以爲備耳。中古之世道德稍衰。邪氣時至。服之萬全なりとある。この湯液と申すは清んだる酒の事。醪醴と云は。濁酒のことでござる。さて醫の字の酉は。即酒でござる。また醫を毉と作は。上にも云た如く。古へ巫覡の徒。専ら醫道を傳へて。禁法を兼ねて療治を爲たる故に。巫に从へて毉とも書き。其人を巫醫とも云ふ。此れも古へ醫藥禁厭あひ兼たる證據でござる。然れば彼土の醫師に。巫某と云が。古代に多有たる事も。既に上に申た事でござる。扨又藥方の名を。桂枝湯じやの。葛根湯じやのと。湯の字を付て申すのは。彼の酒を病ひに用ふる事を弘めて。酒に草根木皮を漬し用ふることゝ成たるゆゑに。其の古義を以て。直ちに其の主たる藥名を取て。麻黄湯。柴胡湯などゝ云た物で有りませう。此の湯の字を。たゞに藥を湯に煎じたる物ゆゑ。何湯と云と心得て居るは。いまだ思慮りの至らぬので有らう。と思はれまする。

扨世の中に。大黒惠。美須の像と申すが有て。家々に祭り。別けて田舎などでは厚く祭る。此の二柱の神の本說が。慥かに知れず。まゝ是を考へて申たる物も有るけれども。此が宜いかと思へば。彼處でくひ

違ひ。又せんさくが行屆かなんだり致して。今其を一々論辨いたしては。大分入りくんでならぬに依て。人の說と合はうが違はうが。一向搆はず。篤胤が考へ付け。思ひ得たる事を以て申さうでござる。彼の二柱の神は。大穴牟遲少彥命に違ひ有るまいと思はるゝでござる。其れは先日の會にも段々申すとほり。此の二柱の神は。殊に世の中に。御功績の有る神々で在たる故に。先きに申たる萬葉集の歌どもや。其外の古書どもにも。世の中の事は。多く此神の御始めなされたることに云傳へ。既に御紀には。百姓至レ今咸蒙二恩賴一とある程の事故に。其の御恩賴を忘れず。古へは家々に。此の二柱の神の御形代を。齋き祀つた事と見えるでござる。邊の田舍などでは。御像をばおかずに。唯に宮ばかりを置いて。その御靈代に。幣束ぐらゐを納めて祀る處がある。是が本當の事で有らうでござる。扨その宮の狀は。二柱相殿の形ちに擬へ。其内一方をば。低く小さくこしらへた物でござる。此れは其大きなる方は。大穴牟遲命。ひくき方は少彥命と云の意と見える。かやうの作り方は。たまさか江戸にも有るものでござる。さて是

を大黑惠比須と申す故は。まづ大黑と云は。大穴牟遲神の御一名を。大國主神と申すに依て。其の大國主の大國を字音で。だいこくと云た物と見える。此れを大黑と書くは。例の佛者どもの所爲で。其はこの大黑と云ふ文字は。佛書どもに考へて見たる處が。摩訶伽羅と云語を翻譯した物で。すなはち摩訶と云は大と云ふこと。伽羅と云は。黑と云字の意でござる。さて此のマカギヤラを。天竺で。武神の長とも云ひ。また摩訶伽羅天神は。戰鬪神也とも云て。勇烈なる軍神と聞えるでござる。これを大穴牟遲神樣と。附會いたしたことゝ思はれるでござる。然るにまた今一つの說が有る。それは南海寄歸傳と申する書に。西方諸大寺。咸於二食廚柱側。或大庫門前一。彫レ木表レ形。或二三尺。爲二神王狀一。坐把二金囊一。却踞二小牀一。一脚垂レ地。每將二油紙一拭。黑色爲レ形。號曰二莫訶歌羅一。即大黑神也とあり。是に依て見れば。何のことも無く。佛家の料理番の神のやうで。世に在る處の大黑とは。形狀までが小同大異でござる。なほ此の餘に。比丘女など云も見えて。名が同じことじやに依て。何の

靈驗それの利益と。例の貪欲なる僧どもが。彼をも此をも取込んで。勝手よく強說をいたした物でござる。然るを又俗の神道者流が。もとは佛者の強說とは知らず。又固より不學文盲にて。眞の古傳をも知らざる故に。牽强附會かれこれ混雜いたしたなれども。其の御像は。これは天の下に弘く成て。世に在る通りに作傳へて居るゆゑ。外に仕やうが无く。其儘あることゝ見えるでござる。今の世にある處の大黑。すなはち大國主の神の御形を申さば。まづ槌を持つて入らせらるゝは。ありや元來は槌ではなく。此の御國を御經營あそばさるゝ時に。御杖あるきなされたる。彼廣矛の狀の。數百千年以前より。段々御形狀の轉じ〳〵て。其柄なんどをも短くして。彼頭槌劔などをも思寄せて。遂に槌らしく見えるやうに成り。其前には。古への事實もまぎれ失せなんどして。とんと世の人も元を辨へず。實に槌ぞと心得て。今はまことの槌に造るやうに成たとゝ見えるでござる。また袋をかついで入らせらるゝ事は。大國主神樣は。庶御兄弟が八十柱まし〳〵て。其八十柱の神樣が。八上姫と云姫神の御許へ。御通ひなさる時に。大國主の神樣は。そのいッち後に御立なされて。袋を負で入らせられた古事を以て。今の世の御形にも。袋を背負せ奉つた物でござる。又鼠の緣ある事は。彼の八十柱の御兄弟の爲に。あぢきなく御いぢめられなされて。豫美の國へ逃げて入らせられた時に。其の豫美に御座なさるゝ。須佐之男神の御計らひで。野火を御付けあそばし。大國主神も。殆どこれには御こまりあそばしたる時。鼠が來て。內者富良々々。外者須夫々々と云て。地に穴有ることを御教へ申て。其れに依て大穴牟遲神は。そこを御のがれ遊ばしたることがある。そこで此神は。鼠を御愛しなさるゝと云こども申つたへ。其れから御祭り申すにも。子の日を祭日と致すことゝは成た物で有うでござる。猶こゝらの訣。委くは內會の時によッく分りまする。此の內。俵の上に立て入らせらるる事は。未だたしかなる考へも有りませぬが。何はともあれ。米を俵に入れるは。御國に限りたる事。凡て外國では。米は囊に入れるでござる。米の稿を以て俵と爲すことは。外國の人の知らぬことで。夫は每も申す通り。外國の稿は弱く力无くて。俵に作

業と爲す者などは。先日の會に申たる事等を。よく心に卜て。朝夕に大穴牟遲少彦神の御靈のふゆを。乞祈まつるべきことでござる。但し此のことも。なま狡意に。神を信ぜぬ世間の人々は。女々しくも聞受けませうが。其れは幽冥の道理を知らぬので。學問も一向なうちのことでござる。何のことも无く。世間のことは。凡て人事と云て。人の爲すべきだけを致したる上では。其の力の及ばぬ處をば。神の御靈を仰ぐより外のことは无いでござる。西戎人も孔子などは。能く此を辨へて居り。孟軻なども悪いことは悪いにもいたせ。此の心ばへをば且々も申て置いたでござる。夫までも无く。かの人間は人形の如く。神は人形を使ふ人間のやうな物ゆゑ。人事と云へども云ひもて行けば。其留りは幽冥の外ならぬことでござる。

さてこれは序でじやに依て申しますが。今の世の醫師方は。みな戎國の神農と申たる王の靈を祭ることなれども。これは何事も。我國の事をおいて。外國に從ふ俗の習とは云ながら。當らぬことでござる。夫れは先かの神農氏が。百草を嘗めたと云ことの有るから。過つて醫藥を始めたと云ひ傳へたるを。眞のことゝ心得てのことなれども。此れは漢土でも傳への紛れで。實は神農氏は。醫藥の道を始めたる人では无いでござる。まづ神農氏が百草を嘗めて。其道をはじめたと云ことゝ。和漢の人がみな。前漢の劉安が淮南子と云書を引て。證と爲ることなれども。此れは當らぬことでござる。夫は如何と云に。彼の書に見えたる趣きは。古者民茹草飲水。采樹木之實。食蠃蠬之肉。時多疾病毒傷之害。於是神農乃教民播種五穀。相土地宜。燥濕肥墝高下。嘗百草之滋味。水泉之甘苦。令民知所避就。當此時一日而遇七十毒。とある。此れは彼の國の古へ人。みな草を茹つては水を飲み。樹木の實を采りて。蠃蠬の肉を食ひ。國人それが爲に。毒に遇りなんど致して。むごい死をも致したに依て。神農氏すなはち。諸の草をかみ分け。嘗試みて。其の中より五穀を始め。人の口腹を養ふべき物を撰み出し。また土地のよろしきを見立て。其れを植そだつることを教へ。此時一日にして。七十の毒に遇たと云ことで。此の諸々の草を嘗味ひたることは。人の食でもあたらぬ

物を。撰分けやうが爲にいたしたることで。醫藥を定めやうとて。致したことでは无いでござる。漢の陸賈が新語と云物にも。民人食肉飲血衣皮毛。至神農以爲行蟲走獸難以養民。乃求可食之物。嘗百草之實。察酸苦之味。敎民食五穀。とあるは此のことでござる。神農氏と云は。かやうのいさをから令負たる名でござる。又その一日にして。七十の毒に遇つたと申すは。きッと一日に七十度づゝ。毒に遇たと申すでは无い。此れは唯數十度も毒にさへ遇て。嘗めわきまへたと云ことを。大數でかやうに申たぶんのこと。何も深い義理のないことでござる。かやうの類は。外にも幾らか例の有ることでござる。また尤も史記の三皇本紀などに。斲木爲耜。揉木爲耒。耒耨之用以敎萬民。始敎耕。故號神農氏とあるはこのことでござる。但しこのつゞきの文に。以赭鞭鞭草木。始嘗百草。始有醫藥と有るは。此の三皇本紀の撰者。唐の司馬貞が。新語。淮南子。搜神記などの文を謬解して。其たゞちに五穀を撰まんとして。百草を嘗たることを。醫藥を撰まん爲に。百草をなめたることに記した物でござる。

神農氏が醫藥を始めたと云ことの。世に弘まりたるは。此の司馬貞が謬りからのことでござる。こゝらを能く考へて。神農氏が醫藥の始では无いことを知て。醫祖としては。祭るべからざることをも考へるが宜いでござる。猶また醫賸に。其云神農定百藥者。昉見世本。而亥制禮註。神農子儀之術。蓋其說之來尙矣。而孔叢子云。伏羲嘗味百藥。乃在神農之前。楊朱云。五帝之事如覺如夢。剏於三皇之事。襲之不可知。亦不可窮而已。芸窓私志。至謂神農聞獸語而知藥。怪誕極矣。とあるをも思ひ合すべき物でござる。又よしやもろこしでは。神農氏が醫藥を始めたにもせよ。御國の神をおいて。外國の神を祭るべき由縁が。どうして有ませうぞ。守屋の大連の云れた語に。何背國神敬他神也と有ること。また我が鈴屋翁の歌に。「齋くべき神等おきて外國の。けしき神をら齋く諸人。と詠れたることを忘れぬやうにいたしたい物でござる。殊に大穴牟遲少彥名神に於ては。先日の會より段々申す通りのこと。こりや醫者ばかりでは无いでござる。誰とても。殊に大穴牟遲神様は。今の現も世の中の幽事と

云て。隱れて目に見えず行はるゝことは。盡く知看て入らせらるゝ。妙なる訣が有て。夫はあら〳〵。古道の大意に申たる通りのことでござる。

さて醫を爲す者は。よく〳〵藥を用ふるの法を學び。直く雄々しき大丈夫魂をもちて。尤も其容貌をも。嚴重にせねばならぬ訣も有るでござる。但し此の容貌をおごそかに致すことは。俗の庸醫輩の。藥を賣んとの計に。門戸を張り。容貌をかざるとは。其事は似て居けれども。其の意は甚相違でござる。實を云はゞ。容貌はどうでもと云ひたいなれども。容貌おごそかならず致ては。人が信せず。人が信せねば。自づからに其術もはか〴〵しく行はれぬ物でござる。此れは弘く人の命を救はんとするの信より出る。いはゆる權道で。此間も申たる。醫にまじなひの意もこもッて居るとは此等の事でござる。この事は早く孫眞人の千金方にも。夫大醫之體。欲レ得二澄神内視一。望レ之儼然寛裕。と申したは。これ篤胤が意と闇合でござる。さて人の病を悲むことは。己が一子の病を悲む如く。病者に對しては。古人も。飢鷹の鳩を捕んず心をなし。大活眼を開いて。其の病の根を搜し。此の病なほさずは置まいと。固く志を立て。もの致したならば。神の御靈のふゆと。我が人を活さんとする信より。練出てたる術と。病者の信仰と相合して。などか病の癒ぬと云ことは有るまいでござる。又かの秦の醫緩がやうなことの。今とても有まい物でも无いでござる。此秦醫緩が事は。左傳に有て。其れは成公が十年の處に。晉景公疾病。求二醫于秦一。秦伯使二醫緩爲一レ之。未レ至。公夢。疾爲二二豎子一曰。彼良醫也。懼傷レ我焉。逃レ之。其一曰。居二肓之上膏之下一。若レ我何。醫至曰疾不レ可レ爲也。在二肓之上膏之下一。攻レ之不可。達レ之不レ及。藥不レ至焉不レ可レ爲也。公曰良醫也。厚爲二之禮一而歸レ之とあり。世間の儒者や。から心の人は。かやうのことをばとかく信じませぬが。そりやまだ至らぬ故のことでござる。其れはこれまで。段々申たることゞもと。思合せて悟らるゝが宜いでござる。扨この二豎子のことからして。世に治し難き病をば。膏肓の病と云ことのやうに成たでござる。何とぞ醫者も。此らの處へ至るやうに。心がけ致したい物でござる。能く神の御由縁。また眞に醫道の本意と致す處を。心挂たならば。かやう

の場合へ出られぬと申すでも有るまいでござる。とかく古人に聞怖して。及び難いことじやと思て居るのは。そりや例の自暴自棄で。かの論語にも。顔回が。舜何人ぞや。我何人ぞやと申て勵み學び。又古き人の語にも。天地日月を始め。世にある萬の物。古への儘と見ゆる物を。人のみが古へに劣らうはずは无い。などゝ申て。學んだも有るでござる。とかく醫は。英雄の氣を逞しく。尤も若く壯健で无くては。業のはかゞ〱しくいかぬ物でござる。伊勢貞丈先生の温藏秘策と云物に。中山三柳と云人の申たる言じやとて。醫は四十前後より。五十までが盛じや。年老いては療治なりにくゝ。又藥もきかぬものじやと云たが。尤なことじや。年老ては。心が弱く成て。仕損じ无きやうに。唯病に障らず。補ひ〱とばかりに心引れて。大事々々とする故にきかず。頭痛がする川芎。胸の痞へ縮砂。腹の痛み木香と云やうに。何から何まで少しづゝあしらッて。藥は茶袋ほどになり。其の上にむやぶみが多くて。中々療治ははかどらず。唯一念に迷ひも无く。一文字に的中の藥を用るで无くては。病にきかぬ。と云ておかれたが。

尤な事でござる。然れども今の古方家と名のる輩の如く。病狀を知らぬ文盲醫者坊が。無面目に攻擊を用ふるのは。こりやごめんな事だが。いつも申す通り。藥の病にきく處は瞑眩の氣味が有る故。あやぶみが有ては。旨くはいかぬ訣でござる。さすれば若くて。剛氣壯健で无くてはならず。其れを俗の人情では。とかく年寄て。重くるしう見える醫を信仰するが。その醫者も。若い時はよく致したにしろ。彼諺にも。麒麟も老ては駑馬におとる。と云やうに。業がすくんで來るから。其らをも考へるがよいでござる。況て固より庸醫ならば。年長て殊勝に見ゆればとて。其れは佛道の大意に申たる。老犬の尨も同じことで。何の役にも立ちはせぬ物でござる。さて右に就きては。孫眞人の千金方に。明說が有るから。此に擧げて注解を加へませう。

凡大醫治レ病必當下安レ神定レ志。

この安レ神と云は。大切の人命を預ることゆゑ。假にも浮きたることなく。能く精神を。かの氣海の邊に安鎭して。また定レ志と云は。能く其の病の根據する處を探り求めて。此病はこゝを如此く攻て。

彼處を如レ此くひしがんと。とツくりと方と證と相對する如く。少かも手ぬけの无いやうに見定めて。そこへ一筋に志を振り定むることでござる。

無レ欲無レ求。先發二大慈心一。不レ問二貴賤貧富一。視爲二一等一皆如二至親一。

と云は。唯一と筋に其病苦を救はん事をのみ思つて。少かもおのが利欲を求めんなどの心なく。第一に大仁心を發して。貴いと賤いと。貧いと富とを擇はず。一等に視なし。又皆如二至親一と云て。其扱ふ病人をば。悉くわが親妻子の病を悲む如く心得ろ。と云ことでござる。

亦見二彼苦惱一若二己有一レ之。深知二悽愴一。

と云は。病人の苦み惱みを見ては。おのれ病で苦惱む如く心得て。深くそれを悽みあはれむと云ことでござる。

勿レ避二嶮巇晝夜寒暑飢渇疲勞一。一心赴救。

と云は。其の病者の許へ行く道の。けはしくさかしきをも厭はず。又夜で有うと晝であらうと。又寒からうが。暑からうが。飢からうが。疲れやうが。勞で有らうが。自分のことは一向に思はず。一心に其へ赴いて救へと云ことでござる。

如レ此可レ謂下慈二憫蒼生一大醫上。

と云ふは。右の如く醫事を行ふ者は。これが眞に。蒼生を慈み憫むの大醫。と云べき者じや。と云ことでござる。

反レ此則是含靈巨賊。

と云は。上に段々云た如くに。道を立るは。眞の大醫なれども。此に反して居るならば。其は含靈の巨賊と云ものじや。と云の意でござる。さすれば今の醫者坊ども。大かたは。孫眞人が謂ゆる含靈の巨賊でござる。なぜと云に。大抵の醫者坊が。不學文盲だから。醫道の本意を知らず。病狀にも暗いに依て。安神定志も无く。又利欲のみを事として。眞の慈心は无く。貴賤貧富のへだてが。殊に甚だしく。人の病苦を見ては。上邊こそ。物のあはれ知り貌にもてなせども。實は何とも思はず。或は道のわるい處。寒いとき暑い時なども。己が爲にさしもならぬ處へは。不在を云たり。斷りなどして。不實を働くものが多い。此が何と。含靈の巨賊では有まいか。と云たのでござる。

さて右に付て。序でじやに依て。俗の醫者坊どもの有状をあら〳〵申さうが。其はまづ醫を爲す者は。孫眞人の申たる通り。其容貌を嚴かにいたして。病家に信ぜられ。病の邪氣には。怖れらるゝやうに致したいものじやが。今時の醫者の仕ざまは。甚しいでござる。其れはたゞ名利名聞のことにのみかけ走つて。眞實から出て致すことゝては無いに依て。其容貌をかざり。大門戸を張るのも。拙者の只今申す事とは見込が違つて。おのが潤屋の計にのみ致す事で。云はゞ體のよい賣藥師でござる。その好曲わる工をして人を欺き。物取るのてだての巧者なること。醫術の方よりは。百陪もまして居る。此方も屋鋪に居たるみぎりは。そんな委き訣も知らんで居たが。かやうに外宅いたして。始めはしッかり。此道を賣うと存じて。弘く醫者にも交つて見たる處が。醫者が誠にたんと有て。風來が天狗しやりかうべに。今時の醫者と云は。武士の子なれば惰弱もの。百姓なれば疎懶もの。町人なれば商を爲得ず。職人なれば不器用ものにて。口過ぎをしかねる者が。醫者にでもならうと云。それを號けてでも醫者とて。あたま

くるりの長羽織。見えと座形ばかりにて。露路も長屋も踏むもすぐるも。そこらこゝらが。犬の糞だらけ。醫者だらけ。病家もめくら。醫者もめくら。めくら千人の浮世なれば。これを呑むもの。往生の素懐をとげながら。恨みもせねば。氣の毒なども思はず。あゝ悲しいかな。文盲なるかな。と云たる如く。いや誠に。あいそもこそも盡果た者どもばかりで。其業の事は。人の命にあづかる大切のこと故。相應に學んでも居やうし。是しきのことは。知ても居やうと思ふ處が。一向なもので。今の古方家と名のる輩は。やう〳〵吉益周助が。傷寒論と金匱要略の中から。おのが氣に入たる方を。拾ひ出して拵へた。類聚方と云物を。なま〳〵に心得たぐらゐのこと。又後世家と云輩は。方彙ぐらゐ。もちッと働た處では。津田玄仙が療治茶談。加藤玄順が醫療手引艸。やうの物を見かぢッて。夫でもさすがに。今時は人が利口に成て居るから。人の侮りを禦ぐ爲と見えて。古き醫書の名目ばかりは能く覺え。その内一とひら半ひらばかりの處を。記臆なんどもして。夫で素人をおごし。甚だしきは夫も知らず。彼川柳點に。「か

ごへは無點。かな付は内で讀み。と云ひ。また。「唐本は。鴐にのる時ばかり入れ。と云ひたる如く。づぶよめんで。讀める面をして居るも多く有るが。よめる奴も讀めぬやつも。大抵はたゞ。人をそらさぬとか云修行ばかりに身を入れて。世間の人氣をはかり。女や愚人の心に合ふやう〳〵。とすることばかりを勉めて致し。少しも爲めになりさうな病家へは。何んでも无い病にも。日に二度も三度も見舞つて。物の哀れを知貌にもてなし。大小便もなめぬばかりに世話をやき。年始暑寒の見舞は云に及ばず。ふだんも伺候してきげんを取り。適々おのが出入の家へ。他の醫者でも呼んで藥を貰ふと。其れをそこいぢわるく。邪魔を入れ。つゝき出し。其は但し自分も出入る處ゆゑ。まづ夫れども思ふけれども。人の行先の病家をも。手を入れ足を廻して覗ひ取り。又或は組合と云が有て。五人か七人の醫者が申合せて。其奸曲の爲やうなどが。誠にかほどまでにも。心の行屆く物かと。甘心することばかりが多いでござる。此は俗にも申す。性は道に依て賢しとか申すやうに。學問の道に賢き人の拵へた物を見ては。どうしてか

やうに。委く物を辨へて。かやうに博く吟味をしたことかと。胆が潰れ。ごろぼうはごろぼうだけの智慧が廻つて。惘れほすやうなことが有り。賣主醫者には。まいすだけの。此の方の思ひも付かぬ。奸曲なる智慧が有て。たまげきるやうな巧がある。これは篤胤がどうして知たと申すに。先年市中へ外宅いたして以來。例の組合仲間にならぬかと申て。篤胤をそゝのかした輩も有て。其組合なかまの。仕組の樣子をも聞き。其れから及ぼして。其の仕ざまや。咄しのはし〴〵考へ合せて。察し得たることも有から。其内一つ二つの奸曲を申さば。此れは名をば申されぬが。元知たる醫者の申すには。病家に信ぜられんと思はゞ。今日藥を與して。明日は少かたりとも。其驗の見えるやうに。是非するが宜いと申すから。どう爲るぞと問たれば。かねて灰墨の丸藥をこしらへて。もし明日にも成て。黑き大便が出たならば。此方の藥の能く廻る驗じや。と云聞せおくと。果して一兩日の中に。黑き大便をするに依て。始め此方の云ひきかせたる通ゆゑ。信仰する氣になる。そこへ付入て。高料の藥を勸めると云やうに。こん

な類ひの巧事がしたゝか有るさうでござる。とかく病人の末期といふ處で。此方にかやう〳〵の藥が有て。此病に相應すると云こ。どんな貧乏者の金子をも。得らるゝ物じやと云ことでござる。また人の內には。是非おふくろと云者か。或は女房か。其家々に。おもと。はのきく者が有るものじやが。始めて行つては。まづ其れを見つけるが肝心のことで。扨それへ氣に入るやうに爲さへすれば。宜いものじやとも申す。また組合仲間の仕やうは。譬へば此方の出入る病家に。大病人でも有て。とてもいけそうも無い時は。早く用心して。彼の川柳に。「とゞめをば他人へゆづる匕かげん。と目立たぬやうに。彼組合の中の醫者を進めて。其れに渡し。互にほめ合て。死でも生ても恨の无いやうに。これも川柳に。「一變と云ふ逃道醫者は明ておき。と有如く。己がしくじりを押隱し。又死んでも生ても。其の病家を組合の內で持つて居て。組合の外へ渡らぬやうにと。夫はそれは行屆いて。其計をする。若しひよッと。親類の勸めとか。何とか云て。組の外の醫者にでも挂ると。表方は何くはぬ顏に。美しくあひしらッて。斷られても。やッはり日々に見舞ひ。其內深切がほに持賓て。組合の醫者を見舞ながらに同道し。遠まはしに。右の親類から勸めて挂た醫者を。をかしなことを爲てつゝき出し。とう〳〵其の病家を。組合の中へ引つたくり返すやうにする。此狀が。とんと一町內の犬が。背中善くして居る處へ。他町の犬の一匹も來ると。寄りたかッて嚙伏るやうな物で。犬は正直にわん〳〵云て嚙合ふが。醫者坊どもは。人じやに依て。さすがに嚙合はせぬけれども。やッはり犬の境界でござる。此方も。毎度犬醫者どもにかみ出されて。覺えが有る。見す〳〵此方の癒したものを。犬醫者どもに其功を奪はれたことも大ぶある。何でも己が組合の病家は。外へやらず。他醫の病家をば。色々と祕術を回らして。取るやうに取るやうにと計るでござる。まだ憎いことは。譬へば此方の預つてゐる病家が。相應に黃金でも有て。其れを取らんとするには。彼の組合の醫者をやッていはすには。拙者は平田が懇意のものじやが。平田は殊の外に。こちらの御病證をおあんじ申て。序でに寄つて見てくれろとの賴みゆゑ。參つたとか云て。委しく樣子な

どを見て。大造に平田を稱る。さて云には。定めて平田は。かやう〳〵の煉藥ならねり藥。丸藥なら丸藥を。用ひたらうと問くでござる。そこで病家は今まで用ひぬ事ゆゑ。用ひぬと云。そこで其れはごうして。平田がそれを用ひぬ事かと。不審な貌をして。譬へば。えんりんのあんかん丹とか。何とか名を云て。あの丸藥は。平田が家の祕方で。けしからずかやうの證に能く可く。とか何とか。大造に稱て。明日にも平田が見えたならば。拙者がかやうに申たと云て。其の丸藥を貰はるゝが宜い。などゝ云て歸る。そこで病家が。此の證に大造きくと云事故。しきりと呑みたくなる。そこで何くはぬ貌で平田が行くと。右のことを云て。其丸藥を望み。何とて今まで其れを用ひ給はぬことじやと云へば。氣の毒げにもてなして。したゝかに高料に上る藥ゆゑ申すも。お氣の毒でなごゝ云。然れども病家では。彼のまはし者の醫者坊が。しこたま稱て行つた事ゆゑ。呑みたくてたまらぬから。高金をかまはず出して所望すると。彼のえりのあかを丸めたやうな物へ。麝香で香ひを付け。金箔などを衣にかけてやッて。黄金をせしめる。此は互にかやう致すことで。其内にも按摩とりや。はい〳〵醫者を。少づゝの合力などして。其れらに色色とたゝき廻させる者も有るでござる。また近ごろ。脈訣刊誤附錄を見た處が。衡陽の羅氏曰。今之醫者ハ毎々毀前醫。驚恐病家。意圖厚賂。尤爲不仁之甚ともあれば。からにもかやうのことが。幾らか有ると見える。さて右の外にも。終日云ても盡ぬほど。醫者の奸曲の傳受を云て。その組合になれと。勸めに來た醫者坊が有たが。此の方は何の事でも聞いておけば。善惡ともに心得になる故に。だまッて聞ては居たが。心の內では。其面へ唾でもしかけたく成て。尤も此方はそれまで。あまり。見識などを云たことも無いに依て。やッはりそんな類の人間と。見立られたのでは有らうけれども。能くも篤胤に向つて。かやうの實ならぬことを申すぞと。惘れ果てたでござる。彼奴かやうの巧みに。けしからず功者ゆゑ。先頭此邊へ參つて。大きに流行ましたが。中々此方の及ぶことでは無い。尤もよほど御大家の藩中で。君より賜はる處も少なからず有て。何不足な事もない身の上ながら。心はかやうに汚穢でござる。

殊に内弟子なども有たが。何を教へたことやら。何を習つたことやらと。常に怪しく思ふことでござる。この醫者坊が咄しに。今の醫者に。かやうの巧みを爲ぬと云はとんと无い。其許はそれを爲ぬに依て。貧を爲ると云たが。何さま世間の醫者を。さてはさう歟と。思ひ合さるゝことが多いでござる。病家も重病難病に遇ひては。多くは困窮なもの故に。醫師も成るべきたけは。惠みを挂て療治すべき物でござる。然るに例の川柳に申たる如く。脈よりも。足もとを見て醫者は逃げ。と云たぐひが多く有て。實に見るに忍び難いことでござる。例令貧乏で一生居やうと。醫者がはやるまいと。そりや爲方が无い。死と成て全きよりは。砕けても玉がよいと。毛唐人さへ申たものを。さて上に申たる醫者坊は。三四年も交はッた男じやが。其後は來ても。ろくな會釋をせず。又行きも爲ぬに依て。平田は時節を知らぬかたくな者じや。と申て居ると云ことでござる。但し此醫者の名も。所も貌も。今はさッはり忘れて。知らぬ人と成たでござる。

さて篤胤は。かやうのことを見るたびに聞たびに。だん／＼醫者がいやになり。又何ほど骨折ても。辛勞しても。療治を爲損じたることも有り。殊に古道の學問は。日を逐つて急がしく成り。中々以て片手業に出來ることでは无い故に。醫者ははたと止めたことでござる。

さて斯の如く。醫者の風のわるく成たるも。實は病家もまたわるいからのことも有る。それはちと此方の口からは。申にくいけれども。强て病家のお氣に入て。衒はうと云氣が无いから申すのじやが。其惡いと云は。まづ第一に。醫者を殊の外に安く扱ふ。それはとんと云々。門人云。これより以下は。ゆゑ有て除かれたり。

扨また膵と云物がある。此はおらんだ語に。大きりいると云物で。此れはもろこし人などは。とんと知らず。内經を始め。漢の數百部の醫書に。一向噂はなく。西洋人の始めて見出し。考へ出した物でござる。其の居所は。胃府の後ろに有て。大きさ牛の舌ぐらゐで。此れには酸く薄く。清涼と云て。すみひやゝかで。能く物に透滲て。蕩かし消化し。收斂と云て。濁れる物を。しめよせすますの液をしみ蓄へてをる物で。これも又腸胃が張ると。其蓄へてをる水を。膵管と云て。細かなる通ひ道より。腸胃へ注ぎ入れ。飲食を消化しすまし。此物の性は。譬へば白礬の。忽ちに汚水を澄すやうな德で。彼の胆液と。互に相制し相助けて。胆の苦き水は。右申す通り。酷烈とはげしく。火氣を含んで居る程の事ゆゑ。物をこなす功は强けれども。猛勢の物ゆゑ。物をベツたりと濁らし。其れをすまし分るの功がない處を。この大きりいるの液の。温潤に。物を清し分る物が注ぎ入て。其の胆汁の酷烈き性を抑へて。清し分ち。其すんだる處は。乳糜と云て。女の乳房に出る物と致すでござる。扨かやうに食物をこなし分つ處は。胃囊から。右申たる謂ゆる百尋の細い處の。假に小腸と名づけたる間で致す事で。其の乳糜と云て。乳房より出るやうな物と。漉しわけたる滓をば。右百ひろの。急に太く成てをる處の。謂ゆる大腸へ送つて。これが大便でござる。此の太く大腸となツて居處は。どうぢやと云に。臍の右の脇から。胃囊の下へ廻つて。夫から左の方へ曲り。脊の方へ寄て。肛門へつゞいてをるでござる。然らば其の乳糜と成たるよき處は。どうなると云に。右申たる通り。謂ゆる百ひろの。彼の細き處に。盡く微細かなる抜け道の管が。毛の生たやうに成つて居て。それが一つに寄りあつまり。譬へば投あみの目の。したゝか有るのが。手元へ寄るほど。漸々に目がつんで。遂には太綱一本と成て居るやうに會合して。丸長い囊となり。上の口が細く直に管と成て。其管が心の藏から出てをる。靜血脈と云脈管へ。けつぼん骨の處でつづいて。これから心の藏へ歸して。血と成るでござる。」

扨また心の藏と云物は。どこの處にありて。何を主ざる物じやと云に。まづこれは肺の藏の訣から申さ

ねば。分らぬこと故。これから云ひますが。一體肺の藏と云物は。右に申す通り。天地の氣を。口と鼻より吸つて。彼の氣道から送つて。此肺の藏へ受入れる物でござる。其在處は。胸一ぱいに成てゐて。諸の藏のうへに。これがいッち大きいものでござる。此が胸中の左右に垂れてをる。それ故彼の氣道も。喉元の處では一本なれども。先で二またになり。肺の藏の左右へ行て。先々いく岐にも成て幹を生じ。其幹の先へ。盡く小な囊が付て。其狀は。近く云はば。葡萄の實のついたやうになッて。其凡てへ膜のかゝッてをる處は。其のぶどうの實へ。其れながらに囊を挂たるやうなもので。其の悉くの囊へ。氣道から呼吸する天地の氣を。のび縮み出入して用を爲すでござる。さて心の藏は。其二岐に成て居る。肺の藏の間に懸り居て。其の狀は。未だ開かぬ蓮花の如くの形ちで。其尖の處は。下に垂れてゐる。これは元來血の府で。その中を割つてみると。中にしきりが有て。左右二つに分つてをる。心の左室。心の右室と云でござる。鳥のも此のとほりでござる。

さて明晩は。心の藏すなはち血の府から。血の一身を循る仕かけより。陰莖陰門の訣。また交合して。其腎精が子となる訣。女に依て子の出來ぬ訣。それより養生の心得。若あはよくは。人の死んで。魂の行方は。どうなる物じやといふ處までを。具さに申さうから。各申あはせて。ちと早くお出が宜しいでござる。

さて心の藏すなはち血の府から。血の一身を循る仕掛は。どうじやと云に。心の藏は。肺の藏の中間に懸り。たがひに通ふ道筋が有て。彼鼻と口より呑入れて。肺の藏へ受たる天地の氣をかりて。其氣の力に依て。心の藏が縮張をして。其いきほひに連れて。かの左室の頂からさしいでゝをる。動血脈と云脈管へ血を送るでござる。胸のこゝの動悸を虛里の動と申すが。こゝの處は。丁ど心藏の先の。尖の處に當つてをるに依て。これは心の藏が延びちゞみ。血の出入いたす。其勢に依て動くのでござる。夫故びッくりするか。或ひはかけ走りでも致すと。おのづから血の出入もせはしくなる故に。こゝで動悸が劇しく打つ物でござる。此の動血脈と云は。心の左室からさし出て。胸をつたひ上つて。けつぼん骨の下を通

り。これより深く脊骨に付て下へさがり。薦骨の骨の處まで。長く來てゐて。尤も夫までに。したゝか幹がさして。其の先々が。まことに細密なること。毛のごとくに分れ〳〵て。胸や腹に有る處の。諸〻の藏府へ行てをる。又肩の處の幹は。二本さして。これは右と左の腕へ行て。此ぴく〳〵と動く脈がそれでござる。此のぴく〳〵動く訣は。其脈管の中に。障膜と云が有て。これは二分程づゝ隔てゝ。譬へば竹の節のやうに。尤も中はあいて居て。此れで血を先へ程よくちぎつて。あがきおくり。先へ血の流れ過ぬやうに。又あとへ返らぬやうにとて有る物で。此れの張り縮み。血の運行する勢ひに依て。これが動くのでござる。かやうに動く脈管ゆゑに。動血脈とは云でござる。尤も肩の處から。手の先へ來るまでに。夥しく小枝がさして。項。頭腦。顏。背などへも循り。また尻ぺたの處で左右へ分つて。兩足までに流れめぐつて居るでござる。

さて又右中たる。心の藏の右室の頂きから。靜血脈と云ふ脈管がさし出て。分れて上下へ行き。其上へゆく幹は。此もまた左右に岐れて兩手へ行き。それから例の如く。細かなる枝がさして。項。頭腦。面。背に行くこと。やはり動血脈のとほりでござる。又其下へ行く幹は。これもまた動血脈の如く。脊骨へ付て。薦骨の處までさがり。夫から二岐に成て。兩足へ流れ分れて。總身にみりんして居ること。やはり動血脈の如くでござる。但しこの靜血脈と云には。動血脈の如く。中にしきりが無く。夫ゆゑ血の通ひに。ぴく〳〵動くことがないに依て。靜なる血脈と云ふ意で。靜血脈と名づけたものでござる。扨この靜血脈と云ものは。何の用をなす物じやと云に。彼左室から出てをる動血脈は。心の藏の血を繰出し。一身へ循らすの用を爲し。此靜血脈は。動血脈から。先へ〳〵とくり送つたる血を。また心の藏へおくりもどし。かの右室へ納める爲に。右室の方から出てをるでござる。其返る仕掛はどうじやと云に。まづこの動脈と靜脈の二つは。總身の血脈の本じやに依て。尤も太く其脈管の中が。大約指一本を容れらるゝ程のことで。其に普く幹から枝を生じ。分れ〳〵て。總身の中も外も彌蔓して。縱横緻密に組合ひ。織りなしてをること。とんと老絲瓜のすぢの如くに

成て居るでござる。然れどもこゝに妙なことの有るは。動脈の先々の細かなる處が。盡く靜脈の。する〳〵の先と連つて。これは動脈管を。先へ〳〵と血が巡るあひだに。段々と濃くなり。且めぐる勢ひもよわく成たる處で。其先の連つて居ることゆゑ。靜脈へ流れて。これからはそろり〳〵と靜脈づたひに。心の藏の右室へ返り入て。こゝで新しい血と和し合ひ。又新しく肺氣をかりて。左室の方から。動脈管へ送出し。右の通り搃身を循り。其の末の先へ行ては。又右の通りにかへり。かくの如くして。信に環のはしなきが如く。巡り〳〵往來して止むことなく。一身を榮やかし養ふことで。其本は先刻申す通り。食物を腸胃で消化し。其精微なるところの。乳糜と云て。乳の如き物と成たるが。靜脈をつたひ。心の藏へ入て。血と成るのでござる。

さてかの動脈血脈の二筋が。脊骨へついて下るまゝに。腎の藏へ來て。血と小便とを分ち。まだ陰囊へ下つて精汁と化り。また人の子を生ずる訣をあら〳〵申さば。まづ腎の藏と云ものは。どこに有ると云に。これは心窩と臍との中分の。兩側に位して。脊骨につきて二つあるもので。たけは指五本ならべたほど。横は指三本を並べたくらゐの大きさで。これへ動脈血脈の二脈管が來て。その動脈からおくる血を受て。其血の中に含みある處の。無用の鹽はゆき渣をこし分る。此しほはゆき渣と云が。即ち小便でござる。これを送り出す。輸尿管と云管に成てをる道が有て。夫から膀胱へおくり納めることでござる。この膀胱といふが。謂ゆる小便府で。その狀が。壜を逆さまにしたやうな物で。其底の處へ。腎の藏から。小便をおくりこす所の。彼の輸尿管と云道すぢが續いてをるでござる。其先の。云はゞとツくりの口の處が。陰莖へつゞいて。此れが小便の出る道でござる。さて其の膀胱。いはゆる小便ぶくろへ小便が溜つて居て。出る仕かけは。先づこの膀胱と云物は。これも縮張のいたす物で。尿が溜れば張り。はツては彼の尿道が。おのづから開けて。小便が通ずるでござる。

一體右の訣ゆゑ。小便は血の滓で。もと腎の藏で夫を分ち。膀胱へたまつて居て通ずる物で。唐人の云やうに。小腸と云道から。わかり傳つて。膀胱へくると云ふは相違なことで。とツくりと體を解て見たことがなく。推あてに申たことで。此れはすでに

京都の山脇東陽先生が。藏志と云ふ書を著はして論じおいた通りのことでござる。
扨また腎の藏で。小便をこし分たる。其純粹のよき血をば。すなはち腎の藏へつゞいてをる。かの靜脈と云て。血を心の藏へ輸りかへす脈管へつたッて。其先のことは。右申たる通りのわけで。心の藏へ返るでござる。
さて腎の藏に付てをる。動脈と靜脈から。幹が二本づゝさして。夫が下つて。左右の睪丸へつゞき連なり。これはなぜかやうに成て居ると云に。かの動脈から受たる血より。この睪丸で。精汁を漉しわけ製して。其殘餘の血をば。又かの靜脈へ送つて。元へかへしやらんが爲でござる。
このかた睪へ。二本づゝ動脈と靜脈と付て居ることは各々探り試みても知れることでござる。但し睪丸の形ちは云々。
さて精汁を睪丸でこしらへて。純粹に熟し成つた上で。夫を輸精管と云て。すなはち其精を輸るの管道から。上へのぼせて。精嚢と云て。精汁を蓄へるの嚢へ。をさめておくでござる。扨この精嚢と云ふくろは。どこに在ると云に。膀胱すなはち小便ぶくろの後の方に有て。その大きさは。指三四本を合せた程のたけで。巾はやう〳〵親指の巾ほどしかない物で。薄膜と云て。うすい皮を着て居る物でござる。先の方が細くて。管に成て。陰莖へ續いて居る。此を輸精管と云。これは精を輸つて射し出す道でござる。其先へ行ては。小便道と一つに成てをるでござる。一體陰具の邊は。神經が殊に多く充々てをるゆゑ。すべて人が情意發動いたす時は。神氣靈液。血もまた充實いたして。そこで陰具が焮熱勃起する。こゝに於て交接いたし。洊りに此を摩蕩すれば。神經大きに夫に感じ觸れて。靈液いよ〳〵注ぎ來て。その已甚きに至り極つて。堪忍ばず。其勢ひ直ちに。精嚢におし迫つて。射出すことでござる。
扨これであら〳〵男子の體のわけはすみますが。婦人とても少か以て。男と違つて居ることは無けれども。唯その相違な處は。子宮及び陰具の邊ばかりが違つてをる。其内まづ子宮と云物は。大きさ雞卵ぐらひで。小袋を逆さにしたやうで。底は濶く。其巾が。大かた指二本半を横にした程で。口は窄く。丁ど陽物の

口を横にしたやうな狀でござる。既に產をした者は。幅濶くて。上の底から下の口まで。長が大抵指三本を並べた程の物で。その狀。上はひろく。下は窄まつて居るに依て。すこむる三角のやうに成て居る。內は甚だ狹くて。僅に蠶豆一粒を容れる程しかないでござる。然れ其孕めば延張つて。したゝか濶く大きに成て。其底の處は。臍あるひは臍の上あたりまでも及ぶ。其體質を見れは。肉のやうにも有り。又膜のやうにも見えて。甚だ厚い物でござる。それを破つて引延して見たる處が。いや。したゝかにのびて薄うくなる。是を以て朘肝すれば。中で子の育つに隨つて。此れの延張てくる所以がよくわかるでござる。

扨また子宮の底の兩方へ付て。卵巢と云袋がある。即ち玉子の巢と云ことでござる。これはあるが中にも奇妙な物で。其大きさが。大がい雞の卵ほど有て。此れへ彼の腎の藏からつゞいて居る。動脈と靜脈とが來て連なり。巨細なる枝に分れて。この卵巢の中に彌綸してをる。婦人に此卵巢の有ることは。男子の睾丸のあると同じことで。右の腎の藏から動脈と靜脈とが流れ來てつらなり居ることは。さんと陰囊へ。腎の藏の動脈と靜脈とが連なつて居ると同じことでござる。

さて此の左右の卵巢の中に。尤も大きいも小さいも有るなれども。大概大きさ豆粒ほどの卵が。片かたに大抵二十ばかりづゝ付て居る。これを卵と云でござる。扨此れをつぶして見れば。清く澄みきッたる彼の雞の玉子の白みと同じ物が充ちて居る。此を試みに煑て見ると。凝固まつて。雞子白を煑たやうになるでござる。此れはどうして出來ると申すに。其本をば父母に受たる後には。段々彼の腎の藏から續いてをる。動脈より血を受て。その精とも精なる處を泌別て。卵の中に收めて。其餘りの血をば。彼の靜脈の管から元へ返しやる。其の仕掛は。やつぱりかの陰囊で。精液を造つて。其の餘りの血を。靜脈から返しやると同じことでござる。

さて和名抄に。源の順朝臣の。謂ゆる玉門から。子宮の口までの處を。膣と云。此は陽物をうけ又は經水を通じ。胎子を產出すの道でござる。其膣の字は肉月に室といふ室の字をかいた文字でござる。さて其

のうはつらの方に。普く皺ひだが有て。此處には夥しく神經が布滿てをる故に。知覺ること甚だ敏なことで。常に滑かなる液を滲出して。滋潤いたして居るでござる。もし情意を生ずる時は。男子の陰具の勃起するが如く。多液が其處の神經に充ち張り。既に交接して。その感快の極に至つて。この液を。常よりは多く涌泄いたすので。彼の卵中に蓄へある精液のもれ出るのではないでござる。

さて姙娠いたす故は。男子の精を。子宮の口へ注射こむ時は。かの卵巣に滲透して。其の中の一卵に入り。是に於て。双方の神氣合ひ感じて。彼の卵が生機くの勢ひを發し。漸くに長じて。其活勢が日々に萌起つて。大きくなる。是において。其の邊に充ちてをる神經と血絡とが。かこひまもツて守護しつゝ。漸に子宮の眞中へ位を定めて。子宮の內に有る處の血絡が纏つて。遂に胞衣を成し。其胞衣と云物は。元より卵に被つて居たるうすき膜で。子を引包んでゐる物でござる。尤もその上の方へ懸つてをる處は。厚さ一分。もつとあつい處は。二分程も有るけれども。下の方を包んで居る處は。大きに薄い物でござる。さやうに薄き物ゆゑ。子の生れる勢ひに破れさけて。其のうすい處は。ちり〳〵と縮んで。あつい處へ寄添てしまふ故。とんと蓮の葉を見たやうに見えるけれども。一體は袋で。子の全體を包んでをる物でござる。然れ共たまさかには。これの甚あついも有て。夫は此袋を被つて居るなりに生れる。此れが世にいはゆる袋子でごでる。其れは生れ出ると直に。其袋をちよいと切破るが宜いでござる。不按內なる人などは。此を甚だ不祥なることにして。其の袋子を捨て仕まふことなども有る物でござる。さやうに袋をきり裂くと。其の簿い處はちゞんで。厚い處へ寄て片付くでござる。

さて又この胞衣から。二本の管が有て。其の二本が一つに。縄の如くねぢれて。兒の臍と續いて居る。これが謂ゆる臍の緒でござる。此の臍の緒が。二本に成て居る故は。其の一本は。母の動脈へ續いて。これから血を臍へ受けて。兒の腹中に入り。これで體を拵へたて。其餘りの血をば。いま一本の管へおくつて。母の靜脈へかへし。夫から母の心の藏へ戻す爲の物でござる。此等はざうさもないこと。吾が妻妾

の出産のときに。一寸覗いて見ても知れることでござる。此の二本の管より。臍へ母の血を出入して。兒のからだは成る物ゆゑ。近く云はゞ。臍はわが體の鑄口でござる。

扨また人ばかりでも無く。氣と形とを具へてをる程の活物は。盡く卵より生れぬと云はなく。唯其の卵が。母の體内に在て。化して兒となると。體外に出て化するとの。差別ばかりでござる。これは活物ばかりでも無く。草木の子仁も又一種の卵で。此れは土の中に在て。形を化するのでござる。此れに付ても。諸越人の。母をいたく卑しめるが當らぬことでござる。既に儒道の大意にも申たることながら。彼の南秋江が鬼神論に。五穀は土に植て生長すれども。其枝も葉も。みな種より出て。一つも土に屬する物がないから。種は父で土は母じやに依て。母は。その我を育てる功は。父と同じことなれど。骨肉をば分けぬから。恩徳はない。そこで母には親みがないから。もろこし周の定めには。母を卑しめた物じやと云て有るが。此れは其の定めを立た人どもが。草木の實の土に植て。生ずる處ばかりを見て。それに執著いたし。深くも考へず。一旦の見を以て。かやうの痴言を言ひ定めた物でござる。實は右の譯ゆゑ。相搆へて。諸越の說などに泥み。母を麁略になどは。思ふべきことではないでござる。然れども母ばかりでは。決して此の體は生れず。父の精液神氣と。母の精液神氣と相ひ感合して生ずることゆゑ。此方の身に取ては。故鈴屋翁の言れました通り。父と母と同じ恩德で。更に隔つべきいはれがなく。其父よりは。母の位の卑いことは。そりや父母の互ひの上にこそ。差別はあれども。夫は父母どうしのこと。子の方よりは。彼此尊卑の差別を立て。さかしらすべき謂れなく。父と母と同等に。厚くつかへ申すべきすぢでござる。

さて人は。男の神氣を。女の胎に射入れて兒となれども。活物の中に。魚などは。女が玉子を外へ生出して後に。男の精氣を。夫へ射かけて子と爲すでござる。其れは金魚などを飼ひおいて見るに。女魚が玉子を藻草へ生付ると。直に男魚が。それへ尾を彈きながら。しらこと云て。精氣を泄し挂る。これに依て子と成るでござる。若しその女魚が。玉子を生

む時分に男魚をのけて有ると。せつかく生んだ玉子が腐つて。子にはならぬ物でござる。又鳥などは。これは唯。陰と陰とを付合せて。其の時雄の精を射込むと見えて。雌が玉子を生み出しても。魚のやうに。しらこは掛けぬでござる。これらはみな各々異なる處で。實は神のさやうに。御定めなされたること。定めて深き由縁のあることで有らうでござる。何れにも男女の精氣合體せねば。子とは成らぬ處は人も鳥けだもの魚虫も同じ理りで。更に違ひは致さぬでござる。かやうのことも。序でじやに依て。思ひ合さるゝだけを。申すばかりのことでござる。

さて兒が母の胎内に在る時は。逆さに成て居る物で。世に云ひ思ふ處とは。大きに違ふことでござる。これは産科のことを。始めて唱へ出られたる。賀川子玄子の。云ひ出されたることで。此の子玄子と云人は。大きに卓れたる發明の人で。産科一道の開祖となり。數百千人の産婦をためし見て。考へいだされたことで。それに相違なく。子玄子の時分は。いまだ西洋の解體の説の。御國へ傳はらぬ前なれども。よく考へ試し見て。云ひ出されたること故に。ひしと西洋の説に合ひ。又この方もためし見たる處が。相違なく逆さに成て居る。尤もたまさか千人に一人。つむりを上にして孕むことも有れど。これは變で此が謂ゆる逆産をして。産がむづかしいでござる。中々以て世に云如く。兒は本より胎内に正しく居て。其生れる時。子がへりと云て。とんぼがへりをして出るなどの譯では無い。夫は右申す通り。兒は子宮内一ぱいに成て居る物ゆえ。とんぼがへりをする境ひがなく。若しかへるならば。母の子宮ともに覆らにやならぬ處が。子宮の外面は。盡く腹中の藏府。總體へ綴合てをる物ゆゑ。此れもとんぼがへりは出來ず。もし爲れば。其兒をうむ婦人が。とんぼがへりをせにやならぬが。其はならぬと。これは人ばかりでもなく。獸でも胎内では。逆さまに成て居て。逆さまに生れるでござる。まだ思ひ合さるゝことのあるは。草木の實も逆さに成て居る。柿の實や桃の實を割ッて見ると。枝付の方には蔕がなく。先の方に蔕が有て。即ち逆さに生える物でござる。此れら全く同し道理でござる。今かやうに生れ出ては。一寸も逆さに成て居られぬ意を以て。どうして逆さに成て居

られる物かなどと思ふは。天地の神の。妙なる御業に依ることなる故を知らぬ者の。さたの限りな心でござる。又子が腹の内で乳を呑むと云などは。論にも足らぬ俗說でござる。

さて產の時に臨んで。はやめの藥などを用ひて。大さうにいきませるが有れども。甚だ宜くないことで。此は倭漢の學者たち。又西洋人なども。いと懇に誡めて有るでござる。其の故は。いまだ時至らぬに。いきみ過ぎる時は。胎内の子。其いきむはづみに生るべき順道を違へ。且は母の勢氣もくたびれて。そこで難產があるでござる。いきまずとも時至れば。自からにいきみが立て。自から止んとするに止み難く。體内の子も、順道に生れ出るやうに。神の成し置れたことで。さしも氣を揉むべきすぢでなく。然れども。千百人に一人。もし實に難產が有る時は。其時こそは。種々の手當も入ることなれども。千人に一人と云くらゐならでば。さやうのことはない。世に難產する者を見れば。多くはよろくそ醫者と。取上婆が不案内から騒ぎ出して。神のなされた自然を。背くことを致すに依てのことでござる。

扨二た子三つ子四つ子などと云ふことも有て。此のうち三つ子四つ子は。甚だ少ないことで。二人は常に有りますが。これは心得ちがひな人などは。不祥なることにして。忌嫌ふことなれども。これも大きに非ことで。更に忌べきことでも。不祥なことでも無く。實は目出度いことの限りで。既に伊邪那岐伊邪那美二柱の神さまも。二た子三つ子は御產みあそばしたことで。まことは父母ども。血氣潤澤。神氣も又壯んに健かなるが故に。彼の玉子のつぶ一つへ。神氣合體したるが故に。二た子は出來る譯でござる。じやに依て。恥べきことでも。不祥な譯でもない。かの伊邪那岐伊邪那美二柱の神も。蛭子と申て。かたわな御子を御生みあそばしたる時こそ。ふさはずとは仰せられたなれども。二た子を御產みなされたとき。常の如く目出度きことに思召したる故に。何とも仰せられなんだことでござる。既に景行天皇も御双生おはしまし。近くは東照宮にも御双生あり。其外高貴の御方々に。數へも盡されぬことでござる。扨また世間を見るに。二た子を生んでは。先に生れ出たる方を弟として。後に生れたる兒を兄とすなど云俗說が有れど

も。これは全く誤りでござる。此ことは神代の巻に。たしかな證據があるでござる。

扨又こゝに妙なことの有るは。男女神氣を感合して。もし血の中に瘀液と云て。悪き液の有か。さては子宮に何ぞ病が有るときは。かの卵が子宮内に位を定むることが叶はず。然れどももはや。活發の生氣を受たること故に。小腹の内どこぞへ位を定めて。そこに留まり。眞に位を定むべき處で無けれども。卵の生氣ますく\きざれ動くが故に。其處の血絡が寄連らなつて。やはり胞衣も臍の緒も出來て。養ひ育てゝ。全く兒の形を為す。然れども母の躰が。もし脆弱なれば。それは續かぬ故。兒の形はとんと腐り壊れる。こゝに於て其のくさつたる物が。母の體の。しかもそでもない處にある故。漏れ出る處なく。それが母の血に混じて。色々の悪證を煩ふでござる。又至つて壯實なる婦人に。かやうのことが有れば。其兒それなりに育つて。月は滿るけれども。出る處が無くて。やはり兒は死んでくさるでござる。然れども其婦人。もとより壯實なることゆゑ。夫にめげず。尤も煩ひは致すけれども。腰のまはり。或は小腹の邊などに。大きなる腫物を生じて。夫が崩れて其の口より。かの兒の骨や髮なんどが。皆出てしまふ物でござる。これは篤胤も二人見ましたが。一人は今以て達者でをる。一人は其腫物ゆゑに死んだが。これは世間まゝ有ることで。人は胆をつぶして。居るやうじやが。よく胎内の訣を心得て見れば。さしも。怪しきことでもないでござる。定めて見聞に及ばれた方も有りませう。こんな事も心得て居るが。宜いでござる。復古明試錄などに。胆をつぶしてあります る。

さて又婦人に依て。隨分壯實で居ながら。子を孕まぬ者も有ますが。此れは種々の訣があれども。かの西洋人が。子の無き婦人を。多く解體して見たる處が。或は生れつき。子宮の口の。横へゆがんでをるが有て。これは孕まず。またかの卵が甚だ大粒で。水の如く。これを煮ても。玉子の白みのやうに。固まらぬが有り。又は卵巣の大きさが。拳ほど有て。其中に卵の無いも有り。又は生れつき虚弱で。卵巣にあしき液が有て。夫れゆゑ孕まぬが有る。と申て有りますが。此れは實にさうで有ませう。此方の人は。西

洋人のやうに。孕まぬ女を。多く解體して見ることでないから。此等はうち任せて。凡て虚言はつかぬと云。西洋人の説ゆゑ。慥かに信ずるが宜しからうでござる。但しかやう申ては。孕まぬは。女ばかりの失のやうにも聞ゆれども。さうではなく。男にも其精液の虚弱なるも有べく。又交接の仕方にも依り。又は其時を得ざる。不調法なども有らうと思はれるでござる。

扨婦人は。十四五歳になると。其の精が漸くに熟成して。經水の通ずることは。一體婦人の血は。本より胎兒を養ひ育つるが爲に。男子に比しては。自然に多く生ずるでござる。夫ゆゑに孕まぬ時は。其餘りの血は。經水と成て泄去り。其餘の血は。子宮に連なり有る處の。靜脈管からかへり流れて。常に身體をめぐり養ふことでござる。又女の胃は皺が多く。よく食物を消化して。滓が少いじやが。凡て女體の。男子と違ふ處は。みな兒を養ふがための故でござる。さて婦人の療治は。男子よりもむづかしく。又やもめ女のたぐひは。別して仕にくい訣が有て。夫ゆゑ醫書に。寧醫二十男子一。莫レ醫二一婦人一。寧醫二十婦人一。莫レ醫二一小兒一とも云ひ。また療二寡婦尼僧一異二妻妾一。とも有て。また其の婦人より。小兒は一段むづかしいことでござる。

扨これで。體の中のからくりも。信にあら〳〵。百分一の訣もすみましたが。まづ此れには實によく知れたることで。殊には大きに心得にも成るすぢじやに依て。云ひは致す物の。先にも申すとほり。實は心ある者の。解體などは出來ることでなく。又見るべき物では無いでござる。もはや蘭書の翻譯も。種々できて。かの醫範提綱。解體新書など。委き圖もあることゆゑ。其れを讀で見て心得るが宜いでござる。うたてしくも。人の體を細密に斷割て見るなどは。こりや紅夷の國のえみし等が致すことで。信にえびす臭く。御國の人などの爲すべきことではない。然らば篤胤は。かやうに委く。既に四度ほども夫を見たは。どうした訣じやと云に。拙者元來醫者に由緣有て。幼年の時から醫の事を學び。尤も其の以前は。漢學びのみいたして。大倭心のみやびなどは夢にも知らず。生狡意のから心十分で有たる時に。若い血氣に任せて見たることで。今さら申て返らぬことで

ござる。然れども古學に入り初めて。眞の道をたごらんと致すに付ては。神の妙なる御所業を。辨へ知べきたづきとも爲り。醫業を致すの心得には。大きになるでござる。此れは篤胤が試見た處を云のじやがもし解體の圖なんどを見ても。能く分らぬと思ふ人は。獸をひらいて見るが宜いでござる。さんと腹中のやうすは。人と何も異はない。夫も猿か。ないしは獺が宜い物でござる。何れにも。もはや世に。かやうの書物も多く出來て。これ程にも知れて來たことゆゑ。解體は爲ずともなこと。實に忍び難いことで。此を思へば。諸越の古人も。解體はしたる樣子なれど。委くは得見ずに。間違ひだら〴〵なことを申たも。此頃は思ひ合せて。然ることよと。察しやられることでござる。其れはおらんだ人の如く。精密に人體を剖見て。其理を究め〳〵ても。其至れる元の道理。またかくの如く。奇々妙々に活動く人を。其身が直に産出しながら。實は其生み出したる人も。どうして拵へたか知らず。生れ出たる人も。知らずに居る程のことで。悉く神の御所爲ゆゑ。かやうに知れぬことは。さんと知れぬでござる。近くは今誰にも付て有る。目鼻耳口舌などのことを思ふに。まづ目は。萬づの物の色形を。殘る處なく見明らめ。耳は諸の聲をよく聞き。鼻は物の香をかぎ。口のもの食ふことは云にも及ばす。奥より聲が出て。唇を動し。舌を働かせば。其聲さま〴〵に變つて。詞と成て。萬つのことを云ひわけるなんど。一つ體の內にして。かやうに各々其用の異なることは。誠に奇異きことの限りなれども。何なる理に因て。かうじやと云ことは。身に持つて居る程のことじやに依て。知れさうな物なれども。誰れも知らず。さんと分らぬことでござる。鈴屋翁の云れたる說に。今この人と云ものを一人。作り出んとせんに。何に賢く。さとり深くたくみなる人の。何に心を碎きて。例の陰陽和合のことわりを極め。こゝらの年月を勞きて。作り成さんとすとも。彼の活働く眞の人をば。作り得ることは能はじを。上に云へるやうに。唯かの男女の。閨中のみそか事に依ては。心をもいれず。小刀の一つだにつかはず。何勞きもなくて。成出るぞかし。然るは其の闇の中のしわざよ。何の賢く美はしく。理深げなることかは有る。その有樣は。ほに出

して學ぶべくも非ず。甚も〳〵人わろくめヽしく。童べの戯れにも劣りて。はかなく愚なるしわざなれども。玆れに因りてこそ。人の巧にては得作らぬ眞の人の。さばかり容易く成り出るなれ。神の御所爲は。世に測り難く。靈しく妙なる物ならずやと云はれたるは。世の漢意なる人の。神代の傳説を受ざるを。諭さうとて。云ひ出られたる説でござるが。實に奇妙なる諭し言でござる。抑紅毛人ども。究理の解體のと云て。幾千萬人。生涯の智りを盡して考へたりとも。其おん詰りの處へ行つては。迚も考へ究むると能はず。謂ゆる造物主の所爲じやと云て。遁れるより外はなきことでござる。然れば强ひて。解體をして見るに及ばず。返す〴〵も。今は各々その書が有るゆゑ。心得の爲には。其書を見て能尋ね。其上に知れぬことは。猿なり河うそなりとも見て。どうぞえみし風俗の。弘まらぬやうに致したい物でござる。

扨これは。古へには無きことながら。今の人は養生と云ふことも。爲ねばならぬ譯がありまする。其れはまづ古へには。養生と云ふことのないわけは。本より古人は。敦厚純固。識らず知らず。自からにして。養生の道に叶つて居たること故。こりや古へには無きはずのことでござる。然るを後世に及ぶほど。事も物も多くふえて。世につれ事に觸れること多くて。望みごと絶えず。思ひ結ぼふれること多く。とかく氣が上へ〳〵と衝逆して。胸膈へたまり。此れがそも〳〵病の始まる謂れでござる。扨このことは。諸越人も天竺人も。早く心づいて。各々其國の書共に。こま〴〵と書てあるでござる。其れはまづ諸越の書では。謂ゆる内經を始め。種々の書物に。返す返す申て有りますが。かやうのことは。一向の大倭心に成り固まつて。外國の説とし云へば。耳に觸れ聞くも。穢らはしく思はれる人は。定めていかにぞや下げすまれませうが。さうでない。其れはなぜと申すに。凡て諸越を始め。萬づの外國は。末國の汚穢き國々ゆゑ。古へより致して。國も猥りがはしく。又病ひも多く。夫ゆゑ養生と云たやうなことや。又は醫藥の道なども。ずんど委く考へものして。尤も例のくだ〳〵しく。言痛きことが多いけれども。此れは鈴の屋翁の云れました通り。亂れたる世には戰に習ふゆゑに。自づからに。名將の多く出るやうな

もので。世々にさま〴〵と。考へ〴〵て云おけることぞ故。中には實に尤もなることどもがあるでござる。こりやわる狡意の敎説ことも違つて。人に利あることは。拾つて取るが宜いと。篤胤は思ふことでござる。其のすわり故に。此の養生のことは。外國の説ごもを摘み取て綴り合せ。辨を加へて演説いたすから。其のつもりでお聞きが宜いでござる。扨また御國に。さやうの説の。古くより無つた故は。古道の大意を演説の砌に申たるとほり。御國は萬國の本つ國たる勝地じやに依て。地氣厚く。夫ゆゑ久しきがあひだ。敦厖純固。恬憺虚無と云たやうに。事少なく。世も穏かでさかし立たず。大やうで有たるゆゑに。かの治まれる世には。名將もなく。盗人のなき郷には。用心の入らぬやうな物で。自づから養生の道じやの。何のと云やうなことは。思ひも付かなんだ物でござる。かの川柳點に。「無病ことも心つかずに無病也と。云たる如きことで有たる處が。外國よりは。くさ〴〵の事も物も渡り。夫にかぶれて。遂には外國風のさかしら言。または世を歷年を重ぬるまに〳〵。事もふえ世も亂れなんごして。古への質朴なる風は。やう〳〵にうつり移ッて。とんと今の世の如く。人事もせはしく。望みこと絶えず。思ひ結ぼふれて。扨こそ今はもはや。養生と云ことも。古へは無いことじやと。一と口に云て仕まはれもせぬやうに成たでござる。素問の擧痛論に。百病生於氣。怒則氣上。恐則氣下。喜則氣緩。悲則氣消。思則氣結。驚則氣亂。寒則氣收。暑則氣泄。勞則氣耗。とも有る如く。諸病も此れより生ずることでござる。然ればいまはその養生と云ことも。一とわたり心得ねばならぬと云に成ては。御國には右申すとほりの訣ゆゑ。さやうのことを考へ記したる物なく。こゝで彼外國の人ごもの固より亂りがはしき國に生れて。かゝることに甚じく心を用ひて。云置たる説ごもを拾ひ取て心得るが。いッち捷徑でござる。其の諸越人の説は。まづ素問の上古天眞論と云篇に。恬憺虚無眞氣從之。精神内守病安從來。とありますが。こりやよう古への大らかで。わる賢くはなく。事少なで。後の世風なる辛勞も無く。夫れゆゑ身が健かで。病に犯されなんだことに。よう叶つて居るでござる。然れごも。古へは古へで事少く。今は今で爲す事業の多

きこそゆゑ。とても古へのやうに。質朴純固になることでは無けれども。古へを尋ね探つて。古人の大らかなる氣質をまねび。神の道の妙なる理を會得して。世に有りとある事物。おのが爲すわざ。身の貧きも貴きも。みな神の御心で。爭ひ難きものなることを悟つて。差越したる望み。強たることは心して。成べきだけの限りを。心靜に計らひつゝ。世は穩かにくらしたい物でござる。但し身に負はぬ望みを爲し。見る物聞くものにつけて。心動き穩かならぬも。己がじゝ。生れ得たる性で。どうも成らぬ人情の。遁れぬ處では有るなれども。これは心ばえをのみ申すのでござる。なぜなれば。篤胤は素より醫の道が好きで。學んだることゆゑ。内の病は。多くは心穩かならず。辛勞の過ぎる處から出來ることを。人の上ばかりでも無く。己が身で試し見て。知て居るゆゑ申すことでござる。此れは漢土。天竺。おらんだの人も。みな符節を合せたように告諭して。その書も力車に七車。牛に汗を流す程ある中に。唯一と口に事短く云ひ取たは。孟子に。養レ心莫レ善ニ於寡慾一と云たが。いツち早い諭し言でござる。その慾を寡なうすることを。委く示したは。養生要訣と云ものに。能攝レ生者。當ニ先除ニ六害一と云て。其六害と云は。一曰薄ニ名利一。二曰禁ニ聲色一。三曰廉ニ貨賊一。四曰損ニ滋味一。五曰屏ニ虛妄一。六曰除ニ嫉妬一とある。此れが寡慾の大綱でござる。これに反して名利を好み。聲色を禁ぜず。貨賊をたくはへ。滋味を飲み食ひ。虛妄を屏けず。常に嫉妬の情を除かぬと。それが悉く心勞の本と爲るに依て。病が發る。しかるを不養生をして病身と成り。又は命にも及ぶと。これは天命じやの。神の御心じやのと云て。心と爲ぬでござる。尤も人は人形の如く。神は人形を遣ふ人間の如き物ゆゑ。云もて行けば。神の御心と云ても違はねども。又そこに心付て養生するのも。神の御心で。やがて禍を直きに復すの理りでござる。よくこゝを辨へて。心勞をば。なるたけ省くやうにしたい物でござる。張文潛と云ふ諸越人の語に。夫れ人未レ有ニ語レ之以レ死。而不レ畏者一也。日夜之所レ爲。則取レ死之道過レ半矣。と云たが。實にそんな物でござる。また經鉏堂雜志と云ふ書に。人在ニ病中ニ百念灰冷。雖レ有ニ富貴欲レ享。不レ可。反羨ニ貧賤而健者一。是故人一ニ

志都能石屋講本下　一名醫道大意

大壑　平田先生講説　門人等筆記

さて人は。學問の志もなく。道のことにも思ひ付んで居ると云は。そりや論の限りては無けれども。醫をよく見立るぐらゐの眼は。具へて居べきものでござる。夫はま古人の語にも。治ㇾ病委ニ之庸醫ニ比ニ之不慈不孝ニ。事ㇾ親者。不ㇾ可ㇾ不ㇾ知ㇾ醫と。申たはこのことでござる。但し此語の義を。醫者の術を。よく知らねばならぬことじやとの語と思ふは宜くなく。とんとさういふ事ではない。其は何の事も無く。此は眞の醫者。かれは賣僧醫者と云ことを。常によく心得居て。君や親の煩ひ付たる時に。それへ委ねんが爲に。兼て眞の醫者を目利しておくやうのことを申すでござる。但し其の醫者を目利することは。自分にも心得がなけりやならぬ。其心得と云は。道を學んで。事情に通じ。よく人を見るの眼を具へて。扨是は學問といひ。療治の仕ざま。かた〴〵以て。眞の醫者じやと云ことを見て。その上にも。かの論語にも云つてある通り。其以る所を視。其由る所を觀。その安んずる所を察て。まさかのときにそれへ委ねるでござる。これが眞の道をたどる人の。醫者を吟味するの心得と云物じや。然るをさやうの心掛も無く。君親のわづらひの時は本より。自らの煩にも。唯々立派に門戸を張て。世事を専として居る。まいす醫者に。命を委ねると云は。扨々外の見る目も氣の毒とも氣の毒で。みす〳〵死ぬまじき命を死に。重るまじき病を重らすこと。日々のことゆゑ。數へも盡されぬほど見る事でござる。これは篤胤が。事新らしく申す事ではない。其は定めて素人方も。聞及んでも居られませうが。醫者たる者の。第一と學ぶべく。法則にも致すべき。傷寒論と申す醫書がある。是は實に醫方書の祖たる。第一のめでたき物で。これを著れたるが。後漢の世の張機字は仲景と云賢き人で。是は戎人ながらも。篤胤が常にその御靈のふゆを蒙つて居るに依て。御國の神に次では。額づき拜み居まするが。其著されたる傷寒論の自序に。右申たる事を。懇に云ひおかれたでござる。これはとんと醫者ならぬ世の常の人を。誨された語じやに依て。能く聞ておかるゝが宜いでござる。その文に

論曰。余毎覽三越人入レ虢之診。望二齊侯之色一。未三嘗不二慨然歎二其才秀一也。

余毎覽二越人云々之色一と申すは。張仲景の自ら。いつも〳〵昔の。越人と云人が。虢と云國へ行て。其の國の太子を診察致したることや。また齊と云國へゆきて。其の國の君の顔色をのぞみ見て。未然に。其病の起る事を察したることやなんどを。史記に記し有事を見るたび毎に。慨然として。越人の醫療の道に。其才の秀てをる事を。歎息せぬと云事はない。いつでも歎息すると云事でござる。此の越人と申すは。即かの名高き名醫扁鵲がことで。史記にこの人の傳がある。姓は秦と申し。名をば越人と申たに依て。此にも越人と云れた者てござる。この扁鵲が。或とき虢と云國へ行つたところが。虢の國の太子が死だる處へ行き合せて。扁鵲がそれを診察いたして。此は尸蹷と云ふ病ひで。卒に脈のとぢて。形の靜なるので。死だやうには見ゆるけれども。いまだ死はせぬと云て。其弟子にさしづをして。鍼をたてさせ。こゝかしこ熨めなどさせたる處が。間くありて。其太子が蘇つたと申すことが有る。仲景の。越人虢に入れる時の診と云は。この事でござる。〇又或る時。齊と云國へ行て。其君桓侯といふを望見て申すには。君に病ひが有て。その病が今は腠理と云て此の皮膚に在りますが。これは治せずに捨ておかれたならば。其邪氣が深く入りませうと云た處が。桓侯の云には。寡人は病がないと云。そこで扁鵲が退出したる時に。桓侯が左右の者に向て。醫と云者は。利を好むものじや。己には病もないものを。病があるといふて。功とせうとする。と申たといふことでござる。その後五日ばかり有て。扁鵲が又見えて。君に病が有まする。其邪氣が。今は血脈にあるが。治せずは恐らくは。深くなりませうと云た處が。また桓侯が。おれには病が無いと云。その後又五日ばかりもおいて。扁鵲が又見えて。君に病有り。腸胃の間に在ますが。治せずに差おかれたならば。深くなりませうと云ところが。こんどは桓侯も。よッぽど腹を立て。應へもせぬ。そこで扁鵲が外へ出て。後又五日ばかり有て。桓侯を望見て。今度は何もいはず。早々にかけ出したで

ござる。そこで桓侯が人を走らせて。其走り退いたるゆゑを問したる處が。扁鵲が云には。疾之在二腠理一也。湯熨之所レ及也。在二血脈一也。鍼石之所レ及也。其在二腸胃一也。酒醪之所レ及也。其在二骨髓一雖二司命一無レ奈レ之何一。今在二骨髓一。臣是以無レ請也。と云たと申すことでござる。ところが後五日ばかりにして。桓侯がはたして煩ひついて。そこで扁鵲をさがしたる處が。扁鵲はもはや。遠く齊國を逃去つて居らぬ。これに依て。桓侯が遂に身まかッたと申すことが。これも扁鵲が傳に有る。仲景の序に。越人齊侯の邑を望むと云ことを見るごとに。と云はれたは此事でござる。さて扁鵲が此の二個條の事どもを。仲景の見る度毎に。慨然として。さても〳〵扁鵲は。醫の才の秀たる者じやと。歎息せぬと云事は無い。と云の意でござる。慨然と云は。自ら奮激して。志を振起すのかたちで。仲景の醫の事に。ふかく志をふり起したる心の内も。此の事を記せる書を見て。歎息せられたる有狀も。今まのあたりみるやうな心ちがいたすでござる。

怪當今居世之士。曾不レ留二神醫藥一。精二究方術一。上以療二君親之疾一下以救二貧賤之厄一。中以保二身長全一以養二其性一。

怪らくはと申すは。仲景の意に。常にあやしんで居ることで。其怪む所は。當今居世之士と云より以下。七十四字を連ねて。論ぜられたる趣で。當今居世之士とは。つら〳〵今の世に居る人の狀を見るに。と云の意でござる。〇かつて心を醫藥の道に留めず。醫方の術を精く究めて。上は以て君や親の疾を癒さうとも思はず。下は以て。貧窮下賤の者の病を救はうとも致さず。中は以て。おのが身の長く全きを保ちて。養生せうとも心がけずと云ふことでござる。但し仲景のこゝの文では。世に居る程のもの。誰も〳〵。醫術をば學ぶべきことじやとの意と見ゆるが。實に世の人が皆此通りに。しッかりと醫道を學ばうならば。夫ほど結構なことはないけれども。なまなかに見かぢり聞きはつりぐらゐのことならば。其れは俗に申す。なま兵法大疵のもとゐとやら。きつく御免なことでござる。いまの世にも。まゝ素人が。少ばかり

醫書などを見かぢり誇つて。とかくちよこざいを働き。人に藥を與たり。或は其家内が煩ひなど。懸の事をして爲そんじ。跡でかゝる醫者に尻を拭はせ。手こづらせるやうなことが幾らか有る。少またさうない處が。醫者の藥に非難を云たり。少かばかり藥種を見覺えたぐらゐでも。しやら臭く。醫者の藥などをあけて見て。ちよこざいを言ひたがり。大きに人の惑を生じさせるやうな事が。いくらか有る。又醫者の方でも。さやうの人には。どうも藥はもりにくい。伸々としたる療治が出來ぬものぢやに依て。こゝらも能く考へのあるべきことでござる。何にしろ人に藥を貰ふからは。一向無心に成て任すがよい。是は此方。醫を業と致す者でさへ。家內などの病人には。自分で療治の仕にくいことも有て。心安き醫者に委ねることもまゝありますが。其時は何をもるやら。一向に搆はず。任せておくでござる。さやうに任せおく程のことゆゑ。兼ては其の醫者の仕込をば。しやんと見屆て置た者へ賴むでござる。素人もその如く。かの始めに申たる通り。まさかの時には賴まうと思ふ醫者を。兼て目利しておくがいッち宜しい。夫れとも醫の道を。奥の奥まで學び盡しておかうぞならば。夫はそれ程宜しいことは無けれども。そりや容易には出來ず。迚もなま物知りでおくほどならば。いッそ醫者の目利をする事ばかりを。心掛るが宜しいでござる。

但競二逐榮勢一。企二踵權豪一。孜々汲々。惟名利是務。

此意は。右申たる通り。世に居る程の人が。唯我も〳〵と。身の勢ひ榮えばかりを逐ひもとめ。權柄を得やうの。富貴豪家にでも成らうと云ふ事にばかり。孜々汲々として働きやまず。たゞ名利の事ばかりを務めとして居る。と云ふことでござる

崇二飾其末一而忽二棄其本一。欲レ華二其外一而悴二其內一。

扨右のとほりに。世の中の人が。主親ならびに自の命にかゝる。醫藥のことをば麁略にして。名利にばかり係つて居ると云は。とんと其末ばかりを崇め飾りて。肝心の其本をば。忽に捨おくと同じこと。また其外ばかりを美はしくせうと欲して。其内をば弱らし衰へさすやうな物じや。と云ふのでござる。

卒然遭二邪風之氣一嬰二非常之疾一患及禍至而方震慄。降レ志屈レ節。欽二望巫祝一告レ窮歸レ天。束レ手受レ敗。

さて右申たる通りの。不心掛な輩が。卒かに傷寒とか。熱病とか云邪氣にあたるか。世の常ならぬ大病にでも煩ひつくかして。かやうの患が身に及び。かやうの禍が至てから。始めて恐れ震慄き。胆を冷して。こゝでは日比の榮勢。權豪の名利さわぎもどこへやら。其高き志をも低く降し。立たる操をも押屈め。今までの大きな貌も止めにして。謹んで巫祝の輩をたのみ。其苦しさを天に告て。祈禱などをして。どんと手を束ねて敗を受ると云でござる。敗をうけるとは。即ち醫方のことを知らぬが故に。かやうの愚かな事をして。命をしまうと云の意でござる。

齎二百年之壽命一。將二至貴之重器一。委二付凡醫一恣二其所一レ措一。

上に申たる通りの。不心掛な輩が。其わづらひ付た時に成て。又或はその大切なる。よくすれば百年も生くべき壽命。至て貴き命と云。重く大事の道具をば。凡醫と云て。云はゞよろくそな醫者に委ねて。そのつまらぬ醫者坊の仕しだいに。うち任せておくと云は。扨も〳〵醫道を知らぬと云ものは。苦々しくあぶない物じや。と云の意でござる。

咄嗟嗚呼。厥身已斃神明消滅。變爲二異物一。幽二潛重泉一。徒爲二啼泣一痛夫。

此あゝあゝと重ねて云はれたのは。仲景が。殊に深く右の事どもを。歎かはしく悲しく思はるゝ心から。きつく歎息して。かやうに重ねていはれた物でござる。扨右の如く。よろくそ醫者に任せたり。或は巫祝などばかりを便りにして居つて。どんと養生が叶はず。其身が死たふれて。神明消滅しと申すは。死んで魂のぬけてしまツたることゝ。變じて異物と爲ると云は。どんと死骸と成たることを云でござる。さて常の心掛のわるい故に。死まじき命を死んで。重泉へ潛まり行て。そこで徒らに啼泣むと云は。扨々痛しいことじやと云ことでござる。此重泉と云は。史記や左傳に謂ゆる黄泉の事で。それは即ちわが國の古き傳説に。夜見と云國の事にて。此れは人死れば。其魂は。みな其夜見に行くと云ことのある故でござる。しかし重

泉と云こと。外の書に例のなきことで。此はやッはり本は黄泉と有たる所を。黄の字と重の字と。形が似て居るに依て。寫し誤て。書傳へたのでは無いかと思はれるでござる。但しこの死だる人の靈の。夜見に行くと云は。古くよりの說では有れども。實は誤りなることと。篤胤委く考へ明かして。靈能眞柱と云を著してござるが。事長きゆゑに。爰にはまをさぬ。其書につきて見らるゝが宜い。
擧世昏迷莫二能覺悟一自盲若レ是。彼何榮勢之云哉。
世の中の人が推しなべて。右に段々申す通りの事を覺悟は致さんで。榮勢名利にのみ迷ひはてゝ。自から盲んで居ると云は。これが何の榮勢と云ものので有らうぞ。扨も〳〵歎かはしいことじやと。きつく歎息せられた物でござる。さて〳〵仲景の此文を讀味ひて見ると。我の昔も御國の今も。思ひ合されて。實にあゝあゝと仲景の云れたることを。身にしみ〴〵とおもひ當ることが有るでござる。○扨此以下の文も。甚だ心得になることながら。こゝには姑く用無きことゆゑさしおいて。但しこの傷寒論の。信に結構なる書にて。醫藥の祖典なるに付ては。和漢古今の人の注解の書ども。數へも盡されず多くあれども。互に得失有て。一向には從がたいでござる。篤胤それらをとくと參考折衷して。其正文を撰んで。傷寒論考文と云を綴り。又その注解をも著はして。追ては世にも弘めやうと存ずるでござる。
扨此の序にある。扁鵲がことに付て。俗人が。耆婆扁鵲と一口に云て。どれがどうと云ことを知らず。甚しきは。耆婆扁鵲と云は。一人の名じやと思つて居る人さへ。れッきとした人にもまゝ有るから。この二人が訣を略々申さう。まづ扁鵲と云は。右申すとほり。諸越人で。周の代の末に出た人でござる。此人のことに付て。己が考へたる說があれども。こゝで云ては混雜する故。まづ差置ませう。さて耆婆と云は。天竺の者でござる。佛說柰女耆婆經と云ふ經が有て。夫に委く其傳がある。其のあらましを。世俗談に申すのじやが。其母を柰女と云ひ。父を萍沙王と云ふ。柰女と云由は。その天竺の維耶離國と云國に。靈しき柰木あり。其華の中より生じたるに依て。柰女と云。年十五に及んで。容貌端正なること。天

下に雙びなく。このこと遠方に聞えたる故に 。七國の王互にこれを得んことを挑みたるが。其うち羅閲祇國の萍沙王といふが。共に宿することを得て。男子を生だでござる。此兒生るゝ時。手の中に。針と藥囊とを抱持て生れ出たるが。本より國王の子にて。醫者の器を持たれば。必これは醫王であらうと云て。耆婆と名けたと有るでござる。八歲に至て。聰明高才學問たぐひなく。太子なれども。家督を辭して。專ら醫術を學ぶことを願ふに依て。國中なる醫者の上手を盡して。敎へさせた處が。習ふのみならず。誰も解し得ざるむづかしきことを悉く硏究して。却つて師匠に向て難問する處が。孰れもさんと閉口したでござる。是に依て評判が高く成て。多く療治する處が。皆瘉たと云ことでござる。時に一人の小兒の。樵を擔ひたるが。其腹中の五臟腸胃が分明に見えるから。考へたる處が。本草經の說に。藥王樹といふが有て。外より內を照して人の腹臟を見ると云ことが有る故に。此小兒が擔ひたる樵中に。其樹があるであらうと思つて。先づその樵をみんな買上げて穿さくした處が。果して此中にそれが有て。小き枝で。

裁に一尺餘で有たでござる。扨これを以て照せば。腹の內が具さに見えるゆゑに。藥王なることを知て大きに喜び。其餘の樵をば。小兒に還し與へたれば。小兒も喜んで立去たと云ことでござる。さて是より後は。ます〳〵諸方より賴まれて療治をする處が。國中なる迦羅越と云て。身上も宜しく。また道をも學んだる者がある。其家に女が有て。年十五になり。嫁すべき日に臨んで。忽に頭痛を病んで死んだでござる。そこで其家に行つて問ふた處が。幼少より頭痛もちで有たが。今朝云々と云。耆婆即ち藥王を以て照し見たるに。頭中に刺蟲大小數百頭生じて。其腦を食ひ。食盡したる故に死んだのでござる。そこで金刀を以て。其頭を劈破て。悉く其蟲を取出して。甖中に入れて封おき。其跡へ三種の神膏と云て。三色の膏藥を塗るでござる。其一種は。蟲の食傷つたる處を補ひ。一種は腦みそを生じさせ。一種はその金刀瘡を治すでござる。さて七日たてば癒ると云。兩親初め甚だ怪んだが。信に其とほり。七日めに息を吹出して。さんと臥たる者の。目の覺た如くでござる。そこで彼の封じおきたる蟲を出して。如レ此く

じやと云て見せた處が。大に驚き。耆婆を神じやと云て怖れ喜び。此の御恩の報じやうがないから。生涯婢となッて仕へやうと云たと云ふことでござる。

此のち維耶離國に行た處が。そこに又迦羅越の家が有て。一人の男兒あり。この兒武藝を好み。七尺餘りの木馬を作て。乗習つた處が。過つて地に躓きおち。足を折いて死だでござる。耆婆これを聞て行き。例の藥王を以て照して腹中を見たれば。其肝が反戻つて後向きになり。氣が結ぼふれて通せぬ故に死んだのでござる。又金刀を以て腹を破り。手を以て料理いたし。肝を還して前に向せて。三種の神膏を以てそこに塗る。一種は手にて攫持たる處を補ひ。一種は氣息を通じさせ。一種は刀瘡の處にぬり付て。此儘に動かさず。三日おけと云たが。果して三日めに生返つたでござる。一同大悦して。此兒も耆婆が爲に。一生召使の奴と爲て。再活たる恩を報じやうと云たと有が。此外にも奇々妙々なる事があれども。こゝに述がたいから。委くは耆婆經に付て見られるが宜いでござる。さて又翻譯名義集を見れば。耆婆此云二能活一。又云二故活一とも。又云レ命とも。飜レ生などゝも有を思ふに。耆婆と云は。よく人の難病を治し。死を活し。壽命を保たせる故の名で。どうか良醫の通稱のやうにも聞えるでござる。

俗人の善いふ言に。學醫は匕が回らぬと云ふことを申すが。此れは一と通り尤なやうなことの。大きに行違ひな諺で。當らぬことでござる。夫は俗に。學醫ともてはやされる醫者を見るに。眞に醫學のある者とてはなくて、彼素人が學問じやと云ひ立るを。何のことかと思へば。少か漢學をして。諸越の男文字を生かぢりにかぢり讀で。詩文章をつゞくり覺え。手跡はいはゆる唐様をひねくり。包紙の上は書にかく殿と云字を丸く書くと。夫を素人は。學醫と心得て居るでござる。醫者もまた。實は醫學はさしも面白くなき上に。醫學のよきかあしきかは。素人には知れず。唐風の手跡をかき。詩を作る方などは。俗人も大抵わきまへて居る故に。それは醫學の方よりは。人の目に付くに依て。やッて居るので。とてもかくても。人を救はうと云實意から根ざす事で無く。たゞ門戶を賑やはし。潤屋の計をせんとてする不實から。根ざす處の修行じやに依て。醫學と漢學問

とでは。こゝに損得がある。夫ゆゑ醫學はせず。漢學を少かして。夫で素人をおどしたものでござる。素人がこゝの由縁をわきまへず。其人おどかしの生から學に威されて。さこそ醫術もよからうと思つて。病ひを委ねる處が。見はつり闘斫りの藥方を。問ひ用ひて間を合せるでござる。尤も其内闇夜のつぶて。まぐれ當りに病を治すことも有り。また本より藥に及ばず。捨ておいても治るのも有る處を。大抵は輕き病は重くなし。重き病は必しくじる。其中に彼唐やうも書けず。詩文も出來ず。中には大黄の目印に閻魔をかき。陳皮には。犬ころの。火にあツて居る形を畫くやうな文盲で。素人も不學なものさ。日比は見貶してゐたる醫者などか。ひよいと其病を治すから。そこで學醫は匕が回らぬと。俗に云やうに成たものでござる。抑不學な醫者は。唐やうや詩文章で。人を威すことがならぬから。夫らは手柄をして。門戸を張らうと云一心で。醫術を修行して。實物を相手に仕馴れて。自然に病機の圖を覺え。けツく醫學の巧は。かの殿の字を丸くかく醫者坊ども。より。勝つて居るでござる。實意から根ざす眞の醫學をすれば。匕の回らぬと云ことは。決してない道理でござる。それは諸越では。かの張仲景は。もと醫者ではなけれども。傷寒論の自序にかいた趣きの實意から。醫學をして。漢醫の元祖。神醫と云る程の名醫で。其匕のまはることは。傷寒雜病論に記し遺された通りに。一々後世の規矩となる事どもでござる。また御國で學醫と呼れたは。したゝか有が中に。北山友松子などは。其治法が多く。後世ぶりでは有たなれども。其匕の回ることは。其著書の考按に。僞りのない處で明かでござる。こゝらを能く考へて。眞の學醫を見つけるが宜い。其の眞の學醫を見立るの心得は。前に申たる如くの訣でござる。もろこし人史崧霊樞音釋序、と云者の語に。夫爲レ醫者。在レ讀二醫書一耳。讀而不レ能レ爲レ醫者有矣。未レ有二不レ讀而能爲レ醫者一也。と申たることもあれど。眞醫學をして。療治のうまく出來ぬとならば。夫はよく〳〵の不器用と云ものでござる。

さて御國の御事は。いつも申すとほり。萬國の本つ國。祖國たる尊き御國ゆゑ。人心さかし立たず。大らかなるが故に。何事もあながちなる考へ事說ごと

などを致さず。安らかにして。言擧もせぬ御國なるところが。醫藥の道を始め。其外器械萬物。技巧究理の書なんどの。専ら用を爲すものは。盡く諸の外國つえみしの國々より。棹舵干さず。舟滿つゞけて貢奉りて。さんと御國の勞きの無いやうに。さしも望みはせぬけれども。送り來る狀を。つら〳〵考ふる處が。さんと君たる人は。上に安居して。下萬民より。種々の貢調を奉り。捧げるやうな狀ちでござる。これは尤もかやう有べきすぢで。その大本は。天照大御神。速須佐之男大神の荒御魂。八十禍津日神のしろしめし。次には大名牟遲。少毘古名大神の。御掌どりあそばさるゝ御事なる由は。弘く神典を參考して定めたることじやが。是より及んでなほ深く考ふるに。もろ〳〵の外國どもは。凡て御國の爲に。神の御造りなされたので有らうと思はれることでござる。此事は。古史傳。靈能眞柱をはじめ。古道の大意講說の時にもほゞ申たること故に。爰に委くは申さぬ。此れは實に何事に付ても。第一に心得をるべきことじやに依て。右の書どもを見て。能くとッくりと辨へ置れるが宜しいでござる。○扨其の外つ國より奉る種々の中に。醫藥にあづかる類のことは。追々申す通りの訣ゆゑ。別して御國の用を爲すでござる。それは尤も善いことを撰んで取るが宜いが。其のうちに。西洋人の解體の事をよく明らめておいたを見て。常に體の中は。かうした物と云ふことを心得るが肝要で。病の發るその原を知らねば。療治は成がたいでござる。其つねを知て居れば。其れに違つて居るが病と知れる事じやが。夫ゆゑ西洋人は少し異つた病で死んだ人は。必解體して見るでござる。さて其解體の趣を知るには。醫範提綱。解體新書など宜く。また凡べて治療の心得となる事は。内科撰要など至て委き物でござる。しかし此等とても。必よいとばかりは申がたく。やはり撰んで取らねばならぬが。今その大概の處。また勿論古傳の趣をも參考いたし。また篤胤が自身僅かに試みて。心得て居る趣とを以て。少か人の體の訣を申さうでござる。其れはまづ第一に魂と云ものは。どこにどうして居るものじやと申すに。尤も此れは古人も水中の鹽味。色裡の膠靑。決定として有るなれども。其形を見ず。心王もまた然り。と申たる如く。水の中に

混つてゐる鹽や。繪具の中に交つてゐる膠は。きッと有には相違なけれ共。其形が見えず。人の魂のからだに在るも。丁どそんな物で。捕まへんとするに形もなく。又見やうと欲しても見えはせず。人の體に彌綸して居る物ながら。其うち頭首の腦髓が本で。この腦髓と云は。どんな物じやと云に。近くは鳥の頭などを潰すと。薄桃色の。ぺそ〳〵したる物が有て。俗に腦みそと云ものが夫でござる。これがつむりの中に。一ぱいに有て。それから脊髓と云て。脊骨の中にも充ちてをる物で。此れに靈液と云物があッて。其中に自然に魂を含んで居るでござる。さてその腦髓脊髓に。盡く枝がさして。さま〳〵の細密な處へ行ては。信に毛のやうに成て。それで體中を織成して近く云はゞ。絲瓜の筋の如く。體に彌綸して居る物でござる。即ちこの筋を神經と云。なぜ神經と云ぞなれば。人の神氣。即ちたましひを含んでゐる靈液の。往來する經と云のこゝろで神經と名づけた物でござる。此神經の本は。すなはち頭首の謂ゆる腦みそと。脊骨の中の髓とが本で。此神經に含んで居る。靈液の發明に依て。事を分ち。物を辨へらるゝ事でござる。其はまづ眼球と云ものは。魚の目玉をつぶして見ても知れるが。とんとあのやうな水でござる。水じやに依て色々の物の影が移る。そのうつッた處で。其れを盡く。右の神經が取卷いて居るに依て。此は何ぞと辨へた物でござる。又耳の音を聞く訣は。丁ど此耳の穴は。近く云はゞ。榮螺じりのやうに成て。其ゆき留つたさきは。神經が彌綸して。譬へば。鼓の皮を張つたやうに成て居るに依て。何によらず物の音が。耳の穴へ入て。夫へ響くと。彼の神經で其音を。それ〳〵に聞き辨へるでござる。此の木くらげを見たやうな物も。こりや謂れも無く付て居るのではない。此れは物の響を此へ受て。耳の穴へひゞかし聞せんが爲に。付て居る物でござる。それ故耳の遠い人などは。此上に。かう手を當てきくと。慥に聞え。又さうない人でも。かやうに手を當て聞けば。唯はきこえ難い物の音も。聞える物でござる。此れは其響を大きくしてきく故のことでござる。凡て體の中に。不用な物とてはとんと一つも無い。此の木蕈のやうな物も。何の爲にあるものと云こと。知れぬやうじやが。實は此訣で

付いて居るでござる。此外に。鼻で香をかぎ。口に味ひを知ることも。皆これに準へて知るが宜いでござる。扨脊骨の髓から。幹のさして居る神經は。臟腑へも行き。手足凡てからだ中へ彌綸して。其れが血絡とおり重なツて。かやうに體と成て居るに依て。そこで熱い寒いも。痛い寒いも感通したものでござる。

さて神經と云物は。右の如く奇々妙々なる物で。體中至らぬ處なく。充ちては居るけれども。其大本は。つむりの腦みそが魂の居處で。夫故に。人の體に取ては。頭首ほど大切な物はないじやに依て。解體して見る處が。つむりほど堅固になツて居る處はなく。其れはまづ彼腦髓を。薄うい物では有けれども。膜と云て。けしからず丈夫な物で。二重に包み。さて其上を腦蓋と云て。裏と表と。二重にかさなツて居る骨の。厚さ一寸二三分餘もある物で。手強く圍つて。さて其上を。厚皮のしかも大さう丈夫な皮で包んで。なほ其上にも。大切にして。かやうに髮の毛を生して圍ツた物でござる。體中どこをでも。けしからず丈夫な物では有けれども。此のつむりほど。骨も皮も手厚く丈夫な處は。有はせぬでござる。なぜなれば。人の神氣の。本の居處ぢやに依てのことでござる。此れは西洋の人が千數百年來。いく百人の人を解體して。事實と實物とに徵して。精密に考へ。其理を極みて書に記し傳へ。其書を讀んで。また此方の人も。事實と實物と照し。ぎんみに吟味を重ねて。とツくと穿鑿しつめたる處が。相違ないことでござる。尤も諸越の人も。委く人體を披き見て。其理を究めて云たでは無れども。闇推ながら。まづ古くは。素問の脈要精微論に。頭者精明之府。頭傾視深精神將奪矣。と云ひ。傷寒論の異本。金匱玉函經と云物に。頭は身の元首。人身の注する所なり。と云ことが云てありまた。本草備要と云物に。人之記性皆在腦中。小兒腦未滿。老人腦漸空。故皆健忘。愚思凡人追憶往事。必閉目上瞪而思索之。此即凝神于腦之意也。といひ。また醫學原始といふものに。人之一身。五臟藏於身内。爲生長之具。五官居於身上。爲知覺之具。耳目口鼻聚於首。最顯最高。便與物接。耳目口鼻之所導入。最近於腦。必以腦。先受其象而覺之。而寄之而剖之。而存之。

故ニ云心之記。正記ニ於脳ニ耳とあり。これは實によく云ひあてたことばでござる。かやうの訣ゆゑ。凡て人は。腕や股から切落されても。めつたに死なず。能く療治すれば。死にはいたさぬ物でござる。首は夫よりは小されけれども。切られては勿論のこと。切落されぬ處が。つむりを打こはされ。尤も右のとほり。脳骨は丈夫な物ゆゑ。めッたに砕かれることは無れども。ひよッと砕けて。少かにても。脳髓へ疵がつくと。人は直に死ぬものでござる。但し記性は脳ばかりでなく。胸とつり合てなることは勿論でござる。又稀には不測な事も有もので。夫は五雜俎と云ものに。首を切られても死なぬ人のことを記して。水を呑まうと爲たれば。首が無かつたと云ことが有る。此れらは變なことなれども。心得ては居るがよいでござる。さて又人のこみ入つた事を考へる時。目をねむッて考へるのも。頭首へ彌々心を凝らし。神氣を集める訣で。知らず〳〵さう行くことでござる。川柳に。「身のうちの智慧をさがしに目を塞ぎ」と申たは。能く云ひ當たでござる。こゝらの訣を。なほとッくりと會得するが宜しいでござる。

扨これで粗々。人の神氣の元の居處は脳髓で。それから神經と云枝がさして。體中に彌綸して。寒熱痛痒を知る訣も。はきと合點のいッた上で。其の脳髓と云ものは。又どうして出來た物じやと云に。其始めはまづ父母に受て生れ出で。その生れ出て後は。心の藏と申て。血の府が有て。この心の藏の訣はあとで申すが。夫から血が頸を傳つて。つむりへ上り。脳髓と和合して。靈液が出來るでござる。即ち脳は。靈液の宗源じやに依て。常に脳中に盈充て。夫より總身へくばり。神明不測の妙用をいたし。萬物に應じ。諸の務めをいたして居る處が。すべて人は目の寢覺てをるときは。その脳髓に充滿してをる靈液が。おのづから神經にわかり流れて。神氣も一身に普ねく盈ちて。寒熱痛痒を知り。視聽嗅味へるなどを始め。其外意識に應ずる。諸のことの營爲をいたすに依て。靈液をつかひ耗すこと。甚だ多くて不足になる。是に於て神氣もおのづから脳中に潜まり鎮まッて。彼のねむたくなるは此訣でござる。さて其睡つたる間には。彼の心の藏から。ます〳〵血が脳中へ上るべき訣が有て。靈液がます〳〵出來て。覺

めて居たる時に。悉く成たるが充々て。その用にたる時は。腦中に潜まッたる神氣が。また〳〵活發出し。靈液が神經に流通して。其人自然に寤覺て。又諸事を辨へ。營爲をなすでござる。何の事もなく。さめて居るに依て不足すれば。睡寢つて是を補ひ。ねむりに依て充たれば。眼さめてこれを用ひへらし。一と度はさめ。一とたびは睡つて。或ひは秏し或ひは補ふ處はたとへば靈液神氣が。腦中にみち集つて。神明の用を爲して。とんと天つ日の。常に天に懸り坐ますがごとく。又その神經に注ぎ流れて。體中に普く充て温養し。活動を爲し。また感通等の妙をなすことは。此れが日輪の御光輝があまねく大地を御照しなされて。萬物を育つるに似て居り。又その靈液神氣の盈ちると缺けるとに依て。覺ると睡りの有ることは。丁ど日輪の出ると沒とに依て。晝夜の有るやうな狀ちでござる。此外にも。人間のできる訣から。凡て體中の工合諸事悉くあやしきまでに。天地の成り始め。また天地の狀とよく似て。其理りがとんと同じことにまゐる。甚だ妙なる事でござる。諸越の人が。人はよく天地の道理に符つて居るとて。

人は小天地じやと申たことが有るが。此れは臆說杜撰ではなくて。實に人間のからだの訣を。とツくりと辨へて見ると。至極尤もな云ひ方で。さういかねばならぬ訣は。神代の古傳でよく知れるでござる。扨その神氣と云物は。靈液に含まり有て。また其の靈液と云ものは。腦髓より製造り出し。其腦髓と云物は。心の藏より血が上り送つて。日々に生成して。極りなき物なることを知たる上で。其の心の藏に蓄へ有ところの血は。どうして出來るものじやと云に。此れも其始めは。まづ父母に受て生れ出て。其の生れ出て後は。日々の食物で生成し。養ひたてゝ行くものでござる。其訣は。まづ飲食は。口に食て咽から納めるもの故。此のわけから申さにやならぬが。まづ一體人はこの咽の中で。咽と喉と道が二つに分れて居る。夫はまづ喉と云は。肺の藏から續いてをる物で。天地の氣を。鼻と口より肺の藏へ受納むる處ゆゑ。これを氣を受る管といふ意を以て。氣管と云ひ。また氣道とも云でござる。又咽と云は。胃の府から續いて居て。これは飲食を。胃の府へ受納むる道じやに依て胃管と云ひ。又食道とも云でござる。

但し氣管と胃管とは。うしろ前にひッ付合て居る物で。其の中氣管のかたは。ふだん呼吸を致して居ことゆゑ。硬くあいてをるけれども。胃管の方は軟かで。此れは物を呑下す時ばかり明いて。常はひッたりと成てゐる物でござる。近くは鴨などを料理して見ても知れる。頭莖の中に。硬い管と軟かな管とか有て。ひッ付合ひ。其のかたい方は肺へづゝき。軟かな方は胃へ續いて。慥かに見え分かる物でござる。さて右の通り呼吸の管と付合て。口の處で一つに成り。夫に工合が有て。その工合と云は。右申す通り。呼吸をいたす氣管の方は。不斷あいて居るけれども。飲食をのみこむ胃管の方は。物を呑むとき。其飲食がそこを開いて通るゆゑ。彼の呼吸をいたす氣管の方をば。押塞いで。一寸呼吸を止めて。その飲食が。氣管の方へ紛れ入らぬやうに成て居るでござる。其仕掛がどうも云へぬ妙な仕かけでござる。此れに付て。かの餅なんど。其外も大きな物。硬き物などを呑込まうとして。此の食道に障り支へる時は。かの管道の方が塞がりきりに成て。呼吸が止る故に死ぬでござる。こゝを能く心得るが宜いでござる。扨其工合に付て居る物は。結喉と云物で。俗にのど佛とか云て。人を火葬にして見ると。どうか人の居つてゐる形のやうにも見えるから。例の坊主共の杜撰に。のどぼとけなど丶名を付けた物でござる。此の工合は。一寸手を當てゐて。唾を呑込んで。試し見ても知れるでござる。右のぐあひじやに依て。物言ひながら。飲食を致す時は。呼吸をも致すに依て。氣管があいてゐる。そこで飲食を過つて。氣管の方へ紛れ入らしめ。彼のものに噎ると云は。此の訣でござる。じやに依て。飲食しながらもの言うならば。心すべきことでござる。孔子の食する時は。物語りせなんだも。此噎るがいやさのことでも有りませうか。扨これで。飲食を呑みこむ訣と。呼吸のわけも。粗々聞えた上で。其飲食したものを。胃の府へ納めてこなし。段々と下へ送る事じやが。其おくる仕掛は。一體まづ胃と云物は。飲食ものを受納める袋で。丁ど心下鳩尾の處に位して居つて。その上と下とに口が有て。上の口は右申たる食道で。これは飲食の通り道。下の口は徑り七八分。此れからつゞいて管に成つて居て。これを延して見ると。長二丈七八尺ば

かり。迂曲廻疊て。腹の中に滿ちてをる。此が俗に謂ゆる百尋で胃府の下の口から。肛門まで續いて居て。これに細い處と。太い處とがある。此の細い處を。假に小腸と云ひ。太い處を姑らく大腸とは云でござる。實は一連きな物でござる。もろこしの醫書ども。謂ゆる內經の素問靈樞を始め。飲食をまづ脾と胃の府へ受て。そこで水と滓とを分けて。水を小腸から。膀胱と云へ送つて。小便となし。滓をば大腸へおくッて。大便となすとやうに申て。大腸と小腸と二本。別々の物じやと云て有るけれども。此れは一向に。からだの訣を不案內で申たことでござる。尤も靈樞に。解體して見た趣も見えるなれども。唯ちよいと覗いたぐらゐの。うろたへ眼で事をきめて。其太い處と。細い處の有を見て。おし推量に。右やうの臆說を云出し。實は一とつゞきなる訣を。知らなんだものでござる。

扨その謂ゆる百ひろに。太い處と細い處のある故は。右申す通り。胃府は。心下鳩尾の處に有て。これは延縮みの致す物で。其空腹でひもじい時は。ちゞんで居るが。飲食を受つめると。張りふくれるやうに成て居る。扨その張詰たる飲食の。こなれる仕かけは。胃袋の右の側に當つて。肝の藏と云が有て。これには苦き水を蓄へてをる物でござる。さて又この肝の藏の中に懸つて。膽と云が有る。これは人に依て。大きいと小さいとがあれども。大抵は。鷄の玉子ぐらゐの袋で。是が彼の謂ゆる人胆で。牢屋の淺右衞門藥とか云て。勞證になど用ひるは此れでござる。甚だ苦く黃色なる液があッて。夫に火氣を含み徹底して。酷烈とはげしくて。能く物をこなす性の物でござる。さて飲食をして。腸胃が張て來ると。肝と胆がそれに壓れて。彼の蓄へてをるにがき液が溢れ出て。尤も細かなる管の通ひ道がしたゝか有て。夫から腸胃の袋へ注ぎ入る。此肝と胆との汁を以て。飲食をこなしたものでござる。

さて飲食がこなれ。下へ送つて空腹になると。又肝の藏と胆とが。おされることが無いに依て。又段々に彼の苦液を造り蓄へる訣があるでござる。人がげッぷと噯氣をして。黃なる苦き水を吐くことの有は。右申したる胃袋へ注ぎ入たる。肝と胆との汁のにがみでござる。

無事時。常作病想。一切名利之心。自然掃去。眞妙法也と云たが。これも尤もなことでござる。中にも富貴の人といへども。病中に在ては。百念灰冷と止んで。反つて貧賤にして。健かなる者を羨むと云たなどが。今の世とても。人は皆さうで。病を得てから。やれと云て騷ぐは。實は俗の諺に。屁をひつて尻をすぼめる。と云譬の如くでござる。此の諺の意は。早くもろこし人も。素問の四氣調神大論に。是故聖人不治已病治未病。不治已亂治未亂。此之謂也。夫病已成而後藥之。亂已成而後治之。譬猶渇而穿井。鬪而鑄兵。不亦晩乎。とも云てあるでござる。さてなぜまた辛勞すぎて。心穏かならねは。内の病ひが發ると申すに。人の身體は。天地の間なる氣を。口鼻より吸ツて上焦に受け。夫れより中焦下焦。腹中惣體へおくり。其氣の力に依て。血もよく一身を運る處を。心を勞すること甚しければ。常に物思ふこと絶えず。胸膈おだやかならぬ故。その氣沈滯して下への運り惡く。そこで種々の病證が起る。其の病證のあらましを云はゞ。まつ上焦では。痰喘咳嗽して。短氣と云ていきだはしく。胸滿と云てむなぐるしく。動悸眩暈。ものに退屈など致し。中焦では。心下痞鞕と云て。鳩尾下の處が痞へて鞕く。少し押しても痛み。或は飲食こなれ惡く。又何となく胸先こゝろ惡く。腹中筋ばり。また下焦は。臍の下に力なく。尤も押て見るに。筋ばつていたみ塊など出來。腰いたみ足冷え。又しびれ。小便近く。或は謂ゆる疝氣もち。積持と云證となりなんど。此外今こゝには申し盡しがたい程のことでござる。こりやみな心を勞すること過て。氣が滯ツて下へ循らず。血は氣の力に依て。一身を循る物なるに。氣が滯ては。血の循り惡くならねばならず。其でかやうの證を發することに至るでござる。そこで養生と云つては。外に爲やうはなく。尤も食養生と云こともあれども。第一は胸膈の間に。氣の沈滯せんで。能く下焦へ循るやうにと心がけるのが專要でござる。此れは誰も知て居る通り。臍の下に。氣海と云名をつけた穴處の有るのも。實は人の口鼻より受くる處の氣をしッかりと臍の下。謂ゆる氣海の穴あたりに湛へて有るやうに。と云の義で名づけた物でござる。素人もよく知て居る。難經と云醫書にも。生氣之原者。

腎間ノ動氣也。此ノ三焦之原。一名ニ守邪之神ト。とありますが。此義は。人の生てをる氣の原と云は。臍下の動氣ある處が夫じや。此れをなぜ腎間の動氣と云ぞなれば。嚮に申するとほり。腎の藏は。左右に有て。丁ど氣海の穴は。其ノ左右の腎の藏の中間通りに當て居て。その動氣の有る處は。かの左右の腎の藏の中間にあたつてをるに依ツて。腎間之動氣と云た物でござる。此の三焦之原と云は。上焦中焦下焦と三焦の中にも。此下焦腎間の動氣のある處は。大切の處ゆゑ。三焦の原と云たもの。一名ニ守邪之神ト云たは。こゝの處さへ氣が充てをれば。外邪にも犯されず。内よりも病ひが發らぬ程の訣ゆゑ。邪を守るの神とも云。この意でござる。されば素問の評熱病論に。邪之所ノ湊ル其氣必虚。と有ルが如く。房事の後にうたゝ寢をして。風邪を引込み。今參の信濃が持ツたる油揚を。鳶に抓れる類も。油斷よりのこと。迷はし神に嚇れるも。狐狸の類ひに化されるも。彼の守邪之神なき隙を付込れたる故のことでござる。然ればこれ程。やんごとなき大事の處ゆゑ醫書と云ふ醫書は本よりのこと。諸道諸業。何れもこゝへ氣をたゝみ蓄へることをさとし。まづ天竺では。釋迦よりも遙まへより學び來ツたる。婆羅門の修行も。治心と云て。心をこゝに治むるの修行。また釋迦の修しだる處も。これに外ならず。されば諸宗の安心も。云ひもて行けば。みな同じ意に歸することでござる。又諸越の神仙の道を傳へたと云ふ。道家の輩の修行する處もこれで。皆こゝに氣が聚まれば無病に成り。無病じやに依て。長壽を保つと云の義で。此の修行を不老不死の術などゝも云た物でござる。氣海の下の穴處を。丹田と云も。其の不老不死の丹藥を。蓄へたる田と云の義を以て。名けた物じやと見えるでござる。

さて臍下へ。氣を練り疊むの修法は。種々ある中に。いッち手みじかい修法が有る。其れはわが父は。八十まり四つの歲まで。壽を保たれましだが。我は若かりし時。殊の外に多病なりしが。とある老人に此法を習ツて。三十餘りの時より。折節となく此の術を行つて。此齡に至るまで無病なり。其方もこれに習へとて。教へられましたが。實以てこれは無病長壽の奇術なることぞ。疑ひなきことでござる。其仕やう

は。毎夜寝所に入て。其いまだ睡りにつかぬ前に。仰向きて。兩脚を揃へて。强く踏のばし。總身の元氣を。臍の邊から。氣海丹田の穴。および腰脚足の心までに充しめ。さて他の妄想をさらりと止めて。指を折り。息を計へること百息にして。其の蹈しめたる力を緩め。暫有て。又かくの如く。大抵毎夜この術を行ふこと。四五度ほどづゝ。缺さず修すること。毎月五七日づゝすれば。元氣總身に充滿して。腹中の積塊も皆とけるなり。何なる良藥も。此術に越すもの無し。夫故に。我れはかくの如く。老に及ぶまで無病なりとて腹を出して見せられた處が。中焦鳩尾の處すきて。下焦臍下の張ッて固きこと。こつこつと音のするやうで有たでござる。此に就て思ふに。唐書と云ふもろこしの歴史に。柳公度と云者が。年八十餘で。力も强かつた處が。此が常に云には。吾かやうに長壽で。力さへ有ることは。初めより外の術はないが。いまだ嘗て氣海を冷さず。また元氣を以て。喜怒を佐けぬばかりのことじや。と云たと云ことでござるが。我が父もとんと此通りの行狀で有たでござる。扨近ごろ。夜船閑話と云ふ書を見たる處が。

これは駿河國の原宿の。松林寺と云寺の住職。白隱和尚と云が著したもので。此白隱若かりし程。座禪觀法の爲に。大きに身を苦め心を勞し。其れがために彼氣胸膈に滯つて。つひに勞瘵の惡證を煩ひ。諸醫百藥寸效も無ッたる處が。山城の國白河の山奥に白幽と云ふ老人の。その年は二百歲餘なるが。隱れ住んで。これが能く醫道に達したる者なる由を聞いて。それへ尋ねたる處が。何にも聞きたる如く。白幽は。僅に五六尺計なる巖中に居て。雜具の類さらになく。實に仙人の有樣で居たる故。白隱はそこへ跪いて。苦に病因を告て。治法を問ふた處が。白幽は。內觀の方と云を授けたと云ふことでござるその內觀の方と云が。右申たるとほり。氣海丹田に力を張るの仕方でござる。旣に白隱たしかに言を立て。能くこの內觀の方を行ひ。其功つもらば。一身の元氣。いつしか腰脚足心の間に充足して。臍下瓠然たること。未だ。しのうちせざる毬の如くならむ。五日七日。もしくは二三七日を經たらんに。從前の五積六聚。氣虛勞役等の諸症。底を拂て平癒せずんば。老僧が頭をきり去れ。と云ひおいた程のことで

ござる。白隠は僧でも。あまり僞はつかぬ者で。此方は弘く人にも傳へて。しば〳〵驗を見たること故。かやうに懂かに言ひおいた物でござる。

抑かやうに煩はしげに。養生の法を傳へるも。どうぞ人々の體を健かにして。古への道を尋ね明させたく思ふ。篤胤が老婆深切でござる。すべて志を立て道を學ぶ者は。身の養生をもせねばならぬ訣で。君親に事へて忠孝を盡すも。また世に功を成して。美名を後世に傳へるも。命有てこそでござる。漢籍にも。孝經と云書に。身體髮膚受二之父母一不二敢毀傷一孝之始也。立レ身行レ道揚二名後世一以顯二父母一孝之終也。と有るは。まづ第一に身を全うして道を學び。立身して。さて後の世に名を揚げて。其父母までも面目を施すやうにするのが。孝道の始終を全うすると云ものじや。と云の意でござる。此れは序でじやに依て云ひますが。世の常の人が此の方づれが。後の世までに功を成すなど云も。餘り事々しいやうじやが。さうでない訣は。彼春秋の左傳にも。太上立レ徳。其次立レ功。其次立レ言。と云たる如く。其の德が國天下に及び。普く世人を治むることは。中々凡下の者のなることではなく。其次の功を立ると云も。其位に居て。政を執る程の人でなくては成らぬことでござる。夫故いつち下なる。言を立て。世人を導きでもするが。凡下の相應なる務めと云物でござる。學問する者の心がけは。先こゝらでござる。

文化八年正月

西籍概論序

欲知字乎。欲知道乎。欲知字。則有字書在
也。欲知道則有
神典在也。進退無所據。唯毛漢人之信。甚矣哉。
盲俗之瞶々成習也。夫西土之書所載。果何事。亦
有知仁勇義禮讓孝弟忠信之名而已矣。而弑父
弑君之實。纍々相望紙表。則所謂。知仁勇義禮讓
孝弟忠信之實。即
皇國固有之道。而非西土空言虛名之道也。世之
講空論虛學者。不問其實。唯々名之信。遂認展
彝倫者。以爲聖人之化也。予嘗謂。道者
神魯企神魯美命之道也。人有秉彝。猶飢食渴飲。聖
人何與。且夫士大夫之誦詩書者。幾何哉。農工
商賈其知仰聖欽賢者。幾何哉
皇國人員。大凡不下三千五百餘萬。而熙々皞々。視
息於兩儀之間。以樂百年之壽者。即
神魯企神魯美命之道。所以
神代至今萬古不變者。而決非儒敎之效也。若夫

權臣黠賊接迹當世。輕蔑
神胤顚倒
華夷者。皆俗儒曲學。戎臭胡穢之所浸染薰蒸。見
馬子之大逆。入鹿之覬覦。藤原諸氏之專恣。及源
平北條足利之跋扈。可視焉。降及德川氏之握政
柄。藩有學。鄉有校。郡有庠。村有序。市井巷
曲。無往不有漢學者。其夥不啻犬屎猫糞馬戻
牛溲也。然而天下之士。各藩之民。知有幕府。
而不知有
天朝。視將軍如
天子。視
天子如寓公。而漢學者之見。亦固出乎此。朝習夕講。
非堯舜。則湯武。引禪讓放伐之迹。嘖々以敎之。
或筆之於書。斯道之湮晦否塞。到德川氏而極
矣。予故曰。風俗之趨薄惡者。非
皇道之不學乎世也。儒毒東漸之效也。學者皆曰。
我國到於
應神帝。而文敎始闢。是昧者之言耳。
應神帝。執
惟神之道。而行

惟神之化。未聞其政變於夷。漢學之盛於世。創
乎
天智帝也。非
應神帝也。猶佛之來貢。在
欽明帝世。而其法之盛。在
聖武。
孝謙二帝之世也。其召阿直支王仁於百濟。豈如後
世儒者所言乎。且夫
菟道皇子之行遜讓。一出天資。非讀論語之效
也。加藤清正之立大節。亦其至性。非讀論語
之效也。不然則後之治儒籍者。數計斗量。指
不遑屈。而何其不悉化爲
菟道皇子。與加藤清正也。由此觀之。曰儒籍
行於世可也。曰儒教之益於世不可也。我師
氣吹舍先生。蓋有慨於此。抱不出世之才。而持
千古之卓見。一旦奮然。咄嗟叱咤。以蕩掃雲霧。
天地間始可謂晴明矣。然而人見先生之罵聖
人。膽破魄死。茫然自失。反罵先生。以爲天人鬼
神。嗚呼先生亦人耳。苟非有所恃。焉能如此
乎。然則何恃也。曰
神典耳。井蛙訝海。夏蟲疑冰。
神典之載
大道。固非腐儒末學之所知。丘陵可踰也。日月不
可踰也。昧者之毀先生。多見其不知量也。夫
橿原之去
神代。幾萬歲。而今之去
橿原。僅々二千五百餘歲耳。嗚呼天地之無窮。以後
世視今代。則今猶爲近古。士固待知己於千歲。
豈容因凡俗之好惡。變其志操乎。古人云。自我
作古。蓋先生之志也。天道循環。榮落有數。
佛滅儒潛。豈無其時。今也
皇道復古之運。已萠乎冥々之中。則今日是學術變
革之秋也矣。學者其可不勉乎哉。

明治三年庚午正月三日

京都大學教官　渡邊重石丸拜撰

西籍概論の端書

己はやく故翁に乞申して此書を手づから書寫ていかてから籍にのみ讀ふけりて中外のけぢめをも辨へしらぬ人々にも示さまほしとく板にゑりなして世にほどこしたまひねとあながちに乞ねきたりしをこは予がきも弱きすさびに漫にものしたる草稿のまゝにしあれば此まゝ人に見すべきものならずとさらに許たまはざりし事を指をりて數ふれば五十年に近き昔になも有ける然るに萬の事古に復したまふ。大御代となりて翁の著はされたる書としいへばいまだ片成の物といへども頻に愛尊む時にあひて今かく速にゑり板のなれる事のいと嬉くはた愚なる身も長いきしたるかひありて此幸ひに逢ぬる悦の涙止めかねてかく漫りがはしき老のこゝろやりをひと言かきそふるになん。

明治三年五月　三川國七十三翁柳園羽田野敬雄

西籍概論講本上之巻

平田先生講談　門人等筆記

さて今日より三日が間に申す所は。記しおきまする通り。儒道の大意でござるが。則ち漢學のあらまし。また漢國は。謂ゆる開闢より致して定まりたる君なく。歷代と申して。周の代が秦となり。秦の代が漢とかはり。替り代つて今の清と云代に成たるまで。數十代の沿革。また儒道と申すこと。又その漢學いたす者を儒者と申す訣。御國へ漢學が渡つて以來のあらまし。また和漢の儒者と云者どもの大抵の學風。および御國の儒者どもの。漢學の致し方の相ひがみ。宜しからざることなどを。論辨いたすのでござる。扨漢學の事は。今では世の中一ぱいに相成り。人の心が多くそれに染み。最負に思ふ人が多くて。其非を辨ずると。腹をたつ人が世に澤山あるから。此れも甚申しにくい。ちョいと聞いて尤もに思はれる衆は。そんなにたんとは无いかも知れぬと思ひますが。我が翁の教へに。人は信じやうと信じまいと。眞のことはありの儘に。作らず飾らず申すがよいと。返

すぐ〳〵教へられましたこと。且は漢人さへ。此心ばへは申したること故。人に憎まれ誹らるゝもかまはず。思ひを放つて申しまする。抑漢國のこと。から學びのことは。世の漢學者が。我が國の事をば。よそに致して。やッきと成て世話やいて居る所を。隙づひゐに。何も此方が申さずともなことでは有るけれども。御國へ儒書の渡つて以來。千五百年ばかりにも和なる事故。世に普く弘まり。人の心にも深くしみ込み。是また佛法と同く。萬の事に混雜してをるが上に。人心を素直ならず。惡さかしく致し。世の害となることは。佛法のやうな事では无く甚しいでござる。夫故に鈴屋の翁は。佛法をば。さしもかまはれなんだなれども。漢學の繫をば。生のかぎり。辨じられたることで。其れは先づ。うひ山ぶみに。第一に漢意儒意を。清く濯ぎ去て。やまと魂をかたくする事を。要とすべし。云々己何に付ても。ひたすら此事を云は。ゆゑなく猥りにこれを惡みてには非ず。大きに故ありて云なり。其の故は。古の道の意の明らかならず。人みな大にこれを誤りしたゝめたるは。何なるゆゑぞと尋ぬれば。みな此漢意に心の惑はされ居て。それに妨げらるゝが故なり。これ千有餘年。世の中の人の心の底に染著てある痼疾なれば。とにかくに清くは。のぞこり難き物にて。近きころは。道をとくに。儒意をまじふることの。わろきを悟りて。これを破する人も。これから聞ゆれども。さやうの人すら。なほ清く此れを免るゝこと能はずして。その說くところ。畢竟は漢意におつるなり。此の如くなる故に。道をしるの要。まづ此を清くのぞき去にありとは云なり。これを清く除き去らでは。道は得がたかるべし。初學の輩。まづ此漢意を清く除き去て。やまとだましひを堅固くすべきことは。たとへば武士の戰場に赴くに。まづ具足をよくし。身をかためて立出るが如し。もし此身の固めをよくせずして。神の御典をよむときは。甲冑をも著ず。素膚にして戰ひて。たちまち敵のために。手を負ふがごとく。必からごゝろに落入るべし。と云はれ。また人に贈られたる消息文にも。只々漢の習氣を除き候こと。第一義に候とも見え。また玉鉾百首にも。「きもむかふ心さくじり中々に。からの敎へぞ人あしくする」て又一漢ざまのさかしら心うつり

てぞ。世人の心惡くなりぬる」でとも詠置れたでござる。尤もこれは縣居の翁の國意考。その外くさ〴〵書著されたる書どもに。云ひおかれたることに。本づかれたることながら。その縣居の翁さへに。取はづし稀々には。漢意の打交りたる說ども有り。まして其以前にも。漢學の弊を心づいて。辨ぜられ。儒者ながらも。大倭心の失せなんだる人々には。山崎闇齋の門人。淺見重次郎安正。號を絅齋と云たる人。また水戶中納言光圀卿の御家臣。栗山愿助。號を潛鋒といふ人。また土佐の谷丹三郎重遠。また讚岐の丸龜の人。佐久間立僊。號を大華と云へる人。また武學者では。松宮主鈴俊仍。號を觀山と云へる人なんどは。各々書を著はして。これを辨じたなれども。猶いまだ。彼の國籍に醉ひまどひ。うはべを作りたる擬聖人どもに。しめを張られて居つたる所が有て。淸く美はしくは辨じかねたものでござる。とてもかくても擬聖人どもの爲に縛られて。漢籍の垣內を出放れぬうちは。からぶみの非說は知れず。漢ぶみから意のひがごとが知れねば。眞の道は見えず知れぬことでござる。各々そのお心得で。鈴屋翁の歌に。「久方の天つ月日の影は見じ。からのこゝろの雲しはれずは」と詠まれたる抔をよく心にしめおいて。拙者の講說を聞かるゝが宜しいでござる。扨とかく物は初めが大事でござる。先入主となると云事も有るに仍つて。序でに申さうでござる。是も翁の玉勝間に。物學びは。其道をよく撰びて入そむべき事と有て。もの學びに心ざしたらんには。まづ師を能く撰びて。其立てたるやう。教のさまをよく考へて。隨ひ初べきわざなり。さとり鈍き人は更にも云はず。本より智さとき人といへども。大抵はじめに隨ひそめたる方に。自ら心はひかるゝわざにて。其道の筋わろけれど。惡きことを得悟らず。又後には悟りながらも。年來の習ひは。さすがに捨叵きわざなるに。我と云ふ禍神さへ立そひて。とにかくに誣言して。猶其すぢを助けむとする程に。終によき事はえ物せで。生涯非事のみして。身を終る類ひなど世に多し。かゝる類ひの人は。勉めて深く學べば。まなぶまに〳〵。彌わろき事のみ盛りになりて。己惑へるのみならず。世の人をさへに惑はすことぞかし。返す〴〵初めより。師をよく撰ぶべきわざになむ。と有ますが。

能々心得べきことでござる。さて漢學の。御國に渡り來たる。その始めを申すに付て。先づ凡てもろもろ外國どもの成始め。又その外國どもの參來る故由を。よく心得ねばならぬ訣がある。夫はまづ靈の眞柱に申たる如く。高皇産靈。神皇産靈神の御靈に依て。まづ此國土の本と成べき一の物が出來て。さて伊邪那岐。伊邪那美二柱神は。夫に御天降なされて。既に大八洲國を次々御生みあそばして。後にもろもろ外國どもは。こゝかしこと。泥淖のかたまッて。大きくも小さくも出來た物で。それは古の傳に。壹岐島。津島。及處々小島者。淖沫之凝成也とある。この傳への意は。靈の眞柱に申したるごとく。壹岐津島より西にあたる國々。三韓はもとより。漢土。天竺。その外の國々も。悉く淖沫の凝て成たる物だと云ふ傳で。夫はこの壹岐津島及とある。及の字をもて知らるゝことでござる。さすれば諸々外國どもは。御國の成たるよりは。はるか後に出來たる物でござる。かくて伊邪那岐命は。天照大御神と。速須佐之男命とを御生みあそばして。大御神には。高天原を知し看せと御依しあそばし。速須佐之男命には。

青海原淖の八百重を。しろしめせと御依しあそばしたるが。この青海原淖の八百重と申すは。この國土全くをいふ古言なる故に。速須佐之男命には。此の大地球を。みな知ろしめせとの御詔でござる。是は二つの御目より御生れあそばしたる。二柱のうづの御子に坐すから。天と地とを御依し分けなされたること。さやう坐べき御事でござる。然るに速須佐之男命は。故有りて御母伊邪那美命の坐す根國へ。入らせられたく思召し。かの國へ入らせられたなれども。さすがに父大御神の。この大地を皆しろしめせと。御依しあそばしたる御詔を。重んじ畏まりあそばして。その荒魂とます禍津日神を帥ゐて。この大地は盡く御巡りなされ。さて御國の地へ御かへりなされて。韓國の島は金銀あり。吾が御子のしらす國に。浮寶あらずはよからじと仰せられて。樟を生したてなされたのは。金銀も無くてはあるまじき寶なるが故に。その韓國にある金銀を。追ては取に遣し給はんとの御心で。かく仰せられて。其取に行く時には船なくてはかなはぬこと故。そのとき船に作るべき料にとて。樟木は御生しなされたものでござる。

この御心のむすびは。神功皇后の御代に至て知らることでござる。かくて此神の御末と坐す。大國主神は。須佐之男命の御後をついで。御國をはじめ。大地にあらゆる國々は。御造堅めなさるべきいはれでござる。だに依て須佐之男命は。此國を造れとて五百つの鉏をこの神と。少彦名神に。御依しなされたものでござる。扨又皇御孫邇々杵命の。御天降あそばして。國土を知しめすことは伊邪那岐命の。速須佐之男命に。この國をみなしろしめせと。御依しあそばしたる。謂れに因て知食すことで。大國主神は。この謂れに因て御國を皇美麻命に御譲りなされて。後に少彦名命の御後より。外國へ御渡りなされ。少彦名命とともに。その外國どもを作りかためもろもろ外國どもを。御國によりて仕へまつら令んとなされ。其の事を御掌りなさるゝことでござる。此れらの細やかなることゞもは。靈の眞柱に委く記しおいたから。彼の書を見らるゝが宜いでござる。さて御國へ外國の參來れる始めは。神武天皇より御十代。崇神天皇の御代の七年に。三輪の大物主神の天皇に。外國の歸伏まゐるべき由を御さとしなされて。この御代に。意富加羅國といふ國より蘇那曷叱智と云者を使として。貢物を奉つたでござる。是は新羅國の西南にある國でござる。後には三韓のうちに成たでござる。扨この御さとしなされたる。大物主神と申すは。即ち大國主神の。幸魂奇魂の神に坐て。神代にこの神。外國を御造り堅めなされて。御國へ御歸りなされ。其時より大和の三輪に鎮坐すことでござる。此神の外國人の參り來ることを御誨なされたるを見て。大國主神の外國もろ〳〵を。御國へよりて仕へまつら令んと。なさるゝことを知るが宜しいでござる。扨かの使人は。この次の御代。垂仁天皇の御代まで。仕へ奉つて居たるが。その還る時に。赤絹一百匹を。その國王に下され。かつ先皇。崇神天皇の御代に。この國人が參りたること故。すなはち崇神天皇の御名を。御眞木入彦印恵命と申し上たるに依て。その大御名のみまといふを取て。任那國と申べき由を詔有て。この使は歸し遣はされたでござる。さて此れにつけてもろ〳〵西にある國々を。からと云ことはこの始めて渡り來る國が。大加羅といふ國で有たる故に。その後渡り來れるをも。その

方角にあたる國々をば。ひろく加羅國と言習はしたものだと。舊き説に有りますが。此れはさうらしいことでござる。井澤長秀が俗説辨に。山崎垂加の説とて。外國をからと唱ふることは嘉稱にあらず。日本を褒て實とし。もろこしを貶して虚とするの謂れなり。日本紀に。膂宍空國とあり。空國はむなしき國。すなはちからくにと云におなじ。殼蛻などの類ひ。中に實なきにたとへたりと有りますが。これは大倭心めかして。おもしろいやうだが。どうであらう。此外にもくさぐ\説はあるけれども。何れも宜くないでござる。又もろこしと云は。かの國へは。野路。山路。海路。もろ／＼の道を越して行くに依て。諸越と云と古人の説だが。是はさうらしいことでござる。何はともあれ。から。亦もろこしと云は。御國の外なる西の方の國々を。おしなべていふ號でござる。此のわけ故。からと云によく當る字は。戎の字がよいでござる。夫れゆゑ師翁の馭戎慨言に。此の戎の字をからと訓じて。もろこしの事にいはれたものでござる。さて此後十四代仲哀天皇の。筑紫の訶志比宮に坐て。熊曾を御征あそばさるゝ時。御

自ら御琴を御ひきあそばし。建内宿禰大臣に。神の命を御伺はせなされたる所が。大后。息長帶比賣命に。神の御歸りあそばして御覺しあそばすには。西の方に國有。金銀をはじめ。種々の珍しき物有。熊曾をうつことを止めて。これを征給へと御さとしなされたる時に。天皇の詔ふやうは。高地に登りて西の方を見れども國は見えず。たゞ大海原のみこそあれと仰せられて。御心の中に。これは詐する神ぞとおぼして。その御琴を押退て。御控あそばさぬ時に。其神大く御怒りあそばして。この天の下は。汝の知らすべき國にあらず。汝は一道に向ひませと宣はせられたでござる。此の時建内大臣の申されまするは。恐し我が天皇。なほその大御琴をあそばせと申したれば。天皇はその御琴を引よせて。なま／＼に御ひきあそばしたるが。しばし有て御琴の音が。聞えなくなッたる故。火をともして見奉つたる所が。とく崩坐てゐらせらるゝでござる。これ即ち神の御言をなほざりに思食したる御祟でござる。こゝに於て驚懼み。まづ天皇の御なきがらをば。殯宮と申てその假宮へうつし參らせ。さて大后は。國の

大麻と云を取て。天の下にあらゆる。種々の罪穢を尋て。國の大祓と云をなされ。さて更めて神の御命を。御伺ひなされたる所が。神の御さとしあそばすこと。先の如くで。此の國は汝が命の御腹にます御子の。しらさん國なりと御覺しなされたでござる。こゝに建內宿禰の申されまするは。恐しその御腹に坐す御子は。何の御子ぞと申したれば。男子ぞと宣ふから。建內宿禰の又申されまするは。今かく言教へ給ふ大神は。その御名をしらまほしと申されたれば。神の御答へに。此は天照大御神の御心で。底筒男。中筒男。上筒男。三柱大神也。かの國を求めんとおもほさば。天神地祇。また海河山の神々に。悉く幣帛を奉り。我が御靈を御船の上に坐させて。云云のわざして渡りませと。仰せられたでござる。ここに於てその御教への如く。軍船を御整へなされて。御渡りなさらんとする時に。御產あらせられんとしたでござる。その時皇后。御腰帶に。石を御纒ひなされて御しめあそばし。祈言して宣ふには。還りての後こゝにて生れ給へと仰せられて。御渡りなされたる所が。海原の魚ども大小ともに。その御船を負ひ奉つて渡る。また順風大に吹き起りて。御船が浪のまに／＼進み行くほどに。その浪新羅國の半まで。おし上り至つたでござる。こゝに新羅の王がおぢ恐れわなゝいて申すには。我國ありてより此方。潮の國に上ることを聞かぬが。これは國が沒して海となることかと。いひも訖らぬうちに。大御船が海に滿ちならび。御旗の光り日にかゞやき。笛鼓の聲。山川にひゞくから。新羅の王がはるかに望みて。これは非常なる兵が來て。吾か國を滅さんとするよと。泣まごッて氣絶いたしたでござる。だがやゝ有て正氣に成て云には。東に大倭と云神國有りときけば。必ずその國の神兵ならんと云て。自ら縄にかゝり。大御船の前に來て申すには。今よりゆくさき天皇の命のまに／＼。御馬飼として。年の毎に船なめて。船腹ほさず。柂檝ほさず。天地の共常磐に仕奉らんと申す故。その縄を御解きゆるしなされて。御馬飼部と御定めあそばし。百濟。高麗の二國の王も。新羅王のまつろひ奉れるを見て。共に御前に來て今より後。貢物はたやさじと申す故。これも御ゆるしなされて。渡の屯家と御定めあそばし。扨その御杖き

なされたる御矛を。新羅王の門に。御衝立あそばし。後世の印となされたるが。其の御矛うせずして。後世まで。有たと云ことでござる。さて底筒男。中筒男。表筒男。三柱神の荒御魂を。この三韓の國の守り神と鎮坐しめて。御還渡りなされたでござる。これに付て舊き説に。その御歸りあそばす時に。弓の弭で岸石に。新羅王は。日本の犬也と御かきあそばしたるが。其後かの國の人。これをいやがり。削れどもいつかな消ぬと云ことをいひますが。此事からびいきの贔が。彼是といひけして信ぜぬことながら。道春先生の神社考。また天野信景が鹽尻に。朝鮮の平安城より一里ばかりわきに。麗似といふ所が有て。河邊に岩石多きが中に。二丈ばかりの大石面に。高麗王者日本犬也。といふ八字を彫つけて。その字の大きさ一尺ばかり深く切入てをる。夫を戸川肥後といふ人が。彼地に於て親しく見て來たと。記しおかれましたから。實にありはすると見えて。不測なる事でござる。さて御歸りあそばして後。御子は御生れあそばしたでござる。その御生れなされたる時に。御腕に。鞆の形なる肉がましまし〱たと云ことでござる。是は皇后の。三韓を御征あそばすに付て。假にますら男の御裝ひをなされて。弓矢を御執りあそばし。鞆を御つけなされたる故。それに御あやかりなされたのでござる。それ故この御子の御名を。大鞆和氣命とも。また品陀別命とも申奉るでござる。これが則ち神武天皇より。第十五代に御あたりあそばす。應神天皇でござる。扨この天皇は。右の如く。神の御覺しに依て。御腹に坐したる時より。天の下を知看たること故。後世に胎中天皇とは申奉ることでござる。この天皇の御生れあそばしたる所は。則ち筑紫で。世の人そこを號けて宇美とは云でござる。かくて都へ還り坐んとする御船路難波をさしてこぐ時に。皇后の御船が海中にたゞよッて進まず。元の所へ引かへるから。太占をなされたる時に。天照御大神の御誨に。我が荒魂は。皇居にな近づけ給ひそ。御心廣田國に居るべしと仰せられ。又この三柱神の御さとしに。吾が和魂は。渟中倉の長峽に居て。往來の船を看んと思ふと。御託が有る故に。その如く大御神の荒魂をば。廣田に御祭りなされ。即ち津國武庫郡でござる。三柱の神をば。渟中倉の長峽に鎮

坐しめられて。則ち今の住吉神社がこれでござる。此時の御言に。こゝに坐て往來の船を看んと思ふと御さとしなされたるは。船路を守らんとの御言で。此謂れに依て後々までも。唐土へ御使を遣はさるゝ時は。この浦より船を出され。且この大神を重く御祭りなさるゝことでござる。扨また天照大御神の此時の御託言に。わが荒御魂は。皇居に近づけ給ふなと宣るに付て考ふれば。此の三韓を征給ふべき由を御覺しなされたるは。天照大御神とは申すものゝ。その荒魂の御心でござる。天照大御神の荒魂なれば。即ち禍津日神に坐て。亦の御名を五十猛神とも申し。夫は天照大御神にばかりの荒魂ではなく。速須佐之男命にも荒魂に坐て。殊には須佐之男命に屬坐すことで。その御子とさへ申し。速須佐之男命の大地を御巡りあそばしたる時。帥ゐて御廻りなされたる程のことでござる。此れらの事。委くは靈の眞柱に申たる通りの訣でござる。さて其大地をまはり御還りなされたる時に。韓國の島は金銀あり。吾が御子のしらす國に。浮寶あらずはよからじと仰せられて。船に造るべき榑を御生しなされたことあるが。夫は右申たる如く。其の加羅國々にある金銀をはじめ。御國の用となるべき物を。追ては取に遣はさんと思召して。其時に船なくては叶はぬこと故。それに造るべき榑を御生しなされたものでござる。扨さやうに速須佐之男命の。かねて御定めなし置れたることを。此時天照大御神の荒魂の。御さとしなされ。神功皇后の。加羅を御討ちあそばしたることで。こゝを考へて。禍津日神は。大御神と速須佐之男命の荒魂に坐すことを。悟るがよいでござる。これらは誠に奇とも。奇しきことの中に。殊にくすしく。妙なりとも。妙なる中にも。殊に妙なる御事で。吾が神代の古傳のおぼろけならず。また神の御靈のかしこき謂れの。よく知らるゝことゞもでござる。さて三韓の國々は。此時より歸伏ひ奉て。御代々の調物には必ず金銀を奉ることで。御用ひなさるゝ金銀のかぎりは。盡く三韓より渡し奉つたるものでござる。かくて四十一代文武天皇の御代五年に。陸奥國と對馬國より金を貢り。これに依て。大寶元年と年號を御立なされたるが。御國に於て金の出たる始めで。但しこの時出たるは。金のよく治へず。あらき物で有た

るが。四十四代聖武天皇の。天平二十一年二月に。よく治へたる黄金を。はじめて貢つたでござる。また銀の出たるは。是より早く三十九代天武天皇の三年三月。これも對馬國より始めて貢つたでござる。扨かく金銀の有ながら。古へは出ずして。異國なるを用ひしめ給ひ。遙かの後に出そめて。次々に諸國より。彌々澤山に出る程に。近き世に至ては。萬國に比なきまで多く出ることゝ。甚も妙なることでござる。是れは皆。さあるもかゝるも。凡て神の御心なれば。必ず深き理のあることであらうでござる。凡人の尋常の理を以て。測り云べきことではないでござる。又この大后の。韓國を御征伐あそばしたる事を。俗の儒者なんど小智をふるッて。彼此と論ひ申し。新羅そのかみ皇國に寇せしことも聞えず。何の罪も无かッたるに。故なく征給ふことは。只たからを貪り給へるにて。不義の御しわざなり。无名の軍ぞなんど申すは。たゞ己が私の小き智を以て。物の義理を定むる。例の漢國意にして。眞の道を知らざるものでござる。抑この御征伐の元の。由て來るいはれを思へば。先づこの大地は。それを御造り固めなされたる。伊邪那岐大神の。速須佐之男神に依し賜りたるものである所を。皇美麻命の受つぎ知看すこと故に。實をいはゞ。我が天皇のみながら御有ちあそばすべきはずなれども。其理のいまだ現はれぬので。其外國々の王ども。各が向々うしはきをることは。其理のいまだ現はれぬに依ての私事でござる。かゝるいはれを。凡人は知らず居れども。皇神等の御定めには。この謂れあるが故に。かく御計ひあそばしたものでござる。夫を畏くも。かにかくに論じ奉るなどは。負氣なきことの限りでござる。又かやうに辨ずるをも。虚誕妖妄の說ぞなど。なほいひも思ひも致さうが。夫はみな漢籍よみの。私の智をのみ恃ならひで。眞の道を知ることあたはざる者の常言なれば。云に足らぬことでござる。さて其始は。かく深く妙なる謂れの有て。外國を御討したがへなされたなれども。彼のよきことに禍事いつぎ。まがことに善事いつぐべき。神代よりの定まり故。から國より種々の物の次々渡り來るに付て。其中にはあしき事も半うち交り來て。國の爲。世の爲にはよからぬことゞもゝ出來ることで。この應神天皇の

十五年と云年に。百濟國の照古王と云が許より。くさぐさの調物を貢る使人に。阿直と云者を參らせたる時に。これが諸越書を讀むことを。心得をるに依て御留めなされ。さて其方に勝れる博士のあるかと御尋ねなされたる所が。阿直が申すには。王仁と云者これあり。是れがすぐれたる書よみなる由を申上たる故。百濟國へ御使を遣はされて。その仁王を貢れと仰せられたる時に。百濟王畏まッて王仁を貢つたる時。論語十卷。千字文一卷を。さゝげ奉つたでござる。これが御國に於て。漢字漢籍の參り入れる始めでござる。時に皇子宇治若郎子と申すが。かの二人を師として。始めてその漢籍を御讀あそばし。よく夫に御通達なされたと申すことでござる。この王仁といふ人は。御國で儒者の始めで。書首等の先祖でござる。さて此時始て漢籍を御よみなさるゝに付ては。漢字の音を知らんでは。漢籍は讀むことあたはず。また此方の言をあてんでは。其文義を解ることならねば。此時より字音も。その訓も。阿直。王仁などの定めたものと見ゆるでござる。夫はたとへば論語をよまんに。まづ首に論語卷之一とある論語。また學而第一とある學而。また子曰とある子の字など。皆音讀にすること故。その音を知らんでは讀むこと能はず。さて學而時習レ之とあるをば。訓によむから。こゝで訓も无くてはかなはず。よしや字音の儘に。學而時習と音によむとも。學とはまなぶこと而とはてのこゝろ。時とはより〳〵と云こと。習とはならふことなりとやうに知らんでは。その義に通達は致し叵く。さやうに知るのが。即いはゆる訓でござる。されば此始は王仁等が。大きに骨を折たことであらふでござる。夫を忽ちによく御通達なされたは。若郎子皇子のいみじき御才氣に坐したことで。その實に漢籍に御熟しなされたる證は。この御代の二十八年に。高麗國より朝貢のみぎり奉りたる表の文を。この皇子の御讀あそばしたる所が。高麗王敎二日本國一といふ不屆なる文が有たる故。その使に其无禮を御責なされ。右の表を御破り捨なされたることが有るから。當時既に此方にて讀べき音も訓も。定まり有たること。これで知れるでござる。もし音訓共になくば。よく讀でその表の文の无禮なるを御辨へなさるゝほどに。御通達は出來ぬことで

ござる。近世の儒者。徂徠。太宰などが說に。よく漢籍に熟し。唐音に達すれば訓讀によらず。彼國の法の如く直讀にしても。能く通じ曉らるゝと云ふは。甚だ以て虛妄の說でござる。たとひ口には直讀にしても。心には訓讀せんでは。其義に通ぜぬことでござる。人にはかやうに言ひさとす此輩も。實には自らも訓讀の法に。よッてをるには相違ないでござる。なほ右の事どもの委しきことは。師の漢字三音考と云を讀で。しるがよいでござる。さて應神天皇樣の御次が。仁德天皇樣。その御次が履中天皇樣と申上るでござる。此御代の四年と云年の八月始めて。於二諸國一置二國史一記二言事一。といふことが書紀にある。これは諸國には。此時始めて物しるす人を置かれて。其國々にあらゆる言と事どもを。御記させなされたるとのこと故。朝廷にはこれより前に既く。史あッて記されたることゝ知らるゝでござる。但し此の頃は。いまだ廣く事を御記させなさるゝ程のことは無かッたることと。申すまでもないことでござる。扨また皇國には。固より文字なしと云は。古人も追追論じ置たることなれども。さうでは有るまいと思ふ。此は必ず神代より有たる事と思はれるでござる。仍て其出來たと思ふ子細を取摘んで申さば。まづ物あれば必ず名あり。斯くて年移り代重なるに隨ては。物多く事しげく成行て。紛らはしく有らう故に。物事に目印を付て辨へずに有べからず。此目印と云が則ち文字の原本で。其れは一つの印には。ヽと書き。二つの印には。ミとかき。三つ以上も。右に准じ。丸き物には〇をかき。四角の物は口の如くにて。是れ則ち文字なり。彼の諸越に謂ゆる象形とて。日月車馬などの字の類も同じ事にて。萬の物の字も是に因て。自らに出來べき理なり。是をどうして神代の神たちの。造りなし給はずに置給ふべき理はないでござる。されば御國に文字なしと云は。無稽の說と云ものでござる。但し神代文字とて。世に見えるもまゝ有るが。其れ等の中には。眞の物も有うなれど。其は未だよく考へ正さゞれば。定めては云ひがたい。是はまた暇ある時に。委く論辨いたさうでござる。扨また日本紀天武天皇紀。十一年三月の處に。命二境部連石積等一。更肇俾レ造二新字一部四十四卷一と云とがある。此の新字といふもの。甚多きことゝは聞えた

るが。今傳はらざる故に。詳には知りがたけれども。世に和字と稱して。榊樫峠凩笹籾鮑襷辻鞆など云類ひの。漢字に非ざるもの數あるは。必ずこの新字の中で有うでござる。上にも云如く。文字はいかにも。造れば造り出べき物で有る故に。漢字の渡らざる以前に。必皇國字の多く有たること思ひ量られるでござる。然れども皇國人は大らかにして。さしも夥しくは造り出さぬ所を。彼の諸越人は。元來物ごと言痛き國風なれば。此道にかしこく。物の理をも委しく考へて。いと多く造り出たるに仍て。便宜き事も少からざる故に。神の御心と其を皇國に貢奉らせて。御用せなさるゝことで有らうが。然れども又多きに過きて。甚煩はしき程に成たるも。止むことを得ざる勢ひでござる。又元は神の御心なる故か。漢字に因て我が古へ意の知られることも。まゝ有から。是はうるさくとも取捨してもちふるが宜いでござる。扨その漢字の渡りたることは。上に云が如くなるが。皇國の賢き人々。皇國詞に考へ合せて。美はしく音訓を定め。次々に用ひたる所が。段々と用ひ馴ては。大に便利なるのみならず。漢學の弘まるべき機運なる故に。いつとなく神代字は廢りて无きが如く。終に今の有樣とは成たることで。これ本より神の御心なることは論ひなしでござる。されば上つ代の事實は。物に記さず。口にのみ言ひつぎ語り繼ぎたるも多く有べけれど。次々に傳聞の誤り出來て。紛はしく有べきを。慥に文字に記し遺したるは。殊に正しく紛れなく傳はりて。千萬歳を過たるも。元の姿にいと親く。當時の有樣を。今目の前に見るが如く思はれる事で。是は實に文字の德でござる。師翁の歌にも。「古ことを今につばらに傳へ來て。文字も御國の一つみたから」。と詠れたは。此故でござる。斯の如く漢字を用ひて事を記すことゝ成たるを以て。俗の漢學者どもが。非心得して誇り騷ぎ。鼻を高うして詈るが。其の論辨はいッち果の會に委く云ひませうから。夫まで待たれるが宜いでござる。

さて御國に漢學の渡り來りたる始の故由は。右の如くで。是より次々に。漢籍も多く渡り。後々は三韓の地をへて。諸越までも御使を遣され。また物學ぶ

人をも遺はされて。かの國の事どもは。何一つ知れぬことなきまでに。御學び取りなされ。終に今の有樣とは成たものでござる。此に付て彼諸越の國の世の始め。人のはじめを考ふるに。其謂ゆる開闢の傳へは。ほゞ御國の眞の古傳が遺つて居るでござる。其れはまづ徐整が三五暦記など云書に。未有天地之時。混沌如鷄子。溟涬始牙。鴻濛滋萌。清輕者上爲天。重濁者下爲地。盤古有其中云々。後乃有三皇。此天地人之始也とある。此こゝろは。古へ天地のいまだ无かッたる時は。其天地と分るべき物が。混沌と入交つて。譬へば鳥の玉子の。白みと黄みとが混じて有るやうで有たが。溟涬て牙を含み。鴻濛として滋々萌むまゝに。其清く輕き物は。もえて天と爲り。濁て重きものは。下つて地と成たる其中に。盤古氏と名つくる神人が生出て。これが天と地と人との始めだと云ことで。即ち御國の古傳に。天地のいまだ无つた時。皇産靈神の御靈に依て。虚空の一の物成て。其の狀いひ難く。浮雲のかゝる所なきが如く漂ひ有たが。其中より狀葦牙の如くして萌上り天となり。其迹に殘つた物が。此大地と成て。さて伊邪那岐。伊邪那美命が御成あそばしたる傳へに。ひしと符つてをるから。此れは全く古傳の彼の國にも傳はり存たもので。此の盤古氏と云が。皇産靈大神の御事。後に三皇ありと云が。伊邪那岐伊邪那美命。また須佐之男命の御ことを。彼國に語り傳へたる名と見えるでござる。其れはまづ盤古氏と云ふ名義を考ふるに。此の盤の字はよろづとよむ。萬の字と同音の儘に。借りて書き來れることゝ見えて。義は萬字にかはることなく。萬世を經たる古への人。と云こゝろと思はれることで。かつ述異記と云ふ書に依て考ふるに。盤古氏夫妻陰陽之始也とあるから。夫妻を兼ねたる名なるが上に。まして帝王五運歴年記に。盤古死後。左目爲日。右目爲月。毛髮爲草木と云ひ。また盤古氏頭爲東岳。腹爲中岳。左臂爲南岳。右臂爲北岳。足爲西岳と云ひ。また盤古氏泣爲江河。氣爲風。聲爲雷など云たる類。すべて皇産靈御神と。伊邪那岐伊邪那美二柱神の古傳の。錯り傳はりたるなる事疑ひなければ。天地初發の事を。彼國に語り傳へた物でござる。抑々この大地の成初めは。是まで段々申する通り。御國が元で。高皇産

霊。神皇産霊神の。世にも殊なる御霊のふさはり。殊に此大八島國は。伊邪那岐伊邪那美二柱の神の。御生みあそばしたる本つ御國。萬の國の祖國ゆゑ。天地の初發の古傳説も。詳に傳はりをることだが。萬の外國どもは。二柱神の御生みなされたるとは違ひ。先にも申す通り。皆是淳沫凝成者矣とある。古傳説に依て考ふれば。からを始め諸の外國どもは。すべて〳〵淳沫ひぢりこが凝集つて。大きくも小さくも漸々に。國形と成た物ゆゑ。天地始の古傳説も。御國の如く正く詳かには傳はらぬ筈のことで。此れは譬へば京都に有たることを。國々の田舎に申傳へたやうなもので。元の京都ほどに慥ならぬも尤なことでござる。又御國の正き古傳説を。訛りながらに。言ひ傳へて。其國々の事の如く云ふのは。是も京都にて有た事を。遠き田舎に聞傳へて。本をば失ひ。其處にて有たる事のやうに語り傳へること。同じ訣でござる。さて上の件に引出て申たることは。から國の古書に見えたる事には有れど。實には吾が古傳の訛りなれば。彼の國上古の事實に非ず。我が御國の古傳と云べきものでござる。扨右申す如く。淳沫ひぢりこが凝寄て。大きくも小さくも國形と成たることは。共にこれ高皇産霊。神皇産霊神の。産霊の御霊に依てなることは。御國も萬國も同じことなれども。其殊なる御霊のふさはッて。殊には二柱の神の御生み成されたる御國と。唯に淳沫泥土の。こり依て成れる外國どもだに依て。御國と外國との國がらの。尊卑美悪優劣がこゝで判る。其れはどうして知れると申すに。古傳説を頼みに致すばかりでなく。今目前の事實に依て考へても。御國は人物を初め。一體の風土および萬の物の優りをること。萬の外國とは雲泥の違ひなるを以ても知れるでござる。委くは古道の大意を演説のみぎり。申たる通りのこと。但し人物および諸物のまさりをる計りで无く。御國は道の起本たる。大君の皇統は。畏くも天地および萬物を御造りあそばす。高皇産霊神には御曾孫。また天地を照し御恵みあそばす。日の神には皇大御孫に坐ます。邇々藝命の御子孫の次々。與二天地一無レ窮矣と有たる。日の神の神勅のまゝに。御相續あそばすなどが。第一の明證でござる。萬の外國どもは是に反して。萬の事物すべて御國に劣るのみならず。道の大

本たる。君と臣との差別も正しからず。定れる君なきまゝに。甚も〳〵猥りがはしきとのみ多いでござる。然るを儒者なんど。猥りに彼の國ぶみを讀耽つて。其文詞のとよきに目くらみ。むせうに彼國を稱立るまゝに。世人も夫れにかぶれて。大抵さることゝ思つて居ると云は。何に愚昧の甚いものでは无いか。まづ御國に生れ。其御國の米穀を食ひ。萬その御恩を蒙りて居ながら。其御國のことを悪く思ひて。誹り奉ると云は。實に叛逆に等しき罪人ではあるまいか。禽獸でさへ。その畜れたる主人をば忘れぬ物じや。これを思ふに。世々の漢學者ども。彼の國の事どもを。知て居ながら云はぬのか。又知らずして云はぬのか。悪きことをば祕かくし。めッた无上に稱上るゆゑ。學問をする者も爲ぬ者も。皆悉く漢意漢人に成果てたることゝ思はるゝ故に。その漢學者どもが尊み慕ふ。彼の國歷代の。殷と云ひ。周と云ひ。秦と云やうに遷り革り。代り替つて。今の淸と云に至る迄の有狀を。僞らず飾らず。眞正直に演說して聞すべし。實に信ずべき國風か。信ずまじき國風か。よく心を平かにして聞るゝが宜い。但し其本書を一々に引出て論ずれば。中々以て二日や三日で終るとでは无いから。本書迄は云はぬでござる。去ながら常に漢學者に聞たる處とは。天地懸隔の相違なれば。不審に思はれる人も必有るべし。其人々は。幾度も遠慮なく。これは何にと問るゝが宜い。府に落るまでは。說聞せやうでござる。抑々世界は一枚なれば。上にも申す如く。極古へは彼の國も共に。我か神々の御開闢なされ。御治めなされたること炳焉く。其は御名こそ替りたれ。上皇大一と云は。天之御中主神の御事を申し。盤古眞王太元聖母と稱するは。皇產靈大神二柱の御事で。天地を御鎔造成されたる御事迹よく傳はり。次に天皇氏。地皇氏。人皇氏。これを三皇と云ふが。此れは伊邪那岐。伊邪那美二柱の大神と。其御子。須佐之男命を申して。大地を固め。國土を御生成しなされたる御事も。和漢の傳說打合ひて聞ゆるに。又是に續ぎたる神眞たち。多く御國より渡りて。彼の國の世々を知り給へる由の古傳あり。又右に續ては。謂ゆる五帝なるが。其第一たる太昊伏羲氏と稱するは。我が大國主神の。彼國に下りて其地を經營し。人民を敎導し給へるを稱したる御名。

次に炎帝神農氏。次に黄帝有熊氏と云は。則太昊氏の御孫と聞え。次に少昊金天氏。また其次に顓頊高陽氏と云も。又其御子孫にして。夫々の御功德あり。この御子孫の次々。連綿と御繁榮なされたる事は。かの國の古き書類を見て著明く。我が神典に。大國主神之御子。凡有百八十一神矣。以十五柱爲珍子而。天下四方國人等。令咸蒙恩頼矣とあれば。實に然も有べき御事にこそ。扨又右の外に少毘古那神は。早くより國々に御天降なされて。漢土は更なり。萬國に渡りて。御經營なされたる御事迹。各國に傳はり。勿論わが神典にも見え。其外すぐれたる神々の御渡りなされて。共に世間を御治めなされ。靑人艸の爲に成るべき事どもを。種々御起しなされたる中に。漢土は皇國に近き故か。神々の御事迹殊に委く傳はり。又國がらも御國の如くにこそは无けれども。其餘の戎狄よりは勝れたる故に。上代は人草の上にも。さして猥りなる事なく。世の治まりたることも。書どもに見えたるが如くでござる。扨又彼國凡ての人の初めは。即ちその古傳に。女媧氏と云が。黄なる土を搏めて人となし。又泥中に繩を引わたして。作たとも云ひ。又或は久しき池に魚の生じ。腐たる物に虫の生ずるが如く。自然に出來たと云も。非説にも有べからず。是はた皇產靈神の御靈に因てなることは。申すまでも无いでござる。扨此五帝に續いて。國王と成たるを。帝嚳高辛氏と云ふ。是は黄帝の曾孫なるが。顓頊の次に世を治めたること。書どもに見え。此次に立たるを帝堯陶唐氏と云。其次を帝舜有虞氏と云。儒者等の大に稱立るは。此王たちのことでござる。かくてこの王等も。五帝の餘業を繼で。天下を治め。萬民を撫育することに。心を用ひたることの容易ならざることは。尙書を初め。古書どもに見えたるが如くでござる。然るに彼の國も。三皇の御代より以上は。草邁のことなれば論に及ばず。五帝の末までも。大方に治まりて。さしも猥りなることは无かりしが。本より國がらも宜からず。物事狡黠ぶる風俗ゆゑ。萬事煩はしく世を經る儘に猥りがはしきことも出來。はた洪水の菑もあり。旁々心は用れども。撫育の道も行屆かず。世を治め侘たるにや。帝堯氏其子は數有たれど。不肖の者ばかり。仍て外に聖賢の人を撰むで。天下を治めさせう

と思ひ付たことで。是が受禪と云ふことの始めでござる。扨この陶唐氏は。高辛氏の子で。則その跡を嗣ぎたるが。世に堯帝とも云はこれがことで。此堯は。始め唐と云處に居たる故に。此の王が世の號をば。唐と云でござる。此れが時に。西戎中が大洪水で。史記や尚書に。天に滔り。浩々として山を懷ね。陵に襄ると云ひ。また下民皆服ニ於水一とも有る程のことゆゑ。實に大變な洪水で有たでござる。尤も此のよほど前からのことで。前後二十年餘り。三十年近くの大騷と見えるでござる。扨こゝに思ひ合さることのあるは。此の年數を繰て見れば。丁ど此時分に當て。西洋要呂波の國々も大洪水で。人種もさッぱり絕てしまッたと云ことが。蘭書どもに記して。西の極なる國々の。今有る處の人の種は。其洪水のみぎり。能阿久と云者と外に兩三人。至て高山に登つて。命を助かり居たのが。洪水治つて後に。その子孫がふえて。諸國へちりぼい。今の如く人がふえたと云ことで。彼の國の書どもに。此洪水のことをば。眞に胆をひやしてかいてある。夫をからの書物では。物理小識と云物に。天地開時初有ニ水荒一云々。太西言洪水時。亞爾墨尼亞爲レ甚。猛雨四旬。地面全沒。止、遺ニ諾厄等數人一考ニ其時一當ニ帝堯之八年壬辰一云。中國洪水在ニ堯時一是一徵也。とあるは此事でござる。また天竺の佛經を讀で見る處が。世の初めに洪水が有たとて。是れも人種が盡る程で有たと。胆を潰して有ますが。其年代は詳ならねど。その前後のさまを考へ見るのに。やッぱり此時の洪水らしいでござる。扨この時分は。御國では何れの御代に當ると申すこと。貞かには申されぬが。大抵は彥火々出見命の御代の頃に當るやうなれども。少か以て思ひ合さるゝ古傳說もなく。實に御國ではけも无かッたことでござる。此れらを考へても。此大地に於て。御國の在所の。殊更に高く尊きことも。又からを始め。西に當る國々の低く卑きことも。よく分るでござる。其内からは。少かも御國に近き故か。地面も高い。西の極なる國々よりは水も少く。人種のなくなる程なことでも无かッたでござる。さて堯は。この洪水を治めやうとて。先づ諸々の臣下に。其事を誰れに申付やうと問たれば。鯀と云者が宜しからうと。皆が申すに依て。其鯀へ申付たる處が。九年其事に拘た

なれども。少かも功を成さず。そこで鯀をば羽山に殛すと申て誅したでござる。其跡をば。鯀が子の禹と云者へ申付たる處が。此は史記にも。禹傷二父鯀功之不一レ成受レ誅。乃勞レ身焦レ思居レ外十三年。過二家門一不二敢入一と有るを見れば。父の功が立んで。殺されたのに。こり〳〵致し。且つ心外にも思たと見えて。誠に其事を勉め。大造に骨を折て。遂にこの洪水を退治いたしたでござる。此の骨折のことは。尙書の禹貢と云篇。また史記の夏本紀。また山海經などゝ云ものに。委く見えるでござる。扨堯には。子もしたゝか有て。其第一の男子の名を丹朱と云。其外に男子が九人。また娥皇女英と云二人の女が有るから。凡て十二人の子持でござる。ある人が堯を祝して。壽くかつ富むで。男子を多く。もたしたいと云た處が。堯が申すには。辭多二男子一則多レ懼。富則多レ事。壽則多レ辱。と云たと有が。隨分女はきらひでも无かッたと見えて。其詞とはちがひ。子をば澤山生せたでござる。扨かやうに男子は十人まで持たなれども。丹朱を始め。一人として跡を嗣せるやうな器量の子が无いとて。他人に禪らうと。

其仕へ居る臣等に。これかれと見立て。王位を禪らうと云ふけれども。誰れも受けやうと云ふ者が无かッたと云ことでござる。これに付て。世人のよく知てゐることだが。其ころ許由と云ものと。巢父と云者とが有て。世を遁れては居るなれども。賢人と云の聞えが有るに依て。堯は其の許由に逢ひて。王位をゆづらうと云た處が。許由は袖を拂て。夫れをいやがり。却つて耳を汚したるとて。川へ行て其耳を洗たと云ことでござる。時に彼巢父は牛に水をのませやうとて。此の川へ來て見ると。許由が耳を洗つて居るから。其訣を問へが。堯帝が王位を禪らうと云ゆゑ。大に耳を汚したに依て。洗て居ると答へた處が。巢父は。許由がさやうのことを聞が。心がけの惡い故だと叱り。其汚れたる耳を洗た水が。此牛には飮されぬと云て。歸たと云ことでござる。此れは莊子に有ること故。例の寓言かも知れぬけれども。人の能く知て。其行ひの高き由に云て。稱譽いたすことだが。此れも諸越人ながら。陳眉公と云が。評をいたしたる趣が面白い。それはこの堯が時は。大地を蠱して洪水で有るが上へに。國が荒はてゝ。鳥

獸と群を同うして居るほどのことで。禹が其れを治むるにも。水の處は船に乘り。陸地もたゞは歩かれぬで車にのり。泥の處は輴に乘たりや何か。千辛萬苦して。其洪水が八年程かゝッて。漸に治つた處で。漸に民に稼穡をさせる程のこと。また百姓どもの苦みは。飲食の物もしかぐ〜ならず。辛うじて生てゐると云ばかり。其上に世の初めだに依て。何もかもいまだ粧り整へることもなく。やう〜〜大地の草稿が出來たと云ぐらゐのことだものを。何を受もらふ處が有うぞ。夫は其王だと云ふ堯が住處と云へば。茅茨不剪椽角不斲と云て。其屋造りの茅や材木も。きらずけづらず。其敷く席も縁をさへに付ず。旨き羹を和して食ふこともなく。やう〜〜鉶簋の食で。わづかに飢をしのぎ。衣と云へば。鹿裘を著て。少か寒さを禦ぐばかり。天下の樂みを享くるどころでは無く。天下の憂を叢めるのである故に。堯は黧。舜は黒と云て。黒く。くすぼッたやうで有たと云が。いかにもさうで有たらう。處を許由が何のかんばしく美むところが有て。此れを受やうぞ。老子に不見可欲使心不亂と云へるは。この許由などがことでも有うか。と云ましたが。此れは實に面白い説でござる。なれども其後。人がこの説を評して。堯の時に洪水害をなして。王とある堯すら。麤なる衣を著し。惡食を致し居たる程のことだに依て。況て巣父許由は。荒山に居る匹夫のこと故。その衣食住が思ひやられるに。右樣の所行と云は。これ一邊の見解と云ものぞと云たが。これも面白い。此時王でさへ右の如くだから。山野の匹夫は。其狀實に思ひやられることでござる。扨又この巣父と云者は。何なりとも持て居ては煩はしいとて。更に何も持たなんだ時に。或人其食物を入れる物のなきを見て。瓢を一つくれた處が。其れを木の枝に引かけ置と。風が吹こんで鳴りたる故。これも煩しき物だと云て。捨てしまッたと云ことで。右の許由が耳を洗たる事と並べて。世の老莊家など云て。悟がましく云輩が。ほめ騒ぐことだが。此れもから人王維と云者が評して。古への高き行ひある人のことゝ云へば。此巣父と許由が。此れらの行ひを云ひ出すが。耳は聲を駐めおく所でなく。聲は耳を染るの跡もないものだが。彼等が如く。外を惡む者は內を垢し。物を病はしがる

者は。自然ふものだに依て。此二人なほいまだ。曠士とさへ云べき者でないから。どうして道を得たる人と云はれうか。と云ましたが。此れは實に能く評したことでござる。諸越の賢人だの。高士だのと云類。この巣父許由を始め。かの謂ゆる竹林の七賢人など云輩もみな似せ者のつくり賢人で有たでござる。漢名で云はうならば。擬賢人とか。擬君子とか云べき者で。實は世人を惑はしたる曲物が多いでござる。扨堯は右の如く人に王位を禪らうと云ところが。誰も受る者がない故。もろ〳〵の臣下に。農夫百姓隱遁の者にても。苦からぬ程に。其人を吟味しろと云たる處が。皆が云には民間の矜をのこに。舜と云が有て。此は人となりの宜しき者なる由を云ふから。堯が吾其試哉と云て。わが女の娥皇と云と。女英と云と二人有たるを。其の舜にめあはせ。又嫡子の丹朱をのけて。外に九人の男子の有るをも。悉くその舜に附て仕へさせ。扨二人の女。并びに其男子どもに對しての舜が爲方。および其一家の修めかたなどを試し見て後に。玉位をゆづらんとの深き思ひ慮りで。かやう致したで。尙書や史記に有るでござる。但し斯の如く。天子とも稱る者の女を。めあはせた程のこと故に。然らば舜を。百姓から取上げもしたことかと思へば。舜は。やツぱり耕しくさぎり。漁りなどもして。其まゝ農夫で居た者でござる。上下の差別なかツたること。此等を以ても知るが宜いでござる。斯て堯は。兄弟の女を舜にめあはせて。彼れが人となりを試し見たる處が。大きに樣子がよいに依て。心を定めて天下を禪る氣になり。七十歲の時に位を避けて。我がする王の業をば。舜に攝行はせて。二十八年すぎて死だと云ことだがさすれば舜は。元のまゝ農夫で居て。王の爲る業を。兼てゐたと見えるでござる。

扨舜は堯が死だる後に。堯が嫡子なる丹朱と云者に。堯が位を嗣せやうとしたる處が。其の世の諸侯と云程の者どもが。朝覲をいたすに。其の丹朱が許へ之んで舜が處へ行く。またもろ〳〵の獄訟の有るものも。丹朱が處へ行ずに舜が許へ行く故に。舜はこゝに於て。天也夫と云て。此より初めて王位に踐つたと有でござる。この舜は虞と云處から出たる者である故に。これが代の號を虞とは云でござる。抑此受禪と云ふ事一とわたりはよきとのやうにも聞ゆれ共。

其實は甚だ惡く。其れはまづ第一に。君臣父子の義理立たず。後世に聖賢の擬僞する者の多くなるべき基で。我が御國の如き。萬世无究の大道に非ず。一代ぎりの功業を主とする故に。長久する事能はず。然れば儒者の此二氏を祖述するに。受禪を以て稱するは。大なる心得違で。實はひいきの引仆しと云べきものでござる。さて舜が子に商均と云がある。此れは。彼の堯の女の。女英といふが生んだ子でござる。所がこれも又。天下を有つべき器量で无つたと云ことで。夫れ故舜が死なぬ前に。かの大洪水を治めたる禹に禪るつもりで有たと申すとでござる。扨舜が死で後に。禹もまた舜が堯の子丹朱にゆづッた例を以て舜の子商均にゆづッた處が。又かの諸侯と云ふきはの者ども。商均が處へは之んで。禹の處へ歸る故。そこで禹王が。王の位を嗣いだと申すことでござる。此禹王が代の名を。夏と申すでござる。禹も又其死る時に。其臣。益と云者に。國王の位を授けて死んだる處が。この益もまた。禹王が子の啓と云へ。彼舜や禹王が。前の王の子へ禪つた如く致たる處が。今度は大きに注文が違ふて。天下の諸侯どもが。皆益へゆかんで。禹王が子の啓が處へゆきて。吾君の子也と云て。これに仕へる。そこで今度は。禹王の子が位に即いたでござる。此れを帝啓と申す。此帝啓が子の。大康と云王が時に。其臣に羿と云が有て。その王大康を逐出して。大康が弟の中康と云を立て。羿が我儘をすることと云べからず。其內に中康が死んで。其子の帝相と申た王が時に。かの羿と申す臣が。また其王帝相を逐出して。今度は自分で位を奪たでござる。一體この羿と云者は。けしからず弓の名人で。論語に羿よく弓を射るとあるは。此がことでござる。處がこの羿が臣に。寒浞と云が有て。また羿を殺して王となり。夫にひどいことは。其の死骸を煮て。羿が子に食せたと云事でござる。扨かの帝相をも。わが子の澆と云者を遣はして。殺させたでござる。此の澆と云が。大造に力の有た者で。陸地に舟を盪たと云事でござる。此のち帝相の臣に。靡と云ものが有て。帝相が子の少康と云を取り立て。かの寒浞を殺し。本の如く夏の禹王が血統に復したでござる。羿と寒浞か。夏の世を奪つて居たる間が。四十年程だと申すとでござる。扨此少康が。禹王が後

を興してより十二代。夫に禹王から以下。少康が父の帝相まで五代。すべてゞ十七代となる。年數が四百三十二年。まづ可なりに續いたでざごる。其十七代目の王が。謂ゆる夏の桀王でござる。此れは大ぶんわんぱくな王で有たと云ことで。夫は史記にも。夏桀爲二虐政一淫荒とあるでござる。此時に殷の湯と云が有て。此の者うはべのみを飾りて世を欺き。桀王が世の衰へを幸ひとして。恣に兵を擧げて。諸國をうちなど致したる處が。其の此桀王が。其臣關龍逢と云者の。諫を言ひたるが氣に入らんで。殺したるみぎり。湯は人を遣して。之れを哭させたる處が。桀王それを怒て。湯を夏臺と云處へ囚へたでござる。是は實に湯がいらざることを爲たる故。囚へられたのでござる。なぜと申すに。よしや關龍逢が諫める處尤で。桀王が夫れを殺したのは無道にもしろ。自は無道と思はず。龍逢をば惡き者に思つて。怒て居る處を。湯が賢人だてらに。夫れを弔ふて哭したならば。桀王が心には。我を非としたる。湯がしわざだと心付て怒りもしようし。囚へもしさうなものでござる。此は今の世とても。君の重き。にくしみを受て。手打などにも逢たるものを。同じ臣下の内に。夫を甚く悔み歎きも致したならば。其君とある人が。いかに心よからうか。かやうの事は。凡て今ある事實の上で。考へ見るが宜いでござる。さて桀王は。湯を此後いくばくも無く釋したる處が。湯はこれより。ます／＼德を修めて人を懷け。かの伊尹と云ふさかしら人を抱へ置て。これと事をはかり。此者を桀王へ進めて。仕へさせたでござる。此は云はゞ間者に入れ置て。陽には忠義と見せかけ。陰に事を計らッて。桀王に付きをる者共の心をそゝのがし。離さしめむとの工で。致したことでござる。夫は尙書太傳などに。きッと證據が見えまする。其工みに相違なき故。やがてまた湯が許へ歸つたでござる。扨この後湯は。昆吾氏といふ諸侯を伐つて。其のはけついでに。其君桀王を打亡ぼして。とう／＼國を奪取て。此より殷の代と申すが。先これで漢土は一變いたしたでござる。此受禪放伐の行はるゝに付ては。眞の道行はれず。天下の人心自らに。其方ざまに移り行て。彼の朱子が謂ゆる。佛法渡りて以來。善惡の名たがひ畢ぬ。と云る如く。儒道弘まりては。眞の道却りて。左道の如

く成たでござる。扨殷の代となッて。湯王から直に次の。太甲と云王が。甚だ暴虐で有たと申て。彼の伊尹は。之を桐宮と云處へ放逐つて。自ら王の位に居て。國を治めたる處が。三年ばかり有て。太甲は其の人となりを改めたに依て。國へよび戻し。元の位に復したと申すことでござる。但しこれは。史記に見えたるまゝに申すなれども。實の處は。かの羿といふ奴が。その王太康を放逐つて。國を奪たる例に傚つて。伊尹も夫れをやッたのでござる。なぜと申すに。この奴國を奪たのでなくば。其君の連枝なる者を君と立て。己れそれに仕へ居るべきことだが。若くは太甲が連枝の者。外に在たと云ことも書に見えぬから。立てもせず。おのれ位をうばッたることゝ見えるでござる。かやう申すと。漢學者流は。太甲が人となりのなほるを待て居たのだ。とも云ふで有らうけれども。直らずは何とする。又太甲がもし。桐宮で死も致したならば何と爲る。そこでは己れ其位に居とげるで有うが。是が奸曲で有るまいか。殊に此の太甲と云王は。殷の代の王どもの中では。太宗と稱し。明君とも云はれたる王でござる。夫が初めにさう惡かろう筈もなし。又はじめ此太甲を位に即けたのも。伊尹がわざでござる。其時は人となりが知れなんだことか。夫では伊尹が不明と云ものだ。若しまた王の位に即る時までは。人となりも宜かッた處が。王に成てから暴虐に成たならば。是も有るまいことでも无いけれども。人には生得たる性と云が有て。さうは變せぬものでござる。其の證據には。桐宮へ放たれて。わづか三年ばかりが程に。とんだ善い人に成たはさ。放逐て直る人となりならば。逐ずとも直る。夫をも知らねば。彌以て伊尹が不明でござる。譬ば逐はなッて。三年になほるものを。五年七年になほッても。直れば猶よし。又直らむで。世の限り暴虐でゐようとも。逐ぬ方が。君と臣との大義に害なく。道の大本を失はぬに依て。後世に毒を流さぬけれども。伊尹が所爲は。甚以て後世へ毒を流したでござる。其後世に流したる毒と云は。さなきだに下として。上の隙を伺ひ。王位を望む。から國一體の風俗ゆゑ。後世の奸曲なる奴原が。伊尹が此の所爲を例に引て。いひ種となし。王たる者に少かの仕おちあ

るか。然らぬも。其の弱きをば押し込で。己れその位を奪へる事。數へも盡されぬ程の事でござる。此の風俗が御國迄に及び。攝政基經公の。陽成天皇を廢し奉られたるなどが。此の伊尹がしわざを。まねられたものでござる。之に付て或儒者が。吾か師の直日靈を難じたる書に。君惡しき行ひあらば。臣などか諫めざらむ。かの武烈天皇。陽成天皇の如き君にして。諫をも聽給はずは。臣などか位を下し參らせざらむ。君の善き惡き論を舍て。畏れ敬ふは妾婦の道なり。といへるを。吾が師の重ねて辨ぜられたる說に。臣の君を諫むるは可也。位を下し奉るは。外國の惡風俗にて。大きに道に背けり。故に武烈天皇の如き御所行ありといへども。臣これを下し奉れることなし。陽成天皇の御世の事は。既に漢樣なれば論に及ばず。そも／＼君あしき時は。臣として其位を下し奉るしわざは。うはべは善事のやうに聞ゆれども。實は甚た惡きことなり。其故は眞實の忠臣にして。然せば世の爲には。しばらくよき道理も有るべけれど。世々に忠臣のみは有りがたくして。不忠臣も多かる物なれば。件の如くにては。自から君の威は輕くなりて。臣の威つよくなり。またや丶もすれば。忠臣の贋物ありて。始めの程は忠義顏に。君を輔佐しつ丶。終にはその位を奪ふ者出來るなり。漢國の代々に。此弊いと多し。彼國のよ丶の史を見ば。いはずとも知るべき事なり。然れば君あし丶と雖も。ひたぶるに畏み敬ひて。從ひ奉るは。一とわたりは婦人の道に近きに似たれども。永く君臣の義の。敗るまじき正道にして。つひには其益廣大なり。この一端を以ても。天照大御神の道は。うはべは行きたらはぬやうにて。實には至極せる妙道なることを。さとるべく。また漢國の道はうはべは。かしこげに道理めきて聞ゆれども。實にはその失多きことを。よろづ准へて知るべきなり。と云ひおかれましたが。よく心をとめて思ふべき事でござる。この伊尹が君を放ちたる事をば。かの國の人すら。非としたるもある。それは千百年眼と云書に見えてあるでござる。然るに後世。また僻論をなして。伊尹放二大甲于桐一の放字は。敎字の篆文から。誤り來つたるもので。伊尹敎二大甲于桐一だと云事だ。など云說もあれど。此れは强てその非を蔽はんとて。言出たる說で。と

るに足らず。はた其事の眞僞は。おぼつか无けれど。竹書紀年と云古書には。大甲が位に即たる元年に。伊尹放二大甲于桐一乃自立と見え。また七年の下に。王潛出レ自レ桐殺二伊尹一と有つて。本の王位に復たことが見えて。此は春秋左傳の。杜預が跋にも引てあるが。實にそんな事で有たやらも知れぬことでござる。彼楊朱と云者の言にも。三皇之事若レ存若レ亡。五帝之事若レ覺若レ夢。三王之事或隱或顯億不レ識レ一。と云てあるが。いかさま傳へもらして。善人とのみ語り來たものと思はれるでござる。さて殷の代は湯王より三十一代。年數六百廿九年。（一說ニ六百四十五年）か相續いたして。其三十一代目の王が。謂ゆる紂王でござる。此殷の代の年數が。六百二十九年と云たり。又は四十五年とも有るに付て。先師の玉がつまに。諸越の古へ時世のあはざるがある事。と云一條を記されて。其說に。もろこしの國も。夏殷よりあなたの世の事は。何事もさだかには傳はらざりしと。おぼしくて諸の書どもに記せる。一やうならず。さまざまにて。時代のたがひて。あはざることなども多し。一つ二ついはば。禹は顓頊が孫。舜は顓頊が七世の孫なりといへるに。同じ時にて位をゆづりたりしはいかに。また伊尹は成湯が時の人なるに。其子の伊陟といひしは。湯が五世の孫の。大戊といひし王の相なり。その五世の間の年いと久しきを。いかで存らへゐけむ。また周の先祖の后稷は。堯舜が時の人といへるに。文王は后稷が十四世の孫なり。其間の年の數千餘年なるを。十四五世にては。いかで續きたりけむ。彼の國そのかみの人といへども。さばかり。皆。命長かりしとは聞えぬ物をや。これら昔の人も。はやく訝しきことに。云へりきかし。といひ置れましたが。みな尤もなる疑ひでござる。此の初めに。夏殷よりあなたの世のことは云々と云はれしは。譙周と云者の古史考と云には。炎帝と神農とを以て。各々一人となし。また羅泌といふ者の路史と云には。軒轅と黃帝とを。此れも各々一人となし。又かの字を製つたと云ふ蒼頡がことを。史皇とも云とあるを。君と臣と二人となし。また共工氏と云を。或は王といひ。また伯といひ。祝融氏と云を。火德の王となし。或は臣だとも云などの類を云はれたものでござる。扨殷の末世三十代目の王が名を辛と云て。是が謂ゆ

る紂王だが。是又夏の桀王が如く。わんぱくで。何くれと暴虐なことが有たでござる。此時に西伯名は昌と申すが有て。これが彼のいはゆる。周の文王でござる。これは紂王の三公と云ふをも勤め居て。追々紂に背いたる諸侯を懐けて。下に付けなど。此者甚だの奸智なる男で。紂王が悪行を幸ひとして。己れうはべを取繕つて。よき人めかし。人の面向くやうやうと。其の行ひを勉めたものでござる。其の時崇侯虎と云者が。紂王に告げて申すには。西伯積レ善累レ徳。諸侯皆嚮レ之將レ不レ利ニ於帝一。と申したる故に。紂王は尤もに聞入て。西伯を羑里と云處へ囚へたでござる。こゝで西伯は囚はれの内に。彼伏羲氏がこしらへたる。易の八封へ。彖辭と云を作つて添へたでござる。其は史記また朱熹の通鑑。易の本義などに。夏商之末易道中微。文王拘ニ於羑里ニ而繋ニ彖辭ニ易道復興とあるが。此れは孔子の作つたと云十翼に。易之興也。其於ニ中古ニ乎。作レ易者其有ニ憂患ニ乎といひ。また易之興也。其當ニ殷之末世周之盛徳ニ邪。當ニ文王與レ紂之事ニ邪。など申てあることも。思合すが宜いでござる。さて文王が易へ繋たる辭どもの趣意はどうだと云に。己が君。殷の紂王が悪行ある隙を伺て。國を奪はうとするの奸智より思付て。伏羲氏の八封は。彼の國には早くより傳はッて。人の信ずるもの故。夫へ附會して。其のいひ成しやうは。君とある人も不徳なれば。徳ある者。其君に代つても。苦しからぬと落ちて來るやうに取成し。又世の常では。臣として君を亡すことは。義に反くなれども。天命の歸したる時は。苦しからぬ樣に。もてつけ。かく言ひ成して。其のまへ殷湯王が。桀王を放出つて。國を奪つたのも。實は天理に叶つてゐると云意にいひ落し。扨己れもさうせんとの下心でござる。さて占て驗の有るを後立てにして。これ人の作に非ず。自然の天地の道だと。世の人を欺き。後に己が反逆せむ時の罪を。天命に託て。のがれ覆ふべき地盤として。あらかじめ世の人に示し置たものでござる。また周易六十四卦の中にも。澤火革の卦の辭が。文王殊に心をこめたる物と見える。夫故此卦の彖辭傳にも。革は云々。天地革而四時成。湯武革レ命順ニ乎天一而應ニ乎人ニ。革之時大矣哉と有るなどが。則ち易を作つたる本意で。君としても不徳なれば。有徳の人が出て。

國を奪ても苦しからず。是即天心也とやうに。僞りを構へたものでござる。殊に損益の卦は。紂王を伐つ年に當てたもので。其象辭に。利有攸往利渉大川とかけたは。其子が時に至つて。紂王を伐つべき年を決斷せしむる。未來記に作つた物でござる。是によツて武王が果して。此二卦を當たる庚寅の年に。孟津といふ大川を渉り。殷の都へ攻入て。その君王を弑したでござる。孔子が雷水解の彖辭を評したる語に。作易者其知盜乎と云たのは。易の作者の本意を。よく見ぬいたる語で。なほくさ〴〵の祥瑞を作りかまへて。殷滅び周興るべき命期の由をしらしめ。また暦法をも作り改め。易と律とを謳會して。始めて長年數の妄誕を搆へ。かの未來記をつくる張本の設けとなし。子思がいはゆる其事を神にして。民に信をとらむとしたものだが。是らの事は別に委しく申すことで。中々以て一席二席に云ひ盡されることではないでござる。かくて殷紂王は。西伯を羑里の庫に拘おけること。百日ばかりもいたしたる所が。西伯が臣に。大顛。閎天。散宜生など云ふ者どもが。計をめぐらして。美女名馬その外種々の珍しき物を取そろへて。紂王に獻じて。其罪を贖つたる所が。紂王は女好きのこと故。心をなごめ甚だ悦で。この美しき女ばかりでも。西伯が罪は釋すに足ることを。況てかく色々の物を奉るを。など赦さゞらんと云て。悅びの餘りに弓矢斧鉞をあたへ。征伐を心の儘にせよと云て赦したが。こゝが紂王があほうなる所でござる。さて西伯は赦されて國に歸り。まづ彼のわが惡事を紂王に告たる。崇侯虎をうち亡し。さてます〳〵上べを飾つて人をなつけ。或は兵を以て諸侯をおどしなどもして。國をひろめたでござる。これは本書に。明年伐犬戎明年伐密須明年敗耆國明年伐邘。明年伐崇侯虎西伯歸乃陰修德行善。諸侯多叛紂而往歸西伯。西伯滋大。紂由是稍失權重とある通りでござる。扨その砌り呂尚と云者が有て。これは元と紂王に事へたる者で有たが。その用ひられざることを憤り。世をのがれて甚だ困窮にくらし。年老て七十餘りなれども。謀略のすぐれたる男なる故。諸侯に遊說して見たれども。心のあふ者もなく。その中に西伯が殷の王位を奪はんとする下心を。とくさとり。夫につかへて事をなさしめ。

己れもその尾に附いて世に出んとする心で。それとなく西伯に出くはせ。謀略を語りて。とり入り用ひられんと下工して。渭水と云河の邊に魚を釣るに事よせて。西伯が獵に出るを待てゐる。則ち本書に。以漁釣奸周西伯とあるは此のことでござる。ここに西伯は。獵に出んとしてトはしたる所が。今日の獲ものは。虎でもなく羆でもなく。必らず王となるの輔を得られませうと云から。喜んで獵に出ると。はたして渭水の河邊に。只ものとも見えぬ老人が。餘念もなく釣をたれてゐるから。西伯は。かの川柳が句に。「つれますかなど丶文王そばへより」と云へる如く。愛敬づくツて。そばへ立より。物いひかけて見ると。こいつ梅干親仁と思ひの外に。これも川柳が。「魚をつるとはうそ八百の親仁なり」と云たる如く。年まかりよツても。いや中々以て膽魂のえらい親仁だから。紂が王位を奪ふの謀は。かやう〳〵と談じたる所が。西伯は大きに悦で云には。吾が先君太公の時より。當に聖人を得るであらうが。其の時我が周は興るであらう。といひ傳へてあるが。大かた子のことであるだらう。吾が太公の。子を望んで居たること久しき故。その太公が望んでゐたと云の義を以て。太公望と稱すべしと云て。我れとおなじ車にのせて歸り。立て師となし。なほ敬て。これを師とし。これを尙び。これを父とすると云の義を以て。師尙父と尊稱し。重く用ひて事を謀つたでござる。則ち本書に。西伯脫羑里歸。與呂尙陰謀修德。以傾商政。其事多兵權與奇計。故後世之言兵及周之陰權。皆宗太公爲本謀。云々。天下三分其二歸周者。太公謀計居多とあるを。よく考ふべきことでござる。その謀計とは。謂ゆる軍法などのことかと思へば。さうでなく。眞言日蓮などの賊法師どもの。するやうな術もあるでござる。夫れは思ひ合すべき事の多かる中に。かの丁侯といふが。周にしたがはざる時　。太公望は。即ち丁侯が形を畫いて。頭と目と腹と股と足とに箭を射つけて。咒詛事をすると。彼丁侯は甚じく煩ひ出したでござる。そこで使を遣はして。臣となり仕へるか。どうだと云てやると。丁侯はどうも苦くてならぬから。何にも仰せに從ひませうと云。そこで太公望は。甲乙の日に。其の頭に射つけて置たる箭をぬき。丙丁の日に

は。日に射つけたる矢を拔き。戊己の日には。其腹の矢をぬき。庚辛の日には。股の箭をぬき。壬癸の日には。その足の矢を拔くと。丁侯が病は。すなはち癒たでござる。そこで餘の諸侯どもが。おち恐れて從つたことがある。則ち本書の頭書に此事を記して。史記の增注したる。光緒と云人の評に。據之則太公祗一妖魔怪誕之術耳。安足信哉。大史公凡曰陰謀陰權等字俱非太公本色。と云たは理なることで。如何にもこれらは。謀略などゝいふやうな。立派なことでは无い。眞言法師や日蓮宗の賊法師等のする。謂ゆる咒ひ。又魔法など云ふと同じことでござる。なほ思ひ合すべきわる工みは。論衡といふ書に。太公陰謀食小兒以丹。令身純赤。長大教言殷亡。殷民見兒身赤。以爲天神。及言殷亡。皆謂商滅。兵至牧野。晨舉脂燭。姦謀惑民。儒掩不備。周之所諱也とあるが。なほこの外にも。韓非子に。文王資費仲。而遊於紂之傍。令之間紂而亂其心といひ。また周有玉版。紂令膠鬲索之。文王不予。費仲來求。因予之。是膠鬲賢而費仲無道也。周惡賢者之得志也。故予費仲と云こともあるが。とかくかやうにわる工みを行つて。時の至るを待たものでござる。それは淮南子に。文王爲玉門。築靈臺。以待紂之失とあるをも。思ひ合すべきことでござる。俗の儒者はかやうの事をば。猫のばゝを隱すやうに。おし隱して。よきさまに取り成しいひ。此れらを聖人聖人と云て。もてはやす。その下た心がいやらしいでござる。さて右の如く惡工をして。國をひろむる所を見て。紂王の臣に祖尹と云もの。西伯がしわざを憎み。やがて禍ひの至らんことを懼れて。紂王に身の行ひを愼むべき由を諫むれどもきかず。倍々わんぱくをやる所が。猶いまだ紂王が親族に。微子。比干。箕子などいふ忠臣有て。輔佐してをるから。西伯はなほいまだかの革命の時の至らぬことを知て。忠々しげにもてなし。飾つて見合せ居たでござる。論語にこの事をほめて。三分天下有其二。以服事於殷。周之德可謂至德而已と。孔子の申たは。この故でござる。但し孔子の此語を。讚岐の大華といふ人が評して。論語は實に孔子の善教を記したる書だが。此語は大不經なる語だと云て。その評に。天下者殷之天下也。西伯者臣也。雖尺土莫非殷之

地。雖一民莫非殷之人。周之初者岐之下而已。而至有其二者。蠶食而有之なり。王上に在るときは王の地なり。王の地を蠶食するは叛くに非ずして何ぞ。史記に西伯呂尚と圖りて。諸侯を傾るの趣あり。是を以てこれを觀れば。奇謀を以て諸侯を臣としたること明かなり。何を以て其不臣を以て至德と稱するや。この語勢を見るに。既にその二つを有つ時は。殷に服事すべからず。然れども猶服事するとの謂なり。たとへ全く天下を有つとも。其君に服事すべからざるの理あらんや。我國の君臣は義を主とす。彼國は地を主とす。その隔ること殊遠なりと云たが。これは盡く尤もなる論でござる。然れども孔子の。かく西伯を美たには。わけもある。其訣と云は。孔子は周の世に生れたる人故。しばらく時世にはむいて。かやうに云たもので。此れは本意では无いが。夫にしても此はいはずともな語で。例の愼み深き孔子に取ては。つひ口のすべッたのでも有ませう。論は大華が云へる如くのわけ故。これらは孔子の語でも取捨すべきことで。然るに俗の儒者どもなんどは。一向にそこらの目はしはきかぬでござる。

かくて西伯は時節の至らぬを見合せをるうちに。年老て死んだが。その死ぬる今はの時に。その子姬發に申すには。見善勿怠。時至勿疑と。遺言いたして死んだでござる。この遺言と。上に引たる易の辭どもと。考へ合すが宜いでござる。

扨この姬發と云は。いはゆる周武王がことで。此者父西伯が志をつぎ。則ち太公望を師として。奸術をまなび。弟姬旦と云者と。心を合せて。紂王がひまを伺つてをる所が。紂王は更に心づかず。かの惡行なほ止まぬから。かの兄なる微子は。諫めあぐんで。父子の道は骨肉のこと故。父に過ちあれば。子三たびこれを諫めて聽かざる時は。隨ふべきことだが。君臣の道は。義を以て屬くこと故。その過ちあるとき。三たび諫めて聽ざれば。去るべきことだと云て。其職をすてゝ去る。又かの箕子は。これも紂王が親戚ではあり。彼れ此れと理を盡して諫むる所が。きかぬ。そこで或人すゝめて。迚も惡行は止むことであるまいから。去るが宜いといふ時に。箕子が云には。人臣と爲つて。諫めを聽かれずとて去るのは。これ君の惡を彰すのことわり故。吾はさうはえせぬ

と云て。わざと狂氣のまねして髮を被り。おちぶれて奴となり。隱れて琴を鼓て。一人悲んでゐると。紂王これを囚へたでござる。又かの比干は。此も紂王が親戚ではある。また忠義の深きもの故。君に過ちあるときは。死を以て爭ふべきものだと云て。直言を發して。きびしく諫めたる時に。紂王が怒て。吾れきく聖人の心には七の竅あると云ことだが。見ようと云て。その比干を殺し。心を剖て視たでござる。かやうのよき人々を。みな失ふと云は。扨々死神の取ついてゐると云ものは。しかたのない物でござる。こゝに周武王は。かくの如く紂王の惡行の。ます〳〵甚だしきを待伺ひつけて。かの父西伯が遺言に。時至て疑ふこと勿れと。いひおいたる通り。更に疑はず。兵を集めて。殷有ニ重罪一。不レ可ニ以不一レ伐といひふれ。自ら專らにせぬと云の心で。父西伯が木主を車に載せ。王號を稱して文王となし。吾は太子發と稱し。自ら四萬五千人に將として。誓詞を立て諸侯どもに。紂が惡行をかぞへきかせ。今予發維行ニ天之罰一。勉哉。所レ不レ勉爾身有レ戮などおどして。殷の都に打入る時に。伯夷叔齊といふ兄弟二人が有て。

此れはもと孤竹といふ國の子なるが。其父の死ぬる時に。後の繼は弟の叔齊と定めて死んだでござる。所が父の死後に。叔齊は兄の伯夷に讓つたなれども。伯夷は父命也と云て國を逃れ去ると。叔齊もまた。兄のあるに吾が立つべきことではないと云て。共に逃れ去たから。そこで國人は。その中子を立てたでござる。爰にこの兄弟は。その頃西伯は。よく人を懷けたる故。實によき人と心得て。投化いたし居たる所が。右の如く叛逆をおこす故。思ひの外におどろいて。武王が馬を叩いて諫めて云には。父死不レ葬爰及ニ干戈一。可レ謂レ孝乎。以レ臣弒レ君可レ謂レ仁乎。と云たる所が。武王が左右の者ども。既に殺さんとする時に。かの太公望が云には。此は義人だに依て殺すこと勿れと云て。扶けて去らしめたとある。この二人がことは。なほ末に出るが。至て好き人でござる。斯くて殷の紂王も。武王が攻め來ると聞いて。兵士七十萬人を發して。拒き戰つたる所が。とても死神のついてをること故。一戰に打負けて。走り反り。鹿臺といふ臺に登つて。自ら火中に飛入て燔死んだでござる。時に武王は。紂王が燔死だる所に至て。

自ら弓を射ること三たび。さて車より下りて。劔を拔て此れを擊ち。黄鉞を以て紂王が頭を斬つて。大白の旗に懸け。又かの妲己と。今一人の愛妾の經れて死だるをも。右の如くして。其の頭を小白の旗と云に懸させたる時に。かの微子は降參に出たでござる。扨かの箕子か囚はれてゐるを釋し。また諫めて殺されたる比干が墓を封じ。紂王が子の武庚祿父と云者を封じ。殷の先祖の祀りを續しめて。諸侯と爲したなれども。その叛かんことを恐れ。わが弟の管叔鮮。蔡叔度と云ものを相て。殷の舊都を治めさせ。こゝに於て己自ら王となり。功臣を封じ。第一に。太公望を齊といふ大國に封じ。弟の周公旦をば魯といふ國に封じ。その外をも夫々に功を賞し。扨周公旦らと相ひ計て。己が叛逆の罪を覆ひかくし。また向後は人に奪はるまじき爲に。かの文王が羑里に於て作りおける易の天道天命を彌々のべひろめて。かの尚書に見えたる種々の文を造り。その託言と致したものでっ實に文王武王周公旦が遠き慮の深きこと。古今ならぶ者はあるまいでござる。殷の世の續きたること。三十代五百八年でこの亡びたる年が。紂王の

五十二年庚寅の歳でござる。爰にかの伯夷叔齊は。武王がすでに殷紂王を亡ぼして自立いたし。國中の諸侯どもが。それを王とし尊ぶを見て。これを恥かしく思ひ。周の粟は食ふまいと。首陽山といふ山に隱れて。始めは蕨を掘りて食て居たが。思へばかく周の代となッては。國中の物。何によらず周の物だに依て。それに生へたる物は食ふべきことで无いと。心を極めて食を絶ち。すでに死せんとする時に。歌を作つたでござる。其歌に。登彼西山兮。采其薇矣。以暴易暴。不知其非矣。神農虞夏忽焉沒兮。我安適歸矣。于嗟徂兮。命之衰矣と歌ふて。遂に首陽山に餓死したでござる。孔子も甚く稱て。古への賢人なりとも。仁を求めて仁を得たりとも。また不降其志。不辱其身伯夷叔齊乎ともほめて有るでござる。また吾が師翁の。この兩人が像をかける繪の賛に。「ことさへぐから國人の。きたなけき行状は。いまさら論ふべくも非ず。そが中に伯夷叔齊といひけむ人の。武王が軍をとゞめしは。少か君と臣とのわきだめを。重んじたるに似たり。されど首陽の山にして。飯に飢て身

死れるに。とよけの神の御靈や蒙らざりけん。畏きやいづこの國にしても。我が天つ神ろぎの大御敎へを仰がましかば。自からあかき心と成なましものを「をりはやす春のさ薇のごかなる。天つ日影ゆ萌出にけり」と有りますが。いかにもさることでござる。

又もろこし人の評には。まづ唐の韓退之が。伯夷頌といふ文に。士之特立獨行。適於義而已。不顧人之是非。皆豪傑之士。信道篤而自知明者也。一家非之。力行而不惑者寡矣。至於一國一州非之。力行而不惑者。蓋天下一人而已矣。至若擧世非之。力行而不惑者。則千百年乃一人而已耳。若伯夷者。窮天地亘萬世。而不顧者也。云々。當殷之亡。周之興。云々。武王周公聖人也。率天下之賢士與天下之諸侯。而往攻之。未嘗聞有非之者也。彼伯夷叔齊者。乃獨以爲不可。殷既滅矣。天下宗周。彼二子者獨恥食其粟。餓死而不顧。繇是而言。夫豈有求而爲哉。信道篤而自知明者也。今世之所謂士者。一凡人譽之。則自以爲有餘。一凡人沮之。則自以爲不足。彼獨非聖人。自是如此。云云。余故曰。若伯夷者。特立獨行。窮天地亘萬世而不顧者也。また朱子が評に。孟子曰。聖人百世之師也。伯夷是也。故聞伯夷之風者。頑夫廉。懦夫有立志。奮乎百世之上。百世之下。聞者莫不興起也。夫孟子之於伯夷。其論之詳也。或以爲聖之淸。云々。此論乃以百世之師歸之。而孔子反不與焉何哉。孔子道大德中而無迹。故學之者。沒身鑽仰而不足。伯夷志潔行高而迹著。故慕之者。一日感慨而有餘也。然則伯夷之功不爲小也といへる。茲におもしろき評でござる。この餘に王直が伯夷十辨など云を始め。くさ〲論があるけれども。大抵武王が主殺しの罪を。尤なることにせんとて。作れる說どもにて。論にも足らず。夫を御國の儒者にも。さることにして。伯夷を非としたるは。物部徂徠。伊藤東涯などだが。もろこし人は。己が國の聖人と云者どものことだに依て。しかいふ者も有りさうな事だが。その漢人すら。右の朱子。韓退之らがやうに云へるもある。所を皇國の儒者どもの。どういふ非心得か。氣味のわるい輩で。事に當つたならば。武王がしわざでもやる氣と見えるでござる。

さて武王は。紂王を亡して後。二年目に。年九十三

歳で死んで。その子誦といふが。十三歳で代つて王となッて。成王と云は。これがことでござる。此につけて。玉がつまに。周の武王とし九十三にして。身死れりし時。その子の成王。いまだ十三歳なりと記せり。然れば成王は。武王が八十一の時の子にぞ有ける。いにしへ人は。しか健なりしことは論ひなけれども。猶いかにぞや所思ることは。此王はやく子どもは。あまた有つれば。子孫絶えむのあやぶみも无きに。なほ生せたるは。さる大じき老のよまでも。なほ好色心のやまざりし也けり。聖人と云者も。さるものにや有けむと記しおかれましたが。何にもさることで。この成王が次にも。子はなほあるでござる。また武王が父の文王も。めつさう年のよるまで。子は生せたもので。左傳に。管。蔡。郕。霍。魯。衞。毛。聃。郜。雍。曹。滕。畢。原。酆。郇。文之昭也とあるから。この十六个國の君の封じたるは。みな文王が子で。この上に武王と。今一人伯邑考と云て武王が兄も有たから。十八人なるに。況てこれは男子ばかりだに依て。女子も十人と十五人はあッたらふし。また欠けたも有たらふから。正に四五十人の子持であッたでござる。夫にまだ大變なことは。男と云ものは。子を生せるものだから。文王も妾をたんとおいて。かやうに生せたので。是はさも有べき事だが。文王が妻の大姒と云たるばヽあが。けしからぬ婆々どのでござる。なぜといふに。武王が殷を亡したる其をりに。弟どもを。みな國々に封じたるが中に。康叔封といふと。冉季載といふ。同母の弟が有て。これはいかう少くて。國に封ぜられなんだとあるが。是は武王が九十一歳の時でござる。さすれば其二人の弟は。やう〳〵十四五で有たと見える。こヽから。年數をくッて見ると。かの大姒といふが。九十歳ぐらゐの時の子でござる。女で九十歳になッても。まだ子を生出すとは。とんだめづらしき婆々アでござる。かやうの事も。人はうッかりと見過してをるが。氣を付て書をよむと。こんな珍しきことも見出すものでござる。かの五雜俎などに。色々かやうの珍らしきことを。人部といふ所に記し集めてあるが。これには心つかなんだことヽ見えるでござる。俗の學者は。とかく聖人といへば。きヽおぢし

て。佛者が佛を思ふやうに心得てをるが。隨分女は好きなものでござる。扨この成王が世になッては。かの幼弱のこと故。周公旦は。己が封ぜられたる魯國に入部はせんで。自ら王の席に居て。成王を輔佐いたし。政事を專らにして。旣に其位を簒はむとしたるを。わきからも簒ひさうにも見えたと云ことで。かの燕の召公奭。太公望はじめ。彼紂王が子の武康に附けおいたる。管叔。蔡叔。その外の兄弟ども。周公旦を疑つて。かれこれと流言したる中にも。この管叔蔡叔は。周公旦が罪をとはんとして。かの紂王が子の武康を挾んで。亂を作したでござる。此れはかやう有るべきわけは。管叔蔡叔が自力では。周公旦に勝つことかなはぬことを知てをる故。この武康を取立て。事を計らへば。殷をしたふ者どもゝ。多くつき從ふことを考へ。また武康は。父紂王が仇を報いたく思つても。當時さかんなる周には敵しがたきこと故。管叔蔡叔が。この催しを幸ひに同心して。思ひ立た物でござる。こゝに於て周公旦も軍を興して大誥を作る うち向ひ。その兄管叔と。かの武康を殺し。蔡叔をばおひ放て。武康が所領を二つにわけ。末の弟の康叔といふを。衞といふ國に封じ。かの紂王が兄の微子を。宋といふ國に立て。殷の祠をつがしめ。かれこれ二年ばかりもかゝッて。其の邊りを。ひとまづ寧めたと云ことでござる。これに付てから人ながら。蘇軾。かのいはゆる東坡が。武王を論じたる文の中に。此事を云て。武王非聖人也。昔者孔子盡罪湯武。顧自以爲殷之子孫而周人也。故不敢然數致意焉。云々。伯夷叔齊之於武王也。蓋謂之殺君。至恥之不食其粟而孔子予之。其罪武王也甚矣。此孔子之家法也。云々。而孟軻始亂之曰。吾聞武王誅獨夫紂。未聞弑君也。自是學者。以湯武爲聖人之正。若當然者。皆孔子之罪人也。云々。殺其父封其子。其子非人也則可。使其子而果人也。則必死之。云々。武王親以黃鉞斬紂。使武康受封而不叛。豈復人也哉。故武康之必叛。不待智者而後知也。武王之封武康。蓋亦不得已焉耳。殷有天下六百年。云々。紂雖無道。其故家遺俗未盡滅也。三分天下有其二。殷不伐周。而周伐之。誅其君夷其社稷。諸侯必有不悅者。故封武康以慰之。此豈武王之意哉。故曰武王非聖

人也。といひましたが。これはよく云ひ得たる論で。甚だおもしろい。實に東坡がこの文に云たる如く。武王が紂王を亡したることは。非として從はぬ國々も多く有た事でござる。それは成王が次を康王と云たが。此王が時まで。まへの殷を慕つて。周に服せなんだ國が四十餘國あッて。尙書にある。多士。多方。無佚の篇などは。夫らを諭さんとて作つたる物で。かの文どもに。商王士。また有殷多士。また殷逋播臣などゝ云て。周の臣民の列とはせず。機嫌を取た者でござる。斯くても其殷を慕つて。周に服せぬ國國の人をば。天命をしらぬ頑愚なる民と云の義で。周の世の頑民と號けたものだが。頑はかたくなと訓む字で。いかにも周から見たならば。頑民ともいはうが。殷から見ればすぐにその頑が忠義でござる。こゝらを考へても。紂王を武王が言に。獨夫と云たることの。眞ならぬことを知るが宜い。かくて周に從はなんだることゝ。四十餘年で有たが武王から三代目の康王が時に。始めて周に歸したと云ことでござる。此れはその壯者は已に老い。老たる者は。すでに死になんどもしたるに依て。終に從つたものでござる。さて康王が次の王を昭王といふ。この王楚の國といふへ。巡狩いたした所が。楚の國を領しをる者の計らひで。船人に申付て。膠づけの舟をこしらへ。昭王が川を渡るとき。中流でその舟のくづれるやうにしかけて殺したでござる。然れども其仇を誅すべき手だても无く。其儘においたが。これより後ます〳〵亂りがはしく。代々に謀反人も絶えず。四方の夷狄と。いやしめる國々からは攻められる。彼是あけしき間もなく。舟で殺された昭王から七代目の厲王といふ王は。國人にそむかれて出奔する。この厲王から三代目の幽王といふ王は。かの誰れも知てゐる。褒姒といふ美女を寵愛する所が。この女が。とんと笑はぬ女であッたが。幽王は此を笑はせんと欲して。千計萬方すれども笑はぬ所が。その頃國が亂れてゐる故に。寇の攻め至ることしば〳〵ある。其時は國々の軍兵にしらせん爲に。烽火を擧げることだが。褒姒は夫れを見ては笑ふでござる。そこで幽王は褒姒が笑ひを見たくなるとは。寇の來ぬ時でも。烽火をあげる。其時は國々の軍兵が。寇の來たことゝ思つて來る。來て見ると。寇も何も來ぬから。

むなしく歸る。かやうの事がしばく有たる故。後には國々の軍兵も合點して。のろしを上げても來なくなッたでござる。さてこの褒姒が生んだる子を次に立んとし。その本妻を廢し。その生んだ子の。太子に立て居たるをも廢したる所が。しうとの印侯といふが怒て。西の方犬戎といふ夷をかたらひて。幽王を攻たでござる。このとき幽王は。例の烽火を擧て。軍兵を催促したが。これまで度々だまされてゐること故。今度は軍兵一人も至らず。かの川柳點に。「笑ひごつてはねいと幽王あはて」。と云たる如く。此時こそは。褒姒が笑ひを見るどこでは无く。あはてさわぐうちに。幽王は殺されたでござる。武王よりこの幽王に至て。二百五十七年にして。周はまづ亡びたでござる。こゝに於て。かの申侯と。その外の諸侯ども相談して。幽王が太子宜臼と云を立て王となし。これを平王と云。今までの都は亡されたる故。東の方雒邑と云ふ地に遷りて。これより以來の世をば。東周といふでござる。この東周の平王といふ代よりは。勢ひますく衰微して。あれども无きが如く。諸侯といふ輩が。勢ひつよく。思ふまゝに傍の小國どもを。伐從へなんどもして。一向に周の下知をきく者なく。周の領地も段々へりが立て來る。其内に平王から十二代目の。悼王と云王は。その弟子朝といふに殺される。悼王から五人目の。哀王と云王をば。その弟なる叔襲といふ者が殺して。その位をうばッたでござる。これを思王といふ所が。位に即て五月めに。いッち末の弟に。嵬といふが有て。その兄思王を殺して。位を奪ふ。これを考王と云。是れより後は。領地もやうく食て生きてをると云くらゐにへつて。見るかげもなくなり。諸侯どもにいぢめつけられ。則ち通鑑にも。其土地人民。不足以比強國之大夫といひ。また帝王世紀と云物には。雖居天子之位號。爲諸侯所役逼。與家人無異とも云てある程のことでござる。夫でもなきく續いて居て。平王から二十二人目の赧王といふが時に。秦と云國から攻められて。其有てる地を殘らず獻り。降參いたし。こゝで周はねこそげ亡びて。祠も絶えてしまッて。秦の代と云に成たでござる。から人楊愼と云者の言に。周三十七王。八百六十五年。然自武王滅殷。至幽王二百五十七年。而昭王

之時王道已微。懿王之時王道遂衰。昭王南巡而不レ反。厲王死二于彘一。蓋此二百五十七年之內變故多矣。東遷以後不レ足レ言也。治日之少如レ此と云たる通りの事でござる。俗の儒者どもなんど。夏殷周の三代といひ。中にも周の世々々と云て。寢ても起ても。うるさく戀しがるは。この代の事だが。實は五七年と治つたことは。ありやせぬでござる。

○鐵胤云。初めに云べきを忘れたり。其はまづ此書。もとは先人の。漢學大意と名づけて。唯少か講說の覺書にて。後に好く文章をかき整へて。西籍概論と爲すべき下拵へに、せられたる物なりしを。其事の成らざる內に。いつとなく。今の如くは成たるなり。さて西籍と云は。すなはち漢籍のことなるが。諸外國は。大凡我より西に當れば。抑なべて西戎と云つべく。其中に彼國は。國がらも少しは宜く。古くより音信ありし事にて。西の字然るべく。今より六十年前の事なれば。紛らはしきこども無かりしに。近頃は。西洋人も多く來たり。舶來の書籍も。夥しきことなれば。西の字紛はしく聞ゆるなり。抑彼國は。古く迦羅と云ひ。諸越と云ひ。また印度西洋等にて。支那と云なども。據なきには非ねども。其國の本稱には非ず。はた彼らも。夏殷周と云は更なり。次々に漢と云ひ唐と云ひ。今は清とも云が如く。數多の名號ありといへども。何れも自撰にて。いと〳〵紛らはしく。公然たる名稱に非ざることは。既に先師たちの說きおかれたるが如し。然れば其本稱は。いかにと云に。其は國土開闢の初に。人皇氏と云神眞の。初めて地球中を。九州に分ち。彼地をば。赤縣州と名付られたることなるが。これ古く正しく。後の世にも紛れ無き。本稱にぞ有ける。然るを儒者らは。彼國をば。上もなく尊びては在りながら。其本稱をも知らずや有るらむ。中國と云ひ。中華と稱し。聖人の國など云は。甚だ猥りなること。叛逆にも等しく。いと〳〵固陋にて。鈴屋大人の。世に儒者ばかり。文盲なる者はなしと云はれたる。實に爾り。かくて其本稱と云も。風土に因て名付られたる物なるが。本より大御國の如き。上國に非ざる故に。赤縣とは云へるにて。稱美たる名とは聞えず。其は今より四十年ばかり以前。

文政の末。天保のはじめ頃に。先人の彼國の事跡を探索し給へる時に。まづ其國名より考へ起して。すなはち其由太古傳に云はれ。亦由ありて赤縣度制考の巻首(はじめ)に。委く説き記されたるが如し。然れば其混(まぎ)らはしき號(な)どもはおきて。動き无き其本名を稱すべき事にこそ。然るを此書に赤縣と云はれざるは。六十年前の覺書の儘なればなり。見む人此旨を心得てよ。斯く云ふは。明治三年庚午の春。この書上木の時にぞ有ける。　平　鐵胤

序に云。此書たゞに。西籍概論と云べき物には非ず。講説の覺書にて。實は漢學大意と名付られたる物なること。上に云へるが如し。かくて志都迺石室は。醫道大意なり。出定笑語は。佛道大意と稱せられたる物なること。此書の趣(さま)に同じと知るへし。扨また俗神道大意と云は。是も後に文章をかき改めて。巫學談弊と稱すべき物の。下搆へなること。云ふも更なり。同門の士は。此旨をも心得おくべし。

西籍概論講本中之卷

平田先生講談　門人等筆記

さて孔子は。この東周の代の末つかた。靈王と云ふ王が二十一年と云ふ年に生れたる人で。先祖は殷の紂王が兄の。微子が封ぜられたる宋といふ國の血脈の人で。父の名を叔梁紇といひ。母をば顏氏と云。叔梁紇いたく年老ゆる迄。男子の无きことを歎き。尼丘山といふ山の神に禱りて。右の顏氏と野合して生んだる子でござる。生れて首上(つむりのうへ)に窊(くぼか)なる所が有つて。尼丘山の形してゐたる故。名を丘といひ。字を仲尼とつけたと云ふことでござる。其生れたる國は魯國の昌平郷の陬邑といふ所でござる。さて此人小兒の時から遊ごとにも。禮義の容(かたち)をしたり。なにかとかく行儀よく凡人でなく。長(ひとゝなり)て十九歲のとき。妻を迎へて子を生だが。その時魯の君昭公が所から。鯉魚をおくりたる故。それがめでたしとて。名を鯉字をば白魚とつけたでござる。この白魚の子の名を伋といひ。字をば子思と云て。中庸を作つた人でござる。扨この孔子は。老子に叱られたことも有たな

れども。一體は正しきよき人で。此人の事をば。師翁も。から人ながらに。屢ほめて歌にも。「聖人と人は云へども聖人の。たぐひならめや孔子はよき人」。とさへ詠まれた程のことでござる。この人生涯の事をあら〳〵申さば。かの論語に。吾十有五にして學に志し。三十にして立つと云出たる如く。十五の時より學問に志して。三十歳の時。その志したる所の本意が立つたと云ふことではあれども。貧く賤く。世には誰れもすぐれたる人と云ふことは知りてをれども。用ふる人なく。姑くの間。魯の君に仕へたが。末とほして用ひられず。國々を流浪して。用ふる人も有らうかと心がくるが。さばかり猥りなる國に。たッた一人のよき人故。とかくよき人は。他にそねまるゝ習ひにて。讒言などに遭ひては。その國々を去り。また諸國の知つた者どもの所へ行きては。食客に成つて居つたることもしば〳〵のことで。餘りに用ふる人が無き故に。よく〳〵のことは。公山不狃といふ叛逆人が用ひようと云て。召によこしたにさへ。悦んで往かうといたした程のことでござる。その國々の君らが用ひぬも理なることは。その時分は。からも別して國がらが猥りがはしく。王を蔑にする所を。孔子は國の猥りがはしきを直し。王を王らしく尊ぶことを專とする故。諸國の君どもの心にあはぬのでござる。その流浪してあるくうちも。くさ〴〵難義をいたしたる中にも。楚といふ國へ行かうとする道に於て。陳國と蔡國といふ。二國の軍兵にかこまれて。糧を絶ち。從者ども迄も。起つこともならぬほどに腹をへらしたこともあり。また或ときは。陽虎と云ごろぼうだと見紛へられて。かの「此奴だと。孔子をうしろ手にしばりと。云たる如く。その縛つたか。しばらぬかは知らぬが。捕へられたことなどもある。また司馬桓魋といふ者には。殺されんとしたり。何か度々辛き目にも遭つたことでござる。扨この人をば聖人々々と云て。その聖人といふ者は。儒者などの云所では。其心も行ひも。尋常の人とは異にして。佛者らが。佛の噂を云やうに。そげもの。かたわ者の如く云ひなすが。つら〳〵孔子の言行を見れば。其心も行ひも尋常の人に何もかはることなく。たゞ正しくよき人と云までのことでござる。それはまづ第一に神を畏れ敬つて。生たる

人に仕へる如く。少かの物も。初穂は。いつもわが祖の靈にそなへ。また十九歳のときに妻を迎へて。白魚と云ふを生せたるを見れば。禮記に三十にして娶るといふ事はあれども。二十まへに女に合ひ。又うまき物も隨分に好きと見えて。山梁の雌雉時哉時哉と。きゞすの旨きさかりをほめ。また原壤といふ老人の。なし得たることも無くて。長生するを。その脛をうッて。老ひて死せざるを賊と云などゝ。たはむれも云ひ。また秘藏の弟子の顏淵が死んだる時は。嗚呼天我を亡ぼせり抔と。よまゐごとを云て。禮記には哭すれども慟せぬといふ定めだが。その哭きの余りに慟して正氣を失ひ。又つよく雷鳴り。風などの烈しき時も。この方と同じことにはがッたと見え。色を變じて恐しがり。また主殺しのたぐひ。凡て道ならぬ事を爲る者があると。いかう腹を立ちて。請ふこれを討たんなどゝ。關らぬ事にもさし出て願ひなどもいたし。また似て非なる者を惡むといひて。似た山をばいかうにくがり。その任に在つては。すでに少正卯など云ふ者をば。首さへうち切つたでござる。この余その言行を見るに何もそげたる行ひなく。よくも我師の翁に。心も行ひも似たる人でござる。これを過言と思はれる人は。よく孔子の書をよみ。よく吾が翁の書を讀み。その言行を味ひて悟るがよいでござる。さて世のひが者の爲には惡み譏られて。世に入れられなんだなれども。少かも世にてらひ。人にはむくと云ふやうな。きたなきこともなく。それでも君親の事をば。其あしきを覆ひ隱し。枉てもよきに云ひまげもすると云ふが本志で。どうもいへぬ美みのあるよき人でござる。かくて生涯用ひられぬことを憤つて。小言を云ひつゝけたが。何も著述とてもせず。たゞ今世に傳はる尙書の序でを正し。詩經の重復を削去りて三百篇となし。また己が生れたる諸越の國の猥りがはしく。定まれる君なくて。まづ第一に道の大本が立ぬ事を殊の外に歎き。御國の如く。道の本たる君の統の定めたいの心が有て。その時分はいたく衰へてをるけれども。周の王統を尊び。内を尊んで外をば貶し卑しめ。口をひらけば。眞の道の心ばへを説きさとし。魯國の記錄ぶみ。春秋と云ふを撰定して。その事實の上に勸善懲惡の筆意をあらはし。それは東周の平

王が四十九年より筆を起して。同く敬王が三十九年まで。二百四十余年間の事を。言少なくして。義はなはだ深く。めでたき物に書取たでござる。この春秋を撰んだる孔子の心ばへの事は。古道の大意に委く申たる通りのわけで。とかく道を見ることは。事實の上でなくては知れず。空論では。人の心に入ることうときが故に。いたしたることで。それ故に吾を知るもの其れたゞ春秋か。吾れを罪する者それたゞ春秋かとさへ云ひおいて。是れほど孔子の心のよく見へるものは无く。その生涯の眞心を見ると。實に涙のこぼれることでござる。扨かほどに心を著しおいたなれども。固より猥りなる自然の國がらゆゑ。少かも孔子の心を用ふる者なく。たゞ用ふる顔のみをして。孔子をば。ほめころばして居るのみのことでござる。孟子が云たる言に。孔子春秋を作つて。亂臣賊子懼るなど云たけれども。これは儒者のさへづりぐさで。實は一向にこの春秋の心ばへを用ふる者なく。孔子より後はます〳〵亂れて。とう〳〵周は右申す如く根こそげ亡び。その祀もたえて。孔子生涯の小言骨折もむだになり。其後とてもその如く。實に孔子はわるき國に生れて。むだ骨を折たことでござる。夫でも弟子は三千人あッたと云ことでござる。かくて周の敬王が四十一年と云ふ年の四月に。七十三歳で卒したでござる。皇國では懿德天皇の御代三十三年にあたるでござる。さて孔子の子白魚は五十歳で。孔子より先に死で。其子は子思。これより九代後の子襄と云が。漢の代に取立られて以來。連綿としてその家をつぎ。孔子の廟につかへて。その神主となり。今の清の代まで傳はッて。代々に疎末にせず。遠聖侯と云に封ぜられてをるが。これ全く孔子の誠心が。天津神の御心に叶てをるからのことで有がたく。もろこしでは孔子の家ほど古き家はないでござる。又奇なる事には。孔子の廟ある。かこひの中へは。荊棘などの類。惡き草を生ぜず。又惡き虫も住まず。鳥も巣を作らず。今以て大社で人の參詣する事いつも絶ず。また神靈を現じたることもしば〳〵有つて。實に此人は神に相違ないでござる。さて右申たる如く。春秋を始め。詩經書經なども。孔子の正したるのみで。著したるでは無く。又論語は。此人生涯の言行を。弟子どものきゝ覺え

居たるを。後に記しつけたもので。悪きとも無きにはあらねど。隨分よろしき書でござる。扨からも倭も。儒者といふ限りの者どもは。皆この孔子を學びの親とし。本尊といたすことで。其儒者どもの中に。諸趣のは姑くおいて。御國の儒者に。大かたは此孔子の本意をよく得たりと思はるゝはなく。別して近き世に古學といふ學風を。となへ出たる儒者どもが。殊にさうでござる。夫は次々に申さうが。今日は其儒者どもの殊に懐かしがる。唐虞三代則謂ゆる。二帝三王と云者どもの。世の終りの處だに依て。夫を總て評しながら。其古學者流の儒者らが。心得違ひをあら〱云ひませう。此は篤胤が。先年かの太宰彌右衛門。號を春臺と申たる儒者の著したる。辯道書と云書の。非說を辯じたる其一條でござる。それは先つ辯道書に。日本の今の世を見るに。中華の昔に及ばずといへども。天下全く聖人の道にて治り候と存じ候。然れば天下の人悉く。聖人の敎に依て。禽獸に陷らず。王公は上に居て。其富貴を保ち。士大夫の中に居て。其祿位を安んじ。庶民農工商賈は。下に居て其家業を樂み。奴婢臧獲。鰥寡孤獨の輩までも。暴虐にあはず。天下平均に。四海無事なるは。全く聖人の所業にて候」と云て有るが。まづ漢國にて。皇國の今の御世の如く。めでたく治りたること。彼國世々の歷史に見えざるに。太宰が中華の昔に及ばずと云たは。漢國の誰れが世をさして云ふにかと思ふに。彼の事々しく云ふ。堯舜禹湯武が世の事を云たものでござる。然れどもその牽强はなはだ過ぎたることで。何として渠等が代を以て。皇國の今の愛たき御世に比べられようぞ。夫はいかにと云ふに。まづ堯舜が代といへば。君臣上下の差別正しからず。父は慈なく。臣は節なく。皇國の今にくらべて見れば。とんと禽獸の有さまでござる。其君臣上下の差別なしと云ふ故は。堯は天子だと名告ながら。其女を農夫の舜に嫁はせたるは如何。舜もまた農夫の身として。天子と有る者の二女を妻として。安んじ居たるはいかに。是は書經に堯が。我其試哉。女于時觀厥刑于二女。とあれば。舜が人となりを試みようとて。斯く計らひたる事だなど云ふは。腐儒者の常談なれど。然もあらば。堯は何とて。さう愚なりしぞ。人となりを試みるには。女を嫁せずとても。

知れぬと云ふことはない。强てさうせねば。其の行狀が知れぬといはゞ。堯は愚人なること論なし。是を聖人なりとて。最もかしこき物に云ふは如何ぞや。人は只一言に依ても。其胸中は知れることあり。又字書にも。聖者聲也。聞レ聲知レ情。故曰レ聖也。と云ふことも見えたるに。堯實に聖ならば。一面會もしたらむには。其人物は直に知れる筈のことなり。幸ひにして舜は位をも禪るほどに。試み當てたればこそ宜けれ。若し鯀が如く目利違ひで有らうならば何とする。徒に王とある者の二女を。農夫が人となりを試みむ爲に。穢させてよからうか。是上下の差別なく。輕忽にあらずして何ぞ。又父は慈なくと云ふは。堯舜子に傳へずして。倶に他人に禪れるは如何。然るに夫は天下を重んじてのことなりと云ふ。是も儒者の常談なれども。然らば湯武なども。何とて堯舜が心に次で。臣下より有德の者を擇んで禪らず。何ぞ不德なる子に傳へたるや。是湯武が其子の愛に溺れて。天下を私事にいたしたるか。然もあらば堯舜が受禪も。たゞ二代にして行通らず。師の云れたる如く。却て後世に王莽曹操が徒の起るべき。其源を開きたるにて。無用ごとなり。堯舜より見れば。湯武は子に慈愛ある者と云べし。是堯舜は子に慈愛なき者にあらずして何ぞ。殊に堯は數代傳はる宗廟の祀を重しとせず。先祖へは大きなる不孝に非ずや。又堯が舜に禪れる時に。舜が直に受ては居なんだと見えて。堯死して後。その子丹朱に讓つたと有る。もし受て居たることならば。丹朱に讓るべき由なく。舜がうけぬ前に。堯が死したらば。舜は力を盡して。丹朱が不德を輔佐て。國を保たすべきことでござる。然るを人が慕へばとて。自ら王と成たるは。逆臣と云るゝも。當り前と云べきことでござる。鳥羽義著曰。堯は愚にして舜は奪へるなり。堯老耄して。うか／＼と政を執らせし故。舜奸計を逞しくして。人をなつけ。衆を引て天下を奪へるなり。禹が舜の世を取しも。又同じと云たが是はさも云べきことでござる。いかにも堯は愚昧で有たらうと思はれることは。少し小賢しき者を見ては。漫りに天下を禪らうと云ひ。又おのれ天子とも名告ながら。農夫が賢か愚かを試みん爲に。其女を嫁せて辱とも思はず。然れども其の云へる言には。まゝ尤らしき言も有るは。

今の俗にも心は大愚にして。其言語を聞ては。利口さうに聞える者も有るものなり。また堯舜の民とか云ひて。渠等が世をば民どもまでも。何か尊きことに云由なれど。其薄情にして忠實の心なきこと。云べきやうなし。孟軻といふ者などは。堯舜の民は。軒を並べて封ずべしなど云たれども。渠は國々の諸侯に。謀叛をすゝめ歩行し悪者にて。其の云へる言どもは。勸化僧の方便言と同じければ。論ずるに足らず。さて其不實なる故は。まづ堯は治世に深く心を勞し。民を惠むにあまりて、天下をも子には傳へず。他人に禪りなどして憐みたることゝ聞ゆるに。然ほどまで恩を受たる君の子を。たとひ悪人にもせよ捨果て。他人がいかほど慈愛ありとて。己らが爲には幸あるとも。夫に付き從つて君と仰ぐは。推並て忠信なき所爲にあらずや。是皆恩を知らざる者にて。堯がさしも心配したるをば。其うくる時のみ悅びて。死での後は更に其の恩を思はざるなり。舜が死後に。禹に從つたも同じことだ。犬猫さへも古主をば慕ひて。他家にていかほど旨き物を與へても親まず。ひたもの古主の許にのみ歸らむことを思ふ。されば其民等は。犬猫の心にも劣れるに非ずや。臣は節なしとは。是らのことを云なり。皆人のこと〲しく云ふ堯舜の民さへ。斯くの如くなれば。彼國の世々の人情。是に准へて思ひ計るべし。漢國の人心は薄悪だと云は此事なり。又民百性のかやうに恩を思はぬを以て思へば。書經などに。さも尊げに記せるも。みな空言で有うと思はれる。少しのことをもことことしく云ひ成すは。彼國人の癖なれば。必さうで有うでござる。聖人の事と云へば。老婆が阿彌陀を信ずる如く。一向に尊く思ふ腐儒者こそ。愚昧の至りと申すべきものでござる。扨又其次に。湯武は逆賊なり。是は己れ云までもなく。人皆しりたることには有れども。又稀には腐儒の云を尤もとして。欺かれ居る人も有るべければ。今序でに辨じませう。扨まづ第一に憎むべきは。彼國の學を主とする者共が。湯武の弑虐を仁義の征伐と云ひなし。其れを強く云ふとては。桀紂の悪を事々しく云ひ立ることなれども。是はみな湯武が悪罪を覆はむとての强說でござる。己れ謂ふに。一大國の君と生れて。萬民の上に立つものなれば。愚なる生質の者は。よしと云ふに

はあらねども。桀紂が如き行跡の。有まじきことは云べからず。逆に臣より君を弑するから見れば。然のみ奇怪なることゝも思はれぬでござる。譬へば桀紂が所為は。群鼠の中に交りて。猛き猫の居るが如き物で。鼠の猫に制せらるゝは。自然のことにて。地の天を戴きて。其位を變ぜざるが如きものなれば。猫の心にも。鼠に嚙殺されうとは思はぬ筈のことなり。桀紂も其如く。元より愚なる者なれば。群鼠の中に。湯武と云ふ猫を喰む鼠の有うとは。思はずに居たらうでござる。さればこそ桀が言にも。吾天下を有つことは。天の日あるが如し。日亡びなば吾も則亡びるで有う。と云たるは。君たる者の眞心にて實に君臣の道は。桀が言の如くなるべきものなり。然るを君臣の道は。天地に則りて立たる物だなど云ひながら。猫をかみたる鼠をば。理の至極と云ひなし。鼠を逐つたる猫をば。有るまじき事の如く。强て云ひ成さうとするは。餘りなる非説ではあるまいか。然れども桀紂が所為を。必しも好しと云ではなく。是はたゞ强て湯武を好きやうに云ふ人に。諭さうとて云ふことでござる。湯武實に好人ならば。殺して國を奪ふまでにせずとも。外に為方は。何ほども有るべきことだ。然るに孟軻などが。聞誅一夫紂矣。未聞弑君也。など云たるは。聞くさへ穢らはしく。甚しき妄説なり。いかに云ひくろむるとも。湯武が弑逆の罪は論なく。殊に彼國の史どもを按ずるに。桀王などは。さのみ大きなる惡逆は无きことで。天下の惡みなこれに歸するなどゝ云べきことではない。然るに湯が奸佞者で。凡て人の思ひ付くべきことの限りを為して民をなつけ。黨を結びなどしたるは。是皆君を亡して。天下を奪はうとてのことでござる。其うへ湯誓に。湯みづから申すには。格爾衆庶悉聽朕言。非台小子敢行稱亂。有夏多罪。天命殛之。など云て。かの天命と云を小楯に取り。或はまた爾尙輔予一人。致天之罰。予其大賚汝。無不信。朕不食言。爾不從誓言。予則孥戮汝。罔有攸赦。などゝ恐民をおどして一致いたさせ。終に君を伐滅して。國を奪ひ取たるのでござる。然して後に自ら云には。予恐來世以台為口實。とか申して。後世の誹りを恐れて。仲虺に誥を作らせて。其罪を陳じさせたでござる。然れども君を弑

したること。誰が口實とせずに置ませうぞ。或漢籍に。七歳の小兒が尙書を讀で。牧誓に至り。その父に問て曰。如何ぞ臣として君を伐つやと申たる處が。其父對て。天に應じ人に順ふと云たれば。又問て。用レ命賞二於祖一。不レ用レ命戮二於社一。豈是人に順ふと云ものならむやと云に。其父對ふること能はずと云ことがある。小兒すら見解ある者に。斯の如くでござる。扨湯王は。かやうに惡逆を行つて後は。また民の吾れに叛かむことを畏れて。夏王滅レ德作レ威。以敷二虐于爾萬方百姓一。爾萬方百姓。罹二其凶害一。弗レ忍二荼毒一。云々など申たるは。皆俗に云ふ猫なで聲とか云ふを以て。民の心を悅ばせ。甚だしく桀王が惡をかぞへ。君たる者を差して。罪人黜伏天命弗レ僣など詈り。其の惡虐いふべきやう无し。然れども兹朕未レ知レ獲二戾上下一。慄々危懼。若レ將レ隕二于深淵一。など申たるを以て見れば。心の中に其惡虐は。知て居ることゝ見えるでござる。又汝らに善きことあらば。吾れ蔽すまいし。若し吾が身に罪があらば。必ず赦すこと勿れなどゝ云ひ。又汝らに罪あらば。夫は吾れ一人が罪だ。若し吾れに罪あらば。汝等が故と云ふことは无いことだ。などやうに。佞言を以ても民を懐け。己れも又々人に亡さるまじき搆へを成たるものでござる。よく思ふべし。天の下の民に罪が有たればとて。其は人々の心々にて爲ることなれば何として其君の罪と云ふことが有らうぞ。是佞言にあらずして何であらう。凡て漢國聖人賢人と云はるゝ輩は。かやうの理无きことをも。事々しく云ひ立て。人に用ひられやうとするは。悉く佞言で。全く民を懐けやうとての計略でござる。かやうなる謀言を。夫とも知らずに。尤もと承知して居ると云は。惡がしこきやうなる國俗ながら。又いかう愚鈍なる所も有でござる。又周武王は。父西伯が時よりして。陰德を行ひ民をなつけ。殷に叛きたる諸侯を。己が强きにまかせて打平らげ。其領地を私に奪ひ取り。天下を三分して。其二つを有つといふ程に有ながら。猶足ることを知らず。士を養ひ。太公望を師として。奸術を學び。紂が惡の增長するを待て居る。西伯死でのち。終に兵を擧て諸侯を會し。例の如く天命誅レ之と云て。愚民どもを或はおどし或はなつけ。君をば獨夫受と詈り。終に戰て打破り。紂が燔死たる所に至て

矢を發ち。自ら君の頭を打ち切り。剰へに紂王が妻ごもの。縊死せるをも切はふり。其惡虐なるさま今見るが如く。斯くして紂が國をば奪ひ。無理に天命と云ひ。上帝と云ふ託言を並べ立て。民を欺むき。終に王とは成たる物でござる。斯して後四五十年がほど。周に服せず。殷の爲に忠義を存して挑みたる國が。四十餘國あッたるを。是らの忠信ものをば。頑民と號て。かたわ者の如く云ひなしたでござる。此一事に依ても。國中擧りて。紂に叛きたるには非ることをも。悟るべきものだ。儒家者流いかにとも云はゞいへ。吾は周の代の頑民こそ頼もしいと云へば。或人己れを呵りて曰。子が云ふ說ども。皆世人の情に悖りて。漫りに湯武を非とすること。實に過論と云べく。又憎むべし。彼國の經典に。孔子も湯武の德を稱したること。多く見えたれども。譏れるは无し。子これを如何とする。己れいふ。子は信に漢人なり。其くらゐのことは。一々辨ずるに及ばず。次々に云を聞くべし。抑々吾が徒の學ぶ所は。吾が古への大道を本とし則矩として學ぶなれば。彼國の經書は更にも云はず。たとひ孔子の言行と云へども。

大きに取捨あるは勿論のことなり。況や孔子が湯武の惡を覆して。其の行ひを善と稱したるは。其本心に非ず。其身は陪臣にして。武王は己が君の君たる者の先祖なればのこと。湯をも合せて稱したるも。湯王が弑虐を云ふときは。武王が罪も著明ければ也。其本情に非ずと云ふ故は。春秋に周魯の惡事をば諱て。他の諸侯どもの惡醜をば。根を盡して記き露はし。又同姓を娶したる昭公をも。禮を知たりと云ひ。また父は子の爲にかくし。子は父の爲に隱す。直きこと其中に在り。と云たるなどを思ふべし。猶いはば。伯夷叔齊を賢人也とも。仁を求めて仁を得たりとも云たれば。其伯夷叔齊が言行とは表裏なる。湯武が所爲を善いとは云ふまいでござる。かつ表記に見えたる孔子の語にも。下之事レ上也。雖レ有ニ庇レ民之大德一。不ニ敢有一レ君レ民之心一。仁之厚也。と云たるをも熟く味ふべきことで。是みな孔子の孔子たる所にして。彼の惡下居ニ下流一訕レ上者上。と云たる言の空しからざるを思ふべきことでござる。若し強て道の儘に論じて。湯武を非とする時は。子貢が語に。非ニ其世一者不レ生ニ其利一。汙ニ其君一者不レ履ニ其土一。と云たる

如く。浮に乘りて海に浮ぶより外は无き事で。これ孔子の大きに時務を辨へ。大きに人に優れたる所でござる。今の俗の腐儒者ども。純等をはじめ。孔子を本尊と立て。したり貌に囀りまはれども。かゝる孔子の意を辨へぬは。何なる狂心ぞや。和漢に湯武を論ずる者。數家ありと云へども。皆强て善人にせむとする贔負口で。小兒を欺くが如き浮說ゆゑ。更に云ふにも足らぬ說どもだが。其中に。藍田東龜年が著せる湯武論。漢士にては。先に申たる。東坡が武王論のみ。ほゞ其旨を得たる說といふべきものでござる。扨この堯舜禹湯文武らの。修飾いたしたる道を。二帝三王の道とも。聖人の道とも云ひて。甚だしく尊きことに申せども。甚以て好からぬ道でござる。其道を規則として。世々相殺し相奪ふて。其さま畜生鳥に異ならず。其は鳥羽義著が言に。湯武等が道は。禽獸にひとし。禽獸剛きは勝ち弱きは負けて從ふが如し。湯武が道を見んと思はゞ。今犬の群集するを以て見よ。强き者弱きもの有りて。かの弱き者他を侵せば。强きもの是を制す。故に群犬かの强きに伏す。然れども其勢ひ子に傳ふることなし。

堯舜湯武が道これに同じと申したが。此說よく當たでござる。常は禽獸と等く貶し賤しめたる。蒙古韃靼などより攻入て國を奪ひ取り。威勢つよくて爲方なければ。頭を低て天子と敬ひ其禽獸と卑めたる國俗に改められて。國中の者ども。二帝三王二聖人の子孫らも。みな今は頭の髮を。四方は剃りて中のみ殘し。彼のけし坊主とか云風體に變せられて。辱とも思はず。いとも片腹いたく。甚もをかしきことでは无いか。熟々味ひ見るに。是みな堯舜湯武らが。制作したる道の過ちにて。是は彼國人の人情薄惡なるが故でござる。斯くても中國の中華のと云て。尊む腐儒者輩の心ほど奇怪きものは无いでござる。扨この王等のことを。彼國の書どもに譽て有るを見て。狼狽たる人は。皆然ることゝ思ふ樣子だが。前にも云ふ如く大なる非事でござる。是は西戎の者ども。世々この王等の爲始めたることを則として。相侵し相殺し。相奪ひもすることゆゑ。讃るも理りだ。譬へば盜賊の仲間にては。盜人の惡きことを云もの无く。却て大なる盜せるものをば。甚たしく譽むるが如く。夫を盜賊の仲間にて譽ればとて。其外の者ご

もが。同じやうに譽ることが何で有らう。夫を譽る者は。必湯武と同じく。賊心あるに相違ないでござる。但し湯武を譽る人を委く云へば。四つ五つの差別あり。一つは未だ初學の人にて。人が譽るまゝに。同く譽れば。好人めきて聞ゆる故に。何の辨へもなく譽るもあり。一つは元來愚昧の生質にて。文辭に誑されたる人か。一つは粗その惡逆と云ことは悟れども。一體が儒者を業とする者にて。其惡を云ひ立る時は。己が業の害となる故に。何くはぬ顔にて居るもあり。又一つは負客みにて。今までの習氣を改むること能はず。譬へば兩國橋邊にて。かッぱの見せ物よとて見するを。河童の意にて。内に入て見れば。思ひの外に雨具の合羽なれど。内に入て見たることの。さすがに口惜ければ。出ながらいみじき河童よとて。出る者のある如く。今更に訕りもならず。人のたま〳〵其惡きを諭せども。一向にうけぬ貌して居るもあり。己等も湯武を實に河童よと。僻心得して見たる所が。思ひの外に欺かれたれば。其合羽なる由を。人にも聞せて。悟らせたく思ふことだ。今一つは實情に。湯武が所爲を尤と思ふ者なり。

これこそは湯武同意の人と云ふべきことなり。假令かの國の書等に譽めたりとも。夫はたゞ例の言よき文辭のみと見過して。其實は其行ひの跡に依て。渠らが善惡は定むべきことでござる。抑かやうに穢はしき。戎王どもが世の狀を。皇國のめでたき御世に比べて。中華の昔に及ばずなどゝ云ひ。或は聖人の道にて治まり候などゝ云は。いかなる妄言ぞや。皇國にて。湯武が道を孰く用ひたる者は。三好義賢。明智光秀が輩なり。其用ひたる者らの成行きを思ふべし。誰も人とは思はぬことだ。又夫より世を上りては。北條義時。同泰時。足利高氏などの輩は有れども。是は我が翁の委く論ひおかれたれば。爰には云はぬ。扨天下の人悉く。聖人の敎に依て。禽獸に陷らずと申したは。何と云ふ狂言で有らう。まづ此處をば何國と思ふぞ。挂まくも可畏き。天照大御神の御本國にして。其御子と御坐す。天皇の代々知看す。此の皇大御國なるを。西戎國の魁首どもの敎に依て。禽獸に陷らずなどゝは。其身皇國の外の者ならば。まだしもさう云はゞ云ひもせうか。純も此御國の内に生れて。飽まで御國恩を蒙り居ながら。斯

る狂言を放つは。更に人とは思はれず。聖人と云ふ者の教へをのみ尊びて。夫を一筋に行はうとする者は。夫こそ禽獣に陥溺したる者でござる。穴かしこ。其道を尊と行ひたるは。北條足利の時代。または三好明智らが所業でござる。然るを何ぞ天下平均なりと云はれうぞ。北條足利が時に。相侵し相奪ひて。四海無事ならざるは。全く湯武の道の行はれたる故でござる。純は手操れる縄の如く。斜める西戎國の例を引て。皇國の正しきを議せんとす。吾は累縄を引たる如く。直く正しき皇國の例を以て。西土のたぐれる縄を議するので。其邪正尊卑。實には論に及ばざることでござる。抑々俗の儒者の。桀紂の二王と。湯武の二賊とを。評論する所を思ふに。丁度皇國の古へ。物部守屋大連の。佛法の我國に行はれんとするを嫌ひて。聖徳太子。曾我馬子などに。亡されたる事を。後世の賊僧どもが。守屋大連を。甚き悪逆の如く云ひ成し。剰へに崇峻天皇を弑し奉つたる。馬子等をば。却て弑虐の罪を覆して。善人と稱し。可畏くも天皇をしも。御悪虐のおはしましたる如く。申成し奉つたるなど〻。同様の邪説にて。甚も〳〵胸悪く。實に忌々しき奴等でござる。朱子の語に。佛法渡つてより。善悪の名が違つてしまッたと云ひましたが。儒者らの説もやッぱり。善悪正邪違て居るでござる。斯くて純また申すには。孔子の教へに從て。堯舜の道を學び候へば。天下の事。何にても足らぬ事なく候。我等は唯々一向に孔子を信じ候へば。聖人の道は極めて明かになり候と。申して有るが。孔子の教に從て。堯舜が道を學ぶ時は。天下のこと何にても足らぬことなしとは。扨も〳〵狭き學者かな。尤もこれは太宰ばかりでなく。漢學者は。大抵かやうに申て居ることだが。孔子も。儒有博學而不窮。と云たることも有るものを。斯やうに時務に達せざるは甚憐むべきことでござる。かゝることを聞くに付ても。吾が翁の。儒學は學ぶまにまに小くなるものなり。と云れたる事思ひ當りて。最尊く思ゆることで。此間も申したる。儒生俗士豈時務を知らむや。時務を知るは俊傑にあり。と云へるは實に尤なることでござる。扨これに付て思ひ出たることあり。今より五十年ばかり以前。志道軒と云人ありて。俗講を業としたるが。其言行を録せる。

風流志道軒傳と云もの五巻あり。都ては滑稽を記せるが。其中に儒道のことに付て。おもしろき論ある故に。今爰に取出して申ませう。其文に。何れの國に至りても。君臣父子夫婦兄弟朋友の。五つの道にもるゝこと无し。人のみには限らず。蜜蜂の飛ぶに君臣あり。烏の反哺。鳩の三枝に。父子の禮備れり。鷄は羽をさげて雌を愛し。猫の不遠慮にさかるも。夫婦の道なり。鼠は算盤に乗る兄弟あり。犬の尾をふッて集り。鯔すばしりの海にかたまるも。皆朋友の道也。伊藤先生。論語を宇宙第一の書と云はれたれど。其論語の中にさへ。また時の宜きに隨ふべきことあり。沽酒市脯くらはずと云へども。越後のしほ引。周防のさし鯖。串あはび。煎海鼠の類を。學者もごぶへ捨てたることなく。祭の醴より外に。内で酒を造つたる先生も无し。これ唐には。池田伊丹といふ名物の酒屋もなく。又海に遠き國ゆゑ。鹽引類のうまい事をしらず。狗や猪を食ふ故に。其敎もまた異なり。薑をすてずして食ふとは云へども。鱠のけんは食はぬと云が。又日本の禮なり。井戸で育つた蛙學者が。めッたに唐びいきに成て。我が生れた日本を東夷と稱し。天照大神は。吳の太伯に違ひは无いと。附會の說を云ひちらし。文武の道を表にかざり。ちんぷんかんの屁をひッても。知行の米を周の升で。はかり切て渡されなば。其時かへッて聖人を恨むべし。誰やらが制札の多きを見て。國の治らざるを知たりと云が如く。亂れて後に敎は出來。病有て後に醫藥あり。唐の風俗は日本と違ふて。天子が渡り者も同然にて。氣に入らねば取替て。天下は一人の天下に非ず。天下の人の天下也と。へらず口を云ひちらして。主の天下をひッたくる。不埒千萬なる國故。聖人いでゝをしへたまふなり。日本は自然に仁義を守る國ゆゑ。聖人出ずしても太平をなす。唐は文化にとらかされて。國を韃靼にせしめられ。四百餘州が。けし坊主に成ても。みづから大淸の人と覺えて。鼻をねぶッて居るやうな。大ごし拔のべらぼう共なり。日本にも昔しより。淸盛高時が如き惡人有ても。天子にならうとは思はず。日本で天子を麁略にすると。慮外ながら。三尺の童子も。だまッて居ぬ氣になると云ふは。忠義正しき國故なり。夫故にこそ。天子の天子たることは世界中にならぶ國なし。唐の法が

皆あしきには非ざれども。風俗に應じて教へざれば。却つて害あり。然るに近世の先生たち。畑で水練を習ふやうな經濟の書を作て。俗人を驚かすこと。片はらいたきことなり。其の位に在らざれば。其政をはからずと云ふ。聖人のをしへを忘れて。聖人の道を說出すは。相撲取のふんどしを忘れて。土俵入をするが如し。其外浮世の口すぎ學者。管の孔から天をのぞき。火吹竹で釣鐘を鑄るやうな。偏見を說出し。我身も。山の芋が鰻になるやうに。尻の方から二三寸ほども。出來合の聖人に成りかゝッたれば。きりん鳳凰に是人のひけ物でも出さうなものと。自負する學者も世に多し。聖人の教へでさへ。其の道にとらかされし。屁つぴり儒者の手にわたれば。人を迷はすことを多く。なづむ時は大きに害あり。などと云たることあり。大抵尤もなる論でござる。さて又純が。孔子の道を得たりとて誇れること。聖學問答にも見えたるが。その語に。孔子の道。吾が眼に是を見ること。青天に白日を懸けたるが如く。今に至ては。毫髮の疑も无りき。若只今にも。孔子に拜謁して。純が所見を呈露して。其の是非を正さんに。恐らくは孔子も。必ず我れを印可し玉はんと思ふなど〻。甚いかめしく。傍若無人にかきちらしたるが。されども純が人となりを。其の著書どもに依て考るに。孔子の教へを。能く覺りたる男では更に无ければ。是は只人を强ちに。聖人の道に引入たく思ふが故に。かゝる强言をば云ふのでござる。若し强ひて純が人となりの如くにても。聖人の道に叶つたことと云ふならば。彌々聖人の道はあしき道でござる。西土の道の中に。取べき所は律令官職の事を。修飾したる類にて。皆皇國の道の枝葉に。御取用ひなされたる物を。何も其の上を强ふるには及ばぬことでござる。或人傍より參申すには。我が國の制度は。律令をはじめ。大抵漢法を移したるものなれば。其の本に泝りて。律令も何も。彼の國のを讀んで足ることぢや。我が國のを學ばんは。甚た迂遠き事なりと云ふ。己いふ。夫は普通の人は。誰れも一と通りさう思ふことなれど。甚しき非言なり。まづ皇國の律令は。西土の制に依て。立られたる如く見ゆれども。我が國上古よりの御制と。もろこしの國の制とを合せて。ほどよく定められたる物でござる。然るゆゑ

に。彼の國に有る制の條々の。皇國の御制に无きことゞも丶多く有て。又相違のことも少なからず。然れば彼の國のは讀ずとも。皇國のはよく學ばずは有るべからず。其の故は彼の國の制の用ある所は。皆此方に移し取て。あとは用なく。譬へば舊帳の如きものゆゑ。讀まず共宜く。夫は殷の代の制は。夏の制に依て。損益したる物なれども。殷の代に。夏の制を學びたりとも。用なきやうなる物で。周の代に。殷の代の无益なるも。同じことだ。況や漢國と。我國と。風俗善惡も異なることなれば。猶更のこと。孔子も。吾從レ周と申したは。當代のを學ばうと云ことだ。然れども故きを温て新を知るは。學問する者の常なれば。舊を學ばんも惡しとには非ざれども。其舊きをのみ取て。新きを廢るは漫りなることでござる。俗の生もの知なる學者等は。時勢時務を辨へずして。周禮に有る事。禮記に見えたる事などは。其儘用ひても。害なきものと思ふは。甚しき非事でござる。扨また純は。孔子の道を。孰く悟りたる者には非ずと云ふ故は。孔子は。我が國を尊びて中とし。他國を卑めて夷狄と申し。我が王公たる者をば

敬つて。其の惡は申さずして。其の善のみを稱し。我に過ちを受ても。我君の非を蔽し。生涯周室の衰微を歎きて。道の行はれんことを願ひたるは。西戎國にては。最も忠心深き人でござる。然るに純は。凡て春秋の意とは齟齬して。內外の差別を知らず。孔子も。天無二二日一。土無二二王一と云ひ。また爲二人臣一者無二外交一。不三敢貳二君一とも。見えたる物を。吾が大君のおはしますに。漫りに西戎の魁首を。我が仕へ奉る君よりも。尊き物と稱して。我が古へを賤しめ。彼が國を中華と申して。吾が國を夷狄と貶し。國に忠なるべき心は露ばかりもない。孔子も。儒懷二忠信一以待レ擧とも。主二忠信一とも云ひ。禮記にも。忠信禮之本也。無レ本不レ立とも見え。論語にも。君子務レ本。本立而道生など申て。聖人の道にも。本を專らと務むべきことを敎へたることなれども。純が學は。其の大本立ず。又吾が國の事を。知ることを要とせず。漢學の末をのみ執へやうとする故に。漫りに狂言を放ちて。國體を損ずるは。甚く我國の制度に背きたることで。旣に左傳にも。毀レ則爲レ賊とあれば。純は其賊に當りたる者でござる。猶申さば。

禮記に。入レ竟而問レ禁。入レ國而問レ俗。入レ門而問レ諱。と云ふ教へも有り。また孝經に。不レ愛二其親一而愛二他人一者謂二之悖德一。不レ敬二其親一而敬二他人一者謂二之悖禮一。とも見えて有り。純自も悖德は仁に非ずと。聖學問答にも云ひながら。我が國を疎みて。由なき外國を愛するは。悖德悖禮にあらずして何ぞ。假令たまくは惡きことあるとも。我が古を稱して。我國に忠なるべく務むるぞ。學者の本旨にて。孔子の意にも叶ふべく。左傳にも。諱二國惡一禮也とある。杜預が注に。掩レ惡揚レ善義存二君親一。とも見えたり。況んや萬國に優れて。尊き御國に生れて。此國に住み。この國の米を喰ひながら。恩を被きて恩を知らず。食二其食一者不レ毀二其器一。蔭二其樹一者不レ折二其枝一。とさへ云たることも有るものを。純等はも斯くまで國に不忠なるは。讐を以て恩に報ゆると云ふ物にて。最も悼むべきことで。孔子も。以レ怨報レ德則刑戮之民也。と申し置たでは无いか。俗の漢學者ども。とかくに事の跡をば省みもせず。只々書物の上の空論空理のみを道と心得。眞の道の活物なることを辨へず。なんぞと云と。唐虞三代だの。先王の道だのと。そりや何で云かと思へば。四書五經。十三經など〻。凡て周の代に書き記したる書を。規則と致して。世を誹り。道を論ずる事なれども。彼の後漢の司馬徽と云者が。儒生俗士豈時務を知んや。時務をしるは俊傑にありと申したる通り。實は迂遠なることばかり云てゐるでござる。夫は儒者の。御國を誹る第一の言ひぐさに。周の代に定めたる所の。同姓不二相娶一と云ことを則として。たとへば源氏は源氏と婚姻を結ばず。藤原氏は同く藤原氏と。緣組を致すべき事て无いと申して。此れをばきつくやかましく云ひ。又大かたの儒者の。よく申す事だが。其内にも上に引き出たる。太宰純と云ものは。腐儒者の多き中にも。佛者の謂ゆる獅子身中の虫とも云ふべき奴で。少かも孔子の心を心とすることなく。世に御國をわるく云者の多く成たるは。大かた此奴が黨より始つたでござる。それも彼辨道書に。例の如くこの同姓相ひ婚することを云ひ出して。日本に禮義と云ふこと无かりし故に。神代より人皇四十代の頃まで。天子も兄弟叔姪。夫婦になり給ひ候。其の間に異國と通路して。中華の聖人の道。此國に行はれて。天下

の萬事皆な中華をまなび候。夫れより此の國の人。禮義を知り。人倫の道を覺悟して。禽獸の行ひをなさず。今の世の賤しき輩までも禮義に背く者を見ては。畜類の如く思ひ候は。聖人の敎の及べるにて候。押並ての腐儒者の常談で。これは太宰純ばかりでも无く。さ申たでござる。御國を貶しいやしめ云ことの。第一の言ぐさでござる。今までも御國の學問をするさ云ふ輩が。各々これを辨せんとは致したなれども。其輩も。なほ未たかの諸越の國の敎をよしさ思ふ。漢意をまぬかれぬ人々だに依て。これを快く辨じたることが无い故に。彼のくされ儒者輩が。なほ慕つて此事をのゝしる。已にこの太宰純が。これを罵つたるも。辨道書ばかりでなく。外にあらはせる聖學問答。または親族正名などゝ申する書にも。うるさく言痛き程にいひ立て。古への天皇の御しわざを。かしこくも恐れ多くも。禽獸の行ひだなどゝ。忌憚ることもなく誚り奉つてあるが。これは西戎國の。昨日あッて今日はなき世々の王どものことを。彼國の儒者どもが。何くれさへづりまはるを。よき事ときゝ馴てのことで有らうが。皇朝の御事は。天地の始めより。今に無窮に御つたはり遊ばして。この大地球に有りとある。國にたぐひ无く坐ますを。彼から國の系統さだまらず。昨日は耕し泥坊などをした男でも。今日は王となれば。天子と名のるやうな。卑き王どもと。ひとしなみに思ひ奉ると云は。餘りといへば物知らぬ。しれ者のしわざでござる。この頃も。おのが門前を。日毎に佛を念じあるく乞食坊主が。何か冊子やうの物を。いとも大きな聲をして。讀みつゝ行くを。何云ふことかと此れをきけば。人皇何十代何某天皇が。しかじかの罪によッて。無間地獄へめしとられ。牛頭馬頭の手に在て。しかじかの罪に行はれしなどゝ云て。さらに憚りもなく呼はり行くに。覺えず總身に汗を流し。耳を覆いだ事ながら。此れらは出家のことで。已に其道にも人非人とさへ云ほどのこと故。かやうのことなど云て。米の一撮も多くもらはにやならぬ。身の上だに依て。赦さるゝ方もあれど。孔子の敎を弘むるとか云て。さわぐ者の。賤きおのが匹夫の身をもかへりみず。己が生れて居る國の。しかも此御國の米を食つてゐながら。この御國の大君をしも。かやうに詈り奉る

と云は。其をしへの據とする。孔子の本意とは。甚だ違つてをることで。夫は論語にあることだが。魯昭公と云は。彼周公旦が子孫で。すなはち孔子のをる國の君なる所が。同姓の呉といふ國の女をめとッたでござる。こりや周の代に。同姓を娶らずといふ。定めのある所に。かやうのことで。其代の禮に違つてをること故。ある人が。此事を。孔子が何とあいさつするかと思つて。何げなく昭公は禮を知て居られるかと問ふた所が。孔子の答に。禮を知て居ると云たでござる。其時に。かの問ふた人が外へ出て。孔子は物を知らぬ人だと。云たと云ふことでござる。孔子は彼昭公が。同姓たる呉國と縁組したる事は。其代の禮に違つてをると云事は。承知して居ながら。人が問へばとて。我が居る國の君のことを。禮を知らぬとは云ひかねて。自分が物知らずと云はれても。君の非事をば。人にいはぬとの意で。右の通り引かぶッて答へたものでござる。これは論語に有まする。サこの通り。たとへ悪いことが有ても。其國の君の事をば言はぬと云が。孔子の本意だもの。こゝらを何と心得てをるか。又禮記の文にも。居ニ其邦ニ而不レ訕ニ其大夫ヲ一と有て。君はさておき。其國の政をとる人をさへに。訕るなと云が定めだものを。何なる儒者のひが心得か。すでに孔子も。惡下居ニ下流ニ訕レ上者上と云て。俗の儒者どものやうに。下として上を訕るをば。きつく憎だものでござる。かやうに己が常にいひさわぐ。諸越の經書と云物の中に申してあることを。辨へぬと云は。俗にいふ論語よみの論語しらずと云は。直に儒者のことでござる。さて御國の古へに。同姓は元より叔姪をかまはず。婚せられたることを。儒者の禽獸の行ひと云て訕ることは。何を據として云ぞとなれば。かの周武王が弟の。周公旦といふ者の定めに。同姓娶らずといふことのあるを法として云のでござる。近頃も市川多門と云ふ儒者が。わが翁のかゝれたる。直毘靈といふ書を破るとて。麻賀の比禮と云ふ書を著して。例の如くもろこしの敎へを稱あげて。周公旦が百世までも。同姓を娶らずと定めたのは人島と畜生島の堺に。銅柱を立たるも同じことで。御國の後世にも。同姓婚することを忌むやうに成たるは。儒學の功の著きのだなど云て。甚く御國を賤めたでござる。夫をわが翁

が。また〳〵葛花といふ書を著して。つぶさに辨じ置れましたが。今は其趣と。なほまた篤胤が辨をも添て申さうならば。先つからずきの輩が。御國を强て賤しめんとして。何ぞと云ふと。古へ兄弟が婚したと云ことをいひ立て。鳥獸のふるまひだと謗るを。御國の事をおもと學ぶ物識人も。これをば實に快からぬことで。御國のあかぬことだと思つて。かにかくに云ひ紛はして。未ださだかにこれを辨じた物の无いのは。かの諸越のをしへ。周公旦がさかしらの定めを。きッと致したる當然の道理のやうに。思ひ泥んでをるからの事で。猶もろこしのをしへに。諂ふ心があるに依てのことでござる。もし彼の國の教へに諂ふ心がなくば。彼の國の定めと違つてをればとて。何事がありませうぞ。抑々御國は神代の昔より。兄弟にはらからといふと。ことはらと云の差別が有て。そのはらからといふは。同母兄弟のことで。これは殊に親しく。またことはらと申すは。異母兄弟のことで。其の同母兄弟のやうでは无く。甚だ疎々しくて。互に大きに差別の有たことでござる。其の同母兄弟の親しき故は。古へはこゝとかしこに妻をもッて居たるもので。それはたとへば大穴牟遲神樣は。出雲の國に御本妻たる。須勢理姫命のましますが上に。因幡の國の八上姫へも御通ひあそばし。また今の越前越後は。いにしへは一國で。こしの國と云たが。其のこしの國にも沼河姫と申て。大穴牟遲神の御通ひあそばしたる。姫神がおッて。かやうにこゝかしこ國を隔てさへ。有たること故。その御生みなされた御子たちが。各々それ〳〵の母親神の許に御出なされて。これは親しく。其父神が。なほ外にもかよひ給ふ所が有て。夫にも御子のおはしますとは。しらで坐ます程の事。よしや。知つたる所が。これは腹が違つてをるに依て。異腹と申して。はらからの兄弟とはとんとわけが違つて。いはゞ他人として有々ものでござる。此れは神代ばかりで无く。中頃保元平治以前までも。さうで。近く伊勢物語やうのものを見ても。しれるでござる。かやうに父は。彼處やこゝへ通ひ住て。其の母と一所に。つね居ると云ではないに依て。母よりは親みもうすかッた物で。既に神代の時分には。おやと云は。おもに母の事を云て。子に名をつけるから。育てるから。一切

の世話をやいて。行末を見立るも。皆おふくろのした物でござる。これは眞の事實。人情の上でも。さういかにャならぬことで。夫は父と母とで。此の身は出來るものながら。其の父と母とで。此の骸の出來たものぞと云ことは。そりや余程智慧づき。自らも子をこしらへる程にもならねば。知れぬこと。母には現在に生出され。其の乳を呑み。其の懐で育ちあがるから。こゝで父よりは親くいかニャならぬことで。これが自然の人情で。御國の古へばかりで无く。萬國おなじ事で。天竺なども。母をば父よりは殊に親み。すでに釋迦すら。佛經の上で見ても。父淨飯王よりは。母の摩耶夫人の方が。したしく見えることでござる。又からとても。さうで有たる故に。その過たるを矯んが爲めに。父よりは遙に母をおとして。卑きものだといふ理窟をこしらへて。示教へたものでござる。母は畠で。父が種をおろすといふ事。どうかさうらしく思はるゝなれども。此れはもと諸越の古へ。さかしら人の云ひ出したことで。自然の人情には背けてをるから。眞の理窟ではない。こりや矯すぎて。却つて枉たと云もので。眞の道にかなはず。親ある者の云ふべきことでは无いでござる。序でだに依て御咄し申すが。これは朝鮮の南秋江と云ものゝ。鬼神論と云ふ書にあるが。李子と申す學者に。或ものが問て。すでに人於レ母有レ連ニ骨肉一乎と問ふたれば。李子がいふに。子見ニ五穀一乎。土にうゑて生長するなり。其の枝節根葉みな種に出て。一も土に屬する物なし。種者父也。土者母也。この故に先王の制。同姓の親。百世不レ婚して。母族は親なし。それ母は功父と同じくして。骨肉を連ねずと答へたる所が。その者が歸つて。其の母に云ふには。きのふ李子にきく。母我れに恩德なしと云て。母に事へることが。粗略になツたと申すことが有るが。漢土のさかしらに。多くこんな類ひが有て。其の内母を卑めることなどは。人の子として。眞の道をもたごらふと思ふものは。聞くさへ否なことでござる。抑父と母とは。同じなみに重きものだに依て。父母ともに同じ兄弟と。父ばかりが同くて。母のことなる兄弟とは。おのづから親疎の差別がなけりやかなはぬでござる。もろこしの國では。右の同母と異母と

の差別を立てず。みな兄弟と云てをるでござる。そもし〳〵御國の古へは。その同母兄弟は。右申す通り。おなじ母の許に在て。親しく。さもない所が。これは決して相婚することなく。異母の兄弟は。右申す通り。いはゞ知らぬ中と云ふ程のことで。天皇をはじめ奉り。大かたよの常に致して。今の京に成てのこなた迄も。すべて忌むことなく。但し貴き賤しき隔はうるはしく有て。おのづから亂れなんだものでござる。この同母兄弟の婚することはいむで。異母兄弟は忌まぬのも。わが皇御祖神の。御立置あそばしたる道だに依て。後世の凡夫の小智をふるッて。とかく議り云べきことでは无いでござる。同母兄弟は婚せずと云が。皇御祖神の御定めなされたること故。もしひよッとこの御定めに乖いたことがあると。神のきびしく其のしるしを。御見せなされたものでござる。それは日本紀に。允恭天皇の廿四年夏六月。御膳所羹汁凝以作レ氷。天皇異レ之。卜ニ其所由一。卜者曰。有ニ内亂一。蓋親々相姧乎。時有レ人曰。木梨輕太子。姧ニ同母妹輕大娘皇女一。因以推問焉。辭既實也と見え。また古事記を案ずるに。この太子の。此の時の御不義をにくみ奉つて。允恭天皇の崩御あそばしてのち。群臣百官。この太子にそむき奉つて。穴穗皇子と申すへ從ひ奉り。終に輕太子を。伊豫國へ放ち奉つたほどのことでござる。この一事を考へても。上古より。かたく同母兄弟の婚をいみたることも。また神の嚴くおいましめなさるゝことをも。知るが宜いでござる。此くの如くいみじき驗をさへに。御見せなされたものでござる。然るに儒者が。こゝらの訣を辨へも致さず。御國の古へを畜生島の行ひだなど申すは。皇御祖神をも憚り奉らず。何を據に申すことか。更に其の據の无いことで。只もろこし周の代の。同姓不娶の定めを。則と致して云のみのことで。この定めを。天地自然の公道の如く心得。世の人もまた皆さやうに思つてをることなれども。夫はかの國の定めに諂ひたるもので。元より必然るべき道理は更に无きことでござる。もし禽獸の行ひに似たるを嫌ふといふ時は。夜は寢て朝は早く起るも。禽獸と同じことだと云て。朝寢するが宜からうか。又子を憐むことも。禽獸の行ひだと云て。あはれまずして置くべきか。漢國には貴き賤しき差別なく。定りたる

君も无く。只その時々に。彊い者が君となり。またはは賤き者の女をも王の妻とし。王の女をも賤夫に嫁する類。すべて上下の別ちがない。此れらをこそは。殊に畜生島の有状とも云べきことだが。其の悪風俗をば言ひも出さず。たゞ同姓婚することをのみ云ひ立るは。いとも頑なることでござる。諺に人の一寸は見ゆれども。我が一尺は見えずと云は。儒者どものことでござる。又百世を經ても。同姓の婚を許さぬと云定めは。周公旦が。さかしらを以て始めたるもので。漢國にても。周の代の私事でござる。殷以前には。此定めが无かッたに依て。舜は堯が女を娶つたが。堯は顓頊が孫で。舜も顓頊が五世の孫なれば。同姓なる中にも。近き親族で有た物でござる。然るに周公旦が銅柱を立添へたるは。後の世の人に己が功を示して。堯舜に勝つたと云はれん爲か。また國の風俗の猥りがはしきに依て。さう嚴しく禁めたるか。もし己が功を示す爲でもなく。また國風の亂りがはしいでも无けりや。堯舜夏殷の代の定めの儘においたとて。何の害もないことでござる。若し又同姓婚するが。實に非事ならば。堯舜が何とて是れを忌まなんだぞ。何れにしても。此の銅柱が心得ぬ事でござる。もし又近き親族でも。姓を異にする時は苦しからずと云はゞ。兄弟にても。異なる姓を稱する時は苦しからぬにや。抑同姓異姓の事。御國は殊に先祖の系統を正すならひでさへ。後世民間に至つては。わづかに五世十世の先をさへ。知らぬ者が多いでござる。まして系統をさのみ正さぬ漢國では。後世民間に於て。人毎に數十世の先をよく知て。別つべきやうが无い。たゞ當時に稱する所の。姓の文字を以て。別つより外は无いことだに。其も數十世を經る間には。或は異姓が混じて同姓に成り。或は同姓も分れて。異姓になりなどする類おほく。或はまた稱する文字は同じけれども。本より異姓なるも有り。又稱する所は違つてゐても。實は同姓なるも有り。かやうにさまざまの紛れもあれば。實の姓の異同は。何を以てよく辨へ知られうぞ。たとひ偶に男女のうち。一方によく其の先を知てゐても。一方に知らぬ時は。いたづらごとだ。然るにたゞ當時稱する所をのみ守つて。その異同を定めるならば。或は實に異姓で有るをも知らずして。徒らにこれを

避け。或は又思ひの外。近き先祖まで。同姓で有つたを。知らずして。婚する類ひなども多かるべきことでござる。又右の類のまぎれまでをも待ず。即ち周公旦が。己が子孫の魯の昭公は。同姓の呉の女を婚したが。魯は禮義正しき國だと云さへかくの通りでござる。又齊の襄公は。妹の魯の桓公が妻であッたに通じたが。是は殊に兄弟なるのみならず。人の妻でさへ有た上に。剰このことに依て。其の夫桓公を殺したでは无いか。是らは近き周の代の内にて。諸侯さへかやうに有たなれば。民間はまして思ひやるべきこと。なほ夫より後々は。かやうの類。はなはだ澤山に有たでござる。然ればかの周公旦が銅柱は。これ何の益にもたゝぬ徒らごとでござる。儒者はかやうな所を辨へも致さず。只みだりに一向によき事とのみ思て居るは。例の能書を信ずると云もので。可笑きことでござる。又御國の後世。兄弟の婚を忌むことに成たるを。儒學の大功がましく云て居るも。をかしなことで。もし百世を經ても。同姓は婚せぬならひに成たならば。さやうにも云べきことなれども。纔に兄弟をのみ忌で。從父兄弟から外は。少しも憚ることは无いが。此れをかの周公旦が定めにて見れば。百分が一にも足らぬことなるを。かやうに事々しく云てをるは。譬へば毎日百枚づゝ寫し物せよと云ひ付たるに。其子わづかに一枚づゝうつして。我は父の仰せの通りに。寫し物爲たりと云て。手柄がましく誇ると同じことでござる。父が是を聞てよしと云はうか。かの孟軻といふ男は。五十歩にして百歩を笑ふをさへ。取らなんだに。此れはちやうど。九十九歩にして百歩をわらふ類でござる。然るを後の世には。かの漢國の定めを少ばかり守るやうにて。異母なるをも兄弟と云て。婚せぬことに定つたなれば。今世にして夫を犯すこそ惡けれ。古へは古への定まりなれば。異國の制を規として。云べきことではないでござる。儒者どもゝ。此のことをよく考へわたして。古へは古への事として。恐多くも。西戎國の中古よりの制を以て。とかく云ふべき事では无い。また今の世は。今の御制度を堅く守て。犯すまじくかまふべきことでござる。」

さて堯舜が受禪。伊尹が輔佐。湯武が放伐の。世々に毒を流し害と成たることを。次々申さば。この間

申す如く。周のいッち末の王であッたる赧王が。秦の昭王に降參致して後。なほ其の頃の諸侯ども。彼のいはゆる六國各々相戰ひ。國土を爭つて居たる間が三十五年。國には王らしき者もなく。其の內追々秦に亡されて。遂に秦の代と云に成たでござる。其の始めて天子と名告たる。王が名を嬴政と申て。これは其の父なる莊襄王といふが。名を子楚と云たが。いまだ太子に立ぬまへに。趙といふ國へ。人質に往て居たるとき。呂不韋といふ大賈人の金持が。己れ女を姙ませて。其のはらみ女を。莊襄王に送て。その生だる子が。即ちこの嬴政と申す王で。實は呂不韋が子でござる。さて呂不韋は。大金持のこと故。金六百斤を。子楚が番をして居る者どもに取らせて。ひそかに子楚を逃出させ。秦の國へ歸らせ。又秦の昭王が后なる。華陽夫人と云に。手を入れて。この子楚を太子に立るやうに取持へ。位を繼せ。これを莊襄王と云。かくて莊襄王が位を繼では。さしづめ政は其の跡つぎとなる順で。太子に立ち。扨呂不韋は。右の功に依て。丞相と云て。すなはち大臣の位と成たでござる。元来商家だによッて。食客三千人をおき。夫らに聞たることゞもを。かき集めて著したる書が。今傳はる呂覽。また呂氏春秋の二書でござる。扨莊襄王子楚が死でから。かの政が其の跡をついで。謂ゆる秦の始皇と云はこれでござる。これが代に。右云如く。六國の諸侯どもを。盡く打亡して。國を一統して。夫までは封建と云て。かの齊の國だの。魏の國だの。楚國だのと云て。いはゆる諸侯どもが。各各國々を持て。皇國の大名がたのやうで有つたるを。皆うち亡して。郡縣と云にして。盡く秦の物となし。代官やうの人をくばり置て。その上り物を。皆取り立ることに爲出したでござる。此れより以來。今の清國にいたるまで。其の制を變せずあるでござる。此れは皇朝に於ても。天智天皇の思召し立せられて。其の御代までは。神代よりの儘に。諸國に國造といふが有て。さんと周の代までの封建の制と同じことで有つたるを。この始皇が始めたる。郡縣の制と云になされたるが。纔に五百年ばかりが程に。やう／＼頽れて。保元平治元曆文治のほどより。天下諸國の有りさまは。また舊きに立ちかへり。自からまた上代の形に。なり反つたでござる。さて政は位について。二十六年に。臣等を集めて云やうは。六國の

王威くその辜に伏して。國中大きに定つたれば。名號を更め成功を稱して。後世に傳へんと思ふに依て。その帝號いかに改めん。評議せよと云たでござる。こゝに丞相李斯といふ者定めて云ふには。昔五帝は。地方千里ばかりならでは服せず。諸侯も或は朝し。或は朝せぬなど有て。制することもならぬ程のことなりしを。今陛下海內を平定して。郡縣となし。法令一統に定まり。上古より以來かやうの事。未だ嘗てあらず。五帝の及ばざる所。これに因て議せんと云て。評議したでござる。何にもこゝに李斯らが云たる如く。五帝三王などが世には。國土にあらゆる國々を。歸服させたやうに。儒者等は云てをるが。其の治めて居たる所は。九州と云うて。彼謂ゆる中國にある州を。九つすべ持て。その餘は服すること能はず。この秦の國は西にある大國。また吳國楚國などは。東にあたる大國で。なほ南にも北にも。その中國に從はぬ國が有て。かの五帝三王などの世には。やう〳〵から中を三分して。その一つを有ち居たるくらゐの事でござる。かく秦國や吳國楚國などは。親しく服從せぬに依て。春秋にも。これらの國々をば。周に貢でもおくれば。諸侯のあしらひに記し。然らぬをりは。夷狄のあしらひに記したものでござる。所を秦の始皇は。その夷狄の國から起て。かの五帝三王が。もてあまして居たる。東西南北の。蠻夷と云國々をさへに。馬蹄の至る所は從へたから。其の臣等が。始皇が德を稱て。五帝に勝つてゐると云たは。尤もなことでござる。此れにつけて。謝肇淛が。五雜俎天の部に。愉快なる論があるから。各々見らるゝが宜いでござる。さて右の如く評議の上。自ら其の德三皇五帝にも。勝つてをるといふの義を以て。三皇の皇の字と。五帝の帝といふを取り合せて。皇帝といふ號を始めて立て。その始めの皇帝と云の義を以て。始皇帝とは名告たもので。後世の世々の王どもの號を。何皇帝と云ふことは。是より始まツたことでござる。また命を制といひ。令を詔といひ。天子自稱して。朕と云などを始め。種々の定をたて。又このまへ周の代には。代が替ては。その先の王の行を以て。諡號をつけて。譬へば西伯昌は。天地を經緯するの德があるといふで。文王と諡し。また殷王辛は。殘レ義損レ善と云の

義で。紂王と謚するなんど。かの周公旦といへる。さかしら人が定めおいたる所を。始皇がこれを止て。そのいへる言に。太古には謚と云こと无かりしに。中古より死して後。その行ひを以て謚を定むること。此れは子として父を議し。臣として君を議するに當るから。朕は取らず。今より以來。謚することを止めて。朕を始皇帝と成し。後の世繼をば。二世三世と云て。千萬世に至り。これを無窮の法となせよと定めたでござる。此れら殊におもしろき見解でござる。尤周公旦が。この謚法を制つたのは。その謚の善惡に因て。後世に愧ぢて。あしきとは爲すまいと云ふ。誡の爲とて致したることだが。これは吾か友。石原正明が云た言に。その行迹に。正しく善からぬことがあればとて。父のため君のため。あしき謚をおくることは。忍び難きことで。かの孔子の語にも。子は父の爲めに隱すと云こともあり。又行迹に付て謚することは云へど。其の子孫の受ついだには。わろ者にも。よき名をおくり。又祚を吾がすぢに傳へざるをば。よき行ひあるも。あしき謚をおくることも有るから。何も勸誡にはならず。無用の詐なりと云たは。尤なることでござる。また御國において。上代に謚を奉りたることは。別に説のあることでござる。何にしても始皇は英斷の人でござる。扨此の始皇が始めたる事どもは。悉く先代にかはツて。何事も一きざみづゝ。我が事をば尊く事を定めたるは。いかにと云に。秦は右いへる如く。周の代には。えびすと立て。あらゆる諸侯どもゝ皆いやしめ。國中の民も。秦をば餘の諸侯どもと。等く見ぬやうに有たる所が。國が強くて。斯くもろこし中を切從へたるから。王と成ても。國中の者どもの卑しめんことを察して。何もかも尊げにしなして。其の威を示したものでござる。これは今の俗にも思ひ合さるゝことで。とかく本のいやしき者などが。經上りもすると。本より尊き人よりは。殊更に高ぶる者だが。其と同じわけでござる。況して是れより後の世々の王どもは。別して高ぶりがつよくなる。夫れはかの國世々の史を見て。其の狀を知るが宜いでござる。斯くてくさ〴〵新法を立たるに依て。其の世の儒者ども。盧生淳于越など云者どもが。例のこましやくれな聖人理窟を云て。始皇がしざまを誹謗したるより事起

て。とかく儒生らが當時をそしるは。詩書百家の書ごもが。世に傳はるからのことだと云て。秦の國の記録と。醫藥の書。卜筮の書。種樹の書ばかりを遺して。これを燒捨させ。古へを以て今を非とする者は。族せんと云ひふれたる所が。倘かれこれいふ儒者ごもが有る故。そいつら四百六十餘人を捕へて。盡く生ながら坑に埋めてしまふたでござる。かゝる行ひは。何にしても暴虐なことでは有るが。實は故有ることで。其の爲方がをかしいでござる。かの川柳點に。「秦の儒者命なるかなと穴でいひ。」と云たは。此の事だが。いかにも儒者らは。天なるかな。命なるかなのと云ことは。よく云もの故。命なるかなと。泣わめいたで有らうでござる。今とても。とかく腐儒者と云ものは。當時をそしり。國をそこなふことを言ひさわいで。憎きものだが。あはれさやうの國を賊ふ。くされ儒者と。神の道をそこなふ法師ごもと。俗の狐醫ごもをば。始皇をたのんで。埋殺してもらひたいものでござる。扨この時。始皇が斯く書を燒き。儒を坑に埋たるに付て。後世儒者らが何ぞと云ふと。始皇が。あらゆる書を盡く燒きつくしたるやうに云ふを。然らずとて。千百年眼といふ書に論へる趣きが。尤もなることだ。夫は始皇之始非レ不レ好レ士。亦未ニ嘗惡レ書。云々。其焚レ書之令。以ニ淳于越議ニ封建一也。また儒者を坑に埋たのは。盧生が輩その世の事を議したるに依て。實は激してしたることと。夫はいかにと云に。この時陸賈酈食其が輩は。みな秦の代の儒者で漢につかへ。また陳勝と云が起つたる時。秦の二世皇帝が。博士儒生を召て。其の故を問たれば。春秋の義を引て對へたる者。三千餘人有つたとある。されば秦の時に。かつて儒生と經學とを用ひなんだと云ではなく。また後に叔孫通といへる儒者が。漢に降るときに。弟子百餘人をつれて有たと云ことだから。儒者と書籍を皆廢てしまツたのではない。然るに後世古書に明かならざる所のあるをば。悉く秦火々々と云て。始皇がせいにするが。古書の闕けてゐるのは。本より闕て有つたのだと云て。こまかに論じてあるが。尤なことで。ちんぷんかんぎらひで。焚いたのでは无いでござる。さて始皇は。その三十七年といふ年に死んで。その死ぬ時に。嫡子扶蘇と云に遺言の書をのこし。次の位を繼せんと

したるに。その臣李斯趙高などいふ輩が謀て。扶蘇に死を賜ふとの遺言なりと偽て。これを殺し。其の弟の胡亥と云を立て。これを二世皇帝と云でござる。これが代に成て。陽城と云所の農夫。陳渉と云を始めとして。其の餘にも謀反人おびたゝしく起りて。中にも楚といふ國より。項羽といふ者起り。また沛と云の地の。泗上の亭の長と云て。御國で云はうならば田舍の名主たるものに。劉邦といふ者も。謀反を起し。兩人相謀りて。かの六國の時分の。楚國の子孫を取り立て。これを義帝と稱し。これに仕へて。各々秦を攻めて寇をなす所が。秦には。かの趙高が丞相の位にゐて。逆威を振ひ。王は有れども無きが如くにいたし。此れは。かの俗にも人の知つてをる。鹿をさして馬だと云て。其の威勢をためし見たる男でござる。かくて此の者。終にその君二世皇帝胡亥をば。位に即て三年目に殺して。かの前にころしたる扶蘇が子の。子嬰と云を立て王と致し。これを三世皇帝と云ふでござる。この王が位につくとき。謀て趙高をとらへ。車裂の刑に行ひ王には成たが。その四十六日目に。かの劉邦は。秦の都に攻入たから。三世皇帝子嬰は。降參に出たる時に。追々かの項羽なども攻入て。子嬰及びその眷屬をみな殺して。秦をば亡してしまッたから。始皇帝が國中を一統して王となり。わづか三代。十五年ならでは續かなんだでござる。これは御國では。孝元天皇の御代。九年に當る年のことでござる。かくて劉邦と項羽とは。秦を亡して後。その中宜しからず。其のうちに項羽は自立して王と稱し。その王義帝をば殺したでござる。そこで劉邦もまた漢王と稱し。互に國王とならんことを。爭つたる間が三年で。その四年目に漢王劉邦は。つひに項羽を亡して國中を一統致し。王となッたでござる。漢の高祖と云は。この劉邦がことで。本とは村の名主で。是より後を漢の代と云でござる。扨つい云ひおくれたが。項羽が身の上をも少しく申さう。項羽は本名は項籍にて。字を羽と云ゆゑに項羽と云が。下相と云處の人にて。世々楚國の軍將で。項と云地に封ぜられたる故に。姓とした物で。少き時をぢに項梁と云が有て。これは目上の者ゆゑ。項羽に書を學ばせたる所が。とんと成ず。劔術を習はせたが。夫も學ばず。そこで項梁が腹を立

て叱りたれば。羽が云には書足以記名姓而已。劍一人敵。不レ足レ學。學萬人敵と云て。兵法を學んだでござる。梁は腹たちながらも。心の中には。其器量に感心したでござる。扨この後段々勢强く。實に大勇豪傑の者ゆゑに。高祖と計て秦を討ち。天下に勇威を顯はしたなれども。運も无く。又拙い所も有たる故に。終に高祖に攻られ。烏江と云處にて。自から刎て死だでござる。色々云べきことはあれども。隨分氣味のよい男でござる。さて漢の代となッて後も。謀反人のたゆることなく。高祖劉邦が次を惠帝と云。この王甚だの柔弱もので有たる所が。その母呂后。即ち高祖が妻だが。大變なる惡婦人で。殘忍兇惡なること云はんかたなく。其の大略を云はば。みな嫉妬から起る事だが。夫はまづ高祖が死ぬると直に。その妾戚夫人といふが生だる子の。趙王如意と云をころし。扨戚夫人が手足を斷り。眼をゑぐり出し。耳を燒き。瘖藥を飮しめて。屎つぼの中へ入れおき。これを人彘と名づけ。その子惠帝が。常に其惡行を諫むるを。うるさく思ひ。これを見せたる所が。惠帝は大に泣いて諫め。迚もこれは叶はぬと心得て。位を去る心になり。日夜淫樂に耽り病を發したでござる。又この惠帝が腹がはりの兄。齊王劉肥と云者を。惠帝が敬ふを見て怒をなし。酒に毒を入れて。それを殺さんとしたる時に。惠帝はその事を知り。自分が其酒を呑まんとしたれば。呂后は驚いて。その巵をこぼしたでござる。そこで齊王劉肥は。恐れて國へ逃歸る。かやうの事どもを氣にして。惠帝はとんと死んだ所が。呂后は少も泣かなんだといふことでござる。かくて我が親族呂氏の子を。惠帝が子だと詐つて。其の母をころし。位につけたる所が。やゝ長じて其の事を知り。呂后をうらむることを云たに依て。後の害を恐れて。これを殺し。また呂氏の子を取て。位につけたでござる。これに依て呂后が一族。我儘を働くことといふばかりなく。また趙王劉友といふ者。これも高祖が子で。呂后が一族の女を妻にして居たが。この人外の女を愛して。その妻をばさしも愛せなんだる故。これを嫉で。呂后に讒言したる所が。則ち國から召よせて捕へおき。食を與へずして殺し。また梁王劉恢といふ者と。其愛妾どもをも。かやうの訣で殺し。また燕

王劉建といふが子をも。殺したでござる。かくて八年といふ年の三月。祓をして還る道に於て。蒼犬のやうなもの。呂后が掖に據てあると見えて。忽然として見えなく成たる故。これを占はせたれば。かの趙王如意が祟を爲すのだといふ。呂后は。これより病ついて。掖を痛がり。とんとこれで死んだでござる。實にけしからぬ女で。かの韓信なども始め。多くの功臣をも。この女が殺したでござる。とかく女の性と云ものは。嫉妬の深いものだが。夫にしても御國には。かやうの女の有つたことは。いまだ見聞に及ばぬことだが。諸越には。いくらともなく。この呂后がやうな女は有たことで。それは五雜俎の人部といふを。披いて見るがよいでござる。さて呂后が死んで後に。もろ〳〵漢の舊臣等が打寄て。呂后の一族を亡し。高祖が二男。劉恒と云を立て王と爲し。此れを文帝と云ふ。此はかの俗の二十四孝と云ものにも出て。漢の代では名高き王でござる。これにつけて千百年眼と云ものにいへることは。漢文帝節儉。身衣二弋綈一。集二上書囊一爲二殿帷一。所レ幸愼夫人。衣不レ曳レ地。此三事以二人主一行レ之。可レ謂レ難矣。然賜二鄧通一以二十數鉅萬一。又以二銅山一與レ之。又何也。と云てあるが。これは尤なる論で。いかにもかゝる儉約をするに合せては。そのおかまなる鄧通に。かやうの莫大なる賜物は。あたらぬことでござる。この王をば。儒者はしたゝかほめることだが。甚のこしらへ物で有つたでござる。なほ云べきことはあれども。此れに准て知るが宜い。とかくもろこしの賢人と云には。つくり者が多くて。うるさいでござる。扨この文帝より九代目の王を。平帝といふ。尤この九代の間にも。穩かなることは甚だ少く。いつも世は亂りがはしかッたことだが。其平帝が時に。王莽といふ臣有て。かの伊尹周公などいふ。擬聖人どもの眞似を見事にいたし。攝政と成て。その人となりを飾り。よく人をなつけ。遂に平帝を毒殺し。二歳になる小兒の。しかも平帝には甚だ血脈の遠きを立て。おのれは假の皇帝と稱し。夫より三年目に。かの堯舜が受禪のまねをして。其れを例にひき位をうばッて。眞の王となり。其の代の號をば新と云たでござる。是に於て漢の高祖が國は。一旦亡びたでござる。夫までの代を。西漢の代と申すでござる。御國

では垂仁天皇の御代しろしめす。三十八年にあたる年でござる。さて王莽は。國王の位をぬすんで。國中を從へたること。十四五年ばかり有て。また謀叛人が夥しく起つて。其の內漢の宗室だと云ことで。民間より劉秀と云ふ者うつて出て。こんと王莽をうち亡し。王位につき。これを光武皇帝といふ。これより後漢の代と申す。これは御國では。垂仁天皇の五十四年のことでござる。堯舜の受禪。伊尹周公旦が輔佐といふことの毒の流れは。そも〳〵これが始りで。王莽は斯く國を取り損つたるに依て。これを世々の儒者どもが。賊と云てにくがることでござる。然れども王莽ばかりで无く。此の後に代々のかはりめが。悉く此の術を以て王位を奪ひ。國を盜んだ物だが。その盜みおほせたる者をば賊と云はず。これに付て直日靈に。異國は本より主の定まれるが无ければ。賤人もたちまち王になり。王も忽たゞ人にもなり。亡びうせもする。古へよりの風俗なり。さて國を取らんと謀り。えとらざる者をば。賊といひて賤しめにくみ。取得たる者をば。聖人と云て尊み仰ぐめり。されば謂ゆる聖人も。たゞ賊の爲とげたる者にぞ有けると。師の云はれたるはこのことでござる。

扨この光武帝が次の王は明帝と申て。これが時に佛法が始めて漢土へ渡つたでござる。これより七代目の質帝と云は。その臣梁冀と云者の爲に毒殺せられ。夫より四代目の王の名を劉辨と云たが。董卓といふもの。又かの伊尹が例にならッて。其の位をおろして。劉辨が弟の劉協といふを位につけ。遂にはおのれ位を奪はんとしたるが。司徒王允と云もの謀て。呂布といふ者に殺させたでござる。さて劉協位に即て。これを獻帝といふ。これが時に。蜀劉備。字玄德。吳孫權。魏曹操といふが出て。三國にわかれ。其の中に曹操といふは。佞奸謀略たくましく。文王武王にもをさ〳〵劣らぬ大賊で。獻帝を守立てゝさしはさみ。それを尊ぶげに見すれども。實は王位を盜まんとする。また吳孫權も。國王とならんとして爭ふが中に。蜀劉備ばかりは忠々しき人で。これはもと民間に居て。履をうり。むしろを織て。業として居たる匹夫なれども。その遠祖は前漢の景帝が子の。中山王劉勝といふ者の子孫だと云ことで。それ故漢

室のおとろへを歎き。再興せんとするの志が有て。大に心勞し。其の臣にも諸葛亮字は孔明。また關羽張飛趙雲などの類ひ。すぐれた者も有たなれども。はか〴〵しき事もなく。其の中に曹操はます〳〵逆威をたくましくして。獻帝を蔑如にし。其の子曹丕が代に。つひ〳〵かの堯舜が受禪の例を以て。獻帝にせまり位を簒つて。程なくこれを殺したでござる。この曹丕が世の號を魏といふ。光武帝が王莽を亡して位に即いてこのかた。王が十二代。年數が百九十餘年つゞいたでござる。御國では神功皇后の。二十年にあたるでござる。

さて蜀の劉備は。これを傳へ聞て。すなはち漢の宗室のこと故。その後をつぐ由にて皇帝と稱し。蜀漢と云はこの劉備が世のことでござる。こゝに於て。呉孫權もみづから皇帝と名告る。これを三國の時と云つて。各々我こそは天子よといふけれども。實は無證據なことで。いはゞ言ひがちなることでござる。夫ゆゑ後世。この時代の史を記す者の心で。或は魏は禪をうけたに依て正統だと云ひ。蜀に心ひく輩は。漢亡びては。劉備は漢の宗室だに依て。正統だと云ひ。かれこれ未だその論判のひぬことでござる。さて劉備が次は。その子劉禪といふが繼だが。これは甚だ愚昧なる王で有たなれども。かの孔明はよく劉備が遺言を守り。それをかしづき忠義を盡し。國を一統せんと心を碎き。入ては丞相となッて國を治め。出ては將軍と爲りて魏國をうち。千辛萬苦したなれども。運つたなくして其の志をとげずに死んだでござる。諡して武侯と云。さて孔明が死では。國の勢ひ甚だ衰へ。程もなく魏の兵に攻入られて。後主劉禪は降參したる時に。孔明が子諸葛瞻と云ものも。手痛く戰て討死し。さて蜀漢の世は二代。わづかに四十二年つゞいたでござる。この亡びたる年が。御國では。神功皇后の攝政六十三年にあたる年のことでござる。扨この蜀に仕へたる孔明といふ人は。その軍術謀略に長じ。且その忠義德行のほどは。犬打わつぱもよく知て云通りのよき人で。この人の傳は。委く陳壽が三國志。朱子の通鑑などに見えてあるが。その骨とある事實を撰び。よく評したるは。淺見絅齋安正の。靖獻遺言といふ書に因て見るが宜いでござる。其かける出師の表といふ文を讀で見ま

するに。これは諸越の人も。孔明が出師の表を讀で涙を落さゞる人は。その人必ず不忠の人ならんと云たる如く。おぼえず身もふるはれ。實に〱涙のこぼれるほど。實意のよく見える文で。此の人生涯の行ひは。から人ながら。篤胤實に間然すること能はず。孔子の後。たッた一人の人と思はるゝ。かのから人のよく云説に。五百年ほどづゝに。聖人を出すといふが。この説はいふに足らねど。しばらく依ていはゞ。孔子の後には孔明が。そこらに當るでござる。諸越人の言に。孔子以前無孔子。孔子以後無孔子。と云たが。篤胤は孔子以後。唯有孔明。と思はるることでござる。この頃五雜組を再覽すれば。才足以撥亂者。多驁而自用。量足以鎮俗者。多懦而無爲。抱苦節之貞者。必褊於容衆。具通達之識者。或昧於褆身。諸葛武侯。外綜軍旅。内和人民。澹泊明志。寧靜致遠。開誠布公。集思廣益。擧世之所難之者。而皆兼之。三代以下一人而已矣。と云てあるが。過たる論ではないでござる。又この頃或儒者の作れる。九經談と云書を見れば。孔明は伊尹傳說の小なるもので。范蠡韓信張良などは。これに比しては蔑如たるもの。唯し孔明が申不害。韓非子がおもむきを用ひたのは。白璧に瑕だが。孔明もし申韓を用ひずに有らうならば。天下を三分にしたぐらゐでは有るまいにと云たは。三代の聖人どもの道によらぬと云の小言だが。これらは例の儒者の。時勢時務をしらぬ論でござる。なぜと云ふに。この三國の時分は。奸雄大賊蜂の如く起て。中々文王や周公旦がのろけた仕法でゆくことではない。孔明はそこを知て居るに依て。時勢相應に。申韓が風をやッたものでござる。夫もあながち申韓がいひ遺したる説によるとは无れど。自然と符合したので。此れはかやう无ければ成らぬ訣がある。それは迂遠なるされ儒者などの。知つたことではない。凡て國を治むるの道と云ものは活物で。緩くも。きびしくも。働かし。その時相應に定てゝゆかねばならぬもので。夫は孔子とても。齊景公と魯昭公と。夾谷に會したる時のはからひ。また魯國の政を執るやいな。少正卯を誅したるなどの類を見て知るがよいでござる。かの理窟ばかりを云てゐたる朱子でさへも。こゝらの趣をば心得たと見えて。さる迂遠な

ことを譯りて。大承氣湯の證に。四君子湯を用ふるやうな物だと云たこともあるでござる。但しこの九經談を作つた儒者は。いかふ孟子を信ずる所を見れば。若くは孔明が篤實に。かの闇弱なる劉禪を守立て。その意に背かず。愼で事へたるから。事はならぬで。手ぬるいしかただ。なぜに伊尹湯武が流に。劉禪を放廢るか。殺しもして自立し。存分に國を平げぬのだとの事かも知れぬ。夫では孔明が靈は。評されて。眉をひそめることで。漢人ながらさやうの心は元き人ゆゑ。大倭心の人にさへ。稱られることでござる。○扨また魏の國は。曹丕から三代目の王。曹芳と云が時に。其臣司馬師と云もの。曹芳が位を廢して。二代目の曹叡が弟の子。曹髦と云を立て王となし。五年ばかり有て。此れもまた司馬師が弟の。司馬昭と云ふ者に殺され。其次の元帝曹奐と云が時に。司馬昭が子の司馬炎と云ふ者。また例の如く迫て。堯舜受禪の例に效ひ。王を廢して。位を奪つて。此れを晉武帝と云でござる。また吳國は孫權から五代目の。孫皓と云者の世に。晉へ降參して。こゝで彼の三國は殘らず亡び。晉の代と云に一統したでござる。此れは應神天皇の御代十一年に當るでござる。扨この魏と晉の代との頃には。淸談と云こと專ら流行て。夫はかの許由巢父など云者等のいひ口を效び。其の行をも贋たもので。何か潔げに太平樂を云ひ。わざと放曠にして行を愼まず。大酒を呑ひ。世にそげたることを業として。底ゆかしげに人に思はせんとして。甚も〳〵憎ぎ者でござる。彼のいはゆる竹林の七賢人などいふが夫でござる。貝原篤信の和漢名數と云ものに。此の謂ゆる七賢を評して。放蕩無賴なる者等故。賢人と云べきことではないと云ひ置たが尤なことで。殊に其下心は。みな口とは異にして。いかう汚く拙きものでござる。千百年眼と云書にいへる如く。此の風は晉に始まツたことでもなく。早く漢の末から。ちら〳〵さやうの人が有て。仲長統と云者の志を見したる詩に。寄愁天上埋憂地下叛散五經滅裂風雅といひ。また鄭泉と云者は。酒を好きで飮んだが。其死する時に。同類に謂て云には。吾が死んだならば。必ず陶家の側に葬れ。庶はくは百歲の後に化して成土となツて。幸ひに取られて酒壺と成たならば。實に我心を獲んと云て死

だ抔が。そも〳〵始めでござる。又かの七賢と云輩も。その下心は口と異にして。汚いと云訣は。これも千百年閒に。謂ゆる七賢人の中なる阮籍と云者を評して。此の者世事を遺落したりと云を以て。美談としながら。職を去て後も。ひそかに司馬昭に媚仕へて居たが小人のしわざで。其小人の情僞。千載の下。掩ふ可らざるものがある。此のもの大人論と云を著して。禮法に拘はる士をば。褌に處る虱に比へたが。己が司馬昭に媚附たるこそ。褌の虱と云所行だが。幸ひに火に焚るゝことを免れたのだと云つたが。げに理なる評論でござる。此後禪學流行して。以來。かゝる風を慕ふ輩が。みな禪に歸したるもの故。清談のさたが無くなッたでござる。又この餘風が御國までに及んで。旣に萬葉集にある。大伴旅人卿の酒を美られたる。十三首の歌などが凡べて此の意で。僞の限でござる。今も御國に希々かゝる風を好むが有て。いまは昔篤胤が知たる醫者が。或とき頻つて死なんとしたれば。其のいへる言に。虎者死存レ皮人者死存レ名。皮を存して人に敷れんも口をしく。名を存して人の口に挂らんも詮なし。吾は皮も存さじ名も傳へじと云たと云て。病が癒て後。篤胤に夫を書き記したるを見せたから。餘りの憎さに。篤胤が云には。そこは日頃見るに。孜々汲々として名利にばかり拘づらッて居らるゝが。實に此のいへる言が本心で。有るなら。名利さわぎはなぜ止めやらぬ。又これに記したる所は。名を遺したく無いとのことだが。夫なら何にこんな清談くさきことを云て。剰へに書遺さうとさへしたるぞ。心にかう思つた計で口に云はずは。さる心とも思はうけれども。口に云ひ。記のこしては。實にさる心とは思はれぬ。どうかうまでおもふ心を。人は知らぬから。いひ殘して。人に此の心を知らせたいと云ふ。名聞心が有るやうに見える。夫ではやはり名を求むると云もので。口と心と相違なる僞りと思はるゝと。苦々しく云たれば。其人赤面したることがある。とかく世にはかやうの人が有たがる故。その眞似などを爲ぬやうにとの心で。かくは云のでござる。實に胸の惡くなることでござる。

西籍概論講本下之卷

平田先生講說　門人等筆記

さて晉の武帝が世に一統して。やう〳〵四五年も立つか否や。かの武帝司馬炎は死で。その次を惠帝といふ。これが時に。その兄弟廿五人。親族たがひに相殺し相奪つて。其亂りがはしきこと云ばかりなく。すでに司馬倫と申すものなどは。位を奪ひて自ら皇帝と稱し。また惠帝が妻を賈后と申したるが惡夫人で。其太子が自分にはまゝ子なるが故にこれを殺し。其内とう〳〵惠帝は弟の司馬越と云ものゝ爲に毒害せられたでござる。扨この惠帝が時に。內亂がこの通りだに依て。國々にも謀叛人の起つたると夥しく。天各一方の國をうしはき居て。別に年號をたてゝ。天子だと名のる者が五人あッて。とんと一日も穩な日は无かッたでござる。扨惠帝は毒殺せられ。廿五人の兄弟が。互に相殺し相奪て。生のこりたる者が三人あッて。其內司馬熾と云者が王の位について。これを懷帝と云でござる。是が時にも。其親族なる司馬覃。司馬延と云を殺しなどする其內に。かの謀叛人の內。漢の劉聰といふ者。これも實は其君を殺して。國を奪つたる者であッた所が。兵を起して。晉の都。洛陽と云へ攻入り。懷帝を擒にして殺したでござる。そこでまた其姪なる。司馬鄴といふ者を王の位にすゑて。これを愍帝と云でござる。扨この愍帝が時にも。漢の劉聰が大いに洛陽を攻て。とう〳〵攻落したに依て。かの愍帝は降參に出たる所が。劉聰はそれを擒にして國へかへり。我が臣下どもに。酒を呑ませする時。今迄天子とか名のッて居たる。その愍帝に酌をさせ。また蓋と申て。位高き者などは。後や脇の方へ。かさや團扇のやうな物を。人に捧げさせて飾とする。其持人にしたり何かして。終に殺したでござる。かの司馬炎武帝が。魏の王位を奪つてから。この愍帝まで四代。五十二年が間。一日もおだやかなる日と云はなく。晉の代は一旦亡びて仕まッたでござる。此れを西晉の代と申す。これが御國では。仁德天皇の御代しろしめす。四年にあたる年のことでござる。さて漢の劉聰が。愍帝をころして後。晉の一族に。司馬叡と云が有て。王の位につき。これを元帝といふ。又これより後を。東晉の代

と云でござる。扨この元帝が後。六人目の王を司馬奕といふ。これが時の大臣に。桓温と云が有て。ひそかに王位をうばゝんとするの志が有て。其いへる言に。男子不レ能レ流ニ芳百世一亦當レ遺ニ臭萬年一と申て。これも又たの伊尹か例だと云て。王の位を廢し。王の一族に司馬立といふ者。これは老子の道を好んで。無慾に見ゆる故。まづこれを位につけ。これを簡文帝と云でござる。さて禪を受けやうと云た所が。思ひの外にこれはゆづらず。簡文帝は程なく死んだけれども。其子に傳へた故。桓温は大きに望を失つたでござる。さて簡文帝が次を孝武帝と云。これが位に即たる頃までに。蜀。趙。燕。涼など云國々も。追々亡び失せたなれども。たゞも一つ有たる。秦といふ國のみが猶のこッて。尤も帝と稱し國を爭ひ。やう／＼。まへの四箇國は亡び失せたかと思へば。四五年もたゝぬ内に。また／＼其の殘黨原が。後燕。後秦。西秦。後涼。西燕。南涼。北涼。南燕。西涼。大夏。北燕。北魏などいふ國號を立て。各々一大國に因て帝と稱し。別に年號を立て國を爭ひ。其大亂いふばかりなく。其内孝武帝は。張貴妃といふ妾の爲に殺されたでござる。扨其次の王を安帝と云。これが時にかの男子云々と云て。伊尹や堯舜の受禪の例をやりかけて。其志を果さなんだ。桓温が子の桓玄と云もの。父が志をついで。安帝をば威權を以て押かぢめ位を禪らして奪つたでござる。時に同じ臣下に。劉裕と云者が有て。かの桓玄を殺し。安帝を元の位につけ。其外くさ／＼効も有たに依て。其功故に位ものぼり威勢も強く。此奴も亦つひに其の王安帝をば。人を遣はして縊り殺させ。安帝が弟の司馬立と云を立て王と致し。其翌年にこれをまた。堯舜の例の如く。うはべをば。無理にゆづらせて位を奪ひ。程なく殺したでござる。こゝに於て東晉の代が。凡て十一代。年數百四年で。ねこそげに亡びてしまい。これが御國では。允恭天皇の御代しろしめす。九年にあたるでござる。さて劉裕は其の主二人を殺して。とう／＼晉の王位をうばひとり。國の號をば宋と申し。すなはち宋の武帝と云はこれがことでござる。この次の王は。則ち劉裕武帝が第一の子で有た所が。位に即たる翌年。直に其の臣下三人の者が。これを殺して。武帝が第三の子を立て位につ

け。これは文帝と云でござる。この文帝を位につけたのも。實はこの三人の臣が。例のかたに。國を奪はんとの合みで致したる所が。これらは却つて。文帝が爲に誅せられたでござる。扨この文帝も位について三十年目に。自分の子で。しかも太子に立おいたる。劉劭と云に弑されて。位をうばゝれたでござる。扨劉劭は。父なり君なりといふ文帝をころして。自立したる所が。また其弟劉駿と云もの。兄劉劭を殺して位に即たでござる。これを孝武帝といふ。所がこれより十二三年ばかりも前までに。かの十二箇國。別に年號を立て。天子と名のり居たる者どもが追々亡びて。其の內北魏といふ國ばかりが勢ひ强く。まだ〳〵さかんで居たでござる。さて孝武帝が次の王は。則ちその長子で。名をば劉子業といふ。位について其の年。直に臣下の者どもこれを殺して。まへの文帝が十一人目の子。劉彧と云を立て。これは八年ばかりも代を有つて。死んだでござる。これを明帝と云。この明帝が次は。其の子劉昱といふが位につき。六年目に其の臣蕭道成と云者。これを弑して。王の弟に劉準と云を位につけ。これを順帝といふ。又この順帝をも。三年目に蕭道成が。かの堯舜が受禪の例を以て。無理にゆづらせて位をうばひ。程なくこれを弑し。甚しいことは。其の親族までを殺し盡した故に。宋の代は亡びたでござる。先祖劉裕武帝が。東晉の君二代を弑して。位を奪てこのかた八代。年數が五十九年で。みな亡びて。御國では雄略天皇の二十三年にあたるでござる。さて蕭道成は。其君二人を殺して王位をうばひ。國の號をば齊と立て。齊の高帝とは云はこれがことでござる。位を奪て四年目に死で。三代目の王を昭業といふが。其位に即たる年。直に高帝蕭道成が兄の子。鸞と云ふ者これを殺して。其王の弟昭文と云を位につけ。未だ四月も立ぬうちに。又これを殺し。今度は自立して王と成たでござる。これを明帝といふ。王位をぬすんで五年目に死んで。其の次王が名を寶卷といふ位について三年目に。其の末の弟寶融と云者。これを殺して位を奪たでござる。是を和帝と云。この和帝も亦其年の內に。其の臣蕭衍といふ者に弑され。國も取られて仕まッたに依て。齊の代は亡びたでござる。高帝蕭道成より七代。總て廿三年つゞいたでござる。御國では武烈天皇の御代しろしめす。

四年にあたるでござる。さて蕭衍は。其の君和帝をば。例の堯舜受禪のかたを以て。强てゆづりを受ついで。これを殺し。位を奪つて。代の號をば梁といひ。梁の武帝と云はこれがことでござる。夫でもこの王はきつく佛法が好きで。それ故に大きに世が亂れなども致し。すでに達磨など。この王が時に。天竺より漢土へ來たでござる。扨この武帝が次の王を。簡文帝といふ。之が代に侯景と云者。亂をなして。簡文帝および其の太子を弑して位を奪て。みづから漢帝と稱したる所が。數月をたゝぬ内に。この侯景も。陳霸先と云者の爲にうち破られ。其の臣たる者に弑され。そこで武帝が七人目の子。すなはち簡文帝が爲には弟なる。蕭繹と云もの位に即て。これを元帝と云。この元帝も。かの魏といふ國から攻入られて。さゝへかね降參して。つひに殺されたでござる。さて元帝が子の方智と云を。かの侯景を打破つたる。陳霸先がはからひで位につけ。これを敬帝と云。この敬帝か位について三年目に。陳霸先は例の如く。無理にゆづらせて。國を奪ひ。ついで此れを弑し。こゝに於て梁の代は亡びてしまい。王は四代。年數が五十六年つゞいたでござる。これが御國では。欽明天皇の十八年に當りまする。さて陳霸先は。かの堯舜が例を以て王位をうばひ。夫のみならず其君を弑し。代の號をば陳といひ。陳武帝と云はこれが事でござる。これより三代目の王が時に。武帝が姪の陳頊といふ者。これを廢して。その位を簒つて王となる。これを宣帝といふ。この宣帝の次の王が代に。隋の楊堅と云に攻入られて。陳の代は亡びて。王が五代。年數廿三年間でござる。御國では崇峻天皇の御世しろしめす。元年にあたる年でござる。さて隋の楊堅は。陳を亡して國を一統いたし。隋の文帝と云はこれが事でござる。所が此太子に楊廣といふ者。父文帝が病に臥たる時。父が寵愛の陳夫人と云を。犯さんと致したる事を。父文帝にしられ。これに依て父の文帝を弑し。また兄の楊勇といふをも殺して。自ら王と成たでござる。隋の煬帝と云はこれが事で。此は古今未曾有のおごりを極めた王でござる。夫よりまた〳〵國中大きに亂れ。國號年號を立て帝と稱し。王と稱する者夥しく有たる所が。煬帝が臣に李淵といふ者。謀叛を起し。煬帝を

おしこめて。太上皇と致して。江都といふ所におい
たる所が。煬帝はその江都で。我に附をる者どもの
爲に。縊り殺されたでござる。さて李淵は煬帝を押
こめて。文帝が孫の。楊侑と云を立て王と致し。半
年ばかり有て。例の如くしかけて。其の禪を受け。
こゝに於て隋代は。凡て三代。三十八年つゞいて亡
びたでござる。これが御國では。推古天皇の御代し
ろしめす廿六年にあたります。御國より始めて。から
へ御使を遣はされたるが。この隋の代のことでござ
る。さて李淵は。王位をゆづり受たりと云は。うは
べばかり。實はわが二男。李世民と云がすゝめに依
て。國王の位を簒つたのでござる。これより代の號
は唐とかはり。唐高祖と云は。この李淵がことでご
ざる。こゝにまた。隋の舊臣ども打寄て。煬帝が孫
の。侗と云を位につけたる所が。これもまた。其臣
王世充といふ者弑して夫にかはる。然れどもこれは
唐の高祖が二男。世民が爲にほろぼされたでござる。
一體この世民と云は。余程の器量もので。父に代つ
て諸國の敵をたひらげ。遂に其兄建成と云が。太子
に立て居たるを。かの周公旦が。其兄管叔をころし
たる例を引て。これを射殺して。二男ながら太子と
成たでござる。こゝに魏徴と云者が有て。これは世
民が兄の建成につかへ居たもので。世民が行々は。
兄の爲にならぬ者なることを察して。建成にすゝめ
て。世民をのぞかんと致したる所が。其内に世民が。
其兄建成をころしたる故。魏徴はまた世民につかへ
て。唐の賢臣と稱せられたるは。この魏徴でござる。
さて唐の高祖李淵が次は。かの世民が位について。
名におふ唐の太宗と云て。世を一統してよくをさめ。
漢土大和の儒者が賢君だと。きつく尊む王は。この
世民がことでござる。既にこれが世の色々よきしざ
まの有たる事をしるしたる書は。貞觀政要とてある。
きつく儒者の稱美致すもので。貞觀と云ふは。則ち
この王が代の年號でござる。夏殷周三代の次に自慢
することでござる。この太宗が次の王を高宗といふ。
父太宗が死んで後。其才人と云て。則ち父が妾なる
武氏といふが。容貌甚だ美はしく。年が廿四で。尼と
成て居たる所が。高宗がそれを還俗させて。本より
の后を廢して。其の武氏を后となし。これを武后と
云でござる。子が四人まで出來たが。この武氏と云

は甚の惡夫人で。高宗にすゝめて后を始め。其外の夫人をも殺し。また本より太子に立て居たる李忠と云を廢して。自分が生んだる弘と云を。太子と致したる所が。これは母に似ず。仁もあり孝も有たるが。武后の氣に入らぬとてこれを毒殺し。其の次の子賢と云を太子に立た所が。これも又すてゝ遂には殺し。三人目の哲と云を太子に立たでござる。さて高宗は死んで。この哲が位に即たる所が。其の翌年武后これをも廢して。末子の旦と云を立たなれども。實はおのれみづから位につき。つひ〳〵唐の宗室をころし盡し。國號を周と立て。みづから皇帝と稱し。僭懷義と云者。其の外も張易之。張昌宗といふ。兄弟の美少年を寵愛し。其の外淫犯いはんかたなく。また惡行も書きつくし。いひ盡されぬ程のことで。則天皇后と云はこれがことでござる。御國では。ちやうど。天武天皇の御代の末から。持統天皇。文武天皇の御代あたりまでのことでござる。かくて後に狄仁傑と云ものゝ諫めに從て。先年廢して。遠くの國へ流しおいたる。哲を呼かへして。太子にたて。夫でもいさゝか惡行をやめず。年も八十二歲で死んだでござる。そこでかの太子哲は位に即て。中宗と云でござる。所がこの中宗の后が。韋氏と申して。これも則天におとらぬ惡夫人で。其の淫犯の行ひを。中宗に知られたるに依て。夫なり國王なりといふ。中宗に毒をくはして殺し。己また則天が如く位を奪つたでござる。所が先年一寸と王の位について。則天に退けられたる。相王旦といふが子の。隆基と云もの。兵をおこして。その惡夫人韋氏を殺し。其の父相王旦を位につけ。これを睿宗といふ。この睿宗が次は其の子隆基が位について。かの名高き唐の玄宗と云は。これが事でござる。この玄宗位について。始めの程はよく諫めをも用ひ。またその行ひもよかッた所が。位にをることひさしかッた故か。段々奢りがついて來て。五雜組に。玄宗の時。長安東都。兩宮ほどんど四萬人とかや。古今掖庭の盛んなる。これに過たるはあらじとあるが。其の倖臣どもはびこり。又其の子李瑁が妻の。しかも十年來も。そつて居たる。楊貴妃といふ美人を引たくッて。殊の外に寵愛し。甚だ亂りがはしく。李林甫。安祿山。楊國忠などいふ。倖臣どもに誑かされ。遂にかの安祿

山は。謀叛をおこして。大に國を亂し。玄宗はとうとう都を出奔致したでござる。所がつき從ふ者ども諫めて。この騷動の起りは。楊貴妃を寵愛したるから起つたることだによッて。これを殺して。忠義の者を勵まさずは。治まるまいと。無理にすゝめて。楊貴妃をば。馬嵬が原といふ所で縊り殺し。蜀といふ國へにげたでござる。これは御國では孝謙天皇の御代にあたる。さて玄宗が蜀へ出奔の跡で。太子の李璵と云が王位をついで。これを肅宗といふ。これが時に。つひに安祿山をば誅したなれども。外に謀叛人が多くて。この後は代々。安らかに治まる事なく。この肅宗が死んで後に。其妻張皇后といふは。其臣李輔國と云に殺される。肅宗が次の代宗といふ王も。其次の德宗と云も。都を逐はらはれ。其次の次なる憲宗と云は。宦者張弘志と云者に毒殺せられ。憲宗が次の次なる敬宗と云王は。宦者劉克明といふ者の爲に弑せられ。其次の文宗といふ王が時などに至ては。別して宦官の勢ひがつよくなり。王も此をもてあまし。すでに文宗が近習の者になげいて。むかし周赧王や。漢獻帝などは。强臣の爲に制せられたが。朕は家奴に制せらるゝ程のことゆゑ。大きに劣つてゐるといひ。又この節もッとも河北など云にも。大敵が有たなれども。夫を退治するよりは。朝廷の朋黨をしりぞける事が。叵い事だと。毎に申した程のことで。これより次々の王どもをば。みな宦官等がはからッて。位につけるやうなことでござる。一日も君臣の間の平和なることなく。文宗が死んで後。其弟李瀍といふ者。宦官の者どもと相計て。太子をころし王位につき。これを武宗といふ。この武宗から四代目の僖宗といふ王は。また謀叛人の爲に都を追おとされ。その末年には。國中大いに亂れて。中中制することも出來ぬやうになり。僖宗が次の王を昭宗といふ。この昭宗が時に。かの宦官等が亂を起して。唐の宗室なる諸王十一人をころし。昭宗をば。少陽院といふ所へ。押こめたでござる。所が朱全忠と云者。これはもと盜賊であッたるが。兵をおこして。かの官者どもを。殘らず殺し盡して。おのれまた昭宗をさしはさんで。逆威をふるひ。終に昭宗を弑し。ついでまた太子李裕を始め。昭宗の子九人を弑し。いッち末の子。李祚と云を位につけて。これ

を哀帝といふでござる。其年の十二月。朱全忠は。先代の昭宗が后。何氏と云をも殺し。また例のごとく。王にせまッて。堯舜が例の如く。うはべをゆづらせて。國を簒ひ。程なくこれを殺したでござる。此に於て唐の代は。根こそげ亡び。すべて王數二十代。二百九十年で。さしも文華の盛なりしも。何の益にも立たず。滅亡いたしたでござる。是が御國では。醍醐天皇の七年にあたります。此より後の代を五代と申すでござる。扨かの盗人の朱全忠は君を殺し。君の妻や子供などをも。かれこれ十人の餘をころし。みづから王となり。これが代を後梁と申し。又これがことを後梁の太祖と云ふでござる。但し此の時には。國々大きに亂れをッて。別に年號を立て。我れこそは天子よと名のるもの夥く。おの〳〵牛角に爭つて。一日も安き日はなかッたる所が。其の內に。後梁の太祖朱全忠をば。其の子友珪といふ者殺して自立致したでござる。所をまた其の弟友貞といふもの。兄の友珪をころして位につく。これを末帝と云。後唐の莊宗が爲に亡されて。此後梁の代は。只二代。年數十一年目で亡びたでござる。

さて後唐の莊宗は。後梁をほろぼし。三年にして。其臣郭從謙と云ものに弑され。これより四代目の王は。其の臣石敬塘といふ者に攻られて。自ら焚死んで。こゝで後唐は亡びたでござる。すべて四代。年數十四年が間でござる。扨石敬塘は其君をころし。王位をうばひ。代の名をば後晉と改め。これを後晉の高祖といふ。この次の王。出帝といふが時に。夷狄といやしむる。契丹といふ國に亡されたでござる。後晉の代が二世。十二年が間でござる。こゝに後晉の臣に。劉知遠と云が有て。自立して王となり。代の號を後漢と云ひ。高祖と云。これが次を隱帝といふ。この隱帝は。其臣郭威と云ものに弑され。こゝに於て後漢の代は。二代四年にして亡びたでござる。さて郭威は。其の君たる。後漢の隱帝を亡して。國號を後周とたて。後周の太祖といふはこれが事でござる。この次を世宗といふ。世宗が次の恭帝といふが時に。其の臣趙匡胤と云もの。禪を受て王位をつぐ。實は恭帝が。この時わづか七歲のことだに依て。その受禪もまた今までの例なること明かでござる。後周の代すべて三世。年數十年にして滅亡いたし。

これが御國では。村上天皇の天德四年のことでござる○さて右申たる後梁以下。後唐。後晉。後漢。後周まで。此を五代の世と申すが五代すべて。年數が五十四年ならでは。つゞかなんだでござる。扨趙匡胤は。後周の禪をうけて國王となり。國號を宋と云。宋の太祖と云はこれが事でござる。但し此宋の代と成ても。國中なほいまだ一統いたさず。凡て八つに分れて國をあらそひ。各々年號を立て。天子と名のッてをる。たゞ其内宋は。代々の國王の都したる所に居たる故。正統のやうには申すものゝ。實は漢土の正統といふしるしは。更にありはせぬでござる。尤かの國にも。王統の傳はる印として。大切にする物がある。夫は上古に夏禹王が。國をたもつしるしの物とせんとて。鼎を九つ鑄て。それを子孫代々大切にして。桀王が時まで持傳へたる所が。殷の湯王が。桀王を亡して後。殷もまた代々これを。國を傳へるの寶として。紂王が時まで持つたへ。紂王が周武王に亡されて後。武王が其鼎をおのが都する所へうつし。周もまた代々。これを大事にして居た所が。秦の始皇が周を亡して。又かの鼎を。我國へ移さんとする時。道で其内の一つを。泗水といふ川へ取落し。底へ沈んで。とり上げることがならぬ。そこで此は天命が。秦に歸したのでは无く。秦を國王にすることを。天が。いやがつたのだなどゝ云て。秦の代は。やう／＼三代で亡びたることなどを云出して。儒者は仰山に。この鼎の事を申すなれども。なんだ此鼎は。たかゞ禹王が。鑄物師に鑄させたる。人作とも人作の物で。何も大造なことはない。銅鍋の大きいのだものを。なに天道樣が。こんな物の世話までを。やかッしやるものか。只仰山に云のでござる。儒者も小利口なことを云とおもへば。思ひの外に。こんなあはうを云てゐる。一體儒者が。秦の始皇をば。尻からこき出したやうに。惡く申すけれども。湯王や武王が。うはべを飾り。又人に用ひられんとして。尤々しきことをいひのこし。後の世を欺いて。孔子の謂ゆる。似て非なる者に比べては。さしも憎むまでのことはないでござる。殊に秦の始皇が次に。世を有つたる漢をはじめ。今の淸に至るまで。始皇が爲始めたる事のみを用ひ。封建の法を止て郡縣となし。井田を止め。また皇帝といふ號。また天子みづ

から稱して。朕といふなどの類ひ。千里の長城をきづくなんど。己が勝手になることは盡く用ひて。かの堯舜禹湯文武らが。遺訓の書に記せる。尤々しきことゞもは。用ゆる顏に。もてなし居るけれども。實は一向にもちひず。たゞ其內。うまく用ひてをるのは。堯舜が受禪のまね。伊尹が廢立。また湯武が放伐。これは勝手に宜きこと故。代々の王ども、みな見事にこれをやツて居るばかりのことだ。然るを儒者なんど。朝よひに漢籍ばかりを囀り居て。かやうのわけを辨へず。めツたむせうに。何ぞと云ふと。秦の始皇を誹るがをかしいでござる。但し其そしる元の起りを。どうしたことかと考へた所が。これは始皇が時に。儒生どもが時務をも知らず。わる狡意をのみ。いひ居るがにくしとて。其世の儒生。四百六十餘人を生ながら土中に埋殺されたることの怨めしく。其時に埋のこされたる儒者どもが。逃吠に誹りそめたのが。かの一犬吠れば。萬犬その聲にしたがふとかいふ如く。後世の儒者が。そしり傳へて。前後の事實に辨へもなく云のでござる。さて秦の始皇は。かの鼎を引取ては見たなれども。其內一つを水中へ落したが。氣になツたと見えて。其後かの卞和と云者の拾つたる玉を。印にこしらへ。夫へかの惡人の李斯と云ものに。受天之命皇帝壽昌とか。何とか云ことをかゝせ。彫工師の孫壽といふ者に彫せて。これを玉璽といふ。何のこともなく始皇が印判じや。但しこの始皇が以前までは。すべて印を璽と申して。ひろく誰がのをも云たものでござる。夫は周禮に璽節とあるのは。役人のあづかツてゐる。印判割符を云たもの。また左傳に璽書とあるのは。魯の國の家老の印を押た書付のことで。古くはかやうに弘く誰が印判のことをも。璽と申したなれども。この秦始皇が定めを立て。國王と成て天子と稱する者の印のみを。璽と云て。臣下の印をば璽といふことを止たでござる。この始皇が定めたことには。かやうのへだてが大ぶある。すでに朕と云ことなども。からで古くは。ひろく誰も申たことでござる。夫を始皇は。以來天子とある者ならでは。云はぬことに定めを爲して。これも今以て其かたを用ひて居るでござる。始皇が國は。ふるく卑しめられた國ゆゑ。人に尊く思はせんとて。かやうに致すことでござる。

さて始皇から三代目の子嬰が。漢の高祖へ降參に出たる時。かの玉璽をわたし。これが漢につたはッて。この玉璽と。高祖が蛇を斬つた劍を合せて。漢の王ども。代々國を傳へるの。しるしと致したでござる。所がかの王莽が漢の王位をうばッたる時に。王太后と云て。漢主のおふくろが。其玉璽をわたすまいと云ふ。王莽は受とらうと云ふ。かれこれ爭つて。王太后は大きに腹を立て。ほふり投げた所が。玉璽の耳がうち缺けたとて。漢書などに。大切さうに云てあるけれども。何のこともなく。たゞの人作で。實は蹈鞴師で彫つた印判と。かはることはないと。谷重遠が。いはれた通りに違ひはないでござる。これを御國の皇統の御璽たる。三種の神寶に比して申す儒者などもあれど。甚畏く勿體なき事で。夫はこの方の學風の始を御開きなされたる水戸中納言光圀卿の御内につかへたる。栗山潜鋒が。すなはち光圀卿の御心を心として。論じおいたる保建大記に。具さに辨が有て。古道の大意に申したる通りのことで。實以て同じ年にも。云ふべきものではないでござる。さて右の玉璽と。劍とを。かの堯舜風の受禪。湯武が仕置の放伐を爲つても。夫を次の代々へ傳へ〳〵て。漢より魏へつたはり。魏から晉へうけとり。右の宋代までに持ちつたへ。これを正統のしるしと致すけれども。一向に其しるしのかひもなく。代々相ころし相奪つて。かの玉璽や劍を持たる者をば。王と立て。手はさゝぬと云ことでもないから。謂ゆる虚器で。何んの役にたゝず。夫を欲しがッて。取うの。とられまいのと。云てさわぐは。戎人の生狡意にしては。笑しなことでござる。からの國王の定まりなく。國をうばゝれ。位を失なふ所の事實に依て。この方が眞すぐに評をつけやうならば。此れを持てゐて國を奪はれ。また前の亡國の寶だによッて。實は傳國の玉璽ではなくて。亡國の王璽ともいふべき物でござる。夫だに依て。かれは上もなく不吉な物で。此をまへの亡國から引たくッて嬉しがるは。丁ど闕所物を取て悦ぶやうなことで。あゝ汗らはしいことでござる。

さて趙匡胤は。後周の王位を奪ひ取て國王となり。これを宋の太祖といふ。二程子朱子のたぐひ。多くの學者の世に出たる。宋の代と云は。この趙匡胤が

國號でござる。この宋の代と成ても。國中始終一統いたしたることなく。夫は契丹。夏。金。遼などと云大國ども。みな帝と稱して。別に年號をたて。常に仇して穩かならず。すでに八代目の徽宗。また九代目の欽宗と云二人の王は。金の國と云て。御國なれば。蝦夷と云やうな國から攻られて。擒にせられ。其えびす國へつれて行かれて。こゝに於て宋は一旦亡びたでござる。王が九代。年數百六十七年。御國では。崇德天皇の大治元年にあたる年でござる。さて徽宗欽宗の二人の王が。金の國へ連れられて。國は亡びたなれども。又徽宗が九人目の子を位につけて。これより後を南宋の代と云でござる。是よりますく右の金。契丹。夏など云國々より攻められて。一日も穩かなることなく。都を敵に追落されなどして。せッかくよき人が出て敵を却そけ。良計をなすかと思へば。佞人の云ことをきいて。忠臣を殺しなどして。夫でもなきく九代續いて。とうく蒙古と云國の。しかも鳥獸のやうに云て居た國より攻入られ。ねこそげ亡びてしまッたでござる。これが御國では。後宇多天皇の弘安二年のことで。この

南宋の代が百五十三年つゞいたでござる。扨蒙古と云は。漢土の東北より。西の方まで打開いたる大國で。則韃靼と入組んでゐる國で。其内の一と所を領し居たる。鐵木眞と云者が。彼さしも强かッたる契丹を始め。夏。遼。金などをも亡ぼして帝と稱し。國號を元と改め。鐵木眞より五人目の。忽必烈と云が時に。とうく宋を亡ぼし。から中を一統して。元の世祖といふはこれがことでござる。其勢ひまことに竹を破るがごとく。實にからでは此元の世祖ほど勢の猛なるは无かッたでござる。此王が宋を亡したる時が。丁ど御國では。後宇多天皇の弘安時分のことで。かの傍の大國どもを亡し。其勢に乘じて。かしこくも御國をさへに。覗ひ犯し奉らんの志が有て。其まへ龜山天皇の御代。文永六年より。度々使を奉つて。うかゞひ申たる處が。御取上もなく。剩へに其使に來れる者の首をさへ。切て仕まはれた程の事ゆゑに。世祖が大きに腹を立て。文永十一年と。弘安四年と。兩度攻來つて。かの神風に吹破られたは。此時のことで。これは古道の大意に申したる通りでござる。扨世祖が。から國中を一統い

たして。王が十代。八十年餘。國をたもち。順宗と云が時に、謀反人おびたゞしく起て。又各々帝と稱し、其內朱元璋と云者。つひに元をほろぼして國をうばひ。明の大祖と云は、これがことでござる。この元の世の亡びた年が、御國では、後村上天皇の。正平二十三年、後光嚴天皇の、應安元年にあたる年のことでござる。

さて明の大祖はから國を一統して、其死だ後に、孫の朱允炆と云が位につき、これを惠帝といふ。所が其叔父に朱棣といふ者、謀反を起して惠帝をころし、位を奪つて。これを太宗といふ、永樂と云は。この王が年號でござる、この王から十一代目の神宗と云が、萬曆二十年と云年は、御國の文祿元年といふ年で、かの秀吉公の朝鮮を御討なされて、悉とッた年でござる。このとき明が大きに恐怖れて。さわいだることは。翁が馭戎慨言に記しおかれた通りのことでござる、扨この王が萬曆四十六年に。古くより。かの、韃と卑めたる所の、韃靼の國より。奴兒哈といふ者。軍をおこして。明の國へ攻入り。これより戰して。たえず仇しつゝ。四十年ばかりも苦められて丁ど御國の萬治二年。かの國の年號。永曆十三年と云に。明はねこそげ韃靼に亡ぼされて仕まッたでござる。其鄭成功と云が有て。これは元來明人鄭芝龍と云者が。九州肥前の松浦へ來て。御國の女と合て出來たるものでござる。夫故か余程武勇のすぐれた者で。はじめ臺灣の國を攻おとし。夫を足だまりと致し。明に入て明主の韃靼に攻られて。其程は永昌といふ所へ逃て。見るかげもなく。居たるを取立て。韃靼を退治せんと致したなれども。遂に其事ならずして死んだでござる。此者明へ忠義を盡したるに依て。其恩賞として明王より。則ち王の姓が朱氏だによッて。其朱氏をくれて。朱成功と名告たでござる。國姓爺と云は。これがことでござる。なぜ云ぞなれば。彼國では。其國王の姓を國姓と云。其國姓を賜つたる人といふの心で。彼國人が尊で。國姓爺といふたものでござる。

さて韃靼は。明の世をほろぼして。國を一統いたし。國號をば清と申すでござる。其一統したる王の次をば聖祖といふ。余程の器量もので。又この王が年號を康熙と云たに依て。俗には康熙帝なども云でござ

る。これより當時の王まで四代。今年文化八年辛未の年迄。百五十年ばかり。國も穩かに治つてをるでござる。尤もから國中を。おのが本國の通りに風俗を改めて。服は筒袖。つむりは。いにしへの二帝三王四聖人といふ輩の子孫も。みな芥子坊主にしてしまツたでござる。其の内孔子の子孫ばかりは。近きほどまで元の儘でおいたる所を。今の王がまへの世に。孔子は聖人のことだに依て。聖人は物に凝滯せず。よく世とおし移るともいへば。當時の風にうつるこそ。孔子の本意であらうと云て。其子孫が。孔子の廟を守つて。いはゞ神主のやうに成て今もをる。夫をも芥子坊主に致したと申すことでござる。なんと右段々申す通り。から國は世々相殺し相奪て。王統定らず。たゞ其時々強き者。かしこき者。かはる〴〵王と成て。甚以て亂りなることでござる。此をさして鳥羽義著が。から國のさまを見んとおもはば。今犬の群聚するをもて見よ。強きもの弱きもの有て。彼の弱きもの他を侵せば。強きものこれを制す。故に群犬かの強きに伏す。しかれども其勢ひ子につたふる事なし。漢國の道これに同じと申たは。

實に尤なことで。よく當つてをるでござる。サかやうの國を漢學者流がよき國と心得て。いかに醉たぶれて居ればとて。卑しき國王どもを。帝だの天子だのと申し。又彼の國を中華など申すは。甚のみだりごとでござる。これはわが鈴の屋の翁が。馭戎慨言といふ書を作つて。具に論じおかれたに依て。夫を本とし。なほ篤胤が說をも加へて。あら〳〵申さば先すべて御國の內で。物に記し。口にいふ詞にも。漢土にしろ。天竺にしろ。凡て外國の王を尊んで。天子だの。皇帝などゝは。假にも云べきことでは无いでござる。さやうに外國の王どもを尊ぶは。其王どもの制度を受て。從ひをる國の者こそ。さう有べきことなれども。御國の人は。たゞ。もろこしの王とか。天竺の王とか云が。ほんとうのことでござる。又それが死んだ事なども。崩などゝ云べきことではなく。たゞ死ぬとか。またみまかるとか云べきこと。また其の妻のことをも。ツマとかメとか云て。皇后だの。キサキだのとは。云べきものでない。すべて此外の言ざまも。これに准へて。しるが宜いでござる。畏くも我が天皇をおき奉つて。外國の王を天子

と致すことは。近くいはゞ貳で。すなはち天皇を蔑し奉ると云ものでござる。彼のみだりがはしく。卑き漢國ですら。天に二つの日なきに准へて。地に二人の王はなしとて。他の國の君をば。少かも尊ぶことはありや致さぬ。夫故かの三國と云て。魏蜀呉と。三つに分つたる時なども。蜀の劉玄德に心ひく輩は。後世にも蜀を尊ぶ故に。魏はまさしく漢の次を承たなれども。天子とはせず。又その當時に有ても。魏の人が。蜀を天子とはいはず。蜀の人も。亦魏をさして。天子と云ことは。さらになく。また北魏南梁の世と申て。北と南と。二つにわかれて居たる時なども。南よりは。北をば胡虜とあなどり。北よりは南をば。島夷とおとし。互にえびすと卑めて。わが方ならぬ王を天子と云ことは。とんと無かッたものを。況て天地の間に二つとなく。尊く坐ます天皇をいたゞき奉りながら。何の由もなき外國の王を。少かも尊み云べき道理が。なに有りませうぞ。夫を儒者などの心には。例の狭く。もろこしの國にまさッて尊き國なく。其の王を天子と崇むべきは。天地の自然なる道理のやうに。思つてをると云は。扨も扨も不わきまへなことでござる。たとひまさッた國にしろ。我國をおいて。あだし國を尊ぶは。己が君に忠ならずして。よその君に諂ひ仕へ。己が親をすてて。人の親をいつくやうなことでござる。抑わが天皇は。まづ竪に申し奉れば。天地を御始めあそばしたる天津神の御子にまし／＼て。神代の始より。萬代の末まで。御ゆき通りあそばして。御たふとさの長へにかはらせ給はぬ上は。また横にも。天地の間に。あまねく御ゆき通りあそばして。御尊さの倫ましまさぬ理は。自から明かなるわけでござる。所をかの諸越の王などは。自からこそ。猥りに貴げにもてなし居けれども。彼らは實に。さやう尊かるべき謂が。どこに有ませうぞ。皆例の詐事を以て。强て貴げにもてなし居るのでござる。と申す故は。まづ諸越で。其の王の事を。往昔よりいたして。天子と稱へてをること。是がまづ甚あたらぬ誣ごとでござる。是はつら／＼考ふる處が。彼の盤古氏が左の目は日となり。右目は月と爲たるなど云ふたぐひの傳へが。訛まりながらも有るやうなもので。我か天皇の御事を。天津神の御子と申し奉る稱が。かの國の古へにもほ

の〳〵聞え有て。それを彼の國の上古の王等が。何のわきまへも無く。一國も領し居るものは。天津神の子と云べきものと非心得して。己が國語を以て。天子と名告たものと思はれるでござる。但し彼の國の帝王世紀と云ものに。神農氏之母。有嶠氏名女登。則ち帝王之稱天子自炎帝始也。とあるに依れば。かやうに。名告そめたは。神農が始めで。夫より後の王等も。皆このかたを。まねたものながら。これは甚の僭稱と云て。漫なる稱へでござる。なぜと云ふに。抑わが天皇の御ことを。天津神の御子と申すわけは。實に天津神の御子に坐ますがゆゑでござる。其れは古道の大意に申たる通り。天津神高皇産靈神の御曾孫。天照大御神の御孫に坐す。邇々藝命樣を。この御國の大君と定め。御天降し遊ばさるゝ砌り。天照大御神の御言に。豊葦原の水穗國は。我が御子孫の次々に知看すべき國也。と仰せられて。御天降しあそばし。扨邇々藝命樣は。この御國の大君と御定まり遊したる故に。此御國に固より坐ましたる。謂ゆる國つ神等の方より。われ〳〵とは同等に坐まさぬと云ふの意を以て。事をわけて尊み奉り。天つ神の御子と申したものでござる。其はまづ邇々藝命樣の御天降の段に。かの大國主神の第一の御子。事代主神は。此御國を御さり遊して。其御父大國主神へ。この國をば天津神の御子に奉り給へと仰られ。また猿田彦神は。天の八衢へ御出迎なされて。天つ神の御子の天降りますと聞つる故に。御前に仕へ奉らむとして。參迎へ侍ふと仰せられた。などを始として。神武天皇の御段などに。國つ神たち。みな〳〵天皇を。天神の御子と申し奉られたでござる。されば此御稱に於ては。我が御代々の天皇に限つて申べき御稱で。穴かしこ勿體なくも。戎夷の王等などの。名告り居るべきことではないでござる。外國の王どもが。何を證として。天子だと申すか。決して天子と名告るべき謂はないでござる。夫れ故からの古き書物に。彼國王を天子と云べき謂のたしかな證となるべき。傳へも。書物も。ありやいたさぬ。若あると云人があらば。其樣な證據の書を見ようと云ふつもりだが。そりや有まい。悔しからうが。さんと有まい。尤はるか後世に出來たる。白虎通と云書に。所以稱天子者何。王者父天母地爲天之子

也といひ。又孝經の緯書。援神契と云物には。天覆地載謂ニ之天子ーといひ。又説文には。古之神聖人母感レ天而生レ子。故曰ニ天子ーともいひ。また春秋繁露には。德侔ニ天地ー者皇帝。天祐而子レ之稱ニ天子ーなど云ことを記してあるけれども。是らはたゞ理窟の上を。小ざかしく云たので。戎國の王を天子なりといふ樣な證據には。とんとならず。皆杜撰臆説で。少しも取れぬことでござる。若し强て右の白虎通。説文。援神契などの説を助けて。諸越の王どもゝ。天つ神の產靈の御靈に因て。成出たる物故に。天子と云ふなどいふならば。然らば世の常の人は固より。鳥獸草木。生とし生るもの。はえと生る物までも。盡くに天は覆ひ。地は載ざる物はないが。是らも天子と云て宜らうか。夫でもよくは。天子でない者はありやせぬと云ものでござる。中々以て。援神契や。白虎通などに記したる趣で。云ひそめた事とは見えず。何れにもわが天皇の御稱の。戎國にほのぼの聞えたるを。盜み云たには相違なく。若しさやうの事でなけりや。杜撰と云もので當らぬことでござる。然るに漢籍に泥んで居る輩は。天神御子と申す御稱の。

西戎國にまで及んで。夫れを彼國で盜みまねび奉つたる天子と云號の。又々御國へ返り來れる物だと云ことを知らずして。却らまに天つ神の御子とまをす御稱は。天子とかいたる文字へ設たる。和訓のやうに思たものでござる。夫はいまた本末を辨へぬのだに依て。よく古を學んで。本をば心得て置べきことでござる。然るに俗の儒者なんど。一向に彼をのみ尊き物にいひ思ふは。皆かの國書の僞言に惑て。其實ならぬことを得悟らぬ非事でござる。其の上己が國を卑めて。人の國を尊むは。却つて彼孔子の本意。いはゆる經書と云ふ物の掟にも背いてをることでござる。實に孔子の本意。春秋の旨に習ふとならば。御國人は諸越のことをば。彼國人が他國のことを云が如くに云をこそ。よく孔子に習たと云ものでござる。けだし其内かの堯舜禹湯文武など云王どもは儒者が其道の祖とすることだに依て。尊ぶもさる事ながら。其心が移つて。其以下の世々の王共をも。押なべて尊み。又その國をも。中華中國上國など云て。ひたすら尊む餘りに。却て御國をば殊更に。東夷ぞなどゝ云ひなすと云は。甚も畏く。律の御制を

以て考へても。此等は大反逆に等しき罪人でござる。然れども。今の御代には。書物の上の詞などは。御吟味もなく。さして御咎めもなきゆゑに。儒者等なむど憚りもなく。口に任せ筆にまかせて。かゝる類の狂言どもをさへに。云もしかきも致すことでござる。抑書と云ものは天下に弘まッて。後の世までも傳はりゆく物なれば。かやうの横さま言を申す輩をば。重き御咎めも有やうに致したいものでござる。古へ大寶の御令にも。から國は蕃國の例に置れて。其使人をも。蕃客とある上は。必すその御令にこそ從ふべきことでござる。其を畏くも恐多くも。皇朝の御令に背いて。彼外國の制に從ひ。御國を惡ざまに申すと云は。なんと太じき罪人では有まいか。儒者だと云て。から人ではあるまいし。皇國の人で御國に居む限りは。どうして皇朝の御法に背かれませうぞ。むね〳〵しき儒者などの。常に彼の國を尊んで申す語を聞習ひ。又それらが作つた書をも見なれては。只それを善事に心得て。近き頃は。物の心を知らぬ生々しき輩さへに。から諸越とは云はず。中國だの中華だのと云は。必しも彼の國を尊ぶ心で云でも无れども。漢學問する人は。彼國の書ばかりを朝暮に讀で居る故に。目も心も夫になれて。自からに。彼國の王をば。わが王の如く親く尊き者に思はれて。萬に正なき非事が出來て。其心から只諸越ばかりを主と思ひ。何事にも彼の國の事には。漢とも唐とも云はんで。却て御國のことに。日本とか本朝とか云て。事を分るも。皆非事でござる。譬へば學問のことを云にも。からの事を學ぶをば。只學問と云て。御國の古を學ぶをば。却ッて和學だの國學だのと云でござる。こゝらが則ち諸越を主として。御國を側になしたる云ざまで。甚以て有ましきことでござる。是らも正しくは。外國の事を學ぶをば。そりや人の國の事だに依て。漢字とか儒學とか。オランダ學とか云て。此皇國の古を學ぶをば受ばッて。只に學問と云が本當のことでござる。からで自分の國の事を學ぶを。漢學とは云はず。又佛學なども。他からは分て佛學と云けれども。法師の徒は。夫を只に學問と云て。佛學とは云ませぬが。こりや尤なことでござる。國學と云ときは。尊ぶ方にも取成されるやうだけれども。國の字を付て云も事によることで。猶うけばら

ぬ云狀でござる。世の人の物言ざまが。凡てかやうの詞に。內外の差別を知らず。外國を內にして。御國を外にしたる言のみが多いのは。漢籍ばかりを讀なれたる故の非言で。それはまづ詩と歌とのことを云とて。詩は思ふ心を言出るものなり。和歌は我國の風俗にて。云々。などゝやうに云ふたぐひ。なご云は。皆皇國を狹く小さく傍。になしたる詞で。且つ和歌と云ふも受ばらぬこと。又我國といひ風俗など必ず皇國人の云べき詞づかひの狀ではない。其は若しかやうのことを言うとならば。歌は思ふ心を云ひ述るわざなり。詩は諸越の國歌なり。などやうにこそ云べきことでござる。凡て何事を云にも。此心ばへに內と外との辨へがなけりやならず。皇國は內で。諸越の外だに依て。彼の國のことを云ふには。取分けて唐には云々。漢の云々。とやうに云べきもので。皇國の事には。日本。本朝。本邦。吾か國などゝ云べきことではないでござる。然るを世の人の云は。皆反さまで。御國を外とし。諸越を內にしたる云狀ばかりでござる。儒者の中でも御國魂の有たる人は。淺見安正だの。水戶の栗山潛鋒や。土佐の谷重遠など。其外にもかやうの心ばへをも思辨へて。猥りに言はず。彼の國を中國と云などをば。好らぬ事と云て置た人も。希には有つたなれども。其の王を御國人の天子と云までを。非說と思ふ人は更になく。專皇國の學問ばかりをして。戎國をば卑しいと知たる輩さへ。是には猶心つかずに居ることでござる。彼の國を中國と云が非言なるうへは。其の王をも。天子とは決して云まじきことでござる。殊に右申す通り。から國の王などの。天子と名告るべき謂は。曾て无きことなれば。元よりのこと。返すゞゝよッく此の意味をたどり。こゝらの訣を心得。本を立ておかぬと。道を蹈ちがへる。萬の過りが此から作る。則ち翁の馭戎慨言へ。尾張の鈴木朗が書たる序に。是義一立而群物咸定。是義一不立而衆弊隨生。と申てあるが尤なことで。道を學び大和魂を固めやうとする人は。きッと心にしめて。忘れぬやうに有りたいものでござる。

扨此より世間の漢學者流の心得違を。二三个條申しまする。其はまづ太宰純が辨道書の說に。日本には元來道と云ことなく候。その證據には。仁義禮樂孝

悌の字に和訓なく候。凡そ日本に元來あることは。必ず和訓有レ之候。和訓なきは。日本に元來この事なき故に候と申たが。此れはけしからぬ言ごとで。此の儒者ばかりでもなく。大抵の腐儒者。又はからびいきの學者どもが。とかく漢國に敎の道あることを鼻にかけ。自慢をいたして。御國の古へに漢國の如き敎へのなかッたことを言ひ立て。とかく卑めるけれども。是は甚だの心得違ひでござる。其の故はから國で謂る仁義孝悌忠信の類。すべて人の行に行ふべき實が有て。行ふまじく致すまじき事を致さず。夫が常で有た故に。敎は入らず。夫が常で有らうならば。なんの人の上に敎の道と云ことが入りませうぞ。元來ミチと云道の字は。からでも本は。往來の上にのみ云ことで。其は彼の國の字書の。道の字の注にも。道所レ由道也。徐曰。道者蹈也。人所レ蹈也と見えて。これ元來は往來するに。ふんで行く道路のことで。夫を人の行ひの上に借て云たものでござる。又御國で美知といふ言葉の訣は。まづ知と云は。路の字の意で。則ち旅路かよひぢなど云ふちと同じこと。夫に美の字を添て云ふは。ほめて添へたるもので。其の美と云言は。まことゝ云眞の字。また御の字の義の詞でござる。その美知といふ言へ。道の字を充たもので。是よく當つて居る。夫れはからでも。道の字は。往來に蹈でゆく處をいひ。御國でみちと云ふ詞は。神代の卷に。うまし御路ありと有る如く。往來する處を云の名でござる。然れども古は決して人の行ひの上に取て申たことはない。其の故は。から人の謂ゆる仁義五常の如きは。かやうに名目を作つて敎るまでもなく。皇國の古人は皆常に行つて正しかッたる故に。別に敎への道といふことの有べき筈はないでござる。此が御國の御國たる所で。萬の國に勝れて。尊き印の見える所でござる。諸越は既にもをり／＼申たる通り。世の初めから致して。惡き風俗で。人の人たる行ひ正しからず。甚だ猥りで有たる故。古への賢き輩が出るまに／＼。導き敎へなどして。元來は往來に蹈であるく處の名を。人の上へ借て。人の道と云たもので。譬へば人の爲まじき事を致すは。徑を行が如きこと故。眞の大道往還を行くがよいと云の意で。終に人の上にも云やうに成たものでござる。又御國で人の行ひを始め。何業の上

にも。道と云ことに成たのは。甚だ後の世のことで。昔から風を移し學んだものでござる。だに依て。ここらの訣を能く考へて見ると。御國の古へに教の道と云ことが無つたのは。そこが尊い處だと云訣も知れる。又からで教の道を作て。人を導いたのは。其の國の辱な訣も知れるでござる。何のことも無く。我國の古人は。さしも禁止ずべき惡事もなかッた故に。教の道を立なんだもので。此れは今お互に子どもを育るで考へてもしれる。生質おとなしい子は。そんなにしおきは入らず。生得おとなしからぬ子は。自から躾も嚴くせねばならず。また盜心の有るものには。夫を戒め教ることもあれど。盜心の無きものには。誰もぬすむなと教るものは無い。教の有ると無いとの差別は。丁どこんなものでござる。所をから國に教が有とて誇るは。盜をする者が。盜みをすなと意見せられて。嬉しがるやうなもの。儒者がこの處に氣が付んで。から國を稱上んとして。其の教あることを言立るは。却て勝負の引倒しとなり。御國の美を顯すものでござる。返す／＼も人の上に。教と云事の有は。惡事をさせまい爲に。防ぎの道具

でござる。夫故禮記の坊記に見えたる孔子の語にも。君子之道譬則坊與。坊ニ民所レ不レ足者也と云てある。惡事をする者が無れば。教と云ふ坊の道具は無用の物でござる。から國に惡事をする者が多いに依て。其を禁ぐ道具も嚴重でなければならぬ。何んと。からの辱ではあるまいか。既に禮記にも。四郊多レ壘。此卿大夫之辱也と見え。又孔子の語にも。大道之行也。謀閉而不レ興。盜竊亂賊而不レ作。今大道既隱云云。城郭溝池以爲レ固。禮義以爲レ紀。以正ニ君臣一。以篤ニ父子一。以睦ニ兄弟一。以和ニ夫婦一。以設ニ制度一。なども云たでござる。かやうの事にも心付んで。猥りに狂言を放ち。多くの人を誤らすと云は。實に憎むべきことでござる。鈴の屋の翁の云はれますには。皇國の古へは。言痛教も何もなかりしかど。下がしもまで亂るゝこともなく。天の下は穩に治まりて。天つ日嗣いや遠長に傳はり來坐り。されば彼の異國の名に傚ひて云はゞ。これぞ上へもなき優れたる大き道にして。實は道あるが故に道てふ言なく。道てふことなけれど道ありし也けり。そをことごとしくいひ揚ると。然らぬとのけぢめを思へ。言擧せずとは。あだし國

の如。こちたく言ひ立ることなきを云なり。譬へばなま〳〵のわ才も何も優れたる人はいひたてぬを。こと〴〵しく言あろものぞ。返りて少かの事をも。ことゞしき故に。言あげつゝ。誇るめる如く。漢國などは道ともしき故に。却りて道々しきことをのみ云あへるなり。儒者はこれをえしら〔ず〕。皇國をしも道なしと輕しむるよ。儒者のえしらぬは。萬つに漢を尊き物と思へる心は。猶然も有りなむを。此の方の物しり人さへに。是をえさとらずで。彼の道てふとある。漢國を羨みて。强てこゝにも道ありと。あらぬ事どもをいひつゝ爭ふは。たとへば。猿どもの人を見て。毛のなきぞと笑ふを。人の恥て。己れも毛はある物をといひて。細なるを强て求め出て見せて爭ふが如し。毛はなきが貴きを。えしらぬ癡人のしわざに非ずや。と云ひおかれたを。能くよみ。よく味ひて道といふ言の。あるとないとの差別を。よく心得るが宜いでござる。さて又仁義孝悌の字に和訓のないのが。御國に道のないと云の證據だと申すが。此らは餘りといへば笑しいことでござる。但し此方はをかしく思へど。漢學者流は。明說だと云て。やんやと稱ることだに依て。少か辨じおかねばならぬ。其は右に段々申す通り。御國の古へ。道と云て敎ることをせなんだのは。古への人は其行ひが正しく。常で有た故でござる。行ひが正しいと云故は。漢國の謂ゆる。五倫五常の道の正しいことで。此等の行ひが正しくば。名がなくとも實物はあるでござる。誠を云はゞ。五常の五倫のと云たぐひは。人々心に具足して。常と成て居る時は。名を付いふべきことではないでござる。凡て物に名を付ることは。彼と此と思ひ紛れるに依て付るもので。假のものだ。夫故から人も。名は實の賓也とも。又は大道が廢れて仁義の名ありとも云たでござる。譬へば器物などに名を付んでは。彼此紛れて。菓の器を取り寄たく思ふとも。人に命ずべきやうもなく。其を强に云ひつけると。硯をほしく思ふ處へ。盃をもッて來るやうなことが出來る。だに依て。名と云物は假のもので。實が貴いでござる。から國は肝心の實物が手薄いに依て。後の世までも正しからず。皇國の體あッて名のなかッたと。一日にはいへぬ事でござる。凡てからでは何事によらず。名目をば互綱に煩いほど付てあるなれども。既に天地に形

ごりて立たりとか云。君臣の道さへ立がたく。ありやこりやになる程の。大變な國だものを。況んや餘のことは。書面に記した空名ばかりが立派で。其の物はなく。云はば佛經の諸佛菩薩のやうでござる。其の名ばかりで體がなくば。何のかんばしいことが有ませうぞ。然るを漢學者なんど。漫りに其の文面の美しい名目にばかり迷つて。其の心を以て。御國の古を譏らむと致すは。謂ゆる杓子定規なことでござる。皇國は今とても禽獸草木。その外の物にも。名を付んで有ものは。いくらも有る。此らも後より名を付て。名のなかッた前は。此の物が无かッたと云て宜らうか。又古へもろこしの文字が渡て後に。名を付た物も有る。此らも名のなかッた前は。其の物もないと強て云はうか。然れどこれらは目に見える物故に。なかッたとは云へまいが。仁義孝悌などは。捕まへべき形なく。目に見えぬ物故に。強て元來御國人の心になかッたと云て。狂れ言を云ひ放つて有うが。鈴の屋の翁の言るゝには。儒者は其の名に惑ッて。名がなければ其の事もないと思つてをるは。甚愚なることじや。たとへばから國では。人の心の上に。意といひ。情といひ。慾と云ふたぐひの。種種の名があることじやが。御國では只こゝろとばかり云て。件んの名どもは无つたなれども。實は意も情も慾も有ッたに違ない。夫を儒者の云如くならば。是らも漢籍が渡り來て後に。御國の人には意も情も慾も出來たといはうか。此ら皆御國人に固より有ることじやものを。夫は御國ばかりでなく。凡てから國の敎をからぬ他の國々にも。此等はみな元よりほどほどに有ことで。其の名こそ異れども。天竺にても。哩儒と云は忠のこと。烏播迦羅と云は孝のこと。你底と云は禮のこと。あら他と云は義のことじやに依て。其の餘の國々も准て知るがよいでござる。所をこれらの類をも。只漢國の擬聖人が。獨で始めたる道のやうに心得て居ると云は。返す〴〵愚なことじやと云れましたが。此れをよく考へて。太宰はじめ漢學者流と云ものは。心狹き者なる事を知がよいでござる。一體から國の敎と云物は。甚急迫にして。人に爲べき程過て。人の小智の限りに。甚狹く作り定めたのでござる。縣居の翁の云れましたには。春は漸にして長閑なる春と成り。夏も漸にして暑き夏と

成るが如く。天地の行は。凡て漸にして至るものじや。然るを唐人云が如くならば。春が立ば即暖に。夏が立てば急に暑かるべきはず。是れ唐人の敎へは。天地に背きて急速に。情屈なることじや。仍て人の打聞には。才覺有て。聞安く。ことわり安けれども。さうは行はれざるものじや。天地のなす春夏秋冬の。漸なるに背ける故じやと云はれ。又吾が翁の云はれますにも。漢國聖人と云者の所業を見れば。君を弑し。其の國を奪ひ取たる大罪をば覆ひ隱して。世の人に信せられんが爲に。己れが身の行ひを。甚く作り飾りたる强事で。人のなるべき限りを過たるしわざじや。扨又其の敎と云も。又己が子孫の。人に國を奪れんことを恐れ。また人のこれを奪はんことを恐るゝ故に。人の有るべき限りを過ぎて。甚しく設けたる强事じや。然るを天下後世の人。其の智術をえさとらずして。皆是に欺かれ居ると云は。誠に愚なることじや。漢國にても聖人と云者の敎の儘に。能行ひたる人は未だ聞えず。其のよく行ふ所は。皆人々自から備へて。生れついたる物なる事をば知らずして。敎の功だと思ふは。甚愚なることじや。譬へば幅一丈の溝を飛越ろとて。飛やうを敎ふるは聖人の道なり。然れども千萬人の中に。一人も敎への如く飛ぶことできず。皆些に三四尺の溝をよく飛越る。この三四尺は。敎を受ずとも固より。誰でもよく飛ぶところじや。扨この敎を學ぶ者の中に。其德に依て。五六尺ぐらゐは飛ぶものも有りもせうが。夫も終ひに彼の一丈は。とぶこと能はず。又其五六尺をとぶと云ふ者も。甚稀なることで。其の餘は。なま中に飛損じて溝の中に陷り。或ひは腰脚を傷つて。もとの三四尺をさへも。えとばれぬ樣になる者も多く有る如く。聖人の道を知らうとて學問する者。多くは邪智のみ增りて。身の行は。却て無學の輩におとる者のみ。世には多いと云はれました。此の二翁の說を。よく考へ通して。擬聖人の道は。自然の道と云に足らぬことを曉るがよいでござる。人々の年たけゆく儘に。智慧深くなり行くのは。春秋の漸に暖に。漸に冷に成行が如く。常の行の有る限りは。三四尺の溝を飛び越るぐらゐなるをこそ。天地の道とも云べきことだ。管の中より天を見て天を論じ。井に住む蛙の海を知らぬたとへの如く。狹く小き擬聖人の道を。

自然の道なざゝ心得て。夫を記たる書ごもを。仰山にもてはやし居る人を見れば。彼の世俗に云ふ。火筒の中にて握飯を燒うとするが如く。甚をかしいことでござる。

さて又同じ純が說に。凡そ堯舜の道の外に。奇異なる道を立るは。皆左道にて候。禮記の王制に。執二左道一以亂レ政殺さ有レ之候。左道の徒は。先王の世には死刑に行はるゝ故に。其說を口外に出すこともならず候。こあるが。是は堯舜が道より外なる道をば。皆左道なりと云ふ。甚固陋なることでござる。抑ゝ外國の道々は。堯舜が道も。其外諸子百家の道も。俱に戎人の私に制修たるもの故に。實は何れ大道。いづれ左道と云ふ差別なく。各々其の立たる道より云へば。其餘はみな左道なり。佛者より云時は。佛道は大道で。外は皆左道でござる。其は彼の徒の己が道をば。只に道と稱し。儒その外の道をば。邪道又は外道なごゝ號るを以も知るゝことだ。然れば凡て外國の道々は。大道と云も左道と云も。皆其道々の上に取ての私の說で。さう云べき證據はさらに无きことでござる。なほまた其世々々に用られると。癈られるとにて。其世にての大道左道の差別もなきに非ざれごも。是また私のことなることは論なし。然るを漢國にて儒者なんど。推張て堯舜が道を大道と云ひ。諸子百家の道をば左道と申すは。彼の國にては。世々堯舜が道を用ふる貌をして居る故のことでござる。王制の文を引出して論ずるなども。彼の國で有うならば。相應なることなれごも。皇國にいたしては。更に當らぬことでござる。但し西土の制度といへごも。取捨して此方の事に御用ひなさるゝとは。今云ふ限りではないでござる。たとへば天竺の制度を以て。漢土に行て漢人を制しても。誰か其の罪に服するで有らう。孔子も吾學二殷禮一有二宋存一焉。吾學二周禮一今用レ之吾從レ周。と云を以ても知るべきでござる。異國の制度を以て掟ようとするは。甚だ不法だ。更に禮記の文に泥むべきことではない。皇國の道より見れば。擬聖人の教。諸子百家みな左道なること論なし。然るを腐儒者のせまき見識より。何事にも堯舜の道。周代の定めとか云て。其の外なるをば異端邪說と號けて。合せて皇國の道をさへ左道だと云ひ。一向に癈てしまはうとするは。返すゝも固陋なることでござ

る。是は漢籍どもに必則古昔稱先王などある類を思てのことで有うが。此は漢國にてのことで。皇國の人にしては。皇國の正き古を稱へてこそ。道には叶ふべきことでござる。抑々道の體とする處は。唯々君は君として下を惠み。臣は臣として君に忠を盡し。親は子を慈しみ。子は親に孝行をいたし。夫婦兄弟長幼朋友。それ〳〵に。さう有るべきことの正しき處をさして。道とは云べきもので。是は人々皆かうなくては叶はぬことで。皇產靈神の御靈に依て。生れながらにして。誰れもよく辨へ居ることでござる。然れども其眞の道の正いと云は。獨皇國のみのことで。諸蕃國はさうでない。其中にも。漢土は。薄惡の國風なる故に。湯武など云者とも出て。まづ其大本たる君臣の道をさへ破りて。君を弑して國を奪ひ。猶又弑虐の罪を遁れう爲に。天命など云ことを取込み。亦其道を修飾して。君臣の道などは。猶も嚴重に作り添て。種々道のことを書籍に記し。きびしく制度を立て有るでござる。但し夫は。君を殺し國を奪ふほどの。奸智ある者どもの立たる制度なるゆゑ。其文面はよく立派に行屆いて見える。或漢籍に。歷觀自古亘盜姦臣强叛猾逆率多高才博學之士也。と申たは。漢人の語にしては。きゝ處あることでござる。扨一旦己が奪ひ取ては。又人に奪はれまじきやうにとて。智慧の限りを振ッて作つたる道なる故に。殘る處もなきが如く。至て尤らしく。書籍には記しあれ共。其書は無用に世に傳はるのみで守る者なく。此れ其立てたる制度と云も。實は初めに己が破りたる道である物を。其破りたる者がまた人にさうはさせまいとて。立てたる制度なる故に。人は用ひぬので。俗の諺に盛たりこぼしたりと云如くなる故に。此れは用ひざるが尤でござる。今の世の人にても自は放蕩惰弱にして。人の不身持を直さうと搆へ。尤もらしく意見を云たればとて。誰が其云ふことを用ひようぞ。孔子も其身不正雖令不從。と云たは。此意であらう。又不能正其身如正人何とも申たでござる。扨今上に漢籍を用ひ賜ふ處は。其便利なる處を摘取て。少か御用ひなさるゝのみのことで。是は彼の。人を以て言を廢ずとか云類で有らう。然るを儒にのみ拘泥たる輩。非心得を致して其儒道をば。皆から皇國に用ひようと思ふは何事だ。撫我則后。虐我則讎などいふ類の穢らはしき

言は。皇國にては聞さへ忌々しきことでござる。又漢風の事をも。少かは御用ひなさるゝを見て。堯舜の道でなくては治らぬなど云は。甚以て稚いヿで。皇國に御用ひなさるゝ處は。彼の國の定めの百分が一にも足らぬヿでござる。若し悉く御用ひなさるゝことならば。さう云はゞ云うが。是も戎人で有うならば。然も有るべきことなれども。皇國の人にしては。漢國のことを御用ひなさるゝを誇るなどは。餘りに如何しきことでござる。又一筋に擬聖人の道を行はうと思ふ人は。行ッても見るがよい。禮記の內則などを見れば。彼の一丈の溝を飛越るヿを敎る類にて。實に生たる心地も。すまいと思はれる程のヿでござる。然るを凡ての行ひ。一筋に堯舜の道に效はうとする人は。其は混れ无き左道の人で。實に彼の敎の儘に行はうとしては。差支が有て迚もできぬヿでござる。或人傍に在て云には。然か云は。汝が我意を立てようとての固陋で有らう。堯舜の道を行ふとても。其所爲を皆行はむとのヿでは无い。只五常を守り。五倫を正しくせうとのことだと云ふ。拙者の云には。前にも云如く。其名目こそは無ッたなれども。實物は有て。是れすなはち堯舜が道の渡り來らざる以前より固有の道で。更に堯舜が道の功ではない。然るを堯舜が道を强て行はうと云は。彼の禮樂容飾。或は君臣位を更るなどの類であらう。此等のことを行はうとする者は。左道の惡者にして。且は顚狂なること論なしでござる。さて堯舜が道を一筋に取立て大道だと云ひ。皇國に今行はるゝ所を。堯舜の道に違ふ故に左道だといふ。是れを譬へて云はば。人の家に寄食してゐる居候が。折節は主人に代つて。家事をも取賄ひなどするが。後には己が寄食人なることを忘れはてゝ。主人を指て。寄食人なりと。罵るが如く。甚笑しいヿでござる。堯舜が道を大道と云ひ。皇國固有の道を左道と云意。この居候の如し。彼の國の道を皇國に用ひ給ふは此意なり。然るに儒者らが云處を。道理と思ひ信ずる人が。同く皇國の道を左道だなど云は。彼の寄食人が本の居候を忘れ。吾れこれは主人だと云を聞て。實に主人だと思ひ居るが如く。殊にをかしい。吾が徒より見れば。主人と寄食人との差は。いとよく分りて。誰も誤る

事ではないでござる。されば皇國の道より見れば。堯舜の道を始め。諸子百家皆左道なる事論はない。處を執二左道一以亂レ政殺。と禮記に見えて。然る徒は死刑に行るゝとか。穴かしこ〳〵。純なにとて今少し委く王制を引ざりしぞ。其を引出ては。自の勝手に惡き故で有らうが。己いま具さに引出て其好む處の王制に據て云ふでござる。抑その文に折レ言破レ律。亂レ名改レ作。執二左道一以亂レ政殺と有て。此等の罪を犯すものは不二以聽一と見え。また孔子家語にもこのことあり。又同く王制に。行レ僞而堅。言レ僞而辨。學レ非而博。順レ非而澤。以レ疑レ衆殺と有るをも。純皆安んじて犯して居る。其はまづ折レ言と云は。古へをそしるの類。破レ律といふは。漢國をば。蕃國と云べき御定めなるを。中華と稱ふなどが夫でござる。また亂レ名と云は。京を勝國といひ。信濃を信陽と云たぐひ。又改レ作とは。何事をも漢風にせむとする事などを云ひ。左道を執て政を亂ると云は。風俗を變じ國家を危くせうと謀るもので。皇國の御制度にては。此の罪名を謀叛と云例で。賊盗律に。謀叛及大逆者は皆斬ると見えてゐる。純も心は漢國の人で有らうとも。體は皇國の人に混れは無れば。皇國の律令に違背はなるまい。然れば皇國の御制にても。禮記の制にても。其の罪を遁れうとするに。陳ずべき由なく。幸にして罪を免れたと云べきものでござる。抑儒者と云ものは。かほどまでにも義理に昧く。我國の事に疎いと云は。實に奇怪と云べきものでござる。世の人の罪を正さうとして引出したる王制を以て。却て己が罪を己れと正したるは。かの謂ゆる吾が室に入て吾矛を執り。吾れを刺すとか云類とも云べきこと。是また彼が謂ゆる天命の然らしむる所でかな有らうでござる。純また申たには。偏屈なる儒者は。諸子百家を異端邪説と名づけて。其書を讀ざる故に。其道を知らず。一概に取べき處なき樣に存候云々。畢竟諸子百家も。佛道も。神道も。堯舜の道を戴ざれば。世に立つこと能はず候と申た。總ての道を堯舜が道を戴ざれば。世に立つこと能はずなど云たは。實に大笑に堪たることで。先にも浮屠氏のことを云た處に。彼の輩が奴僕を使ふは。君臣の道。弟子を養ふは。父子の道。また法兄法弟あるは。兄弟の道。衆僧を和會して學問するは。朋友の道。また佛事に某

某の儀式あるは禮。梵唄聲明は歌。鐘磬螺鼓を鳴すは樂にて。釋氏も禮樂を捨ては。其道行はれず。備者より見れば。今の僧侶は。皆先王の道を受るにて候などゝ申た。此固陋また云べきやうなしでござる。是らは皆聖人の道を借ざる。他の國々にも。某々に道は有ると云ことの證據には當れども。何として純が云如きことに當らうぞ。此れは人々當の行ひ。己が尊ぶ聖人の書に記し有ることと共と。似たることのあるを見て。斯思つたもので。此胸中の狹きことと思ひ計られるでござる。少く似たる處あるを以て。斯云はうならば。佛者よりも。諸子百家のことを云べく。何れの道々よりも。其外の道々を指て。さう云べき物でござる。其故は諸子百家の道。何れも五常を廢て君父を弑し。盗賊をせよと教へたる道はなきことゆ故に。何處も同じ筈のことでござる。猶その道々の書を見て知るがよい。その內擬聖人の教のみは。うはべこそ立派に云てあるなれども。其行ひの跡につい
て是を見れば。右に段々申す通りの訣だに依て。是こそ人に君をころし國を盗むことを教ふるの道と云ものでござる。かやうの事をも辨へんで。諸道何によらず。聖人の道をいたゞかざれば。世に立ことは能はずなどやうの強言を云は。譬へば小兒の我家の上に照る月を見て。此れは我家の月だと云が如くの甚稚きことでござる。月は至らぬ隈なく。萬國を御照しなされる物を。我か家ばかりの月と思ふがをかしい。純が說は是と同じ理でござる。天地の間の萬國。漢土に言通はせざる國。何ほども有りませう。聖人の化流沙の西に至らずと云言もある。萬國上古よりの人。固より活物で。産靈神の御靈に依て。自然に男女の交合を始め。總てのこと知らんでは成らぬ限りをば知て。其の通りに爲し來つたるものでござる。然るを純が云如くならば。聖人道を作らぬ以前は。萬國の人生れたる儘にて。木偶土塑人の如く。動きさへせずに居たるものと思つた樣子だが。なんと小兒の如くでは有まいか。稼また世に漢學に迷つたる者どもが。彼の國の書どもに。中華は萬國の師なりなどゝ。戎人の狹き心より云出たる。漫言を聞て。いかにも然ることゝ心得。漢國の教へに非ざれば。諸事を爲し得ぬことゝ一向に思ふは。甚しき愚昧なり。漢國の教と云ものは。我が皇國の正しき上より見れ

ば。知れたることを事々しく教へたるもので。この事は湯淺常山の説に。聖人の教と云ものは。名目を立て弟子どもに固く守らせ。大切にする處は。大抵は只今の子共に禮を教る如く。飯は喰こぼさぬものぞと云に同じかるべし。道理の精微なる事とは。曾て覺えぬなりと申てある。純と同流の學者にも。かやうな面白き見解の人も有るでござる。然るを强て堯舜の教に非ざれば。道を知らずと云ふは。例の文辭に迷つたる痴心か。譬へば爰に衣冠正しく裝たる人と。又外に痴人が一人ある。其衣冠正しき人が出て。件の痴人に向つて言には。汝ぢ空腹に至つたならば。則ち當に食を喰ふが宜からうと敎へた處が。痴人が聞て大きに悅び。此は忝き人かな。此人の教に非ずば。吾れは飢て死べき處で有つたとて。太じく尊く思ふが如く。是れは痴人なるが故でござる。空腹に至れば。當歲の小兒といへども。母の懷を開て乳を探るではないか。されば教を受ずとも。知るべき事は必ず知て居るもの也。此の衣冠正しき人と云は。擬聖人どもの書物にたとへ。痴人と云は。純を初め。其道を奉ずる輩を云のでござる。先にも賀茂翁の説を引て申たる如く。春秋の漸々に暖に。漸々に冷になり行く心で。聖人の教の如く。急速に迫りて教へずとも。人たる者は誰か漸々に。其爲べきだけのことを知らずに居やうぞ。今の世に稚立より書を讀で。文義も曉る迄に至らざる内に。讀書を廢め。或はまた更に書を讀だこともなき者も。時至れば相應に五常五倫の道をも行つて。世に立行をも思ふべきことでござる。或人申すには。今の世學問をせぬ人。相應に道に外れたることもなきやうに行ふは。聖人の道渡りてより。千有餘年行はれて。世に徧滿したるが故で。是れ儒學の功に非ずして何ぞと云ふ。篤胤云。其は儒者の常談で。一通りは誰もさう思ふやうなれども。深く思はぬ僻言でござる。儒の道の渡り來らざる古。人の所行いと正しく。自ら道に叶つて居るは。何故で有う。これ知ずして叶はぬことは。固より知て居るのではないか。或る人又云。然らば學問は廢よとのことか。拙者云。學ぶべし〳〵。世にはまゝ生れながらの眞心もてするに。學問せずとも。何事か有らむといふ人も有れど。此は彼の子路と云ふ。から人の申たる言と同じく。心地よげには聞ゆれども。

さうでない。其はまづ誰も身に付たる。五倫五常の道は。學ばずとも知て居ようが。其身の本たる親先祖の事を知るには。學問ならでは知ることは能はず。人として人の大本は。何なるものとも知らずに居んは。世に口惜きことなれば。勉め勵みて學ぶべきこと勿論でござる。然れば漢國の學は。姑く後にまはして。まづ古を學んで身の本を知り。又よく古への正き御代の意を辨へ。其眞心を正く固くして後。漢國の事をも學んで。古學の奴に使ふべきものでござる。猶いはゞ禽獸にさへ。烏に反哺の孝あり。鳫に兄弟の義があり。猿には父子の親あり。又虫にも蜂蟻などには。君臣の義もありなど云ども。漢籍にも何くれと見えてある。此等も堯舜が道の及んだと云もので有うか。人として堯舜が敎に非ざれば。道を知らずと云のは。國に對し。先祖に對し。禽獸にも劣たる不法者と云べく。純などの倫則ちこれでござる。殊また前に申たる純が說の。堯舜の道に非ざれば。世に立こと能はず候とある。其文の續きに。されば中華の古代も日本の今の世も。天下はいつも堯舜の道にて治り候云々。諸子百家を悦び。或は佛道。或は神道を好むは。其國家の亂るゝ端にて。譬ば病なき人の。妄に吐下攻擊の藥を服するが如くなるべく候とある。此中華の古代と限て云たは。甚笑しいことで。堯舜が道は。西土にては。古代にばかり益有て。後代には益なき道で有らうか。夫れを大中至正の道とは何ごとだ。彼の頭隱して。尾を出したる譬への如く。純爰に至て大きなる尻尾を出したでござる。それに付て思ひ出たる笑しき談がある。或山寺にいつの頃よりと云こともなく。年久しく庵主と成て住たる。老法師が有た處が。朝夕佛に仕へることいとまめやかで。讀經の聲撞木の音たゆることもなく。懈怠ないに仍て。聞傳ふる人毎に。いみじく尊き聖だと云て。甚やんごとなきものに譽尊んだと云ことでござる。然るに此法師。或夏の夕つ方。佛にむかひ讀經して居たる處が。谷間より吹上る風の。いと心地よく涼し氣に覺えて。そゞろに眠りを催し。手に撞木を持たるまゝ。我を忘れて打倒れ。其の處に寢てしまッたでござる。近き邊りの者ども。夫とは知らず。此法師に物とらせうと申て。打群て來て見たれば。いと大なる狸が尾を出し。衣を著たるまゝ。打伏て

居たに依て。人々始て此法師の。老狸で有たることを知たと云物語があることだが。純も是と同日の談と云べく。甚笑しいことでござる。堯舜が道を功あるさまに云うとばかりすれども。さすがに彼國の世世に。聖人の道と云を用ひて治つたることなく。亂がはしきを思へば。古今に渉りて。大中至正の道だと。受張て云かねたとと見えるが。これは然も有るべきことで。未委くは考へ通さゞれども。漢土の世世に。五十年とよく治つたることは有るまいと思ふ。されば漢土の古代は治つたと云も覺束ない。況て其後のことは。上に段々云が如く。今何の國に用ひたりとも。何の益が有ませう。然るを強て歡び好むときは。只國家の亂れる端でたとへば病なき人の。みだりに吐下攻撃の藥を服するが如く。更に益なきのみに非ず。終には廢人となるべきことで。心すべきものでござる。扨純また樂のことをも委曲に辨へたりげに申たなれども。彼が著はしたる和讀要領などに。皇國の音聲を。侏離鴃舌とさへなし。漢國の音聲を正しいと云たるが如き僻耳では。何事も覺束なきことでござる。禮記の樂記にも。知レ聲不レ知レ音者禽獸是也とも。また不レ知レ聲者不レ可三與言二音。不レ知レ音者不レ可三與言二樂ともある。此者はやくより。詩文の師とならうと云て。勵みたるほど有て。詩を賦り漢文を書くことをよく得たる處は。皆人も知たる如く。實に一つの門戸を成たでもあらうかなれども。道を學ぶ者の上から見ては。甚以て卑く愚なることでござる。夫は禮記の學記にも。記問之學不レ足三以爲二人師一といひ。又外の漢籍にも。記問文章不レ足三以爲二人師一。以レ所レ學外一也とも云てある。詩文の如き技藝をよく得たればとて何で有らう。此れは俗間に時行歌を作り。或は豐後節の文句を作ることを。業とする者などゝ。同等のことで。更に國用には益なきことでござる。然るを何ぞ道の師とする程のことが有らう。是らのこと少し心を用ひたならば。誰しの人にも出來べき筈のこと。技藝に名あることは。心ある人は恥とすることでござる。扨この元祿寛保の間は。未だ學問の道大いに開けざる時代なる故に。純なども學者の頭數には入りたれども。今や學問の道大にひらけたる。其眼をもて。灑らが唱へたる古學とか云說どもを見るに。いと片腹いたき杜撰のみ多

く。未だしきものでござる。今の世にも鈍才なるものには。渠等が學風を愛慕ふ者もまゝ有れど。是は以前高名なりしとの。世に流れ來りて。未たその說の稚きを悟らざる故の事。此後漸々に彼らが學風の廢りゆくは。眼前のとでござる。今の俗に。己れ儒者だからとて。實には道を尋んものともせず。其身もち放蕩惰弱にして。詩文をのみ主といたし。只博覽多識と呼れて誇らうとのみ構へ。妄りに人の子弟をさへに。其黨に引入れ。却つて道を尋ね。律義なる學者をば。見識せましなど云て。片羽もの丶如く云ひなし。謂ゆる彼の人の子を賊ひ。世間の風儀を惡くするは。悉く純らが遺風にて。あはれ始皇が居るならば。穴にもと思ふばかりなる儒者どもの。世に多きは。みな純が輩の流したる惡學風でござる。譬ひいかほど勝れたる人にても。稀々には誤りなきにも非ざるを。純は第一に。大本立ざる學問故に。非事のみ多いでござる。又經濟の事を云たにも。不經なること少からず。孔子も不レ在二其位一不レ謀二其政一とも有る。純が黨の儒者にも。經濟を云へば。天下を玩ぶ意ありと申て。生涯云はなんだ者も有るは。宜なることでござる。また宋儒の學を唱ふる儒者をば。聖人の旨に違つたと云ひ。口を極て罵つたなれども。其流の輩も。大概は純が如き僞儒にてはなく。春秋の意を守りて。我國を尊み。山崎闇齋。淺見絅齋などの云た說には。甚も勇ましく。猛く雄々しき皇國魂の言も多いでござる。純が學風は此等と表裏で。若しや昔元の世祖が如く皇朝を襲ひ奉らうとて。西戎より攻來ることも有うならば。中華の天子に射向はんこと。東夷として有まじきことぞなど云ひふれて。歸命投化と心得。甲を脫ぎて西戎の膝下に屈まり。國を賣うとするは。かやうの儒者で有うかと思はれる。か丶る者をば佛者すら。獅子身中の虫と號けて。いとも〳〵惜むことでござる。仁王經と云佛書に。乃是住レ寺護二三寶一者。轉更滅二破三寶一如三獅子身中虫自食二獅子一非二外道一也と云へり。純はよく此虫に似て居るでござる。扨人學ばざれば道を知らず。など云言もあれども。學問も純が如く學んでは。大に國の害となることで。更に學問もなき農夫山賤の類は。一向に我が國の尊くありがたき物なるとを心得居て。外に思念なき物でござる。或漢籍に僞儒奔二競聲名一。

不レ如レ保ニ細民之廉恥一。と云てあるは然ることでござる。たとへば。皇國の書は更にも云はず。漢籍十三經廿一史。諸子百家。古今小說の書。五千餘卷の佛經。皆闇誦して有らうとも。國忠の志なく。大本たたざる學者は。書淫蠹魚の類にて。農夫山賤にもはるかに劣れるものと云べし。或人の申すには辨道書の文意は。小角復ニ友人一書中の語を編次したるもの。親族正名は。伊藤氏が釋親考を取り。和譜要領は。羽倉氏の讀書指要を採たのだと云ふ。また或書にも。聖學問答には。西小角が說を。生剝にしたることのみ多いとて甚く呵り。又或書にも。辨道書中に。釋氏のことを云たは。増穗大和が八部書の說を。編次したのだと云たが。實にさもあらば。井澤蟠龍が云たる如く。彼信天翁と云ふ鳥の類にして。純は學者の風上には置まじき。穢らはしきをこの者でござる。其は蟠龍が說に。他の說を以て。我說として誇るは。志士のあへてなきことゝす。弊習また歎くべし。仍て思ふに。丹鉛總錄に。信天翁は鳥の名。湨中に有り。其の鳥魚を喰へども。みづから取ること能はず。魚鷹の取て落せるものあれば拾ひて喰へり。蘭廷瑞が詩に。荷錢荇帶綠江空。唼レ鯉含レ鯊淺草中。波上魚鷹貪未レ飽。何曾餓死信天翁とあり。他の說を我が說とする者は。この信天翁に相似たることと申た。是に付て己また謂ふに。此風の學者。俗間に多く有ものなれども。然る者は決めて學問も。蹈占たることなく。語相て見るに。いと未たしく。心も淺々しきものでござる。其者どもが人のよき說を盜みて。己が說なりと誇り。他人に談るをきくに。自の說か人の說かの差別は。能く聞分つて。譬へば鼷鼠が磐石の傍に在て。我れこの石を負て來たと云たが如く。大概は水際立て聞分るもので。心ある人はみな笑ふことでござる。其の上にもをかしいは。爰に聞たることを彼に語り。かしこに聞たることをこゝに談りて。其のさま腹惡き嫗が。人の間言を云あるくが如く。何か事知り顏に立廻る者もまゝ有るが。かやうの者を俗には才子と云。一體本に養ふ處なきもの故に。其よき說を語りきかせたる人をば。倏く忘れて。又其人に對して。其聞たることを我物にして。をこがましく談ることもある。とにかくに此癖は。心汚きわざなるは言ふに及ばず。甚愚なることでご

ざる。かゝる汚穢こゝろ有りながら。己れ道を得たり顔に。一向に孔子を信じ候。孔子も我に印可して下さるなど申たは。餘りに押の強いことでござる。純が如きものに。印可するやうな孔子ならば。更に好人とは云はれまい。是は或漢籍に欲スルレ譬シトレ偽ヲ者ハ必ズ假ルレ眞ヲと云へる如く。みな愚人を誘はうとてのたばかりごとでござる。實に孔子を信ずることならば。其敎をこそ守るべきことなるに。更に其意とは異にして今の世の賊僧どもの。己が道の五戒をば。さらに持つと能はずして。漫りに釋迦を尊み貌するとと同じことだ。悄むべし〳〵。

出定笑語講本上之卷

平田先生講說　門人等筆記

さて是れは出定笑語の大意で。演說致すことは。まづ第一に天竺の國の水土風俗より致して。其國の始めの傳說由來。又釋迦一代のあらまし。又もろ〳〵の佛敎一部一冊として。釋迦のまことの物でなく。殘らず後の人の記したる物なる慥かな論辨。さて佛法が諸越へつたはり。夫より御國へつたはつたることのあら〳〵。また御國にある所の諸宗の始まり。及びその宗旨々々の立てかた。さて佛法の本意。また當時世にをる者の佛法の心得方などのことを申すのでござる。但しわが師の翁は。とかく漢學びの。人心をさくじり立たしめ。わるさかしらに致すことをば。返す〳〵論されましたなれども。あまり佛法のことをば云はれず。たゞ聊かばかり佛の道と云ものは。世の女わらはべを欺くが如きことなれば。論ふにも足らぬ物じや。などゝ云はれたぐらゐのこと。また「釋迦といふ大をそ人のをそ言に。をそ言そへて人惑はすも」。また「佛書よめばをかしきこと多み。獨笑ひもせられけるかな」。これは實に左樣のわけではあるなれども。今はかやうに行はれて。至らぬくまなく。世に有りとある諸事諸道。何によらず其意の混雜せぬこともないやうで。夫を能くしらげわけねば眞面目の見えかぬることが多いに因て。その根本のわけも心得ねばごふもならず。其故にあらましながら。其佛道の眞面目をありのまゝに申すのでござる。但しこの佛道と申すものは。いと。をさなき物ではあるなれども。其をさなき所が人氣に叶ふと見へて。世に信じ人も多いから。これは甚だ申しにくいことでござる。なぜなれば。その信じてをる人は。みな佛者どもの爲に。計られて。實は佛者共がよきさまに取繕ひて。其誠のことを云ひ聞かせず。鉛を銀じやとさとしおくことを知らず。その闇樂たるそら言を信じて。この方が佛經に因て。その正實をいひきかすをば。佛法を謗るなどゝこゝたえ。以の外に腹をたつでござる。正實のわけを云ふをばそしりと心得。坊主のそら言をば眞と信じをると云ふは。さて〳〵迷ひといふものは。しかたの无いものでござる。この佛法の眞實を云つたならば。おこる

人が有らふと云事は。云はぬまへから。この方も。さし心得て。居たるゆゑ。實はいふまいとさへ思つたなれども。いはんでは。事がわからずと。先年も心遣ひをしつゝ云た所が。果して一席二席きいて。それを攝にさへた人なども兩三人ある。此方のいふ所は誇ると云ものではない。眞の所を云ふのじやが夫程に心遣ひをしての演說を。そしりと聞取るは。扨々白い黑いの分からぬことゝ。腹さへ立つでござる。これはたとへば出家の輩のいふ所は。澁柿を甘いと云て。人にだまし。食はせておくやうなものだが。その澁柿をよい氣に成てくひならツて居たる人に。それを氣の毒じやと云て。眞の甘柿をくはしても。とんとくはず。その澁柿に食ひなれて。けツく。其あま柿をば顏をしかめて。くはぬやうな物でござる。わが鈴の屋の翁がよまれたる歌に。「まが神い世人の耳かふたぐらむまことかたればきく人のなき」。と讀れた通り。こりやかの古道の大意にあら〳〵申たる如く。神にも善惡邪正さま〴〵あるが。其あしく邪なる神にまじこられ。耳をふたがせ。眞のことを。きくことならぬ人々と見えるでござる。釋迦の。縁なき衆生は度しがたしと云たのも。かやうの人々のことでも。ありませうが。そのくせ出家の方でいふ所は。御國の神をば佛法の下役の如く。卑めてあるが。それをば何とも思はんでゐるでござる。そも〳〵古への神々は。天地をさへに御造りあそばしたる程のことで。且は恐れながらいはゞ。自分の先祖じやが。それをば賤しめられても何とも思はず。釋迦はたとへ眞に尊きものにもしろ。外國の人じやものを。そこを畏くわが先祖とも。身の本ともまします。わが國の神に見かへて。上なきものに。諂ひ仕へると云は。ちやうど我が君わが親をすてゝ。他人を尊び。其の他人への諂ひが有て。かへらまにわが君我が親をそしられても。何とも思はず。且ともども我が君わが親をそしり。たまさか自分の親を尊めと勸むる人をさへに憎むやうなものじやが。返々も扨々世には。さかさまな心の人も。あればあるものと。覺えず肩で息をする程のことでござる。然れども。そんな邪なる人はそれにしておいて。ごふ考へても。佛法のことも。いはねばならず。いでや云ふと成ては。もはや。かのぬれぬうちこそ露をもいと

へ。かやうとても濡れかゝッては。あゝまゝよ。しヨことが。无いと。明らめて。そしりは致さぬが。その正實と云て。佛法のまことの所をありの儘につくろはず飾らず。竹を割りたるやうに申するから。いづれも。其おこゝろ得で。かならず腹をたゝれぬがよい。さてまた別段に申すことがある。それは古へよりからやまとのものどもが。我おとらじと。生まごしやくを。はたらいて。佛法を論辨誹謗は致したなれども。みな佛書をよく見ず。聞はつり。見はつりて。かの胡椒丸のみといふ樣に。只々大きな聲をして。云つたぐらゐのことでござる。それ故。いひあてたと見える論は。とんと少いでござる。凡て論辨と申すものは。我が家の說を以て申しては。先で承知は致さぬものでござる。これは蘇子由といふ漢人の申たる語に。善與レ人言者。因二其人之言一而爲二之言一則天下之辯者服矣。與二其里人一言而曰。吾父以爲レ不レ然則。誰肯信以爲二爾父之是一云々。辯二夫異端一而終以不レ明者。爲レ不レ務レ辯二其是非利害一而以二其父一屈レ人也。と申したが。誠に尤な。いひかたでござる。それ故。拙者の。諸道を論辨いたすに。儒道は儒書で論じ。佛道は佛書で論辨いたすことでござる。これは凡て何事にも。其本を知て論ずるときは。向ふへまはッた者も何とも云こと出來ず。また本をきめさへすれば。先の枝葉のことは。何のことも。わかりがよく。事に因ては。本をさへに。よく取極むれば。末はいはずと。聞かずと。自にわかることも多いからのことでござる。たとへば鼠をつらまへるに。足や尻つぼをこはぐ〳〵につらまへては。振返つて。喰ひつきもする所を。胴腹か首筋の所を。ぎユつと。強くひしぎつけると。喰つくことも。ひッかくことも出來ず。其中に目玉が飛出すやうなものでござる。夫故。この方の演說は。餘りこまかしきことは。いひませぬから。そのこまかしきことに。それに准へて。知るべきことでござる。○扨まづ天竺の國は。誰もしつての通り。御國からは漢土を隔てゝ。西の方にある國で。すなはち西洋人の五大洲と名けたる。その第一の亞細亞と立たる州の內でござる。さて其國がらのことは。世のをこ人どもが。何か結構な國のやうに心得違をして居るけれども。實は。もろこしよりも。また餘程わるい國でござる。

然るを坊主どもの。それを。よざまに。取成て云ふは。どうした事ぢやといふに。これはちやうど。漢學者が。何もかも漢土がよい〱と。最負すると。同じことで。自分の業とする道の本尊。釋迦法師が本國ゆゑ。取繕ひてのことでござる。また中には。實に天竺は。よい國じやとばかり。心得て居た僧も。昔から。いくらも有つたことでござる。夫らが言觸れたことゞもが。世に弘まッて。尋常の學問せぬ人などは。どんと誠の事と。心得たものでござる。中に甚しきは。天竺を天じよくとおぼえて。直にこの青く見ゆる空のことじやと心得て。段々朝鮮から漢土へ渡り。それから行々すれば。行れもすることのやうに。心得てゐるものも。多くべらぼうには。あるでござる。因て今。證據たゞしく。彼國がらのことを。まづいはふでござる。さて佛法のわけを。とくのに。その國がらのことは。いらぬやうに思はるる衆もあらうかだが。一體國々の道々と云ものは。其の國相應に組立たることが多き故。その國風のわけも。心得て居らぬと。わからぬことも。受ひきがたいことじやと思ふ様なわけも。あるものでござる。

夫故あら〱申すので。えへん。さて據と致して申すものは。大唐西域記と云ものでござる。此書は漢土で唐の代と云た時分に。その二代目の太宗といふ王の。貞觀三年といふ年。皇國の舒明天皇元年の八月に。玄奘法師といふ僧があッて。佛法でもいはゆる大乘といふ高い所が。傳へたいと云て。漢土よりは何千里の難所をこえて。天竺の國へ行て。國中こと〱くあるいて。さがしごとをして。見たり聞たりした。國風摠體のことを。具に記して來て。さて同十九年正月に。本國へかへッて。取て歸つた所の佛經はもとより。今の國風摠體をしるして來つたる書をも。其王太宗へ奉つたが。夫がこの大唐西域記でござる。此の功に因て佛法の方では。規摸として。きつく重むする所の三藏といふ位になッた故に。世に此僧のことを。三藏法師と云でござる。なんと夫程。この人が佛信心で。誠に險岨艱難千辛萬苦。云にいはれぬ程の難儀をして。天竺をあるいて。佛法を受て來て。そして。あくまで佛びいきといひ。其の佛の本國のことぢやに依て。どうも。好く。いひたくて。ならなんだらうが。どうも。さうは云はれぬ。わる

い國ぢやに因て。ありの儘に。かいたと見えるでござる。因て。かの國がらの事を見るには。是程たしかなものは無い故に。その西域記に。玄弉の書て置たあらましを。かいつまんで申すのでござる。まづ天竺の異名を。身毒とも。印度ともいふ。印度と云は。天竺の詞では。月のことで。彼國の國形が。北は廣く南が狹くて。ちやうど半月の形してゐるに因て。國の名を。印度と云たものでござる。西洋の人は。インデヤ。またインナイイア。またインナイインなど云ふ。共に言の轉訛つたのでござる。さて右の如く。月の形してゐると云の心を以て。漢土では。かの國をさして。月氏國ともいふでござる。又西域記の一説に曰く。印度者言諸々群也云々。故謂二印度一といへるは。後人のいひ出たる説にて。信ずるに足らず。本文に取たる説を正とすべきことでござる。さて漢土などよりは。又ひとかさ廣い國で。東西南北と中と五つに分けて。これを五天竺と云ふ。それが。又こまかに。わかッてゐる。采覧異言に引く。萬國傳信記事に云く。西はベルシヤに界ひ。北は韃靼に連り。東は支那に至り。南は印度海に臨めりとある。さて其風土のことは。阿蘭陀の方で。委く考へ。よく〳〵見極めたる天文地理の説に因て見ると。天の度數で。ちやうど赤道線と云て。日輪の御通りなさるゝ道に近く。已にかの國近くの島々には。赤道の直下にあたる島々もある程のこと故。大の熱國でござる。夫故に穀が一年に三四度もみのる。草木も。四時いつと云ことなく。花が咲たり。實がなッたりする。それ故西洋人は。この國を天の下の花圃と云といふことと。采覧異言に見えてある。また沈香や丁子胡椒などのたぐひ。香氣の高いものゝ出來ると云も。熱國故のことでござる。人間も殊の外。下品で。熱國ゆゑ國人がみな黄黑く。いはゞ土氣いろの。もッとわるい色ざしじやといふことでござる。西域記に。天竺の一國々々の風俗を記す度に。顏色厘黑と云ことが。いく所となく。いッてあるは。この事でござる。また采覧異言にも。土人の色。或は黄なるあり。或は黒きありと云てある。すでにくろんぼの國といふも。この國内で。則釋迦の生國迦毘羅衛國の西南の界にある國で。かの崑崙といふ國がそれでござる。天竺人の黒き中にも。この崑崙國

の人が。別して黒いによッて。西洋人はすべて色の黒い人を。コンロンボと云でござる。御國に於てくろんぼと云は。この言のうつりでござる。釋迦の生國は。この隣じやに因て。その黒きことは同じことでござる。熱國故みな黒いのでござる。また西域記にも。時特暑熱。地多泉濕と云てある如く。とかく暑熱の烈き國は。濕氣もまた強いもので。夏物に。かびの生るでも知れることと。暑熱の氣に蒸れて。色色とわるい虫獸も多く。わるい病もある。さて家の住居方なども。上下あまり隔がなく。とかくぢゝむさいことどもが多い。其中に。變なことをするのは。地に牛の糞を塗て。それを清淨だと。したもので。その。これを塗る心は。牛の糞は。日に照つけらると。ふと嗅では。麝香のやうに。にほふからのことゝ見えるでござる。また時々の花を取てまきちらすこともある。衣服は裁製をせず。染もせず。白いをよしとして。横巾のまゝ。男は腰から繞らして腋のかたへ絡ひつけ。右の肩を袒いで居る。又女は衣を襦ひて下し垂れて。これは肩をも隱してゐる。髮は中で結で。餘りをば垂れ下し。國王や大臣などは。首には華鬘と云物をかぶる。また寶冠といふものもかぶる。則觀音などの。被てゐるものが。それでござる。身に纓絡に環や孔雀の尾などを。つけるもあるけれども。王家の次にたつ。婆羅門などいふ。家柄の者などには。死人のしやれかうべを。纓絡の飾にするものも多くあると云ことでござる。また耳たぶへ穴をあけて。鈌をかける。達磨などの耳の鈌がそれでござる。また悉くの人が徒跣であるく。履をはいて歩く者は。とんとないと云ことでござる。いかにも諸の佛に。履をはいて居るのをば。見たことがないでござる。またからだには。栴檀や鬱金の類ひ。諸の香を塗ることでござる。なぜ。そうするといふに。濕熱が強くて蒸るゆゑ。自然とかの國人は。からだが。臭いからのことでござる。また髮の縮んでをるのも。熱國ゆゑ。おのづから。ちゞむのでござる。また釋迦の生國迦毘羅衞國といふは。印度にある。一つの島國で。廻りが。やう〳〵三百六十餘里（御國ノ七十餘里）と云でござる。これをセイランと云でござる。增譯采覽異言に。この島を去赤道北四度とあるから。別して燒るやうでござる。則釋迦の修行し

たる。靈鷲山といふ。山が有て。古跡も存して。あるそうでござる。さて此國の。近頃の風俗を。采覽異言によッて見れば。支那法師が渡つたる時分とは。餘程風俗も移つて。男子は上身赤膊圍絲布手中加以厭腰。髮鬚並滿身毫毛。皆剃去止留其髮用白布纏首。女人髻綰腦後不圍白布其新生小兒。則剃頭。女則腦後不剃。云々。若欲人喫飯則於闇所潜食。不令人見などゝあるから。大きに風俗もかはッたでござる。また面白いこともあるは。此の國人が大便しても小便しても。其あとで前陰も肛門も。是非濯ふといふこと。西域記にありますが。これは今以てその風俗が遺つてゐて。釋迦が出生したる。カビラヱ國は。とくに。その子孫も。みな亡びて。今はかの崑崙ぼの國と共に。阿蘭陀に。せしめられて。佛法も大半亡びて。切支丹宗に成て。しまッたる故。長崎へ來る。阿蘭陀人が。召仕ひに。いつも。彼のくろんぼを。つれて來る。なぜなれば。人がおろかで。至極骨を。をしまず。働く故じやと云ことでござる。扨その阿蘭陀人の連て來る。くろんぼめが。今以て昔の通り。大小便のあとで。やッぱり。尻や前陰を洗ひをる。これに付て。をかしい咄があるは。先年來た。くろんぼめがおのが。子僧くたんぼを。つれて來たそうでござる。所が二三年も。長崎に。ゐるうちに。その子僧が。とかく皇國人の眞似をする。そこで。其の親くろんぼが。叱つて云ことには。おのれは。其樣に。日本人のまねを。しをるが。後には。尻も洗ひをるまいと。云たと。いふことでござる。是はなるほど。一言もないことでござる。さて其の洗ふ器は。壺の樣に。こしらへて。さげてあるく。此を彼のくろんぼが。國へ歸る時に。棄て行くさうなが。何か。形のへんな物ゆゑ。好事な輩が拾つて。庭へでも。おいたり。彼是年を經るうちに。江戸の茶人などの手に渡り。江戸の人は。こんな物とは。つゆも知ず。其の形にほれて。自慢と貯へ。床へ直して。花生にして。有たことを見たるとて。森羅萬像が紅毛雜話に。かいておいたが。いかさま。これはいやな事でござる。さてまた。天竺人は。煩ひついても。國風で七ヶ日が間といふもの。粒を絶てゐて。その内に。なほればよし。なほらぬと。そこで藥をのませる。また死人の葬かた

は。三つのわけがある。第一が火葬。これは皇國でも。持統天皇の御代に。道昭といふ僧が。彼の國の法をまねて。仕始めたことで。今も爲る迪り。また一つは。水葬と云て。流川へうッちやる。次が野葬といッて。野へ棄て。獸に飼せて。しまふでござる。又きつく。年がよッて煩ひつき。迚も今度は。よくなるまいと。當人も思ひ。人も。さう思ふ樣になると。親故や知友が。より集つて。樂を奏じ餞をして。其上で。舟へのせて。海川へ流し出すと。中流にして。其人が。みづから溺れて。死んでしまふでござる。かうすれば。天へ生ずると。心得てゐると云ことでござる。扨これで。玄奘法師の西域記に。記してある風俗の。あらましでござる。但し右申すやうな風俗どもは。すべて下國の風俗で。夫はしかたはないが。中にけしからぬことは。觀經といふ佛經によッて考へたる所が。釋迦の時分までに王にして。父を害するもの。一萬八千人。また子として。父を殺すもの。一萬人とも記してある。是に因て天竺の國がらを。知るがよいでござる。尤かやう。亂りがはしかるべきわけは何事も。始まりが大切なものであるに。かの國に。人の出來たる始めが。亂りで有つたからのことでござる。夫はまづ。彼の國の人物に四つの差別がある。これをまづ。心得にヤなりませぬが。それはちやうど。こちらの詞でたとへば。士農工商と云やうな。わけでござる。まづ第一を。刹帝利といふ。これは代々王となるべき家。で。則ち五天竺七千餘國の國々の王と成てゐるでござる。第二を婆羅門といふ。是は飜譯していへば。淨行と云ことで。則淨き行ひとかく詞で。國から相應に有來つた學問でもして。段々家を傳へるものでござる。第三を毘舍といふ。これは商人でござる。第四を首陁といふ。是は農業のことを爲る者で。いはゞ百姓でござる。刹帝利。婆羅門。毘舍。首陁。これを天竺の四姓といふ。まづ此の四つをよく心得て。居べきことでござる。扨この刹帝利と云て王と成べき家がらの起つた所以は。長阿含經といふに。彼の國の古傳が委しく記してあるが。夫によッて。其あらましをいはゞ。世の初天地の成ようとする時に。大水彌滿たる所が。風が吹て。それを結構で。さて此の世界が出來ると。化生といッて。人が。虫のわ

くやうに。したゝか生じて。其砌は身が光があッて。飛行自在で。男女の形も。そなはらず。また尊卑親疎の差別もなく。また其食は歡喜(ラスト)爲(ル)食と有て。うれしひ。よろこばしい。といふことを。食として。居たと。云事でござる。これが變なことで。とかく佛經には。こんな。をかしな事があるが。ごふして。歡(よろこ)びを食つたものか。彼の獏(ばく)といふ獸が。夢を食ふと同じことでござる。扨かくの如く。元一所に。うや〳〵と虫のわくやうに。衆共に生じたるもの故。衆生と云とある。是がそも〳〵。衆人を。ひろく。衆生といふ佛語の出處でござる。さて右の如く。この衆生どもが。おまんまにも。おかづにも。歡びをたべてをッた所が。自然と地より蜜のやうな物が涌出たでござる。これを地味といふでござる。そこで彼の衆生どもが。以(テ)手試嘗とあるから。氣味わるながらに。ちョいと指をつけなめて。見たことゝ見えますが。やッて見ると。味(あぢはひ)甜(うま)く。今まで。歡びを食てゐたとは。きつい相違なことで。どうもうまくて。たまらぬから。こゝでかの衆生どもが。元來蛆(うじ)のやうに涌たる者ども故。蛆のやうに。よりたかッて。頬(つら)ッゝこんで甞(なめ)るもあり。手でしやくッて。なめるもあり。因有(テ)勝負(リ)便相是非(ス)。と有るから。大きにあらそひが出來て。いやおれが一と口なめる中に。おぬしは。二たしやくり。なめやッた。などと云ふて。犬の群聚してゐる所へ。汁の餘りでも。棄たやうに。嚼(か)合ひなども。致したことゝ見えるでござる。扨こゝに悲しき事は。右の物を。しやぶッてこのかた。各々身の光りもなくなり。飛行自在も止み。其上意地を汚(きた)なく。多くしやぶッた奴(やつ)程。顔色麤(あら)悴(かじけ)たといふことでござる。彼是(かれこれ)する中に。かの蜜のやうなものが。みな消て。なくなッて。しまッたでござる。是に於て。皆懊惱咄哉とあるから。大きに力をおとして。泣わめいた事と見えるでござる。これは尤なことでござる。此後に。又地皮と云ふもの。また地膚といふ物も生じて。それをも。右のごとく。爭ふて取食たと云事もありますが。其事はまづおいて。その二種の物が。また滅つてしまふと。後に自然と粳米(こめ)が生じたと云ことでござる。衆生が大きに悦で。これを食つたる所が。この時始て。男女の形をなして。陰莖陰門が出來たといふことでござる。

そこで互相瞻視生二慾想一共在二屏處一爲二不淨行一。とあるから。衆生各々。互ひに前を出して。見せもし。見も致して。ふしぎや。そこもとの。御またぐらへ。あやしき一物が。突出いたしてござるといへば。こちらもまた。さきのまたぐらを。のぞき見て。しか仰せらるゝ。そのもとの。またぐらへは。奇しき一つの洞が出來てござる。いかに拙者が。この突出いたしたる一物を。そこの股なる。洞穴へ。さしふたぎ。試みたくこそ候へ。いかにも。などゝ云て。在二屏處一爲二不淨行一と有る通り。皆が見えぬ所へ行て。かの上總の方言に。いはゆるそゝこめぐしたることゝ見えるでござる。これが天竺に於て。男女交合の始めでござる。さてかやう有りつゝ。その衆生どもが。この淫泆のことにのみ。心をよせて。夫婦となり。其行ひの時に。人に見らるまじき爲にとて。始て屋舍を立たといふことでござる。則ち本書に因二此因緣一世中立レ家とあるでござる。又これより始て懷胎して。子の生れることが。始つたといふことでござる。扨かの自然に生じたる所の粳米は。始のほどは朝に刈れば暮に熟し。暮に刈れば朝に熟する。

といふやうに有たる所が。中に大きに慾づらの。ひッぱッたる衆生が有て。四五日ほどの糧を一どきに刈取たる所が。とんと其粳米が生なく成てしまッたでござる。そこでどうもならぬから。各々土地を分けもッて疆を立て。田を作ると云とが始つたでござる。所を中に不屆な奴が有て。己が米をば藏めて。他の田穀を盜みなどもするけれども。彼の蛆の涌やうに。もろ／＼一所に生じたる衆生のこと故。みな同輩で誰有て此を決斷するものがないから。各々評議して。中に一人すぐれて形も大きく。威德のある者が有たる故。それを主に請て善をなす者を賞し。惡をなすものを罸しさせたる處が。これでまづ亂がはしきこともうすらいだと云ことでござる。これを刹帝利といふ。刹帝利といふは民主と云の心で。是が天竺に於て酋長の始で。彼の天竺四姓の第一たる。刹帝利家の元祖で。これから段々に子孫がふえて。さて天竺の國々の酋長どもは。皆この末じやと云事でござる。釋迦法師も。すなはちこの刹帝利が子孫で。カピラヱ國の淨飯王と云が子でござる。さて釋迦の姓に。五つのわけがある。一つには瞿曇氏といふ。二

には甘蔗氏と云。三には日種氏と云ふ。四には舎夷氏といふ。五には釋迦氏といふ。悉くこれにはわけが有るけれども。餘りくだ〳〵しいに因て。是はおきませうが。其中に甘蔗氏といふわけは。かの刹帝利の子孫から。すさまじく年代を累ねて。いッち後の王を大茅草と云たでござる。夫が老衰して子がなかッたゆゑ。國の事をば大臣とも云べき者に任せて自剃髮して出家をなしたけれども。極老のこと故歩行がならぬ。そこで弟子の輩が。時々出ては乞食をして此にくはしておく。其乞食に出る時に。虎狼の害を恐れて。かの王仙をば草籠へ入れて。樹の枝へひッかけては出たといふことでござる。所が彼白い物を著てゐる國だから。獵師があッて遠くからこれを見て。木に白鳥がゐると思つて。これを射殺したといふことでござる。そこで其血が地に瀝つて。そこから後に甘蔗が二本はえたと云ことでござる。そこで其甘蔗がだん〳〵日に照されて。われて一本の中からは男の子が生れ。一本からは女の子が生れたと云ことでござる。そこで彼國に居る臣下どもが聞傳へて。その男と女の子をむかへ取て。こりや王の種だと云て。養育して成長の上で。遂に立て王にしたでござる。これ故に甘蔗氏ともいふと。また釋迦氏と云わけは。此の甘蔗から生れたといふ王に。五人の子が有て。其中一人は本妻の生んだ子で。これは不器量もので有つた。殘り四人は妾腹の子で。何れも器量ものなる所が。本妻が夫を嫉ましく思つて。右妾腹の四人を讒言して。雪山といふ山の邊へ擯出したでござる。所がこの四人の子供は器量ものであッたる故に。遠くの人まで歸服して。數年の間に家居を立つゞけて。一ケ國としたでござる。そこで父の王が大きに歎息して。吾が子どもらは。釋迦じやと云たといふことでござる。釋迦氏と云は是からのことでござる。さて釋迦といふ天竺語を。翻譯すれば能仁といふ言となッて。能仁といふは仁を能すると書た文字で。いはゞわが子等らは仁者じやと云たのでござる。扨この甘蔗王が五人の子どもの第五人目を。尼拘羅といふ。尼拘羅が子を。倶盧といふ倶盧が子を。瞿倶盧といふ。瞿倶盧が子を。師子頬といふ。師子頬に子が四人あッて。その第一の子を。首圖駄那といふ。是を翻譯すれば。淨飯といふこと

になる。淨飯とは淨き飯と云ことで。から名をつけたにもわけがあるけれども。是はまづよしませう。扨この淨飯が。善覺長者といふ者の娘。摩耶といふ婦人を娶て生んだ子を悉陀と云。是がかの始て佛道と云ことを考へ出して。世に弘めたる釋迦といふは。此悉陀がことでござる。扨又釋迦と云はほんとうの名ではない。元來は姓で。先にも申す如く。能仁といふことで。能仁といふは。仁者といふ程のことでござる。夫のみならず。悉多は衆生の爲じやとか云て。苦んで佛法を弘めたに因て。其德を賞て釋迦と云たといふことでござる。何れにも釋迦といふは實の名ではなく。姓なりあだ名なりでござる。扨この者の生るゝ時に。母の右の脇から生れ出て生れると直にみづから七足あるいて。右手を擧て天を指し。左手を下て地を指し。師子吼をなしたと云ことでござる。この師子吼と云は。何のこともなく產聲のことゝ見えるでござる。然るを又此師子吼に文句をつけて。我於二一切天人之中一最尊最勝。無量生死於レ今盡矣。此生利二益一切天人一と吼たともあり。また一說には。天上天下唯我獨尊と吼たともあるでござる。この生るゝと直にあるいて。手を指上たり何かじて。吼たことは何の經にも云て有るから。實にこんな事が有たかもしれません。なぜと云に。此奴邪なる道をはじめて。夫をかく世に說弘めたる程の。變な奴ゆゑ。その生れる時もこの位の變はありそうなものでござる。また眞虫を見たやうに。脇から生れたといふことも。是は心狹き儒者などは。わけをも正さず。めッたにやかましく云て疑ひませうが。古學の廣い心から見れば。これも有まい事でもないが。やッぱり僞でござる。なぜかやうに僞はッたものじやと云に。釋迦ほどの佛が凡人と同じやうに。陰門と云ふ不淨な所から生れたと云ては。尊く思はれぬから。脇ばらから生れたと。事を神妙にせんが爲に僞はッたことでござる。すでに經文にも摩耶が胎にやどらんとするまへに。陰門は不淨なる所じやによッて。脇から生れやうと觀じて託胎したと云てあるでござる。右申す通り變物の生れたる事故。かやうな變のあるまいでも无けれども。右の譯も有り。此外にも諸の佛經に。尻口のあはぬ噓ばかりついてあるに因て。誠のことでも實とは思はれぬでござる。

これはちやうど今の俗でも。とかく何によらず間にあひのうそちや〱らを云てあるく人が。たま〱實の事を云ても。また嘘かと思はれて信用のならぬやうなものでござる。是につけても僞はいはぬやうに致したいものでござる。不斷うそをつく人と云者は。何を云ても人は誠にせず。何かいひ出すと。又鐵砲かまんぱちかと云て取上ぬから。後々は自分からして。うそつきの心持に成てゐると見えて。何ぞ一と言いひ出すにも。是ばッかりは實の事ぢやと。まづ前口上を云ていうやうになるものでござる。また其うぶ聲に。天上天下唯我獨尊と云たの。或は我於二一切天人之中一最尊最勝。云々と云たなどゝいふも。みな釋迦が成道出山して道を弘むる時に。妄言したる說のしりを結ばむが爲に。後の出家どもの僞り云たることでござる。是は追々聞るゝうちに。其化の皮があらはれてわかる事でござる。扨この生れたる日は。因果經には四月八日とありますが。佛所行讃經といふに。三月八日と云ことでござる。時に白淨王及諸釋子。未レ識二三寶一即將二太子一往二詣天寺一とあるは。則ち梵天の祠に參詣したことで。いはゆる宮參りと見えるでござる。これは釋迦が云出さぬまへは。佛と云者はなきもの故。誰も知たる者なく。その第一と祭る所は。古傳のまゝに梵天を大切にしたるが故でござる。此つゞきの文に。此時その梵天の像が座より立て。釋迦小僧が足を禮して。淨飯王にいふには。この太子は天人中の尊で。虛空大神も皆悉く敬禮す。いかんぞ今こゝに來て我を拜さするぞと。云たとあるが例の僞でござる。扨その呼名をば。諸の婆羅門どもに相談して。薩婆悉達と名けたでござる。これは漢語に譯して吉祥と云ことになるでござる。扨この悉達が人相を。阿私陀仙人といふが見て。この子乞食の相あり。必出家して大名を發すべしと云たといふことでござる。そこで淨飯王が大きに愁て。出家させまじき爲に。くさ〲其用意をして。中にも多くの妓女の。形容端正。不レ肥。不レ瘦。不レ長。不レ短。不レ白。不レ黑。才能巧妙。各々數技を兼たるを擇で。身には名寶の瓔珞をかざり。かはる〲守をさせ。悉達が心目を悅ばせんと。はかッたと云ことでござる。扨かの摩耶は悉達を生で七日目に死んだでござる。〽脇から生れたと云は僞り

なれども。いづれにも以の外の難産であッたる故死んだのでござる。此をまた大善權經などいふものには。生後七日。其母便薨。稱應昇天非菩薩咎。前處都率觀摩耶大命。將終有十月七日之期。故神變來下。是菩薩權方便など云てあるが。すべて釋迦が妄言の尻を結ばうとて作つた説でござる。凡てこの大善權經といふものは。かやうの尻をむすぶことばかりを多く云たものでござる。かくて淨飯王が後妻を入れて。これが名を摩訶波闍波提といふ。是れにも子が出來て難陀と云でござる。さて悉達が七歳の時。婆羅門を師として手を習はす時に。其の師が梵字四十九字の手本をかいて。其の音を敎へたる所が悉達が問ふには。この國土の中に書が幾種あるぞ。又この阿字に何等の義があるぞと問ふ。そこで其の師も答へが出來ぬ。時に悉多がいふには。すべて此國土の中に梵書あり。また佉樓書といふがあり。蓮花書と云があり。すべて六十四種あり。また阿字は。これ梵音聲にして。字義に無上正眞道の義がある。と云てこまかに其事を論し聞したで。師匠の婆羅門もへこみ果たとある。また諸技藝典籍議論。天文地理。算數射御。悉く自然に知てゐたとあるが。これ以て僞りで。このしりッぽが今にはげる。それは此つゞきの事實を見ると。悉多がつき從ふ者どもと。國界へ出て。閻浮樹といふ木の下に彳で。耕人を看て居たる時に。蟲が一つ死でゐて。それを鳥が啄てゐる所を見て。悉達が慈悲心を起して。衆生可愍。互相呑食することよと思惟して。これこの欲界。こゝでやゝ菩提心をきざしかけたとある。此の後また野外へ出たる所が。一人の老人が頭白く背傴り。羸さらぼッて杖にすがッて歩み行くを見て。側の者にあれは何じやと問ふから。從者が。あれは老人と云ものでござる。と云た所が。老といふは。どうしたことじやといふ。從者がこたへに。老と云は。年つもッて色衰へ。飲食も減じ。氣力もうすくなり。餘命いくばくもなき者を老人といひまするど云たれば。それはかれ一人のみさうか。また一切の人みなさうかと問ふ。一切の人みな悉くあのやうになりまするといふと。悉多が大きになげいて。こゝにまた〳〵思ふには。年移り老の至ること電の如く。吾雖富貴豈獨免耶。いかゞして世の人がこの理を怖れぬこと

であらうと云て。ます〳〵世を厭ふ志が起て。愁ひつゝ歸つたと云ことでござる。これが十七歳の時でござる。此の後また途に於て。甚だ弱りはてたる病人を見て。此時も。かれは何ぞと從者に問ふた所が。あれは病人でござるといふ。その病と云ふはどふしたことじやと問へば。病といふものは。かやう〳〵のわけで起るといふことをいひ聞せたでござる。所がそれはあの者ばかりか。または。人みなさうかといふ。一切の人誰とても。これは遁れがたいことでござると答へたれば。悉多がまたふさぎ出して。かゝる怖ろしきことのあるに。なぜ世の人はこれを恐れぬことであらふと怖ろしく思つて。身心戰動如三月影現二波浪水一ニとあるから。地震の子か蒟蒻の幽靈とやら云ごとく。ぶる〳〵振ひ出したと見える事でござる。これらの說どもは。釋迦の菩提心を發したる所以をありのまゝに記したので。これは實にかやうなことゞもから。世を捨る志が起つたであらふでござる。是につけて思へば。右申したる七歳の時。書を學んでいろ〳〵こまちやくれなことを云たり。また諸々技藝典籍。天文地理算數射御を始め。何によらず自然に知ていたなどゝあるのは。みな後からいつた僞りなることの。化の皮がはげるでござる。なぜと云に。六つ七つでそれ程の事を精密に辨へてゐた程の者が。十六七歳にもなッて。人には病といふことがあり。また老ると云ことも有るわけをしらぬと云ことが。どうして有ませうぞ。よく考へて見るがよいでござる。また右らの虫や老人。また病人などは。釋迦が野外に出たる時。ゆくりなく見て右の如く無常を觀じた事と見ゆる。それを又つくり言をして。其虫も老人も病人も。悉多に菩提心を發させんが爲に。淨居天といふ天神が。そんな者に化て見せたのぢやと有ますが。これは殊にしりの結ばらぬうそでござる。なぜといふに。釋迦は元來都率天に居て成佛してゐた所を。この天竺へ生れて來たのは。かりに摩耶夫人が腹をかりて生れたと云ではないか。そんなら出家することはかねて覺悟してゐること故。淨居天が色々工夫をつけて菩提心を勸めずともよいことでござる。殊には。天から下つて摩耶が胎に宿る時。諸々の天神に。かねて其事を云て聞かしてあると云ではないか。是らは何の事もなく。釋迦が元來

凡人である所を。こんな事から思ひついて出家したと。有のまゝに傳へては。おもしろみがなく尊くもないやうじやに因て。かやうに尻口のあはぬ僞を云たものでござる。すべて佛經どもは。此次の會に委くいひませうが。盡く釋迦が死て遙後の世に。嘘はつき次第と記したるもの故。實の事はないが。其中に實に有たる事實がまゝ交つてある。それはよく前後を考へわたして味はへると動かぬものでござる。其動かぬ實事を撰び取て。それを規矩としてよく探り考へると。かの僞どもがよく知れるでござる。凡て佛經を讀むの法は。一つ二つの實事を以て僞說を考へしり。又その僞說を以て實事を知ると云ふ法を。心に立てよむが宜しいでござる。さうないと惑はさるゝとでござる。さて悉多は己が居所に歸つても。右等の事のみが心に懸り。おふ〳〵として愁悶へて居たる所が。父の淨飯がその從者どもに。上件の事どもを尋聞て。悉多が遁世心の萌あることを察し。かの阿私陀仙人が。前に相を見て云たる言もあり。かたゞ〳〵その出家せんことを恐れて。悉多は此時もはや十七歳にもなッたると故。妻を持して其心を止させんとかまへ。都合三人を呼でさづけ。また選下諸妓女聰明智慧。顏容端正善二於歌舞一能惑レ人者上。種々莊飾。光麗悅レ目。ともあるでござる。初悉多が妻三人のうち。第一を瞿夷と云て。水光長者といふ者の女でござる。第二は耶輸と申て。移施長者と云者の女でござる。第三は鹿野と申て。釋長者といふ者の女でござる。また子も三人あッたでござる。第一を善星と云。これが鹿野と云ふ女の生んだ子でござる。第二を優婆摩耶といふ。瞿夷といふが生んだ子でござる。第三を羅睺羅といふ。これは耶輸といふが生んだ子で。かの五百羅漢のその一人でござる。なんと妻を三人持て。子も三人生せりや。隨分澤山なことで。子福者といッてもよい程のことでござる。但しこれは佛本行經。五夢經。十二遊經など云類ひの。慥なる佛經に記し有て爭はれぬことでござる。そもそも釋迦に妻子の有る所以は。右申す通り天竺の四姓のうち。かの第一たる刹帝利は。王種と云て國を守り。民を治むる者。其の次にたつ婆羅門は。法種と云て民を導き敎ふるもので。漢土の國でいはふならば。儒者のやうな者でござる。夫故この婆羅門と

いふもの者は。妻子のあるものでござる。釋迦は刹帝利の家に生れは致したなれども。自分の物ずきで王とはならず。廿五の時に家を出て婆羅門と同じやうに人を導き敎へ。釋迦以前にはとんと无つたことの新趣向を立て。妻をもたぬといふことを始めたものでござる。かやうの法を立たにも譯が有るが。夫はおしつけ申すでござる。此のわけ故に。其出家せぬ前は妻をもち。妻を持たに因てまぐはひを致し。まぐはひを致したによッて子を生せたと云ものでござる。それた後世の佛者共が。わる贔負を致す僻心に。釋迦に妻子が。しかもかやうに澤山あッたと云ことが。言行のたがふ故。いやでならぬから。後々僞り作つた佛經に。いかふ負惜みなことを云たものでござる。一體もろ〳〵の佛經を。みな釋迦の說たことを記した物じやと思つて。世の人はをるけれども。盡く後の出家どもの。釋迦に託けて僞り作つたものに相違なく。其譯は具にこの次の會に申すつもりでござる。さて其後世に僞り作つた。佛經の負をしみと云は。譬ば瞿夷といふ女のことを。耶輸が別名じやと云たり。是は一人も妻を少くしよふと思つての負惜み。またはは

善星といふ子をば。釋迦の子ではない。堂弟の難陀が子じやなどゝ云てあるけれども。皆せつなく作つた說どもで。眞の事ではありや致さぬ。殊に善星などいふ子は。涅槃經の文によッて考へた所が釋迦の菩薩の時の子ぢやとあるから。さすれば廿五で出家して山に入り。三十のとき已に佛に成たと云て山を出てから後に。鹿野といふ女を犯して生せた子には相違ないでござる。さすれば菩薩も油斷はならぬ所が。これをいひくるめやうとて。まづ大善權經といふに云てあるには。何故菩薩而有室娶菩薩無欲。所以示現妻息防人懷疑菩薩非男斯黃門耳。故納瞿夷釋氏之女生羅雲云。於天變沒化生。不由父母合會育。とありますが。この經文の意を說かばまづ假に何が故ぞ菩薩にして妻を娶たものじやといふの問ひの辭を設て。さて夫に答へて。菩薩は無欲といッて。房事の念などはなけれども。その妻子を持て示現せたる所以は。もしや人が菩薩は。ありや男ではあるまいなどゝいひまたは黃門と云て。陰莖なしの。かたは者じやとおもはれうかと。その疑をさけやうが爲に。瞿夷といふ女。また釋氏の女めなどを納

れて妻となし。羅云を生せたものじやが。それも天より變沒と云て。胎を投じさせ生せたもので。父母の交會に因て出來た物ではないといふの意でござる。然れども交會して出來たでなければや。釋迦は黃門と云て。陰莖なしではなかッたといふの證據にはならぬことぢやが。こりやけしからぬ尻口の合はぬ負惜みでござる。また或は耶輸が腹をちよいと指さしたれば姙で。六年が間生れずにゐて。釋迦の成道出山して後に。羅睺羅が生れたなどゝ云こともあるけれども。然らば羅睺羅一人は夫にもしてやらふけれども。外にまだ優婆摩耶といふ子と。善星といふ子と二人あるが。この二人の子どもをば。何とも云ひくるめよふがないでござる。こりやみな俗にいふ。頭隱して尻かくさずとかいふ類ひのうそで。とんと釋迦の知らぬことではあるけれども。餘りといへば智慧のない嘘のつきよふでござる。なぜ又かやうに。せつないうそをつくといふに。一體釋迦は人を導くの方便に。我は久劫と云て幾百萬歲といふ限もなく。久しき前から成佛して都率天といふ天上に居たるが。世に出て佛法を弘めてもよき時節じやと觀極めて。淨飯王が妻摩耶夫人の腹に宿つて。世に出た者じやと云て人をおごしおいた所が。其後その流れをくむ佛者どもの心に。もし人に。釋迦は。さほどにも久しい先から成佛してゐたと云ならば。妻子はありそもないものじや。佛に妻子が有てはすまぬと難じられた時に。困るわけ故。釋迦の方便に云たことの。其の尻を結ばふとて。かゝる類ひの。せつないうそをついたものでござる。まだ〱この餘の佛經どもにも。右の尻がむすばらんで。實にここへ出して申すにも申されぬをかしいことばかりありますが。其うち一つをいはふならば。觀佛三昧經といふ經文にある趣は。釋迦は妻を娶つたなれども。交合をせなんだ所が。耶輸陀羅を始め。もろ〱の侍女どもがいかふあやしんで居たる時に。その侍ひ女の中に一人がいふには。奉事歷レ年不レ見二其根一。況ヤ有二世事一。といふ但しこゝに根と云たるは。則陰莖のこと。世事といふはやがて交合のことでござる。何のこともなく。釋迦につかへて年を經たけれども。其陰莖を見たことがないから。まして交合はせぬはづじやと云たのでござる。時にまた一人の女がいふ

には。我事ニ太子ニ經ニ十八年一。未レ見ニ太子有ニ便利患一。況復諸餘。といふ。此意は。我は太子につかへて十八年を經たけれども。陰莖もないと見ゆる。どふして交合がならふぞといふ。其時もろ〳〵の女どもが。みな〳〵しからば太子は男ではあるまいとおもふたと。釋迦はこれを察して。晝寢をしてかの一物を出して見せたでござる。其見せたる趣きをば經文のままによみますからとツくりと御きゝが宜いでござる。爾時太子於ニ其根處一出ニ白蓮華一。其色紅白上下二三華相連。諸女見已復相謂言。如レ此神人有ニ蓮華相一。此人云何。心有ニ染著一。作ニ此語一已。噎不レ能レ言。是時蓮中忽有ニ身根一。如ニ童子形一。諸女見已更相謂言。太子今者現ニ奇特事一。忽有ニ身根一。如ニ丈夫形一。諸女見已更不レ勝レ喜ニ悅現ニ此相一。時羅睺羅母見ニ彼身根一。華々相次如ニ天劫貝一。一一華上乃有ニ無數大身菩薩一。手執ニ白華一圍ニ繞身根一。現已還沒。爾時復有ニ諸婬女等一。皆言。瞿曇是無根人。佛聞ニ此語一。如ニ馬王相一。漸々出現。初出之時猶如ニ八歲童子身根一。漸々長大如ニ少年形一。諸女見已皆悉歡喜。時漸長大如ニ蓮華幢一。一一層間有ニ百億蓮華一。一一蓮華有ニ百億寶色一。一一色中有ニ百億化佛一。一一化佛有ニ百億菩薩無量大衆一。以爲ニ侍者一。時ニ諸化佛異口同音ニ毀ニ諸女人惡欲一。而說レ偈言。

若有ニ諸男子一　年皆十五六　盛壯多ニ力勢一　數滿ニ恒河沙一　持以供ニ給女一　不レ滿ニ須臾意一

時ニ諸女人聞ニ此語一已。心懷ニ慚愧懊惱一。辟レ地擧レ手拍レ頭。而嗚呼惡慾。各厭ニ女身一皆發ニ菩提心一。とありますが。なんと是は大變なことでは有ませんか。こりやみな右申す通り後の法師どもが。まけをしみで作つたる墓何說でござる。かやうの墓何說をつくツて。釋迦をかばふつもりでは有らうけれども。是こそ眞に最負の引だふしと云ふものでござる。なぜと云に。そう〳〵世の人じやと云て文盲な者ばかりあるものでもないから。坊主のやうにたゞぶだ〳〵とばかり讀で居らず。たまさかには今篤胤がよんだやうに。しやんとよむ人もあるから。さう讀れてはたまらず。右申す通り。もろ〳〵の佛經。盡く釋迦に託して後の佛者の僞り作つた物ではあるけれども。世の儒者なんど大かたの人は。みな實に釋迦の口から出て。阿難が書ておいた物じやとかたく覺えてをるに因で。目指ては釋迦を謗る。世に佛道を謗る者が皆さ

うでござる。この方のやうに佛經に。昔後の佛者の僞り說で。釋迦のいはぬ說どもが十にして九分ほどじやといふ說を心得て。其論辨せねばならぬが事有て論辨するとも。かやうにわけを立て云人は。佛法をそしる人が。たとへば百人有ませうが。其中に能くこゝらの訣を知ていふ人は。やう／＼一人有るかなして。外の九十九人はみな釋迦をめざして謗るから。なんと後世の佛者どものしわざは。釋迦を贔負のひき倒しではあるまいか。釋迦の。妻を三人。子を三人持れたことは。どういひくろめたればとて。活た眼で書をよむ人には。是非その尻つぼを見出される。其しつぽと云は。五夢經。十二遊經。佛本行經などにたしかなこと。又その餘にも維摩經の注に。鳩摩羅什なんどいふ。しかも是はもと天竺の僧じやが。其言つたことに。淨飯王が釋迦に出家をさせまいとて。更に妓樂を増してよろこばした所が。其時菩薩欲心內に發し。羅睺羅。胎に處し。耶輸其夜に身めりと云こともあるから。さすれば釋迦は其うたまひ酒の遊びに心うかれて。淫欲の心がおこり。そこで耶輸をおしこかして孕ましたには相違ないことでござる。○扨悉多は父の淨飯がはからひで。妻をむかへ子さへにうみも致したなれども。この後また／＼野遊に出たる所が。死人を輦にのせて香花をそなへ。其眷屬の者と見えて。哭つゝこれを送つて行く。是を見て從者憂陀夷といふ者に。あれは何じやと問ふ。そこで死人じやと答へたる所が。死ぬと云はどうした事じやといふから。憂陀夷が云には。死ぬと云は神識去り身動かず。寒熱をも知ることなくなることじやと答へたでござる。悉多がこれを聞て大きに恐れて。それはかの死人ばかり死ぬことか。また餘の人もさうかと云ふから。憂陀夷が。一切の人みな此の如く。貴賤ともに免るゝこと能はずと云と。悉多がかゝる苦しき事の有るに。世人のそれを恐るゝ心のないといふは。木石に等しきことじやと云て。早早に歸つたといふことでござる。但し前後の事實を考へわたすに。此時は悉多が二十二三歲の時と見えますが。夫まで人の死ぬと云ことを知らんでゐると云は。餘りといへば愚かなことでござる。凡て右等の事どもは。悉多が出家したる元の因をいひ傳へたこと故。たゞ大らかに虫の死だのや。老人病人死人

等を見て菩提心を發したといふことに。ざッと見ておくがよいでござる。また悉多は王の太子と有ながら。この出たる度々に。かゝる不淨の者などを見る所を以ても。漢土の王などの如く立派なとでなく。今御國でいはふならば。村々の大庄屋を見たやうな物なることを知るがよいでござる。さやうな趣に相違なき故。佛經を見るに。同樣に見える王がいくらとなく有て。すでに五百の王が一度に攻來つたなどやうな事さへあるでござる。かくの如くなる所を。佛經を漢土で翻譯する徒が。其しどけなきことゞもがいやさに。文を飾て譯し。盡く漢土ざまに書取て。庄屋どのをば王とかき。その家内をば后とかき。また其子をば太子とかき。其いッた言も吾といふをば朕といふやうに。何もかも漢風に。國から住居の樣子までをも。もろこしぶりに仰山らしく書て。人に信を起させんとしたものでござる。佛經を見るにこの事をもよく心得てよまぬと。其の文章にはかられて。漢土などのやうに太そうらしいことかと思ふでござる。中々あんなに結構な事ではない。近くいはば。蝦夷にも村々がしたゝか有て。その村々の酋長をおとなといふ。これは何百人といふ程多く有る。これと同しさまでござる。蝦夷のことをかくにも。おとながことをば王とかき。めのこがことを后とかき。其の子がことを太子などゝ書くと。殊の外に仰山に見えるでござる。漢土は實に仰山に立派なことでござる。是には訣がある。それは漢學のときいひませうでござる。かくて悉達はいよ／＼出家遁世すべき心に決定して。父淨飯王が前に出て云には。恩愛集會必有ニ別離ー唯願聽ニ我出家學道ー不ニ留難ーと云たる所が。淨飯王大に驚き泣て物をも得いはず。良久しくして云ふには。汝よろしく其意を息めよ。いかにぞなれば。年もなほ若く。國にはいまだ世嗣もなし。而るに我を委て出家しようと云は。宜からぬことじやと涙ながらに諫むる時に。悉多がいふには。然らば吾に四の願がある。一つには不老。二つには無病。三つには不死。四には不別。父もしこの四願を與へ給はゞ。出家は致すまいといふ。是が實にいはゆる難題で。これで父をやりこめたものでござる。淨飯王これをきいてなほ悲しみ。彼れ是れと諫むる所がとんと聞入れず。悉多はまづ吾が居る處へ引取

りはしたなれども。出家せんとの心は決定して。或る夜人の寢しづまるを伺ひ。車匿といふもの一人を連れ。揵陟といふ馬に乘てしのび出たでござる。其出る時に。我若不レ斷ニ生老病死憂悲苦惱一終不レ還レ宮。不レ盡ニ恩愛之情一終不ニ還見ニ耶輸陀羅一と云て出たといふことでござる。かくて跋伽仙人といふ婆羅門の修行して居る山へ行て。馬より下り。身に著たる衣服かざりの品々を脱て。車匿に渡し。それまで從たることを賞て歸さんと致す所が。この者いふには。君をこゝにおいて吾のみ歸り參つたならば。定て父王のとがめに逢ひ候はん程に。こゝにおき給へといふ處が。悉達がいふには。汝還て父王に白すべきは。吾今不下爲ニ生天樂一故上復非レ不レ孝ニ順父母一。但以レ畏ニ彼生老病死一。爲ニ除斷一故來ニ至此一耳。といへ。また父王。わが出家したることを早いといはれたならば。老病死至豈有ニ定時一。人雖ニ少壯一焉得レ免レ此と。わが云たといへと。逐一にその答のしやうまでを敎へて歸さんとする所が。車匿はなほ戀々として還りかねて居る時に。悉多は聲をはげまして。會者常離の理である故に。我が生れて七日にして母の命終たるを見よ。母子すら尚死生の別がある。況餘人をや。汝速に馬と共に還るべしときびしく云て。自ら鬚髮を剃り。折節そこへ來る獵師の著て居たる袈裟を。吾が今まで著てゐたる服とかへて著て。車匿が泣たふれて居るをもかまはず。袖を拂つて山奧へはいッたでござる。此時は二十五歲の時ゆゑ。是を二十五出家といふでござる。この出家の年も諸の經に相違が有て。或は十九出家ともあり。または七歲出家ともありますが。是はみな釋迦の妄說のしりをむすばんとする種にせんとて。後世の法師どもの奸曲にいひ出したことでござる。實は二十五歲が出家の年に相違ないでござる。そこで車匿も詮方なく淚ながらに馬を牽て還つたでござる。さて悉多は山奧に入て。かの跋伽仙人が修行して居る所へ行て見ると。諸の鳥獸が馴住で飛去らず。さてかの仙人どもの修行を察る所が。或有下以レ草而爲レ衣者。或以ニ樹皮樹葉一而爲レ服者上。或有下唯食ニ草木華果一者上。或は一日に一食。或は二日に一食。或は三日に一食。かくの如く自餓の法を行ふ者あり。また或は水火を事ひ。或は日月に奉へ。あるひは翹ニ一脚一或臥ニ塵土一。或有下臥ニ於荊棘之上一

者。或有臥於水火之側者。こゝに悉多がその跋迦仙人に。そこ等は今かくの如き苦行をするが。これは何等の果報を求めんとするのじやと問ふた所が。仙人答て。此苦行を修するは天に生ぜんことを欲するのじやといふ。そこで悉多がまた云には。天は樂しいけれども。福盡る時窮て六道に輪廻して終に苦聚となる。いかにぞ諸〻の苦因を修して求苦報ぞと難じて。かやうに議論しつゝ。日暮にも及び。其夜は一宿して明旦まで思惟したる所が。この諸仙人ども苦行を修すといへども。みな解脱眞正の道にあらず。こゝに留るべきことでないと。其處を去て。この山の北の奥に。阿羅邏爵陀羅仙人といふ。大仙人の修行してゐることを聞て。それへとて立こえたでござる。扨また悉多が家にのこツて居たる。耶輸陀羅およびもろ〳〵の女どもが。眠をさまして見ると。悉多がをらぬから。先とりあへず泣出して。淨飯王と繼母の摩訶波闍波提にこれを告たる所が。二人とも大きにたまげて地に倒れ泣き。父淨飯はそれが爲に精魂を失ひ。いはゆる氣絶いたしたでござる。所へかの車匿が馬をひき泣ながら歸て來て。具に右の

始末を語るときに。摩訶波闍波提は。悉多我が養育に因て長大なりながらそこは思はず。我をすてゝ跡をかくし去れりと云て泣く。耶輸陀羅は我は年久しく親んで。行往坐臥相離れず。然るに今吾を捨たり。古昔諸王入山學道。皆將妻子不暫相棄。世間之人一過相識別不相忘。夫妻之情。恩愛之深。而反更如是之薄をと云て泣く。其中に淨飯王も氣がついて。果して車匿を叱る。「そこで悉達が申しつけたる如く理づめを云たる所が。淨飯もへこみ。そこで車匿を叱ることを止めたが。とかくに親子の愛情止がたいから。いでや悉多が在所を尋ねんとまで致したが。人も諫むるゆゑ。王師と云て淨飯王が師と頼む者に。服心の者を多くそへ遣して。先づかの跋伽仙人が許へ尋させたる所が。跋伽仙人がいふには淨飯王の太子か何かしらず。近頃一人の少沙彌が來て。一夜吾と議論をしたが。北の方阿羅邏仙人の許へ行たといふから。王師が又それへ行く所が。途中の尤も山中に。悉多が樹下に坐禪をして居るから。王師その前に進んで。父の王の歎きを云て還るやうにと云時に。悉多がいふには。我豈不知父王於我恩情深也。但、

畏ル二生老病死之苦ヲ一故ニ棄テレ此ヲ爲ルニ斷除セント一なり。父王もしこの苦を除きて賜らはかへるべし。さうなけりや中々歸らぬと理づめを云ふ所を。王師もさるもので。色と利害をとく所が。といへばかく云つゝ口がしこく。吾は是より阿羅邏仙人を道師として。生死解脱の道を求むると云て。袖を拂つて一はやく山奥へかけ入つたでござる。そこで王師は空しく歸られもせぬから思ひついて。其の連たる人どもの中に。憍陳如と云者を始め。五人を山にのこして。悉多が修行のやうを伺はせて王師は歸つたでござる。扨悉多はかの阿羅邏仙人が居る山は。是よりはまだ遙に國々山川を隔て遠き所なるを厭はず。其途々の國々の王ども。王舍城の頻婆娑羅王。また摩竭國の缾沙王。これらも。みなもとは。かの刹帝利より出て同姓のこと故。達て諫る所が。それも右の如くきゝ入れず。途に彼阿羅邏仙人が住する所の山に尋ね入て。對面して道をきゝかけたでござる。そも〳〵天竺に於て婆羅門どもの學問といふものは。前にも申す如く。婆羅門家の者どもが代々うけついで致すことで。其の學びかたは。七歳以上は自分の家で學問し。十五歳以上になると家出をして。諸々方々をあるいて學び。年四十になると子孫の斷絶せんことを恐れて家へ歸り。こゝで始て妻を持て子でも生むと。其中に年の五十にもなると。また〳〵山に入て道を修行するでござる。さて其道と云て。修し教ふる趣きは。ごふちやと云に。治心と云て。心をちやんと治むるの修行をして。いつも申す通り。彼の國にも天津神の。天地を始め。世にありと有る事どもは。その御靈に因て、出來るものじやといふの傳へが有て。これを彼國では。梵天王といひ傳へてをるでござる。それは諸々の佛經に。梵王ハ是娑婆主といひ。或は梵王ハ居シテ二大千之中ニ一以統御爲レ主といひ。又は大梵王言フ。我生ス二世間ヲ一といひ。また梵天王ハ名ク二一切衆生ノ祖父ト一。作ル二一切有命無命物ヲ一などやうにいへる言どもがしたゝかある。これ古傳説があるに因て。これを本として道を說たものでござる。故にその道を梵行といひ。書く文字も。梵天の敎へたると云事で。梵字と云でござる。この梵天王と申すは。即皇產靈神の御事をかく申傳へたものでござる。是に因て世人も甚く尊みたる事でござる。龍樹菩薩の大論といふも

のにも衆生常識ニ梵天ヲ。以ニ梵天ヲ為ニ世間祖父ト。為ニ世人ノ故説ニ梵天ヲ也とあるはこの事でござる。また夜見の國の傳へも有る。これは彼の國の辭では那落といふでござる。その那落と云は地の底なる獄屋といふことで。こゝが御國の眞の傳説と違つて人間生涯善根をつめば。死して後天堂と云つて。即梵天帝釋の御許へ生れる。また惡事をすれば那落へ行て。そこに居る所のあらぶる神。十王などゝ云に責られるといふでござる。此れらは彼の國の古傳説で。決して作つて云た事とは見えぬてござる。さればさしも个樣の事は憎みいふべきことではないでござる。さて世々の婆羅門家は。これらの古傳説を本として教を立た者でござる。其いつち最初に教へを立た婆羅門を衞世師と云て。之は釋迦よりも八百年前に出た人じやと云ことでござる。この衞世師の後に追々すぐれた婆羅門家が出て道を弘めたことで。何れも天に生ずることを修し教へたもので其內に少しづゝ立かたに違つた所が有て。總て九十五種これを佛法からさして。六十五種の外道と云でござる。其ちがふ所と云は。其始め何の事もなく欲界といふ天が。有て。そこに梵天帝釋が坐ますゆゑ。善を修して天へ生れようと修し教へたる所を其次に出た婆羅門は。もちつと其上はてをいはねば行はれぬに依て。その欲界の天よりは上に色界といふ天がある。この方に從て道をまなぶと。その天へ生ずるといふて道をひろめたでござる。所を其後に出た婆羅門は。また其上を一層いひ上て。其色界どころではない。この方の修し得たる所は。色界の上にある空處といふ。結構な所へ生ずる法じやと云て弘める。さて此の樣に其上を上をといひ上げ〳〵して。終に二十八天までいひ上げた物でござる。然れども實は漠然としたる事で。皆よいかげんに云たものでござる。右の如く生天のことをおもと云たるもの故に。己に悉多が始めまづ跋伽仙人どもに逢て。欲レ求ニ何ノ果ヲのじやと問ふた所が。仙人どもが答へて。為レ欲レ生ニ天ニとは答へたでござる。扨この時悉多が慕ひ尋ねたる。阿羅邏仙人と云が立たる趣きは。二十八天上の非想非々想天といふ天があると云て教へたもので。是もこの前に出たる鬱陀仙人といふ婆羅門の。無處有と云天があると云て弘めて居たる所へ出て其上を一つ越して。非

々想天といふ天が有ると云たものでござる。こゝらのさまが實は子供のいたちこッこさやらをするやうなことでござる。扨また天竺の國風で。とかく不思議奇妙な事がすきで。其世間を教ふるにも。かの不可思議神通をやらんでは人が信じないから。代々の婆羅門ども人に教授でもする者はみな夫を修行してやるでござる。扨それを神通といへば甚だきゝよいやうなれども。實には幻術といふことで。幻術とはまぼろしの術といふことで。狐や狸のそでもない物をそれと見せて。人をたぶらかすと同じ術でござる。夫故これを幻術といふ。近くいへば手妻の大きいやうなもので。このことも法華經の妙玄と云ふ者に。如下幻師在二四衢道一幻中作種々象馬瓔珞人物等上。無明幻出。六道依レ正當レ知本自不レ有無明所爲とあり。また圓覺經の疏と云ものに。世有二幻法一依二艸木等一幻二作人畜一。似二往來動作之相一。須臾法謝。還成二艸木一。然諸經教幻偏多。良以二五天此術頗衆。見聞既審。法理易レ明と。あるを能とッくりと考るがよいでござる。まづ釋迦の出ぬ前。天竺に。もとからあつた教へのおもむき。婆羅門の學び方は。あ〳〵この通りでござる。

○扨悉多は右の阿羅邏仙人に逢て生老病死を斷ずるの法はいかにと問ふた所が。阿羅邏が答へて。衆生之始。始從二於冥初一。從二於冥初一起二於我慢一。從二於我慢一生二於痴心一。從二於癡心一生二於染愛一。從二於染愛一生二貪欲瞋恚等諸煩惱一。於レ是流二轉生老病死憂悲苦惱一と云。悉多また問には。其說をきいて生死の根本は解し得たるが。それを斷絕する事はいかにといへば。仙人がこの生死の本を斷せんと欲するならば。出家して修二持戒行一。謙卑慈辱。住二空閑處一修二習禪定一離二欲惡不善法一離二於種々想一。入二非想非々想處一。斯處名爲二究竟解脫一。是諸學者之彼岸也。汝若以レ斷二於生老病死之患一。まさに此の如きの行ひを修學すべしと諭したでござる。悉多は其說を聞て又いふには。非相非々想處爲レ有レ我也爲レ無レ我也。若言レ無レ我。不レ應レ言二非想非非想處一。若言レ有レ我。我爲レ有レ知。爲レ無レ知。若無レ知。則同二木石一。我若有レ知。則有二染著一。有二染著一則非二解脫一。一切盡捨是則名爲二眞解脫一といはれて。阿羅邏仙人も。ひしとつまつて。默然として。いたと有ますが。よく思へば。この悉多が云た趣は。たゞ辨才にまかせて云たことで。阿羅邏が說よりは大きに無理でござ

る。夫はいかにといふに。阿羅邏が云たる趣きは。欲惡煩惱すべて一切の善らぬ事どもを離れて。善心に歸する事を云て。その善心までを止めよといふの說ではない。故に非想と云が。欲惡は想はぬと云こと。非々想といふは。世の爲。人の爲になる善事をば想はぬではない。それは想ふといふ心で。非想非々想天の法と云たもので。こゝの場へ學びつけた者は。學問の彼岸に到つたので。是が解脫といふものじやと云の心でござる。隨分尤なことでおもしろいでござる。また悉多が言ぶんは無理じやと申すわけは。非想非々想處。爲レ有レ我也。爲レ無レ我也。言レ無レ我。不レ應レ言ニ非想非々想處一と云たが。是は知れたことでござる。なぜと云に。非想非々想といふわけは。右申したる如く。惡欲不善なることは思ふまい。善きことをば想ふと云の義じやに因て。爲レ有レ我也。爲レ無レ我也と問ふがものはない。また若言レ有レ我。我爲レ有レ知。爲レ無レ知若無レ知則同ニ木石一と云たもしれたことで。非々想といふからには。有我といふ義なること論はない。有我なれば有レ知は是また論はない。それも何も無レ知則同ニ木石一などゝ。口おほく。しやべることはないでござる。また若有レ知則有ニ染著一。有ニ染著一則非ニ解脫一と云たは。すなはち悉多が趣意で。これは何の事もなく。阿羅邏か非々想と云て。善事をば思はぬと云わけではない。それは想ふと立た筋を。氣に入らぬからいひ出したことで。おのれは生老病死を遁れたいと云て。親妻子をもかへり見ず惡事は。もとより露いさゝかも善事をさへに想ふまいと云。ねぢけ心からいひ破つたものでござる。また能一切盡捨。是則名爲ニ眞解脫一と云たか。此通りに。一切盡く想といふことをば捨果てしまつたならばいかにも悉多がいふ通り。それは眞の解脫では有ませうが。かく天地の間に采まれては。生てゐるうちはもとより。死でもそれは決して出來ぬこと故。さやうに心がけて。親妻子をさへにすてゝ。山に入りたるこの男が。口は此通り立派にしやべるけれども。已に今阿羅邏に云た言にも。無レ知則同ニ木石一といひ。また一切の想ひを捨はてぬから。まづ阿羅邏が說が氣に入らぬといふ想もあり。さて生老病死がこはいものじやといふ想もあり。また此次の會に出ます。この阿羅邏が許を去て修行する時に。物さへ

くはんでりきんで見たが。ひもじくてたまらず。既に死さうになつた時に。牧牛女に乳をもらつてしやぶり。夫で命を助かつたでござる。さすればひもじいといふ想もなくなりはせぬ。また年が寄たればしわくた坊主になつて。その死ぬ時も。あらいたや。あら苦しやと。うめきちらして死をつたでござる。なんと是が生老病死。一切の想を盡捨たと云ものか。どうして捨られるものか。すてられぬはず。忘られぬわけは。天津神の産靈の御靈に因て。この天下に生れては。どんなに捨ようの。拂ひ落さうのとあせつて駈てまはつても。生老病死の四はおッこちぬでござる。然るを悉多が心得違ひを致して。あゝ大べらぼうなるかな。あゝくそだわけなるかな。尻の毛へ火の付たやうに夫をいやがり。周章さわいだがやつぱり死んだが。其さまをつらく\/思へばちやうど俗の諺にいふ。一つの長屋の左二兵衛じやらが。四國をまはつて四國を出られず。まはり\/て猿と化たと云やうなかたちで。其いひおいたる説どもは。徒に世の愚人ばらを惑はす種と成たのみのことでござる。なほ追々わかることでござる。さて悉達は阿羅邏仙人を調伏し。また夫より伽闍山苦行林中に入て。尼連禪河といふ河の側に。靜坐觀想して苦行を修し。日に一麻を食し。或は一米を食し。或は二日。または七日に一麻米を食す。こゝにかの王師が遣し置たる憍陳如らも。悉多と共に苦行を修し。人を遣はして王師及びかの長臣に。悉多が所行を具にいひやりたるに。王師と長臣は國に還り。悉多がいへる言。ならびにその苦行のことを淨飯王にいへば。淨飯その言を聞て身を顫動ひ。身毛を竪て聲も絕々に歎き悲み。言さへに得出ぬまでなりしを。良久くありていへるは。悉多はこれ吾が性命なり。然るに汝等今渠を伴ひ歸らず。我が性命いかにして存へよふぞといふ時に。王師は悉多が志の堅固なると大山の如く。なかく\/移動し難きことをいへば。淨飯王はさてもあらねば。衣食住の具一切を多くの車に積て。かの車匿に申つけ。汝これを悉多に與へて供養し。乏少ことのなきやうに致せ。盡たらんには。また請によこせと云て。送り遣したでござる。扨車匿は悉多が修行する所へ行て。其形を見たる所が。骨と皮ばかりのやうに瘦さらぼつて。血脈も悉くに現はれて居る程のことゆゑ。車匿は涙

を銜んで。淨飯王が日夜に歎き悲で忘るゝこと能はず。此らの物を送れることを遁たる時に。悉多がいふに。吾は父母に逆ひ。また國を捨て遠くこゝに在ることは。至道を求めんが爲にとてのことなり。何が故にかゝる品々を受よふぞと嚴しく云から。車匿が思ふには是ではこの品品を受けはすまいと悟つて。右の品々をば悉く淨飯王の許へ返し送つ。吾れ一人は。かの憍陳如らと共に麓に在て。悉多が苦行を見ついだと云ことでござる。これ程に父の厚き志を無にして反しやるとは。さてさて悉多は心なき者でござる。くはずは。食んでもよいから受ておいて。父の志を慰るが。人の子たる者の道でござる。こんなに痩さらぼつて居るから。嘸かし心中には。おいて食にかつたであらふでござる。所を一旦何も入らぬ。食物もくふまいといひ出した。わる我慢を張てのことゝ見えるでござる。これが實に諺に云ふ痩我慢でござる。さて悉多は早く婆羅門らが說を看破つてあるに。坐禪瞑想に身を苦しめたは。いかにといふに。先つかの念ひ極めたる。生老病死を解脫し。かつ神通を大きに修し得て。夫を以て婆羅門どもを伏させんが爲でござる。それはすなはち大論に。若不レ行二苦行一而呵二言非道一者。無二人信受一。故自行二苦行一過二於餘人一と見え。また西域記にも。太子思二惟至理一爲レ伏二外道一節二麻米一。以支レ身六年とあるは此事でござる。又さやうに外道を伏させんとするはいかにと云に。かの外道の輩は。國人に普く信じられてをる者故。まづ其外道から伏させて道を說かねば。弘まらぬからのことでござる。又それを伏さするに。神通を以てするは何といふに。それも神通といへば大さうに聞ゆれども。先にも申したる如く。實は幻術と云もので。その幻術といふは。かの圓覺經の疏に。諸經數幻術名良以二五天此術頗衆一見聞慣審法理易レ明と有て。五天竺ともにこの幻術が頗る多きことで衆人見なれ聞なれてをることゆゑ。この術を行て。その奇怪に目を驚かし。心を惑にして說つけること。人が信を發してよく會得する故。これで人をさとしたものじやといふ上の義で。釋迦より前に出たる婆羅門どもが。皆これを以て人を驚させたものでござる。故に釋迦もこれを専とやらんでは。其道が行はれぬに困て。六年の修行にこれを第一と修行したもので

ござる。夫は即ちかの龍樹菩薩が著はしたる大論にも。鳥無翅不能高翔。菩薩無神通不能隨意敎化衆生と有る。此文を考へて釋迦法師が神通を行つたる故をしるがよいでござる。扨また神通の出來る觀相の仕法は。これも大論に。菩薩爲衆生取神通現諸希有奇特之事。令衆生心清淨。何以故。若無有事不能令多衆生得度。菩薩作此念。已繫心身中虛空。滅麁重色相。常取空輕相。發大欲精進心。智慧籌量心力能擧身未。籌量己自知心力大能擧其身。譬如學踔。常壞色麁重相。常修輕空相。是時便能飛。二者。亦能變化諸物。令地作水。水作地。風作火。火作風。如是諸大。皆令轉易。令金作瓦礫。瓦礫作金。如是諸物。各能令化。變地爲水相。常修念水。令多不復憶念地相。是時地相如念即爲水。如是等諸物皆能變化と有る。これをよく考へるがよいでござる。なんと手妻の大きいものなる幻術に相違ないでござる。また右申す通り。釋迦以前の婆羅門ども。何れも〳〵この幻術を以て道を弘めたる所へ。其世の人のきゝ知らぬ佛道と云事を作爲して。また〳〵同じ神通をかりて弘めよふと爲ること故。以前とは事かはり。大きにはなれた術をして。おごかしたものでござる。これも大論に。種々諸物皆能轉變。外道輩轉極久不過七日。諸佛及弟子轉變。自在無有久近。とあるはこのことでござる。さて釋迦が神通自在なることは。諸經に委く見えたる中に。瑞應本起經と云に。その狀が言みじかにいひ取てありますが。それは。所欲如意不復用思。身能飛行。能分一身作百作千。至億萬無數。復合爲一。能徹入地。石壁皆過。從一方現。俯沒仰出。履水行虛身不陷墜。坐臥空中如飛鳥翔。立能及天。手捫日月。涌身平立。至梵自在。眼能徹視。耳能洞聽。意預知諸天人龍鬼神蚑行蠕動之類。身行口意言心所欲念悉見聞知とあるから。いかにもすぐれた事であつたでござる。此神通といふものは。大論に有る通り。觀想に身を苦めて。よく修行すれば出來ることゝ見えるでござる。夫はどふして出來ると試にいはゞ。人の通はぬ深山幽谷などには。魑魅魍魎。又は天狗などいふ類の奇しきものの多ければ。修行するうちに。つひ〳〵夫らの物と馴交り。又それを使ふやうにもなることゝ見えるで

ござる。それは先日申たる、釋迦が始めて跋伽仙人が所へ尋たる時。諸々の鳥獸が馴住で。飛去らずに居たと有るをしるがよいでござる。御國の古へにかかることの見えたるは。書紀の皇極天皇の御卷に。高麗へ遣し置れたる。鞍作得志といふもの。彼の國に於て虎を友とし。其幻術を學び取り。或は枯山を變じて青山となし。或は地を水に變じ。この外に種種奇しき術を覺えたる所が。虎が其針を授ていふには。愼々人に知らすること勿れ。これを以て病を治したならば。癒ぬといふことはあるまいと云たでござる。そこで得志が虎の教の如く爲て治するに。悉く驗が有たと云ことでござる。然るに得志が其針を大切にして。柱の中に隱しおいたる所が。後にかの虎が。どう思つたか。其柱を折て針を取て去たといふ事がある。此れらを以て考るに。釋迦も虎か何かに針でももらつて持たと見えるでござる。さて佛法が御國へ渡り。御國の法師ども丶。其幻術を受續でやつたものでござる。それは菅原寺の行基。叡山の傳教。高野山の弘法。淨藏法師。其外いくらもあるでござる。近くは御嶽山をひらいたとかいふ僧や。

金毘羅信心じやの。或は道了信心じやのといふ輩が。まのあたり神通らしい事をやるを見れば。隨分苦行をさへすれば出來ることゝ見えるでござる。然れども釋迦ほどに。はなれた業をせぬものは。修行が足らんであのやうには出來ぬのか。若くは出來ても今は幻術といふことがしれて來たによつて。縛られるが。こわさに。はなれたことをばせぬのか。何れにも深山幽谷へ行て難行苦行をして年月をかさね。一心に觀想をすれば。大論にある如く。出來るに違ひはないと見えるでござる。叉かの役の小角などの輩は。前鬼後鬼とか云ものを使つたとあるから。本より狐つかひと同じこと。また阿部晴明は。式神をつかひ。それで不測を見せたと有ますが。この式神といふは。死人の靈を使ふことゝ見える。かやうの業をする輩。むかしは僧どももとより。外にも多く有たが。其うち法師のしざまがにくいでござる。それは中頃の書を讀で見るに。高貴の御方の御懐姙とか。いさゝか御不快とでもいふと。大かたは物怪がつく。そこでいつも法師どもに仰せ付られて祈をなされ。それで御快氣有た所を見れば法師ども己その

物怪をつけまゐらせて。其祈をいたし私せんとのしわざでござる。夫に違ひのない證據は。とかく上樣にばかり物怪の祟りが有て。下ざまにはとんとないでござる。こゝを以て坊主共が爲ることゝなるをしるが宜しいでござる。これは今の世にも僧や修驗者などいふ奴らが。この謀事を行ひ。己れ狐をつけて。その狐をおとす祈禱を受合ひ。物取る者もまゝあるでござる。此れらも。やはり幻術の流れで。多くは佛法から傳へ來たことでござる。然れども。これを神通と云から。何か香しげに思てをる人もあるけれども。元來が邪法ゆゑ。上の御咎めでも有て縛られもすると。とんと神通も何もしらぬたゞ人と同じ樣に。いくぢもなく縛られて。既に山伏の方などでは。神變大菩薩とか何とか云てさはぐ役の行者でさへ。色々をかしなことを致して。天皇の勅命に。何の手もなく縛られて伊豆の島へ流され。ちやこまつて居たでござる。是を元亨釋書などには。勅命が下て。小角を捉へよふとしたる所が。空へ上つて飛去たるゆゑ。捕へることがならなんだに因て。其母をとらへて縛つたによつて。小角は是非なく捕へられたなどゝ云てあるが。みな空ごとでござる。こりやどふじやと云に。高が凡人の爲に役せられ使れるやうな。前鬼後鬼ぐらゐの賤しき妖鬼のしわざ故。とても其人を救ふ程のこともなく。また悟り深く威德のある人には。手も足も出ることじやないでござる。さて悉多はかく坐禪觀想をして。神通の修行工夫に苦行を致しつゝ。月をへ年を經て。殆ど身も枯木の如くに痩衰へたが。老病死苦は解脱することあたはず。只修し得たるものは神通ばかり。こゝに思ふやうは。吾かばかりの苦行を修して。すでに六年に垂とするが。いまだ生老病死を解脱するの道を得ず。さすれば眞の道ではなかつたと見へるから。是は昔閻浮樹の下に於て。傷虫の鳥に啄るゝ所を見て。思惟したりし趣に不如る事をさとり。欲を離れて寂靜ならんことを思つたのが。最眞正の事で有けるよと云たでござる。この語に因て考ふれば。かの生死病死は。解脱することならぬものじやと云ことを。此時始て發明したと見えるでござる。あゝ。のろまなるかな沙婆悉多。その頑愚なる心より。解脱しがたき生老病死も苦行をすれば脱れらるゝ事のやうに思て。長

長の年月を。ひもじい思ひもして見たが。更に解脱がならんで。年とるまに〳〵身の様子も違て來たから。そこで始て目が覺て。離欲愛寂靜の道より余に修し得られぬものと。珠數を投たものでござる。是がのうまでなくて何で有りませう。さて離欲愛寂靜を修し得たばかりでは。是までの婆羅門仙人どもがやつた所と。さしもかはることもなく我慢をやつて。物食はなんだ。かひもないから。なほ負をしみで思ふには。今我昔以二此羸身一而取レ道彼諸外道當レ言二自餓是涅槃因一我當二受レ食一然後成道一と念ひさだめたとあるでござる。この文に涅槃とあるは死る時のことでござる。釋迦が死ぬる時の事を記したる經を。涅槃經といふもこれ故のこと。また釋迦が死ぬときの像を。涅槃の像と云も是故でござる。じやに因て。此文に。涅槃の因といふは。やがてしぬるもとゝ云ふ義になるでござる。また取レ道とある道も。當レ成レ道とある道も。道といへばこと〳〵しいが。さとりの道を得たりと云て。この苦行を止ることを。かやうに重くるしく云たのみのことで。さしも深い訣はないでござる。佛經をよむ人は。かゝる。おごしをくはぬやうに。よく前後を考へ通して。文に拘らず義を取るが宜しいでござる。さて一體の語の義は。我もしこの痩身を其のまゝに。この苦行を止たならば。かの諸の婆羅門共が。そしつて。それ見たか。爲とげもならぬ事を爲て。自がすぎて餓さらばいたが。それが因となつて。命は死るであらう。といはふから。まづ食を喰て。力をつけて後に。この苦行はやめて。生死解脱の道を得たりと披露するがよいと念さだめたといふの義でござる。これが負をしみでなくて何で有りませう。人の噂や。あとさきを考へて取繕ひ。おのが今までの痴鈍を文らんとする惡念がある。こんな佛があるものか。物食はんでは。ひもじくてたまらず。また生老病死を解脱することもならぬと。有體にすればよいに。これが憎いでござる。さて右の如く念ひ定めて。座より起て河に入て。垢だらけ虱だらけな體を洗ひおとし。さて河から上らうとする所が。身體羸痩。不レ能二自出一とあつて上り得ず。あツぷ〳〵として。あぶなく。土左衞門にならふと—て居るから。人が樹の枝につらまへさして。攀出してやつたでござる。扨まづ河から上て

もらつた所が。垢はおちもしたらうが。彼の本文にも。消瘦皮骨相連。血脈悉現とも。若枯木とある如く。眼はくぼむ。腹は背にひつゝく。あばら骨は出る。頬がこけて。あたまといへば。栗のいがを。屎壺へおつことしたと云やうで。いや其形は見られた物じやない。こゝに於て一人の牧牛女の。その名は難陀波羅と云がこれを見て。不便さ。やる方なかつたと見えて。乳糜を取てくれたでござる。そこで悉多がその施をうけて甚悦び。よく〳〵嬉しかつたと見えて。その女に對して。禮に咒願を唱へたでござる。咒願といふは云々。こゝろを説く其咒の趣は今所施食欲令食者。得充氣力當使施家得膽得喜。安樂無病。終保年壽智慧具足といつたでござる。この咒の義は。今この吾に施してくれる所の食は。食する吾身の氣力を充しむる計りでなく。施してくれた功德に因て。そなたも喜を得て安樂無病で。一生無難に壽を保て、智慧も具足であらふぞと云の心でござる。きつい禮のいひやうでござる。顋で蠅を追ふやうになつて。ひもじくてたまらず。ひだるひ時にまづひ物なし。馬ゝ屎でも喰ふ気に成てゐる所へ。かゝる馳走に預つたること故。悦びさうなものでござる。今の世にも。坊主に一文やるとたま〳〵は。この文を唱へてゆく者があるはこの故でござる。但しこゝに憎いことのあるは。ひもじい所へうまき物を下され有難いなら。有がたいでよいことぢや。夫に又へらずぐちの負をしみをいひをつたでござる。其言は。我爲成熟一切衆生故受此食と云たでござる。これがほんに。いやらしいと云のでござる。かくいひつゝ夫を受て食つた所が。身體丈夫になり。大きに氣力を得たでござる。但し右の如く。河であぷかぷして居る所を。人が憐んであげてやつたのを。天神が攀出したのじやといひ。又ひもじがつてゐるを不便に思つて。牧牛女が乳糜をくれたのを。淨居天といふ天が。此女に勸てくれさしたのじやと云て。こればかりでなく。何もかも實事をば。諸天がかうしたの。淨居天がさうしたのと。奇妙不測に託して。重くるしく記しあるが。みな跡からいひ添たことで。取るに足らぬ僞りでござる。それほど諸天が附屬つて居るならば。悉多にこんな。たはけを盡させぬがよいでござる。そりや諸天でも

ないと云ものでござる。かくて悉多は。畢波羅樹といふ木の下なる石上に坐して。（此樹の事受胎經には浮樹とあり又一には菩提樹ともあるでござる）我道不レ成こゝは起つまいと念ひ定めて。かの乳糜をしやぶりつゝ。そこに四十八日結跏趺座したといふことでござる。此れにもまた大きなうそがしたゝかある。それは悉多がかくの如くづッしりと居つたる故。其德の重き故に。大地が勝(たへ)ることあたはんで。めり〳〵と震動した所が。其響で大地の下に居る。盲聾(めくらつんぼ)の兩目がひらいて明になり。過去七佛の出世したる時も。この瑞應が有たに因て。是は何ぞ佛の出世と思はるゝと云て。地より涌出して。悉多が足を禮(いただい)て。偈を以讃(ほめ)たといひ。また其通り大地が震動し。悉多が眉間より大光明を放(はな)つたに因て。六天の魔王がそれを見て。これは佛ヶ出世と見えるが。それでは吾が魔道を行ふ妨となることじやといつて。吾が配下なる數千の魔どもに申つけ。また自(みづから)も色々と悉多が成道を妨げんとしたなれども。とふ〳〵悉多に降伏せられたの。この餘(ほか)にも仰山なる僞ばかり云てあるが。みな釋迦に重みをつけよふとて。いつたとで。一つも取るに足る物はないでござる。○さて悉多は山に入て。右の如く座禪觀想を爲(し)て。終(つひ)に其道を成就したると云て山を出たる年が。三十歳の時であつたる故。これを三十成道といふでござる。俗に出山の釋迦の像とて。破れ衣を身に纏ひ。瘦さらぼつたいが栗坊主が。山を下りながら風に吹れて。後を振返て見てゐる。すごいやうな圖があるは。この時成道して山を出る時のかたちを書たものでござる。是は二十五の時から三十までじやに因て。ちやうど六年の修業でござる。かくてかの石上を起て山を下り。かの阿若憍陳如が輩五人の居たる。波羅奈國へ來ると。彼五人の者どもは。悉多が食を受て食たることを知てをるに因て。互(かた)に語り合ふには。瞿曇棄ニ捨苦行ヲ一而受ニ飲食之樂ヲ一。所レ志不レ獲今既ニ來ル此。我等不レ須ニ起迎一之亦勿レ作ニ禮敬ヲ一と云ひ合せて。各々默然として居たが。さすがに。そこへ來ては。さうもならず。かれこれと世話やいたと云ことでござる。其時悉多はかの神通を以て。早く五人の者の意をさとり。汝等申合せて吾を迎へまいと約束したが。なぜに其申合せたる言に違て。かくとりはやすぞと云た所が。五人が大きに驚いて。

おの〳〵面を見合せ。手もちぶさたに前に進んで。瞿曇行道徘徊シ無ニ精進ニと云たれば。悉多がいふには。汝ら無上尊たる吾に對て。憍慢の情を以て。姓を喚で瞿曇と云たが不孫なことじや。子稱ニ父母ノ名ヲ於ニ世俗ニ尚不可。まして吾はこれ成道して一切の父母とあるものを。姓を稱ことゝ相すます。汝ら自ら罪報を招くであらふと。嚴しく叱りつけたでござる。この叱りつけたことは。山から出て來ては始めのこと故。かやうにまづ人の己を輕ずる情を抑んが爲に。けんのむねをくれたので尤なことじやが　この姓を云たる事を咎めたといふのは。此は諸趣のこれを翻譯する法師が。からの事に因て加へたことでござる。姓をいふを無禮とすることは天竺にはないでござる。諸の佛經にかやうの事が多く有るから。氣を付て見るがよいでござる。さて五人の者どもは。此の如くきめられて大きにへこみ。顏を赤うして。我らは愚癡なる者ども故。往に見うけました所が。人の飲食を受られたに因て。道の苦行におこたられたのじやと存て。不禮を致してござると云た所が。悉多が。汝ら小智をふるつて。我が道の成と不成とを量る事

なかれ。そも〳〵形に苦あれば心が惛亂し。身に樂あれば情それに著す。じやに因て苦樂ともに道を得ることがならぬから。吾はその中道を行て。しばらく苦行をつとめ。また飲食をうけて。かくの如く物くつたり。物くはなんだりの行を爲たのじや。これ皆おれが深き存じよりが有て爲たことで。その方どもの知たことではないは。今既にその驗に因て。生老病死の患を離れて。無上正覺の道を成就することを得たるぞと。嚴しく叱り。その弱つた所で。かの四帝十二因緣といふことを。こま〴〵と說ききかせ。種々の神道を見せて無常にとき入れて。まづ彼者どもを屈服させたでござる。この阿匿と憍陳如の二人は。弟子の中に於て。かく始に悟したる故に。第一の弟子とはいふでござる。爰に五人の者のいふには。我ら今佛法に於て出家して道を修せんと思ふと云たる所が。悉多が。うなづいて。かの五人を。善來比丘と一聲喚ぶと。鬚も髮も自に落ちて。くりくり坊主となり。自に袈裟衣が身に著て。しやんと沙門の形と成たでござる。こゝらがとんと尾上松綠が。早がはりを見る心地かするでござる。なんと手

妻でありませんか。この手妻をつかつて。人をくりくり坊主に爲たること夥しくあるが。其一つをいはば。或る長者の息子に名を耶舍といふが有て。何の氣もなく女ぐるいをして遊んで居たる所を。坊主にした手際が妙でござる。かの神通を以て自然と其樂を。いとふ心を生じさせ。先づふら〳〵と外へ出る心もちになして。家の外へ出ると。空中に光明を耀して。構の門も自然に開けさせたでござる。さて耶舍は何か知らず。やみくもに世の事がいとはしく苦く覺えて。その光明を尋て行くと。其道に河がある。向ふは悉多が居所でござる。こゝで耶舍は覺えず。あら苦しやと一聲云と。即ち河向ふから聲をかけて。耶舍汝便來るべし。我に苦を離るゝの法ありといふから。河を渡て往て見ると。悉多がさまは。かの三十二相八十種好とかいふ顏容で。威あつて丈高く見ゆるから。まづひらたく成て足を戴き。吾が苦を救ひ給へといふ。そこで色々あはれツぽいことを云てきかして。然らばその法に歸きたいといふと。悉達がかの善來比丘と一聲いふと。自らに髮鬚が落て。沙門の形となる。それを尋てこの耶舍の父が來ると。又かの神通でをかしな心持にして。それも吾が道に引入れ。又この耶舍が友とする者ども。五十人も有た時に耶舍が緣に因て。これらも出家したくなるやうに仕かけて。吾許へくりよせて說法し。さて出家したと云と。直に善來比丘といふと。五十人が一時に。右の如く。くり〳〵坊主になるでござる。かくしつゝ段々に人をくり々々坊主にしてまはる。此はまあ何とも名付やうのない山事でござる。扨その山事の妄說。釋迦が悟り得たるといへる趣は。この天地いまだ无かりし百千億萬の前世よりの事實。及び人物の有り初より。その父母兄弟妻子眷屬。また貧富貴賤。壽命の長き短き。又その姓名。また造す所の善き惡き。さて今の何某は古への誰で。此處の何某は彼處の何某に生れ。或は鳥に生れ。虫に生れてをると云こと。また人の賢きも。愚なるも。顏の麗しきも醜きも。悉くに故あることとなるを始め。また人死しては其所行の善惡に因て。天上。人間。地獄。畜生。餓鬼の五道にわかれ行く事先その「人間に生れては。始め胎に託らんとするとき。父母和合すなはち不淨を以て體となし。

生れ出ては老病死。その外さく／＼の苦あり。また「地獄に墮しては。或洋銅灌口。或抱銅柱或臥鐵牀。或以鐵鑊而煎煮之。或以火上而加串炙。或爲虎狼鷹犬所食。或有避火依於樹下樹葉墮落皆成刀劍割截其身。或以斧鋸解剝肢體。或擲熱沸灰河之中。或復擲熱屎坑中。受如是等種々諸苦。また「畜生に生れては。雜の醜き形をうけ。或は骨肉皮毛の爲に殺され。或は人の爲に重擔を負ひ饑渇ても人之を知る者なく。或はその鼻を穿たれ。或はその首に鉤うたれなどの苦しみをうく。また「餓鬼は恒に暗中に居て日月の光を視ることあたはず。形を受ること長く大きく。腹は大山の如く。頸は鍼の如く。口中つねに大火もえ出て。常に饑渇を苦しめども。千億萬歲。食を得ることあたはず。雨の灑ぐに値へば。それが變じて火の珠となり。海河すべて水を臨めば。その水化して熱銅焦炭となり。身を動かし歩行すれば。肢體節々より悉く火然え出づ。これみな爲本造慳貪積財不施故。令今者受斯罪報。若人見彼受此苦痛宜應惠施勿生悋惜設使無財亦應割肉以用布施。また「諸天に生るゝは。

その身清淨にして塵垢を受ず。瑠璃の如く大光明あつて目瞬かず。心常に歡悦して適はざるの事なく。天樂を奏して娯み晝夜を識らず。四方ことごとく絕妙ならずと云ことなく。衣服飮食念ふに應てすなはち至る。然れども天福盡る時ありて命終り。彼の天身をすてゝ三惡道に墜ることあり。吾が修し得たる道はこんなことじやない。生死の相を離れて一切智を成し。甚深なるが故に。一切の衆生は解りがたく入りがたし。唯佛與佛よくこれを知ること。先つおごしかけたものでござる。この如く一切の事を覺つた者と云の義で佛とはいひ。その道を佛道とはいふでござる。佛とは天竺の詞で翻譯名義集に因てこれを見れば。佛陀こゝには云智者覺者とあるから。さとつた人と云ことでござる。扨この佛道といふことを云に付ては。古き。より所をこしらへでは杜撰におちて人が信せぬから。過去の七佛といふを作り。それは過去の世。人壽八萬歲の時に。然燈佛と云ふ佛が世に出で。次に人壽七萬歲のとき。尸棄佛といふが出世し。次に人壽六萬歲の時に。毘舍婆佛といふが出世し。次に人壽四萬歲の時に。拘樓孫佛とい

ふが出世し。次に人壽三萬歳の時。拘那含佛といふが出世し。次に人壽二萬歳のとき。迦葉波佛といふが出世したり。吾今人壽百歳の時に出世して。最正覺を成せり。そも／＼佛は。天上天下の至尊なるが故に。梵天王帝釋天も隨從して。命をきくと大言を吐出し。かの修し得たる神通を以て。梵天王帝釋天などの形を現はし。いはゆる佛足頂禮をして。己を尊ぶ體に見せる。これは今までの婆羅門の立たる教の趣は。古傳のまゝに梵天を尊んで。夫に奉事し。その修する所も天に生ずるを極意とするを破り。また國人も普く梵天を識て世間の祖父とし。また大梵天は萬物を生ずるの本じやと心得て。皆婆羅門等が說を信ずるもの多き。その鼻をひしいで。己が新ばり道を弘めんとてのことでござる。扨その過去の七佛とやらは。更に聞も及ばぬ佛名じやが。さばかり久しき以前の事を。どふして知て居るぞといへば。元來吾は阿僧祇と云て。限りもなき遠き昔に國王であつたる所が。菩提の道を得んが爲に難行苦行をして。其の功德つもり／＼て。一切種智と云を得て。兜率天といふ天に生れて。其名を聖善白菩薩と云て。

則ち天の諸神を敎導して居たる所が。時到つたるに因て。又この國土に生れ來て。ひろく衆生を濟度せんとて。まづ其生るべき國はどこにしよふと云こと。又その生るべき家がら。及び其父母とすべき。人がらなどをも。觀じたる所が。天竺國の中に。まかだ國は。誠に國土の眞中で。十二遊經 因果經 此れにこしたる地がない。天上天下唯我獨尊の身として。外の邊地に生るべきことではないと。まづ觀じ。さて其國の淨飯王は甘蔗王の苗裔で。夫婦ともに吾が父母にたのむに足る。又その妻摩耶夫人は壽命か短く。來る何月の何日に死ぬべきといふ。さればかれが腹をかりて。世に生れよふと云ことまでを觀じ。その腹へ假に宿て出世したる者じやと云て。なほ疑ふものには。いざ其證を見せんと。かの大神通をあらはして大地の震動する如く思はせ。大地がわれると其地中より。一つの塔が湧出すると。その塔の中に。かの過去の七佛と立たる中の佛などが居て。善哉々々と云て。今釋迦の說る如く相違なきことで。吾は今より過去三十一劫のむかし。人壽七萬歳のとき出世したりし尸棄如來なり。疑ふこと勿れなどゝいはする。また

吾ははやき昔より成佛して。兜率天に居たる者じやと云を疑ふものに示さんとて。眉間から大光明を發して。其光明の中に兜率天のありさまを現はし。諸天神が吾を尊敬して仕へる相を見せて膽をつぶさせ。此外にも地獄を疑ふものには地獄の有樣を見せ。餓鬼道と云を信せぬ者には餓鬼道のさまを見せ。また乾闥婆城と云て。この海中にその住處があると云を信せぬ者をはいざ來れ其樣が見せんと伴なつて。海底にすら〳〵歩み入る。さて乾闥婆城へ行くと龍王が出迎て。佛足頂禮をする。かくの如きの相を現ずることは。皆かの修し得たる幻術を以て現はし見することで。その隨一のことは。中々二席や三席に申し盡さるゝことではないから是に准へて知るべきことでござる。かやう致しつゝさんと人を惑はして。己が[illegible]ばり道に歸依させたものでござる。けれどもすでに其世の人等も心あるは誹謗して。佛智慧不レ出二於人一。但以二幻術一惑レ世と云たと云こともの。龍樹が大論に記してあるでござる。かくしつゝ。吾より前に道を說たる者どもをば。おのが道の外なるといふの意を以てすべて外道と名づけ。芥の如くに賤しめたでござる。世の人は外道といへば。何か怖しく角でもはえてゐる物のやうに思つて居るが。これは釋迦の說き出したる佛道の外の道といふの心で。儒者が儒道の外なる道をば。異端といふと同じことでござる。但しかくの如く。もろ〳〵の外道をばおし掠めいひ破つたなれども。其世にも並び行はれて。心ある者はみな元のまゝに。婆羅門の說を用ひたることと見えるでござる。是はさうあるべきはずは。婆羅門どもの說く所は。彼國の古傳說を本とし。今ある實事を見て道を論じ。親妻子も其儘あり。愛情もすてぬもの故。いはゞ其國にはえつきの道でござる。然るに釋迦が立たる趣は。かの婆羅門どもの謂ゆる天堂地獄因果應報治心などの說は理あることで。それは破られぬから。其なりに竊んで我物となし。其中生天の說を破つてひくしとし。親妻子の愛情さへにすて。生死の海を出ると云ことを加たるのみのことで。其加たる所は。すべて無理なる事ども故。この譯を辨へたものは。釋迦が說には因らぬはずのことでござる。それ故竝び行はれたものでござる。また玄奘法師が西域記に因て考ふるに。この法師が

彼の國へ渡つたる時分は。佛法は婆羅門の道よりも大きに衰へた様子に見える。夫はかの西域記に。天祠と云て梵天を祭たる祠が。國々にいくらとなく在るやうすだが。佛閣は夫よりも少いやうすなるを以て考へるが宜いでござる。扨かくの如く大山事を工夫して。とう〳〵釋迦はまづ一大家と成て國々をあるく所。が彼の婆羅門の輩も多くしめられて。弟子となつたるが多き中に。摩揭陀國の王舍城と云所に。摩訶迦葉といふ婆羅門がある。これは其父なる者は甚の大富長者で。天竺の內に。十六大國と名におふ國が十六あつて。其の國々に肩を竝ぶる者はなかつたと云ことでござる。尤も婆羅門の家柄で。かの古へより有來たる生天治心の學問を致して。迦葉は弟子の五百人餘りも有たでござる。こゝに釋迦が思ふには。かの兄弟三人の者は仙道を學で。國王臣民悉く信ずる者で。また聰明なるもの故。かれを吾が下につけたらんには。廣く人を濟度するの力になるべき者ぞと思ふて。かの摩揭陀國へ行て。日暮に迦葉が住所へ行たでござる。所が迦葉か出て年少沙門どこから來たといふ。そこで釋迦が吾は波羅奈國より來れるが日が暮たる故。一宿をたのむといふ。そこで迦葉が宿を借して。其留たる晩から。種々の神通を行ふて。迦葉をおどかしたることすべて十八度。其中にまづ迦葉らが第一と尊む所の梵天が。每夜來て釋迦の說法をきゝ。佛足頂禮などをする。これに膽を消して居る所を。また婆羅門の法に火に事へると云て。晨朝に火を燃して供養する法がある。そこでかの五百人の弟子どもが。晨朝に火を燃さんとするに燃ぬから。膽をつぶして迦葉に云と。是れはかの沙門の所爲であらふと云て。其事を釋迦にいへば。還去れ。火が自らに燃るであらふと云から。還て見ると火は燃る。さて供養畢て其火を滅さんとする所が。いッかなしめらぬ。そこで迦葉が其事を釋迦にいふと。汝かへれ火は自ら滅るであらうといふ。還て見るときえてゐる。また或時は迦葉がもとへ摩揭陀國の王を始め多くの人が來て。七日會と云ことを爲す時に。迦葉が心に。この年少の沙門は相好はなはだ麗しいに因て。これを見たならば會つたる輩が。吾を捨てこれを信ずる心にならうも知れぬから。どうぞこの沙門が七日が間。吾が所に來てくれねばよ

いがと思ふと。釋迦は其心を直に悟つて。どこへか行て七日還らずに居る。扨七日を過會も訖たから。迦葉が思ふには。かの沙門が。七日來てくれんで大きによかつたが。今こゝに集會の餘饌があがるが。歸つたら是を食はしたい物じやと。思ふより早く〳〵。釋迦がすなはち其心を知てひよろりと直に歸て。迦葉が前へ來たでござる。迦葉が。大きに驚いて。汝此七日ばかり。何處へ遊行したことぞと問ふた所が。釋迦が。この程の集會につけて。そちが心中に吾を忌む氣があつたる故。餘處へ往たが。汝今心に吾を來れがしと思つたに因て。還來たのじやといふから。星をさゝれて迦葉がたまげまいことか。身の毛も竪つほど驚いたが。中々伏する心なく。この沙門年もいかんで。かゝる奇特なることのみを爲るが。どうしても吾が道の眞なるには及ぶまいと思つたとあるでござる。さて釋迦は右の如くおどしたることとすべて十八度して。今日こそかれを伏さすべき日と云ことを念ひ定めて。河に入てかの神通で流を左右へ開いたる樣に見せて。そこに居ると。迦葉は遙に見て。これは沙門が水に溺れたと見えると云て。弟子どもと船に乘て漕よせて見ると。水は左右へひらけ。眞水上に立てゐるから。また膽を潰したが。いやまだまだ吾が道の眞には及ぶまいと思つてゐる。さて汝船へ上らんと思ふかと問へば。しかりと云て船の底からちよいと入て。結伽趺座して居る。そこで迦葉が船底に穴でも有らうかと思て見る所が。穴もないから。また膽をつぶして居る。何また穴があるものか底からはいつたと見せて。實は上から上つたものでござる。かの手妻つかいが脇指を呑だと見せて。こゝにありと云て懷から出すと同じわけでござる。そこで釋迦がこゝこそと思て。汝不知道證胡爲起大我慢。稱我有道德と云たる所が。迦葉が誠に慚入て。如是沙門。如是大仙。願攝受於吾といふ時に。釋迦が云には。汝年旣老て百二十歲なり。また弟子眷屬も多く。國王臣民の爲に敬せらるゝ事故。もし決定して吾法に歸せんと欲はゞ。よく弟子どもと詳論してからのことにしやれと云たる所が。迦葉は實もと云て弟子どもを集め。かの年少の沙門が中中大抵の者でなく。吾が及ばぬもの故。吾今其法に歸せんと思ふ。汝らが心はいかにといふと。弟子ど

もの云には。吾らが知たる事どもは。尊者の恩で覺たること故。かの沙門は尊者の信ずるならば。吾らも共に歸依しよふといふから。引連て釋迦の前に出て。ともぐ＼その弟子とならんことをいへば。釋迦がまた例の如く善來比丘といふと。迦葉を始め五百人の弟子ども一度に髮髭が落ち。袈裟衣が身に著て。即ち沙門と成たでござる。是を見て迦葉に二人の弟が有て。各々弟子が二百五十人ほどづゝもあつたが。此等も弟子に成て。くり＼／＼坊主にされる。迦葉一人を伏さしば許りて。暫の間に千人餘りも善來比丘にしたでござる。さて爲二迦葉及諸弟子一現二大神變一。又應二其心一而爲説法とあつて。かく新に人を濟度したる時の狀を見くらべる所が。いつでもまづ神通で膽を潰させ信を起させて。弟子に成りたいと一言いふと。其言の變ぜぬうちに。手早く善來比丘にして。そこでかの大神變を現して説法する。その大神變といふは。説法のとき大地が震動して。異類異形の物が涌出して説法をきゝ。また天上より花を降し音樂などを奏じて。諸天が下て其説法を讃る。之は皆その者どもに信を起させんとてする幻術でござる。則

本文に。爲二迦葉及諸弟子一現二大神變一とあるを考へ見るがよいでござる。また梵天およびもろ＼／＼異類異形の物の現はれ出る事は。先に申たる瑞應本起經に。能分二一身一作レ百作レ千。至二億萬無數一とある如く。近くは狐が人に化て。色々な物を出して見すると何もかはりはないでござる。さて釋迦が迦葉を骨折て伏させたることは。先にもいふ如く。この者は年といへば釋迦よりは四さうばいで。百二十歲。家柄もよく富榮え。その眷屬も多く。修行は八十年して。釋迦が出ぬまへは神通廣大で。なかなか其世にはの立つ者なく。國々の王どもを始め。世には大さう用ひられて居るに因て。此者一人を伏させて弟子にすれば。これを信ずる輩をが。みな坊主にしよふとまゝになるといふ見込でいたしたことでござる。されば夫故外の弟子とは違つて。迦葉をば殊更に敬ひ。來れば出むかひなどもいたし。またひさしく乞食をして衣はつゞれとなり。さかやきなども長くはやして。見苦しき體で釋迦の所へ來たる時など。迦葉を見知らぬ外の弟子どもは。迦葉を侮り賤める者もある。その節釋迦が自分の半座をわけて迦葉を座せしめ。

大きにその功徳を賞て。我と異なる事なしと申たることもあり。また釋迦と迦葉と同座を致したるをりなどは人々咸釋迦が師で。迦葉は弟子と成たと云を疑つて信せず。迦葉は大智慧あつて普く世の人の敬ひ信ずる所。何どして年少の沙門が弟子とならふぞと云たと云ふことでござる。いかさま迦葉は年も釋迦の四さうばいなり。釋迦が敬ふ樣子。かたぐ\何れも左樣に思たらふでござる。其時釋迦は早くその心を悟て。迦葉に。汝もろ\/の神變を現はせといふと。迦葉は即ち虚空に昇て。身上よりは水を出し。身下よりは火を出し。また身上より火を出し。身下より水を出し。或は大身を現じて虚空の中に滿てしめ。また小身を現じ。或は一身を分て無量身となし。或は身を沒して地に入り。また虚空中に踊出て行住坐臥す。衆人これを見て目を驚し。未曾有と稱歎して。かほどの大仙が。どふして沙門瞿曇が弟子とならふぞと云てゐると。迦葉は空中から下りて。釋迦の前に至て頭面禮足と云て。そのつむりに釋迦の足をのせ頂いて禮をなし。世尊是天人之師。我實其弟子じやと云から。衆人膽をつぶして。かくの如き大

阿羅漢の人を弟子にするとは。さすれば釋迦はすさましい者だと信伏したといふことでござる。實に迦葉が今致したる神通の十倍も。釋迦の神變は。ましてをるから。きつい物でござる。扨之よりますます其說を弘めて。かの智慧第一の舍利弗。神通第一の目犍連。また目連ともいふなどを始め。盡く弟子にして。扨己が道の掟をも立たでござる。それはかの誰も知てをる。殺生。偸盜。邪婬。忘語。飲酒の五戒を始め。種々の戒めを立て。その道に入り出家したるものは乞食と云て人の門に立て。今の世の僧もする如く。餘り物をもらつて命をつないで居るでござる。但しこれにも法が有て。まづ乞食するわけは。一切の憍慢の心を止させよふが爲じやと云ことで。其貰つて來たる物を四つにわけて。一つは同行の僧どもに與へ。一つは窮乏の人と云て。物をもらつて來ぬ人に與へ。一つはこれを諸々の鬼神にそなへ。殘り一つを自分のくひ料として。そのくらふにも度々はくはんで。其戒めに。飲食。譬如ニ人身病服レ藥。令ニ其愈一不レ得ニ貪著一といひ。又一日一食。不レ得ニ再食一ともあるでござる。また次第乞食の法といふこともあ

る。夫はまづ一つには。口々に一家に到り食を得ると。夫を食てたらんでも夫で。おく。二つには次第七家に到り。食をもらへば食つて。又たらん時はそれでおく。三つには次第家より家に到り。食ふほどあれば夫でおく。またの日乞食に出る時は。先に行止つた家から。また貰ひ始めるでござる。この外に乞食をする法が色々有て。ちよつといひきれぬことでござる。扨この乞食といふことばゝ。天竺の辭では分衞といふでござる。夫を漢土の語に翻譯すると乞食と云ことになるでござる。今の世に僧の物もらつてあるくをば乞食といはず。たゞ非人どもの。物もらつて歩くばかりを乞食と云でござる。然れども人の門に立て。ものもらつてあるくことは。古へにはとんと无かつたことで。元來佛法が渡つてから。僧どもが。物をもらつてあるくを見まねて。よるべなき者どもが。其まねを爲たものでござる。されば乞食の本家は坊主で。その坊主に乞食をしてくふことを教へ。法をも立たるは釋迦で。自分も。もとより乞食をしてあるいて。乞食じやに困て正直に自ら乞食じやと。佛書に書てあるでござる。されば今の非人どもの爲には。釋迦はきつくよい事をしておいたものでござる。うゝ非人の所のにはた見ると。ほこらのやうに作つて。白山權現とかいふを祭つてある樣子だが。人にきけば。あれは乞食の開祖じやと云ことじやが何者かしらぬが。これは釋迦を祭るべきことでござる。然るに今の坊主は。くらゐそばへて。乞食をしてあるきながら本を忘れて。門に立つた時。出ぬ〳〵とでも云と大きにおこつておれは乞食ではないなどゝ云が。ありやけしからぬ心得違ひなことでござる。

出定笑語講本中之巻

平田先生講説　門人等筆記

さて衣服はこれも甚だ色々のわけがあるけれども。一體袖と云ものを著るが本とふのことで。釋迦の教へでござる。夫は糞掃衣とも云て。もとは人の捨た物を拾つて著るのでござる。これも四分律と云て佛法の戒めを書たるものゝ中に。牛嚼衣。鼠嚙衣。火燒衣。月水衣。産婦衣。その外裡死人衣。往還衣。塚間衣のたぐひ。なほ種々有て。夫を洗ひ。袈裟色と云にそめて著るでござる。この袈裟色と云は。すべて天竺の言に。物の色目の正しからず。入交つたる色を袈裟と云でござる。こりや元來出家の服と云ものは。右の通り色々と。穢れよごれたるものを拾ひ集めてするもの故。その色が正しくない。夫ゆゑ袈裟と云たもので。元來は上中下の三衣を通じて云たる所を。後世には襟元へ引かける物ばかりを袈裟といふ。則あれが天竺で。出家の衣服の總名でござる。それを今は結構なる。金襴。錦などいふ類ひでするは。大きに釋迦の意とは違てをるでござる。扨

又律の中に彌沙塞律と云がある。夫に汝等比丘。雜類出家。皆捨二本姓一稱二釋子沙門一と云たとある。法師どもの釋子といふはこれ故でござる。さて右の如く法を立て衆生を導き。くり〳〵坊主にして廻たることこゝに六年。このとき父淨飯王は。吾が子の成道出山したることを傳へ聞てこのかた。六年なる所が。いまだ相見ず。甚だ戀しく思つて優陀耶といふ者を呼で申付るには。吾が子に別れてより以來十二年になるが。夙夜にその愛慕の心止ず。逢まほしく思ふ程に。其方かしこへ行て迎へ來れと申付たでござる。優陀耶その旨をうけて釋迦のもとに至り。つぶさに淨飯王が意を述たる所が。其の樣子の嚴重で。かの梵天帝釋なども其命をきいてゐるさま故。こいつまた出家したいと云出したでござる。するとかの比丘來と一聲かけると。例の如く髮鬚悉く落て沙門となる。時其餘所レ度不レ可二稱計一とあるから。此時も夥しく坊主にしたと見えるでござる。將心に思ふやうは。今若還レ國無レ所二感動一。所レ化尠少。先遣二優陀耶一顯二神足一て。吾が往んとすることを知らしめて。道心を發起せしめ。そこで吾が往て導いたならば。度

する所が多からうと思ひ定めて。優陀耶に云やうは。吾今本國に歸るべけれども。國人の信ずまじきことを恐るゝから。汝まづ神足を以て虛空を往き。神變を顯はしたならば。新まいの弟子すらかゝる神變をなすから。まして佛は威德無量のことであらうと。信じ受るであらうと云た所が。優陀耶は其旨をうけ飛行して虛空を登り。本國迦毘羅衛城の上に到つて。彼迦葉が虛空に上て致したる如き神通を。花々しくやつたる所が。國中の者みな〳〵口あんごりとあいて虛空をながめ。大きにたまげて感心して。釋迦が得たる道の尊きことを知たと云ことでござる。此時優陀耶は。しすましたりと思て。淨飯王が前に出ると。王が吾が子はいつ還ることじやといふ。七日ばかりに來らんといへば。王が踊上つて大きに喜び。國中に觸をまはし。道を淨め地に香汁を灑ぎ。旛蓋を竪て日を數へて待て居る時に。釋迦は其日になつて諸の弟子に告て。今日は本國に還て父王に見る程に。衣服を嚴整にして供をいたせと云て。かの梵天を右に現じ。帝釋を左に現じ。彼須彌の四天王とかいふ。毘沙門の輩を前に現じて從はせ。また諸々の弟子どもをば悉く後に立せ。其外諸天龍神など云ものゝ形を夥しく現じて。それに或は香花を捧げさせ。または樂を奏じさせ。自らはかの大光明を發して。三十二相黃金の肌を見せ。大地震動の神通を行ふこと六反して。足は尤も地を踏ず。中をあるいて迦毘羅衛國を到つたでござる。この時父の淨飯王は。もろ〳〵の臣下と共に遠く出迎て平臥して。この尊き有さまを觀て。喜び泣に泣出したと云ことでござる。これはさうも有ませう。かく平臥してをる所へ釋迦は中をあるいて來ること故。ちやうど淨飯王が額の所へ足が來てゐる。こゝでかの頭面禮足と云て足を頂くの禮を父にさせた物でござる。分別功德經と云ものに。佛還ニ本土一。足升レ空行與ニ人頭一齊。使ニ父王一接レ足。而己不レ欲レ屈レ身。と有は此事でござる。一體天竺の禮と云ものは。合掌じや。偏袒右肩じや。結迦趺座じやといふ類がすべて九とほりある。其中にこの足を頂くの禮は。いッち尊ぶのかたちで。まづ貴人に出逢た時。稽首と云て地べたへ首をつけ。扨その間が近ければ。その貴人の踵をなで。また足をねぶるでござる。すると其貴人が手を出して。その

足をねぶる者のつむりを撫さすつて。どうだ替ることもないかといふやうに辭をかける。是が則其拜禮を受たるかたちで。諸々の經に佛足頂禮。又頭面禮足などあるはこの事でござる。なんとこれも國がら相應の禮なら。しかたはなけれども。さて〳〵親たる者に足を頂かせ。ねぶらすと云は。人たる者の忍び難く出來ぬことじやが。釋迦もこゝらは眞に豪傑でござる。扨かやう致したは。みな。佛ほど尊い者はない父にすら足をいたゞかするど。人に信を發させんが爲でござる。またこの時もろ〳〵の樂器が自に鳴り。婦女の珠環が相撲て聲をなし。盲者は目をあき。聾者は耳がきこえ。拘躄は行き。瘂者はものいひ。狂者は正氣に成たなどゝ有ますが。このうち樂器の自に鳴つたなどは。彼の幻術で。そんなことをしたで有ませうが盲が。目をあいたの。いざりがかけ出したのと云はみな僞でござる。もし寔にこんな事が有つたならば。夫はかの古河の弘法水を始めた山師や。ひもんやの仁王をはやらかした山師が。かねていざりや。をしや。つんぼ。めくらなどを。こしらへて置て。かの仁王を信じ。弘法水を用ひてから直つたと云て。目をあかせたり。いざりを立せたりしたる術と同じく。釋迦がかねて拵へて置て。此時そんな奇特を見せたに相違ないでござる。○さて此時淨飯は。國中のすぐれたる者五百人を選で沙門となし。また迦葉等が有様を見る所が。至て形が陋しげに見えて。釋迦がそれらを從へてをつては。尊げに見えぬとて。吾が親族の内から。形のうるはしき者を選んで。釋迦の弟子につけたともあるでござる。また淨飯王が弟に白飯王と云がある。これに子が二人あつて。第一の子を阿難と云ふ。これが物覺えがよくて。釋迦が生涯に云たる言どもを覺てゐたと云ふ男でござる。これもこの時出家させたでござる。其次を調達といふ。是がいはゆる提婆達多でござる。これがとかく釋迦の爲る事が氣に入らぬと云て。生涯爭つた男でござる。尤さやうに始終中の宜しかるまじき訣は。釋迦がかの瞿夷といふ女を迎へる時に。調達もそれに心をかけて居たなれども釋迦にとられたるから。始終それが根と成て。中わるかつたと見えるでござる。とう〳〵爭ひが募て之は釋迦の神通で燒殺されたでござる。扨此時釋迦が

の親族どもを弟子に致したる神變。また無理やくたいに出家させたる者多き中に。いとも憐むべきは。釋迦が迦毘羅衛國の尼拘類園といふに居て。城內に入て乞食をしてあるいた所が。其の弟の難陀と云が有て。是はかの摩訶波闍婆提が生んだ子でござる。年もいッかふ若くて。高い所から見ると。釋迦が乞食するを見て。下て來ていふには。佛は刹帝利の王種とありながら。自ら鉢を持て乞食をすることやあると耻しめて。其鉢へ飯食を入れてやッたでござる。釋迦は却て。もはやかれを比丘衆にしてやらうと云心が起て。弟子どもにいふは。かれが居所へ乞食に行て。もし彼れがこの方の鉢を受とり。物を入れて出したならば。それを取らずに還り來れ。必この所へ來るべし。我はからふ旨ありと云てやッたる所が。果して其計の如く。難陀が鉢を受取て物をくれたなれども。行た奴がそれをうけとらぬから。難陀がついて來る時に。難陀の婦に孫陀利といふが有たが。その出る時いふには。速に歸るべしと云ことを。反々いッたと。これは釋迦が許へ行た者は。坊主にされぬと云はないから。吾か夫もそんな目に逢てはならぬといふ心であッたと云ことでござる。そこで難陀が釋迦の許へ行て。鉢を置てかへらふとする所が。釋迦がいふには。汝すでにこゝに來る。今よろしく鬚髮を剃除して三法衣を服すべし。何ぞ還らうと云ぞと。以二威神力一逼二迫難陀一令二出家一。閉二在靜室一とあり。また佛即命二剃師一剃髮。難陀不レ肯。怒拳而言。迦毘羅衛一切人民。汝今盡可レ剃二其髮一也といひッたこともあるから。無理やくたいにおごし掠め責つけて坊主にして。かはいそうにも年もいかぬ者を押籠て。座鋪牢のやうな所へぶちこんだのでござる。そこで久々あッた難陀が閑暇を見て。逃て家に歸らうと伺ひ竊に遁れて。大途を行ては釋迦に逢ふもしれずと。小徑からこそ〳〵逃ると。やがて釋迦がそれを知て。行く向ふからまはッて來たでござる。そこでごふもならぬから。木の蔭へ隠れんとすると。釋迦が神通で。其木を根から拔倒したでござる。そこで其木のぬけた穴へ隠れて居ると。釋迦がそこへ來て。何にこゝへ來たと云から。膽魂を拔れてふるひわなゝく所が。汝はどこへ行ふと思ふと云から。ふるひ〳〵。家に還て婦に逢たく思ふといふ。此時釋

迦がいふには。吾今將レ汝天上に到て觀せふうから。怖るゝなどいひさま。かの神變で。とんと天上に行き上るやうに思はせたでござる。さて難陀は釋迦ともに。その天上に上つて。一つの宮殿を見ると。その莊嚴の麗しく。其樂きこと言べからず。そこに一人の玉女と云て。玉の如く麗しき天女が居て。それに夫とおぼしき者がないから。難陀があやしく思つて。是はいかなることぞと問ふたれば。釋迦が。そち自身に問へといふから。自らその天女に問ふた所が。天女答へて。汝不レ知乎。迦毘羅衛國。釋迦文佛之並父弟難陀。後當三生レ此爲二吾夫主一ここたへたでござる。そこで難陀も。ひそかに少し嬉くなッて來たでござる。此時釋迦が云には。此のわけじやに依て快く出家道を修せよ。久しからずして汝こゝに生れて。かの玉女を婦にして。福を受ること無量であらふぞといふ。扨また地獄の狀を現じて見せたでござる。その有さま上に申したる如く。見るに堪がたき苦みのみ有るが中に。一つの大鑊がかけて。それに獄卒大勢とりまいて。湯をたぎらして居るが罪人は見えぬ。そこで難陀が。あれはいかにと問ふたれば釋迦がいふには。汝自ら獄卒どもにとへと云ふから問ふ時に。その獄卒どもが答へて。迦毘羅衛國の釋迦文佛の並父弟に難陀といふ者あり。人となり放逸にして婬欲の情多し。渠が命終りて後。まさにこゝに來るべし。その時煮んが爲に設けおくのじやと云でござる。こゝに於て難陀が身の毛を堅て。顏色かはッて恐れわなゝき。獄卒どもが留よふとでも云てはならぬと思つて。南無佛陀。南無佛陀。唯願將レ吾還り給へと云て。袖にすがッて。是からとんと出家する氣になッたと云とでござる。こゝらの神道のさまが。とんと老狐が人を化すありさまにかはりは无でござる。また吾が子羅睺羅を出家させんと云て。弟子の目連を耶輸陀羅が所へ遣したる所が。耶輸が云には。吾が夫太子たる時吾を娶りて妻となしゝより。吾それに仕へて一つの失もなく。いまだ三年も滿ざるに家を出て逝れ去り。父王自ら往き迎へども其の命に違戻したがはず。鹿皮の衣を著て。其さま狂人の如く。山澤にかくれ居て勤苦すること六年。成道して國に還れども親を顧みず。恩舊を忘るゝこと路人より劇しく。吾が母子をして孤を守り窮を抱かしめ。今また使

を遣して吾が子を求め。その眷屬となさんとするは。何とて。かくの如く酷（はなはだ）しきぞ。成道して自ら慈悲じやといはるゝが。慈悲の道は衆生を安樂せしむべし。今反りて人の母子を離別せんとす。苦の中にも甚しきは。恩愛離別の苦に若（こし）たるはなし。こゝを以てこれを推考ふるに。佛に何の慈悲かあらんといふ。これは一々至極尤もなるいひぶんでござる。そこで目連が種々と喩し諫むるけれども。耶輸陀羅さらにきゝ入れぬでござる。こゝに於て目連もこまりはてて。此事を淨飯王に云たる所が。淨飯王はその妻。摩訶波闍婆提をやツて喩させたる所が。耶輸はいツかな聞入れず。吾家に在る時。八國の王より請に來たなれども。父母はそれに許さず。太子は才藝人に過てをることゆゑ。父母が許してこゝへ嫁いらしたるに。太子その時世に住せず。出家學道せんとならば。なぜに。ねんごろに吾を求めてあるぞ。それ人は婦を取り。恩好聚集歡樂をなして。萬世相承ぎ子孫相續で。紹繼宗嗣は世の正禮也。太子既に去てまた羅睺を求めて出家せしめ。永く國嗣を絕さんと欲す。これ何の義ぞやと云から。摩訶婆闍婆提も。この言ども一々理あるにかへす言もなく。默然としたと云ことでござる。こゝに於てどふもならぬから。釋迦が例の神通で。空中に聲をひゞかして。耶輸陀羅汝いかに遺れたるか。往古の世に吾れ汝より。五莖の蓮花を買取れるに。汝世々ともに吾が妻とならんことを求む。吾それをきゝ入れず。汝もし一切布施して意に逆らはずば。吾が妻となることを許さんといひしに。汝誓を立て。世々生るゝ所の國城。及び生める子。また吾が身も君に隨て施與して悔（くゆ）る心なからんと云へり。然るに今なんぞ羅睺羅を受惜して。出家せしめざると云たでござる。これが不測でござる。耶輸がその語をきいて自然と。いかにも前世にさう約束して有けると胸にうかんで。いままでかたく拒んだ事が氣の毒の心持に成て。羅睺羅を出家させたくなつて目連に渡したでござる。そこでまんまと羅睺羅も出家にしてしまツたでござる。なんと佛道の仕方はおもしろいことではござりますまいか。今でも此通りしれも致さぬ。現世未來の因果ばなしで。愚人の鼻をすゝらせて。佛信心のふえる樣に致したもので。しんに仕方が面白いでござる。扨

右の辺り釋迦のはじめたる佛法と云ものは。死生をはなれ。三界といふを出て。天地の外の者とならふとすること故。君父をもすて。妻子の愛情をも淨くはなれねば得られぬといふの教で。眞の人間にはとんと出來ぬことでござる。然るを後世に出來たる佛經や諸論にっ是をさもあらぬさまにいふてあるけれどもそりや釋迦の本意ではないでござる。論より證據は。既に釋迦が成道出山して國へ還り。神通やら説法やらで。其の父淨飯王。ならびにおのが妻も不承知なる所を。かの羅睺羅を先出家せしめ。扨近き親屬は殘らずといふ程のこと。同じ流れの一家。八萬四千人を弟子となし。其後も國中の人々を殘らず僧にせんと搆たでござる。よく〳〵のことなればこそ。父の淨飯王が釋迦になげいて。これでは國計永ク絶ンといふたことも經文に見える。なんとこれでも人の眞のみちにかなはふか。邪の道ではあるまいか。扨かやうに説弘め言ひちらしたる年數が。およそ四十餘年の間でござる。さて釋迦は諸の弟子どもと。はゝ城といふ所の闍頭闌といふへ到つたる時に。そこに工師の子とあるから。大工の樣な者と見えます

が。其の名をば周那と云が。釋迦の所へ來て。例の頭面禮足していふには。明日私方に於て食を進じたいから。來て下されと請待する。そこで釋迦はうなづいて承知いたし。其の翌日法服を著て。手には鉢を持ち。大衆が圍繞て。その周那の舍に行たる所が。周那は程なく飯食を設て。釋迦にも供につゝいた弟子坊主どもにもくはして。さて別に栴檀樹の耳は。世に珍しきものでござると云て。それを羹て釋迦にくれたでござる。所が釋迦も爲に説法すとあるから。これは珍味をくれて忝いなどゝよろこび。舌打を致して食た事と見えるでござる。扨いろ〳〵と教示して。夫より立て弟子どもと其家を出て。これは大勢馳走になりましたなどゝ。大きな顔をしてかへりがけ。中途にある木の下に留て阿難にいふには。吾いかなることにか疾が生じて。背がいかう痛うなッて。ごうも行かれぬから。其方こゝへ座をしいてくれろと。死そうな顏をして云ふ。そこで阿難が膺をつぶして。いやそれは周那が供へたる。菌の毒にあたらしつたと見へます。さてもにくき奴かな。ごほふもない物を佛に進つて。これは極めてあなたはこれで涅槃

を取らるゝで有ませうと云と。釋迦は阿難か口をとめて。またこの時も負をしみを云たでござる。それは。いや／＼阿難。おぬしそんな事をいふこと勿れ。周那はおれにあの木の子をくれて。おれはそれが爲に死ねば。かれは大きに利を得。また壽命をも得ることじや。夫はいかにと云に。吾初めて成道せんとするとき。食をくれたる女。また此度この食の爲に滅度に及べば。この二つの功德正等にして。その施したる人の利となることじやに依てそんな事いやるなと云たでござる。長阿含經　これは迚も木の子の毒に中つて。年は取てゐる也。とても今度はよくあるまいと自分も決定して。どうせ阿難がそんな事の云ひだてをしては。意地きたなくそんな食つけもせぬ物を食たからじやと。人にも下すまれる事故。かやうの負措みを云て。口をとめたと見えるでござる。是が負をしみじやと云訣は。いかにもかの座禪の苦行に痩さらぼッたる時。牧牛女(うしかひ)が乳糜をくれたるのは功德にもならふが。人に毒をくはして殺して。何の功德にもなるまいでござる。實はまだ／＼世に久しくゐて。善來比丘をしたゝか拵へるつもりでゐる所

を毒殺せられたから。彼の我漫ものではあり。心の中には咽笛へもくひつきたかッたらうでござる。また此時。のたうちまはッてしたゝか苦んだが。周那はより附もせぬを見れば。心あッて毒物をくはしたと見えるでござる。さうなりや。この周那と云者は。餘程見解のある者でござる。さて釋迦は其うちにしきりと大病に成て。これは迚もいかぬことゝ覺悟したることゝ見えて。自ら法服をぬいで褺(たゝん)で。それをしいて。其上に右脇に偃(ふ)して。長阿含經　日頃手ならし持たる所の。鉢と錫杖をば阿難に付屬し。處胎經　もろ／＼比丘どもに云には。諸々善男子。よく其の心を修して。したきまゝの放逸をいたすこと勿れ。我今背疾(せのやまひ)にて惣身いたくて。たまらずと云て苦しむ。涅槃經　そこでもろ／＼比丘らが。何故に一劫も半劫もこの世におはして。我等を敎導なされぬのじやと云たる所が。釋迦がいふには。わが無上の正法は。悉(こゝ)く已(すで)に大迦葉に付屬してある程に。わが如く其方どもを敎導するであらうと云て。とんとまづ死んだでござる。續記　こゝに於て棺にをさめて置(お)くと。しばらくして中から手を出して阿難に問ふて。迦葉舍利弗

は來たかと云でござる。所がこの迦葉はこの前より。その弟子五百人と。耆闍崛山といふ所へ行てをり合さぬ。それ故これは第一の弟子のこと故。戀しく思つて死かねたと見えるでござる。また舍利弗はこの前にはやく死んで。とくに亡人でござる。それを來たかと云て尋ねたのは。これも秘藏の弟子で有たる故に。やみぼふけて。まだ死なぬ事に思ひまがへたものでござる。また薩婆多論といふに依て考へたる所が。この舍利弗と目連はとく死んだる時に。この二人は大弟子のこと故。その數へこんだる弟子どもは。散亂してしまひさうで有つたる故。釋迦はその散亂なきやうにとて。かの神通で。舍利弗目連の二人を化作して。左右においたる故。みなが悦んで。さては舍利弗目連は死んだと思つたが死ぬと云て。散亂せなんだと云こともある。かやうの手妻をやッたることさへ忘るゝとは。けしからぬ病ぼふけようでござる。そこで阿難がいふには。迦葉はいまだ至らず。舍利弗はとく涅槃にいりましてござると云たれば。釋迦が。またいふには。我今永取滅度と云て。即ち手を引こまして。この後に何もいはず。寂であッたと云ことでござる。涅槃經この我今永取滅度と云たる意も。とかく迦葉らに。死目にあはぬ事を思つてのことと見えて。こんなねぢけ者でも。こゝらは不便なことでござる。佛ずきな輩は。こゝをよく思ふべきことでござる。本より心がけたる老病死苦を。はなるゝ事も出來ねば。また阿羅邏と問答の時に。一切の想をすてゝ。それに染著しまいなどゝ。口は立派に云たけれども。この死かねる所を見て。愛情は。捨られぬ者なることをしるが宜いでござる。さてこの死ぬときの事を。涅槃に右の如く寢臥たる所で迦葉がいふには。如來已免一切諸病苦患無有病。云何默然右脇而臥。當為九十五種之外道所輕慢。沙門瞿曇無常所遷と云たれば。釋迦がむく〳〵と起て結跏趺坐して。その顔貌甚だうるはしく大光明を放て。其光が百千の日輪よりも光りて虚空に充滿して。さて迦葉につげていふには。諸衆生不知大乘方等密語便謂如來眞實有疾が故に。今假に病を示現して見せて。世間法を示すのじやと云て。したゝか説法したなどゝあるが。みな後世の大乘經々を造る奸僧どもの。その大乘に重みをつけようとて。云

たることゞもで僞りでござる。實に迦葉はこの時居合せなんだものを。この樣に作り事を申たものでござる。釋迦の身體が。無量の金色大光明を放つたといふことで。それも隨心の羅漢弟子といふにばかり左樣に見えて。いまだ釋迦を深く信せぬものは罪が深いに依て。釋迦をば灰色羸婆羅門と見たといふことが。觀佛三昧經といふに見えてあるが。こりや合點のゆかぬことでござる。なぜといふに。實以て金色大光明のからだならば。信心不信心者おしなべて。一樣に見えさうなことでござる。然るに。かやうのへだてが有るといふは。つら〳〵考ふるに。信ずるものは迷ひに依て。金色大光明のからだと見なし。信せぬものは迷はぬに依て。有りのまゝに灰色のやせ法師と見えるではないかとおもはるゝでござる。これはちやうど狐狸が人を化てゐるを。人間は智といふ惑ひぐさのある故か。其の眼を掠められて。その狐狸を人と見なせども。けツく犬などは狐狸に一向たぶらかされず。とびかゝツてかみふせるやうなことが間々あるものだが。そんな訣ではないかと思はるゝでござる。なほ思ひ合さるゝ事のあるは。これも釋迦の若い内は。根氣づよく。斯樣に神通もやツてゐたが。年のよるに從つて根氣も薄くなりつひ〳〵化のしツぽを現したでござる。それは增一阿含經の十八に。阿難以レ手摩二佛足一言天尊之體何故極緩不レ如二本故一。佛言。夫受二形體一爲レ病所レ逼といふこと見え。また中阿含經には。佛遊二王舍城一。告二諸比丘一。我今年老體轉衰弊。壽過垂レ訖と云たこともあるでござる。こりや年のよるに從て根氣もつゞかず。神通を行おほせられなんだことゝ見えるでござる。なんと佛には。常少不老の德ありと云ことも。外の經論どもにあるが。こりやどうだ。是にも後世の坊主どもが。色々とせつない理窟をつけて。尻口を結ばうとしたけれども。一つもいひ得たる說がないでござる。扨かやうに老衰しつゝ。年八十のときとんと床へついたでござる。夫は大般涅槃經といふ經に。我今背疾擧レ體皆痛。我今欲レ臥。如二彼小兒及常患者一と云て。右脇に臥たといふことがある。然るを後世の僧どもがまた說を作つて。大論などに。佛は金剛の體なれば。實には病と云ことは无れども。方便して病惱が有るやうに示現したものじやなどゝ云たでご

ざる。然れどもこりやけッく贔負の引だをしと云もので。ちやうど儒者が聖人を引たふすと同じやうなことでござる。實には釋迦も其すこやかであッた時こそ。よこさの道のしひごとして。其行を繕ひもしたなれども。死期に及びては其眞心のあらはれて。これはかく有べき事でござる。かの佛も元は凡夫也と云事はあれども。元ばかりでなく。實もッて始終凡夫で。たゞ化て居たのみの事じやもの。死期に及んではかうも有そうなこと。かの四十餘年未顯眞實がこゝで顯れた物でござる。かの。今はの期になりて。阿難に水を乞る時。その聲も。かすかに有たればこそ。阿難がきゝつけぬ事など思ひ出るに付ても。不便なることでござる。然るを後世の坊主どもは。釋迦よりもなほ高くかまへて。我がちに悟りがましく。しやらくさき。狂言をば吐散し。今や命をおとすまでも。其まごゝろを包藏くして世ををはるは。扨も〳〵憎い事でござる。師の歌に「さとるべき事もなき世を悟らんと。おもふ心ぞまよひなりける。とあり。此通じや。扨釋迦もとう〳〵死だる時に。こゝで阿難がをかしなことをしたでござる。それは佛の陰藏相を出して。女人に示すと有て。釋迦が陰莖を出して。もろ〳〵の女人に見せたでござる。これは阿難が心に。諸の女どもが。この陰莖を見たならば。女人の形を恥て。男子の形を得たく思て。佛道を修行する心にならうかとの。心しらひで有たと云ことでござる。さて其翌朝阿那律といふ弟子が阿難にいふことには。汝王舍城に入て。諸の末羅（これは働人のことか）に佛の滅度を語てたのむが宜いと云ときに。阿難が泣々城に入て。諸の末羅どもの。一處に居たる所へ行た所が。それらが云には。朝早々なにの用あッて來たぞといふ時に。阿難がいふには。如來昨夜已に滅度せられたに依て。來てくりやれと云と。これらが云に。どうしてさう急に死んだことじやなどと云つゝ。此等がかゝッて取しつらひ。天冠寺といふ寺へ持て行て。火葬せんとして。薪に油を沃ぎなどして。火をかけたる所が。いつかな燃つかぬから。阿那律がいふには。是は大迦葉が。五百の弟子と遠くへ行てをるから。それを待て火がもえぬであらふと云て止させたでござる。（雙卷經）これは彼のねぢけ心のこり固まりたる所より。かようの驗も有たらふでご

ざる。隨分今の世にも執念深く思ひをとめた者には。かやうの事が有るものでござる。扨こゝに迦葉は。五百の弟子どもと耆闍屈山といふ所に。道を弘めて居たる所が。これは拘尸城をはなるゝこと五十由旬といふことで。御國道にして四十里ほどある所なり。何となく心さはぎがいたす故。釋迦の事が氣になりかの大勢の弟子どもと。釋迦の居たる拘尸城へといそぎ來る。その路で一人の婆羅門法師が。手に文陀羅花といふ花を持て來るに行逢て。そちは。どちらから來たるぞ。我が師は何處にあると問た所が。それが答て。我は拘尸城から來たが。其の方の師は菌の壽にあたつて。すでに涅槃に入て七日をへたと云たでござる。そこで迦葉は大きに力を落しなげいて。善導遐棄。衆生顚墜せんと云たれば。こゝに思ひの外なる事のあるは。その迦葉に從て來たる弟子どもが。更に相賀してとあるから。互によろこびを云て。如來が寂滅しては。わが曹。もし犯すこと有ても。誰訶制する者もなく。これからは安樂になる事じやと。云たといふことでござる。其時迦葉もあきれ顏して。扨も／＼さうしたことかと思て。深く更に感傷したとあるでござる。

西統 こゝらをよく佛ずきの輩に見せもし。聞かせもして。釋迦の敎と云ものは。人情に相反してをることを。曉したい物でござる。やう／＼釋迦が死るやいなや。其の垣內に從ひ居たる者どもですら。かやうに歡びを云ほどのことでござる。これはさうも有ませうで。其の師たる迦葉は。釋迦が神通にたまげて弟子と成たなれども。この弟子どもは。釋迦をさしも信ずる心も无つた所を。師匠ともど／＼に。思ひもかけず。善來比丘にされたこと故。悔しくも有たらふが。その生てゐるうちは。否だといふと。釋迦は嚴しく神通をやツて。辛きめにあはすから。否々ながらに比丘來となツて居たること故。死だと。きいては。悦びもしさうなものでござる。さて迦葉が拘尸城へ著したは。釋迦が死で七日めでござる。これに付てかの僞の經々に。釋迦が涅槃の時に。眉間から大光明を發して。又その涅槃を告んとて。大きに聲をあげて呼りたる所が。其聲大千三千世界に。ありと有らゆる者の耳に聞えて。梵天帝釋四天をはじめ。あらゆる鬼神諸天。及び鳥獸虫の類ひまでも。死目に逢うとて集つたなどゝあ

るが。それほど大きな聲。また其光などが。ごふして四十里ばかり先に居る。第一の弟子たる。迦葉が所へ見え聞えなんだことか。また四十里ばかりの道は。かの神足とやらで。飛行したならば。瞬くうちにも來られさうなものじやが。七日かゝッて來るとは。これもどうしたことか。實は此時。釋迦は一向にいくぢもなく疲果て。日比の神通は一つばも出ず。又より添て居たも。やう／＼阿難と阿那律と。四五人ぐらゐと見えるでござる。是故阿那律が死骸の番をして居て。阿難が直に人を頼みに行たでござる。又或人の説に。釋迦は山中の木の下でのたれ死をして。七日か間うち捨ておいたるゆゑ。鳥獸虫などもたかッて。啄きちらした所を。德化に依て。そんな物の寄集つたかたちに。涅槃の圖は。かいた物じやと云たが。是は惡口のやうだが。實にさうかもしれぬでござる。尤も釋迦が死だ日は二月十五日なれども。天竺は二月と云ても。御國の土用中のやうぢやから。直さま蛆もわくことでござる。さて迦葉は。かの天冠寺へ行て。阿難に逢て。釋迦の死骸を見やうと云た時に。阿難がいふには。棺にしまッたから見せられぬといふ時に。迦葉は棺に向た所が。棺の中から兩足をぬッと出したでござる。迦葉がそれを見ると。をかしないろあひじやに依て。阿難に。佛のからだは紫磨黃金の膚で有たが。どうして。こんな。をかしな色相じやといふ。そこで阿難がいふには向に一人の老婆がこゝに來て。泣悲んで。佛身の上に涙を落したるゆゑに。色が異つたのじやと答へたと云ことでござる。じやが。これは涙を落した故で何でもありやせぬ。達者で居た時は。かの神通でさう見せたなれども。死んでは神通をせぬから。色がわろくなるは知れたことでござる。それを迦葉が本とうに。金色で有たと思ふたうちが。笑しいでござる。こんな。のろまじやに依て。比丘來にされたでござる。さて迦葉はその棺に向て。かの足を例の如く頂いだれば。引こましたと云ことでござる。一體この兩足を出したといふことも。をかしなことだが。執念深い心に。こんな事が。實に有つたかもしれぬから。是はさしも疑ふべきことではないでござる。時に棺の四方に薪を積て。雙巻迦葉は。佛所ニ教化一人　所レ度已周遍　我行レ道絶レ向　唯恨不レ見レ佛と。かやうの何でもな

いことを云て。七市して。手火を放つたる所が。今度はよく燃たでござる。（處胎經）さて釋迦の死た年が。けしからず異說のあることで。實はちツとも古き人にしたいと云。僧どもの心からして。色々と牽强附會をしたもので。其說今では周の穆王が五十三年の二月十五日と定まツたやうなれども。とくと調べて見たる所が。周の穆王が五十三年よりは。五百年餘りも後のことでござる。夫はどふして知つたると申すに。漢土の梁武帝といふが時に。隱士趙伯林といふ者が。天竺の地方へ行て。律師弘度といふ人に出逢て。衆聖點記といふ書物を得たでござる。これは釋迦の弟子であツた優婆離といふ僧が。釋迦の身まかツた年の七月十五日に。何となく黑點をつけて。それより年々の七月十五日になるとは。一點をしるすが例と成て。その後代々の住職が。その通りにして傳はツて有て。それがこの衆生點記でござる。そこでかの趙伯林は。その書を得て。彼の星を勘定して見たる所が。九百七十五點あツて。前代齊の永明七年。七月十五日迄の點が有たといふことでござる。こゝに於て釋迦の年代をくり上げ操おろすと。

生れ年も。身まかツた年も。今年まで何年になると云ことまで。しやんと分るでござる。先その死たる年が。御國では懿德天皇の御卽位あそばしてから二十五年目。漢土では周の敬王と云た王の三十四年にあたる。又その身まかつたる年が。七十九歲であツた故。これから七十九年くり上ると。其の生れる年が。御國では綏靖天皇の御位に御つき遊ばしてから十六年目。漢土では周の靈王と云た王の第六年にあたる。さすれば釋迦が身亡てからは。この文化八年辛未年までに。二千二百九十七年になるでござる。なるほど餘ほど古さはふるいことながら。僧どもはとかく一年も先へおくりたがツて。彼れ此れといひまぎらし。ざツと六百年ほどもかけねを云て居ることでござる。さて釋迦が死からだを片付て後に。迦葉がおもふには何に。したならば佛法をひさしく世に傳へて。未來世の人をこの道にみちびかれやうぞ。これは釋迦一代の說法を結集して置くがよいとおもひついて。そこで釋迦があらゆる弟子どもを。王舍城と云所へあつめ。此の事を評議して。迦葉は上足の弟子じやに依て會首と爲りて。その大勢の中か

ら。阿羅漢果といふを得たる者數百人を選み出してこの人數。或は五百とし。七百とし。千人とも云ふが。七葉岩内といふ大きなる岩室の内に集ひ。其事に係たでござる。時に其中に。かの生涯釋迦の侍者となッて左右に仕へ。殊に地獄耳と云やうに。覺のよかッたる阿難も居たる所が。迦葉は座より立て。手づから阿難を引出して云には。今淸淨の阿羅漢衆の中に於て。佛一代の說法を結集せんとするに。汝は未だ阿羅漢果を得ざるものじやに依て。こゝにをるなと。苦々しく云たでござる。此時阿難が泣ていふには。我二十五年佛の左右に仕へて居たが。但し佛法には阿羅漢果を得たる者は。佛といへども其の左右につかはぬこと故。そこは修行せんで居たものじやと云た所が。迦葉が云には。汝さらに罪もある。其罪と云は。佛は女人の出家する事を好まれなんだに。汝こひすゝめて。摩訶波闍婆提の出家をゆるさるゝやうに取持たが相すまず。又佛涅槃の時に。汝に水を呑たいと云れたる所が。汝それを奉らぬが相すまず。汝佛の爲に其法服をたゝんだる時に。其上を踏んだ事もある。又中にも相すまざる事は。佛涅槃の後に。其陰藏相を出して。女人どもに見せびらかしたが相すまぬことじや。汝かやうの罪どもがあるに依て。この席上で懺悔しろと云たる所が。阿難は長老のいふこと故。長跪合掌偏袒右肩と云事をして懺悔したでござる。なれども迦葉がなほ免さず。汝いづれもにいまだ阿羅漢果を得ぬから。とても此衆中には加へられぬ。早く阿羅漢果を得て後に來れ。少しも煩惱の心が遺つて居る内は。來ること勿れと云て。つき出して門を閉たでござる。その夜に至て門をたゝく者が有から。迦葉が誰じやと問たれば。答へて我は阿難じやと云。なぜに來たぞと云たれば。我今夜諸煩惱を盡く拂つて。阿羅難漢果を得たりといふから。伽葉がいふには。我汝が爲に門をひらくまいから。彌以て諸煩惱を拂ひつくしたならば。門の錠の孔からはいつて來いといふと。阿難は心得たといひさま。もはや神通を得たること故。錠の孔からはいッて。伽葉が前へ來て。例の頭面禮足したでござる。そこで伽葉は阿難が頭をなでゝ。吾汝がいまだ得道せぬことををしく思て。わざと畫の如く汝を責たのじやに依て。あしく思ふことなかれと云て。阿難が本の座に復し

たでござる。さて結集に挂たる所が。阿難は右の如く常に釋迦の左右に居たるもの故。よくその說法ごもを覺えて居たでござる。さて此の說法したる事ごもを集めたる事を。三藏結集といふ。それは其說ごもを忘れぬさきにつゞり結び集むると云のこゝろで。結集とはいふでござる。その三藏と云は修多羅藏。(また素怛覽藏とも云は後なり)毘奈耶藏。(古は毘尼藏といふ)阿毘曇藏。(阿毘達摩藏と云は後なり)と云て。これらの事ごもは。佛書をよむ毎に出る言じやによツて。よく心得てをるが宜いでござる。夫はまづその修多羅藏の修多羅といふ言は。翻譯すれば。糸篇に泉といふ字を書たる字の意言で。すなはち其綫字は。いとすぢと訓ずる文字で。一體佛經と云ものは。四句の偈と云て。かの諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅爲樂。などいふ類ひのことが旨とある物で。かやうの辭ごもを間々の文を以て。釋迦が云々といふ偈を唱へたれば。阿難が云々といふ偈を唱へたと云やうに。つなぎ合せたるもの故。その趣きがとんと糸すぢを通して。偈をつなぎ合せたと云やうなすがた故。天竺辭で修多羅と云た物でござる。さて一切の經々が。皆その姿のもの故。ひろくいふ時は修多羅といふ辭は。一切の經といふ心にもなるでござる。(此翻ニ契經一古云ニ單經一ともあるでござる)また毘奈耶藏の毘奈耶といふ辭は。翻譯すれば法律といふ言とゞて。すなはち佛法のいましめ律でござる。(また此云ニ調伏一古云レ律ともあり)かの飯は一日に一度くらふ物じやの。乞食をするにはかうするものじやの何のと。種々の律を記したものでござる。又阿毘曇藏の阿毘曇と云ことばゝ。翻譯すれば對法といふ言になツて。(また古云ニ無比法一とも有り)近くは大論じやの婆沙論じやのと云やうなすがたに。論を集めたる物を集めたる物をいふ名でござる。さて修多羅藏。毘奈耶藏。阿毘曇藏と。藏の字をつけていふは。これも梵語では俱舍と云が。それを翻譯して藏といふのでござる。なぜ又これらを藏といふぞなれば。そのことを攝含で藏めおくと云の意でござる。さて後世に三藏と云て。これを法師の位名としたるは。右の修多羅。毘奈耶。阿毘曇の三藏に通じてゐると云の意で。これを位名としたものでござる。扨この時迦葉が會首となツて三藏を集めたと云ものゝ。何ぞ其說ごもをみな集めて。書に記したと申すではない。たゞ〳〵聞持不謬。辨才無礙と申て。覺えの宜

しく。その教をよく聞取て居たるどもが。釋迦の説たる趣はかやう〳〵と。互に口に誦し語り合ひ。我が聞落したる事は彼れにきゝ。彼が聞おとしてをる事をば。我がきゝ覺えたる所を。誦しきかせたるのみのことでござる。其中に阿難と申す者は右申したるごとく。元來釋迦の從弟で。殊の外に物覺えよろしく。且釋迦に隨從いたして以來。闕席いたさず不斷傍に居たる者故。盡くよく覺えて居たと申すことでござる。一體釋迦の説教は。機に臨み變に應じて。才覺を以て申したることで。かの禪宗に申す。以レ心傳レ心といふやうなわけで有るから。文字には記さなんだものでござる。是は實に。禪家で申すに相違もない事でござる。夫れは大論に。迦葉らが三藏を集むることを誦出々々と云へるを以て。知るがよいでござる。これ唯口に誦おぼえたることを云たものでござる。なほ次々申すうちに分ります。然るに後世の僧どもの。僞作つたる經論どもに。此時すでに。多羅葉といふ木の葉へ。釋迦一代に。説き教へたる事共を記して。それが。今ある經文じやと申すのは。皆事實をよく考へぬ誤りでござる。實に此事は釋迦の本國たる。天竺の僧ども。漢土。および御國にも。古へより致して。名僧智識といはれたる僧どもにも。一人としてこゝを心得たる者はなく。明らかには知れなんだ物でござる。明かにしれねば。人の迷つて居たも尤もなことでござる。是は少し講談が横へはいるやうだが。所を大直日。神直日神のいかなる御靈を賜はりたることか。もはや佛法のわけも世に明かになり。人の惑ひも。追々は開くる時節の。めぐみ來たると見えて。奇しいかな。櫻町天皇の御世しろしめす。寛保延享の間に當つて。津國難波に。富永仲基と申す人があッて。これは。俗名を道明寺屋吉右衛門と申て。身は町人ながら。甚だすぢの宜しき學風で。始めはかの誰も知てをる。三宅萬年と申す。其頃の大儒に從つて。漢學を致し。大いに。漢學の。御國に害あることを發明致して。説弊といふ書今ハ亡を作つて。萬年に見せたる所が。三宅は儒者のことゆゑ。大きに立腹致して相用ひず。仍て富永仲基は。萬年の門人を相斷り。それより進んで佛書をよみ。かの不レ凡の大才を以て、佛法の經論のこらずを讀盡し。から大和の僧。學者はもとより。彼釋迦の生國。そ

の佛法の本國。嫡々相承の。祖師開祖と仰がるゝ名僧智識も。かつて見とらず。考へ出さぬ所の。明說をいひ出し。諸佛經は。一部一册として。釋迦の眞經でなく。みな後世の。僞作なるよしを發明致して。名さへ出定後語（定を出て後かたる）といふ書二巻を著はし。辨じたる年が。延享元年のことで。其序に。基也今既ニ三十以テ長スとあるからは。漸々三十有餘。いまだ四十に及ばぬ程のことに見えるでござる。然れども世間に。珍書を好む人の少いのか。或は。佛經を論じたるもの故。なほざりにさし置たのか。更に〳〵世に弘まらず。誰れも存じたものが无つたと見えて。世間に一向その書はなかッた所を。我が師本居の翁は。いかにしてか此書を得て。これをよまれ。翁が隨筆玉勝間に。かへす〴〵稱おかれたでござる。其趣は云々といひ置れたでござる。篤胤。この一條をよんで大に驚き。即刻に。本屋を詮議しようと存じて。西へかけり。東へはしりて。江戸中の書林を殘らず駈あるいて。尋ねたる所が。書名をさへに知た者がない。そこでまた思ひつひて。江戸には。かほど博識の多き事故。誰ぞ持て居る者も有らうと存じて。知たる人には逢て尋ね。しらぬ人には。つてを求めて問ひなんども致したなれども。誰あッて見たと云人がないあまつさへ。わが翁の玉勝間に。かやうにいひおかれたるをさへに。うか〳〵と。見過して居たる人ばかりでござる。こゝに於て。翁のよまれたる本があらふと存じて。松坂へ申し遣はした所が。知れぬとのこと。かた〴〵大きに力を落し。また〳〵考へつけて。此地の書林。十四五軒へ行て。上方へ注文を頼み。また仲基は大坂の人ゆゑ。大坂の同門へ云ひ遣つたならば。あらうかと。これへも申し遣し。また京都の同門。城戸千楯と申すは。俗名をえびすや市右衞門と申て。本屋を致すもの故。あつく〳〵頼み遣はしたる所が。この人も大きに骨折て。尋てくれまして。幸はひに一本を見出し。京都より早飛脚で。この書をよこして呉だでござる。それが此本で。今年からは。八年以前のことでござる。所がこの通り板元もしれませぬ。其中に。彼頼みおいたる。十四五軒の本屋どもからは。櫛の齒をひくが如く。京大坂へ申遣はす。彼是實は。大さわぎを入れたでござる。所が。大坂の何とかいふ本屋が。その夏。土藏の掃除

を致したる所が。この板本の板が出たでござる。それまで。自分の藏板とも。知らずに居たと申すことでござる。こゝでその本屋が。其砌。やかましく詮議のあッたこと故。早速にすり出して。江戸へ下し。新らたにつゝみ紙。。此書。我が家の藏板ともしらんで居たる所が。本居先生の玉がつまに。返すぐ〱稱擧せられてから。四方の君子の求めをしきりにうけ。この度見出したるに依て。摺出したる趣きを。記してあるでござる。その本が。こゝかしこの本屋から。都合五本。この方へよこしました。其前に千楯の所から。此本をよこして。最早入りはせぬけれども。注文いたしたる事故。是非なく其節みな買ておいたでござる。是から致して。ちッと世間の學者も。この書名を覺え。また見たる者も出來たでござる。其後又さらに賣ぬと見えて。此節本屋を尋ねても。またさッぱりないでござる。さすれば彼つゝみ紙に。四方の君子と書たのは篤胤が注文を。三ケの津から申てやッた。故ではないかと。思ふやうなことでござる。なる程賣ぬも尤なわけは。佛經の論で。餘り入用もなく。また見た所が。佛の經論を。ひろく見た人でなくては。わかりかぬる事の多き故でござる。篤胤は何によらず。珍書を得ると。おのれ一人讀誇てをるが嫌ひで。とかく人にも。その善きことを聞したいから。書をすきな人へは。吹聽して見せる所が。この書ばかりは。余程文學の才ある人も。わかりかぬるが多いでござる。さすれば。うれぬも尤なことでござる。依て此書へ。かなの注を致して。世の人にも。弘く合點させるつもりで。致しかけておいたでござる。また其後に幸ひなることは。赤保々と云ふ書を得たでござる。これは蘇門居士。服部天游と申す人の著述で。出定後語の後に出來たるもの故。また一きざみ。よろしい事も多くあるでござる。篤胤が佛書の學問はこれらを梯立と致して。入り始めたことで。かの藍は。藍より出て。藍より青し。とか申すやうに。此の一書の過りをも。亦餘程考へ出し。夫にそへて佛道より起つたるつひえ。害を論辨致すが。今度の趣意でござる。わが翁も。しかせよとの事と見えて。佛法の事は。餘りいはれず。只この出定後語を。譽ておかれたと見えるでござる。篤胤は。其ほめ言に依て。此書を得。此書を得たるが梯となッて。

世の學者などは。ひろくて手も出されぬと。捨置たる佛法をも容易くかやうに。申し說るゝやうに成たこと故。いひもて行けば。佛書の學びも。やつぱり翁に。ならつたやうなものでござる。とにかく翁に。あたまの上らぬと云は。實は口をしい程のことでござる。（これは大きに長ばなし）さて迦葉の輩數百人。かの大石室の內で兩三月が間に。釋迦一代の言敎を論じ定め。迦葉は僧中の上座の者故。その結集したるを上座部と申て。迦葉の正統はこれでござる。所がまた未熟のもの共じやと云て。其の結集の中間を省かれたる。數百人の輩が相談して申すには。如來の在世には。此方もともに學んだことであるに。わが輩を簡びのけると云は。口惜き事じやといッて。みな〳〵集り。是の輩も師恩を報ずる爲とて。迦葉らが集めたる三藏の上に。雜集藏。禁呪藏と云二條をまして。都合五藏を結集致したでござる。是は學無學をいはず。數百千人で論じ定めたること故に。大衆部と申して。これすなはち旁流でござる。扨かやうに。岩內岩外とわかッて結集致し。正統と旁流と異なれども。其の說に於ては異なることなく。法唯一味。二部和合して。兩部ともに。其言述る所。いはゆる小乘阿含部の旨にて。有を以て宗となし。事みな名數に在て。全く般若華嚴などの類ひ。大乘といふ經どもの如く。高上微妙の說は无つたもの故に。互に諍競もなかッたものでござる。然るに右申す如く書に記さず。口で誦し傳ふることゆえ。漸々に亂れ紛れて。既にかの阿難が末年に。或る山中を通た所が。一人の沙彌が。行々佛語を誦しつゝ行くをきくに。大きに間違つてをる故に誨へたれば。その沙彌がわらッて。大德は耄せり。我が覺えたる所は正しいと云て用ひぬから。阿難が大きに歎息したと云ことも西域記に見え。また釋迦入滅後百年ばかりも過ては。大きに異論が出來たと云事でござる。それは大論に。佛滅百年。阿輸迦王作二大會一ヲ諸大法師論議異。故有二別部名字一といへるにて知るべきことでござる。是より後は。ます〳〵異說が起つたでござる。それは婆娑の序說によッて考る所が。釋迦入滅の後四百年ばかり有て。北天竺の境なる。健馱邏國の王が。每に佛經を習ひ。日々に僧一人づゝを請待して法を說しめてきいたる所が。僧どもの說同じからざる故に。深く

疑ひて。但しこれは必一とすぢなるべき道の。各々異にして。合ざる事を深く疑ふたのでござる。そこで迦葉阿難より。かの上座部正統の大法師。脇尊者といふに問ふたれば。此法師の答に。如來去レ世歳月逾邈。弟子部執。據ニ聞見ー爲ニ矛楯ーと云。こゝに王また問ふて。諸部立範。孰最善乎といへば。莫レ越ニ有宗ーと答へたでござる。そこで健駄邏國王が。然らばその有宗の部の三藏を結集すべしとて。有德の僧どもを召て。共に詳議せしめて集めたるが。今傳はる毘婆沙論じやと云ことでムる。此脇尊者と云は。迦葉阿難より正統の大法師なる故。これに糺し問ふて。釋迦の本義は有宗なりと云言におちついたものでござる。また法顯傳に。法顯本求ニ戒律ー而北天竺諸國。皆師師口口傳。無ニ本可レ寫。是以遠歩。乃至ニ中天竺ー。於レ是得ニ一部律ー。是摩訶僧祇律。復得ニ一部抄律ー。可ニ七千偈ー。是薩婆多衆律。亦皆師師口相傳授。不レ書ニ之於文字ー。と見えて。法顯傳時欲レ寫ニ此經ー。其人云。此無ニ經本ー。止口誦耳と云たとあるなどが。實に佛經どもは釋迦入滅後。久しく書に記し傳へなんだ物なることの。明かなる證據でござる。そこで人々定説なく。

また依憑むべき籍なき故に。皆意隨に改め易へ。口づから傳授し來つたものを。後に書に寫したる故に。一切の經説がうち合ぬわけでござる。かくて經々の初に。如是我聞と云ことあるは。文字のごとく。我は是の如く聞りとの意にて。我とは後世。その經々を誦し説る者の。自ら我れといへるにて。釋迦文佛の説れたることとの。我が聞傳へたる趣は是の如しといふの意で各々思ひ〳〵に。釋迦の説に託して。我が思ふ旨を説出したるものでござる。然るを次々作れる經説どもに。阿難登レ座稱ニ我聞ー大衆悲號といへるを始め。種々の説あるは。後世に成たる經々をみな三藏結集の時に。阿難が如是我聞と云つて。誦し出たる物と心得たる非ことでござる。夫はいかにと云に。我聞一時といふことも多くあるが。阿難は親しく。釋迦に敎を受たるものなれば。我聞一時と云へき由なき事でござる。然るに是にもまた説を作りて。阿難得道夜生。傳レ佛二十餘年。未レ傳ニ佛時應ニ是不レ聞と云も非でござる。此説の如くならば。既に釋迦に傳へて後に聞るといふ經どもに。何以に復た如是我聞。また我聞一時などあるか。これ不通の説

でござる。また或は阿難が釋迦に願て。未聞ざる所の經を重て說けと云たれば。爲に密に說たの。或は阿難が聞ざる所の經を。人に從て聞たの。或は諸天に聞たの。或は佛が棺より臂を出して。阿難が爲に重ねて說たの。或は阿難は。法性覺自在王三昧といふ法を得たりし故に。いまだ如來に侍へざる前に說る經をも。皆よく親しく聞たる經々と同じ樣に聽持て居たるの。或は釋迦の死ぬ時に。我涅槃後。阿難所レ未レ聞者。弘廣菩薩といふが。當二廣流布一と云たの何のとあるは。經々をみな阿難が口より出たる物にせんとて。苦きまゝの妄說で。笑ふに堪へたる說どもでござる。實は諸經說。おほくは佛滅後五百歲の人の作れるものなる事を知らず。後世の學者ども。皆徒に數萬の經說。みな阿難が集めたる物と思ひをるは。眞に愚昧な事でござる。さて今ある佛經には。誰も知てゐる如く。大乘と小乘といふの差別がある。それはまづ小乘といふは。阿含部と申して。長阿含經。中阿含經。相應阿含經。增一阿含經の四つの阿含經を始め。此部の經どもを。すべて阿含部といひ。大乘家より是をさして。小乘とは云てござる。又その大乘といふは。般若經。法華經。華嚴經。大集經。楞伽經。大日經。維摩經などいふ類ひ。この餘にも。凡てかの阿含部を陋しめ貶し斥けたる經どもを。大乘とは云ふでござる。然らばその大乘と小乘との趣意は。どこで違つてをると申すに。小乘の經々は。釋迦生涯の事實に就て。此處にてはかゝる說法ありけり。彼處にては然る事のありしと。事實の因に道を說たる趣が見えて。かの脇尊者が。健駄邏國王に答へたる如く。有を以て宗と致した物でござる。故に大乘の經說にくらべては。說が淺く聞えるでござる。また大乘と云ふ經々にある趣は。何れも高妙に取なしたる理窟ばかりで。小乘阿含部の經々とは。大に趣意の違つたものでござる。然らばその大乘の部と。小乘の部と竝べては。どちらが釋迦の本說で。どちらか先に成たもので有らふと云ふに。世の出家どもはもとより。在家の人々も。生ごしやくに佛書でも見かぢる輩は。たれもこの大乘の經々の說が釋迦の本意で。その說が高く尊く。小乘は只愚人ばらを導く方便說で。卑い物じやと心得てをる。これは御國ばかりでなく漢土でもみなさうでござ

る。已にもろこしでは名高き儒者じやが。王元美といふものなどは。この大乘の經々の旨の高妙なるげに惑つて。其いひ置たる言に。一切の經をみな釋迦の說ぞと心得てをるが。その間には後人の釋迦に託して造つたるもあるが。その大乘といふ諸經は譲することなく。釋迦の本說と見ゆれ共。小乘の經々は。佛滅後に竺土の僧どもの作つたので。それを釋迦に託したものじやと云ひ置たが。これは服部天游がいひたる如く。ありやこりやの說で。何のこともなく。大乘の經々の旨深げなるに惑つて。却て小乘の經々は。實事のあることを辨へなんだものでござる。依て今篤胤が。此天游が說を本として。其に何れが先。何れが後といふことを申ひらかば。大乘の經々はもとより。小乘阿含部も。ともに釋迦の入滅後。迦葉阿難の輩が。三藏を結集したる時より。遙か後の世の人の書たもので。其の内小乘阿含部の經々は。先に記したるもの故。十の中に三つ四つは。實に釋迦の口から出たるまゝのこともあれど。大乘といふ諸の經どもは。凡て全く後人の。釋迦に託して。僞り作つたものに違ひは无いでござる。それはどうして

知れると申すに。小乘阿含部の說どもは。右申すごとく。釋迦生涯の事實を本に記して。その事實の因に法を說き。大乘の經々の說どもは。空理ばかりを云たものでござる。夫はたとへば。釋迦の行狀を述るにも。小乘には十九出家。三十成道。八十入滅と云て十九歲の時出家して。三十歲の時に成道出山して。さて八十歲の時。菌の毒にあたッて死んだと。有のまゝに記してある。所を夫ではやッはり凡人と同じ事で。おもしろみもなく餘り尊くもないから。大乘には。釋迦は久遠劫といッて。限りもなく。遠きむかしより成佛して。世に出で。扨かりに滅度を示したなれども。實は入滅せんで。常に靈山といふ山に住で。說法して居ると云てあるでござる。これはみな。小乘の經々に。記しある通りの事實がまづ有て。後にかやうの空理を附會したること明かでござる。また小乘の經々にある名目は。その義理が正しくて。隱れたることなく聞えるでござる。所を大乘のかたには。多くはその小乘部にある名目を假て。それを翻案して。大乘の義に取成たものでござる。その心得易く。悟り安き事どもを。一つ

二ついはゞ。小乘部に苦集滅道。これを四諦といひますが。先この苦とは。心の煩惱をいひ。集とはくさ〴〵の愚癡が。心に集まる事を云ひ。滅とはその愚癡煩惱を滅すると云のこゝろ。道とは。その如く愚癡煩惱を滅しては。菩提の道に入るといふの義で。この苦集滅道の四つを。四諦と云でござる。なぜ諦といふぞなれば。諦とは審實不虛の義と云て。この趣に違ひはない。審かに實なるとの。虛からざるといふの義でござる。それ故小乘部には。これを有のまゝに。苦は實に苦。また集は實に因と說てある所を。大乘には。諦といへども。苦は苦でもなく。集は集でもないなぞと。何か高妙なる由ありげに說なしてある。また小乘部に。四大といふ說を云てあるが。この四大といふは。地水火風の四つを申て。この道理を以て天地間の道理。また人身のわけをも說たもので。是は西洋の國々では。甚だ古くから申たことで。今以て阿蘭陀など。すべて西の極なる國々では。是を四元と號て。是で物の道理をさばくでござる。是は實以て尤もなことでござる。さて天竺で古き昔から。此四大を以て諸事をさばき。釋迦より前の。

かの波羅門の輩が。何れも〳〵是を說き。釋迦も夫をうけて說を立たる事故。小乘部の經どもに。四大とあるは尤なことでござる。實に釋迦の眞面目でござる。然るを大乘部には。此四大に。空といふことを加へて。五大となしたなれども。空と云もの。四大へ竝べては。一向理にあたらず。通えぬことでござる。なほも加へ〳〵て。六大七大にも致し。また小乘部に六識と云ふことあり。（是はもと眼耳鼻舌身意の識を云）大乘部に。これに加上して。七識。八識。（六識に未那識阿賴識を加へて八識といふ）九識。十識など。說く。是れ皆後々漸々に。阿含部の上を〳〵と加上して。說を立たものでござる。但し是らは其の例を示さん爲に。二つ三つを擧て申すのだが。餘もこれに准へて曉るべきこと。實は此類。今かぞへも盡されぬ程の事でござる。かゝれば先つ小乘部があッて後に。大乘部の起れること疑ひなく。それを大乘と號けたるも。阿含部を陋めて。自ら立たる筋を高ぶり。自分と大乘といふに對して。阿含部に小乘と云名を。大乘家より付て。いひ貶したものでござる。阿含部を信ずる方で。自らいやしめて。小乘といはふ筈がないでござる。こ

こを考へても。小乘部が先で。大乘部の經どもは。後に漸に成たるわけは。明かなことでござる。とは云もの丶。その小乘阿含部の經でさへ。すべて釋迦は本より。迦葉阿難などよりも。遙かに後人の手に出來たものに。違ひないでござる。たゞ其の中大乘部の經どもよりは。先に記したもの故に。僞の功者がいらず。釋迦の眞面目も。眞の事實も。隨分にあること申すまでのことでござる。然らば小乘の經々も。遙に後の人の手で成たるものじやと云ことは。何にしてしれると云に。前にもいふ如く。彼四阿含の內なる雜阿迦經を見れば。阿輸迦王と云もの丶。法事といふを起したることが記してある。この阿輸迦王と云は。釋迦の入滅してから。百年餘り後の人でござる。然るに此事を記してあるからは。また阿輸迦王よりは。小百年も後の世に記した物には。違ひの无いことが知れるでござる。さすればこの小乘阿含部の經々といへども。釋迦の死してから。三百年ばかりも後に成たるものなること。彰々として明かなことで。大乘の經々は。それを押つけようと云趣意に。かまへ作つたるものなれば。是はまた小乘部の經々よりは。遙かに後に出來たること。更に論はなく。尤それは一人の手ではなく。次々思々に。天竺人どもの釋迦に假託したることでござる夫ゆえ諸經に釋迦の語ばとて。後五百歲といふ語がたんとある。是はその經々を僞り作る者どもが。釋迦よりは五百年も後に。己等が作つたものを。釋迦のといたのじやと云て弘めること故。かやう云たもので。近くは法花經などに。後五百歲弘宣流布とあるも。吾が死たる後。五百歲ばかりにして。此經が弘く流布するであらうと。釋迦の未然に云ておいたやうに思はせた者でござる。さて右のごとく見識をたて。眼を活して見てゆくと。何經が前に成て。何經が後に成たると云ことまで。巨細にわかる。夫はまづ前にいへる如く。佛滅後に。迦葉阿難が輩が。彼の石室の內で結集したるは。上座部と云て。釋迦の正統で。これ即いはゆる小乘阿含部の旨でありますが。又かの結集の人數を省かれたる曹數百人が。石室の外に集つて結集したる。大衆部と云も。說に於ては互に異なることはなかッたが。佛滅の百年ばかり後に。右の大衆部の徒の中に。大天と云もの有て。始めて異

見を起し。別に新義を立て。生死涅槃。皆是れ假名と云ふ旨を唱なへたが。これやがて般若經の空假の旨で。後世大衆の說の起れる基でござる。かくて此說を。大衆部の徒は信じて用ひたが。上座部の徒は。その舊義に違ふことを惡んで用ひず。大に乖諍を起し。互に謗り相て。和合せなんだと云ことでござる。赤倮々の說さて後に。ます／＼この空假の旨を。唱ふる者多くなッたと見えて。前に申たる。釋迦の入滅より。四百年ばかり後のことぢやが。彼の健駄邏國王が。僧等の傳ふる經說を。各々異なるを疑ひて。上座部正統の大法師。脇尊者に問ふたれば。此の法師の答に。莫シレ越ルニ有宗ニ一といひましたが。此有宗と云は。三世實有といふの義で。すなはち上座部の正統阿含部の旨でござる。されば此時分大天がいひ出したる空假の旨を唱へたものゝ。多きこともしれるでござる。故にそれは釋迦の本義ではない。有宗の旨が本義じやと。正しく答へたものでござる。これに依て思へば。般若經が大乘部の中で。いッち古く出來たと云ことも。明かにしれるでござる。さて此經の旨は。以テレ空相ヲ爲て。ことみな方廣と云て。高妙

にたぐひなく。仰山に說を成したもので。此經の旨は諸法皆空で有る故に。その空なる理を悟り得よ。これ則佛法の本意で。そこを悟る智慧をみがき出すは此經に說る趣ぞといふの義を。般若と號けたのでござる。般若とは天竺語で。譯すれば智慧といふ義の語でござる。此經は六百卷有て。仰山に多いが。その內肝要なる卷を理趣分と云が。これを讀で見るとわかるでござる。かの禪宗また修驗者などのいつもよむ。なむからたんのう。とらやアやア。なむおりア。とらは牛分毛をむしられ。なんどいふが。此理趣分でござる。もッと少い物では。般若心經でも此訣がしれる。其文に色不レ異ナラ空ニ。空不レ異ナラ色ニ。色則チ是レ空。空即チ是レ色。とあるが。色といふは則ち我身を云たもので。文の義は。己が身形は空に異ならず。空は身形に異ならず。身すなはち空。空すなはち是身なりといふことでござる。さてかくの如く。何もかもみな空におとしたは。阿含經の旨は佛の本意ではないと陋しめた物で。是がいはゆる大乘の經の始りでござる。されど此の經の成た時分は。未だ阿含が前とも。般若が後とも。年數の前後を論ずる事は无

つた者で。阿含部を首張する者は。如來の生涯の説法は。四阿含に止まるといひ。夫は智度論に。迦葉語二阿難一。從二轉法論經一。至二大涅槃一。集作二四阿含一。增一阿含。中阿含。長阿含。相應阿含。是名二修跖路法藏一。とあるにて知るがよいでムる。修跖路藏とは上に申た如く。一切經藏と云ことでござる。般若を首張する輩は。如來得道の夜より。涅槃の夜に至るまで常に般若を説れたといふでござる。此趣も智度論に。釋迦の。初成道の事を記せる所に。是時世界主梵天王。及色界諸天等。皆詣二佛所一。勸二請世尊初轉法輪一。云々故受レ請説レ法。諸法甚深者般若波羅密。是故佛説二摩訶般若波羅密經一とあるにて知るがよいでござる。これ阿含部を首張する者も。般若を首張するものも。各々そのよる所を正義として。後世に云ひ出たる。阿含は前に説たもの。般若は後に説た物など云やうな。年數前後の説はなかッたものでござる。然るを法界性論に。十二年説二阿含一。三十年説二大品一即般若也。八年説二法華一と云たは。下に引く法華經文に。從二成正覺一過二四十餘年一云々といふことのあるに。惑はされたる非説でござる。かくて般若の次に成たる經が。法華經でござる。夫はごふして知るぞと云に。阿含は有を宗と爲し。般若は空を宗と爲たる故に。此經を作れる人が思ひつきで。此は如來のいッち末年に説たる經で。此經の趣きが眞實の本意じや。これより以前に説るは。眞實の旨ではない。みな方便説じやといひ立たる眞言に。從レ成二正覺一來。過二四十餘年一。無數方便。引二導衆生一。我所説諸經法華最第一。但爲二菩薩一不レ爲二小乘一。觀二諸法實相一。是名二菩薩行一といつたでござる。此は釋迦の道を弘めた間が。およそ四十年ばかりのことじやに依て。此經はその末年に説るに託して。以前の諸説を陋しめ貶し。また此を實相に託して。阿含の有宗。般若の空をも破つて。彼らはみな方便に説た旨じやと。釋迦の自らいッた趣に託したものでござる。然るに後世の學者みな之をしらんで。徒に法華經を旨といたして。釋迦の眞説で。實に經中の最第一と思へるはいかい誤でござる。年數前後の説も實に法華に昉り。また權と實とにわかッて。是までの諸教を并呑に致す事も。實に法華に昉る。廣大の方便説を以て。古今の人を惑すことと。限りもない事でござる。天晴れこれをよく見明らめ

蔽りましたは。實に富永仲基が功でござる。解深密經に。初小乘。中空敎。後不空といへるは。阿含。般若。法華を說る年數の前後を云へるにて。小乘とは阿含をいひ。空敎とは般若を指し。不空とは。法花に諸法實相といへるを指せるにて。此も法華經を作れる者の黨より出たることと知られるでござる。さて三藏の目は佛滅後に。迦葉らが結集の時より起つたことでござる。然るに法華の文に。三藏學者といへる言があるが。釋迦が說たる眞經に。此目のあらふ筈がないでござる。是を以て此經の後に出たることが。明かにしれるでござる。此次に成たるは華嚴經でござる。此の經の趣は。阿含は成道出山の始に說たる狀にて。有を宗と爲し。般若は阿含の後に說る趣にて空を宗となし。法華は末年に說る由にて。諸法實相と云ふ旨と爲て始中終の說があるに依て。これは入れ所がないから。釋迦成道出山して。直ちに此經を說たなれども。甚だ高い所で。人が入りかねたる故。趣向をかへて。阿含經以下。般若經。また法華經まで說たけれども。夫は方便にしたることで。實はこれが釋迦の本意じやといはふが爲に作つたでござる。其は性起品に。譬如日出先照二諸大山王一。次照二大山一。次照二金剛寶山一。然後普照二大地一。日光不レ作二是念一。但地有二高下一。故照有二前後一。如來亦然。智慧日輪。常放二光明一。先照二菩薩山王一。次照二縁覺一。次照二善根衆生一。然後悉照二一切衆生一。如來本不レ作二是念一。但衆生善根不レ同。故此種々差別。と云るが此經の本旨で。譬の意は。如來の所說に。固より淺きと深きのわかちはない。唯その最初に說く趣こそ眞實なれ。されども衆生の根氣が。同からぬに依て。菩薩等は聞て速に其化を被り。縁覺の徒は。やゝ後れてその化を被り。善根の衆生は。また此に後れて其化を蒙り。一切の衆生は。また後に其化を被つて。皆各々その德を成すが。法を說く如來には。次々に化せんといふ念はない。夫は喩へば。日輪の出て。山王と云べき大山を照し。次に夫よりやゝ卑き山を照し。次に又それより卑き山を照し。さて後に。普く大地を照せども。日光にはさう次々に照さんといふ念はない。だゞ地に高き下き有て。高い所はおのづからに早く光りをうけ。下い所はおそく光をうけるに同じことじやといふ意で。般若法華の旨を釋迦

の本説ではない。初に説た華嚴の旨が。最妙の本旨じやと託したものでござる。また出現品に。一切二乘不聞此經何況受持といも。一切二乘とは。阿含部の小乘家と。般若法華の大乘家を指したもので。文義は。彼二乘の徒は。此經の旨さへ聞かれぬに。まして受持つことならぬと云ことでござる。また法界品に。舍利弗不樂說不能讚嘆といひ。如聾如啞などと云てあるは。智慧第一の舍利弗さへ。此經の高く妙なる旨を得られんで。説びもせず。讃嘆することもならず。聾のごとく。啞の如く。默然て居たといふことで。皆その立たる宗をおし張つて。是までの經説を斥けようとのことでござる。さて此經は右に申した如く。最初に説る趣に託したなれど。實は阿含。般若。法華などよりは。後れて成たに依て。遂にその尾をあらはしたは。可笑いことでござる。それはまづ二乘の教へあツて後に聲聞の人はあるべきことでござる。儞るに此經。入界品に。舍利弗等の五百聲聞があるが。此時未だ小乘の名さへ有うやうはないに。舍利弗ら何處より何の法を學んで。聲聞とは成つたことじや。其上へ舍利弗目連らが。釋迦に從

たは出山してしばらく後のことで。時も處も違つてゐるを。華嚴會に居合せたはどうしたことじや。また祇園精舍は。佛成道六年の後。始て建立有つたのじや然るに此經。成道の初に託しながら。委しく此の事を述てござる。こりやなんと前後相違のことではないか。また諸法實相。般若波羅密の語があるが。是にて此經の般若法華の二經より。後に成たといふことは。疑ひもないことでござる。○無量義經は。法華經に黨する徒の。華嚴に後れて作つたものでござる。これは其說に。初說四諦為求聲聞人。中於處々演說甚深十二因緣云々。次說方等十二部經。摩訶般若。華嚴海空。法華會入佛慧宜說菩薩歷劫修行とあるにて。此經の。法華經に黨する徒の。華嚴に後れて作つたことが明かでござる。また四十餘年未顯眞實。種種說法以方便力と云るにて。上に引る法花文に。從成正覺來。過四十餘年。無數方便。引導衆生。我所說諸經。法華最第一。といへるに合せ。彼經の勝れたことを示さうとして作つたものでござる。華嚴の次に。大集經。涅槃經の説が起つたでござる。それは此二經の旨は。大小

二乘を合せて。重を其涅槃に歸したもので。十六年始說二大集一と云が如き。これ暗に阿含の後。般若の前に此經をといたと云て。二乘の中間へ入れたものでござる。又その律を說て。如レ是五部。雖二各別異一。而皆不レ妨二諸佛法界一。及大涅槃一と云た如きは。これ五部律の。各々違つてゐるのを。合さんとての事でござる。然るに五部律は。もと八十誦中に出たのを。分て五部と爲たことは。釋迦入滅から遙後の世のことでござる。五部律とは。曇無德法密 薩婆多一切有 迦葉遺數論 彌沙塞不著有無觀 婆蹉富羅犢子 摩訶僧祇大衆 これなり。こを以て此經の。後に出たことを知るでござる。般若經もまた同手で作つた物じやに依て。言語が多く似て居るでござる。則これを佛滅に託して。此經の出ること。年數の最後なる由を證し。其聖行品に。譬如下從レ牛出レ乳。從レ乳出レ酪。從レ酪出二生酥一。從二生酥一出二熟酥一。從二熟酥一出上醍醐。醍醐最上。佛亦如レ是。從二佛出二十二部經一。從二十二部經一出二修多羅一。從二修多羅一出二方等經一。從二方等經一出二般若波羅密一。從二般若波羅密一出二大涅槃一。猶如二醍醐一と云てござる。十二部經とは。すなはち一切の經をいひ。修多羅とは。其中に大小二乘に屬ざる別部をいひ。方等經とは。その修多羅の中に就て。大乘と云べき經等をいひ。般若波羅密とは。その方等の中に就て。粹なるものをいひ。大涅槃はすなはち大圓寂にて。般若の粹なる由に別つたもので。これ大涅槃經を作つたる本意でござる。さて醍醐と云は。牛や羊の乳を。段々と製法致したもので。乳を酪となし。酪を酥となし。酥を醍醐となすが。その醍醐は。色黃白にして。餅に作つて甚うまく。乳脯といふも。此ことじやと申すことでござる。此喩はもと。無垢藏王といふもの。涅槃の敎の最勝たることを嘆たに依て。釋迦の實尤なことじやとて。此の五味の譬を以て是まで說る經等より。涅槃經の勝れて濃く。純粹なる由を示したるに託したものでござる。此經右申す如く。いッちしまいに說た趣に致したなれども小乘部。長阿含。增一阿含などにも。釋迦入滅して寺に葬り。後に諸弟子說法することまでを載てある。また龍樹が。大論に。此經のことはとんと說がないから。彼よりは。後に出たと見ゆるでござる。此次に頓部の說が起つでござる。その契經が二十ばかり有て。楞伽經は。其中に尤も最たる

物でござる。これは從前の諸經の言說。重く煩はしく。其說がうち合ず。迂遠なによッて。更に激切なる語を發て。其言に。一切煩惱。本來自離。不可說斷。及與不斷一切衆生。皆是一切。畢竟不生。離諸名字。即一切法。唯一眞心。一念不生。即是佛。とやうに環回さした說なく直切なる語を以て。以前の諸經をうち破つたものでござる。後世菩提達磨は。即この經に本づいて說をなし。義に依て。文字に依らず。始終一字を說かず。實に禪家の鼻祖でござる。さて其窮まりに至つては。乾屎橛を以て佛性を語つたり。經卷を斥ぞけたりするに至るが。これ皆いはゆる頓部でござる。禪宗のことは。なほ下に申すことでござる。扨是では。もはや僞作のしやうも有るまいと思ふ所が。まだ趣向が一つ殘つてゐて。こゝで彼のいはゆる眞言祕密といふことを作て。以前の經々は。いづれも釋迦の實意ではない。その祕密の所は生涯あらはさんで。密に金剛手菩薩（金剛薩埵ともいふ所謂普賢なり）といひ傳へたる所が。金剛手菩薩。これを南天竺の鐵塔に藏めてしらせず有た所を。數百年の後に。龍樹菩薩が。初めて取出したる經じやと云て。則ち三部の密經と。世にいふ所の。大日經。金剛經。楞嚴經といふ三經を僞作して。その敎の趣は。世尊得一切智々。爲無量衆生。廣演分布。隨種々趣。種々欲性。種々方便道。宣說一切智々。或聲聞乘道。或緣覺乘道。或大乘道。或五通智道。或願生天。或生人中及云々。各々同彼言音。住種々威儀。而此一切智々道一味といひ。六度經に。契經如乳。調伏如酪。對法如生蘇。般若如熟蘇。總持門如醍醐といひ。また樓閣經に。眞言是諸佛之母。成佛種子。若無眞言。終不能成無上正覺。また三藏經。盡從陀羅尼所出。などいへる如く。以前の經說を盡く陋しめおとして。一切智々と云ことを首張して。その一切智々を得れば。以前の經智にとける事どもは。心易く出來る趣にいひとり。其一切智々を得んとするには。眞言で无ければ得られずと。遂に重きを眞言に歸した物でござる。その眞言といふが。かの毘盧遮那阿字門で。それが謂ゆる光明眞言でござる。但し阿含經以下。楞伽經などの事は。龍樹の大論に其うわさが有るけれども。此の三部の密經を。鐵塔から得たると云說が。とんとないから。是で考へると。この眞言祕密の經どもは。

いづれ龍樹より後の。僞作にちがひはないでござる。猶下に委く申すつもりでござる。○これが諸教の起つた分ちでござる。皆もと。その上〳〵といひ上げた物で。さうせねば。我が立る道の張がたき故でござる。扨かく後に出たる說ほど。先にある經どもの噂を云て。押つけること故。それに依て何經が前に成て。何經が後に出たと云ことが。明かにしれるでござる。さすれば此れは。おのれと化の皮を顯すやうなものでござる。なほこのほかに佛經は夥しく有れども。外は皆上に論辨したる經どもの。いはゞ枝葉で。皆それ〳〵へ割付らるゝ事故。こまかに云には及ばぬ事でござる。なんと此の如く。諸々の佛經。一部一冊も釋迦の眞のものなく。盡く後人の僞り作つたものに相違ないが。こりやどうだ。サ此訣じやに依て。諸經いづれもがくそくとして。說が合はず。夫も。阿含經には。有を宗とし。般若經には。空を宗とし。法華經には。諸法實相と云たやうなことは。機緣によッて。法を說たとも云て。免しておかうけれども。實事の上で。けしからぬ相違が有て。譬ば釋迦の事を云に。二十五出家。三十成道とあるかと思へば。七歲出家。三十成道と云たり。十九出家と有たりして。甚だ紛はしいでござる。然るを後世の僧どもが。夫をみな彼の迦葉が。法藏結集の時に。阿難が覺えて居たことを。多羅葉の葉に記して有た物じやと。說うとするから。こゝで說が。一ッぱもあはんで。こじつけ理窟を。まはり遠く云て。高妙に取なしたものでござる。それ故漢土大倭の僧どもの。佛經を注釋したものは。たゞ惑ひぐさになるばかりで。一向見るに足らぬものが多いでござる。實に佛經の。眞面目を見出さうと思ふ人は。佛經の中の名目ぐらゐを。古人の說にたよッて覺えたならば。本文ばかりでよむがよいでござる。これは儒書もさうでござる。餘り古人の注解は賴みにせぬことでござる。扨其大乘の部といふ經々の中に。何がいッち大事とよむ物じやと云に。法華經でござる。此れはから大倭の名僧智識とよばれたる僧ども。何宗によらず。此經を尊び。その注解も。屋の棟を穿つばかりにたんと有て。今の俗でも。愚なぢゝばゝに至るまでも。第一の經じやと。覺えこんで居ることなれども。實は同じ大乘と云うちにも。外の經々よりは。

一向に味ひも何もなく。唯々めッぽふかいなる大ばなしばかりで。其訣をば說かず。此經一部八卷二十八品。たゞかさばかりがこんなにあれども。其要とする所は。たゞ方便品ばかりと見えるでござる。然らばその方便品が。いかなる甚深微妙の說があるかと思へば。唯有一乘法。無二亦無三。といふ語のあるばかりで。外はなんにも珍しいことはない。唯有一乘法。無二亦無三とは。たゞ一乘の法有て。二もなくまた三もなしといふことじやが。その二もなく。また三もなしと云は。此わけじやといふ。その尊き謂も何もないから。さッぱり詰らぬ。譬へば。今一寸手紙を書うが。其文言に。外に比類のなきうまい物で。結構じやと書たならば。其比類なき旨いものは是ぞと指す物が。一つなければならぬはさ。なんと此方便品の語もそのごとく。唯有一乘法。無二亦無三と云からは。その指す物が无ければならぬが。何もないはどうだ。なんと詰らぬじやないか。又いひ出しても。胸のわるい程たはけなことは。此中の語に。これを持つ人と。謗しる人との罪むくいを記して。持二此經一人功德。百千萬世。不レ瘖瘂一口氣不レ臭。舌常無レ病。口亦無レ病齒不二垢黑一不レ黃不レ疎。亦不二缺落一。脣不二下垂一。鼻不二匾㔸一亦不二曲戾一。面色不レ黑。亦不二陿長一。亦不二窊曲一と有。此意は。此經を信心する人の功德は。千年萬年過ても。おしとならず。口もくさくもなく。常に舌や口に病なく。齒に垢も付かず。黑くもならず。黃色にもならず。すきもせず。かけもせず。脣さがらず。鼻もまがりかゞまらず。顏の色も黑からず。せまく長いと云こともなく。すぼくまがりもせぬと云ことでござる。また是を謗しる人の。罪報ひを記して。其人命終。入二阿鼻獄一。從二地獄一出。當レ墮二畜生一。有レ作二野干一。身體疥癩。亦無二一目一。爲二諸童子之所二打擲一。受二諸苦痛一。或時致レ死。更受二蟒身一。其形長大。五百由旬。宛轉腹行。爲二諸小虫之所二唼食一。晝夜受レ苦。無レ有二休息一。若得レ爲レ人。諸根闇鈍。盲聾背傴。口氣常臭。鬼魅所レ著。貧窮下賤。爲レ人所レ使。多病無レ所二依怙一。身常臭處。淫欲熾盛。不レ擇二禽獸一。謗二此經一故。獲レ罪如レ是とあるでござる。この意は。此經をそしる人は。死ときに阿鼻地獄に入り。その地獄より出て。また畜生におちて。或は野干となり。身體は。なまづや。かたいを煩ひ。目

といへば。たッた一つ。又もろ〳〵の子どもの爲に。うちたゝかれて。色々の苦みをうけ。又ある時は死たる上にまた死。更にうわばみの身となりて。其形の長きこと。四百里。そのからだで。そこらを這ひあるきて。小虫どもの爲にすひくらはれ。夜ひる苦しみを受ることひまなく。また萬一人に生るれば。諸のことにくらくにぶく。目がつぶれ。耳が聞えず。せなかゞまがり。口がくさく。またいろ〳〵の物に取つかれ。貧乏や。いやしくて。人につかはれ。又病たゆることなく。よるべき親類もなく。身は常にくさく。また淫欲がさかりで。鳥獸に限らずつるむ。夫はと云に。常に此經をそしるが故に。罪を得ることかくの如くじやと云ことでござる。こりやみな人情の。好み惡む所で云たことで。愚ともおろかな。ちちばゝを導くには。これでも用をなすかもしれぬけれども。右にも申す通り。或は持ち。或は謗しッてかやうの報いを與へる。其者は何物じや。これが罰利生を見するといふ。其物がなけりやならぬが。かんぢんの其物が。ないから。此れは藥を取し落たる。能書見たやうなもので。一向何にもならぬものでござる。なんとこんな物を。いッかどの人間が。髭くひそらして。だゝぶだ〳〵誦でゐるが。さうだゝぶだ〳〵とばかり云て居るから。あらも知れぬが。誠によんで見ると。あいそもこそも盡果て。こんな物じやが。こりやどうだ。片腹痛いばかりでなく。下腹さへ引はることでござる。こんな物をよんで。驗や報いがあるならば。しんぐひ〳〵や。させもせさせもせと云歌でもしるしがあり。藥のかはりに。その能書を呑でも。病がなほる。こりや惡口じやない。實に法華經一部八卷二十八品。みな能書ばかりで。かんぢんの丸藥がありやせぬもの。もし腹の立つ人があらば。その丸藥を出して見せろと云つもりでござる。後世の日蓮などゝいふ愚僧はこりやいふにもたらぬが。漢土でも。天台の智者大師などいはれる僧が。きつくこの法華經を尊信して。大造くはしき注解などを書て世に弘め。法華經の親玉のやうに人にいはれ。此智者が云たことには。頭も上らぬやうに。人は思つてゐるが。此方の目で見ると。智者ではなくて。愚者大師とも云べきものでござる。なんとこの通りに拙いものを。昔から取はやしたは。ご

うじやといふに。一體の經を僞書としらず。みな釋迦の眞のものと思つてゐる故。かの四十餘年未顯眞實。また無二亦無三などいふ語に目がくらんで。とんと惚こみ。又この法華經の內の二十五品目を。普門品といふ。此は一册別に摺出して。世間の人が觀音經と覺えてゐるが是でござる。夫故始めに。妙法蓮華經普門品第二十五とある。これがまた一向に拙きもので。もと在家の愚夫愚婦を勸誘ふ爲にしたる物と見えて。將ニ諸商人ー齎ニ持重寶ーといひ。若有ニ女人ー求レ男求レ女といふ類ひ。凡て出家沙門の事でないでござる。又この品の偈に。呪詛諸毒藥。所欲害身者。念彼觀音力。還著於本人とある。此意は。のろいことや毒藥を。以て人の身を害はんといのれども。其祈らるゝ人。觀音を念ずれば。却て其わざはひが祈る人について。祈る人の身をそこなふと云ことだが。こりや佛道の意とは大きに乖つてゐる。なんと大慈大悲と名づけられたる觀音が。かやうの。むねきなことをして宜からうか。漢國の蘇東坡といふ人が。戯れにこゝを評して。もし此話の如くならば。菩薩の大慈悲と云ものではない。これに依て下の一句。還ニ著於本人ーといふを改めて。兩家摠沒レ事と爲たならば。眞の事じやと云たこの事ぢやが。尤な事でござる。また臨レ刑欲ニ壽終ー。念ニ彼觀音力ー。刀尋斷々壞と云語が。此品に有によッて。此を不斷念じてゐれば。首の坐に直つたる時。太刀が折れるとか云て。既に此法華經宗の開祖日蓮などが。辰の口の難とか云て。そんな事があッたなどゝ。其宗旨の輩の作ったる。日蓮が傳などに書いてあるが。是は實にない事で。みな後の日蓮宗共が。主馬の判官盛久が古事をぬすんで云た者で。夫故日蓮が自書に无でござる。其上主馬の判官盛久の古事も。謠などにも有て。古く云た事じやが。こりや亦からの古事を盗んで云つた事で。その古事の元は。佛祖統記といふ物に見えてあるが。是も元は僞つた事に違ひない。凡て佛者といふものは今に尻のはげる嘘をついて。夫をひんむくられて恥もとも思はず。しア〳〵まじまじとして居る。こりやみな釋迦の遺風と見えるでござる。まだ笑しいことは。日蓮宗の者は。大かたは觀音などは拜まず。稀にもをがむ者があると。彼米の中へ。砂の交つてゐる樣な物じやといふ譬などをして。謗法ぢやなどゝ云て。甚しきは身の毛を彌

竪て騒ぐけれども。その觀音は。法華經第一のき丶ものだが。どうした事か。こりや此普門品一册別にして。觀音經と云てゐるから。別の物じやと思ふと見えるでござる。夫でも日蓮が傳に。念彼觀音力。刀及段々壞の事實を。附會したが。をかしいでござる。

出定笑語講本下之巻

平田先生講談　門人等筆記

一體もろ〳〵の大乘の經々にある所の。佛菩薩と云ものは。みな其經々僞作したる者共のよいかげんに拵へた物で。實以て有つた物ではない。皆かの。からの古き文章に。假に人名を作つて。亡是公とか。烏有先生とか云ことを。かくと同じことでござる。夫故どこから出て。どうした物だと云ことも無ければ。行先も居所もしれず。虚空と同體じやの。極樂といふ所に居るのと云つて。紛らかしたもの。實に有つた人とは。さんと名の訣までがよく分る。阿彌陀。觀世音。不動。普賢。文殊と云つたやうな名も假で。其おんづまりを穿鑿しぬくと。人の心の異名になる譯でござる。譬へば毘盧遮那と云を翻訳すれば。大日と云ことに成て日輪の普く世界を照すやうなる。心の德を云つたものと云こと。また觀世音と云は。よく世音を觀じて。これも至らぬ隈なく。人を慈むといふ心の德を云つたもの。不動と云も。心を

氣海丹田におとし修めて。物に惑はぬ所を云つたものでござる。俗に持あつかふ不動經は。尤も僞經の中の僞經ながら。人のよく知てをるもの故。一寸よみませうが。其文に。是大明王。有大威力。大悲徳故坐金剛石。大知慧故現大火焔。執大智劍。害貪瞋癡。持三昧索。縛難伏者。無相法身。虚空同體。無其住處。但住衆生心想之中。と有るが。なんと違ひあるまい。凡ての佛菩薩と云ものは。皆こんな物でござる。同じ佛經の中でも。誠に有つた人の名は。是とはとんと訣がちがッてゐる。譬へば。釋迦第一の弟子たる。摩訶迦葉といふ名を。翻譯すれば。大龜氏と云ことになる。大龜氏とは大龜氏と書く。是は迦葉が生れたる時。龜が出たと云で。か樣に名を負たもの。また舍利弗と云弟子の名も。翻譯すれば。鶖子と云ことになる。これは其母が眼の樣子が。鶖のやうで有つた故。鶖と云ふあだ名をつけたと云ふことでござる。夫が生んだ子じやに依て。鶖子といふの意で。舍利弗とつけた物でござる。此外も。阿難。目連。羅睺羅などを始め。皆かやうのわけが有て。名の付たものでござる。是らは甚だ質朴なることで。おもしろいことでござる。是に引きかへ。かの阿彌陀。毗盧遮那。觀音。勢至。普賢などの類ひ。後人の作つた名どもは。みな空理を云たもので。小ざかしく。しやらくさいでござる。扨その佛菩薩どもは。後世に僞り作つた物で。實はないものだと云はるゝが。其の無ものなる。觀音や。不動に。祈つて驗のあるは。こりやどうじやと。此のやうに云人も有らうが。是れはうまく古の道を心得て。神祇のわけをよく辨へると。何のこともなく捌ける事じやが。一寸いはふならば。この天地の間には。かの萬葉の歌にも。海原の。邊つもおきにも神集り。うしはき在す。諸の。大神等。とあるの意で。海原ばかりではなく。神と人との差別がある故。人の眼にこそ見えねども。いづこも〳〵。神のまさぬ所なく。その神神には。尊きも賤きも。善もあしきも。種々あることで。そのいやしき神などの寄よッて。驗を視し。或は易の十翼などに。遊魂變をなすと云つた通りに。人の魂魄などの寄付て。しるしを現はすのでござる。夫は云々草鞋大王鮑魚神これらのことを考へて。この道理をしるが宜でござる。さて今日はよい序じやに依

て。阿彌陀經の事を一寸申しませうが。まづ阿彌陀と云ものは。右申す通り。元來つくりもので。實は無きものなること。これは論なし。夫れ故後生の坊主でも。如在のない輩は。うはべこそは。有る物のやうにいひふらして物を貰ふの種としたけれども。實の所へ行ては。已に一向宗の有がたがる書物にさへ。阿彌陀とは。我が心の異名也。などゝも云てある。其扨この阿彌陀經といふ物。是も大乘の經の部で。其の描き物なることは。今さら云までも无れども。よッぽど下手な作者と見えて。是ばかりの中で。直に尻口のあはぬことがある。夫はまづ西方十萬億土とやらに。極樂といふ結搆な世界が有て。阿彌陀がそこに居ると云ことは。是は誰も知たる通り。さてそこへ生れたる衆生が。身にみな光明が有り。其外何もかも光りかゞやいて。日月の光をからんでも。常に闇くないと云が極樂の證で。これは諸の經論に。云てある通りのことでござる。然るにその本文に。晝夜六時と云たり。また清旦と云ことなどがある。なんと此の通りに。晝夜と云ことが有つたり。また清旦と云ことが有つては。やッぱり此の日月の御惠みを被る所で。この大地の內と見えるが。扨はこの大地球の內には。そんな國はたえてなし。此間より申す通り。此大地の內では。御國ほど結搆なる國はないから。强て戯れにいはゞ。御國などが極樂とも云べき國でござる。西方十萬億土。天竺の西へ〳〵と。其のつまりへ行けば。大地は丸きもの故東へ出て。則御國へ來る。さすれば御國などでも有りませう。但しこれらの尻口合はぬのは。此の經の作者が。つい心づかなんだものでござる。又その文の中に。彼の國常有二種々奇妙。雜色之鳥。白鶴孔雀云々鳥一。云々。晝夜六時。出二和雅音一。と云ふことのあるが。一體佛敎の說では。鳥獸に生れるのは。みな作つた罪のむくいで。さう生れるといふことじやといひ。また極樂へ生れるものは。すべて善根を。積だ者でなくては。生れぬと云ひながら。そこに鳥が居ては。どうか罪ふかき者も。極樂へ生れるかと。いはれた時に困るから。是をばよく尻を結んで。勿レ謂是衆鳥。皆是阿彌陀佛。欲レ令下法音宣流上。變化所作といふたでござる。この意は。その極樂世界に鳥が居るとて。それを罪報故に生れたのじやとおもはんがよい。これ

はみな阿彌陀如來が。その佛法の音を流布しやうが爲に。變化分身して。鳥の形を現じ。なかしめた物じやと云の意でござる。かやうの事どもは。何もこの方が申さずともなことでは有るなれども。是は序じやに依て申すのでござる。さて釋迦はぬれ衣かづくとやら。實は一向しらぬ事どもを。後世の人の爲に。大きに無實の難を受てをることでござる。又すべての經々を。僞作つたる輩も。さして長久に傳へようと云意もなく。いはゞ愚夫愚婦のさとしぐさ。一時の戲れ同樣にしたるものだらうと。思ふやうな經もある。旣にこの阿彌陀經などがさうでござる。さやうの拙く愚なる物が世に弘まり。それを頂におし拵て。かの草鞋大王の類なる。有名無實。名あツて實なき物を拜んで。甚だしきは。身をさへに捨て媚諂ひ。おのが國。おのが身の本たる。有名有實。名あり實ある。我が皇神等を。粗略になし奉るといふは。是も皆いひもてゆけば。禍神の心とは申しながら。憤ろしく。歎かはしきことでござる。さて佛法の傳來は。釋迦が初めで。其正統が迦葉。迦葉の次が阿難。阿難の次が商那和修尊者。これより段々

相承傳來して。その十三祖と仰ぐ所は。かの大論などを作つて。大いに佛法を再興したる。龍樹菩薩でござる。これは釋迦の入滅後。七百年ともいひ。五百年とも。また六百年とも有て。何れをそれと。極め叵いようなれども。どうか六百年と云が。本當らしいことでござる。元來南天竺の人で。その幼少の時からきつく利發な生れで。覺もよく。天竺にある程の學びごとは。みな學び盡したと云程のことで。尤かの幻術なども。殊の外に鍛練して。一體が。豪傑ものと見えるでござる。或時に。その契友。三人と相談して。世間の神妙なる術は。我が輩。すべて達してゐることじやが。なんと此上は。何を樂みとしようぞ。思ふに人間の樂みと云は。色慾が。この上もない樂みじやに依て。何れ隱身の術を學んで。これで身のたのしみとせうと。相談致して。其術を知つた者の所へ行て。どうぞ習ひたいと云つた所が。其人の思ふには。此の四人は。才智拔群なる輩であるけれども。我が所へ來て畏まるのは。おれが。此術を知てゐるからのことだ。さすれば此方を授けては。直におれをば捨て仕まうだらうから。是は授け

ぬがよいと了簡して。青い丸薬一粒づゝを。四人の者にくれて。この薬を水でといて。眼に塗るときは。形が見えぬと教へた所が。龍樹は其香ひをかいで。しかも多味な薬を。これ〳〵であらうと云たれば。其師匠どのも惘はてゝ。其法を授けたと云ことでござる。そこで龍樹は。かの三人と。右の薬を用ひて。國王の奥へ忍び入つて。思ふが儘に色慾をやりたること。数月の間であつた所が。その奥の女どもが。段々懐姙する。こゝで國王も。大きに膽をつぶして。是は鬼魅と云て妖物のわざか。又は隠身の術を行ふ者のしわざか。ばけ物ならば跡はあるまい。隠身の術ならば。人の足跡があらふとて。砂をしいて置たる所が。果して四人の足跡があるから。すはと云ままに。勤番の者を入れて。人は見えぬけれども。むせうと劔を抜て。振まはさせた所が。とんと三人は斬殺された。其中に龍樹は利發者故。王の側へ〳〵と。身をよせて居たる故。切付る者ども。王の側へは。餘り近く切かけぬ。是に於て龍樹も。こり〳〵して。堅く誓を立て。もし此難を遁れたならば。出家と成て。色慾を止めようと心願してどこをどうしてか。此場を遁れて。さて迦葉より十二代目の。迦毗摩羅尊者と云が弟子となツて。佛道に入り。この横着者の大才士が。ぴツくり反て。さう成たること故。何のこともなく。九十日ばかりの中に。三藏に通じ。剰へ世に有らゆる事は。學び盡したと云の意で。自ら一切智人と云て居たと云ことでござる。扨さき程論辨いたしたる。經どもを取調べて。夫に添てよむべき物。かの大論を初め。色々の論をも著して。もろ〳〵佛經を世に傳へたるは。實には彼奴がわざでござる。それ故諸宗に於ても此者をば。釋迦についで尊むことでござる。さて佛法の漢土へ渡つたる年が。是も亦僧どもの方では一年も先のことにしようと思つて。彼是と偽り申したる説どもが有るなれども。實は前漢の代に。まづ民間へ渡つて有たると見えて。漢武故事。また魏略の西戎傳などに。その證據が見えるでござる。其後。後漢の明帝といふ王の。七年に。丈六の金人が。頂に日の光を佩びて。殿庭を飛行すると。明帝が夢に見えたでござる。そこで諸の臣下に問ふた所が。誰も答ふる者がなかツた中に。傳毅と云者進出で。西方に聖人あり。其

名を佛と申すと。承つてをるが。夫であらふ。と答へたる所が。明帝が然らば其佛法を求めようとて。中郎將蔡愔。秦景。博士王遵などいふ輩。十八人を天竺へ遣はして。佛道を尋ねさしたる年が。八年の事でござる。扨かの蔡愔等は。中天竺に行て。摩騰。法蘭といふ二人の僧に出逢て。夫を伴ひ。佛像と經論とを得て。白馬につけて。明帝が十年にかへり來たでござる。扨この明帝が。金人を夢に見たることは。すなはち例の幻術で。此後も度々あッたことでござる。此の前より。彼の國の民間に渡つてある所の佛者どもが。其道の世に弘く用ひられぬことを歎きて。この術を行つたるものと見えるでござる。又かの傳毅が。答へのさまを考へたる所が。彼奴が民間にある所の佛法を。竊(ひそか)に信じて。この術をも學び。明帝に夢を見せて疑ひを起させ。夫を答へて。なほ公に。佛法を弘めんとの心で。なしたることかとも思はるゝでござる。群臣誰もしらず。答へぬ其中に。おのれ抽(ぬきんで)て。西方に聖人あり。其名を佛と云。などといへるさま。己が國の聖人と云ものより外には。よき人もなきものと。一向(ひたすら)に思つてゐたる。其頃のから人の。口づきとも。思(おぼ)えぬことでござる。扨そのあくる年に。始めて。白馬寺と云寺を立たでござる。是が漢土(くに)で。佛寺を建たるの始めで。則かの佛像經論を。白馬につけて來たると云の緣を以て。白馬寺とつけたことゝ見えるでござる。是の年かの摩騰が初て。四十二章經と云を。翻譯いたしたでござる。これが佛經を。漢土で譯したる始めでござる。然れどもこの砌は。佛法も初々(うひうひ)しく。いまだ經文全部を。譯する程のこともなく。たゞ〳〵大部の中から。要文を抄(ぬい)て。譯したばかりのことでござる。扨また漢土には。元から道士と云者が有て。是はこの漢の代と云よりは二代先の。周と云た代に。李耳と云人の作つたといふ。老子と云書を本として道を學び。無爲恬澹と云を專(むね)と致して。心を勞するとのないやうに身を養ひ。神風を練て。長壽(ながいき)することを。勉むる道でござる。その神氣を練て。心を治むる所は。かの佛法より外道とさしたる。天竺の婆羅門の仙人どもがする所と。大きに似よッた物でござる。尤も幻術をも行ふ者でござる。からで仙人と云は。この道士のこうろへたるもの。仙術と云はこの道士どもの

爲る方術のことでござる。これは此のまへ。漢の武帝と云つた王などの。きつく好んだ物で。其ののち大きに世に弘がり。この明帝が時分などは。殊更に多かッたでござる。所へ佛法が渡つてからは。新奇な事には。目も心も移る世の中ゆゑ。大きに道士ごもの。けんぺきとなりさうで有つた故。道士の輩。六百九十人が上表して。明帝が十四年の正月一日。佛道とまさり劣りを。試みたいと願つたる所が。然らばと云ことで。其月の十五日に。かの白馬寺に於て。東の壇には。道士の經論や。符籙と云て。いはゆる御符などのことを書た物をおき。また西の壇には。佛法の經論。佛像舍利などをおき。さて双方へ火をかけたる所が。道士の方のは。皆やけて灰燼となり。夫のみならず。日頃は驗を得たる所の。呪術もしるしなく火に入り。履レ水の術も。どうしたことか。是時は夫も出來ず。また佛法の方の物は。一つとして燒なんたでござる。こゝに於て。道士どもは靑くなる。佛びいきの者は。其悅びいふばかりなく。かの摩騰は身を踊らして。空に飛び上り。種々の神變を現はし。かの法蘭は。大梵音といふを發して。佛道の德を宣明て。天より花を降せ。など致したと申すことでござる。この時男女千五百六十人。一時に出家に成たいと云ことで。その通りにこれを許し。其中に道士の佛法に歸依して。僧と成たる者も。六百二十人あるでござる。それを氣にして。道士費叔才といふ者などは。死んだ程のことでござる。また雒陽に於て。寺を十ケ所たてゝ。是れより致して。佛法の勢ひが。ます〳〵熾になッたでござる。此事を。漢土大倭の僧どもが。事々しくいひ立つることなれども。これも例の幻術で。もとより佛法の幻術は。此間も申す通り。釋迦の大きに工夫して。甚手あつくしておいたる事故。釋迦の靈の幸ふことでござる。かの幻術の本國たる。天竺の婆羅門どもですら。みな佛法の幻術にかなはず。勢ひをとられたる程のことなる物を。漢土の道士どもの。生々なる幼術が。どうして佛法の幻術と。力くらべの。なるべき事ではないでござる。かの大論に。諸の外道の神通は。不レ過二七日一。佛及び諸弟子の神通は。久近あることなしとあるは。此事でござる。道士どもは。かやうの訣をしらず。蟷螂の立車に向ふ譬の如く。

愍の事を仕出して。大きな目にあッたことでござる。さて此後世々に弘まッて。天竺へ僧をやッて。經論を取よせる。また彼處よりは持て來る。彼是宋元の代あたりまで。千三四百年の間には。佛の經論が。大概殘なく。漢土へ渡つて來たでござる。其間に。國の害となッたること。指を屈むるに暇なく。既に是が爲に國をうしなひ。身を亡したる王ども丶。少からんでござる。こゝに於て世の儒者ども。其の弊を考へて。其時の王を諫めなど致しても用ひず。あまッさへ。其諫めたる者を。罪に行ひなどもして。代々の王どもが。誠に惑ひはてたものでござる。その諫めて。罪に貶されたる儒者の論でも。韓退之が佛骨の表。または原道論。あるひは歐陽永叔が本論。など云ものは。甚だ尤もなることともでござる。一體釋迦の佛法と云ものは。御國では猶更のこと。漢土でも實は。餘計なものでござる。なぜと云に。佛法の經論どもに。云てある道理は。かの飛行自在の神通ばなし。方便の術を除て見ると。正味のこる所は。只。天堂。地獄。輪廻。治心の。四條ばかり殘るでござる。これからの事は。自分の國の古書に。

小澤山と云てある。夫はまづ天堂梵天のことは。天帝。皇天。后帝など丶云て。古書にあくまで其理が見え。また地獄の說は。かの黃泉の古傳說で其の理が見え。また因果報應。輪廻の事も。漢土では古くより申たることで。其一つ二つをいはゞ。左傳に。禍福は門なし。たゞ人の招く所といひ。または易の文にも。積善の家には。餘慶あり。積不善の家には餘殃ありといひ。たま臣其君を弑し。子其父を弑するは。これ一朝一夕のことに非ず。依て來る所の者漸なりといひ。また遊魂變を爲すなど丶ある類ひが。大きに輪廻。また因果報應と。同じ道理でござる。また治心と云て。心を治め。壽を養ふの道も。老莊の書。或は淮南子など云もの。又は醫書でも。素問靈樞などいふ物にも。あくまで其理が見えるでござる。さすれば佛法の經論と云物は。すべて漢土でも。餘計なものでござる。然るを已が國の書どもに。委く其理の見えたることを心づかず。無せうと佛法を弘め。其國世々の害と成たるのみか。つひ〳〵御國までに及んで。かくまでかぶれるやうに成たことでござる。但し其うち。儒者といふ者は。いつも申す

通り。心の狭きもので。己がよむ儒書に。直に佛說と同じ意の。語があるの。事實があるのと云と。大きに腹をたつけれども。腹を立ても。背を立ても。こりやごふも仕方がない。その腹をたつやうな。せまい心で書をよむ故。眼も昧み。かやうの語をも見おとして。佛語ばかりを。喧しく云てゐるけれども。若此方が佛者だと。から一番に儒をやりこめて仕まはれるでござる。また儒者の中にも。稀々はこゝらの事の。氣のついた者も。多き中にはありもしたらうけれども。夫らも又儒者に。佛說と同じ意の語があると云ては。都合のわるいことゝ見えて。諺に云ふ。猫のばゝを隱すやう。臭い物に蓋をするやうに。しらぬ顏して居たと見えるでござる。

○御國へ佛法の始めて渡りたる年が。皇孫邇々杵命より。卅二代の天皇命。欽明天皇の十三年十月十三日に。いはゆる三韓の。その一つ。百濟國の聖明と申する王の許より。怒唎斯致と申す者を使として。釋迦の銅像。經論。幡蓋。その外種々の佛具を貢に獻つて。さて表を上つて申上るには。是法於諸法中最爲殊勝。難解難入。周公孔子尚不能知。此法能生無量無邊福德果報。乃至成辨無上菩提。譬如人懷隨意寶。逐所須用。盡依情。此妙法寶亦復然。祈願依情無所乏。且夫遠自天竺。爰洎三韓。依教奉持。無不尊敬。由是百濟王臣明。謹遣陪臣怒唎斯致。奉傳帝國。流通畿內。果佛所記我法東流。と申上たでござる。そこで天皇聞已。歡善踊躍。詔使者云。朕從昔來。未曾得聞如是微妙之法。然朕不自決。乃歷問群臣曰。西蕃獻佛相貌端嚴。全未曾看。可禮以不とあるごとく。天皇命の御心にも。いかんとも御定かねあそばして。諸々のまへつぎみたち。則群臣へ。いかにしやうと御尋遊ばしたる所が。其の時の大臣蘇我稻目の申さるゝには。西蕃の諸國これに禮奉す。しかるに我御國のみ是を禮奉せぬといふは。ひがことでござりませう。殊に百濟王は。世々御國の御厚恩をうけて。忠義を盡しをる事ではあり。もし妖神を貢るならば。御國へ忠義な國とは申されぬが。中々左樣のことではあるまいによッて。是は御案じなく御受なさるゝがよろしうござると申し上られたでござる。時に大連の物部尾輿おなじく中臣鎌子の申されまするには。我が

天皇命の。天下を御治めあそばすには。恒に天津神。國津神八百萬の神を御祭りあそばさるゝが御典でござりまする。然る所を今改めて蕃神を御祭りなされたならば。恐らくは元より祭り奉る。天津神國津神の御怒りも有りませうと申上られたでござる。

この大臣大連と申すは。古へ臣の姓の人をば大臣になされ。連の姓の人をば大連になされてちやうど今の世の左右の大臣のやうな方でござる。また蕃神とは佛をさして申した言で。蕃とは皇國の外の事で。みやつこぐにと訓ます。さすれば陋しき外國の神と申す義でござる。

こゝに於て天皇にも。御すなほに御きゝ入遊ばして。いかにも是は卿らが申す所。尤もなることじやさりながら聖明王がせッかく貢つたる物を。捨ることもなるまい。返されもすまい。依て。誰ぞこの佛神に仕へようと思ふ者につかはさうと詔が有て。かの蘇我稲目の大臣に。其佛像を下されたでござる。そこで稲目の大臣は。跪て受て大きに悦び。右の釋迦の像を。我が家へ安置いたし向原と云所に有たるおのが宅を。寺にしつらへて。彼の佛像をすゑて禮拜致したことでござる。是が御國に於て寺院のはじめ。また佛像をおくことの始めでござる。其の寺の名をは則ち向原寺と申すでござる。所が國中大きに疫病がはやッて。多くは治療がとゞかずたま〳〵治る者も。久く煩つて愈ることでござる。こゝに於て物部尾輿の大連。また中臣の鎌子の大連の申上らるゝには國にかやうの禍あることは。臣等が申上たる義を御用ひあそばさず。蘇我稲目へ下されて。かれが心のまゝに祭らせ給へるが故なり。さればかの佛像を御棄なされて。後福を御祈りあそばすが宜しいと。申上られたる所が。天皇命にも。其奏しのまに〳〵聞召て。有司の人等に仰せ付られて。かの稲目が建たる寺を御燒せ遊ばし。彼の佛像をば。難波の堀江へ御流棄なされたでござる。此のとき天に風雲も無くして。忽大殿に火の災ひが有たと申すことでござる。扨この天皇命の十三年に。佛像經論の參渡つたるは。おもて立つての事。實は是より三十年以前。則ち繼體天皇の十六年に。漢土の梁の武帝が普通三年のことで。則ち彼の國より司馬達等と申す者が渡

り參つて。大和の國高市の郡。坂田の原と申すに草堂をむすひ。佛像を安置いたして居たる所が。誰一人信ずる者なく。異域の神をまつるとて。皆あざめいやしめたと申す一說があるでござる。さて物部尾輿の大連と。中臣鎌子の連との諫めを御用ひ有て。一トまづかやうに佛像經論。及び其寺をさへに燒失ひは致したなれども。この砌は禍神どもの何にあらびに荒びたることか。とかくに異き事なども多く。天皇命にも。清く佛を捨はて給ふこともなく。この明る年の五月。やがて河內國茅渟海より上つたる樟木をもつて。佛像二つを御つくらせ遊ばした程のことでござる。天皇のかくあそばす程のこと故。その道を好める輩は。なほ媚諂ひ。佛に仕へたることは。こりや申す迄もないでござる。扨この天皇命の御次が敏達天皇でござる。此御代の六年といふ年にも。百濟より。經論及び禪師等六人を貢つたでござる。この後も度々佛の具を三韓より。かはるがはる奉り。其時の大臣。すなはち蘇我稻目が子の馬子。きつく佛法を好で寺をたて。佛像を安じ。しきりとこれを弘める所が。其十三年二月。また百濟より。

彌勒の石像を献じ奉つたる所が。そがの馬子。その二の佛像を請ひ奉て。かの司馬達等を四方に遣はして。僧を尋たる所が。播磨の國に於て。高麗から來たる僧の。先に還俗して居たる。惠便といふ僧を見つけ出して。馬子大臣がこれを師として佛道を學び。また司馬達等が女の島と云を。それが弟子にして善信尼と號け。外にも尼二三人をこしらへ。其尼どもを崇敬して。佛殿をたて。うつゝをぬかしての大たわけで。大會と云て。佛事を設けて。彼の髮長どもに飯を食せたる時に。司馬達等が。その齋食の中から佛舍利を得て。それを馬子に献じたる所が。馬子がそれを鐵の上に置て。鐵の鎚を以て打て見る所が碎けぬ。そこでまた水の中に入れて見たる所が。浮がしと思へば浮き。沈めがしとおもへば沈んで。心の盡になる。そこで馬子がますます信心を起して修行怠らず。また馬子が石川の宅と云に佛殿を作り。佛法が是より大いに起つたでござる。然れども。この舍利を得たる始末。また水に浮しづみ心のまゝで有たなどが。みな坊主どもの。例の手妻で。やツたることで。夫を馬子が。まに受たのでござる。又もし

くは馬子が僧ども示合せて。かゝることの不測が有て。舍利を得たると披露して。佛法を弘めんとて致したるか。この二に出ぬことでござる。かやうのうきたる事を。舍人親王の。公然と朝廷の御正史に。御記しなされたる御氣が知れぬでござる。さて其翌年二月馬子が煩ひて。それを卜者に占はしたる所がこれは父稻目が時に祭つたる。佛神の祟じやと云ことでござる。そこで其占を天皇に申上たる所が。詔に。うらなひの言に隨て祭れと仰出されたでござる。そこで馬子はかの石像を禮拜して。壽命を延る事を祈るでござる。扨これがまた馬子が虚病をして。卜者にいひつけ。佛の祟りといはして天皇に奏し。夫までは。内々ひそかに祭つたる所を。御免を受て。世にはれて祭らんとての奸術と見えるでござる。なぜなれば。稻目が祭つたる佛を物部尾輿の大連と。中臣の鎌子の連との奏上に依て。御捨させあそばされたることで。稻目は其佛をいかにも大切に祭つた人じやによつて。彌々佛が祟るならば。稻目が子の馬子に祟るべき謂はない。この時は尾輿の子の守屋の。大連と爲て居られたること故。それに祟るべき理でござる。然るに其祟るべき人には何の氣もなく。祟るまじき恩のある。稻目が子の馬子に祟るとは。横ぞッぽうなことでござる。こゝを以て馬子が虚病をして。卜者と馴合ひ。かやうに云はせて。夫で佛を祭らんと云ふのしわざに相違ないことが現はれるでござる。とかく佛者ともの。佛法を弘めんとて致したる巧ごとには。かやうの事どもが。この後の世にも幾らか有たことでござる。扨馬子にかく詔が有て。佛を御祭らせあそばすと。直に國中いみじく疫病が流行して人草の死するもの夥しくあるでござる。是に於て物部守屋と。中臣連勝海の申上らるゝには是は臣等が諫めを御用ひなく。佛法を流布し給ふゆゑ。先つ天皇より今の御代まで疫病がかやうに流行いたして。國民も絶んと致する程のこと。これ偏に蘇我大臣が佛法を興行して。世に弘むる故と存じますと申上られたる所が。天皇にも至極尤もなる事じや。佛法を絶し。やめよと仰せられたのでござる。是に於て守屋の大連は。其の身自ら彼の寺へゆかれて。胡床に腰うちかけ指圖しつゝ。其塔を崩したほし。佛像佛具と共に殘らず火を放つてこれをや

き。燒のこつた佛像は。難波の堀江に捨てしまツたでござる。此時雲なくして風吹き。雨降つたと有ますが。是こそはいかにも佛法を弘めんとする。禍神の心と見えるでござる。さて守屋の大連は。夫にもいツかなたじろがず。雨衣を被て。馬子宿禰。また馬子に從て。佛法に醉狂居る侶を責訶り。また佐伯造御室と云を遣して。馬子が尊信する尼どもを呼よせ。馬子が泣わめくをもかまはず。其三衣を奪て。海石榴市といふ所に於て。尻肩を楚で撻ち。いはゆる。たゝきばなしとも云べき刑に行はしめられたでござる。扨も心ちよきことでござる。扨これは凡て日本紀に依て申すのじやが。此のつゞきの文に。天皇與大連卒患於瘡。云々。又發瘡死者充盈於國。其患瘡者言。身如被燒被打被摧。啼泣而死。老少竊相謂曰。是燒佛像之罪矣。と有りますが。とかく日本紀の撰者。舍人親王は。佛贔負なるおかたで。何こも〳〵佛のことをば。重くるしく尊きさまに記し。其御心ゆゑ。佛を尊信する者をば。其の惡きわざも好やうに書とり。また佛を卑めたるをば。さかく惡ざまに書取られたものでござる。實はかやう

有るまじきことでござる。既にこゝの文などがそのの一つでござる。物部守屋大連の天皇へ申上られ。さて右の通りに。佛像佛閣を燒こぼたれることゆゑ。其祟りにて。まづ天皇と大連とが。此病を受られたる狀に。記されたものでござる。よしや是が佛の祟にも致せ。歴史を記すの例と申すは。かやうの物ではないでござる。其訣は序の時に申しませう。扨この時の病が。痲疹の始りでござる。夫は鈴の屋の翁の玉勝間に。委き考へが有ります。さて〳〵禍神の所爲と申すものは。すべもすべなき物で。此まへにも佛法の祟りと見ゆることが。時々見えます。それが。則禍神の心でござる。其謂を。今即刻に申したればとて。初めて御聞の方々など。直ちに心得取らるゝ事ではないでござる。依てこれは追々と委く分りまする。もし實に是が佛の祟りじやと申すならば。許しおかれぬ訣でござる。なぜと申すに。佛は慈悲を以て。專と致すべきはずの敎でござる。己さやうの敎を立て置きながら。よしや己を信せぬ者ありとも。なぜかの慈眼視衆生。とか云如く。慈悲の眼を以て衆生を見ぬのじや。それもしばらく實の神の例を以

て。死しても遣はさうが。此時すでに敵對いたしたる者ばかりでなく。外の者をも。なぜ惱ましたぞ。なぜ苦しめたぞ。夫のみならず。此病を長く久しく。今の世までに流行して。なぜ數の人を取殺すぞ。かやうに執念深く祟りをなして。夫でも出世間の佛の心が。慈眼を以て衆生を視るのか。いや甚以不埒なる汝がしわざ。いや不屆なる其の方が。振舞じやが。なんと是にも云ひわけ有るかと。此のやうに難じたならば何とする。釋迦もし靈ある者ならば結伽趺座をもして畏まり。天上天下と指さしをる。其手をついて恐れ入り。螺髮の頭を掻ながら。こそ〳〵逃て行ねばならぬ。こりや此時のはやり病は。決して釋迦の祟りではない。實は此とき禍津日神の。御荒びなされたる時で。禍神ども。折よく夫に出くはせ。枉事を爲たる佛贔負のいひぐさに成たばかりのことでござる。扨是年の六月。馬子がまた〳〵奏するには。臣が疾ひ重く。今に至て愈ず。これは三寶の力を蒙らでは。治し向いと申上たでござる。是に於て。馬子に詔りあそばすには。然らば汝獨り佛法を行ふて。餘人には決してならぬと御言が有て。かの三人の尼を。馬子に返し下されたでござる。そこで馬子が大いに歡で。三人の尼を頂禮して。また新たに佛塔を營て。いたはり傅いて。また守屋の功がむだに成たでござる。扨この秋八月。天皇は御病ひ御重りあそばして。崩御あらせられたでござる。扨此敏達天皇の御次が。橘之豊日命と申上て。此は後に贈り奉りたる漢様の御名を。用明天皇と申上るでござる。此天皇御位に御つき遊ばして。其翌年四月に。磐余河上といふ所に於て。新嘗を御して。此日御病氣にあらせられて。宮に御歸りあそばし。詔曰朕思ニ欲歸ニ三寶一。卿等よろしく評議いたせと。仰せ出されたでござる。其時も守屋大連と。中臣勝海連とが。例の如く御諫めを申上られたでござる。この事も日本紀に記して。物部守屋大連與ニ中臣勝海連一違レ詔議曰。何背ニ國神一敬ニ他神一也。由來不レ識ニ若レ斯事一矣。蘇我馬子大臣曰。可ニ隨レ詔奉一レ助。詎生ニ異計一。云々。引ニ豐國法師一闕名入ニ於內裡一。物部守屋大連邪睨大怒。とあるでござる。是も。やッぱり守屋大連と。勝海連とを。あしさまに。かき。馬子をよきさまに書取られたる文でござる。なぜと云に。この文に。物部守屋。

中臣勝海。違レ詔とかゝれたなれども。是時の事は。天皇の御心にも。佛を御拜みあそばすこと。己命の御心にも。いかにも。御決めかねあそばされたによつて。卿等議レ之。と仰せられたでござる。夫故この二人の臣等は。有のまゝに眞の所を申上られたでござる。之を違レ詔。と記されたるこそ。甚だ心得がたいことでござる。天皇の大御言に違ふことは。違勅の罪と云て。最も畏く。あるまじく。反逆の罪に等きことでござる。其文例を以て。守屋と勝海とを記され。馬子がことをば。可レ随レ詔。詎生二異計一などと。是は馬子が。かやうに申したではあらふなれども。其文の勢を見るに。舍人親王の。其御下心に。守屋をにくみ馬子を贔負されたる事。明かに見ゆるでござる。扨かやうに誠のことを申さるゝ。守屋勝海の。その忠心も更にかひなく。つき賢木いづの御靈と。天地にい照とほらす。その天日の神の御子孫たる。天皇命の大宮へ。汚はしくも。法師を御入れ遊ばされたるが。此時が始めでござる。抑世中に。有と有禍事。あしき事の元は。盡く穢より起る妙なる謂れあり。眞の道の趣きは。淸きが上にもいさぎよく致さでは。神の御心に叶はず。ふさはしう思召さぬ事なるを穢はしき事あれば。禍津日神。その穢れを怒り給ふ故に御荒びあり。其御荒びによりて。禍事も出來る事なるを。彼惡神どもは又それに處得て。くさ〳〵の枉事を行ふ。妙なる謂があるでござる。鈴屋翁が道の大意をよみ出られたる。玉鉾百首の第一に。「つきさかきいづの御靈と天地に。いてりとほらす日の大御神。と云哥を記されたは。此の訣をふくんで致されたことでござる。其よつくのわけは。大平といふ人が。それを註したる。玉鉾百首解にも申てあるでござる。但しこゝらが。道の元の妙なるいはれで。中々以て今の間に申し取らるゝやうな事ではないから。初入の方や。漢意の除こらぬ衆などは。さて〳〵篤胤は。迂遠なことを申すぞ。などゝ思はるゝもあらふかでござる。此はこの方も。もと覺えの有たことで。更に無理とは存じませぬ。「たゞ其内に篤胤が外の事を論辨いたすには。謂ゆる攻撃で。手ひどい所とくらべ考へて。故こそあらふ。いでやその鈴屋翁が。眞の道を說たる書どもを見て。實にさうでないかの所を。尋ねよふ。詮議

しよふとでも思はれさへ致せば。それで拙者が。かやうに申た志は立でござる」さて眞の道。また世の中の善事は。清淨なる事より起るいはれのある。神代よりの趣をも思召さず。馬子等は考へも致さず。かの法師の輩は。人の眞の道の本を失ひ。其申することゝては。死んだる先のことのみ申し汚く穢はしき。死骸なんどを。朝よひに取扱ひ。人のきらひ棄たる物なんどを拾ひ著て。人の餘物穢物をもらひ食て。其上けがらはしき末國の人にして。人に非ざるけがれ者の。その教を承續をる。きたなき奴を。清めにきよむべき朝廷へ。召入れられましたが。扨こそ是より致して。佛法ますく\盛んになり。世々の天皇命にも。恐れながら。かの無常の心とか。來世を恐るゝとかいふ。女々しき大御心の御出來あそばされて。つひく\神の御國の。本の御手風もおろそかに相成り。この間もまをしたる。大國主神の。八尋矛を御ゆづり遊ばされたる。いはれを御忘れ遊ばし。古への武くをゝしく勇ましかりし。大倭心もどこへやら。其中に。漢樣のわるさかしらも相交り。それに乘て。御臣たる臣則下人々の。勢ひさかんになッて。朝廷の仰せをもごき奉るのみか。射向ひ奉るやからも。中頃には多かッたでござる。これみな元は。佛の道と。漢意とが致したることでござる。これは唯今つごく\に申すまではなく。歴史の學と云て。御代々の記錄をよくよめば。明かにしれるでござる。實にかやうに心とゞめて。御代々の御紀をよむ時は。覺えず聲を上て歎息し。其書を机にさし置て。慨然として。憤りを發することが。時々あるでござる。扨この時つひに守屋の大連の。深き慮りも相通ぜず。かの法師を內裡へ入れられたること故。守屋大連は。眼をいからして。大に怒ると。日本紀にありますが。これは尤もなることでござる。其時に。押坂部史毛屎といふ人。あはてゝかけ來つて。密に守屋大連へ申しまするは。今群臣卿をはかり。將斷路と申したでござる。さすれば馬子が輩。守屋の歸路に待ぶせて。己が輩の邪魔をはらはんとするの。巧みと見ゆるでござる。こゝに於て守屋大連は。其別業。阿都と申す所へ退かれて。人數を集められた所が。中臣勝海連も衆をあつめて。守屋を助けんと致されたるうちに。馬子方なる。迹見赤檮と云もの

ひそかに伺びよッて。勝海の連を殺したさあるでござる。愘い奴でござる。扨かの法師を召入れられたなれども。天皇の御瘡。轉盛んにおなりあそばして。旣に今はにおなりなされたでござる。時にかの司馬達等が子の。鞍部多須奈と云者の申上るには。天皇の御爲に。私出家いたし。佛道を修しませうと云て。丈六の佛像。及び寺を御作らせ遊ばしたでござる。さう〳〵是にも驗なくて。天皇はおかくれあそばしたでござる。これが四月のことでござる。さすれば是時の佛わざ。何のしるしもありやせんでござる。かくて其あくる月の五月に。物部守屋大連は。ひそかに用明天皇の御弟にまします。穴穗部皇子を。馬子が輩と中あしき事故。其家に籠り居られて。ひ御位につけんとの心で。其催しが有たと申すことでござる。これを察して。蘇我馬子ら。炊屋姫命の御言といひ立て。兵を遣して。其穴穗部皇子を殺し奉り。また宅部皇子と申上るは。穴穗部皇子と。御中よかッたとて。是をも殺し奉つたでござる。是を舍人親王は。誅すとかゝれたは。甚だしいことでござる。これしきの字義を。知らぬ事では无れども。こりやみな馬子をかばふの。お心と見えるでござる。鈴屋の翁も。「まつぶさにいかでしらまし古へを。日本書紀の世になかりせば」と詠れたる通り。日本書紀は。實に結構なる御書物ではあるなれども。かやうに汚き事のみ多いに依て。見るごとに胸をわるくいたすことでござる。扨この七月。蘇我馬子大臣。勸二諸皇子與一群臣一謀レ滅二物部守屋大連一とありますが。これはよう書れました。實に馬子が。何れもを。そゝのかしたのには違ひあるまいでござる。さて守屋のこもり居らるゝ所へ。押寄たる所が。守屋は手勢を率て戰ひ。自ら榎の上に登つて。雨の降る如く矢をはなつ。其軍強く盛んにして。馬子がたの軍勢。怯弱恐怖。三廻却還とあるが。守屋大連の。氣丈大和魂では。かう有さうなものでござる。その時厩戸皇子（かの聖徳太子也）も馬子がたで。この軍中にゐられて。白膠木を以て。かの佛經にいはゆる。四天王の像を作つて。頂髮に安置なされ。馬子もろともに。もし守屋に打勝たならば。四天王の寺を建ようと誓を立て。進み戰ふうちに。又かのにッくき奴かな。迹見の赤檮が矢を放つて。守屋大連を。榎木から射落したで

こざる。之に依て。守屋の軍がつひに敗れ。其子たち眷属も。或は殺され。或は隱れて。姓を改め名をかへて。有處をかくしたる人もあるでござる。爰にまた難波にある所の。守屋の本宅をば。則ち其の臣捕鳥部の萬といふ人が。百人ばかりの勢で。守つて居たる所が。大連の討死致されたる由を聞て。そこをひき。山中へ隱れてゐたる所が。朝廷評議あッて。萬は逆心をいだいて。隱れたることゝ見ゆれば。その親族を。攻滅すがよいと評議が有たでござる。時に萬は。垢つき弊れたる衣裳を著て。やせ憔悴たるさまをして。弓を持ち。劔を帶して獨り自ら出來たる所が。數百の衛士を遣はされてとり圍むと。萬は篁の中に隱れて。繩を竹に繋て。それを引動かし。吾が隱れたる所を。惑はしたでござる。衛士等それに詐られて。その竹の動くを見て。萬はこゝにをると云て。馳寄ると。萬は箭を放て。一矢もむだ矢はせなんだと云ことでござる。衛士らが。それを恐れて近づかず。こゝに於て萬は。弓を腋に挾んで。山に向て走り去くと。衛士等は河を夾で。さんぐ＼に追射る所が。さらに中らなんだと云ことでござる。

其中に一人の衛士がとく馳て。萬の先にまはり。河の側に待伏せして射たる矢が。萬の膝に中つたる所が。萬は其矢を拔て。なほ弓を張。箭を發ち。地に伏して。大いによばはッて申には。萬爲天皇楯。將効其勇。而不推問。翻致逼迫於此窮矣。可共語者來。願聞殺虜之際。と申したと有りますが。この語の意を考へ見るに。この人守屋大連の忠心を心として。同く朝廷の御楯となッて。守り仕へ奉らんと思へる所を。かへらまに。夫をばそれと問ひもしたまはず。かやうに責給ふことよと。いへる意ときこえるでござる。扨これを以ても。守屋の大連の深き慮り。また其のそこの心をも推はからるゝでござる。さて軍兵等は競馳てなほきびしく射立たる所が。萬はその飛來る矢を拂ひ捍いで。なほ矢を飛し。三十餘人を殺し。扨これまでと思へるが。持たる劔で。其弓を切りをり。また其劔をおしまげて。河の中へ投すて。別にさしたる小さき刀を以て。自身と頸を刺して死んだでござる。依て其死骸を八段に斬て。これを八ケ國へ散し。梟すべき由を仰付られ。其通りにせんとする所が。雷が鳴る。

氷がふる。大あれで。其上不測なることは。萬が飼ておいたる白犬が有たる所が。臥たりころげたりして。萬が屍ねの側を吠廻て。遂に萬の頭を嚙へて。古き冢へもッて竝おいて。其側に横に臥して。とんと飢死んで仕まッたでござる。かやうのことを思ふに付ても。哀なることでござる。扨これは河内での事ゆゑ。其國の國司より。この犬のあやしきしわざを。朝廷へ奏上たる所が。哀に思し召て。官符と云て御書付を下され。御稱めなされ。此犬世所二希聞一也。可レ觀二於後一。須下使二萬族一作レ墓而葬上と仰出されたでござる。これに依て萬の族が。有眞香邑といふ所に。墓を雙起て。萬と犬とを葬つたとあるでござる。是は御尤もなる御ことでござる。さて用明天皇の御次が泊瀬部若雀命と申上て。後の贈り參らせたる。漢風の御名を。崇峻天皇と申上るでござる。この御代に至りては。なほ憚る事なく。馬子が輩。佛法を弘め。且その我まゝ無道なること。云ばかりなく。天皇命にも。殊の外に憤り思し召さるゝことの多かッたことゝ見えて。或とき猪を御前へ獻じたる者がある。その節天皇命猪を御ゆびさしあそばして。何れの時か。この猪の頸をきる如く。朕が嫌しと思ふ所の人を斬ましと仰せられて。密々には。其御催しも有たでござる。この時に。大伴八手子といふ妃があつて。これが天皇の御寵愛の衰へたることを。御恨申して居たる所が。この御言を承て。馬子にいひ告げたでござる。馬子がこれを聞て大きに驚き。計りごとをめぐらし。群臣をも詐はッて。東國の調を進らせる由をいひ。東漢直駒といふ奴を其の人にしたてゝ。天皇を弑し奉ったるでござる。この直駒は後に馬子が女と密通して。夫があらはれ。馬子が爲に。立木にしばり付られ射殺されたでござる。こいつ直駒といふ畜生の名をついて。馬子といふ畜生の名を付けた者の命をうけて。かやうに漢様の。畜生の行ひを致したる故。神の御罰でがな有ませう。さて馬子は。かく天皇を弑し奉りたる程の惡逆を致したなれども。誰一人それを制し渠が罪を咎むる者もないと申すは。實に馬子が勢ひに。呑れはてた。ものと見えるでござる。この時はかの俗にも。よう人の知て居る。聖德太子なども坐々て。重く朝廷にも御用ひなされ。世にも殊なる御器量の坐ます

こゝに取りさた致し。これは實に取りさたばかりでなく。餘程の御方に坐ましながら。此れを御捨おきあそばされたること。恐れながら甚以て御不埒でござる。この砌は。外にむね〳〵しき皇子がたもなく。尤この時。推古天皇。いまだ御位に御つきあそばさんで。入らせられたなれども。これは御女儀にましまして。其の御位に御つき遊ばしたるのも。下より推てつけ奉つたる事でござる。かやうの事に。御心の御つきあそばさぬも。こりや申し奉るべき筋でなく。さしつめ馬子のたぶれ奴をば。厩戸皇子の。罰し給はねばならぬことでござる。聖德太子は。用明天皇の御子で。其御母を。穴穗部間人皇女と申て。聖德太子を御懷姙なされて。厩戸に至らせられて。御生みなされたに因て。厩戸皇子とは申すでござる。また上宮と云宮に。御住居なされたに依て。上宮太子とも申す。書紀に生而能言。有聖智。及壯。一聞二十人訴。能辨知未然とあり。この故に其の御名を稱へて。上宮厩戸豐聰耳命と申すでござる。昔から國の。周と云つた世に。晋の靈公と云たる諸侯の。大夫と云て。第一の臣に。趙盾と云が有て。それが眷屬の者が。其の君靈公をころしたる時に。趙盾これを打捨さしおいたる所が。其時の記錄をしるす役の。董狐と云もの其事を記して。趙盾弑其君と記たでござる。これは甚だ正しき書かた故。萬世に至るまで史記を記す者の。則りと致すことでござる。孔子もこの記しざまをば。きつく美ておいたでござる。（これは左傳の宣公二年の傳にあり）此例を以て記さうならば。厩戸皇子弑天皇とかいたればとて。一句もない程の事でござる。こりやどうして捨おかれたことじやと申すに。聖德太子は馬子が婿で。夫に佛法を弘めんとなさるゝ御心より。馬子とかれこれ。示し合されたることのある故でござる。こりや爭つてもあらそはれぬ。事實の上に能くわかッてをる。然るを佛法ずきの人々。舍人親王を始めまいらせ。古へよりこの皇子をほめたゝへて。聖德とさへ申しさだし。すでにけしからず古き物ながら。聖德太子傳暦など申て。この皇子の御事を。彼是れと取りつくろひ。僞りに僞りを重ねて。記したる物があり。世の人も大かたはよき人と心得てをる。既に漢學者でも。太宰彌右衛門。號を春臺と申たる腐儒者などは。辨道書とい

ふ書を著して。それに申すことは。本朝に於て厩戸の功は。制作の聖とも云べき人にて候。聖徳太子と論せられたるも。虚名にあらず候。などゝ云ひましたが。是は聖徳太子は。佛法ばかりでなく。漢風の事をも御始めなされたる故。儒者のくされ心に。それを嬉く思つてのことじやが。其から風を御用ひなされたる故。漢風に天皇を弑し奉つたものでござる。この太宰などは。今時の漢學者流が。鬼神の如く恐れる儒者ぢやが。扨々儒者などゝ申すものは。眞の道は不案內なものでござる。聖徳などゝ申すは。恐れながら當らぬことでござる。たゞし漢國の聖人といはるゝ輩も。孔子を除くの外は。大かたは上べを取飾たるのみにて。實は主殺しなどが多いから。こゝらを思へば。少しばかりは。あたらぬでもないかでござる。鈴屋の翁の歌に。「小菅よし蘇我の馬子は天地の。そこひのうらにあまる罪人。また「馬子らが草むすかばね得てしがも。きりて屠りて恥見せましを。また「くなたぶれ馬子が罪も罰めずて。さかしら人のせしは何わざ。と詠れたは。こゝらの事實をよまれたのでござる。さかしら人のせしは何わざとは。その代に賢き人のなされたるは。何業にて有りしぞと云の心で。天皇を弑し奉れる。馬子が大罪をば罰せずして。賢人がましき顔をして。かしこげに行なへるしわざは。何事を行へるぞと。深く咎めたる心でござる。實にかやうの。太じき大事をばさし置て。いさゝかも咎め給はぬ程のことゆゑ。外にいか程の功が有とても。善き行ひがありとても。それは取るに足らざることでござる。この厩戸皇子。十七ヶ條憲法といふ。制目を御定めなされたが。多くは漢樣の胸わろき事ばかりで。煩くうッとしいが。其第三條に。承レ詔必謹。君則天之。臣則地之。天覆地載。云々。欲レ覆レ天。則致レ壊耳。云々。とかゝれましたが。是はみな漢籍の書拔詞じやが。それにしても。何と馬子が天皇を弑し奉つたを。この御憲法の趣では。捨おかるべき事でない。また第一條に。見レ悪必匡。とも御かきなされたが。なぜに馬子がかゝる大逆を犯したるを見て。御匡しなされ。牛裂か。磔けにでも御かけなさらなんだか。是らすべて。漢樣の顔ばかりが賢人がましくて。書に記したばかりが立派なので。山貢の能書を見たやうな事どもでご

ざる。からの書物がみなかうでござる。また第二條に。篤敬三寶。三寶者佛法僧也。則四生之終歸。萬國之極宗也。何世何人。非貴此法。云々。不歸三寶。何以直枉。と。佛法の事をば。かやうに事々しく御かきなされたなれども。神の御事をば。少も宣まはず。餘りといへば御不埒でござる。なぜと云に。我大御國は神の御國で。天皇は日神の御正統に坐し。現人神とさへ申奉て。その天下を御治めあそばす御政事の本は。神事が本で。かの順徳天皇の御抄にも。先神事。後に他事とさへ。御記しあそばされたる程のことで。此事が闕ては。天照大御神の御定めにたがひ。決して相濟ざる深き御謂のあることとなるに。聖徳太子。己命は其の御子と坐ながら。其大御神の御定めを。御擾亂しなされて。聊も神の御事をば。十七ケ條にも宣はぬは。何と御不埒であるまいか。察し奉る所。此の御にくしみにも坐々たればこそ。太子さまで在らせられたなれども。終に御位にも御つきあそばされず。御薨なされて後。蘇我入鹿がために。その御子孫ものこらず亡ぼされて御しまひなされたでござる。日本紀をよまるゝ衆はよく

こゝらは取捨して惑はぬやうに致さるゝが宜しいでござる。漢國の朱子と云つた儒者が申したる言に。佛法渡つて以來。善惡の名。たがひをはる。と云ひましたが。實にこれは尤なことで。すでに馬子と守屋の上でもしれます。守屋は眞の道をたどり。遠き慮りさへに明かなる大忠臣。馬子は。天地の間にも。入れがたい程の大罪人なるを。却て守屋を逆臣といひ。馬子をよきさまに取なし。また俗にも。釋迦に提婆。太子に守屋。などゝ申すは。これ朱子の申たる通り。善と惡と。名を取替たのでござる。かやう申すと。どうか彼の川柳の句に。「神道者守屋重々理だといひ」といふたるやうにも思はれませうが。是は實に。神道者流の。腹を立てるのが尤もでござる。しかし國によりては。釋迦に提婆。守屋に太子と守屋を實事にいひ來る所々も有るでござる。さて播磨國赤穂郡。坂越の浦と申す所に。大酒社と申すがある。これは守屋の大連の社で。たゞ一神を祭つてあると申すが。是はかの萬づなどを相殿に祭るべきこと。また心ある人は。序もあらば。參詣致すべきことでござる。扨馬子が崇峻天皇を弑し奉つて後。豐

御食炊屋比賣命を。御位につけ奉つたでござる。是は欽明天皇の御女子で。元來は敏達天皇の。皇后に御立あそばされて有たでござる。この天皇命。後におくり奉つたる。漢風の御名が。推古天皇と申上るでござる。此御代の元年といふ年に。厩戸皇子を。皇太子。に御立あそばし。また攝政を御兼なされて。萬の政を御執りなされ。此年かの四天王寺を御建立なされたでござる。是よりして。日々月々年々に。寺を立て僧をふやし。佛を作り。この御代に。漢土へ度々御使を遣はされたるも。みな佛法の爲になされたることでござる。凡て厩戸皇子の世に坐々たる間は。朝廷の御わざも。十に七八は佛法のことで。夫はよむにもうるさい程のことでござる。さて聖德太子は。この御代の二十九年。二月五日に薨ぜられたでござる。扨この太子の御事を記したる物は。夥しくあるが。みな佛ずきの輩や。坊主の作つたるもの故。その中に。實の事もあるかも知れぬなれども。見渡したる所が。七八分程は。明かにしれた僞りゆゑ。其餘の二三分も。ごふも疑はしくてならんでござる。夫はまづ太子傳暦と申て。ざッと六百年以前からの書がある。これは古きもの故。すでに塙検校が。羣書類從にも收めてある。それと釋の虎關が元亨釋書とて。その一つ二つをいはゞ。厩戸皇子は。漢土の南嶽の衡山寺と云寺の慧思といふ僧の。再來して。御國へ生れさしつたのじやと云ことで。或る時は人に語つて仰せらるゝは。此國へ傳つたる法花經は。文字が落てある。我がむかし彼の國に居たる時よんだる經には。其字が有たると云て。その經をとりに遣はされたる所が。間違つて。外の本をよこしたる故。是ではないとて。或時。元來建おかれたる。夢殿といふへ籠つて。戸をさして七日が間。出られなんだる所が。八日目に。漢土で持れたる所の經を。取て歸られたと云ことを。國史にある所の。眞の事をも取交へて記してあるが。その慧思といふ僧は。世には南嶽大師といふ。高名なる僧で。佛祖統記などを始め。その外も。漢土の名僧の傳を書た物を見れば。彼國の陳と云た代の。大建九年。壽六十三で身まかッたとある。此大建九年は。御國では敏達天皇の六年にあたッて。聖德太子の。五歳にならるゝ時の事ぢやが。こりやごふだ。なんと。未死

もせぬ五年まへに。御國へ生れ來よふはずはあらふか。また推古天皇の二十一年十二月一日に。片岡と云へ太子の御出なされた所が。飢者が道の邊りにをるゆゑ。其名を問れたる所が答へぬ。そこでめし物を給はり。又たべものをも給はツて。歌を御よみなされ。其あくる日。人を遣はされて。お見せなされたる所が。彼の飢者が既に死んで居るから。そこへ墓をきづきてこれを埋め。其の後數日經て。近習の人を召れて。かの飢者は凡人とは見えぬと仰られて。其墓の所を見せに遣はされたる所が。かの飢者が。ひそかにその塚をぬけ出て。かの賜物の衣服をば。たゝんでそこへ置て。いづちへ參つたでござる。そこで其賜はツたる衣を。御取寄なされて。常の如く服れたと云ことでござる。其を見て時の人が。聖之知レ聖ヲ。其實哉かなと云へり。逾太子を惶み奉ツたと云事が。日本紀にある。此事は又かの禪家の方で尊ぶ所の。達磨が御國へ來たのじやと云て。元亨釋書などには。開卷第一に此事を記してあるが。なる程この飢人は。へんな奴ではあるけれども。これは南嶽大師を附會したるよりは。もツと甚しい時代の相違なことでござる。夫はかの達磨が死んだる年は。漢國梁の武帝が大同元年の事で。御國では安閑天皇の二年にあたる。この推古天皇の二十一年。聖德太子の飢人にあはれた年よりは。七十九年先のことでござる。佛ずきな輩のうそと云ものは。大抵こんな物で。どうかと云と實は文盲で。年代などをば。さしもしらんで居るからの事でござる。また中には承知してゐつゝ。やつてゐたと思はるゝ僧などもある。元亨釋書を作つたる。虎關などがそれでござる。何にしても。人を惑はす者は坊主でござる。餘はこれに准へて。聖德太子の事は。日本紀に依て見るがよし。夫も用心せぬと。かの佛びひきの說に惑ふ事でござる。篤胤が案ふに。この飢者めは。やはり佛法の混れ者で。わざと飢たる眞似や。死んだまねなんどをして居て。今異ませんとてした事であらふでござる。佛者には。そんな奴らがいくらも有。又もしくは。かねて太子の御計らひなされて人に異ませ。佛法に信を起させんとて。かやうの事を太子が示し合せて御させなされたもしれぬでござる。又さる惡さかしらをなされかねぬ御方でござる。さうなけりや。

天皇の太子と坐す御身にて。かゝる非人のけがれ者に。物宣ふ事さへあるに。御衣を賜はり。剰に夫をまた召返されて。常の如く。御身に御著あそばしたも。何とやらんをかしな事でござる。さて蘇我馬子は。この御代の三十四年。五月八日に死んだでござる。其死んだることを記されたる所に。性有二武略一亦辨才一。以恭二敬三寳一。と記しおかれましたが。ちとほめ過のやうでござる。なぜと云に。武略が有たならば。守屋にあんなにきたなく負ぬはずのことでござる。さて其跡の大臣をば。其子蝦夷といふ。これは。えぞと云と同じ事。此奴ら代々ろくな名はつかぬ。是も馬子が威勢をうけついで。甚だの我儘もの。また其子入鹿は。父にまされる我儘無道で。これも同じく大臣でござる。さて推古天皇の御次が舒明天皇。その御次が皇極天皇でござる。この御代の二年十一月に。聖徳太子の御子。山背大兄王と申すが。斑鳩宮と云に坐したるを。入鹿は巨勢徳大臣といふと。土師娑婆と云を將として。掩ひ奉り。その御一族を追ひ奉り。悉く入鹿が爲に。滅ぼされさしッたでござる。これは入鹿が畏くも。天日嗣を奪ひ

奉らんと云心があるに依て。此大兄王は。聖徳太子の御威光がうつゝて。世人みなが慕ひ奉る御方ゆゑ。さては天日嗣を。この王のしろしめすやうに。成行ん事を忌み。己が反逆の邪魔になるによつて。其邪魔を拂はんとの事でござる。扨大兄王の宅を襲ふて攻たる所が。奴三成と云もの。數十人の舍人と共に。出て拒戰ふて。入鹿が大將。土師娑婆連を射殺したに依て。入鹿が兵士。恐れて引退いたでござる。此時大兄王は。馬の骨を取集めて。御寢所におかれ。其妃また御兄弟がた。御子等を率ゐて。逃出さしッて。膽駒山と云に御隱れなされたでござる。巨勢徳太臣等は。火を放て。斑鳩宮を燒た所が。灰の中にある骨を見て。大兄王の死しッたと思つて。圍を解て。退いたでござる。馬骨を人骨と見まがへると云は。是も。いかいべらぼうでござる。こゝに於て大兄王は。其家族を連れさしつて。飲食をもなくして。逃出たる所が。文屋君と云人が勸めて。かやう〳〵にして戰ひ給はゞ。必ず入鹿に勝ち給はんと。二度迄も計どを申したなれども。大兄王御兄弟は御聽入なく。いかにも卿の申す通りに致したならば。必定

勝ちは致すべきなれども。一身の故を以て人を煩はし。又後世に於て。大兄王の爲に。我が父母をうしなへりと言れんは。大丈夫の心に非ずと申されて。御兄弟の男女二十三人。もろともに御首を經つて。おつにをはられたでござる。扨々佛者と云ものは。おつに了簡をつけた物でござる。なんとかやうに弱く女々しく。いくじもない死ざまをなされて。これでも佛法では大丈夫か。朱子は佛法渡つてより。善惡の名差ひ了ると云たが。かやうに女々しく。拙いことでは。善惡ばかりでなく。强弱の名までが取りかはつて居ると云物じや。なぜと云に。戰へば必ず勝べき頼みも有ながら。手を束ねて經れ死るゝやうな怯きしわざを。ごふして〳〵。正心男などゝは思ひもよらぬ實以てますらを大丈夫といふ者は。かやうの事に當つては。一足も退かず。たとへ討死するとても命と刀のつゞくだけ。切て〳〵きりまくり。さて叶はぬ時は。守屋大連の臣。捕鳥部の萬がやうに。自ら頸をかき切るか。腹かきさばいて死るのが。こりや眞との大丈夫とも。ますら雄心とも。大和魂とも云ものでござる。然るを書紀に。この御首縊の所に。五色の幡蓋が大空に照灼り。種々の音樂が聞えたなどゝ有けれども。いつも申す通り。書紀の撰者舍人親王は。佛ずきの御方ゆゑかゝる狂ことの語り傳へを。まことに御信なされて。御記しなされたのでござる。實は取るに足らぬ妄誕でござる。實とにさやうの事が有たならば。夫はいかなる禍神の心でか。世人を惑はしたのでござる。左にも右にも。佛法などの如き。邪道の渡來て行はるゝも。鈴屋大人の云れたる如く。禍神等の心によることゆゑ。其ふしぎらしき事等のあるも。みな禍神のなし行ふ事でござる。扨こそ。かゝる不測らしき事が有ても。夫だけの何一つ。佛法が御國の爲に。なツた事とては。ありやせぬ。こゝを考へて。禍神のしわざなる事を。悟るが宜いでござる。然るを後の太子傳暦などには。この縊死れた事をよく云なし。書紀の妄説につけましをして。或は聖德太子は觀世音の化身とやらで。此國は無佛世界じやに依て。佛法を弘めん爲にとて。生れ出られたる事故。元より其御子孫を遺さんの御心なく。また山背大兄王を始め。二十三人の人々が。皆權者とやらで。假に來られたること故。この首く

くらしッた時。何れも天仙天女と成て雲に乗り。西にむかッて飛去られたなど丶云てあるでござる。これも朱子は。釋子よく遁辭して。其説を窮局しがたしと云つたが。實に其通りに違ひないでござる。而れども。さうはいはさぬ。なぜと云に。實に觀音の化身に坐々たならば。御妻をも持ち給はず。御子などもなければ。よいに。又かやうに云と。かの黄門とかいふ。陰莖なしと思はれうかとの。御心でなどと云ふべけれども。其わけならば。かやうにたんと御生みなさらんでも。よかりさうな物じやが、かばかりたんと生置れて。かゝる浮目を見せ給へること。其本地たる觀音が。なんと不法では有るまいか。また太子は未然と云て。よく先の事を。三世までも鑒がみ悟らしッたとの事で。すでに日本紀にも。知未然とあるが。なぜそれ程の悟り深き御心で坐々ながら。彼の御心を合せ給へる。蘇我の子らが爲に。三世までもなく。直に其御子等の害せられ給ふことの。未然を察しおかれなんだが。をかしなことでござる。又崇峻天皇の。馬子に弑せられ給へるは。前生のむくいで。夫故太子は。帝へ劔難の御相ある事を。未然に申上られたなど丶云ふことも。太子傳にはあれども。然らば其御子等の。首しめてはて給ふべき相をば。なぜ示しおかれなんだか。扨々佛ずきの者の。取つくろッたる説と云ものは。見るにも聞くにも。胸のわるくなる事ばかり。之を思へば聖德太子も。後世の佛者どもの附會な説には。大きに濡衣かづいてゐらるゝことでござる。かく佛法渡つて。天皇にまで大變の有るに從つて見れば。なんと御國亂妨の開祖と云は。佛法では有ませんか。皇大御國は。天地の開けてより。彼大御代迄。何百年ともなく年經きぬる内に。天皇に禍事の有らせられたる事もなくき臣連等始め。下ざまの者に。右申したる如く。大罪人の有し事。此古には俗に云如く。藥にしたくてもありや致さんで。かく拙者が實録の上で。こま〳〵申す事を御聞の上で。猶以かの佛道を信心致さるゝかたは。かの馬子等が天地不容の惡行を。不屆とは思はれず。下心には。各々尤もと思ひ居らるゝと申ても。否とは言れますまい。夫に近頃俗の人の云ことを聞くに。佛道もなけれりやならぬ。此國は古へは。人が荒くてならなんだ故。それで此佛道と云事

を。廣めさしッたものだ抔と。こしやくらしく云が。其事實が何に記してあると云たならば。ひしと差つまり。ぎうの音も出はすまい。しかしかく云ふものの。彼の道も數年人々の心に染付て居ること故に。いま急に直さうとて。さう急にも。なほるまいから。我が皇國の神の道の。有がたき事を思ひ奉り。かの外道をば。おひ／＼にでも心がけて。改めらるゝやうに致したい物でござる。實には唐人すら。過則勿憚改とある如く。惡事と聞たならば早く改むるが。賢人とも。また發明とも云ものでござる。又惡說と思ひつゝも直さゝれば。畜生にも劣ると云ものでござる。扨蘇我入鹿は。かやうにわが反逆の差支になりさうな方をば亡しつゝ。天皇の御眞似を爲奉り。帶劍を致して御前に出なんど。すでに御大事におよばんとするに至て。中大兄皇子と。中臣鎌子連と。密々に種々と示し合されて。かの皇極天皇の四年六月十二日に。天皇の御前に於て。入鹿を誅せられたでござる。この中大兄王と申は。前の欽明天皇の御子に坐て。後に天日嗣を知看て。天命開別天皇と申て。後の漢風の御諡を。天智天皇と申上るは。即この中大兄王の御事でござる。また中臣鎌子連と云は。後に藤原朝臣の姓を賜り。また大織冠といふ位を賜はり大臣となり。藤原一統の大祖にて。世にも人のよく知てをる。大織冠鎌足公と申すは。この鎌子連の事でござる。扨入鹿が父蝦夷をも誅せられたる所が。蝦夷その誅せらるゝさきに臨んで。天皇の御代々の御紀。並びに御國記。又やんごとなき御寶共を。此奴大臣の事ゆゑ。預つて居たるを。悉く火を付て。既に皆燒失はんとしたる時に。船史惠尺と云人が。惴防いで。其國說をば取出し。中大兄王に奉つたでござる。此は太じき大功でござる。若此時。此人のかく働かずは。神代の傳へも。御代々の御事も。みな蝦夷が爲に。燒き失はるゝ所で有たでござる。さすれば古への御典を讀人は。この惠尺の恩賴をも。なほざりに思ふべき事ではないでござる。なんと蘇我馬子このかた三代。實に天地の間に入れ巨いほどの。大逆無道の奴ごもではないか。さて此後は御代をかさね。年を經るに從て。彌ます／＼に世に弘まり。御國のつひえ。世の害と成たる事は。筆に書れず。口にもほゝばり。中々以て二十日や三十日に。

いひ盡さるゝ事ではないから。まづ夫はさしおき。當時は八宗と相成り。それにかの一向。日蓮の二宗を加へて。十宗とわかれをる所以を。あらく申しませう。まづ御國で宗旨の始まりは。三論宗でござる。是はかの龍樹菩薩が著はしたる大論。即大智度論とおなじく。天竺の提婆と申す僧の著したる。百論と申すを。おもと學んで。義を立たるもので。推古天皇の三十三年正月に。慧灌といふ僧が。高麗國より渡り參つて傳へたることで。河内國井上寺が其元でござる。○此次に傳はッたるが。唯識と申すでござる。是は天竺の世親と申す僧の。立たる筋を以て宗旨と致し。かの唐代の玄奘法師が。天竺へ參つたる砌に傳へ來て。それが御國へ傳はッたるは。孝德天皇の白雉四年に。河内國丹比郡の僧。道昭と云者。かの國へ渡り。玄奘三藏に謁して。之をうけて參つたでござる。この道昭といふ僧が。始めて火葬をはじめたでござる。平城の右京の禪院が。此僧の建立でござる。○此次に渡つたるが律宗でござる。是は佛法の戒律と申て。いましめのことを宗旨と致して聖武天皇の。天平勝寶六年正月に。唐國より鑑眞と云僧が渡つて。傳へたる宗旨でござる。奈良の招提寺が。この僧の建立でござる。○この次に渡つたるが華嚴宗でござる。是はかの華嚴宗の趣を宗旨として立たるものでござる。孝謙天皇の御代。河内國の僧。慈訓といふ者。唐土へわたり。彼國の賢首國師といふに出逢て傳はり。これを受て歸つたでござる。南都東大寺。大安寺などが。この宗旨じやと申すことでござる。○此次に渡りたるが天台宗でござる。これは法華經の。權實といふことを宗旨として。其說を龍樹の大論に本づけ。漢國陳と云た時分の僧で智顗と云が。始めて天台山と云を開きたるゆゑ。天台大師ともいひ。また其宗を天台宗と云もこの故でござる。桓武天皇の延曆二十一年に。近江國滋賀の郡の僧。最澄といふ者。彼國へ渡り。天台山國淸寺へ到りて智者より七代目の。道邃法師といふに從ひ。其外。時の名高き僧に從て。眞言の祕密をも。これをうけ。其道の奥意をきはめ。其歸つたる年が延曆二十四年でござる。さて比叡山の延曆寺は。この僧の開基でござる。後に諡號を下されて。傳教大師と云はこれでござる。此次に渡つたるが密宗でござる。

是はいはゆる眞言宗で。これは其元の起る所は。元來釋迦の祕として普く傳へず。金剛手菩薩といふに傳へたる所が。金剛手。是を南天竺の地の鐵塔に藏ておいたる所が。神これを守り。數百年あッたる所が。世に傳はるべき時至て。龍樹菩薩。芥子の實を擲つけて。其とざしを開きたれば。今の三部の密經が出たると申す。然れども。これは僞り託しいふことで。實は此間申す通り。この三部經は。龍樹以後の人の僞作いたしたる物に相違ないでござる。扨これを天竺の不空大廣智三藏と云が持て來て。漢土へわたしたは。唐の玄宗が開元七年の事でござる。さて御國へ傳はつたるが。此まへ傳教も。うけて來たなれ共。其委しきことは。讃岐國多度郡の僧空海といふが。桓武天皇の延暦二十三年。すなはち唐の德宗貞元二十年に。彼國へわたッて。不空大廣智三藏の高弟。惠果阿闍梨と云に出逢て。のこらずを學び盡し。平城天皇の。大同元年にかへッて來たでござる。此僧大ひに密宗を弘めて。高野山を開基いたし。仁明天皇の承和二年に入滅致したでござる。此後延喜二十一年に。弘法大師といふ諡號を下されたでござる○この次に渡りたるが禪宗でござる。これはかの此間申したる所の。楞伽經と云を元として。心性を悟ることを宗旨と致し。また以心傳心。敎外別傳。不立文字。直指人心。見性成佛といふの義を立て。夫を漢土へ傳へたるが。梁の武帝が普通元年のことでござる。その來れる僧が。名におふ達磨でござる。所が武帝は名だたる佛すきで。夫ゆえに國を亂したる程の王では有たなれども。達磨がいふ所は。武帝のそれまで心得たる趣とは違ふゆえ。氣に入らなんだでござる。之に依て達磨は魏の國と云へ行て。少林寺といふ寺の壁に向かッたきり。九年ゐて死んだと云ことでござる。此宗は。以前傳敎大師が傳へて來たなれども。早く亡びうせてあッたる所が。備中國吉備津宮の加陽氏より出たる僧に。榮西といふが有て。是は御國にありとある所の諸宗を學び盡し。六條天皇の仁安三年。南宋の孝宗が乾道四年に。漢土へ渡り。かの天台山へも登て修行し。彼是佛書を得てかへり。其のち後鳥羽天皇の文治三年の夏。また／＼漢土へ渡り。夫より天竺へ行て。釋迦の古跡を尋ねんと志ざしたなれども。佛の本國はみな。佛道は亡びたる由を聞

て。大きに力を落し。こゝに於て。虚菴の敞禪師と云に從て。禪宗を學び勤むること三年。かの國の紹熙二年といふ年の秋。すでに還らんとする時に及んで。敞禪師より達磨以來。嫡々相承の傳來を。盡く附屬せられて歸つたる年が。後鳥羽天皇の建久二年のことでござる。さて大いにかの單傳心印。不立文字。敎外別傳直指人心。見性成佛の義をひろめ。元よりこの榮西は。[illegible]才辨拔群のもの故。其頃の僧どもを盡くいひ伏せて。思ふが儘にこの宗を弘めたでござる。その禪宗の[illegible]。この榮西が始祖といふも。尤なことでござる。此宗がわかツて。臨濟。曹洞。黄蘗。この下々が二十四派にわかる。○この次に起たるが念佛宗でござる。また淨土宗ともいふ。是は美作の國より出たる僧。源空と云が始めて弘めたる宗旨で。これは人のよく知てをる通り。たゞ〳〵一心に。彌陀の名號を稱へだに致せば。罪有も罪なきも。みな極樂といふ結構なる國へ。生れる由を勸めて。其旨といたす經は阿彌陀經でござる。この源空。元來は天台宗の僧であツたる所が。晩年に慧心僧都の往生要集といふ物をよんで。こゝに於て。夫まで學んだる所を捨て。この趣に替たと申ことでござる。さて此僧の念佛宗を弘めたる年が。後鳥羽天皇の御代より土御門天皇の御代のほどでござる。後に法念上人と諡號をたまはツたでござる。○これに次で親鸞といふ僧が出て。これは源空が一心專念彌陀名號の宗旨を本と致して。大いに人情のまぬかれ叵きことを察したるが。肉食妻帶の宗旨を始めたでござる。其のいひぐさに或日夢中に觀世音が見えて。親鸞に告て。行者宿報設女犯。我成玉女身被犯。一生之間能莊嚴。臨終引導生極樂。と諭したと披露したものでござる。これを觀世音陀羅尼經といふ佛經に。女犯の欲と。五辛と云て。蒜の類ひ。凡てなまぐさき物を喰たる時などに。となへる呪文がある故。それから思ひ付て。かやうの僞言を云たものと見えるでござる。一向宗と申すはこれでござる。順德院天皇の建暦年中より此宗を弘めたでござる。親鸞始めは慈鎭和尚の弟子にして。天台宗であツた所が。後に源空の弟子となり。善信坊綽空と名づけ。其後親鸞と改めたでござる。○この次に。これに次で出來たる宗旨が。かの日蓮宗でござる。則日蓮といふ僧の

はじめたることで。其宗旨の趣きは。天台宗の法花經を本と致して。夫に一念三千。また止觀など丶云ふ儀を取て我が物となし。吉田家の神道を習合致して。みだりに大言のみを放ち。あがる中にも文盲千萬なる宗旨でござる。この僧は。自ら記しおける書に。日蓮は。貞應元年壬午安房國長狹郡東條郷の生れ也とも。また日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ。旃陀羅の家より出たり。とも記しおいたによつて。この上もなき汚穢しき者の子と見えるでござる。此僧のいひ置たることどもを破つたる書は。禁斷日蓮義。挫日蓮。續挫日蓮。破邪見正記。四度宗論記。など丶申すものは何れも七八分は尤なることでござる。彼宗の者ども丶。一々それに返答を致してあるけれども。たゞ大聲を上て申したばかり。見事に返答したりと見ゆるは。更にありやせんでござる。事を明らかに辨へたる人は。日蓮宗は天台宗の虫喰。一向宗は淨土宗の虫くひ。山伏は眞言宗のむしくひじやと申すが。これは相違ないことでござる。殊にこの三つの者は神をば卑しめて。みな佛の下司の如くいひなし。扱ふ。不埒なるものでござる。夫も其に

申たいが。今日はまづおきて序に申しませう。扨かやうに諸宗と。わかるやうに成たるは先に申する通り凡ての經々が。一部一册として釋迦の眞との物はなく。後人の思ひつきを以て。次第々々に僞り作りたるものなることを辨まへず。その諸宗の祖師どもが一向に釋迦の眞のものじやと心得て。これを信じ。また稀にはその眞ならぬ物なることを悟りたる者もある樣なれど。夫らは又かの負じ魂にこれを守て。俗にいふ。臭い物へ蓋をするやうに之を取繕ひ。彼經どもの。とりどりに。有といひ。無といひ。諸法實相といひ。祕密といひ。彼是その經々を作れる者の。思ひ思ひに云たる說どもを。右諸宗を始めたる祖師等が。おのが心に叶たる經に就て宗旨の本意を立たるに依て。右の如く諸宗に成たるものでござる。然れども。こゝに笑しきことのあるは。かやうに諸宗に分つて。各々其立たる趣意が。いかう違ふやうに見え。思はるゝけれども。夫は末のいさかひ。枝葉の論ばかりが。ちがふので。其おんづまり。極意の所へゆくと。諸宗がみな一つ意に歸して。すでに申たる釋伽經の旨。すなはち彼經の文に。即一切法。唯

一眞心。一念不生。即是佛。いふことに因て立たる。禪宗の宗祖たる。だるまが。謂ゆる以心傳心。不立文字。直指人心。見性成佛といふ。見性治心と云の說にしめらるゝでござる。夫は諸宗を。一々申すもいらぬこと故。そのうち世に多く有て。其宗の旨を人のよく知てをる。眞言。天臺。淨土。この三つの宗旨でいはふならば。まつ眞言祕密の宗旨の極意は。先夜も申す通り。かのいはゆる光明眞言。をん。あぼきや。べいろしやなふ。まかぼだら。まに。はんどま。じんばら。はらばりたや。うん。といふ陀羅尼を唱へて。一切智を得るといふが極意でござる。これは天竺の辭のまゝで翻譯せず。かの宗旨では此眞言の訣をとかず。祕密にして。決して其わけを傳へぬ故。かの宗を眞言祕密の宗といひ。また密宗とも云でござる。但し彼の宗の法師どもは決して人に傳へず。祕していはずとも。この方も限があるゆゑ。天竺の詞じやと云て。さう分らぬ訣でもないから。彼の宗の者へ對しては氣の毒ながら。其訣をあらく申す。まづをんと云は歸命といふの義。あぼきやといふは。不空と云のこゝろ。べいろしやなふと云は。びるしやなといふこと。同じことで翻譯すれば光明遍照といふこと。また大日と云義にもなります。またまかぼだらと云は。決定と云の意。まにといふは。如意といふの義。はんどまといふは。蓮花と云こゝろ。じんばらといふは光明といふの義。はらばりたやと云は。うつると訓む。轉字の意。うんと云は菩提心といふの義でござる。まづかやうに一々の天竺詞へ字を充ておいて。扨これを漢文に作つて見ると。歸命光明遍照大日。決定不空。如意蓮華光明。轉菩提心。と云ことになるでござる。かやう致すことを翻譯といふでござる。この心は何の事もなく。大日佛を一心に信仰すれば。其のしるし決定として空からず。意ふがまゝに。一切のこと成就して。蓮華の臺に坐して。光明を發して菩提心に轉ずると云のこゝろでござる。轉菩提心とは。すなはち佛を成して。即身成佛すると云ことでござる。さて眞言僧のいふことに。この光明眞言をつゞむれば。あうの二字につゞまる。其あうの二字があの一字に切るといひますが。此も大造誂することながら。只かやうばかり云ては。其つゞまると云わけは。どうしたことか。

知れぬやうなれども。是は凡て音と云ものは。あが始りで。そのあといふ。聲は咽の眞中から。外へさはらず。まん丸に成て出る音で。口を大きく開かねば出ぬ聲ゆゑに。これを開音と云でござる。扨その咽より出る音を。口をすぼめ合せて云時は。うとなる。夫れ故このうと云ふ音を。合音といふ。なぜなれば。脣を合せねば。いへぬ音じやに依てのことでござる。扨ものいふには。此口を開くと合せるとで。出來るもの故。右の光明陀羅尼を唱へるにも。口を開き。口を合せていひ。言をなすに依て。夫をつゞむれば。口をひらいた。あの音と。口をすぼめたうの音とが。本じやに依て。此あうの二字に。約ると云つたものでござる。又其のあうの二音が。あの一字に。つゞまるといふ故は。すべて諸の音は盡くあが始りで。其あが始りじやと申す故は。音は咽より出るもの故。其の咽より出る始めは。あの音ならでは出ず。これは各々呼試みても知るがよいでござる。さて其の咽より出るあの音が。脣。舌。齒。喉。牙と。かやうに口の内こゝかしこへ觸て。諸の音がこゝで出來る。その一つ二つを申さうならば。まみむめも。

これを脣の音と云。なぜなれば。脣で云ふからのことでござる。らりるれろ。これを舌音と云。なぜなれば舌で云からのことでござる。先かやうの訣じやが。其本の音の出所はといへば。咽から出るあの音が本じやに依て。何の音でも。其本はみなあの字に歸するわけでござる。夫れ故このあと云音を。母音といふ。夫は此あの音から。諸音の出來る所が。丁ど母の子を生やうじやに依て。申した物でござる。眞言僧の申すあうんが。あの一字に約まると云も。この訣でござる。然れば光明眞言に限つて。かやうの約まるやうに申すのは。愚なことでござる。なぜなれば。諸々の音と云ふものは。右申す通りのわけ故。ちちんぷい〳〵みよのみたからと云ても。池のごんがめすつぽんといふても。何の詞でも本の母たる。あの音へ歸するは同じことでござる。夫をこの眞言に限つたことのやうに云て人をおどすが。眞言僧。それに怖されて。眞にさうかと思ふのは。音韻のわけをしらぬからのことでござる。此方は其の手じやいかんでござる。扨この眞言を唱へ。あの字を觀じて坐禪するのを。眞言宗の阿字觀と云。さやうに阿字觀

坐禪するは。何の爲じやと云に。かの毘盧舍那佛。すなはち大日を。感得せんが爲でござる。然らば其の大日と云者は。どこに居てどうした物じやと云に。すなはち坐禪を致し。眼耳鼻舌心意の六根を清淨にして。自心をさとり。發明し。みがき出したる。其自の心を毘盧舍那佛と云でござる。その毘盧舍那といふ言は。右申す通り。光明遍照と云ことになる。又大日とも云義となるわけは。光明が遍く照す所が。ちやうど日輪の。世間を普く照すやうな物故。大日と云義にもなるでござる。但し光明の普く照すといへばとて。悟れば其骸が。さやうに光ると云わけではない。自心を知て大智を得るに依て。何事にもあまねく行きわたツて。明かになるといふ心の德をほめて申したもので。其德に至ツた所を。菩提心を得たるとも。佛に成ツたとも云でござる。すなはち大日經に。菩提謂知自心といひ。金剛頂經には。一切衆生。本有薩埵。爲貪瞋癡煩惱所縛。故輪廻六趣といひ。猶この外にも。かやうの類の語が多く見えて。かつ金壺集と云物などにも。それ佛法遙にあらず。心中にして即ち近し。淨土外になし。身をすてゝ何にか求んと云ひ。又この眞言を。さなへる清淨心が。即佛即淨土なり。かならず外に求むべからず。唯心の彌陀。己身の淨土と云は。豈これにあらずや。とあるが。これ座禪と同じことなり。此はその宗旨の僧の書た物ゆゑ。別して篤胤が申すことの證になるでござる。さてこゝに禪宗の本旨たる。直指人心。見性成佛と云ふ意の。諸々の經に見えたる文を。一つ二つ言はゞ。まづ華嚴經云。遍諸十方求成佛。不知身心是佛。般若經云。知我心者即身成佛。又云。於內外中間莫散亂。遺教經云。縱此心者。喪人善事。制之一處。無事不辦。法華經云。唯佛與佛乃能究盡諸法實相。あみだ經疏の三の巻に。實相者。開念自心天眞之佛云々とあり。彌陀經云。執持名號。一心不亂。一心不亂即是爲一經要旨云々。此一心即達磨直指之禪といふ。その抄には。一心者。專使正境也。禪不亂。生生妄念也。大日經云。云何菩提。謂如實知自心。云々などが有て。これらみな。直指人心。見性成佛の心なり。さて禪宗に。みなとらるゝこゝは。先どうした訣じやといふに。天竺には。かの佛法より。外道とさした

る婆羅門の輩が。唱へ來たる道が有て。其道の趣意が。元來治心の教でござる。所へ釋迦が出て。其いひぐさこそ大造なれども。こりやみな先の婆羅門を。押付ようが爲に云たことでござる。そりや謂ゆる方便。おのれが修して人にも勸める所は。やつぱり治心の修行でござる。なぜと云に。まづほとけといふは、佛の字の和訓のやうに人は思つて居るけれども。佛といひ。又ふとと云と同じことで。それへ。ケの字を添て云ふばかり。やつぱり天竺の語で。正しくは佛陀と云べきことでござる。夫を翻譯すれば。さとりといふ覺の字の心となる。さすれば天竺の佛。また。ふと。また。ほとけ。といふ語は。さとッた人と云ふことでござる。夫は翻譯名義集と云物に。佛陀。此云㆓知者覺者㆒とあるでござる。其さとッた人と成るには。どふ修行すると云に。心をみがき上げねばならぬ。其のみがき方は。といへば。心を治めて。見性するのが修行でござる。見性といへば。何か。むづかしさうに聞ゆるけれども。何のこともなく。性を見つけると云ことで。其性の字は。中庸に。天の命これを性と云とある性の字で。御國の訓を付

るときは。うまれつきといふ語でござる。其生れつき則性と云ものは。中庸にある通り。あまつかみ則ち皇産靈神様が。人のからだの出來ると一つに。賦りつけて下された物で。削るにも削られず。洗つても。おちぬといふ。人の眞心でござる。それを死んだ上でほとけと云ふと思つては。大きに違ふ。迷はぬやうに爲べき事でござる。夫れゆゑ漢人がこの字を製るにも。心と云ふ字を偏にして。生れるといふ字を。つくりに付た物でござる。夫、其生れついたる眞の心と云ものは。どんな物じやと云に。親を敬ひ。妻子をめぐみ。富貴をねがひ。惡きをいやがり。善きを好むのが則ち性で。人の眞の心。これに反してをるならば。そりや變と云もので。常に違つてをるから。人の道とは言れませぬ。扨かやうに。まづ性の字の字義を穿鑿しつめ。また佛といふ天竺語が。さとりと云覺の字の義じやと云ことを知ッて。そこで見性成佛と云語を解して見ると。なんと削つてもけづれぬのが性で人間の眞の心じやと云物を見つけて。そこを明らめたのが。さとつた人で。則ち佛じやと云の心でござる。又そこを。さやうに見さるのは。小刀細

工の理屈を云た書では。しれず。直に人の心を的にして考へねば。知れず。得られぬこと故。こゝが則ち不立文字直指人心といふ語の所でござる。この不立文字の事も。諸宗で彼此申すけれども。これは達磨もしつかりと諸經の意を得たる上で申したことで。夫を一二申さば。法華經に。諸法寂滅。相不可以言宣といひ。大般若經には。第一義無有文字と云たこともある。かやうの文字が。また〳〵有るから。どうも達磨の語は。諸宗からは破られぬ訣でござる。さて禪家の立言したる。不立文字。直指人心。見性成佛といふの義をといて見ると。此の如くおもしろく。眞の道を修行する。意味合にも叶つてをるが。其立言の面白いばかりで。既にかやうの言を立そめたる達磨を始め。また元祖と仰ぐ釋迦法師。其外の名僧智識とよばれた程の僧ども。誰一人として。其行は。この通りではない。なぜと云に見性成佛したと云ならば。まづ僧に成ては相すまず。妻子をもたず。親を捨たが相すまず。汚い物を捨つて著たり。乞食をするのが氣に入らず。其わけは。彼らがいふ。直指人心の語の通り。直に人の心を的

にして考へ。尋ねずとも覺るのが。これが眞のさとりと云もの。此を佛語でいはふならば。直指人心。見性成佛でござる。若これに反してをることは。そりや。さとりでも何でもない。然るを世の禪學者。道學者など云輩が。其生れつきの心。即いはゆる性に。親妻子を忌嫌つて。きれいな物より穢れたものと云やうな。ねぢけ心が元から有らうか。こりや十人が十人ながら。ありやすまい。人に无ければ。釋迦も達磨も。そんな心は无い筈じやが。なんと其生れもつかず。尋ねた所が。有もせぬ。ねぢけ事を無理にやつて。見性したと言れうか。成佛たといはれうか。いや中々以てさうはいはさぬ。釋迦や達磨は。見性もせねば。さとりもせぬ。其見性した。悟つたと。思つて居たのは。其の生れもつかぬ。ねぢけごとを考へつけ。夫をば無理に。強てやつてゐたのを。見性した。成佛したと。心得た物でござる。こは眞の見性。まことの悟と云物ではなくて。不見性。不成佛と云物じや。そんなら其眞のさとりと云物は。ごふした物じやと云に。かの石の上に居つたり。壁に向つて瞑んでゐたりや。何かをして六年九年苦ま

ずと。今きいて今わかり。今やつて今出來る。一向無造作なものは。此さとりでござる。夫は何の事もなく人間の生れつきすなはち謂ゆる。それが性で。夫に反してをる物とを。分別しわけて。親を慕ひ。妻子を慈み。彼七情とかいふ。生れつきの眞心も。其程々に動くのが。こりや人間の當然と云ことを見つけるのが。即ち見性。其の親を敬ふ心を以て君につかへ。妻子をめぐむ心を。他へ及ぼして人と交はり。奴僕を憐み。かの七情といふまごゝろを。横さの道へ蹈さぬやうに。しやんと明らめ。おぼえるのが此が。即ち眞のさとりと云もの。これが眞の道といふ物でござる。釋迦や。達磨が。やつた所は。これとは反してをるから。悟りでもなければ。道でもない。みな彼奴らが勉めてこれをやり。夫をさとりと云ひふらして。後世までを惑はしたのじや。若又きやつらが。實以て。其底の心から情慾を離れ。親妻子を何とも思はず。きたない物や。貧窮がすきで有たと云ふならば。そりや眞の道。眞の心と反むいて居るから。則ち變と云もので。常を以ては語られませぬ。いはゞ人にして人にあらず。彼奴が謂ゆる。人非人じやといへば。きやつを贔負の輩のいふこともよく知れてゐる。佛は出世間。出三界といふて。心も骸も。此の世の天地の外へ出してをる故。とんと別な物じや。夫故この世の神の例や。此世の凡人の上を以て。云べきことでは无いなぞと云が。夫ではいよいよ佛といふ者は。此世の人間はづれに違ひない。夫を此の世の人間へ弘めるは。何のたはわざじや。出三界の出世のと。大きな事を云たればとて。此天地の間に生れきては。此天地の神の支配は脱られず。夫ゆゑ此の世の人の心もなくならぬ。夫をなくなつた顔に。ばけてゐるのが佛法じや。そりや。これを始めた。釋迦さへ。さうだ愛惜と云て。愛したり。にくんだりする心を。止めよと云たけれども。己が道の外なるを憎み卑しめ。妻も三人。子も三人あつたが。これが愛惜でなくて何じや。愛惜が人の情の元だから。外もとんと。今の人間と。少しも異つたことはなく。年たけたれば皺がよつたり。死ぬ時もいくぢがなくなり。骸が痛いの。水がのみたいのと。哀な樣に云たわサ。鈴の屋の翁の歌に。「事しあればうれし悲しと時々に。動くこそ人の眞心。又「動くこ

そ人の眞心動かずと。云ひてほこらふ人は石木か。と詠れたるを能思ふがよいでござる。然に今の世にも。禪學者じやの。道學者じやの。と云輩が。かた様の訣をば。しりも致さず。胸の惡くなることばかり行てゐる。これは年頃日ごろ。うるさく思つて居たこと故。今日はよき序だから申しまするが。この輩。佛の眞似して。心法悟道と云ことを旨と致し。或如意また拂子など云を。おのが居間などに飾り。はしやにがまへなどして。わかりもせぬに。佛經などをよみ。悟道に入て。天地の氣と一に成ツたとか云て。うれしく悲しい事が有ても。夫をさうとも思はぬ顔に見せ。兎角世人を衆生凡夫と見下して。何事も。命もさツぱり惜くないやうな顔をしてゐるが。此らは。うそな證據には。煩ふとやつぱり醫者にかゝり。又中には悟りさへすれば。藥は。のまいでも。病がなほるなどゝ云てゐる者もあるが。此等は密に藥をのむと見えるでござる。また元より悟ツたつらで。實は一かど暮して居ながら。乞食の眞似をして。物もらツて歩いたり。してとかく世人を衆生凡夫と見おろして。何事も心法悟道にいひ紛らして。放屁のやうな理屈をつけ。夫でも少し風雅の情の有げに。もてなして。腰折歌や。發句ぐらゐ。又は悟道まじくらの大口漢文などを書き散し。月花を愛たる歌文にも。例の心法悟道の意をまじへ。悟りがましく人にもほこり。物に執著せぬと云が。きつい自慢で。たとへば月花を見ても。ながしめに見て。よい花じや。よい月じや。ぐらゐに云ておくでござる。花のうるはしいに目がつくならば。夫より女の色香をば。なほ見そうな物じやが。夫は一向に見ぬ顔をしてゐるでござる。また中には。旨い物も旨しとはいはず。夫は底からさうかと思へば。是は拙者が子供の時に。人とたわむれに。川柳の口まねを申したことでござる。それは。「悟道者もから瓜よりは鰻くひ。なせなれば。心法悟道に入れば。愛憎もなくなると云事だから。さうは有そもない物じやが。うであげた冬瓜よりは。鰻の方をたんとくふでござる。さすれば旨いと。うまくないが分ると見えるでござる。又此輩の。死ぬ時などが笑しいでござる。大かたは。日頃のおばけをこゝでは是非あらはすが。中には死ぬまで化てゐる者もあり。また此輩死ぬ時には。辭世

とか云て。悟りくさい事を。發句か何かて。是非いはねばならぬと。究たうちが。をかしいでござる。夫は人にしらさず。かねて作つておいて。今わのきはに今作つた顔で人に見せる。夫ゆゑ。その悟道先生が。まゝ頓死などをしても。跡で何かを片づけると。料紙の箱か。紙入に夫があるから。さんと辭世にさし支がない。さあ死んで後は。同腹中のおばけであひが寄て。わる口にいへば。嘔吐を發するやうなことどもを。傳に作つて彫りけるまづ禪學者道學者など云者は。此くらゐな物でござる。然れども。何か。ちよこざいに。しやべるもの故。とかく彼等が云ことをば。人は眞のことかと思つて。信ずるものじやが。どうぞ彼奴らが云ことをば。たえて取上ぬやうにしたい物でござる。實の所は彼等の學問と云ものは。博く書物をよんで。眞のことを知る程の働もなく。然れども少しは。生ちよこざいが有る故に。ちつとばかり見かぢり。聞はつツて。そこで右の通りの。へんな眞似をして。悟りぐさいことでも云てゐると。俗人は驚くからすることでござる。それ故。此輩は。まことの學問でもした人に。きめられる時のいひ遁れに。禪學ではいはゆる不立文字といふ言と。孟子が云た。盡く書を信ぜば。書なきにしかずといふ言などをば。よく記憶して。何ぞといふと。此をいひ出して逃るものでござる。さて佛法の趣。釋迦の教と云ものは。此通り。人の眞の性に戻つてゐること故。其弟子なりし羅漢どもですら。かの阿難を始め。女犯などをやつた者が大ぶある。人情に背いてゐる證據には。此の間申したる通り。釋迦の死んだと聞くと。直に其弟子どもが。これからは。この方を訶制する人がなくて。氣らくじやと云て。賀びあふた程のこと。夫故今の坊主どもなどは。女犯をやらぬものは。とんとあるまい。こりや顔に印のないこと故。しれぬが。位高き僧等の。かほよき小性をおいて。男色をさるゝを見ても。その以下の坊主どもは。こそ〳〵女犯をやることが能く知れるでござる。今の世では。僧と男色をば。かまはぬやうに爲てあるけれども。色にそみ。煩惱のおこる心は同じことだ。釋迦が男色は苦うないと云たことは。何の經にも見えはせぬ。今を去ること十二三年以前に。江戸遊所で。坊主を。たんとお捕なされて。ほうづきをから

げたやうに。日本橋へ曬されたことが有たが。其時は拙者もいまだ御國學などを。さしも委くはしらぬ時で。扨々にくき坊主どもかな。などゝいひつゝ見たが。其後で。一人の士が。いまだ我が古の眞の道も地におちぬ。有がたいことじやと云ひましたが。其時は何の心もなく聞てゐたが。今思へば云々云ふわけだ扨こそ親鸞などはこゝを悟つて。肉食妻帶の宗旨を。工夫したる事と見えるでござる。何はともあれ。人の眞の道をたどりたいと思ふ人は。佛法に迷はぬやうに致したいものでござる。守屋大連の語に。何背ニ國神ヲ敬ハム他神ヲ也。といはれたること。また鈴屋の翁の。「いつくべき神等おきて外國の。けしき神をらいつく諸人。と詠れたるとを。忘れぬやうに致したい物でござる。然れども。こゝに心得べきことは。今かやうに天下にひろがツて。彼切支丹のさばき以來。この坊主どもに宗旨を改めさせらるゝ事と也。また死たるときは。僧が來て改たむるも。變死を御吟味なさらんが爲で今は上よりの御定めとなりてをること故。如何程いやに思へばとて。こりやどうもならぬこと。また先祖の墓をも守らせおくこと故。其心しらびをして。其分相應に。坊主をも扱ふべきこと只々申したる事どもは。人の惑ひをさくばかり。迷はぬやうにと申すことでござる。鈴の屋の翁の常にいはれますには。學問するは道を明らめるので。努々これは道ならぬ事じやなど云て上よりの御定をもどくと云すぢでは无いとあれやこれやの書に記しておかれ。歌にも。「かもかくも時の御令にそむかぬぞ。神の眞の道には有ける。また「時々の御法令も神の時々の。御命にしあればいかで違はん。また「今の世は今の御のりを畏みて。異しき行なひ行ふなゆめ。などゝも詠でおかれたでござる。

出定笑語附錄序

世に何の道。くれの道とて。言はやす道々の多かる中に。佛の道てふ道は。普く世に弘ごりては有れど。甚も〳〵拙く怪き道なる事は。吾が師伊吹舍大人の。出定笑語ちふ書を著して。悉く說諭されたるが如し。かくて此書はしも。其笑語に泄たる事をら。時によりをりに臨みて。何くれと講諭されたる。其書とめ等の數あるを拾ひ集め。殊に親鸞日蓮の二派は。同く佛法と稱へる中にも。宗外と爲たる程の邪宗なる事をし。詳に辨へ給へるを合せて。かく三卷となし。即て笑語の附錄とはなしたるなり。其講說の珍たき事は。讀見て後に覺るべし。故いさゝか此由を記して。見む人の便としつ。かく云者は。下總人野口晉森。平山光長らなり。時は文化十四年と云年の。正月もちの日。

出定笑語附錄一之卷

平田先生講說　　門人等集記

〇門人等云く。此卷は師の佛道に關れる事等を。時々に講聞せ給へる說。また其趣を。自から書とめ置れたるも有り。また我々の聞書ども〻多かるを。取集めて記せるなり。然れば引用の說ども。其書名の出ざるもありまた謂ゆる。次第不同なることも少からねど。強ては改めず。其は師に取ては。著述と云に足らざる物なればなり。さて本編（出定笑語）に見えたるは。大抵除きたれど。その說の詳略に依て。重ね擧たるも有り。斯くて下に記せる。一向宗の論と。次卷なる日蓮宗の辨とは。前に玉襷に附て。神敵二宗論と名け置かれたるを。佛道の緣に因りて。この出定笑語の附錄とは爲したるなり。見む人この旨を心得てよ。

松下郡高が權衡錄に。朝廷をすら。欺き奉りたる程の僧どもゆゑ。古への武士は。なほ出家に誑されたることが多く。夫故當代の古實諸禮家。軍家者流に相傳する。旗。幕。采配。陣鞭。鞢。母衣。團扇等

の武器にさへ。不動愛染明王。大日等の梵字を書き。或は金胎兩部の說を用ひ。佛語を引て口傳としたることの多いは。苦々しいことぢや。わが神國の武器に不動愛染の梵字が。何の益に立うぞ。予連年軍學に眼をさらし。武術に心身を勞すれども。更に佛語梵字の。益あることを考へず。然れども先輩の致し置いたることぢやに依て。わが門弟を敎ふるにも。是を改めずして措くなれども。弟子の輩に。是を尋ねられては。面目ないことぢやと云ひ置たが。是らは自分の流義の。化の皮を云ひ顯はして。尤な云ひ分でござる。何のこともなく。古への武士は。弓馬の道に隙なく。文を學ぶの暇なく。文盲不才は。亂世の武士の常ぢやに依て。出家に便りて物を探ね。其流義々々の傳書をも作りたる事故に。僧どもは。得たり賢しと。その己れが知らぬことを。佛法に引合せて。耳とりて鼻かむやうな理窟をつけて。武士を欺き。傳書を拵へて。授けたものでござる。其內眞言の意味と。禪宗の意味とが多いのは。かの兩宗の世間に弘く行はれたる故でござる。また凡ての技藝の傳書は。多く北條足利時代に出來たものと見えて。かの代の時代は。禪學さかりに行はれたものなれば。僧ならぬ者も。大かたは禪氣で有たもの故。そこで殘らず禪學くさく。夫は香花茶の湯などの爲ざまも。盡く禪家の方から出たことで。今の世の住居に。玄關。書院。床間のかざりなどもなみ。北條足利時代の。禪學の行はれた頃のかまへでござる。斯やうのことは。なほ委くも云ひたいが。演說が橫へ這入るに依て。是は序てが有たら委く云ひませう。

○また一つ。豫て斷つておかねばならぬ事がある。夫は今の俗の人は。けしからず佛の上をば。丁寧にもの云て。阿彌陀でも宜いことに。御阿彌陀樣と云ひ。釋迦と云てもよいことを。御釋迦樣と。御の字と樣の字とをつけて。云はねばならぬことのやうに。心得て居る所を。拙者の講說に。御の字も樣の字も付けず。只に釋迦が。どうしてかうしてと云をば。日頃渠れを尊く思つて居る人々は。いな事にも思ひ。腹を立つ人も有ませうが。余にはどうも。樣の字をつけて云へぬ譯がある。其わけと云は。釋迦は天竺と云ふ蠻國の中の。一の小き國王の子で有たが。佛法を弘めて。大さうには成たれども。この皇國には。

朝廷の御定めが有て。それはきツと。勅撰の御書に見えて有る。其趣きは。此御國に生れては。この御國の君をのみ尊み奉りて。外國の王どもなどに。心を寄せ尊むことなどは致すな。然やう有ては。己が君をさし置て。他の君を尊むので。二心するのぢやに依て。謀反も同じことぢやから。然やうの者は。斬て捨よとの御定めでござる。是は斯やう有べき事は。この心が募つては。譬ば儒者はやみくもに。赤縣ばかりを尊く思つて居り。また佛者はめツたに。天竺贔負になツて居るから。若も。赤縣や天竺などより攻て來たる時。その贔負する輩が。案内でも爲やうかとの。御心しらびを以て。斯やうに御定めなされたものでござる。また佛道に。はまりこんで居る者などは。その贔負に思ひ詰たる心からは。其が爲に。命を捨た者も。昔からまゝ有から手引を爲まいものでもないでござる。夫はとも有れ。右の如くの。朝廷の御定めを承知して居るに依て。此の方はどうも。敬ひ言には云へぬでござる。なぜと云に。人に眞の道を解んとする。此方ぢやに依て。正しく朝廷の御律に背くと知つゝ。吾から道を亂すやうなことはならぬでござる。ぢやに依て。朝廷の御定めに相反かぬ樣に。敬ひ言ばには云はれず。又此方は素より。皇國に生れたる。謂ゆる神國の神民ぢやに依て。少かも外國の。佛の恩になりたることも無く。又どう系圖を考へても。緣もゆかりも无きこと故に。敬ひ言ばには云はぬでござる。と云たらば。そんなら上で御崇敬なされて。世々の天皇等にも。御信じ遊ばし。高き卑しき家々。各々菩提寺を持ち。佛壇も置くが。之はいかになど云ふ人も有ませうが。此訣は佛道の大意を說くしまひの日に云ませう。

○今の世の僧どもは。餘りと云へば。文盲ぢや。夫はたかゞ念佛宗なれば。阿彌陀經を棒よみにすることゝ。其外に立まはる宗儀の和讚とか。おふみとか云くらゐの物を覺えたぐらゐ。また日蓮宗なれば。法花經の棒よみ。その外自我偈と云もの。又かの念佛無間禪天魔の惡口ぐらゐを。かぢりちらして。夫で聞を合せておくばかり。其の上の事は。さしも知らず。こりやわる口ではない。實に相違ないことぢや。外の宗旨の僧どもゝ。大かたそんな者。盡く文盲で。佛法の眞のことはどうして〳〵知りはせぬ。但しか

う云はれては。この群集の中に。日蓮宗も。念佛宗も有うし。また佛書を讀んで居る。素人も有らうから。定めて腹が立う。腹が立なら。余が云ことを能く聞おぼえ。その聞落した事は。いつも云ふ通り。遠慮はないから。此所へ來て聞直し。覺え書にして歸り。その余が云たことを。能く論辨して。余に一句も出させぬやう。大言を云はせぬやうに。論書の上で云ひ詰るが宜い。夫は自力にいかずは。旦那寺の和尚を憑み。夫で足らずは。有とあらゆる。名僧知識の聞えある僧どもを。鉦や大鼓で集めてなりとも。論書を作て云ひ詰るが宜いがサ。そんな僧はとんとない。なぜなれば。余に云ひ勝つほどの。佛學に器量のある僧なら。それは佛道の。眞の處を見つけた人故。ア頼もしいが。佛法の眞意を知ては。あほうらしく。佛道にくッ付ては居られぬ故に。山崎敬義らがやうに。還俗せねばならぬ。なぜに論書を作て。云ひ詰ろと云ぞならば。口でばかり論ずることは。かの水に數かく譬の如く。云たことも。云はぬになるやうな紛れもあり。また俗にも云ふ如く。聲の高い方が。勝つやうにも聞えて。慥でなし。また騒がしくもある。夫故論書をかいて。云詰よと云のでござる。論書にかいて遺されては。又その返辭の論書を書かねばならぬから。めんどうでは有るけれども。此方も道の爲じやに依て。負た方で。弟子になる契約なら。片のつくまで。幾度も返辭を書かうが。そんなに余を。へこまさるやうな氣性ものは。めッたに有るまい。只ぶつ〳〵内證で小言を云ふぐらゐのことで有らう。

〇かの古き口合に。思ひきや。出家は人の捨りもの。と云た通り。今の出家は。大概親兄弟が貧窮で。養ふことがならぬか。扨はその親が盗をするか。火を放るか。何ぞ惡事をして。御仕置にあッた者の子供が。しやうことなしに。僧になるので。筋目正しき。公家武家の子は。百人に五人か三人ぐらゐぢやに依て。只々卑きことのみ聞おぼえ。小僧の時は師の僧に。なぐさまれるばかり。何事も不自由に生立。やう〳〵一寺の和尚に成て。少しく小金でも。立まはるやうになると。本が賤しく生立たる故。金銀を甚大切の物と心得て。色々に工夫して。利欲を考へ。大寺では手代などを置て貸金を致し。佛道の三衣は

營ながら。心は商人よりも汚く。又その掠め取たる物をつかふとては。かこひ女を致し。其の外くさぐさ。淫犯の行をして。近くは谷中の延命寺。下谷の正宗寺。天德寺などか。所行を見るが宜い。但し今の僧が。釋迦の敎と違て。右の如く繁昌を願ひ。女を犯し酒肴を食ひ。また長壽がしたいと思ふなどは。是がこの御國に生れたる。水土自然の所で。斯なければならぬことでござる。夫はこの御國自然の風は。今の身の繁昌。子孫の長久を悅び。長壽を願ひ。萬事賑々しく。物の盛りなるを好み。勇ましき國風で。樂みかりにも無常を觀じ。衰を悅び。寂滅を以て。樂みとするやうな人は。神の御心として。生れ出ぬわけでござる。生れ付に。そんな心の无いものを。佛法の掟で縛り。无いもせぬ佛道根性を。塗つけて置ゆえ。女も嫌ひ酒もいや。肴も否と云て居ること故。畢竟本の生れ付の。御國の心を包みおふせず。しくじるので。實は尤なことでござる。こゝらを考へても。佛法の。御國の自然。則神の御心に背向て居ることも。この御國に不相應なることも知るがよい。相應せぬに依て。古への人が信せぬ。かの司馬達等が渡り參つて。大和の國。坂田の原と云に草堂をむすび。佛像を安置いたして居たる處が。一人も信ずる者なく。異域の神を祀るとて。皆あざめいやしめた。と申すことがある。そこを行基。傳敎。弘法などが工夫して。御國の神々を。天竺の佛に混じ。本地垂跡と云ことを始て。八幡宮の本地は阿彌陀如來。或は釋迦と云春日の四社は。釋迦。藥師。地藏。觀音ぢやなどゝ。仰山な山言を云て。人を欺き。寂滅爲樂と立たる佛どもに。福祿を祈り。壽命を願ひ。病を祈禱することを始め。近くは日蓮僧が。三十番神と云ふことを云ひ出して。神々へ一日々々の當番を配りつけて。其日を守護するなどゝ。根も葉もない僞を云て。愚昧な者を惑はし。何も己が宗旨ですむやうに。否でも應でも。歸依させんとの工ぢやが。是も惡口にいへば。佛の散物ばかりでは。とり足らぬに依て。神の散物までを。わが宗旨へ引とらう爲のわざと見える。吾が御國の神が。日を定め月を極めて。番をすると云ことは。正しき古書に。とんと无いことでござる。神々の。この御國を守り。人を御惠みなさるゝことは。當番非番の差別なく。譬ば。天つ

日の至らぬ限なく。御照しなさるゝと異りはない。是は松下も云た通り。御國の神々。寄合辻番の日雇のやうに。今日は某が當番。明日は誰が非番と定め。非番の日は。何事が出來ても搆はぬ。と云やうな。鄙劣なる番わりをなされたと云ことは。とんとないでござる。夫のみならず。何の比に始めたかは知らねども。子安の觀音とか云て。赤子を抱て居る像を作り。腹帶の地藏などゝ名けて。寂滅爲樂の世話役に拵へ。觀音や地藏を。長生爲樂の御國風に拵へて。愚婆や賤婦。おろかな者を欺いて。散物を貪らむと云の工夫ぢや。觀音經の文中に。產婦の世話をやかうとも。とり揚をしやうとも。云たことはとんと見えず。また地藏なども。產婦の腹帶を世話するいはれも諸々の佛經に无いことで。一體腹帶は。大かたの人も知て居る通り。神功皇后樣の。三韓を御征伐あそばす時に。應神天皇樣を。御身に宿して居らせられたる御故。その御退治の濟で。御歸國あるまで。御產の延る爲とて。御腹帶を遊ばしたと云が本で。なほ外に謂も有て。是は御國の產婦にかぎることで。天竺の叔原などの。夢にも知たことぢやないでござる。なほ腹帶の事には。世人の心得に云べきことも大分あるが。こゝで云ては。演說が横へはいるに依て。夫は醫道の大意を說く砌り。委く云ひませう。然るを地藏や。觀音が。夫をも世話をやくと云が僞なことも。夫を信じて居る輩が。僧に一杯くはせられて。居ることをも知るが宜い。一體世の人は。猫魔や狐ばかりが。人を誑すと思て居るが。僧どもの誑しは。狐や狸のやうなことではないから。よく氣を付るが宜い。なぜといふに。狐や狸の人を誑すのは。高が糞つぼを。居風呂桶と見せて。人をはめたり。赤子の死んだのを。鴨と見せて。人に喰せるぐらゐのことで。きついことはない。それも講だてをせねば。誑しもせぬが。僧の欺しにはまつたのは。百貫目。二百貫目の。身上ありたけをうちこんで。くり〳〵僧に化り。悟つた面で。乞食をするを能いことにおもひ。甚しきは。命さへすてたものも。むかしから幾等もある。それはみな右の通りに仕かけて。世人を欺して信を發させ。その信仰の發つた處で。無常の心を勸めこみ此世は假で。來世が大事だと云て。本願抄のやうな物や。因果の道理などを云

ひ聞かせ。かの白骨のおふみと云ふ類の。哀れッぽいことを。淚交りに說きかせ。寺へ多分納物を爲れば。爲たゞけ。極樂へ行て。居所も結構な所に居らるゝやうに。勸こむ故。身上ありたけはおろかなこと。旣に世の人も。能く知て居る事ぢやが。享保時分のことだか。一向宗の寺を建立するとき。棟木に爲やうとて。ある神社の神木を。貰ひたいと云た處が。くれぬ故。棟木の大木にこまッた處が。日比欺しこまれて居る夫婦の者が。その木をくれろと云ふ書置き。頭に懸けて。かの神木へ上て。首をくゝッて死たる故。是非なくその穢た木を。くれてやッたと云ふことが。今も人の口に殘て居て。一向宗の輩が。きつく自慢をすることだが。こんな奴等は。串にも箸にもかゝらず。云にも足らぬことぢやが。佛法に誑られて居る者どもは。こんな痴鈍を。きつく感心して居るが可笑いでござる。此方のをかしいばかりでなく。そんな心に勸めこんで僧どもゝ。やッぱり蔭では舌を出して笑て居る。こゝらがとんと違ひのない事で。丁ど狸が人を糞壺へはめて。腹鼓を打て悦んで居ると同じ趣でござる。こんなに云と。首たけ佛法にはまッて居る人々は。腹を立が。それは怪談本にある。彌二と云ふ田舍者の。狐にだまされ。尿つぼへ這入て。居風呂と心得。顏やつむりを洗て居るを。百姓どもが。夫は尿つぼだと云て。引上げやうとしたれば。嚴う腹を立たやうなもので。此方も世の佛好な輩が。佛法の尿壺へはまりこんで。あぷ〳〵して居るが。氣の毒さにどうぞ引上て。ちッとは。實のことでもきかせたい。とおもふ信實が餘て。人の氣にさはることも。知りつゝいふから。かならずあしくきゝ取られぬやうにしたいものでござる。

○僧は人をだまして。物を取るはずの役と心得。或は葬禮の布施を取て。己が奢に費し。樂につかふ。誠に胸の塞ることぢや。俗の境界は。心易き者は勿論。少々中惡しき者なりとも。夫を死ねかし。煩へがしとは思はねども。僧は人の憂不幸がなければ。今日暮しのならぬもの故。己が金銀の乏しくなれば。旦那の中に年忌もあれがし。亡者でもあれがしと。念じて居るものじやと。松下が云たは。尤なことぢや。是に付て思へば。まだ非人の方は。僧にまして

居る。なぜと云に。非人は物を貰つて歩行く所は。僧の眞似なれど。吉事凶事ともに。物を貰はんとするから。世間に吉いこともあれがし。と思ふであらうが。僧はとかく。旦家の死ぬを待て居る。是は松下ばかりでもなく。或戯書に。僧等が歳旦連哥なりとて。納所が。「よき旦那死ぬべき春のあした哉。」と云たれば。所化が「霞がくれに人魂が飛ぶ。」と付たぢや。そこで和尚が。「春風に旗天蓋をなびかせて。」と云たと有るが。いかにも是に違ひは有まい。こんな不吉な者を信仰して。我が身に吉きことあれがし。と云の祈禱をたのみ。また長壽を祈つたり何かする世の人の。さて〳〵氣の知れぬうろたへたる事どもでござる。と云たら。それは餘りな惡口と云ものだ。然やうに人を死ねがしと思ふ僧ばかりも有るまい。實に釋迦の敎へを守て居る僧もあるから。夫に賴めば。長壽をも富貴をも。よく祈てくれるなどゝ云でもあらうが。實に釋迦の敎へを守る僧ならば。尙のこと吉いことは祈りはせぬ。夫はなぜと云に。佛法の本意とする處は。前にも云ふ通り。かの寂滅爲樂と云て。死ぬる事を樂みと爲し。此の世を穢土などと心得て居る者が。何の富貴や。長壽を祈る筈がない。若それが。吉いことを祈るなら。夫は釋迦の敎への本意でなく。御國風ぢやに依て。佛衣を著て頭を丸めた。神道者のやうなもので。紛れ者と云ものぢや。能く物を考へて。とても珍たく吉き事の祈禱なら。そんなまぎれ者に賴むことはやめて。眞の道を辨へたる。純粹の御國風な。神職に賴むが宜い。なぜなら。神樣はきつく。頭の丸い者や。佛經が御嫌ひぢやに依て。僧が祈禱したとて。一向に夫知らぬ貌で居らッしやる。唯知らぬ貌して居らッしやるばかりなら宜いが。事に依ると太じき御罰を御當なさるゝことも有うでござる。但し口巧者な者どもは。僧の祈禱するには。神へは願はず。佛へ賴むと云で有らうが。その佛は。寂滅爲樂と立て置た程のこと故。福祿長壽を祈つては。あの僧めは。吾が寂滅爲樂の敎へを弘めながら。富貴長壽を祈るとは。擽々横道なことを云ふと。咽小言を云て。取り上ぬは知たことぢや。傘屋は雨を悅び。雪踏屋は旱を願ふ如く。眞に釋迦の敎へを守る僧は。寂滅爲樂を本意とする故。長壽や富貴を祈らぬと云を。不審く思ふ者

も有うが。夫に相違のないことは。大德寺の一休和尙や。原の白隱和尙などは。佛法の眞を得たるものなることは。今更云ふまでもないことぢやが。その一休が歌に。「生れては死ぬる也けりおし並て。釋迦も達磨も猫も杓子も」また「世の中は食てはこして寢ておきて。さて其後は死ぬるばかりぞ。」など見え。其外實情を述たること多く。また白隱の所へ。伊勢の山田の子が知てゐる所から。何ぞ此の上もなく。珍たいことを書てくれよと云てやりたれば。白隱が大きく。死と云ふ字を書て。扨それを直に。歌に詠でおこしたを。今以て持て居るが。其歌は。「死ぬることいやなら早う死なしやれよ。一度死れば二度は死なぬに。」と書ておこしたが。これは何と。釋迦の教への。眞を得たる僧の祈りは。此通りぢや。是でも僧に頼んで。其身の不吉を祈るか。此方きつく不吉は嫌ひだが。夫を好な人は。どうでも爲るが宜い。また世の愚人らが。祈禱じやと云て。百萬遍とか云ことを爲るが。これ程蕃何なことは有るまい。なぜなれば。一遍念佛を唱ふれば。何なる惡事災難も。免れると云では無いか。然るを百萬遍とは何ごとだ。せめておまけに。二遍ばかりも唱たら。喧しく无くて。宜さうに思はれる。

〇天竺の僧どもさへ。佛法を見破て。丹霞と云ものは。木佛を扣き碎きて火にくべ。雲門は佛どもを打殺して。犬に食せんと語れるも尤の事ぢや。御國の僧どもは。佛法をだまし貢て。糊口をする故。佛像を打破て。火に投る程の器量はなけれども。内心には其法を信ぜぬに依て。女犯肉食をする。何とそれ口をこすツて居る僧でさへ。信仰せぬ佛法を。俗の身として。逆上るほど信仰するは。何とをかしいことではないか。また僧どもゝ。釋迦の法を說き。愚なる人を勸むれども。魚鳥を食ひ。女房を持たがるを見れば。やはり御國風を羨しく思ふに相違ないでござる。

〇松下も云た如く。佛法ほど不吉なものはなく。この御國の道は。勇義の武氣を本として。萬事淸淨潔白にして。少かも穢のなきを神も歡び。またちかく。今日の上で見ても知れること。人の家に。祝ひ事の有をりは。餅を舂き。または赤飯を蒸し。鱠燒物。魚類を以て神に供へ。家内眷屬うち寄て。酒宴を爲し。

賑々しく謡ひ舞して。神慮を慰さめ奉り。或は婚姻を整へるにも。子孫の繁昌を祝し。子を生では。産土の神へ參らせ。髮置袴著。何事に依らず。珍たきこと丶云へば。神社へ參詣して祝ひを爲す。是はみな神代からの遺風でござる。今の世とても。神國に生れた人ぢやに依て。人氣にとんと替りは无く。一向宗や。日蓮宗などの如く。佛臭い事ばかりを行て居る宗旨の者ですら。右の珍たい座席へ僧を呼で。經を讀せる者もなく。何ほど寂滅を樂とする人でも。我が子を早く殺して。結搆な極樂へ遣たい。と祈る者は有るまいでござる。斯やうに不吉なる法故に。大御神の御前へ。僧尼剃髮の者を御忌なされて。御正面から。拜することを御免しなされず。御鳥居のまへに。御制札がたつて居る。其のふみに。「僧尼山伏法體之輩。自レ此不レ得ニ參入ニ者也。仍廳裁如レ件。」また「念數揭じて佛具を持。異形にて。自レ此內へ致ニ參入ニ間敷きもの也。」とも有り。また齋宮の御忌詞にも。佛を立すくみと云ひ。經文を染紙と云ひ。僧を髮長と云ひ。尼を女髮長など丶云て。忌はしきことは。聞よき詞に云替て。唱へることにて。實にさも有べきことでござる。出家を今も世捨人と云て。世にある人の部に入れず。年の始め。又その外も。凡て祝儀の席に忌嫌ふことは。鄙も都も同じことで。これは云までもないことでござる。

○今日の上を見て。人氣を考ふるに。富貴に暮し子孫の繁昌を願ふ人は誰も妻子を捨て。魚鳥を食はず。僧に化たいと思ふは。甚だ希なことで。大かたは。鰥寡孤獨と云て老て。養ふ子もなく。或は夫に離れ。兄弟におくれ。賴方なき者か。又は片羽病人で。人並の事もならぬか。又は不仕合。不吉。年々に打續くと。彼の無常の心とか云ふ心が起て。そこでくりくりと僧に化て。乞食になりたくなる。是はみな佛法の眞のいはれを知らず。僧どもに。たばかられて居るに依てのことで。根が大和魂の堅まらぬからのことでござる。

○佛道は。いの字も知らぬ老婆賤婦でも。地獄極樂と云を本當に心得て。此世で善を爲れば。來世では浮ぶと云ひ。此世で惡をすれば。來世では那落の底へ沈むと云て。愚な者の耳に入り安い事を作て。導き喩し。殊にいかなる極惡重罪の者たり共。臨終の一

念佛。題目の功力に依ては。其の罪悉く亡びて。極樂に生るゝと敎ふる故に。地獄參りを。實の事と思ふ程の愚人ごもなれば。常に惡事を致しても。罪を作ても。末期に望んで。念佛題目さへ唱へれば。其罪亡びて。佛となると了簡して居るは尤もぢや。然れば。今の世に。後生願ひと云ふ人に。剛欲無道の惡物が多いのは。みな僧ごもの。斯る勸めを致すに依てのことでござる。

○地獄の圖と云物に。罪人を釜いりにしたるなご。種々の仕置が見えるが。これは漢書史を見るに。吳道子が畫初めたる趣だが。いかにもさう思はれることは。鬼がみな虎の皮の褌をしめて居る。されば川柳に。「地獄には虎がしたゝか有ると見え。」と云てある如く。みんな虎の皮だ。然るに其罪人は。みな日本人にちがひない。是に付てまた川柳に。「唐人を入込にせぬ地獄の畵。」とも云てあるが。鬼ばかりは唐から雇ひにでもするものか。ちとをかしな取合せでござる。何れにもも釋迦は素より。天竺人の一向に見たことのないはずの圖ぢや。又寺々に於て。二月十五日に。釋迦の涅槃の圖をかけ。四月八日に。釋迦誕生の灌佛を出して。散物を奪るが。あれは僧の文盲ぢや。夫は釋迦の生れたも死だも。周の代のことぢやに依て。その時分の暦は。冬至を以て正月に配すれば。今の暦の二月八日が誕生で。十二月十五日の入滅ぢや。かやうのこともみな可笑いでござる。

○さて釋迦は神通を得たと云ふが。これはじつは幻術のことだが。その幻術を以て。衆人を惑はせたのぢや。然るにその幻術が。吾が御國までに傳はり。近く寬永正保の頃まで。專らこの術を行ひ。馬を呑み。形を隱し。水に便て龍を出し。平地を海になしたり。なんご。色々の奇恠を致して。世の人を惑はしたる者に。花心居士。陰屋清三郎などゝ云者が有たでござる。是にいかう人が。迷た故に。大猷院殿の御代に此術を嚴しく御停止なされたに依て。今は止んでしまッたでござる。然れども邂逅はある。旣に天明年中の髮切。或は石塔磨きなども是ぢやと云ことでござる。

○御國の僧官の高位なる訣は。恐れながら天子の宮宮樣方　攝家清花の御歷々に御子が外くあれば。外に輕く御片付もなされ難き故。男御子は。南都一乘

院の宮。日光の宮。智恩院の宮。聖護院の宮。妙法院の宮などゝて。御剃髮あそばし。姫御子も。法隆寺の梅の宮。山林の宮。法花寺の宮などゝ稱て。御出家に御成り遊ばし。攝家淸花の御家。其外の公家衆にも。御子大勢あれば。僧正や僧都の寺々にて。御剃髮あることでござる。是を手本にして。賤き者の子供も。僧になれば。親の筋目を用ひず高位高官にも昇進するのでござる。御國に。天子公卿の御子の。出家と云ふ事がなければ。氏无き者の。猥に高位に昇る謂はないと。松下が云ひましたが。實の事でござる。なほ天子公卿の御子等の。御出家あそばすに付ては。深きいはれもあることぢやが。どうも此では申されぬ訣でござる。

○佛書を見るに。此世を穢土と云ひ。火宅と云ひ。來世を淨土と云ひ。極樂と云ふ。また厭離穢土。欣求淨土とも云て有る。此義は。此世の穢土を厭ひ離れて。來世の淨土を求めよと云の意でござる。これ寂滅爲樂と同義で。死ることを樂とすると云ことぢやが。何と否なことではないか。さて佛に成て極樂へ行た上で。また心得て居るべきことがある。夫は松下が云た通り。極樂と云て。立派なる處かと思へば。僅なる蓮の花の中に。ちゞこまッて。合掌して居るは。何ともあぶなき体でござる。この形を以て考ふれば。極樂と云ふ所は。沼か池か。とかく水の中には相違ない。なぜなれば。蓮は山にも里にも生ぬ物で。水草でござる。然れば極樂へ行て。佛になりたいと思ふ人は。第一の修行には水の泳ぎを習ふが宜いでござる。なぜなれば。十劫の歲千固まッたやうに成り。こんな手つきなどをして。蓮花に乘て居ること故。長い中には。欠をすまいものでもなく。又此世に殘て居る人が。噂を爲まいものでもない。さすれば極樂の蓮花の上でも。やはり嚔が出るで有らう。そんな時にもしも蓮花の莖がぐらついて。落まいものでも无から。水を知ぬと。あぶ〳〵して水を吞み。また死んで。ござゑもんに成たときは。どうなる物か。佛に成て後に死だ者の行先は。佛書に未だ見當らぬから。行き所にまごつく道理でござる。此方はそんなあぶない極樂は。きつい嫌ひて。行ぬから極樂のござゑもんになる氣遣ひはないが。極樂ずきな輩は。さぞかし金箔まみれの。水死人になる

だらうと。案じらるゝと云たが。實はそんなものでござる。

○扨これは口がすべツて。つひ佛のことを安く云ひましたが。このお開の中には。定て佛を太じき者に信じて居る衆も有うから。不審う思て。其わけを聞ひ詰めたくも思はれるはず。とかく佛法に惑つて居る人と云ものは。少かたりとも。佛法のことを議すること。主人や親の事などを云はれたよりは。熱くなるものだから。めツたには申さぬが。斯う口がすべツては。彼の濡ぬうちこそ露をも厭へ。もはや爲方がない。麁々その佛經は。佛と云ふ山藥を賣らんとする。能書なるわけを申しませう。但しその委きことは。佛道の講說の時に申さうが。一体は阿彌陀ぢやの。地藏ぢやの。觀音ぢやのと申す者は。元來跡形もなきもので。佛法の極意をつき詰て。穿鑿致せば。人々の心の異名を。假にかく名け設けたものでござる。ぢやに依て驗も報も何もない譯でござる。所をあの如く。金箔まみれの立派に形を作て。愚なる人に。彌阿陀も。地藏も。まツこの如く形が有て。したゝか効能も有る如く思はするは。何んと山賣が。衿の垢を丸めて。金箔を衣にかけ。えんりんのあんかん丹。と名を付て。人を誑かすと。同じ手段では无いか。又その佛經どもは。元より名ばかりで驗もむくいも無ものを。しゝたか効能の有やうに。仰山に書立たは。何と山賣の能書と同じことではないか。このこと手近く有る佛經で。一つ二つ申さうが。まづ淨土宗の三部經と云は。無量壽經。無量壽佛經。觀無量壽經の三つぢやが。この經々に。阿彌陀の功德を美てある。文を少か申さば。光明遍照。十方世界。念佛衆生。攝取不捨とある此の文の意は。阿彌陀佛の功德は。日月の如く。十方世界を照すが如く。行き渡つて居る故に。何處のはて。何なる者も。南無あみだ佛と念佛を唱ふれば。悉く極樂へ迎へて。佛に成し下さると。云の意でござる。また極重惡人。無他方便。唯稱彌陀。得生極樂ともある。この意は。暴虐なる惡行を爲たる者は。罪を蒙るより外に爲方はない。然れども。阿彌陀佛よと念じて其德を稱すれば。すなはち極樂へ往て。佛となる事ができる。と云の意でござる。又觀音の功德を。法華經の普門品に記して。具一切功德。慈眼視衆生。福壽海無量。

と有りますが。此心は佛は一切の功德を具足して居る者ぢやが。其有がたき御眼を以て。衆生を看行はし坐ます故に。一切の衆生が。富貴萬福長壽なること。海の深く底の知れぬが如くぢや。と云ことでござる。また臨刑欲壽終。念彼觀音力。刀尋段々壞。と云ふ文が有ますが。この文の意は。大罪ある者は。上より御仕置になるが。今に斬られて。命の絕んとする時に。かの觀音の利益を被らんことを念願いたせば。その斬らうと爲たる太刀が。寸寸に折れ碎けてしまふと云ふ。意でござる。例の川柳の口吟みに「觀音の功能書は念彼の段。」と申たはこのことでござる。何と效能書はかくの如く。仰山で有ますが。さとんと是は云たりけりで。こんな驗の例がない。と云と。日蓮宗の人などは。いや此方の祖師日蓮は。相模の國の龍の口に於て。土壇に居られ。旣に首を討れんと爲たる時に。太刀取の持た太刀が。ぽき〳〵と折れて助かツたなど丶。まじめに成て云ますが。それは氣の毒なる哉。僧に一杯食はされたので。僧てなきことでござる。それでも日蓮記に記して有る。などゝ云ませうが。夫は後世の僧どもの僞言で。その元は。佛祖統記と云ふ赤縣の佛書に。□□と云者が。日比觀音を信じて居たが。罪を犯して。首を切られやうとしたるときに。太刀が折たと云ふ妄說を取て。源平盛衰記に。主馬判官盛久が事にして記したが。夫を取て。盛久の謠にも作つて有を。日蓮宗の僧どもが盜んで。日蓮の事に作りなしたものでござる。論より證據は。日蓮自分の事を記し置たる文章どもに。さんと記してなく。たゞ引縛りて馬に乘せられ。由井が濱近くの旅宿まで引出されたが其內に免された事ばかり記して有でござる。都て佛者と云者は。今に尻の兀る僞を云て。夫を引むくられても。恥とも思はず。しやアしやアまじ〳〵として居る中にも。日蓮宗の僧が甚しいでござる。近いことは。實に阿彌陀や。觀音に。斯やうに重き罪人をも助くる能が有ならば。僧の御仕置者は。絕て无いはずのことだが。先年寺社御奉行は。板倉周防守殿の勤役中で有たが。吉原や深川で。女犯を致したる僧どもを。晒簗を繫いだやうに。したゝか引括つて。日本橋で御曝なされたことが有る。其れには一向宗。日蓮宗を始め。諸宗の僧が有ましたが。彼れら何れも〳〵

口の内には。阿彌陀や觀音を唱へたには違ひないだが。極重惡人無他方便。念佛衆生攝取不捨とある。阿彌陀如來の効能書の通りに。彼の縛られたる僧共を。阿彌陀が引抱へて。西方淨土へ飛去たと云ふ噂も無し。また火をつける僧もいくらか有て。その御仕置にならんとする時。そこへ觀音が來て。火を消たと云こともない。また日蓮宗には。舊き代より。邪法を行ふ者が多く有て。首を斬れたり。耳鼻を殺れた者もしたゝか有が。罪に一人太刀の折たこともなければ。繩がおのづから解て。駈出したといふ咄しも聞たことがない。是は阿彌陀。觀音の能書ばかりでなく。普賢。文殊。不動。地藏の効能書も。その如くで。つひに經文に有る通りの。驗のあッた例がないでござる。但し經文が僞りで。功能の無は天下の幸ひぢや。なぜと云に。若も本文の如くで有うならば。公儀の御厄介。何程で有ませう。其訣は。いかなる極重惡行を作ても。念佛さへすれば。其の罪の消ると敎ふるは。主弑し。親ころし。火付。盜賊。似せ金つかひ。何に限らず。極重惡行。勝手次第にいたせ。と勸めるも。同じことではないか。然れば。佛と云者は。其罪人の腰押をするも同じことだから。實は犯罪の當人よりも。阿彌陀。觀音など云佛等は大重罪の者でござる。

○京清水の觀音を。惡七兵衞景清が信仰したるに依て。景清が首を刎られんとする時。觀世音がその身代りに立て。其時に首を背向に付けて。鹿相なるものが接だに依て。今に此の觀音を。後から拜ませると云ことぢやが。是らも僧の僞りに相違ない。なぜなれば景清が身代りに立ほどの。神靈ある觀音が。自分の首を接く時に。その接人が。後まへに接を知んで其の通りになッて居て。指圖もせぬと云ことが有るものか。また永觀堂の見かへり本尊とか云て。古へ永觀とか云ふ僧を。呼かへしたるに依て。其なりに佛の首が。今も横に向いて居ると云つて。先年旣に江戸へ持て來て。開帳したことも有たが。是も僧の妄說なること論はないが。何の事もなく。是を作つた佛師の作意か。又は僧が指圖を爲て。風を替て拵へたものに違ひはない。何と永觀々々と云て。振向た程の首が。瘡かきのやうに。本の如くに成らぬと

云ことの有う筈はないことでござる。
○千手觀音と云ふが有るが。實に千手有るは。河内の國葛井の剛林寺にある觀音ばかりだ。と云ことでござる。是に付て。太宰彌右衛門と云儒者の著した。紫芝園漫筆と云ふものに。天和三年の春。右の千手觀音を江戸の護國寺へ持て來て。開帳したる時に。夥しく參詣の有たことを記して。一つの咄を書て有る。夫は一人の鄙き人が。かの像を見て。この觀音は手が千本有て。脚が兩つだが。手に合せては。なせ又このやうに。脚の寡いことぢやと云たれば。觀音が云には。おれは甚だ脚が寡いぢやに依て。脚を求めに。此所へ來たのぢや。もし脚が手の如く。たんと有らうならば。何しにここへ來やうぞ。と云たと云とでござる。是は錢を足と云につけて。太宰が戯れに作つた咄しと見えるが。如何にも面白い。觀音も。釋迦も。阿彌陀も。衆生濟度に。諸國へ開帳に歩行と云は。そりや云ひ立ばかり實は足が欲さに開帳見世を出すのでござる。
○さてまた佛者らの惡説の。世間の大害となることは。これは一席や二席で。申盡されることではないが其うら惡むべきの甚しきは。伊勢の皇大神宮を。出店のやうにまをし觸して。日の神は大日如來ぢやの。奈良の大佛と同物だの。といふことだが。其の説の。由て出たる元を尋ぬれば。師錬と云ふ奸僧がわざでござる。ことに大日と云ふ佛のことは。かの三部の密經に見えたることで。此間も申す通り。御國へ三部の密經の趣。その説の始めて渡りたるが。桓武天皇の延暦二十四年以後。傳敎弘法からのことで。この聖武天皇の御代。行基法師が時分などは。かの密經が。やう〳〵赤縣へ渡つた時分ゆゑ。御國などでは。その氣味も无いこと。大かたはこの行基が後。小百年も過てから。渡つたものでござる。其の時代の考へもなく。師錬が行基に附會したのは。過でござる。殊に聖武天皇の御代に。東大寺へ御造立あッたは。大日ではないでござる。夫はまづ唯るしやなと云と。びるしやなと云と。まかびるしやなと云と。三つの訣が有て。るしやなを飜譯すれば。光明遍照とも。淨滿ともなり。びるしやなを飜譯すれば。徧一切處と云ふことに成て。此の二つともに。なべての佛の上に云ことでござる。又まかびるしや

なは。翻譯すれば。大日となる。然れども御國で。古へるしやなと云たは。右の譯どもの義では无く。たゞ大きなる佛像を。るしやな佛とも。びるしやな佛とも云たものでござる。返すゞゝも。此時いまだ。密經は渡り來らぬ前のこと故。大日なるべき謂はないでござる。所を元亨釋書に。日輪を附會して。大日佛の如く云たは。心得ぬことながら。斯やうの訣を知らぬではなけれども。誣て日の神と大日佛とを。本地垂跡に說うとする心から。知りつゝ。俗を欺いて。此說を發したものでござる。さて師錬が。この大妄說を云ひ出たる工の。其由て出たる本の起りも。元亨釋書でよく訣る。夫はこの大御神の御事を。記し奉りたる後へもッて來て。論をしるして。夫に云へる趣きは。師錬ある時。伊勢の宮へ參詣致したる處が。殿製朴古茅茨無二彫刻一行人屛息跼足入。中心已肅如也。ときにやうやく。宮の前へすゝみ寄んと致したる處が。一人の覡が呵て。この神は。沙門を御嫌ひあそばすに依て。近づくなと云ふ。是に於て。師錬が思ふには。昔釋迦牟尼佛の。大集經を說れたるとき。四天王に勅して。十方の一切鬼神を驅集て。佛會に趣かしめ。正法を護るべきよしを。佛囑を受たることぢや。今この神は。本朝の大祖で。もし釋尊におくれて。世に出られたることならば。其佛囑を知らぬも理りなれども。釋尊に先立つこと。百萬餘歲で有りながら。何と釋尊の。この附屬を受られぬと云ことは有るまい。夫で沙門を嫌ふと云ことが。どうして有うぞ。いやこれは。社人どもの矯で。我輩を拒むに相違ないと思つて。夫から神書を。あまねく探して。神宮雜事と云ふ書を得て見たる所が。右記す通りの。行基法師が。伊勢へ通夜したる時に。大御神が。右の實相眞如の御語を。仰せられたること。聖武天皇の御夢に。大御神が。日輪はびるしやな也。と仰せられたことが記してある。是に於て大御神の。沙門を御きらひ遊ばすと云は。巫祝社家の輩の。妄說なることを知て。此事を。今傳にあらはすと申す趣が記して有る。然すれば師錬が。此の妄說を言出したる。其起りは。大御神へ參詣して。神官に叱られ。夫から腹立まぎれに。神書を穿鑿して。雜事記を得て。夫へ己また附會をして。此說を作つたものでござる。さてその雜事記の說へ。

師錬がまた増說を致したると申すゆゑは。師錬が見たる。その雜事記と申する書が。今も傳はッてあるでござる。これに師錬が妄說の種と爲たる說が有る。夫は天平十四年辛巳十一月三日。右大臣橘諸兄公。參二入於伊勢太神宮一。其故波。天皇御願寺。可レ被二建立一之由。依二宣旨一所レ被二祈申一也。而勅使歸參之後。以二同十一月十一日夜中一。令二示現一給布。天皇之前仁玉女坐。即放二金色光一天宣久。本朝和神國也。可下奉レ欽二仰神明一給上。而日輪者大日如來也。本地者。盧舍那佛也。衆生者悟レ之。當レ歸二依佛法一也。御夢覺之。御道心彌々發給天。件御願寺事於。企給利。とある師錬が云のは此の事でござる。扨この雜事記と申する書は。垂仁天皇の廿九年丙辰より。後三條天皇の。延久元年までのあいだに。朝廷より。兩宮への勅使。神事等のことを記したものなるが。眞のことゝ。虛ごとゝ。間違ひと。相半してをるのでござる。その虛事どもは。都て彼の伊勢の五部書と云ものと。同じやうなる趣きで。佛好の輩のいたしたることに。相違ないでござる。それは聖武天皇の御夢に。玉のごとき女の見えて。日輪は大日如來なり。と申したといふ妄說を始め。例の聖德太子と。守屋大連軍のことをもしるして。守屋公を。あしざまに書てなどあるでござる。またかやうのことよりおよぼして。とツくりと考へるに。其の眞なることどもは。元來あッたる處へ。彼の師錬が。おのれ神を佛の垂跡と云なさんが爲に。外宮の禰宜と示し合せ。この妄說どもを。新に書加へたるかも知れぬ。と思ふことゝもが。たんと有でござる。夫は各がた。孰れも知て居られまする通り。伊勢の外宮に。古くより傳はッてをる。五部書と申すがある。夫は謂ゆる。寶基本記。御鎭座傳記。同次第記。同本記。倭姬命世記の五部でござる。珍らしき古傳說を取記したることも少からねど。凡ての趣きは。外宮の禰宜等が邪心にて。外宮を內宮の上に立んとの工みに作りたる書でござる。師錬は是に依て。妄作したることゝ思はれるでござる。其の委きことは。別に記したる物があるから。此には云まい。

○扨また僧どもは。とかく尊くはやる神をば。我か方へ引入で。物奪んの工夫にすることちや。其の中

に。稻荷神の本地は。十一面觀音ぢや。などゝ云て。愚人原を欺くが。その云種に。昔弘法が。赤縣より歸りがけに。何所より來るともなく。同船して來る。白髮の老翁が有て。夫は稻荷山の白狐で。實は十一面觀音の化身で有たが。弘法が。眞言宗を弘むる。守り神とならうと約束して。其後に。今の稻荷山へ。稻を荷たる老人に化て。現はれたる故。夫を祭つたのぢやなどゝ。しりも結らぬ。大まんぱちを云ひふらすが。稻荷の大神は。そんなたわいもないものでは无い。此の御社は。朝廷の御記錄延喜式に。山城國紀伊郡。稻荷神社三座。號ニ名神、大、月次、新嘗、とあッて。宇迦御魂神。猿田彦大神。大宮乃賣神。以上三神を祭り奉りたる御社でござる。その第一たる。宇迦御魂神は。伊勢の外宮の大神と御同體で。衣食住に幸ひ賜ふ。甚も〳〵やんごとなく。尊く有難き大神で。一日片時世に在る者は。此の神の御幸を蒙らんでも。生て居ることはならぬでござる。また猿田彦神は。天孫降臨のときに。御先驅ひ御案内をなされたる。勇壯拔群の神なる故に。今も神々の御祭禮に。神輿の先に立せらるゝは。此の故でござる。さて又

大宮乃賣神は。亦の御名を。天宇受賣命とも。宮比神とも申して。諸人奉公の道を守り。君臣。父子。夫婦。兄弟。朋友の間をも。和合したまふ御神におはしまし。又狂言綺語。すべて音曲歌舞の根元を。掌り給ふが故に。今も初午祭りに。俄をどり。時口。茶番など。種々の滑稽を爲すは。この故でござる。なほ此の神等の御事は。別に委き御傳記をかくつもりだから。其を見て知るか宜い。何とかやうに。尊き神々に御坐すものを。夫を何だ。天竺と云う戎國で。乞食どもが云ひ出したる。有名無實の觀音と。同物とは何ごとだ。殊に此の神社は。元明天皇の。和銅四年の御鎮座だから。空海が。赤縣から歸りたる。大同元年より。九十五年前のことでござる。嘘を云のは。僧の持前とは云ひながら。大抵にするがよい。右の如き御神等にまし坐すものを。何として。人道はづれの佛道を御守りなさらうぞ。俗人は此大神の有がたき。元の謂も知らぬこと故に。僧らの妖說に迷ひ居るが。扨々氣の毒なことぢや。どうぞ欺かれぬやうに致したいことでござる。さて右の訣ぢやに依て。各々かやうに。衣食住に。安んじ居るの

は。この稲荷の神の御恩頼と云ふことを。能く心得て。定めて此所にも。御社は有ませうが。願はくは各々日々に參詣をして。大切に致さるゝが宜いでござる。是に付て。とかく神の御德と云ものは。廣大無邊なるもの故。餘りに大きくて。是が神の御德と。さしては申されぬやうな物ぢやが。實には行住座臥。常にその大きなる。御神德の中に居ることで。夫はまづ神の御造りなされたる。この國土に住み。神の御靈に依て。なり出る物を。飽までに給べ。生れ出るから。食もたれるも。服も冠るも。死での後も。盡く。神の御德に洩ると云ことはないか。斯の如く。大きなる御德の中にをること故。夫が常となり。常と心得て。何とも思はず。是は當りまへ。と云やうに成て居るゆゑ。たまさかに。蛸藥師に願をかけて。疣でも落た。と云やうな利生があると。夫をばけしからず有難がッて。噪ぐでござる。世の人の。佛を有がたきものに云は。こゝらでござる。夫は人もよく云ことぢやが。天津日の光をば。常になれて居るから。闇の夜に提灯を借たほどにはおもはず。また子等らが。兩親の慈愛をば。何とも思はず。偶

偶に。餘所の人に。饅頭の一つも貰ふと。夫を殊の外に嬉しがッて。あのをぢさんは。おまんをくれた。能いをぢさんだ。と云て。忘れぬやうなものでござる。何と偶々。饅頭を一つくれた人と。兩親の慈愛する處とは。どちらが實の惠で有りませう。殊に佛の利生と云も。實は神の御靈によることで。佛の利益ではないでござる。先刻も申したる如く。觀音經に。あの如く効能書をしるして。觀音を念ずれば。火にも燒ぬの。或は繩目の難き解るとあるが。あれはみな。山賣の能書を見たやうなもので。僞りのたはことでござる。佛經は。都て。佛と云ふ山藥を賣んとて。作りたる。山うりの能書に違ひない。こんな物を稲荷神の本地なりとは。何ごとで有ませう。神様の御罰利生は。今が今に知れて。明らかなことでござる。夫はちよッと。稲荷神の御神德で云はふならば。此神の御德に依て始たる。この衣食住をはなれて。食をくはず。赤裸にして。外に立て居られるなら。居て見たがよい。直にぴり／＼と死ぬであらう。神の御德は。常に馴てをるが故に。心づかぬことなれども。斯の如くぢや。夫を放れては。片時

も居れぬことでござる。ぢやに依て。眞の道をたどりたく思ふ人は。是をよく思へと云のでござる。また僧に誑されるも。河童(かつぱ)に尻を拔れるも。時のまはり合せと思へば。思ふやうなもの丶。本を知ぬと云は。爲方(しかた)のないもので。夫を眞と思て居るが。是はみな。其本を能く聞て置ぬからの過りでござる。內經と云ふ醫書に。邪の至る所。其の氣必ず虛す。と云たる如く。房事の過たる翌日など。惡(わる)くうた丶寢などすると。大きに風を引くやうなもので。今參りのおしなが持た油揚を。鳶がさらふも。其の虛を見すましてのこと。月夜にかまを拔れるも。油斷から來ること。僧がこんなあやかしを云のも。人の本を忘れて居る處の。其の虛に付こんで致す事ぢやに依て。各々狐にばかり。眉毛をぬらさず。僧どもにも眉毛をぬらして。用心するが宜いでござる。其用心と云て外にはない。古學の講說を聞て。本を辨へ。大和心を。づッしりと。固めておくと。僧でも狐でも。誑すことも。引掻くことも。出來るものではないでござる。

〇扨また右に付ておもふに。正親町天皇天正八年。武將平信長公。近江の國安土御在城の砌りに。無邊と云ふ廻國の妖僧が有て。我は生所も父母もなし。一所不住の僧ぢや。我に不思議の祕法あり。これを傳受の人は。現世に於ては。無數の患難を遁れ。來世に於ては。無量の罪障を滅す。と披露したに依て。在々所々の男女が。甚だ信仰して。空海法師が再生ぢや。と云はやしたと云ことでござる。受法は丑の時ぢやと云觸したに依て。夜中の群集限りなく。さて散錢散物が席上に充滿すれども。夫らに目はくれぬと云ふ面をして。見向もやらず。無慾と面を見せかけたものでござる。さて一と所に。漸一兩日の逗留で。晩に來り朝には歸り。三宿と同所に居らぬと申ことでござる。さて廻り廻つて安土の東。石場寺の。鶺鴒(せうれう)坊と云が所へ來たと云ことで。三月廿日の夜に。信長公の御前にて此の沙汰あッた所が。公の仰せに。その客僧とやらは。聞及だる者ぢや。それ試て見やうから。呼出せと。楠長庵と云に仰付られたでござる。長庵承て鶺鴒坊の許へ。彼の僧同伴して登城せよと。使を遣はしたに依て。則召連て參たでござる。扨此の妖僧は大きに悅び。自ら思ふには。

何さま殿中か殿守へ召上られ。佛法商量の上をも御尋あらば。俱舍。淨實。法相。三論の沙汰。顯密兩宗のこと。淨土の厭離穢土。欣求淨土。或は敎外別傳。不立文字。又は孔子。孟子。老子。莊子等の道を以て敎化し奉り。御用ひにも預らんと。笑を含んで居たと云ことでござる。さて長庵より。彼の僧を具し參て候。と言上した所が。何の殿中どころか。御庭に御出あツて。扨そこへ無邊を呼出され。御立のまゝ。無邊とは彼奴がことかと仰られ。ぱッたと御睨なされた所が。無邊は案に相違して膽をつぶし。どぎまぎして居る。そこで信長公の御言葉として。汝生國は何ぢやと仰せられた所が。無邊と申上たでござる。また御尋に。無邊と云所は。唐土の內か。天竺の內かと仰られたでござる。所が。天にも非ず。地にも非ず。また空にもあらず。と申上たでござる。そこで信長公の仰らるゝには。天地を離れて。何の所にか。安身立命するぞ。と仰られた所が。此に於て。無邊大きに差詰り。一言の御答も出ず。ぶる／＼と振出したでござる。扨また仰らるゝには。有情非情に至るまで。天地を離るゝことなし。扨は汝は化生變化の物か。いで試んと仰られて。馬の灸する鐵棒を。眞赤に燒立。其奴が面上に當んとなされたる所が。無邊たまらずふるひ上り。申上ますツと云て。泣出して。さて申には。愚僧は。出羽の羽黑山の者でござりまする。とふるひ／＼申上たでござる。そこで信長公の仰せらるゝには。汝は種々の奇特を見せると云ことぢやが。信長にも奇特を見せろ。と御責なされた所が。一言も出ず。地震の子か。蒟蒻の幽靈見たやうに。ぶる／＼と振ひてばかり居る。扨又信長公の仰に。かやうの賣僧。恣に徘徊させば。諸人猥に佛神を祈り。筋なき幸を願ふべし。尤世の費なり。たゞ信長が手に掛り。其の後神變通力を以て。再生して見せよとて。引きはらせ。向より引刀にて。しづかに截わらせ給へば。神變通力のことは。いざしらず。弓手馬手へ分れたりとぞ。是はこの公の御事實を記したる。信長記に依て申のぢやが。何と信長公の御所行は愉快のことでは有ませぬか。世に佛者らの奇特を見せると云は。皆かやうのものでござる。夫を無我無心で。信じて居るから。彼等が。よいかと思て誑すのでござる。所を公の如く英明に

して。佛法を信ぜざる御方には。神通も奇特も。一向にきかぬでござる。是はかうなければならぬ訣ぢや。此公は。天皇の御勅を蒙らせられて。叡慮を安じ奉り。萬民を治め給ふ。御大任にあらせらるゝ。武將右大臣信長公に坐ますものを。何でこんな妖僧の奇特ぐらゐに。御誑されなされる物か。夫を欺奉らんとは。餘りと云へばあつかましいことでござる。

○すべて佛法に迷ひたる者は。士農工商ともに。其身の本を忘れ。殊に武士は柔弱に成て。つまらぬ物でござる。それ故か有德院殿は。盆の十二三日頃。或は彼岸の中には。是非御鷹狩の御殺生に。御成が有る。それは江戸中の町人までも。能く知て居ることで。是は世間の人が。餘りに佛法に迷つて居ることを知し食て。愚昧な者の。心付にもなれがしとの思し召で。御鷹野御殺生の御成も有たことぢやと。松下氏が。その御代の人で記し置たが。これは實に有がたい思召でござる。

○今の世。俗家にある佛壇といふ物を見るに。その宗旨々々の佛を。正面に直して。第一と傅くべき。親先祖の位牌をば。下段におろし。甚きは。其忌日に當ても。靈供をだにも備へず。御眞向とか云者に。打拔飯を一つ供へ置ば。などゝ云て。其の餘りを。先祖の御靈へも分て下さる。少しもかまはぬが。これは何と云ことだ。先祖には。其阿彌陀の立ずくみに。ぶんぬき飯を一つ與ておけば。先祖の靈に備へずとも。其内を分て與ると云こと。何と云經に。何と云佛が說て置たことが有るか。夫が聞たい。夫が見たい。然し親鸞や連如らが說では。承知はならぬ。これはみな何もかも。立ずくみの物だと云て。寺へ取こみ。佛へ奉らせて我が物とする。下工に云出したることゝ。眼で打込だる此棒は。大地をば打外すことは有とも。是ははづれぬ。又それを信ずる俗家も俗家だ。僧が云へばとて。夫に乘て。親先祖をひぼしにすると云は。餘りなことゝ。まづ阿彌陀は何だ。よしや生ある者にもせよ。外國から居候に來て居る者で。大切なる先祖に。見替る程の者ではない。夫故古くも佛をば。御紀には。蕃神とも。他神とも御記しなされて。蕃神とは。ゑびす國の神と云こと。他神とは。あだし國の神と云こと。また靈異記と云書などには。隣國客神とも

あるが。此等を見て。佛は御國の居候なることを知るがよい。一度御國へ居候に來て。庇を借て正屋を奪ひ。我物貌に大類をして。先祖の祠堂の正面に。居しかつて居るやうに致したは。皆僧等が所爲で。曾て以て。公より。佛を大切にして。親先祖をば。麁末にしても宜い。と仰出されたることは無い。夫だに依て。親孝行は御賞なさるが。佛孝行を御ほめなされたることはなく。親不孝は御咎めがあるが。佛不孝と云御咎めの有たことを。終に聞たこともない。是はないはずのこと。實は居候だに依てのことでござる。近いことは。諸國に御立なされたる御制札にも。親を大切にせよとは。御記しなされたが。佛を大切にしろと云ことは。とんとなしでござる。但し斯云へば。夫なら彼の御制札に。神を大切にしろと云ことも。記してないなどゝ。云人も有ませうが。親の元は神だに依て。神を大切にせにやならぬことも。其御文面の中に籠つてゐるが。どう系圖を引ても。佛には續きがない。然るに。其宗旨の人々なんど。惡く僧に勸め込れた輩は。佛に願ひさへすれば。何もかも與る物と心得て。君の賜もの。親の讓物をも。皆佛に賜たやうに思て居るが。佛はもと衣食住を捨た者なる上に。御國の居候だものを。何の與る物が有ものか。世に有る物は。大小悉く。神の御靈に依て生出ること故。もし佛が與るならば。夫をいたゞくか。扨は神の物を。かの神通でも行て。そツと竊して人に與るのでござる。尤も佛は乞食だに依て。賜た物をくれるは。當り前ながら。此方は。其乞食のためたる物を。貰ふことはいやだに依て。直に神樣より戴くつもりでござる。彼麪桶とか云物にもらひためた。天竺の喰あまり。豕や犬ころの喰のこし。洗ひ流しは。穢くけがらはしいではないか。何んぼ夫が正命の食と云物ぞ。などゝ云たればとて。否なことかな。見るも聞くも。反吐の出ることでござる。所を世の人の信仰すると云は。とんと合點がゆかぬ。熟と考へ見た所が。凡て佛等は。金箔まみれに光て居るから。物でも持て居やうと。思てのことでも有うが。何も持ては居らぬ。又さう衿元にはつかぬものでござる。其は尤も佛經どもに。佛の體をば。紫麻黃金の肌などゝ云て有から。實はさうで有だらう。と思ふでも有ませうが。是は先頭申たる

通り。一體天竺は。殊の外の熱國である故に。人物が。髮も螺髮と云て。蝶蝶の尻を見たやうに。やけちぢれて居るほどのことだから。總體みな黄黒く。夫に應じて。いかう穢狀しき人どもでござる。其中に釋迦は。例の幻術で。其黄色な體を光らして。人に信じさせたる物故。其を仰山に。紫磨黄金の肌など〻。赤縣人が文章に書たのでござる。其は幻術で致したことだに依て。死ぬ時に化が顯はれて。眞黒けに成たでは有ませんか。扨その釋迦を。赤縣へ渡したる所が。美しく造て。渡したとは云もの〻。夫は天竺ぶりに美しいので。赤縣へ持て來ては。猶陋く穢狀くて。信仰がなかッたるを。また赤縣で。人の信ずるやうに。美しく造り直したものでござる。此事は。唐の代の李綽と云人の著したる。尚書故實と云書に記してある。その文に。佛像本夷狄朴陋。人不レ生敬。今之藻繪彫刻。自二戴顒一始也。顒嘗刻二一像一自隱二帳中一。聽二人臧否一。隨而改レ之。如レ是者。積二十年一厥功方就。とあるでござる。この意は。佛像はもと。天竺えびすのものであるゆゑに。其の形朴に陋くて。人が敬ひの心を生ぜなんだものだが。いまあるところの佛繪佛像ともに。戴顒といふ者より始まッたもので。此の戴顒と云もの。嘗一つの佛像を刻んで。かざり置き自は竊に帳の中に隱れ居て。さて人の臧否の噂を聽て改めつ〻。此の如くすること。十年の功を積で。厥功方に成就して。今の美はしき。佛像には。成たものだと云ことでござる。扨此の如く。赤縣で形容して。拵へたる佛像が。御国へ傳はり。其上を。また御國の佛師らが。なほ美はしく。人の歸依すべきさまに造つたもので。淸水寺の康高法師と云が。御國の佛師の始まりで。是に子が二人有て。兄を康助と云て。是が京佛師の祖で。世に七條佛工と云ふ。弟は定朝と云て。是は奈良佛師の祖でこざる。此より兄弟。兩家の子孫の佛師多く。定朝より六世の孫は。彼謂ゆる雲慶法師。その子は湛慶と云て。是が殊に上手で有ましたが。彼の玉眼を入れることなども。この運慶が始めたことでござる。斯て又法師の輩も。各々佛像を書習ひ刻み習て。彼の卑き口ずさみに。「佛師屋をしても弘法食る也。と云る如く。中にも空海が上手で。有た

と見える。かやうの訣故。今の佛像と云物は。次々に工夫しつゝ。手を盡して。物體らしく。人に思ひ付せんと。造たる物故。あのやうに美しく見ゆるが。實の形は。天竺の陋き形で。近く云はゞ。黑坊が。黃疸を煩て居るやうなが。佛像の眞面目でござる。扨佛菩薩(ぼさつ)の輩をば。右の如く美しく造りつけたが。五百羅漢をば。餘りたんと有て。手が廻らぬから。其形(なり)にして置た故に。あの如くをかしな。面貌の者ばかりで。彼口吟に。「羅漢寺にまうかると云ふ佛なし。と云たる如く。格別に。金錢の取れさうな氣色ではないが。しかし又。「錢箱の有るが羅漢の組頭。とも云て有る通り。じよさいなく。取つもりとは見えるでござる。佛菩薩どもゝとんと彼等が如くなる所を。夫では人が信せず。金錢にもならぬから。美しく造り立て。人を歸依さしたものでござる。其は佛壇に箔を塗のも。彩色するのも。皆故あることでごうして〳〵。佛も御國へ渡らぬさきは。彼の國には。眞の金箔がないから。あのやうな結構な所に居たことは。曾てなしでござる。居候も出世すれば。此の如くにも成から。居候の人だと云ては。餘り力

は落さぬが宜い。例の川柳に。「居候秷形(おほくびなり)の餅を喰ひ。と云如く。餅のたち端を喰はせられても又三杯めにはそツと出しとも云程に。難儀をしても。佛が出世の例も有るから。彼の一向宗に用ふる。三ぐそくのやうなる。結構な道具を遣ふ身の上に。なるまいものでもない。また川柳に。「その當座奈良の佛も御氣苦勞。と云る如く。佛も用ひられる中に。また心配もいたし。渡つた當分はとかくに信仰せぬ人もあるから。今日燒れやうか。明日毀されやうかと思ふやうで有ましたが。此の如く。位そばへる程出世したでござる。扨その羅漢等(ども)の中にも。賓頭盧(びんづる)などが體相(ありさま)は。變な面で。「びんづるはこゝは御免と押へてる。と云たる如くの手つきをして。而して醴(あまざけ)にでも醉たが。笑て居る體だが。其故か。愛敬を守るこか。諸病を直すとか云て。世の老婆(かゝ)らが。あの佛をばいかう無體なことをする。眼が華むとては。其眼(め)屎(やに)だらけな。我か眼を擦つて。彼が目をこすり。鼻(はな)液(みづ)がたるとては。彼が鼻を撫て。我が鼻をなで。其手で又かれが目や鼻を撫まはし。齒が拔ぬやうにとて。彼が口のまはりを擦つて。我が口中をかき回し。

又其手で。彼が口のまはりなどを撫まはすから。忍るものではない。鼻も類べたも擦りなくして。剩へ老婆等の。目汁。鼻水。齒屎だらけに粘著て。彌々へんな面に成て。夫でも彼の眼玉だから。目ばかりは煌々として居るが。老婆たちも。餘りと云へば。慾づらの引張たことで。年が寄ての目汁。鼻水。齒の拔るまでが。びんづるだと云て。どうも爲方が有まいでござる。又びんづるもびんづるぢや。もし生ある者ならば。何と癡では有ませんか。然れば彼の口吟に。「地藏よりまだ氣のよいはおびんづる。ともあるでござる。とにかく此も。佛菩薩どものやうに。立派にして。正面に直して。戸張でも下て有れば。誰もあんなにいぢり回しもなるまいが。形も陋く。入口に罷出て居る故に。こんなめに逢ふのでござる。何と賓頭盧尊者と云も。可笑いではないか。然れば佛を尊く思ふのは。佛者どもの計略に。うまうまと載られて。其枠元に付のだが。此頃はやる風俗哥の。小桶で茶を呑やうな。とぼけた者こそ乘はするとも。少からも眞の道を辿らんと思ふ人は。そんな手は喰ぬが宜い。凡て佛者等のすることは。尊くも何ともない物を。信じさせんとすること故。盡く形容ばッたことばかりで。夫は寺々へ行て見るに。飾り立た所は。いかう立派に見えるが。其供物なども。作り菓子の見かけばかりな。物を備へ。夫もその本尊に奉る。と云ふ本意を失つて。人の見る方を表として。後向に居てある。佛前の方からみれば。蕣苞などでござる。寺々の供物が。盡くさやうだから。僧をまねる世の中故。夫を宜きことにして。我家の靈前に備る物も。各々さう致すぢや。僧徒は人に信を敎るとか言立るが。實は世の人に僞を敎へるのでござる。其根性だに依て。人の死のを待て居て。祠堂金の。月拜金のとて。檀家をねだり取るが。其當日に。寺參りをして見ると。首尾も取らぬ芋や慈姑の。白湯でうでたやうな。麁末至極の物が備へて有でござる。相應に。祠堂金。月拜金を納めてすら。かうだから。「釋尊も錢なき衆生度し難し」。と云た如く施物の少い檀家をむごくするは知れたことぢや。「位牌まで羽目に付てる百檀那。と云たは尤なことで。憎しとも憎きは僧ごもでござる。我が古へに。先祖を祭るには。中々以てさうしたことではない。其正しき祭り

方は。拙者古實に因て。委く考へ記した物が有から。こゝには云はぬ。

○今の僧等は。過去帳をくり出して。壇家の遠忌を改め。今年何月何日は。某信士。某信女の幾年忌に當る。などゝ云て。寺から催促するやうになッたが。是は可笑いでござる。元來佛法に於て。年忌弔ふと云ことは。とんとなしでござる。また御國の古風に祭て。魚味を備へやうとも。儒道で祭らうとも思ひ思ひ。己が好々にしても構ひないことで。公の御觸に。是非僧を頼んで爲よ。とも酒肴をば供へるなと云こともとんとなしでござる。實を云はゞ。寺の方から。年忌を弔はうなどゝ申したならば。いや其許は。實しからぬことを云ふ。先に引導を渡して置たではないか。其引導は何の爲だ。極樂と云ふ善所へ導いて。此世に迷せては置ぬつもりではないか。夫に今また。年忌を弔はんなどゝ云は。なぜに是まで。亡靈を迷して。成佛させずに置たことだ。夫でも出家の役がすむか。などゝ嚴しくきめつけたならば。大きに寺の摩掌ものでござる。年回を弔ふと云は。實は儒法ですることぢやが。物をもらはん爲には。儒法を盗んで。我物とする。實に慾に目の无いと云は。僧どものことでござる。

○扨また靈前へ。酒肴を供へることも。世俗の心次第にて宜きことで。御國風に祭て。魚鳥を供へやうとも。又は儒道で祀らうとも。思ひ〳〵。己が好々にして。構ひないことで。公の御制度にも。酒肴を供へる勿。と云ことは无いでござる。然るに今世俗にて。父祖に孝心なる者は。其存生の時の好惡を考へて。酒肴を供へるは。謂ゆる如在の禮を盡せる心なり。然るを今の僧徒には。小言を云者もあるは。甚たつまらぬことぢや。但し謂ゆる佛壇に。かの本尊と云ふ立ずくみでも有て。若も迷惑がることでも有るならば。我が皇國の風儀に叶はぬ事故に。夫は片付おいて。父祖の靈前にのみ供ふべきことぢや。但し實は。其本尊に供へても。苦しからぬ筈のことで。夫はなぜなれば。佛祖を始め。肉食妻帶も多かることは。佛道大意に申おいたる通りのことぢや。然れば中古の名高き僧等にも。魚鳥を好んで食たるも數あり。其一つ二つを云はゞ。まづ古事談に。仁海僧正は。鳥を食ふ人なり。房に在ける僧の。雀を

えも云はず取けるを。はう〳〵と炒りて。粥漬のあはせに用ひけるなり。然れども有驗の人にて坐けり。大師の御影に違はずとあり。十訓抄にも。此事は見えてある。扨また宇治拾遺物語に。むかし南の京の永超僧都は。魚なき限りは。齋非事も。都て喰はざりける人なり。公請つとめて在京の間。久しくなりて。魚を喰はで。くづをれて下る間。なしまの丈六堂の邊にて。晝わりご喰に。弟子一人。近邊の在家にて。魚を乞て進めたりけり。件の魚のぬし。後に夢に見るやう。恐ろしげなる者共。其邊の在家をしるしけるに。我家を記しのぞきければ。尋ぬる處に。使の云く。永超僧都に。魚を奉る所なり。さてしるし除くと云ふ。其年。此村の在家。悉く疫病をして。死ぬるもの多かりけり。この魚主が家たゞ一字。其事を免るゝによりて。僧都の許へ参り向ひて。此よしを申す。僧都この由聞て。かづけもの一重たびてぞ。歸されけると見え。此事古事談にも見えて有り。此等は。位階ある者なれども。此の如くぢや。況て凡僧らの。魚鳥を食ふことを厭はざること。云までも無く。俗家にて靈前へ供ふることなど。決して咎むべきことではないでござる。

○また同じ宇治拾遺に。昔久しく行ふ上人ありけり。五穀をたちて年比になりぬ。帝きこし召て。神泉苑に崇めすゑて。殊に貴み玉ふ。木葉をのみ食ける。物咲ひする若きんだち。集りて。此ひじりを試みんとて。行向ひて見るに。いと貴げに見ゆれば。穀斷。いく年になり給ふ。と問はれければ。若きよりたち侍れば。五十餘年に成ぬ。と云をきゝて。一人の殿上人の云く。穀斷の屎は。如何やうに有らん。例の人には異りたるらん。いで行て見んと云へば。二三人連て行て見れば。穀屎を多く痢おきたり。怪しと思ひて。上人の出たるひまに。居たる下を見んと云ひて。疊の下を引上て見れば。土を少し掘りて。布ぶくろに米を入れておきたり。公等見て。手を扣きて。穀屎聖〳〵。と呼はりて。罵り笑ひければ。にげ去りにけり。其後は行がたも知らず。長く失にけりとなん。と有り。之に就て或人の說に。むかし南天竺の人なりと云ふ。達磨法師は。赤縣に至り。少林に居て。面壁九年と云ことで。其間すわり續けにして。是が座禪の初まりだと云ことだが。然でもあ

らうか。然れば九年の間の食物。及び兩便は。いかが爲たであらう。食物は側より運んで。食はせたでも有うが。兩便はどうぢや。立て通ひたることゝすれば。九年の座禪云ふに足らず。居ながらまりたらんには。尿は地にしみ込たることとしても。屎は日に積るべし。然れば其體は。屎にて埋まり。夫が爲に。足も尻も腐り果たるにや。其臭さ汚穢さ。云はん方无るべし。但し達磨は。凡人には非ずと云とも。九个年の間のこと。いと不審しきことなりと。或人の云たは。上に云へる穀屎聖などを思ふに。尤なる説でござる。この面壁九年は論あることなれども。こゝには云まい。

○此頃宮負定賢。來て云く。己か村は。至ての小村でござるが。古くは佛信心と見えて。寺が五个寺有たる處。段々潰れて。今は二个寺に成て。またその一个寺も。あるか無きかに成たり。然るに其宜き方は。和尚たび〳〵替りて。一年と居付ず。あまりに世話がやけて。困ること故に。近頃工夫いたして。洗濯人と號けて。内々相應の女房らしき者を。充行おけば。大きに寺持がよく成て。今の和尚は。三个年無事でござる。大抵どこのお寺も。近年は。大黑とか。辨天とか云ものが有て。内々は子持も多くあると云ことでござる。されば川柳に。「五戒より和尚やッかい持つてる。と申したは尤でござる。と云つたが。實に尤ぢや。此人は村長ぢやが。本より困窮なる小村を。よく取立て。今は大抵の飢饉にも。さし支へ无きやうにいたしたる程の人で。夫故寺々の取扱ひなども。大やうで宜しいでござる。抑僧と云ものは。世を捨たの。木の端も同樣で。无心ぢやのと云ひは云へども。其はもと僞りなること。今更云ふまでも无いこと。實は本より人の子で。殊に我が大皇國に生れ出ては釋迦も孔子も。貓も杓子も。悉く我皇神の道に從はねばならぬ筈の者ゆゑに。實にはさうも有さうなもので。日本橋のさらし物を見ると。少し氣の毒な心持もするでござる。

出定笑語附錄之一下

平田先生講說　門人等筆記

○神敵二宗論

神敵とは。餘り事々しい名目のやうで。如何とも存することだが。是は神道學者の言出したる語で。又さして。不相應と申す程のことでないから。まづ人の訣り能きやうに。其儘用ひたのでござる。扨二宗論とは。一向宗と。日蓮宗との論辨のことだが。此二宗ほど。吾が神の道の妨害を爲す者は无いこと故に。止むことを得ず。辨駁いたすことでござる。吾豈辨を好まんやで。向方より。此の方の邪魔をせぬ者をば。篤胤に於て。少しもあしく云つた事は无いが。向方より。邪魔を爲ることが甚しければ。此方より嚴しく。打拂はねばならぬこと。是は譬へば。君父の敵の。捨置まじきと同樣でござる。とは申すものの。拙者は學事に閙がしく。長々と拄つて居る隙は无く。今は二宗を引くるめて。僅に兩三日の講釋ゆゑに。思ふやうには行屆かず。仍ては此二宗の者ども。若しも訝しき筋でも有ならば。幾度でも問返すが宜い。少しも密々にすることでは无く。右の敵打の心だに依て。向方の屈伏する迄は。幾度も答やうでござる。夫は能くとツくりと聞畢て。其跡で。又とツくりと考へて。尋ねられるが宜い。決して無理は申さぬ。是らは學業の趣意に關る。大切の事故に。先斷り置くのでござる。さて第一に。一向宗と。日蓮宗と。伊勢大御神を祭り奉らず。また餘神をも拜まぬ訣を。あら〳〵云ひませう。まづ一向宗の開祖親鸞は。大谷本願寺の開山で。舊名は。善信坊綽空と云たが。後に天竺の天親と云ふ僧の親字と。赤縣の曇鸞と云ふ僧の鸞字とを。取合せて。親鸞と云たでござる。三室戸大進有範と云ふ人の子で。その伯父六條三位範綱卿と云ふの養子と爲て。九歲の時に剃髮し。慈鎭和尚の弟子となり。天台教相を學び。廿九歲の時に。淨土宗の祖師。黒谷の源空法師。後に法然と稱せる法師に從て。淨土專念の宗旨に歸して。すなはち源空が上足の弟子。五人の中ぢやと云ことでござる。その淨土宗の。一向專念と云て。ひたすらに彌陀を念ずる。と云ふ宗意を取て。立たる宗旨ながら。其師法然の立方はそれ迄の他宗は。ま

づ佛經を讀み。何くれと心法さわぎも有て。下根の人は中々にさとし難く。入れがたき仕かたで有つたる故に。惠心僧都の記た。往生要集は。赤縣の善導と云ふ僧の。佛經などは誦まず。一向に念佛ばかりを申して居たることを。楯に取つて。下根の人にはこの趣向がよい。と記したるもの故。夫から思ひ付て。法然は念佛宗を弘めかけたでござる。然れども。外の佛を念ずることや。神を拜することまでを止て。と云ふ處までは。未だ氣も付かず居たる故。制しもせなんだなれども。さして邪魔にもならなんだ。處が。親鸞は甚だの利口奸智の勝れたる僧で。とても佛道の本意たる。妻子を持たず。雜行雜修と云て。門松をも立てず。人並のことを爲ず。又鮑食をして。生ぐさを食はぬと云やうなことは。人たる者の。決して出來ぬことぢやと見拔て。觀音の夢想と僞り。肉食妻帶の宗旨を建立し。釋迦の掟にそむいても。時機に應ずる一宗を始めんと。企てたでござる。其訣は師匠の法然が。一向專念と云て。念佛三昧の宗意を腹としながらも。外の佛をもたのみ。神をも拜むと云ふ處が有ては。猶いまだ專に。彌陀を信ずると云ふで无いから。則ち阿彌陀經の要文とする處の。一心不亂。彌陀名號。と云ふ文から取て。眞に一向に。一心不亂に。彌陀を念じて外を見ず。念佛申して佛にならふの。悟て佛にならふのと云ふ。自力を捨て。唯ひたすらに阿彌陀を賴め。阿彌陀を賴めば。彌陀の他力で。天津日の、森羅萬象を洩さず。照し給ふが如く。阿彌陀如來。その光明の中に救ひ取り。極樂往生の素懷を遂げさせ給ふ。第十八の御誓願ぢやと云て。勸めたことだが。然すがに御國は神國で。各々神を信ずる心は止まず。なほ一向一心不亂と。彌陀に隨歸する處に引かかりが有て。人が進まず。是ではいまだ。人を誑し込べき藥味が足らぬ故だと心付て。夫から又。深く工夫したと見えて。かの弘法が。天竺に名もなき。大日佛と云ふ佛を僞作して。天照大御神の本地ぢやと云て。世人を惑はしたる。大奸曲の一味を盜んで。吾が宗旨に調合いたし。かの阿彌陀の本願とやらに。光明徧照。十方世界。念佛衆生攝取不捨。とか云ふ處などが。天照大御神の世をあまねく御惠み遊ばさるゝ。御德にも似たるさま故。とり付て。阿彌陀がやがて。天照大御神の本

ぢやと云ひ張たものでござる。それは世の人の。天照大御神を。有難く思ひ信じ奉り。何もみな大御神の御物で。それを分け賜はつて有るのぢやと。世の人の有難く思ふ。其心を。悉く阿彌陀に移させ。然うろたへた處へつけこみ。かの白骨のおふみなど云物を。哀れげに作て誦聞せ。鼻をすゝらせ泣して置て。跡で回ッてものするやうに仕かけたものでござる。僧こそ彼の僧を信ずる輩が。うまうまと謀られて命の毒なる哉。空氣なる哉。ふはりと其に載られて。何もかも阿彌陀如來の物だと云て。己が身の元たる神を忘れて。迹形もなき阿彌陀佛を。有難く思ひ。例の極樂へ行て。蓮葉の上に畏り。百味の飲食をしてやらうと爲る。慾心も增長し。あなたのことなら。鍋釜藥罐も。金も命も。褌も尻の毛も。差上ませうと。惜氣もなく上さして。跡で拾ふは寺の僧だが。やれもやれも氣の毒なとでござる。是につけて。拙者の八九歲の頃で有ましたが。さよぢや節と云が流行ましたが。その文句に「一四つ目長命丸と。お寺の坊さまが能う似たの。さよぢややめつたやたらに。泣してさりやるの。さよぢやあやあ。と囃して

謠ひましたが。實にこの歌の通り。泣して採るに違ひない。學に拙者多年。古の道に志して。外の道々を云ひ排かんとする心より。その道々の學をも致して。この宗旨の立かた。勸めかたなども。阿彌陀經は素より。親鸞の書ども。またおふみなど云ふ物をも委く讀み。偖その法談と云ふことをも。幾度となく聞て。覺えたことだが。今は一向宗と云へども。東西と派が分り。枝葉がさして。數十派になつて居るが。その祖師親鸞の本意と云ふは。右の如く相違なしでござる。さて先第一に云べきは。肉食妻帶のことぢやが。彼宗徒の言ふ處は。我が宗旨にて。女姫肉食することは。建仁三年の秋。九條關白兼實公が。大師源空法師に仰られたには。御弟子の中に。兼實一人在俗でござるが。淸僧の念佛と。我等が念佛と差別なくは。御弟子の中。一生不犯の僧を一人たまはつて。在家の僧となし。末代の人の疑をはらし。念佛往生の行者の手本に爲たい。と仰せ有た處が。大師實にもと承知して。然らば善信坊。今日より。兼實公の仰せに隨ふが宜い。と申されたる處が。鸞師かたく辭退したまふ時に。大師の仰に。此はさやう

に精進することでは无い。其の故は。去ぬる四月五日の夜に。六角堂の觀音の示現があつて。その告命に。

行者宿報設女犯　我成玉女身被犯
一生之間能莊嚴　臨終引導生極樂

と云ふ四句の文を。汝に授けたまへる上は。精進すべからずと仰せ有つて。すなはち兼實公第七の御子。玉日姫と云ふ。親鸞師に賜はりたるより以來。肉食妻帶することぢやと云ふを。茶店問答と云ものに。委く辨じてある。其の趣は。此話は。昔より聞もの嘔吐をなすことぢやが。此說に。六つの不埒あり。其はまづ。建仁三年に。觀音の告命ありと云なれども。この建仁三年の翌年は。元久元年なるを。其の前年に女婬肉食の告命あつた事ならば。爭で翌年の元久元年。七个條の誓紙に。婬肉を停むる連判の中に。親鸞の入るべき謂は无でござる。また公卿傳を按ずるに。兼實公は。建仁二年出家。法名圓證とあり。然れば出家し給ひながら。在俗と仰せられやう筈は无い。是一つの不埒。また兼實公の仰に。御弟子の中に。兼實一人在俗ぢや。と仰られたる由なれども。

在家の弟子は。公卿にも五七人のことでなく。武家にも。五七人には限らぬことぢやが。此を。お知なされぬことは有るまじき筈ぢやに。兼實ひとり在俗とは如何では无いか。殊に前年に出家なされたことは。忘れ給ひしことか。是二つの不埒。また御弟子の中を一人賜はりて。在家の僧となし。末代人の疑をはらし。念佛者の手本となされよ。と仰せられたる由なれど。此願に。極難不通のこと有り。其は此言の如くならば。若逆罪を犯せる者有て。大師に對して。我ひとり逆罪を作ました。御弟子の中一人。父母を殺させ。末代の人の疑ひを晴し。念佛は。逆罪の者も。往生すると云ふ手本と。なし下されと願つたならば。大師何とがなさるで有らうぞ。此の外に罪の品は限ないから。或は盜賊。放火。主殺親殺など。押かけ〳〵願つたならば。御弟子は殘らず。六條河原に骸をさらすで有らう。是三つの不埒。また兼實公。女を嫁すると云說は。親鸞傳抄と云ものに出たれども。公卿傳にて。月輪殿の系圖を見るに。御子十人の中に。末の御一人のみ女子で。餘の九人は御男子ぢや。この御女子は。後鳥羽天皇の后にた

たせられて。宜秋門院と申すは。此御方で。玉日と云者は无く。第七の御子は。醍醐の良海僧都ぢや。然れば妄說なる事疑ひなしでござる。然るを彼徒の或書に。月の輪の系圖に。玉日と云ふ者の无きを傷みまして。兵部大夫爲敎が女を。養女として賜はッたのぢやと云ひ。また兼俊僧都の系圖に。範意の母は。攝政兼實公の女とあれども。兼俊は蓮如の子ぢやに依て。謙者の證據ゆゑ取がたい。或は玉日姫を。岡崎姫と云ひ。本地觀音。河内國高安郡。玉祖大明神の應現なりなど云ふは。笑ふに堪たる事でござる。此事。其宗の中にも。正道の人は。氣の毒に思ふと見えて。築地安養寺惟均の勸誡集に。此事を擧て。先達に此の說ありといへども。是はこれ傍義也と云て取らず。是は先達より出たる說成故に。虛說ともならず。傍義ぢやと云たなれ共。序の文に。踈鄙孟浪。還て乃祖をして。他の點俐を受しむ。と云て有る。こゝを以て。其の宗の中にも。用ひぬ人あるを知るが宜い。是四つの不埒。また觀音の四句の文。初の二句は。行者宿報にて。女を設けて犯すことならば。我玉女の身と成て。犯されやうと云ことぢやが。今時わづかに。唐詩選を素讀したるばかりの小兒でも。かやうな卑劣の句を吐かず。行者とは。念佛者か。誦經者か。修驗者か。廻國者か知れず。また大師もいかがぢや。鸞師の弟子入は。建仁元年で。その三年四月までは。二年も立か立ざるゆゑ。三經一論四帖の疏も。學ぶ間もないに。行者と云を鸞師の事とし。固く辭退あるのを。勸められたはいかゞしいことぢや。さて宿報とは。善か惡か知れず。設女犯せばとある。犯字きこえず。犯は婬事に限らず。法度を背くを云ふことで。四人を犯人と云ひ。世の制礼にも。違犯の輩と書て。爲まじき事を爲るを。犯と云ふ故に。正婬と云て。夫婦の上には犯と云はず。邪婬をなすを犯と云ふ。然れば女犯とは。密通不義のことぢや。觀音は。何とてかやうに文盲ぞや。此はおかすと云ふ訓によりて。誤りたるもので有らう。又次の句に。我成玉女と云へる。成の字きこえず。成は成就の義で。成きッて跡へ返らぬ字也。其は成佛と云へば。再び凡夫に返らぬことで知るが宜い。今觀音。かりに玉女となるには。現とか爲とか。化とかせねば通せず。成と云へば。玉女に成切るの

で。本の觀音には返らぬことゝなる。普門品に。三十三身を說く處に。みな卽現と云て。卽成とは云はず。觀音いかなればかく不學ぞや。偖また後の二句は。一生の間よく莊嚴いたして。臨終に引導をして。極樂に生れさせやうとのことだが。一生の間と云ときは。鸞師一人に限る語になるが。廣度衆生の心と云ふは无いことか。莊嚴とは。女犯を以て莊り立ることか。是で引導をして。極樂に生ずることならば。不義ものは。殘らず往生するで有らう。生極樂とは。觀音の口にはあたらず。是五の不埒。今戯に。この告命を作らうならば。

綽空憑レ緣示ニ恩愛一　我現ニ女身一同ニ世塵一
以ニ大莊嚴一共ニ佛事一　引ニ導衆生一還ニ極樂一

など有るべきものぢや。また凡佛菩薩の化をなすに。最初に本地身を明すことは。古今其の例をきかず。其は狐の人をたぶらかすにも。初めに正體を明しては。誰か馬糞を饅頭と食であらう。然るに觀音。初めに。我玉女となつて夫婦となり。犯されやうと云ふとも。綽空が心に。觀音の化物と知つては。紅紛の翠黛も抹香くさく。雪の膚へも。金箔の剝んことを恐れて。枕席を共にすることが成やうぞ。夫故に。初めに本地を名告と云は。不緣の本ぢやに。我玉女と成つてとは。觀音の不思案では有るまいか。殊に觀音の化身ぢやと云ふ玉女が。出生してより一生涯。何の化益もなく。剰不肖の子を生だは何事ぢや。是六つの不埒。古人の語に。人を味ますに。理のなき所を以すれば。匹夫も是を誣るとは。かゝる事で有う。と云たるは尤なることでござる。○偖また同書に。剃髮染衣の身で有ながら。婬身肉食いたすことを。彼宗徒の云ふ處は。我が宗は。他の例を學ぶではなけれども。例を言はゞ。悉達は太子たる時に。耶輸多羅女と云ふ最愛が有ッたが。それは凡俗たる時のことぢやと云はうか。夫ならば誕生の時に。天上天下唯我獨尊。と云ッたと云は異い。また大論に。妙覺須摩提德王の三菩薩。護法論に傅大士。華嚴經に緣覺に妻あり。唐にて羅什に妻あり。日本にて。聖德太子も妻帶であり。また隆寛律師。さては彥山。靈山。丸山。御影堂。みな妻帶ぢや。此の外に。時宗の末院。池上の日朗日像。また中山の日常を初め。代々妻帶で有ッたが。名聞を思ッて。清僧に成ッた

など、云なれども。悉達が妻帯のことは。佛法を信せぬ者より云ふ時は。尤なることなれども。其流の者より云ッては當らぬ説ぢや。其外は。尙全が辨に。大論にある三菩薩が事は。是は居家の菩薩と云て。在家の人にして。菩薩戒を受たる故に。菩薩とは云ふなれども。觀音勢至などゝは別でござる。また傳大士も。在家の人で有髮であり。華嚴に緣覺の妻子あることは。本より在俗の人なれども。ふと飛花落葉を見て。師尙なく。獨覺る故に。獨覺とも云て。妻子あり。發心後に妻子あるでは无い。かの苅萱が。盃中の落花を見て。出家いたしたと同じこと。聖德太子は。出家でござらぬから。妻帯は元よりのことでござる。また隆寛も。中年の發心で有から。三子あッたは。在俗の時の子ぢや。自身出家したればとて。已前の妻子を。打殺してもしまはれず。彥山以下。或は山伏。または丸山靈山の茶屋。或は御影堂の扇折等の類は。いくらも有ませう。日朗日像の輩を念佛の敵なれども。妻帯の段には。身方に招き寄たのは可笑いことでござる。○さて親鸞。おのれ妻帯ずるのみならず。門弟にまで。妻帯をゆるしたることを。彼の宗徒の云ひ分には。止がたきを止れば。邪婬を行ひ。非道に惡事を爲べきことを思つて。門弟にも妻帯を許したのぢや。外相に妻を持ずとも。內心に色欲が有ッては。妻子あるに等しきことぢや。我宗は。和光同塵にして。利益衆生を本とする故に。形を世俗に染なし。飲食持妻も。かれに准ずることぢや。今の淸僧自慢の出家に。御僧は。持戒か無戒かと問ふたならば、持戒と云はうとすれば。在家の五戒すら持たず。況て二百五十戒を持たれることでは無い。外相に肉食せぬばかりを。淸僧と思ッて居ることぢや。涅槃經に。佛大衆に告て曰く。今日より初て。聲聞に。肉を食ふことを許すとあり。六祖惠能は。常に肉を食ひ。曹溪は鹿食をした。我宗には。三淨肉を用ふ。生るを殺す類があるならば。鸞師の門葉ではない。未來は阿鼻獄に墮るで有う。と云ふを破ッて。止がたきを止れば。邪婬を行ふで有らうと思ッて。門弟に妻帯を許すとは。敎をなすの道でない。いかなれば親鸞の弟子に限つて。千人が千人。こと〳〵く邪婬をなす者ばかりも有るまい。夫は凡て敎と云ものは。制敎を本意とす。喩へば財寶を欲

がるは。人の常情ぢや。欲心の止がたきを止るは。甚難きこと故に。佛敎も世法も。心に惡の起るは是非もない。業に出さぬを道とすることで。弘決に云く。設心に起るとも。口に起さゞれ。口に起るとも。身に起さゞれと云ッて有る。さて外相に妻を持ずとも。内心に色欲がつきずは。妻子あるに等し。云々と云たは笑ふべきことぢや。また我が宗は。和光同塵してと云なれども。和光同塵とは。内德をかくして。姑く世に交りて。人を度するを云ふことぢや。いかなる内證の德行あるか。また淸僧自慢の出家。五戒すら持ずとは。何の戯言で有らう。戒のことは更に知らぬものぢや。今略して示さうが。在家の五戒とは。第一に殺人命戒。これは人の命をとらぬ戒なり。獵師漁人も。持れずと云ふことなしでござる。二に偸盗戒。此は盗をせぬ戒ぢや。三に邪婬戒。こは人の妻を犯さぬ戒で。自の妻は。正婬と云て。罪にも破戒にもならず。四に大妄語戒。これは我は佛ぢや。羅漢ぢやと言はぬ戒でござる。五に飮食戒。これは土風酒を以て禮を行ふこと故に。戒師隨方毘尼に依て。或は遮し。或は酤酒戒を以て是に替る。是を在家の五戒と云ふ。この中に。初の三つは。王公より下乞食に至るまで。受たると受ざるとの違ひこそあれ。持ぬものは。天下に一人もなし。此を持たぬ時は。佛制はさておき。王法に依て。大刑に行はれる。第四は。氣違の外は犯す者なし。第五は。家業にあらざれば酤らず。然るを五戒すら持たぬとは。いかがのことぢや。外相に女犯肉食せぬを淸僧と思ふとは尤ものことで。それ淸僧でなくて何ぢや。涅槃經に大衆に告て。今日より聲聞に。肉食を許すと有ると云は。甚の妄言なり。三國流布の涅槃經には無ことぢや。我今涅槃經の本文を示さう。四相品に云く。迦葉佛に白して言く。我肉食せざる者を見るに。大功德あり。佛言ふ善哉。汝善く我が意を知れり。今日始て。聲聞弟子に。肉を食ふことを許さずと見え。また迦葉の曰。乞食の時に雜肉食を得ば。云何して食ふことを得て。淸淨法なるべきと問た處が。佛曰く。まさに水を以を洗て。肉を別ならしめて。食せよと云ひ。また一切の現肉。悉く食ふべからず。食へば罪を得とも有て。彼の徒の言ところとは。天地の違ひぢや。また六祖曹溪などのことを。例と引たれど

ふ。是等はみな無敵手より出たることで。肉をも食へば糞をも食ふ。然れども。その門弟はみな清僧で。此を手本とせず。肉はおろか葷酒さへも。門内に入れぬことぢや。また我が宗には。三淨肉を用ふ。生るを殺さずと云なれども。三淨と云は。殺すを見ず。殺すを聞かず。我が爲に殺さず。と云の三つぢや。然るに彼の宗徒の寺の厨下を見れば。俎上に鯉の生れたるを載せ。生たる鮒を桶に蓄へて煮り食ひ。螺蛤を。生たるまゝに煮て食ひ。鰻を生ながら剖て串にさし。泥鰌の生て躍り居るを。鐺に入れて煮るなど在俗の人さへも心ある者は。忍がたき事では無いか。あゝ親鸞の本意かくの如く。不埒千萬なることぢや。其の徒何故に。衆生の受苦を恐れて。諫止の意をなさゞるぞ。とも云て有る。此の外に書たることども。一々尤には有れども。大抵は小事どもなる上に。佛者同志の爭論にて。弘く世上へ押出しては。無用のことも多いことゆゑ。今逐一には引出ず。然れども。若も委く知りたいと思ふ人は。其書等に就て見るが宜いでござる。凡て此の宗旨のことは。自分勝手に立たる物故に。我が古道の旨に叶はざるは。云までも无く。普通の佛法にも背けたることで。諸宗より。宗外と云はるゝ程のことなれば。論ずる迄もなきことなれども。元來愚痴文盲の者共を。誑さうとて。作り立たること故に。其の宗の者は。其の文盲を恥とも思はず。一向の信心より。他宗の者をもめッたやらたらに勸め立る故に。愚盲の者は。段々に引込るゝも少からず。大に吾が道の妨げとも成ることなれば。今は止むことを得ず。辯論にも及ぶのでござる。

○さて世間に。此の宗旨を論じたる物は。計ふるに遑あらざる中に。嚴垣氏の著はされたる。正實直言記。また釋氏根元記とも云ふ物に。諸宗のことを論じたる。其中に。此宗のことを辨駁したる趣。大抵は宜しければ。今こゝに引出て示すが。其の説左の通りでござる。

○門徒宗と云は。法然の弟子。善信（後に親鸞）と云者。一向一心に。專修念佛を先務にして。八十四代。順徳帝の建暦二年。法然寂して後。此の宗を國々に專流布したでござる。大旨は。法然の一枚起請の趣と變ること無く。また其の中を拔取たる物なれば。

唯さへ愚痴なる上に。覆輪をかけ。此の世から。もはや佛になされて下さるからは。もう助かツて居ることゆゑ。未來も其のとほりに。極樂へ直通りぢやと云聞せ。とかく佛の仰を疑へば。往生の妨と成る。疑ふな疑ふな。疑ひの心と云ことが。此の宗旨の大誡で。何事も打棄ほかして。無學にして愚にかへり。神は決して敬はず。外の佛さへ頼むは。傍法なりとて見向もせず。たゞ稱名念佛より外のことは。无きやうに勸めたて。唯一致に集り。何もかも。物入失墜を一つに約めて。取込うと云ふ分別より外に。深き宗法の奥意も无く。釋迦の胸から出た。佛法らしきことは。一つも云はず。釋迦の了簡とは。ぐわらりと違つたものでござる。凡て獲處もなき。妄語ばかりついて。人を誑惑して。世業するばかりの事で。本より愚痴無惑。道心准俗を云ひ立にして。一派を立課せたるもの故に。何も是ぞと。法聞難聞すべき。力ある宗旨では无いでござる。亂世後は。無學の人多く。文盲愚痴の人に向ひ。無學ぢやと呵れば。却ツて腹を立ることゆゑに。無學でゆく流義を立て。夫を以て。勸めるゆゑ。其の心易いに喰付處

を。死の道を云て。大に威し付て。信心を固める事でござる。凡て後から始めたる宗旨故。人數を集むる計略に。昔から定めおかれたる掟を背きて。付合せぬ筈に究めある。穢多等を引込たるは。有難がらせて。錢まうけの種にする發端で。山ごとぢや。斯の如く國法をも。亂がはしき宗旨故。公道より御不審を蒙り。叡山からは差止を受け。其言訣に。是は佛法宗旨に非ず。まづ佛縁を結ぶ下拵へで。俗民の白衣を著るばかりの者で。僧ではないとの申立でござる。夫ゆゑに衣を著して。說法と云て。說こともならず。黑衣の製へも違つて。聽衆と同様に坐して。法談と號けて。話の形狀ぢや。肉食妻帶のことも。開祖親鸞が。好色ゆゑのことでは无い。佛法の宗旨でも无く。僧でもなく。俗民白衣の者でござる。との云ひ訣ゆゑ。肉食妻帶するは。公道への申わけ故にすること明白でござる。但是も。この宗旨ばかりのことでなく。淨土も法花も皆同じく宗外の物なれば。妻帶せねばならぬ筈を。法然も日蓮も我慢にておし強く。逃課せたるものでござる。親鸞は。此の事は。質直に國法を守りたる者ゆゑ。生涯天下の科人にも成ら

ず。無事に長壽して。天命を終つたことぢや。然る今の世。此の宗の僧の不貶口に。世界の人間殘らず肉食妻帶ゆゑに。殺生戒。邪婬戒の二つを破るから。佛身に成ること覺束ないことだと。疑の心が起るで有らう。其心を發させまじき爲に。元祖親鸞。自ら其身を。肉食妻帶に陷つて。衆生の爲に肉食妻帶をしても。佛に成ると云ふ證に。見せしめの爲になし置れたることぢや。などと。出たらめに誣付るでござる。いかに老婆かゝの。誑し能き者を相手にすればとて。世間には理非邪正を辨へて居る人も。多く有ることだが。其手前をも恥かしいと思はず。實のことを覆ひかくし。妄語ばかりで。人を教化しやうと云ふは。正道を踏外し。公道を蔑如にし奉るの。第一で有らう。また即身圓佛のことは。法身の佛と云ふが。其の本文は。久遠成レ道。皆在ニ衆生一念心中一と見えて。地獄極樂三世因果は。假の方便の空言で。惡を退け善に至る心が。卽佛ぢやと。實の處を顯した釋迦の經ぢや。夫を親鸞が勝手の儘に。脇道へすべらかして。即身成佛と。此の世から何の行も無く。佛に成て居る故。脇目もふらず。其のお禮を申すことぢや。などゝ勸化るゆゑ。常に死行先が怖しく。魂魄の行方を按じ。覺束なく思ひ居る處故。虛僞とは思はず。安心して。先後の辨へもなく。世に頼もしきこととばかり心得て。已に即身が。佛に成て居る氣になり。我を慢じ。人を侮り。我こそ信心堅固なるゆゑ。無理は云はぬ。道は背かぬと思ひ居るでござる。夫故に。國恩をば礑と忘れ果て。元來空言で拵た。佛道の中でも。偏僻な勸めに隨ッて。我が宗へ義を立て。同じ釋迦の仲間内でも。外の佛は見むきも爲ず。日本に生れながら。此の國中は皆。先祖から續いた。一家じやとは氣も付ず。銘々の先祖なる神々樣を敬はず。剩へ大神宮の御祓さへ。家に置奉らず。切支丹同樣の。異國外道の佛に追從して。大金を費し。佛檀を座敷の眞中へしつらひ。肩衣をかけて。朝夕にせぶり暮すが。此宗旨の持前ぢや。だとへば親を追ひ出して。穢多を迎へて。稽首再拜むが如く。道に背くこと。此の上は有るまいでござる。我が子我が孫の髮置さへ御堂へ連れ詣りて。生れ立から佛なぶり寂滅爲樂として。足ること知らずの貪欲心を。子どもの時から仕習はせ。死の道を教化

いたすことなどは。生涯の壽命を縮めると云ものでござる。今現在に。禁裡樣。將軍家は。銘々我が先祖より。血脈の明白に胤嗣たる。本家なりとも氣もつかず。國恩を忘却し。公道を疎略に思ひ。邪宗同樣の詭道の物を信仰して。寂滅を樂みと爲し。動すれば。一致に黨を結び。公道に敵對する事を何とも思はず。六字の旗を立て。佛敵を亡す氣に成て居るでござる。また官軍に屬する者も。六字の旗に向ふは。佛敵になることと恐れて。公道に弱みを付たること。此の宗旨には。別して度々有たることで。軍書舊記などに。多く見えて有る。さしも名家の剛將方も。後れを取られたる事數度ぢや。是何故なれば。中古より門徒の軍。信心合體して。防禦堅固に。塊まつて居るに依てのことでござる。今もその時の甘味を得忘れず。この法德が。結搆な有難き物ゆゑのやうに自慢いたして。今太平の代に成ても。誤りを改めやうとの氣も付ず。唯後來の爲を思ふに。とかく一致に固めおかずは。後に信心がさめて。反心あらんことを危ぶみ恐れ。脇見させぬやうに。文學へは近よらせず。愚に凝て固まるのを。信心者だと褒

はやす故に。一と筋に。佛より上こす。尊き者は无いやうに心得て。文盲に陷いれられ。眞實の道は明察ず。一つに傾いて。他を顧ること能はず。何もかも。彌陀一體に綴つて仕まふ心に。成て居ること故に。六字の旗には。乃向はれぬ筈のことと見える。本より名ばかり有れども。形は无き詭言に荷擔して。我が身に付たる。血脈の大母屋樣を。疎略にし奉ると云ことも。穢多に附き合て。一蓮託生を願ふ心からは氣が付ず。頑愚に凝かたまる偏屈ほど。翻りがたき物はないでござる。天明年中。京都出火の時。御所は炎上に及んだなれども。本願寺には。命を捨て禦ぐ者が多い。これは國恩を思はざるので。切支丹徒黨の者共の志にも。劣らざる有樣だが。これ實に此の宗の僧徒の勸化が惡き故に。人を善道に導く途は无く。却て徒黨の芽萠を含ませることでござる。また近ごろ。頑愚の塊たる者に。不受不施と云ふ門徒ありて。怪說奇異を爲たる故に。堅く御制禁と成ッたでござる。然れどもいまだ。俗人の信心に。惡く塊つたる者どもが集り。中にも衆頭を私に知識と號け。かの凝親仁を尊みて。寄々に衆を催し。片言

交りの妄說を談じ。末法の僧には讓り置がたき。大事の祕密を。元祖より。俗人へ讓りおかれたるを。受嗣たる物ぢやと云て。愚痴の婆嬶を惑はすことだが。其の知識おやじも。畢竟は家業でもないことを。宗旨の心得違あるやうに誹り廻つて、何か密々と賣あるくことだが。凡て隱すことに。直なことは无いものじや。夫と云ふも信心が。惡がたまりに固まツて。邪正の明察もできぬ故のことでござる。一途に此の宗旨に傾き。命までも指上たきやうに思ひ。朝夕に尊崇する佛と云物は。實は人間が毫の先で。拵へたるばかり。形はとんと无い物ぢや。また不斷云て有難がる。歸命無量壽如來など云物も。同く有名無實の物でござる。さて近來此の宗の僧徒。專學問を勵み。博く覽を精出し。やゝもすれば。釋迦を談じ。法花を講じ。儒書に從來禪錄にて取捌くやうのことも。出來たが。今太平文明の御世なれば。斯うせねば。當世に合はず。檀那付合が出來ぬ故ぢや。尤これは惡きことでは无く。他見に法を精出す如くに見せて。隨分宜きことには有れども。元祖親鸞が。此の宗旨を發起した意味とは。大に背けたることでござる。學問を致して。闊才をせんと思ふは。自力の修行と云もので。實に本有の深妙を磨出す心ならば。他力本願の宗旨を止めて。正道自力の禪力。天台へ改宗せねば。其の道に背く道理でござる。しかし夫では。魚も喰はれず。妻も暇をやらねば成らず。夫は止とも无しじやと云て。開祖の思ひつき。宗旨の奧意とある。法文と云ものを見れば。餘りにどふ臭い。愚旨らしき物ゆゑに。隱密に宗旨の趣きに背いても。勤學いたし。ぬからぬ顏で。博識らしくすることだが。是全く元祖の法意を。蔑如にしたる所業でござる。夫故か。涙も交らぬ泣聲で。元祖の影前で。禮拜する行作と。內心の憍慢とは。大に相違した狂言ぢや。熊澤氏は此の宗他力を言立にして。人を誑し惑はし。然して置て。今自力を私に勵む。是晝劫盜の甚しきもの也。と書のせ置たは。尤もでござる。學才博識に成て。其の德を以て。正道實情に法を說き聞せ。人に益あるやうにすれば宜しけれども。夫はやはり。得手勝手で。たとひ人の爲に害に成らうが。國の御爲に成るまいが。構はゝこそ。唯わが身の。取込がつての能いやうに。まづ元祖の

自慢を先務として。益にも立ぬ功能を云ひ並べ。充もなき。過去未來の妄語を云ッてさへ居れば。人が信じて。持運んで尊んでくれること故に。婬樂は專とでき。魚鳥は喰次第。あまりに美味過たることゆゑ。惡いことは知りながらも。思ひ切られず。元祖を賣て。世業する所でござる。彼の亂世に。快く錢まうけする法を。法然が仕組出したおかげに依て。其の流を汲で。この宗旨を弘め。殊に穢多を取込んだが仕合せ。大豐饒と成り。その金の威光に依て。次第に宗旨も盛に成ッたものでござる。彼の亂世には。止ごとなき高貴の御旁にも。奉るべき貢物は納めず。剩へ亂妨に侵されて。こゝかしこに迯吟ひ。飢渴にも及ばれる程の處をも。救ッた者と云は僧徒ぢやが。夫故に。世も少し靜まれば。其の恩賞として。格も无き身に。過分の官祿をも賜はッたことでござる。

百五代。

後柏原帝永正の頃。御即位の禮行はるべき料も。調ひ兼たる處を。三條實隆公の御計らひで。本願寺より。其の御料を奉る。其の賞として。諸學無盡の。道心坊の顯如が。輿に乘る仕合になり。姓氏も審ならぬ坊主舳が。准門跡と成たる分限に憍り。法威を輝さうと云て。名聞を飾り。寺格を嚴めしくするなどは。悉く元祖の法式に背いたものでござる。高貴の虎の威を借て。僞惑の狐世に蔓り。人を愚欲に陷れると云ものぢや。然るを此の宗に傾き。有難がッて居る人は。世界に。門跡より外に。尊き物は无きことのやうに心得て。剃刀頂戴などと。一寸とした中剃に。白銀二枚の三枚のと。小澤山に掌握れて。野郎の安珍と云ふ。茶筌髮に成り。三十二文の。春日野同然の大根や。油揚豆腐の一膳飯を。御前のお相伴仕るなどゝ。上も无き事に思ひ。白銀一枚の。二枚の膳料を。涙こぼして指上る。莫太の高利。實に長者富に飽かずの諺に違ひ无しでござる。夫よりもまだむごいは。近頃其貪欲超過して。大坂其の外の國々へ下向の時。お立寄に。小休などゝ。樣々の名目をつけ。愚盲ものを誑いて。烏目一貫文の目見えには。乘物の戸を三寸五分ほど開き。五貫文には。半端ほどあけ。十貫文には。大概にひらき。五十貫文には。少し點頭。百貫文には。乘物を立て。片足をさし出すなどゝ。王法の格式と。元祖の淫流を。調

合いたして。充行の摘菜同然に。直價相應に賣歩行くとぢやが。寔に尋はずんば飽じと云ふ。聖人の語に。符合いたしたることでござる。いま此の時節。學問の筋も。やゝ開けたる世の中なれば。知らんで作る罪は輕い。知てなす惡事は重いと云ことも。承知の上の事なるべきに。穢多にまで。追從する法なる故に。今蓮花の地に。姓氏不詳の者も混ッて見えるが。此の國の亂に生育ッた者は。六條や大谷。其の外掛所の茶所臺所などで。うかと茶烟草も呑れることでは無い。早く正實に歸るべし〳〵。と申したは。隨分尤なることどもでござる。

右は岩垣氏の。一向宗辨論の大概を引出て。講說に及ぶことだが。猶委しきことは。本書を讀で知るが宜い。さて此の內に。南無阿彌陀佛と。書たる六字の旗に向ふを。佛敵と云て。恐れたと云に付て。心得置べきことが有る。其の趣をも。取摘んで申さうでござる。夫はまづ。

尾張大納言直義卿の。御撰なされたる。東照宮御年譜附尾と。云書に。永祿六年九月。尤も此の頃は。東照宮三河國に御座なされ。諸方の御合戰に。御暇なきをりから。御家人菅沼氏軍用の兵粮を。同國佐崎の上宮寺と云ふ。一向宗の寺より借られた處が。寺僧等怒て。菅沼氏の館に亂入いたし。下部どもを打伏せ。穀物を奪返したに依て。菅沼氏。大に立腹いたされ。酒井雅樂助正親主に訟へられたるゆゑに。正親主。使を以て制しても。更に用ひず。剩へ。其の使者を殺害し。右の上宮寺。幷に末寺末山の檀越たる。御一族御譜代の人々。多分一揆を起し。上宮寺は勿論。野寺の東證寺。針崎の正滿寺。土呂寺等に閉籠り進足往生極樂。退足無間地獄。と札に書て。甲の眞向に立て。恐多くす國主たる。東照宮に敵對し奉り。數度の御合戰になり。御一族を始め。御家人多く死亡致され。既に東照宮も。兩度ほど。御手を負せられた程の事で。とう〳〵。翌る永祿七年二月までかゝッて。漸々に御平定なされたでござる。

門人藤田有成曰く。此の上宮寺の僧等が。不義亂行。憎むべきことでござる。元來僧徒の身分として。穀物などを。餘分に蓄へ持たるは。佛法に乖けたること故に。罪のないでは無けれども。此は亂世のことなれば。暫く免しても置ませうが。第

一菅沼氏の借用せらたるは。神君の命ご聞え。貸すことを許し。其の品を遣し置て。其の後に其の人の館に亂入して。奪返したるは相すまず。不義亂妨ご云ものぢや。若なくて叶はざる物ならば。始め借やうご云はれた時に。何故固く辭み申さゞるぞ。又たとひ寺用の物なりとも。軍用の兵粮ご有ることならば。唯に施し與へるが。法師の本意では无いか。殊に酒井正親主の使者を殺したるなど。其の罪は免されざることでござる。斯て其の上宮寺の僧徒ども。軍ご云へば。必旗に南無阿彌陀佛ご云ふ。六字の名號を書付る事見えるが。殊に此の程の軍には。各々兜の眞向に。進足往生極樂。退足無間地獄。ご書たる札を立たごあるが。此の意は。阿彌陀佛の爲に。進んで敵を打取れば。死で極樂淨土に生れ。退いて。敵に後を見すれば。死で地獄に墮るご云ごゝろぢやが。先佛名を旗に書き。佛軍ご立たる上は。佛意を以て主ご致すべきこご。殊に僧ご成り　佛法に入たる者は。必ず其の道を奉ずべきことは。云までも无いでござる。然るを右に記したる。進退云々の語は。決めて佛意では有るまい。又此の語は。いかなる經文にあることか。是も決めて无いことぢや。然るに此頃の將士たち。旦暮軍事の閙しさに。佛經など讀べき暇なく。殊に中古以來の人々は。大概佛法に迷はされて居ることゆゑに。眞の佛意は。いかなる物ご云ことを知らず。然るに彼の奸僧ども。其の知らざるを幸として。有ること無きこと。己が勝手に云ひ立て。衆人を誑し欺くこと故に。其の頃の軍人たち。親族などの討れたる。哀傷の處へ付込んで。無常の法文など讀聞せ。臆病心の付きたる上に。佛敵ご云趣きを。眞しげに說聞せ。適々には。異驗を見せて。威し掠むることもある故に。愚痴なる者は。云までも无く。名將智士ご。稱せらるゝ人々までも。大抵は。欺かれぬは无ことで。實に僧等の奸計。憎むべく罪すべきことでござる。爰に又。阿彌陀佛ご云物の事を按ふに。先佛ご云者は。慈悲正直を。第一ごするご云ことだが。此の上宮寺のことは言ふに及ばず。凡て僧等が惡業奸術を知りつゝ。其の儘に見過すは。阿彌陀も僧等ご同意の物か。是非をも知らぬことなら

ば。不用にて役に立たず。知りて其の罪を糺さゝることならば。佛の罪も輕からず。木像ならば。燒捨てしまへばよし。銅像ならば。鑄潰して。軍用の物にも製ッたならば。少か其の罪を贖ふべきことでござる゜と有成が申したが。是も尤なる論でござる。

偖また其の後も。攝州大阪。野田福島。或は伊勢の長島。紀州の雜賀。又は加賀越前越中などの一向門徒。所々に起り。近國の悪徒を集め。山賊海賊などを業といたし。或は官軍の妨をなし。少かの利を見ては。是非を顧みず。逆威に募ッたることゆ故に。元龜元年九月。織田の信長公。まづ攝州野田福島の賊を。御征伐あッた處が。賊等三千餘挺の鐵砲を以て。打立たる故に。信長公の大將。野村越中の守を始め。夥く討死致し。甚危き戰で有たる處を。前田利家卿の働きに依て。辛くして。賊徒を追退けられたでござる。また同二年五月に。伊勢長島の門徒を。御征伐あッたる處が。此時も。氏家常陸の介など。賊の爲めに討死いたされ。同四年九月にも。又長島を征伐せられ。門徒數千人を誅戮せられたるが。身方にも。大將林新三郎など討死いたす。其の後も。長島賊徒は。篠橋。大鳥居。かろと島。大島。中江の。五个處の城に閉籠ッて。益々逆威を振ひ居る故に。天正二年七月。信長公。五萬餘騎を以て。征伐し給ふ處が。八月三日。大鳥居の門徒ども。潜に忍び出やうとする處を。男女二千餘人切捨。耳鼻を刋で。船一艘に積入れて。城中へ送られたでござる。處が此の勢ひに恐れたることか。同十二日篠橋に起つたる奴ばら。一命をさへ助けて下さらば。長島の城を欺き取て獻りませうと願ひ出たる故に。命を助けて。長島へ追入られたる處に。長島の奴原是を知て。其計事は相違したなれども。九月二十九日。長島の城中怺かねて。立退く處を。小氣味よく。三千餘挺の弓鐵砲を以て。過半打殺したでござる。然る處に。其中千人ばかり。必死に成て。本陣へ切込だる故に、信長公の御伯父。津田大隅守殿を始め。御一族十餘人討死いたされ。嚴しき戰ひで有たるゆゑに。門徒原は。僅に三百餘人ばかりに成て迯去たでござる。是にも懲ず。天正三年八月。加賀越前の門徒。八个所の城に閉籠り。近國近郷を惱ましたる故。信長公

御征伐ありて。下間筑後守。同和泉守をはしめ。賊徒數千人を誅戮せられたでござる。然るに一向宗の大將は。大坂の城に居て。數个所に枝城を搆へ。賊徒夥しく閉籠り。甚强大なる勢で有つたる故に。信長公は。其本城を攻滅さうとて。天正四年四月。大坂に御發向なされ。御合戰あッた處が。賊の勢ひ强く。原田備中守など討死いたされたでござる。同五年二月には。紀州雜賀の門徒御征伐。同八月にも大坂合戰あり。天正六年六月には。紀州熊野の海上にて。信長公の大將。九鬼右馬允。雜賀の賊船五百艘と戰ひ。同年九月越中國今泉の城にて。門徒の奴原。一揆を起したる故に。信長公の大將。齋藤新五馳向つて五百餘人を討殺す。斯の如く度々。信長公も力を盡して。御征伐あッたなれども。中々以て盡ること无く。さすがの猛將も。手に餘された程のことで有つた故に。竟に天皇も逆鱗あそばされ。同く八年七月。勅使を。信長公と大坂とへ下され。門徒の奴原。速に大坂を退散いたすべしとの御事ゆゑ。さすがの惡黨も勅命には力なく。紀州の方へ立退て。先平穩には成たでござる。

門人渡邊弼云く。佛法渡りてより以來。凡そ千有餘年。僧徒の彌增に驕たること。何ばかりでござらう。古くも種々の謀計。奸術を行ひ。或は幻術を以て。異驗を見せなどしたる者共も。多くあれども。夫らは大抵。我か宗を强て弘めやうとするの巧ごとで有つたる故に。惡きことは論なけれども。少しは見免すべき方もあるを。此の元龜天正の頃の僧徒らは。惡逆無道なること。申すべきやうも无く。中にも此一向宗の者共は。諸宗に越たる大罪を犯したることと。右に記されたる趣きを以て。知べきことでござる。扨かやうに。惡行の增長したる。其元を尋ぬれば。佛と云曲物が。世に用ひられて。衆人の惡行を誘ひましたる故でござる。其は元來惡性なる者は。自からに。惡事を爲たく思ふ處を。極重惡人。無他方便。唯稱彌陀。得生極樂。一念彌陀佛。即滅無量罪。などゝ云ひ聞せ。何なる重罪を犯したる者も。たゞ吾か名を稱する事ならば。其罪たちまちに滅えて。極樂淨土と云ふ。結搆なる處に生ずることを得さするぞ。と説聞する故に。唯なんまいだと唱さへすれば。魂の

行方は安心して。思ふが儘の。暴惡を爲たることと思はれる。然れば僧等が惡行の本は。阿彌陀。觀音など云ふ佛どもが。腰押をして。勸めたることと明白でござる。抑人は。爲すまじき惡事をなす時は。上に君上ありて。罰し給ふ事でござるが。これは人をして。惡道に墮し給はざる御仁德で。則世を治め給ふ。御政道の有難き處で。是をこそ。彼らが謂ゆる。慈眼視衆生とも申すべきことでござる。然るを阿彌陀佛などは。是に乘いて。惡行を爲たる者をも。助けやうと云ふこと故に。惡性のある者は。幸ひとして。倍々惡を爲す理なれば。これ則。人に惡を勸めると云ものでなくて。何で有りませう。佛を始め僧徒らは。悉く君上に背き。御政道を蔑如する道なるがゆゑに。佛法盛んなれば。ますます世は衰へ。亂れるものと思ふが宜しく。實に忌々しき道ではござらぬか。凡そ數百年間の亂世に。挂卷は畏けれども。宸襟安からざることのみに坐々を。足利氏代々其の職に在りながら。天下を治むべき力なく。剰へ。花奢風流を好まれたること多き故に。いとゞ亂れに亂れたる世の中なるを。織田信長公。豊臣秀吉公。また東照神祖命。次々に出まして。暴逆の輩を打罰め早く宸襟を安んじ奉らんの御心にて。専と其のことに功み仕へ奉らるゝ時なるに。一向宗の僧徒共。強慾暴惡を擅にして。天下治平の大業を妨げると云ふは。反逆に等く。憎むにあまりある大罪でござる。僧徒は云ふに及ばず。其の本尊と云ふ佛どもをも。悉く引出し。或は燒捨。打殺すとも。罰せずには差おかれまいでござる。織田豊臣の二公。また神祖の如きは。全く。叡慮を安んじ奉らんとの御深意で。決して以て。武田。北條。今川等の如き。私慾の軍をなされるのではないでござる。と弼が申たも道理でござる。

新井氏の讀史餘論に。按ずるに。加賀の富樫介が家賊に苦むこと。度々に及び。近くは我が神祖も。此事に依て。國ほとんど危かッたことでござる。されば御代の始に。東西に御分ちなされて。少しく其の勢を御抑へなされたなれども。尺寸の地をも領せずして。二流猶。國君と同樣の有福ぢや。是は徒事で

はない。尤も心得あるべきことでござる。と見え。また織田殿の兵威盛んなる。終に彼を碎くこと叶ひ給はず。然れども此の人の世に。叡山の兵器を燒き。根來の寺を燒亡されて。數百年の禍を除かれたるは。尤も其の功大なりと申すべきことぢや。唯一向の一宗。今に其禍絕たことゝも見えず。後世また國の憂を爲すべき者は。此の一つばかりが殘つて居ると。君美主の云はれたるは。悉當然の論でござる。猶上に申したる趣き。と考へ合せて。神國の神民と有らん者は。能々其の宗意の奸猾なる所以を辨へて。ゆめゆめ惑はさるまじき事でござる。何と此の中に。彼の宗旨の人もあらば。其の宗旨の本意の處迄を。聞込れた人も有らうが。篤胤が今申したる趣に。違ひあるまい。我が道の妨害を爲たるをば。何の道をも。かう明かに辨論しつけて置て。扨我が古への眞の道を。人に云ひ諭さんとする。この篤胤如來が。第十八の願ではなくて。第一の御誓願ぢやが。何と聞受られたかな。面白いことでは有りませんか。

出定笑語附錄之二

平田先生講談　門人等筆記

扨次に日蓮宗に於て。天照大御神を始め奉り。外の神々をも。法華勸請とやらでなくては。信ぜぬと云ひ居るわけは。先この日蓮と云ふ法師の立たる宗旨は。佛道の大意に演說致したるごとく。天台宗の宗意を悉く竊んで。吾がものとなして。建立したるものでござる。それゆゑ四箇の名言とか云て。念佛無間。禪天魔。眞言亡國。律國賊などゝ。我慢の立言を爲たれども。天台宗のことをば。さんと惡くいふはず。ほめて有るでござる。その天台宗の宗意とは。まづ日蓮宗に。法華經を。最爲第一の經王ぢや。と云て用ふるところは。すなはち赤縣の。陳の代隋の代のころに出で。天台山の佛隴寺。と云ふ寺の三代目に住したる。智顗字は德安。號を智者大師とも。また天台山に居たる故。天台大師とも云へる法師の。始めて云ひ出したる說で。この僧が。法花經の文段を注釋して。文句と云ふ書十卷を作り。また妙法蓮華經と云ふ題號の訣をといて。玄義と云

書十卷をつくり。また摩訶止觀といふ書十卷を作て。觀心のことを云たでござる。この玄義十卷。文句十卷。摩訶止觀十卷。すべて三十卷を。天台の三大部とは云でござる。然て斯やうに。法華經一部を。悉く注を書て。專とかの經を尊信すること故。その智者大師が流義を。法華宗と云ひ。また天台山より弘めたること故。天台宗とも云でござる。偖この宗意を。かの傳教大師が。桓武天皇の延暦二十三年に。赤縣へ行て。智者大師より七代目の。道邃と云から傳へ受て。歸て弘めたでござる。所を日蓮はるか後に出で。その比もつぱら法然の念佛宗。親鸞の一向宗なども。山があたッて。弘まる樣子を見て。夫を羨む心より。己また一機軸を出して。親鸞が。法然の趣意を取て。また一趣向を轉じたる如く。天台の宗意をそのまゝ取て。夫に吉田卜部の。山神道の說を調合して。かの宗は建立したものでござる。それは日蓮宗に於て。法華經を用ふる所は。やがて天台の意で有から。何もかも夫にならひ。先その觀心と云が天台の智顗が。摩訶止觀の書に云たる趣のまゝ。また一念三千。三千一念の法問と云ふも。智者が云たること。また諸法實相娑婆即寂光の法問と云も。智者大師が。文句と云ふ書に云ひおきたる事だが。皆とあることゞもは。皆かくの如くに。彼を取りこんだものぢやに依て。かの日蓮が御書とか云物を見れば。みな右申たる。天台三部の中から。此處彼處ぬき摸し。夫を和解して假名にかき。また〳〵他宗の。少なる非事どもを見つけ出して。大きな聲をして。罵り立たる迄のことで。外に何も。是が日蓮の新發明と見ゆることはないでござる。さて天台宗は。傳教大師が傳へて來てこれは御國の古へ人の。佛を信ぜぬ者を。信じさせんが爲に。神を取こんで。佛法を弘むる方人にしたるもので。其趣意を。日蓮が取たるもの故。やがて天台宗に於て妄作したる。三十番神の說を用て。月三十日の日を。伊勢大御神をはじめ。替り〳〵に持分て。法華經の番をして守護するなどゝ挂卷も畏く。恐れ多きことを類張出して。猶その根じめを固めんとして。其頃吉田卜部の家は。兼益と云た時分だが。彼家に於ては。曾て古に無き說どもを妄作して。天兒屋根の命より。相承の神道ぢやの。我か家は神道の長上ぢやなどゝ云を眞と心

得。入門して墓何の限りなる許狀を受け。其說を聞とり。我が道へ調合したが是もやはりその以前の法師ども。行基。傳敎。弘法。親鸞などが。神を引こんで。我道を弘めたる跡に習はんでは。とてもこの神國の人を服さすることは。出來ぬからのことで。是は然もせずはなるまいが。此に氣の毒なることは。その吉田家から傳受したる。神道と云が。實は吉田家に於て。妄作したる說である上に。日蓮が眞言亡國。と云て詈たる。其眞言の說を以て。作つたる說なる事を知らずに。取こんだる事故。是が神道の正說ぞ。これが神道の行法ぞと。頑に心得ていたゞ居る所は。かの寄祈禱を始め。みな眞言の旨だが。何と日蓮は。過去。現世。未來の。三世了達の。釋迦の一弟子たる。上行菩薩が再來で。即三世了達の男ぢやと。今も彼の宗旨の人々は。口についたやうに云が。實は吉田卜部に。一杯くはされて。かの眞言法を。眞の神道行法ぞと。眞うけに受たのぢやが。何と氣の毒なことでは無いか。斯て神社も。日蓮が勸請したる祠の外は。みな禰前勸請と云て。邪神ぢや程に拜むな。それを拜んでは。謗法と云ものぢやと

云て。既に日蓮が書たる間註抄。諫曉八幡抄。など云ものに。伊勢大神宮。八幡宮。其外日本國の諸社は。皆惡鬼邪神也と。こゝかしこに記して有る。是を弘めて。かの宗旨の輩が。人をむゝむる口ぐせに云から。夫を人が難めて。日蓮が勸請したでなくとも。大神宮は大神宮ぢやと云へば。いや同じ大神宮と云ても。法華の大神宮と。餘の大神宮と違ふと云でござる。我慢も大概が有たものぢやが。いつ法華天照大神と云ふ神の。出さしッたことがある。此返答が聞たいものだと。此やうに强くいふ人がないに依て。能いかと思つて。かやうなたはけを云が。かの宗旨の僧どもゝ。大概に墓何を盡すがよい。日蓮が勸請ならぬ神々は。天皇の御大祖。天照大御神を始め奉り。八百萬大神等。また將軍家の御祖。東照大神君も坐とは知ぬか。それをみな邪神と云てよからうか。何にかく寬仁大度の御政事を。御行ひあそばして。彼等の云ふ言をば青蠅の。ぶん〳〵いふ類ひとも聞し召すか。免しおかるればとて。付上り。上を憚からぬ。不屆な云ひ方ぢやが。斯やうに上を憚らぬ。說を云は。皆その祖師たる日蓮がいひ流した

る毒に。食ひ醉て居るからのことぢや。その日蓮が流したる毒と云は。まづその著したる。王舍城抄と云に。日蓮を訕る法師原が。日本國を祈らば。彌この國亡ぶべし。上一人より下萬人まで。もとゞりの分つやッことなり。臍を噬ふためし有べし。後生はさておきぬ。今生にっ法華の敵となりし人をば。梵天帝釋。日月四天。罰し玉ひて。皆人に見ごりさせ玉へ。と申付て候。と記し。また報恩抄など云もの。其外の書にも。平城天皇より已來。御歷代の天皇樣がたを。大惡無道の大罪人なり。と記し奉り。また我宗にあらざる人々は。貴賤悉く大罪人なり。一人なりとも。命をとりたるが。至極の大善根也と。數箇所に記し。また撰時抄。阿佛房抄。幷に。諫曉八幡抄など云物にも。上を罵詈ひ。惡口したる雜言。この外計へ盡されぬほど有から。この流をくむ法師ばら。及び其宗旨の輩の中にも。頑なる輩は。この口まねを致して。上を憚らぬ惡言を吐散す。夫は申し出るも畏きことぢやが。此事は。推日蓮と云ふ書にも記して有るが。紀伊國法實山の。日如と云ふ者の記したる書に。我宗にあらざる天子將軍は。畜類禽獸に劣り。敬ふに足らず。人倫と思ふべからず。と書き。または他宗の人々を。上下となく。一人なりとも。命を取たるがよし。他宗の寺院。及び在家を燒拂ひたるが。題目唱ふるよりも。大善根なり。などゝ記して有が。斯やうに云のは。皆日蓮が。上を恐れぬ惡言を發したる毒に。食ひ醉ての事で。何とも惘れほしたことでござる。都てかの宗旨の輩が。我宗のは。神も佛も餘のとは違ふと云ことをよく云て。釋迦をさへに。他宗の釋迦と。我宗の釋迦と違ふと云ふが。是も何の世に。二人出たことがある。天竺迦毘羅衞國の。淨飯王と云ふが子の。釋迦と云より外にはないが。もし有と云ならば。何の經にあるか。出して見せろと云のだが。何あるものか。彼宗の僧どもが。我慢說ぢやものを。斯て畏くも。勿體なくも。天照大御神。八幡大神をも。かの穢はしき。法華經の番をし給ふなど云て。己が作つたる。ひげ題目とか云ふ。をかしな物の左右に記し奉つて。佛と云へば結搆らしいが。實は乞食の開祖たる釋迦が。下司の如くあしらひ奉り。尙すまぬことは。今そのことを申出るも勿體なく。實に涙がこぼれ。髮

も逆立ち。拳の握らるゝことで。彼宗旨の人が。ますする事ぢやが。亡者の帷子に。かの髭題目などを書くは。是はその好む事故に。どうでもぢやが。大御神と。八幡御神の御名をさへに書付て。著せてやるが。何とそら恐ろしいと云事を知らぬ。狂氣者どもでござる。人の道をたどる者は。家に穢れのことでも有れば。神棚を封じさへ付るではないか。夫にかゝる事をすると云は。みな日蓮が流したる。我慢の毒に。くらひ醉て居るが故でござる。日蓮より以前の宗旨。天台。眞言。禪。淨土。一向を始め。すべて神をば。方人にせんとて。引こみはしたれども。此やうに甚しきことをする宗旨とては。とんと有りはせぬでござる。また傳教。弘法。法然。親鸞なども。日蓮のやうには。我慢の悪口雜言を云はず。また彼がやうに。高ぶりもせなんだが。彼宗旨ばかりが。どうして斯やうにけしからぬ我慢の。穢はしきことをするぞ。また日蓮は。なぜにあのやうな。我慢の悪言を云て。高ぶッたものぢやと。年ごろ考たることだが。是は斯やう有べき謂がある。日蓮贔負の人々。必ず腹を立つまいぞ。其訣と云は。日蓮は元來。はなはだ以て。穢はしき者の胤ぢやに依て。其世の人が用ひなんだ故に。其憤る心より。我慢の悪言も發し。また高ぶりも致したことゝ見えるでござる。是は今の世にも。藩中などの。家の子と云て。先祖代々。士で有た家柄の人は。然しも高ぶりもせぬの物ぢやが。かの足輕中間から。取立にでも成たるやす侍が。とかくいぢかり股をして。目下の者をいじめたり。又却て目上を憚らず。高ぶりたがり。又乞食。非人。穢多なども。臭いもゝの身知らずとやらで己が身の穢く。けがらはしきことを省みず。世の人と同じやうに高ぶり。また人知らぬ所では。結句凡の人よりは。高い面をして。とかく清く。尊き事物をば云ひ消し。嫉みなどするものだが。日蓮が。我慢の悪言高ぶりは。夫と同じく。實は其身の出所が。あまりと云へば。卑き者で有たる故に。かうしたも隨分尤なことでござる。と云たら。日蓮贔負の人は。腹を立て。いや御祖師様の氏は。三國氏で。父上は。井伊家の先祖と同じことで。遠州の太守。貫名重忠と申して。藤原氏。母上は清原氏で。公家衆の流れぢや。その故。井伊家と同じやうに。橘を

紋所に著る。などゝ云であらうが。然は云さぬ。此方は。そんな通りをくふのぢやない。夫はいかにと云に。彼系圖は。後世かの宗旨の僧どもが。我が祖師の。卑き出所なることを恥かしく思ひ。寛永年中。幕府で御撰びあられたる。系圖の。井伊家の所を。その儘に拔うつし取て。僞り作つたものでかの系圖に。井伊太郎盛直が子の。實名四郎。その子直行と云までは全く寛永系圖を寫し取り。夫より以下は。彼輩が作出したるもので。寛永系圖を見たる人は。一と目に譯ることでござる。且その日蓮が系圖は。房州小湊の。誕生寺の什物で有たるを。出したると云が。夫は享保。寶暦時分からのいひ言で。その以前に作たる。註畫讃など云書に。記さぬ所を以て。僞りなることが知れる。いよ〳〵誕生寺に。その樣な系圖が有たならば。探て此に記さぬ筈はないでござる。また古書に。曾て遠州の大守に。實名と名乘たる人なしでござる。若有らば。正しく書物。何にあると云事が聞たい。かの僧らが。僞書に記したることは。此方承知せず。且は然やうの僞りを云ては。却て日蓮の本意に叶はず。謂ゆる謗法に均しき罪で有らうぞ。夫はいかにと云に。日蓮が。我慢惡口の高ぶりは甚いけれども。生れつきはと云へば。弘法や親鸞などよりは。大きに正直な所の有たる僧でござる。それ故。吉田家にも。一ッぱい食されて。彼家の僞作神道を眞に請たり。又その書貽したる書等を見るに。その世に有たる事どもは。さしも僞を云はず。かの龍口で。首を斬られやうとしたる時。太刀が折れた。などゝ云やうな僞りは。とんとなく。あの類ひは。みな後世の僧どもが。赤縣。やまと。天竺の古事を集めて。僞り作りたることでござる。それは云はずとも知れたことだが。又其證據もあるぢや。其證は。此時日蓮が。鎌倉の建長寺へ贈たる書がある。其おもむきは。

昨日拙僧於濱邊可爲斷罪之處。以大禪士之御慈愛滅死罪一等可被處遠流候。誠禪師之大恩。生々世々難忘。昨日御慈悲之無實使者。日蓮并門徒之滅亡無疑。後日有露命者。何豈不奉報其恩也。右之通。侍者中宜敷請上達。

文永三年九月十四日　　日蓮百拜在判

建長寺方丈大和尙

此書は先年、近江人鵜永如心茂彦が。寫し來たのでござる。以前は毎年。土用干の時に見せたるが。或時に。日蓮宗の廻し者が來て。盜まうとした故に。その後は容易くは見せぬと云ことぢや。

とあるでござる。然れば建長寺の和尚の蔭で。免されたのぢや。夫に相違ない。太刀も折れたでなく。不思議なことは少しもないでござる。さて日蓮はその正直なる心より。佛道の本意と云ものは。氏素姓。もとの身の貴き賤き。系圖などには。拘はるものでなく。僧と化ては。雲上人でも。穢多でも隔なく。其道に至りたる者を。上とすると云の意ゆゑ。己が素姓を更に隱さず。何と書ておいたと見れば。その著したる佐渡書と云ふの中に。日蓮今生には。貧窮下賤の者と生れ。旃陀羅が家より出たり。心にこそ。すこし法華を信たる樣なれども。身は人身に似て畜生なり。魚鳥を混丸して。赤白二渧とせり。其中に識神をやどす。濁水に月のうつれるが如し。糞嚢に金をつゝめるなるべし。心は法華經を信ずる故に。梵天帝釋をも。猶恐れと思はず。身は畜生の身なり。色心不相想の故に。愚者のあなづる道理なり。心もまた身に對すればこそ。月金にもたとふれ。云々と。有のまゝに記して。隱さぬでござる。是が實に。出家の本意たる處で。日蓮が心には。世の法師どものゝ系圖さわぎをするなどが。佛道の本意でないと。煩くも思ふ心より。かくさなんだものと見えて。殊勝なことでござる。その自書に。日蓮は貞應元年壬午。安房國長狹郡。東條鄉生也と見え。また佐渡書の奥に。文永九年壬申三月二十日。日蓮。弟子檀那御中。とあり。是は佐渡國へ流されて。彼所より鎌倉の人人へ送れる書ゆゑ。佐渡書といふが。その門流の者は。尊んで。佐渡御書とは云でござる。さて日蓮宗に於て。穢多や非人を大概檀家にしたのも。佛法に於ては。貴賤のへだてはいらぬ。と云ふ心から。致したことでござる。所を。その本意を知らず。かれこれと作り系圖をして。能きさまに云なすは。結句贔負のひき倒し。と云ものでござる。もし日蓮が父は。實に遠州の大守。貫名重忠。と云ふ歷々で有たならば。右の如く。我慢高ぶりを云ふ心より。その如く記しておかぬことが有うぞ。夫を隱して。旃陀羅の子ぢやと。云はうはずはないでござる。然らば。その旃陀羅と云ものは。何のことぢやと云ふに。此は

天竺の語で。夫を翻譯名義集に依て見れば。その人倫篇と云に。旃陀羅此云屠者とも。また此云嚴熾。謂惡業自嚴。行時搖鈴。以竹爲標幟故。若不爾者。王必罪之。名爲惡人。與人別居。入城市則。擘竹自異。人則避之。と見えて。この意は天竺に於ては。旃陀羅と云ふ物は。赤縣にある屠者のことぢや。その屠者と云は。獸の皮をはぎ。その肉を屠り割くことを。業とするもので。天竺の屠者は。ゆく時は鈴を搖り。竹を持て。たゞ人とわかるやうにして。標幟となし。かゝる惡業をしながら。斯の如く嚴にするもの故。その旃陀羅と云ふ言を。また嚴熾とも譯すると云ふことで。若この者が。鈴をふらず。竹を持んであるくと。必ず國王から。罪に行ふとあるが。此の凡人と。紛れるからのことゝ見える。さて斯やうの汚れたる者故　かの國でも。惡人と名て。人と遠く。別に居らしむることで。此者もし城下などへ出ると。右の竹を以て。そこらを擊て。自ら旃陀羅なることを。知するやうにするから。人がその穢れをいやがッて。則これに違避ると云ことで。何のこともなく。御國の穢多非人のことでござる。

彼國でも。此をば殊の外に。汚き者として。凡人と別んが爲に。鈴をふらしたり。竹でたゝかしたりするので。丁ど御國の非人を。ざん切にして有ると。同じ訣でござる。何と日蓮は。正直な法師ではないか。此を有のまゝに。秘さず。書貽したる處がきついでござる。實にこの日蓮が。記しおいたる如く。穢多の子に相違なく。その生れたる故は。遠江國周智郡。貫名村の女が。安房國小湊に來て。或百姓の所に奉公して居たるが。穢多と密通して。日蓮は。其中より生れたるを。怒てその主人が。その子を。ある寺の梅木の下へ棄たるを。其住寺が拾つて。育て上げたのに違ひない。それをまた。日蓮記などを見るに。妙星天子が。梅木に天降つて。どうしてかうしてと。仰山な僞を云が。本人の日蓮が。自ら旃陀羅の子ぢやと云て置たものを。どうならう。とんと論はないでござる。然るを。挫日蓮の笑解などゝ云ものに。是を云直して。日蓮親父。房洲小湊浦へ配流せられ。漁人となり給へるを云り。などゝ云ておれども。何しに日蓮が。漁人を。旃陀羅と書ておかうぞ。この位のことを。知らぬ男でもない。是も

最負のひきたふしでござる。定て斯云はゞ日蓮最負の人は。胆がつぶれやうが。夫では未だ佛道の本意を知らず。日蓮を能く信ずると云ものでなく。眞の佛法者とは云へぬでござる。これを否なことに思ふならば。佛法は好まぬが宜い。なぜなれば。斯やうに素姓の卑き者でも擇はぬのが。佛道の本意ではないか。佛法を好ながら。是をいやに思ふと云は。それや皆諸越に。龍が好だと云て。常に繪を書た龍を見て居た人が。生た龍を見て。氣を失つたる譬とおなじことでござる。高貴の胤であらうと。斯やうの賤き者で有うと。夫に擇はず。佛德の至つた者を尊ぶが。佛道の本意ぢやに依て。日蓮は穢多の子で有うとも。少しも恥ることはない。假令我慢にもせよ。斯ばかり一宗を。弘めた程の器量もの故。そこが此僧の勝れた處だから。尊ぶなら。其を尊ばねば日蓮の氣に入らぬ。なぜなれば。日蓮が。旃陀羅の子なることは。自分で書て置たること故。これが正しく。後世の僧どもの云ことは。僞りだからのことでござる。夫は譬へば。拙者は今は由有て。平田氏を名告れども。元來實父は。大和田氏で。尤平田。大和田。兩氏ともに。同じ出自で。畏くも。天照大御神より。御三十二世の御孫に當り坐す。桓武天皇の御後胤。常陸下總の國主。千葉介平常胤が末葉で。血脉連綿として有もの故。すなはち紋所も。斯樣に月星。また澤瀉を著け。胤の一字を冒して。平篤胤と申すから。此のいはれを書貽して置ませうが。拙者の素姓を。拙者が記し貽すことゆゑ。これが正しい所を。後世にその書のこしたる書等を見て。尊信する者の心に。此人は凡人でなくて。空より降たの。木の股から生れたのと。神妙らしく。言立まいものでもないが。夫は最負の引倒しで。拙者の心には面白くない。と云やうなものでござる。今日は序ぢやに依て。猶も今の日蓮流の輩が。日蓮を最負の引倒しを云て。日蓮の氣に入らぬことを爲る訣を。一つ云ませうが。まづ日蓮を菩薩と云ふこと。是は曾て當らぬことでござる。夫はまづ御國に於て。古より菩薩と云ふ號を賜はりたる僧は。菅原寺の行基菩薩。大谷寺の光照菩薩法然。招提寺の大悲菩薩覺盛。西大寺の興聖菩薩叡尊。光泉寺の忍性菩薩。大經寺の大乘菩薩圓澄。立政寺の興正菩薩。この七人の僧に限る。是は

情なる記録どもに有て、紛れなきことでござる。所が日蓮に。菩薩號を賜はりたること。古昔に曾てない。夫はまづ古くは。律。倶舎。華嚴。成實。法相。三論。天台。眞言。これを八宗と云て有たる處を。後に禪宗が渡り、淨土宗が出來てから。是を加へて十宗と成た所へ。親鸞。一向宗を弘め。次に日蓮も。一宗を立んと爲たけれども。御取上げなかッたものでござる。故に。日蓮が立たる宗旨は。今こそ斯やうに弘まッたなれども。以前は御免なく。只こゝかしこの田舍などに。信ずる者もちら〳〵有て。その信心より。己が領所を與たり。又は領所に。その宗の寺を建てなんどしたるより。ふえたもので。是と一向宗とは。宗外として有たものでござる。夫も今の如く。御政事が。隅からすみまで。行屆かるゝことで有ならば。捨てはおかれぬなれども。北條が。鎌倉の執權として。天下を指揮いたしたる時分ゆゑ。國々の取締りも。屆かなんだを幸に。かく弘まッたものなれども。右の訣ゆゑ。今も一向。日蓮の兩宗は。朝廷に於て御定めなされたる。十宗の外でござる。斯やうの訣ゆゑ。何時どうして。菩薩號を賜はることが有ませうぞ。然るに彼宗で。手近く見るものぢやが。法華三卷書と云がある。此等に云へる趣は。

後光嚴院文和元年。天下大にひでり。諸社に雨を祈るに驗なし。依レ之。大覺上人に命ず。此年文和元年六月廿五日。桂川の邊にて。日蓮の像を建立し。雨を祈り。たちまち驗あり。依て日蓮大菩薩と。敕筆を染め給ふ。御よろこびの餘り。日朗。日像へも。菩薩號を賜はる。大覺へは。大僧正の宣下也。上古よりの菩薩號は。行基。叡尊。二人許り也。然れども。この二人。大菩薩にあらず。孫弟子まで。菩薩號。誠にためしなきこと也。

と記して有るが。是も後世の僧どもの僞りで。夫はまづ是に大覺上人とあるは。身延の住職でござる。また上古よりの菩薩號は。行基。叡尊二人ばかり也。とあれども右申す如く。七人あるでござる。出家とありながら。此くらゐのことも知らず。扨この後光嚴院と申すは。足利高氏が。私に立まゐらせたる。謂ゆる北京の君にて。その文和元年と云ふは。吉野の賀名生宮に。大御代知し食し。後村上天皇の。正

平七年なるが。その六月に。ひでりで有たと云こと。この時分の記錄に曾て見えず。諸社に御祈り有て。驗がないとは。夫は大變なことぢやが。其時の記錄に。夫程の大變を。記さぬことが。どうして有ませう。殊に古への御定は。旱霖ともに。夫を御祈りなさるゝ御社は。上七社と云て。伊勢。石淸水。賀茂。松尾。平野。稻荷。春日。又中七社とて。大原野。大神。石上。大和。廣瀨。龍田。住吉。下八社と云て。日吉。梅宮。吉田。廣田。祇園。北野。丹生。貴船。これを總て。二十二社と申て。何れも何れも。止事なく。尊き大社の御神々に坐まし。この上に。祈雨十一社と云て。天雷。水主。木島。乙訓。平岡。恩智。廣田。生田。長田。坐摩。垂水などの御社へ。敕使を立。幣帛を奉られて。御祈り遊ばさるゝことで。これに驗のないと云ふは曾てなきことでござる。偖また斯やうの御祈の爲に。建置るゝ大寺は。比叡山と。三井寺にかぎることぢやに。どうして宗外なる。日蓮宗へ仰せ付らるゝことが有ませう。若また然やうに。餘宗へでも仰せ付らるゝやうなことがあると。まづ比叡山と。三井寺とで合點せず。夫では桓武天皇の。敕願所と建られたる規摸が。相立ぬと云て。いつでも日吉の神輿を。かつぎ出して。京を騷がし。既に天皇にも。加茂川の水と。山法師ばかりは。朕が心のまゝならぬと。仰せられた程のことで。大騷動になること故。中々天皇の思召でも。日蓮宗へ仰せ付らるゝことなどの。出來ぬ時分だから。さやう有らうはずもなし。夫でも。達て有たことぢやと云ならば。その騷動も有たはず。また然ばかり止事なき神々に。御祈り有てすら。降ぬ程の旱の。珍事が有たならば。その時分の記錄どもに記さぬことが。どうして有ませうぞ。殊には此御代より先。伏見天皇の御世。正應。永仁の頃より。公家。武家。一同の評議で。日蓮黨を禁制すべき由を。度々下知あッたなれども。とかく制しおほせられざる故。花園天皇の御代。延慶年中に至て。京都にあらゆる日蓮黨を。追却すべき由の院宣を。御下しなされたことがある。その御文面に。

近日有二一類之僧徒一。爲二諸宗之讐敵一。禁二誡之趣一嚴制先畢。而無レ憚二憲章一。不レ恐二敕命一。乍レ居二於洛陽一。結二黨於道場一。引二率弟子同朋一。妄稱二法華持者一。

號之自宗。俺破佛法。天台之所說。月氏之教相。豈如斯乎。雖似展轉隨喜之功德。忽犯誹謗正法之罪障。以外道之行儀。偏表邪惡。按本朝之比附。宜道料坐。爲國爲法。不可不禁。宜卽禦衛追却京都旨。　院宣如斯。仍執達如件。

延慶三年三月八日

かく仰出されて。此時京中の日蓮黨を。追放せられたる程のことで。此は堂上方の日記。また法華弘通抄。などと云ものにも記してある。右やう先皇の院宣を。御下し遊ばされたる程のことで有ものを。夫よりわづか四十年許りの間に。斯やうに首尾の直らふ答はなし。何のこともなく。己が我意を立んとして。畏くも、天皇に申かけをなし奉るのでござる。然れば日蓮に。大菩薩と敕筆を御書遊ばしたと云も。日朗。日像に菩薩號。身延の大覺に。大僧正の宣下が有たと云も。みな僞りで。その敕筆と云もとくに燒失して。その摸しがあるなど云けれども。擬物なること論はない。是は吉田家に於て。神道長上の綸旨など云ふ物を僞作して。夫も本書は燒失したと云て。寫しぢやと云ふ物計りを持て居て。是が證據ぢやと云さわぐを。吉田家の門下たる日蓮宗。それを見まねて爲のぢやが。是等はみな彼宗旨の。十宗に入らぬなどを。口惜く思ふ心に。例の如く高ぶらんと。名聞を好む心から。僞り出したことに相違ないが。夫は日蓮の心ではないでござる。なぜと云に。日蓮は佛道の本意を守て。名聞を好まぬ故に。右の如く正直に。我は旃陀羅の子ぢやと書て置た程のことぢやもの。何と斯やうの僞りを喜びませうか。と云と。その敕許なき菩薩號を著て云たならば。捨置るまじきことぢやが。其儘さし置るゝからは。御免の有たことで有う。など丶云も有うが。それは行基や。叡尊等に。別段に賜はることは賜はるだが。外の賜はらぬ輩が云たればとて。とんと御構がない。此が御國の御政事の。寬仁大度なる有がたき所でござる。夫は昔から。幾等ともなく。妙阿彌陀佛ぢやの。本阿彌陀佛ぢやの。と云ふ類ひの名を付た者が有ても。御構なく。既に今の世にも。刀の目利をする。本阿彌と云ふ家々は。其本阿彌陀佛が子孫ぢや。遠頃も尾張殿の儒者に。如來とさへ云が有たが。如來と云

は。菩薩と云よりは。佛道では重いことで有はサ。また近頃富士講と云ことを始めたる者は。本郷の油賣ぢやが。其者が名は。彌勒菩薩と云たが。御構ひもなし。殊に菩薩と云ふ號は。人が事々しきことに思て居るが。近く翻譯名義集を見ても知れることぢやが。正くは菩提薩埵と云べきを。略して菩薩と云ので。その菩提と云は。譯すれば佛道と云こと。薩埵と云は。譯すれば衆生と云ことだから。菩薩と云ふは。佛道に入たる衆生と云ことで。叉その衆生と云は。人を始め。鳥獸虫魚にもあれ。總て活物に云ふ語ぢやに依て。實はそんなに。重くるしく云べきことではないでござる。夫故御構ないことゝ見える。日蓮宗の僧が。其を知て。菩薩と云をば。俗人は事事しく思ふから。人おどしに。大菩薩などゝ名告せたものでござる。まさが大師號や。國師號をば名のること。是は直に御尤めあることを知て居るに依て。名告せぬと見えるでござる。己にこの文化八年は。一向宗の開祖親鸞の。五百五十回忌に付て。兩本願寺。眞正寺。その外。かの宗旨の大寺本寺より。大師號を賜はり候樣にと。種々願はれたなれども。御聞濟なく。その四月東西兩本願寺。眞正寺。その外共に諸司代酒井讃岐守殿より。仰渡されたる御書付の趣は。

開祖遠回に付。大師號之儀。追々被二相願一候へ共。範宴善信事者。優婆塞同樣之事に付。相願候儀者。可レ憚入一事に候。依レ之不レ及二御沙汰一候。

四月

かくの如く。御書付を以て仰渡され。なほ御口達の趣は。

源空上人より。勘氣を被レ請候身分に而。淸僧とは難レ被レ申候に付。御差留には無レ之候へ共。親鸞上人と唱へ候儀も。遠慮有て可レ然事に候。」と仰渡されたることは。此頃たしかに承はり傳へたることだが。なんと大師號は。斯やうに重きこと故。名告せず。さはりなき菩薩號をば。いつの間にか。そッと名告て。勅許などゝ云たものでござる。日蓮宗に於て。總てかやうの事どもを。押強くするのは。元來吉田の門人に成たる故。彼家に於て。押付に神祇の長上などゝ名のりをるを。見やう見まねに。我慢づよく。元の賤きを云ひ紛らさんとして。斯やうの僞を。多

く云のでござる。その宗旨につながる人は。夫に擬(ならう)て我慢づよく。甚しきは。人変りさへも。和やかにはいかぬ者が。幾等もある。夫に付て。拙者の知た人に。日蓮宗のかたまりが。有たが。よく又この宗旨の人に限つては。經文を誦習(よみなら)つたり。その宗旨の書などをも見て居るが。その人は。中にも克く委く。其書どもを誦(よ)み覺えて居る。その持て居る書を借(かり)るために。拙者少しもさからはず。付合て居たが。此人のをかしきことは。主人より賜はる物も。人に貰つた物も。何もかも御祖師樣の御蔭々々と云ふ人でござる。或時連立て。本所へ行くとて。下谷三線堀の高ばしと云を渡る時に。其人が躓き倒れて。大きに膝をすりむいたが。起返つて唾を付ながら。あゝ有がたい。是もお祖師樣の御蔭ぢやといふから。拙者もこゝに於て吹出して。そんなにけがをして。何で祖師の蔭と云ふ事が有うぞ。と云たれば。かた法花宗と云ものは。能くすましもので。いや御邊(あなた)は。いまだ無二の行者とは云へぬ。其訣は。妻はこの間子等を連れて。里へ逗留に行て居るが。里の屋鋪に普請がある。其所へ子等らが行て。遊ぶに違ひない。然れば今頃定めて。上から材が落て。つむりをこわすか。蹈抜をするかすべき所を。祖師の救はせられて。其かはりに。吾がひざを。御すりむかせなされたるに違ひないから。是が御祖師樣の御蔭ぢやと云ふてござる。なるほど日蓮宗の人の。安心すわりと云ものは。おつにきめたもので。斯思つて居さへすれば。何でも日蓮の蔭でないと云ことはないから。有難く思ふはずでござる。是人の。まだもをかしいことは。或とき拙者。その宅へ行たれば。夫婦で祖師の前に居り。いつもよりも聲をはり上て。拙者の行たを顧もせず。だゞぶだを云て居る。半時ほど。予を居らせて置て。さて挨拶するから。今日は殊に長く經を誦れたは。どうした事ぢやと云たれば。妻が此ごろ。雨度謗法(ほうはふ)を致したから。今日はその侘心に。夫婦でおがげを。千返誦(よん)だと云でござる。夫はどんな謗法を致されたと問たれば。有う事か聆(きい)て下され。四五日以前に。妻が茶碗を落して破て。其時聞て居れば。なんまいだと云たに違ひない。夫を叱たれば。いや然は申ませぬ。南無妙法蓮華經。と申ましたと情をはる。夫さへ有に。今日はまた。念佛の行者に。

手の内を遣たから。是が謗法が有まいか。祖師の教に。行者たるもの。少たりとも。餘宗の雜行が交ては。米に砂を交へ味噌に牛糞をまじへたる如くで。甚の謗法ぢや。と云て置れたる故。心得違ひのないやうにと。常々油斷なく。その事を云ひ聞すが。我が妻ともある者の。かやうのことを云ては相すまぬ。緣につながる我らまでが。謗法の罪。そら恐ろしく。そこで今日はお侘を申上たのぢや。と云でござる。かた日蓮宗と云ものは。大抵このくらゐの可笑きことを。常に云でござる。念佛を贔負ぢやないが。茶碗でも落したる時のかけ聲は。題目を云よりは。念佛を云ふ方が。手まはしが宜い。南無妙法蓮花經と云ては。りきみが有て。我慢に見える。夫は芝居を見ても。名たゝる大將の前で。忠義な家來が。腹でも切たる時。その大將が淚を浮め。合掌して目をふさぎ。南無阿彌陀佛と云やうすが。何とかや。物の哀を知たる名將と思はれて。殊勝に見えますが。かの清正主の狂言を見るに。その死なるゝ時。りきみ返て合掌し。題目を唱へる狀が。どうも我慢らしくて。哀れに見えぬでござる。是は人情の上を申すのだが。今は千年來。念佛を串馴てをるから。芝居の狂言をする時か。又は器物をこわしたる時の。かけ聲ぐらゐは。念佛もわるくはないでござる。されば彼川柳に「念佛を集めてあるく燒つぎや」。と云てあるぢや。殊に念佛と云ふものは。神のいかう御きらひ遊ばすもの故。神の御怒りでも。引おこしたく思ふ人は。神の御前で。頻く云たならば。その御祟りが有うも知れぬが。此外には更は効能なく。實に何にもならぬもので。日蓮が。念佛無間と云たればとて。ないもせぬ無間地獄へ。墮やう氣遣ひもなし。よし地獄が在にした所が。念佛を云て。其へ墮ると云ふことは。諸の佛經の上に於ても。曾てなきことで。宗論をする度毎に。淨土宗から云ひ破られる。公よりも日蓮黨へ。然やうのことを云ふ勿と。嚴しく御禁め成され。彼宗旨の寺々よりは。恐入ました。以來さやうのことは申すまいと。屹度連名の證文が出して有でござる。事の序に。その宗論の事も。俺々云ませう。また彼川柳に。「宗旨論耳と首とに珠數をかけ」。と云る如く。いつでも相手は淨土宗でござる。夫につけて。その宗論の度毎に。その論じたる趣を。委

く記したる書が有て。夫は淨土宗で記したる書には。わが宗の勝たる由に記して。有るが。是は互に然やう有べきことながら。實はその度毎に淨土宗が論じ勝たに違ひなく。夫故今も現に、日蓮宗から出した負證文が。淨土宗の寺々に存して有り。淨土宗より。さし出たる負證文とては。何處にもないでござる。然れば日蓮宗の方で。論じ勝たと云て居るのは。例の負をしみ。我慢なること論はないでござる。とは云ものゝ。今その宗論の咄をするに。淨土宗の方で。記し置たる書のまゝに云ては。贔負のやうにも聞え。かつ淨土宗で勝は勝たが。其の論じやうが手ぬるいから。夫に記したる論どもは。總て云はず。その宗論の度毎に。云のこして有ることどもを。日蓮宗で貴ぶ所の。法華經に依て。拙者しばらく是を論ずるが。佛法信仰の行者。淨土宗の僧に爲て論じませう。然すれば贔負とは云へぬ。なぜなれば日蓮宗で。最爲第一とする法華經。すなはち彼が持てをる棒で。撃倒すからのことでござる。是より日蓮宗。淨土宗と宗論始まり〳〵。孰れも閑然に。耳をすまして。聞れませうぞ。ばた〳〵とかたの付くことでござる。

淨土宗より問ふ。其方の義に。法華經より以前の經說は。みな妄說で有る故に。その爾前經に依て立たる宗旨は。盡く無得道ぢやと云が。その證となるべき明文ありや。と云ふ時に。日蓮宗より答て無量義經に云く。種々說法。以方便力。四十餘年。未顯眞實。我所說諸經。法華最爲第一。とある上は。法華を說かぬまへ。四十餘年が間に說たる。種々の說法とも は。みな方便にしたること。法華經が最第一である上は。爾前の經說こと〴〵く。虛妄の說なること論はない。と云ふと。淨土宗が云には。然らば。汝が用ふる法華經に依て云はん。其文は。法華經の行者をして。信じさせんが爲に云たることで。夫より以前の經說を。みな捨よとのことではない。故に。法華經のうち譬喩品に。我昔從レ佛。聞ニ如レ是法一見ニ諸菩薩ニ受レ記。とある此文に。佛と云ひ。諸菩薩と云るは。我昔とあるからには。釋迦より以前の佛菩薩を指て。云たること論はないが。斯ても法華經より以前の經說を。棄るかと云時に。日蓮儀答て。是わが宗祖の。法華經を尊ぶ所以で。其方の宗祖法然の。たゞ三部經にある。阿彌陀をのみ念じて。餘佛をば。

捨閉格拋と云て。捨よと教へたるが如し。と云ふ時に。淨土宗より云には。吾宗祖法然のこの言は。餘の佛を。盡く捨よとの言ではなく。念佛を修するには。念佛の外は捨よとの敎へで。則大經に。一向專念無量壽佛。と有に依たのぢやが。其の方に於ては。法華より爾前をば。悉く捨て取らず。これ我が宗祖の立たる趣意と異なり。かつ念佛無間と云が。然らば聞べきことあり。其方の貴ぶ法華經に。唯一心念と云ひ。又は一聲南無佛。皆已成佛道と有が。これ念佛の義に非ずして何ぞ。いかにかく。法華經に有る念佛を。無間の業とは。何を以て云ぞ。この答を聞んと云ふ時に。日蓮宗が答ふること出來ず。其答のこと。斯の如く。りんと。唯一心念とも。一聲南無佛。皆已成佛道とも有のを。どう成ませう。そこでまた淨土宗が云には。かく法華經にも。念佛をすすめて有る上は。念佛無間とは云ひ難く。然るに其方の祖師。日蓮の秋元抄に。法華を行ずる人の。一口には稱題し。一口は念佛するは。是飯に糞を交へ。砂を交へるが如し。と云てあるは。何に非言で有まいか。此外諸經に。念佛の功德を讃たることは。幾らとなく見え。題目を稱ふることは。法華經に。擁護受持。法華名者。とたゞ一句あるのみにて。是も次の文に。何況擁護受持。とある上は。題目を受持は。劣りたることながら。徒に居るよりは。功德があると云の心で。夫はこの。何況と云たるを以て。悟るが宜い。然れば。法華經に依て說をなしても。題目を唱ふるばかりが。妙法ぞと云ふことではなく。殊には右云ふ如く。唯一心念とも。一聲南無佛。皆已成佛道。とも云て。念佛の功德を。第一に美て有からは。其方の宗意は立ぬと云時に日蓮宗も。是には一句もなきことでござる。昔より度々の宗論にいづも淨土宗で。勝たには違ひなけれど。その論じやうが手ぬるく。且は夫を取て云ては。右申す如く。贔負のやうでも有から。竹を眞直に割たるやうに。拙者が論ずれば此の如くでござる。とは云もの〻。更に念佛を有がたいの。題目が有がたくないの。と云ふ訣ではなく。拙者はどちらも有難くも何ともないが。且その中にはいッて云へば。日蓮宗に云ふ所は。この如く無理には相違ない。と云のみのことでござる。必ず心得違へて。拙者は念佛をあり難がる

など丶。思はれぬやうに致したいでござる。

○さて兩宗爭論の事は。まづ後柏原天皇の御代。文龜元年五月廿四日。細川左京大夫政元の下知に依て。藥師寺備後守の宿所に於て。宗論あり。初番は。淨土宗の京本覺寺の騰蓮社と云と。日蓮儀。本國寺住僧正覺院と論じ。二番に。淨土宗の妙光院と云ふ僧と。日蓮儀の賢大房と云ふと論じたが。二問答ともに日蓮儀が負て。袈裟衣を剝取られたでござる。このこと。和漢三才圖會にも記してある。其より七十八年後。正親町天皇の御世。天正七年五月廿七日。右大臣信長公の台命に依て。江州安土の淨嚴院に於て。淨土宗と宗論が有た。其起りは建部紹智。大脇傳助と云ふ。日蓮信仰の輩が。うッけ噪いで。日蓮宗より事を起し。宗論せんと云になッたる故。双方へかれこれと御扱ひ有て。淨土宗では承知致したが。日蓮宗例の我慢で。承知せず。依て是非なく命せられたことでござる。淨土宗からは。西光寺の聖譽上人貞安と云ふと。正福寺の靈譽上人玉念と云ふ二人が出て。後詰として。洞庫助念と云ふ二人がさし添ひ。日蓮宗より。頂妙寺の日珖。妙滿寺の日雄。妙覺寺の日諦。妙顯寺の大藏坊と云ふ。四人が出て。外に。百餘人の後詰が出て居る。斯て定りの如く。諸宗の智識を。判者として差出され。諸役人列坐して。まづ双方へ。勝利を得たる上では。如何するぞと尋られたる時に。淨土宗よりは。弟子にして。成佛させんと云ふ。日蓮宗の方では。出席の淨土法師どもを。悉く首打切て。かの宗旨をみな絕さんと云ふ。この時信長公は。甚だ日蓮儀の我慢なることを。御惡みなされたと云ふことでござる。斯て論に及たる所が。淨土宗よりは。貞安が出で。日蓮宗よりは日珖が出て。しばし言合ふたが。とふ〳〵日珖が閉口したでござる。此時判者奉行たちが。法の如く。その三衣を剝取て。貞安に渡されたでござる。斯てこの騷動を起したる。建部紹智。大脇傳助兩人は。首を刎られ。負たる四人の僧をば。貞安に賜はッて。沙彌となされ。さて三奉行に仰付られて諸國の日蓮黨を。悉く退治せられんと。致した時に。その時馳集たる日蓮儀の法師ども。我宗の滅せんことを嘆き。自今以後は。他宗を誹ることを致すまいと。達て申上ること故。其頃いまだ。天下おだやかにも無ッた

る時なれば。退轉のことをば御免なされたでござる。其時かの宗旨の諸住寺。連名で捧たる起請文の詞に。

一　此度於二江州浄嚴院一浄土宗與致二宗論一負申事
一　向後對二他宗一一切不レ可レ致二法難一事
一　法華一分儀可レ被二立置一之條忝存候

右之條々於二僞儀一者忝日本六十餘州大小神祇。大乘妙典。三十番神。可レ蒙二御罸一。仍起請文如レ件。

天正七年五月廿七日

と記して。妙覺寺。頂妙寺。久遠院。本國寺。要法寺。妙滿寺。本能寺。立本寺。妙顯寺。妙蓮寺。本隆寺。本禪寺妙傳寺。都て十三箇の大寺の。時の住寺が。連判をして奉り。菅谷九右衛門。堀久太郎。長谷川於竹。三奉行の充名でござる。又一通の書册の文には。

今度當宗被二立置一之儀。不レ可レ有二御座一候所に。御免許忝存候。於二自今以後一。不屆之儀申出候者。以二一行之旨一。當宗悉可レ被レ成二御成敗一候。其時毛頭御恨不レ可二申上一候。此旨可レ預二御披露一。恐惶謹言。

五月廿七日　　　妙覺寺代　日諦

頂妙寺前住　日銑

久遠院代　日雄

御奉行衆中

と記して。尤も連判が有るでござる。右の起請文は。今に京の智恩院に藏めて。虫干の時は。いつも出して人に見する所が。先年それを。日蓮宗のまはし者が。盗まんとして此のかた。鉄網をかけて有そうでござる。此事治まッて後に。京わらはの口すびに。「日銑がみけん眞實打破られ。四十餘年の恥をかきけり」。と云たと云ことぢや。さて此時の宗論のことを。日蓮宗の書どもには。悉く其方で。勝たることに記して。剰へ信長公の。妙國寺に遺恨有て。宗論の時。日蓮徒が勝そうならば。喧嘩をしかけて。罪に落すべしと。諸奉行に内通して。實は日蓮儀が勝たるを。負たりとして。負證文を書せたの。或はこの捌きが。依怙の捌きで有たる故。大閤秀吉公の再吟味せられて。其證文を取返して。本國寺へ賜はッたの。と云て有が。總て僞りてござる。此事挫日蓮と云ふ書に。能く辨じてある。夫をまた。日蓮宗より打返して。挫日蓮笑解と云ふ物を著したが。みな負惜みの僞言

ばかりで。一つも正しき論はなく。能く打返したと見ゆることは。更になく。たゞ賤くきたなげなる。悪口ばかりでござる。この宗論のことは。信長記。また四度宗論記などに。記したるを以て正しとすべきことでござる。

○また此後。慶長十三年十一月十五日。東照宮の台命に依て。殿中に於て。宗論が有て。其時も負たでござる。此起りは。尾州熱田の地に在る。日蓮宗の中にも。かの不受不施と云ふ派の。常楽院日經と云が所から。例の四十餘年。未顕眞實の文を記して。かの念佛無間のことを云ひ張て。いらざることを。同所の正覺寺と云へ送ッたでござる。是は淨土宗の西山派で有から。論書をよこされては。ぢッとして居られず。清洲の性高院へ告たる故。止事を得ず。性高院より。増上寺の存應和尚へ訴へたでござる。是は諸宗の大僧正とあること故。すなはち上聞に達して。宗論に及んだのでござる。斯で存應和尚の上足の弟子廓山和尚が。其相手と爲て。當日に及んだる所が。かの日經が。まづ臆病を發して。出ともながるでござる。然れども。家康公秀忠公共に。御出座あらせられ。諸役人方歴々相詰め。また判者及び聴衆の。諸宗の出家列座してのこと故。しきりに催促有て。漸々日午過になッて。日經は虚病を搆へ。弟子五人を連て出たでござる。時に廓山の問に。淨土の三部經。無得道ぢやと云ふが。彌々然かと云た所が日經がぶる〳〵振へて。答をせぬ時に。上より。種々答をせよと仰せあれども。一言も云ぬから。廓山また云には。汝平生の言にも似ず。何とて無言なるぞ。未顕眞實の難言を。嚴密に答へ來れと云ふに。日經は更に唖の如く。だまッて居る時に。判者。高野山遍照光院の頼慶僧都。これは廓山の云ふ處を。日經は聞取かねて。答へぬならんと云て。廓山が云たる言どもを。また悉く。斯やう〳〵の訣と釋き聞せたるに。日經はなほ無言で居るから。判者が叱て云ふには。汝よく聞け。いま空く答へずは日來の説法みな邪説に歸して。一黨の恥辱を。末代に貽すことで有う程に。云へと。再三責る所が。とんと答へぬから。廓山が又云ふには。然らば。弟子の輩なりとも答をせよと責たる時に。日經が從たる。玄聴と云ふ弟子が。例の如く四十餘年。未顕眞實を云ひ出

したが。廓山に。ひしや〳〵と云ひ負されてしまッたでござる。なほ廓山は。誰ぞ出て論ぜぬかと云ふ時に。一人として。言を出す者がないから。然らば法の如く。三衣を脱しめよと。判者が云て。役人衆中立掛り。日經子弟六人の法衣を剝て。廓山にさゝげ。また面々交名連判して。一通の負證文を出して。退散いたし。さて幕府までを。斯やうにさわがせたるに依て。其罪輕からず。故に即日より。師弟六人を。江戸中を引わたして。京都に遣はされ。翌年二月二十六日に。師弟六人を。劓刑と云ふ刑に處せられて。耳鼻を劓ぎ。手車に乘せて。京中を引わたされ。同年十二月に。幕府より。池上の本門寺。中山の法花寺。また碑文谷などに御たゝりが有て。念佛無間の證文を出せと。御催促が有たる時に。全く證文のなきこと故。一通の書を奉ッたが。其の文に。

被ニ仰下一旨。欽承候。念佛を申。地獄へ墮ると云ふ名言は。經釋中に無レ之候。任ニ祖師所一レ立候儀に候間。御前可レ然樣に。御披露所レ仰候。恐惶謹言。

極月十一日　池上　日詔
中山　日述
眞間飯高　日感
藻原　日僚
平賀　日悟
碑文谷　日揚
御奉行衆中

と記して。奉ッたでござる。この六箇寺は。かの不受不施派でござる。斯て同じく十四酉年。又幕府より。甲州の御郡代。大久保石見守殿に仰せられて。本山身延の久遠寺へも仰せ遣はされ。また京の諸司代板倉伊賀守殿に仰せられて。京都妙顯寺。寂光寺。本隆寺。要法寺。本法寺。立本寺。本能寺。本國寺。本滿寺。本禪寺。妙傳寺。妙蓮寺。妙滿寺。頂妙寺。妙覺寺。これ等はみな受不施派ぢやが。是等へも。念佛無間の證文を出せと仰付られ。身延よりも。京の寺々よりも。右同樣の文面を差出して。これで事落着致したが。右の剝取たる六人の三衣。又三通の捧狀は。今現に增上寺に藏めてある。夫を其儘。本朝四度宗論記。と云書に記して有を取て。今申すのでござる。さて此度の宗論も。物の見事に。日蓮宗の負たには違ない處を。また彼宗の書等に。負をし

みを記して。増上寺より奉行人を頼み。數百人を遣はして。宗論のある前夜に。常樂院を。棒にて半死半生に打擲して。當日に。一言も云へぬやうにしたる故。答へができぬのぢや。此事は。天下の人の。自他宗ともに能く知る所。夫故その頃の口ずさみに。法問にてはなく。棒問なりと。評した。などゝ云て有が。都て僞でござる。是はいかにも。挫日蓮の書に辨じて有る如く。然やうに打擲して出したならば。畏くも東照神君。及び秀忠公。また時の御老中。諸役人衆の。御察しなさらぬことが。どうして有ませう。笑解には。權威をかり。奉行人を頼み。打擲させたなどゝ書て有るが。どうして奉行衆。さやうの不法に與(くみ)せらるゝ事が有ませう。夫を天下の人。自他宗共に知る所なりなど云は。正しき御政事を。邪に申掠むる罪。輕からぬことでござる。又よし打擲したるにもせよ。弟子ともに六人が。啞の如くになる程。どうして打れて居ようか。然やうのことが有ばあるとて。怒を發して。云ひ開くと云が。人情である上に。況て我慢づよき日蓮徒が。なにだまッて居ませうぞ。己に玄聽と云ふ弟子が。例の四十餘年。未顯眞實を云出したはサ。又よし其時は。六人共に。啞になる程。打のめされたにもあれ。後に其事の知れぬことはない。また我慢づよき彼宗旨の輩ぢやもの。其六人はだまッて居るとも。餘の者どもが。何しにだまッて。さやうな不法をされて居ませうぞ。みな僞りな證據には。その寺々より。みな連名して。負證文を出したではないか。總て日蓮宗の負をしみは。此類ひで。實は百中一二ならでは。眞のことはなく。其綸旨ぢやの。敕許ぢやの。臺命ぢやの。御免ぢや。のと云てある言どもゝ。みな上へ申かけを致すので。逐一に。夫を辨ずるも煩き程。僞りが多いから。必ずゝゝ。彼宗旨の書に記してあることをば。信せぬがよい。眞に。尻から冗る嘘ばかりついてある。我慢の僞りを云も。大概の有たものでござる。

○さて斯(か)やうの訣と云ひ。増上寺は。幕府の御菩提所と云ひ。代々大僧正に任せらるゝこと故。その入院の時は。諸宗の住僧。みな悦びに來ることぢやが。關東の觸頭(ふれがしら)。池上本門寺の出たる時の拜式を。増上寺を勤る御家人衆に。委く聞ておきましたが。まづ

座敷に通ッて。かの頸に掛て居る物は。袈裟と思はれますが。あれは坐具と云物で。實は布て座する爲に。衿に掛てゐますが。夫を脱して布き。つむりをべたと。其上につけて。其前に香を燒て居る。暫くして僧正が出て。立ながら何とも云はず。川柳に。「錐をもむ手つき十念しまひなり」と云た如く。珠數をもみながら。十念を授けると。例の如く本門寺が。一々受て南無阿彌陀佛と。十聲云ひ終ると。僧正は何も云はず。ついと引こんでしまふと。又その方に向ッて。拜をして立て歸ると云ことでござる。かやうに念佛を唱へても。本門寺代々。無間地獄へ行かずとも。宜いか知らぬ。さすれば。念佛無間も僞りぢや。偖右の慶長十三年の宗論以來も。かの宗旨の輩。日蓮が諸宗無得道の口まねをして。他宗を謗り。其中にも不受不施派と云が情こわの我慢を云て嘆く。元來この不受不施派と云は。日蓮が上足の弟子ぢやと云ふ。日興と云者。本跡勝劣と云の義を立て。駿河の富士郡に寺を立て。大石寺と號し。その弟子に日目と云者。夫を増々申つのり。本尊にも。日蓮が作たる曼陀羅と。日蓮の像の外に。何もおかず。法華經の中にも壽量品ばかりを取て。其に四卷は擧と云ふ其餘は取らず。薄墨衣を著して。一流を立て。また日蓮が作ぢやと云て。僞書を多く作たが。其の書の拙きこと云ふばかりなく。其一つを云はゞ。大石寺へ鎌倉より十萬貫の所領を寄附したと書たが。今の高にしては。百萬石に當るゆゑ。多過て。然も分錢石直しの時代が違ッて居る。夫とも知らずに。記したること淺ましく。吾云たる嘘の。直に兀るとも知らんで。かやうの言を云出すと云は。不便なものでござる。斯てこの不受不施派は。寛文六年。天下に令せられ。禁斷せられたる所が。彼輩また〳〵。悲田派と名目を變て。なほ絶ざりし故に。貞享元祿の比まで。度々御吟味有て。かの邪宗の輩を。遠島。または死罪に行はれ。其寺々を清めて。大かた天台の末流となされたでござる。江戸にも。谷中の感應寺。碑文谷の法華寺。四谷の自證寺。千駄谷の寂光寺などの類ひ。まだしたゝか有る。その元祿九年の夏。上總國夷隅郡澤倉村と云ふ所で。幡隨院の所化が。日蓮宗の僧と法論をして勝たる所が。日蓮宗の旦那どもが腹を立て。口を引拆たで

ござる。是がもめて。公聽に達したる故。雙方を召て糺明せられ。日蓮宗の僧二人を。穢多の手に挂け首を切て。獄門にかけさせられ。又その家どもを。みな刑せられ。彼所化は。御褒美に預つたでござる。都て古より。宗論は禁せられる所なる上は。彌々宗論すべからず。もし日蓮宗にて他宗を誹謗する僧あらば。訴出べきよしを令せられて。一先日蓮宗も口を閉たが。同く十一年。又々かの悲田派の餘黨が起て。禁令を犯したる故。遠島せられたるに。また寶永四年の頃。かの不受不施の餘黨。富士門徒と稱して。大きに邪義を弘めたるゆゑ。一黨の僧どもを。みな。流罪に所せられたが。また正德五年。常陸の土浦。また駿河の邊にをいて。五家楽盲相派と號して。頻りに邪法を弘めたるゆえ。これを捕へて刑せられたるに。また懲もなく。享保四年江戸に於て。日蓮宗の惡僧ども。三超派といふて。かの邪法を弘める。是も同く不受不施の流で。その本尊は。俗體にして。今樣の上下を著せしめて。是は生田五郎兵衛と云て。邪術を行ッて。磔の御仕置に成たるものぢやと。云ことでござる。左に日蓮が像をおきて右に得も知れぬ異像を置て。密に之を尊敬し。僧はやはり鼠色の衣を著て。深く庵に隱り。其徒を招いて。邪義を勸める所が。切支丹のやうで有た。と云ことでござる。そこで公より。是らの輩を捕へられ。尚その同類を御尋有て。四月より六月までに。數十人の邪信を刑せられたでござる。其後寛政の始に。又かの不受不施の輩。上總國に於て黨を集め。蓮華往生と云ふことをして。愚人を歸依させたことがある。其爲方は。一つの大なる蓮華臺を作り。歸べき便もないやうな。愚人を語合。その蓮臺の上に載せ。僧ども大勢とり巻て。かのだゞぶだを。喧しく讀立ると。その蓮の花びらが蕾むやうに拵へて。其上で。かの中に這入て居る人の尻の當る處に穴があけてある。其穴から槍のやうな物で。突通して。之を殺し。能く死終てから。花びらを拓いて見ると。往生して居る體に仕挂たものでござる。扨その往生を見て。法華經の奇特と思ひ。人の信じて。歸依する者の。癒るやうにとての事で有たが。或者その仕狀を疑て。その往生人に成んことを願ひ。密に鏡を懐中して。蓮華の中に入り。その鏡を尻に當て居た

る所が。下から突たれども。通らず。夫を見屆て。訴人に出で。是より其悪僧どもが捕られて。御仕置仰せ付られたでござる。そも〳〵日蓮。一度我慢の言を放て此かた。その弟子ども。いよ〳〵邪義を重ね。亂世に乘じて。恣に邪道を弘め。天下に毒を流し。愚夫愚婦の輩が。是に惑ひ。刑に遇たる者少からず。寛文斷絕の後。幾度となくその名を革め。國家を欺き。人民を惑したること。飯の上の蠅の。追へばまた集り。妖狐の。隱れてはまた出て。人を化すが如くでござる。如何にも。不受不施派は。邪宗に違ひない。人として。是を憎まんで居られやうか。とかく日蓮宗の人は。在家と云へども。我意我慢がつよく。此風に引かれて。心ひがみ。腹あしく。他宗歸依の者とは。緣をも組ぬなど云て居る。川柳點に。「能い口が有れば宗旨が氣に入らず」。「彌陀釋迦の違ひ。不緣の元となり」と云た如く。世の交はりさへ。心よからぬ者が多く。中々に心得違ひのあること故。必ずともに違はぬが宜いでござる。

○さて法華經のことは。佛者等の。仰山に言はやす物では有れど。釋迦の眞說では无く。はるか後の天竺僧が作たる物で。是は屹度したる證據どもが有て。佛道の大意に。委く論じ置たる如くの訣で。かの經を僞作したる者が。實は釋迦より。五百歲ほど後に生れて。己が作たる物を。釋迦の說たるのぢやと云て。世に弘むること故。後五百歲。廣宣流布と。釋迦が未然に云て置たることに記した物でござる。夫は丁ど。楠正成主が。兵士の志を堅くせんが爲に。密に聖德太子の未來記と云を僞作せられて。太子の未然に。今世の事を謀て。天皇の北條を亡して。天下を御一統あそばすべき時を。さし置れたることと。人々に信じさせて。根强く軍をされたると。同じ手段でござる。然ながら。楠主の此事は。逆臣を亡さんとする。計略に致されたること。又この法華經を作たるは。世人を惑はさんと。釋迦に託して致したる。天竺僧の奸術で。かの周の姬昌が。易を作換たるも。同じ手段でござる。其わるだくみと云中にも。釋迦の本意に違たもので。殊には一向下手な作者の書たもの故。たわいがなくて。實は外の經々よりも。論じ力もない程。だはけな物である處を。倭漢の法師どもが。是を止事なきものに思たのは。どうした

ことおやさ云に。此經を僞作したる者が同じ手で。夫に四十餘年。未顯眞實無量義經と云を作り出て。我所說諸經。法華最爲第一。と云ことを書て。法華經は。釋迦の晩年。いッちらしまいに說たることで。夫より已前。四十餘年が間に說たる經々は。皆いまだ眞實を顯さぬので。此法華に至て。始めて眞實を說たから。是が最爲第一の經ぢやさ。己が僞り作たる法華經を。釋迦の本意に見せて。人に信じさせんが爲に。その證據にせんとて。無量義經と云をも。己が手に僞り作て。釋迦に託したもので。丁ど赤縣で。孝經を信じさせんとして。孟子外書を作り。古文尙書を信じさせんとて。家語。孔叢子を作たと。同談でござる。後漢の法師等が。こゝに心付かず。其文に四十餘年。未顯眞實。我所說諸經。法華最爲第一。と無量義經に見え。又法華經には。從五百塵點と弘宣流布と云ひ。唯有一乘法。無二亦無三。など有からは。是が釋迦の本意ぞと。めッたやたらに惚こんで。信じたものでござる。その信じての第一は。先に申たる。赤縣天台山の智者大師で。然やうに信ずる心から。この法華經に注を書て。先に申す如く。まづ其本文の注に。文句と云て。十卷を作り。さて摩訶止觀と云て。觀心のことを。十卷に書き。また妙法蓮華經。と云ふ題號の說を說とて。玄義と云ふ物。十卷を作り出したが。是を天台の三大部と云ふ。右申す如く。たわいもなく。味ひもなき物を。迷て信ずる心より。たわいが有て。無量の味ひもある。高妙なる物にせんとて。其注を書たること故。味の外なる引ごと。譬事なんぞを。腐々しくしたる故。かやうに大部なる註と成たもので。實は本文の法華經よりは。其の注に書たる。玄義。文句。摩訶止觀の三大部が解しにくゝ。讀に面倒なるものでござる。故にその智者大師より六代目の。妙樂大師湛然と云が。また其注の注を作て。かの妙法蓮華經と云ふ題號を。智者が注したる玄義の注を。十卷書き。是を釋籤と云ふ。また法華經の本文を注したる。文句の注を。十卷書き。是を疏記と云ふ。止觀の注をも十卷書て。是を弘決とも。輔行記とも云ふ。此の注ども。總て六十卷。これを天台の六十卷と云て。其宗旨の債どもが。一生かゝつて嚥ぐが片腹いだく。可笑くてならぬでござる。其のたわいもない法華經を。高妙な

る物にせんとして。入りほがに。何にもむづかしくしたる例を。手近く一つ云ませうが。彼智者が題號ばかりの注を。玄義と云ふ十巻に書き。夫はいかう六かしき故に。湛然がまた其注を十巻かいたが。まづ法華經とは。略して云ので。正くは妙法蓮華經と云のぢやが。是は天竺言を。漢言に翻譯したる言で。その本の天竺言のまゝには。薩達磨。芬陀利。修陀羅と云て。其薩達磨と云を。漢言に譯せば。妙法と云ことになり。芬陀利と云を譯せば。白蓮華と云こと。修陀羅と云を譯せば。經と云ことになるぢやに依て。是を取總て。妙法白蓮華經。と云ふことになる所を。赤縣で。翻譯したる人の心を以て。白蓮華の白字を略して。直に妙法蓮華經としたものぢやが。其本は何のこともなく。此經を僞作したる。天竺僧の心を以て。彼國では。花の中にも勝れて。白蓮華を貴び愛することゆゑ。その白蓮華の如く。愛貴ふべき。妙なる法の經なりと云の意で。此經を。さつたるま。ふんだり。しゆたらとは號けたもので。外に意はないことでござる。

〇扨て佛經には。何に付ても。蓮華をごたいそうに云て。蓮華が降たの。また佛は。蓮華臺に乘るのと云のは。かの天竺に於ては。花の中に。蓮華を殊更に。貴び愛するからの事で。何も深き謂なく。夫は本朝では。牡丹の花を第一に愛し。御國に於ては。櫻の花を。花の王として愛すると。同じことでござる。實にまた櫻と云ものは。其始は。天より御下しなされたる物で。花の祖たる。大切のいはれ有る花で。「山櫻詩でほめらるゝ花でなし。」と云たる如く。御國より外。赤縣にも天竺にも。曾てなきものぢやが。水戸黄門光圀卿の時分に。赤縣の朱舜水といふ人が。亂をさけて。御國へ參り。水戸家にかくまひ置れましたが。その人の言に。もし我國に。この櫻花が有たならば。何しに牡丹の花を。第一に愛ようぞと申した。といふことだが。實に此の如く。天竺にも有たならば。蓮花々々とはいふまいでござる。定めて佛書にも。櫻花が降たの。佛は櫻花に乘るの。と云は知たことでござる。然れば。妙法蓮華經と云ふ題號の義を。注に書もその如く。蓮花は天竺の國に於て。貴び愛する所の花であるゆゑに。その蓮花の如く。貴び愛すべき。妙なる法の經と云ふ意也と

やうに。きちりと注して済ことを。書も書たり。天台の智者大師が。是ばかりのことを。大部の書十巻に注を書付たから。牽強附會。耳とつて鼻をかむやうな。又ほがばかりで。見るに反吐の出るやうな說どもでござる。その如く。又ほがに書て解ぬから。また湛然が。夫へ十巻の大部なる注を書き。すべては積上る程あるが。その附會したる趣きの可笑きことを。一つ二つ云はゞ。蓮花と云ことを解とては。古文眞寶にも出てゐる。周茂叔が。愛蓮說の意などもとり交へて。かの文に。蓮は花の君子なる物で。泥中に生じても。泥に染ずに生る。などゝ云てあるに依て。世にあらゆる諸法諸說が。みな泥の如きもので有るに。其泥の中に。共に居ても。此經ばかりは。蓮花の。泥中より生じても。泥に染んで咲やうに。勝れたるものぢやなどゝ云てあるが。泥中より生する草ぢやと云て。泥まみれの。泥色には咲ぬはずで。夫は蓮に限らず。水葵も。骨蓬も。澤瀉も。同く泥中に生ずれども。泥まみれに成ては居ぬことでござる。また妙法と云ことを說て。この字は女偏に少字を書て。二つに分れば少女となり。また法字を。二つに分れば。水を去るとなるから。外の經には。女人成佛の趣がないが。此經を受持する時は。少き女も成佛することで。夫は則本文に。八歳の龍女が。成佛したとあるで。女人成佛のことなるを知るべく。龍女が成佛しては水を去る。そこが則。この妙法の二字を。首に置たる所以ぢやなどゝ。とつけも无いことを云て有るが。この妙法の字は。漢の字で。夫を二つに分れば。何にも妙と云ふ字は少女と云になり。法字は。水を去の二字になれども。夫は偶然のことで。天竺の。さつたるまと云ふ言の意は。少女が水を去る。と云ふ義でも何でもありはせぬはず。此位のことは。書物の一冊も讀んだ者ならば。直に分りませう。統て此類の愚說を云ひ〱して。とんと二十巻となッたもので。夫を今逐一に。云て居る隙はないから。外はみな是に準へて。たわいもなき事ばかりなる訣を。知が宜いでござる。智者大師と云ふ名は。自ら名告たか。人がつけたか知ぬが。實は愚者大師で有た故に。法華經のやうな。たわいもなき物に惑つて。夫を高妙に取成んとして。かやうな莫何を盡したものだが。日蓮宗に於て。妙と云ことを。

とかくむづかしく喧ましく云のは。是から來たことでござる。その妙のことに付て。可笑きことがある。夫は享保四年のことでありますが。京都の本國寺。妙顯寺。妙滿寺。などの。日蓮宗の寺々夫まで甚不行跡で。女をしたゝか隱し置き。是を妙と名けて居たが。即少き女。と云のかくし言でござる。所を六月廿口の夜に御所司代の命に依て。數百人の捕人を遣はされ。俄にまづ本國寺に押入て。かの妙を。七十餘人捕へて夫を盡く。その親里に預けられ。隱し置たる僧どもを縛り置て。さがし立たる所が。魚鳥の肉を貯へ。亂行不法の所爲。一時に顯れて。面目を失ひ果たことがある。大かた諸宗の本寺に。斯やうの淺ましきことは。とんと聞も及ばぬことでござる。其頃京童の口吟に。「本國寺今は六字に成ぬべし。いッち大事の妙を取られて。」と謠嘆したと云ことでござる。妙滿寺。妙顯寺。その外の寺々にも。此事を聞て。大きに恐れ彼の妙をば。皆外へ忍ばせ遣たから。本國寺ほどに。恥をかゝなんだと云ことでござる。さて此序に。今一つ法華經のことを云うが。實に味もなく。たわいもない物で。一生が間。だゞぶだ〳〵と。聲を枯して誦だとて。何もならず。近いことは。彼の經の文に。是を信ずる者は。色が白くなるの。歯が黒くならず、また缺ぬのと。其外したゝか大造なる。功德を云て有れども。現に嘘なことは。日蓮宗の人々ぢやと云て。色の白い人ばかりはなく。みそッ歯もあれば。歯の缺た人も。目かちも。鼻かけも。幾等かある。また法華經を信ぜず誹る人は。色々と報を受る中にも。五百由旬の蟒と化るとあるが。是は御國の道にして。四百里ほどに當るが。古より法華經を誹たるもの。倭漢の儒者などにも。大分あるから。夫らはそんな目に逢そうなものぢやが。萬國の珍しき說を。集記したる物にも。そんな大な蟒の出たと云咄もなければ。みな愚人威しの戲言でござる。この篤胤も。右の如く。大ぶ法華經を誹ッて。謗法いたしたが。來世には。そんな大蟒に生れもするかと。少し樂みに思て居る。夫はいかにと云に。體が四百里ばかりも有ては。ザッと長崎の果から。江戸邊までの長さ故。定て食物も。たいそう食ふことでありませう。まづ一日に。少くも馬に百駄ぐらゐは。食そうなものぢやが。其食に

は何をしやう。他の物より僧が宜い。まづ頭に毛が无て。きれいで。呑よからうから。一駄に十人宛と思ても。一日に千人づゝと云ものだから。一年もかかッたら大概僧は呑盡して。しまはれそうな物でござる。然してかたばし。僧尿をたれて。迚もの謗法ついでに。法華僧を。みな糞にたれるつもりぢやが。もし食足ずは。他宗の氣に入らぬ僧どもを呑みそれでも足らぬと。腐儒者を始め。世の僻める學者等を。食れるだけ食うと。樂みに思つて居ることでござる。○さて先に委曲に申す如く。日蓮が言に。我宗に非ざる人は。貴賤悉く大罪人なり。一人也とも命を取たるが。至極の大善根なりと云ふ趣を。しばしば云て有るが。是は貴賤悉くと有からは。上天子樣より下萬民までにかゝることぢやが。彼が宗旨に非ざるは。天子樣。次に關白殿下。征夷大將軍を始め奉り。幾百萬人と云ふ限り有べからず。夫を一人なりとも。命をとりたるが。至極の大善根也とは。何と云ふ惡言で有ませう。世の人は。是を何と聞て居るであらう。また惡を罰むれば。世間なほ。一殺多生の道理と云て。一つの惡きを殺して。多きを助くることあり。況て佛法に於て。その道理なからんや。他宗謗法の法師原を殺害するは。殺すの罪なきのみに非ず。いよいよ善利を獲るなり。豈これを。惡心無慈悲と云んや。斯やうの小節。は論ずるに及ばず（申正論と云ふ書に記せる趣）如しと云ひ。また其邪宗の徒。御仕置に逢ても。法の爲には。不レ惜二身命一と云て。少しもその邪志を改めず。夫は我が宗祖の在世にさら。堅く此の法を持つが故に。或は遠島の流罪に遇ひ。又は死罪に遇んとせらしかども。なほ深く。謗法の罪を恐るゝが故に。嚴命にも背きぬ。是らの罪過は。芥子ばかりも。世間不義の罪にあらねば苦からず。（道源德母抄などに云る趣）など云て。公の嚴命を恐れず。遠島斬罪に逢ふを。眞の法華の行者と敎へて。愚俗をまごはすでござる。傳へ聞くに。きりしたんの敎へに。磔梟首にかゝるを以て。成佛なりと云て。悦ぶと云ふことぢやが。日蓮宗の勸めかたは。甚これに似寄て居るから。能く氣をつけて見るが宜いでござる。かの念佛無間の惡言を。嚴く信じさせんとしては。既に日蓮が書置きたる。阿佛房抄と云ものにも。父母を殺す人は。その肉身を破れども。父母を後生に。無間地獄に墮さ

ぶ。念佛は父母を無間地獄に墮す法なり。とも云て置たが。是は譬へにも有れ。父母を殺しても。夫は構はぬ。念佛は申すなとは。餘りなる事では无いか。あゝあゝ愚なる哉。日蓮法師。佛經の妄說に欺かれ。無き地獄を。有りと心得たるより。斯やうの惡言をさへに發して。愚人を惑はし。狂はすでござる。一匹の馬がくるへば。千匹の馬が狂ふ。とは斯やうの事でも有うか。なほ日蓮宗の事に付ては云ふ可き事。ざッと二十日も云はずは。大概にも片付まいが。先あら〳〵。早く心得べきことばかりを。搔つまんで。申すのでござる。斯やうの我慢なる。宗旨の立たか故。大御神の御祓の大麻などをば。有難しとせず。家に置き奉らぬことゝ見えるが。能く思へば。夫も即神の御心で。かの旃陀羅を。御惡ひ遊ばす故ではないかと。竊に思ひ合さるゝことも有ぢやが。是はまづ暫く云まい。何にしてもあゝ困ッたものでござる。其宗旨の人々。必ず惡く聞れまいぞ。左にも右にも人の惑はぬやうに。と思ふばかりの。篤胤が老婆深切で。人の氣に入ぬ事とは。知乍も。眞の所を知せんと欲て。かくは申すのでござる。

出定笑語原本 ㊂

阿含部の經々は。事實を記せる物なるに。般若經の旨は。みな空に說なしたるは如何と云ふに。阿含經の旨は。佛の本意には非ず。と早しめたる物にて。是ぞ謂ゆる大乘の經の始なりける。然れども。此經の成れる頃は。いまだ阿含が前とも。般若が後とも。年數の前後を論ふ事なく。阿含部を首張する者は。如來の生涯の說法は。四阿含に止まると云ひ。

そは智度論に。迦葉語阿難。從轉法輪經。至大涅槃。集作四阿含。增一阿含。中阿含。長阿含。相應阿含。是名修妬路法藏。とあるにて知べし。修妬路藏とは。上にいへる如く。一切經藏と云ことなり。

般若を首張する輩は。如來得道の夜より。涅槃の夜に至るまで。常に般若を說れたりといふなるが。此趣も智度論に。釋迦の初成道の事を記せる所に。是時世界主梵天王。及色界諸天等云々等。皆詣佛所。勸請云々。故受請說法。諸法甚深者。般若波羅密。是故說摩訶般若波羅密經。とあるにて知るべし。

これ阿含部を首張するものも。般若を首張するものも。各々そのよる所を正義として。後世に云ひ出たる。阿含は前に說るもの。般若は後に說たるものなどいふごとき。年數前後の說はなかりしなり。

然るを法界性論に。十二年說阿含。三十年說大品。(卽般若也)八年說法華。といへるは。下に引る法華經の文に。從成正覺。過四十餘年。云々。といふことの有るに。惑はされたる非說たり。

○頭書云朱熹か大學の序に異端の虛無寂滅の敎其方過于大學と云るは般若の旨を指せりさて朱熹は禪を取て四書を說たり。

かくて。般若の次に成たる經が法華經也。そはいかにして知るぞなれば。此の經の趣意は。阿含は。有を宗と爲し。般若は。空を宗と爲たる故に。此を作れる人の思ひつきにて。此は如來の末年に說たる經なり。此經の趣きが。眞實の旨に非ず。みな方便說ぞといひ前に說るは。眞實の本意にて。これより以立たるが。其言に。從成正覺來。過四十餘年。無數方便引導衆生。我所說諸經。法華最第一。但爲菩

薩ノ不レ爲ニ小乘ノ觀ルニ諸法實相ヲ是名ニ菩薩行ト〕といへり、此は釋迦の道を弘めたる間が。凡四十年ばかりのこと故に。此經は。その末年に說るに託して。以前の諸說をいやしめおとし。また此を實相に託して。阿含の有宗。般若の空をも破りて。彼等はみな。方便に說る旨ぞと。釋迦のみづから云へるに託せるなり。（然るに。後世の學者みな是を知らず、徒に法華經を宗として、釋迦の眞說にて、實に經中の最第一、とおもへるは誤なり、年數前後の說、實に法華の昉り、幷吞權實の說も、また實に法華に昉る、廣大の方便說を以て、古今の人を、災惑せるのみには非ざる也、あはれ、此をよく見明らめ窺れるは、實に富永仲基が功なりけり、〇解深密經に、初小乘、中空敎、後不空、といへるは、阿含、般若、法花を說る、年數の前後を云へるにて、小乘とは阿含をいひ、空敎とは般若を指し、不空とは、法華に、諸法實相と云へるを指せるにて、此も法花經を作れる者の黨より、出たる說と知られたり、扨三藏の目は、佛滅後に、迦葉が結集の時より起れり、然るに法華の文に、三藏學者といへる言あり、いかで釋迦の說る眞經に、此の目あらめや、是をもて、此の經の後に出たることは、いとしかるをや、猶次々いふを見て、思い辨ふべし〕

此の次に成れるは。華嚴經なり。此經の趣は。阿含は成道出山の始に說る狀にて。有を宗と爲し。般若は。阿含の後に說る趣にて。空を宗と爲し。法華は。末年に說る由にて。諸法實相といふを旨と爲て。始中終の說ある故に。此を阿含よりも以前に說るに託して。彼の經を斥け。また般若法花をも斥け。一家の經王に立むとして作れる也。其は性起品に。譬如下日出先照ニ諸大山王ヲ次照ニ大山ヲ次照ニ金剛寶山ヲ然後普照ニ大地ヲ日光不レ作ニ是念ヲ但地有ニ高下ヲ故照有ニ先後ヲ如來亦然。智慧日輪。常放ニ光明ヲ先照ニ菩薩山王ヲ次照ニ緣覺ヲ次照ニ善根衆生ヲ然後悉照ニ一切衆生ヲ如來本不レ作ニ是念ヲ但衆生善根不レ同。故此種々差別。と云へるが。此經の本旨にて。譬の意は。如來の所說に。固より淺きと深きとのわかちはなく。唯その最初に說く趣こそ眞實なれ。然れども。衆生の根氣同じからざる故に。菩薩等は。聞て速に其化を被り。緣覺の徒は。やゝ後れてその化を被り。善根の衆生

は。また此に後れて其化を被り。一切の衆生は。然して後に。其化を被りて。皆各々その德を成すなり。法を說く如來には。しか次々に化せむといふ念はなきことなり。其は喩へば。日の出て。山王といふべき大山を照し。次にそれより稍卑き山を照し。次にまた。それより卑き山を照し。さて後に。普く大地を照せども。日の光には。しか次々に照さむといふ念はなし。たゞ地に高き下き有て。高き所は。おのづからに早く光をうけ。下き所は。おそく光を受るに同じ事ぞ。と云ふ意にて。般若法華の旨を。釋迦の本說には非ず。初に說る華嚴の旨ぞ。最妙の本旨なる。と託したるものなり。

また出現品に。一切二乘。不レ聞ニ此經ヲ何ニ況ヤ受持ヲ。といひ。

一切二乘とは。阿含部の小乘家と。般若法華の大乘家を指せるにて。文の義は。彼の二乘の徒は。此經の旨を得聞ず。況て受持つことは得ずと也。

また法界品に。舍利弗不ニ樂說セ不レ能ニ讃嘆スルコト。といひ如レ聾如レ啞など云るは。智慧第一の舍利弗すら。此の經の高く妙なる旨を得ることは能はずて。說びもせず。讃歎することも能はで。聾のごとく。啞のごとく。默然たりしと云るにて。皆その立たる宗を張りて。從前の經說を。斥けむとの意なり。

さて此經は。右に云る如く。最初に說る由に託したれど。實は阿含。般若。法華などよりは。後れて成れる故に。遂にその尾をあらはしたるは。可笑き事なり。其は舍利弗目連等が。釋迦に從へるは。出山して。暫く後の事にて。時も處も異なるを。華嚴會に。舍利弗等。五百聲聞あり。また祇洹林普光法堂は。初成道の時。並にいまだ建立せず。然るに此の經は。成道の初に託しつゝ。具に此事を述たり。此れみな作者の方便。逗漏のところ也。また諸法實相。般若波羅密の語あり。是れにて此の經の。般若法華の二經より。後に成れること。疑ひなきものなり。○頭書云亦裸々云、此作者、成道最初の說に託すと云へども、處々に破綻の文有て、覺えず後出の消息を漏逗せり、夫れ小乘の敎有て而して後、聲聞の人は有べき事也、爾るに此經入法界品に、舍利弗等の五百の聲聞有り、此時未た小乘の名さへ有べきやう無きに、舍利弗等、

何くより、何れの法を學び得て、聲聞とは成れるや、且つ祇園精舍は、佛成道六年の後、始て造立有し也、然るに此品の初めに、祇園精舍有り、是前後相違に非ずや、

無量義經は。法華經に黨する徒の。華嚴に後れて作れるなり。そは其說に。初說四諦。爲求聲聞人。中於處々演說甚深十二因緣。云々。次說方等十二部經。摩訶般若華嚴海空。法華會入。佛慧宣說菩薩歷劫修行。とあるにて。此の經の。法華經に黨する徒の。華嚴に後れて作れること炳く。また四十餘年。未顯眞實。種々說法以方便力。と云へるにて。上に引る法華の文に。從成正覺來。過四十餘年無數方便。引導衆生。我所說諸經法華最第一。といへるに合せ。彼の經の勝れたる由を示さむとして。作れること灼然し。

華嚴の次に。大集經。涅槃經の說起れり。そは此の二經の旨は。大小二乘を合せし。重きを其の涅槃に歸して。十六年始說大集。と云が如き。これ暗に。阿含の後。般若の前に託して。二乘の中間に出るなり。且つその律を說て。如是五部。雖各別異。而皆不妨諸佛法界。及大涅槃。と云がごとき。これ五部律の異を合さむと欲してなり。然るに五部律は。もと八十誦中に出たるなるを。分て五部と爲たるは。佛滅度を去ること。遙に後の世なり。こゝを以て。此經の後に出たること知べし。涅槃も同手の作なる故に。言語おほく相ひ類たり。これすなはち。此ぞ佛滅に託して。此の經の出ること。年數の最後なる由を證し其聖行品に。譬如從牛出乳。從乳出酪。從酪出生酥。從生酥出熟酥。從熟酥出醍醐。醍醐最上。佛亦如是。從佛出十二部經。從十二部經出修多羅。從修多羅出方等經。從方等經出般若波羅蜜。從般若波羅蜜出大涅槃。猶如醍醐。是譬於佛性。と云へり。

十二部經とは。すなはち一切經をいひ。修多羅とは。其が中に。大小二乘に屬ざる別部をいひ。方等經とは。その修多羅の中に就て。大乘といはゆる經等をいひ。般若波羅蜜とは。その方等の中に就て粹なるものをいひ。大涅槃は。すなはち大圓寂にて。般若の粹なる由に別ちたるにて。これ大涅槃經を作れる本意なり。

此の喩は。もと無垢藏王と云もの。涅槃の敎の。最も勝れたることを嘆する由に。釋迦の實に然ることなりとて。此の五味の譬をもて。從前に說ける經等より。涅槃經の勝れて濃く。純粹なるよしを示したるに。託したるものなり。

大集。涅槃。等の說ありて後に。頓部の說興れり。(頓とは云々)その契經。およそ二十ありて。(二十は云々などなり。)楞伽經は。其中に尤ものなり。此は從前の諸經の言說。重く煩しく。その說うち合ず。迂遠る故に。更に激切の語を發て。其言に。一切煩惱。本來自離。不レ可レ說ニ斷及與ニ不斷一。一切衆生。皆是一切。畢竟不生。離ニ諸名字一。即一切法。唯一眞心。一念不生。即是佛。とやうに環回の說なく。直切なる語を以て。從前の諸經を破りたるものなり。

後世菩提達磨は。即ちこの經に本づきて說をなし。義に依て文字に依らず。始終一字を說かず。實に禪家の鼻祖也。而して其窮めに至りては。乾屎橛を以て佛姓を語り。經卷を斥するに至る。これ皆いはゆる頓部なり。禪家のこと。なほ下に云べし

頓部の說興りて後に。秘密曼陀羅の敎起れり。其敎の旨は。六度經に。契經如レ乳。調伏如レ酪。對法如ニ生蘇一。般若如ニ熟蘇一。總持門如ニ醍醐一といひ。また世尊得ニ一切智々一。爲ニ無量衆生一。廣演分布。隨ニ種々趣一。種々欲情種々方便道一。宣ニ說一切智々一。或聲聞乘道。或緣覺乘道。或大乘道。或五通智道。或願ニ生レ天。或生ニ人中及云々一。各々同ニ彼言音一。住ニ種々威儀一。而此一切智々道一味。など云へるを見るべし。此の敎。諸家を攝するに。一切智々を以てし。乃ちこれを。その所謂曼陀羅に合せ。遂に以て重きを。其のいはゆる。毘盧遮那阿字門に歸するものなり。

赤裸々に。唐の玄宗が開元中に。南天竺の金剛智。不空。善無畏の三三藏。蟬連として長安に至る。倶に曼陀羅密敎を傳ふ。大抵從前一切の修多羅。これを釋迦の所說に託せざる事なし。獨り密敎は。其の言これ毘盧舍那法身の所說なり。金剛薩埵。(金剛手ともいふ、すなはち所謂善賢なり。)これを受て。南天竺の鐵塔に秘藏たりしを。後に龍猛塔を開きて。之を薩埵に承け。而して後に。世に流傳すと。これ荒渺の說。實に藉重の最なり。

果して其說の實ならば。嚮に玄奘法師が西遊するとき。南天竺にも渉りたれど。所謂鐵塔の靈蹟を見ることを。聞ざるはいかにぞや。按にこは西域記に。婆毘吠伽論師が。南天竺の磔迦國に至り。芥子を咒して。岩壁を擊開きて。彌勒の阿素洛宮に入れり。と云ふ幻說あり。三三藏の輩。是等の事を附會して。毘盧緣起を揑造するか。且つ三三藏の傳來する所は。亦唯壇場儀軌の事法に過ざるのみ。かの理觀の如きは。台賢二家の所說と。始より殊途なし。意に一行の徒。竊に理を斯に取て。これを事法に緣飾して。鐵塔の說に託せるなるべし。故にその他宗に矜誇する。亦唯事法の一端に在るのみ。〇出定後語に亦た云く。不空師の云。經夾藏于鐵塔數百年。龍猛始獲焉と。然るに龍猛の所說に。一言のこれに及ぶものなし。唯秘密の號は。龍猛に出づ。故に後世崇奉の至り。蓋し依て以て然りと爲るなり。

これ諸教興起の分ち。皆もと相ひ加上するに出たることにて。そは加上せざれば。道法の張がたきが由にて。すなはち古今の自然なり。然るに後の世の學者。みな徒に。諸教は釋迦師の口より。親しく說る所にて。阿難が親しく傳へたるものと思ひ。上件に云へる如く。許多の開合あることを知らざるは。いと惜きことなりかし。

或人服部天遊に問けらく。小乘は前にて。大乘は後なること。誠にさも有るべく所思れども。既に諸經にも。如來衆生の根機を調熟むが爲に。その說法。淺きより深きに至ると有れば。小は前。大は後なるも。何ぞ怪むに足らむ。と云へるに。天游答けらく。我が小前大後の說は。共に佛滅後の假託と見て。論ずる所なるを。子の小前大後の說は釋迦在世一代の眞說と信じてなり。然れども。其は後人の。說時次第の說に惑はされてなり。〔今云、說時次第とは、初成道に華嚴を說き、次に阿含を說き、次に大集を說き、次に般若を說き、次に法花を說き、最後に涅槃を說り、など云て、諸經を說る時を、釋迦の在世一代に、配當したる說をいふなり〕凡そ諸經に。說時の次第を立るは。皆これ後世の。大乘家の妄作なり。そはいかにぞなれば。まづ小乘家には。釋迦一代の說法。悉く

四阿含等に盡たりとして。此餘に。別に大乘の説あることを許はず。然るに。大乘家後に出て。小乘を厭むと欲するに。小乘家の説は。迦葉阿難より連綿して傳へ來り。自は實に其後に出たるなること。世人の明に知る所なるをもて。小乘を釋迦の説に非ず。とは誣がたき故に。大小乘共に。釋迦一代の眞説と許し。たゞ其中に就て。淺深勝劣を分ち。小乘は淺く劣れりと云て。其の深と勝とを。吾が大乘に歸したる。是ぞ説時次第の説の。因りて起る所以なり。(かの法相、三論の二宗共に、三時教を立るが如きこれなり、○綱要云、據二南山律師意一者、如來一代所説、法門大小諸教、分爲二三教一、一性空教、一切小乘、即此の中に攝、二相空教一切大乘淺教悉攝、三唯識圓教、一切大乘淺教悉攝、「今四分律、即性空教中之一分、唯識圓教」是祖師域心、圓融故云々、圓教妙體、是唯識教也」)然れども後來大乘家に。華嚴などの經出て。これを最初の説に託するが故に。小前大後の次第も。立がたく妨有り。是に於て。天台の五時の説起れり。(今云、此の説は、唐土天台山の、智顗と云へる法師の作れる説なり、故に天台家の説と云へり、天台大師と云ふは、すなはち此智顗が事なり、委くは天台宗の所に云ふべし、)其説に。如來最初に。頓大の法を説き給へども。(頓大の法とは、華嚴の教を云へるなり、)衆生小機にして。其の益無きが故に。權にまづ鹿苑の小教を施し。(鹿苑の小教とは、阿含の教を云り、)後漸々に衆生を引て。方等。般若を歷て。(方等とは、此にては、大集の教を指せり、般若とは云々、)終に法華。涅槃の一乘。醍醐の味ひを説く。(今云、醍醐味の事は、前に涅槃經のことを云へる所に云へりき、さて法華涅槃を醍醐味に譬へたるは、諸教に勝れて、純華なる由なり、)出世の本懷。是に於て畢ると云へり。此説誠に。諸經の殊旨をみな和會して。綿密なるが如しと云へども。元とこれ附會に出るが故に。支離破綻。つひに識者の眼を覆ひがたくなむ。其は今五時の次第を擧て。其の破綻を拈出せば。まづ華嚴を。最初の説とするは。始成二正覺一といふ語あるに因てなれど。諸部の小乘にも始成正覺の語ありて。鹿苑に説るをもて。最初の

説としたり。(然れば華嚴に、始成正覺の語あるを以て、最初の説とする説は立がたし、是に於て、荊溪また説を作りて、小乘部に、初成正覺の語有ことは、是は、小機の見る所にして、大乘始成に異なりと云へり〕然れどもこの説を主張する時は其の家説に齟齬する事あり。其は鹿苑の説法を。成道最初の説とする事は。彼が據る所の法華方便品にも見えたり。そは我始坐道場と云より。法僧差別名と云まで。此の一段六十四句の偈これなり。(其の大意を言はゞ、釋迦成道の後、三七日思惟しつるは、我直に一乘の法を説べけれ共、衆生根鈍にして、信ずること能はじ、然るに過去の諸佛、みな方便をもて、三乘を説けり、今吾も其例に從はむとて、鹿苑に赴き、五比丘の爲に、四諦の法を説く、此の時始めて、三寶の名ありと也〕如此れば法華の始成は。即ち小乘の始成と同時にて。異なること無ればこ法華もまた。小機所見の説と謂ふべしや。元來華嚴は法花より。後に出たる經なればこ法華に。その事を言ざるは然ることなり。(然るに智顗が、彼經の信解品の、長者窮子の譬に、五時を配當し、その傍人の急追を、華嚴の擬宜を領ずるの文とせるは、附會の甚しき也、本文のみを、平かに讀去るべきに、何とてかゝる穿鑿に及ふや、況て舊譯正法華のこの譬は、文句甚異にして、嘗て五時に配すべき狀ならぬをや、然れば智顗が説、巧成事は巧なれ共、嘗て此經の作者の、本意に非ずと知べし〕かつまた華嚴に就て考ふるに。彼の作者。こを成道最初の説に託して作れりと云へども。處々に破綻の文ありて。覺えず後に出たる事の。消息を漏逗せるをや。(今云此事は、既に華嚴の論の所に委く云へりき、合せ考ふべし〕次に阿含を第二時とすること。信解品の脫妙著麁の文に據てなり。然れども舊譯には此の文なし。然れば此は後人加入の文なり。(諸經に、後人加入の文多きこと、下に委く云ふべし〕次に方等を第三時とするは。大集經の如來成道始于十六年。と云ふ文有に據れるなれど。(頭書云此文吟味の事〕方等經も。甚だ博く。其間説時の異説區々なり。然るに大集一經の語を以て。餘の一切を槩せむこと。不平の甚しきと云ふべし。か

つ方等の稱は。方廣平等の義にして。凡そ一切の大乘經の總名なれば。阿含部を除く外は。華嚴。般若。法華。涅槃も。みな盡く方等なるをや。其證諸經に多く見えたり。(今其一證を擧て言はゞ、舊譯正法華の序品に、今日大聖當下爲ニ我等一講中正法華等典籍上と云へる、これ正しく法華を指して。方等と稱せり、爾るに唯八年の中、四教ともに說く者とすること、甚だ非なり、其誤涅槃經の五味の譬を、五時に配當するより起れり、五味もとより、五時に干渉(あづから)さること、富永氏既にこれを辨べき。)凡そ天台家。方等の稱に。理方等時方等と云を立たれど。其所謂理方等は。これ正義なり。別に時方等を立るは杜撰なり。(かつまた菩提流支の說に、成道二十八年に、瓔珞經を說き、三十八年に、解深密を說き、四十二年に、觀無量壽經を說く。と云へり、然るに天台家には、右の諸經を、みな方等部に收入せり、是等の異說。いかむか和會せむ)されば近世藕益の智旭は。天台宗の末師なれども。時方等の盡理ならざるが故に。專と大乘の通名なるの義を主張せり。次に般若を第四時

とするは。仁王般若に。如來成道二十年。既ニ爲レ我說ニ摩訶般若一。といふ語に據れるなれど。此語の意は。其前二十八年中に。華嚴阿含方等の三時を說き畢れり。と謂へるには非ず。たゞ成道已來諸部の般若を說て。(今云般若には、大般若、放光般若、光讚般若、小品般若、などの異あり、故に諸部の般若といへるなり)二十九年に至れるの義也。(其證を言はゞ、大智度論に。初成道の事を記して、是時世界主、梵天王、及釋提桓因、幷四天王等、皆詣ニ佛所一觀ニ請初轉法輪一是故佛說ニ摩訶般若波羅密多經一と有を見るべし、また天台も大論を引て、始從ニ成道夜一至ニ泥洹夜一常說ニ般若一といへるこれなり)次に法華涅槃を。第五時とするは。法華に四十餘年。無數方便といひ。(今云、此の文、上の法華經の論ひの所に、委く引るを合せ考ふべし)涅槃に。臨滅度時といへる文に據れるなれど。是れみな二經の作者の。自張自大の談にて。他經をもて此を律するに其說合ざるなり。其は長阿含。增一阿含などには。釋迦入滅して寺に葬り。後に諸弟子。說法する事までを載たり。(ま

た近くは、遺教經のごとき、釋迦臨滅中夜の說に非ずや、是れいはゆる小乘の所說なるをや。）然れば阿含部。反て法華涅槃の後に在るをや。五時の破綻かくの如し。是に因て。天台また通別五時の說を設けて。其失を救へる說に上の如く前後次第を立るを。別の五時といふ。また通の五時と云は必しも前後次第に拘はらず。如來たゞ。衆生の機に趣きて。最初より法華涅槃をも說くべければ。此れを說き。最後にも華嚴阿含を說く。方等般若の前後に通ずるも。亦かくの如し。といへるは强說なり。（そは通の五時、別の五時、と云兩說は兩立せず、如何となれば、若し別を立れば通は廢れ、通を立れば別は廢る、決して並び行はれて、相悖らざるの道理なし。）若强て其理有と言はゞ。是因明論に。我母は石女也と云へるが如く。自語相違の說なるをや。（今云、石女とは、子を產せぬ女の事なり。）然に此自語相違の說は天台のみならず。淸凉の華嚴の疏に。約不壞相と。別して時分を明せる。約實圓融との說有り。これ全く。右の通別の說に相同じ。嗚呼この兩宗の祖師ども。諸經は皆後人の手に出ることを。知らざるの徒には。非ざれども。誰これ護法の念勝て。直に說破するに忍びず。多方に遷就回互して。後の學者を。圈套中に陷れて。跳りて出ること不能しむ。歎ずべし。（或人また問ふ、誠に此說の如くなるときは、諸經みな後人の假託なること疑なし、然るに法門中にも、また別に僞經目錄ありて、眞僞の辨を嚴にするはいかにぞや、答ふ、法門中に於ても、また眞僞の辨ある所以は、古來世に偏ねく流布し、諸人信受奉行し、かつ其義理に大謬なきものを、權に眞經と定め、或は其譯せる時代、また其出處も慥ならず、義理に大謬有て、凡そ人の疑を惹くべき類を紕て、僞經と定む、されば其眞といふは、假中の眞にして、其僞と云は、假中の假なり、假中の假の疑に由りて、遂に假中の眞をも、人の信ずるまじきを恐れ慮かりて、眞僞の辨の嚴なるなり、譬へば、淸淨行經、また冢墓因緣經などに、閻浮提中有振旦國、我遣三聖、在中化導人民、光淨菩薩、彼稱孔子、迦葉菩薩、彼稱老子、月光菩薩、彼稱顏回、頭書云、廣弘明集に云、須彌圖云、寶應

聲菩薩化爲伏義、吉祥菩薩化爲女媧、儒童應化作孔丘、迦葉化爲李老、妙德託身開士、能儒誕孕國師、又涅槃經云、所有經書記論、伎藝文章、皆是佛法、以此而推、三皇五帝孔李周莊、皆是菩薩化身、所收文字圖書詩書章禮樂、並是諸佛法藏所攝と有。』といへる如き、これみな唐土の奸僧、儒、道二教を壓むが爲に、假託して造出たる說なり、『頭書云朱子語類、百二十の卷に、佛法は漢僧が、老莊をとりて作れると云說有、』總じて佛經に、妄誕多しと云へども、特にかゝる類の說を倣すれば、儒道二教の徒かならず起りて、辨斥せでは休ざるなり、若かゝる說をも、眞經に收入せば、彼辨斥の餘波、或は法華華嚴等にも及ばむか、されば法門中に、眞僞の辨あるは、必しも其假を惡むに非ず、その假中の眞を護らむが爲なり、其實は、眞假ともに假にして、無差別なるが故に、既に眞僞未決の沙汰ある經も、義理に害なき類は、天台等の祖師といへども、引用したること有るをもて見るべし、また假中の假を造るに、その、意樂、右の奸なるが如くには非ずして、極めて笑ふべき有り、昔妬婦を怯るゝ者あり、此を制するに計なく、遂に經文を摸擬し、佛に託して、妬の罪報の、極めて畏るべき事を說く、これたゞ一時、家婦の妬を禁ぐに在て、流布するに意あるに非ず、されど偶々、世に傳へ來れりしこと、開元釋教錄に見えたり、此經若我國へも渡りなば、六條の御息所、宇治の橋姫などを喩すには、利益なきにしも非じ、何ぞ必しも此を廢せむ、また此國に造れる經も多く見ゆれど、顚倒錯置などありて、知り易し、これまた假中の假なりとしるべし、

なほ此餘にも。佛經は夥しく有れども。其はみな上に論辨したる經どもの。枝葉末派の物どもにて。今逐一に引出て。論ふには及ばぬことなり。然れば斯の如く。諸の佛經一部一冊も。釋迦の眞の物なく。盡く後人の僞り作りたる物成事。更に疑ひ無事也。

倶舍宗といふは。倶舍論といふに據りて。說をたつるをもていふなり。此の論 名くはしくは。阿毘曇倶舍論といふべきを略して。倶舍論とはいふなり。（論の字のみ漢語にて、阿毘曇倶舍は梵語なり、阿毘こゝに對と云ひ、曇こゝには法といひ、倶舍こゝ

には藏と云なり、即ち對法藏論の義にして、法とは佛法を指す、佛法に對向する論藏の義なり」 そもそも此の論は。釋迦入滅九百年の時に。竺土の世親論師といふが造れるにて。其の起りを探ぬるに。釋迦入滅四百年の初めに。北天竺の境なる健駄邏國の王。佛法を尊信して。日々に一僧を請して。法を說しめたるに。僧說に不同ありしかば。深く怪みて。迦葉阿難より。正統相承の脇尊者といふ者に。佛教同源理當レ無ニ異趣一諸德宣唱焉有レ異乎。と問へるに。脇尊者答へて。如來去レ世歲月逾邈。弟子部執據ニ聞見一爲ニ矛楯一。といふ。王また諸部立レ範。執最善乎と問へるに。脇尊者答へて。諸部之中莫レ越ニ有宗一。王欲ニ修行一宜レ遵レ此矣。と云ひしかば。王すなはち此部の三藏を結集すべしとて。五百人の僧を集めて。三藏を釋したるが。大毘婆沙論なり。此後五百年ばかり有て。右にいへる世親論師。もとは此の有宗を習へりしが。後に大乘の旨を學て。有宗の義を取捨して。此の論を造りしとぞ。（この世親、はじめに小乘を弘めて、五百部の論を造り、後に大乘を學びて、また五百部の論を造れる故に、千部論師と云へりしとぞ」 さて此論唐土に傳はりて。唐の高宗が永徽年中に。玄奘法師これを譯して。三十卷と成せるが。即今傳はるところの俱舍論なり。（此の論世親が造れる故に、此宗に、此論師を本祖師と爲すなり）、 さて此の論は。右に云へる婆沙論を本として說る故に。有宗の旨を述て。一切諸法實有。また三世實有。法躰恒有など說くを宗となして。此の論三十卷。すべては九品あり。一は界品。二は根品。三は世間品。四は業品。五は隨眠品。六は賢聖品。七は智品。八は定品。九を破我品といふ。此の九品の中に。初の界品は。諸法の體を明し。根品は。諸法の用を明し。後の七品の中に。世間品より下三品は。有漏を明す。中に世間品は。果を明し。業品は因を明し。隨眠品は緣を明す。また賢聖品より下三品は無漏を明す中に。賢聖品は果を明し。知品は因を明し。定品は緣を明せり。さて破我品は。無我の理を明す。これ俱舍論一部三十卷。九品の始終に說明すところの大意なり。（綱要に云、此宗唯明ニ生空一不レ談ニ法空一、言ニ生空一者、即遣ニ我執一、五蘊之中無レ有ニ人我一、五蘊和合聚成、假名爲レ人、無レ有ニ實人一、

如レ此觀故、證ニ我空理ヲ然其法體三世實有、由ニ此義ニ故、他宗名爲ニ我空法有宗ト也〕

成實宗と號くる由は。成實論といふを以て。宗旨の據と爲つる故なり。此論は。釋迦入滅して七百年ばかり後に。〔或は九百年とも云ひ、または八百九十年とも云ふ〕、薩婆多宗を立る。〔倶摩羅陀といふが上足の弟子に。〕訶梨跋摩論師といふ天竺僧の。諸部の最長の義を簡ひ取て。一類と爲て。此宗を成し。釋迦の所説の。三藏の中の實義を釋成したるといふ義を取て。かくは號けしとぞ。〔そは彼の論に。我欲ニ正論ニ三藏實義ヲ云々、と云へるにて知るべし。〕さて唐土に傳はれるを。姚秦の羅什法師が翻譯して弘めたるにて。一部十六卷二百二品あり。〔唐土にて造れる章疏、いと多かり〕　さて最長の義とは。綱要に云。最長義者。此宗之中具明ニ二空ヲ。故觀立ニ二種ヲ。一者空觀。如ニ瓶中無レ水。五蘊之中無ニ人我ヲ故。是人空觀也。二者無我觀。如ニ瓶體無レ實。五蘊諸法皆假名。故是法空觀也。既明ニ二空ヲ故ニ。其義最長。雖レ談ニ二空ヲ。唯斷ニ見思ヲ不レ斷ニ所知ヲ。雖レ未レ進ニ入大乘ニ。於ニ小乘中ニ尤爲ニ優長ト。一切諸法唯歸ニ一滅諦ニ。其旨深矣。といへるを觀て。此の宗の大意を辨べし。〔釋書にも、叙ニ置三寶四諦ヲ、攝ニ諸名相ヲ而設ニ于理ヲ者成實也、といへり〕

天竺。唐土。日本。三國に弘傳せる相を述るに。如來滅後四百年の間。小乘繁昌して。異計相興る。大乘隱沒して龍宮に納在り。〔此事處胎經四の三十三丁に有、龍宮の事、法苑珠林二十の四丁〕中に就て。百餘年の後に。異計競ひ起り。〔珠林論じう記に出たり〕是をもて摩訶提婆〔大天と譯す、三逆罪の人なり。それより出家す〕五事の妄言を吐き。〔五事のこと、珠林論上。十九丁〕婆麁富羅〔犢子部と譯す〕いまだ實我の堅情を捨ず。佛滅三百年より。佛滅四百年の始め。大義を諍て紛紜たり。西山北山異見を起して猥綸す。〔ジウリ論ジツキ上三丁メ、猥綸とは、犬のなに事なきをあらそふが如し〕遂に四百年の間に。二十部五印度中に競起す。〔ジウリ論にあり、西域記二の初丁〕五百交り五百部の事諍ふ。〔大論六十三三丁メ〕五百年の時に。外道競起り。小乘稍隱くれたり。次て大乘を

を爰に馬鳴論師時六百に將として始めて。大乘を弘む。（馬鳴のこと。マヤ經下十三丁メ）外道の邪見否な卷きて皆亡す。（九十六種の外道、名義集二の二十八丁。）小乘の異部。口を閉て咸伏す。大乘の深法再び與る。衆生の機感。すでに正路に趣けり。次に龍樹菩薩（西域記八ノ八丁）あり。六百の季歷。（マヤ經七百年の終といへり）七百の初運を。馬鳴に紹て。五印に獨步し。所有外道みな摧かずと云事なし。所有法皆悉く傳持す。三本華嚴（下に見ゆ）獨り胸藏に含み。四辨文河妙に江海を控く廣く論藏を造りて。藍より青く。深く佛法を窮ること。氷より寒し。（凡てこの二大論師は、並にこれ高位大士なり、馬鳴はすなはち。古の大光明佛、龍樹はすなはち昔の妙雲相佛、俱に本佛なり、智辨倫に超たるは宜なるかな。）爰に二大論師。化緣已に盡き。化を息め本に歸して後は。衆生また雜起して。邪見還て深し。これに依て。九百年の時に。無着菩薩といふ者出て。（西域記五十一丁にあり）また再興して道を說り。（此者夜は都率天に昇りて、現に釋迦の敎を稟け、晝は降りて、廣く衆生を敎へたるに、衆生の執深くして、尙

皇國に傳はれる宗の始りは。三論宗なり。此は釋迦法師入滅して。六百年の後に出たる。彼の龍樹といへる法師の造れる。中論四卷。提婆といへる法師の造れる。百論二卷。また龍樹が造れる。十二門論一卷。この三論の旨を本と爲て立たる故に。三論宗といふなり。外に龍樹が智度論百卷を加へて。此を四論といふ。此の四論。何れも諸の外道法と。小乘とを破りて。大乘の義を說明せるが中に。智度論は。大品般若を釋せり。故に智度論といふ。（梵本はもと千卷ばかり有しを。羅什法師が取簡て、九倍を減じ翻譯して、百卷となせりとぞ。）また三つの論すべて七卷の旨は。眞俗二諦を說明らむるに過ず。（二諦のことは、下に引る、八宗綱要の文にて知るべし。）四論の旨をうち合せて。此宗の祖述する所は。般若の旨を本と爲たるなれど。彼經に說る在の隨なる趣の餘に。新に微妙の旨ある趣に立たるものなり。（般若の旨は、五蘊皆空といひ、諸法空相と云へるにて、空を主と爲たること明なり。此の由上に委く云へりき。）そのは凝然が八宗綱要に。緣生諸法是假有。假

有即無所得矣。故立二諦以俗諦故。不動眞際建立諸法以眞諦不壞假名。而說實相故。空宛然而有。有宛然而空。色即是空。空即是色旨在茲矣。有是空之有。故言有非有。空是有之空。故言空非空。非有故卽有談空非空。卽空說有諸佛說法。常依二諦即其義也。此宗所顯即此而巳。といひ。また亦立四重二諦。一有爲俗諦空爲眞諦。二有空爲俗。非空非有爲眞。三有空非空非有爲俗諦非非有。非非空爲眞諦。四有空非空非有。非非有。非非空爲俗諦非非不有非非不空爲眞諦。斯迺破外道法。有所得大乘等故也。と云るを觀て思ひ辨ふべし。また成佛果を說る趣は。同書に。一切衆生本來是佛。六道衆生本自寂滅。無迷亦無悟。豈論成不成乎。故此宗迷悟本無。湛然寂滅云々。成佛有遲有速。由根有利鈍故也といひ。また此宗意は覺體本有迷。故有生死。拂客塵時。本有覺體宛爾而顯。此名爲始覺佛。當知。對迷故立悟。對悟有迷。悟發則無迷。無迷故何悟。無迷無悟。迷悟本無。本來寂滅。迷悟染淨是假名。無得正觀。即妙極至道也。と云るを見

て辨ふべし。さて此の字意は。龍樹に始り。龍智提婆の二論師に傳へ。夫より次々傳はりて。羅什法師と云に傳はりたるを。此の法師唐土姚秦の世に。彼の國に渡り來て。經論を翻譯し。專ら此の宗旨を傳ふ。右の四論は。すなはち此の法師が譯せるなり。斯て羅什法師より次々傳はりて。嘉祥法師といふが時に。高麗國の慧灌と云ふ法師。彼土に渡りて。嘉祥にしたがひ。三論の學を受て國に歸りしを。推古天皇の三十三年正月に。高麗國王より。貢物の便につけて。慧灌法師を貢れり。(此年の夏、僧正に任せられたり。)こゝに於て。元興寺に住しめ給ひしが。後に河内國井上寺を創めて。三論宗を弘めたり。これ皇國に宗旨あるの始なり。(八宗綱要に云、諸宗是三論之末、三論是諸宗之本、若有不入龍樹心府之宗乎矣、諸宗悉崇爲大祖者乎、○釋書云三論者、諸法蕩滌之深理也。)

三論宗の次に傳はりたるは法相宗なり。此をまた唯識宗ともいふ。此宗の趣きは。八宗綱要に。決判諸法。故名法相宗。此宗大意明唯識。故名唯識宗と

ありて。學ぶ經論の多かる中に。主とあるは。唯識論。瑜伽論などなり。(此は誰が作にて云々)抑々この宗の起原は。釋迦入滅して後。九百年の時に。彌勒菩薩といふが。中天竺の阿瑜遮國といふに天降りて。釋迦の在世中に。親く聞る所を。傳へ說る由なり。そは綱要に。彌勒菩薩。從二都率天一降云々。如來在世親聞所レ傳。非空非有中道妙理。於二諸教中一定爲二明鏡一。如二瑜伽論一者。卷軸百卷。諸教悉判。故名二廣釋諸經論一と云るにて知べし。(元亨釋書にも、唯識者諸法建立之精致也、昔慈氏大士、微塵刧前所二承稟一矣といへり、慈氏とは。彌勒がことなり、また餘書に、慈尊ともあり、これが傳へたる旨なる故に、此教を慈氏教とも、書等に見ゆ、然れどこの彌勒の天降りて說る、と云ふことは幻說にて、實は下に擧たる無着世親らが、託言と聞えたり。)次に無着と云ふもの出て。彌勒が說を繼ぎ弘め。其弟世親といふもの。(無着世親ともに、諸書に菩薩とあり。)其迹を承て。此宗を傳へたる。次に護法と云ふ者。これを弘め。次に戒賢と云ふもの。繼弘めたりしを。彼玄弉法師が。天竺に渡れる時に。戒賢に謁して。此の宗を傳へて。唐土に還りて弘めたりしを。新羅の僧智鳳と云ふもの。玄弉に承て。天智天皇の御世に。皇國に渡れるを。大和國高市郡人に。義淵と云ひける僧。この智鳳に從ひて此の宗を學び。後にまた唐土に往て。玄弉の弟子。窺基法師が上足の弟子。智周法師と云に謁して。此宗の訣を稟て國に還り。盛に此宗旨を弘めて。龍蓋寺。龍門寺。龍福寺などを建たり。行基。道玆。玄昉。良辨。宣教。降尊などみな義淵法師が弟子どもなり。文武天皇の大寶三年に。僧正に任せられたり。(釋書諸宗志の篇に、唯識と擧て、亦法相と云ふよしを記さず、唯識は、道昭が、玄弉より傳へたるよしをのみ記して、義淵が事をいはず、然して道昭が傳には、玄弉に謁して、ただ禪學を傳へたる事のみを記し、義淵が傳には、唐に渡りて、唯識宗を稟還れる由を記せるは、いぶかしきことなり、今は八宗綱要に據り、義淵が傳に考へ合せて記しつ、)さて此の宗の趣きは。綱要に云く。一者立二三時教一攝二一代教一。是解深密經說分明故也。一者佛教於二初時一者。爲二聲聞乘者一。破二外道實我之執一。明二我空法有之旨一。諸部小乘皆此教攝。二者空教。於二第

二時。爲大乘者明諸法皆空之旨。以破前實法之執。諸部般若皆此敎攝。三者中道敎。於第三時説非空非有之旨。以破前偏有偏空之執。是則中道妙理直入正路。一代之中尤甚深微妙。華嚴。深密。金光明。法華。涅槃等諸大乘皆此中攝。といひ。（此宗に、三時敎を立たるは、上に辨へたり、あわせ考ふべし。）また此宗本意。只明唯識。一切諸法。皆是唯識。無一法而在心外。故慈恩大師云。有心外法。輪廻生死。覺知一心。生死永弃。然諸法差別。皆唯識所變。離識無別法。一切境界皆皈心識。惣明此義といひ。（慈恩大師とは、上にいへる窺基法師がことなり。）また諸位修行皆觀唯識。佛果所證但證唯識。故萬行自唯識而起。萬德依唯識而感。などあるを以て。此宗の大概の旨を知べし。

法相宗の次に渡れるは律宗なり。此は四分律といふに據て立たる宗なる故に。かく云ふなり。（具には四分律宗と云べきを。略して律宗とのみ唱へ來れり。）其は釋迦入滅の後に。彼の七葉岩內にをいて結集せる。三藏の中に。毘那耶藏と云へるは。すなはち律宗なるを。彼の十大弟子の中に。優婆離といひける者の。此をよく持ちて誦し傳たりしを。漸々に傳誦し謬りて。釋迦入滅より。百年ばかり後には。多く異義を發して。區々なる說も起れりしかど。曇無德と云ける法師の。傳誦したる趣きを傳へたるが。即今在る四分律六十卷にて。此の敎の始めて唐土に傳はれるは。曹魏の世なり。斯て唐の世に。南山律師と云ひける僧。かの曇無德を祖として。四分律の義を說て種々の章疏を著し。盛に此宗を弘めたりしを。次々傳へて。鑒眞和尚と云に傳はれり。此の僧は。唐土の楊洲といふ國の產にて。唐の玄宗が。天寶元年の比。楊州の大明寺といふに在て。律の講席を開ける時に。皇國より。榮叡普照といふ二人の僧。彼國に渡りて。（この二僧は、天平五年遣唐使丹墀廣成に從ひて、求法の爲に渡れるなり。）其席に連なりしが。鑒眞に皇國へ渡らむことを請しかば。其請に應じて。孝謙天皇の天平勝寶六年正月。大宰府に著りしを。四月に京へ召れて。東大寺に入らしめ給ひ。太上天皇。（聖武天皇を申すなり。）大后を始め奉り。皇子たち。官人等までに受戒せしめ給ひ。後に大佛

殿の西に。別に戒壇院と云を建て。受戒所を定め給ひ。後にまた唐招提寺を建しめ賜ひ。天平寶字二年に大和尙の號を賜ふ。律敎の御國に弘まれるは。此大御代より始まれり。さて此宗旨の大意を云はゞ。八宗綱要に。此宗法義明レ戒也。戒本者。僧尼二部也。比丘比丘尼所持。名二具足戒一。僧尼具戒。無量無邊。定數限且隨レ緣制。故僧尼戒各有二三重一。僧戒三重者。廣則無量。中則三千。略則二百五十戒。尼戒三重者。廣則無量。中則八萬。略則三百四十八戒。僧尼二衆受二具戒一時。並得下如レ此無量無邊等戒上。量等二虛空一。莫レ不二圓足一。故名二具足戒一。五戒。八戒。十戒等。皆從二具足戒中一抽レ之誘二機根一。以爲二具戒方便一。其五戒者。一不殺生戒。二不偸盜戒。三不邪婬戒。四不妄語戒。五不飮酒戒也。八戒者。五同レ上。（但改二邪婬一爲二不婬一也。）六香油塗身戒。七歌舞觀聽戒。八高廣大床戒也。十戒者。八同レ上。九。非時食戒。十持金銀寶戒也。比丘比丘尼並具足戒。沙彌沙彌尼並十戒。優婆塞優婆夷。並五戒也といひ。また南山律師。立二化制二敎一。以攝二一代敎一。其化敎者。經論之所詮。定慧法門四阿含等是也。其制敎者。律敎所詮。戒學法門。四分律等是也。此宗即律藏敎也。以レ戒爲レ宗。戒行淸淨。定慧自立。故先持戒制禁業非。然後定慧伏二斷煩惑一。三乘聖道非レ戒不レ立。故如來最初制レ戒。意在レ茲矣。行者試心奮在二此宗一。大覺妙果夫賒乎。と云へるを以て。大概をしるべし。さて此四分律宗は。大小二乘の中に。何れに屬くと云ふに。或は大乘と云ひ。或は小乘と云ひて。其說の區々なるを。網要に。南山律師が。四分律宗義。當二大乘一と云へる說に據て。其意に說たれど。此は大乘と言むとするに。大乘の旨に非ず。小乘とせんことの惜きまゝに。中を取て。當二大乘一といふ說によれるものなり。然れども。實は小乘の旨にて。阿含と並び行はれてもとることなく。釋迦の眞面目にぞ有ける。

華嚴宗といふ由は。華嚴經をもて。本憑の經と爲すによりてなり。（此の經今在るは、三十八品あり、此はもと。全本傳はらざりしを、渡ることに釋しつゝ、東晋の覺賢三藏。唐の喜覺三藏、般若三藏。など云ふ僧ども。次々釋して。全本と成せりとぞ。）此宗に。七祖を立たり。一は馬鳴論師。二は龍樹論師。

(此の二人は。天竺の僧なる事、上に記せるが如し、)三は杜順禪師。(此は漢土の終南山と云ふ山に居て、華嚴法界觀、五教止觀十玄章など云を製りて、此宗旨を流通したりし故に、此を唐土の大祖師と立る事にて、諡を帝心尊者といふなり、)四は智儼禪師。(こは雲華寺といふに居たり、故に雲華尊者と諡をつけたりとぞ、)五は香象大師。(この僧の經を講じける時に、天華を雨ふし。口より光を發しなどしける故に、唐の則天と云ひける女王が時に、賢首菩薩といふ諡を號たりとぞ、八宗綱要に、一宗總義解釋無レ遺、義理逃盡、凡華嚴甚盛。晉在ニ此祖一と云へり、)六は淸涼大師。(この僧は、廣く諸宗に兼通して。大疏演義鈔、その餘にも、章疏を多く作れり、淸涼山といふに居て、此圓宗を弘む、諡を華嚴菩薩と云ふなり、)七を宗密禪師と云ふ。(この僧は、圭峯草堂寺と云ふに居たり、諡を、定惠禪師と云ふなり、)但し此の七祖は。唐土にて立たるなれど。皇國の此の宗には。杜順。智儼。香象。淸涼を。四祖と立てたり。さて此の宗旨の皇國に傳はれることは。聖武天皇の大御世。天平の頃に。河内國より出たる慈訓。審祥と云ひける二人の法師。相偕ひて唐土にわたり。賢首國師(上に擧たる、香象大師がことなり、)に謁して。華嚴の旨を稟け歸りて。良辨法師と云に付て。始て賢首宗と稱たりしとぞ。(稱德天皇の天平勝寶四年に、慈訓を僧都と爲され、寶字元年に、興福寺の主務と爲たまへり、此職は、此の僧より始まれり、さて慈訓は、寶龜八年に寂せりとぞ、)抑この良辨と云ふは。近江の生れにて。(また一說には、相摸の國の人なりとも云よし、釋書に見えたり、)二歲のとき。鷲にに捉られたりしを。南京義淵と云ひける法師。春日神社に詣つるとて。途なる野にて。拾ひて弟子と爲し。法相宗を教へたりしが。また慈訓法師に從ひて。華嚴の旨を受て。此の宗を弘めたり。(釋書に慈訓、與ニ審祥一、親稟ニ於賢首一、故良辨爲ニ賢首的孫一也、訓祥不レ振、至レ辨大昌、と云ひ、綱要には、流ニ傳日本ニ道璿律師爲ニ其始祖一、律師承ニ香象大師一、授ニ良辨僧正一、と云へり、道璿とは、慈訓がことなるか、いまだ考へず、)聖武天皇の大御世に。東大寺の大像を建給へるは。全この法師の勸化によりてなり。(此事委くは、巫學談弊に記せるを見るべし、)かくて天平

五年に。金鐘寺を建て。寶字四年に僧正となり。寶龜四年閏十一月に卒したり。さて此宗の概略は。五教十宗と云ふことを立て。一代の法門を攝し。重を華嚴に歸したるものなり。其は八宗綱要に。五教者。一小乘教。二大乘始教。三大乘終教。四頓教。五圓教也。小乘教者。如來出世。爲說一乘開化衆生故。說本教一乘。(本教一乘とは、すなはち華嚴を指ていふ、)然衆生不堪聞深法。故於一乘中分別三乘。漸誘淺機。以令趣大道。中小乘教。權方施設也。次大乘始教者此教既出小乘。始入大乘。故少雖似小教。多談直進深義。云々。雖出大衆上座之黨。進未及隨緣皆成之談。始教之名寔由此矣。次終教者。此教諸相融即。入不二之定門云々。即大乘深義。然未談事々無㝵。未明主伴具足。未絕昇進之相立位。是故名爲漸教也。次頓教者。此教。一念不生即名爲佛。法相之差異都亡泯。眞性之妙理直顯現。一切所有唯是妄想。一切法界皆是絕言。云々。然未知森焉諸法皆毘盧果德。浩然衆相。俱是佛海妙相。故尚號淺教也。圓教者。此教明事々無㝵。窮諸法之體相。談主伴無盡。彰果相之圓備。故融諸法而即入。六相圓融。通衆相而無㝵。云々。圓融之妙義。現身證果。行布不妨圓融。圓融不妨行布。故得一切相即融。是此教意也。如來所說。一代教文。淺深雖區。不出此五也。此五總束以爲一大善功廣大法綱。攝法分齊。圓教備足。故凡一代最長。諸宗玄底。莫如此圓教。唯此教窮極。華嚴如須彌。諸教似群山。諸教皆會華嚴大海。三乘並出今經座苑。故此教名爲根本法輪。圓極自在教也。と云ひ。また十宗のことも。同書に。十宗者。上五教約宗分之。不過十宗。一我法俱有宗。二法有我無宗。三法無去來宗。四現通假實宗。五俗妄眞實宗。六諸法但名宗。(以上宗、並小乘教中開之、)七一切皆空宗。是始教也。八眞德不空宗。是終教也。九相想俱絕宗。是頓教也。十圓明具德宗。是圓教也。と云へるをもて。大概をしるべし。

天台宗といふよしは。唐土の天台山國淸寺といふより。弘め出たる宗なる故に云ふなり。(此由下に委くいふ、)伊人法義例に。一家教門所用義旨。以法

華爲二宗骨一以二智論一爲二指南一以二大經一爲二扶疏一以二大品一爲二觀法一引二諸經一以增レ信。引二諸論一以助二成觀心一。といへる如く。（智論とは、智度論を云ひ、大經とは、大涅槃經を云ひ、大品とは、大品般若を云ふ也。）法華經を以て。本經と爲つる故に。また法華宗とも云ふなり。（今世は、後世日蓮と云ひける法師の立たる宗を、法華宗といふめれど、彼は此の宗の號をぬすめるなり。）この宗の祖師を。天台智者大師にかけていふめれど。（この法師が名を、智顗字は德安といひて、唐土の陳隋の世の間の僧なり、また智者大師とも云ふ。）實はこれより前に。惠文大師と稱ふ僧の。智度論に依て。一心三觀の旨を立て。南岳惠思禪師と稱ふに授けたりしを。此僧また。定惠三昧成就觀と云ふ發めて。右の智者大師といふに授たりしかば。此の法師また。法華經の四十餘年。未顯眞實の文に依て。こを最第一の經とさだめて。五時八敎の說を立て。（五時八敎のことは、下に云ふを見るべし、また五時の說の非なるよしは、下に天遊が說を引たるを見て、辨ふべし。）彼の經の文段を註釋して。文句と云ふ書。十卷を作り。妙法蓮華經といふ。

題號の義を釋して。玄義といふ書十卷を作り。摩訶止觀といふ書。十卷を作りて。觀心のことを釋明せり。（此の三十卷を、天台三大部といふ。）さて此より章安。智威。惠威。玄朗。妙樂。荊溪。道邃などいふ法師に。次々傳はれりしを。此法師どもの。次々その說を增益して。此の宗は成れりとぞ。（そは智者はたゞ散說したりしを、章安が悉く結集して、一家の綱目と爲し、智威、惠威、玄朗など、次々に此を弘めて、妙樂法師にいたり、智者が玄義の註を、十卷かきて、此を釋籤と名け、文句の註を十卷かきて、此を疏記といひ、摩訶止觀の註を十卷かきて、弘訣とも、輔行記ともいふ、智者が注と、妙樂が註と合せて六十卷、これを天台宗の六十卷といふなり、元亨釋書にも、此の宗の事を、慧文神悟憲二章龍樹一、智者倡レ之、章安轄レ之、二威緘然而守、荊溪僞レ說而行、といへり、憲二章龍樹一とは、龍樹が智度論に本づきて、說を立たるをいひ、二威とは、上に云へる、智威、惠威二人がことゝ聞えたり。）さて右の法師ども。次々に增益して。大成したる宗旨の。大概のおもむきは。八宗綱要に。宗大義敎觀二門。其敎門。四敎。

五味。一乘。十如是等也。其觀門者。十二因緣。二
諦。四種。三昧。三惡義等也。判二一代敎一。敎有二四
敎一。時有二五時一。四敎之中亦有二二種一。一化法四敎。
(是釋義之綱目也。)二化義四敎。(即判敎之大綱
也。)兩種四敎。合爲二八敎一也。化法四敎者。一三
藏敎。二通敎。三別敎。四圓敎。是也云々。藏通
二敎是應身。(於レ中藏敎劣應身、通敎勝應身也。)
別敎他受用身。圓敎自受用身。理智冥合。融通無
㝵。三身即一如來也。(また圓敎者云々、一切衆生、
一念心即如來ともいへり。)此宗立二四種佛土一。一同
居土。藏敎劣應身佛。居二此土中一。(於レ中有レ二、一
同居穢土、如二娑婆等一、二同居淨土、如二安養寺一、)
二方便有餘土。在二三界外一。通敎勝應身佛居二此土一。
三實報土別敎十地。圓敎十住已上菩薩。住二於彼土一。
四寂光土。唯佛實身住二彼淨土一。四敎佛居二如レ此四土一
也。以二此四敎一判二如來一代大小諸敎一。莫レ不二窮盡一。
(化法四敎、大概如レ此。)次化儀四敎者。一頓敎。
(如二華嚴經一。)二漸敎。(阿含、方等、般若之三時也。)
三不定敎。(機解不レ同、同聽異聞、聞レ大解レ小、聞レ小
解レ大等、然互相知、故名二不定敎一。)四秘密敎。(一會之

說、對レ機異說、或說レ小之座、說二一實之法一、或說レ大
之座而說二餘法一、然互不二相知一、故名二秘密敎一。)是惣
名二化義四敎一也。(當レ知化義所說、不レ出二化法一、化法
說儀不レ過二化義一、故立二八敎一、以爲二判解即大綱綱目一。)
其五時。華嚴。阿含。方等。般若。法華。涅槃。化儀次第
一代說敎。不レ過二此五一。名爲二五味一也といひ。釋書に
も。其訓也爲レ權爲レ實。其統也爲レ圓爲レ一。其分也
爲レ具爲レ變。彌二綸萬法一者八敎也。十界者。一界各具二
十界一而百界生焉。十如互含二百界一而千如成焉。配二
三世間一爲二三千法一。分而成二三千一。復而歸二一念一。即レ復
而分。即レ分而復。一心之於二三觀一。亦復如レ是。といへ
るなどを合せ見て。此宗の大概を知るべし。(すべて、
此宗の大意を知らむと思はゞ、四敎義集解標指抄、
といふものを見るべし。)さて此の宗の皇國に傳はれ
ることは。桓武天皇の延曆二十三年七月に。近江の國
滋賀の郡より出たる最澄法師。(此僧、姓は三津にて、
西土の、漢靈帝と稱ひける王の末なりとぞ。)渡唐求
法の詔をうけて。遣唐使菅原淸公にしたがひ。彼國
にわたりて。天台山國淸寺に至り。道邃和尙といふ
にしたがひて。(道邃は、荊溪上足の弟子にて、智者

より七世にあたる也〕一心三觀の旨をさづかり。すべて天台教の書ごもを寫し取り。又（佛隴寺の、行滿座主と云にも從ひて、荊溪より前の、諸籍秘賾を授かり〕延暦二十四年の秋に成て。歸り來り。唐土にて得たる所の經論。凡て二百三十餘部を獻りしかば。勅して阿闍梨になさる。是に於て日枝の山にて。此宗を弘めたり。（是より前に、天平勝寶ロロに、鑑眞和尙がわたり來し時に、此宗の章疏をも持來りしかごも、未世に弘まらで有しを、最澄に至りて、世に弘まれり〕延暦二十五年最澄奏して。この程までは。華嚴。法相。三論。律の四宗ありしに。この新天台法華宗を加へて。五宗と爲たり。さて此の法師。弘仁十三年二月に。傳燈大法師の位記を賜ひしに。同年六月五十六歲にして寂しぬ。弘仁十四年二月。寺の額を賜ひて。延暦といふ。此は先の天皇の。崇建し給へるに依てなりとぞ。（是より前、最澄、延暦四年七月、比叡山に上り草舍を立て、法華經、金光明經、等を讀誦し、同七年、山頂に一宇を創建して、一乘止觀院と名け、自ら藥師佛の像を刻みて安ず、こは十九歲の時なりしとぞ、この止觀院は、今の所謂中堂の在所にて、延暦寺といふは、即ちこれなり、〕さて淸和天皇の貞觀八年七月勅して。傳教大師といふ謚を賜へりしなり。

眞言宗といふ由は。金剛頂經。大日經。蘇悉地經など三部の經を所憑として。秘密眞言の教。といふを立るをもてなり。（右の三經のことは下にいふべし〕抑この經々の所說は。大日如來の教にて。金剛手といふ者に傳へたりしを。南天竺の鐵塔に藏めおけるに。釋迦滅後七百年時に。かの龍樹といひし者。芥子を擲て。その關鍵を啓き。金剛手に遇ひて受たるより。世に見れたるを。龍樹論師。これを龍智といふに授け。龍智より善無畏。金剛智。不空など云僧に。次々傳はりしを。唐玄宗が開元四年より次々に。善無畏三藏。金剛智三藏。不空三藏ともに。唐土にわたり來て。互に此の宗を弘めたり。此時もなほ龍智は。天竺に存命たりしかば、不空また訪行て。深く秘密教の旨を得て。唐土に歸り。大成して。惠果阿闍梨といふに傳へたりとぞ。（上に記せる事どもは、しばらく此の宗の書等にいふ所に就て記せるなれど、すべては、いと／＼信がたき事多かり、其由

は、巫學談弊に委く云へり」さて此の宗の皇國に傳はれることは。桓武天皇の大御世に。空海法師が亰て來れりしなり。抑この空海法師といふは。讃岐國多度郡人にて。俗姓は佐伯氏なり。初の名を敎海といへりしを。中ごろ如空と改め。延暦十四年。東大寺の壇に登りて。具足戒を受て。空海と改めたり。(東大寺の戒壇のことは、律宗の下にいへり」この時佛前にて。三乘十二部經。我心有疑未能決擇。三世十方一切諸佛。願垂加被示我正法。と云ひて寢たりし夢に。人の來て。有大經名大毗盧遮那神變加持。是眞秘要也。と告しかば。寤て後に。此經を問ふに知るものなし。諸所に往來して。懇誠に尋求めて。大和國高市郡。久米寺の東塔の下にて。此の經を得て披閲るに。其意を得ざること多かりし故。これより渡唐して。其の義を明らめむと思へりしとぞ。(上の件、大毘盧遮那經を得ざる事のよしは、釋書によりて記せるなれど、此はいと／＼信がたき説なり、其由は、巫學談弊に委く云へり」斯て延暦二十三年の五月。遣唐大使藤原葛野麻呂にしたがひて。彼の國に渡れりし時は。唐の德宗が貞元二十年の八月なり。さて不空大廣智三藏の高弟。慧果阿闍梨と云に謁して。灌頂を授かりし時。慧果阿闍梨。かの金剛頂經など。諸密經。並に圖書曼荼羅。又諸道具を與へて。昔大毗盧舍那世尊。以秘密眞言印付金剛薩埵。薩埵傳龍猛。展轉至大廣智。大廣智亦付我。我兩部大法秘密印信。皆悉授汝。宜歸本土傳布國界。と云て傳へたりしとぞ。(釋書に、また最澄の傳に、德宗貞元二十有一年、如越州龍興寺、遇順曉阿闍梨受三部灌頂密敎、及得陀羅尼經書印契圖樣、灌頂器物、曉闍梨付法書曰、昔開元朝、大三藏、婆羅門國王子善無畏、從佛國大那闌陀寺傳大法輪至大唐國、轉付傳法弟子義林、是國師大阿闍梨年一百三歲、見今在新羅國、轉大法輪、又付大唐弟子順曉、亦是鎭國道場、大德阿闍梨、復付日本國供奉大德弟子最澄、轉大法輪、最澄是第四付屬、唐貞元二十一年四月十九日書、令佛法永々不絶、阿闍梨沙門順曉、錄付最澄、と見えたれども、此またいと信がたき説也、此由も、巫學談弊に委く論へるを見て、辨ふべし」斯て彼國の元和元年八月に。般發して。歸り來れる時は。平城天皇の大同元年也。(彼國の貞元

二十年八月に、かしこへ渡り著て、元和元年八月に、彼國を發しかば、かしこに滯留せること、二々年あまりなり）さて勅して。傳來の密乘を流通せしめ給ひ、嵯峨天皇の御世になりて、宮中に。諸宗の碩師を召て。おの／＼習ふところを唱へしめ給へるに。空海。即身成佛の義を立たり。こゝに諸宗の僧ども。爭ひて折かむとするに。空海が辨論精審なりしかば。天皇の御言に。義雖玄極。朕思見證。と詔ふ時に。空海すなはち。五藏三摩地觀。といふを爲して。忽に頂上より。五佛の寶冠を涌出し。五色の光明を放ちしかば。天皇も禮し給ひ。群臣はみな起て拜したりとぞ。（これ空海法師が、いはゆる神通を現じたる始なり）さて弘仁七年に。空海勝地を相めて。紀伊國高野山に上りて。金剛峯寺を創立し。弘仁十一年。傳燈大法師の位記を賜はり。弘仁十三年に。大同太上天皇。（平城天皇をまをすなり）入壇灌頂し給ふ。これ天皇の。密灌を受たまへる始なり。空海これより。大に密教を興し。則「毘盧遮那經及菩提心論」十住心論といふを著して。諸宗を品藻したり。その十住心とは。八宗綱要に。一異生羝羊心。二愚童持齋心。三嬰童無畏心。四唯蘊無我心。五拔業因種心。六他緣大乘心。七覺心不生心。八如實一道心。九極無自性心。十秘密莊嚴心。是名十住心。初三住心是世間乘。「於中第一是三惡道。第二即人乘。第三是天乘。」後七住心是出世間乘。「於中第四聲聞。第五緣覺乘。惣是小乘。後五大乘他緣覺乘。心是三乘教。一道極無即一乘教。第十是金剛乘教。最尊最極之實教也。」然九種住心。皆是權乘。竝是因位。第十住心。獨是實果。大日如來心王覺體云々。自在圓滿高超諸宗而聳々。廣包衆典而廓々。然則顯乘大果。未上此堂出世小聖豈得入室乎。四大乘以空寂而謂實現九界情執覆心城而未開顯。（四大乘とは、法相、三論、華嚴、天台の四宗を指ていへり）此の密教。明見實理深入心城。故塵數諸尊。森羅而住。一切衆生。萬德妙用。歷然而具。故一切衆生。皆是毘盧遮那也。一切諸相。悉是覺王境界也。此空建立六大惣明佛體。（六大とは、地水火風空識をいへり）六大之中前五大是理。識即智也。智即金剛界。理是胎藏界。是名兩界兩部大日。而成六大即大日如來。一切諸法。不離六大。六大法性周遍諸法。故

一切諸法無レ非ニ大日一。大日如來周ニ遍法界一當レ知。兩部者是大日如來。理智之德也。兩部不二。爲ニ理智冥合一云々。顯敎是レ釋迦說。密敎即大日說。是故二敎說主。炳然差別。若得ニ實義一即二佛無二。離ニ釋迦一別無ニ大日一。云々此敎意。一切諸法皆是大日。眞如即我身。佛法即吾體也。重々深妙。密々秘奥。若離ニ此敎一永無ニ成佛之路一。といへるを見て。此宗の大意を辨ふべし。さて弘仁十四年正月。勅によりて。東寺に灌頂院を建て。每歲二度。灌頂事を行ふことを始め。承和元年に。空海奏して。唐國の內道場に准じて。宮中に眞言院を置むことを乞しかば。勅して勘解由司廳をもて。曼荼羅道場と爲し給ふ。(こは後世まで、每年正月後の七日に修法あり、湖亭涉筆に云、唐大宗嘗曰、梁武帝君臣惟談ニ苦空一、侯景之亂、百官不レ能レ乘レ馬、此深足レ爲レ戒、至哉大宗之言也、以レ此訓ニ子孫一、子孫猶不レ能ニ遵守一、肅宗置ニ道場于麟德傳一、以ニ宮人一爲ニ佛菩薩一、武士爲ニ金剛神王一、召ニ大臣一膜拜圍繞、代宗置ニ百高座一、於ニ資聖西明兩寺一、講ニ仁王經一、至ニ晉孝武帝一、立ニ精舍於殿內一、引ニ諸沙門一居レ之、內道場之設權ニ輿于此一、此風一開、不ニ特當時響應一、浸淫至ニ于皇朝一、設ニ內道場一、講ニ仁王經一、遂爲ニ朝廷典故一、攝關三公、剃染營建爭効ニ其爲一、更有レ甚焉、)さて淳和天皇の天長の始に。僧都となり。仁明天皇の承和二年三月二十一日に。高野山金剛峯寺にて。六十二歲にて寂したり。醍醐天皇の延喜二十一年十月に。弘法大師といふ諡號を賜へり。

禪宗の事は。八宗綱要に佛法玄底。甚深微妙と云。釋書に。如來心性之玄賾也。と有て。此の宗旨の傳來は。釋迦在世には。未其人を得ざりし故に。祕しおけりしを。末後に。迦葉に付屬したるにて。此を正法眼藏涅槃妙心と云。かの以心傳心。敎外別傳と云は是也。斯て迦葉より。次々相傳して。菩提達磨と云者に傳はりしを。(いはゆる達磨大師これなり)此法師。西土梁武帝が。普通元年九月に。彼國にわたり來て。武帝に此の宗の旨を說りしかど。武帝はもとより。淫する宗のありしかば。達磨がいふところ心に契はず。故に達磨は梁を去りて。魏國に入り。(此時しも、西土は二つ分りて、北魏南梁といひしほどの事にて、梁はいはゆる南梁、魏はいはゆる北魏なり)嵩山の少林寺と云に居て。九年壁觀して終れりとぞ。

禪家祖承の法師の名。付法藏經。摩耶經。舍利弗問經。禪經など。各々相違あり。これは異部相傳の說にして。誰を信と定がたし。また唐僧智矩といふもの。寶林傳と云を作りて。いはゆる二十八祖を載たれど。此は仲基說に。是契經所未經見。古人或謂以爲智矩僞作。以法言之。心則吾心也。法則吾法也。以吾心而證吾法。何用彼祖承。雖已自爲七佛。誰復咎之。然而天下滔々。誇其祖承者。皆是也。以吾觀達磨。決非其衒人以祖承者之徒。禪家制祖承者。豈無非後世防智矩乎。後世儒氏亦不知之。愧其已獨無之。乃云堯以是傳之舜。舜以是傳之禹。以至孔子孟軻是其道統之傳。所出可笑。達磨入支那者。其意蓋謂。竺土佛法既屬像季。事皆萎薾。無復可與語者。惟支那絕遠。敎法未及。事猶屬草味。宜於此時誘以吾道直示之旨。亦應有了解者。乃決其意而來也。然其初見梁武帝。乃問以功德及與朕對。於是磨乃謂。亦猶吾竺土佛法也。非帝不契。乃磨不契。即輒拂衣而去。於少林寺九年壁觀以終。其人或云。振旦機熟。是大不然。以基觀之。是或然矣。其言于帝而不契。終爲人被毒而死。是何在其爲機熟。分明是後徒飾辭。嗚呼達磨。爲其道法遠入遼絕之地。欲以播之。其言至高。無復人信受者。而終死于極惡闡提小人手。吾以達磨爲天下古今一人可憐者也。然而後來其道大興。天下衲僧跳不出泥裡。洗土塊直至與迦文相抗衡。亦固其所也。其徒所謂機熟。以是云爾。然以命之其初者非也。

かくて此法師の立たる旨も。次々六傳して。曹溪といふに傳はれり。(世に六祖大師といふはこれなり)この法師。大に達磨が以心傳心の骨法を得て。是より以前には。此宗旨なほ氤氳として。明ならざりしを。明に解り得て。弘めたりしかば。次々に此を主張する法師のおほく出來て。盛に行はるゝに就て。その法師ども。所見にいさゝか異ありて。種々の旨を立たる中に。臨濟。雲門。曹洞。潙仰。法眼。の五宗の外に。なほ楊岐。黃龍。の諸派に支れたり。其は釋書に。頭上雷轟。一喝不及掩目。目前電閃。一棒無處轉身者。臨濟宗也。納脚睦州門中。門閉脚折。封眼靈樹函内。函開眼明。三句語揮劍而

不痕。一字禪關轉而。無味者雲門宗也。正中偏中。設五位成三疊。東說西說。推一位忌十成。玉顔無看黃閣僕下。寶車不礙。紫寶者生者曹洞宗也。三春綱齒頬勝。却鶖子之神通。百月刻胸懷。脫出應眞之妙書用。劍及上事行。燃燈前機者潙仰宗也。言八識而異慈恩用。六相不類。雑華鼓吹而曲入別調擬議則箭過新羅者法眼宗也。受乳哺於三角虎見歩驟於三種驢。其道難容受也。謂之栗棘蓬其機難透脫也。謂之金剛圈者楊岐也。竭盡潙潭之死水波。起智海之洪濤。坐一榻而應四來。立三關而。接萬衲者黄龍也。とあるなどを見て知るべし。皇國に今存る所は。臨濟。曹洞。黄檗の三宗にて。此下々が廿四派にわかるとぞ。然れども其立る大本は。異なることなく。達磨が語に。以心傳心。教外別傳。不立文字。直指人心。見性成佛。と云へるに違ふことなし。さて此の宗旨の。皇國に傳はれるは。河內國丹比郡の。道昭といひける僧。孝德天皇の白雉四年五月に。勅によりて。遣唐使。小山長丹にしたかひて。漢土にわたり。(唐高宗といひし王の、永徽四年といふ年なり)かの玄奘三藏に謁して。教を受たるに。一日玄奘が。道昭に語けらくは。經論文博。勞多功少。我有禪宗。其旨徽妙。汝承此法。可傳東徽。とて授けたる後に。また慧滿禪師と云ふに相見せしめしかば。慧滿禪師。楞伽經を出して。昔達磨以楞伽經付二祖。(二祖とは云々)曰吾觀震旦所有經。唯此四卷。可以印心。といひて授けたり。さて歸朝して後。元興寺に止め給ひしかば。其域內に。禪苑を營りて。此の宗を諭したる。これ皇國に。この宗を傳へたる始めなり。元明天皇。都を平城にうつし給ふ時に。道昭が奏して。新京に。禪院を建たる。これ所謂平城の右京の禪院なり。かくて此の法師。文武天皇の四年三月。七十二歳にて寂したり。皇國にて火葬することは。この僧を火葬したるよりはじまれり。(釋書に云ふ、道昭唱導外勸利濟。路傍穿井、諸渡儲船、山州宇治之大橋、昭之創造なりといへり)此後桓武天皇の延暦二十三年に。最澄法師が。求法に渡れりし度も。沙門脩然といふに見えて。此の宗旨を傳へ得て歸り。其の後また。仁明天皇の御世に。慧萼といふ法師の。唐土にわたる度に。橘大后の御心として。

彼國より。禪宗の有德の法師を。伴ひ來るべき由を命じ給ひしかば。義空といふ僧を連歸れり。爰に大后。檀林寺といふを創めて。居しめ給ひて。此の宗を弘めしめ給ふ。（此の大后は、嵯峨天皇の皇后にまして、世に檀林皇后と申すはこれなり、仁明天皇の嘉祥二年四月、薨し給へり、〇釋書に、世言、橘后問ニ密法於弘法、弘法盛稱レ之、后曰更有ニ法之邁レ之者ニ乎、弘法曰、大唐有ニ佛心宗、是達磨之所ニ傳來一也、燦行ニ彼地、空海又雖ニ少聞レ之、未レ暇レ究レ之耳、因レ茲后使レ蕚扣問、といへり、然るにや、）然れども。なほ普くは行はれざりしを。是より三百年ばかり後に。備中國吉備津宮の。賀陽氏より出たる。榮西といひける法師ありて。この以前に傳はれる宗旨は。天台。密教をはじめ。みな學び盡して。六條天皇の仁安三年四月に。商舶に乘て。西土に渡り。（彼國にては、宋孝宗と云へる王の、乾道四年と云ひける年なり、）天台教の章疏どもを得て歸りしが。其の後文治三年の夏。ふたゝび。彼の國に涉り。此の度は遙に。天竺の地にわたりて。釋迦の古蹟を探ねむとせしかども。其頃天竺はみな。蒙古に隸せられて。關も通りがたき由をきゝて。大に望をうしなひ。漢地に止れるに。黃龍八世の孫弟子。虛菴敞禪師といふに見えけるに。敞禪師問けらくは。傳聞日本。密教甚盛。端倪宗趣一句如何。といへるに對けらく。初發心時。即成正覺。不動生死而至ニ涅槃。といひければ。敞禪師がいはく。如ニ子言。與ニ我宗一一般といふ。これより榮西は。此の宗旨に心を盡して。敞禪師に親炙すること。數歲にして。彼國の紹熙二年といふ年に。國に歸らむことを告げれば。敞禪師が。此宗の奧旨を傳へて。昔釋迦老子將ニ圓寂一以ニ正法眼藏涅槃妙心一付ニ屬摩訶迦葉一。二十八傳而至ニ達磨一。六傳而至ニ曹溪一。又六傳而至ニ臨濟一。八傳而至ニ黃龍一。又八傳而至レ予。今以付レ汝。汝當ニ護持一佩ニ此祖印一歸レ國布レ化。開ニ示衆生一。繼ニ正法命一。又達磨。始傳レ衣而來以爲ニ法信一。至ニ六祖一止不レ傳。汝爲ニ外國人一故我授ニ此衣一爲ニ法信一。則ニ乃祖一耳。といひて。衣を授けたりとぞ。（二十八傳のことは、前に仲基が說を擧たることく、僞說なれば、此時授たりといふ衣も、眞に傳來せりや否やは、知るべからずといへども、姑く釋書によりて、記すのみ也、）かくて後鳥羽院天

皇の。建久二年に歸り着て。盛に此の宗を唱たりしかば。時人是を惜みて。擯けむとする者おほかる中に。良辨といひける僧。叡山の法師どもを誘ひ。朝に訴へて。榮西を放逐せむことを請けるゆゑ。同六年。榮西を廰に召してたゞされけるに。云ひけらくは。我禪門者。非今始有之。昔叡山傳敎大師。嘗製內證佛法相承血脈一卷。（いま按に、相承とは禪法をいひ、血脈とは天台、眞言を云へり。）其初乃我達磨西來之禪法也。彼良辨昏愚無知。引台徒誣我。禪宗若非。傳敎亦非。傳敎若非。台敎不立。台敎不立。台徒豈拒我乎。甚矣。其徒之闇其祖意也。といふに。台徒閉口して。事をさまりしかば。榮西ますます此の宗を弘めて。衆に示しける言に。我此禪宗。單傳心印。不立文字。敎外別傳。直指人心。見性成佛。其證散在諸經論中。出一二以諭汝等。華嚴曰。初發心時。便成正覺。大般若曰。第一義無有文字。法華曰。唯佛與佛。乃能究盡諸法實相。又曰諸法寂滅相。不可以言宣。涅槃曰。如來常住。無有變易。起信論曰。離言說相。離心緣相。智度論曰。般若波羅密。實法不轉倒。念想觀已除。言語法亦滅。是等文繁。今出少分耳。此事只在行住坐臥處。纔作奇特玄妙商量。已交涉。所以動則生死之本。靜則昏沈之鄉。動靜雙忘。顢頇佛性。若是旨外明宗。終不言中取則。古人謂。太事未明。如喪父母。大事又作麼生明。直須當人大悟。若也未悟。縱說得五千四十八卷。盛水不漏也。只是法身量邊事。於是大事遠之遠矣。試擧古人悟處。羅山和尙。一日問石霜和尙曰。起滅不得時如何。曰直須寒灰枯木去。羅山不契。卻往巖頭和尙處。如前問。巖頭喝曰。是誰起滅。羅山言下忽然大悟。悟箇什麼。十二時中做工夫。直是以悟爲則。發一問決擇此事。尊宿應病與藥。唯以病去。全體淸爲驗也。といへりとぞ。（此は釋書に記せる要を抄て、擧つるなり、なほ達磨が立言の旨の、經論に見えたるを、一つ二つ言はゞ、大般若經に、於內外法心莫散亂、また知我心者、卽心成佛といひ、華嚴經に、如鑽火取火、未出而數息、火勢隨至滅、解怠者亦然といひ、大集月藏經に、若能精勤繫念、不散則休息煩惱、不久得成無上菩提、十六觀經に、應當專心、繫念一處と

いひ、大灌頂經に、禪思比丘、無他想念、惟守一法、然後見心といひ、遺敎經に、夫心者制之一處、無事不辨、楞嚴經に、又以此心内外精研、といひ、無量壽佛經に、執持名號一心不亂、といひ、楞伽經に、若欲了知能取、所取、分別境界、皆是心所現者、當離憒鬧、昏滯、睡眠、初中後夜、勤加修習、といひ、大集經に、法語比丘二萬年中、常修念佛無有睡眠、不生貪嗔等、不念親屬衣食、資身之具といひ、阿含經に、成就三明、滅除暗冥、得大智明皆由精勤修習、樂靜獨居、專念不休之所致也といひ、文殊般若經に、一行三昧者、應處空閒、捨諸亂意、繫心實理、想念一佛、念念相續而不懈怠、於一念中、即能見十方諸佛、獲大辨才也、といひ、華嚴經に遍詣十方求成佛不知身心久成佛といひ、大日經に、云何菩提、謂如實知自心と云へるなど、みな達磨が立言の旨に、符合する語どもなり、なほをほかるを、今はいさゝか擧つるなり」かくてこの法師の創めたる。禪院の多かるなかに。建仁三年。平安城の東に。大禪苑を建たり。此をのちに勅して。建仁寺といふ名を賜へりしゆゑに。釋書にも。建仁寺榮西とはいへるなり。さて建保元年。僧正を賜はり。同三年七月七十五歲にて寂したり。上にしるせるごとく。この法師より以前に。道昭。義空。最澄など。次々この宗を傳へたりしかど。普くは弘まらでありしを。榮西に至りて。盛に行はれたる故に。後までも。此法師を推て。皇國の禪宗の始祖のごと云ふめり。此後

寛元四年

「禪宗者。己身佛身佛祖不傳敎外別傳不立文字と立るなり。「淨土宗者。安心思惟決定。三身唯稱彌陀己身淨土と立るなり。「日蓮宗者諸宗無得道。成佛限法華余二則非眞法華最第一と立るなり。「時宗者。身禮悟佛身本覺無自身非有非無極我佛國一味と立つ。「倶舍宗者。自身自佛佛國非有。非空本學無外と立るなり。「三論宗者。佛國神國無外身體五倫依身佛體非他。心中五臟心腑と立るなり。「華嚴宗者。三界唯一心。心外無別法心佛及。衆生是三無差別と立るなり。「律宗者。持戒則。佛敎守護自德唯與と立るなり。「成實宗者。三身具足唯稱彌陀。釋敎學修己身妙體と立る也。「天台宗者。歸入辶字門唯以五時敎佛果證修已得位

自。心自佛極と立るなり。」眞言宗者。自想敎想觀法無我自心大日本有無物と立るなり

此書どもは。去し文化の十年ごろ。人々の需に依りて。口づから講聞せられ。或は記しても見せ給へる物なるが。此たび人々の願ひに依て。斯く上木して。初學の人々に。見する事と爲れるに就ては。少か諭し置べき事あり。然るはまづ。先生の講説の。勁くはた俗言俚語なども交りて。賤げにも聞なさるるを。何にぞや思はるゝ人々も有る由なるが。其は志淺きが故なり。抑諸の道何に依らず。我が皇神の道の妨を爲したる事。幾許ぞや。神國の神民と在ながら。外蕃の種類に入れる者も少からぬは。實に我が敵也けり。然るを國の御爲。道の御爲に。憤り思はるるが故に。辨駁せらるゝ事なれば。其説勁く酷しき筈の事にて。決めて理りなく。人惡く。言放たるる事には非ず。實に我が爲の敵なる上は。何に言ひなすとも。何でふ事かは有らむ。少かも憚るべきに非ず。且俗言俚語の混れるは。書よむ程の暇なき人にも。容易く。其理りを知らさむが爲の事にて。それ實には。道を思ほす眞情の。甚々篤く切なるが故也。譬へば今。君父の仇持たらむ人の。しばしも猶豫ふべきに非ず。速かに打罰め。屠り散さむこそ。忠臣孝子とも云べけれ。學者たらむ者。國の爲。道の爲に。邪説を言ひ排かむ事を思はずは。何の益かは有らむ。義を見て爲ざるは勇なしと。赤縣人も言へるに非ずや。然れば先生の講釋本は更也。總ての著書みな。餘人の作意とは異なり。其心を以て讀味ふべき事にこそ。阿那かしこ。かく云ふは。伊布伎の舍の塾にもの學ぶ。小島元吉。千本松吉周らなり。

悟道辨講本上

平田先生講談　門人等筆記

今日は悟道と云ことの論辨でござるが。其はまづ佛道諸宗の。安心さとりと云ことの根を段々におして探れば。先日も申す通り。氣海丹田に氣を充しめ。安心して。なるべくは。長壽を保んとするが故のことで。是より外には。何にもなしでござる。然るにその趣意なきことを。趣意ありげに持賞て。佛者どもが。是を事々しく。悟りなど丶云立て。中にも禪僧がやかましいでござるが。この悟と云ことゝ。世の常の人々が其の穴を知らず。僧等に謀られて。何か奥ゆかしく。妙なことが有て。その悟りと云ふ場へ修し至れば。不測なことでも有るやうに心得て居るが。一向やくたいなことでござる。吾か師本居先生の歌に。「悟るべき事もなき世をさとらんと。思ふ心ぞ迷ひなりける。」と詠れましたが。實に見ぬかれたる歌で。世の禪學などを致す者どもに。能く云きかせたきものでござる。何も悟ることは有りもせぬものを。禪僧に欺されて。悟らう〳〵と思て居るが。生れもつかぬ迷ひでござる。その禪僧どもの欺しと云は。まづ其の者等。人に悟りを勸めるからは。おのれ〳〵は何を悟つて。何が人に異たる不測がある。何もないはさ。夫は此の道を始めたる釋迦さへそうで。悟つた驗も何もなく。生老病死を遁れんと。尻の毛へ火のついたやうに噪ぎまはつて。修行したが。とんと叶はず。年が寄たれば。皺くたになり。背が痛いの。腰が痛いのと云ひ出して。あげくの果に。周那と云者の爲に。茸で毒害せらる丶も。知らず悟らず頬つて。七十九歳の時。拘尸城と云城の外の山中で。とんとのたれ死を致したでござる。是らは天竺の。きツと慥なる經文に記しある事でござる。其元祖すら斯の如くであつた故に。况てその流れを汲む僧どもが何を悟るものか。悟つた面で人を欺き。佛道の眞のことをば。押隱して。愚人を惑はすの云ひなし。悟道々々と云ひなして。惑はし種に云ふ語とでござる。その道歌なんどの多き中に。能く人の知て居る。「暗の夜になかぬ鳥の聲きけば。生れぬ先の父ぞ戀しき。」と云ふ。是が中にも。人の囂しく云て。悟道の極意を詠だる歌で。

心も言も及び難き。深意妙意のある事ぢやと。世の小賢しき輩が。その小ざかしき。心と。己が心に眩まされて。惑て居るが。此歌は。人或はしに云ひおきたる。禪僧のおどしで。大きに人を愚にしたもので。都て禪僧の語ぢや。その道歌ぢやの。と云もの。又その行ひの常に異つた。變なことを爲なども。みな人を愚にするのでござる。世の人其所に心つかず。禪僧らがする事をば。其云ふ言も行ひも。みな悟道について。深き故あり。深き心ありてのことぞと信じて。彼れ等が人を愚にする術計に。うまうまと載せられて。道理の深きとでも有うと。惑つて居るのが。見るにも聞にも氣の毒で。どうもならぬ。夫はまづ此の歌に。晴の夜に。なかぬ烏の聲きけば。と有がさ。何とやみの夜に。烏の鳴うはずは无し。又その鳴もせぬ烏の聲を。どうして聞れませうぞ。これは。誰にも通えぬは知れたことだが。その通えぬことをきいた風に云ひ成て。とほうもなく。深き理の有げにもてなし。生れぬ先の父ぞ戀しき。などヽ結つけて。人を威し。やみの夜に。烏はなかぬ所を。其のなかぬ烏の聲をきけば。と云からには。深き故あることで有う。と腕を組せ。此に妙なる謂が有うと。人々の。己が智慧に昧まされて。まごつき惑ふやうに爲掛たる。おどしでござる。猶また悟道を得たる人は。斯したものと信じさせんが爲に。自は。世の道に異なる所爲を見せて。何か公然と搆を爲て。横柄に人をあしらひ。高貴の人をも。恐れぬ顏つきなどを致して居るが。夫もみなおどしでござる。この威を以て。人を惑すことを。近きことで云はゞ。能く世の心學者。道學者など云輩も。擬てすることぢやが。禪僧の爲ざまが。譬へば其の道をきヽたいと云て。入り始て。參禪したる者を。まづ威し始めに。書院へ通して。まづしたヽか待せて。然て弟子僧どもに。大造な褥を布せなどして。さて老僧めが。拂子を振拂ひなんどして。例の如く。どんな者にでも。横柄にもの云ひ。にくき面をして居る。さて辭儀をすると。僧めは却て後へ反る。そこで扇子にも有れ。火箸にも有れ。あたりあひに指出して。是は何ぢやと。其許知て居るか。などヽ云て突つけると。其の人は胆を潰しながらも。正に知れたる。扇子や火箸を出して。是は何ぢやと云から。

故有て云ことで有うと。まごつき出して。火箸とも扇子とも云ひかねて。むづ〳〵として居る。またやや正直な者は。夫はすなはち。鐵で拵へたかな火箸でござると云と。其の導師めが。いや何。これが火箸だと。是を熟く見やれ是が火箸なものか。是を火ばしと思ふやうなことでは。道には入られぬ。其の許は愚な男ぢや。などゝ醋しく叱て。是は鋏火箸ではない。考へて見やれと。投つけてやるから。さ。是で又此人もまごつき出して。其の火箸を手に取て。爪でひッ搔たり。何かして見る所が。かな火ばしに相違ないから。私の目にはどう見ても。かな火箸と見えまする。と云と。導師が竹篦ふり擧げ。目をむぎ出して。初對面で。いまだ馴染もなき人を。居丈高に成て叱りつけ。是を鋏火箸と見たるおろか者よ。と云ひさま。不意に起て。腰やら肩やら頭やら。目口もわかず。したゝかに擊のめし。尿だはけめがなどゝ。苛いめに合せて。襖引たて奥へ入ると。ぶちのめされた人は。思ひがけなく。足腰が立ぬほどな目に逢て。怨めしげに奥を見やり。あゝ〳〵痛い。苛いめに合せたな。醋くぶち倒しをつた。などゝ云て。其の痛い所へ唾を付などして。起上るがこんな苛めに合ても。强僧にぶたれたばかりは。公事にも諠譁にもならぬ。法のもので有から。どうもならぬ。尤も其の仲間うちでも。論に及ぶと。しまひは擊て掛り。掴合にもなることで。何でもその先を越た者が。勝となることでござる。偖又かの鋏火箸を。正直にかな火ばしと云て。擊倒されたる人が。それで措ばよいに。現に火箸ぢや物を。火箸ではないと嚴しく云から。然らば故こそ有うと。迷ひが起て。是非さとる氣になる。是がかの。吾か師の翁が詠れたる「悟るべき事もなき世をさとらんと。思ふ心ぞ迷ひなりける」の所で。禪僧の。おどしの罠に懸つたのでござる。實の所は。先に是は火箸でないと云ふ時に。此方から飛懸つて。此無法僧め。己は其手でいくのぢやないと。蹈倒しぶちのめし。どうしても。火箸に相違はないと云ひ張て。起かゝつたならば。蹴倒すか。組伏て。擲きのめし。どうでも火箸ぢや。と云ひ張りさへすれば。僧は大きに胆を潰して。善哉々々。汝得レ道などゝ美て。悟道の仲間とするでござる。然るにかのまごついた奴をば。種々なことを云

ひかけ。いぢめつけて。座禪しろの。觀相しろのと。彼是とまごつかせ〳〵して懲しめる。そこで其者心づき。どう考へても。鉄火箸だものを。かな火箸ではないと云たのは。己をまごつかせたのぢや。と云ことを看破して。座禪も何もいるものか。あゝ大慕何ごとに骨折たと。股を拊て。くワらりと疑を晴す。こゝが禪家の。悟り〳〵と云ひふらして。人を惑はす穴でござる。かの鳴ぬ鳥の聲を聞と云も。かの人の能く知て居る。原の白隱が。片手を出して。此の音をきいたか。拍ぬ片手の聲をきけ。〳〵と云て。人を導いたと云も此の訣でござる。なかぬ鳥の聲や。拍ぬ片手のこゑが。どうして聞えるものか。是ら統て。禪僧の人を威して。さほりを喰はせるのでござる。夫故此方から先を取てやると。ぐにや〳〵とへこむものでござる。此の方も隨分。歷々の禪學者を。へこたれさせたことが有が。是はまづ云まいでござる。白隱が片手の聲を。きけ〳〵と云ひたるに付て。すなはち原宿の。舂米を賣る者で有たさうなが。白隱が寺の門の扉へ。大文字に。「白隱が片手のこゑを聞よりも。兩手たゝいて商ひがまし」。と書て置たれば。白隱がかへしに。「あきなひが兩手拍いて成ならば。片手のこゑはきくに及ばず」。と云たと云ことぢやが。是は此米屋に。おどしの穴を見付られて。斯いはれたに依て。化の皮を顯はし。ぬからぬ面で。かやうの返しをしたもので。都て禪學者の所行と云ものは。人おどしに爲事ばかりでござる。此方も。其中へもはいつて見た上で。云のだから。餘り違ひはない。是より外に。何も訣はないとだに。なほ深き心も有げに思ふは。みな惑はされて居るのでござる。實に拙者の申すに相違なきことは。彌々悟つたと云ならば。何が凡人と。悟つた程の異りが有る。何もないはさ。物を喰せぬと空腹がつて。飯をくれろと云ふ。かの川柳が句に。「悟道者も煎餅よりは金米糖」。と云たる如く。煎餅とあるへいと出せば。あるへいを舌打して食ひ居る。また西行法師が歌に。「捨はてゝ身は无ものと思へども。雪の降る日は寒くこそ有れ」で。悟道の和尚も。寒中に裸にしておいたなら。凍固まつてしまうで有らう。また暑中に綿入を着せておいたら。霍亂して吐たり瀉たりするであらう。また川柳に。「淸僧も鰯のなべは覗くなり。」

と云たる如く。どんな清僧でも。是非其鍋ぐらゐはのぞく。夫はかの男色の事でござる。是いわしを煮たるなべで。愛情戀慕のなくならぬ所。もつとひどくは。「和尙さま。善女人だとくどきかけ」。また「お釋迦さまさへ」と和尙のへらず口」。と云たぐらゐに。女にうつる心も止まず。生涯決して。灰に成るまでは失ならぬ。夫故やゝもすれば。「大黒を。和尙布袋にして困り」などもするし。又すまぬ事を和尙腎虛で遷化なり」と云やうな事も有る。また煩ひもする。年も寄る。食物へ少々ぐらゐは。糞をまぶして食しても知らずに食ふほど。何も見ぬくほどの力もなく。また禪學者ぢやと云て。皆が皆。八十九十百まで。生ると云でもなし。禪學も知らぬ常の人ぢやとて。彼輩よりは。皆短命と云でもなく。然すれば。何も人に異つたことは无いが。夫ならどこが。悟道のしるしの見える處だ。何も驗はなく。一向にやくたいぢや。只々悟道と云ふ。言立ばかりが大造で。何のこともなく。彼らが常に異なる行をして。大きな頰をする處におどされて居るので。あゝゝ氣の毒なことでござる。凡て世には。心法悟道家。など

云ふ輩がしたゝか有て。夫ら大かた。禪僧のおどしを擬て。悟り臭き言を云ちらし。かの發句とか云物を見るに。其の高い所と云へば悟道めかしく云て有が。その大本たる禪僧ですら。右の如くぢやものを。何の宗匠ぐらゐの者が。悟道とは何ごとぢや。是れ等が云ことをば。世の人大かた。然も有げに思て居るもの故。わが古への淳直なる道を解んとするに。妨となる故。止事を得ず辨ずることだが。まづ今の世の。俳諧の宗匠ぐらゐのお箱として。悟りがましく云ひちらす。種とする物は。高が徒然草でござる。誰彼の宗匠は。つれづれを熟見た人だから。歷々ぢやなどゝ。人は云ふが。まづ彼の徒然草と云ふ物は。淸少納言の。枕冊子の文法を眞似て。書いたものながら。淸少納言より。時代の。三四百年も後たる代に生れたる。吉田の兼好が。その文法を擬ての作ゆゑ。虎を繪に書て。猫に成たと云ふたぐひで。文章もいかう拙く。同日にも云へぬ程。劣た物でござる。所が。悟りぐさき言どもを。多く書ちらして置たる故。二百年前より。世の生ごしやくに。悟りがましきことを云ひたがる輩が。この書を踏臺

にして。うるさく煩はしいほど。悟り臭き註を書弘めたなれども。あんなに喋ぐ程のものではないが。彼の書に。「人と生れたらんには。いかにもして。世を遁れん事こそ有らまほしけれ」などやうに云たが。故由ありげに聞えるからのことで。とう〳〵世の人も。皆つれ〴〵草と云へば。事々しく。むづかしい物の如く。心得るやうに成たものでござる。今宵はよき時。つれ〴〵の一二段を読ませうが。かの悟臭きことは云ひつゝも。兼好ぢやと云て。木の俣から出た者でもないから。實は些とも悟りはせぬ。その底意は。此の方お互の意に。何も異りはないでござる。夫はかの書に。

住はてぬ世に。見にくき姿を待得て。何かはせん。命長ければ辱多し。ながくとも。四十にたらぬほどにて死たらん。めやすかるべけれ。

と云て有ますが。この意は。世に限りもなく長く。人の命は長きと云へども。限り有るものなれば。さてもこの長い世の終るまで。住はつることはならぬ物ぢや。夫に長生して居ては。その段々に年よつて。醜くなる姿を。待て居るやうなものだから。長生して何をするものか。いやなことぢや。長生をすれば。辱かしいことが多いから。譬へ長生するとも。四十歳に足らぬほどで死こそ。見にくゝもならんで。宜いと云の意でござる。是はとみな例のさとり臭い僞りごとで。かやうのことを。世の悟りづらな輩が。尤なることに思ふのでござる。中にも。命長ければ辱多し。と云たのは。赤縣籍莊子と云ものに。彼の國の唐堯と云た王が。申したる言を。全に盗んで云たことでござる。年が寄たら。見苦しくなるはず。見ぐるしくなればどうだ。兼好法師。あれ悟た貌で。かうは云ても。此やうに。年の寄て。見苦くなることを。いやがる所を見れば。世情の失ぬので。悟つた顔の僞が。直に兀る。この法師。年まかり寄ても。色を好む心が失なんだに依て。かやう云たものでござる。是ばかりではない。此の法師の色好なることは。此の書の中。こゝかしこに見えて蔽されぬことでござる。四十に足らぬうちに。死が宜いなどゝ云たけれども。夫なら自分は。四十ぐらゐの時に。首でも縊ればよいに。六十餘の。皺くたに成まで生て居て。高師直が。鹽谷高貞の妻に。

戀慕する時の艶書を。かいてやつたり。何かして。口と心とは。いから相違して居る。そこで僞言ぢやと云のでござる。この法師。さとつた貌でも。實はいかう女好で有たことは。この段の次で直に知れる。夫は。

世の人の心まどはすこと色欲にしかず。人の心は愚なるものかな。しばらく衣裳に。たきものすと知ながら。えならぬ匂には。必ず心ときめきするもの也。久米の仙人の。物洗ふ女の。はぎの白きを見て。通をうしなひけんは。信に手足はだへなんどの。きよらに肥え。あぶらづきたらんは。外の色ならねば。さも有んかし。

と有りますが。是は兼好が。色にはどうも迷ふと。きツと心にふまへて。覺えの有こと故。かう云たものでござる。人の心まどはすこと。色欲に及ずとは。赤縣籍禮記にも。飲食男女。人之大欲存。とある。意で人の心を惑はすこと多くあるなかに。色欲ほど。人の心の迷ふものはないと云こと。これは兼好。覺えなくては云へぬ事でござる。人の心は愚なるもので。姑く衣裳にたき物すと知りながら。えならぬ匂には。必こゝろときめきするもの也と云は。古くは燒物こ云て。香をたいて。其の香を。衣裳に移して着たもの故。その移香のえも云はれぬ。かうばしき香をきいて。香の薫りと知りながら。思ほえず。心うかることで。是も兼好。きツと心に覺えあること故。云たものでござる。それ故に。必と。決定の言ばを用つて。心ときめきするものなりと。治定の言ばで結たものでござる。是は兼好ばかりでなく。今とても。いと美愛き娘などの。きらびやかに粧ひ飾て。其の行ちがひさま。頭に貼たる。梅花油の薫りなどの。ふと鼻にはいつては。覺えず。心ときめきすることなどの有ものでござる。是は此方も覺え有から。此の席に居らるゝ人たちに。覺えある人も有ませう。かの悟たつらの。道學めかす宗匠でも。川柳點の口ずさびに。「十五點。など、宗匠ふりかへり」また「ちツとづゝ。出る太股に蹴つまづき」と云つたる如くでござる。夫は高い卑いによらぬこと。かの「車ひき女を見るといきみ出し」なるほどうん／＼とうなるでござる。これは男ばかりではない。女とてもこの心はおなじこと。「ほめらるゝ度。もち直す日がら

がさ」。又「何くはぬ貌で男にけつまづき」。實に是に違ひないでござる。扨「久米の仙人の。物洗ふ女の。脛の白きを見て。通を失ひけんは。信に手足膚なんどの。清らに肥あぶらづきたらんは。外の色ならねば。さも有らんかし」。この久米の仙人がことは。誰もよく云ことだが。正しい書には見えたことはなく。實は詳ならぬことぢや。但し齊明天皇の御紀。元年の下に。唐人に似て。笠をかぶり。大和の國の葛木の嶺から。膽駒山のあたりへ。空中を飛んだと云ことが有て。何とも知れぬ怪き物ぢやが。是を以て作つたことか。元亨釋書と云物に記してある。夫は彼の書の。神仙傳と云くだりに。久米仙者。和州上郡人。入深山。學仙法。食松葉。服薜茘。一旦騰空飛過故里。會婦人。以足踏浣衣。其脛甚白。急生染心。即時墜落。とあるが兼好は是に依て云たもので。是も至極さう有りそうなことで。實尤と。兼好身に取て覺えが有る故。云たことでござる。そのことも川柳に「お仙人さまァとぬれ手で抱起し。」と云たが。是らは克く氣が付て。その云ひとりが至極きれいで。おもしろい。しかし有た事にもせよ。此は擬仙人で有ませう。さて「肥あぶらづきたる」。と云は。赤縣籍詩經に。女の體の美はしき事をほめて。膚如凝脂」と云に依たものでござる。「外の色ならねば。」と云は。前に云たる。燒物の香をきいて。心ときめき動のは。外よりつけたとでさへ然あるものを。況て外より繕ひ飾たる色でなく。清らに美愛き。脛や股の白き所などを見ては。たまるまい。尤もなことぢや。神通を失つて。落もしそうなものぢや。と云ふ意で。さも有んかし。とは云たものでござる。是ぢやに依て。悟り臭いことを云のは。みな僞ぢやと云のでござる。さて斯やうに。女の色には惑ふもの故。兼好すかさず。此の次の段で戒めたでござる。夫は。

六塵の樂慾多しといへども。みな厭離しつべし。其中に。たゞ彼のまどひの一つ。やめがたきのみぞ。老たる若きも。智あるも愚なるも。かはる所なしと見ゆる。されば。女の髮すぢをよれる綱には。大象もよくつながれ。女のはけるあしだにて作れる笛には。秋の鹿必よる。とぞ云ひ傳へはべる。みづから禁しめて。恐るべく愼むべきは。こ

の惑ひなり。
とあるでござる。六塵の樂慾と云は。兼好は佛者のことを故。佛語で云たが。近く云はゞ。色々の慾とたのしみはあるが。夫はみな厭離と云て。いとひはなるゝことも成るが。其の中に唯かのまどひの一つ。やめ叵きのみぞと云に。何の慾何の樂も。いとひすてゝしまはれるが。其の中に。かの色に惑ふと云ふ慾ばかりが。どうも捨がたく。止叵い物ぢやと云事でござる。夫は老たるも若きも。智ある人も愚なる者も。異る所はないと見ゆる。皆そうぢやと云のでござる。されば。女の髮すぢをよれる綱には。大象も能くつながる」とある。是は佛經の語で。大威徳陀羅尼經と云に。以二女人髮一作二綱維一香象能繫。況丈夫耶」とあるに依たものでござる。此の語にても。佛の色に迷ふことも。人に異りのないことを知るが宜いでござる。然るを何で宗匠ぐらゐの奴等に。悟られるものか。悟られぬくらゐならば。悟た貌の發句などはせぬが宜いでござる。「女のはけるあしだにて。作れる笛には。秋の鹿必よる。とぞいひ傳へはべる」。是は獵人の鹿をよせるに。吹ならす。

鹿笛と云ものが有るが。夫は形を。酒をつぐ承壺こ云物の如くに。平たく作て。先の方へ紐を著け。蟇がへるの皮で。外をはる物ぢや。と云ことでござる。是を美女。或は名ある遊女のはきたる木履を以て作れば。常よりも。多く鹿のよるものぢやと云ことでござる。此通りのこと故。自らいましめて。恐るべく愼むべきは。この惑ひなりと云て。止たものでござる。これは甚だ尤なことで。自ら戒めて。と云たは。この道ばかりは。人の異見などでは。さんさ止ぬ物ぢやに依て。我とみづから。誡め愼まねばならぬことぢや。と云のでござる。何と此の通りに。吉田の兼好法師も。女は好でござる。女をすきなれば。何もかも。よきことと面白きことを好なは。知れたことぢやに依て。悟り臭く。禪學根性を云ひ弘めても。本心は然でなく。悟た貌ばかりで。皆噓だと云のでござる。かの。白骨と觀じながらもうつくしや。ともある如く。其のはずは。左しても右しても。のがれ難き人情の實で。先夜申したる如く。皇神の御さづけ遊ばして。御生賦なされたる性持前である故のことでござる。

序ゆゑ申すが。此の席に居らるゝ衆だちの中にも。拙者の道を講ずるを聞居られながら。女は決して嫌ひぢや。などゝ云はれた衆も有たと覺えたが。それは實に好か嫌ひか。然やうに論せずと。拙者よく知て居る。尤も其中に。濃と薄いの違ひこそ有れ眞の道を定規として。其の本心を尋ぬれば。嫌ひと云は決して无いことでござる。もし實以てそこ心。きらひな人が有らば。夫は不具で眞の道に生れはづれた人ぢやに依て。拙者の演說をきくはむだなこと。いッそ僧にでも化が宜い。どうしても此心ばかりは。生ある者。人情の元で遁れぬことでござる。物のあはれも是よりぞ知る。と俊成卿の詠れたるは。動かぬ處でござる。と云て亂りがはしく。淫れたる行ひが有てはすまぬ。本情は本情つゝしみは愼み。是は各々心得にあることで。今さら云までは无い。其の眞の心まで。戎風に包み隱して。決してそんな心は。根から无いなどゝ云ては。それは嘘だと云ふ訣を述る迄のことでござる。然れば僧でも眞情を。有のまゝに云た者もある。夫は春夜談と云冊子に。ある聖と東山へ伴ひしに。最もあてやかなる女の。行違ひ侍ければ。二三度まで見返り給ひしを。何をなむ御覽じ給ふにやと問たりければ。あまりに微妙なれば其事と无く見かへり侍りし。と有るは。眞情の僧でござる。

扨この悟道と云て。わるずましに悟た貌をする惡風俗は。佛法より流れ出たることにはあれど。赤縣にも古くよりありたることで。夫は唐堯の世に。許由と云者が有て。其が賢人だと云ふ聞えが有とて。堯はその許由に王位を禪らうと云たれば。許由は袖を拂て夫をいやがり。却て耳を汚したと云て。川へ行て。其の耳を洗て居る所が。巢父と云者が。牛に水を飲せやうとて。此川へ來て見ると。許由が耳を洗て居るから。何故に洗ふのぢやと問たれば。有の趣を答へたでござる。所が。巢父が云には。さやうの事を聞と云は。心がけの惡いのぢやとて。大きに叱りつけて。其汚耳を洗ひたる水は。牛に飲されぬと云て。歸つたと云事こそがある。此やうなたわいもない事も。世の老莊家など云て。悟りがましく云囃が。殊の外美る事だが。是よりして。かやうの族がちら／＼有たが。漢の末より次々ふえて。まづ仲長

統と云ふ者の。志を見はしたる詩に。寄ニ愁天上ニ埋ニ憂地下ニ。叛ニ散五經ニ滅ニ烈風雅ニと云ひ。又鄭泉と云者は。酒を好て飲だが。其死ぬる時に。同類に謂て云には。吾が死んだならば。必陶家の側に葬れ。庶くは百歳の後に。化して成土となりて。幸に取られて。酒壺と成たならば實に我が心を獲ん。と云て死んだなどが。そも〳〵始めでござる。凡て魏晋の代ごろは。かやうの輩。大きに流行して。悟道の。心法のと云事は无れども。清談と名けて。何か潔げに太平樂を云ひ。態と放曠にして行ひを愼ます。大酒を食ひ。世に異なる事を業とし。底ゆかしげに。人に思はせんとしたる。心汚き者等が。大分有たでござる。その放蕩無頼の限りなる。阮籍。嵆康。山濤。向秀。劉伶。王戎。阮咸らを。竹林の七賢人とは申すでござる。彼等が心の汚きことは。千百年眼と云書に。委く辨じてある。又貝原篤信も。彼れ等を評して。放蕩無頼なる者ども故。賢人と云べきことではないと云たが。實に其の通りでござる。中にも阮籍が事を評して。此者世事を遺落したりと云を以て。美談としながら。從事中郎と云職を勸めたが。其職を

去て後も、ひそかに司馬昭に媚事へて居たが。小人のしわざで。其小人の情僞。千載の下掩ふ可からざる物がある。かつ此者。大人の論と云を著はして。禮法に拘はる士をば。褌に處る蝨に比へたが。己が司馬昭に媚附たることそ。褌の蝨と云しわざぢやが。幸ひにして。火に焚かるゝことを免かれたのぢや。と云たが。實に理なる評論でござる。この後禪學流行してこのかた。かやうの風を慕ふ輩が。みな禪に歸したる物ゆゑ。清談のさたが。无なつたでござる。また此の餘風が。皇國までに及んで。既に萬葉集にある。大伴旅人卿の。酒をほめられたる。十三首の歌などが。凡てこの意で。みな僞でござる。今も御國に。かゝる風を好むが有て。今はむかし。篤胤が知たる醫者が。或とき煩つて。死んとしたるが。其の云たる言に。虎者死存レ皮。人者死存レ名と。皮を存して。人に敷れんも朽惜く。名を存して。人の口にかゝらんも詮なし。吾は皮も存すまい。名も傳へまいと。云たと云て。病が愈て後。篤胤に。それを書き記したるを見せたから。餘りの憎さに。篤胤が云ふには。日頃見るに。孜々汲々として。名利にばか

り。拘づらつて居らるゝが。實に此の云たる言が。本心であるなら。名利さわぎは。なぜ止やらぬ。また此に記したる所は。名を遺したく无いとのとちやが。夫ならなぜに。此やうな。清談くさきことを云て。剩さへに。書きのこさんとさへしたるぞ。心にかう思つたばかりで〳〵口に言はずはさる心とも思ふけれども。口に云ひ記し遺しては。實にさる心とは思はれぬ。どうぞかうまで思ふ心を。人は知らぬから。言ひ遺して。人に此の心を知らせたい。と云ふ名聞心があるやうに見える。夫ではやはり。名を求めると云ものので。口と心と。相違なる僞りと思はれる。と苦々しく云たれば。其人赤面したことが有る。とかく世には。悟貌なる惡風俗も。弘まり居ることゆ故に。その死んとする時に。人を雇ひて。辭世の代作をさせる者もある。但し中には。實に云ひ出ても。其道に疎き輩など。其向の人に。直して貰ふなどは。餘義も无ことなれども。常に其筋のことは。思ひもよらぬ者などに。例の悟貌なる。詩歌發句など。作搆へて與へたるを。其意味をも知らず。めッたに。石碑などに彫付る人もあるは。抱腹に堪へざることで

ござる。とかく世には。かやうの人が有りたがる故に。その眞似などを爲ぬやうにとの心で。斯くは云のでござる。實に胸のわるくなることぢや。なほ漢學の大意にも此事をば論ふつもりでござる。そもそも皇國に於ては。佛法弘まつて以來。人心弱く女々しく。神武の道の衰へたることは。佛道の演說の時に。委く申すこと故。今云ふには及ばざれども。其道の本意とする所は。三界無菴と立て。衣食住を捨て。子孫の斷滅を好む。と云趣意にて。人外の邪道なれば。有の儘にては。自からに。人も信ぜざることなれども。中古の僧等が如く。幻術を以て。威しつけることとも。今の世にては成ざる故に。悟道などと云ふ。をかしな趣向を立て。現在のことは云も更なり。未然のことをも。知たる樣に云ひなしたるなどは。殊に憎いでござる。聖德太子傳曆。と云ふ物に。負惜みが記して有る。それは太子四十七歲。冬十二月。命レ駕科長墓處。覧二造レ墓者一。直入二墓内一。四望謂二左右一云。此處必斷。彼處必切。欲レ令三應絶二子孫一之後一。墓工隨レ命。と云てある。是は太子の御子等の。をかしな死ざまをなされたることを。能きさまに。

云ひくろめんとの云ひごとでござる。然るを徒然艸にも。此事をはめ。散して。我か身のやむごと无らんにも。況て數ならざらんにも。子と云もの无く有りなん。など例の悟り貌な。僞りごとを書て置たでござる。これを僞りと云訣は。實に太子ハ。御子孫斷絶を好み玉ふことならば。何故に始めより。御子をば生しめ玉へるぞ。子をば生おきて。早く死ぬことを好むと云は。不仁の甚しきもので。僞りの負惜みに相違あるまい。然るを兼好又。尤のやうに書たるは。僞の腰押と云ものぢや。然るに又座禪。悟道。清談など云ふ惡習も。次々に移り來て。殊に北條が幕府の執權として。逆意を振ひたる頃。この風俗甚多く。其の中にも。世に賢人とも云はれたる。時賴入道などが其の風でござる。夫は師の玉勝間に。東鑑に。弘長三年十一月。北條時賴。最明寺にて身まかりける時の頌とて。業鏡高懸三十七年。一槌打碎大道坦然。とあり。北條足利の世のほどは。高きも短きも。人みな殊に禪法に惑へりしかば。死むとする際にかゝる悟りがましき。僞り言するを。いみじき事に思ひたんめり。最うるさく。且はをこなる態なりけり。と云れたるにても。知れたことでござる。此れ等よりして。終に右申たる如く兼好僧が徒然草にも。及んだことぢやが。其の中に。上にも少しは云出たが。「人と生れたらん印には。何にもして。世を遁れんことこそ有らまほしけれ。偏に貪ることをのみ勉めて。菩提におもむかざらんは。萬の畜類に。かはる所あるまじくや。大事を思ひたらん人は。去り難く。心に掛らんとの。本意を遂げずして。さながら捨べきなり。と有る此心は。大事と云は。菩提のことぢやが。其の菩提の道に思ひ立たらば。去り難く。心にかゝり。此はかう爲ねばならぬが。と思ふ事の。本意を遂げずして。其心にかゝる事を。夫ながらに捨て。佛道に趣くべきものぢや。と云ことでござる。是を思ふに。かやうに。佛法根性と成り果ては。死人にも劣りたるとなれば。云までも无きことでは有れども。實は人と有らん者は。なる可き限りは。世の中のことをば。勤むべきことで。假令。わが身に得る所は无しと云へども。世の爲人の爲めになるべきことを。勤めるが人の道ぢや。然るに右やうの事を。尤ものやうに思ひ。何もかも捨てると云ふ

は。人非人と云者ぢや。但し此れは。全くの本心に非ず。悉く佛法の妄說に。欺かれたる物でござる。しかし中古以來の佛者ども。皆斯の如くだに依て。この僧一人を。咎むべきでは无けれども。今は序ゆゑ云でござる。抑佛法の僞りなることは。今更云ふまでも无ことにて。兼好も。其僞りを知らざるに非ず。知りつゝも。例の悟得貌にかく云て。又人を欺きたるものなり。夫は何を以て知ると云に。其の行狀と。其の云ふことゝ。相合はざるを以て知られるでござる。然るを其眞僞をも辨へず。此等の趣を。よきことゝして。世事を捨て。爭で。佛道に入らんとする者の多かるは。愚昧と云も。餘りなることでござる。僧はまた。一人も多く。其むれに引入れたるを。功德とすることなる故に。むせうに勸めて。善來比丘とは。爲たる事と見える。然れば。ふと誘されて。僧と成たる後に。其の僞りなる事を知て。後悔する者も。間々有ることゝ見えて。清少納言が枕册子に。思はん子を。法師になしたらんこそ心苦しけれ。然るは。いと頼もしきわざを。たゞ木のはしなどのやうに思へるこそ。いと〳〵惜けれ。と云たは愚なることでは有れど。尤なことでござる。兼好も徒然に。法師ばかり。羨しからぬ者はあらじ。人には。木の端のやうに思はるゝよと。清小納言が書るも。實さることぞかし。と云つたは此事で。僧ながらも。實情より云へば。清少納言が云たことを。尤もに思つたに依て。かう書たものでござる。此れ等を以て。この僧。佛法の僞りを知らぬでは无く。知りつゝも。折により時に臨みて。表裏を云て。人の心を誑かし。自からは。例の悟得貌をして。人にもて囃されやうと云ふ。名聞を欲する心深く。これ即ち。高貢邪慢の所業にて。實に釋魔なることを知るが宜いでござる。凡て俗の學者等の上を思ふに。大抵赤縣州の惡風を慕ふが故に。此の悟道の僻が有て。夫は知りもせぬことを。知たりぶりに云のが。すなはち夫でござる。とかく彼れ等は。簒奪弑逆を行つた者を聖人と云ひ。又悟た者が。賢人ぢやの。尊いの。と云て。天子も庶人も。尊卑の差別はないなどゝ。口に任せて妄言を吐散すが。其說等は。惡風俗なる外國どもへは當てもゐるで有うが。我が皇國に於ては比し奉るべき所なく。その差別雲泥の相違あるこ

とにて。同年にも云れぬことながら。今序だから此に大略を申ませう。抑吾天皇命はこの天地月の三大を御生成あそばされたる三柱の天津大御神の御大孫に當らせ給ふ。天照皇大御神の皇美麻命に坐します故に。百八十と。大御代は歴れども。其御威光の衰へまさず。誠に遠津神。現人神にまし／＼て。畏み奉るべきことは。靈能眞柱。古道大意などに申たる通りでござる。今こゝに少かなることまでも。その御稜威の御驗の坐々ことを。一つ二つ申さうでござる。夫はまづ。澁川春海の新廬面命と云書を見れば。元祿十七年甲申三月二十一日の條に。其の頃柳原大納言殿。江戸表へ御敕使に御下向あつて。京都へ御歸上のみぎり。御草履取が。御草履を道へ落して。知らずに行た所が。その邊の賤き者が。夫を撫つて。是は見事な草履ぢやと云て。履て見た所が。忽に兩足が腫て。動くこともならず苦んだと云ことでござる。所が夫を。柳原殿の御草履なることを。見覺て居た者が有て。是は高貴の御方の草履を。凡夫下賤の身として履たに依て。然なつたのぢやと云て。早々神奈川まで追しき奉て。柳原殿の雜掌衆へ。右の由を申して。御詫申上たる所が。たゞ一言敕。と宣られたれば。即かの者の病が本復いたしたが。扨々御敕使の御威光は。畏み奉るべきことぢやと云てある。また脇坂侯の物語いたさるゝには。先年伏見宮の。江戸へ御下向なされたる時。その御馳走を仰せ蒙られて。色々丁寧を盡されたなれども。御飯をば常の如く。下人に焚せられた所が。その者が俄に大熱さし出て。煩ひついたに依て。人を替て焚せたるに。三人迄右の如く煩て。御飯が成ぬに依て。挂りの人も據なく。侯へその由を申し出たる所が。侯の申さるるには。伏見宮は。親王家にまし坐すと故。末代と申ても。下々の者が御飯を焚ては。恐あることで有うに依て。士に。座敷の上で焚せよと有て。すなはち士に申付て焚せられたる所が。無難に成たと云ことでござる。かやうのことがまゝ有りたる故に。大將軍家にも大方ならず。京都を御崇敬あそばさるゝことで。とかく申されぬことぢやと記し有るが。斯やうの事等は。世の常の人も。時々見たり聞たりすることながら。其本の謂を問ぬ中は。たゞ何となきことのやうに。疎略に心得てをるが。能く思ふべき

ことでござる○然るを俗に○學者ぢやと云て○道を說くなどゝ喚ぐ奴原○儒者○佛者○道學者○神道者○心學者などが○惡く表濟なことを云ひ弘めて○御國風の篤實に○朝廷を重じ提み奉る○世の人心をさへに惡くして○天皇を疎に思ひ奉らせんとするでござる○夫はまづ儒者の說では○近くは太宰純が著したる○辨道書と云ふ物に云へる趣は○摠じて天地開闢の始めに○人の生ずる所は○久しき池に魚の生じ○腐たる物に虫の生ずるが如く○自然の氣化にて生じたるものにて候○さる故に○其時の人は○貴賤上下の品も分れず○皆同輩にて○形は人にて候へども○心は禽獸に異ならず云々○然るに人の性さまぐ＼にて○賢き者愚なる者○强き者弱き者有て○强き者は○弱き者の衣食を奪ひ○弱き者は○强き者に○衣食を奪はる○是より爭ひと云ふこと出來候○此時幾億萬人の中に○神妙なる智慧の人生れ出て○夫々に教訓して○是より其邊の人○漸々に歸服して○何にても分別に能はぬことをば○持行て尋問ひ○爭鬪する者は○其の事を告訴て○裁斷を乞求む○其體今の世に郷里の子弟たる者○其所の父兄長老に從ふが如く○

いつとなく○諸人こぞりて○君長と仰ぎ奉る○上古の盤古氏○燧人氏など云は是にて候○と云て有る○但し是は太宰が始めて云ひ出したることでも無く○赤縣で○宋の代と云た時分の儒者どもの云たとを○我が說にして云たことで○尤是はもろこしの世の始め○人の始めを云たのでは有なれども○是から及ぼして○我皇國の御世の始め○人の始めもこの如く○天水桶へ○孑々虫の生る如く○臭い物に蛆のわいたやうに○一時に人が涌出して○我が天皇の○御遠津祖神と申せども○その涌た虫の中ぢや○と云やうに說落して○勿體なくも○禽獸の行ひなどゝ記し置たが○阿那かしこ○何なれば太宰純○かゝることを頰張出したるぞ○我が天皇の御遠祖の御事は○是までも段々申たる通りの訣で○世の始め天地も未だ无りしときより○天之御中主神○高皇産靈神○神皇産靈神と申奉る○三柱の大御神が○大虛の眞中に御坐て○この天地を御鎔造あそばされ○是に依て○伊邪那岐命○伊邪那美命○二柱が御生なされたでござる○斯てこの二柱の神に○其の初生なるこの大地を○修理固成せと○彼の三柱の神より仰せ付られたるに依

て。人草及び八百萬の物の祖をも御生あそばされたでござる。其の中に二柱の貴御子と申すが坐々て。是れすなはち此の世界を御照し遊ばさるヽ。天照大御神と。須佐之男命でござる。此の大御神の大御子を。天忍穗耳命と申奉り。又その大御子を。皇孫邇邇藝命と申し奉る。この皇孫をはるぐヽと御天降しあそばされて。御國を始め。大地世界を知食せ給へる御事でござる。この皇孫邇々藝命様より。是の文化の今上天皇様まで。御七十一世。百廿三代。御皇統御連綿あそばして。世の始より今に至るまで。誠に御一世の如く。昭々赫々たる御事でござる。是に依て御代々の天皇を。八隅知し大君とは稱し奉るでござる。八隅知しとは。世界を悉く知し食す。と云と同じ言でござる。かヽる尊き御大祖を。勿體なくも。右やう申し貶し奉ると云は。太宰純何なる枉心ぞや。假令外國數萬卷の末書は。讀盡したりとも其の本をしらざる時は。學者とは云べからず。皇國の緊要たる寶典を拜讀したる事なきは。頑愚とや云はん。文盲とやいはん。殊に其の文中に。强ても皇國を。惡ざまに云ひなさんとするは。奸曲も又甚しき大賊儒。憎むにも餘りあるものでござる。予開業の始めに。先純が著書を辨じて。呵妄書と云を著せるが今は其の中の一段を。少か言出したることでござる。偖また皇國人種の始まりは。古傳と事實に考へて。明らかなることでは有れども。頑愚の者の爲に少か申さうでござる。其れはまづ皇産靈大神を始め奉り。天津神。國津神たち。殊には天照大御神より。葺不合尊まで。御兄弟御子孫おびたヽしく御座す。これを神別と申すでござる。さてまた神武天皇より。御世々の天皇命たちの。御兄弟御子孫も。夥しくおはします。是を皇別と申す。忝なくも。我れ等もこの皇別の中でござる。此の外御世々に。外國より歸化したる者もある。是をば諸蕃と云て別でござる。かくの如く皇國は。天つ神の生成し給へる御國。人種は。すなはち神孫なるが故に。神國と稱し奉ることでござる。偖また漢土の古へ。盤古氏。燧人氏など稱したるも。純が申したる如く。たわいもないものではない。その盤古氏と申は。實は我が皇産靈大神。燧人氏と申すは。我が大國主大神に坐ますを。彼の國にて稱し奉りたる御名。また印度にても。世

の初めの神を。大梵自在天王と申すが。是も我が皇產靈大神を。彼土にて稱へ申たる御名でござる。此等は予委く考へ記したる物が有から。塾の衆には見せ申さう。すなはち古事記の序に。參神造化の首を作す。と有る此參神は。上に申したる天之御中主大神と。皇產靈大神二柱と。合せて三柱の御事なるが。こゝに記されたる如く。此の參神は。世界萬國を御開闢なされたる。大神等におはし坐せば。諸蕃國共に。此大神等の御事跡の御傳が。訛りながらにも。必貽つて有るはずのことでござる。然るに赤縣は。風俗あしき國風で。人心さかし立ち。我勝に小智を振ひ。己が臆說をたのみにして。古傳說を信ぜず。信ぜぬまゝに。本の傳をば失ひ果たる如く成たでござる。尤も御國を除くの外。諸蕃國の人の始めは。神の御生あそばされたでないから。子々虫の涌くやうに。涌出したる物でも有らうが。夫とても。皇產靈大神の御神德に依てなることは。申す迄もないでござる。然るを右らの訣をも知らず。今見る子々虫や。蛆の涌などを見て。夫から思ひつき。御國人の始めも。まづ其の如く。一時に。うや〳〵むく〳〵と涌たものぢやと。うはずましに決てしまつたものでござる。都て世の成り始めや。人の始めなどのとは。戎書にも。老子と云ふ書に。物あり混成す。天地に先立て生ず。と云たやうに。天地よりも先に生れて居た人でなくては。實は知れぬことでござる。其ゆゑに。御國の古傳說を篤く信じて。只管に。夫に從はねばならぬ訣でござる。なぜと云に。我が神國の古傳說は。右に申たる如く。天地の未だなかりし以前より坐ましたる。三柱の天津神の。神代より傳傳て相續いたし。はた其天地を御造化あそばしたる。天津神の御子孫たる。邇々藝命を。始めてこの御國に御天降しなさるゝ時に。その天津神の御口づから。御傳へなされたる通りに。御受繼あそばされたる御傳說にて。少かも紛れなく。また人麿主の歌にも。言靈の幸ふ國と詠れたることく。御國は言語の上に。妙なる御靈のあることは。即ち言靈の神の御惠みの。萬國に勝れたる御國ぢやに依てのことでござる。然ればその止事なき古傳をば。忘れず洩さず。言つぎ語りつぎ。またかの神字がきにも書記して。今の世までに傳へたること故に。是程正しく信

ずべき傳說は。百八十と國は有れども。外には絕てあることなく。今の現の事實に合せ考へても。少しも動かぬことでござる。儒者の本尊とする孔子の語にも。述而不レ作。信而好レ古と云たは。此方の如く。かやうに古傳說を。弘め及ぼして說き考へ。その信ずべき事を。篤く信じて尊べとの敎へでござる。然るを純なんど。その本尊とする。孔子の此の語を。何と心得てをるか。古の傳を信せず尊ばず。述而不レ作と云て。古の道を述弘めて妄作するな。と云ひ置たる旨に背いて。己れいまだ見も聞もせぬ。世の始めの有樣を。孑々虫のわくに準へて。妄作すると云は。何と云ふ邪心得か。知れぬことをば知れぬにして置べきことで。既に孔子も。其知らざる所に於て。蓋闕如すと云て。推量は云はぬものぢやと。誡めてある。是は人の臆說を以て究めたることは。必ずくひ違ひの有るもの故のことでござる。實に御國の始まりも。純等が云ふ如くならば。今も池など掘おけば。自然に鮏が生たり鮒が生たり。腐た物には虫がわくから。希々には。彼所此所の山奥か野原なんどへ。自然に人のわき出ることも有そうなものぢやが。

そんな珍事の有たと云ふ咄は。聞たことがとんとないはさ。然れば人種の始まりを。魚の生ずる例なんどを引て云べきことではなく。また我が天皇を。外蕃の王どもと。同並に思ひ奉るべきことではないから。能く古傳說を信じて。畏み尊み奉り。儒者や道學者が。是らの訣を辨へずに云ひ噪ぐ。狡意說に迷ふべきことではないでござる。是に付けて去年の事ぢやが。江戸の三十間堀に本鄉式部と云ふ者が居て。月に七日づゝ道學とか云を說き散した所が。人が大勢是を信ずると云こと故。どんな說を云かと。七日が間行て聞た所が。一つも聞ところのない。生賢風の墓何說を演說して。何もかも。都て悟道のことに說なして。その云た說の中に。やはり人の始は。虫の生やうに生たもの故。天子樣ぢや。貴人ぢやとても。何も民百姓に異つた事も。有難いこともない。たゞ冠裝束を奇麗に著飾つたばかりのことで。同じ人間ぢや。兼好が徒然草に。竹の園生の末葉まで。同じ人間の種ならず。と書て有るに依て。凡人とは違つたやうに。思つて居るけれども。もし禁裡樣が。凡人と異つて居ると云ならば。砂糖を辛いとも。蕃

椒を甘いとも云つしやるか。やつぱり蕃椒は辛く。砂糖は甘からうがの。然すれば何も異つたこともなく。別に有難いこともない。たゞ悟た者が貴いのぢや。など丶云ひをつたのでござる。奴おのれ悟たつもりで。人に悟道を勸めるからは。己より外に貴い者はない。夫に天子ぢや。貴人ぢやとて。高く居るのがしやら臭い。と云ふの云ひぶんぢやが。何とかやうの語を。貴人の御前で。其やうに冠裝束ばかりを立派にしたとて。夫は眞の貴いと云ものではない。凡夫ぢや。小人ぢや。愚人ぢや眞の聖人貴人福人と云ふは。此の方の如く。悟りを拓いた人のことぢやと云たならば。狂氣に取てさばいたならば。牢へでも入ずはなるまい。又その云ひ説を。正氣に取て捌いたならば。縛り首がものはあるでござる。これは道學者など云ふ奴ばかりでなく。俗の神道者等も。多くはこんなことを云て居が。みな外國の卑き國々の王ぢやの。貴人ぢやのと云ふ者に準へて云ふ。杓子定規の狂言でござる。阿那かしこ。何事も。寛仁大度の御政道が行はれて。御捨置あそばさるゝ故。その寛仁の御政道にくらゐそばへて。斯る狂言を吐散すが。實は道の爲には。かやうの奴原をば。醢にもせばやと思ふ程のことでござる。なぜなれば。斯る狂言どもは。都て世の人に。上を蔑如にすることを勸るので。甚だ人氣を惡くすることでござる。この者は。此外にも聞捨難き慕何言ばかりを吐散して人を惑はし。篤胤が知た人々も。大分これにはまつて。信じて居るが氣の毒さに。此奴こゝに置べき者ではないと思て。その七日が間聞たることを。一々罸めて。屁口物語。と云ふ論書一卷を作りて。奴が所へ贈りたれば。其答へが出來んで。とんと奴めは。去年の夏。何處へか逃て失をつたでござる。もし望みな人があらば。其論書を見せませうから。夫を見ると能く解る。先日も云ふ通り。御國の人と生れては。天皇は申上奉るに及ばず。高貴の御方々をば。能く其貴き故よしを辨へて。貴ばんでは。皇神の御心に違ふ故に。其の終りが神罸を蒙て。極めて宜しくないでござる。已に純なども其子孫は。江戸淺草の。非人の手下となり。其遠忌を弔ふ者も無くなりて。八九年前のことぢやが。通町の書肆。嵩山房が所で。弔た程のことでござる。この本屋は。太宰純が著し

たる物を。多く板にして。利を得たるもの故。その報恩の爲に。致して遣はしたと。亭主が直話であつたでござる。阿那かしこ〳〵。天皇命を遠きながらに拜み奉り。其現人神に坐ますとを畏み奉りて。鈴屋翁の教へを守り。ゆめ粗略に思ひ奉るべからず。もし此の意を忘れて。上を蔑如に思ひ奉ると。太宰純がやうに。子孫はかならず乞食ぢや。穴かしこ。とかく儒者には。油斷のならぬ者もある故。吾が本居翁も屡々儒道をば難じられたものでござる。是も新蘆面命に記して有るが。伊藤仁齋なども。思ひの外をかしな男で。紀伊殿へ書を奉つて。天無二日と申候が。日本には二つの日これ有るに依て。號令一ならず。宜しく帝位をば。將軍御踐なされ。天子をば大和公になされ候樣にと申上候。紀州樣殊の外御怒なされ。かやうの妄言。江戸へ申上候はゞ。死刑にも可被仰付候。然れども御慈悲を以て。默止なされ候。以來かやうのこと。筆は申すに及ばず。口にも吐申間敷旨。御制戒被成候。」と記してあるが。この仁齋が云ひ分などは。評にも及び難い程の不屆で。實に紀伊殿の御慈悲故。きやつ一生事故なく。笠の臺を失はなんだものでござる。此奴斯の如く。朝廷をないがしろに思ひ奉る心がある故に。忌憚ることをせず。仁齋など云ふ號を付て居るでござる。夫は仁齋の仁の字は。清和天皇御以來。御代々の天子樣の。御諱へ。通り御一字のやうに。御付あそばして有から。心ある者は忌さけ奉るべきことでござる。又この仁齋が子の東涯は。實に漢學には。勝れたる發明者で有たなれども。その底心には。甚だいやな。汚い所が有たものでござる。是から思へば。山崎闇齋などは。神道の杜撰を爲たのは惡けれども。然すがに御國の事に。心をよせた程あつて。頼もしい所が有る。夫故この闇齋が取立の學者だち。また其の流れを汲む輩。何れも御國忠の一義に於ては踏たがへず。中にも淺見絅齋なんどは。靖獻遺言と云もの。また稱呼辨正などゝ云ふ善き書物を著はしたでござる。此人は大分武人で。假にも柔弱なることなく。太刀の鐔にも。赤心報國と云ふ四字を彫付。諸侯に仕へず。御國家に御大事あらば。義兵を擧て。御國忠を盡さんと云て居たと云ことでござる。どうぞ〳〵天下擧つて。御國忠に心を盡すやうに致した

いことでござる。扨右の訣ぢやに依て。必々世の俗學者らの推量說や。悟道くさき說どもに迷はず。皇神の正しき御道に習ひて。各々夫々の身の業を勤むべきことでござる。

文化九年

門人等云。今般この悟道辨を淸書するに付ては。いと能き序なれば。尻口物語をも淸書して。是にさしそへ。邪道に迷はん人の禁戒と爲んとす。

悟道辨講本下（尻口物語）

此尻口物語の書は。ことし文化八年。師の君の。本郷式部といへる人の。悟道とか云ふことを說散し。俗人を多く惑はしたる事を憤りまし。其を嚴しく。罸め給へる書也。その時に師の。此書に添て贈られたる。手簡をも取添て。如此く一と卷と成したるなり。

氣吹舍門人等記

○此間者御無音に打過候彌御平安被成御起居珍重に存候然者貴所御說得之趣委曲承り信受奉行いたし候故乎全く五臟の煩ひとも可申哉に候へども一昨々夜扨々奇異なる夢を見申候例の如く御說得大會末座に聽聞罷在候處御說得半にして一人の翁の其面は靑黑にして左手には一つの利劍を執り右手には彼の三味索とも可申索を持候が能の謠に似より候を謠ひつゝ座を起て貴所の前に到り難詰いたし候事ども心耳をすまし承り候處夢中には候へども其翁の申候事逐一心に記し置即書取り懸御目候於拙者は此翁の難詰其理尤

分明之樣存候若不尤にも候はゞ逐一御示敎可給候且是は珍夢に候へば此始末人にも語り聞せ度候間御熟覽之上御返却有之度候已上

あたら日の三日の春日をはるさめの
降るとも知らずかきくらしけり

うるふ　　　　をはり町

二月廿五日　　　　丸外　二拜

本郷　樣

○夢中に。靑黑面の翁が。起て進みながら。誦ひ候趣は。

爾時大會　有一敎翁　是大敎翁
有大威力　大悲德故　現靑黑形
執大智劍　害貪愼癡　持三昧索
縛難伏者　一切衆生　意想不同
是故敎翁　或現慈體　或現忿怒
敎化衆生　雖現忿怒　內心慈悲

と斯やうに歌ひつゝ。貴所の前へ結跏趺坐して。然て徐に申出候は。先頃から。近所の人の噂にきけば。そこは。大分ものしりで。若い時から。何かの道の奧儀をも。殘りなく學び盡し。その深く明らめたる心から見れば。世の人の道のことをば。知らずにをることの不便さに。廣く世の人を敎へ。まづ東の方から弘めんとて。備前國から。はる〴〵此江戸へ來て。此の頃は。大分近所の者も。弟子になると云ことを聞て。夫は殊勝なとだ。どうぞ夫は知る人になりたいものだ。と云たれば。皆が云ふには。此の本郷と云人は。近付になりたいなど丶云ては。中々逢ぬ先生なり。直に弟子にならねば。對面はせぬ人なりと。口を揃へて云から。其時余が思ふには。扨々夫は心得ぬことだ。倭漢のかしこき人等の。人を導きたるが多けれど。己からして人に師と仰がれたいの。弟子にならぬ人には逢ぬ。など云た人はなく。既に己に長じたことが有ても。師席に居らず。など云ひおきたる人さへ有ものを。夫程の物しりに。似合ざる立かたぢや。扨々合點の行ぬことぞ。もしや夫は鼠の。何かかぢり散したやうに。諸の事を少しづゝ聞はつり。夫で愚なる者を威し。物貰はんとのわざではないかと。直に心付て有たが。予は幼少の時分から。どうぞ〳〵。眞の道を得たい。善事は覺えたいと。

老弱を擇ばず。遠近を訪はず。何かを學んだ癖がまだ止ぬゆゑ。夫程までに。人のもて囃す人ならば。譬へ其所は物欲がりにもせよ。その以囃す人々。みな愚なるにはよもあらじ。されば其所にも。少しは得たることも有だらうから。まづ〳〵行て見るが宜と。かの何とか云ける唐人の。爾言を聞ても察す。とか云たこともあるから。問ふて見やうと。彼の善いこと好の癖が起りて。止がたければ。人を頼みて云ひ入れ。この閏月のきさらぎ七日の夜から。其所の說得とやらを開始め。十三日の夜まで。一夜も闕さず聞た所が。扨々埒もなきことゞもにて。中には聞捨がたきことも多くあれば。今宵はそのことを云ひきかさん爲に來れるなり。但し。然程に埒もなく思へることを。七日が間これを聞き。其の後も三四度も。歌の題を取て。其歌を詠み來りしは如何にと云に。是れ則觀世音には非ざれど。慈眼視衆生とやらにて。そこの講釋を聞ば。文盲で不便なり。また寄集つて。そこの講釋をきく者を見れば。是も氣の毒なり。夫故まことに笑ひをこらえて。七日が間之をきゝ。後にて訣を言ひきかさんとての事なり。本心をおとし著て能く聞けと。そこが云た故。能く聞て覺えたことを。今逐一に難詰する程に。そこも彼の本心をおとしつけ。能くこれを聞く可し。

○初　日

拔隊假名法語の拔書。これは禪家の悟りをさせやうとて。初心の者に敎へた俗書也。これで心性を悟れと云ふことを。長々と諭し。次に一向宗のおふみとか云ものゝ拔書。次に大學の初めの所を。少しばかり說たが。大旨は。熊澤が大學解などに依たやうなれど。寢とぼけた時に讀んだと見えて。義をとり違へたることばかり也。さて何を解にも。禪家で云ふ心性を悟る。と云ふことの意に云ひまはし。其の證據に。古歌や託宣などを。いくらともなく引て云たが。あれは何だ。大概は和論語ぢやァないか。此の和論語と云物は。近江の國佐々木家の浪人者が。古人の語や。歌を少しばかり覺えて。夫へ自分の悟り臭き狂言どもを。神の託宣だの。佛の歌だのと。僞つてこしらへた物で。實は神の託宣でも。佛の歌でもない。みんな其の男の意也。何のたわいもないものぢや。夫も知らずに。神の託宣。佛の歌と信じを

るは氣の毒ながら。此の位の事はどうでもだが。風月を詠んだ古歌をさへに。己が得手に說きまげ。いはゆる牽强附會して。愚人を惑はすが憎き也。その一トつをいはゞ。小野小町が。花によそへて。吾面影の變れるを嘆き詠る。花の色はうつりにけりな。と云ふ歌の意を解て。花の色とは。心の色と云ふ事也。心と云ものは。色々に移り安きもの故。さうなきやうにと。誡めたる歌なり。是を世の人は。花の歌とばかり思つて居るが。文盲なことだ。今の世では。歌よみと云つて。花鳥風月を。面白そうに歌に詠むが。何の益に立ぬことだ。小町ほどの賢女が。子等らしく。何しに花の歌を詠ものだ。など云たが。嘔吐の出るやうな說かたぢや。其の心では。とても實のとを云ひ聞せたり共。生醉に異見。馬の耳に風とやらで。解りはせまいが。ならば心を平にして。眞のことも聞が宜い。こんなとつけもないことを云て。悟りの歌に取成さずと。外に心性さとりのことを書た書物が。十車も二十車もあつて。いくらも悟りの言種にすることはある。その言種にこまつて。其でもないことを。それに取なし云やうな未熟で。

人に諭すのなんのと云はぬが宜い。爲ぬが宜い。こりや丁度薪が足らぬとて。美はしく花の咲た櫻の木を。押折て。薪にするやうなものだ。薪はたきゞ。花は花にしてながめるが宜い。是が眞の學問と云ものだ。「山賤の斧とる者も櫻木の。花の盛は見てや過なむ。」いかにそこの心は。賤の男山賤にも劣りて。一向に風雅の情を知らぬと云ものだ。其所一人は。どんなあほうを云ふとも。そりや爲方がないけれども。汝にたはけを聞こんだやからが。人中で。こんなたはけを云て。人の哂ふも。知らずに居るが氣の毒だ。不斷つき合て見た所は。相應に何かゞわかりて。實に男一匹と云はるゝ者も。汝の云やうなことを。信じて居るかと思へば。扨々學問のない者は。むごいものだと。氣の毒ぢや」。
とかく汝は。神も佛もないもので。皆わが一心だと云かと思へば。心はないものだと云たり。何を云のだか。根からわからぬ。尻と口と。耳と鼻とで物云ふやうだ。これ神靈は無ものだと云ならば。先祖の祭りもいらぬことだ。先祖は自分の生れた本ではないか。また古への神々樣は。我先祖の出た本ぢやぞ

よ。夫を忘れて。道の本がすまうと思ふか。此頃もきけば。そこの咄を聞こんだ者が。先祖の祭りも入らぬものだと云て。佛檀を物置へ片づけ。先祖より祭り來た神の棚をも。川へ流してしまつた者も。大分あるそうだがまた。中には神靈と云ふことはないことなれど。先祖を祭るなどは。表と云ものだ。などゝ云て居る者もある。然して見れば。先祖を祭て置は。人見せにすると云ものだが。汝は表裏のないが宜いと云たが。そんな人見せのてれんごとをしちやア。表裏の有と云ものだが。どうだ」。

さて汝の云ふこと說くこと。都て悟りのことに牽附(ひきつけ)て。たゞ心を悟りさへすれば。聖人ともなり。佛ともなる。夫故悟りを開いた人をさして。佛とも。聖人とも。君子とも。福人とも。貴人とも云ふ。悟らぬ人をさして。小人とも。愚人とも。女人とも。凡夫とも。貧人とも云ふ。天子樣ぢや。貴人ぢやとて。何も民百姓に異つたとも。有難いこともない。たゞ。冠裝束を。奇麗に着飾つたばかりのことだ。されば。同じ人間ぢや。徒然草に。竹のそのふの末はまで。同じ人間の種ならず。とあるに依て。凡の人間とは。違つて居るやうに思つて居るけれども。若天子樣が。凡人と異つて居ると云ならば。砂糖を辛いとも。蕃椒(たうがらし)を甘いとも云はッしやるか。やつぱり蕃椒は辛く。砂糖は甘からうがの。さすれば何も異つたことも。別に有難いこともない。たゞ悟つた者が貴いのぢや。と此の後も二三度云たが。予も此の時は餘りにあきれ果て。覺えず耳をふさいだぞよ。

式部。其の方も。此の御國に生れて。此の御國に住み。此御國の米を喰つて居るではないか。夫に忌憚ることなく。如何に愚人をたぶらかし。物貰はんの爲なればとて。よくもかゝる狂言をば放ちけるよな。憎しともにくき人非人ぢや。其の世を非とするものは。其の地を踏まずと。古人の語にも云てある。夫ほどにも。此の御國の大君を非と思はゞ。なぜ此の御國に居る。なぜ此の御國の米を喰つて居るぞ。なぜ天竺へ飛で行ぬ。汝こゝろみに。有司の人に對して。かゝる狂言を放つて見よ。汝が頭どうして其儘あるものか。汝がやうな人非人に。舊來屬從(つきしたが)つて居る輩も。是に於て其の人非人の同類たること。推て知そゝ也。少も人間の心あるものは。早く其の非を改

めよ。神を蔑し國を詛り君を卑しめ。人を惡道に導きて。其の先祖妻子を忘れしむ。是が人非人でなくて何ぢや。

○二日目

大學。法然撰擇集。一向宗の由緒と云もの。右何れもひが言そら言。かぞへ盡されぬ程あるが。面倒だから云はぬが。其の中に。大學の。民を親にするにありと云ことを解とて。引言に。神功皇后の。肥前の今の松浦にて。飯粒を以て釣し給ひし時。其の御鉤に。鮎の魚のかゝり上りし時。此は珍らしき。魚なりと宣へるより。その釣し給へる地を。めづらと云けるが。その語の訛りて。今は松浦と云よし。御紀に見えたることを。また心性の悟りに說なして云には。鮎を釣とは。民を愛し給へると云ことを。斯う云たものぢや。神功皇后ほどの。佛性を得たる人が。子等らしく。何しに釣をさつしやるものか。然るに此神功皇后の。釣し給へる地を。繪にも書は。物しらずの爲たることなり。など云たが。其所は何もかも。自分一人。知た顏に自負すれども。いまだ我が皇國の御正史たる。御紀をさへに。見たとがないと見える。もし見たことも有ながら。こんな牽強附會を云ならば。これ汝の好な釋迦も。そんな噓をつくと。舌のない物に生るゝと云たぞよ。若また御紀を。未だ讀ずは。和學はかうしたものだの。神學は斯したものだのと。知たり風はせぬがよい。此のやうな噓事をきかす時は。いとゞ愚なる者が。なほも頑になるぞ。まだしも雪の色をば白し。墨の色をば。黑しと覺えて居るものを。汝の說得と云とを。聞こんだ者には。大分ありやこりやに。心得た者も有るやうすだ。これ人間は。ちッと身のほどをも知るが宜い。汝は備前の田舍に居た時は。鳥なき島の蝙蝠見たやうに。そんな狂氣を云ても人は聞て居たか知らぬが。まづ此地は何所だと思ふ。大將軍の御膝元ぢやぞよ。夫に何だ。大きく口を開て。上下おしなべて文盲ぢやの。道を知らぬのと度々云ふが耳にさはる。押並てと云は。上一人より。萬民までをさす言葉で。弘く係るぞ。あらゆる諸藝の博識が。軒並のやうにある。盲人蛇に畏ずと云とはあれど。その目くらでも。草叢の中では。用心しながらあるく。餘り穴を云やうだが。能く聞けよ。そこの云こ

さをきくと。色々の書物をよむから。素人はみな物しりだとか。何とか云て。畏りもするだらうが。汝のやうなもの知りには。今日始めてけふ成れるものだ。其の仕やうはかうだ。天道ぼしの本屋が。並べ本屋へ行て見ると。神書や。佛書や。儒書や。心學の書や。何かゞいくらも並べてある。そこへ行て。あれやこれを取ては見。とつては見て。初の處を。一行二行づゝおぼえて居るか。又は書抜かすれば。一日の中に。百部や二百部の書物が。何の苦もなく讀で仕まはれる。そこで夫をしやべると。博く書物を見た人のやうに素人は思ふものぢや。汝の物しりも。夫に違ひはない。と云たら。腹を立つだらうが。證據がある。其證據と云は。今日の說得でも知れる。六日目の講釋に。御紀の初卷の。古天地未剖。と云所を說たが。全部見ぬ證據には。今日の講釋には。神功皇后の御事を引て。あんなたはけを云たぢやないか。殘らず見たものが。どうして此やうな間違を云れるものか。實語敎も。大學も。六韜も。古今集も。假名法語も。讀むとよむ書物が。みな此の通りぢや。こんな學者を。江戸では。ちい〳〵學者と云ふ。なぜ然云なれば。鼠があそこの葛籠や。こゝの簞笥を。ちく〳〵とかぢり散して置くやうぢやに依て。鼠に譬へた物ぢや。そんな學者は。江戸には。等ではき集める程有けれども。汝のやうに人集めせぬのは。江戸の者は。恥を知て居るからぢや。汝もちッと。恥と云ことを知たならば。識者に從て。誠のことを覺てから。人を集めて講釋するが宜い。但し大悟に入て。恥も忘れて仕まつたか。

○三日目

六韜の拔書。翁問答の拔書。日蓮御書ぬき書。徒然艸などをも總て悟道のことに取なし。云たが。例の如く。ひとことも聞るゝやうなことはないぞ。其の中にも。牛若丸が。軍法の達人に成らんとするには。心性の悟りをひらかねばならぬとて。鞍馬山の山奥へ行て。觀念して居た處が。鞍馬山の僧正坊と云ふ知識が有て。毛裘を羽がひと見えるやうに著て。鼻へ火吹竹をあてゝ。おどろかし。試た所が。牛若丸は。少しも驚かず。そこで僧正坊も。是は凡の者とは見えぬと思ひ。心法を開かしてやつたと云ふ。大虛語をまじめで云たり。又人はとかく心の空のが宜

い。夫ぢやに依て。神佛を拜するに。南無と云は。皆も知ての通り。南無と書た字ぢやに依て。心を空にして神佛を拜み。身はみなないものと思ふのが。みなみなしぢやと云たが。不立文字だなど云ながら。何ゆゑ此やうなたはけな字義を解く。一體南無と云ふとは。もと天竺の語で。南無とかいたに意なく。云はゞ假字書ぢや。その南無と云ふ天竺語を。翻譯すれば歸命と云ふ辭なることをも知らざる也。佛法を弘めんと思はゞ。少しは佛語の訣も心得て居よ。さてこの南無と云ふ辭は。穢はしく。神の御名の上につけて云ものではない。其訣は面倒だから今は云はぬ。

また世に。小野の小町が雩の歌と云ひつたへたる。「ことわりや日の本こそは照らせめ。さりとてはまた天が下とは。」と云ふ歌を引て。小町が雨請の歌と云は誤にて。實は其の時の天子を。後醍醐天皇と申て。初め御不徳で有た故。民百姓がいかう難義した。この事を旱魃で。民が難義したと云たものだ。そこで小町が。此の歌を詠で。御諫め申た處が。天子の御氣がついて。夫から民を御惠み遊ばしたと云ことを。雨が降たと云たものだ。正法に奇特なしぢや。小町ほどの賢女が。何しに雨請の歌を詠ものか。歌ぐらゐで雨が降るものか。歌を詠んで雨がふれば。そりや奇特ありぢや。扨その通りに。下が潤つた故に。民が大きに悅んで。其の時分は。延喜年中のことぢやに依て。延喜の聖代とも。戸ざゝぬ御代とも云たものだ。其の時に。後醍醐天皇が。高殿に登て。見さしッた所が。大分よく。民の竈も賑つて來た故に。其時の御歌が「高き屋に登りて見れば煙たつ。民のかまどは賑ひにけり」と御詠なされたと云たが。狂人の物云ふやうで。此の訣を云て聞すも面倒だが。一寸と云てきかす。能くきけよ。まづ延喜と號たは。この文化八年からは。九百年餘り先のことで。其の時の天子樣をば。後に御諡號を奉つて。醍醐天皇樣と申上げたが。これは天滿宮や。時平公時分の天子樣ぢや。又後醍醐の天皇樣と申し上るは。此の延喜時分の。天子樣の御事ではない。楠の正成朝臣や。新田の義貞朝臣時分の天子樣ぢや。醍醐天皇樣の御隱れ遊ばしてから。やがて四百年ほど後の天子樣ぢや。また高き屋に登りて見れば煙り

たつ。の歌を御詠み遊ばしたと云傳へる天子様は。仁徳天皇様と申上て。天満宮時分の。醍醐天皇様から。やがて六百年程まへ。楠時分の。後醍醐天皇様からは。千年あまりほども前の。天子様ぢや。こりやまあ何と云ふ時代違ひの。取つけ引つけぢや。是でも和學を知たと云ふか。但し是は一寸と時代の相違したことばかり云てきかすのだが。元來は。ことわりや。日の本なれば照もせめ。と云ふ雨請の歌を。小町と云ひつたへるけれども。小町ではない。近來の出家の歌ぢや。また高き屋に登りて見れば煙り立。と云ふ歌も。仁徳天皇様と言傳へたが。あなたではない。左大臣時平公の歌の。傳へそこなひぢや。

序だから云ふが。とかく汝は。奇特と云ことも。不測と云事もないと云ことを。口についたやうに云て。夫ぢやに依て。まじなひの。或は汚れるの。或は狐に化されるの。と云ことはないと云たが。なる程是は鼻先のちよこ才な人には。然う思はれることと見えるが。能く耳の穴をあけて置て。此の開眼で得道するが宜い。世の中に有りとある程のことは。皆奇特不測ぢや。不測でないことは一つもないぞ。先この天地からして。はなはだ不測な物だぞよ。何ぞと云と。大極ぢやの無極ぢやのと云て。汝は理窟を付るが。その大極無極も。やッぱり不測ぢや。日月のめぐり。雨ふり風ふくも不測ぢや。空もみな氣ぢやなど云けれども。實はどうなつて居るか知ず。この大地の下も。どうなつて居るか。是も實は知れず。オランダから。天文や地理の考へが。委しく傳つて來て。是は唐土の大極や。無極などのやうな。のろくさいことでなく。實事によく合て居る考へだが。夫でさへ。天地の測り難く。大きいに合せては。庇あはひから。日蝕を拜んだほどに。ちッとばかりの所が知たのぢや。さう云ふことだから。何と不測ではあるまいか。況や。大極や無極の理窟ぐらゐでは。とんと知れず。赤縣にも賢い者は。大極や無極の説は。疾に破つてある。又人の上でも考へたが宜い。汝の云ふ通り。始めは一滴の水ぢや。其水が。こんな活てはたらく人と成て。目で見。耳では聞たり。口では物云たり。足であるいたり。手では何かをして。胸の中では色々と。かうして悟らせやう

の。あゝして合點させやうの。と云ことを考へてする。そこでかの。元は一滴の水で有た人が。また一滴の水を女の腹へ蒔おろせば。骨もをらず。拵へた者も。どうして出來たと云ことも知らずして。またやッぱりこんな人が出來る。何と是が不測では有るまいか。不測でなくば。此の訣がそこに知れるか。知れはすまいが。知れねばやッぱりふしぎぢや。不測と書た字を。能く見るがよい。元來は儒書でも。是が尤も大切の書ぢや。と。汝の云た周易に。陰陽不測之を神と云ふとある。是から來た熟字ぢやぞ。此の字義を能く見るがよい。測られずと云ことぢやぞよ。孔子も。釋迦も。不測なことは。やつぱり不測と云て置たぞよ。但し汝は。この二人の上へ立た佛が。正法に不測なしと云たは。汝の云やうな訣ではないぞ。もし其の訣が聞たくは。識者に能く聞が宜い。此の通り不測な天地の中ぢやに依て。不測なことも。奇特なことも。幾等もあり。化物もあり。幽靈もあり。穢もあれば。まじなひも驗があると云ふ故は。汝は天狗と云ふ物はないと云たが。實に有ものだ。有に依て。まゝ誘はれる者がある。天狗がさそッて行に依て。一日の中に數百里の先を委く見てかへる者などがいくらもある。こりや今委く云ずとも。漸々三十歲餘りの余さへ。度々見たり聞たりしたことがあるから。汝の心の中にはきつと覺えが有だらう。夫をないと云は。云がゝりの我慢と云ものだ。また狐にばかされると云ことも隨分ある。人は萬物の靈ぢや。狐にばかされてすむか。附れてすむかと云て。汝はみんなに理窟を云たけれども。愚なる者は。隨分狐にばかされる。こりやどうしたことか。狐の得てゝ居る所で。人をばかすが。あの獸の藝ぢや。狐ばかりでない。外の鳥獸にも。夫々能が有て。鷄は時を告げ。鷹は鳥をとり。猫はねずみをとるも。皆その物の得手ぢや。どんなに汝がきめつけたればとて。萬物の靈ぢやと名告たればとて。然云ふ汝も。誑されまいものでもない。釋迦も孔子も。化物には目を眩まされたことがある。釋迦が說法の處へ。天魔と云ふ魔が。菩薩に化。說法をきゝに來た處が。釋迦をはじめ。諸の弟子どもゝ。みな實の菩薩だと思つたと云ことが。佛經の中にあり。また孔子は。鯰に眼を掠められたことも。漢の古き

書物にきツとある。是ぢやに依て。汝も化されまいものでもないから。わるくりきまずと。隨分用心するが宜い。釋迦や孔子でさへも。妖物に眼をかすめられた程のことだから。愚なる者は。隨分ばかされる事もありさうなものだ。狐に化された者も。取つかれた者も。いくらも世間に有て。大概の人が。見たり聞たりして居ることだ。また穢のことは。甚だ深い訣があるけれども。其の訣は。云ても汝には解らぬことだから。まづ云はぬけれども。事實の上でためして見るが宜い。とんと爭はれぬ物だ。ちよッとした所が。紅粉や蘇枋の色を染るにも。火に汚が有ては。とんと宜く出來ぬ物だ。能く弘く人に尋て見るが宜い。夫は氣のせいだと云けれ共。氣のせいでも。こんな不測があれば。やッぱり不測ぢや。孔子も齋とて。穢の事をば。きツとして愼んだものだ。また禁厭も。隨分驗のあるものだ。譬ば瘧の病などを煩ひ。藥は素より。灸やら針治やら。どんなにしても癒らぬのに。ちよいとまじなッて。直におちるやうなことが幾らもある。また夫は氣のせいだと云けれども。氣のせいでもやつぱり不測ぢや。その上是は。氣のせいとも云はれぬ訣もある。始に藥を飮ときも。愚な人は。神佛の前で。御鬮とやらをとつて醫者を極め。病人の心では。是は何れの神佛の御指圖の醫者ぢやときつく信じ。醫者も。その目利にあへると思つて。藥を考へてもる。こゝでは病人と醫者と。異體同心になる。何と是程に。氣の合體なる事があるまいか。是でちつともよくならぬこともある。夫を禁厭で。ちよいと愈ることがあるから。腕をこくやうな名醫がたが。恥をかくことが幾らもある。また癬瘡と云ふ腫物を。まじなひの驗あるかなきかを見せんとて。半分まじなふときは。半分ばかりがよくなつて。半分は其儘で居るやうなことが有て。とんと我がをれるものだ。夫なら禁厭も。一向きかぬことがあるはどうぢやと云ふに。禁厭もとんと理詰にしたもので。こゝが彼の不測の所だが。その理詰で。どうしたことか。病がさらりとよくなる。こりや丁度正直な人が。理詰にあつて。其の身を恥ぢ。我を折るやうなことゝ見える。愈らぬは不正直な人間の理詰にあつても。恥ぢやとも思はず。蛙のつらへ。水をかけたやうに。しやあ〳〵まじ〳〵として居る

やうなものと見えたり。心を平かにして。とツくりと考へるが宜い。偖また幽靈もあるものだ。是は近く云へば。人の魂のうろついたのぢや。周易にも。遊魂變をなすと云ふことがある。周易は儒書では。第一の書ぢやと。汝は云たが。この語をどうして見落したか。さて段々云て聞す通り。不測なもの故。神靈は素より。遊魂も化物も。あるに疑はないことだ。と云へば。汝のやうな人は。夫なら出して見せろなどゝ云ものだが。今見やうとて然自由に見らるるものではないが。このとは。徂徠と云ふ儒者が。鬼神が无の。何のと云ふ愚な人を諭すとて。云た言に。木を劉て。花を其の中に求め。花なしと云て可ならんや。と云た如く。櫻の木に花のさくことを知らぬ人に。花の无いとき。此の木へ美はしき花が咲く。云て聞しても。とんと承知せず。どうして是へ花がさくものか。木を碎て見ても。花はないものをと云て。きめられると困るやうなものぢや。學問の未しきうちは。とかく鬼神ぢやの。怪いことぢやのと云は。めッたに押消したくなるものだが。能く此の事を會得して。唯々その物に惑はず恐れず。その畏惑ふものをさとし。この道理をよく辨へるを。學問の德と云ふ。怪しきことゝて。ひたすら云ひ破るは。學問もまだ。いろはのいの字を覺えた所と知る可し。

○四日目

今夜は神道の極意。祕密の講釋ぢや。是は此の國の道ぢやに依て。一と通りは知らねばならぬ。しさやかに聞がよい。などゝ云ふ故。如何なることを云ひ出すやらんと思へば。六根清淨祓と云ふ物を讀で。是は中臣祓とも云ふと云たが。けしからぬ間違ひだぞ。さて其の說やうも。みな間違て居るけれども。まづ夫はさしおき。この六根清淨祓と云物は。俗の神道者などが。もち扱ふ物なれども。元來は後世の佛臭い奴が。大日經と云ふ佛書を本として。僞り作たものじや。その初めに。天照太神の曰く。などあるけれども。まづ六根と云ふ辭からして。この御國では。昔は知らず云はなんだ語で。佛語ぢや。諸の法は。かげと形の如し。みな因より果とはなるなど云は。丸で大日經の文ぢや。その外。目に諸々の不淨を見ても。心に諸々の不淨を思はずなどあるは。

都て般若經の文を。詔詞書に直した分のことぢや。斯やうの訣をも知らずに。神道の極意と心得たは誤りぢや。その上この祓を證據として。神も佛も一體で。みな一つだ。夫れ故神の本地は。みな佛ぢやと云て。かの聖武天皇の御代に。行基と云た法師の。伊勢の大宮へ。佛舍利を持行て。通夜した時に。天照大御神の。實相眞如の日輪は。生死長夜の闇を照し。本有常住の月輪は。無明煩腦の雲を拂ふ。今逢がたき御法に逢て。渡りに舟を得たるが如しと。御託宣が有たと云ことを云たが。然すれば。汝の神道神道と云は兩部ぢや。夫なら云て聞す。一體兩部神道と云の初まりは。世の人が誰も知る通り。我が御國は神國で。世の初から。神祇を重んじ。齋き祭るが第一で有た故。欽明天皇の御代に。佛法が渡つて來たけれども。汚はしく思つて。誰も構ひても無く。漸々少しづゝ世に弘まりはしたけれども。とかく卑める人のみ多かつた故。佛法を弘めやうとする僧どもが工夫で本地垂跡と云ことを考へ出し。神の本地は佛で。佛の垂跡が神ぢやと云て。どうやらかうやら。世の人を誑しこみ。夫からして。兩部と云ことも出來。今の世の如く。佛も神も訣らぬやうになつたけれども。實の所は。佛は神のきつい御惡ひものぢや。そんなら夫程に。神のきらひ給ふ佛道が。なぜこのやうに弘まつたことぢやと云だらうが。是には深い訣のあることで。別に書た物があるから追て見すべし。こんな眞のことを云てきかすと。兩部神道の輩や。佛くさい輩が。この六根清淨の祓を云出したり。大神宮も。かう〳〵御託宣が有たと云て噪ぐ。既に原の白隱和尚なども。辻談義と云ふ書を著して。然云たが。此託宣は。行基法師が。佛法を弘めやうとて。例の如く僞り作つた託宣ぢや。夫れ故朝廷の御正史實錄には。此の事がとんとない。元亨釋書と云ふ書に。此の事があるけれども。この元亨釋書と云物は。後醍醐天皇の御代に。虎關と云ふ僧が。古への僧どもの傳を書たもので。其の中に。この行基が傳もあるが。夫に始めて此事が書てある。こりや皆一つ穴の狐どもで。俗に云ふ緣者の證據ぢや。かう云ふ根源の訣も知らず。神道の極意とは何事ぞ。さてそこは。この託宣を始め。和論語などにある託宣をも。よく引言に云ふが。神と云ふは名ばか

りで。實はないものだと云にしては。似合ぬことぢや。神靈がないものならば。託宣も无はずぢや。自分の勝手になることは。神の託宣も信じ。また託宣を信ずるからは其の時ばかりは。神をある物にするか。また神も佛も。實はないもので。皆我が一心ぢやと云にしては。天竺の佛が。我が國の神と垂跡して。佛は神の本地ぢやとは。何を云ふのぢや。取に足らぬ僧どもの妄説ながら。本地垂跡と云ふ訣は。天竺の佛が。この御國のことをも。きつうせわにして。假にこの御國の神と生れて。跡を垂たとも云ふ事ぢやないか。この本地垂跡の妄説を信じながら。神も佛も我が一心で。實はないものぢやとは。是もやツぱり。尻口でもの云のぢや。

汝の云を聞に。何を云も。心性の悟りに說おとして。悟れば天地の間を飛行するも自在ぢやの。死ぬることもなければ。生るゝと云こともないの。或は富貴に成るの。長壽ぢやのと。灰吹から龍の出るやうなことも云て。人を惑はすが。こりや生禪學者の口眞似をしていふので。實は口で云ばかり。一つも出來ることはない。とかく出來もせぬことは云はぬものだ。もし夫ともに。汝は飛行がなるか。なるならば飛で見やれ。但し飛そこなふと。腰の骨が打折る。昔一人の僧が有て丁どそこのやうに。大きに悟つたつもりで。天上もする心持に成たかして何の幾日には。飛行すると云ひ觸たものだから。人も實のことゝ思つたかして。見物人が夥しく集つた。そこで彼の法師が。數丈に高き岩石の上へのぼり。いで飛んと云まゝ。飛んで見た所が。思ひの外に飛ことは能はず。數丈の上より落て。腰やら手足やら痛めて。半死半生になり。その世の笑ぐさになつたと云ことが。宇治大納言の書れたる。古き物語にあつたが。汝もそんな類ひだらうと思はるゝ。またもしくは。實に飛と云ことではなくて。此の身は天地と同根なるが故に。天地のあらん限りは不生不滅ぢや。是が長壽と云ものだ。富貴と云ものだなどゝ云が。こりや生禪學者の能く云ふことぢやが。實はこじつけ理窟で。そんなに云へば。どんなことでも理窟がつくけれども。夫は佛法も後世の迯口上で。元來釋迦は。佛性を悟れば。實に飛れるの。自在ぢやのと云て。人を勸めたものだ。是は口で云たばかりでな

く。實に飛だり化たり。地中から踊て出たり。眉間から。光りを出して見せたりしたには違ひはない。是で大きに。人がたまげて歸服した故。存分に其道を弘めたものぢや是を佛の神通と云ふ。實は幻術と云もので。近く云はゞ。手妻の大きいものぢやが。是も人を勸むる方便にしやうとて。山に入て修行した時に。仙人どもに習つたことが。きつと佛經に書てある。大論と云ふ佛書に。鳥につばさなければ。飛こと能はず。佛に神通なければ。法を弘むること能はず。とある如くぢや。まだ如在のないことは。中には利發な者も有て。神通などでは承知せぬ故。奥の院へ。心法悟道のことを拵へて置たものだ。此訣ぢやに依て。その弟子ども〻。みな相應に。この神通が出來たものぢや。赤縣へ佛法が渡つてから。彼の國の僧等も。相應に幻術を覺えて。夫より我御國へ傳はり。古の僧どもも。ちよこ〳〵この神通を行て。人を歸伏さしたものだ。昔の僧に。奇特が有たの何のと云は。皆この幻術を行つたからぢや。是が誠に。佛法に云ふ飛行自在。神通の本說で。なほ委く書た佛書も。證據も慥にあることだ。然るに。天竺も赤縣も倭も。追々人が利發になつて。とんと幻術と云ふことを知て來たに依て。後世の佛者どもが。神通を行ふことをば。さらりと止て。心法悟道のことを專となし。飛行自在と云は。天地の氣と同根なる所を云たものだの。何のと云て。實は混らかしたものだ。近世にも。幾等も古への僧に劣らぬ僧が出たけれども。神通を行なんだは。もはや神通では人が承知せぬからぢや。夫故益々。心法のさだが委くなつて。中にも御國では。北條が時分に。禪學盛に行はれて。夫から足利の代に至り。世の人もみな。夫にそまつたもの故。一切の技藝。軍學。武術に至るまでも。盡く心法くさいことが交てゐる。汝は。諸道何に依ず。明めたとのことで。その極意ぢやと云て說たことどもは。みな禪家の心法ぢやぞ。とても佛法を說ならば。その骨髓の所も。心得てから云が宜いぞや。今云つてきかすのは。その骨髓のあらまし實に百分一ぢやが。なほ委しく認た物もある。元來はこんなたはひもないことぢやに依て。そんなに神道ぢやの。飛行自在ぢやのと云はぬものだ。もし强て。天地の氣と同根になつて。飛行すると云ならば。

斯して生て居るうちは出來ぬことだ。もし生て居るうちに。ひよつと飛行自在でも出來ると。直に縛られて。とんだ憂目を見るから。めつたには。飛れまい。然して見れば。飛行自在は。死でからのことだ。そりや生て居る人に勸めるは。迂遠と云て廻り遠いことだ。死んだ先は先のことにして。そんなに遠い先の。實は知れもせぬことを。苦勞にせぬものだ。孔子もいづくんぞ死を知らん。と云て。死で先はどうなるやら知れぬことぢやと云たぞよ。とかく人は。生てゐるうちは。此の世のことがかんじんぢや。人間の道の眞の悟りと云は。そこの云やうな。迂遠なことではない。とんだ安らかな宜い心持のものぢや。序があつたら云て聞さうが。今は云はぬ。

○五日目

歌道のことを云とて。古今集の假名序を讀み。花に鳴く鶯。水にすむ蛙の聲をきけば。生とし生るもの。いづれか歌を詠ざりける。と有るに依て。況て人は誰も〳〵。歌は詠べきものぢやと云たが。あれは誠のことで。汝の云ふ通りに違ひはないが。但し今の世の歌學者は。てにをはぢやの。假名つかひぢやのと云て。むづかしく云へども。古今集の序に。已に水にすむ蛙の聲をきけば。何れか歌を詠ざりける。とあるでは無か。鶯や蛙が。誰にてにをはを習つたと云ふ咄もきかぬ。夫ぢやに依て。てにをはも何もいらぬ。と汝は云つたが。汝は蛙と人と同じやうに思つて居るが。てにをはと云ものは。辭とことばをむすび合する。大事のもので。歌ばかりでなく。常のもの言ひにも。てにをはが調ねば。汝の說得のやうに。とんと尻口そろはぬことゝなる。夫故俗にも。前後うち合ぬことを云ものを指て。てにはのあはぬことを云ふとも云なり。常の言語で譬て云はゞ。烟管を取寄たく思ふときに。烟管で持て來いと。での字を入れて云ては。何のことか。云付られた者も解るまいが。是非烟管を持て來いと。をの字を入て云はねばわからず。また本鄕に遠ざかると云へば。予が方から汝の所へ行ぬこと。本鄕が遠ざかると云へば。汝が予が所へ來ぬことゝなる。常の詞の上ですら。此やうに意味の異ることだ。況て歌を詠み文を書くには。能くてにをはの訣を心得ねと。てにをはも合ぬと云ふ歌や文が。出來る。てにをはの訣を。

よく會得した人の歌や文は。わづか一字のてにをはで。無量の意味をも。含むやうなことがある。これわが御國のてにをはの妙ぢや。よく〳〵我慢の鋒を休めて。合點するが宜い。てにをははどうでもよい。と云た口も乾かぬうちに。鸚鵡がへしの歌のことを云たが。あの歌の。たゞやの字が。ぞの字と替つたばかりで。さらりと義のかはるにても考へよ。何と是も尻口の合ぬ云ひぶんぢやないか。此のぞの字とやの字が。即てにをはぢや。是でもてにをははいらぬ物か。また假名づかひも。能く知らねばならぬものぢや。其の訣を近いことで云てきかさう。尾張を俗言に。おわりと云は。訛つたのぢや。實はをはりぢや。尾の假字は。をぢや。おではないぞ。また張の字もわりではない。はると云ふ字ぢや。これぢやに依て。口におわりと云ふとも。文や歌には。此の訣をおぼえて居て。をはりと書ねばならぬ道理ぢやないか。まだこんなことぢやない。假字用格を知らねば。大と小をさへに。取違へるやうなことが。幾らもある。それに假字づかひや。てにをはも知らんで。歌學者と云はるべきや。そこの三十一字も。大分見たが。てにをはも合ねば。假字はもとより。大間違ひばかりぢや。夫に付て云ことがある。汝は。片手の聲をきくの。打ぬ鐘の聲をきくのと云が。そんなら。音のある物で聞せたいものがある。予は汝の講釋を聞て。「をかしさを忍へて腹もはるの日に。なりて出たるおときかせばや」。そこの歌よりはよッぽど實がある。

源氏重代うぶぎぬの甲と云は。心のうぶの儘なる所を表したものぢや髭切の太刀は。髭を切たに依て。かく名をつけたと云は誤りぢや。心のむしャくしャとしたる髭を。切すてよ。と云こゝろで付た名ぢやの。また梶原佐々木の兩勇士が。宇治川の先陣を爭ひかの川を渡したことを云ひ出して。どうしてあの川が渡られるものか。是は佐々木が悟をひらいて。今まで色々と。心に難所が有たのが。捨てしまつたと云ことを。かう云た物ぢや。また梶原が後れたと云のは。佐々木がやうに。悟りが出來なんだと云ことを。かう云たものぢや。悟りを開いて。本心を見つけさへすれば。天地の間に。山と云ことも無ければ川と云こともなく。飛行自在ぢや。其をさして。生

月と云ふ名馬で。宇治川を渡したと云たものぢや。と云たが。そんなことを。何と云ふ書物にかいてある。汝と同じ穴の狐の。云て置たことは。證據にはならぬぞ。きッとした正しい物で挨拶せよ。挨拶がなるまい。こりやみな汝の心で。よいかげんに取きめた空言ぢやものを。其身の上に引比べ。古の勇士等の。いさましき働をさへに。疵をつけよごすと云ものだ。是は譬へば。鷦鷯と云ふ小鳥が。垣根のきはや。溝の端ばかり飛まはつて。ずんど宜い氣になつて居る所へ。大鷹の。雲居はるかに飛翔た咄を聞て。そりや嘘ぢや。どうしてそんなに飛れるものか。自も飛で覺えがあると云て。合點せぬやうなものぢやぞよ。

○六日目

醫道の説得なりとて。素問の上古大眞論を。少しばかり讀で。色々醫道の講釋をしたが。多く嘘言で中には書て有る通りに云たことも有けれども。今時は一つも間に合ぬ。廻り遠きことのみなり。神道やら歌道やら。醫道やら。なぜ知りもせぬことを。知たり貌にしやべり散して。愚人を惑はすぞ。孔子の。之を知るを之れを知ると爲し。知ざるを知らずとせよ。と云たも知らぬ物知があるものか。さて序ぢやに依て云が。悟りさへすれば。藥飲ずとも病は治ると。汝は心得て。既に去年旅から歸て來て。しばらく煩た時も。藥は飲なんだと云ことだが。汝は悟た人ぢやに依て。夫でもよからうが。汝の咄を聞こんだ輩にも。そんなことをきつく感じて。汝の眞似をしたがる者もある樣子だが。是は何より悪いすゝめごとぢや。なぜと云に。人の命にかゝる。然すれば大事のことぢやに依て。云て聞すが。汝のしやべつた素問を始め。諸の醫經に。病を受たらば。速く手當をして癒せ。遲くなつては。病が深入して。輕き病は重くなり。重き病は。終に不治の病となると云ことを。返返くれ〴〵も云てある。是ほど道理の訣つて居ることを辨へず。夫でも醫學者か。是はこゝに寄合て居る人々に云ひますが。本郷の悟り咄しなどを。尤に心得て。必々。あんな慕何な眞似はせぬがよい。家を興すも身を立るも。みな命が有つてこそぢや。孔子も。疾をば。きつく大切に愼んだと云ふことが。論語にも見えてある。とかく人は何なりと。異たと

は。して見たくなるものぢやが。そりや新もの好と云て。惡いことぢや。惡いばかりでなく。煩つて藥を呑ぬなどは。心得違ひで。實は不孝の第一ぢや。本郷が藥を呑ぬのも。實に飲ぬ共思れはず。陰に藥を貯へて飲で。人には飲ずと。云ひふらすやも知べからず。さすれば唯欺かれて。輕き病は重くなし。もしや命を失ひたらんには如何せん。昔一人の僧ありて。一向に食を絶てくらはず。世の人もみな。大悟の聖僧と尊み思ひ。既に朝廷にめし置せ給へるに。この僧。ある夜ひそかに大便をしけるを。殿居の人に見付られ。さてはひそかに貯へて。食けるよと悟られ。夜に紛れて逃たりける。時の人。米糞上人と異名を付たと云事。宇治拾遺と云ふ古き書に見えたり。本郷も。この大悟の僧の類には非ぬかと。心を付てうかゞはゞ。藥尿先生ならんも知べからず。

是も醫道の講釋のとき。上方筋の。何とかや云ふ舊社の境内に。泉川と云ふ川ありて。此の川の水が藥になると云て。參詣の諸人が。目へつけたり。頭首へ付たりするけれ共。是は世間の人が。文盲になつた故のことぢや。元來は。人に心性を悟りて。うぶの心になれとのことにて。名づけたる川なり。夫ぢやに依て。泉川と云ふ。はて泉と云ふ字を能く見るがよい。白き水と書た文字であらうがの。人間は父から母の腹へやどる時は。それ白き水で有たらうがの。何と其の時は。可愛と云ことも。憎いと云ことも。何もしりやすまいがの。但しこの中の衆に。その時のことを知て居らるゝ衆があるかの。有りはすまいが。夫ぢやに依て。其の時のうぶの儘になれと云ことで。泉川と名た物ぢやと云たが。汝はありや場談か。場談でなくては。あんな狂氣なことは云へぬはずぢや。場談ならば。あんなにまじめで。こはァい貌して云はねばよいに。人はみな誠と思つて。既にそこの説得とやらんを。聞こんだ輩は。是に似たことを。まじ目で云て居るが。氣の毒ぢや。實に惡いぢやうだんと云は此事ぢや。

さて此夜。誰とても。たゞ我心のみ頼みになりて。實は妻子と云ふとも頼みにならず。身方と云ものではないと云ことを。諄々さとし。彼の大集經にある所の。妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者。と云ふ佛

語を引て。とかく愛情を捨ろと云て。聲をからしした
が。この佛語は。昔栗田の道衆と云ける人の。工を
があつて。扇子に書き付て。勿體なくも。其の時の
天子様を御欺し申て。御法體となし奉つたことがあ
る。汝もその流れを汲で。寄添ふ者を。みな無情の
心とか云ふ。佛くさい心を起させて僧に爲んと工む
のか。先この大集經の佛語を。佛の金言ぢやの。何の
と云て。喋ぐけれども。妻子も珍寶も。譬へば王位
でも。命の死ぬ時に。持て行れぬものと云ことはどの
やうな愚なぢゞばゞ子等でも。釋迦や汝にきかずと
も知れたことだ。こんな淺はかなことを。金言々々
と。何云ふことが有ものかとかくこんなたはけな佛
語を持出して。人に愛情を棄ろの。无心になれの。
うぶの儘になれの。愛憎と云ふ好き嫌ひを止めよの
と。佛の口眞似して。誠の人間には。とんと出來
ぬことを勸めるが。其はならぬことぢや。なぜならぬ
なれば。天道様の賦り付た。人の眞の道に乖けばな
り。夫故。その源を開いた釋迦からして。无心では
なかつた。況てそんなに云ても。汝もうぶの儘でも
なく。愛情も捨て。无心になッた共云へまい。な
ぜと云に汝も元は。妻も子も有たと聞てゐるが。そ
の妻子が可愛くはなかッたか。その死んだ時に。哀
くはなかッたか。其時哀くもなかッたならば。夫で
は予も實に閉口ぢや。汝は實に愛情をすてた人で。
无心にちがひない。無心なれば。石ころも同じこと
で。そりや人間と云ふものではないぞ。畜生よりも
ッとわるい。鳥獸すら。身に替ても子を愛しむ。汝
はその根性で云ことぢやに依て。少しも人間の道を
辨へた者には。聽れることが一つもない。愛憎と云
て。是が善の彼が惡いの。或は自他の隔と云やうな
こと。惡いに依て。棄ろのと云が。是も無理ぢや。
そんなら汝は、愛憎や自他の隔をすてたか。棄はて
たと云はゞ問言がある。我が子の煩と。見ず知らぬ
人の子の煩と。どちらが悲い。また米の飯と稗の飯
と。何れを食ふぞ。また家に犬を畜おかんには。人
咬む犬と。人かまぬ犬と。何れを畜おかんと思ふと
問はゞ。答て。どちらと云ふへだてはない。と口には
云で有らうが。心が問はゞいかゞ答へる。答へやう
が有るまいがの。もし實以て心までが隔なくは。ま
た人非人ぢや。これよくきけよ。汝の云ふ通り。大

聖人と云れたる孔子でも。顔回が死んだ時には。天予を喪せりと云て。天にさけび。地に身をなげて。前後も知らぬ程なげいたが。外の人の死んだと聞ても。そんなに泣たと云ことも聞ぬ。また喪に臨んで哀まずんば。吾何を以てこれを観んや。とも云て置た。是が誠の人情と云もので。のがれぬ所だ。また米の飯と稗の飯と。口に食ても。是がうまい。あれが旨くないと云とが訣らねば。そりや食つても其味を知らぬと云もので。口が不仁になつて居るので。やッぱり木石も同じとぢや。その草木ですら。其こやしの相應不相應があるを見れば。是も愛憎がある様子だぞ。さて米の飯と稗の飯との味の。よさあしさが分つた上では。稗の飯よりは。米の飯が欲いと思ふのも。是が生て居る者の誠の情で。のがれぬ所だ。また人咬犬を。是も負惜みでこはくない。人くはぬ犬と。隔はないと云であらうが。なんぼ悟つた人でも。一向かまはず。飛かゝつて喰つくぞ。さて本郷が悟り話しに。能さとりさへすれば。こはいものも。恐しいものもないとて。昔の仙人等が。虎をなつけたの。狼を畜ておいたのと云を聞て。自分も大きに悟たと。思ふ衆もある様子だが。悟りもあてにならぬから。必ともに。病犬のそばへなどはよらぬがよい。昔ある日蓮宗の僧が。天魔猛獣も。水も火も。題目の徳には。傍へも寄つくことならぬと。例のかたくなに心得て。つれ二三人と。ある日山中を通りしに。向ふより一つの手負猪かけ來りぬ。その時二三人の連は。大きに恐れて。深く草むらの中へ隠れ。息を詰て居たりしに。彼題目僧は。是こそ妙法蓮華の奇特を見すべき時なれと。かの大きなる數珠をしヤにかまへ。草むらの中にて。高らかにだぶだを誦み居りしに。かの怒猪は。その聲をしるべに。草村の中へかけ入て。彼の題目僧をば。粉微塵に喰さいたと云とが。心學者の書た物に有たが。こんなとが能くあるものだと云へば。本郷は。それは未だ至らぬからの事だ。うぶの儘の心になりさへすれば。喰付ぬと云であらうが。至つた人と至らぬ人と。わけへだてが有れば。獸にもやつぱり愛憎の心があるではないか。既に此間も。生れて漸く。笑ひ語るぐらゐの小兒の胸へ。盗人がぬき刄を當て

も。何とも思はず。笑つて居るから。盗人も殺しかねたと云ことを云つて。心がうぶの儘にさへなれば。火もまた焼くと能はず。水も溺らすことがならぬと云たが、そりや杓子定規と云もので。盗賊は人ぢやに依てのことぢや。病犬はそんな勘辨が何あるものか。うぶ子這子で。こはいも恐ろしいも知らぬ子等が。犬猫に咬れたことは幾らもある。さすれば何と愛憎と云ともなければならぬ。愛憎と云ふ心は。生れてぎやつと云と。直にからだにひつ付て。離れぬものだ。夫故これを性と云ふ。まくりと云ふ。苦ものを含ましむれば。親をしかめ乳を含ましむれば心ちよげに飲む。煖かなれば快く寐る。寒いと泣出す。是が愛憎でなくて何ぢや。汝の云ふによく似たやうだ。性の字を能見るが宜い。ある禪學者の歌に。「生るゝと直にからだにひッついて。離れぬものは心なりけり。」さてこの性と云ものは。天道様の。一人々々に賦り授けさしッた物で。夫故中庸に。天の命之を性と云ふ。と云たものぢや。誰教ふるとなく。神と君とは尊むべきもの。親はしたはしきものと覺えてゐる。扨その生るゝとひとつに。天道様から授つた。性の通りにして行くを道と云ふ。中庸に。性に順ふ之を道と云ふ。とあるは此の事ぢや。扨その性のまゝなる道を。ふみ違へぬやうに。取り立て修して行くのを。教へと云つたものぢや。中庸に道を修むる之を教へと云ふ。とあるはこのことぢや。是で性のことをも道のことも。教へと云ともよく訣つて居る。夫に愛憎と云ことはない。妻子と云へ共。たのみにならぬの。身方にならぬほどに。其の心を棄ろ。うぶになれ〳〵と。聲を枯して云たとてどうして夫が然なるものか。妻子の愛情をすてられるものか。棄られぬのが誠のことで。人の道ぢや。夫にその眞の道をすてろの。悪いのと云のが。何と邪で有るまいか。汝は一人身のことぢやに依て。夫でもすまうが。人がさう不人情に成れるものか。此の席に居らるゝ衆等の心をきかねども。さう不人情になッた人は。一人も有まいと思ふ。どふしてまた。世を捨はてた。乞食僧の竟界になられるものか。人には人の道がよい。人非人の道は不相應ぢや。古人の語にも。道とは道路の謂なりと有て。其の言を。人の行ひの上にかりて。云たもので。譬へば大道を人の蹈て。安ら

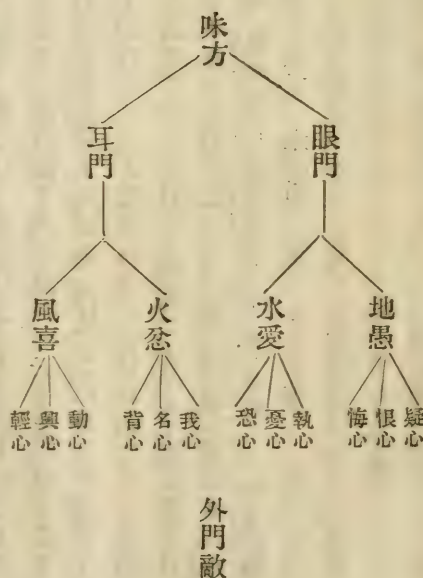
かに行るゝ如く。人間の安らかに出來ることでなくては。そりや眞の道と云ものぢやないぞ。「踐て行く道こそ道の眞なれ。踐得ぬ道に人勿さそひそ」。中庸にも。道は須臾も離るべからず。はなるべきは道にあらず。と云て。道と云ふものは。行住座臥。しばらくも身を離るやうな。そぐなはぬ物ではない。若爲にくうて身にそぐなはぬやうなことでは。道と云ものではないぞ。と云ふ義ぢや。夫に妻子も。かあいがつては悪いの。愛憎をすてろのと云ことが。何と人間の。安らかに出來ることか。身にそぐなつた敎へ方か。もしまた希にも、何の苦もなく、妻子をも愛する心が止み。愛憎をも隔なく出來る人ならば。そりや人非人と云もので。鳥獸にも劣つて居る。そんな輩は。風上におくも汚らはしい。其心が募ると。段々と妻子がうるさくなつて。厭ふ心が出來ると。終にはあたまを丸めてはッち坊主にでもなりたくなる。なんと畜生でも親をしたひ。子をば可愛がる。その畜生にも劣つてゐる爲方だから。是は名のつけやうにも。こまる程のことぢや。不孝に三つあり。後なきを大なりとすと。唐人も云て。是ほど大きな不孝はない。人間の道と云ものは。神と君と親とを尊み。妻子奴婢をあはれみ。朋友にはよく交はり。そのほど〱に。己が爲べき業を精出して。其家を興すことを力めさへすれば。何にもそんなに悟道ぢやの。心性ぢやの。圓相ぢやのと云て。佛くさく悟り臭いことは。敎へず共宜いものぢや。原の白隱和尙の許へ。ある米屋のもとより。「白隱が片手の聲をきくよりも。兩手扣いてあきなひがまし」と云ひ贈りければ。白隱和尙の反し歌に。「商ひが兩手たゝいて成ならば。片手の聲はきくに及ばず」と詠んでやッたと云ことぢやが。佛者でも。眞の所へ出た人は、此通り眞のことを云ッてきかす。これで見れば白隱なども。俗は俗のやうに。そのほど〱に。己が爲べき業さへ出來れば。佛くさく悟道くさいことは。入らぬと云の心と見える。何と上に云た通りで。道はとんとすんでゐるではないか。夫に何ぢや。天竺の乞食の說弘めたことを。俗の身で。その道を弘むると云ことがあるものか。と云たら。佛贔負の人等は氣に當るであらうが。釋迦は乞食ぢや。夫も自分の物好で。乞食に成たのぢや。なぜと云に。はて天竺

は。一向いかぬ國ながら。その國の王の子で。悟道が好だとか何とか云て。其の位を捨て。出家して。恥を知らぬ國がらとは云ながら。人の打捨た物を拾つて著たり。人の門に立て。物もらつて步いたぢやないか。是が物好でなくて何ぢや。國の風俗が惡かッた故に。夫を直さうとてしたことぢや。と云けれども。はて國の風が直したくは。乞食にならずとも。幾らも爲やうがある。大學にも。一人貪戾なれば。一國亂を作すとある如く。上の心次第で。國の風俗は。善も惡くも。どうでもなるものぢや。また上一人の心は。下千萬人の心なり。と云ふこともあるではないか。釋迦は王のことだに依て。上に居て。如何やうにも。國風は改められることぢや。夫程の身分で居ながら。乞食になるとは。是が物好でなくて何ぢや。この物ずきと云は。すなはち癖ぢや。癖と云は。小兒なればやはり虫ぢや。「子どもらが爪かむも虫泣もむし釋迦の乞食も虫のわざなり」「釋迦の乞食になつた事の物好の訣は。なほ委しき考へがあるけれ共。今日は云はぬ。扨あれほど苦んで悟つた釋迦も、命もわづか七十餘。そして身は乞食ぢや。さすれば悟つた程のこともない。然れども。盜人にも製詞ありとやらで。色々のことを云て置たから。中には尤らしいこともあれど。御國などでは。害となることが多い。その害になることは何ぢやと云に。元は人の思ひもつかなんだ愛情をすてゝ。不人情になりたく成たり。極樂へ行て。百味の飲食を食たいと云ふ。妄念が起つたり。終には妻子をすて。或は後を絕しなどして。人の眞の道をかき昧ました事が。昔から幾ら共。計へ盡されぬ程のことぢや。その妄念の火を放した者は誰ぢや。釋迦が本人ぢや。「釋迦と云ふ物貰ひめが世の人の。一圓相へ火を放ちけり」。扨その佛法で放した火を。また佛法で直さうとて。倍々其の道を弘むるは。薪の火を消さうとて。また薪を投つけるやうなものぢや。「おのが手で火を放ちつゝ其の火をば。また救はんと噪ぐしれもの」。然れども僧の輩は。その業のことぢやに依て。こりやさうせずはなるまいが。僧でもなくて。僧に荷擔して。夫を弘めやうとて噪ぐは。何のたはことぢや。「佛滅の後五百歳に本郷の。八百屋の子さへ火を放つとは。」僧ですら一休和尚や、白隱和尚などは。この訣をよく承知し

て居て。さて一旦僧になつたに依て。爲方がないと。明らめて居た様子だ。こゝが眞に悟道の場で。さう有りさうなものぢや。又うぶの儘になれ〳〵と云とも。どんなに汝が云たとて。どうして初生になるものか。其勸める汝さへも。うぶのまゝではない。なぜと云ふに。汝は生れてうぶ聲を上たときから。そんなに物を知て來たか。さうではあるまい。孔子も十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所にしたがへども。矩をこえずと云て置て。段々智慧のまさねばならぬ物ぢや。年が寄ても智慧がつかず。たゞ老耄てしまうばかりでは。そりやあほうぢや。旣に汝も實語教を引て。人肥たるが故に貴からず。智有を以て貴しとす。と云たぢやないか。夫になぜまた。尻口の合ぬことを云ぞ。

今夜のすゝめに。妻子と云ども賴にならぬ。身方にならぬと云ことを。返す返す云て。その證據の圖を見せんと。嚴めしくとり補理（しつらひ）て。

二相大悟法

味方
眼門　耳門
地愚（疑心・恨心・悔心）
水愛（執心・憂心・恐心）
火忿（我心・名心・背心）
風喜（動心・興心・輕心）
外門敵

こんな圖を出して見せて。大分何か云たが。あれは楠の軍法の書ぢやと云ひふらす。南木武經と云ものにある圖ではないか。それは延寶時分に。安藤掃雲軒と云ふ生軍學者が。楠の名をかたりて。僞り作つたもので。今時は人が利發になつて。少しばかり通俗もの位を讀んだ者でも。あんな狂氣なものは承知せぬやうに。物事がひらけたに依て。誰も取上て見る者もなくなつたから。板本ながら。とんと世に

い物ゆゑ。人は知らずに居るぢや。予も子どもの時に。讀んだ事があるけれども。俗に云ふ。河童の屁とか云やうな。たはひもなく何の益にもたゝぬ物ぢや。あのくらゐな事で。楠の名をかたるとは。きつう楠公の名の汚れる事だ。そこの弟子等が。我が先生は。楠の祕書を持て居らるゝと云て。恐れるそうだが。大かたこの。南木武經の事で有うが。楠公はそんな鈍まな事で。軍がされるものではないぞ。二相大悟も事々しい。あんなたはけな事で。どうして大悟がなるものか。

○七日目

神代の卷の初めに。古へ天地未ㇾ剖。陰陽不ㇾ分云々とある處を少ばかり讀で。是に天地未ㇾ剖とあるけれども。是は天地の初の事ではない。天地は素から有たもので。初めと云事も。終りと云事もない。是は天地の素から有た所へ。人の生た事で。父母の人を産だ事をかう云たもので。天地とは父母と云事だ。其だに依て。父母の恩は。天地の如くと云たものぢやと云て。また例の。白き水の咄しをしたが。一向にきかれる事は无かつた。其上汝は何もかも無ぢや無ぢやと云が。天地ばかりが。素から有たか。亦天地は素から有て。夫へ虫の生やうに。人のわいた事も能く知て居たの。老子に物あり渾成す。天地に先だつて生ずと云てあるは。其所の事で有うかと思ふやうぢや。但し神代の卷を始め。眞の神書は。汝等ぐらゐの力では。一つも解る事ではないぞ」とかく汝は。有無の穿鑿ばかりするけれども。禪家の方でも。有ぢやの無ぢやのと云ふ内は。まだ一向なうちのことぢや。實には。鬼神は元より。心も有るものには違ひない此の間も心の無いと云ことを。諄々云て。若心が有ると云ふ人があらばどこにあるか見やうなどゝ云たが。あんなあほうは云はぬ物ぢや。我慢の角を折て。よくきけよ。禪家の方でも。高い所では。心をもきッと有と云たは。雙林禪慧の語にも。「水中鹽味。色裡膠青。決定是有。不ㇾ見二其形一。心王亦爾」。と書て置て。水の中に交つてゐる鹽や。色の中に交つてゐる膠は。きッと有には相違なけれど。其形の目に見えぬやうなもので。心とても。今見やうとて。其形は見えぬけれども。人の體に交つて有には違ひない。と云の意ぢや。とても禪家の眞似をしやうと

思はゞ。こんなことも覺えておけ。但し汝はこんなに理づめに逢ふと。だまつて居て。その理詰を云た人の歸つた後に。弟子どもを誑して。此方は教外別傳不立文字ぢやに依て。古人の語には據らぬ。古人の語は。紙に書てあるので。あれはみな反古ぢや。あんなことで道は知れぬなどゝ。後で負惜みを云ふそうなが。彌々不立文字ならば。なぜその古人の語の反古を。かぢり散して。夫をしやべり。愚な者を惑はすぞ。何と是も尻口であるまいか。「說ながら不立文字とは瓢箪に。鯰のやうな人のそら言」。禪家の方で不立文字と云たは。大きに訣のある事で。汝の云ふ通りの事ではなく。元より汝等の知た事ではないぞ。時が有たら云て聞さう。

扨一ばんしまひに。道の極意の圖を見するとて。こと〴〵しく取しつらひ。何を出して見するかと思へば。○こんな丸いものを出して。何か悟り臭い事をしやべつたが。ありや圓相とやらではないか。是で道の極意が知れるか。禪學者の眞似がしたくは。もちつと。此上の所も覺えておけ。世間にも隨分あるものだ。圓相の中に達磨が居て。欠をしながら。○この外へ。足をふみ延した所の圖があるものぢや。眞の道が知りたくは。欠びをしながら。圓相の外へ足を蹈のばす程でなくては。一向に少いぞ。圓相の外はないと思つて。この中にちゞまつて居るのは。丁ど俗に云ふ。藥罐でうでた蛸魚のやうなものぢや。圓相の外に居る人の目から見ては。氣の毒なほど狹いものぢや。莊子が井蛙不レ知レ海と云たもそこの事ぢや。「藥鑵にてうでたる蛸魚が圓相の。外見ぬばかり憂ものはなし」。

さて今夜講釋畢てから。お傳へがあると云ふ故。何をするかと思へば。一間の內を。また屛風でかこひて。男女を云はず。一人づゝ呼入れて。例の長物語をして。十七日に來て。心の有無を云ひきかせろと云たが。あれは禪家の。參禪と云事の眞似ではないか。夫も宜が。一人づゝ屛風の中へ呼入れて。汝とたつた二人さし向ひで。ひそ〳〵咄をしばらくするが。隨分男はよけれども。あの女どもの中には。人の女房も娘もある樣子だが。をかしな事をするの。汝は人の嫌疑をさくると云事は知らぬか。僧でも油斷はならぬ。況て俗形の身分として。愼むべき事だぞよ。

どうか高師直が眞似でも爲やうかと案じられる。赤縣の人も。瓜田に履を容れず。李下に冠を正さずと云て瓜畠の中で。履がぬげても。夫をいれては。どうか瓜を盜んだやうに思はれうかとて。其履をいれず。また李の實の生てゐる下では。冠のひもが解ても。夫を直したらば。李の實を取たと疑はれうかと恐れて。その冠を直さずと云事だか。なんと汝のしざまが。心ある人の目から見て。見苦しく有まいか。五雜俎と云ふ赤縣の書物に。ある所の僧が。丁どそこのやうに。物を教へるとて。人の妻や娘を。密室に誘ひて。度々密通した事が知れて。苛らい目に逢たと云事も見えてあるぞ。氣をつけるがよい。近くは谷中の日蓮宗延命院が惡行をも知らぬのか。さて其の後答の日に。汝の魂と書て渡した物の下へ。本來無心と書て出したれば。汝は點頭いたが。あれは此方の本心ではない。心の水と云題へ詠だ歌も。詞書も。そちに悅ばして置て。なるならそろ〳〵。眞の道をも聞せたい敎へたい。あんなつまらぬ事ばかり云て居るは。偖々不便な事ぢやと思つたから。其の後も。二三度歌を詠で行たり。何かして。親しく物云ひかけて見ても。自分の云事ばかり云つて。予にはさつぱり口を開せず。わざと卑下して。歌は詠めぬの。何も知らぬと云たれば。その詞じりを取て。悟道の事やら。歌道の物語やらして。大分予を叱りつけたが。扨々汝はわからぬ事ぢや。詠で行た歌のしらべや。詞の用ひぶりでも些とは解りそうなものぢや。赤子に云やうな事を云たが。予はまだ初生にかへりはせぬものを。汝は予をもはや。うぶに歸たと思つたか。其の時われも可笑かつたが。若や隨分わかつて居ながら。彼のあつかましく。こんな事を云ふか。それなら鐵の面でもかぶらねば。云へそもないものだが。貌をそッと上て覗いて見ても。そんな樣子もなし。然すれば實に解らぬのか。もしや予が小粒な所で。辛くは有まいと見損じたのか。夫でもどうぞ斯ぞして。眞の事をきかせたいと思ッて。下から出て見たが。とても汝はいけそもない。いけずは汝一人はどうでもだが。予が知つた人の中にも。大分汝の云事を。本當ぢやと。心得たやからが有るから。然すれば人の爲にもならぬ事。夫をだまつて居ては。朋友に信實がないと云ものだから。

小の虫を殺して。大の虫を救ふの道理と。佛の眞似して下から出たり。また忿怒の相を現じて。こんなに叱つても見るのぢや。どうぞこゝを咀分て。論語にも。意なく必なく。固なく我なしと云ひ。また孔子から。憤せずんば啓せず。悱せずんば發せずとも云たほじろき。しやんと心をきり替て。「道々と云が道かはと」と斯やうに難詰し畢て。かの青黒面の翁は。すなはち貴所の前を起ながら。また聲をはり上て。

説二是言一已　遂二其本意一　還二著本坐一

と謂ひつゝ。元の坐席に著申し候。夢中の趣斯の如くに御座候以上。

追啓傍なる者に認めさせ候まゝ。定めて文字の誤りなども候はむ。能く御讀分御熟覽之上。御返却御返書待入候已上。

○此の如く云ひやりて。二十日餘り。三十日ちかうなりにたれど。返辭もせざりける故。また消息して如何にこの聞きこえし物語は。讀れたるにか。夢の翁が異見をば。如何に見られたるぞ。と云ひ遣ければ。その使人に。餘の言は無て。たゞに此物語を返して。急ぎ給ふとならば。まづ返し參らすになん。とぞ云ひおこせける。故また云遣けるは。三十日ちかうも止置れながら。此書の條々。委曲に辨ふる程の事はなくとも。此かしこのよきあしきを。云ひ解ばかりの暇の。いかでなからめやは。殊に今日參らせたる消息は。たゞかの物語は。讀れたるかと問るのみ。返しねと云へるには非ぬを。かく云て返されし事こそ心得ね。思ふに此は。夢の翁が言葉とがめに。云ひ開くべき言のなくて。惱みぬるをりから。此を能便りに。かへり言せで。その惱みを遁れんとのしわざにや有らん。然もあらば。其所の云ひと云ひ。敎へと敎ふる言どもは。都て非とこそ覺ゆれ。ゆめ此後は。さる非事勿。世に云ひ弘めそ。愚人をな惑はしそよ。腹あしき事と思ふらめど。この聞きこえたるがごと。其所が説に惑ひ居る人等に。この物語見せて。云ひ諭しはべらんかし。もし實に暇なくて。返辭ものせられぬならば。猶しばらくも。此物語とめ置て。夢の翁ゆかへり言せよかし。と云やりけれど。他へ出たるよしを云ひおこせて。其の後は

音づれもなし。其は四月の月立ぬる日になん有ける。

平田篤胤記

講本氣吹颸上之卷

平田先生講說　門人等筆記

さて未だ壯年の拙者。かくばかり道を說き諭し。人を誘ひますることを。嘸や老輩の學者等などの。彼此と小言を申し。中には篤胤が。斯やう平和に。孰も聞とれるやうに申すことなどを。道を地に落すなど丶。誹る輩も有ませうが。是に訣がある。其の訣と云は。まづ何致したことか。拙者幼少の時より。萬に勝つて。書物を讀ことが好て。漸々物心を辨へる時分に。思ひましたには。及ばずながらも。何とぞして。學問を以て。世に名を輝し。功を立ばやと志して。何の學び。何の書と云ふ嫌ひなく。まづ讀通り。善につけ惡きにつけて心得となるべきことは。書拔も致しなど。怠なく努め居るうちに。去る享和元年のことで有ますが。二十六歲の時より。始めて鈴の屋先生の著はされたる書を讀み。其の敎の有難き事を知て。其の門に入り。益々古道の。上もなく尊きことを覺えまして。夫よりは。只管に此道を學びて。今年三十六歲になるまで。精勤いたし。神の御靈と。先師の御蔭とに依て。甚だ拙き生得ながらも。如此までになりましたが。時に先師本居先生の學風の。正しく太じきことは。萬國古今に比類なく。然も有べきことは。萬國の本つ祖國。神の御國とある。此の皇國に生れ出られて。神の御傳へあそばしたる。眞の道を說明されたるが故で御座る。扨この道を。普く世の人に。知らしめんと致されて。その書き遺されたる書等。すべて五十七部。中には歌物語。音韻のことなどをも。論ぜられたるも有りますが。云ひ以て行けば。盡く人に眞の道を示さんとて。著されたることで。その深切丁寧なること。其の書どもを見る每に。淚も落ることどもで御座る。爰に篤胤。其の敎へを信じてより以來。爭で〳〵其志を續で世人に普く。此の道の實を說諭さんと。精勤致すことは。及ばずながら人の人たる道を盡さんと存じてのことで御座る。夫につけて。世の古學者等の。敎導いたす樣子を見まするに。古事記。書紀。萬葉集など。其外の古書を。講釋して聞せ。また歌を詠しめなどして。導きまするが。拙者の思ひます

るには。夫は上等の人の。しかも書物も餘程讀み。かつ隙もある人を導くの手段て。中等の人。然ては書を見る暇もない。と云やうな人を導くの手段でなくて。其功ちひさく。且熟々世の中を見まするに。書物も讀る。暇もある。と云やうな。上等の人は少く。かつ夫らは。却て生心が著て居て。諭しにくゝ。負惜みなども差添ひ。質朴に道を聞とることは。結句出來ぬもので有ますから。夫は捨措き。世にたんと有る無學の人。また眞のことを。知りたく思ふ志は有ながら。書を讀て居る隙もない。と云やうな人。是は結句生心も著て居らず。負惜みもなく。讀る輩よりは。朴に道を聞とること故。とてもの勵みに。其人々に代つて。我一人で書を讀み。其學び得たる眞の所を。諭し聞す方が。功も大きく立つことで。人の爲には成そうなことゝ。と工夫致して。左に右人の。聞取よいやうにと演說致して。師の說教へられたる。古道の意を。說弘めることで御座る。拙者の此の志を知らずに。左や右。訕る人々には。如何程も訕られて。夫はとんと心とはせぬ積りで御座る。なせなれば。普くの人に。善き事を聞す事で。夫を聞受て。悅ばるゝ所を見ますれば。嬉しく有難く。中々人の訕り位に。思ひかへらるゝことでは有ませぬ。且また拙者も。まづは學者で有ますが。實の所は。世の學者等の學び方。教へかた。行狀までが。大かたは氣に入らぬことばかりで。此方の目から見ると。結句書も讀まぬ人よりは。行ひも宜しからず。生ごしやくで。いやらしく見えますから。拙者はとかく學者ぎらひで。とんと江戸の學者づき合ひなどを。致したことがない。やはり凡人の朴な人が。いやらしくなくて。つき合も致しよいから。其の交りが好で。不斷の人には。問へは云ますが。常はとんと。學問ばなしなども嫌ひて御座る。ぢやに依て。近所鄰りの者等にも。近き親類にも。拙者を學者とも何とも知んで居る人も。多くある程のことで有ましたが。近來人に普く。說聞すことを始てから。學者と知れるやうに爲て。人に貌を見られる心持て。大分肩身がすぼまつて。ちと迷惑致して居るが。今さら仕かゝつたこと故。止られはせず。とにかく學者と。者の字を著て云はれるやうでは。常の人と異なつてをるから。云はゞ畸人にされるので。餘り面

白くはないことで御座る。おやに依て。各々方も。必ずともに。學者にならうなどゝは思はれず。只々拙者一人を畸人にして。其云ふ實のことを聞取て。我物となし。古への道を知て。蹈違へず。物に惑はず。正道の人と云はれるやうに致さるゝがよい。其の代り拙者一人が引かぶつて書を讀み。眞の道。眞の事を學び取て。有の儘に口うつしに。御傳へ申すで御座る。また多き人の中には。拙者のやうに。生得書物を讀むことを。好む人も有ませうが。もし讀るゝならば。吾師本居先生の書物を。次々に讀がいッちよい。是を讀で。萬の本を知りまするど。世に有らゆる邪說。紛れ說に。迷はぬ魂がまづ居り。夫より外國の書に渡りまするど。甚だ根强く。惑ふことがなくなるで御座る。どうぞ吾が先生の書物をば志ある人。暇のある人は。學者にならうと思はず。心得にしやう。と云ふ心持で。讀るゝが宜いが。夫も强ては申さず。戎書にも。行有餘力則。以學文。と云へる如く。餘力あらばのことで御座る。吾が師の身まかられまする期に。數百千人ある弟子等に。云ひ貽されたる歌に。「家の業勿怠りそね雅び士の。歌は詠むとも書は讀むとも。」と詠おかれましたが。家の業と云ふは。各々お互ひ夫々に。仕來つてある家業のこと。雅士と云は。是では。古の道を學ぶ人をさして。言れたもので。一首の意は。古への道を學ぶ雅士の輩は。古への道を學んで。歌を詠み書物を讀は。いと〳〵宜しきことなれども。其の歌讀むことや。書讀むことにばかりかゝらひ泥んで。かんじんなる。家の業はひを怠るな。夫では却て。道に違ふことぢやぞよ。と云の意で御座る。此の歌を。末期に書遺されたること。先師の深き心有て致されたことで。何に付ても。人は家業が大切で御座る。拙者も今は。學問を委くせんと。書物を弘くよむが。家業である故。出精いたしますが。各々も夫夫に。家業を第一に出精いたさるゝが。親のしつけを守るので。やがて人の道。孝の道で有りますから。家業を怠りなきやうに有たいもので御座る。さて是は。初入の方へ。序に申しておきますが。みくにと申すは。取も直さず。御國と申すことで。則ち吾が此の御國のことで御座る。此をなぜに。おんくにと云ふぞなれば。こりや天皇。すなはち禁裡樣の御國

で。夫故尊んでかやう申すが。本當のことで御座る。また世間の人の常に云ふ言に。日本でどうしてかうして。或は日本人が。どうしたのかうしたの。と云ふことを申すが。然云べきものではない。其訣を。只今委く申したいが。其の說長くなる故に。是はまた序のときに申しませう。まづ以來は。拙者がみくにと申たならば。此の皇國のことぢや。と心得さへすれば宜しいで御座る。

○序ぢやに依て申すが。今の世の儒生輩の學風も。大かたは孔子の意に背くことのみで。實に歎息の至りで御座る。其は本とし學ぶべき皇國の學びをせず。漢籍のみを學て居るが。學問は何の爲にすることゝ心得たるか。都て學問の道は。譬へ外國のことを學ぶにも致せ。その學ぶ主意は。其の善事を取て。此の御國の御用にせんとて。學ぶことぢやに依て。まづ御國のことを本とし學んで。さて外國の學びに及ぶが順道で御座る。然るを。俗の漢學者流を見通すに。我か國の事を問れても。知らずと云て恥と思はず。我國のことを問へば。知らぬことまで。知た貌に申すで御座る。彼卑き口ずさびにも。「虎のなく聲をきかれて儒者こまり」。また「魯の國の僉議する間に腰かゞみ。」とも申したは。儒者の此癖を詰つたもので御座る。さる輩の。もし事有て君命を蒙り。戎人と應對すること有て。彼れより皇國のことを問ふた時に。吾は此の國のことは知らず。其方の國のこと耳。學んで居ると申すだらうが。其の戎人。もし心あらば。いや吾が國のことは。其許に聞まではなく。自國のこと故。能く知て居るが。然るにても。汝は。己が國の事を知らんで。夫て學者と云はれやうか。そんな物知が有るものかと。手を拍て笑ひませう。是が即ち。君命を辱しむるの道理で御座る。孔子も。己れを行ふに恥あり。四方に使して。君命を辱しめざるを。士と云べし。と申したではありませんか。また然やうの輩に。何で吾か皇國のことを學ばぬのだ。と尋ぬれば。假名文のみが多いから。俗ぢやなどゝ申すが。是が却て俗意で御座る。都て戎籍のみ讀む者は。黃口乳臭の小兒輩に至る迄。我が皇國の御書を讀み。我が皇國の事を學ぶなどをば。俗ぢやと申すが。然云ふ心を察するに。御國文は。兒女子輩も目に馴て。珍らしげなく。漢文の男文字。

見ぬ諸越の物語は。愚夫兒女子の耳を驚かすを悦ぶ。俗意に根ざして。露ばかりも。眞の道を尋ねんなどの。志なき處より起つたことで御座る。さる輩に。その俗ぢやと卑むる。御國文を讀するに。文義を解し得ざるは元より。宇伊のみを云て。讀むこと能はず。實に笑止千萬なるもので。果は假名文は讀めず。解らずと云て。まじ〱として居るが。拙者が心には。物學びすると云ひつゝ。己が國風の書を。讀めぬなど申すは。此上もなき恥辱と思ふが。彼の輩は。恥を知らねば。恥とも思はぬ趣なれども。是れ孔子の意にあらず。孔子もし。皇國の人に生れたならば。俗儒生輩がする如く。此の御國の學びを心とせず。魯の國齊の國の穿鑿する間に。腰のかゞむやうな。迂遠なることにのみ。生涯を送りませうや。時務に預る。此御國の學を本として。外國の事は。羽翼に學び申すべきは。云までも無い事と思はれまする。其故は。吾學二殷禮一有二宋存一焉。吾學二周禮一今用レ之。吾從レ周と云てあるが。心を公平にして。熟く考へらるゝが宜いて御座る。尤も赤縣にも。右やうの學者が多く有て。夫れは彼の國人にも。儒生俗士。豈知二時務一乎。知二時務一者在二俊傑一と云てある。赤縣人の。其國籍を學ぶをすら。時務を知らざるをば。心ある者は。斯く笑てある。況て御國人にして。御國のことを專とすべき。時務を知らず。漢學のみ致すをば。何と申しませう。又時務を知らざるの。迂遠のみならず。御國の古へ學を能くせんでは。吾が本祖の。出身を知るべき由なく。是れ以て學問の本意でない。夫は或書にも。禮記に。君子論二撰其先祖之美一而明二著之後世一者也。云々。其先祖無レ美而稱レ之。是誣也。有レ善而弗レ知不明也。知而弗レ傳不仁也。此三者。君子之所レ恥也。といふて有るではないか。儒者は。儒書をよむを業と爲ながら。その書にも。かゝる語どものあるを。心とゞめざるは。訝しきことで御座る。斯やうのこと。儒者等には常おほく有るが。君子之所レ恥也。とも知らざるは。憫む可きことで御座る。また物あれば此に則あり。國あればこゝに法あることぢやが。此の皇國の學びをせぬ故。大かた儒者は。國禁を知らぬもので御座る。儒はかの曲禮に。入レ竟而問レ禁。入レ國而問レ俗。と云へるにもかなはず。孔子の謂ゆる。君子の儒は。

豈かくの如くならんや。然れば。學問に志したらんに。まづ早く。律令格式の御書を拜讀して。御國法を知るが。肝要の事ぢやが。然しも學ばぬ故。一番へば令の御定めは。赤縣國をも。蕃國の例に置れて。其の使人をも。蕃客とある上は。必ずその御令に從ふべきことは。勿論のことなるに。彼の國を中華と云ひ。其國人を。華人など。云ひもし書も致すは。相濟ざることぢや。彼を華と云へば。即ち此の皇大御國を。夷狄にするので。違令の罪なるとはしらず。斯く本を務むる學問に疎くて。我學するも。皇國の御用にせんとて。學ぶと云ふ趣意を失ひ。頻りに我贔負を致すが。何と彼れ等は。愚癡なものでは有ませんか。是に付て淺見安正の論があるが。至極尤の説ぢやに依て。序だから申すが。夫は「中國夷狄の名。儒書にあり來ること久し。夫れ故我が國に在て。儒書盛に行はれ。夫を讀ほどの儒者どもが。唐の書物に。日本をも夷狄と云ひ置たるを見て。とぼけた學者が。あら口をしや恥かしや。我れは夷狄に生れたげなとて。我れと作り病をして嘆くが。扨も淺ましき見識ぞ。我が生れた國ほど。大事の中國が何處に

有うぞ。國が小くと。何が違はうぞ。同じ日月を。唐人の差圖を受もせずに。戴て居る國に。唐人が。夷狄と書て置た程にとて。もはや亢ぬやうに覺えて居るは。人に唾を懸られて。得拭はずに。泣て居ると同じことぞ。夫でも聖人も。夷狄と云たものをと云はうけれども。夫は唐の聖人は。唐からは。然云ふはず。日本の聖人は。また此方を中國にして。彼方を夷狄と云ふはずぞ。夫では硏あふと云ふけれども。そこが義理と云ものぞ。大義を知らぬ者は。そこで迷ひ安いこと。人にも親があり。我にも親がある。人の親の頭ははるとも。我が親の頭は。はられぬやうにするが。子たる者の義理ぞ。すぐに其。あちの親と云ふ親の子も。また面々に。我が親の頭をば。はらせぬやうに思ふ。是がすれあふやうなれども。夫で義理は立たものぞ。夫でも日本は。小國ぢやと云ふ。夫ならば。身代の宜いもの〳〵親を見て。手前より輕き身代の親ならば。役にたゝぬ親父よとて。何處ぞへ捨やうか。是一つで。合點のいくことぞ。我國は。天地開闢より以來。餘所の國の蔭にて。立たる國にてはなく。神代以來。正統に少しも紛れ

なし。唐の書を讀でなじめば。どこともなく。唐人形氣になッて。日本は旅屋のやうに覺えて居る。古今第一の僻者。我國の固より天地と共に生じ。他國を待ことなき體を知らざる。甚誤り也。我國。天地始まつて以來。正統つゞき。萬世君臣の大綱變ぜざること。是れ三綱の大なるものにして。他國の及ばざる所にあらずや。其外武毅丈夫にて。廉直正直の風。天性に根ざす。是れ我が國の勝れたる所也。道を學ぶ者は。實理當然を學ぶなり。我國にて。春秋の道を知れば。我國が即ち主なり。他國をば客と見る。是れ即ち孔子の旨なり。夫を知らずに。唐の書を讀むから。唐贔負に成て。とかく唐から眺める。日本のなりにうつり覺えて。とかく夷狄々々と。あちへつられる合點ばかりするは。全く孔子春秋の旨と。うらはらなり。孔子も日本に生れなば。日本なりに。春秋の旨は立つはずなり。是則。よく春秋を學び得たると云ふものなり。今春秋を讀で。日本を夷狄と云は。春秋の。儒者をそこなふには非ずして。能く春秋をよまぬ者の。春秋をそこなふ也。或人云。然らばあすが日。唐土より。堯舜文武のやうな人が來て。唐へ從へと云はゞいかゞ。曰く是は云ふに及ばざることなり。山崎先生かつて物語りに。唐より日本を從へんとせば軍ならば。堯舜文武が大將にて來るとも。石火矢にて。打崩すが大義なり。禮儀德化を以て從へんとするとも。臣下とならぬが。是れ春秋の道なり。我が天下の道なり。と云はれたり。甚だ明かなることなりと。是は靖獻遺言の口義。と云ふものに云てあるが。扨々殊勝なことで御座る。徂徠や太宰は。まさにかうは有うか。云はうか。既に徂徠などは。太宰が師匠ぢやが。孔子の肖像へ贊をして。日本國夷人。物茂卿。拜手稽首敬題。と書きましたが。なんと之が。孔子の心にかなはうか。あゝあゝ孔子は。さこそ〳〵泉下に於て。眉をひそめ。貌をそむけて居る事で有ませう。自分を夷人にすれば。尊さや。是の皇大御國を。夷國と云のぢやが。御國を夷狄とすれば。即ち恐ながら。大朝廷をも。憚り奉らぬので御座る。何と儒者は。道を知らず。とぼけたものでは有ませんか。此心では。淺見や山崎が學びの筋と。表裏て。もしや戎人どもが。負氣なくも。皇國へ對し奉つて。生ごしやくなことでも

するときは。導きでもしやうか。と思はれまする。おやに依て。御國忠に志しある人々は。儒者には心を許さぬやうに致したい。何と不安心なものでは有ませんか。

○さてまた世の生儒者等。此美しき皇國語をば用はず。とかく戎語で。物云ひたがる事ぢやか。是も先師本居先生の。漢字三音考と云ふ書を著はして。夫に具に論ひ置れましたが。實に鳥獸の音韻に同じことで御座る。夫は諸越の人の物言ひは。先づ第一に。鼻にかゝる音が多く。殊に御國などゝ違て。彼の國は。字音が。却て言じやに依て。其の意味の。細に訣りそうな處を。却て甚だ不便理なことで此の事は。長崎聞見錄。と云ふ書にも記して有ますが。吾が御國の言よりは。大きに用が便ぜぬて御座る。夫は長崎に來て居る唐人どもが。應對いたすに。仕形をするて御座る。其の仕形を交へんでは。通じがたいことて御座る。そこで唐人どもが。長崎へ來て。かの御役所で御用談を便ぜらるゝに。如何に入組んだる評議をするにも。閑靜にして。諸事速に事の便ずるを見聞して。大きに感じて。我が國朝廷に於て。搢紳家政事を命令するにさへも。言語に手まね足まねを相接へて。靜ならず。況て理論を決斷いたす時などは。倍々噪がしく。漸々の事て。其事が解る所を。貴國の御役人中が。言語さまを見るに。諸事しづかで。斯やうに。すら〳〵と便ずると云は。感ずるに堪たることぢやと。きつく感心すると云ことで御座る。但し夫も。正直な唐人どもは。かやうに感じも致すが。とかく唐人と云ものは。貪吝みなもので。自分の國の不勝手なることは。語らぬもので。譬へば。彼の先夜も申たる如く。無性で湯を用はず。ただ手拭をぬらして。ざッと拭ておくぐらゐの事故。虱だらけに成て居るが。夫でもその穢いことを。此方で哂へば。日本は夷狄の國ぢやに依て。清淨を好むの癖がある。などゝ云て居る。大かたこんな訣で御座る。ぢやに依て。下々の唐人どもに至つては。入りくんだ事でも談ずるときは。實に騷々しくて。彼ぴイん〳〵。ぱアん〳〵を喧ましく云のぢやから。とんと鴃や剖葦の囀るやうで。夫も解らぬと。立て摑合ひなども致すさうで御座る。如何にも古くより戎と云の冠辭に。さへづるや。とかけて云たは。尤

なことで御座る。偖またオランダなどの言語は。と
かく。舌と顎に觸て出る音が多くて。譬へば。其云ひ
ざまが。ウエッ。フエ。ルエ。とか。ナチウ。リユ。
と云たやうに。をかしく。くもり曲つて。穢らしい。
其外の萬國も。みな是に準へて知るが宜で御座る。
夫が上に。言語の體用本末をとり違へて。言語が逆
で御座る。夫は譬へば。大學を讀むのに。國を治め。
天下を平かにすと訓むは。あれは御國の物言ひざま
に。かへり點を付て讀むのぢやが。赤縣では。治國
平天下と云で御座る。その治國と云が。國を治むる
と云ことぢやに依て。國と云ふことが。主なり體な
りで。治むるは。客なり用なりで御座る。然れば御
國の訓の如く。其主とあり體とある。國と云ことを
先に云て。治むると云ことを後にして。國を治むる
と云のが。實のことで御座る。夫を赤縣のやうに。
治國と云ては。言の本末の違ふので。丁ど常陸邊り
の者が。水を汲て與ろと云ことを。汲て與せんせう
水を。と云やうなもので御座る。是らが御國の中な
がら。もの言が逆で御座る。外國の言語。盡く此の
類ひで御座る。尤も御國の内でも。國に依て。物言ひ
ざまが。奥羽の者は鼻にかゝつて。且。しとすを取り違
へて。からすをからしと云ひ。苛苛をからしと云かと
思へば。是は結句からすと云で御座る。また上總者
は。都てかきくけこの辭を。皆あいうえおと云ふ。
夫は譬へば。坂と云をさゐと云ひ。崎と云べきをさ
いと云ひ。酒と云べきをさえと云ふ。其れは前の酒
屋で酒飲む可い。と云べきを。さいのさあ屋でさえ
呑むべい。と云で御座る。かやうに國々で。少か訛り
は有けれども。概して。外國人等の言語とは。同じ
日にも云へぬ程正しいて御座る。是ぢやに依て。外
國の語は。言語の體用本末を誤つて。言靈の妙用に
應はず。活用に疎いて御座る。其の戎語の。字音こ
とばが入り交つて以來。御國の語が。大きに惡くな
つて。今は大かたの人が。戎語やら。御國語やら。
解らぬやうに成て。結句その戎語を。立派な事のや
うに。心得て居る人さへあるで御座る。夫は。忘れ
ましたと云べきことをも。「失念と云へば立派な物忘
れ。」と云たる如く。字音で云て御座る。但し右の如
く。外蕃の言語の。國毎に猥りがはしく違ふことは。
然る由有て。神の御心と。かく御定なされたること

て有ませう。さて此大皇國は。神の御國。則ち地球の都たる御國ぢやに依て。神隨なる。大道の具はつてあるを。外蕃にて。道ぢやと立たるものは。悉く人作て有から。一向に行はれず。我が天地自然の大道とは。實に雲泥の相違で御座る。然るを古き俗歌に。「別登る麓の道は多けれど。同じ雲居の月をみる哉」と云歌や。また。「雨霰雪や氷と隔つれど。解れば同じ谷川の水。と云歌が有て。是を俗の神道者や。道學者。心學者ぐらゐの徒が。何ぞと云と引歌にして。神道も。佛道も。儒道も。皆落る處は一つに歸して。世を治め。人を善道に導くの敎なり。と頻く云立て。是を聞く人も。皆然ることよ。と思つて居ることとなるが。いや是は。甚の心得違ひのことどて。何して此の三道が。一つ意に落ようぞ。下馱に燒味噌。御月樣に泥龜も。皆同じことゝ云よりは。もつと相違な事で御座る。是はかの。解ちらす徒が。其の道々の片端ばかりをかぢりかけて。その本意を知らず。大概こんなもので有うと。押つけ推量に事をきめて。人を惑はすので御座る。但し斯ばかり云ては。その違つてゐるは何處ぢやと。合點の行かぬ人が有うから。其の差別をあら〱云はうが。まづ神の道と。儒道との差別を云はゞ。神の道の本意正實のことは。是まで段々演說致したる通りの訣故。皇國の天子樣は。最も尊く。此の地球の大君に御坐て。天地と共に動きなき。御皇統におはすることを辨へて。一向に畏み奉り。厚く古の傳へを守りて。神祇を尊び。大倭心の雄武を旨とし。且君を敬ひ。傳き仕へて。譬へば君に君たらざる行ひ有とも。臣として其心を辟易さず。身を抛て忠義を盡し。臣は地の天を戴て。其位を變ぜぬ如く。いつまでも臣となり君は天の地を覆ふて。其位を替ざる如く。いつ迄も君とある。こゝらが道の大本にて。動かぬ處で御座る。さて生れ得たる眞心の儘に。親ある間は。其に仕へて孝を盡し。妻子を憐み。其の程々に。子孫の繁榮を願ひ。先祖の祭祀を。絕さぬやうにと勤むるが。皇大御國の神の道ぢやが。儒佛の道の本意は。是とは。相違のことで。其委き訣は。儒道佛道の大意に。記し置たる通り。別に演說致す故。今は畧々申すが。儒道の本意は。先第一に。道の大本たる。君と臣との道立ず。三代相恩の主どころでは無く。

假令十代二十代。厚恩を受たるも。悪き行あるときは。彼の殷の湯王や。周の武王が如き。强き者討て出で。其君主を追伐し。亦は殺して其位を簒ひ。己れ國主となりては。また己か悪行を蔽はん爲に。天命ぢやの。革命の時の至つたのぢやと。へらず口の古事付を云て。世を欺き。只管に古主を慕て。其亡びたる後迄も。其に忠義を存ずる者をば。頑民などゝ名を付て。不具者の如く云ひなし。亦或は。其の國主たる者が。柔弱でもあると。其の臣たる者。无理に押掠めて。位を禪らせ彼の天命ごかしに。古事つけて引たくる。諸越の國風が。世々斯の如く。相殺し相奪つて。定まりたる國主とても无き國で御座る。何と道の大本たる。君臣の道が。立たず。君君たらず。臣臣たらざるの道を。道とすることぢやが。何と是が。御國の君君たり。臣臣たりて。無窮に動かぬ。大本の立てをる大道と。同じ年にも云へやうか。善悪正邪論は无いで御座る。扨また佛道の本意は。此世を。穢土火宅と云て。厭ひ棄て。君臣の道をも取らず。親妻子の愛情を忌嫌ひ。其家を出て山に入り。樹の下や。石の上を住所として。ひもじくなれば。乞食をして食ひ。衣服は。人の捨たる汚れつぎや。古襌を拾つて服て。死ぬときも所を撰ばず。野ても山ても。のたれ死なりとして。其屍も。彼の一休和尚の歌に。「我からだ燒と埋もと野に捨ちよと。痩たる犬の腹を肥そと」。と云たる通りに。命や體にさへ。執著せぬと云が。佛道の本意ぢやが。何と是が。我神の御道の。君臣の道を重んじて。親妻子を慈み。先祖の祭りを絶すまいと。其家を大切にして子孫を繁榮にし。また其の身の程々に。身の出世を悦びて。清きが上にも清きを好む。御國の道と同じ年にも云へやうか。いやさうは云へまい。右の如く相違なる儒佛の道と。我が皇國の神の御路とは。相違なる訣をば知りもせんて。世の神道を說の。道學を說なんど云輩が。生ちよこざいに。右の歌の。落れば同じ谷川の水ぢやの。同じ雲居の月ぢやの。登れば同じ山の頂ぢやのと云て。世の人を惑はすがしやら臭い。知らずは知らぬ樣にだまつて居ればよい。實に是が一ッ事だと云ならば。下駄も燒味噌も。御月樣も泥龜も。同じものぢや。と云やうなもので御座る。其ならいつそ。味噌だと云て。屎でも喰へば宜

い。何を云のだか。凝者どもが。外國の諸の道々が。彼此御國の道と。似通ふ所の有やうなれども。夫は誠に枝葉ばかりて。其の極意の相違なることは。右に云通り。おき火と氷との違ふやうで御座る。依て篤胤が。彼の別登る麓の道は多けれど。同じ雲居の月を見る哉。と云歌の意の裏を云うならば。斯て御座る「麓なる道の衢の多かれど。月見る山の道は一と道。」斯の如く。眞の道は。唯一筋で。我說く古道より外には。誠のものは必ずない。蛇と无い。世の人の。神道や道學なんどを聞て。道を心得たと思ふ處は。殊勝だが。其の道學者や。神道者どもが。泥龜や龜の子をとらまへて。御月樣だと云に欺かれて外國の道々を。眞の道と思つて居るのが。氣の毒なることで御座る。世の道好な人が。道だと思つて。あられもない。橫さまごとに。はまつて居る處は。丁度こんなもので。此方の目から見ると。酒だと思つて。泥水を呑て。うまいと云て。舌打するやうな形に見える道好が。世に多いで御座る。此の意を。また歌に云はゞ。斯も有うか。「月見んとたどる山路を踏違へ。非ぬを其と惑ふ世の人」。でも有ませう。

扨また一つ。世の學者どもが。神儒佛の三道を。落れば同じ谷川の水で。極意は一つだと。あやかしを云て弘めるのは。文旨ばかりでも无い。夫は其道々の正義を知らぬのみならず。其の底の心を探り見れば。穢い心が有に依て。こんなあやかしを云訣も有るで御座る。其の穢い心と云は。今の世の中一般に儒道やら。佛道やら行はれて。世の人各々。夫を信じて居るに依て。夫を惡いと云たら。聞人が腹を立て。我が說く道を。一向に聞は致すまい。夫では口の干上る道理かと。前後を考へ。先の信ずる道の枝葉ばかりを。ちよこ／＼と見付出して。大きな聲して。事々しく是を言ひたて。其の極意の處は。隨分宜いと云やうに說なして。聞人の氣をそらさぬやうにと。世の人心に衒ふ氣が有る故に。此の歌どもを引て。神道も。儒道も佛道も。其枝葉こそ違へども夫は別登る麓の道の多きやうなるもの。また雨霰。雪や氷と隔つるやうなもので。約まる處は。勸善懲惡の敎へで。神道も。佛道も。儒道も。皆人を善道に導くことと故。惡くはないと云なして。彼方へもべたり。此方へもべたりの。內股膏藥に說つけて。何

方からも。物貰はんとする。汚き仕方で御座るて底にはこんな。汚き心を蓄へ居りながら。道を說とは。片腹痛いで御座る。其の中に。道學者や。心學者なんどの輩は。外國ぶりの敎ごとを本として。說を爲すもの故。是は論の限りではないが。神道を說とて。人集する。俗の謂ゆる神道者どもが。斯やうのあやかしを云ては。相濟ざるもので御座る。其故は。此輩神道者と名告りて。高座に登り。鈴を振り立。負氣なくも。畏くも。皇大御國の道を說弘め。神の御德の。尊く坐ます謂をも。人に諭さむと騷ぎながら。斯有る汚き心を以て。愚人の氣に入り。物貰はむと衒ふなんどは。こりや爲まじきことと。また有まじきことで御座る。夫は。世の人も能く云ふ語ぢやが。忠言は耳に逆ひ。良藥は。口に苦き譬への如く。世の人が。外國ざまの横さま說に。首たけはまッて居ること故。どうで眞のことは聞人も少く。此方の云ふ眞の說が。結句耳に障つて。腹を立もしやうし。又其のはまりて居る處は。丁ど勞症病のやうなるもの故。云はゞ難治の病だから。眞の道の良藥を與る時は。酸の甘いの。苦いのと小言を云て。受つけぬ族も有もので御座る。假令そんな族が。受つけまいと腹を立うと。貌をしかめやうと。そんなことに心遣ひをして。眞の道を說れるものではない。唯一筋に。眞の道を云さとし。邪の道の非事を。有の儘に云聞して。夫で人が腹を立て。受つけまいが。そりや云はゞ。先が曲で居るので。難治の症なれば。仕方がない。そんな人は夫にして。能く聞受る眞の人を。一人なりとも。とツくりと諭すがよいて御座る。とかく道を說き。道を學ぶ者は。人の信ずる信ぜぬに。少しも心を殘さず。假令。一人も信じてが有まいとまゝよ。獨立獨行と云て。一人で操を立て。一人で眞の道を學ぶ。是を漢言で云はゞ。眞の豪傑とも。英雄とも。云ひ。また大倭魂とも云で御座る。何と夫を。誰も彼も信ずるやうに。をかしな理窟を附て。說なし說曲ると云は。そりや人の枉つて居るを。直くしやうとて。古の道を說うとする人の。己れからして枉ると云もので御座る。是は唐人すら。己を枉て。人を直くすること能はずと云て。戒めたことで御座る。中々神の道を說く人などの。有まじきことだと云は。此の訣で御座る。俗の神道者も。神の道

を説くとて。嗅ぐ處は殊勝なれども。實は物欲いと云。穢き心が有る故に。神の道を借て。口過ぎにするの勸化言で。是は僧が。佛を賣物にして。方便を云と。何も替りは无い。其僧ですら。見識の立たる輩は。今の神道者等のやうに。內股膏藥に。人を勸めはせぬ。夫は親鸞など。己が宗旨を。一心一向に信じさせて。脇ひら見せまいと宗旨を立て。亦日蓮なども。念佛無間。禪天魔。眞言亡國。律國賊と立て。諸宗を屎の如くに云こなし。また己が宗旨に尊ぶ佛の外は。皆邪神。邪佛だなどゝ云て。この親鸞。日蓮の輩は。夫が爲に。島へ流されたり。又は首の座に直されても。びくともせぬ。其立たる筋を變ぜず。とう／＼意地を張て張り通し。邪ながらも。今の世の如く押弘めたて御座る。物部徂徠。と云ふ儒者の書たる物に。此のことを云て。坊主でさへ。其道の爲には。身命を惜まず。説つけたが。吾儒道を。其如く身を捨て。弘めむとしたる儒者が无い。と云て嘆いて置たが。是は徂徠が儒者ぢやに依て。その儒道に。身を入れて弘める者の无きことを。嘆きたるが。此方は。古道を說く人。また神道者など云輩に。彼の僧等のやうに。氣性を突立て。獨立獨行に。弘めやうとする人の无きことを。常に悲しく思つて居ることとて御座る。

○偖また此神道者が云には。猪や豚などの類ひ。四足の物を食ても。穢れることなく。亦女なども。月水の穢れなどを忌もすれど。是れ以て構ひなく。神參りしても。苦しくないことぢやと云て。夫に付ては。天照大御神の御事をも。只今申すにも申されぬ程の。惡言を云ことぢやが。定めて彼の奴原が云ふ所を。聞れたる衆は覺えても居られませうが。其云心を得と考へて見ると。皆世の愚人の氣に應ずるやうにとて。申す事で。實は物欲しさに斯く云ので御座る。夫故。乞食法を行ふ神道者と云ので。是も甚だ過言のやうに。思はるゝ人も有ませうが。篤胤が心を放つて申すこと故據る處无ては申さぬ。夫はまづ彼れ等。鈴振立て六根清淨の文などを。幾遍も操返し誦などが。皆法師の所業。金剛鈴を振り。佛經を幾遍も誦するなどを。見習つて致すこととて。且つ何くれと。當らぬ神號を書散したる札などを。賣てものを取り。はた神供米とか名を付て。謂ゆる佛餉

袋を授けて。聽衆から米をもらひ。何か致すが。かかることは。御國の正しき古道には。嘗て无こととて。皆法師の乞食する法を見習つてすることとて御座る。但しかやうの業を致す者。古くもちら／＼有たることで。其等をば。乞食のあしらひにして。既に今を去ること九百年前に。源順朝臣のしるされたる和名抄。これは學問する者の。常に傍を放たれぬ書で有ますが。其術藝篇と云ふに。乞盗の部と云を立られて。其の處にかやうの徒を出して置れたで御座る。乞盗とは。乞食と盗人と云事で。何と彼れ等口を極めて。佛法をば誹りながら。其の佛道の乞食法を行つて物貰ひ。また佛道の所爲。及び佛語をも盗んで作りたる。六根淸淨の文など云を讀立るから。如何に盗人で有まいか。乞食で有まいか。斯て夫らが爲ことは。悉く佛法により。夫で命を繫て居ながら。恩を得て恩を知らず。恩を得たる佛道をば。づぶろく。腰抜けよい／＼などゝ。聲をはかりに詈るが。是が彼の。盗人たけ／＼しいと云もので。畜生にも劣て。恩知らずで御座る。彼れ等斯やうに云はれて。口惜くは。一々其佛法から移つたることゞもをさして云が。夫を殘らず。止めてしまつたならば。不便や口が干上りませう。僧より。己がづぶろく。腰ぬけ。よい／＼ぢや。實の處は。僧どもより。あのやうな奴原が。十倍勝つて憎むべきもので御座る。なぜと云に。出家は憎いながらも。己が持前の佛法を賣て。口を糊するが。彼れ等は神道者と名告て。出家の上まへを取り。蔭富では无くて。蔭佛法を賣るが憎いで御座る。中には然云はずともなこと。と思はれる人も有ませうが。赤縣の孔子と云物識も。似て非なる物を惡むと云て。然るものをば。きつく惡むだもので御座る。彼れ等神道者と名告り。神道を說くと云て。人集め致し。其の懸札にも。神祇道の御家の御稱號を記し。御門人。又は學士などゝ記しておくから。世の物知らぬ人は。實に神祇道と云ものは。彼れ等が云通りのものぢや。と心得るから。こりやどうしても。辨じねばならず。惡まねばならぬ謂で御座る。彼れ等が云こと。實は千に一つも。眞のことは有ませぬから。必共に取上ぬがよい。何を知るもので御座る。夫はをりふし。國常立の尊などゝ。神の御名を申し出るばかり。夫も尤々しげに聞ゆる

ことゞもは。背俗の神道學者等が赤縣の說を附會して云たる。陰陽五行の取添へ。又は氣化。心化。造化など云ふ生さかしらに。心法の說で作つたる。高天の原と云は。則胸三寸のことて。心の異名ぢや。ぐらゐのことて。取統て屁の如き說だが。夫も生かぢりに聞はつッて。云ので。是らの外は。都て豆藏。乞食の云ことを能く聞覺え。夫に世に有る俗事の穴を探して。夫を都合能く繼合せ。知りもせぬ。佛法のことを。しやれまじくらに。詈るまでのことで。一つぱも。誠のことは云はぬで御座る。云はぬと云へば。知て居ても云はぬげに。結構らしく聞えますが。實に神の道のことは。少しも知らぬで御座る。知らぬが故に。いッち肝心のことを。右の如く驀何を云ので。只々人を可笑しがらせて。一人も多く寄ることを。工夫したもので。その口合と。晒落へ云落して來やうとて。廻り遠く。引つけ云まはして。每夜同じことばかりを云て居る。其の替りには。世間の穴をば。能探し覺えたもので。遊女場の訣。博奕打の隱語。または街道筋の宿次でも早言に云はせやうならば。夫はきついもので御座る。夫が面白い

とて。愚な人は。したゝか集て聞のだが。是れ等のことを。伊勢貞丈先生は。深く憤つて。其の書れたものに。世に目くら千人。目あき千人と云が。予を以てこれを見れば。目くら千人。目くら千人。とおもはるゝと云はれましたが。ちと劇言のやうなれども。骨折て人の耳を明やうと。深切に眞のことを云ふをば聞受ず。驀何說を云をば。大勢打寄るから。其の深切な心からは。斯も思はれそうなもので御座る。中には神道と云ものは。實にあのやうなものぢや。と心得る人も有るやうすだが。夫は。彼の仰山に。白川殿の御門下ぢやの。藤波家の御門人ぢやのと。記して置からのことで御座る。右の如くの。たわいも无いことばかり云て居れば。夫は座鋪豆藏。と思つて居もすれど。假初にも。神道者と名告りばッち裾はしョりながらにも。烏帽子白張を著て。神道を說とて。人を集めながら。穢れと云ことはないなど云たり。挂卷も畏き禁裡樣を。禁公と云ひ。大御神を。天公と云ひ。八幡宮を八公。などゝ卑しげに云ひ。また或は。神を蔑如に云ひくたし。公の御定めをさへに。云破る事にも及んで。世の人に。惡き

事を云聞すから。聞捨おかれず。斯く云のて御座る。此の方の眞の說をとくと。面白みがないから。左右に人が聞受ず。何かつまらぬことを云て居るには。二階が落たの。ねだが拔たのと云程。人が這入ますが。正しき講釋には聞人が少く。既に近比。赤坂でも。小田原町でも。門人等に說せて見ましたが。とんと聞人が少く。どうかしつこくやッて居たら。說人ばかり殘りそうで有たるゆゑ。仕まはせたほどのことで御座る。處を當所にては。どうしたことか各各能く。この面白くないことを聞かれますが。此方はまたそれが憘しくて。尤も是は。古人の語にも。己を知らざるに屈して。己を知るに伸る。と申たる如く。聞受てくれる人は。此方を知つた人ぢやに依て。さやうの人に。猶も能きことを聞したくなる。是が人情で御座る。さて彼れ等。此所彼所の小祠などを持て。神主と稱し。又高貴の御家の。御門人など〻。御山に名告る訣は。彼奴等も流石に。其の言ことゞもの。卑く拙きことを知て居る故。人の誹り咎むる口を塞がんとて。まづとある小祠の社人分などになり。夫を事々しく。神主など〻云ひ。さて神祇道の御家々の御門人。と云號を犯しはすれど。嘗て以て。一つもあのやうな事を。御傳授有つた訣では有ませぬ。是はかの。僞りを賣んと欲する者は。必ず其の眞を借ると云た如く。然る狂說を賣るに付ては。さも致さんでは幅もなく。且神道と云ふ名目を借ること故。かやうの仕掛をするのだが。夫は只。少かの束脩を獻じて。御門人と云號を。許されて來るのみのことで。あのやうなことを云とは。其御家家にも。一向御存じあらせられぬことで。是らは高貴の御家風の。大らかに坐ます處でも有ませうが。實は甚だ御不穿鑿なことで御座る。伊勢貞丈先生は。斯やうの輩を。神だゝき擲き殺して仕まはずは。眞のことが顯れまい。と書ておかれましたが。彼の孔子も似て非なる物を惡むと云たこと故。是は劇言ながらも。實に尤なる腹立で御座る。是まで段々申す通り。御國は神國ぢやに依て。神の道。すなはち天下の大道で有から。御國人たらん者は。神事を疎畧にしてはすみませぬ。各々こんな乞盜輩の說に迷はず。正しく神祇に仕へ奉るべきことで御座る。さて神にしろ。先祖にしろ。其拜し方は。きッと愼で。

手を二つ拍て。何のこともなく。貴人に御辭儀をする通りに拜するが宜い。夫に付て男の拜は云々。女の拜は云々。延喜式にも。女の神を拜するには。頭地に至らずとあるから。其通り致すがよい。

○さて序ぢやに依て云ひますが。神を拜すると云にも。すこむる心ばへの有ることとて。まづ世の人の心得は。彼せつない時の神頼みとやらで。せつなくなるとやみくもに神を祈り。空腹い時に。物を食て直つたやうな驗がないと。恨だり何かするが。然したものではない。一體かうして居る處が。直に神の御德で。その御德の中にはらまれて居ること故。不斷そのやうに。御前に於て。よまい言などは云はぬもので御座る。たゞ其御德の中に。斯う致して居ることを。有がたく常に忘れず。御禮の心ばへに。御辭儀をする心得に成て居るがよいで御座る。箸から落る滴のはてまでを。祈て驗を賜はることのやうに思つて。不斷神をいぢり。よまいごとを云人は。極めて思ふ通りに行ぬと。勿體なくも。神を恨み奉るやうになるもので御座る。中々以て神の御心と云ものは。測り叵く知り難いもので。驗を賜はるも賜はらぬも。人の自由にならず。また凡人心には。差當つては。惡きことゝぢやと思ふことも。かの翁の歌に。「吉事に凶事いつぎ凶事に。吉事いつぐ世の中の道。と詠れたる通りぢやに依て。その凶しと思ふ事が。直に吉き事の來る元となること故。其の儘になし置るゝやらも知れず。是らはどうも師說の如く。人は譬へば人形の如く。神は人形をつかふ人間の如き謂れぢやに依て。言以て行けば。人のすること成すこと。みな神事故。その御心は量り知られず。また譬へば。一つの無盡に。權兵衛も八兵衛も加入て居る時に。二人が同じやうに。其無盡を得して賜されと願ふ。是らが大きに。神の御こまりあそばす處で。何方に取しても。一方は恨むる訣で御座る。尤も是しきの小事を。せわやく神は。小さき神で。此の天地を御幸ひあそばす神々などへ。持て行て願ふは。甚だ恐れ多きことゝて御座る。左に右に。神に祈りさへすれば。空腹い時に。飯を食たやうな。驗が有るはず。と思ふは宜しくない。其心は元來古への僻どもが。佛法を弘むるに。人が信ぜぬ故。佛を信ずれば。速に驗が有ると云て。云ひ勸め。幻術などで驗を見

せ。夫より段々。人の心が夫にうつり。その惡癖が弘まッて。神も佛の能書を書た。佛經にある通りの驗がなくては。有がたくないことのやうに成たもので御座る。

○さて神祇道の御家と申すは。右申したる。白川殿。藤波殿。其次は。吉田家で。まづ白川殿は。神祇伯王と申し奉つて。其の御先は。花山天皇の皇孫。延信王に坐々て。其以來。大凡八百年。御相續あそばされ。其の御職重きが故に。今に至るまで。王號を賜はることで御座る。また藤波殿は。天兒屋根命の神裔。大中臣氏で。神代以來。相承の神祇道の御家で。其御職に付ては。世に並びなき御名家で。本來は伯職をも勤められたる御家ぢやが。白川家以來は。神祇大副と申して。伯職の御助を勤められ。また往古より。神宮の祭主をも勤めらるゝことで御座る。此御家々にて。朝廷の御神事向。また天下の神社。神官等の御支配を致されたもので御座る。扨今の神官等の勤と云ものは。右に申たる如く。俗神道者風を。とかくに致すことで御座るが。實はあのやうな訣のものではない。都て天下に有ゆる神社は。御國家御守護の御爲に。御鎭座在らせらるゝことだに依て。夫に仕へ奉る神官等は。其神慮を心として。潔白英武を心掛けて。事あるときは。禁中神祇官を。御守護奉るべきことで。假初にも。雌々しく。乞盜風をしては。相濟ぬ訣で御座る。然るに其の風儀の惡く成たる。其本を尋ぬれば。佛法の害は本よりなれど。今の世神祇の長上とか。自稱して居る吉田家が。甚だ以て宜しくない。一體此の家は。神祇ノ權ノ大副と申て。神祇官の。俗に云ふ權の助役で御座る。其本は。兒屋根ノ命より出たる由に申すそうぢやが。御正史には。とんと見當らず。伊豆の國から出たる。卜部平麿と云が子孫て。世々神祇官の下官を勤めて居る内。奸計を以て段々と。天下の神官を過半まで。己が配下のやうに爲て居るが。實を云へば。神官等は。神祇官の人別ぢやものを。彼の家で配下などゝ云ては濟ぬ事で御座る。今の世には彼の家を。神祇道の本家のやうに。心得て居る人もあるが。實は卜部の賤しき家ぢやに依て。聊も神祇道の本義は知らず。夫故に。佛道を以て。神道を建立したもので御座る。然れば門人にも。甚だ如何しき者がある。

夫は彼の家の說に。空海も。親鸞も。弟子ぢやと云ふが。夫は不淨ながらも。平人のこと故に。どうでものことだが。日蓮を弟子にしたは相濟まぬ。この僧は。安房の國小湊の穢多の子で。穢れたる者の限りなるを。弟子にしたは何ごとだ。穢多の子なる證據は。日蓮自身に。書遺したる物がある。佛法はもと乞食なれば。穢多でも非人でも。さして違ひも有まいが。假初にも。神祇道の家ぢやと云ひながら。そんな不淨の限りの者と。師弟に成て濟ませうか。其上に。今も此の末流の僧を。入門させると云ことで。夫は近頃。甲斐の國の。英智院日宣と云に授けたる書付の寫しを。田河利器が。或る方より借出して見せましたが。其趣は。

建長元酉年。示現神敕曰。我者法華經守護三十番神也。仁也有大誓願我甚歡喜之仁者本化上行菩薩。承本門法華經付屬之人也云々。吉田殿四十代。兼益記云。弘長元年二月九日。法華行者日蓮法師入來。依神領武州忍田御厨代官。益行口入去年以來連々通達畢。此人立妙經時節現當法門作書籍。名安國論。顯學無雙之人也云々。神代降臨。三十二神名號事。懇望之間。舊冬注進之件神號。宇訓讀樣爲傳受今日來臨。此事神道行法之祕號也。於凡人輙不相傳之儀也。然此人極一代藏經之才學頗異人之間。不涉思惟令授與件祕訓等畢。兼俱記云。右本朝弘長春。有載日乘蓮之人。一日入予祖家問吾神道答以一義矣。乃至神明而顯妙。妙明顯神。嗚呼神妙二字。爲所說云々。

下文

天兒屋根命。太諄辭正義。直受是也。授與英智院日宣訖。又曰。神道從來精學。可爲神妙者也。

文化五年閏六月五日

神道管領長上卜部朝臣　[印 良連]

呈兼俱卿記云。吾鎮守之外。餘社之參禮首等禁之云々。

右神道相承之事。

開祖上人先蹤。露赤心之誠因茲所被授與如件。

神祇管領長上

月　日　　　　公　文　所　印

とあるで御座る。拙者其の本書を見ぬから。會々誤字も有かも知れぬが。如何にも愚文て。此やうな慕何ごとを。辨ずるまではなけれども。序だから少か云うが。まづ示現神勅とは。何の神が出さしッたか訣らぬが。三十番御と云ことは。御國の天台僧が。妄作したる事で。其說を。日蓮僧が盗んで　月の三十日を。畏くも大御神を始め奉り。神々たち代り代り持分て。法華經を守護するなどゝ。恐多くも。妖言を吐出して。猶其の根を固めんと。彼の家を賴んで。神道傳授を受たと拵へたもので御座る。何に乞盗神道の家ぢやとて。こんな不淨の僧どもを取込んだるは。神樣を愚弄すると云ものぢやが。憎いながらも。佛者の神を蔑し奉るのは。佛者として。暫くさし置くとも。假初にも。神道の家ぢやと云ひながら。神祇を僞はッて宜からうか。大御神をはしめ奉り。神々の殊に御嫌ひあそばす。不淨の限りなる佛經を。何で御守りなさらうぞ。神祇を蔑し奉るは。同じ佛者の內でも。日蓮宗が甚だしいが。まだ其上に甚しく惡むべきは。此の吉田卜部が所行で御座る。

彼家では。何ぞと云と。僞神託を云出すが。甚だ悪むべきことて。弘仁三年の官符にも。若有下百姓輙稱二託宣者上不レ論二男女一隨レ事科決。と有からは。何れにも彼家は。罪科免れぬことで御座る。何と罪を犯しても。物とらんとすることは。是れ乞盗で无て何ぢや。また兼益を四十代としたは。兒屋根命の神孫ぢやとて。僞作したる系圖によつて。書たで有らうが。是以て無證據なる僞りごとぢや。實は平麿十四代と書けば正しいで御座る。また兼倶の記とある。この兼倶は。右兼益から八代の孫ぢやが。彼家世々の內でも。また甚しき妄作神道者で有たから。益々僞りを云て。日蓮宗から謝禮を取た物と見える。またこんな僞りごとを。天兒屋根命の。正義直受とはなにごとぢや。云へば云程。餘り煩くめんどうだから云はぬが。神宮の參拜も成らぬ者等が。神祇の長上などゝは何ごとぢや。不法と云も餘りある云ひ分で御座る。猶委しくは。別に俗神道と。日蓮宗との論辨に說ことだから。こゝには差置ませう。
○扨また一つ。云はねばならぬことがある。其はまづ。近頃阿蘭陀學と云ことがはやッて。其の學を奉

ずる輩は。其國をも。何か結搆らしく云ひ囃すから。其眞面目も少か申ませう。まづ此阿蘭陀人の説に。此地球の大きさを。一と口に一萬何千何百里と云へば。ざッとしたやうだが。是は謂ゆる大數で。何ぼ西洋の人が委く見たり。考へたりしたればとて。手の上へ載て見た。と云でもないから。何處でどうなッて。大きく成てをるか知れぬで御座る。此のオランダと云ふ國は。御國からは。海上まはり廻つて。一萬二千九百餘里。西北に當る國で。其國の廣さが。御國の九州ほど有て。北極地上を放るゝこと。五十七度に當る國ぢやと云ふことで御座る。夫故四季共に。すこむる寒國で。日の出も。御國よりは。二時餘りも遲く。拜み奉ると云ふ國で御座る。扨暦法の立かたも。皇國や赤縣とは違つてをる。夫は皇國や赤縣の暦は。月を表として月の見え初むるを朔日として。滿月を十五日とする處が。オランダの暦法は。日を表として。月を裏にする故に。月の缺初むるも。定日なく。十日頃に初めて月を見。廿日過に滿月を見る。滿月の日も。毎月定まることがない故に。其日の下に。滿月と記して置て御座る。日を表とする

故。毎年十二箇月の日數に。定まりが有て。正月は三十一日。二月は二十八日。三月は三十一日。四月は三十日。五月は三十一日。六月は三十日。七月は三十一日。八月は三十一日。九月は三十日。十月は三十一日。十一月は三十日。十二月は三十一日。都合一年。十二箇月の日數が。三百六十五日で。其內二月の二十八日を四年に一度。二十九日となして。一日の閏で。とんと暦法の違ふ。と云ことは无い訣があることぢや。又一晝夜を。十二時と定めんで。二十四時と定めたる國で御座る。さて御國や赤縣で。月を表として。毎月の日數を。廿九日三十日と立て。隔年と。二年おきに。閏月を置て。夫で度數を合せると。オランダの。日を表として。毎月の日を定めたとは。何れが簡便ぢやと云ふに。實はオランダの定めが。天地の行道時候に能く叶つて。便利は便利ぢやと云ことで御座る。猶こゝらの委き訣は。其道を能く辨へた人に從て問が宜いで御座る。さて其國は。七州に分つてある。セイラムド。グルウネゲ。ウイタラキト。ウルトウント。オウブルイセル。フリイスランド。ホルランド。と云ふ。此のホルラン

ド。と云が。其中國で。御國で云はうならば。山城の國。大和の國と云ふ邊りで御座る。實はこのホルランドと云を。聞違へ訛て。オランダと云ので御座る。その酋長が居る所の名ぢやに依て。弘く七州の總名を。オランダ。と云やうになつたもので御座る。夫は丁ど大和の國は。神武天皇様以來。御代々の天皇の。宮所と遊ばしたる國故。夫を廣く及ぼして。御國を總て。ヤマトと云と同じことで御座る。また彼の國人は。頭に短くちゞれたる赤毛が生て居る故に。赤縣では。紅毛國とも名を付たで御座る。さて右の七州に。長らしき者が四人有て。夫をコンパンヤと云ふ。此四人の酋が心を合せ。銘々に商船を仕出して。大地にあらゆる諸國を經歴り。交易を業とすることで御座る。扨この國は。御國とは。四民の立はが違つて。商人を第一の位に置て。武事を司る者をば。いから卑めて。いッち下と立たもので御座る。またなぜに。商人を第一の位に置と云ふに。右申す通り。彼の國は極寒國で。國の產物が少く。とても萬國をあるいて。交易して。其國用を達する者故。第一と立てをるで御座る。さて萬國へ商船を出す仕方は。右申したる四人のコンパンヤ。即ち首長が指圖を致して。南海の中に有る。ジャガタラと云ふ島へ。代官を出張させ。會所を立て。諸國へ商船を出して。十五年に一度づゝ。其の代官の所から。彼四人の長が所へ。總勘定をすると云ことで御座る。此の代官のことを。オランダ言では。ゼネラルと云ふで御座る。また此ゼネラル。即ち代官の下手代を。カピタンと云ふ。是が船頭となッて乘出すことで御座る。さて御國へ。貢物を持て來まするには ジャガタラを。五月の中節に。南風の吹を見合せて。出帆致して。七月の初めに。長崎へ入船致して。八月九月の間に。荷物を捌て。九月廿日限りに。去年から。逗留して居るカピタンと交代をして。翌年の春。使者役を勤めて。江戸へ參上することで御座る。さて此のオランダ人の。御國へ來り始めは。何の頃からの事で。どう云ふ緣から。起つたことぢやと申すに。其來り始めの故由は。いや甚だ心ちよきことで。赤縣や天竺の。腐り根性の付た輩はいざ知らず。假初にも。此御國に生れたからには。春日大神の御託宣と云物に。人の國より我國。人の親より我親と。御

論しあそばしたと有る如く。御國恩の有がたきことを辨へて。大和魂のある人々は。小踊りして悦び。愉快々々と云はねばならぬことで御座る。抑々彼の國の。御國へ來れる始めは。長崎の町人ながらも。あつぱれ壯士と稱れたる。濱田彌兵衛と云者の働きから事起て。貢物を奉るやうになッたもので御座る。此事は。先頃古道の大意演說の砌り申したから。今は少か云が。是は寛永頃の事で。其頃長崎の代官。末次平藏と云人が。天竺の方へ出されたる交易船へ。このオランダ持の。大灣國の者どもが。不屆を致したに依て。末次氏大きに憤り。右彌兵衛。同弟新藏。また悴の彌左衛門。外四人の豪傑者に差圖して。其罪を糺さん爲に。彼國に遣はしたで御座る。さて此大灣國の王おやとか云て居る。則オランダの代官。ヒイトルモイッと云者を。右の豪傑が。各々刀を拔かざし。取て押た處が。其外の從者等は。逃るもあり。氣絶するもあり。ぴい／＼ぱあ／＼。なちうると云て。城中の騷動は。實に潮の涌が如くで有たと云ことで御座る。爰に彌兵衛は。彼國の語にも達して居たこと故に。大地も響くばかりの大音をあげ。まづ靜り居れ。と叱りつけ。扨しとやかに。彼の不屆の罪を糺した處が。ヒイトルモイッが。誠にふるひ恐れて。侘言を申し。其者どもは。他國へ行て居まするから。歸國次第。重刑に行て。罪を謝しませうが。夫迄の人質に。我が一子を上げ置ませうから。どうぞ我か命は。免して給はれとて。十二歲なる男子を差出し。以後決して貴國の船へ。指ざしも致させまいと。海山かけて誓ひを立る故に。ヒイトルモイッをば差免し。人質の男子を引立て。勇立て。七人は長崎へ歸つたで御座る。其後進物を贈り。彼の末次平藏の船をなぶりたる奴原を。皆首討切て。仕置致したる由を申し越して。右の人質の男子を。返して貰はんが爲に。また代りを遣し。其後は例となッて。カピタンが。人質に交代して。年々貢物を持て參り。今は商船交易の體になつてをるが。本の起りはかくの如くで御座る。さて此彌兵衛は。早死いたして。弟の新藏は。細川侯へ召出されて。武士と成たで御座る。また此の輩の。英雄豪傑なる振まひが。大地にありとある。萬國の取沙汰となッて。何れの國でも。舌を卷て。我が御國の人の。强く猛き

を恐れて居るで御座る。既に彼の輩の働きのことは。かのオランダの國で。萬國の風土を記したる書に。其時の有狀。城中の騷動。及び七人の輩のやうす。濱田彌兵衛が。ヒイトルモイツを捕て。ねぢふせて居る所の圖を。委く書て有て御座る。夫はオランダの書物故。世に少く。ちよツと見ることのならぬものだが。夫を拔出して。萬國新話に記して有で御座る。○序ぢやに依て云ひますが。此の大灣の國は。元たかさごと云た國で。唐人持の國で有た所を。寛永の初め頃に。オランダ人めが責入て。唐人どもを追出して。右の如く諸國へ船を出す。出張所と致して居つたが。この濱田彌兵衛が。騷動を入れたる後も。久しくオランダが持て居たが。其後寛文元年に。彼謂ゆる國姓爺。俗に云ふ和唐内が。其オランダ人どもを追出して。己が住國として。唐と軍を致したて御座る。其後國姓爺が子は。唐へ降參して。今は本の如く。唐の持と成たて御座る。斯てオランダ人は。大灣を。國姓爺に追拂はれて後に。右申たるヂャガタラを。出張所として。交易に渡ることとて御座る。さてオランダ人の容體は。誰も見て知て居られませうが。一體餘國の人よりは。丈高く色が白くて。鼻高く。眼中に白き星がある。凡て人品は輕々しく。能く笑ふもので。怒ることは少く。貌つきに似合ぬ。弱き形の見ゆるもので御座る。さて髭を剃り。爪を切て。唐人等のやうに。穢くはない人物で。衣服は尤も奇麗に。金銀等を飾つたものだが。彼れ等が眼玉の色あひが。實に犬に似てをる。腰より下は長く。足の細やかなる所も。獸に似て。溲尿をするに。片足を擧て致す所も。犬の仕ざまで御座る。其の上脚跟があがツて。地につかぬ故か。履のあとの方へ。木で拵へたる。趺を作て付てある。どう見ても。犬の目つきで御座る。夫故か。陰莖の形も。つゝさきの所は。切そいだやうに成て。とんと犬の物のやうで御座る。と云へば。どうか常談のやうにも思はれませうが。實談で御座る。是はオランダ人ばかりでなく。オロシャ人もさうぢやと云ことで御座る。其事は。先年伊勢の白子の船頭。幸太夫と云ものゝ。オロシャへ渡つた時のことを記したる。記錄の中に。彼の國人の。湯へはいる所を見たれば。鉾がそいだやうで。とんと犬のやうで有たと云ことがあるで御

座る。是に付て。古く寶暦安永あたりの春書帖に。オランダ人の。交合して居る所も書て有て。其陰莖の形もありますが。只今申す如く。鉾がそいだやうて。犬の物の形いたしてをるで御座る。さすれば此の時分は。かゝるはかなき笑繪などでも。餘程心を用ひたものと見えるで御座る。今時の笑繪のやうに。やみくもに大きく。太股よりは。はるかに太く書て。おくやうなことばかりはないで御座る。但し夫にも。少しはおまけも書てある。そのおまけと云は。其の陰毛を。唐草のやうに書て有ますが。是はオランダ人の毛ぢやと云て。唐草のやうでも有まいで御座る。此らが繪そら事なる處だが。今時のやうではないで御座る。扨かの國人は。陰莖の犬に似て居るせいか。犬の如く婬亂なもので。夜中婬事のみして。そのくせ考の深き國故。色々と工夫して。喜悦薬を製へ。女を悦ばして。實に採つける。彼の線香をたきては。女の氣をわるくしたり。臘丸などを塗て。行ふなどの類は。みな彼の國人の始めたもので御座る。よくよく婬亂なことは。仕まッた跡で。養生薬になるとか云て。みな夫を嘗てしまふ者。などもあるそうで

御座る。斯の如く婬亂て。そして酒を好むから。長壽な者はなく。五十歳までも生ると。此方の人の。百歳餘までも。生たやうに心得て居るで御座る。但し彼の國人は。甚だ深く物を考へる國で。何に寄らず。あらゆることの。根から底から穿鑿しつめる。夫故天文地理のことを始め。萬の細工もの。醫療のことなども。萬國最上に委く。慥なことで御座る。夫は先譬へば。病を治しまするに。まづ人の體の常を。能く知て後に。夫に違て居ることは。病ぢやに依て。其の體の常を能く知らねば。病は治することがならぬ。と云處から。人のからだを。腑解と云て。盡く切りこまざき。目は此の訣で見える。耳は此譯て聞える。と云やうに吟味して置て。目や耳の病があると。そこで目はかやう〳〵の訣に成て居る所を。かう見えなくなッたからには。然すれば彼處のあたりへ。斯云さし支へが出來たる故。見えなくなッたのぢや。耳はかう云ふ訣で聞える處が。聞えぬと云は。こゝへこんな差支が出來たのぢや。と云ことを考へて。療治する。又一通り。さやうに療治しても。どうしても直らぬ病をば。其の病人の死だ跡で。ど

う云う訣で。此の病は直らなんだ。と云ことを知らうが爲に。是非腑わけをして見て。其理を極める。夫故かやうの學び方を。究理の學とは云て御座る。右の譯故。體の中のことを。吟味したることなどが。甚だ委しいに依て。今は其說を本とし。猶此方でも。吟味して極めたる說を。取合せて申すで御座る。時にまづ此體と云ふものは。どうして出來た物ぢやと云ことを。是は人とあるものは。誰も〱。能く心得て居べきことで御座る。と云へば知れたことさ。父母の例のしごとで出來たのさと。事もなげに云ひませうが。いや夫は。鼻先の了簡と云もので御座る。なぜと云ふに。夫は父と母との。閨の内のむつびごとて出來るは。知れたことながら。其づッと奥の大本を。よく考へて。委く穿鑿すれば。父母の細工ながらに。父母の細工で出來る。とも云へぬ訣があるで御座る。なぜなれば。そんならなんと。男女申合せて。今夜は是非男の子とか。女の子とか。拵へやうと云て。爲かけて出來ますか。さうは出來まい。男子の欲き所へ。女子が出來ると。忌々しいなどゝ云ふが。夫もきッとできるかと云に。何としてもできぬ時には。女の子でもできない。扨また出來て生れた上で。其子を見れば。いや手足目耳。その外悉く具つて居る。其子を拵へた人等は。然云ふ細工を。しッかりと心に覺え有て。作だかと云へば。覺えはない。此方も子をば四五人も。まづ手作にしたつもりでは居るけれども。眞粉で犬ころを作るやうに。目や鼻を作つた覺えはないが。小刀の一つだに用はんて。夫が著て生れるは。なんとふしぎでは有ませんか。と云と彼の赤縣の陰陽や。五行の說などを聞かぢッた。さかしら人が。いやなに夫は陰陽で左して右して。父母の二五の精。相合したる妙でなどゝ。生ごしやくを云ひますが。そんなら其陰陽五行の道理を極めて。やッて見たがよい。出來はせんさ。是は數百人の聖人が。額を集めて考へてかゝつても。理屈ではいかぬことで御座る。そんなら又。どうして出來ますと云はれませうが。是は實の處は。父母の細工とは云ひながら。高皇產靈。神皇產靈の神。二た柱の神樣の御靈を賜はッて。夫で出來たもので御座る。其の皇產靈の神と申すは。挂卷も畏きことながら。此の天地の。未だ無りし前より。天津御虛

に坐まして。まづ此の天地を御造り遊ばし。其後の神々も。盡く此の二柱の神の御靈に依て。御成あそばし。さて夫より人も何も。此神の御靈に依て。成始めたもので御座る。斯やうの御德がおはします。貴き御神に坐ます故。其の御名を。產靈の神とは申上るが。今はむすぶの神と申す。同じことで御座る。夫はまづ產靈の神の。むすと云ふ語の意は。生ずると云ふ字。また產するとよむ字の意の言で。またむすびの。びは。即ち奇々妙々なる事を申す。神代の言で。この神樣は。何に依らず。御產生しあそばす御德の。奇々妙々なる神に坐す故。產靈の神とは申上たもので御座る。そのむすと云ふ語の意は。今の世にも。むす子むす女。など云ふむすも同じ言で。依て來る所は。產靈の神の。むすと云ふ處から來たことで御座る。珍たきことの限り。世の人も知て居る歌ぢやが。「我が君は千世に八千世に細石の。巖となりて苔の生まで。と云ふ歌がある。此歌に。苔のむすまでとあるは。苔の生ずるまでと云ふことぢやが。是を以て。產靈の神の。むすと云ふ意を知るが宜で御座る。また古歌に。「君見ればむすぶの神ぞ恨めしき。つれなき人を何作りけん。と云ふ歌がある。是らは。殊に。產靈の神樣の御神德に依て。人は出來るものぢや。と云の證據になる歌で御座る。夫は此歌の意は。さて〳〵君は情ない方ぢや。さう情なくさッしやる君を。見る度每に。むすびの神樣が御恨めしうなりまする。其訣は。なぜ此やうに。つれない人を。御造り出しなされたことぢやと。しみじみ思ひまする。と云の意で。是は戀の歌では有るけれども。此時分までは。此の神樣の御德を。世間の人も。よく覺えて居たる故に。かやうな歌も詠だもので御座る。此の訣ぢやに依て。各々御互。釋迦も。孔子も。猫も。杓子も。法然も。弘法も。親鸞も。日蓮も。皆この產靈の神の。奇々妙々なる御靈に依て。父母の爲事とは云ながら。小刀の一つも遣はずに。生れ出たるものなることを。人たる者は。能く辨ふべきことで御座る。さて然らば。其の產靈の神樣が。そりやまた何で。此體を御造りあそばしたものぢやと申すに。其廣大無邊。奇々妙々なる。產靈の御神德に依て。風と火と。水と土との四つを御結びあそばし。夫に魂を添て。この人と云者は。御造

りなされた物で御座る。と申すと。ゑへん此の體が。土と水と。風と火だ。どうしてまたそんなことを云ふ。と云ふ人も有ませうが。夫に相違はないと申す故は。何と各々御互ひの。此呼吸。是は風でなくて。何で有ませう。またこのあたゝかさが。是火で无くて何で有らう。また體のうるほひは。これ水でなくて何で有ませう。さて死して後埋むれば。何に成ます。土にかへるでは无いか。是に於て。とんと爭はれぬ事で御座る。然らばその。風火水土と。四つの物をかやうに。御結びなさるゝは。どうしてと申すに。それこそは。神の御德の。廣大不測。奇々妙々なる所ぢやに依て。人の上からは。測り知られぬ所で。百千の佛や聖人が。うめきすめき。額に皺をよせ。目をむき出して考へても。知れぬ事で御座る。何とその。生れて出たときは。ちよいと。手のひらへ載る位の。小さな體を。何の間に段々かやうに。大きくなさるゝことやら。その大きく成た者も知らず。何と奇妙なことでは无いか。斯やうに神の御德の。有がたきゆゑんを知らず。また尋ねんともせず。云云の事を爲たれば。出來たと覺えた計では。すまぬものて御座る。さて右の如くの訣で。此の體は。風火水土の四つだが。其の魂は。まだどこにどうして居ると云こと。其外解體腑分のことに依て。明らめたる體の訣は。醫道の演說に。委く云ふつもりだから。まづしばらくさしおきまする。

○さて此濱田彌兵衞が。外國に於て。其名を轟したることを申すに。付ては。又同じ頃。尾張人山田仁左衞門が。天竺國に於てのふるまひも。御國の人の。英雄の名を。外國に顯はしたることだに依て。此の始末をも少か申しませう。抑々この山田仁左衞門と云は。尾張の國の出生で。自ら平將軍織田信長公の裔孫ぢや。と云て居たと云事で御座るが。流落て。駿河の府中に來て。知音の町人に便て。いはゆる居候と爲て。十年餘も產業をもせず。また仕官をも好まで居たで御座る。但しすこぶる大志ある男で。兵術を談ることが好で。任俠を好む。そこで其朋輩が異見をする處が。容した貌で。とんと其人となりを改めず。なれども一體心が直實で。才辨も有る者故に。人多く親み交はッたと云ことで御座る。殊に御國も中古より。近く寛永頃までは。諸々異國へ商船

の通路も御差留なく。自由で有たる故に。京。大阪。奈良。堺。長崎などより。思ひ〳〵に唐渡りと云て。天竺などの國々へも交易に行く。其の砌駿府からも。右の如く。商船が唐渡をして。其家が二十家ばかり有たと云ことて御座る。其船どもを。御朱印船と云ふ。夫は官印を賜はッて。渡海致したが故で御座る。處が元和五己未の歳。駿府の商家。瀧佐右衛門。太田次右衛門と云者の。唐渡りをするとき。彼の仁左衛門も。一同に行たいと云ふ。然れども日頃流浪の身て。産業を事とせず。また大胆なる處をも。氣味わるく思つて。聽入ぬて御座る。そこで仁左衛門は。先立て家を出て。長崎へ行て。かの瀧佐右衛門。太田次右衛門が。まづ彼所へ舟を著て。その船よそほひをする處へ出迎て。ひたすら連てくれろと云ふ故。兩人が止ことを得ず。同船に伴て。大宛の國へ行て。交易をなし。夫より歸らんと致すとき。仁左衛門が。我は此土に留りたいと云から。兩人其心に任せて歸つたて御座る。さて仁左衛門は。此所からまた便船に乘て。天竺の内。暹羅と云ふ國へ渡つたて御座る。抑々このシャムロと云ふ國は。赤縣の西南。南天竺の東南に在て。其方に海をうけたる大國で。周廻が御國の里數にして。千里ほどあり。其の酋長の城が。めぐり御國の四里もあると云ふ大國で御座る。殊に天竺の國の内では。第一の强國で。かたはらの國々を多く打從へ。右の如く東南に海をうけたる國故。諸々外國の交易船が夥しく入りこんで。甚だ繁昌の國で御座る。故に此國の酋長が。大きに高ぶッて。その稱號をけしからず長くついて居る。夫を漢語に譯して見れば。皇天より保護するところの。神聖の尊體を以て。威德隆盛にして。征討すれば必勝ち。千百餘の王侯を臣服し。暹羅の大國を治め。福地に都し。金冠の寶位に登り。黄金珠玉の宮殿に坐し。百珍萬寶を擁するの義。ぢやと云ことて御座る。また其妻子も。是に準じて。事々しき號をつけて。日月の共に照し臨むが如く。王と竝び。一切婦女の主にして。天下の母ぢやと云ふ義の號で御座る。（赤縣にて國母と云が如し）さて國風で。次の位をば子に傳へず。段段弟に傳へる定で御座る。また此國は。佛法の本國故か。尤も佛法の盛に行はるゝ國で御座る。扨それへ。御國よりも商を通じて居たが。元和年中から。

寛永の頃まで。大阪の落人ども。外にも浪人どもが。多く商船に乘て。彼所へ行て逗留し。若海賊などの有るときは。武勇を以て追拂ふ故。シャムロ國酋も。是を調法なることに思つて。地を借して。數百軒の町屋が出來。之を日本町と云ふ。永く留る者は。妻妾を持ち。子を産むほどに。當時は。八千人に過たと云ことで御座る。時に彼の仁左衞門も。其中に居て。始めは賣買などのことで。彼の國の官人に近づき。才智の者故。其國の言語に通じ。御國の軍法。古戰の物語りをしたり。また粗赤縣州の書にも通じたもの故。そんなことを語り聞せたる所が。彼の國の官人どもが。段々に親くなッて。終にシャムロ國酋の前へ出て。問ふに隨て。皇國と赤縣のことを。尤もこんな才子だから。僞りも云たらうが。實に響の聲に應ずるが如く語つたる所が。國酋が深く感じて。仁左衞門を擧用ひて。官人として。御國の三千石程に當る地を與て。酋の師として敬ひ。其の內また加增して。二萬石程の主と致したで御座る。そこで仁左衞門は。日本町に居る者等に。皇國に歸る心なく。我が臣とならん者は。召抱へんと云ふに。諸浪人悅んで。臣となる者多く。勇士四十餘人。雜兵百餘人。足輕中間のやうな者。百餘人を抱へて。御國の行列に出立て。我が領國へ入部したる所が。見る人目を驚したと云ふことで御座る。或る時國酋が。仁左衞門に云ふには。予其の方に。日本と漢土の國風をきくに。みな其子に位を傳へる。是は尤のことぢや。然るに吾が國風は。古へより父の子の有ん限りは。弟に禪り。父の子が絕て子に禪るが。是よりは法を改めて。子に禪る事に仕ようと云て。末の弟が一人有たをば。菩提所へ遣て僧となし。また屬國へも。盡く是を觸たて御座る。所が其の屬國の中に。逸比留と云ふ國の長が。是を承引んで背いたで御座る。是は御國の。三四十萬石程にも當る。大國ぢやと云ことで御座る。そこでシャムロ國酋が。大きに怒つて。仁左衞門に云には。吾れ其の方の說を聞て。日本風に。我が子を立て。次の位を繼せんとするに。イッピル國が。命に從はず。相ひ背いたが。是を其方打亡し。其國を領し。猶忠義を盡して。吾が子を守立よと云ひつけたで御座る。仁左衞門其旨を承て。三萬に近き軍兵を引卒して。其內手勢五百餘人をば。

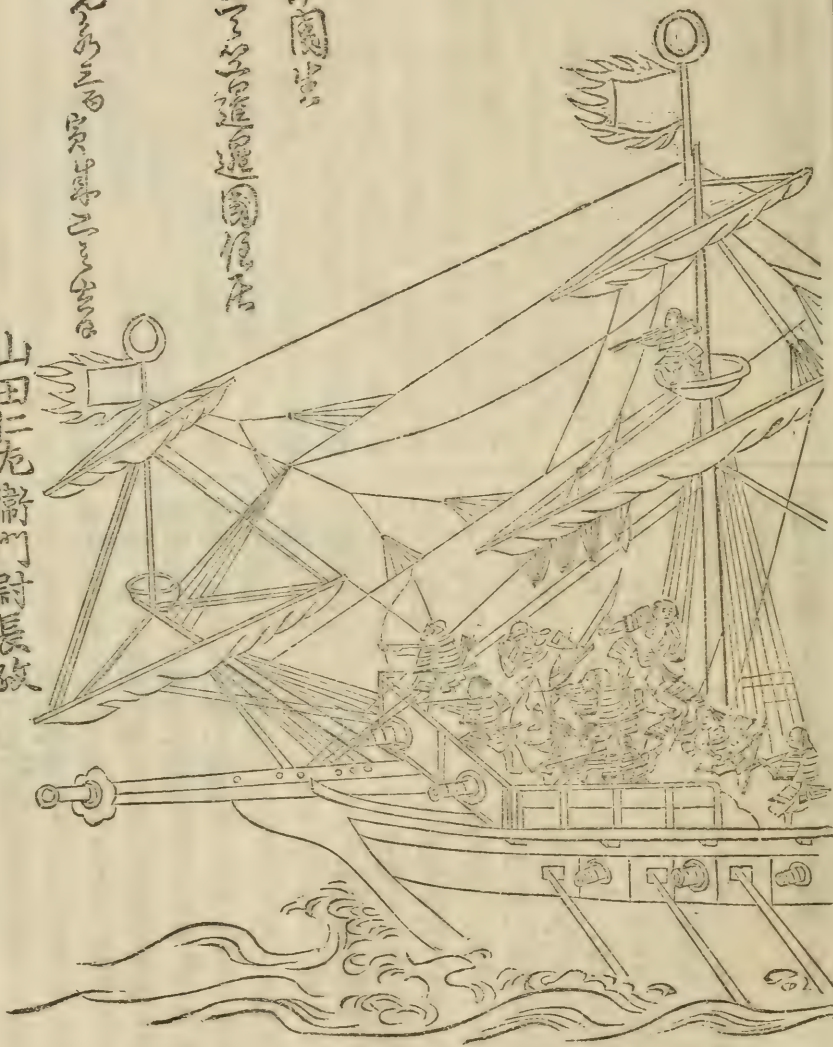
御國風の軍立に。華々しく出立せ。其身は緋威の鎧に。鍬形の兜を著し。大纛の車に乘り。シヤムロ風の音樂を奏じて。イッピル國へ打向ひ。其の率ゐて居る兵は。もと大阪の落人浪人等で。御國の烈しき軍に馴てをること故に。戰ふ毎に打勝て。とう〳〵イッピルの國を亡ぼし。其の城に入て民を撫安じ。其臣大塚十左衛門と云ものを城代として。其の國を能く治めて。山田は手勢二千餘人を。御國の行列に出立せ。預りの兵二萬餘人に。前後を圍はせ。其身緋威の鎧に鍬形打たる。金の兜を著し。大纛の車と云ふに乘て。シヤムロの音樂を奏じて。歸陣致したる所が。見物人山野に充て。胆をつぶしたと云ことで御座る。シヤムロの國酋。其の軍法を逐一きいて。大きに感じ悦て。仁左衛門が武略。中々シヤムロ人の及ぶ所でないと。約束の如く。イッピル國を與へたて御座る。是 於て山田は大物になり。倍々登用せられて長臣となり。常に國酋が左右にありて。國政を議する所が。シヤムロ國世々の長臣の家柄の者に。こうはむと云者がある。是は家柄だけ。仁左衛門よりは年も下で。三十歳少し餘で有たなれども。

上座に居て左右の長臣と成て居るが。實は山田ばかりが用ひられたと云ことで御座る。此の後にも。四方の從はぬ國々を。仁左衛門が討平け。戰ふ毎に勝て。實に天竺中を震ひわなゝかせ。日本軍と云へば。小兒も啼を止め。瘧も落る程に。天竺の國々をおぢ畏れさせた程のことで御座る。實に御國の武勇を。天竺中に輝しつけたで御座る。さて此節は。元和五六年の間のことで。其砌かの先年。仁左衛門を同船して渡したる。駿府の商人。太田次右衛門。瀧佐右衛門兩人が。又々渡海して。大宛に渡りたる所が。彼の國人の云ふには。嚮にシヤムロ國より書を贈て。日本の商客が來たならば。速にシヤムロ國へ渡り來れ。さもあらば。交易の大利を得させん。と云ひおこしてあると云ふ故。此の兩人。合點の行かぬことぞと思ひつゝも。やうすが有らうと思て。シヤムロ國へ渡りたる所が。彼國の下役人ども。委細を云はず。國の大臣。其方等を久しく待て居らるゝ程に。王城に來れと云て。嚴しく警固して。遠く酋が城へ送つたで御座る。其の道々も能く饗應し。日を經て其城に著と。大臣其の方等に逢うと云はるゝと云て。

其營中に入れて。拜をさせたて御座る。兩人つらつら座中を見廻す處が。兵器を連ね。數十人の官人ども。位列を正しく座し。其の狀甚だ嚴重に見える。暫く有て。彼の大臣がゆるぎ出たるを見れば。衣冠。綾羅。誠に眼を輝し。拜禮終て休息せしめ。且役人等に。大切に饗應すべきよしを命じて。まづ旅館にかへしたて御座る。そこで官人どもが。兩人を別殿に引て行き。善を盡し美を盡して。饗應したと云ことて御座る。斯て夜更人しづまッて後。誰とは知らず。ふだんのシャムロ裝束で來て。兩人につき添ふ。左右の者を退けて。瀧と太田に逢ひ。其手を執て笑ひ物語る。兩人驚て能く見れば。晝拜禮致したる大臣で御座る。さて兩人に向て云ふには。我は山田仁左衛門長政ぢやが。先年其許等の噂に依て。此地に渡り。幸にしてかくまで立身したると云て。夫まで色々と有しことゞもを語て。今まで本國の人の來るを待て。大宛へも申し遣し置たが。今日其許等に逢て。日頃の願ひ足れり。能く我名を本國に知らしめよ。實に日本は武勇の名盛んなるを以て。我れ功をなすことを得たり。我れまた微賤にして。日本の威風を外國に顯すこと。生前の望み既に足れり。と云たて御座る。是に於て兩人が飛しさッて。其出世を賀したる處が。以來は日本國より。商船の著したならば。かう／＼手厚く計はんと云ふまでを約し。初令まで物語をして。人の怪まんことを憚つて。其の營中に歸り。夥しく兩人に物を與て歸したて御座る。瀧と太田は。本國駿河に歸り。右のことゞもを人に語つたる處が。其時初めて駿府中の者が。扨こそ日頃小事に拘はらず。大志ありと見ゆる者であッたと云て。嘆美致したと云ことゝて御座る。此の後元和七年に。シャムロの國より。御國へ使を獻つて。種々の珍しき土產を獻じたて御座る。是は本多上野の介正純主。土井大炊の頭利勝主などの。閣老を勤められた時分で。則其の時の御返書を。近頃或る人の許より得て。寫し置たて御座る。また此時山田が所よりも土井大炊の頭殿へ差上て。尤も進物をも奉つたが。其書翰に。御國の年號を用ひて。元和七年卯月十一日。大炊の頭樣御小姓衆中。御披露。とあるで御座る。また此後寬永三年に。駿府の商客が。シャムロへ渡つたる所が。山田が命じて。吾本國に在し時。

駿府の總社。淺間新宮は。靈德崇く。神威盛んにおはします故。日頃信仰し奉つたが。此國に來て。合戰する毎に。しば／＼軍功勝利を得たることは。全く日本神德の御加護に因ること故。この國に在つゝも。なほ厚く朝暮に尊信し奉れば。その船軍の圖を。繪馬に書て。神殿に奉納せんと思ふと云て。其戰艦の圖を書しめ。是も御國の年號て。其月日姓名を記して。其商人に渡したで御座る。歸國して後。夫を總社の神殿に掲たる處が。駿府の人々是を見て。實に感心したと云ことで御座る。但し惜い哉。その眞物は。天明八年十一月五日の火事に。燒失したで御座る。然れども其燒ぬ前。其通りに摸し置たる圖が。今以てその神主。總社宮內と云人の所に貼つてあり。また其繪馬を遣したる砌り。駿府の知己どもへも。土產物などよこして。夫をば篤胤が知たる人の家にも。今以て持傳へて居るて御座る。また此寬永の頃。大阪の角倉與市の、外國へ出したる船の。書役をして行たる。德兵衛と云もの。寬永三年十月。其船の書役をして。天竺へ渡り。彼の國中を經めぐり。四五年目に歸つて來たで御座る。是が謂ゆる天竺德兵衛で御座る。是も仁左衛門に對面したと云ふ事て。其書上の書に見えるで御座る。さすれば此の仁左衛門は。とかく御國を戀しく思つて。御國人と云へば。親はしく。對面したことゝ見えるで御座る。さて御國の寬永九年のことぢやが。シャムロ國酋が。病に罹て。今死んとするとき。かのコウハムと。山田を近く呼て。吾が死たる後は。其方等兩人。幼主を守立。今年は。コウハム此所に在て後見し。仁左衛門は。領國イッピルに歸つて。國の政道を治め。明年は參勤して。コウハムに代り。幼主に文武の道を敎へ。國の師範となり。よく治め。每年斯の如く。隔番に勤めよと遺言して。死んだで御座る。仁左衛門は。義氣の至て强き者故。淚を流して領掌し。其の年は。吾が領國へ入部したで御座る。扨かのコウハムは。幼主の後見をして國政を執て居る處が。其の死たる酋の後家と密通して。其後家と計て。自ら其の國の酋とならんと致したで御座る。夫を知て。幼主がやう／＼十三歲になる處が。餘程心ある者で。密に近臣と謀て。コウハムを殺さんと爲たる時に。其事を後家がもれ聞て。吾が生んだ子ぢやが。幼主

を毒殺して。頓死と披露したで御座る。是はさきの酋が死んだ年の。十一月の事で御座る。扨その後家が酋と成て。日夜コウハムと淫樂をする。此の事を山田仁左衛門が。領國イッピルに居て聞傳へ。以の外に憤り。此奴等を亡ぼして。先の酋が弟を立て。亡主二人の靈魂を休めんとおもひ立て。兵を催す處が。此事シャムロ。後室の居所に聞えたる故。大きに恐れ。使を遣して。彼是と山田が機嫌を執り。仁左衛門が子に。オインと云が有たる處が。夫に太尼國。六昆國と云ふ。二つの大國を與て取繕ふ處が。山田は。我が心を取てのしわざ。と云ことはとく知りつゝも。其の二大國を得たならば。彌々兵を強くして。コウハムが居所に攻上り。其の罪を糺さんと。心支度をするうち。又々後家とコウハムが相計て。チャントホラと云者に計らはせて。惜むべし。仁左衛門を毒殺したで御座る。此後は右オイン一説に。女ぞと云は。おいんと云ふより。誤て女と思へるにや。は。仁左衛門に劣らぬしたゝか者で。父が仇を報んと構へて居るうち。シャムロより。後家とコウハムが差圖として。彼の仁左衛門を毒殺したる。チャントホラを大將として。オインが居城へ攻來る時に。まづ其軍を。何の事もなく打破て。父の仇チャントホラを殺し。是よりあばれ出して。南天竺中を震動させる程の武勇を振つて。諸國を切從へたが。竟に討死したで御座る。然れども其名は。天竺國中の胆魂を拔く程に。彼の國に貽つて有るで御座る。また此騷ぎに依て。日本町に居る。皇國の商人どもが。オインに内應でも致さうかと。女酋は大に恐れ。コウハムと議て。其船を取あげ。日本町を燒拂はんとのことが聞えたから。日本町の總支配。岩倉平右衛門を始め。金屋源三郎。大坂屋助作。綿屋市兵衛。岸部屋九郎左衛門。同甚太郎。谷久兵衛。今村左兵衛。山田仁太夫。同仁兵衛。兵法者の有賀門太夫。能太夫の速水又三郎。智源五郎八。錦屋庄左衛門。玉屋忠兵衛等相談して。大に武勇を振ひ。妻子等を悉く船に乘せ。大筒小筒を備て引取る處を。暹羅人數十艘の大船で追來り。石火矢五六十挺を打挂たる處が。味方の船には。木綿の帆を横に張て幕になし。其間に。石火矢大筒を居たる故に。敵の玉は幕を打ぬき得ず。味方は女船を背に圍ひ。矢ごろを定めて打放し。敵船三艘打沈め。猶も船を進めて

山田仁左衛門尉長政

打合たるに。石火矢の餘炎。味方の帆幕に燃つきたるを。刀を以て切拔たる處が。其帆幕の切れが。火の燃たる儘に。風に吹れて敵船に飛ゆき。船底にある火藥に火入て。數十艘の敵船。微塵に成て失たて御座る。是は神の御祐けなること勿論ながら。實に愉快きことで御座る。然るに敵また。南蠻の黒船を雇ひて追來るに。是も難なく打沈め。一と先六昆國まで引とり。後に寛永十年八月下旬に。肥前の國平戸に歸著致したで御座る。此事は。增譯采覽異言。其外山田興亡記。碎玉話。宗心物語。天竺三圖贅記。など云ふ書にもありて。慥なる事で御座る。是れ程の事なれども。人の委く知らぬこと故に。斯やうに委く申すことだに依て。能く覺えて。大日本魂の人の。外國に渡りたる時の。手本ともすべきことで御座る。扨彼のコウハムと後家は。惡病を受て死んで仕まッたで御座る。是に依て先の酋が弟の。僧と爲て居たのを。國人がよび返して。國酋に取立たと云て有る。また彼のシャムロには。今以て日本町と云ふ稱も。貽つて有ることとで御座る。

〇追加る事なるを。鐵胤云。此は駿河人大石善言が思ひ起せ其儘こゝに彫添るものなり。

山田仁左衛門駿河國淺間社に奉れる額面之圖

これのあだし國船の畫はしもっ本つ文に。故宇斯のまつぶさに。しるし出給へる如く。山田ぬしの。彼國より。吾が駿河の國府なる。淺間の御社に奉れる額面なるが。此廣前に挂置れしを。去し天明の八年と云年。迦具土の神の御荒びに。御社こと〴〵く烟と成ける時に。此額面も燒失しは。いとも歎はしき事の極なりけり。然るを幸ひなるかも。其ころ當御城の。御書院番と云を勤めらるゝ。榊原長俊ぬし其圖をしも。いち速くうつし取り持給ひしを。再び寫し補ひて。挂軸と爲し。やがて同じ御社の神庫に收め奉りぬ。いかで此を大抵にも寫し得て。此卷の後へに附け。山田ぬしの。雄々しく猛き軍艦の有狀をし。諸人に見せまほしと思ひ立て。其由宮人に乞申し。寫し得たれば。ことし文久の三年十月。江戸に持出て。此事いかにと。今の宇斯にねぎ申せるに。最よき事なりと。頓に諾ひ給ひしを悅び思ふ餘りに。やがて拙き筆とりて。かく梓にのする者は。駿河國府の市人大石善言。

此圖上に題したる文字は。かくの如く草體にて。元

は山田ぬしの自筆の由言傳ふ。初めの五字は。奉レ掛御立願。つぎは。諸願成就。その次は。令ニ滿足一所。その又次は。當國生。今天竺暹邏國住居。寛永三丙寅年二月吉日。山田仁左衞門尉長政。と見ゆ。こは今縮寫して。こゝに載するに付ては。若も讀誤らむ事を思ひて。如此は記し出たるなり。

善言また中也

講本伊吹於呂志下之卷

平田先生講説　門人等筆記

さて各々がた。孰も是まで。篤胤が負氣なくも。古道の大意より次々。醫道までの表會を立置て。演説いたしたる趣を。とッくりと御聞の上。つぶさに御會得あッて。なほ厚く古への道を信ぜられて。各々名簿を投ぜられ。斯やうに內會までも出席致さるゝこと。先達ても申す通り。師翁の人に贈られたる消息にも。只々一人にても。多く道を說聞するが本意ぢやッと言はれたるにも相叶ひ。然こそその靈魂にも。大慶に思はれませう。この篤胤に於ても。その滿足この上もなく。悅ばしきこと。申すばかりはないで御座る。猶この上ともに今の心を失はれず。愛たく幾久しく。古の道を步行るゝやうに致したいもので御座る。時に然やうに學問を心がけて。古道を第一に學ぶに付て。申すべき事が有て御座る。夫れは此方の學風の事ぢやが。右申す如く。及ばずながら。何とぞ致して。世に弘ごれる紛れことを正し。人の惑ひをひらき。わが古への道。眞の筋を弘めんと致すに

付けて。世におしなべて。思ひをる事とは違つて。いかう外の道々を責立て。嚴く攻撃にとり挫ぎまするが。是は。物を穏に心得をられまする人などは。甚おとなしからぬ學風ぢや。譏かたおやと。さげすみも致さうが。是はどうも。斯う参らねばならぬ訣がござる。その訣と申すは。世俗に云ひ思ふことゞも。大抵十に七八は打紛れ。心得違ひの事どもで有る故。その處へづか〳〵と。わが主とする。古道の眞意ばかりを申ては。人の心に入り兼る故。夫を取除つゝ。古道に引入れて参らでは。入かねるからの事で御座る。夫は譬へば。百重にかさなる荒山中を通りて。京へ道を拓かんと致すには。こゞしき山の岩根木の立。荊棘からたちなどを伐平らげ。彌重なれる雲霧を。忍長戸の風に吹拂ひ。さやけき月を見る如く致さいでは。とても宮所へは出られませず。古道を弘めんが爲に。世俗の誤を辨じ。人の氣に入らぬことばかりを申すも。斯やうの訣で止ことを得ず。實に據どころ無く申すことで御座る。但し夫は書を著はし。又は道の講説に及んだる時のことで。不斷かやうに。人の氣に當ることや。攻撃を申すと云ふ訣ではない。是に付けて。常に門人等にも。申付けて置くことがある。夫はまづ世間を見わたすに。生々の古學者なんど。少かも吾が翁の書を讀だるは。事々しく誇りまはり。世に異なる行ひを致し。或ひは謾りに高ぶり。人の見聞も憚らず。他學びの人を詈り。何彦とか。某丸とか。事々しき名告なんどをつけて。初對面の人にも。まづ其通名を云はんで。かの大造なる名告を先に云ひ出し。その名告を聞けば。即て古學者よと。先の人の氣のつくやうに。我は貌に誇り躁ぎ。又は更に物しらぬ。俗の人に對して。先では一向きゝ知らぬ。古き言で物云つたり。また尋常の人の言葉を難め。我こそ古學者よと。躁ぐ者も。大分見えるが。是は惡いことで御座る。吾が本居先生は。斯やうのことは。きつく否がられましたことで。彼や此やの書のはし〳〵。此の心ばへを。戒めおかれたで御座る。何のこともなく。人が名を問ふたならば。通名を名のるが宜い筋で御座る。なぜなれば。今は古へと事變つて。實名をば奥にして。吉藏とか。八左衛門とか云ふ名で。通用する故のことで御座る。然て先で實名はと問ふたならば。夫は先

て心あッてのこと故。其の時こそ名告を云が宜いで御座る。又よの常の人に向つて。古言まじくらに物云ふことも。初學のほどは。然やう有りたきものと見えるが。是も悪い。とかく學者の學者臭く。豆豉汁の豆豉臭が悪いと。俗にも申す諺の如く。古學者も。世の常の人に對しての。古學者臭いことは宜しくない。若心ある人でも是を聞くと。直にこれは初學の人よと。後指さゝるゝ事だに依て。愼めと申すことで御座る。是は序だに依て申すが。とかく世の生漢學者どもなんど。僅に四書五經とか。左國史漢の類でも見かぢると。やがてしャら臭く成て。あのれ漢學者よと名告がましく。音聲までを替て。はじかみの祭禮などゝ論語よみ。と賤しき口ずさみにもある如く。生姜まつりと申ても宜い事を。はじかみの祭禮などゝ云ひ。とかく不斷も。赤縣語で物を云ひたがり。平目の汁に。金がしらの燒物と云て宜に。平目のあつものに。金頭のあぶりもの。などゝ云つたり。又今日は風が吹て。眼に砂がはいると云ても宜からうに。今日暴風にして。小石眼中に投ず。などゝ云やうな輩が多いで御座る。又近頃蘭學者と云て。オランダの學びをする輩が。とかくオランダ語で物を云ひたがりますが。是は漢語で物云よりは。もッと悪い。先立て。芝邊を通つたる砌。若き醫者坊が二人づれ。先に立て行く處が。其のうち一人の醫者坊が。しきりにオランダ語で。咄を致しかける處が。一人の醫者坊は。一向にオランダ語は知らぬと見えて。一々問返すと。その生蘭學者が。跡では其の語の講釋をする。其くらゐならば。いッそ知らぬ人には。蘭語で物は云はねば宜いがと。後で可笑しく思つて。聞つゝ行く處が。終にオランダ語で物云ふ醫者が。蘭語を知らぬ醫者を指て。足下のやうに文盲なる人もないものだ。とあざ笑ひましたが。是は結句。蘭語で物云ふ奴が文盲で御座る。都て今はやる蘭學する輩も。われ蘭學者よと知たふりに。病名藥名何もかも。オランダ言で申すが。日頃うるさく思て居ること故。序に咄を致すので御座る。一體今の世の人の。常云ふ言が。四分は御國の眞の言葉て。四分は漢語。二分は天竺語で有るわけは。昔より致して。赤縣學び。佛學びを爲る輩が。丁度近頃の蘭學者どもが。人の耳を驚かして。我は貌に。オ

ランダ語を交へて云やうに人に誇り。珍らしがらせやうと。打交へ云來つて。世に弘がり。今は世間一般に云ひ馴て。世の常の人などは。大かた戎言やら。御國言やら。知れ難るやうに。用ひ馴たもので有るが。古き人も。夙く是を賤きことにして。紫式部なんど。源氏物語箒木の巻に。ひるくひの女と云が有て。其の詞に。月比ふひやうおもきにたへかねて。ごくねちのざうやくをふくして。いとくさきに。えたいめん給はらぬ。と申したと有るも。式部の心に。字音の言を。賤きことに思はれてのことで御座る。偖かやうに。戎言の字音言。また天竺語などを打交へて。好事に申したるが弘まッて。御國の言が。大きに悪くなッたにさへ困て居るに。況てオランダの穢き言を云ひ弘むるは。いやなことで御座る。川柳が句にも「失念と云へば立派な物忘れ。」と申たる如く。忘れましたと云よりは。失念致しましたと云ふ方が。丁寧のやうに聞えるのは。皆用ひ馴たるが故て御座る。是につけて町の若い者が。二人づれで來ると。向ふから侍が一人來たが。其若い者のうち。一人が。その侍に知音で有つたと見えて。辭儀を致しながら。旦那きのふは。有がたうござりました。と云て通りすがうと。連の一人が申すには。其方はぞんざいな物云ひをする男ぢや。旦那衆に對して。きのふは有がたいと申しては無禮ぢや。昨日は有がたうござりまする。と云ものぢや。又もッと重い旦那衆には。一昨日は有がたうござりまする。と云はねばならぬものぢや。と申たれば。其一人の男は。感心して。和主は何の間に。そんな物知りに成た。と申したと云ふ咄が有るが。今の世に。下々の者などは。斯やうに心得て居る者も多くある。斯の如く弘まッては。今更どうもならぬ處へ。古學する輩が又やみくもに。耳遠き古言を交へて云ては。一向解らぬやうで有うから。不斷は平和に物を云へ。古學者づらは致す勿と。門人等にも。常申すことで御座る。但しさやうに。おだやかに心得をるにしては。拙者の講釋の。厳う強いはどうしたことぢや。と思はるゝ人も有うが。講釋は常とは違つて。はッきりと其言を。人に聞取らせんとするが趣意のもの故。きびしく云はんては。人の心に入りにくい故のことで御座る。佛道などを取りきめるも。古道の害をな

すが故で。是は實は云にも足らぬほどのことではあれども。蠅や蚊のやうな小さき虫でも。耳元でぶんぶん云てやかましく。眠をさまたげ。體をねぶッて煩ければ。蚊やりを焚て追出すか。蠅取黐でも。仕かけねばならぬやうなもので御座る。是を能く辨へて。常はいかにも平和にして。更に常人と異らぬやうに致し。その大和心をば。いかにも〳〵堅く衛立て物に惑はず。動ぜぬやうに致したく。夫は譬ば。段々に。古道と佛道の大意を能く聞辨へては。地獄極樂の妄説に惑はず。又かやうの奇しき天地の中に居て。かつ神の奇しく妙なる理を辨へ。また世に。種々さま〴〵の恠しき行を致す。妖物も任ることを心得ては。偶々恠しきことが有ても。夫に惑ず。譬ば何處其所に化物が出る。と云ふ噂がある時に。能くその化物と云ふ物も。有るはずだと心得て居れば。夫に驚くことなく。驚かぬに依て。惑はさるゝ事もないで御座る。是がかの兵書にも。彼を知り己を知ると云ふ場で。その彼れを知り己れを知るときは。百戰て百勝と云ふ如く。化物の化しやうがない處を。かの川柳が句に「妖物の談を儒者はひッ叱り。と云たる如く。かの儒者らがやうに。心狹く。この天地と云ふ。一つの大きに靈しき物の中に居て。己が身からして。大にあやしき物なることを辨へず。世に怪しきことはない。狐が人を化してすむものか。化物が有るものか。などゝ云ふ輩は。たま〳〵怪しきことを見ると。胆を潰しもする。また化されもするて御座る。是は彼れをも知らず。己れをも知らぬからのことで御座る。既に後漢の世に。阮瞻と云た唐人が。世に鬼神と云も。妖怪と云もないものだと云て。無鬼論と云ふ書を作つたが。或時外より。一人の男が來て。その無鬼論を著したる人と。鬼神は有る物ぢやと云て。論を仕かけたる所が。かの無鬼論を作るほどの人だに依て。口を利口に云て。とう〳〵其人を云ひ負して。鬼神はなきものだと云ひ勝た所が。その來て云負されたる男が。然らば我は鬼神だが。熟く見よと云ひさま。丈一丈ばかりの鬼神と爲て。白眼つけたる故。無鬼論を書た人は。不意をうたれたること故。目をまはし。夫より煩ひ付て。とうとう死で仕まッたで御座る。是はかの儒者の小量に。無い物だと。理窟ばかりにかゝッて。彼れをも己れ

をも知らぬが故に。かやうな不覺を取るもので御座る。所を能く。古學の意をきゝ取て。大和魂をつき固め。彼れをも己れをも知り。譬へば目の前に。大入道が出よう共。夫は尤。各々七情のあるからは。不意に出た所では。一とまづびッくりは仕ませうが。心の居りが違ふことで。腰の拔るほどの事はなく。其內に靜まり返つて。日頃おぬしらがやうな物の。有ると云ことは。かねて心得て居るが。一體おぬしは何處に居るもので。まづ何の用が有て。是へ來たのぢや。段々聞たいこともある。などゝ問かけ。豫て熟く心得たく思つて居る。幽冥の有狀でも。問ひ試みやうなどゝ。ヅッしりと仕挂たならば。その出た化物も。大きに手こづりものに出逢たことゝ。こそこそ出て行くは知れたことで御座る。總て古へざまの。大和心と云ものは。雅びやかに小せつかず。どッしりと心を平和にして。空氣心を無くなすが。第一のことで御座る。その空氣と云は。古くも譬に云ことだが。蛇が居たよと云たれば。あらこはやと云て駈出した。いやさ死んだ蛇だと云たれば。あら悲しやと云て泣出す。夫もくさッて居るよと云たれば。やれ臭いと云て。鼻をつまんだと云ことがある。是が空氣と云もので。何さ腐て居ると聞たとて。急に鼻を抓むこともない訣で御座る。こゝを大和魂が能くすわッた上では。何處そこに。化物が出ると聞ても。驚かず。なに化物が出るとか。それは面白い。逢ひないかと。熟く聞すまして置て。行て見て居られては。化物も大きに窮る訣で御座る。實に御國の內にも。殊に江戶の人氣は。强く勇ましくなければならぬ。大切の訣があるで御座る。其の大切の訣と云ふは。先頃も申す通り。この大日本は。萬國の本國。祖國で。其の上に。わが天皇樣は。天照皇大神宮樣から。御血筋が御連綿と御つゞき遊ばして。萬國の御大君に御坐し。その御大君より。萬國のおきて。御取締を御命じあそばして。御大政を御任せなされて指置るゝ。征夷大將軍の御膝元に生るゝ者は。猶更自然と强くなければならぬ訣で御座る。夫はまづ征夷大將軍と申す御事を。人は何と心得て居るか。則征夷の夷の字は。えびすと訓む字で。えびすと云は。カラ。天竺。韃靼。オランダ。シャムロ。カボチャの國々。總て御國の外なる。四方の國どもを。皆悉く。

エビスとは云て御座る。謂ゆる東夷と云は。東のエビスと云こと。南蠻と云は。南のエビスと云こと。北狄と云は。北のエビスと云こと。西戎と云は。西のエビスと云事で。その東西南北のエビスどもの。御國へ對し奉り。不屆をせぬやう。また不屆無禮が有たならば。相糺し。打平げよと云ふ。大將軍に御任じおかれてさし置るゝ。大切なる德川の御家に坐すに依て。征夷大將軍とは申し奉るで御座る。斯の如く。四夷八荒至らぬ隈なく。鎭めたまふ。御武德まします。大將軍の御膝元に生れて。上に染る下のこと故。その御武威の自然に。下々までに布及んで。是は斯なければならぬ故で御座る。また古く東人は。額には矢は立とも。背には立ぬと。常に申したことぢやと。宣命にも見えたる如く。同じ御國の中でも。東國の人は。格別なることとで御座る。是を熟わきまへて。御當地はもちろん。此の御國に生れたらん人は。假にも義に當らぬ行ひ。また卑しき根性などは。もたぬが宜いて御座る。一體眞の强い人間と云ものは。譬にも。暗隅から。牛を引出したと云ふ氣味もあり。常の事には疎いもので御座る。夫は勇氣が。

腹に充滿してをるに依て然で御座る。夫は陶鋺に水を入れても。少し入れては。がふ〳〵鳴音がするが。十分に入れると。鳴ぬもので御座る。とかく人は。心をしつかりと落著て强く持ち。大日本魂。御國氣性を固め。この御國を誹り。この御國の御道を。惡く云ふ者が有ならば。嚴しく取締てやるが宜いて御座る。上の御定めにも。此の御國に生れて。此の御國を誹る者は。反逆同樣のことて御座る。この訣故に。夫を取締て。罰つけたればとて。何所からも。しりの來ることてはないで御座る。凡て大和魂と。空氣心との差別は。かやうなもので。常の心がけにも。喧嘩とさへ云へば。尻引掲げて挂るは。ちと長しくない。御國は常も云通り。言靈の幸ふ國と。古語にも云て。口で云て訣らぬことも有まいから。初めから打合はず共。彌々の場へ來る迄。腰を居て動かぬ所が。やがて東夷南蠻西戎北狄をとり挫ぐべき。大和心の。大丈夫なる狀で御座る。此の心でなくては。毛唐人や天竺人の。負氣なくも。御國に射向ひ奉つて來たときに。しかと罰つける心にはなられぬことで御座る。尤をり節は。權道常ならず。敵に因て變

化すると。古人の語にも有如く。太平樂も云はねばならぬ場合もあるから。拙者なども。講釋の間に。をりふし太平樂も申すだが。夫は事と時とに依ることで御座る。其で拙者の講釋は。江戶風に。外の道を捌いて參ることとで御座る。偕まづ然やうに。大和心を居てをッて。家と身と心とを克く淸め。天神地祇の有がたさを。常に忘れず。拜し奉る心に成さへすれば。この御國の人に限つては。決して衣食住の三ッには窮らぬ。有がたい御國で御座る。さて親子夫婦兄弟朋友睦ましく。そのほど〳〵に。家業をいとなみ。をりふしは花をも見。紅葉も眺めて。おだやかに世を經つゝ。さて一度は死ねばならぬが。その死だる先も。今の心懸次第で。親子夫婦朋友も睦ましく寄合て。此の世に同じ樂みも有て。阿彌陀や閻魔王がせわには。なる訣がないから。かの川柳が句に。「旋りと賴むでもなし南無閻魔。」と云たる如く。佛法の信心者でも。通りがけの目禮ぐらゐで。深く拜みはせず。實は死て幽冥に入ては。大國主大神の御許に歸して。この世にのこす子孫を惠み。各々其の處を離れず。無窮に居ることとで御座る。然は云ひつ。

拙者は。毛虫と。佛と。死ぬことは。きついきらひぢや。夫はいかにと云に。畢には一所に寄るには違ひなけれども。暫くなりとも。妻子に別れることは。五十日百日の旅に立さへ。物うきことだに依て。その一つに寄るまでは。淋しからうと思はるゝで御座る。ぢやに依て。人は養生もして。長壽を保つやうにするも。大切のことで御座る。必ず房事過ぎ。呑すぎ。また心を遣ひすぎるも。甚だ宜くないことで御座る。是につけて。世の佛好な輩が。早く死たいなどゝ云ことを。能く云ものだが。合點ゆかぬことで、拙者の心には。不審な事に思はるゝで御座る。夫は如何と云に。極樂と云ものは。段々申す通り。一向に跡もなき所なり。よし又有るにした所が。一向おもしろくないことぢや。まづ十萬億度と云ふ長道を。づう〳〵行て。行おほせた所が。「蛙さへ重きに蓮に佛等」と云ふ口ずさびの如く。水中に生て居る蓮葉の上に。只一人つくねんとしては。さう居ずまひの能い人ばかりも有るまいし。殊には此の世に殘ッて居る。親屬や近づきが。噂を云まいものでもなく。其の時もし嚔てもするひやうしに。落もすると。

極樂のどざゑもんになるから。是もこはものなり。また川柳が句に「屁をひつてをかしくもなきひとり者。」是はどうも笑はれまい。そなたの屁から。己がおならが出た。などゝ云て笑つたり談つたり。踊たりすることもならず。たゞ屈まつて居ることは。何と否なことでは无いか。どうしても速くその極樂へ行たがる人の氣が知れぬ。極樂よりは此の世が樂みだ。夫はまづ。暮の相應にゆく人は。美濃米を飯にたいて。鱣茶漬。初堅魚に。劔菱の酒を呑み。煉羊羹でも給ながら。山吹の茶を呑んで。國分の煙草をくゆらして居らるゝ。また然いかぬ人は。ゆかぬなりに。相應の樂みが有て。炭團でたばこは呑ながらも。番茶の口切を。水道の水で煎じ呑み。鯱とにらめツくらをした心持が。どうも云へぬで御座る。是をいやがつて。極樂々々と云のは。榮曜の上の貪好み。とやらで有ませう。是につけて。去る寛政年中のことで有つたが。仙臺侯の家中に。杉原新左衞門と云人が有て。その槍持男が。並べ本屋で。古き書物を見つけて。わづかの價にて買て。主人新左衞門に見せたれば。夫を古筆見に目利させたる所が。一休和尚が眞筆で有らう。と云になッて。そこで仙臺侯へ上たで御座る。是を大守より。紫野の大德寺へ遣はされて。吟味なされたる所が。一休の眞筆に混れなきもので。代金九百兩の折紙。添簡をして返されたで御座る。そこで新左衞門へ。侯より刀一腰。馬一匹。時服一つを下され。又かの槍持へは。金百兩下された事がある。其のかき物に記したる文の寫を見るに。「一坊主になるな魚を喰。」「一地獄へ行て鬼にまけるな。」「一大食をしてくらせよ。」「一念佛は申さず共。遊興すな。」「一佛法はうそ。をかしくも此の歌を見よ。」「みな人は欲を捨よとすゝめつゝ。跡で拾ふは寺の上人」紫野とんきやう齋。と書てあるが。然すがに一休和尚で御座る。また「佛法は片便宜なり。我れら委しき事は存ぜず候。」などゝ云たも。よく佛道の虚僞なることを見ぬいて。愚弄したる言で御座る。世に一休の語だの。歌だのと云ものが。幾等かあるが。大かたは後人の託したるもので。實の物は少いが。是は實に一休の腹で御座る。何と出家でも。誠をたどる人はかやうで御座る。夫に蚤く死たいの何のと云は。をかしなことで御座る。〇赤縣の人で

はあるが。老子の語に。執㆓古之道㆒以御㆓今之有㆒。能知㆓古始㆒。是謂㆓道紀㆒。とあるは。もッともなることで。何事も世の中のことは。古き迹に效つて致さぬと。旨くは治まらぬ物で御座る。能く其始めを知て。道を立るを道紀と云。とある如く物の始めが。即ち後の世を治むる手本と成ることとて。其中にも。學問は。本末を知るが大事で御座る。然れば伊勢貞丈ぬしの云はれたる如く。とかく學問の志ある者は。まづ古き所々と。學んで入るが順道で御座る。さうなくては。今世の混說を正すことが。とんと出來ぬで御座る。既に徒然艸にも。「何事もふるき世のみぞしたはしき。今樣は無下にいやしくこそ成ゆくめれ。かの木の道の工の作れる。うつくしき器物も。古代の姿こそおかしとみゆれ。文の詞なんどぞ。昔のほぐどもはいみじき。たゞ云ふ詞も。口をしうこそなりもてゆくなれ。古へは車もたげよ。火かゝげよ。と云ひしを。今樣の人はもてあげよ。かきあげよ。と云ふ。」と有りますが。是は兼好の心にも。何事も。古き世のさまが。雅びやかに美しくて。慕はしいと思ふにつけて。書出したことで。

「今やうは。無下にいやしくこそ成行くめれと云は。古き世は。物も言も雅びやかで有た、。今のさまは。何事も無下に卑きかたに移り行く。と云ことで。其卑しく成行くさまを。一つ二つ書出したもので御座る。木の道の工と云ふは。大工または番匠と云て。さし物などの類を作る者のことで。夫を古くは。木の道の工とはいふで御座る。是は源氏物語の。品定めの卷などにも。木の道のたくみの。萬の物を。心に任せて作り出すなど有て。古き語で御座る。夫らが作るうるはしき器物も。珍奇さはうつくしいが。なほ古代の器の姿が。雅やかで宜いと云ことで御座る。おかしと見ゆれと云は。おかしとは。物にめで感じたことで。あざめ卑しめて云ふをかしとは。意も違ひ。假名も違ふて御座る。文の詞なんどぞ。昔のほぐどもはいみじき。」と云は。器物も。古代の物はおかしと見ゆるに。況て文詞などは。昔のが微妙く宜しい。と云ことで御座る。器物をばさきに云たが。うつはものもと云ひ。文詞のことは後に云ても。文の詞なんどぞと云て。況て文章の詞は。いかう古へに劣つて來たと云ふ意を。見せたもので御座る。

かやうの訣も。よく心得てをるが宜しいで御座る。ほぐと云は。物を書ちらしたる紙を云で御座る。是も古き語で。既に散木集に。「秋の田のほぐとも雁の見ゆるかな。誰おほ虚に書ちらすらむ。と云歌があるで御座る。扨その文詞の。いやくだちに下つたと云ふ訣は。都て外國の事の。渡り來ぬ前の言と云へども。神代の言に比べては劣り。まして外國の書どもの。渡り來て以來は。その言の下つたること。云ふ可きやうもない程のことで御座る。さてもなほ。源氏物語。枕册子などの出來た時分の言葉は。また一品かはつてうるはしいが。夫もまた段々に下り來つて。既にこの兼好が徒然草は。枕草紙の趣意と筆意を。つとめ眞似たものながら。實は清少納言の足元へも。立よられぬもので。其言もいかう下つてをるで御座る。扨また今の世の謂ゆる手紙。これを古くはせをそこと云ふ。是は消息の字音を。かやうに馴然かに。せをそこと云は。古實で訣のあることで。その昔の文の狀と比べ思ふに。いかう違つて來てをるが。まづ古く源氏物語時分のせをそこ。則今のいはゆる手紙の文は。「うけたまはりぬ。一と日はひじりだちたる樣にて。殊更に忍び侍りしも。さ思ひ給ふるやう侍る頃ほひにてなん。なごりと宣はせたるこそ。少し淺くなりにたるやうにて。恨めしう思ひ給へらるれ。萬づは今さふらひてなん。穴かしこ。」また今昔物語にある。盗人の文。「一とせの坪屋のことを思し出よ。其事の今に忘れ難ければ。其畏まりを申すべき方のさふらはざりつるに。斯く登らせ給ふ由を承はりて。迎へ奉るなり。其懐しさは。何れの世にか忘れ申さん。其の夜いたづらに成なましかば。今まで斯て侍らましやは。と思ひ給ふれば。限りなくなん。」と有るまづこんなもので。かやうに雅びやかなる處が。是から百五六十年ほど後。定家卿時分の消息のさまはいかう下つて。即ち定家卿の。衣笠内府の許へ贈られたるせをそこ文に。「毎月の御百首。能々拜見せしめ候ひぬ。凡此のたびの御歌。まことに有がたう見申候へば。年來愚なる心に。辱なき仰の。否み難さばかりを省み候とて。僅に先人申おき候ひし。庭訓の片はしを申候ひき云々。」また家隆卿の文。「何事か候らん。此庚申の歌にやみ伏て無レ術候。眞實に。今はむげのことにまかり成候云々。」

但し此歌一切に。御口より外へ出べからず。其故は。主おぼえず候間。かた〴〵憚り存候なり云々」などある。此時分のは。餘程今の世のせをそこのさまに似てをるが。今のは又いかう下つたもので。譬へば「以二手紙一致二啓上一候。然者兼而申進候云々」とか何とか書く。是が謂ゆるちくら文と云ふ文法で。御國風とも。漢風ともつかぬ。をかしなもので御座る。以二手紙一致二啓上一候とやうに。以の字を。手紙の上に書き。致の字を。啓上の上へ書など。漢文の格なる處が。まづ手紙と云ふことと。漢語ではなく。御國の言でも。後世の俗言で御座る。また致二啓上一候の候は。古への雅び言に。せむらふと云たる言を。訛りくさッて。さふらふと云ひ。また夫を訛らして。そろと云ので。赤縣にはとんとない格の語で御座る。かやうの訣故。今の手紙の文と云ものは。手紙と云ことの頭へ。以の字を書くなどは漢文の格。また啓上など云は。赤縣語。夫に結に候と云字を書などは。御國風おやに依て。頭は漢文。尾は御國文。さて讀上た處は。赤縣の音と。御國の聲と入交りぢやに依て。彼の源三位頼政卿の射られたと云ふ。鵺と云ふ化物のやうな文で御座る。また然ればと云ことを書く。是が中にも當らぬ言葉づかひて御座る。なぜと云ふに。然ればと云ふ言の意は。然在則と云ふことて。近く云はゞ。云々のことが有たれば。と云ふ意の言葉で御座る。ぢやに依て。上にどうしたかうしたと云ふ訣がまづ有て。其言を受たときに云ふべき言で御座る。たゞに發語のやうに心得て。めッたに書くは。當らぬことで御座る。今は世の中一般に然だから。どうもならぬが。古へを學ぶ者は。かやうのことも。よく心得辨へて居るべきことで御座る。扨序ぢやに依て云ひますが。手紙と云ふ語も。とんと古くはないことて。貞丈主の說に。手紙と云ふ名目古へはなし。手簡と云は。手づから書たる狀なり。手簡はしゆかんなるを。てかんと讀み。てかん轉じて。手がみと云ひ誤れるか。古へは紙を横に。二つに折て書くをば。小文と云しなり。其の小文を略して。半切紙に書て。手紙と名付たるなりと有り。又若くは。書することを手とも云へば。唯何となく。書をかきたる紙。と云意でもあらうか。扨つれ〴〵の文が。どこへか迯たやうになッたが。「たゞ云ふ詞

も。口をしうこそなりもてゆくなれ。」と是は常云ふ詞も。だん〱に訛つて。口をしきまでになり行く。と云ふことで御座る。「古へは車もたげよ。火かゝげよとこそ云しを。今やうの人は。もてあげよ。かきあげよと云ふ。」と是は車もたげよと云も。車もてあげよと云ふも。火かゝげよと云も。火かきあげよと云も。唯延たと。約まりたる違ひばかりなれど。かきあげよと云よりは。かゝげよと云ふかたが。優美く聞えるで御座る。是は兼好の時分の言葉だが。今はこんなことではない。もたげよと云を。もちやげろと云ひ。また火をかゝげよと云べきを。とうしみかきだせ。などゝ云で御座る。都て此類に。事も物も沿り革たる。其流の末に居て。物學ぶこと故。よく其の源をまねびおけば。末の流は準へても知るやうになる。こゝが古學の有難き處で御座る。

○さて又一つ云はねばならぬことが有る。抑眞の聖人の道は。我が大御國の大道と。さして異なく。實に國の寶とも云べき物なることは。既に辨じ置たること故に。今更云に及ばざれとも。是に反して。擬聖人の道と云ものは。深く恐るべきことて。我が大皇國の大道とは。雲泥の相違なること故に。これは能く其の眞僞を御撰み无てはならぬ事で御座る。然るを師翁の。くれぐれ云はれたる如く。其道を一向に御用ひなされたる故に。蘇我馬子が。崇峻天皇を弑し奉りたる如き。大逆事も出來たることゝ思はれる。然るに其御撰み无く。其中古以來。ます〱深く御取用ひ有故に。大道自づから廢れ。其上に。佛道をも深く御信仰なされたる事は。佛道大意。其外にもをり〱申したる通りの事ぢやに依て。人氣次第に懦弱に成行き。殊に歌は。我が御國の風俗で。神代は云に及ばず。上古のは雄々しく武く。其の中に優美なる所ありて。甚もめでたき姿で有たる所が。人氣に随つて。いつとなく儒佛の意に移り。古代の風は廢りて。只淫奔の媒妁の如くに成たることで御座る。右の如き習弊に依て。終には白川天皇様の如き。道ならぬ御所行もあり。夫より事起りて。崇徳天皇様の。御大事にも及びたることとなるが。是即ち保元以來。大亂の本とは成たて御座る。何と悲しきことの限では有ませんか。此れ等のことは。玉襷を始め。古今妖魅考にも。委く申たることだが。夫に

洩たることを一つ申さば。此の天皇の御述懐の御製ときこゆる。御歌を讀奉るに。殆涙のこぼるゝことどもで御座る。夫は彼のつれ〲草に。「新院のおり居させ給ひての春。よませ給ひけるとかや。「殿守の伴の御やつこよそにして。掃はぬ庭に花ぞちり布く。」新院と申すは。まづ近く天皇の御隱居あそばしたるを。院樣と申上るで御座る。處が其院樣の。御一柱おはします處へ。また其次の天皇の御隱居あそばすことがある。そこで院樣が御二柱になるから。先のを本院と稱し。後に御隱居あそばしたるを。別て新院と申上るで御座る。是に新院と兼好の書たるは。何れの御事か。はきと致さぬが。是は考へたる處が。崇德天皇の。御位を御おりあそばして。新院と在らせられたるときの御歌と。思ひ奉らるゝことで御座る。さやうに申す訣は。かの崇德天皇は。御位に御即きあそばして。御世知看すこと。十九年まし〲たる處を。本院樣の御計らひで。その御位をおろし奉りて。新院となし參らせられたで御座る。夫故に。この御述懷の御歌を。あそばしたることゝ見えるで御座る。終にその御述懐があまり有て。保元の亂は起りましたで御座る。この本院。新院。御中宜しからなんだことも。白川の天皇樣の。道ならぬ御所爲より起りたることとの趣は。參考保元物語に見えて。保建大記にも記して有ます。抑此事が。天下大擾亂の。因て出たる本なることは。是より後の御世々の御典に見えたる通りで御座る。さて御歌の意は。御殿を守り。御掃除を致す伴の御やつこたちも當今の大宮をば能く勤むれども。御心ならずも。御位を下らせ給へる故に。その御殿をばよそにして。御庭の掃除も致さぬに依て。散しきたる落花も。其儘にあるぞよと。御歎息あそばしたる御歌で御座る。「今の世の事しげきに紛れて。院には參る人もなきぞさびしげなる。」是はこの新院樣の御事には限らぬが都ての院樣も。已に御位を下らせられては。自づから人の參ることも少なくて。さびしげに坐ことを申たもので御座る。天の下を御治めあそばしたる天皇に坐ますから。御位をおり居させ給へば。人もはや參らぬと。兼好の歎息で御座る。「かゝるをりにぞ。人の心もあらはれぬべき。」とはすべて心と云ふものは人の盛なるときは。やれこれと持はやしはすれども

やゝ下り坂になると直に。今まではうら无く語り。
何くれと深切らしく。出入つた者も遠ざかり。且そ
の出入たるときは。悪きことも善きやうに。人にも
云なしなんどしたる者が。彼の下り坂に成てくると。
さしもない事をも恚み怒り。あしざまに云ひなんど
もして。扨も扨も頼もしくないことゝ。歎息せらる
ることがあるもので御座る。是も篤胤身に覺えある
ことで。以前は親の相應に爲おかれたる餘光に依て。
少かは人をも恵んだこと故に。人もそれず。深切に
出入も致したが。年にまし月にまして。學事の爲に
かやう困窮になッたれば。更に來も致さず。素より
知らぬ人の如くに成つてしまッたも。大分あゐて御
座る。是につけても。兼好がこの二條の文面を。實
にさることゝ思ひ合さるゝ。松永貞徳が。この一句
を。一章の金言ぢやと云ひましたが。實にさうで御
座る。また小野小町が。「色見えでうつらふ物は世の
中の。人の心の花にぞありける」。と詠だは尤もに思
ふことで御座る。但しさやうの不實は。世の常の人
心なれど。吾が古學を倶にする人々は。よくこゝら
の事情を辨へ。譬ひ人は落ぶれやうと。本の深切を

失はず。常石に其深切の大和心を。くじかぬやうに
するが宜しいで御座る。斯て崇徳天皇の。大御怒の
いみじきより事起つて。源頼朝ちふ人出て。まづ朝
廷を蔑にし奉り。それより北條足利の輩。尋て益々
逆威を振ひ。現御神と。大地を知しめす。天皇命を
波風暴き島國に遷し奉り。私に君を立まゐらせなど
したるは。是れ擬聖の所爲に效ひたるもので。何と
勿體なく畏こき逆事ではないか。斯て後醍醐天皇は。
其逆事に堪へたまはず。楠正成卿はじめ。大忠臣た
ち。討死せられてより後は。御心ならずも。神器を
奉じて。吉野の行宮に御遷りあそばして。後村上天
皇。長慶天皇。後龜山天皇と。御四代まで。眞木の
立つ荒山中に。天津日繼知しめしたで御座る。師翁
の歌に「いかなるや神の荒びぞ眞木のたつ。荒山中
に君が御代經し」と詠れたは此御事で御座る。扨こ
の足利の輩。また代々逆威を振つて居たる處が。時
なる哉。直日神の御心なるかな。平大將軍信長公の
出まして。まづ天朝を清め鎭められ。それより豐臣
秀吉公。またついで東照神祖命出まして。彌益々に
天朝を崇奉りたまひ。また古學の道を御興しあらせ

られしより。皇神の大道。ふたゝび世に起れることは。いかに尊き神慮ならずや。猶こゝらのことは。玉襷の總論に云ひ。また武道の演說にも委く云ひませう。

○さて松下も云たる如く。昔から良將の聞えある方方。儒學に達し。博識で有たる故。其力らに依て剛敵を亡したと云ふこともなく。また今日の上を以て考へても。恐ながら將軍家の。天の下を豐に御治めあらせらるゝも。儒佛の道を本にして。御治めなさるゝと云でもなく。御代々御銘々に。その御生得に備らせ給ふ。御良智御英才を以て。東照宮の御定めありし御條目。世々の大將軍の御古格を。御ふまへありて。世を御治めあらせられ。また列國の大名等とても。同く先規古格を以て。國を治められて。壁書制札觸書等を出すにも。佛語は素より。四書五經などの語を引て書たることもなく。また公事訴訟の理非を糺すにも。儒者や佛者を呼で。夫に理非を聞わけてもらッて捌く御家もなく。悉く自然に傳はる。御國の古格に依て。致さるゝことで御座る。但し俗の儒者と云ものは。假令からだは大兵でも。いかう心の小量なるもの故。その御國の自然の古格が。諸越の經書と云ものゝ趣にも。似かよふ處が有るに依て。もろこしに擬つてすることだと思ひ。太宰彌右衛門が辨道書などにも。慕何說を云て置たが。是は儒道の論辨の時に申しませう。されば儒佛の二道。この御國に無ては。治世の政の。ならぬと云ことは決してない。彼の二つの道の。未渡り來らざる以前。よく治まッて居たでは無いか。既に東照宮御一代。數度の御合戰に御勝あそばし。慶長年中。天下を悉く御靜謐に。御治めあそばしたなれども。大學の三綱領や。八條目を。敵に讀きかせられ。或は法華經や。阿彌陀經を說て。敵が夫に感じて。歸伏して治まッた。と云ことではない。みな御武德の盛なるに依て。天の下泰平に治り。今に二百年餘り。御治世長久の。御恩澤を蒙り奉ればこそ。儒者も佛者も。愚鈍な言を云ても居らるゝやうになッたので。士農工商遊民まで。夫々の家業を勤めて。心易く妻子を養ひ。安堵すること。偏に御武德の御蔭で御座る。もし足利時代までのやうに。世が亂れたならば。儒道や佛道で。中々是を

静めることは扨置き。どうしてほうがへしもなることではない。儒者や坊主は。まご〳〵して迯まはることで御座る。然れば國を治むるの萬事萬法。全く武道の一事に歸して。その武道即て御國の自然ぢやに依て。云ひ以て行けば。神の道に相違ない。俗の儒者。又佛者は。遊民と云て。四民の內に入れず。高尙の空理を。口に云ふばかり。外に何も益に立ぬもので御座る。武田信玄の頃に。かやうの者を。地諷士と云つたと云ことで御座る。なぜなれば能をするとき。太夫も脇も。笛も鼓も。みな夫々に手をうごかすけれども。地諷ばかりは。居つて口ばかりて。外に能のないもの故。是を譬へたもので御座る此の訣ぢやに依て。太宰が。聖人の道にて治まり候と云つたのを。全く東照宮の御武德により候。と直すが宜いと云もので御座る。先日も云通り。大かた儒者と云ものは。時務を知らず。其の時相應の勤めを知らぬもので。中にも朱子學者に夫が多い。宋の亡ぶる時に。理窟を云たることは。尤に聞える儒者も。いくらか有つたが。夫はみな口ばかりで。何の役にも立たず。却て武臣等の戰功を。打毀したることはあれども。國家の爲に成たることは何もなく。云ふがひも无く。亡びて仕まッたて御座る。實に慕何々しきことではないか。猶これらのことは。松下氏も云ひ。師の翁も論はれたることなれば。今委しくは云はず。

○世の俗儒輩の。常によく云事だが。儒道でなければ。世は治まらぬものだと云ふが。夫は空言ぢや。儒道でどうして治まるものか。夫はまづ彼等が道の主とする所は。謂ゆる堯舜の禪受。湯武の放伐ぢやが。第一禪受が相ひすまぬ。丹朱が不肖ならば。何ほども嚴しく敎諭して。舜をば執政として。輔佐いたさせるのが順道ぢや。去ながら夫ほどに。早く禪りたいことなら。まづ舜を養子として。父子の約を爲し。丹朱をも兄弟として後に。隱居すれば宜いことぢや。さすれば自から道にも叶ひ。後世になりても。王莽曹操らが如く。强ての簒奪は无きはずなり夫はなぜなれば。赤縣を始め。外國は一同に。眞の君臣の道は无けれども。親子の情愛は。歟なりに立つてあることと故に。後世に毒を流すことも少からうて御座る。然るを禪受を善しと云は。人倫の第一た

る。君臣の道立たず。父子親愛の道をも捨たる所爲なれば。採用ふべき事に非ず。皇國は。君臣の大道動くこと无く。父子親愛の道。厚き御國風であるものを。何として外國の左道を以て。治まるべき筈は无いで御座る。次に湯武等が放伐は。固より逆賊の所爲なれば。是は論に及ばざることは。彼の國の者でさへ。何くれと。辨駁したる事も有るて御座る。然れば大道に於て。取る所无き上は。儒道を以ては治め難きことを知るが宜い。但しをりをり。儒學に名ある人等に。政事の道に賢きも无きにはあらず。然るに政事の趣を見れば。自から優美なる所有て。彼の禪受放伐などをば。用ひたること无く。やはり我が大皇國の道を本體と爲し。儒道をば少か羽翼と爲たる迄のことで。眞の儒者では无いで御座る。是は其の行狀の事實を考へて見れば。知れることぢや。然るを。眞の唐人儒者を捕へて。我が御國を治めよと云ふは。謂ゆる鳥を鵜につかふ。と云ふ諺の如く當らぬことゝて御座る。是は序ぢやに依て云ひますがこの鳥を鵜に使ふやうぢやと云ことは。常の人もよく云ふことぢやが。たゞ諺ばかりでなく。實に有つた事で御座る。夫は古事談と云ふ書に。文覺上人が。高尾山を興立のころ。地所を見立んと。そこら見まはッた處が。清瀧川の上に。大きなる猿が二三匹居て。一つの猿が。岩の上に。あふむきに寢て。動かんで居ると。二つの猿は。立のいて居る。そこで文覺が怪しき事に思つて。隱れて見て居ると。鵄が一羽飛で來て。その寢て居る猿の側に來て。良有て。猿の足を啄きて見る處が。猿は少しも動かず。死だやうにして居るから。鳥は遂に猿の上に乘て。目を啄かんとする時。その猿が。鳥の足を採て起上ると。彼の立のいて居た。二匹の猿が出て來て。長き蘰を以て。鳥の足を縛りつけたで御座る。鳥が飛去うとすれども。叶はず。扨やがて河におりて。鳥をば水に投入て。一匹は蘰のさきを取て居ると。二匹は河上から魚を逐よせるて御座る。是は人の鵜に役つて。魚をとらするを見て。夫をまねたもので御座る。扨鳥は水に投入られて。とんと死んでしまつた。そこて猿どもは。打捨て。山へ上つたと云ことで御座る。是は文覺が親り見て。人に咄したと云ことで御座る。鳥を鵜に使ふと云ふ諺は。是らに依て云たものか。

烏は鵜に似て。黒くはあるけれども。鵜のやうに。魚をとることは出來ず。外國の道々も其のはし〴〵は。どうか眞の道に似て居るやうなれども。夫で皇國を治めやうとするは。烏を鵜に使ふやうなもので。猿智惠の儒者どもの非で御座る。赤縣の道で。國が治まるなら、赤縣はよく治まりそうなものぢやが。其懸しがヾ周代すら。十年と能くは治まらず。其の後は云ふ迄もヾ無く。末にはとう〳〵卑めたる。夷狄に取られて。風體までも。替られてしまつたでは無いか然るを御國へ持て來ては。烏を川へはめるやうなもので御座る。

○扨赤縣州の諸藝どもを。御國に弘めたるは。吉備公で御座る。此人の赤縣へ行かれしことは。續日本紀に依て考ふれば。元正天皇の靈龜二年。唐の玄宗が開元四年に當る八月。多治比の眞人と云人の。謂ゆる遣唐使の仰を蒙て。行れたる時。吉備公は夫に從て行き。さて十八年が間。彼の國に留學せられて。研₂經史₁該₂渉衆藝₁とある如く。習ひ終て。その歸られたる年が聖武天皇の天平五年の事で御座る。吉備公の外にも。赤縣へ渡つた人は多く有つたなれども。此人は赤縣に居られた間が。十八年と云もので。長かッたに依て。名も高く。また御歷史にも。渉₂衆藝₁とある如く。碁將棊雙六の類の。卑き藝道までも。覺えて歸られたもので御座る。さて其のことを眞似ばるゝには。彼の國風で。金銀を欲がる故に。他國へは猥に傳へず。夫故に。吉備公の渡らるゝ時に。砂金一萬斤を持參せられて。赤縣人にとらせ。是に替て。修行せられたる趣も。御歷史に見える。右の如く。元は金を出して。唐人から。買て來られたる藝ぢやに依て。自からに。その臭みにかぶれて。其の習ひ歸られたる藝を。弘くは傳へず。吝み祕して。容易には敎へず。吉備公の本どもに。千金莫傳と云ふことの。こゝ彼處にあるのは。金を出して。赤縣から習つて來られたること故。その臭みの付てまはるので御座る。御國の諸藝に。祕事口傳と云て。その傳授ごとの。謝禮の直段を極て。傳へることの元の起りは。このの惡僻の移つて。世に弘まり。眞似たもので。實は。赤縣から移つた事で御座る。悲いことには。御國のはヾぬきなる。止事なき事ども。歌の道にさへ傳受ごとぢやの。口傳ぢやのと云て喋

ぐも。根ざしは皆。戎風の穢い心から出たことで御座る。是に付ても我が本居先生の消息に。拙者の道を説聞せ候は。唯々古傳古實に依て。考へ得たる趣きを。有の儘に傳へ候ことにて。祕授口訣など云ふことは。一切無之候。と云はれたることの。尊く有りがたき敎なることを。考へるが宜いて御座る○また伊勢貞丈先生の作られたる。秋草にも。祕事と云事の論が五个條ある。其の中に。初め三條は。有るべき筈のことだが。其の第四には。人に物問はれたるに我も知らぬを。しらずと云はんことの口惜さに。祕事なりと云ひなすことあり。五には。禮物を取るべきが爲に。祕事なりとて。吝み隱して。善賈を待て。沽る祕事あり。近世普くはやる祕事。おほくは右の。五个條めの祕事なり。四个條めの祕事も。又間々あり。と云ひおかれたるは。能く祕事口傳事をする輩の穴を云はれたことで御座る。また吉備公の後にも。延喜帝の御時に。左大辨大江の惟時と云ふ人に。砂金十萬兩を持せて。赤縣へ御渡しなされ。龍取將軍と云ふ者に。六韜三略。其外四十二个條の軍傳をも。習つて來たことが。古書に見えてある。とかく唐人等は。御國人を誑して。有つても無てもすむ。何でもないことを。賣物にして。金銀を貪り取つたもので御座る。とかく毛唐人どもは。昔から金銀を。此上もなき物に。尊んだものなれども。眞の上から見れば。金銀は何の益にも立ぬもので御座る。夫は今の世の如く。通用のものとなさるゝ處から思へば。上もなき物のやうに思はるゝなれども。その通用物は。金や銀でなくとも。銕でも鉛でも。又は上でなさるゝことならば。木でも紙でも通用するから。とんと无ても差支のないものぢや。但しカネの中で。世に无てはとんと叶はず。困るものは。銕こそ。此の上もなく。結搆なもので御座る。なぜと云に。かの刄物と云ものは。まづ第一には。武具の鎗刀を始め。家を作らうと。何細工をしやうと。料理をしやうと。刄物が无くては。一日も叶はず。外にとんと。代用ふべき物は无い程の。止事なく尊いもので。何ほど上の御威光でも。是はどうも替やうの无い物だが。金銀は通用を。外の物に替て用へば。一向になくても事は缺ず。但しかう云たら。道具諸色の飾りに困る。とても云ふだらうが。夫は奢りと云もので

御座る。道具諸色を光らすことは。御國は金銀が澤山ぢやに依てするものゝ。實はとんと入らぬ事で。光らずとても。事は缺ず。たゞ佛像などが光らんでは。愚人の信仰が薄いから。僧は口の干上る程に。困るで有うが。夫は僧ぎりのことで。外には命にかかるほど。困る人とては。一人もないで御座る。誠に一日も无くて叶はぬものと云は。まづ第一に。米を始め穀物。次に鹽。さて蠶。綿。木に萱　これ等に限ることで。是らがあれば。衣食住に事かけぬに依て。是らをこそ上なく尊ぶべきことで御座る。かやうに人たるもの〻。一日片時も。无くて叶はぬ。大切の物は。殊なる故よしある。神國なるが故に。有餘て實に困ると云ふ程に。夫も萬國に比類なく。結構に多く出來る。また銕とてもさうで御座る。かねの中では。无て叶はぬ尊きもの故。是また萬國に勝れて。結構なる銕が夥しく。その結構なる銕で。鍛へる刄物故。御國の刀劒は。古道の大意にも云通り。萬國最上で御座る。何と有がたい御國では有ませんか。斯やうの有難く。結構なる御國に生れて。斯やうに結構なる物を。神の殊なる御惠に依て。飽までに給用ひながら。その尊ぶべく。重んずべき物をば尊ばんで。金銀ばかり尊ぶは。赤縣風の卑劣なことで。實は通用する物に成てをるからのことで御座る。その眞を云はゞ。穀物鹽など。都て衣食住の物。また銕などに比べては。一つ日にも云べき物ではなく。卑いもので御座る。能くこゝの差別をば辨へて。神の御惠の有難きことを。麁略に思ひ奉らぬが宜いで御座る。外國人は。こゝらの差別に疎く。その尊ぶまじき金銀を。とかく尊んで欲がる故に。唐人どもが。書物の名をつけるにさへ。千金祕要方。など云ふ名をつけたり。また藥方の名にさへ。不換金正氣散。などゝ云ふ。卑劣な名をつけなどもするで御座る。また天竺の國などでも。近くは阿彌陀經を見ても知れるが。七寶とか云て。金銀。瑠璃。硨磲。瑪瑙などゝ。金銀を頭にして。たわいもない物を。此の上なしと尊んであるが。その瑠璃ぢやの。瑪瑙ぢやのと云ふ物は。あれば有るて。住居のかざり。さては緒じめの玉にでも磨て。目を喜ばすばかり。實は翫弄と云もので。屁玉の益にも立ぬ物で御座る。なぜと云に。人の屁玉は。芋畠てす

れば。夫だけこやしにもなると云ことだが。硨磲瑪瑙は。何にもならぬ物で御座る。扨醍醐天皇の御時。左大辨大江惟時と云人。砂金十萬兩を持行て。六韜三略。其外四十二个條の軍傳を。習つて來たと有るにつけて。序ぢやに依て云ひますが。六韜三略と云物は。名こそ昔の儘なれ。みな後人の著作した物で御座る。但し中には。古書に遺りたる文を。取たるもあるから。悉く僞書といふてはあるまいが。十萬兩で。受て來る程の物ではない。又四十二个條の軍傳と云ふも。覺束ないことぢや。猶凡て兵書のことは。武學本論の附錄に論ふつもりで御座る。さて右の訣故。御國にては。穀物鹽鐵綿類。木萱等を以て。第一の寶としたもので御座る。吾が翁の歌に。「物作る民は御寶。」と詠れたる如く。百姓を古言に。おほみたから。と云のも。右の寶物を。作り調ふるもの故に。天皇よりかく命せられて。御愛し遊ばされたもので御座る。また赤縣にも。唐の李紳と云者の。憫農の詩と云ふが。よく百姓の辛苦を云ひ取たものだが。其は鋤レ禾日當レ午。汗滴禾下土。誰知盤中飧。粒々皆辛苦。と云たは。殊に尤なことで御座る。また佛家にも。對食五觀の法と云ふが有て。其の說に。凡喫ニ粥食一。先須ニ端想誦レ之。訖方食一。蓋自警也。と云ひ。また此食。墾植收穫舂磨淘汰炊煮。及レ成用工甚多。一鉢之飯。作夫流汗。食少汗多ともいふてあり。近くは釋氏要覽などにも記して有から。戎狄の。其の元の有がたさを知らぬ國々でさへ。此の通り。農人の勞を思ひ。また尊びもするから。況てその稻種の本つ國たる御國の人は。其の本を尋て。我か師の。「朝夕に物くふ毎に豐受の。神の惠を思へ世の人」。と詠れたる歌を。常に思つて。戴いて給るが宜いで御座る。儒者ながらも。太宰が漫筆を見れば。食する毎に。かの李紳が憫農の詩を。一篇づゝ誦して後。稼穡の艱難を忘れまい。とすると云つて置たが。其本の有がたき所以をば。知らずに。唐人の詩を誦すると云は。文旨至極是非もなきことながら。その心ばへは。隨分尤なことで御座る。但し本を知らんで。末を取ては。其の本の神樣に對して。憚りあることぢや。太宰が如き腐儒輩は。ともかくも。學者たらん者は。夫てはすまぬことで御座る。そこで拙者が。各々に。古道を學ぶが宜いとは云て

座る。とかく學問は。大本より學ばんでは。大道は知れず。戎狄のもの。私に建立したる。儒佛の教へなどに惑はず。人道の本なる。皇神の大道に習ふが宜いて御座る。夫を習つても。此の方には出來ぬなど〻云人もあるは。愚昧の上に。自ら棄ると云ものぢや。皇國の人にして。皇國の道を學ぶに。何のむづかしきことが有ませう。夫では万物の上どころでは无い。人と生れながら。禽獸にも劣ると云ふもので御座る。なぜと云に。猿の狂言をするは。誰も見て知て居るであらうが。まだ夫よりは。先年犬の狂言。また猫と鼠の狂言をさへ。見せ物にしたことがある。何と此の通り犬猫ですら。人が教へ立れば。負氣なくも。人のする業をさへに致すはさ。夫に人として。人の道を學ぶのに。出來ぬと云ふいはれが有らうか。いよいよ出來ぬと云ならば。そりやお氣の毒だが。其人は。犬猫鼠にも。劣て居ると云もので御座る。

室松岩雄
保持照次
校

明治四十四年三月二十日印刷
明治四十四年三月二十三日發行

定價金貳圓也

編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行者　三里半七
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷者　遠藤廉治
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷所　公木社
東京市京橋區南鍋町二丁目七番地

製本者　由美直之助

東京市麹町區飯田町五丁目八番地
發行所　一致堂書店